魔法少女リリカルなのは～優しい嘘～

アマネ・リィラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～優しい嘘～

【Ｎコード】
Ｎ２０５６Ｒ

【作者名】
アマネ・リィラ

【あらすじ】
機動六課解散より四年。平穏な日々を切り裂く事件が起こる。
多次元世界連続爆破事件――その事件に、一人の青年が関わることになる。
世界に対し、反旗を翻した者たち。
世界を守るため、自らの死を是とした青年。
言葉を届けようとも、納得できないことがある。

ゆりかごの英雄たち。彼女たちは、世界に問いかけられる。
世界の守護者。その組織は、世界に問われる。

――正義とは、何たるや、と。

戦い、嘆き、慟哭し。
多くの友が倒れ、移りゆく状況の中、青年は何を選ぶのか。

残酷な真実か。
優しい、嘘か。

数多の命が絡み合い、願いが世界を混迷に巻き込む。
そして。
戦いの果てに、青年は答えを出す。

「世界を敵に回しても、守りたい人がいる」
「……嘘吐き」

『魔法少女リリカルなのは～優しい嘘～』
……始まります。

プロローグ

快晴、というのは正にこんな日のことを示すのだろう。
そこそこ雲があるが、青い空がよく見える。
そんな日の中で。

「……暑い」

夏の気温は場所によっては４０度というとんでもない数字を記録する。そしてここ、ミッドチルダの首都、クラナガンはその『場所』に当てはまっていた。

「うう、暑いなぁ……」

声の主である人物は、その言葉を繰り返す。口にすればするほど暑くなるのに関わらず、である。

年の頃は、１７、８といったところであろう青年は、滝のように流れる汗を袖で拭いながら、一台の大型バイクを押していた。

「ついて、ないなぁ……。急に、止まるなんて……」

彼にとっては制服である黒い上着を脱いだ状態で、ネクタイも外しながら、青年は苦笑する。
一応、急がなければならないのだが、バイクがこれではどうしようもない。

「ねぇ、リンネ。あと、どれくらいで到着しなくちゃいけないかな？」

《余裕をもって出ましたので、あと４０分ほどあります。しかし、今のペースですと遅刻は間違いありません》
「弱ったなぁ……」
青年は苦笑する。首もとに光る、十字架を嵌め込んだ小さな長方形型の宝石が、キラリと光った。
インテリジェントデバイス『リンネクロウズ』。青年にとっての相棒は、嘘を吐かない。彼女がそう言うなら、真実なのだろう。
実は今日、青年は地上本部に呼び出されていた。呼び出された以上、遅刻はいただけない。
「でも、どうしようも、ないし、ね」
息を切らしながら、青年はバイクを押し続ける。そんな青年に、リンネは呆れたように言葉を紡いだ。
《ならば、このバイクを置いていけばいいではないですか》
「そうもいかないよ。駐車料金がもったいないでしょ」
《稼いでいるでしょうに》
「だからこそ、だよ」
青年は苦笑しながらそう返す。リンネもそんな主人のことは理解しているようで、それ以上は何も言わなかった。
しかし、遅刻確実という現実が変わるわけではない。
どうしようかな、連絡しようか――と青年が考えたその時。
――――ドオンッ！！

凄まじい轟音が響いた。青年は反射的に音がしたほうを見ると、リンネに言葉を紡ぐ。

「リンネ！」

《――ここより東に６００メートル地点の高層ビルにて、爆発が起こった模様です。詳しいことは不明》

「十分！」

青年は頷くと、バイクを停め、走り出した。目指すのは騒ぎの中心だ。

その途中で、首に下げたリンネを掴み、声を張り上げる。

「緊急事態だから許可を取ってる暇はない！　いくよ、リンネ！」

《許可なしの魔法使用は始末書ですよ？》

「泣いてる誰かを助けられるなら、安いものだよ！」

《それでこそ、我が主》

リンネが、どこか嬉しそうに言う。青年は頷くと、リンネを首から外し、掲げるように持った。

そして、叫ぶ。

「リンネクロウズ、セットアップ！！」

《Ｙｅｓ，ｓｅｔ　ｕｐ》

リンネが応じると、青年の体が光に包まれた。眩いばかりの光は数瞬で弾け、青年の姿が現れる。だがその姿は、先程までとは大きく違っていた。

青年が宿す黒い髪や瞳とは対局の、純白のコートとズボン。所々金

の糸による紋様がついたコートの下には、肌に張り付くようなアンダーウェアがあり、その中心には金色の十字架がはめ込まれていた。

管理局の魔導師が戦いの時身に纏う防護服、バリアジャケットだ。ただ、青年には普通の魔導師が持っているはずの、武器がない。しかし――それでいい。

「飛行魔法で一気に行くよ！！」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

青年の体が宙を舞い、黒煙が立ち上る場所を目指す。その近くでは、人々が逃げ惑う姿があった。

唇を、噛み締める。青年は、速度を上げた。

◇　◇　◇

逃げ惑う人々に逆らうようにして走り、青年は現場に向かう。既に現場には消防車が到着していたが、何故か救助隊の隊員らしき者たちは待機していた。

青年はそのことに疑問を覚えつつも、話しかける。

「本局執務官、ファイム・ララウェイです。救援に参りました」

敬礼しながら青年、ファイムが言うと、救助隊の隊長らしき人物は驚いたような顔をしつつ、敬礼した。

「ありがとうございます。実は少々厄介な状況でして」

「自分にできることならいくらでも協力します。どういう状況なんですか？」
「はい。爆発が起こったのは最上階の１０階下――２０階の地点です。しかし、爆発の余波が階段を瓦礫で埋めてしまったらしく、すぐには最上階に辿り着けないのです」
「なるほど……」

ファイムは考え込む。仮に魔法で瓦礫を吹き飛ばすにしても、場合によっては建物の崩壊を早めてしまう。
階段に瓦礫が落ちてくるほどに建物がダメージを受けているなら、尚更だ。

「先行している者たちが、道を空けようとしていますが、このままでは間に合いません」

唇を噛み締めながら、隊長が言う。ファイムはわかりました、と頷くと、上を見上げた。
ここは、最近オープンしたばかりのホテルである。助けを求める人たちは、きっと多い。

「自分が空から突入します。みなさんは、できるだけ急いで援護を」
「ありがとうございます。助かります。うちには、空戦魔導師がいませんから」
「いえ。……それでは、行きます」

もう一度だけ敬礼すると、ファイムは飛び上がり、ホテルの２０階――燃え盛る場所へと突入した。

バリアジャケットが熱を防いでくれるとはいえ、限界はある。ファイムは、グローブを付けた手を握り締めると、走り出した。

◇　◇　◇

「……ッ」

伝う汗を拭いつつ、ファイムは前を見た。もう何人運び出したかわからない。だが、火の手は予想以上に早く、瓦礫を突破した救助隊の者たちを合わせても、救助が追いつかない状態だった。

残るのは、最上階のみ――例によって飛行魔法で先行したファイムは、要救助者を探していた。

「リンネ、エリアサーチを」

《マスター、もう３０往復は繰り返しています。体力も魔力も、このままでは……》

「要救助者の反応は？」

《マスター》

「……急いで、探して欲しい。もう、助けられないのは嫌なんだ」

絞り出すようにそう言うと、ファイムは歩き出す。リンネが何かを紡ごうとして、唐突に魔法を展開した。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

――ガギン！！

何かが障壁に激突し、弾かれた。ファイムがそちらを見ると、炎によって赤く染まった廊下に、一つの人影があった。

「誰だっ！！」

ファイムが声を張り上げる。すると、影は笑った。

「今はまだ、名乗るべき時ではない。管理局の犬よ、その時は近いぞ」

「待っ――」

影が、消える。転移魔法だ。

「リンネ、追跡を！！」

《――――ッ、無理です。振り切られました》

「……そっか」

リンネは優秀なデバイスだ。彼女が追えなかったなら、仕方がない。

それに――

（今は、正体不明の不審者よりも要救助者だ）

体は辛いし、魔力も残り少ない。だが、ファイムは止まらなかった。

◇　◇　◇

『本日、ホテル『ユートピア』で起こった爆発ですが、どうやらこれは事故ではなく、何者かによる爆破である可能性が高いようです。これにより管理局は、テロ事件として捜査を行うとのことです。また、幸いにも救助隊の活躍により死者は出ておらず――』

――プツッ。

ずっと流れていたニュースが、テレビの電源が落ちると同時に消える。それを受け、ファイムは視線をテレビから目の前にいる女性へと向けた。

茶色のボブカットの、小柄な可愛い印象を受ける女性――八神はやては、リモコンを机に置くと、とりあえず、と言葉を紡いだ。

「救助活動、ご苦労様やな。おかげで犠牲者が大幅に減ったわ」
「当然のことをしただけです、八神司令」
「あはは、相変わらずやなぁ、自分は」

はやては微笑みながら言う。年上のこの女性に、ファイムは大変世話になっている。そのこともあって、少し緊張する。

それを知ってか知らずか、はやては笑いながら言った。

「それに、呼び方もや。はやてさんでええよ」
「しかし」
「ええから」
「……わかりました」

ファイムは頷く。すると、それでええんや、とはやては頷いた。
そして、その表情が変わる。

「ファイムくんなら察しがついてるやろうけど、あれは事故やない。ニュースの通りや。最近、頻繁してる爆破事件と関係してると管理局は睨んどる」
「……はい」

「執務官であるファイムくんやったら知ってるやろうけど、これは次元世界のあちこちで起きてることや。それで今回、本局と地上本部で手を組んで捜査に当たることになったんや」

「えっ！？」

ファイムは驚く。本局と地上本部というのはとにかく仲が悪い。それが手を組むとは……。

「それほどの大事なんですね」

「そうや。もっとも、二人三脚でってわけにはいかへんのやけどな。……それでや、ファイムくんには、うちの部隊に出向って形で協力して欲しいんよ。今回、うちの部隊が中心になって捜査する予定やから、犯人らしき人物と接触したファイムくんには特に協力して欲しいんよ。ファイムくんは執務官としても優秀やしね」

「それは、もちろんです」

ファイムは頷く。はやては嬉しそうににっこりと微笑んだ。

「おおきにな。ほな、早速手続きせなアカンな」

そう言うと、一度言葉を区切り、はやては微笑んだ。

「――ようこそ、特務部隊機動六課へ」

それが、始まり。

長い長い戦いの、始まりだった。

プロローグ（後書き）

まず、読んでくださった方、ありがとうございます。

長い（？）プロローグがようやく終わりました。

努力して精進していく所存です。よろしくお願いします。

序章　いずれ訪れる未来

「難しいです。ただ……悲しいですよ」

「気に入らねぇ。わかるんだよ。あんたらが、とんでもない貧乏クジを自分から引き受けてんのが」

「騎士の誇りなど捨てた。私が戦うのは、家族のためだ」

「……こういう、ことかよ」

「守護獣として、家族として、戦わねばならない」

「現場から退いた身でも、やれることはあるさ。ねぇ？」

「……知らないのは、次元世界でも君ぐらいだぞ」

「ユーノくん、どうして？」

「私たちが、何をしたの……？」

「わ、わかりましたっ！！　人質をとられてるんですね！？」

「これだけは譲れない。あたしは凡人だけど、諦めることだけは絶対にしない！！」

「ダメです！！　あなたたちを失えば、部隊は総崩れです！！」

「私たちを、見捨てないでください……」

「それほどまでに、憎いの？」

「いつだって世界は理不尽だから、だからこうして戦うんだ」

「恩人であり、親友である奴を信じて戦える……。最高だ」

「なのは、はやて！！　あんたたち、自分がなにしてるかわかってんの！？」

「もうどうしようもあらへんやろ！？　なんでなんや！！」

「銃弾を、管理局は持ってはいけないんだよ。それだけは、認められないんだ」

「……嘘吐き」

「大切だから、だからやらなければならないことがある」

序章　いずれ訪れる未来（後書き）

とりあえず予告です。
結構考えなしですが、頑張ります。

よろしくお願いします。

第一話　一期一会と再会と

時空管理局というのは、法の守護者である。曰く、「警察と裁判所が一緒になったもの」とも表現される。
その局員には、それこそ様々な役職があるが、その中でエリートと呼ぶべき役職がある。

――本局執務官。

単身で凶悪事件を追ったり、時には検察や弁護士の仕事をこなしたりする、狭き門である試験を突破した者のみが名乗ることを許される役職だ。

かのエース・オブ・エースに並ぶ知名度と実力をもつ『雷光の死神』の肩書きとしても有名な執務官、その名を持つ青年ファイム・ララウェイはなりたての新人でこそあるが、その若さと実績からして相当な実力者と思われることが多い。しかし、彼を目にした者は総じて同じ感想を漏らすことになる。即ち――

「こいつが『あの』ファイム・ララウェイ執務官なのか？　信じらんねーな」
「あはは、よく言われます」

赤毛をお下げにしたつり目の少女――ヴィータのいきなりの言葉に、ファイムは苦笑しつつ頬を掻いた。その姿からは、確かに威厳は感じられない。

「こら、ヴィータ。失礼やろ」
「でもはやて」

「主はやての言う通りだ」

そのヴィータを叱るはやてと、それに同意する桃色の長い髪をポニーテールにした女性――シグナム。彼ら四人は今、新たに立ち上げられた部隊――特務部隊機動六課の部隊長室にいた。今回、部隊長八神はやての保有戦力として召集されたシグナム、ヴィータとフォワードの顔合わせでここにいる。ちなみにはやての補佐官であるリィンとシグナムの融合騎であるアギトはメンテナンスにより遅れている。

もっとも、顔を合わせたことがないのはヴィータだけなのだが。

「……」

「ええと……」

睨むようにヴィータに見られ、苦笑を深くするファイム。その様子を見て、シグナムは息を吐いた。

「ヴィータ、やめろ。それとララウェイもだ。もっと堂々としていろ」

「そう言われましても、やっぱり緊張してしまいます。ヴィータ教導官は有名ですし、シグナム一等空尉も尊敬する方ですから」

「む……」

シグナムの眉が微かに動く。それを見て、はやては笑った。

「あはは、やっぱりファイムくんは大物やで。そんなこと素で言える子なんてそうおらんよ」

「そうですか？」

「自覚なしかよ……」

呆れたようにヴィータは溜め息。とはいっても、ファイムにしてみれば心の底からの本心である。

四年前のＪＳ事件において単身で『聖王のゆりかご』の心臓部を破壊したヴィータに、騎士として名を馳せ、同じくＪＳ事件において活躍を見せたシグナム。二人を尊敬するのは、むしろ当然だ。

「それがファイムくんのええとこや。ま、それはともかく。本題に入ろか。……最近頻繁しとる爆破テロ。これの捜査をわたしらで行うことになった」

「元々は、僕が抱えていた案件だったんですが……すいません」

「気にするな。いかに『緑風事件』を一人で解決した執務官であっても、この案件は一人でどうにかできるようなものではない」

「全くだ。気にすんなよ」

「ヴィータの言う通りやね。元々地上本部にファイムくんが呼ばれたんもこれが理由なんやから、気にすることあらへんよ」

「……はい」

みんなにフォローされ、苦笑しつつ頷くファイム。さっきからこればかりだ、とぼんやり考える。

「でまあ、話を戻すとや。これが未だに尻尾が掴み切れてないんよ。昨日ファイムくんが見たっていう人影も、定かやないし……」

「それは厄介ですね」

シグナムが顎に手を当てつつ思案する。それに対し、全くや、とはやては言葉を紡ぐ。

「せやけど、だからといって何もせんわけにはいかん。相手の規模

もわからん今は、とにかく情報を集めるのが第一や。それと平行してロストロギアの回収もせなあかんから、やることは山積みなんやけどな」

はやては肩を竦める。が、ロストロギアの回収については今更のことだった。

今回の特務部隊は爆破テロの対策のために設立された部隊である。そして最近わかったことだが、爆破テロにはロストロギアが関係している。

失われた文明の遺産、ロストロギア。それはものによっては世界を壊す程の力を持つという。

爆破テロを担当していたファイムが調べた結果、爆破テロが起こっていた場所ではロストロギアの取引が行われていたという共通点が見つかったのだ。

合法的なオークションであったり、違法取引であったりと形式は異なるが、それは事実である。

そして――ロストロギアが全て奪われているという事実も。

ちなみにファイムがその事実を突き止めた人物であるということを、はやてはついさっき聞いた。こういうところで、情報伝達の杜撰さが伺える。

「まあ、考えてみれば楽だよな。ロストロギアと爆破テロが関係してるんなら、ロストロギアを守ってりゃいずれぶつかるってんだからよ」

「ヴィータの言う通りや。ロストロギアは使うものによっては次元規模で被害をもたらしてまう。どちらにせよ、確保しといて損はあ

らへん」
「そうですね。僕も、それが一番だと思います」
頷きつつ、ファイム。担当した、調べたからわかる。それが一番の手だと。
はやてはうん、と頷くと、場を締めくくるように言葉を紡いだ。
「できるだけ早く犯人を捕まえたい。頼んだで」
「はい！！」
三人で応じる。こうして、特務部隊機動六課は動き出した。

◇　◇　◇

「そういえば、機動六課ということは、四年前の奇跡の部隊が再集結することになるんですか？」
「ん？　ああいや、今のところそれはあらへんよ」
はやては前に出した手を左右に振りつつ、言う。
「今回は今のところ、前みたいな戦力は必要あらへんしな。できればそうならんうちに終わらせたいし」
「それに、各々も忙しい身だ。そう簡単には集まれん」
「あたしらははやての保有戦略だから集まれただけで、普通ならありえねーしな」
「やっぱりそうですか」
わかっていたことであるため、特に落胆せずファイムは頷く。

そもそも、あの時のように執務官と教導官が出向するような事態でさえ普通ではないのだ。これ以上は確かに過剰戦力である。

「まあ、必要になったら集めるよ。……っと、着いたで」

はやてが言い、辿り着いた部屋――技術室の扉をノックする。どうぞ、という返答が返ってくると、四人は部屋に入った。

「失礼するよ～」
「はい、どうぞ～」

はやての言葉に対し、のんびりとした声が返ってくる。見ると、一人の女性が立っていた。
どうやらこの部隊の技師らしい。女性が多いなぁ、などとファイムは思う。

「紹介するな。うちの部隊で技術主任をやってくれてる、エレン・ローグ技師や」
「よろしくお願いします」

エレンが軽く頭を下げるため、ファイムも頭を下げた。そして、自己紹介をしようとした時。

「はやてちゃーん！！」

見た目１０歳くらいの小柄な薄い蒼の髪の少女――リィンフォースが走ってきた。それを見て、はやてが笑顔を浮かべる。

「リィン、迎えにきたよ。検査はどうやった？」
「異常なしです～」

「あたしもだ」
「アギト」

リィンの後ろから現れた、見た目の年齢はリィンとそう変わらない赤い髪の少女、アギトをシグナムが呼ぶ。
その二人を見たファイムは、微笑みつつ声をかける。

「リィン、アギト。久し振りだね。僕のこと、覚えててくれたかな？」
「もちろんですよ、ファイム。元気にしてたですか？」
「聞くまでもなさそうだけどな」
「うん、ご名答」

ファイムは頷く。この二人とファイムは面識がある。少し前の事件でも、協力してもらった身だ。

「なんだ、二人はこいつと面識があんのか？」
「姉御はないのか？」
「名前ははやてから聞いてたけど、会ったことはねー」
「僕自身、教導隊の方とはあまり繋がりはありませんしね」

執務官になる前にいたのは災害担当の救助隊だったので、教導隊の教導官から教導を受けたのも、ファイムは2度しかない。

まあ、その2回で地獄を見たのは思い出である。

「まあ、今回の事件でファイムくんもうちの部隊で戦うことになったから、二人ともそのつもりでな」
「はいです」
「おう」

二人が元気よく応じる。
その後、エレンに挨拶し、部屋を出ると、さて、とシグナムが言葉を紡いだ。

「ラウェイ。今からトレーニングルームへ行くぞ。アギトもこい」
「おう！！」
「え、いや、なんでまた」

だが、ファイムは困惑する。当然だ、いきなりこんなことを言われたら、誰だって困惑する。
しかし、シグナムにはちゃんとした理由があるようで

「なに、ただの模擬戦だ。背中を預け合うことになる以上、実力の把握は必要だ」
「バトルマニアめ」
「それに貴様とは、決着を着けねばならん」
「いや、あれは僕の負けじゃないですか」

ヴィータの言葉をスルーしつつ言うシグナムに、ファイムは首を左右に振りつつそう返す。だが、シグナムも譲らない。

「いいから来い。どうせ訓練はするつもりだったのだろう？」
「なんや面白そうやな～。わたしも見学するわ」
「リィンもです～」

逃げ場は、ないようだった。

◇　◇　◇

「いたたた……」

模擬戦のダメージが微かに残る右腕をさすりつつ、ファイムは苦笑した。

模擬戦は１０分で終わりを迎えた。アギトとユニゾンした状態のシグナムの猛攻をなんとかギリギリで避けていたのだが、一瞬の判断ミスで隙を生んでしまい、負けた。

「うーん、やっぱり強いなぁ」

《マスター、悔しいとは思わないのですか？》

「相手は古代ベルカの騎士だよ？　元々、空戦Ａ＋程度の僕とは次元が違う」

リンネの言葉に、苦笑しつつそう返す。正面からやりあって勝てる相手ではない。次元が違い過ぎる。

《しかしマスター》

「しかしもなにもないよ。それに、味方を全力で命懸けで倒しても意味がないでしょ？　昔みたいに、殺さないと生きられないわけでもないしね」

そう、あれはあくまで模擬戦なのだ。一か八かの命懸けをする意味はない。まあ、やっても勝てないだろうが。

と、そんなやりとりをしていると、人の気配がした。ファイムがいるのは隊舎の屋上だ。誰が来てもおかしくはない、のだが――

「こんなとこにいたんやね」
「八神部隊長？」
現れたのは、書類仕事に追われているはずのはやてだった。
仕事はいいんですか、と聞こうとしたが、その前に、はやての機嫌がなんとなく悪いことに気付く。
「えーと、部隊長？」
「……はやてさん」
「えっ？」
「はやてさん、って呼んでって言うたやろ」
「え、あ、はい。……はやてさん」
「ん、それでええ」
はやてが満足そうに微笑む。その笑顔にドキリとしつつ、自分の腰掛けているベンチの隣に座ったはやてに、ファイムは問いかけた。
「あの、仕事は？」
「一段落ついたから、今は休憩や。そういうファイムくんも、仕事あったはずやろ？」
「僕はひとまず終わらせました」
「……相変わらず反則じみた仕事の速さやな」
その言葉に、ファイムは苦笑。デスクワークは得意分野である。だからまあ、確かに仕事は早い。
「まあええわ。……昼間はごめんな？　あの子、どうも不器用でなぁ」
あの子、というのはシグナムのことだろう。確かに模擬戦はそれな

りのダメージを残したが、だからといって謝られることでもない。

「いいですよ。勉強になりましたし」

「そう言われると、ありがたいわ。まあ、明日からはヴィータの訓練が待っとるけどな」

「う……あまり想像したくありませんね」

昔受けた教導の記憶が蘇る。文字通りの地獄を見た。

徹底的に打ちのめされて、そこから学ぶ――勉強になったが、受けたいとも思わない。

「四年前も、新人たちはボロボロやったしなぁ。ファイムくんは、なのはちゃんとも知り合いなんやんな？」

「知り合いと呼べるかどうか……。教導を受けたことと、事件解決に一度協力して頂いたくらいですし」

「そうなんや。でも、話したことぐらいはあるやろ？」

「はい。はやてさんの言うとおり、素晴らしい方ですね」

管理局のエース・オブ・エース、高町なのは。その称号は、彼女の実力だけではなく、人格あってこそと思い知らされた。

「僕には真似できません。あれほど強い人を、知りませんから」

「ホンマやで。なのはちゃんには、随分助けられた。いつもいつも……」

「……ただその分、いつか壊れそうという気はしましたが」

「えっ？」

「なんでもありません」

首を左右に振って、ファイムは言う。

「……この事件、早く終わらせられればいいですね」
「ホンマやな。それにはファイムくんの力も重要やし、期待してるで？」
「精一杯、努力します」
ファイムは、そう返した。

◇　◇　◇

夜も昼も定かではない場所に、それはある。
時空管理局本局。多岐にわたる次元世界を一手に守る砦だ。
その本局の廊下を、執務官の制服である黒の制服を着たファイムは歩いていた。

「……ふぅ」
《お疲れさまです、マスター》
「うん、ありがとうリンネ。やっぱり、何度どやっても慣れないなぁ」
相棒に礼を言いつつ、ファイムは苦笑する。彼がやっていたのは、彼が担当していた事件の経過報告だ。
執務官というのは優秀な魔導師である証だ。管理局は常に人手不足である。執務官ほどになると、一人で複数の事件を担当することもそう珍しくない。
《マスター、やはり補佐を誰かに頼むべきでは？》

「そうしたいけど……ほら、前に募集した人たち、みんな辞めちゃったし」

苦笑を深くしつつ、ファイム。執務官には普通、補佐がいる。しかしファイムは補佐を雇っても、すぐに辞められてしまうのだ。

別にファイムの性格がどうとかいうわけではない。ただ純粋に、凶悪事件ばかり担当し、その中で不眠不休に近い働き方をする彼に、誰もついていけないだけだ。

そしてそれを本人が自覚していないので、ズレが出る。

そのせいで今回も一人でデータの処理をし、整理をし、合わせて五つの事件の経過報告を終えた。もっとも、連続爆破事件以外は解決に向かっているので、問題はない。

《しかしマスター、このままではまた倒れますよ？》

「大丈夫。これぐらいで倒れてたら、無限書庫のみんなに申し訳ないよ」

無限書庫――管理局においてもっとも忙しいとされるその場所で、ファイムは一年程働いていた時期がある。あの時に比べれば、この程度は楽なものである。

と、そこで、ファイムはあることを思い出した。

「そういえば、資料を頼んでたんだった。リンネ、取りに行こう」

《わかりました。その旨を先方に伝えておきます》

「うん、お願い」

リンネにそう頼むと、ファイムは歩き出した。ここから無限書庫へ

は少し遠い。急ぐべきだ。
そんな風に考えながら曲がり角を曲がった時。

――ドンッ！！

誰かとぶつかった。そして同時に怒鳴り声が飛んでくる。

「どこに目ェつけてやがる……って、なんだ、ファイムか」
「いたた……あれ？　リューイ？」

目の前にいたのは、金髪碧眼の青年だった。ファイムにとっては数少ない同年代の友人である青年、リューイ・エンドブロムはファイムを引っ張りあげる。その後ろから、声が響いた。

「そそっかしいにも程がありますよ、マスター」
「うっせぇ」

聞こえてきた声に、どこかバツが悪そうにリューイは応える。見ると、そかには翡翠の髪と瞳を宿した女の子がいた。
リィンやアギトとそう変わらない身長のその少女は、呆れたような目をリューイに向ける。

「自らの恩人を弾き飛ばすとは……嘆かわしい」
「あのな」
「あはは、いいよミリアム。怪我はないし」

女の子――ミリアムに向かって笑顔でそう返す。ミリアムはしかし、と続けようとしたが、いいから、と首を左右に振るファイムを前に、口を閉ざした。

「二人とも、今日はどうしたの？　デスクワークとか？」
「いんや、保護観察のおっさんに経過報告だよ。面倒くせぇがな」
「マスター、そのようなことは……」
「事実だろうが」
「あはは……」

そのやり取りを見て、ファイムは苦笑。相変わらずだ、と内心思う。

この二人は、とある事件で管理局に捕らえられた元犯罪者である。
しかし事情が事情であったため、保護観察を受けながら局員として働いているのだが。

管理局はこういう事例がとても多い。『雷光の死神』も『最後の夜天の主』も『Ｎ２Ｒ』も元々はそうであったとファイムは自身の調査の過程で知った。
まあ、だからどうというわけでもないのだが。

「で、お前はどうして本局にいんだよ？　基本的に寄り付かねぇだろ？」
「寄り付く暇がないだけだけどね。えっと、任務の経過報告だよ。あと、これから無限書庫へ行く予定」
「なんだ、資料でも頼んでたのか？」
「うん。今担当してる事件に、ロストロギアが絡んでてね。ものがものだから、直接行こうかな、って」
「なるほどね。……おい、ミリアム」
「なんですかマスター？」
「お前、ファイムについてけ」
「えっ？」

思わず疑問の声をあげる。すると、リューイは深い意味はねぇよ、

と言葉を紡いだ。

「俺も調査依頼だ。今から用があるからあとで行こうと思ってたが、丁度いいだろ？」

「それもそうですね。了解しました、マスター」

「リューイの用事は一人でいいの？」

「あー、大丈夫大丈夫。デバイス取りに行くだけだから」

軽い口調でそう言うと、んじゃ任せたと言葉を紡ぎ、リューイは行ってしまった。

ファイムはんー、と一度唸ると、僕らも行こう、と歩き出す。

「二人とも、管理局の生活はどうかな？」

「特に問題はありません。ありがとうございます」

「そんなに畏まらなくてもいいよ？　僕なんか、そんなに偉いわけでもないし」

「そう言われましても、我らの恩人ですから」

「んー、そっか」

大したことはしていないけど――その言葉は呑み込む。言えば、間違いなく真っ赤になって否定してくるだろう。

「そういえば、無限書庫に頼みたい資料って？」

「大したものでは。発見した遺跡にあると思われるロストロギアのデータが欲しいだけです」

「なるほど、重要だね」

ロストロギアは総じて危険だ。見つけても、すぐに手を出すことはなく、こうして情報を集めてからが基本になる。

そういう意味で、無限書庫は明らかに管理局内でも重要な場所だ。
だというのに、扱いはあまりいいとは言えない。
優秀な司書長がいるからどうにかなっているだけのあの場所、かつての職場を思い出し、ファイムは苦い思いになる。

（はやてさんが言ってたっけ。管理局がどうにか保ってるのは、無限書庫のおかげだって）

四年前、レジアス・ゲイズ中将の死によって管理局地上本部はモラル低下と検挙率低下に苦しんだ。それでも保ったのは、無限書庫の頑張りが大きい。
朝から晩まで、それこそ文字通り血を吐く思いをして。
その時期にあの場所にいたからこそよくわかる。

「着きましたね」
「――っと」

思考に没頭していて気付かなかったらしい。いつの間にか、無限書庫に到着していた。

「失礼します」

一声と共に扉を開け、ミリアムと共に中へ入る。無限書庫の無重力によって体が浮き、どことなく気持ちいい。

その中を飛行しつつ、ファイムは目的の人物を探し――見つけた。
他の司書が精々3、４冊を同時に展開するのが限界なのに対し、その人物は１０冊以上を同時に開き、速読魔法を展開していた。

相変わらず、凄い――そんな風に思いつつ、ファイムはその人物へ

声をかける

「ユーノさん」

「ん？」

閉じていた目を開き、その人物――ユーノ・スクライアはこちらを見た。そしてファイムの姿を見ると、笑顔になる。

「ファイムくん。久し振りだね、元気にしてたかい？」

「はい。ユーノさんはーー痩せましたか？」

「それ、なのはにも言われるよ……」

ユーノは苦笑を浮かべる。ああ、やっぱりろくに食べてないんだな――と、ファイムは少し呆れる。

「ユーノさん、また漂いますよ？」

「最近はなのはとヴィヴィオのおかげで少しはマシなんだけど……」

「……まあ、いいです。今日は、例の資料を受け取りにきました。こちらのミリアムもです」

「ミリアム・エンドブロム一等陸上です。陸士１０８部隊より参りました」

「うん、そっちも聞いてる。資料を渡すから、二人ともついてきてくれるかな？」

「「はい」」

二人で応じ、ユーノの後を追う。そうして司書長室に入ると、ユーノはデスクの上に山のように積まれた資料から、二つの束を取り出した。

「ご依頼のものだよ。二つとも、閲覧規制がかかってるから、扱い

には注意してね」
「了解です」
「了解しました。……では、私はこれで」
ミリアムはそう言うと、敬礼した。ファイムもうん、と頷く。
「リューイによろしくね」
「了解しました」
ミリアムは頷くと、ユーノには一度頭を下げ、立ち去った。
それを見送ったユーノは、少し真剣な表情を宿しつつ言葉を紡ぐ。
「彼女が、『緑風事件』の？」
「はい。今は局員ですが」
「そっか。うん、なかなか真面目そうだね」
「……その時は、お世話になりました」
「好きでやったことだし、ファイムくんには助けられたからね。気にしないでいいよ」
ユーノは微笑む。だが、ファイムはいえ、と首を左右に振った。
助けたなどと、そんな高尚なことをした覚えはない。して当然のことをしただけだ。
ＪＳ事件の傷痕残る管理局において、それを支えた無限書庫に進んで協力し、司書として一年働いた。
それだけ――むしろ、その程度しかできなかった。
「僕がしたことなど、しれています」
「そんなことはないよ、ファイムくん。戦技披露会でフェイトと戦

って、耐えて耐えて耐えて引き分けにして、そうまでして無限書庫の現状を訴えようとしてくれたのは、本当に嬉しかった」

「……」

押し黙る。三年前の戦技披露会で、かの『雷光の死神』フェイト・T・ハラオウン執務官と戦ったのは事実だ。

ボロボロになりながらも引き分けに持ち込んで、そして、インタビューで訴えた。

無限書庫が、どれほど悲惨な状況にあるか。

それを、叫んだだけだ。

結局――変わらなかったのだけれど。

「僕がしたことなど、自己満足です」

「そんなことはないよ。少なくとも僕たちは嬉しかったし、少しだけ、マシになった」

だから、助けてもらったんだよ、と、ユーノは笑った。

ファイムはそれ以上は何も言わず、そうですか、と呟くと、ユーノに一礼し、部屋を出た。

そうしてから向かうのは、はやての所だ。

資料を手に、転移ポートへ向かい、はやてが指揮する時空管理局L S級艦船『ヴォルフラム』に向かう。

その途中、資料をペラペラと捲り、簡単に目を通す。

「……C級とかD級ばっかりだね。特定のものを狙ってるわけじゃないのかな？」

《あるいは、探しているのかもしれません。無差別にロストロギアがある場所を狙っているのかも》

ファイムの相棒、リンネが言う。ファイムは、うーん、と唸った。

「そうだとすると、厄介だよね。行動の特定が難しくなる」

《しかし、見たところ、共通点は古代ベルカのものというくらいですよ。一部、不明なものが混じってこそいますので、断言できませんが》

「『聖王のゆりかご』とかと同じ時代か……。あの時代のロストロギアは多いから、共通点としては弱いかな……？」

考え込むファイム。そのファイムに、リンネはまあ、と言葉を紡いだ。

《詳しくは八神司令と共に考えたほうがよろしいかと思いますが》

「それもそうだね。よし、行こうか」

《Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ》

二人は歩き出す。

手探りの捜査が、始まった。

◇　◇　◇

闇の中、声が響く。

「ジェイル・スカリエッティ。彼は優秀だったが、短絡過ぎた。時空管理局はもはや世界そのものといっていいほどの影響力を持って

いる落とすのは容易くない」
「『ゆりかご』でも？」
「ありゃあ、古代ベルカ時代の、最強の質量兵器やったんやろ？」
響く、二つの新たな声。最初の声の人物は、ふふっ、と笑った。
「確かに『ゆりかご』は最強の兵器だ。しかし、それだけではダメだ。あれ一つでは、世界を消すには時間がかかってしまう。だからこそ、管理局に墜とされた」
「ならば、どうすると？」
「単純だ。足りないものを補えばいい。そしてそのピースも揃いつつある」
言って、そいつは笑い。
そして、楽しむように、こう言った。
「――核兵器というものを、知っているかな？」

第一話　一期一会と再会と（後書き）

第一話です。フラグがないとか言わないで？
とりあえず現状と、一人、キーマンになる人物を出してみました。
ではでは、第二話では一気に展開を進めたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

第二話　賭け金は命しかない

第４７観測指定世界『ワグリア』。

かつては古代ベルカに並ぶ、あるいはそれを超える文明を誇った世界だが、紛争により滅び、人は消え、世界を覆う大自然のみになった世界。

管理局から定期的に観測の部隊が派遣されるが、基本的には管理局も特に手を加えていないその世界に、三つの人影が出現した。

「自然ばっかだな」

「珍しい？　アギト？」

広がる自然を前にそんな感想を漏らすアギトに、ファイムは微笑みながら問いかける。アギトは、いや、と首を振った。

「そーじゃねぇんだけど、ここまでのは流石に圧倒されるっていうか……」

「自然というものは、人を惹き付け圧倒する。お前の感想は正しいぞ、アギト」

もう一つの人影であるシグナムが、微笑みながら言う。そうですね、とファイムも頷いた。

「古代ベルカの戦乱も、ここ『ワグリア』で起こった戦いも、この大地を奪い合うものだったそうです。……愚かですよね。自然は、大地は、奪い合えるものではないのに。現にこうしてこの世界は、人がいなくなってもここにある」

「はぁ……凄ぇな」
「詩人だな、ララウェイ」
「照れますね」

ファイムは苦笑し、恥ずかしそうに頬を掻く。だが、自然とはそういうものだ。
なにせ人は、抗えない自然という脅威を、『神』と呼んだのだから。

「さて、こうして話していても仕方がない。先行している部隊に追いつくぞ」
「そうですね」
「おう」

二人が頷き、ファイムとシグナムはバリアジャケットを纏うと、飛行を始めた。アギトもしっかり付いてきている。

今回、この三人がワグリアに派遣されたのは、ロストロギアの反応があったからだ。
今回の事件にはロストロギアが関わっている。故に、先見隊の護衛とロストロギアの護送のために二人が派遣された。

「でさー、ファイム。今回、事件の首謀者って出てくんのか？」
「……正直、微妙だね。今までの事件はみんな都会、もしくは人がいる場所で行われてるんだ。ここは人がいないから……」

ファイムは苦笑しつつそう言う。すると、シグナムが言葉を紡いだ。

「確かにそれも一理あるが、警戒しておいて損はない。そもそも、情報が少ないのだからな」
「確かにそうですね。……っと、着きましたね」

ファイムたちの下に、キャンプが見えた。そこには調査員の服を着た局員が何人もいる。
三人はそこへ降り立つと、敬礼しつつ挨拶した。

「お疲れ様です。応援に参りました」
「お疲れ様です」

ファイムが言うと、ここの責任者らしき人物が敬礼しつつ歩いてきた。

ファイムもシグナムもアギトも知っている顔だったため――というか、部隊の隊員だったため、一々自己紹介などせず、本題に入る。

「状況はどうなっていますか？」
「はい。この近辺にロストロギアの反応があるのは間違いないのですが……この世界は鉱物の含有率が高く、細かい場所が特定できないのです。そこで現在、三つのチームに分けて捜索していますが、まだ終わりそうになく」
「なるほど、了解しました。自分たちも手伝います」

ファイムは頷きつつそう言うと、シグナムを見た。すると彼女は、アギトと共に通信士のところにいた。

「どうしました？」
「いや、何やらモニターの様子がおかしいようでな」
「一つだけ正常に作動してないんだよ」
「そうなんですか？」

それを聞き、ファイムは通信士の男性に問いかける。男性ははい、

と頷いた。

「他の二つは問題ないのですが、一つだけ、通じないんです」
「問題が発生したんでしょうか？」
「いえ、この世界は地層の鉱物含有率が高いので、そのせいで電波が阻害されているのだと。通じないチームは、ここから一番距離がありますし」
「そうなんですか。……ですが、一応確認に出向きますね。シグナムさん、アギト」
「なんだ？」
「どうしたよ？」

ファイムが呼ぶと、二人が返事をした。一応、この三人ではファイムが一番階級が高かったりする。

「僕は連絡がつかないチームのところへ向かいますので、お二人は護衛も兼ねてここに残っていただけますか？」
「了解した」
「おう！」

二人の返事を聞き、では、とファイムは飛翔する。座標は頭に入っているので、問題ない。
そうして飛行を始めたファイムに、リンネが声をかけてきた。

《マスター、厄介です。ジャミングのようなもののせいで、エリアサーチが上手く機能しません》
「そっか……中々厄介な世界だね」
《気をつけてください》「もちろんだよ」

ファイムは微笑み、そう言った。

◇　◇　◇

生物の音が、しなくなっていた。
密林と呼ぶに相応しい森が広がる一角でしかし、そこからは少しも生物の気配がしなかった。

鳥の声も。
虫の羽音も。
木々のざわめきも。
そこからは、消えていた。

――カチン。

不意に、音が響いた。音が消えたその場所に、あまりにも大きくその音は響き渡った。
その直後、紫煙が立ち上る。それは、煙草の煙だった。

「ふぅ……」

息を吐く音が響いた。音がない世界に、音が生まれる。

「つまらねぇ仕事だ。ロストロギアもありゃしねぇし」

声の主は、まだ若い男だった。黒いコートとを羽織り、巨大なライフルを自身が座るものー一死体の山に立てかけている。

男は艶のある黒髪を掻き揚げ、懐から小型の通信機を取り出すと、

それを操作し、通信を開いた。

「ギレンだ。ロストロギアを回収した」

『さっすが。仕事が早いねぇ。帰ってこれる？』

返ってきたのは、妙に明るい少年の声だった。ギレンと名乗った男は、はっ、と吐き捨てる。

「ガキじゃねぇんだ。迷いやしね――」

――ズドドンッ！！

ギレンが言い切る前に、突如ギレンの周囲に無数の魔法弾が着弾した。ギレンが上を見ると、そこにはバリアジャケットを着た魔導師が一人、こちらを見下ろしていた。

「ああ、すまねぇ。少し遅れる。お客さんだ」

言うと、ギレンは返事を待たずに通信を切り、管理局の魔導師らしき人物を見上げた。

その人物は鋭い視線をこちらに向けながら、言葉を紡ぐ。

「時空管理局です。危険物所持及び殺人の容疑で、あなたを逮捕します」

「そいつぁ違ぇなぁ」

ギレンはその物言いに、楽しそうに言葉を紡いだ。

「容疑じゃねぇ。俺はこいつらを殺したんだよ」

◇　◇　◇

目に入ったのは、惨劇の現場だった。
周囲の色を塗り替えるほどにぶちまけられた血と、積み上げられた死体の山。
その中心にいる男に、ただ不快感が湧いた。

「武器を捨て、降伏してください。従わないならば、容赦はしません」
「公僕とは思えねぇことを言う」

男は、くくっ、と笑いながらライフルを手に取った。降伏の意志はないらしい。
ファイムはそれを見て取ると、リンネに念話を飛ばした。

（リンネ、シグナムさんたちに連絡お願い）
（……すみませんマスター。磁気が酷く、周囲にジャミング電波のようなものがまき散らされています。そのせいで連絡は……）
（そっか……）
（すみません……）
（リンネのせいじゃないよ。じゃあ代わりにリンネ、相手のランクわかる？）
（――オーバーSランクかと）

告げられた言葉に、内心でファイムは舌打ちをする。オーバーSとはつまり、自分よりも3つもランクが上ということだ。

魔導師ランクは一つ変われば明確な差が出る。一つ程度ならともか

く三つも違えば、まず勝てない。
どうするか――そんな風にファイムが考えた時。
「向かってこねぇなら、こっちから行くぜ！？」
《ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｅｔ》
男がファイムに銃口を向け、引き金を引いた。数にして十の魔法弾が、ファイムを襲う。
「くっ……！」
ファイムは身構え、それを受ける体勢に入る。そして。
――ドドッ！！
着弾。ファイムがいた場所が、煙で覆われた。
男はライフルを回転させ、はっ、と吐き捨てる。大したことない――そう言おうとした瞬間。
「あぁ？」
男は怪訝な表情を作った。煙が晴れた先に、ファイムが無傷で立っていたのだ。
「……なんとか、上手くいったけど。次も上手くいく保証はない。強いなら、最初から全開でいくしかないね、リンネ」
《同感です、我が主》
「いくよリンネ」
今の魔法は手加減されていた。だから、この状態でも捌けた。だが

全力を出されれば、それは不可能になる。
だから――

「フルドライブ！！　モード・フェザーナイツ！！」
《Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ，　ｍｏｄｅ　ｆｅａｔｈｅｒ　ｋｎｉｇｈｔ》

バサッ、という羽音と共に、ファイムの背に魔力で形作られた純白の翼が生まれた。
それを見た男は、ヒュウ、と口笛を鳴らす。

「面白ぇ！　かかってこい！」
「言われずとも」
《ｗｉｎｄ　ｂｕｌｌｅｔ》

ファイムの周囲に風に変換された魔力スフィアが浮かびあがる。それと同時に、ファイムは男に突撃を敢行した。

「シュート！！」

ファイムの言葉に応じ、風の弾丸が男を襲う。だが、男は障壁を張ると、あっさりと受け止めた。

「変換資質か？　いや違ぇな。ただの変換か」

男は冷静にファイムの弾丸を分析する。そう、ファイムには変換資質などという才能はない。

だが、ファイムは風の魔法を得意としており、他の属性より僅かに早く魔力を変換できる。

もっとも、変換資質持ちの人たちに比べれば随分遅いのだが。

それに――フルドライブ中なら風の魔法は威力を底上げできる。

「フェザーショット！！」

《ｆｅａｔｈｅｒ　ｓｈｏｔ》

「シュート」

畳み掛ける――そのつもりで、ファイムは自身の背に宿る翼の羽を弾丸とし、放った。それらは直撃し、爆発を起こす。

やったか――そう思った瞬間、風の流れを感じた。最早反射だけで、手をかざす。

「面白ぇぞ公僕！！」

ミシミシ、という音を立て、男の蹴りを受け止めたファイムの腕が軋んだ。ファイムはそのまま弾き飛ばされ、叩き付けられた木を数本へし折ってようやく止まる。

「かはっ……！」

「休んでんじゃねぇぞ！！」

内臓が悲鳴を上げ、思わず苦悶の声を漏らすファイムに、男は更に追撃をしかける。銃口を向け、一瞬の迷いもなく引き金を引いた。

――ガドン！！

砲撃魔法のそれである一撃が放たれ、ファイムはそれに飲み込まれた――かのように見えた。

だがファイムは、左腕こそバリアジャケットが破けているが、直撃は受けていないようで、そこに立っていた。

「あぁ？　どうなってやがる？　直撃しただろ？」

「説明する義理はない」

「違ぇねぇ」

男は再び、今度は複数の魔力スフィアを形成し、それをファイムに向けて放った。砲撃は紙一重で避けられただけと判断したのだ。

だが男はそこで、信じられないものを見ることになる。

「……」

ファイムが、破壊するでも避けるでもなく、襲い来る魔力スフィアを全て受け流しているのだ。僅かな動きで、文字通り流している。

「あぁ！？」

「ふっ」

驚く男に、地面を蹴って一瞬で到達。そのまま、掌底を打ち込んだ。男はとっさにライフルで防ぐが、体が浮き、弾かれる。

再び距離が開いたその隙に、ファイムは右拳を握り締め、リンネに命じる。

「右腕のジャケットパージ」

《……ｙｅｓ，ｓｉｒ》

リンネが応じ、ファイムの右腕が露わになる。そこにあったのは、肉体ではなく、黒く冷たい鉄の腕だった。

その腕がスライドし、カートリッジをロード。空の薬莢を吐き出す。肉体に直接備え付けられたカートリッジは体に重い負担をかけるが、そんなことを言っていられる場合ではない。

「一点集中！！　ウインド――」

《ｗｉｎｄ　ｂｕｓｔｅｒ》

「バスターッ！！」

放たれたのは、暴風の砲撃。それは木々を薙ぎ倒し、景色を変える。

「……はっ……はっ……」

右腕から排気を行い、ジャケットを戻すよう指示しながら、ファイムは粗い息を吐く。

相手が強いのはわかっていた。フルドライブ状態でさえ、互角には戦えないと。

だからこそ、本領を発揮される前に最初から全力かつ全開で挑んだのだが……

「そう、上手くはいかないみたいだね……」

ファイムの視線の先には、バリアジャケットを所々損傷しつつも立っている男の姿があった。

ファイムが身構えると、男は呟くように言った。

「――殺す」

先程までとは違う、明確な殺意が込められた言葉だった。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺してやる！！」

叫び、男は銃口を向けてくる。ファイムは身構えたが、男は笑った。

「甘ぇよクソが」

《ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

「なっ！？」

一瞬で背後に回られ、銃口を向けられる。これだけ近ければ、受け流す余裕はない。

《ｆｌａｍｅ　ｂｕｓｔｅｒ》

ゴウッ、という音と共に、炎の砲撃が駆け抜けた。ファイムは障壁を張ったが、それを砕かれ、一撃をもらってしまう。

「か……ッ」

「どうしたオラァ！？」

ドスッ、という鈍い音。地面を転がったファイムの腹を、男が蹴り飛ばした音だ。

たまらず、ファイムは吹き飛ぶ。圧倒的な力の差がここにある。

《マスター！！》

「……ッ！！」

リンネの言葉を受け、顔を上げる。頭部から流れ出る血で前が見えず、はっきりとは見えないが、砲撃魔法が展開されている。

《ｗｉｎｄ　ｍｏｖｅ》

リンネが魔法を起動し、ファイムは大きく移動する。

だが――

「だから、遅ぇってんだよ！！」

「――――ッ！」

移動した先には、男の姿。ファイムは、至近距離で砲撃を浴びる。

地面に叩きつけられ、口から血を零すファイム。そのファイムの耳に、笑い声が届いた。

「ハハッ！　でけぇ口叩いた割には大したことねぇなぁオイ！？起きあがってみろよそらァ！！」

銃口が三度こちらを向く。ファイムは地に這い蹲るようにしながら、それでも、立ち上がった。

両手を前に出し、構える。

そこへ――砲撃。

「……ッ」

何が起こったか、説明に多言は必要なかった。

放たれた砲撃が文字通り反射され、男を撃った。

直撃。そして爆炎が巻き起こる。ファイムは粗い息を吐きながら、木によりかかった。

魔力と魔力が干渉し合うのは、最早周知の事実である。でなければ、純魔力砲撃同士が激突するなどありえない。

ファイムが行ったのは、それを利用した体術だ。弾くでもなく受け止めるでもなく、受け流し、その方向を誘導。跳ね返したのだ。

無論、言うほど容易くはない。というか、理論上で可能というだけで、実戦でそれを行える者など絶無だろう。

だがファイムは、風の魔法で干渉し、己の手で受け流すという方法で、それを実践した。

とんでもない魔法コントロール技術と精神力である。

だが無論、その代償も大きい。

「……ッ、はっ……はっ……」

出血によってふらつく体と、今の行為の反動によって激しく疲労し、荒い息が漏れる。

今のでノックアウトできなければ、限界だ。だが――

「……！」

ファイムは今度こそ絶望の底へ突き落とされた。

空には、こちらを見下ろす男の姿。

（万事、休す、かな？）

一部が赤く染まった視界で男を見上げながら、ファイムはぼんやりと思う。
打てる手は、もう尽きた。

「……時間か」
「えっ？」

ファイムが声を漏らす。それとほぼ同時に、耳を切り裂くような音が響き渡った。

「……！」

その音に顔をしかめながら空を見上げるファイム。そしてそのまま、固まった。

空にあったのは、巨大な戦艦。八神はやての指揮する『ヴォルフラム』と同レベルの艦が、空を飛んでいた。
ちっ、という舌打ち。ファイムと同じようにそれを眺めていた男が発していたものだ。

更に男は何事かを苛立たしげな様子で呟くと、ファイムの方を見る。

「いいか？　テメェは絶対に俺が殺す。いいな、絶対、必ずだ」
「ッ、待て！」
「死に損ないがほざいてんじゃねぇよ。ボケが」

ファイムの静止に対してそう言い切ると、男は立ち去っていった。
ファイムはそれを追おうとするが、それは阻まれる。

空に浮かぶ艦より降り注ぎ始めた、爆弾という名の暴力の嵐によって。

――ズン！！

腹に響く轟音が響き渡り、森が燃え盛る。

ファイムの後方に広がる森が吹き飛び、紅く輝いていた。

ファイムは、思わず叫ぶ。

「なっ！？　いくら人がいない世界でも、ここには生命が大勢いるのに！」

《退避を！　マスターッ！》

「……ッ、でも！」

その言葉に対し、ファイムは躊躇を見せる。ファイムの視線の先にいるのは、積み上げられた死体の山だ。

あの男に殺された、ファイムと同じで管理局に所属する者たち。

おそらく彼らには、帰りを待つ人たちがいるはずだ。だからせめて、死体だけでも連れ帰らなければ。

「リンネ、彼らを転送！！　できる！？」

《……無理ですマスター。天然の磁力が、転移魔法を阻害しています。この世界内でさえ、時間がかかります。次元転送など、不可能です》

「……この世界の転移ポートに移動させるのに、どれくらいかかるの？」

《……これほどの質量となると、３０分は……》

「……ッ！」

ファイムは唇を噛み締める。そんなに時間がかかっては、転送する前に爆撃される。
それは、つまり。
彼らを、見捨てて去るということだ。

《すみません、マスター……》

拳を硬く握り締めるファイムに、リンネが沈んだ口調で声をかける。
ファイムは、ううん、と首を横に振った。

「リンネのせいじゃないよ。至らないのは、僕だ。僕の弱さが、この状況を作り出した」
《マスター……》
「……行こう、リンネ」

呟くようにそう言うと、ファイムは死体の山に向き直り、膝をついた。そして両手をつき、頭を下げる。

「申し訳、ありません」

たった一言、そう呟くように言って。
ファイムは、空へと駆け上がった。

「ララウェイ！！」
『ファイム！！』

空に上がって数秒後、ファイムはアギトとユニゾンした状態のシグ

ナムと遭遇した。そのまま彼女たちと並んで飛行しつつ、転移ポートを目指す。

「あの艦の出現により、主はやてから撤退命令が出た。残っているのはお前たちだけだ。……お前が見に行った調査員たちについては、聞かぬほうがいいのだろうが……」

「……すみません。力、及ばず。僕は……」

「そうか……」

『ファイム……』

シグナムは多くを聞かず、悟ってくれた。彼らがどうなったかを。

ファイムは、後ろを振り返る。

そこにあるのは、こちらに船首を向けながら暴力を撒き散らす、巨大な戦艦。

ファイムは、拳を握り締めた。

◇　◇　◇

「ギレンの魔力、補足完了～♪　転送開始っと♪」

「待てグリス。本人の許可なしに転移をすれば、転送事故が起こるのではないか？」

突如『ワグリア』に現れた戦艦、名を『シュツルム』とするそれの内部。ブリッジにおいて、そんな会話が行われた。

グリス、と呼ばれたのは白衣を纏った小柄な少年だ。ブリッジのコントロールパネルを叩きながら、楽しそうに笑っている。そのグリスは、ふっふ～、と投げかけられた疑問に胸を張って応じた。

「もしそうなっても、生きていればなんとかなるなる♪　頭が吹っ飛んでない限りはね～♪」
「私は冗談を聞いているのではないが」
「じょ～だん？」

凛々しい口調の女性のその言葉に対し、グリスは一瞬、呆け。
そして、壮絶な笑みを浮かべた。

「実現できる冗談ほど、つまらないものはこの世にないよ？　ボクは冗談には拘る」
「……」

女性は押し黙る。グリスはキーボードを変わらず叩きながら、心の底からの笑みを浮かべる。

「リクエストがあるなら、脳さえあれば心臓が止まってても治すよ？」

グリスの手が、止まる。

「ドクターの下で学んだのは、そういう技術だからね～。余裕余裕♪」

グリスが振り返り、女性もまた、振り返る。
二人の視線の先には、一人の男がいた。
口元に笑みを頌えたその男に、楽しそうにグリスは言う。

「ボス～♪　ご命令通り、準備万端いつでもどこでもオールオッケーだよん♪　ギレンも回収完了～、五体満足かはわかんないけどね

ん？」

キャハハハハ、と笑いながら、グリスは言う。女性は不快そうに眉をひそめたが、男は気分を害した風もなく鷹揚に頷いた。

「五体満足でなかったとしても、お前が元に戻すのだろう？　ならば何一つ問題はない」

「ありゃりゃ、聞いてたのボス～？　人が悪いな～？　キャハハハ♪」

「……フッ。世界的に私が悪ということは今更だ。一つ二つ増えたところで変わりはない」

「かぁっこい～！！　キャハハハハ♪　でもでもボス、一つだけ訂正い～い？」

「なんだ？」

男が聞き返す。グリスは、いやいや大したことじゃないんだけどねん？　と、前置きしつつ、言葉を紡いだ。

「元通りはありえないよ？　ボクにとっての『治す』はイコールで『改造』だからね～。そこんとこは訂正しといてね？　キャハハハ♪」

「わかった。心に留めておこう」

「さっすが、話がわかるぅ♪」

笑うグリス。彼がそうして一頻り笑ったあと、男はグリスに問いかけた。

「――準備はいいな？」

「いつでも」

グリスは、即座に応じた。男は頷き、指示を出す。

「ならば撃て。……管理局への、宣戦布告だ」

「待ってましたっ♪」

グリスがキーボードを叩き始める。その光景を見ながら、男は呟いた。

「さて、後の歴史はこれを何と呼ぶのかな？」

◇　◇　◇

管理局に、一つの緊急連絡が入った。

――ワグリアが、消滅した。

第二話　賭け金は命しかない（後書き）

長いですねぇ……。

もうちょっと、すっきりさせられるようにしたいです。

ありがとうございました。

第三話　集結、とある青年の迷い

第４７観測指定世界ワグリアの消滅。

核兵器と呼ばれる質量兵器によって引き起こされたそれは、あらゆる次元世界に衝撃を与えた。

ＪＳ事件やマリアージュ事件といった、質量兵器によって引き起こされた大規模な事件も記憶に新しい現在。『質量兵器』という単語は、イコールで恐怖となりつつあった。

たった一発で、世界一つを消し飛ばす兵器。

かつてジェイル・スカリエッティが起動させた『聖王のゆりかご』の主砲と並ぶレベルでの兵器に対して、管理局は対策を迫られていた。

◇　◇　◇

「申し訳、ございませんでした……ッ！」

「ファイムくん、頭上げて、な？」

「あの場にいながら、自分は……自分は……ッ！」

特務部隊機動六課部隊長室。そこで、一人の青年が文字通り地に頭をこすりつけながら謝っていた。

ファイム・ララウェイ。優秀な執務官でもある彼は、ワグリアの消

滅の際の責任を、誰よりも感じていた。

「ただ、見ていることしか……逃げることしか、できませんでした……ッ！　生き恥など、いくらでも晒します。ですが、彼らを！　連れ帰らなければならなかった彼らを、自分は見捨てた！」

「ファイムくん！！」

はやての、鋭い声が響き渡った。

ファイムの鼻を、甘い香りが刺激する。気付いた時には、はやてに抱き締められていた。

「責任は、部隊長である私にある。ファイムくんは、出来る上で十分頑張ってくれたよ」

「ですが、自分は……」

「私らは神様とちゃう。全てを救うことなんてできひん。そうやろ？」

「……それでも、やらなければならなかったのに……」

首を振り、ファイムは言う。

「捕まえるべき相手に敗北し、取り逃がして、そればかりか、待つ人がいる彼らを放置して。……愚か者です、自分は！」

「ファイムくん……。仕方ないなぁ……少しだけ、堪忍な？」

――パンッ！！

はやてが言った瞬間、乾いた音が響いた。はやての右手が、ファイムを叩いていた。

「ああ、痛いなぁ。ホンマに痛いわ……。ええか、ファイムくん。

わたしらがせなアカンことは、後悔してうずくまることでも、泣くことでもあらへん。もうこれ以上の犠牲を出さんことや。……泣くななんて言わへんし、自分の力のなさを恥じるなとも言わへん」

そこで、ファイムは気付いた。はやての声も震えていて、まるで、必死に泣くのを堪えているかねようであるかのようであると。

「でも、立ち止まったらアカン。わたしたちが立ち止まったら、もっと多くの犠牲が出てまう。だから、立ち止まったらアカンのや」

「はやてさん……」

「これ以上の犠牲は、絶対に出さへん。……ええな、ファイムくん」

「――はい！」

目の前にいる、自分より遥かに強い女性の言葉に、ファイムは頷いた。

◇　◇　◇

『ヴォルフラム』の食堂。そこに、シグナムとヴィータの姿があった。二人とも真剣な表情で向かい合っている。

「ファイム、っていったよなあいつ？」

「ララウェイがどうした？」

「あいつ、なんつーか危なっかしくないか？」

「どういうことだ？」

ヴィータの言葉に、シグナムが聞き返す。ヴィータは、ああ、と頷いた。

「訓練のメニューを組むために模擬戦をしたんだけどよ。あいつ……まるで命を投げ捨てるみてーな戦い方しやがる」
「命を投げ捨てる、か？」
「『受け』のスタイルだってことはわかる。でもあいつ、必要以上に自分を犠牲にするみたいな戦い方をしやがるんだ」
「……」
その言葉に、ふむ、とシグナムは考え込む。そのシグナムに、ヴィータはなにか知ってんのか、と問いかけた。シグナムは、頷く。
「いや、詳しく聞いたわけではないが……。おそらく、原因は奴の生い立ちだろうな。命を懸ける、もしくは捨てる……それが当たり前の世界で生きてきたのだろう」
「よくわかんねーな」
「すまんな、許せ。本人が語らねば、意味がなかろう？」
「まーな」
食事を胃に入れつつ、ヴィータ。そうして目の前の食事を全て胃に入れると、思い出したように言った。
「そういや、六課メンバーがまた集まるんだよな？」
「全員ではないがな。エリオとキャロは明日に到着する。スバルとティアナはまだしばらくかかるそうだ」
「テスタロッサは？」
「一週間以内には出向してくるそうだ。なのはについては、言わずともわかるだろう？」
真剣な表情でシグナムは言う。ヴィータは頷いた。

「ああ。わかってる。あいつはようやく休めるようになったんだからな」
「もっとも、これ以上に状況が厄介になるなら、なのはも召集されるだろうが」
「させねーよ。あたしが、そんなことは絶対に」
「ふっ……頼りにしているぞ」
「ああ」

微笑を浮かべるシグナムに、頷いて応じるヴィータ。
二人の騎士の話し合いは、そこで幕を閉じた。

◇　◇　◇

地上本部艦船ドッグ。
ファイムが出向しているＬＳ級艦船ヴォルフラムは、整備のためにそこを訪れていた。

また、ヴィータ教導官による午前中の（文字通り）地獄のような訓練を終えたファイムは、空港に来ていたのだ。

「ええっと、二人は……」

キョロキョロと周囲を見渡しながら、ファイムは呟く。ここにきたのは、とある二人の迎えだ。

「ファイムさ～ん」

と、不意に声が聞こえてきた。見ると、そこには赤髪の少年と、薄

いピンクの髪の少女の姿。

エリオ・モンディアル。
キャロ・ル・ルシエ。

共に１４歳という若さでありながら、それぞれ陸戦ＡＡランク、同Ａ＋ランクを保有する二人だ。

「二人とも、久し振りだね。覚えててくれたんだ」
「はい、ファイムさん」
「もちろんです」

二人は笑顔を浮かべる。かつての戦技披露会でこの二人の保護者であるフェイトと戦ったファイムは、この二人とも縁があった。

「光栄だね、僕みたいなのを覚えててくれるなんて」
「そんな、謙遜しすぎですよ」
「そうですよ」
「あはは……そう言ってもらえるのは嬉しいけど、エリオは僕よりランク上でしょ？　キャロだって僕と同ランクだしね」

苦笑しつつ、ファイムは言う。陸戦と空戦の違いこそあれど、ランクは同じだ。なら、エリオたちの言葉は嬉しくはあるが、お世辞に聞こえる。

「まあ、それはともかく……二人とも、特務部隊機動六課へようこそ」
「「はいっ！！」」

元気よく二人は敬礼する。ファイムはそれを見ながら頼もしいと思

うのと同時に、なにかひっかかるものを感じていた。

◇　◇　◇

特務部隊機動六課部隊長、八神はやて。

一部では『地上本部の切り札』とも呼ばれる彼女は、現在、『ワグリア』の消滅の件について陸・海・空、それぞれの管理局上層部に対して説明を行っていた。その隣には、エリオとキャロを案内し、送り届けたその足でここへきたファイム・ララウェイの姿もある。

「今回使われたのは、核兵器と呼ばれる質量兵器です。第９７管理外世界『地球』には現代最強の兵器として、第５５管理外世界『サーマ』ではその技術の片鱗らしき記述が発見されています」

「核兵器……？」

「世界を破壊する質量兵器だと……？」

「そんなものが……？」

会議が俄に騒がしくなる。ファイムは、その中でも冷静に言葉を紡いだ。

「無限書庫に調査依頼はしていますが、おそらく情報は期待できないでしょう。兵器として現存する『地球』でさえ、使われたのは僅か２度であり、失敗しています。……もっとも、本来の威力の数％しか威力を発揮しなかったにも拘わらず、都市が２つ吹き飛び、何千万人という数の――いえ、犠牲者というのであれば、何億人という犠牲者が出ています」

ごくり、と誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。それを聞いてか、はやてが言葉を紡いだ。

「『地球』ではそれを保有できる国を制限して、尚且つ抑止力として用いてます。しかしそれは、『地球』だからこそ通じる道理。ここでは通用しません」

「しかし、それほどの威力であるならば、そう簡単に製造はできんのではないか？」

「そうでもありません」

上官の言葉に、ファイムは首を左右に振って言葉を紡ぐ。そしてモニターに某かの設計図を出した。

「これが件の核兵器の――特にこれは水爆と呼ばれるものの設計図です」

一気に会議室がざわめく。その中から、声が飛んだ

「そのようなものを、どこから手にしたのだ？」

「『地球』でです。ちなみにこの設計図はとある大学生が卒業論文で描いたものです。……『地球』の文明力は、ミッドチルダに比べて魔法技術の面で劣っています。その世界で一学生が描けるものを、この世界の学者が描けないと思いますか？」

「……ッ」

その言葉に、全員が言葉を止めた。ファイムは、更に言葉を続ける。

「また、核兵器にはプルトニウムという物質が必要になるのですが……おそらく相手はそれさえもクリアしているのでしょう。……報告は、以上です」

静かな声が響いた。声を発する者はいない。

「……私たちは、全力を上げて犯行グループの逮捕、そして事件解決を目指します。質問がなければこれで、会議を終わらせていただきます」

ファイムがそう締めくくると、上官たちは次々と部屋を出て行った。結局、こちらにすべてを任せるという腹積もりだろう。

大規模テロであったＪＳ事件も記憶に新しいこの現状で、その神経は理解できかねるが――仕方ない。

そうして上官たちが全員出て行くと、はやては大きく息を吐いた。

「お疲れ様やなぁ、ファイムくん」

「はい、お疲れ様です。……結局、増員はなしのようですね」

「まあ、私らは『奇跡の部隊』らしいからなぁ。それも仕方あらへんよ」

どうせ、また何とかしてくれると思てんのやろ――はやては面白くなさそうに言う。ファイムは、思わず問いかけた。

「はやてさんは、どう思いますか？　僕たちで、解決できると思いますか？」

「思わへんな」

即答だった。思わずファイムは言葉に詰まる。

「まず相手の規模がわからへん。ジェイル・スカリエッティはなん

やかや言うて単独犯やった。でももし、これが多次元世界を巻き込んだ犯罪組織なんかが起こしてる事件やとすれば、対応できるかどうかはかなり怪しいんが現実やよ」

「なるほど……」

「集まるにしても、どうしても時間がかかってまうからなぁ。手掛かりも、この『ギレン・リー』しかあらへんし……」

はやては顔写真が貼られた一枚の紙を取り出す。そこには、一人の男について記されていた。

ギレン・リー。危険度S級指定の広域次元指名手配犯罪者。傭兵として多くの次元世界を渡り、その過程で民間及び管理局へ重大な被害をもたらしている男だ。

ファイムが戦い、敗れた相手である。

「この男は傭兵です。金さえ積まれれば、管理局さえ敵に回すほどの。……ここから探るのは、難しいでしょうね」

「せやろな。……さて、どうしたもんかな？」

「……一つだけ、提案が」

悩むはやてに、ファイムは言葉を紡いだ。なんや、とはやてが聞く。

「今回の事件は、管理外世界でしか見られないような兵器が用いられています。故におそらく、相当な技術力を有した科学者がいるはずです。そして、裏には裏の繋がりというものが少なからずあります」

「なるほど、それで？」

わかっているであろうに、はやては聞く。ファイムは、頷いた。

「ここ数十年で最も凶悪で厄介だった次元犯罪者に聴取を行いたいと思います」

そして、ファイムは口にする。
自身にとっても因縁ある、その人物の名を。

「ジェイル・スカリエッティに、話を聞きに参りましょう」

◇　◇　◇

軌道拘置所。凶悪な次元犯罪者が収容されるその場所に、その男はいた。

ジェイル・スカリエッティ。戦闘機人を率い、『聖王のゆりかご』を甦らせ、聖王さえも甦らせた稀代の天才。
しかし、アンリミテッド・デザイアという名の通りの結末の果てに、夢敗れた男。

「ほう、私に面会とは実に珍しい」

拘束椅子に座らされた状態のスカリエッティが、楽しそうに言う。
そしてファイムとはやての姿を見ると、僅かに目を見開いた。

「ほう！　これはこれは、私の夢を砕いてくれた奇跡の部隊、その部隊長殿ではないかね」
「久し振りやね、ジェイル・スカリエッティ。尋問の時以来やな」

はやては冷たい声色で言う。スカリエッティはふふふ、と笑みを漏らした。

「辛辣だねぇ。実に態度が冷たいじゃないか」

「嫌なんやったら、さっさと協力してもらえへんかな？」

「それは断るよ。それとも、協力すれば奉仕でもしてもらえるのかな？」

「ありえへんな。そんなんはただの悪夢や」

「……冗談さ。だからそこのキミ、私を殺そうとするかのような目で見るのはやめてくれないかね？」

スカリエッティの言葉に、はやては自身の隣を見る。そこには、スカリエッティを睨みつけるファイムの姿があった。

「低俗な冗談は好きではありませんので」

「怖い怖い。その制服は、彼女と同じ執務官の証だろう？　執務官がそんなに短絡的でいいのかね？」

「あなたに言われることではありません」

「ふふっ」

スカリエッティは笑う。そのスカリエッティに、ファイムは言葉を紡いだ。

「ジェイル・スカリエッティ。あなたにいくつか質問があります」

「なにかな？　キミたちがＪＳ事件と呼ぶ事件については、何も語るつもりはないが？」

「それはこっちも理解しとるよ。今回は別件や。……自分、核兵器を持ち出すような次元犯罪者に心当たりはあらへんか？」

「はやてさん？」

ファイムは思わず声を上げる。それは、いきなりすぎる。
だがはやては厳しい表情のまま、言葉を紡いだ。

「時間があらへんのや。ぼかして回りくどくやる余裕はあらへん」
「……わかりました」
「ごめんな？」
「いえ……。それで、スカリエッティ。心当たりはありますか？」

ファイムが問いかけると、スカリエッティは笑みを浮かべつつ、こちらを侮るように見た。

「キミたちも大変だねぇ。私のところにくるために、いくつも許可をとって時間をかけたのではないかね？」
「あんたに心配されることやあらへん」
「それも道理だ。……結論から言えば、核兵器を持ち出しそうな者なら、何人か心当たりがあるねぇ」
「ホンマか？」
「嘘を吐く理由がない。私たちの世界はキミたちが思っている以上に繋がりというものがある。マリアージュの件でもそうだっただろう？」

マリアージュ事件――その時も確かに、この男の情報が役に立ったのも事実だ。
だが――

「だが、知っているといっても、語るかどうかというのは別の話だね」
「そう言うと思っていましたよ」

ファイムはため息でも吐きたげな表情でそう言うと、木箱を取り出

した。ほう、とスカリエッティが言葉を漏らす。

「ドゥーエ、でしたか？　彼女の命日が近いのでしょう？」

入っていたのは、赤ワイン。血のように赤い、ヴィンテージものだ。

「ほう！　これはこれは実に素晴らしいものを！　良いのかね？　このようなものを犯罪者に渡しても？」

「結果として人命が救われるなら、安い買い物ですよ」

「なるほど、合理的だ」

「……それで、話していただけますか？」

「ふむ、いいだろう。情報提供をしようじゃないか」

スカリエッティは笑う。場合によっては他のナンバーズも巻き込もうと思っていたが、その必要はなさそうだ。

「だが、情報が少ないねぇ。ただ核兵器を作る技術というだけなら、それこそ何十と心当たりがある」

「……次元航行艦を保有し、同時に傭兵を雇うような奴や」

「ほう……それはまた随分と過激だね。キミたちも苦労している」

「心当たりは？」

はやてが問う。すると、スカリエッティは少し考えるように息を吐き、そして言った。

「４年前ではそれほどの規模の組織はなかったねぇ。……その核兵器の破壊力はどのくらいの規模だったんだい？」

「次元世界が一つ吹き飛ぶくらいです」

「なるほど、それほどの完成度となれば、流石に限られてくるねぇ。おそらく……グリス・エリカランだろう」

「グリス・エリカラン！？」

はやてが声を上げ、ファイムは目を見開いた。スカリエッティは、笑みを浮かべる。

「ありえへん！　グリス・エリカランは――」

「死んでなどいないさ。私と同じで、クローン体で生き残ったのだろうね。現に私は、４年前に彼と一度再会している」

「……」

ファイムが厳しい表情を浮かべる。スカリエッティは笑った

「まあ、今の私にわかるのはこれくらいだ。満足して頂けたかな？」

「……心当たりがあるといえ者たちについては、リストを作って頂きます」

「それぐらいなら構わんよ」

スカリエッティが応じる。ファイムは頷くと、では、と口を開いた。

「……はやてさん。少しで構いません。僕とこの男を、二人きりにしていただけませんか？」

「なっ、何を言うとるんや？」

「個人的に因縁がありまして。……心配でしたら、監視していただいて結構です」

強い意志を宿した瞳を、ファイムに向ける。はやては、数秒悩んだ後、ファイムに背を向けた。

「終わったら、話、聞かせてな？」

「はい」

はやてが出て行く。ファイムは息を吐くと、改めてスカリエッティを見た。そして、言う。

「お久しぶりですね、ドクター」

◇　◇　◇

「あなたは覚えておられないかもしれませんが、昔、世話になったことがあるんです」

「ほう？」

「あなたにしてみれば、実験のモルモットだったのでしょうがね」

言いながらファイムは上着を脱ぐと、右腕の袖を捲り上げ、手袋を外した。

そこにあるのは、無骨な機械の腕だ。

スカリエッティの表情が、大きく変わる。

「ほう、なるほど……記憶しているよ。１２年ぶりかな？」

「覚えて頂いていたとは、恐縮ですね」

「キミも私にとっては作品の一つ。作品を覚えているのは当然だよ」

「そうですか」

それを聞き、ふう、とファイムは息を吐く。

「話とは、その件についてです。……確認しますがドクター、僕にはＩＳ――インヒュレート・スキルはないんですよね？」

「ああ、ＩＳは戦闘機人の特権だからねぇ。半機人とでも言うべきキミには備わっていないよ」
「そうですか……」
僅かに、ほんの僅かに落胆した声音で呟く。普通なら気付かない程度の起伏――だが、スカリエッティは気付いた。
「どうしたねかね？　ＩＳが必要にでも？」
「あなたには関係ありませんよ」
「いやいや、そうでもないよ。……ふむ、なるほど。先程の部隊長殿か」
くっくっ、とスカリエッティは笑う。ファイムは、どういうことですか、と問いかけた。
「なに、単純な話さ。あの部隊が再結成されれば、キミはお荷物になる。そういうことだろう？」
「……ッ！」
「図星かね？　ふむ、なるほど確かにその通りだろうね。ニアＳランク以上がゴロゴロしているような部隊だ。キミ程度では、足手纏いになってしまうだろうね？」
ニヤニヤと、楽しそうに笑いながらスカリエッティは言う。
対しファイムは、表情を強ばらせていた。
それは、考えないようにしていたこと。
目を背けてきたことだから。
「１２年前、私たちのところから逃げ出した時、ドゥーエに手も足

も出なかった実力から成長したとしても、所詮は知れている。違うかね？」

「……僕は」

「キミの身体スキャンは行ったが、精々がAランク程度だったと記憶しているよ。一般の魔導師としては優秀でも、かの部隊では役立たずだろうねぇ？」

「ッ、うるさい！」

「ふふっ、そう熱くならないでくれたまえ。私はキミのためを思って言っているんだよ。……あの部隊から、キミは離れるべきだ」

ガツンと、頭をなぐられたかのような衝撃を感じた。

勿論、錯覚だ。しかし、そう感じさせない何かがあった。

「思い出したよ。キミは確か一度、我が研究所の一つを襲撃したのだったね？　そして、結果敗れた……それが答えだよ」

「……僕は、でも……」

「キミも大事な作品だからね。壊れて欲しくはないのさ。それに、キミが足手纏いであれば、キミの仲間が傷つく。違うかね？」

ファイムは唇を噛み締める。スカリエッティは笑った。

「あぁ、あぁ、哀れだねぇ！！　愚かだねぇ！！　自分の力を過信した愚か者のために死んでいく！！　実に無価値じゃないか！！」

「……ッ！」

脳裏に浮かぶのは、はやてたちが倒れる姿。

それを、傷ついた自分は眺めているしかないという悪夢。

いや――起こりうる現実。

「まあ、それでもいいというのなら話は別だがね。私は今回、部隊の役者ではない。精々観客として楽しませてもらうよ」

――バタン。

扉が閉じられる。残されたのは、スカリエッティ一人だ。

「実に心が脆いねぇ、彼は。楽しませてもらえそうだ」

「……ファイムくん？　何を、言うてるん？」

「勝手とは理解しています。しかし僕がいては、皆さんに迷惑をかけてしまいます」

ファイムは、頭を下げる。

「僕を、部隊から外してください」

◇　◇　◇

時空管理局地上本部。

その近くにある公園で、ファイムは空を見上げていた。
考えるのは、はやてのこと。彼女の泣きそうな表情が、頭から離れない。

「……はぁ」
《マスター、これでよかったのですか？》
「良かったもなにも、これしかなかったよ。確かに僕があそこにいても、できることなんて迷惑をかけることだけだから」
《マスター、そんなことはありません。マスターは……》
「ありがとう、リンネ。けれど、これで良かったんだよ」

顔を手で覆うようにしながら、リンネは言った。

そう、これでいい。
自分の存在が人を傷つけてしまうなら、自分などいないほうがいい。

――ジャリッ。

不意に、地面に敷き詰められた砂利を踏みしめる音が聞こえた。ファイムがそちらに視線を送ると、そこには彼の友人、リューイ・エンドブロムの姿があった。

「こんなとこでなにしてんだよおめーは？　仕事はどうした？」
「リューイ……」
「しっかりしろよテメェよ。陸士１０８部隊もお前らが担当してる事件に協力することになったから、おめーにゃ頑張ってもらわねーといけねぇんだよ」
「……それなら、もう僕にはすることがないよ」
「あぁ？」

リューイが眉をひそめる。ファイムは、呟くように言った。

「抜けたんだ。僕には、あそこにいる資格はないから」

「んだと」

「あそこにいたら、迷惑をかけちゃうから。僕は弱いから、そのせいで迷惑をかけちゃうんだ」

「……テメェ」

リューイが底冷えする声で呟いた。そしてリューイはファイムの目の前に立つと、胸倉を掴み上げた。

「誰に吹き込まれた？　んなくだらねぇこと言ったのは誰だよ？」

「誰でもないよ。僕自身が決めたんだ。弱者が、迷惑をかけてしまわないように」

「……テメェ、あれだ」

それを聞いたリューイは、右拳を握りしめる。

「歯ぁ喰い縛れこのボケがっ！！」

ドガッ、という鈍い音が響いた。手加減なしの一撃が、ファイムを吹き飛ばした。

ファイムは上体を起こして口元を拭いながら、リューイを見上げる。

「……何を」

「あぁ？　ボケにゃいい薬だろうが。で、何だって？　もっぺん言ってみろよテメェ」

「……僕は、弱いんだよ」

立ち上がろうとするファイム。そのファイムの胸倉を、リューイは

掴み上げる。

「……ふざけんなよテメェ。どの口がテメェが弱いなんてほざきやがる？」

「事実、でしょ？」

「ふざけんな！　テメェは十分に強ぇだろうが！」

「……リューイには、わからないよ」

グッ、とリューイの腕を掴みながら、ファイムは叫んだ。

「どれだけ僕が悔しい思いをしてきたと思ってるの？　魔導師ランク空戦Ａ＋――１２年前から、入局してからどれだけ頑張っても一歩も進めない僕の気持ちがわかるの！？　昇格試験を２０も落ちてる僕の気持ちが！」

「それでもＡ＋なんてランクなら、十分だろうが！」

「ＡＡＡ＋のリューイに言われたくないよ！」

その言葉に、リューイはハッとなる。ファイムは、尚も続けた。

「『普通より優秀？』そんなの、望んでない！　それじゃダメなんだ！　フェイトさんに引き分けたのも、所詮は時間切れ！　ホントなら勝負にもなってない！　僕なんてその程度なんだよ！」

「ッ、だからといって逃げていい理由にはならねぇだろうが！」

殴り合いが始まる。互いに、想いをぶつけ合う。

その中で、ファイムは呟くように言った。

「……思い知ったんだ。敵の傭兵には、僕のフルドライブも通用しなかった。当然だよね。ＡＡＡ－になれるくらいじゃ、通じないんだ。……体にカートリッジを積んで、使うなって言われるフルドラ

イブを使って……命しか賭け金がないからそうしたのに、それさえ通じないんだ。僕にできることなんてないんだよ。いつだってそうだった。救った命より、救えなかった命のほうがずっと多くて、だから強くなりたくて、でも、少しも強くなれない」

必死に訓練しても、昇格試験は一度も突破できなくて。

執務官試験もランクを誤魔化すくらいの筆記試験の成績を出すしかなくて。

凶悪事件を担当していても、制圧の時は部隊の協力を得るしかなくて。フェイト・T・ハラオウン執務官や、ティアナ・ランスター執務官のように単独での制圧はできない。

嗚呼、とファイムは思った。
こんなにも自分は、弱いのだと。

だがそれを、リューイは否定する。

「いい加減にしろよテメェッ！　テメェは、俺たちをたった一人で救ってくれたじゃねぇか！　管理局が殺すしかねぇって判断したなかで！　暴走した俺たちを命令違反してまで止めてくれただろうが！　助けてくれただろうが！」

一際強烈な拳が、ファイムに入る。

「言わせねぇ。たとえテメェ自身であろうと。ファイム・ララウェイが弱ぇだなんて、絶対に言わせねぇ！！」
「買い、被りだよ。僕は……」
「だったら、嘘なのかよ？」

ファイムを見下ろしながら言うリューイの言葉に、ファイムは顔を上げた。

「『死ななくていい命を救う。それはつまり、全ての人を救うことだよ』なんて言ってやがったのは！！　あれは嘘かよ！」

「嘘じゃない！　けど、僕は！」

「一緒だろうがよ！　動かねぇってんなら！　テメェは何も見えてねぇ！　管理局には、テメェをヒーローと思ってる奴が大勢いるんだよ！」

リューイは怒鳴る。必死に、思いを届けるために。

「俺たちを救った『緑風事件』！　この間の、37人をたった一人で救い出したホテルの爆破テロ！　それだけじゃねぇ！　管理局の奴らは口を揃えてお前を『エース』だと！　『ヒーロー』だと呼びやがる！　お前はそういう奴なんだよ！　命を懸けて自分にできる以上のことをしてきたから！　だから、テメェは強いんだよ！」

立てよ、とリューイは言った。

「本当に強いかなんて関係ねぇ！　弱くていい！　でも、テメェを信じてる奴を裏切んな！　女を泣かせんな！　立てよヒーロー！　立てっつってんだよ！」

「あああっ！！」

何かを絞り出したかのような叫び声。

ファイムの拳が、リューイの顔面を捉え、殴り飛ばした。

八神はやては、地上本部の寮に部屋がある。基本的には任務期間中に艦船が整備に入った時の仮眠室代わりである。
そしてそこで、はやては来客者に背を向けて座っていた。

「今更、都合がいい話だとは理解しています」

その来客者は、頭を下げながらそう言った。

「迷惑をかけます。しかし、自分はここにいたいのです」
「……自分から辞める言うといて、勝手やとは思わへんか？」

はやては振り返らぬまま、来客者――ファイムに向かってそう言った。ファイムは、はい、と頷く。

「それでも、やるべきこと、自分が果たすべきことを見つけました。自分は弱いです。でも、それでも戦うことに意味はあるのだと、そう知りました」

許していただけないでしょうか――ファイムは、そう問うた。

はやてはしばらく無言でいたが、意を決したように口を開いた。

「許さへん。もう二度と、そんなこと言わへんって誓ってくれへん

のやったら、絶対に許さへん」
「二度と言いません」
「なら、ええよ」

はやてがファイムのほうを向く。その目は、赤かった。

「……申し訳、ありませんでした」

ファイムは、もう一度頭を下げた。
そんなことしか、できなかったから。

でも、それでも。
決意は、変わらなかった。

◇　◇　◇

ガラッと扉が開く。扉の内部は研究施設で、そこにはグリスがいた。
グリスは振り返ると、来客者に声をかける。

「あ、ギレンだ。どしたのどしたの？」
「俺様のデバイスを取りに来たんだよ」
「あぁ～、なるほど了解。メンテナンスなら完璧に終わってるよん♪　でもいいの？　言ってくれれば滅茶苦茶に改造したげるよん？」
「遠慮するよ。テメェにやらせるとろくなことになりゃしねぇ」

ギレンは肩を竦める。グリスはキャハハ、と笑った。

「ちぇ～、つまんないなぁ。他のみんなも体をいじくらせてくんな

いし、つまんないんだよねぇ」
「だったらまず、自分の言動を改めろ」
「それは無理だよん♪　キャハハハハハ♪　これは僕のプログラムだからねぇ。変えらんないの」
「ああ、そうかよ」

キャハハと尚も笑うグリスに、ギレンは肩をすくめた。

「でさー、一つ聞いていいかな、ギレン？」
「なんだよ？」

グリスの言葉に、眉をひそめてギレンは返す。グリスは、少しだけ真剣な表情で言葉を紡いだ。

「ギレンはさー、なんで『あんなの』に協力するの？」
「『あんなの』ねぇ……」
「正直、ただの馬鹿でしょあれは？　夢を語ることしか、理想しか見てない子供。協力するだけのものがないでしょ？」
「そういうテメェはどうなんだよ？」
「ボク？　ボクは単純だよん♪　ここなら思う存分実験できるし、世界を玩具にできる。あんなにイカレた人にも中々出会えないしねぇ♪」
「はっ、狂人が。……俺は単純だよ。理由なんざただ一つ。金がいい。そんだけだ」
「ふーん。らしい台詞だね？」
「はっ」

ギレンは肩をすくめる。それに対してグリスは笑うと、そういえば、と思い出したように口を開いた。

「次の作戦きーてる？　なんかまた、とんでもないこと考えてるみたいだけど？　我らのりーだーはさ？」
「それについては今更だろうが。……『シャングリラ』の起動キーの確保だろ？」
「最終目的のためには絶対に必要だからねぇ。キャハハ♪　楽しくなってきたなぁ♪」

グリスは笑う。ギレンは、ふん、と鼻を鳴らした。

「どちらにせよ、俺はあの野郎をぶち殺す。久々だ。心の底から殺してぇって思える相手はよぉ」
「『地上本部のエース』ファイム・ララウェイだよね？　キャハハ、大物だぁ♪」
「あぁ？」
「ありゃ、知らないの？　ランクこそそこそこだけど、それからは想像できない実力をもってるって有名な人だよん♪　キャハハ、『奇跡の部隊』に組み込まれたんなら、厄介だよ～？」
「へぇ……」

ギレンの瞳が、怪しい光を宿す。

「相手にとって不足なしじゃねぇか。ぶち殺してやるよ」

戦いの時は、近い。

第四話　力がなくとも、エースと呼ばれるならば

断続的な金属音が響き渡る。響いているのは、地上本部のトレーニングルームだ。

ファイム・ララウェイ。
エリオ・モンディアル。

この二人による模擬戦が、行われていた。

「はああっ！」
「……！」

エリオの一撃を、力点をズラして受け流す。本来ならここで体勢を崩したエリオに一撃を入れるべきなのだが、その余裕がない。

（――速い！）

わかっていたことではあるが、わかっていても思わず舌を巻く。エリオのスピードは、ファイムが一撃を加える隙さえ与えてくれない。

（流石、一線級のストライカーはレベルが違うね……！）

その人がいれば、どんな状況も覆せる。そんな魔導師に与えられる称号。

溢れんばかりの才能と、それを開花させるだけの心の強さ。周囲の支え。良い師との巡り会い。

（なるほど、確かに『天才』だね）

才能はあるだけでは育たない。それを開花させるだけの環境と努力。そして何より、それに巡り会える『運』が必要だ。

それを彼は、いや、『彼ら』は持っている。

羨ましいな、とファイムは少しだけ思った。

努力が実を結ぶ。当たり前のはずのそれを実現できる彼らが、少しだけ羨ましかった。

だって、自分は身を結ぶことがなかったから。

でも、だからこそ。

凡人――いや、それ以下でしかないからこそ。

（そう簡単には、負けられない。――行くよ、リンネ）

（Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ）

念話でリンネが応じる。それとほぼ同時に、エリオも決めにきたらしい。

「ストラーダ！」

エリオの愛機であるストラーダがカートリッジをロードする。狙うなら、ここだ。

「紫電、一閃！！」

烈火の将シグナムと同じ技。ただただ純粋に魔力を込めた強力な一

撃が迫ってくる。

スウッと、ファイムは息を吸った。魔力を全身に送り、薄く、薄く膜を張るような状態にする。

迫り来るエリオ。ベルカ式のフェイトと表現される戦闘スタイルは、確かに速い。

タイミングは、一瞬。

――ドンッ！！

激突音。衝撃が周囲を駆け巡り、見ていた者たちの視界を一瞬だけ奪った。そして、目を開けたとき。彼らの前に現れたのは。

「……」

壁に陥没した穴を作り、そこに背を預けて座り込む二人だった。互いの衝突によって吹き飛び、ダブルノックアウトという状態だ。

「ここまでだな。引き分けか」

「ファイムくん！」

「エリオくん！」

模擬戦を見守っていたはやてとキャロが――はやては仕事をほったらかして来ていた――それぞれのところに駆け寄った。

それを眺めながら、ヴィータにシグナムが声をかける。

「ララウェイの戦法……確かに危険だな」

「あぁ。エリオの一撃を敢えて受けてのカウンター。ムチャクチャだぜ」
「確かにいかなる達人でも、攻撃の瞬間は動きが止まるものだが…だからといって、狙うものでもない」
「だな。……一応、防御はしたみてーだが、それにしたって無謀過ぎる」
「ふむ……危ういな」

シグナムのその言葉に、ヴィータはああ、と頷く。
生き残ることを考えないかのような戦い方。あまりにも、危う過ぎる。

「……しかも、矯正しようにも完成されちまってる。すぐに治せるレベルのもんじゃねー」
「厄介といえば、厄介だな。……主はやては、奴に好意をもっているようだ。だが……」
「あぁ。だからこそダメだ。あんな戦い方する奴に、はやては任せらんねー」

ヴィータは表情を険しくする。詰まるところ、二人の騎士がファイムに対して関心を寄せる理由はそこだ。

八神はやての騎士であり、家族でもある四人の騎士『ヴォルケンリッター』。その絆と主を思う気持ちは、何よりも、誰よりも強い。

「まあ、結局は主はやてが決めることなのだがな」
「……まーな」
「不服そうだな？」
「別に」

ヴィータはそっぽを向き、シグナムはやれやれと肩を竦める。
二人の視線の先では二人が目を覚まし、色々と騒がしくなっていた。

◇　◇　◇

痛む体をさすりながら、ファイムは自室にいた。その顔には、苦笑が浮かんでいる。

「いたたた……あれ？　なんかデジャヴ？」
《騎士シグナム殿との模擬戦時も、同じようになられていました》
「あ、そっか」

リンネの言葉に、ファイムは納得する。そういえばあの時ははやてと話をしたのだったか。
まあ、なんにせよ、一つだけ確認できた。

「リンネ、僕は凡人かな？」
《……それは、暗に自らが天才だと言っておられるので？》
「キミのマスターは、そういう人？」
《……失礼しました》
「ふふ、いいよ。冗談だから。……それで、どうかな？」
《……マスターの、人とは異なる手足を除けば、そちらに入るかと》
「うーん、やっぱりそっか」

あはは、とリンネの言葉に苦笑を浮かべるファイム。リンネは慌てて、申し訳ありません、と言葉を紡いだ。

だがファイムは、いいよ、と首を振る。

「それが事実なんだと僕も思うから。……今日、エリオと戦って改めて理解したよ。天才……というよりは、才能って言葉の意味が」

努力を行う意志と、それを支える周囲の環境と、偉大な教官と、そして何よりも、努力が身を結ぶという事実。

それこそが、才能。

「まあ、確認だから。気にしないで、リンネ」

《……マスターは、御自身の力に満足しておられないのですか？》

「してるわけない。……救えなかった命を思い出す度に、思うよ」

１２年。もうそんなに経ってしまった。

そしてその中で満足したことなど、一度もない。

自分自身が救われた身だから、誰かを救うことでそれを返そうと思って。

そうして、生きてきて。

いつも、思うのだ。

「届かないと、分不相応と理解してても、わかっていても」

届くなら、届いている。

届かないなら、きっと届かない。

ただ、それだけのことを。

認めずに、諦めきれずに、ここまできたから。

生きて、きたのだから。

「強くなりたい。もっともっと……って」

不条理で、腐った世界で。

それでも、生きてきたのだから。

《マスター……》

「ごめんね。女々しいマスターで」

《いえ……あなたは、私の誇るべき主です。私を生み出し、機械である私を家族と呼んでくれた貴方は、誰よりも私のマスターなのです》

「……ありがとう」

ファイムは微笑み、呟いた。

そして、それからは無言がしばらく続き。

それを打ち破ったのは、緊急警報だった。

◇　◇　◇

『海上の第七輸送艦より、緊急の応援要請が入った。わたしたちは今から現場に向かい、襲撃者の撃退及び捕縛に向かいます』

整備が済み、明日の朝には出る予定だった『ヴォルフラム』のブリッジに辿り着いたファイムは、はやてからそんな言葉を聞いた。

海上を航行し、地上本部を目指していた輸送艦が何者かの襲撃を受

けたというのだ。
しかもその輸送艦には、とある犯罪組織から押収したロストロギアがあるという。

おそらく、奴らだ。

すぐさまメンバーは出動を命じられ、輸送機に乗り込んでいる。また、その中でも先行することを命じられたらファイム、ヴィータの二人はバリアジャケットを纏った状態で他のメンバーに最終確認をとっていた。

「では、僕たちは先行して輸送艦へ行きます。ザフィーラさん、エリオ、キャロ、アギトはシグナム一等空尉の指揮下で後から援護をお願いします」
「心得た」
「はい！」
「はい！」
「おう！」
「任せておけ。……お前たちも、気をつけろ」
「わかってるよ」

ヴィータがグラーフアイゼンを担ぎつつ、適当に返事をする。ファイムは敬礼し、勿論です、と頷いた。

「では、武運を」

バッ、と、言葉と同時にファイムは飛び降りる。ヴィータもそれに続き、二人は飛行を開始する。

「ララウェイ」

「ファイムでいいですよ？　ヴィータさん」
「……あたしもさん付けはいらねー。じゃあ、ファイム。……足手纏いになるなよ」
「その時は構いません。捨て置いてください」
ヴィータの言葉に、ファイムは至極真剣な口調でそう返す。ヴィータはなっ、と固まった。
だがファイムにしてみれば、当然のことだ。
「空の人間である以上、覚悟はしていますから。……単純な計算です。巻き込まれてヴィータが被害を被るなら、僕など捨て置いて頂いたほうがいい」
「なっ、ふざけんな！！」
「至って真剣です」
「……ッ」
歴戦の戦士であるヴィータでさえ、怯むような目で、ファイムは言い。
ヴィータは、ちっ、と舌打ちした。
「そんなだから、テメェを……」
ファイムにその言葉は届かない。
ただ、目的の場所は近付いていた。
◇　◇　◇

「ふんふんふふ～ん♪」

鼻歌が響き渡る。唄っているのは白衣を纏った少年で、その歌を聴いているのは床に倒れた管理局員たちだ。

少年の白衣には、返り血であろう赤い模様が付いているが、少年は気にしていない。

いや、そもそも頬にべっとりと付いた血液さえ気にしていないのだから、衣服の血などそもそも気付きさえしていないのかもしれない。

少年の名は、グリス・エリカラン。

7年前に公式上死んだとされていた、かつての広域指名手配次元犯罪者。

当時の年齢を考えても異例だった実名による指名手配犯で、当時未成年でありながら危険度S級と認定された人物だ。

「ふんふ～ん♪　はい、おしまいっと♪」

「失礼します」

グリスが満足そうにうんうんと頷くと、不意に横合いから声が飛んできた。グリスがそちらを見ると、いつからそこにいたのか、そこには一人の女性が立っていた。

肩まで伸ばした、艶のある黒髪のポニーテール。その身に纏っているのは青のジーンズと白いシャツ。その上からは漆黒のコートを纏っている。

その女性は鋭い目つきでグリスを見つめながら、言葉を紡いだ。

「艦内の掃除は終わりました。現時点において、艦内に戦闘可能な者は存在しません」

「ヒュウ♪　流石だねぇ～！　全員殺したの？」

「いえ。殺すまでもありません」

「あ、そうなの？……ちなみに、どれくらい前からここにいたの？」

「２０分程前からになります」

そう言われ、グリスは笑った。

「人が悪いよ～。言ってくれればいいのにさ？」

「集中を乱してはならないと思いまして……。余計でしたか？」

「ん、ん、んーん？　まあ、どうせ僕の作業が終わるまでテンリュウさんにはしてもらうことなかったしね。問題なしなし♪」

「それを聞いて安心しました」

恭しくテンリュウと呼ばれた女性は頭を垂れる。グリスはあはは、と笑った。

「悪い気はしないんだけどさ、いいの？　あなたほどの人が頭なんて下げてもさ？」

「私の頭に価値などありません。目的のためならば、なんとも」

「にひひ♪　いーい感じに歪んでるねぇ♪」

テンリュウの言葉に、笑顔を浮かべるグリス。そしてグリスはよし、と呟くと、テンリュウに言葉を紡いだ。

「ボクの方も、セキュリティーは完全解除したから、目的の場所に行こっか。空からの敵はギレンがなんとかしてくれてるだろうしね

ぇ？」
「はい」

二人は歩き出す。瞬間、二人が向かっていた扉が吹き飛ばされ、一人の戦士が殴り込んできた。

「時空管理局だ！！　武器を捨て、投降しろ！！」

現れたのは、管理局員。

ファイム・ララウェイ。
グリスにとって因縁ある、若き執務官だ。

「ありゃりゃ？　どしてまた？　変だねー、妙だねー？」
「ギレン殿が落とされたということでしょうか？」
「それはないでしょ、多分。強いし？　ん、んー……ちょっと、確認してみるねん？」

テンリュウの影に隠れるようにしながらグリスは言うと、ギレンに念話を飛ばした。それは、即座に繋がる。

『あぁ！？　何の用だテメェ！？　こっちは忙しいんだよ！』
『おお、のっけからテンション全開、本気モードじゃんか♪　元気そだね～？』
『殺すぞクソガキ』
『あはは♪　そう怒んないでよ？　いやね、ギレンの標的がこっちきちゃったから、どしたのかなって思ったわけなんだよ』
『んだと！？　ちっ、やっぱりこのガキは囮かよ！』
『あ、やっぱり交戦中？』

『あぁ。ＪＳんときに活躍した赤髪のガキだ。まあ、これはこれで楽しめるんだけどよぉ？』
『え゛？　ギレンってばロリコン？』
『ぶっ殺す』
『あはは♪　じょーだんじょーだん♪　ん、んー、でもそれじゃ、テンリュウさんが相手するけど、いいのかな？』
『……ちっ。仕方ねぇな。他で我慢してやるよ』
『おけおけ。じゃね～♪』

若干不満そうなギレンの返事を受けると、グリスは念話を切った。
そして、テンリュウに小さな声で語りかける。

「なんかね～、ギレンはギレンでオモチャ見つけたんだって～？生かしとくと厄介だし、相手したげてよ♪」
「それは『殺せ』という、依頼ですか？」
「必要があると判断したらね～♪　っとと、なーんか、こっち睨んでるねぇ？」

ニヤニヤと笑いながら、グリスは無手の騎士を見る。その瞳は、真っ直ぐにグリスを捉えていた。

「本当に、生きていたのか。グリス・エリカラン」

その騎士は――ファイムは、確認するように、そう言った。

◇　◇　◇

時間はファイムが殴り込む１０分前に遡る。

「……ちっ」
「酷い、ですね」

輸送艦を視認したファイムとヴィータの二人は、その惨状に思わず絶句した。火を噴く甲板。吹き飛んだ装甲。無事なところなど一つもない。

とにかく、突入を――そう思った瞬間。

《魔力反応！　マスター！》
「ちっ！」

ファイム目掛けて砲撃が飛んできた。ファイムは防御をしようとしたが、ヴィータが割って入り、代わりに受け止めた。

「すみません……助かりました」
「気にすんなよ。……あいつか、撃ってきたのは」

ヴィータの鋭い視線が射抜く先には、銃口から煙を吹く巨大な銃を構えた男がいた。

「報告にあった奴だな」
「はい。ギレン・リー。強敵です」

ぐっ、とファイムは拳を握り締める。それを見て、ヴィータはファイムの前にでた。

「あいつの相手はあたしがする。ファイム、お前は突入しろ」
「ヴィータ？」

「いいから行け。もう少し経てばシグナムたちもくる。ここで時間くってる場合じゃねー」
「……わかりました」

こういう時、ファイムの判断は早い。ファイムはそのまま、艦内へと砲弾の着弾のように突入する。

この艦にはロストロギアがある。まずはそれを確保しなければならない。
ギレン・リーがいるということは、そういうことだ。

――そして、時は経って。

「妙だ。お前はあの時、確かに死んだはずだ」
「あはは♪　無理してそんな硬い言い方しなくてもいーのに♪　んっとねー、ドクターとやったことは同じだよん？　スペアつくっといたの♪」
「スペア？」
「そそ、スペア。ボクはボクが善人だなんて欠片も思ってないし『そんなもの』には吐き気さえ覚えるんだけどね？　まあ、だからいつだって死ぬ可能性なんてありありなんだよん♪　でもそんなの嫌だし？　だから造っといたの♪」

ケラケラと笑いながら、自分のオモチャを自慢する子供のように、楽しそうにグリスは言う。

「……」
「あ、納得したの？　そうそう、これはプロジェクトFの技術でね

ー。厳密にはボクであってボクでなかったりするんだけど……知ったことか」

雰囲気が一変。冷笑を浮かべるながら、グリスは言う。

「ボクはボクであり、それを否定する手段がないのなら、グリス・エリカランはここにいる。それだけだよ」

言い切ったグリス。それに対し、ファイムは無言。

言葉を返す必要はない。

かつて死んだはずの――否、殺したはずの犯罪者が生きていた。それだけなのだから。

だから、すべきことは、一つ。

「グリス・エリカラン。輸送艦襲撃の現行犯で逮捕します」

「投降しろとか言わないんだねぇ？」

「二度言う必要はない」

「うんうん、確かにそれは道理だ♪」

グリスは笑い、ファイムは拳を握りしめた。

敵は二人。グリスと、黒髪の女性。ニ対一。不利と一目でわかる。

しかも、グリスは技術者としての力以外に、魔導師として7年前の時点で推定ＡＡランクの力を有している。

そして、もう一人。黒髪の女性に至っては。

（リンネ、あの人はどうかな？）

（推定で、オーバーSランクです。バリアジャケットも纏わずにいるにも拘わらず、とてつもない魔力を有しています）
（……強いってことか）
12年も管理局にいるのだ。一目見れば、何となくで危険度がわかるようになる。
あの女性は、今まで出会った誰よりも強い。そう感じさせるだけのものがあった。
最初から全力で行かねば、捕まえるなど夢のまた夢。
「フルドライブ！！　モード・フェザーナイツ！！」
《Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ，　ｍｏｄｅ　Ｆｅａｔｈｅｒ　Ｋｎｉｇｈｔ》
ズドン、という衝撃音が響き渡った。ファイムの体から魔力が噴き出し、その背には白い翼が宿る。
その状態のファイムを見たグリスが、口笛を鳴らす。
「ヒュウ♪　のっけから手加減なし？　あはは♪　お約束を破ってくるねぇ？」
「出し惜しみをして敗れるぐらいなら、最初から全開でいくほうがいい」
「うんうん♪　道理道理♪　でもでも、一つだけだいござ～ん♪…
…その程度じゃ、最強の侍には適わない」
――ガガギィン！！

グリスが言い終わるとほぼ同時に、凄まじい金属音が響き渡った。
一言も声を発さぬままにファイムに接近してきた女性が、いつの間にか手にした刀でファイムを斬りつけ、ファイムがそれを障壁を展開して防いだ音だ。

ガラスの割れるような音が響き、ファイムの障壁が砕け散る。ギリギリで展開したとはいえ、フルドライブ状態の障壁を、一撃で砕かれた。

女性は無音のまま後ろへと、文字通り瞬間移動のように後退。今の一撃で折れた刀を一瞥すると、それを投げ捨て、ファイムを見据えた。

「まず、いきなりの非礼をお詫びします。私は言葉が苦手故に、刀で語らせて頂きました」
「……」
「強者と認め、我が名を名乗ります。我が名は、テンリュウ。テンリュウ・シンドウ。今はただの無頼の身にございます」
「……時空管理局執務官兼、特務部隊機動六課戦闘部隊隊員、ファイム・ララウェイ」

ファイムは、反射的に名乗る。それを聞き、テンリュウは頭を軽く下げた。

「我が流儀に沿っていただき、感謝します。ファイム・ララウェイ……その名、胸に刻ませていただきます。……では」

――空気が、変わる。

刺すような魔力が、殺気が吹き荒れ、ファイムは思わず体を震わせる。

「――推して参る」

ガンガガガギィガギィン！！

二人の衝突と同時に、凄まじい音が吹き荒れた。
ビリビリと、ファイムの腕に衝撃が走る。同時に、テンリュウの周囲に刃が舞った。

「所詮は十把一絡げの安物ですか……しかし」

キン、という音と共に、テンリュウの背後に魔法陣が現れる。ミッド式ともベルカ式とも微妙に違うそれは、召喚陣だ。

「まず……」

い、とファイムが言い切る前に、召喚陣より現れた刀の柄を手に取り、抜き放つ。

凄まじい速度の一撃。両の手からそれぞれ繰り出される斬撃は、リンネが展開した障壁を打ち砕く。
同時に、折れる刀。だが、テンリュウはそこでまた別の刀を手にする。

「くっ……！」

《ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

移動魔法によって、距離をとる。だが、テンリュウはぴったりとそ

れについてくる。

（見たところデバイスもないのに……！）

ファイムは内心で焦りを覚える。テンリュウという女性が使う刀はただの刀だ。誰でも使える量産品。

だからこそ脆いのだが、それはそれでおかしい。ただの刀が相手なら、ファイムの障壁が破られるわけがない。

だが現に破られている。それは即ち。

（デバイスなしで、こんなに高度な魔法運用を……！？）

『烈火の将』シグナムや『鉄槌の騎士』ヴィータ、『盾の守護獣』ザフィーラなどには及ばないが、ファイム自身も用いるベルカ式の基本にして奥義である肉体強化の魔力運用。通常はデバイスありきで行うそれを、彼女はなしで行っている。

どれほどの――力を持つというのだ。

（僕は、間違いなく劣ってる）

致命的な一撃を貰わぬよう、綱渡りのように立ち回り、『受け』に徹しながら、ファイムは思う。

敵は強い。明らかに、自分よりも。遥かに強い。

（けれど、それでも、僕が『エース』であるならば！）

ファイムの瞳がテンリュウの瞳を射抜く。
そして。

《Ｆｅａｔｈｅｒ　ｓｈｏｏｔ》
「ファイア！！」

ファイムの翼、その羽全てを弾丸とし、周囲にバラまく。
一発一発の威力は知れている。だが、数が集まればその威力は跳ね上がる。
周囲の機器が吹き飛び、爆発する。煙が、空間を支配する。

「……」

目を凝らし、敵が見えるのを待つ。この状態なら、敵もこちらを見えな――

――ザンッ！！

閃光が煌めいた。ファイムの翼、その左翼が斬り飛ばされる。

「……ッ！」

バランスが崩れ、体が傾くファイム。だが、ファイムは今の一撃で敵の位置を把握。バリアジャケットを右腕だけ消し、機械の腕を露わにする。

そして更に、ガキン、という音と共にカートリッジを二発ロード。
一時的に跳ね上げられた魔力を、右腕に集中する。

「一点突破！！」

《ｗｉｎｄ　ｂｕｓｔｅｒ》
「ウインドバスターッ！！」

煙を引き裂き、壁をぶち破り、翡翠の砲撃が室内から空を駆け抜けた。

バシュッ、という音を響かせ、ファイムの右腕が煙を吹き出す。
その後、バリアジャケットを再構成。ファイムは前を見る。

そこにあるのは、二つの人影。

「危なかった～！！　ありがとね、助かっちゃったよテンリュウさん♪」
「いえ、ご無事ですか？」
「元気元気、傷一つないよん♪」
「それは重畳」

テンリュウは障壁を展開しつつ、グリスとそんな会話を繰り広げる。
彼女の額からは、一筋の血が流れていた。

しかし、それだけだ。
多少服にダメージがあるが、それ以外には何もダメージがない。

効いて、いない。

「いい一撃でした。次は、こちらがお見せしましょう」

そして、一閃。
ファイムの翼を切り落としたのと同じ一撃が放たれ、ファイムを叩く。

「……ッ、あっ……！？」

残っていた翼を使い、ガード。視界の端に、テンリュウの刀が砕けている光景が映った。

ファイムは床を滑りつつ、体勢を立て直す。ようやく、目が慣れてきた。

――ズガガガガガガガガギィン！！

次から次へと現れるテンリュウの刀と、それを魔力で固めた拳で受け流し、あるいは受け止めるファイム。防戦一方たが、しかしそれでも凌いでいる。

「……」

テンリュウの目が、より一層鋭くなる。瞬間、斬撃のスピードが上がった。

「……ッ！？」

突然のスピードアップに対応できず、ファイムの腕が斬られる。だが、ファイムはそこにカウンターを合わせにいき、拳を突き出す。

「むっ……！」

テンリュウはそれを避け、後ろに下がる。ファイムはこみ上げてきたものを吐き捨て、テンリュウを睨む。

べちゃり、という音と共に、床に赤い血が広がる。斬られたのは腕だけ。それも右腕だったので、ダメージは特にない。だからこれは、別の要因。

フルドライブと、カートリッジによる身体への過負荷によるダメージだ。口元から血が滴る。しかし、止まるわけにはいかないのだ。

「……前にも思ったけど、無茶するよねぇ？」

「……『エース』、なんだって」

どこか嘲笑するような調子のグリスに、ポツリとファイムは呟いた。

「僕は、『エース』なんだって。そんな力、ありはしないのに。……でも、そう呼ばれるなら。弱くても、『エース』と呼ばれるなら」

《ｊａｃｋｅｔ　ｐｕｒｇｅ》

リンネの言葉と共に、右腕のバリアジャケットが弾け飛ぶ。

機械の腕が、そうして露わになる。

「その嘘を、吐き通す」

カートリッジが四発ロードされ、魔力が跳ね上がる。正真正銘の切り札を発動するためだ。

「……血桜」

テンリュウが呟き、召喚陣から一本の刀が現れる。刀身が赤く染まった、見るからに禍々しい刀だ。

「一点突破！！」

《Ｓｔｏｒｍ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

ファイムを中心に、風が吹き荒れる。変換プロセスを経なければならないため、溜めに時間がかかる。

「……」

対し、テンリュウは無言。ただ、膨大な魔力が研ぎ澄まされていく。

そして、二人は衝突する。

「ストーム……ブレイカァァァッ！！」

「夢想演舞」

――音が、消えた。

◇　◇　◇

「ッ、なんだ！？」

「あぁ！？」

海上で戦闘をしていた二人――ヴィータとギレンは、その光景に思わず動きを止めた。

輸送艦のブリッジが、翡翠の閃光と紅の閃光によって吹き飛んでいく。

推定でＡＡＡランク以上の魔法が衝突した――ヴィータはそう判断。

同時に、急がなければ、と彼女は思う。

おそらく、翡翠の方はファイムだ。そもそも彼はＡ＋程度のランクのはず。その彼がこれだけの魔法を使って、負荷がないはずがない。

しかし、目の前の敵の強さが、それを許してくれない。

「どけテメェ！！」

「はぁ！？　こっからが楽しいんだろうが！！」

ヴィータの振るうグラーフアイゼンを、ギレンは自身の巨大な銃で受け止める。

「オラァ！！」

そして、空いている左手で砲撃魔法を展開。ヴィータはギリギリでそれを防ぐ。

「くっそ……」

「流石は『ゆりかご戦役』の英雄！！　楽しいなぁオイ！！　そらそらそらそらそらァ！！」

「アイゼン！！」

次々と撃ち出される弾丸を避け、あるいは防ぎながら、ヴィータは叫ぶ。グラーフアイゼンはカートリッジをロードし、片側が針のように鋭く、逆側には噴出口が形成される。

「らあああああああっ！！」

「うおっ！？」

速度、威力共に上がったその一撃に、ギレンは耐えきれない。
鉄槌の騎士の一撃は、歴然の傭兵を撃ち落とした。
ズドン、という音と共にギレンは甲板に着弾。姿が見えなくなる。
「……」
追うか――そうヴィータが考えた時、念話が入った。
『ヴィータ。聞こえるか？』
『シグナム。ああ、聞こえてる』
『ラウウェイはどうした？　念話が通じんのだが』
『……あいつは、ちっと厄介なことになってるみてーだ。あたしは今からあいつの援護に行く』
今しがた落とした相手――ギレンも気になるが、それよりもファイムだ。
そう思い、グラーフアイゼンを握る手に力を込めるヴィータ。しかし、それをシグナムが押し止めた。
『いや、お前はそのままギレン・リーを捕らえろ』
『どうしてだよ？　このままじゃファイムが』
『ラウウェイのほうには、頼りになる援軍が向かっている。直に私たちも到着する。一網打尽にするぞ』
シグナムが念話でそう言ったとほぼ同時に、ヴィータの視界の端にとあるものが映った。
――それは、金色の光。

雷光の死神。

◇　◇　◇

「……ご無事ですか？」
「うん、元気元気～♪　傷一つないよん？」
「何よりです」

吹き飛び、青い空と青い海が見渡せるようになったブリッジに、そんな会話が響いた。

ニアSランクレベルの砲撃魔法の衝突、爆発から『無傷で』生還したテンリュウとグリスの会話だ。

「ただあれだねぇ。目がチカチカするよん」
「それはご容赦を。威力の相殺と衝撃の拡散で手一杯でしたので」
「あはは♪　いいよいいよ～♪　助けてくれたことにはすっっっごい感謝してるんだからさ～♪　というか、デバイスなしであの砲撃防ぐとか。ムチャクチャだよねぇ？」
「……師ならば、このような手段を取らずとも、丸ごとねじ伏せました」
「それはそれでムチャクチャだけどねぇ」

少し沈んだ調子のテンリュウに、彼にしては珍しく苦笑しながら言うグリス。
そのまま、でさ、とテンリュウに声をかける。

「彼、殺したの？」
「……夢想演舞は、魔導師風に言えば、いわゆる『多口砲撃』です。……そのうち、少なくとも二発は直撃しました」

『多口砲撃』――通常、砲撃魔法というのは一つの砲口、例えば拳やデバイスの先端から放出されるのが基本である。

しかし、『多口砲撃』という方式は、魔力スフィアやそれに類するものからも同時に砲撃を行うという、超高等技術である。

かの『エース・オブ・エース』が聖王を止めた一撃、『スターライトブレイカー』もブラスタービットを用いた『多口砲撃』の一種である。最低でもＡＡランク以上の魔力操作技術が要求されるほか、威力を持たせるには莫大な魔力を必要とするという前提条件があったり、どうしても一つの砲口から放たれる一撃が若干ながら弱くなるというデメリット（もっとも、総合的な威力は明らかにこっちが上であるし、その形式から応用範囲はかなり広い）があったりと、扱い難いが、圧倒的な力を有する術式である。

「ふーん……そりゃ、ふつーは死ぬねぇ？」
「はい。通常ならば」

グリスは『最強の侍』の実力を客観的に分析してそう結論を出し、テンリュウも自身の実力を冷静に分析してそう結論付ける。

だが、二人とも言葉の割には表情が厳しい。その理由は――……

「まあ、ふつーじゃなかったと」
「……そのようです」

二人の視線の先には、何故かバリアジャケットではなく、ボロボロになった執務官の制服を着たファイムがいた。

「ＡＭＦ……ですか」

「みたいだねぇ。まあ、衝撃までは消しきれなかったみたいだけどねん？」

目の焦点が合っていない様子のファイムを眺めながら、二人は言う。その中で、テンリュウはしかし、と呟いた。

「恐ろしい手段をとるものですね。一歩間違えれば、跡形もなく消し飛んでいたでしょうに」

「確かにねぇ♪　いくらテンリュウさんのが純魔力砲撃だっていっても、威力の桁が違う。ガジェット程度のＡＭＦなら、間違いなく吹き飛んでただろうし？」

クスクスと笑いながら、グリス。そう、その通りだ。

かつてＪＳ事件で難敵として存在したガジェットと呼ばれる兵器は、ＡＭＦと呼ばれる魔力結合を阻害する装置が付いていたからこそ、難敵とされた。

だが、一見無敵に思えるＡＭＦにも弱点がある。範囲外の魔法を阻害できなかったり、例えば魔法で加速された物質の加速そのものを消すことができないことや、雷や炎などに変換されたものも消せなかったりする。

そして、一番重要なのは出力だ。これは単純に力の問題で、ＡＭＦで消される前にそれ以上の力でねじ伏せれば貫けるというものである。

ＪＳ事件において『エース・オブ・エース』が純魔力砲撃でＡＭＦを抜くことができた理由も、そこにある。

そして、今回。

ファイムは、オーバーＳランクの砲撃魔法を打ち消す程のＡＭＦを発動した。

「とてつもない出力だねぇ。自分のバリアジャケットの構成さえできない程のＡＭＦ……あはは♪　古代魔法とかそーゆーのの世界だよ♪」

「同感です。しかし……ここが限界のようですね」

二人が、目の前にファイムがいるのにどうしてここまで余裕なのか。

逆にファイムは、どうして黙っているのか。

その答えが、出る。

――ビチャッ。

「あ゛っ、うっ……」

呻き声が漏れ、ファイムの口から夥しい量の血液が溢れ出す。ファイムは口元を右手で押さえながら、左手を地面につく。

テンリュウの一撃、その衝撃が内臓にダメージを与え、それによる吐血が、床を赤く染める。

見るからに、限界だった。

「魔導師のスキルとしてのＡＭＦが使われない理由はここだよねぇ。

……『使用者本人も魔法が使えなくなる』。更にバリアジャケットの構成さえもシャットアウトしちゃえば、モロに衝撃を生身で受けちゃうのが道理だ♪」

「……」

オーバーSランクの砲撃だ。衝撃だけでも凄まじい威力を誇る。魔導師が頑丈なのはバリアジャケットと魔法のおかげだ。それを失えば、ただの人間。

――耐えられる道理はない。

「ま、それでも十分っていえば十分だけどねん？　テンリュウさんの砲撃をまともに相殺しようとしたら、それこそ『エース・オブ・エース』でもなければ不可能だしね～？　そういう意味では、良く良く耐えた耐えた、凄い凄い♪」

まあ、キミの負けだけどねん、とグリスは笑って言う。テンリュウも、静かに目を閉じた。

「――……」

しかし、不意なファイムの言葉に、二人は反応する。

「……いい、や」

途切れ途切れに、ファイムは言う。

「僕の……勝ち、だ」

金色の雷が降り注いだのは、それとほぼ同時だった。

◇　◇　◇

「にゃわわ～っ！！」
「……」

いきなりの攻撃に声を上げるグリスと、冷静にグリスごと守るための障壁を張るテンリュウ。降り注いだ雷は、魔法によるものだった。

「……時空管理局だ。武器を捨て、投降しろ」

現れたのは、金色の美しい長い髪と、黒のバリアジャケットの上に白いマントを羽織った女性。

時空管理局本局執務官、フェイト・T・ハラオウン。

「……フェイト、さん」
「ファイム、無事？」
「……何とか」

壁にもたれるようにして座り込みながら、ファイムは苦笑しつつそう返した。
だが、これでこちらの勝ちだと、ファイムは内心で思う。

テンリュウの実力は圧倒的だった。防ぐことさえ、満足にはできないほどにだ。
故にファイムは、時間を稼ぐことにした。

そもそも、シグナムたちも後からこちらへ来る手筈だったのだ。自分一人で逮捕できればそれが一番だったのだが、それが不可能と判断し、時間稼ぎと足止めに終始した。
こちらはロストロギアを奪われず、相手を逮捕すれば勝ちなのだから。

「ありゃりゃ……まんまと嵌められたねぇ♪　時間稼ぎが目的だったなんて。あはは♪　『雷光の死神』までご登場とは、びっくりぎょーてん♪」
「……」

笑うグリスと、沈黙を通すテンリュウ。二人は追いつめられている側だというのに、焦りは見られない。

「……従う意思は、ないみたいだ」
《Ｆｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ》
「ファイアッ！！」

フェイトの周囲にいくつもの魔力スフィアが現れ、二人を狙い撃つ。

着弾。ボロボロの艦が、大きく揺れた。
そして、煙が晴れ。

二人は、目を見開いた。

「ギレン殿の回収は如何しますか？」
「ん、ん、んー、放っといていいんじゃない？　自分の後始末ぐらいはするでしょ」
「……承知しました」

無傷のまま、転移魔法を展開する二人。フェイトは慌てて踏み込む。

「待て！」

「確か、『全力全開』でしたか？　かの『エース・オブ・エース』の口癖は」

大気の振動。そして、テンリュウの右掌に魔力が集中する。

「……ディバインバスター」

ズドン、という轟音が大気を引き裂いた。フェイトは障壁を展開し、それを何とか凌ぐ。

だが、そのせいで時間を与えてしまった。

「……イレギュラーではありましたが、お会いできて良かった。大魔導師、プレシア・テスタロッサの遺児である貴女に」

「なに？」

「待て……！」

その言葉にフェイトが反応し、ファイムが静止の声をかける。

だが、そこまでだった。

「焦らずとも、いずれ再び向かい合います」

二人の、姿が消える。

ファイムの意識もまた、そこで落ちた。

◇　◇　◇

コツ、コツと足音が響き渡る。地中深くの、光が射さぬ場所で人工的な光に照らされる、いくつもの影があった。

「ごめんねボス～？　とってこれなくってさ～」

グリスの、申し訳なさそうな声が響く。グリスは両手を合わせ、頭を下げつつ、集まっている者たちの中で唯一椅子に座っている男に謝っていた。その隣ではテンリュウが膝をつき、頭を下げている。

その様子を見、別の声が上がった。

「はっ、大したことねぇなテメェらも」

「……仰る通りです。言い訳はしません」

挑発的なその言葉に、テンリュウはひどく冷静に応じる。声の主――まだ１４かそこらの少年は、ちっ、と舌打ちした。

「けっ、そんなんじゃ、『剣聖』ってのも大したことねー……」

――風が、流れた。

文字通りの一瞬で少年は床に押さえつけられ、刀を首に押し当てられた状態にされる。

「……ッ！？」

「私のことであるならば、どれほどの罵声を浴びようと受け入れましょう。しかし、その名を。『あの人』に対する冒涜だけは許しません」

ツッ、と少年の首筋から血が流れる。少年は、声を出そうとして、

出せない。
テンリュウの瞳が、あまりにも冷たかったが故に。

「やめとき。テンリュウ、ガキの言うことやろーが」
「……頭目」
「お前もやウィル。調子に乗るんやない」
「……おっさん」

――ガンッ！！

「っっ痛って～～～！？！」
「わしはまだ２０代やアホ！！　何遍言うたらわかるんやおのれは！？」

テンリュウが離した少年ーーウィルに、容赦なく頭目と呼ばれた男は拳骨を叩き込む。男の言葉が終わっても未だにウィルがのたうち回っているところから、どれほどの威力だったかを推し量れる。

「……主。話が逸れています」
「おお、アカンアカン。ついついやってまうな」

それを、ずっと黙っていた一人の女性が静止し、男は思い出したように頷く。
そして、ケラケラて笑っているグリスと、真剣な表情のテンリュウへと向き直った。

「さて、と……ってかグリス。笑いすぎや」
「あはは♪　いやー、ウィルウィルが馬鹿すぎて♪」
「んだとテメェ！！」
「やめんかアホ。おのれは触れるものみな傷つける思春期か。……

それとテンリュウ。そんな堅くならんでえーよ？」
「いえ……これが常なので」
「ああ、さよでっか」

やりにくいなホンマ、と呟き、男はさて、と言葉を紡ぐ。

「まあ、今回の失敗やけど、成功さすのが一番やったとはいえ、取り返せんわけやない。グリス、ギレンは捕まっとるんやんな？」
「うん。そのはずだよん。簡易デバイスなんか使うからああなるんだよね。自分の使ってたら負けなかっただろーにさ。馬鹿だよねぇ♪」
「楽しそうやなオイ。まあええ。それやったら、利用させてもらおか。そのついでに目的のモン手に入れたら、それで全部チャラやしなぁ」
「……なるほど♪　楽しくなりそうだねぇ♪」

男の考えにいち早く気付いたグリスが、楽しそうに笑う。それに対して男は、しかし、と言葉を紡いだ。

「お前は行かせへんぞグリス」
「えぇ！？　なんで～！？」
「お前にはバックアップってゆー仕事がある。テンリュウには、引き続き出て貰うで」
「……承知しました」
「ええ返事や。あとは、ウィルも行ってこい。でかい口叩きたかったら、結果出せ結果」
「上等」

ウィルが獰猛な笑みを浮かべる。その中で、主、と先程の女性が口を開いた。

「私は……？」
「エリアは待機や。ま、今回はそんな人数もいらんやろうしな」
エリア、と呼ばれた女性は、承知、と頷いた。
「ほな、やろか」
笑みを浮かべる男。その男は、内心でそれにしても、と言葉を紡ぐ。
（八神はやてときよったか。……親近感湧くなぁ。同じ地球の島国、それも関西とは。ま、敵同士なんやけど）
男は、ゆっくりと歩き出す。
「さてさて、『あいつ』は起きとるんかいな？　人に頭目なんざ押し付けおってからに……」
口調とは裏腹。その瞳は、楽しそうに輝いていた。

……

報告。
海上での戦闘における被害。
輸送艦の乗組員のうち、
負傷者７９名。
重傷者２２名。

奇跡的に死者はゼロ。しかし、主犯格と思われる者たちとの戦闘で、局員が一名、意識不明の重体。
また、犯行グループの一員と思われる男を逮捕。
名を、ギレン・リー。

第四話　力がなくとも、エースと呼ばれるならば（後書き）

少しだけ、補足を。
作中の魔法技術や解釈は、独自解釈です。わかりにくかったらすいません？
一応説明はしたつもりですが、質問などがございましたら感想などに書いてください。

また、そうでなくても感想ください。待ってます。

最後に、読んでくださってありがとうございました。
続きも是非！！

第五話　束の間の休息……命の価値と、使い方

管理局地上本部拘置所。
その場所で、一人の男が拘束椅子に座らされていた。
ギレン・リー。先の輸送艦襲撃事件の主犯格であり、『ワグリア消滅』にも大きく関わっている人物だ。

「気分はどうよ？」
「最悪だな」

質問に対し、ギレンは拘束されている身にもかかわらず笑ってそう言った。

質問をした男は椅子の背もたれをギレンのほうにむけ、背もたれによりかかるようにして座る。

正直行儀が悪いが、本人が気にした様子はない。

「あ、ちなみに俺はカグラ・ランバードね。地位は一佐。役職は多すぎて説明できないから、あれだ。今回は特別捜査官として接させてもらうぞ」
「はっ、テメェが何者なんて興味ねぇよ」
「それはお互い様だ。美人のおねーさんならともかく、野郎相手じゃこっちもやる気が出んよ」

はっ、と面倒くさそうにカグラは言う。ギレンは、あぁ？　と眉を吊り上げた。

「ウゼェなテメェ……ぶち殺すぞ？」
「ＡＭＦ体に埋め込まれて、尚且つ拘束されてる状態じゃ負け犬の遠吠えにしか聞こえんよ」
「野郎……！」
「ははっ、からかいがいがあるねぇ、お前さんは」
楽しそうにカグラは笑い、ギレンはギリッ、と歯軋りをする。
「ま、そんなこたーどうでもいいのよこれが。お前さんをからかうのも楽しいっちゃ楽しいんだけど、こっちも忙しいんでな。ちゃっちゃと片付けさせてもらおーか」
――ガンッ！！
言い終わると同時に、カグラの拳がギレンを打った。ギレンは、鋭い目でカグラを睨む。
「テメェ……！」
「挨拶代わりだよ。吠えんな。……今回の事件な、流石に規模が大き過ぎるんだよ。だから八神はやてとファイム・ララウェイを地上本部は動かし、本局と協力して『奇跡の部隊』の復活を決めたんだが」
パキパキと、拳を鳴らしつつカグラは言う。
「その部隊にも弱点があってなぁ。……あいつら、綺麗過ぎんだよ」
どこか自嘲するように、カグラは笑みを浮かべる。
「汚ぇことを知らん。まあ、ファイムは別だけどな。……綺麗でい

られるなら、綺麗でいたほうがいいんだよ。ま、俺のエゴなんだけどな。つーわけで、俺がわざわざ尋問に来たわけだ」

「……」

「事情説明は以上。質問は認めん。お気楽査察官がいりゃ一番早かったんだが、そうもいかん。……手荒になるが、覚悟しろよ」

洗いざらい、吐いてもらうぜ――カグラは、そう言葉を紡いだ。

非公式の尋問が、始まる。

◇　◇　◇

地上本部医務局。戦闘などで傷を負った魔導師がよく世話になる場所。

そこの一室に、一人の青年がいた。

「……体中が痛いなぁ」

《当然です》

青年――ファイムの呟きにさらりと応じるのは、彼の愛機であるリンネだ。リンネは、更に続ける。

《運び込まれた時は、生死の狭間をさ迷うような状態だったのです。シャマル先生には感謝しなければなりません》

「うん。それは確かにそうだね」

ヴォルケンリッターが一角、『湖の騎士』シャマル。あれだけの無

茶をしたのにこうして生きていられるのは、彼女のおかげだ。
まあ、説教は勘弁して欲しいところだが……。
「それで、リンネは大丈夫なの？　ＡＭＦの影響とか出てない？」
《問題ありません。エレン・ローグ技士に確認していただいたところ、特に問題はないと。メンテナンスもしていただきました》
「そっか……良かった」
ホッと一息を吐く。ＡＭＦ……ファイムにとっての切り札であるそれは、あまりにもリスクが大きすぎる。対策はあるとはいえ、魔導機械であるリンネのことはやはり心配だ。
だが、問題ないという。エレンにも後で礼を言わねば。
そして――
「わかっていたとはいえ……右腕が動かないなぁ」
チラリと、自身の右腕を見る。右足も動かしにくいが、それよりも右腕だ。
ストームブレイカーとＡＭＦの影響で、全く動かない。
「マリーさんのとこに行かなきゃなぁ。……こんなんじゃ、また迷惑かけちゃうよ」
苦笑するファイム。そのファイムに、リンネは言葉を紡いだ。
《マスター……もう、やめにしませんか？》
「えっ？」
《マスターの魔力量は、決して多くありません。フルドライブ状態

であってもです。……それでもSランクの砲撃が撃てるのは、魔力を右腕の中で乱反射させ、暴走に近い状態を人為的に引き起こしているからです》

「……」

《機械の腕ならば、付け替えれば替えが効きます。しかし、マスター。それでもマスターへの負担は決して軽くはないんですよ？　そもそも、マスターがあの威力の――》

「リンネ、そこまでだよ」

続けようとした愛機の言葉を、ファイムは遮った。

「確かに、退くのも選択肢の一つだと思う。『奇跡の部隊』に、僕の居場所はないかもしれない」

天才たちが集まるあの場所に。

居場所など、あろうはずがない。

わかっている。わかりすぎているほどに。

そして、誰も決してそんなことは言わず、思いもしないことも理解している。

だって、彼女たちは優しいから。

あまりにも綺麗で、優しすぎるから。

「でもね、リンネ。僕はそれができないんだ。立場や風評、そんなものじゃなくて……ファイム・ララウェイという一個人が、命を懸けて戦いたいんだ」

《マスター……》

「それにね、はやてさんを放っておけないよ」

彼女には、いっぱい世話になったから、とファイムは言った。

「恩返しとか、できないかもしれないけど。それでも、少しでも力になりたい」

《……それは、恋慕の感情ですか？》

「僕なんかじゃ、釣り合わないよ。だから、違うさ」

《……嘘吐き》

リンネは、言った。

《マスターは、嘘吐きです》

構わないよ、とファイムは言った。

それが自分の生き方だからと。

沈黙。

それを打ち破ったのは、ノックの音だった。

◇　◇　◇

「……」

「……」

沈黙がとても重く、辛い。空気に重さがあれば、間違いなくファイムは潰されている。

チラリと、ファイムは愛機を見た。しかしリンネはスリープモード。助けてはくれない。

「……ファイムくん」
「……はい」
「……言いたいことは、わかってるやんな？」
「……はい」

ベッドの上で正座しながら、ファイムは応じる。目の前には、ご立腹のはやてがいた。

「……なんでなん？」

そんな雰囲気の中、ポツリと呟くようにはやては言った。

「一歩間違ったら、ううん、そうでなくても、普通は死んでるんやで？　どうして、そんなになるまで戦うん？」
「……必要、だったからです」

それだけです、とファイムは言った。

はやては、そっか、と呟く。

「なあ、ファイムくん。わたしはな、部隊長なんや。みんなを死なせるわけにはいかん。……頼むから、無茶はしんといて」

ファイムが意識を取り戻すまでの時間――約三日。はやては、時間を見つけてはファイムのところへ来ていたという。

ファイムは、はい、と頷いた。

それが、守れない約束と知りながら。

「ん、ならええよ。ほな、ファイムくん行こか」
「えっ？」
「魔法の使用は一週間の間、厳禁。それ以外はシャマルの魔法で大方回復に向かってるさかい、退院や」
言って、はやてはバッグを差し出す。そこに入っているのは、ファイムの衣服だ。
「わたしも今日はこれからはオフや。一緒にお出かけしよ？」
「えっ？　えっ？」
未だに状況が読めないファイム。そのファイムを置き去りに、はやては病室を出る。
「ほな、急いで着替えてな～」
カバンを手に、呆然とするファイムを残して。
《……デートと言わない辺り、八神部隊長も不器用ですね》
リンネの呟きは、誰にも届かなかった。
◇　◇　◇
場所は変わり、次元空港。
そこに、旅行トランクを引く青髪の銀制服の女性がいた。

「スバル！早かったわね！」

その女性――スバルを呼ぶのは、オレンジ髪の執務官服を着た女性だ。

「ティア！　久し振り～！」

スバルはその女性、ティアナを見つけると、嬉しそうに駆け寄る。

その姿は、まるで主人を見つけた犬のようである。

スバル・ナカジマ防災士長。

ティアナ・ランスター執務官。

かつての『奇跡の部隊』に所属していたコンビである。

「この後本局で色々申請しなきゃだから、もう少しかかるけどね」

「それはあたしもよ。引き継ぎとかが多くて……」

ティアナは肩を竦める。執務官とは激務である。ティアナもその例に漏れず、忙しい。

二人は並んで歩きながら、自分たちが出向する部隊のことについて話し合う。

「また集まることになるなんて思わなかったね？」

「それが一番だしね。しかも今回は、なのはさんもいないし……」

「そうだね……」

不屈の心を携えし、誰もが認める『エース・オブ・エース』高町なのは。

彼女は今回、部隊に召集されていない。
なのは抜きの部隊――そこに不安がないことはない。
しかし、それでも。
「私たちがいる。なのはさんの不屈の心を受け継いだ私たちが」
「その通りよ。必ず、解決してみせる」
決意を新たに、歩き出す二人。その途中で、スバルがティアナに問いかけた。
「そういえば、新しい人がくるんだよね？」
「ええ。というかいるんだけどね。ファイム・ラフウェイ。『地上本部のエース』よ」
「へぇ……」
スバルが感心したような声を漏らす。ティアナは、まあ、と口を開いた。
「実力は確かよ。信頼もできる。何気にあんたと同い年だしね」
「そうなの？」
「ええ。……まあ、そんな風には感じないんだけど」
ティアナは、含みを持たせるように言う。
カードは、揃いつつあった。
◇　◇　◇

「……つまり、上からの指示があるまで待機してろということですか？」
「うん。そういうことやね」
地上本部技術局へ向かいながら、二人は――というよりファイムが、はやてから経緯を聞いていた。
「ギレン・リーを逮捕したやろ？　本来なら事情聴取は私たちがすべきなんやけど、今回は事件の規模が大き過ぎるからって、カグラさんがすることになったんよ。そのまま議会に持っていくためらしいわ」
「カグラさんですか……なるほど、大事になってきましたね」
「全くや」
どこか疲れた様子で、はやては言う。部隊長である彼女は、そういったいわゆる『上とのやり取り』が多い。ファイムと比べても、格段にだ。
だからファイムは、一言だけ口にした。
「お疲れ様です、部隊長」
「……また部隊長っていう」
「はやてさん」
「ん♪」
コロコロと変わる表情。それが、どこか可愛い。
はやての笑顔を見、知らず微笑を浮かべていたファイム。彼はその後、申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「すみません……付き合わせてしまって」
「へっ？　いや、ううん。ええんよ？　気にしんといて」
「いえ、申し訳ありません」
深々と頭を下げるファイム。はやては、仕方あらへんなぁ、と苦笑を浮かべた。
「なら、なんか買って？　それでチャラや♪」
悪戯っぽくはやては言う。彼女にしてみれば、冗談だったのであろうそれを、ファイムは真面目に受け取った。
「わかりました。買わせて頂きます」
「へっ、ホンマに？」
「えっ、はい。本気ですが」
詰め寄るようにしながら聞いてくるはやてに、ファイムは頷いて答える。はやては、やった、と笑顔を浮かべた。
それからは常に笑顔を浮かべた状態のはやてが先をいき、ファイムもそれにつられて笑顔を浮かべ、歩いていく。
そして目的の場所に着いたとき、はやては、廊下に備え付けられたソファーに腰掛けた。
「わたしはここで待ってるな？　マリーさんによろしく言うといてな？」
「はい。ありがとうございます」

その礼は、気遣いに対するもの。
やはり優しいな、と内心で思いつつ、ノックをして部屋に入った。
「失礼します。マリーさん」
「は～い。あら、ファイムくん。どうしたの？」
「突然すみません。実は、腕が故障しまして……」
頬を掻きつつ、ファイムは苦笑する。
マリーはそれを聞き、ファイムの右腕へと視線を移すと、ああ、と頷いた。
「聞いてるわ。危険度Sランクの犯罪者を捕まえたのよね？」
「いえ、捕まえたのは僕じゃありませんよ」
ファイムは苦笑を浮かべる。
「むしろ、僕は、やられてしまいました」
「そうなの？　私が聞いたのとは違うわね」
部屋の中を何かを探しながら、マリーは首を傾げる。
「フェイトちゃんから、『ファイムのおかげで逮捕できた』って聞いたんだけどな」
「……むしろ僕は、助けられた側です」
少し自嘲を含んだ笑みを零す。
そう、あの時、フェイトが来てくれなければ死んでいた。
計算していたとはいえ、である。

「そうなの……っと、あったわ、これね」

言いつつ、マリーは少し大きめのケースを取り出し、机の上に置く。
マリーがそれを開けると、現れたのは機械の腕。

ファイムは、それに見覚えがあった。

「その腕は……」
「そうよ。ファイムくんが昔付けていた腕。今の腕を直す間は、これで代用して頂戴」
「わかりました」

ファイムは頷き、上半身の服を脱いでいく。そして現れた身体に、マリーは僅かに眉を顰めた。

身体中に残る、大小様々な無数の疵痕。無事な部分を探す方が困難なぐらいの傷が、刻まれている。

かつて、まだ幼かった『エース・オブ・エース』が墜ちた時、全身に傷を負うことになった。しかし、『ゆりかご戦役』でも更に傷を負った彼女の身体に、表面上、傷は見られない。

つまり、それだけの技術が管理局にはあるということであり、同時に、それでも消せない程にファイムの傷は深いということである。

痛む体を動かして神経を一度切断。腕を取り外すと、ファイムはもう一つの腕を取り付け、神経を繋ぐ。
そうした後、調子を確かめるように腕を動かすファイムに、マリーは思わず言葉を紡いだ

「いつ見ても、痛々しいわね」
「返す言葉もないです」

ファイムは苦笑。そして、あるものに気付く。

「ワイヤーは付いたままなんですね」
「当時のままだから、カートリッジシステムはないけどね」
「いえ、これはこれで使い方次第ですから」

かつての事件で活躍した装置を確認しながら、ファイムは微笑を浮かべる。管理局法では限りなく黒に近いグレーだが、それぐらいしなければ勝てないのだから仕方ない。

「……マリーさん。ワイヤーの機能を本来の腕の方へ付けることはできませをか？」
「……難しいわ。それに、できたとしてもただでさえカートリッジシステムで強度が落ちてるのよ？　更に強度が落ちることになるわ」
「できるんですね？」
「……不可能ではないわ」
「なら……お願いします」

言って、ファイムは頭を下げる。更に。

「もう一つ、頼み事があるんです」

必死さを滲ませた声で、ファイムはそう言った。

――バタン。

ファイムが閉めた扉の音が響いた。一人残されたマリーは、顔に手を当てながら呟く。

「間違ってる……彼は、間違ってるのに……」

彼の頼み事。それを否定した時の、彼の言葉。

間違っている。彼は根本的に間違ってしまっている。

なのに、否定できなかった。

自分は、彼にそれを『決めさせた側』の人間だったから。

マリーは、しばらくそうして俯いていた。

◇　◇　◇

「お待たせしました」

「ううん。ほな、行こっか？」

「はい」

そうして、二人は歩き出す。最初に目指すのは、昼食の場所だ。

「それにしても……ファイムくん」

「なっ、なんですか？」

ズイッ、と顔を寄せられ、ファイムは思わず顔をひきつらせる。

はやては、その服や、と言葉を紡いだ。

「もしかしてファイムくん、私服持ってないん？」

ファイムが着ているのは、スーツだ。ただし上着は着ていないし、ネクタイもしめていない。機械の右腕を隠すために右手には黒い手袋をしているが、それだけだ。オシャレのおの字もない。

「謝らなアカンのやけど、『ヴォルフラム』のファイムくんの部屋に入らせてもろたんや。せやけど……服もそれしかないし」

「一応、寮にはジャージとかがあるんですが……確かに、私服はあまり持ってないかもしれません」

執務官であるファイムは本来なら、本局の寮に住むのが通例なのだが、ファイムは執務官としては珍しく、地上の仕事を受けることが多いので、ミッドチルダの地上本部の寮に住んでいる。

まあ、それはさておき。

そもそも、休みというもの自体が稀であるファイムは、私服を着て出掛けるという行為そのものが意識の中になかったりする。故にというべきか、私服らしい私服などほとんどない。

だがはやては、それが許せないようで。

「そっか……ならせっかくやし、ファイムくんの服を買おか。お昼ご飯はそれからや」

「えっ、いいですよ。気を使ってもらわずとも……」

「えーからえーから」

はやてはファイムの手を取ると、歩き出す。ファイムは手を握られたことに驚き、僅かに赤面。そのまま、連行される。

《……マスターは、尻に敷かれるタイプですね》

今更のことを、誰にも聞こえないようにリンネは呟いた。

◇　◇　◇

尋問は、カグラにとって拍子抜けするくらいにあっさりと進んだ。

知られたところで関係ない――そう言って、ギレンが驚くほどあっさりと話したからだ。

もっとも、一発殴ったことは根に持っているらしく、度々こちらを挑発してくるが。

「……なるほど、お前さんを含めてメンバーは九人と。……少なくね？」

「俺が知るかよ。雇われに期待してんじゃねぇぞバカが」

「ぶっ潰すぞテメェ」

「やってみろよ。拘束してねぇと俺と向き合うことさえできねぇ臆病者のくせに、吠えんな」

剣呑な空気が流れる。二人ともが、言葉以上の殺意を放っていた。

しかしそんな中でも、尋問は進んでいく。

「で、そいつらの名前は？」

「そいつは言えねぇ」

「ふざけんなよ？」

「ふざけちゃいねぇよ」

くっくっ、とギレンは笑う。カグラはちっ、と舌打ちした。

「痛めつけりゃ吐くか？」

「そう思うなら、やればいいじゃねぇか」

カグラの言葉に対し、ギレンは不遜な態度を崩さない。逸れに対し、カグラは今度は内心で舌打ちした。

おそらく、ギレンは吐かない。

そもそもの前提条件として、ギレンはそこらの犯罪者ではない。傭兵、それも凄腕とくれば、多少の拷問では吐くまい。

それこそ指でも落とせば話は変わるかもしれないが、非公式とはいえそこまではできない。

（やりすぎると議会がうるさいからな……あー、面倒臭ぇ）

自分から志願しておいてなんだが、投げてしまいたい――そんなことを思った時。

――ピピピッ！！

カグラの胸ポケットから、音が鳴り響いた。カグラは立ち上がると、ギレンを見据える。

「小休止だ。休んどきな」

「くくっ、いいのかよ？」

「喋る体力ぐらいは残しておいてもらわねーとな」

言い捨て、廊下に出ると、カグラは通信機を取り出した。防音は完璧なので、聞かれることはまず、ない。

空中に画面が現れ、一人の男が映し出される。黒髪の男性で、バリアジャケットを纏っている。

クロノ・ハラオウン。

管理局の人間なら十人中十人が『エリート』と評する人物だ。

カグラはそれを確認すると、よっ、と軽く挨拶した。

「相変わらず仏頂面で可愛げないなぁ、クロノ」

『うるさい。余計なお世話だ』

カグラの言葉に、目を閉じ、頭痛を堪えるように返すクロノ。カグラは、ははは、と笑った。

「ま、いいや。……尋問の様子を聞こうってんだろ？　大変だねぇ。『クラウディア』の点検中は、議会のパシリかよ」

『……パシリではない。いいから報告を』

「はいはい、っと。未来の理事様には逆らいませんよ」

カグラは肩を竦める。

ハラオウン一派――ＰＴ事件に始まり、数多くの事件を解決した彼らは、管理局でも重要な立ち位置にいる。本人たちに自覚はあまりないだろうが、バックにいる統括官たちはそれを利用している部分があったりする。

まあ、一派のほとんどが管理局のトップエースなのだ。力が集まるのは、むしろ当然である。

カグラは、ふぅ、と息を吐くと、クロノに報告を始めた。

「とりあえず人数は吐いた。あっさりしてっから、信用できるかどうかってのはビミョーだけどな」

『そうか……構成員の名前は？』

「尋問中～。吐くとは思えんけどなぁ。あーやだやだ。面倒臭いなぁ」

『……そうなると、わかっているのは三人か』

「その三人が既に鬱だけどな」

カグラは肩をすくめる。六課の報告、特にファイムのデバイスである『リンネクロウズ』のデータによると、わかっているのは三人。

グリス・エラカラン。

ギレン・リー。

そして……テンリュウ・シンドウ。

三人が三人共、危険な存在だ。

「つーか、グリス・エラカランとギレン・リーはともかく……テンリュウ・シンドウはどうしてだろうな？」

『……それについては、議会でも結論が出ていない。彼女と『剣聖』は管理局に積極的な協力こそしてこなかったが、敵対することもなかったからな』

「厄介だよなぁ……」

カグラはボヤく。それほどまでに、テンリュウ・シンドウという名は重い。

真正古代ベルカとはまた別系統の流れを継承する、いわゆる『裏』の存在だ。少人数で脈々と受け継がれ、鍛え上げられたその実力は、管理局の『エース・オブ・エース』に匹敵、あるいは上回るとさえいわれる。

なにせ、今は故人となってしまった『剣聖』と呼ばれる人物は、先代の『エース・オブ・エース』を打ち破った程なのだから。

しかも彼女たちは、裏の存在であるが、『噂』として知名度が高い。そんなものが相手となると、流石に厄介だ。

「風評にも影響でるしなぁ。あー、やだやだ」

『だが、捨て置けない』

「わーってるっての」

いちいち言うんじゃねぇ、とカグラは肩を竦めた。

「確か……『エース・オブ・エース』の嬢ちゃんはいないんだよな？」

『議会は召集しようとしたが……今は、はやてが呼ばないと決めた』

「なーるほど。まあ、今は無茶だろ。もう少しぐらいは休ませないとな」

『同感だ。……だが、このままでは』

「呼ぶことになる、と。世知辛いねぇ。傷ついた兵士一人休ませてやれないか」

クロノは、何も言わない。

傷ついていても、高町なのはという人物は、間違いなく『エース・オブ・エース』と呼ぶに相応しい力を有している。

しかしそれでも彼女は休ませるべきだ。

娘も、いるのだから。

『キミが……』

「おん？」

『キミならば、あるいは――』

「無理に決まってんだろ」

クロノの台詞を、カグラは一蹴する。

「全盛期ならともかく、今の俺じゃ敵にならんよ。俺の翼は、あの時にもぎ取られた」

『そうか……。わかった。引き続き尋問を頼む』

「あいよ～」

ひらひらと手を振り、カグラは通信を切る。

一人残された彼は、ふぅ、と息を吐いた。

「歯痒いねぇ……思うように戦えないってのは」

◇　◇　◇

「うんうん、格好ええよ。ファイムくん♪」

「あ、ありがとうございます」

上機嫌なはやてに言われ、ファイムは若干照れながら応じる。
慣れないオシャレというものに戸惑っているが、はやてが選んだ服装は確かに似合っている。

「ファイムくん、髪の毛が黒いし背も高いから、少し明るいくらいのほうが似合うね」
「あはは……」

普段こういったことを言われる機会がないので、ファイムは照れ笑いを浮かべる。

はやても、笑顔を浮かべていた。

そんな二人は今、昼食を終え、約束であるはやてへの贈り物を探している。

「どんなものがいいですか？」
「せやなぁ……アクセサリーとかあんまり持ってないから、欲しいかもしれへん」
「なるほど」

はやての言葉にファイムは頷き、周囲を見回す。そして、その店を見つけた。

「では、あのお店に入りましょう」
「ん、了解や」

見つけたのは、小さな宝石店。二人は、店内へと足を踏み入れる。

「どんなのがいいですかね？」
「ファイムくんが選んで？」
「……責任重大ですね」

はやての言葉に、ファイムは苦笑しつつ、はやてに似合いそうなものは……と店内を見回す。

そして、それを見守るはやて。

――その姿は、恋人同士に見えた。

◇　◇　◇

首都クラナガン次元空港。そこに、二つの人影があった。

テンリュウ・シンドウ。
ウィル・ガーデンズ。

片方は、艶のある黒髪をポニーテールにした美女であり、もう片方は、年の頃１４、５くらいの薄い青髪の少年である。

「あー、もう。面倒臭ぇ。パッと転移でもすりゃ早ぇのによ」
「仕方ありません。転移魔法を使えば、間違いなく気付かれますから。……警備部隊に囲まれてもよいというなら話は別ですが」
「うっ……すみません」
「謝られることではありませんよ」

ウィルの言葉に僅かに微笑してそう応えると、テンリュウは歩き出

した。それに続き、ウィルもついていく。

組織において、ウィルはとある例外を除いて最年少である。それもあって反抗的な態度をとることが多いのだが、先日の一件から、テンリュウに対しては従順になっている。

そうして歩きながら、二人は言葉を交わしあう。

「バレないんだな。こんなに堂々としてんのに」

「むしろ、堂々としているからですよ」

テンリュウは、偽装のための旅行トランクを引きながら、そう答える。

「あなたの名と顔は割れていませんし、私も名前を偽っていますから。気付きませんよ。そうですね……指名手配の写真と同じです」

「指名手配？」

「はい。人の記憶というのは、不完全なものでしてね。写真程度なら、気付かないのです。何年も前のものがずっと残っているのはそれが理由です。しかも、今回はこれだけ堂々としています。木を隠すなら森の中、ですよ」

「はぁ……凄ぇな」

「特に技術がいることではありません。人の記憶の欠陥を突いただけですよ」

その言葉を紡いだ瞬間、テンリュウの表情が僅かに、本当に僅かに曇った。

「……大切なことさえ、思い出せなくなる程に」

その呟きには、あまりにも深い哀しみが込められていた。

◇　◇　◇

「……寝てしまいましたか……」

日は昇りきり、むしろ落ち始める時間。
地上本部のすぐ側にある公園のベンチで、ファイムは呟いた。

彼の膝の上には、はやての頭がある。いわゆる、膝枕というやつだ。
ここで一休みしようと座ってから少しして、はやては眠ってしまったのだ。

部隊長として激務に追われる彼女は、きっとまともに休んでいない。
だから、と、ファイムは膝を貸すことにした。

……最後のは、言い訳だけれど。

「……」

規則正しい寝息を立てるはやての寝顔を見て、ファイムは微笑を浮かべる。

可愛いな、とファイムは思った。
寝顔は天使という。正に、その通りだ。

狸と一部で呼ばれる彼女は、しかし、こうして見ると幼い少女のようにも見えた。

そして、その胸元には、十字架のネックレスが下げられている。
ファイムの贈り物だ。

「女々しいんですが、ね……」

――ファイム・ララウェイは、神を信じない。

もしそんなものがいるならば、不幸などという言葉が存在するはずがない。
こんなにも世界が理不尽なわけがない。
こんなにも、『こんなはずじゃなかった』ことばかりのはずがないから。

でも、それでも。

信じていない神様を頼ってでも、気休めでも、贈りたかったのだ。

「……」

ファイムは、無意識に手を伸ばし……はやてに触れる前に、手を止めた。

そして、自身の右手を見つめる。
あまりにも見えない血に汚れた、手を。

《触れないのですか？》
「……リンネ。スリープモードじゃなかったの？」
《メンテナンスは終わっていますので。……マスター、八神部隊長に触れないので？》

「……触れられないよ」

リンネは、自嘲の笑みと共に、首を左右に振った。

「僕の手は、どうしようもないほどに汚れてるから。触れたら、汚してしまう」

《マスター。マスターは汚れてなどいませんよ》

「ありがとう。でもね、僕は人を殺してる。理由はどうあれ、ね」

《しかしマスター。マスターは罪人ではありません》

「裁かれなければ、罪じゃないの？　違うよ。罪は自分自身が背負うものだ」

ファイムは、きっぱりと言い切った。

リンネは、沈んだ声音で、マスター、とファイムを呼ぶ。

ファイムは、首を振った。

「それにね、リンネ……最初の一人は、明確な殺意をもって殺したんだよ？」

《マスター、それは……》

「知らなかったから？　それが当然である世界だったから？　理由にならないよ、そんなこと。人を殺した事実は変わらない。それに……」

ギュッ、と、ファイムは拳を握り締めた。

「グリス・エリカランも……僕は、殺意をもって殺した。そしてあの時、当たり前のように思ったんだ」

――もう一度、殺せばいい。

そう、思ってしまった。
当然のように。
当たり前のように。
捕らえるでなく、殺す、と。
あまりにも許せない、存在だったから。

ファイムは、はやてを見つめる。
泣きそうな――表情だった。

「触れられや、しないよ」
《マスター……》
「こんな手で、触れられやしない。守ることさえできないんだよ？
命を懸けても、自分自身を守ることさえできないんだよ？」

その言葉は、声は、あまりにも涙に濡れていた。
泣いていないのに、泣いていた。

「救えた命より、救えなかった命のほうが多いんだよ？　そんな僕が、言えるわけがないじゃないか。そんな資格が、あるはずないじゃないか」

信じてもいない神様を頼るしかない身で。
何を望めるというのか。

《だから》

リンネが、言葉を紡ぐ。

《だからマスターは、自らの命を――》

「それしかないから。そうするしかないから。だから、やるんだ」

自己満足でいい。

何と言われようと構わない。

だって、そうしなければ。

そうしなければ、償いにならない。

死など、恐れていられない。

「やるよ。僕は。はやてさんとの約束を破ることになっても、戦う。たとえ、その先に。みんなの笑顔の中に、僕がいなくても」

ファイムは、あまりにも悲しい決意を、口にする。

「僕の、未来がなくても」

リンネは、何も言わない。いや、言えなかった。

間違っている主に、何も言えなかった。

ギュッ、と、はやてが拳を握り締めたのに、ファイムは気付かなかった。

◇　◇　◇

管理局地上本部上空。そこに、テンリュウとウィルの二人は浮かんでいた。簡易結界で魔力反応を消している二人は、ギレンが捕らえ

られているはずの場所を見つめている。

「確か、あそこだよな？」

「はい。グリス殿によれば。……頭目も、準備は終わった頃ですね」

「じゃ、始めるか」

「はい」

頷き、テンリュウは手を前に出す。

すると、ミッド式とは微妙に細部が違う小さな魔法陣が手の前に展開され、更に二人の前方に直径１０メートル程の魔法陣が現れる。

「我が呼びかけに応えよ。……来たれ、サリヴァルム」

ゴウッ、という音が響き渡り、魔法陣より一体の黒い飛竜が現れる。全長はかの『龍騎士』が駆るアルザスの飛竜『フリードリヒ』と同じくらいの黒い竜が、吼える。

サリヴァルム――テンリュウが従える黒竜で、その火力は竜という名に恥じない力を有している。

「サリヴァ。ウィル殿を背に乗せ、戦ってください。指示は出しますが、基本的には思うように戦ってください」

「ギャウ」

体を撫でられながらの指示に、サリヴァは応じる。そして、テンリュウはウィルを見た。

「ウィル殿。今ので管理局も気付いたはず。これより行動を開始しますが、構いませんね？」

「おう」

ウィルは頷くと、サリヴァに飛び乗り、更にバリアジャケットを起動した。

藍色のパンツに、藍色のアンダーシャツ。肩から先の袖はなく、非常に簡素な造りだ。そして手に持っている槍も、特に装飾のない簡素なものである。

「やっぱり、簡易デバイスだと違和感あるな……」

「贅沢は言えませんよ。……ご安心を。いざとなれば、私がカバーします」

テンリュウの背後に魔法陣が現れ、そこから刀の柄が出現する。テンリュウはそれを二本、それぞれの手で引き抜くと、目的の場所を見据えた。

「一応、非殺傷設定で参りますが……運が悪ければ、死ぬでしょうね」

平坦な声音で言い、テンリュウは刀を振るう。

テンリュウの周囲に、２０もの魔力スフィアが展開される。それらは徐々に肥大していき、やがて、臨界点を迎える。

「夢想演舞」

推定、ＳＳランクもの威力を誇る砲撃が、放たれた。

◇　◇　◇

あまりにも凄まじい轟音と衝撃に、公園にいたファイムとはやての二人は飛び起きた。
その視線の先にあるのは、煙を吹き上げる地上本部の一角。

「事故!?　リンネ!!　状況は!?」
《情報が混乱していて、正確なことは不明です!!　しかし、上空に推定オーバーS及びAAランク相当の魔力反応を確認!!　おそらく、襲撃です!!》
「緊急事態や!!　わたしはすぐに出る!!　ファイムくんは、安全なとこに――」
「僕も出ます!!」

ファイムの身を気遣い、待機命令を出そうとしたはやてに、リンネはそう言葉を紡いだ。
はやては、なっ、と表情を変える。

「何を言うとるんや!!　ファイムくんはドクターストップがかかってるんやで!?　出させられるわけがあらへんやろ!?」
「では傷が癒えるまで相手は待ってくれるんですか!?」

ファイムは声を張り上げた。そうだ。傷如きで、待機などできない。だって、決めたから。
自分の在り方を、決めているから。

「はやてさんの言う通り、緊急事態です!!　推定でオーバーSランクなんて、今本部でまともに相手ができる人などいません!!　少しでも手がいるんです!!」

そもそも、ＡＡＡランク以上の魔導師など、管理局には全体の５％程しかいない。そしてそのほとんどは、常に散っている。

元々、地上本部は本局に比べて高ランクの魔導師が少ないこともあり、このような本来想定されていない状況に対応できる者など、いないのだ。

だが、今なら。

今なら、自分がいる。フルドライブを起動すれば、時間ぐらいは稼げる自分が。

だがはやては、首を振る。

「アカン！！　フェイトちゃんたちもいるんや！！　ファイムくんが無理する必要はあらへん！！」

「到着までの間、被害が出ない保証なんてない！！　僕の命より一般市民の命の方が重いんだ！！」

――パシン！！

乾いた音が響いた。はやては目に涙をいっぱいに溜めながら、ファイムを睨んでいた。

叩かれたファイムは、すみません、と呟く。

「はやてさんが、僕を心配してくれているのはわかります。でも、僕は。『ファイム・ララウェイ』という一個人である前に、『管理局本局執務官ファイム・ララウェイ』なんです。動かなければ、ならないんです」

「……ッ、なんで、なんでそんなこと言うん？」

はやては、涙を零しながら、ファイムの胸を叩いた。
大した力ではないのに、酷く、痛かった。

「自分の身を、大切にせんで……なんで、なんでそんな風になってまで戦うん？」
「……怖いと、思ったことがないんです」

ファイムは、呟くように言った。

「物心ついた時から戦場にいて、死ぬかもしれないと思ったことはあっても、死を怖れたことはないんです」

ずっと、思っていた。
いつか自分は、ボロボロになって死ぬのだろうと。
歳をとった自分というものが、想像できなかったから。

「いつか、ボロ雑巾のようになって死ぬのだろうと、そう思っていました。いえ……そうなるんでしょうね」

それが、命を削って戦う代償。
覚悟は、できている。

「でも、そんな人生も、悪くはありません。そう思えるようになりました」
「なにが……なにが人生や！！　そんなん、悲しいだけやんか！！」
「罪人に望める人生なんて、ありませんよ。むしろ、こんな身でも何かができるなら、上等な人生です」

だから、とファイムは言った。
だからこそ――

「僕は、両手では数え切れない数の人を殺しています。血に汚れた手と、冷たい手足。だからこそ、みんなが喜んでくれるんです」

命を捨てる戦いを、とファイムは言った。

罪人だから、だからみんな、死に向かって走っていく自分を喜んでくれる。

そういう、ものなのだ。

だがはやては、それを否定する。

「間違ってる!!　そんなんおかしいわ!!　ファイムくんの命は、そんなに軽いものやない!!　みんなと変わらへん価値がある!!」

「『命の価値』……その言葉も、最近ようやく理解できました。価値があるということは、つまり、『使い方』があるんです」

はやてに背を向け、ファイムはリンネを起動。バリアジャケットを纏った。

「管理局は正義でなくてはならない。そうでなければ、ならないから。だから、僕は命をそのために使うんです」

「……そんなん、間違ってる……」

弱々しく、はやては言った。

知っています、とファイムは応じた。

そして。

傷ついたボロボロの騎士は、それでもなお、空を飛ぶ。

顔も知らぬ『誰か』を守ると言って。

償いを、するために。

「お願いします。行かせてください。はやてさん……いえ」

その言葉は、あまりにも、悲しい色を帯びていた。

「……八神部隊長」

はやての手の力が、僅かに弱くなり。

――その瞬間、風を纏った手負いの騎士が、戦場へと飛び立った。

まるで、そこが居場所とでもいうかのように。

はやては、その場に崩れ落ちる。

「――――――ッ！！」

あまりにも悲痛な叫びが響き、悲しみの雫が、地面を濡らしていた。

どうして、どうして……。

その言葉が止まらない。

自分の将来を、未来を……結末を決めた一人の青年。

間違っていても、彼は進む。

それが、彼自身が決めた道ではなくとも。

それは、彼が『選んだ』道だから。

第五話　束の間の休息……命の価値と、使い方（後書き）

次回予告

命を懸けて戦う青年は、目撃し、理解する。
最強の意味。
そして、それに抗うために必要なものを。
叫んだたけでは変わらない。
望んだだけでも変わらない。
『エース・オブ・エース』不在の六課に、二つの『最強』は止められるのか？

そして、あまりにも理不尽で不条理な力を前に、青年が出した答えは、悲しすぎるものだった。

「僕の命を……全て使う。届かなくてもいい。それでも……やるんだ！！」

次回、第六話
『ここにいる理由』

第六話　ここにいる理由

『管理局はお前を裁かない。理由がわかるか？』
『……』
『だんまりか。ま、気持ちはわかるけどな。理由は単純だ。利用できるからだよ』
『利用、ですか？』
『そーだ。お前は管理局においては限りなく黒に近いグレーだ。存在的にな。だが、ゲイズのシジイは利用できると踏んだ。だから、選ばせてやるよ』
『……』
『そう身構えんな。単純な二択だ。……ここで俺に殺されるか、生きて管理局のために死ぬか、選べ』
『……どういう、意味ですか？』
『管理局ってのは、正義じゃなくちゃいけねぇんだよこれが。でも、いつもそう上手く事が運ぶわけじゃねぇ。局員もまあ、命だしな。だから、お前さんには命を懸けてもらう。そのための術式は教えてやるよ』
『……何故、僕を？』
『汚ぇからだよ。血塗れで、薄汚れて、地獄を見てきたからだ。太陽が輝くにはな、対比物がいるんだよ。お前にはそのための礎になってもらう。なに、別に薄汚い仕事しろってわけじゃねぇ。お前はお前の思うようにやりゃあいい』
『それで、いいんですか？』
『いいさ。どうせ命を懸けることになる。つーかな、難しく考える必要はねーんだよ。こんなこと言わなくても、どうせ命懸けてただろうしな、お前はよ』
『どういう……？』
『単純明快だ。……償いをする気は、あるかい？』

ふと、始まりの日を思い出した。
スカリエッティから逃げ出した後、管理局に拾われた直後のことを。
殺さねば生きられなかった日々の終わりの時を。

あれが、始まり。
そして、ここまできた。
償うために、戦ってきた。救うために、全てを捧げてきた。

いつしか、それが理由になっていた。

執務官を目指したのも。
ランクを上げようとしたのも。

全て、償いのため。
自己満足のため。

「なんというか……寂しいな。僕の人生は……」
《マスター？》
「なんでもないよ。行こう、リンネ」

もう戻らない。
戻れやしない。

始まりから、間違っていたのだから。

◇　◇　◇

「つあ～……効いたぜ」

頭を押さえつつ、のしかかってきた瓦礫をどけながら、カグラは言った。

その視線の先には、飛竜とそれに乗る少年、そして一人の美女がいる。

その傍らには、傷つきながらもデバイスを構えているギレンの姿もある。

一言で言うなら、失態だ。

重要参考人を、奪われた。

「ナメた真似しやがって……そんなに死にてぇのかよ?」

言いつつ、カグラはデバイスを構える。今の彼は、バリアジャケットを纏っていた。

腰にあるのは、漆黒の甲冑。上半身には同じく漆黒のジャケットを羽織ったその姿は、黒い騎士。

だが、漆黒の騎士が持つのは剣ではなく、銃だ。

マシンガン型のアームドデバイス『ヘルダスト』。会話はできず、簡単な応対機能しか持たない、カグラの愛機である。

「結界を張らせてもらった。逃げたきゃ俺を殺しな。解析は無駄だ。できるわきゃねぇ」

「はっ、この状況じゃ負け惜しみだぜ?」

「あぁ? 何を言ってやがる。……逮捕すべき対象が、わざわざ飛び込んできてくれたんだ。むしろチャンスだよ」

――パパパパパパッ！！

カグラの銃が火を噴き、無数の弾丸がばら撒かれる。テンリュウたちは、それをそれぞれの障壁で防ぐと、カグラに向かって攻撃を仕掛けた。

ギレンのライフルが火を噴き、砲撃がカグラに迫る。カグラはそれを避けるが、避けた先に飛竜『サリヴァ』の砲撃が向かってきていた。

「ちっ！！」

カグラが呟くと同時に、２０もの魔法弾が敵に向かって放たれた。その光景を見て、カグラはヒュウ、と口笛を吹く。

「お早いお着きだな。そんな体でよくやるよ。……けどま、そうだよな。ここで来なければ、お前さんじゃないわな」

「……ご無事ですか？」

「なんとかなー。いや、キツいわやっぱり。あれだな。バケモンの相手はしんどいよ」

「加勢に入ります。他の方々は？」

「下がらせたよ」

立ち上がりつつ、カグラは言った。

「相手はオーバーＳランクが二人に、ＡＡランクが一人。更に飛竜だぞ？　地上の魔導師連中じゃ、次々落とされんのがオチだ。地上の魔導師たちには、避難誘導をしてもらってる。俺たちの仕事は、その間の時間稼ぎだ……来るぞ！！」

ファイムの魔法弾によって発生した煙を突き破り、一筋の砲撃が二人を狙い撃った。

二人はそれを避け、砲撃の主を見る。そこにいたのは、先程までとは装いが変わったテンリュウだった。

「ファイム・ララウェイ殿に、カグラ・ランバード殿。強者を相手に、手を抜くなど無礼の極み」

とある管理外世界の島国で、『袴』と呼ばれる装いの上に、紅蓮の胸当てを付け、頭部には額当てを装備。括られていた髪はバラけ、風に舞っている。

そして何より目を引くのは、桜の紋様が刃に刻まれた、巨大な薙刀。

「故に、我がデバイス『桜花』にて相手をしましょう」

凛とした声と、佇まい。そして、吹き荒れるような魔力。

向き合っただけで、理解させられる。

相手が――悪すぎる。

「……最悪だ」

テンリュウを見て、カグラは苛立たしげに呟いた。

テンリュウ・シンドウ。

『最強の侍』と呼ばれる、古代から脈々と受け継がれるとある術式の正統継承者にして、最後の継承者。

その力は、文字通り鬼神の如き力。

「……ファイム？」

ふと、カグラはファイムを見た。
魔力量がいつものフルドライブ時に比べて低い。おそらく、ギアを落としているのだろう。

だが、そこではない。
気になったのは、そんなところではない。

（恐れて、いない？）

テンリュウの実力は、向かい合っただけで感じたはずだ。
なのに。
だというのに、この青年は。
何の躊躇もなく、踏み出そうとしている。

「行くよ、リンネ」

静かで、落ち着いた声だった。
その背を見つめながら聞いたこちらの背筋が、僅かに凍る程に。

《……ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

対し、デバイスの声には迷いがある。

どちらが、人間なのか。
思わず、迷ってしまうような会話を終えて。

手負いの騎士は、己が適わぬと理解する敵へと、向かっていった。

◇　◇　◇

「今動ける子は急いで準備や！！　わたしも出る！！」

悲壮な表情で、はやては叫ぶ。今彼女がいるのは、『ヴォルフラム』の中だ。

この緊急事態に対し、はやてたちも出動を命じられた。
だが、元々待機命令という名の休暇を与えられていた彼女たちは、そのほとんどが現場から遠い場所にいた。

また、はやてのユニゾンデバイスであるリィンフォースも、メンテナンス中で、終わっていない。

「ハラオウン執務官の飛行魔法使用許可承認！！　現場到着まで約２５分！！」
「シグナム一等空尉及びヴィータ二等空尉の飛行魔法使用許可承認！！　現場到着まで約３０分！！」

「ルシエ陸曹の技能封印解放許可得ました！！　フリードリヒ召喚可能です！！　現場到着まで、約４０分！！」

次々と紡がれる情報。それを聞き、はやてはギリッ、と歯軋りした。

（――遅過ぎる！！）

ファイムが向かってからすぐに指示を出すために転移してきたが、ここまでもってくるのに一時間もかかってしまっている。

このままでは、ファイムが危ない。

すぐに飛んでいきたい。だが、自分は部隊長だ。指示を出さなければならない。彼のために、他の隊員を無視できない。

はやてはデバイスルームへと通信を繋ぎ、言葉を紡ぐ。

「シャーリー！！　エレン！！　調整はあとどれくらいかかる！？」

『あと一時間ぐらいは……いえ！！』

『３０分で終わらせます！！』

二人は叫ぶように言った。３０分。あまりにも、長い。

はやての中に、焦りだけが積もっていく。

ズドン、という爆発音が響き渡った。

画面の中で、本部が砲撃を浴び、火を吹いていた。

◇　◇　◇

「……っとと。危ないなぁ。意外とムチャクチャするんやな、テンリュウも」

管理局地上本部技術局。

職員たちが避難しているその建物の中を、一人の男が悠然と歩いていた。

茶髪のその男は、右手にトランクを携えていた。そこには、封印と

書かれた紙が張られている。

「目的は果たしたし、楽勝やね～♪」

チャリン、という音が響いた。男が手にしている鍵の束の音だ。
だがその鍵は、通常のものとは少し変わった形状をしていた。一言で言うと、大きいのだ。
そして、次元航行艦に乗る者なら気付いただろう。それが、魔導砲『アルカンシェル』の起動キーに似ていることに。

「こうも上手くいくと、拍子抜けやな。さっさと帰ってまうか。それとも――」

――宣戦布告を、していくか。
獰猛な笑みと共に、男は呟いた。
と、その時。

「おいそこのあんた!!　なにやってんだ!?」

一人の青年が、こちらへ駆け寄ってきた。男は、うん？　と首を傾げる。

「どないしたんや？　そんな大声張り上げて」
「頭沸いてんのか!?　今ここは襲撃受けてんだよ!!　Aランク以上の魔導師は結界の外で待機!!　それ以外は市民の誘導と避難!!　知ってんだろ!?」
「ああ、そういうことかいな」

ポンッ、と手を叩き、納得する男。青年は、綺麗な金髪を掻きあげながら、面倒くさそうに言った。

「おっさん、ボケてんのか？」
「む。わしはまだ２０代やで？　おっさん違う」
「あっそ。俺は１８だよ。……俺が護衛すっから、さっさと出るぞ」
「年上と知った上でタメ口かい。まあええけど。自分、地上本部の魔導師かいな？」
「じゃなきゃここにいねぇだろ。陸士１０８部隊所属、リューイ・エンドブロム三等陸尉だ」
「ほう、その歳で大したもんやないか」

急ぎ足で歩きながら、二人はあまり緊張感のない会話をする。
そうしてしばらく歩くと、前方から声が聞こえてきた。

「マスター！！　ご無事ですか！？」
「ミリアム。お前な、まだ中に残ってる奴がいたぞ」

ミリアム、と呼ばれた緑髪の女の子は、えっ、と声を漏らすと、男を見た。男は、苦笑を漏らす。

「なはは、どーも」
「ったく、下手すりゃ大惨事だぞ？」
「そんなはずは……」
「まま、えーやんか」

男は笑ってフォローする。リューイは、そんな男の手を見て、ん？と首を傾げた。

「なあ、それなんだ？」
「ああ、これかいな？　これはあれや。……『ジュエルシード』。封印指定のロストロギアやな」

「なっ！？」
「えっ！？」

二人が身構える。男は、ケラケラと笑った。

「えー反応や。そうでないとアカン」
「おいおっさん。テメェ、何者だ？」

リューイが、声を低くして言う。男は、ふむ、と頷いた。

「人に名乗らすときは先に名乗るのが礼儀――ってあれやな。すでに名乗ってくれとったな」
「……」

ミリアムも、目つきを鋭くする。

「わしの名は、ホムラ。ホムラ・イルハート。元時空管理局第二教導隊副隊長、及び先代『エース・オブ・エース』や」

瞬間、ゴウッ、という音と共に、風が吹いた。
魔力の余波。それだけで風が起こる程の魔力。

「『緑風事件』の主犯とその融合騎やな？　相手したるわ。かかってきぃ」

男は、ホムラは、笑う。
リューイは、無言でデバイスを起動した。

◇　◇　◇

「……ディバインバスター」
「……ッ！！」
「うおっ！！」

放たれた紅蓮の砲撃を、ファイムとカグラはなんとか避ける。

かの『エース・オブ・エース』の十八番、純魔力砲撃『ディバインバスター』。単純であるが故に使い手の技量が現れる魔法。
テンリュウが放つその砲撃は、『エース・オブ・エース』と比べても差がない。

「おっそろしい威力だなオイ！！　ファイム！！　受け流せねぇのか！？」
「無理です！！　単純な威力が違いすぎます！！　腕が吹き飛びますよ！？」
「くっそ……！」

カグラは舌打ちする。彼の視線の先には、ギレンと飛竜、そして少年の姿。
そして少年は、今は何やら装置を取り出し、ギレンに触れている。

「マズいな……ＡＭＦを解除されるぞ」
「わかっています。しかし……」

ファイムは自身の斜め上を見上げる。そこには、傷一つない体で宙に佇む『最強』の姿。
この立場。見上げる側と、見下される側。それが、実力差そのものだった。

だが、しかし。
そんなことは、理解していたことだから。
ファイムは、鈍色に輝く右腕を振る。

「……ステージ構築は終わりました。カグラさん、チャンスは一度です。ご協力、お願いします」
「はっ、言うようになったじゃねぇか。いいぜ、手ェ貸してやんよ」
「……何をする気かは存じませんが」

テンリュウの言葉。そして、ブン、という音と共に、薙刀が振るわれる。
紡がれるのは、二つの魔力スフィア。

「構いません。我が一撃にて沈めます」

二つの魔力スフィアが、臨界点を迎える。

「ディバインバスター・ツインシフト」

紅蓮の砲撃が、二つ同時に放たれる。
受ければ、落ちるのは必定。しかし、二人は動かない。

「……!?」

テンリュウの表情が、僅かに変わる。
二つの砲撃が――逸れた。
ディバインバスターは直射砲である。故に、曲がるということはありえない。

しかし、曲がった。
最初は徐々に、そして、最後には大きく。
そうして逸れた一撃は、当然、二人には当たらない。

そして、それを見逃す二人ではない。

「ブラスター1!!　いくよリンネっ!!」
《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

ファイムの魔力が跳ね上がる。カートリッジなしでのブラスターシステム起動は、あまりにも無茶な行為だ。

だがファイムは、それをする。
命を使う、行為と知りつつ。

――ダンッ!!

魔法陣の足場を蹴り上げ、ファイムは宙に飛ぶ。そして。

「カグラさん!!」
「任せな。いくぜ、ヘルダスト」
《ＯＫ，Ｂｏｓｓ》

ヘルダストが応じ、形状を変える。両手のマシンガンが消え、腕を覆う手甲が現れる。

《Ｓｏｌｄｉｅｒ　ｍｏｄｅ》
「歯ぁ食い縛りな」

ファイムの背後から届く、その言葉。そのままカグラは、足を引く。

そして。

《K&F, combination humans cannon bullet“F&R”》

ファイムを、蹴り飛ばした。
文字通り弾丸となって飛ぶファイム。人間砲弾――文字通りのそれが、テンリュウを狙い撃つ。

そして、テンリュウの正面に辿り着いた瞬間。

「……見事です」
「ストーム……！！」
《storm breaker》

テンリュウは微笑。そしてファイムは、拳を放つ。

「ブレイカアアアッ！！」

翡翠の砲撃が、空を覆った。
そして。

「……そんな」

呆然とした声が、漏れた。
それはあまりにも、残酷な現実。

「人間砲弾……その覚悟、確かに受けました」

そこにいるのは、未だ健在な、テンリュウの姿。

「……ッ！！」

「遅い！！」

裂帛の気合いと共に、薙刀が振るわれ、ファイムを叩く。

鈍い音。

戦闘不能は免れない一撃を受け、ファイムはビルに着弾した。

「ファイム！！」

「貴方もですよ。――夢想演舞」

一瞬でカグラの眼前に到達したテンリュウは、多口砲撃――一撃の威力では『ディバインバスター』に匹敵、あるいは凌駕する一撃で、カグラを撃つ。

地面に巨大なクレーターを作り、カグラは落ちる。

テンリュウは一度薙刀を振るうと、周囲に視線を走らせた。

「……なるほど、ワイヤーですか。それも、魔力を含んだ」

空中で僅かに光ったそれ――テンリュウが切り落としたワイヤー――を手に取り、テンリュウは呟いた。

ファイムとカグラを襲ったディバインバスターが逸れたカラクリは、これである。

魔力同士は干渉し合う。そこを利用した、ワイヤーによる三次元的な魔力干渉。カートリッジシステムを導入する前のファイムにとっ

て、切り札であった装置である。

だが、弱点も多い。ワイヤー自体が脆いため、何発も作用させられるものではなく、何より、魔導ではなく質量兵器としての側面が強すぎるのだ。

だが、そうまでしても、通用しない。

管理局法に触れる方法を、とってさえ。

「管理局法に触れる行為のはず……裁かれる覚悟を抱いてというのなら、見事。その一言です」

届いているかどうかはわからない。だが、テンリュウは言葉を紡ぐ。

「故に私もお見せしましょう。『最強』と呼ばれるその所以を」

テンリュウの魔力が吹き荒れる。そうして出現するのは、巨大な魔力スフィア。

直径数十メートルという魔力スフィアが、出現する。

「忠告です。守らねば、全てが吹き飛びますよ」

そして、テンリュウは薙刀――『桜花』を振るう。

「高キ御心ココニ在リ、紡ガレヌ歴史ハ真実ノ語リ手。我ガ血、魂、信念、願望、欲望、無念……全テハ悠久ノ楽園ガタメニ。今ココデ我ハ乞ウ。破壊ヲ。創造ヲ。来タレ、忘レラレシ都ノ遺産」

古代魔法――現代ではもう、使用されないそれを、テンリュウは紡ぐ。

ファイムの視界にも、それが映った。

止めなければ、と、ぼんやりとした思考で考える。

しかし、それで終わりだった。

「クロノクルセイド」

時の聖戦――その言葉と共に。

世界が、閉ざされた。

◇　◇　◇

それは、一瞬の出来事だった。

張られていた結界――範囲内のものを保護することを目的としたそれが、一瞬で砕け散り、同時に、世界が白に染め上げられた。

結界の外で待機していた者たちはその光で目を閉じ、そして、目撃する。

瓦礫の山となった、管理局地上本部の姿と。

それを覆い隠すように広がる、砂塵のカーテンを。

そして、別の場所では。

それを楽しそうに眺める男の姿がある。

「『神は惨劇を包み隠す。まだ、見るべきではないと』……はは、こら凄いわ。ゾクゾクするで」

体を震わせながら言うのは、ホムラだ。

そうだ。これが、魔法だ。

非殺傷などという言葉で誤魔化された、純然たる『力』の正体。

これこそが、見たかったものだ。

「リミットなしのＳＳＳランク……管理局の歴史でも一人しかおらんような怪物。そもそも、敵に回す方が間違っとる。なあ、そう思うやろ？　おにーさん？」

「……」

ホムラが振り返った先。そこにいるのは、瓦礫に背を預け、座り込んでいるリューイと、その側で小型化し、気絶して倒れているミリアムの姿だ。

リューイは、最後の気力を振り絞ってホムラを睨んでいる。

だが、できるのはそれだけだ。

ホムラは、ははっ、と笑う。

「ええ目をしとるなぁ、自分。せやけど、気力だけじゃあどうにもならんよ。だから、そうして這いつくばっとるんやもんな？」

嘲笑うように、ホムラは言う。

どこか、憎むように。

「ユニゾンした状態で、Ｓランクってとこか？　強いなぁ、自分。せやけど、勝てん。そんなもんや。……魔法には、限界がある」

言って、ホムラは空へと駆け上がる。

そして、リューイを見下すように見つめると、手を翳した。
魔力が、収束する。

「ま、いずれわかるわ。魔法は最早、誰も守れない力やってな」

そして、白銀の閃光が、リューイを包んだ。

◇　◇　◇

古代魔法――最早失われた力であるそれは、文字通り最強と呼ぶに相応しい。

かつての、古代ベルカと呼ばれる時代の更に前の時代は、魔導師という存在は、『存在する』という、ただそれだけで世界に影響を与えていた。

そんな時代から時が流れ、現代。古代魔法はそのほとんどが失われ、同時に実用的でなくなっていた。

しかし、たった今。
忘れ去られた力が、たった一人の魔法使いによって、蘇った。

「……」

テンリュウは自身が生み出した惨状を、ぼんやりと眺める。弱い魔力の反応。あの二人は、死んでいない。

一応、手加減はなし。非殺傷などという生易しい手段もとっていな

かったのだが……。

「まだ向かってくるというのであれば、大したものですが……」

そう、呟き。

視線を外した瞬間。

《Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ》

雷の刃が、彼女を襲った。テンリュウは咄嗟に『桜花』を盾にするが、威力を殺しきれず、後方へと弾かれる。

「……！」

衝撃でビリビリと震える手を黙らせ、テンリュウは新たな敵を見る。金色の髪と、白いマントを羽織った漆黒のバリアジャケットを纏ったその姿に、見覚えがあった。

フェイト・Ｔ・ハラオウン。

『雷光の死神』とまで謳われる、執務官だ。

フェイトは何も言わず、彼女のデバイスであるバルディッシュを構えた。説得の余地はないと判断したのだろう。

そしてそれは、正解だ。

視線を交錯させる二人。互いに踏み込むタイミングをはかっていた二人はしかし、乱入者によってそのタイミングを失ってしまう。

「ハッハァ！！　吹っ飛べオラァ！！」

「ッ、バルディッシュ！」

《ｙｅｓ，ｓｉｒ》

ギレンの言葉と共に放たれた砲撃を、フェイトは障壁で防ぐ。だが、相手はオーバーＳランクの魔導師だ。防ぐのに手一杯になってしまう。

そして、その隙をテンリュウは見逃さない。距離を詰め、フェイトに迫る。

「くっ……！」

しかし、テンリュウが桜花を振るおうとした瞬間、テンリュウの眼前に連結刃が出現した。

いや、出現したというのはおかしい。テンリュウの足下より、伸びてきたといったほうが正しい。

テンリュウは、即座に後退。連結刃はそれを追わず、持ち主の下へと戻る。

そして、炎の翼を纏った騎士が、侍に迫る。

「紫電一閃！！」

――ズドン！！

空に、轟音が響き渡った。圧倒的な威力の一撃が、それを引き起こしたのだ。

「フリード！」

「ギャウ！」

そして、それに注意を奪われた一瞬の隙に、ギレンにフリードの熱

線が放たれた。

「クソが！」

魔法を解除し、それを避けるギレン。そして、それを見てフリードに一撃を加えようとサリヴァを駆るウィル。

だが、彼にも上空からの騎士が迫る。

「はあああああっ！！」

ストラーダのブースターを使って加速したエリオが、上空から突撃。ウィルは慌ててそれを受けるが、威力に負け、サリヴァの背中から弾き飛ばされる。

「うあっ！？」

「……！」

弾き飛ばされたウィルは、旋回してきたサリヴァの脚に掴まり、落下を回避。対し、エリオはストラーダのブースターを使い、キャロが乗っているフリードの背中に戻った。

そして、犯罪者たちに対する攻撃はまだ止まらない。

「轟天爆砕！！」

叫び声と共に、テンリュウたちの頭上に影が差す。

巨大。そうとしか表現できない鎚が、振り下ろされんとしていた。

対人用では決してない、対艦用の一撃。

それが、振り下ろされる。

「ギガントシュラーク！！」

振り下ろされる一撃。身構えるギレンとウィル。その二人に、テンリュウが声を張り上げた。

「私が防ぎます！　お二人は下へ！　防いだ後、反撃をお願いします！」

それだけ叫ぶと、テンリュウは桜花を構え、圧倒的な威力を誇るその一撃に向かっていく。

轟音と共に迫る一撃。テンリュウは、桜花を構え、魔力を集中する。

「……夢幻天声」

ゴゥン、という音と共に、巨大な障壁が展開される。

グラーフアイゼンはそれに直撃。あまりの衝撃に、グラーフアイゼンが砕け散り、障壁も吹き飛ぶ。

そして、砕けたグラーフアイゼンの瓦礫の隙間を抜い、ギレンと、ウィルが駆る飛竜、サリヴァが砲撃を放つ。

しかし、今度はそれを、ヴィータの前に現れた青き狼の姿をした『盾の守護獣』ザフィーラが防ぐ。

「今です！　主はやて！！」

生まれた一瞬の隙。その隙を、大威力魔法の単純な威力ならばかの『エース・オブ・エース』をも上回る、『地上本部の切り札』が、

畳み掛ける。

「……遠き地にて。闇に、沈め――」

リィンフォースとユニゾンした状態のはやてが、魔法を紡ぐ。

「ディアボリック・エミッション！！」

空間魔法――あまりにも圧倒的な威力を誇るその一撃が、三人と一匹を飲み込んだ。

◇　◇　◇

半壊どころか、七割方崩壊した地上本部の一角。そこに、二人がいた。

「つっ……生きてるか？」

「……すみません。助かり、ました」

カグラの言葉に、ファイムは口元から血を滴らせながら応じる。テンリュウの一撃。あの古代魔法の中を、カグラは自身の全魔力を使い、ファイムと共に生き延びた。そのせいで、魔力はもう残っていない。

しかし、それで良かった。ファイムにはまだ、やってもらわねばならないことがあったから。

「俺は魔力が尽きた。お前さんは、まだやれるか？」

「……魔力そのものは限界ですが、まだ、やれます」

けほっ、とファイムは血を吐く。しかし、目は死んでいない。
いや、どこか狂気じみた色さえ宿していた。
それを見て、カグラは笑う。

「上等だ。それでいい。……今ので決まりゃあ一番いいが、そうもいかないだろうしな」
「はい。……リンネ、大丈夫？」
《……はい。まだ、動けます。魔力制御に集中することになるので、バリアジャケットの出力は落ちますが……》
「うん。ありがとう。……リンネは、飛行魔法の制御をお願い。後は、全部僕がやるから」

そう言って、ファイムはポケットからカートリッジが六発入ったリボルバー型の弾倉を取り出す。
本来の腕の時に使う、予備のカートリッジだ。

今のファイムは、カートリッジが使えない。しかし、取り出した。
その理由と意味は、一つ。

「……今、お前にこんなことを聞くのは間違ってるんだろうけどよ、聞かせてくれ」
「何を……ですか？」
「どうして、そこまでする？」

カグラは、懐から煙草を取り出しつつ、言った。

「始まりは、選択肢がなかった。俺たちが押し付けた。けどよ、今は違うだろ？　今なら、選べるだろ？　どうして、お前は命を捨て

る？」
「……今更、聞かないでくださいよ」
ファイムは苦笑。
その瞳にあるのは、覚悟。
「償いをすると決めたんです。命を懸けて。……知っていますか？『白』という色は、周囲に『黒』という色がなければ、自分が『白』だと気付けないんです。そしてそれは、『黒』という色も同じです」
カグラに背を向けて、ファイムは、そう言った。
「みんな、綺麗なんですよ。あまりにも綺麗で、美しくて、真っ直ぐで……憧れてしまうんです。そんなこと、望む資格もありはしないのに。場違いにも、思ってしまうんです」
あんな風に生きたいと。
あんな風になりたいと。
なれるはずがないのに。
なれるわけがないのに。
「でも、それも終わりです。僕は罪人。戦って戦って戦って、ボロボロになって死ぬことこそが相応しい。それだけです」
「地上を守るのは、どうすんだよ？　お前がいなくなりゃ、地上は」
「大丈夫ですよ。ナカジマ三佐がおられますし、リューイとミリアムもいます。カグラさんもいるじゃないですか」
ファイムは、そう言って笑った。
あまりにも、悲しい笑顔だった。

それに、とファイムは言った。
それに――

「はやてさんもいる。僕一人がいなくなっても、問題はありませんよ」

そして、ファイムは飛び立った。
未だ戦いが続く、空へ。
それを見送ったカグラは、火のついていない煙草を投げ捨てると、呟くように言葉を漏らした。

「……だから、言ったんだよ……！」

苛立たしげに、吐き捨てる。

「向いてねぇって……そう言ったんだよ！！　ふざけんなよ！！
認められねぇよ！！　あいつが死んだら、地上は終わっちまう！！」

ファイム・ララウェイ。
『本局』執務官である彼が、どうして『地上本部のエース』と呼ばれるのか。
どうして、そうとまで呼ばれる程の実績を残せたのか。
その意味を、本人も、管理局も理解していない。

「反抗してくれりゃ、良かったんだよ！！　そうすりゃ、こんなことにゃならなかった！！　あんなガキに死に方を決めさせて、何が先代『エース・オブ・エース』だ！？」

あの青年を死に追いやった人間の一人であるカグラに、そのようなことを言う資格はないのだろう。

だが、カグラは。
カグラ・ランバードという男は、やりきれない気持ちにとらわれていた。

上空で、八神はやての魔法が発動した。

◇　◇　◇

空間魔法――圧倒的な威力のそれは、大気を歪め、空気中の水蒸気を強制的に結合させ、大量の煙を生み出した。

それを見つめるのは、六課の面々。

「やった、かな？」
『直撃はしたはずですが……』

はやての言葉に、ユニゾン中のリィンフォースが応じる。今の一撃は、間違いなく決まった。普通なら、ここで落ちて然るべきなのだが……。

――煙が、晴れる。

そして、全員が目を見開いた。

「はーい、皆さんちゅーもーく」

球状の結界。ディアボリック・エミッションを防いだのであろうそ

れを解除しながら、先程までいなかった男が、そう言葉を紡いだ。
その手には、管理局で魔導師が多用する杖型のデバイスがある。
「初めまして、と一応言うとこか。何人かは会うたことあるけど、まあええやろ」
周囲を見回しつつ、男は言う。はやては、眉をひそめた。
（なんや……？　見覚えがある……それに、関西弁……？）
関西弁という表現方法は、かなり独特なものだ。それを聞く機会は、ミッドチルダではまずない。
しかし、昔一度、はやてはどこかで聞いた覚えがあった。
一体、どこで――
『なあ、お嬢ちゃんたち。魔法、好きかいな？』
懐かしい声を聞いた。いや、思い出した。
そうだ。もう１０年以上前、フェイトと共に本局を歩いていたら、声をかけられたのだ。
確か、名は――
「ホムラアァァッッッ！！」
絶叫のような声が、響き渡った。
その場にいた全員が、声の主を見た。
瓦礫の山の一角。そこにいるのは、カグラだ。
ホムラはその姿を認めると、笑みを浮かべた。

「ははっ、久し振りやなぁ、カグラ。元気にしとったか……ってのは、聞かんで良さそうやね」
「黙れ！！　ふざけてんのかテメェ！！」
「なはは、魔力も限界のくせによー言うで。まあ、ちょいと待っとき。相手したらなアカン坊主がおるようやし――」
――風が、舞う。
ホムラの背後。四人と一匹が集中するそこに、一人の騎士が現れた。
その騎士は、拳を握り締め、一切の躊躇もなく放つ。
「――ファイムくん！！」
はやての叫び声が、響くと同時。
ファイムの拳が、ホムラの右手で掴まれた。
「自分も、久し振りやな？　『地上本部のエース』くん？」
「……」
ボソリと、ファイムが何事かを呟いた。
ファイムの、鈍色に輝く右腕。その拳の中から、光が溢れ出す。
ホムラは、眉を跳ね上げた。
「まさか自分！！」
「吹き飛べ！！」
カートリッジの暴走。
繊細な造りをしているカートリッジというものは、外部から薬莢に直接魔力を叩き込んでやれば、いとも簡単に暴発する。

意図的にそれを起こしたファイム。使われたカートリッジは、６発分。

――空に、魔力爆発が起こった。

◇　◇　◇

魔力爆発。テンリュウたちは咄嗟にその場を離れたが、ホムラはそうもいかなかった。
とてつもない爆発。誰もが固唾を飲んで見守る中、不意に声が響いた。

「あー、驚いた。よーやるで自分。ムチャクチャやな」

そこにいたのは、健在な姿のホムラと、肘から先の右腕を失い、ボロボロの状態で二の腕を掴まれ、掴まれている部分以外の手足をだらりと下げた状態のファイムだった。

「ファイムくん！！」

はやてが、泣きそうな声で叫ぶ。ホムラは、はぁ、とため息を吐いた。

「『無駄に』命を使うもんやないで、自分？」

「……い」

ファイムが、呟くように言った。ん、とホムラが首を傾げると、フ

ァイムはホムラを睨み、声を絞り出しながら、左の拳を振るった。

「……うる…さい…ッ……！！」

――ポスッ。

しかし、その拳は、あまりにも弱かった。

ホムラは、はっ、と吐き捨てる。

「腹立つわ。ホンマにムカつくで。苛々が止まんわ。自分見とると。……失せろや」

ホムラが、ファイムを投げ捨てる。いきなりのことに誰も反応できず、ファイムは瓦礫の山に着弾した。

「ファイムくんっ！！」

「てめぇ！！」

「貴様っ！！」

はやてが叫び、ヴィータとシグナムがホムラに迫る。だが、ホムラに到達する前に、それぞれギレンとテンリュウに足止めされてしまった。

「どけよてめぇ！！」

「はっ、そうして欲しけりゃ俺を倒しな！！」

「貴様……！！」

「『将を欲せんとすれば、まず馬を射よ』……違いますか？　烈火の将？」

そして、その少し上空では、フリードに乗るエリオとキャロが、サ

リヴァに乗るウィルと向き合っていた。

「自分が何をしているか、わかっているんですか！？」

「なんのためにこんなことを！！」

「あぁ？　お前ら馬鹿かよ？　わかってるからやってんだろうが」

エリオとキャロの必死の言葉に、そう返すウィル。その光景を眺め、ふむ、とホムラは呟いた。

「錚々たるメンバーやね～。『地上本部のエース』……はリタイアしとるけど、『ヴォルケンリッター』からは『烈火の将』、『鉄槌の騎士』、『盾の守護獣』。『竜騎士』に、『真竜使い』。ユニゾンデバイスも二つおるし、更には――」

――ガギィン！！

上空より高速で飛来したフェイト。ザンバーフォームによる大剣の一撃を、ホムラはシールドを展開してガード。笑みを浮かべる。

「『雷光の死神』もおると。凄まじい力やね。あの変態ドクターご執心の理由、なんとなくわかるわ」

距離を取ったフェイトが、その言葉を聞いて眉をひそめる。ホムラは、チラリとはやてを見た。

「下におる奴は置いといて……流石やな、『最後の夜天の主』。部下が墜ちても、そちらへ行かずにわしらを睨んどる」

「……」

ギリッ、と歯軋りする音が聞こえてきそうな形相で、はやてはホム

ラを睨んだ。ホムラは肩を竦め、んー、と声を漏らす。

「『銀制服（シルバー）のエース』と『星の光の継承者』……何より今の『エース・オブ・エース』がおらんのが残念やけど、それは言うてもしゃーないな。ま、目的は達成したし、退こか？」

ホムラは、戦闘を行う寸前のメンバーたちにそう言葉を紡ぐ。だが、ギレンはあぁ？　と片方の眉を吊り上げた。

「ふざけてんのか？　これからが楽しいんだぜ？」

「……首領としての命令や。あとギレン。自分『ワグリア』で嘘吐いたやろ？　その辺もきっちり話せなアカンしな」

「あぁ！？　テメェ――」

「ええから従え。わしを怒らせんな」

有無を言わせぬ迫力だった。ギレンは、ちっ、と舌打ちする。

「……仕方ねぇな」

「ん、素直でよろしい。ほな、テンリュウ。『あれ』召喚しよか。そのうちに撤退や」

「正気ですか？」

「正気やったら、管理局に喧嘩売ったりせーへんよ」

ひらひらと手を振りつつ言うホムラ。そのホムラに向かって、カグラが声を張り上げた。

「テメェ！！　逃がすと思ってんのか！？」

「逃がすもクソも、現状わしらを捕まえられんやろ？　手負いの自分にわしは止められんし、まあ、他の面子もまともにやりあったらわからんけど、『逃げ』に徹したらそう難しいことやない」

ホムラがそう言い切ると同時に、彼めがけて一筋の砲撃が駆け抜けた。だが、ホムラのデバイスがオートで障壁を展開。それを防ぐ。

撃ったのは、はやてだ。

「おーおー。容赦ないなぁ、お嬢ちゃん」

「気安く呼ばんといてくれへんか？　管理局の裏切り者、ホムラ・イルハート」

「なはは、辛辣やねぇ」

ウォン、という音を響かせ、ホムラを中心に球状の結界が展開される。また、ホムラのすぐ側ではテンリュウが目を閉じ、魔法の起動に入っていた。

それを横目で確認しつつ、ホムラははやてに向かって言葉を紡いだ。

「せやけど、一個訂正や。わしが裏切ったんやない。管理局が裏切ったんや」

「……展開。来たれ、荒ぶる災厄」

ホムラが言い終わると同時にテンリュウが詠唱を終え、巨大な魔法陣が展開される。

直径にして、数十メートル。そこから姿を覗かせるのは、巨大な鎖で縛られた、一体の竜。

その大きさは、キャロ・ル・ルシエが従える真竜『ヴォルテール』をも上回る。

それを見たカグラが、三度、絶叫のようにホムラの名を呼ぶ。

「ホムラァァアッ！！　ホムラ・イルハートッ！！　どうしてだ！！　テメェは何がしたい！！　何が目的だ！？」
「……まさか、自分にそれ聞かれるとはなぁ」
ホムラは、微笑――否。
冷笑を、浮かべた。
「忘れたとは言わせん。自分には尚更や。……逆に聞くけどな、自分は何でそっちにおるんや？　何で、未だに管理局におるんや？」
「何だと？」
「……トモエを殺したのは、時空管理局や。そうやろ？　なのに何故、お前はそちらにいるんや？」
そう言った時のホムラの瞳は、あまりにも悲しい色を宿していた。
「……まあ、ええわ。敵同士とはいえ、再会できて良かった」
言って、ホムラはデバイスと共に右手で持っていたケースを左手で持ち直す。
僅かに破損しているそれは、遺失物管理課で使われる、ロストロギア封印用のケースであった。
「わしらは退くけど、代わりに土産を置いてくわ。……ほな、さよならや。カグラ・ランバード」
カグラのデバイスが、転移魔法を起動。四人と一匹の姿が、消えていく。
「……かつて友だと信じた男よ」

カグラたちの姿が、消える。それと同時に、己の中の全てを込め、カグラは吠えた。

「ホムラァァァァァァァアアッッッ！！」

カグラの叫びが、空を震わせ。

「ギギギギぃぃィィあアアあああアアアアアッッッっっッ！！！！！！！！」

断末魔のような竜の叫びが、天を引き裂いた。

◇　◇　◇

真竜『ガンゲイル』。

とある次元世界において神として崇められると同時に、災厄とも呼ばれ、恐れられる存在。

その力は凄まじく、一度暴れれば都市の一つや二つは壊滅するという。

『最強』とも一部で呼ばれるその竜はしかし、数年前より目撃の情報が途絶えていた。

しかし、現在。最強の真竜は、一つの明確な脅威としてそこにいた。

「ッ、緊急事態や！！　市民の避難を！！　あと、結界魔導師の出動要請！！　わたし一人では支えきれへん！！」

周囲を保護するためではなく、純粋に『ガンゲイル』という名の怪物を抑えるための術式。
展開されたそれはしかし、あまりにも強力な力を前に、悲鳴を上げる。

ミシッ、とはやての腕から鈍い音がした。総合ＳＳランクという凄まじい魔力をもつはやてでさえ、抑えきれない力。

だが、はやては強引にそれを押さえ込む。
だって、破られれば。
全てが、壊されてしまう。壊れてしまう。

「キャロの技能封印解除の許可は！？」
『まだです！！　承認がおりません！！』

そんなシャーリーの返答を聞き、はやてはギリッと歯を食いしばる。

「ヴォルテールなしで止められる相手やないのに……！」

キャロ・ル・ルシエが従える、彼女が一族を追われる理由ともなった真竜、ヴォルテール。
その召喚許可が下りない。このままでは、クラナガンは壊滅する。

『主はやて。我らが参ります』
『任せろ！』
『行ってくるよ、はやて！』

どうするか――そう考えた瞬間、三人の念話が入った。同時に、ユニゾン状態のシグナムとヴィータが、はやてたちの上空を飛行していく。

「シグナム！　ヴィータ！　アギト！」
『三人共！　ダメです！』

声を張り上げる、はやてとリィンフォース。
それを聞いてか否か、シグナムとヴィータの二人は口元に笑みを浮かべ、速度を上げた。

はやての背筋が、凍る。
まさか、二人は――

「……ッ、アカン！　私も！」
「いけません！！　主はやて！！」

前に出ようとしたはやて。しかしそれを、人型になったザフィーラが止めた。

「あなたを失えば、部隊は総崩れです！！」
「でも！　ザフィーラ！！」
『シグナムとヴィータちゃんが！！』

声を張り上げるはやてとリィンフォース。
落とされ、生死不明のファイム。彼のように、誰かを失うことは耐えられない。
今だって、彼を探し出し、助けたいのを必死で堪えているのだから。

「……主はやて。我らヴォルケンリッターは、一騎当千の騎士です。あの二人ならば、必ず生きて帰ってきます」

ザフィーラは、はやてを守るように立ちながら、言葉を紡いだ。

「我らを、信じてください」

何も……言えなくなった。

そうだ、あの二人は強い。そして、自分は。八神はやてという人間は、あの二人のマスターであり、家族なのだ。

信じなくて、どうする。

「……おおきにな、ザフィーラ」

「その言葉は、全てが終わってから改めてください。……主はやて。私が守ります。奴を討つための魔法を」

「うん！！」

『はいです！！』

はやてとリィンフォースが応じ、盾の守護獣はその力を発揮する。

はやての張った結界が破られたのは、それと同時だった。

◇　◇　◇

「ぎィあががギギギぎあッがががががかギアあああああああーーーッ！！！！」

ガンゲイルの叫びが響き渡る中、シグナムは冷たい目でそれを見下ろしていた。

「……今まで向かい合ったどのような存在よりも強力な力を有しているようだな」

『いけるかな？　シグナム？』
「無論だ。己が信ずる武器を手に、必殺の一撃をもって敵を沈めるのが我らベルカの騎士だ」

ガチャン、という音と共に、レヴァンティンがカートリッジをロード。その音を聞いてか、ガンゲイルが叫び声を上げながらシグナムに照準を定めた。

『シグナム！！』
「むっ！！」

アギトの警告。シグナムの眉が跳ね上がり、ガンゲイルがいくつもの火球を召喚。それを放った。シグナムは、体を引き、力を込める。

『「飛竜一閃！！」』

連結刃となったレヴァンティンが火球を打ち、更にガンゲイルへと伸びていく。

――ガギィン！！

だが、シグナムの刃はガンゲイルが展開している障壁によって弾かれた。
ガンゲイルは吠えると、シグナムに向かって拳を振るおうとした。
対し、シグナムは受ける構え。

『来るよシグナム！！』
「案ずるなアギト。……忘れたか？　私たちは囮だ」

――ゴギィィイン！！！！！！

空より飛来した赤髪の少女が、渾身の力でガンゲイルを叩いた。
障壁が砕け、ガンゲイルに一撃が入る。しかし、倒すまでには届かない。

「ヴィータ！！」
「ちっ！！」

シグナムが叫び、ヴィータは全力で下がる。ガンゲイルは怒りの叫びを上げながら、周囲に火球をばらまいた。

「くっ……！」
「くそっ！！」

二人はガンゲイルを挟むような位置を飛び回り、それを避ける。
周囲の被害は、考えていられない。
今の一撃は申し分ないものだった。それが通じないとなると――

「……」

チラリと、シグナムは自身の後方にて魔法を展開するはやてを見る。

浮かぶのは、白銀の髪を宿したかつての友。
辛く重い、悲しい運命を共に生き、そして、満ち足りた笑顔と共に消えた人物。

「ぐるルぁオオぁぉぉアああッッッッ！！」

ガンゲイルの尾が割れ、無数の鋭利な先端を持つ触手となる。シグナムはレヴァンティンを構え、呟いた。

「……案ずるな。お前との約束は、必ず果たす」

烈火の将が、吠える。

「おおおっ！！」

ミッドチルダという世界の命運さえも左右する戦いが、激化する。

◇　◇　◇

目を開けた先に映ったのは、燃え盛る世界。

――視界が悪い。右目が開いていない。

「……ッ、えほっ」

腹の奥からこみ上げてきたものを、吐き出す。

鮮血が、地面を染めた。

「……くそっ……」

通じなかった。

届かなかった。

全力でやっても。右腕を捨てても。

「……ッ！？」

目から、一筋の涙が零れた。
青年は、ファイム・ララウェイは、目を閉じそうになる。
だが――

「……逃げるな」

片方の目しか開かない中で。
片腕を失い、立つことさえままならない中で。

ファイム・ララウェイは、前を見た。
あまりにも圧倒的な存在を、睨むように見上げた。

――認めろ！！

ファイムは、自身に怒鳴るように言う。

――これが、敵と自分の力の差！！
そして、これを埋めなければ、誰一人として守れない！！

「おいファイム！」

静かな覚悟を決めるファイム。そのファイムに向かって、カグラが声を張り上げた。

「生きてるか？　生きてんなら退くぞ。直ここに、『アルカンシェル』が撃たれる」
「なっ、どうしてですか！？」
「上の判断だよ。嬢ちゃんたちにも撤退命令が出てるはずだ」

ファイムは、今現在、命懸けで戦っている彼らを見た。
そして、燃え盛る瓦礫の山を。

魔導砲アルカンシェル――闇の書をも蒸発させたその砲撃を、ここに撃てば。
最早この場所は、『死んで』しまう。

ファイムは、ギリッ、と歯を食いしばると、カグラに言った。

「カグラさん。……デバイスを貸してください。あと、予備を含めてカートリッジをありったけ」
「……何をする気だ？」
「奴を撃ちます。……こういう時、誰かに変わって命を捨てるために、僕はここにいる」

ファイムの目に、怯えはなかった。
あったのは、覚悟。
あまりにも悲しい、覚悟だけ。

「……わかったよ。貸してやる。やってみろや」
「はい」

カグラからデバイスを受け取り、ファイムは一度、大きく息を吸う。
――覚悟は、決まった。
ただ、それだけのことだった。

◇　◇　◇

時空管理局本局第一会議室。
理事会が開かれる時や、緊急事態の時のみ使用されるその場所に、管理局を文字通り束ねる理事たちが集まっていた。
たが、普段からして多忙な理事たちだ。集まれたのも、極僅かである。
故にそのほとんどが、通信によって会議に参加していた。
今回の議題は勿論、地上本部の件だ。

「避難はどうなっている!?」
『あと一時間はかかります!!』
「『アルカンシェル』の準備は!?」
「すでに位置についています!! 発射準備が整うまで、２０分です!!」
『現場の魔導師は!?』
『撤退命令を下しましたが……』
「馬鹿者!! 彼らがいなくなれば、誰が一時間もの間、ヤツを止めておくのだ!?」

会議室はまとまりがなく、ただただ怒号が響いていた。
そんな中、凛とした声が響く。

「皆さん、落ち着いてください」

発言の主は、金髪の美女。カリム・グラシアだ。
理事の一人である彼女のその発言は正しい。しかし、それが今は通じない。

「教会の者は黙っていろ!!」

「……！」
「ッ、どういう……！？」

理事の一人が叫び、カリムの護衛として本局に来ていたシャッハ・ヌエラが声を荒げる。男は、吐き捨てるように言った。

「これは管理局の問題だ！！　口出しせんでもらおうか！！」
「ッ、ミッドチルダの危機なのですよ！？　そんなことを言っている場合ではないはずです！！」
「はっ、どうせこの機に発言力を高めようとでも思っているのだろう？　卑しいものだ」
「なっ……！？」
「無礼な！！　取り消しなさい！！」

男の言葉にカリムは絶句し、シャッハが自身のデバイスを起動させようとする。
だが、その前に別の声がそれを止めた。

「……やめんか。みっともない」

決して大きな声ではなかったが、その声は確かに響き渡った。
声の主――伝説の三提督の一人であるミゼットは、威厳のある声で言葉を紡いだ。

「そんなことを言い合うために集まったわけじゃないよ。……リンディ、現場の指揮官は？」
「はい。八神一佐と、ランバート一佐ですね」
「……なるほど。カグラの坊やに通信は繋げられるかい？」
「すぐに」

統括官という地位にあり、『奇跡の女神』とまで呼ばれる女傑、リンディ・ハラオウン。彼女は、すぐさまカグラと連絡をとる。

通信が繋がり、カグラに繋がる。カグラが、おっ、と声を漏らした。

『お、ミゼットのばーちゃんか。撤退命令なら聞いたぜ？』

「それなんだけど、あと少し粘れないかい？　避難が済んでないんだよ」

『いやいや、無茶だろ流石に』

カグラは肩を竦めた。

『待機してた魔導師たちまで下がらせといて、そりゃ虫が良すぎだろ？』

「貴様！！　状況がわかっているのか！？」

理事の一人が声を荒げた。カグラは、はっ、と挑発するように息を吐いた。

『俺は魔力切れでリタイア。待機してた魔導師共は撤退。今は機動六課が抑えてるが、二人リタイアした。まあ、保たないだろうよ。……状況なんて、わかり過ぎるほどにわかってんだよこっちは。最低だってな』

酷く冷めたセリフだった。会議室が、一瞬、静寂に包まれる。

そんな中、まあ、安心しろ、とカグラが言った。

『ファイムがいる。感謝しろよ？　あいつが止めてくれるらしいぜ？』

「ファイム……？　まさか、執務官の？」

リンディが呟いた時、オペレーターが声を張り上げた。

「魔力反応です！！　これは……」

「……あの坊やね」

ミゼットの脳裏に浮かぶのは、一人の青年。

レジアスが利用すると決め、誰もが目を逸らしつつも利用してきた存在。

「カグラ。今すぐ止めなさい。彼が『無駄に』命を消費する前に」

『……無駄、ときたか。こいつぁ笑うしかねぇな』

ははっ、とカグラは、乾いた笑みを浮かべ、そして、冷たい目でミゼットを見た。

『……耄碌したな。ばーちゃんよ。まさか、『無駄』とまで言うとは思わなかったぜ』

「ランバート一佐！！」

リンディが声を上げる。カグラは、あぁ？　と片眉をつり上げた。

『あー、『奇跡の女神』か。なんだ？　あんたもファイムの行為を無駄だと言いてぇのかよ？』

「……」

リンディは無言。この中で、ファイムの名を知らぬ者はいない。

そして同時に、彼がレジアス・ゲイズの下、どのように戦ってきたのかを、みな、知っている。

カグラは、呟いた。

『あれだな。怒りってのは、度が過ぎると逆に冷静になれるんだな。……権力ってのは、麻薬と同じだ。まさかあんたらからこんな理不尽な命令聞くとは思ってなかったよ』

カグラは笑っていた。

笑いながら、言葉を紡いだ。

『その命令は聞けねーよ。自分で言えよ。『お前の今までは全て無駄だった。だから止めろ』ってさ』

「私たちはそんなつもりで言ってるんじゃないんだけどね？」

『同じだろ。命を懸けさせといて。死ねと言っといて。虫が良すぎんだよ。大体よ、そんなことを今更言うんなら、もっと前に止めてやれよ。……遅過ぎるだろ』

カグラは、そのまま通信を切った。

数秒の間が過ぎて。

今度は、八神はやてに通信が繋がれた。

◇　◇　◇

「……ゴメンね、リンネ」

《それは、何に対しての謝罪ですか？》

「全てに対して、だよ」

ファイムは、片手でカートリッジをカグラのデバイス『ヘルダスト』

に込めながら、そう言った。

「不出来な主であったこと。僕が弱かったこと。たくさん迷惑をかけたこと。そして何より……こんなことに、付き合わせたこと」

《……そんなことを、言わないでください》

「それでも、言っておきたかったんだ。……ねぇ、リンネ。キミは優秀なデバイスだ。この後、全てが終わったら、新しい主の下で頑張って欲しい」

《マスター！！》

「キミは、僕にとって最初で最後の家族だから。だから、幸せになって欲しい」

一部の者は、笑うだろう。

デバイスに、命などないと。

けれど、リンネクロウズというデバイスは、ただの道具ではなく、ファイム・ララウェイにとっては『家族』だったから。

――ガガガン！！

カートリッジがロードされ、『ヘルダスト』が姿を変える。

失った右腕を媒介に、カートリッジのロードによる魔力増強で砲身を形成。バリアジャケットも消し、そちらは砲身を支える柱へと変える。

《Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｄｅ，ＲＩＮＮＥＣＬＯＳＥ&ａｍｐ；ＨＥＬＬＤＵＳＴ》

紡がれるは、命を懸けた砲撃。

生きていられる、保証はない。

《Ｂｕｒｓｔ　Ｓｔｏｒｍ》

リンネが魔法を紡ぎ。
ファイムが、吠える。

「おおおおっ！！！！！！」

獣の叫びのようなそれが、天を震わせ。
世界が、一筋の光が、ガンゲイルを穿った。

――ゴゥッ！！！！

風が荒れ、世界が怒り、ガンゲイルの腕が吹き飛んだ。
しかし――

「……ッ！？」

吹き飛んだ右腕の付け根から、突如触手のようなものが生え、腕が再生した。
そして、ガンゲイルの瞳がファイムを捉え。

――閃光が、ファイムを撃った。

◇　◇　◇

「……ッ！？」

ガンゲイルより放たれた閃光に、はやては思わず目を閉じた。

そして目を開け、叫ぶ。

「ファイムくん!?」

ガンゲイルの一撃が着弾した地点は、巨大なクレーターができていた。

あれでは、おそらく――

『魔力反応確認!!』

絶望に心が折られそうになったその瞬間、リィンフォースのそんな声が届いた。

はやては、ぐっ、とシュベルトクロイツを握る手に力を込める。

『まさか、ララウェイか!?』

『無茶だ!!』

『あのバカ、死ぬ気か!?』

シグナムたちのそんな声が届いた。はやてに、マルチ通信による指示が入る。

『はやてさん、フェイトさん、聞こえる!? 今すぐララウェイ執務官を連れて撤退して頂戴!! 彼がこれ以上、『無駄に』命を消費する前に!!』

リンディの、その言葉が、はやての中の何かを、貫いた。

命を懸けて償うと言っていた彼。

そのために生きてきたと言った彼。

ボロボロになって死ぬことこそが人生と言った彼。

それが――無駄？

『はやてちゃん？』

リィンフォースが、心配そうな声色で言う。はやては、絞り出すように言葉を紡いだ。

「……いえ。私は、彼の援護をします」

否、と。

だって、そうしなければ。

彼を、否定してしまうと思ったから。

◇　◇　◇

「……ッ」

カートリッジは全て使った。もう、魔力強化はできない。砲身も、維持するのがやっと。撃つだけの魔力は、残っていない。

しかし、彼には。

ファイム・ララウェイには、まだ命が残っている。

ならば――それを使えばいい。

《……マスター。魔力が足りません。このままでは、撃つことすら

……》

「僕の命を、全部使う。届かなくてもいい。それでも……やるんだ！！」

そのための術式は、知っている。

《……それでも、計算上不可能と出ています》

「いい。やる」

迷いはなかった。リンネは何かを堪えるようにマスター、と呟くと、意を決したように言葉を紡いだ。

《わかりました。精々派手に終幕を飾りましょう》

「ありがとう、リンネ」

ファイムは、笑った。

とても清々しく、同時に、とても寂しい目だった。

「ファイム・ララウェイ最後の演目。演じきってみせるよ」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｆａｔｈｅｒ》

父、とリンネはファイムを呼んだ。

最後だから。

だからこそ。

「待って、ファイムくん」

「……はやて、さん？」

不意に、ファイムに背を向けながら、はやてがフ眼前に現れた。ファイムは、はやてさん、とその背中に呼びかける。

「退いてください」

その言葉に、はやては無言。そのまま、障壁を展開する。

そして、気付く。はやてのユニゾンが、解けている。

「わたしの障壁で、一発分くらいの時間は稼ぐよ。それにわたしの魔力を足したら、届くかもしれへん。……安心してや。リィンは置いてきた。ここにいるのは、わたしの勝手や」

『はやて!?　何を!?』

通信で、フェイトが叫ぶ。それに続き、リンディの通信が入った。

『はやてさん!!　やめなさい!!　あなたまで『無駄に』命を捨てる気!?』

ぐっ、とファイムは唇を噛み締めた。そうだ。自分一人なら無駄に死ぬのも構わない。だが、はやてまでーー

「……やない」

ぽつりと、はやては呟いた。その肩は、震えていた。

「ファイムくんがしようとしてることは、無駄なんかやない!!　ごちゃごちゃとうるさいわ!!　ちょっと黙っててくれんか!?」

その叫びは、通信に乗り、大気に乗り、全てに届いた。

「わたしはわたしにとって一番納得できる選択をしたんや!!　ファイムくんが命の使い方を決めたように、わたしも使い方を決めた

んや！！　何が『無駄』や！！　何が『無意味』や！！　ファイムくんにそれを決めさせたんは、そもそもわたしたちやないか！！」

はやては叫ぶ。

己の想いの全てを乗せて。

「わたしたちが弱いから！！　だからファイムくんは決めたんやろ！？　選択肢を押し付けられて！！　でもな、それでもファイムくんは選んだんや！！　間違ってるって、自分は間違ってるって笑って言うんやで！？　そんな答えが正しいわけがないやないか！！　でも、それでも決めたんや！！　だからわたしはファイムくんを助けるんや！！　ファイムくん自身が選べるようになるまで！！　よう言えたもんやな！？　『無駄』やなんて！？　高いところから見てるだけの自分らに、否定はさせへん！！　理解なんてしてもらわんでええ！！　ただできひんのやったら、黙って見といて！！」

はぁ、はぁ、と息を切らしながら、はやては言い切った。

ファイムは目尻を下げ、砲身へと命を送り込む。

それが、選んだことだから。

はやては一歩下がり、二人を包むように結界を展開しようとする。

だが、元々魔法の展開がその巨大な魔力故に遅い彼女だ。時間がかかる。

だが、それをガンゲイルは待ってくれない。触手のような無数の尻尾が、二人に伸びた。

「……ッ！！」

「鋼の楔っ！！」

焦りがはやてを襲った瞬間、白き光を放つ楔が触手を穿ち、縫い止めた。

「たかが蜥蜴の上位種如きが我が主に触れることを、この『盾の守護獣』が許すとでも？」

ガンゲイルは叫び、今度はその口から先程ファイムを撃った熱線を吐き出す。
そしてそれは、三人には届かず、紅の鉄騎に防がれる。

「ああ。許すわけがねー」

そして飛来するのは、祝福の風。

「はやてちゃん！！　酷いです！！」
「リィン！？」
「私を置いていくなんて……我ら守護騎士は、いつだってはやてちゃんの味方ですよ？」

そう言って、リィンフォースははやての胸に飛び込み、ユニゾンを行う。その様子を見て、ザフィーラが言葉を紡いだ。

「主はやて。守りは我々にお任せを。あなたはラウェイと共に、砲撃の準備をお願いします」
「ザフィーラ？　でも……」
「ご安心を。頼りになる援軍が来てくれました」

ザフィーラが笑みを浮かべる。それとほぼ同時に。

「ウイングロード！！」
「クロスファイアー・シュート！！」

空に青き軌跡が描かれ、同時にオレンジ色の魔法弾がガンゲイルを襲った。そして更に、ガンゲイルの眼前を走る青い髪の女性が、拳を握りしめる。

「ディバイン……バスター！！」
《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ》

閃光がガンゲイルを襲い、その巨体が揺れる。だが、ガンゲイルは踏みとどまると、両の腕を振り回してウイングロードを破壊した。

青い髪の女性――スバル・ナカジマはオレンジ髪の女性、ティアナ・ランスターと共にすぐさま退避。距離を取る。

その、見覚えのあるかつての部下に、はやては目を見開いた。

「どうして二人が？」
『元々、あの二人は召集されてただろーが。なあ、嬢ちゃん？』

その疑問に答えるのは、カグラだ。魔力がすでに限界のはずの彼はしかし、通信越しでもわかるほどの魔力に包まれていた。

『なんだよ？　不思議そうな面して。ファイム。お前にその術式を教えたのは誰だ？』

カグラは、笑った。

そして、ファイムは絶句する。
それは、つまり。
カグラは、命を使う術式を発動したというのか？

『そんな面すんなよ。……嬢ちゃん。お前さんの言うことは、綺麗事だ。しかも感情論ときてる』

「……」

はやては、無言。それは、否定できないことだったから。
言葉を待つはやて。そのはやてに、カグラはだが、と言葉を紡いだ。

『綺麗事は大好きだ。綺麗事だと何も言わずに俯くくらいなら、綺麗事吐いて前向くほうがいい。ま、そういうわけだ。こっからは俺も参戦する。……あと、ファイム。少し待ってな。心強い援軍が直に到着すんぜ』

「援軍？」

ファイムは首を傾げる。カグラは笑みを浮かべ、それとほぼ同時に転移魔法陣が展開。そこから、一人の女の子が現れる。

ミリアム・エンドブロム。ＡＡＡ＋というランクを誇る魔導師、リューイ・エンドブロムの融合騎だ。

ミリアムはファイムの下まで歩いてくると、手に持っていたものを差し出した。
それを見、はやてが目を見開く。

「それは……！」

「ジュエルシード、シリアル？です。ファイムさん、これを使ってください」

「……どういうこと？」

その一言の中に多くの疑問を込めつつ、ファイムは言った。

ジュエルシード。封印指定のロストロギア。それを何故、ミリアムが持っているのか。

そして、使えというのはどういうことなのか。

「……私たちが不甲斐ないために、これしか取り戻せませんでした。しかし、それがこうして役に立つなら、私たちの行動は意味がありました」

「ちょっ、ちょっと待って。ロストロギアをそんな簡単に使ったら……」

『構いやしねぇよ』

ファイムが抱いた当然の迷いを切り捨てたのは、カグラ。

『ロストロギア・ジュエルシード。願いを叶える古代の遺産……今使わずに、いつ使う？』

「ですが……」

『要は『価値』と『使い方』だよ。封印すべき力。だが、何故そうする必要がある？　今ここに、必要としてる奴がいんのによ』

己自身の言葉を使われ、ファイムは言葉を詰まらせる。そのファイムに向かって、今度はミリアムが言葉を紡いだ。

「マスターより、言伝です。……『勝手に死ぬことは認めねぇ。死んだら楽になるとか思ってんなら、俺はテメェをぶん殴る。テメェが俺たちにくれた言葉を、今度は俺たちがくれてやる』」

すうっ、と、ミリアムが息を吸った。
そして。

「『生きたいと言え。その言葉をくれたなら、俺たちは全力でテメェを助ける』」

少し乱暴な言い回しになったその言葉は、かつてファイム自身が言ったこと。

ファイムの目から、涙が一滴、零れ落ちた。
その言葉は、言ってもらいたくて、しかし、もらえなかった言葉だから。

「私も同意見です。……ファイムさん。受け取ってください」

ジュエルシードが差し出される。ファイムはトリガーから左手を離し、それを受け取った。
それを見たはやてが、問う。

「ファイムくん。何を、願うんや？」
「……何を、願えばいいのでしょうか？」
「それは、自分で決めなアカン」

願いを叶えるロストロギア、ジュエルシード。
それを手にしたファイムは、惑う。
力を望むべきと知りつつ、僅かに。

はやての言葉を聞いたから。
聞いて、しまったから。

はやてはファイムの左手を両手で包み込むように握ると、優しい笑顔を浮かべた。

「わたしは、ファイムくんが決めたことを手伝うよ？　だから、ファイムくんは見つけなアカン」

選ぶ、ではなく、見つける。

はやては、そう言った。

「自分のことを罪人やって、そう言ってたやんな？　だから、償うんやって。でもな、ファイムくん。自分がしてることは、償いであって、償いでないんよ？」

八神はやては語る。

彼女こそが、罪人として今も尚償いを続ける人だから。

「罪は、自分で背負うもんや。償いは、自分でするもんや。……他人が決めたことに従うのは、償いとちゃうんよ」

はやては、微笑んでいた。

微笑みながら、泣いていた。

「もちろん、ファイムくんが自分で決められる状況やなかったのもわかる。せやけど、今なら。今やったら、選べるやろ？」

「……僕は」

ファイムは、俯く。

はやてに言われたことは、気付いていたことだ。人の言う通りに動いても、償いにはならない。

けれど、それでも。
そうするしか、なくて。
そんな自分を否定したら、全てを失ってしまいそうだったから。

「僕は……」
「辛いやろ？　難しいやろ？　しんどいやろ？　けどな、それが真実で、それだけが現実なんや。でも、それでも今ここで、ファイムくんは選ばなアカン。自分で見つけて、背負って、抱えて、決めなアカン」
「僕は！！」

ファイムは、耐えかねたように、叫んだ。

「僕は、人を殺したんです。機械なんかじゃない、何十年と続いたはずのその人の人生を、そこで終わらせた。終わらせてきた。そんな僕が今更、偉そうに『こう償おう』なんて言えるわけがないじゃないですか！！」

結局は、そういうこと。
見つけられないのではなく、その資格すらないと、そういうこと。
死人に償う方法など、ないのだから。

だから。だからこそ。
ファイム・ララウェイは、これほどまでに間違ってしまったのだから。

だが、しかし。
はやては、それを否定してくれる。

「人、っていうんは、いつだって気付くのが遅い生き物なんや。け

どそれは、いつ気付いても遅くないってことでもあるんやで？」
「……詭弁、です」
「かもしれへん。でも、もしそうやったら。世界は、もう少し優しくなるやろ？」

残酷で理不尽な世界が、優しくなる。
はやては、そう言った。
そして。

「それでも、ファイムくんが罰を受けたいなら、わたしが罰をあげる」

はやてはファイムから手を離し、ファイムを、優しく抱き締めた。

「生きること。忘れないこと。それが罰や。ええか、ファイムくん？」
「……ッ」
「世界中の誰もが許さなくても、わたしはファイムくんを許すよ。だから、生きて」

はやては、ファイムを抱きしめる腕に力を込めた。

「こんなになるまで頑張ってここを守ってきたファイムくんになら、幸せになる権利がある」

幸せになっていい。
ずっと、言って欲しくて。言われたくて。
でも、拒絶してきた言葉。
それを、くれた。

八神はやてという女性が、『許す』と、そう言ってくれた。

「……僕は……」

ファイム・ララウェイは、突きつけられる。
この短い間に、選択を迫られる。

罪人として生き。
罪人として償ってきた。
しかし、償い方を間違え、そして、選択を迫られる。

今までの生き方を貫き通し、ここで果てるか。
それとも、別の答えを出すのか。

「……僕は……」

ファイム・ララウェイの。
――出した答えは。

◇　◇　◇

「……すまねぇなぁ、嬢ちゃん。ここまですっ飛んできてくれたんだろ？」

「いえ……こんなの、見過ごせませんから」

カグラの言葉に応じたのは、白きバリアジャケットを纏う魔導師。
現代の、『エース・オブ・エース』。

「……嬢ちゃん。お前さんも無理する必要はねーからな？」
「大丈夫、わかっています」
そして、高町なのはが空へと上がる。
「いくよ、レイジングハート」
《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》
「エクセリオン……」
高町なのはの真骨頂。一部では『白い悪魔』と呼ばれる砲撃が、収束する。
「バスターッ！！」
――ズドンッ！！！！
凄まじい威力の一撃がガンゲイルに直撃し、その巨体がバランスを失う。そこへフェイト、シグナムが追撃の一撃を叩き込むと、ガンゲイルは仰向けに倒れた。その光景を見、ファイムはヒュウ、と口笛を吹く。
「怪物だねぇ……。全盛期の俺より強いんじゃねー？　まあいい。俺は俺の仕事がまだ残ってる」
キィン、という音と共に、カグラの足元に紡がれるミッドチルダ式の魔法陣。
カグラは通信機を取り出すと、片っ端から魔法で繋いだあらゆる場所へと声を飛ばした。
「あー、あー、聞こえるか？　この緊急事態において指揮を執るカ

グラ・ランバードだ。俺たちは現在、物凄く厄介な状況にある。だが安心しろ。手は打った。しかし、こいつはもう少しだけ時間がかかっちまう」

カグラは、真剣な表情で言葉を紡ぐ。

「だから、それまで時間稼ぎをしてぇんだが、それには手が足りん。そこでだ。……お前さんたちの力を借りたい」

その言葉は軽く紡がれたようで、必死の想いが込められていた。

「上の決定によれば、アルカンシェルを撃つために俺たちは撤退しろとのことなんだが……クソ喰らえだ。俺はそんな結末は認めねぇ」

カグラは、言葉を続ける。

「俺たち時空管理局のすべきことはなんだ？　弱きものを守ることだ。アルカンシェルを撃って地図を書き換えちまったら、それは最早管理局のするこっちゃねぇ。俺たちの目的は敵を潰すことではなく、か弱き市民を『守る』ことだ。確かに相手は強大だ。けどな、関係ねぇんだそんなこたぁよ！！」

カグラは叫んだ。
みなの覚悟と想いを、無駄にせぬために。

「ランクが低い？　関係ねぇよ！！　今ここで踏ん張ってる奴の中に、精々がＡランクの奴がいる！！　魔力がもう限界の奴もいる！！　けど、そんなこたぁ関係ねぇんだ！！　無理だってんならそれでもいい！！　命も懸かる！！　だが、頼む！！　助けてくれ！！　陸も海も空も地上も本局も支部も関係ねぇ！！　この場所が！！

明日からまた多くの笑顔が行き交う場所になるように!!　そうするために!!　頼む!!　手を貸してくれ!!」

カグラは、目撃する。

空を駆ける魔導師が。
大地を走る魔導師が。

明らかに力不足と知りつつ、向かっていく姿を。

「これは『命令』ではなく、『頼み事』だ!!　俺たちは今から、『切り札』の準備完了まで奴の足止めに入る!!　いいか!?　目覚めが悪ぃ!!　死ぬんじゃねぇぞ!!　さっさと終わらせて祝勝会だ!!」

そこでカグラは大きく息を吸い込み、そして叫ぶ。

「てめぇら返事はどうした!!」
『『『応ッ!!!!!!!』』』

――決着は、近い。

◇　◇　◇

本局の会議室は騒然となっていた。

命令違反と取れる、地上本部近くで待機していた魔導師たちによる戦闘参加。これにより、事実上『アルカンシェル』は撃てなくなっ

た。

緊急事態宣言が発令された、今回の事件。管理局の理事たちは、大きなことを忘れていた。

――局員法。

警察と司法、更には軍隊としての側面も持つ管理局は、その命令系統を明確にするためにそんなものが定められている。

そして、その中には緊急事態宣言が発令された際の指揮系統の決定も含まれている。

「ナカジマ三佐！！　貴様理事会を無視する気か！？」

理事の一人が、今回の件でカグラたちに協力している陸士１０８部隊の部隊長、ゲンヤ・ナカジマに怒鳴る。だが、ゲンヤは肩を竦めて応じた。

『しかし、それを聞けばそれこそ局員法に触れ、命令違反になりますが？』

局員法に記載されている一つの事柄。

それは、『緊急事態宣言が発令された場合、現場の最高指揮官に最終的な全ての決定権が委ねられる』というものだった。

今現在、現場で指揮をとっているのはカグラである。彼に従わなければ、むしろゲンヤたちが命令違反になるのだ。

ミゼットは、ふう、と息を吐いた。

本来この法は、上からの指示を待つ余裕がない現場のための法。そ

れを、カグラは利用した。
普段なら障害になることはない局員法。しかし、現場が上に逆らえば、それは障害となる。

何より――

（一時的なものであるとはいえ、今の坊やは私たちよりも決定権が上。罰せられる要素もない）

他の者たちもそうだ。彼らは命令違反などしていない。彼らは『頼み事』を聞いているだけ。そもそも命令を受けていない。

ならば彼らにこちらの命令を出せばいいかといえば、そうもいかない。カグラは片っ端から通信を繋ぎ、彼の言葉はあらゆる場所へと届いた。それを真っ向から否定すれば、世論を敵に回す。

カグラ・ランバードという男は、かつて『エース・オブ・エース』と呼ばれた存在であり、その知名度は計り知れないのだ。

（頭は冷静に、自分に有利な状況を用意……相変わらず、恐ろしい坊やだわ）

ミゼットは、戦場を映すモニターを見る。
そこにあるのは数多の魔導師たちによる戦いであり、そして、管理局のあるべき姿。
地上、海、空。
本局、地上本部、支部。
手を取り合うべきでありながら取り合わなかった者たちの共闘だ。

――滑稽なものである。

理事と呼ばれる、優秀なはずの局員が何人集まっても良くできず、むしろ悪化させていた関係を、たった一人の男がこの時だけではあるが、繋げたというのだから。

ミゼットは、目を凝らし。
結末を見届けるため、モニターを見据えた。

◇　◇　◇

《魔力供給、完了です》
『いつでも撃てます』
『お願いするです、ファイム！！』

リンネと、ファイムとユニゾンした状態のミリアム。そしてはやてとユニゾンしたリィンフォースが、言った。

ユニゾンにより、髪と瞳が綺麗な翡翠色になったファイムは、指を引き金にかける。
はやてはファイムの体を支えるように寄り添い、片手でファイムを抱き締め、片手でファイムの左手に手を添えながら、言葉を紡いだ。

「みんなに、お礼言わなアカンなぁ」
「はい。でも、その前に」

ファイムは敵を見据えながら、穏やかな表情で言葉を紡いだ。

「ありがとう、はやてさん」

心の底からのそれを。
たくさんの言葉をくれた貴女に。
足りないけれど。
こんなものじゃ、弱いけれど。
それでも、伝えたかったから。

そして、ファイムは。
――引き金を、引いた。

――終幕の、音が鳴り響く。

◇　◇　◇

バラバラと、砲身が砕けていく。それと同時にファイムも倒れかけたが、踏みとどまった。

まだ、倒れたくなかったから。

はやては、そんなファイムの手を握り、問う。

「結局、ファイムくんは何を願ったんや？」

わかっているくせに、彼女は言った。

ファイムは、微笑を浮かべる。

「そんなもの、決まっているじゃないですか」

遅すぎたけど。

今更だけど。

それでも――願った。

「“生きたい”」

第六話　ここにいる理由（後書き）

更新が遅くなってすみませんでした？
スランプに陥ったり、バイトで精神的に追いつめられたりと、言い訳にしかなりませんが、色々あってこんな感じになりました。
とりあえず、ここで一区切りです。次回は、敵側について短いものを入れ、第二部へと進みたいですね。
感想とか頂けると、本当に励みになります。よろしくお願いします。

第六・五話　最強の侍、その在り方

ＪＳ事件と呼ばれる事件から、一年。
レジアス・ゲイズ中将の死は、想像以上に管理局の力に影響を与えていた。
そう、辺境の世界の町が一つ滅びたことに対し、対策も打てない程に。

「……」

第９９管理世界、『プラント』。辺境も辺境であるその場所の、小さな町。いや。
かつて、『町だった』場所に、テンリュウ・シンドウはいた。
広がるのは、瓦礫の山。
匂うは、死臭。

「……大型の竜。いや、これは真竜ですか……？　どう思います？　桜花」
《……ん、なに？　朝？》
「既に昼です。……桜花、この惨劇の犯人は誰だと思いますか？」
《寝てたしわかんない》
「……あなたが『あの方』のデバイスでなければ、叩き潰すところです」
《時価三億だよあたし？》
「その程度のお金ならば持っています」
《出たよセレブ》

「それはともかくとして」
《うわぉ。スルーですか》
「……管理局は、何をしているのでしょうか？」
自身のデバイスの言葉を完全スルーし、テンリュウは呟く。桜花は、んー、と唸りつつ、言葉を紡いだ。
《多分あれじゃない？　ほら、ちょっと前の事件で偉い人が死んだから、動けないんじゃないの？》
「レジアス・ゲイズ中将ですね。なるほど、そうかもしれません」
《あの変態が捕まったのはいーけど、それ以上に世の中は大変だ》
「大きな組織であればあるほど、一度亀裂が走れば一気にそれは大きくなります。レジアス・ゲイズ中将はミッド地上の要とでも言うべき存在でした。大きなものを失えば、その傷は他へと伝染し、深くなっていきます」
《……それってさ、自分のこと？》
桜花の言葉。それを、テンリュウは無視する。
失ったもの。
無くしたもの。
それはあまりにも重く、深い傷を刻んできた。
だから。
だからこそ、ここにきたのだ。
「……ここには何も無さそうです。別の場所へ参りましょう」
《不毛とか思わないの？》
「なにをもって不毛とするのか、わかりません」

《あっそ》

ならいいよ。そう言って、桜花はスリープモードに入った。テンリュウは息を吐くと、歩き出そうとする。その瞬間。

「そこのあんた!!　魔導師でしょ!?」

そんな声が聞こえ、テンリュウは周囲を見回した。

そして見つけたのは、一人の女性。

その女性は、必死の様子でテンリュウを見つめながら、言葉を紡ぐ。

「お願い!!　私に魔法を教えて!!」

「……」

テンリュウは、無言。そのまま立ち去ろうとする。それを、慌てて女性が止めた。

「待ってよ!!　ならいい!!　デバイスを頂戴!!」

「これを、ですか?」

テンリュウが取り出したのは、待機状態の桜花だ。女性は頷く。

だが、テンリュウは首を左右に振った。

「これは大切なものでして……。しかし、そうですね」

キィン、という音と共に魔法陣が現れ、そこから一本の刀が姿を現した。刀身が紅色をした、銘を『血桜』という刀である。

「これを振ることができたなら、差し上げましょう。この刀は名を『血桜』といい、そこらのデバイスよりは強力な力を有しています」
「……わかったわ」
女性は頷き、テンリュウが手渡した血桜を、握り締め。

――一時間が、経った。

カシャン、という音と共に、血桜が地面に落ちた。テンリュウは女性に近付き、血桜を拾う。
「答えは、出たようですね」
「ッ、ズルいわ!!　こんなの振れるわけがないじゃない!!」
「……そもそも、何故私に魔導を教えろなどと仰ったのですか？」
テンリュウの問いかけ。それに対し、女性は俯き、服を強く握り締めると、絞り出すような声で言った。
「……復讐よ……父さんも母さんも、村のみんなも、あいつに殺された……!!　私は……!!」
「復讐、ですか。ならば、尚更ですよ」
血桜を振りながら、テンリュウは言う。
「復讐とは、この刀よりも重いものを持つことです。この刀一つ振れないようでは、成し遂げることなど不可能です」
「……ッ、それでも、私は……！」

尚も食い下がろうとする女性。しかし、不意にその先を遮る声が上がった。

「お姉ちゃん！」

「リリア？」

現れたのは、まだ5、6歳くらいの少女だった。テンリュウは、ふう、と息を吐く。

「貴女は復讐などで手を汚すべきではありませんよ。貴女の側には、守るべき存在がいるじゃないですか」

「……私は」

「近くの街まで送りましょう。すいません。道案内をお願いできますか？」

俯く女性にそう言い、テンリュウは微笑む。

女性は逡巡の後、テンリュウを案内し始めた。

――立ち去る直前、テンリュウの瞳は滅びた町を映していた。

◇　◇　◇

交易都市『サーマ』。『プラント』の田舎にある交易都市で、地方の特産品などが集まる賑やかな街だ。

その街の一角、小さな宿屋と酒場が一緒になった場所に、テンリュウはいた。

酒と軽食を食べながら、リリアという少女と話をしている。

「では、リリアと姉君の……リースは、ここで暮らしているのですね？」

「うん。お姉ちゃん、ここで働いてるから、あたしは邪魔にならないようにしてるの」

「……偉いですね」

「えへへ」

テンリュウが頭を撫でてやると、リリアは嬉しそうに目を細めた。

テンリュウは、リリアの頭を撫でながら、視線を周囲に飛ばす。店内には、忙しそうに動き回るリリアの姉、リースの姿があった。

聞けばこの姉妹は一週間前、こちらに買い出しに来ていたため、あの惨劇に巻き込まれずに済んだらしい。

突然降り注いだ不幸。二人はあの町唯一の生き残りとして暮らしている。

強い、姉妹だ。

突然の辛い現実から逃げずに、生きている。

テンリュウは微笑み、呟くように言った。

「……どうにもならないと知りつつ無様に抗い続ける私とは、大違いです」

「え？」

「なんでもありませんよ。……リリア、何か食べたいものはありますか？」

「えっ？　でも……」

「案内して頂いたお礼です。お好きなのをどうぞ」
「ホントに？」
「遠慮するものではありませんよ」
ふふっ、と微笑を浮かべて言うテンリュウ。リリアは、うん、と頷いた。
「ありがとう！！　テンリュウお姉ちゃん！！」
「どういたしまして」
頷き、そう返した瞬間。
「……テンリュウ？」
呟きが聞こえた。テンリュウは反射的にそちらを見、そして、目を見開く。
「あなたは……！？」
「え、マジでテンリュウの嬢ちゃん？　うわー！！　何年ぶりや？　ひっさびさやなぁ！！」
独特の話し方をしながらこちらへ歩み寄ってきたのは、２０代も半ばという雰囲気の男だ。その男は一切の遠慮もなくテンリュウたちの机に座ると、懐かしそうに言葉を紡ぐ。
「１０年？　それ以上か？　ごっつ別嬪さんになったなぁ」
「……そちらは、お変わりないようで」
「なはは、こんな性格破綻者がそう簡単に変わるかいな」
笑いながら男は言い、ん、と驚いた様子でいるリリアを見た。それ

を見て、慌てて男は謝る。

「ありゃりゃ、すまんな嬢ちゃん。驚かせてもーたか？」

「え、えっと……」

「すみませんね、リリア。彼はホムラといいまして、私の古い友人です。胡散臭い部分が多々ありますが、悪人ではありませんよ」

「ちょい待ち。なんや胡散臭いて？」

「あなたを見て警戒しない人はいませんよ」

グラスの酒を煽りつつ、テンリュウは言い放つ。厳しいなぁ、とホムラは肩を竦め、そして、テンリュウとリリアを見た。

そして、はぁ、と息を吐く。

それを見たテンリュウは、何ですか、と問うた。すると、いやな、とホムラは言葉を紡ぐ。

「いやな、そらわしも年取るなー思てなー。ガキやガキや思うてたのに、子供までこさえて……って、ちょい待ち。嬢ちゃんいくつや」

「ご、5歳です」

「……てことは……ちょいテンリュウ！！　自分いくつで嬢ちゃん産ん――ゴウッ！？」

ストレートがクリーンヒット。ホムラはひっくり返る。テンリュウは呆れた様子で言葉を紡いだ。

「誰が娘ですか。彼女は現地民ですよ。道案内のお礼に、こうして食事をご馳走しているんです。彼女の姉君にも頼まれましたし」

「あだだ……あー、なんやそやったんか。てっきりいい人でもできたんかと。ほら、自分あの人にべったりやったやん？」

「恋人の類ならいませんよ。今までずっと」
「えっ、嬢ちゃんって確かもうすぐ２０やんな？　それやのにしょ――」
――ドゴン！！
一閃、かかと落としが綺麗に入り、ホムラは床で悶絶する。テンリュウは、全く、と息を吐いた。
「５歳の子供の前で、何を言うつもりですか貴方は？」
「あだだ……あー、容赦なさすぎちゃうか？」
「手加減の必要がないでしょう？……ああ、リリア。すみません。お気になさらず」
テンリュウは、いきなりの状況に若干引いているリリアに、フォローの言葉を紡ぐ。リリアは、コクコクと頷いた。
「……それにしても」
ふと、テンリュウは周囲を見回す。
「どことなく、暗いですね……」
「そらま、せやろな」
テンリュウの言葉に、ホムラはつまらなさそうに頷く。
「こっからそう遠くない場所にある町が一つ消されたんや。死者も仰山出とる。楽しむ気になんて――」
「――――ッ！！　そこまでです！！」

ホムラの言葉を、テンリュウが慌てて遮る。なんや、とホムラは聞こうとしたが、目に入った光景に、口を噤んだ。

「……ッ、ふえぇ……」

ホムラとテンリュウの目の前。そこで、リリアが必死に涙を堪えていた。

……ホムラの言葉で、思い出したのだろう。
自らが住んでいた場所が、無くなってしまったことに。

小さくとも、それくらいはわかる年頃だ。

「リリア！！」

リースがリリアの様子に気付き、駆け寄ろうとする。だが。

「……ふぇ？」

リースが駆け寄る前に、テンリュウが無言でリリアを抱き締めていた。そのまま、テンリュウは言葉を紡ぐ。

「泣きなさい。泣きたい時に泣かなければ、笑えなくなってしまいます。私が側にいますから」

「……ッ、ふっ、ふえぇぇぇぇっっ！！」

リリアはテンリュウに抱き付き、思い切り泣き始める。きっと、ずっと我慢していたのだろう。

こんな小さな子供が、帰る場所を失って、泣きたくないわけがない。

辛くないわけがない。笑える……わけがない。

聡い子なのだろう。お姉ちゃんに迷惑をかけたくなかったのかもしれない。

だけど。

泣くことぐらいは、許されるはずだ。

「……すまん」

目を伏せ、ホムラが呟いた。

テンリュウは、優しくリリアの涙を受け止めていた。

◇　◇　◇

「……寝てしまいましたね」

「ごめんなさい……」

「貴女が謝ることではありませんよ」

頭を下げてきたリースに苦笑しつつそう返すテンリュウ。彼女の膝には、気持ちよさそうに眠るリリアの姿があった。

リースは、今度は礼を言う。

「ありがとう……私、気付けなかった……」

「出せなかったのでしょう。聡い子のようですし。……貴方も、無

理はしないでくださいね」

テンリュウは、リースに微笑みかける。

「この子を守ることが貴女のすべきことで、同時に、貴女も幸せにならなければなりません。……泣くだけ泣いたなら、自分にできることを探すんです。そうすればきっと、笑えるはずですよ」

「……ありがとう」

リースはそう言うと、仕事に戻っていった。それを見届け、ホムラは言葉を紡ぐ。

「なるほどね……ええこと言うやないか」

「私の言葉ではありません。以前、偶然巻き込まれた事件でとある青年が言っていたんですよ」

「なんにせよ、前向きではある。……必要やと思うで、嬢ちゃんたちにはな」

「私もそう思います」

テンリュウは頷く。

身体の傷であるならば、時が癒やしてくれる。だが、心の傷は中々癒えることはない。

下手をすれば、一生背負うことになる。

ならば。

背負い、抱えて生きるしかないのだ。

誰だって、そうするしかない。

「……実はな。今日の朝、討伐隊がこの街を出発したんや」
「討伐隊……まさか」
「そのまさかや。管理局は何もしてくれへん。けど、身近に危機は迫っとる。なら、自分たちで何とかするしかあらへん、ってな」
酒を煽りながら、ホムラは言う。
「相手は真竜。『ガンゲイル』って呼ばれとる奴でな。当然、その力は怪物のそれや」
「……討伐隊の錬度は？」
「人数は３０人、平均でＢ～Ｃランクってとこかな？　リーダーに一人Ａ＋ぐらいのがおるみたいやけど」
「……それは、あまりにも……」
「せやな、無謀や」
真竜。人よりも遥かに強大な力を持つ絶対の存在。その力故に一部の管理世界では『神』とも呼称され、同時に神聖な存在として管理局法において害なすことは禁止されている。
「……しかし、その者たちを無謀と評することはできません」
「全くやな。ここの人らは、生きようとしとるだけ。それは愚かでもなんでもない」
「……真竜、ガンゲイル」
テンリュウは呟く。
真竜。自然の化身と一説では語られるその存在は、ある種精霊と呼ばれるものに近い。
ただ現時点でわかっているのは、抗うという行為そのものが無駄ということのみ。

それでも、この世界の人々は抗う。
不可能と知りつつ。
そう、決めたのだろう。
だが――
「大変だ！！」
その決意は、脆くも崩れ去る。
「討伐隊が全滅した！！　奴がここに来るまで時間がない！！」
店内に飛び込んできた男はそうまくし立てると、すぐさま走り去っていった。本当に、焦っているのだろう。
「ふぇ……」
男の大声で目を覚ましたリリアが、泣きそうな目でテンリュウを見た。テンリュウは、微笑みながらリリアの頭を撫でる。
「大丈夫ですよ」
テンリュウは、断言する。
騒がしくなった店内に、不思議とその声は響き渡った。
「おいあんた。何を根拠に……」
「……」
テンリュウに詰め寄ってきた男の言葉が途切れる。ホムラが無言で

手を出し、押さえたからだ。

ホムラは、真剣な表情でテンリュウに問いかける。

「得なんて、なんもないで？」

「力持つ者が守らず、誰が守るのですか？　それに、理由ならあります」

テンリュウはそう言うと、リリアを見た。ホムラは、さよか、と頷く。

「わしも出たほうがええか？　金次第で考えたるで？」

「……ならば、これを」

テンリュウは懐から小さな巾着を取り出すと、ホムラへと投げ渡した。中身を見たホムラは、目を見開く。

「おいおい、自分これはいくらなんでも……」

入っていたのは、金貨。

管理局の一般的な職員が、一年かけて稼ぐレベルの額が入っていた。

「前金です。後半分は、終わってから支払います」

「オーケーや。……ご依頼は？」

「この都市の住民全員の避難をお願いします」

「そんだけか？」

「……敗れるつもりはありませんが、万一私が敗れたとき、後始末を」

「りょーかい。……武運を」

「互いに」

テンリュウは頷き、立ち上がる。その瞳は、リリアに向けていた優しいものではなく、戦場に降り立つ戦士のものだった。

その後ろ姿を見送ってから、ホムラはパンパンと手を叩く。

「ほれ、さっさと避難開始や。時間ないで～」
「ちょっ、あんた!!　正気か!?」
「何がやねん」

気を取り直した男の言葉に、肩を竦めるホムラ。男は、苛立たしげに怒鳴った。

「無茶だ!!　一人で往かせる気か!?」
「それが嬢ちゃんの望んだことや」
「ふざけるな!!　おいあんた!!　早まる――」
「まあ、待ちぃや」

ホムラは男の肩を掴みながら、テンリュウを見る。

「自分、世界最強の魔導師て誰やと思う?」
「なんだいきなり!?」
「えーからえーから。答えてーな」
「……そりゃあ、管理局の……」
「『エース・オブ・エース』か。うん、ある意味正解やね」

ゆりかごの英雄。『エース・オブ・エース』高町なのは。その力は確かに、最強と呼ぶに相応しいものだろう。

だが、世界には。

もう一人、最強と呼ぶに相応しい存在がいる。

「『剣聖』、『ソードマスター』、『辺境の英雄』、『覇者』、『最強の侍』……呼び名はいくらでもある。自分ら運がええなぁ。滅多に見られるもんちゃうで？」

ホムラの視線の先には、袴を纏いし侍がいる。

「もう一つの『最強』、その全力の戦いなんてな」

……その者、血塗られた刃を携えし侍。

最強に最も近い者。

名を。

――神道天龍。

◇　◇　◇

夜の荒野。『サーマ』より少し離れた場所に、テンリュウは立っていた。

夕闇の向こう。黒き世界の奥。

そこから、凄まじい力を感じる。

「……桜花。起きていますね？」

《うん。起きてるよ》
「ならばよかった。……桜花、これより相対する真竜ガンゲイルの情報を少しでも多く集めてください」
敵を知り、己を知れば百戦危うからず――情報は武器であり、盾だ。
桜花は、んー、と唸る。
《真竜の情報なんて、無限書庫にしかないと思うんだけどなぁ》
「ならば、無限書庫へハッキングを」
《……あの司書長相手にするの？　だったら、こっちに気を払えなくなっちゃうんだけど》
「構いません。なんなら、バリアジャケットを解除して頂いても結構」
紅の刀『血桜』を召喚し、握り締めながら、テンリュウは言う。同時に、薙刀と袴が消えた。
《相手は真竜だよ？　死ぬ気？》
「そう思うなら、急いでください」
テンリュウは刀を抜き、構える。
そして。
「あぎギギぃィぃアアカガあぁァァグルるえあアアァァぁッッっ！！」
断末魔のような叫び声が、大気を震わせた。ビリビリと、テンリュウの体が振動で揺れる。

闇の中に、紅の光が二つ。
続いて、赤黒い体躯が姿を現す。

「……」

全長は、百メートル単位。その体躯の前では、テンリュウなど豆粒だ。

大自然そのものを相手に、テンリュウは退かない。退けるわけがない。

胸元の、小さな御守りが揺れた。
ここにこうして立つ前に、リリアから貰ったものだ。

「我が背には、決して失えぬものがあります。故に身勝手ではありますが、ここから先は通しません」

双眸には、意志を。

手には、刃を。

心には、折れぬ強さを。

――想いは、強く。

◇　◇　◇

「……これはもう、何というか……」

『プラント』には魔法生物が数多く生息しており、大量発生でもすれば都市を上げて討伐隊を組むことさえある。

都市とはいえ、辺境にある『サーマ』は、数年に一度起こる魔法生物の大量発生に、幾度となく頭を悩ませてきた。

そして、今。

真竜ガンゲイルが現れると思われる方角の逆。街の南門から見える光景に、ホムラは頬をひきつらせていた。

「真竜から逃げようとしとる魔法生物の群……突破すんのは至難の技やな」

すぐ側にいるというわけではない。ないが、確かにそいつらはいた。

普段は地中で生活しているのであろう魔法生物たちまでもが這い出し、一つの大きなうねりとなって南へと向かう光景。

その通った跡には、死体まで転がっている。

「……」

チラリと、ホムラは後ろを振り返った。そこにいるのは、戦う力など持たない住民たちだ。

ホムラは、はぁ、とため息を吐いた。

「こらアカンわ。どうしようもあらへん。……待つしかないかねぇ？」
「おいアンタ！！　そこをどけ！！」
「ん～？」

怒鳴り声を聞き、ホムラは振り返る。その先にいるのは、殺気立った住民たち。彼らは手に持てるだけの荷物を持ち、外に出ようとしていた。しかし、ホムラがそれを止めているのだ。

住民たちの先頭に立つ男が、ホムラに詰め寄る。

「あんた俺たちを殺す気か！？　門を開けろ！！」
「そう言われてもなぁ。外の方が危険やで？」
「状況わかってんのか！？　ここは直に吹き飛ぶんだよ！！」
「防壁もあんのにか？」
「んなもん意味あるか！！」
「……ま、何にせよ外には出さんよ」

肩を竦めながら、ホムラは言った。

「普段なら自殺しようとしとる阿呆なんざどうでもええんやけどな。自分ら守んのがわしの仕事や。報酬分くらいは働かんとなぁ」
「埒が明かねぇ……！！　テメェ、いい加減にしやがれ！！」
「そうだ！！　さっさとどけ！！」
「俺たちは逃げんだよ！！」

口々に言い出す住民たち。ホムラは大きくため息を吐くと、ふぅ、と息を吐いた。

――空気が、変わる。

「いい加減にすんのは、自分らや」

口調は変わっていない。なのに、纏う雰囲気が今までと違いすぎて、誰もが知らず口を閉じていた。

「状況がわかってない？　アホなこと抜かすな。こちとらこれで飯食うとるんや。……ほな聞くけどな。この中に、万単位の暴走する魔法生物の群をどうにかできる奴、おるか？」

魔法生物――その生態は多種多様だが、総じて魔力を持つが故に、一般人では太刀打ちできない。魔導師でさえもやられるようなものまでいるのだから、その力のほどは相当なものだ。

「……挽き肉になりたいんやったら止めへんけどな。それに、逃げ場なんてあらへん。世界の果てにでも行く気か？」

「だが……！」

「信じろや」

尚も言い募ろうとする住民に、ホムラは言った。

「わしのことはええ。けど、テンリュウのことは信じろや。得にもならず、その気んなったら自分一人で逃げられるのに、命懸けで戦っとる奴くらいはな」

ホムラは言い切ると、不安そうな表情でこちらを見ていたリリアに歩み寄り、頭を撫でた。

「お姉ちゃんは強い。信じたってな？」

「……うん！！」

リリアが頷く。それと同時。

ガンゲイルの叫びが、大気を引き裂いた。

◇　◇　◇

「ぎァァっッ！？」

「あなたの相手は私ですよ。……永き時の中で堕ちた竜よ」

一閃、紅の一撃が入り、叫び声を上げるガンゲイルに、テンリュウが静かに言った。

「最早正気を失いし姿とはいえ、気高き魂の具現。名乗りを上げましょう」

ガンゲイルの瞳がテンリュウを捉える。それは、テンリュウを『障害』と、『敵』とみなした証であった。

「我が名はテンリュウ・シンドウ。我が誇りと義心より、ここに立ちます」

ガンゲイルが吠え。

テンリュウは、静かに応じる。

「――推して参る」

――ガギギン！！！！！！

凄まじい轟音が響き渡った。とんでもない速度で迫ってきたガンゲイルの尾を、テンリュウが弾いた音だ。
だが、そこでガンゲイルの攻撃は終わらない。突如尾が割れ、無数の触手に形を変えると、テンリュウに襲いかかる。

――ザギギギガギギィンガガガン！！！！！！

音速に近い速度で四方から襲いかかってくる触手。テンリュウは、それを全て迎え撃つ。
しかもそれだけに留まらず、一瞬の隙を見つけると、懐に入り込み、刀を振るった。

――ザギィィン！！

だが、テンリュウの刃は宙で止まる。

（魔法障壁……！）

――障壁が、彼女の刃を阻んでいた。

相手は最強の存在、真竜だ。障壁の展開ぐらいは予測していた。
しかし、堅い。
刃が――通らぬ程に。

――ゴンッッ！！

轟音。テンリュウが、吹き飛ばされる。

ガンゲイルの拳が、テンリュウを捉えていた。

◇　◇　◇

管理局本局無限書庫。
数多の管理世界に存在する情報の全てを備え、同時に管理する場所。
『管理局で働きたくない場所ランキング』堂々のナンバーワンを、業務が始まってからの１１年間、ずっと守り続けてきた場所である。
その無限書庫は、ＪＳ事件で管理局が負ったあまりにも深い傷をカバーするために、普段以上の働きをしていた。

「ユーノさん」
「ん？　どうしたの？」

呼ばれ、無限書庫の司書長であるユーノが振り向く。笑顔であるが、疲労の色が濃いのは丸わかりだ。
もっとも、声をかけた側の青年、ファイム・ララウェイもそれは同様で、というより、無限書庫でまともな健康状態を維持している者はいなかった。
しかしそれでも、ユーノ以上に疲労している者はいない。
ファイムは、少し強い口調で言った。
「いい加減休んでください。もう、丸三日休んでないでしょう？」

「大丈夫。まだやれるよ」
「大丈夫じゃないから言っているんです」
ファイムは、睨むようにユーノを見た。
「司書長、司書長が倒れたら、無限書庫は終わりです。お願いですから、休んでください」
「……けれど」
「これは司書全員の総意です」
ファイムは言い切る。ユーノが周囲を見回すと、全員が頷いていた。
ユーノは苦笑。
「ごめんね？」
「謝るのは、むしろこっちです。僕たちも、ユーノさんぐらいに仕事ができれば……」
「気にすることじゃないよ。みんなには、ホントに感謝してるから」
じゃあ。ユーノはそう言うと、仮眠室へと消えた。ファイムは、ふぅ、と息を吐く。
「大変だねぇ」
その背に声がかかる。ファイムが振り返ると、そこには赤髪の少女、アルフがいた。
「アルフさん」
「全くユーノは……。言われるまで、休もうとしないんだから」
「本当に、そうですね。……そうしなければならないという現状もありますが」

「……本人も、責任みたいなものを感じてるからねぇ」

アルフは、ため息を吐きながら言った。責任？　とファイムは首を傾げる。

「どういうことですか？」

「……聞いたことあるかもしれないけどさ。あたしとユーノは元々、前線にいたんだ」

「伺っています」

「あたしはまあ、フェイトはもう、あたしに頼る必要がないから、って思ったからなんだけど……ユーノは、自分に見切りをつけたんだよね」

「見切り、ですか？」

「そう、見切り。……自分ではなのはを守れない。なのはが墜ちた時、泣きながら言っててさ。その時だよ。ユーノがどうして無限書庫勤務を受け入れたのか、その理由を知ったのは」

「それは、でも。ユーノさんは空戦Ａランクじゃ」

「なのはたちは、オーバーＳさ。しかもなのはは今や管理局の『エース・オブ・エース』。……『高町なのはの敗北は、管理局の敗北』なんて言われるまでになった。それも手伝ってるんだろうね」

「……」

ファイムは、自身の掌。手袋で覆われている右手を見た。

ユーノ・スクライアは、Ａランクでは力不足と自らに見切りをつけた。

ならば、自分は？

遥か以前より見切りをつけながら、今も前線に立とうとする自分は、

どうなのだろうか。

「まあ、だからだろうね。ユーノは自分の気持ちを押し殺してる。あの二人は、見てて悲しいよ。通じ合っているのに、すれ違ってる」

「……」

「まあ、それは当人同士の問題さ。……さあ、ファイム。ユーノが休んでる間、頑張るよ」

「はい」

ファイムは頷く。

そして、二人が仕事に入ろうとしたとき。

「ッ、緊急事態発生!!　ハッキングを受けています!!」

一人の司書が叫んだ。二人は弾かれたようにそちらを見、すぐさま飛来する。

「ハッキングだって……!?　管理局のシステムはどうなってるんだい!?」

「全く反応していません……スクライア司書長が開発したシステムがなければ、気付きさえしなかったかもしれません」

「流石ユーノ司書長……と言いたいところですが、そんな余裕はありませんね。リンネ、手伝ってくれる?」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

ファイムのデバイス、リンネクロウズを起動する。

それと同時に、アルフがファイムに聞いた。

「……ユーノを起こしたほうがいいかい？」
「いえ。大丈夫です」
ファイムは、断言する。
「休める時に休んで頂かなければ、管理局が崩壊します」
ユーノ・スクライア司書長。
その名は最早、管理局になくてはならないものになっている。
無限書庫にて情報が揃わなければ、部隊は出撃できない。『情報』というものの重要さは、確かにある。
事実、無限書庫が機能するようになり、管理局の魔導師、その生存率は跳ね上がった。
そして、その代わりに、ユーノの負担が増えていったのだ。
ユーノ・スクライアを失えば、管理局は最早機能を停止せざるを得ない程、彼の存在は重要だというのに。
だから。
だからこそ――
「何とかします。してみせます」
「万が一の時は、どうするんだい？」
「万が一は、起こりません。起こさせません。ですが、もし起こったなら」
ファイムは、自身の首に手刀を当てる。
「こうするまでです」

そして、ファイムは息を吸い、魔法陣を展開する。
敵は姿を見せない隠密の存在。一瞬の隙が、命取りになる。

「解析開始。リンネ、敵の情報をわかるだけお願い」
《……おそらくはインテリジェントデバイスです。しかし、演算能力が圧倒的です。おそらく……》
「……費用を考えていないワンオフ品。なるほど、厄介だね」

ファイムは頷く。デバイスというのは大体が量産品で、専用のものでも相場が決まっているのが普通だ。

かの『エース・オブ・エース』のデバイスも、今でこそ改良を重ねられ、圧倒的なスペックを誇るが、当初は『魔導師の杖』と呼ばれるレベルのスペックだったらしい。

無論、相場が決まっているのにも理由はある。一つは調整だ。
確かに専用のものはスペックが高いが、それ故に複雑で、調整が難しい。また、スペックが高いというのは扱い辛いというのと同義でもあるため、そもそも専用のデバイスというものを必要としない魔導師も多い。

だが、『エース・オブ・エース』や『雷光の死神』、『最後の夜天の主』のように、ワンオフ、それも採算度外視のものでなければならないという魔導師もおり、専用に改良された、あるいは生み出されたデバイスは、文字通りの規格外デバイスとなる。

ちなみにファイムのデバイスもワンオフであるが、初期化されたジャンク品を組み上げたものであるため、性能は量産品より若干上程

度。

そして、今無限書庫のデータベース――整理が済み、データ化できたものを記録している場所にハッキングしてきているデバイスは、おそらくワンオフ品。

それも、規格外のそれだ。

「リンネ、どこまで侵入されてる？」

《閲覧制限エリアに侵入されました。ファイアウォール展開します》

「任せたよ。……補足開始。相手の情報を抜くよ」

相手のインテリジェントデバイスのデータと、位置情報を抜く。それが、ファイムの目的だ。

無限書庫への無断進入は、問答無用で御用である。整理されていない情報の中には、それこそ世界を滅ぼすようなものまであるのだから、当然だが。

《ファイアウォール突破されました！！》

「大丈夫！！　狙い通り！！」

リンネの言葉に、ファイムはそう応じると、展開した魔法陣の上で指を踊らせた。

まるでピアノでも演奏するかのように鮮やかな動きは、確実に結果を残す。

「……」

《補足、完了しました》

リンネが、結果を告げる。

相手のＡＩを補足し、使用者の情報を引き抜く。更に、回線を封鎖することにより相手のＡＩを無限書庫データベースに封じ込めた。

「……聞こえますか？」

ファイムは、ハッキングの犯人へと語りかけた。

◇　◇　◇

「……ッ、桜花？　聞こえていますか、桜花？」

頭部より滴り落ちる血を拭いながら、テンリュウは自身のデバイスへと問いかけた。

だが、桜花は答えない。テンリュウは、こちらを見据える真竜を睨んだ。

凄まじい一撃だった。しかもあれは力を込めた拳。それだけであの威力。エース級の魔導師であっても、一撃で沈められるであろう一撃。

絶対的な、強さそのもの。

「……だから、何だというのです」

テンリュウは血桜を握り締め、吐き捨てるように言った。

「私がやらねば、誰がやるというのですか」

もう、嫌だった。

自らが知る者が、己の力至らぬ故に死を迎えるのを見るのは。

僅かな、刹那の時を過ごしただけ。

本来なら、出会うことさえなかったはず。

出会わなければ、戦わなかったろう。

出会わなければ、滅びを黙って見ていただろう。

所詮、顔も知らぬ他人。興味を持つ道理もない。

たが――出会ってしまった。

懸命に生きる姉妹に。

復讐のためと、自ら手を汚す覚悟を決めていた少女に。

涙を流すことさえ忘れてしまっていた少女に。

だから、退けない。

退けるわけがない。

退いて……たまるか。

『聞こえますか?』

声が届いたのは、そんな時だった。テンリュウは、声を発する自ら

のデバイスを見る。

『こちらは管理局無限書庫司書です。あなたの行為は犯罪です。もし自首するならば、貴方には弁明の権利が――』

聞こえてくるその言葉に、テンリュウは心の片隅で思った。

――ああ、桜花は失敗したのだと。

そして、それとは別に。

心の奥底より沸き上がるのは、怒り。

「……何が、管理局」

『何？』

テンリュウの呟きに、相手が反応した。テンリュウは魔法陣を展開しながら、思いのままに言葉を吐いた。

「何が、法の番人！！　何が、秩序！！　何が世界の守護者！！　安全圏から見つめるだけのあなたたちに、何が守れるというのです！？」

普段、テンリュウは感情をここまで露わにすることはない。

だが、理不尽な言葉と。

自身に蓄積された想いと。

純粋な願いが、彼女の本音を吐き出させた。

「その閉じられた目を開き、世界を見据えなさい！！　現実を！！　事実を！！　真実を！！　その目で！！　その身で体感しなさい

！！　あなたたちが何もしないから、私がこうしているのです！！」

相手は、何も言わない。

テンリュウは、言葉を続ける。

「世界を守るなどと言って！！　何も守れていないではありませんか！！　あなたたちが何もしないから、だからこの世界の人たちは！！　命を懸けて！！　その果てに敗れたのです！！　だから私が立っているのです！！　それを！！　何も知らぬ身で邪魔をするあなたたちは何なのです！？」

圧倒的な力を前に、折れかけていたテンリュウの心は、悲鳴を上げる。

ただでさえ、大切なものを失い、心が砕けそうだったのだ。

心はすでに、悲鳴を上げていた。

「そもそもこうして私がここに立っていることがおかしいのです！！　何故ですか！？　この世界の人々が、何をしたというのです！？　何故私などが立たねばならぬのですか！？　あなたたちはヒーローなのでしょう！？　正義なのでしょう！？　それが何故、守るべきものを守らず、この世界を見捨てるのです！？」

真竜、ガンゲイル。

圧倒的な力を持つ、自然の具現が、力を集中する。

そして、灼熱の閃光が、放たれた。

◇　◇　◇

街で最も広い、中心部にある建物。街の政治を行うその建物の眼前に、街の人々は集まっていた。

この街は交易で発展した場所である。運搬手段が発達したとはいえ、今もなお、各地の特産品が集まる祭が開催される。

その開催される場所こそが、人々が今集まっている広場であった。

しかしやはりというべきか、人々に笑顔はなく、あるのは恐怖のみ。

そしてその中には、あの姉妹もいた。

「……リリア」

リースは、自らの妹を抱き締める。安心させなければならない。そう思いながら、できなかった。

ガンゲイルの恐怖が、染み付いていた。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

しかし、姉と同じ、あるいはそれ以上の恐怖を感じているはずのリリアは、そう言った。

世界に、光が走る。

街の外。そこから、光が溢れ出す。

それは希望の紅き光ではなく。
絶望の、竜の光。

「ああ……」
「おしまいだ……」

口々に、人々は言い、目を閉じる。

テンリュウはやはり、敗れたと決めつけ。
俯き、未来を諦める。

リースも俯き、目を閉じたその中で。
リリアだけが、絶望の光を見据えていた。

「頑張ってる！！」

リリアが、叫んだ。

同時、絶望の閃光が街を襲わんと放たれる。
街を一つ吹き飛ばす程の威力を秘めたその一撃は。

しかし。
街を、襲わない。

「え……？」

リースが、呆けた声を上げた。見れば、紅の障壁が、街を守っていた。

紅き魔力光。リースには、見覚えがあった。

テンリュウの、魔力だ。

「お姉ちゃんが、頑張ってくれてる！！」

リリアが叫ぶ。あまりにも小さく、弱いはずの少女の叫びは、しかし、この場の誰よりも強かった。

「頑張れお姉ちゃん！！」

届かぬことは承知の上。しかし、リリアは叫ぶ。リースはリリアを抱き締めながら、ぐっ、と拳を握り締めた。

「お願い！！　頑張って！！」

強き二人の姉妹の叫び。

意味なきはずのそれは、周囲へと伝播していく。

「そうだ！！　頑張ってくれ！！」

「頼む！！　あんただけが頼りだ！！」

「頑張れ！！」

いつしか、俯く者はいなくなっていた。

届かぬ想いは、それでも届く。

信じたならば、どこまでも。

「私たちに、未来を見させて！！」

◇　◇　◇

「ッ、アアァァッ！！」

テンリュウは、叫んだ。テンリュウが持つ『守り』の魔法、その中で最高位に位置する魔法、『夢幻天声』。全力展開のそれは、しかし、僅かに出力不足。

原因はわかっている。桜花だ。デバイスなしでもテンリュウは魔法を使える。だが、ギリギリのところで、デバイスなしというデメリットが露出している。

（このままでは……！）

抜かれる。そう思いながら、しかし、テンリュウにはどうにもできない。

ただ、全てを懸けて抗うのみ。

「弱音を、吐くな！！」

テンリュウは、自らに言い聞かせる。

「私だけなんだ！！　あの子の笑顔を守れるのは！！　ここにいる私だけなんだ！！」

究極的なところ、テンリュウにとっては街などどうでも良かった。

彼女が戦うのは、あの姉妹のため。

自分よりも遥かに強い姉妹に、生きていて欲しいから。

ふと、テンリュウは思った。

どうして、ここまで肩入れするのかと。
しかし、すぐに愚問と切り捨てる。何故なら。
――死なせたくない。
理由など、そんなものだから。
「ッ、ううっ!?」
押され始める。そもそもの地力が違うのだ。ある意味、当然である。
ここまでなのか――テンリュウの脳裏に、絶望が過ぎった瞬間。
《Ｓｅｔ　ｕｐ》
起動の音が聞こえた。同時に、テンリュウの体が光に包まれる。
袴と、薙刀。桜花が、起動していた。
《お待たせ!!　さあ、反撃開始だよ!!》
「桜花――」
《説明は後!!　とにかく今は、押し返す!!》
桜花が叫び、テンリュウも気を引き締めた。
その結果が現れるのは、すぐだ。
「おおおおっっっ!!」

テンリュウが叫び、ガンゲイルの一撃は四散した。
防ぎ――切ったのだ。
「桜花、どういうことで？」
《向こうの人が話わかる人でね。『緊急事態と判断します』って言って、解放してくれたの》
「まさか」
早口に告げられた言葉に、テンリュウは驚きを覚える。それは、まずありえないことだろう。
それについて桜花は簡潔に、こう答えた。
《『全て僕の独断です。何もなかった。それだけです』って、短時間に片っ端から情報くれながら言ってたけど》
「なるほど……そうですか」
テンリュウは、ガンゲイルを見据えた。何者かは知らないが、感謝をする。
この怪物を止める希望が、見えてきた。
テンリュウは、薙刀を右手で。刀を左手で握ると、大きく息を吐き、呟いた。
「不思議ですね。胸が温かい」
自らの背中に、見えない力が宿っているような、そんな気持ちになる。

「桜花。あなたのことです。対策は、あるのでしょう？」
《当然。……胸にあるコアを打ち抜けば、一時的に活動停止にさせられるよ。後は、『あれ』で封印すればなんとかなるかも》
「承知」
《でも……》

頷いたテンリュウにしかし、桜花は言う。

《テンリュウの全力でも、胸の装甲が破れるかどうかはわかんない。ガードなんてされたら……抜くことは不可能なんだよね》
「しかし、道はそれしかありません」

テンリュウは言う。桜花が言うのだから、打開策はそれしかないのだろう。

ならば、難しくともやるしかない。

そして、テンリュウが踏み出そうとした瞬間。

「ストラグルバインド！！」

魔法が紡がれた。魔力結合を阻害するバインドが、ガンゲイルの両腕を拘束する。

テンリュウが背後を振り返る。そこには、淡く輝くバリアジャケットを纏う、ホムラの姿があった。
ホムラがここへきた。その驚きを言葉にする前に、別の声が鼓膜を揺らす。

「フハハッ!!　吹き飛ぶがいい!!」
「恨みはない。だが、我が主の命に従い、貴様を討つ」
同時、ズドン!!!!　という轟音が響き渡った。ガンゲイルの右腕を穿ったその一撃は、ガンゲイルの腕を抉った。
「ほう、流石に堅いな。俺様の一撃で砕けんとは」
「今更のことです。それに、我々の目的は時間稼ぎ。まさか失念したわけではないでしょうね?」
「承知の上だ。なめるなよ蒼き騎士」
「ならば、とるべき道は一つのはず」
「フハハッ!!　理解している!!　吹き飛べ!!　砕けろ!!」
現れた二人は、その力をもってガンゲイルを攻撃する。
女性の方は、白い騎士甲冑を纏った蒼い髪と瞳の凛々しい印象を受ける女性で、男のほうは黒い騎士甲冑を纏い、巨大な戦斧を持った、禿頭の男だ。
状況的には味方のようだが、テンリュウに覚えはない。
何者か。そう思った時。
『安心しぃ。わしの仲間や。テンリュウ、こっからはわしらも参戦する』
念話が入る。ホムラだ。
『あの蜥蜴のせいで魔力磁場が発生しとってなぁ。転送に手間取った。すまんすまん』
「……何故です?」

念話でもわかるホムラの軽い調子に、テンリュウは問いかけた。ホムラは、ふむ、と頷く。

『わしの故郷の言葉にな、『義を見てせざるは勇なきなり』っちゅーもんがある。理由なんてのは、そんなもんでええ。他に欲しいんやったら、適当に考えるで？』

「……必要ありません。協力、感謝します」

『どういたしまして。ほな、行くでぇ！！』

ホムラの足下に展開される魔法陣が、巨大なものになる。そこから更に、ホムラは自身のデバイスを回転させながら、魔法を紡ぐ。

「元管理局空戦Ｓ＋ランク魔導師の力、なめるんやない！！」

紡がれるは、巨大な結界。ガンゲイルは当然のこと、テンリュウたちをも包み込むその結界は、まるでバトルフィールドを形成するかのように展開される。

『テンリュウ、聞こえるか？　範囲保護結界を展開した。これなら、自分も全力出せるやろ？』

「……重ねて、感謝します。確かに、この中ならば」

己の信ずる武器を構え、テンリュウは言う。

「周囲を気にする必要は、ありません」

紅蓮の魔力が桜花と血桜、そしてテンリュウを包む。

ホムラが笑みを浮かべ、デバイスを構える。かつて『二人のエース・

オブ・エース』の片翼を担いし英雄が、その牙をむく。

「どうにも、わしのことを『守り主体の結果魔導師』と思っとる奴が多いみたいやけど、違うで？　わしは、それが得意なだけや」

ガコン、という音と共に、カートリッジがロードされる。

「速さ。そしてその速さから繰り出される勢いの乗った近接格闘。確かにそれに関してはカグラの阿呆には勝てへん。せやけど、単純な力でいうならば」

《Ｍｏｏｎ　ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

ホムラのデバイスが魔法を紡ぎ、ホムラは腕に力を込める。

「――世界の誰にも、負けはせん」

淡き銀色の光が、世界を照らす。

月の光。太陽の陰でありながら、それでもしかし、神聖な力を宿す存在の力が、爆発する。

「ぎぁルるるるがぁァァあっッっアアアッ！？」

ガンゲイルが吠える。

怒りの叫び。

大自然の具現たるはずの自らが、とるに足らぬはずの存在にこうも翻弄されている現実が、許せない。

叫びの中にそんな想いを感じたテンリュウは、強き瞳と共に、言葉

を紡いだ。

「久遠に等しき時を生きるあなたからすれば、生きて精々８０年の我らなど、とるに足らぬ存在なのでしょう。……ですが」

圧倒的な存在。それ故に、知らないことがある。

「私たちは、それでも生きているのです。受け入れられぬなら、納得できぬなら!!　抗うしかない!!　抗い続けるしかない!!」

その叫びは悲痛で。

涙色の覚悟に、染まっていた。

「侮るな!!　真竜!!　人の力を!!　想いを!!」

生きるため。

目指すものを、掴むため。

不毛と知りつつ、進むため。

「その目を開けて、しかと見よ!!」

そして、魔法が紡がれる。

「セイクリッド・ブレイズ!!」

聖痕。

神が刻むとされる、膨大な力を宿す印。

その力を全て、敵に叩きつける。

――決着。

◇　◇　◇

「とりあえず、封印は終了か？」

「夢と現実の狭間……永遠の場所にその身を幽閉しました。出てくることは、まずないでしょう」

「そいつは上等や」

テンリュウの言葉に、ホムラは笑顔で頷く。封印。それが決着だった。

真竜は永遠を生きるとまで云われる存在である。消滅させることは容易ではない。故に、テンリュウはコアを撃ち抜き、更に彼女自身が持つ、対象を異次元へと飛ばす術式をもって封印した。

「……これで、この世界は安寧ですね」

「とりあえず、やけどな。それにこの世界だけやない。この世界はちょいとばかし異常やったけど、他の世界では管理局の機能低下のせいでかなり苦しんどる奴がおる」

ホムラは、背後を振り返る。その視線の先には、先程協力してくれた二人が、こちらを見ていた。

「レジアス・ゲイズは、ある意味管理局の希望やった。せやけど、

奴は間違え、死んでしもた。……最早世界は、管理局では守れなくなっとる。変革が必要なんや」

「あなたが革命を起こすとでも？」

「まさか」

ホムラは、肩を竦めた。

「できるもんならやりたいけど、わしはわし一人のことで精一杯なしょーもない男や。……でもな、『義を見てせざるは勇なきなり』。できひんからってなんもせんのは違うやろ？」

ホムラは、真剣な表情でそう言い切った。テンリュウは、そんなホムラに問いかける。

「私にその話をした真意は？」

「テンリュウ。テンリュウ・シンドウ。わしらに力を貸してくれんか？」

「断れば？」

「頼み込む。土下座でもなんでもしたるわ。これ以上、管理局の傲慢で関係ない奴らが傷つくんは、見てられへん」

ホムラの目は、本気だった。どうしたものか、とテンリュウは僅かに考え込み、そして、結論を出す。

「折角ですが、お断りします。興味がありません」

「ほ？」

「この世界……いえ、この街には、リリアたちがいた。だから戦った。それだけなのです。世界がどうなろうと、興味は――」

「アルハザード」

「――――」

ホムラが紡いだその言葉に、弾かれたようにテンリュウは振り返った。ホムラは、笑みを浮かべる。

「なんとなく、自分がそう言うんはわかっとったよ。だから、わしは自分を雇わせてもらう」

「どういうことです？」

「言葉通りや。……プレシア・テスタロッサ。かの大魔導師が追い求めた幻の都の手掛かり。一年前、ジェイル・スカリエッティが掴めなかった夢の果て。それをくれてやる」

ホムラは、手を差し出した。テンリュウは眉をひそめ、問う。

「何故、私にここまで？」

「自分は敵に回しとうない。それに、個人的な縁もある」

テンリュウは、数秒迷い。

その手を、握り返した。

「よろしくやな、最強？」

「こちらの台詞です」

二人は、笑っていた。

◇　◇　◇

「テンリュウお姉ちゃん、どこに行くの」

「さぁ……私の行き着く場所がどこなのか、私にもわからないので

す」

リリアの問いに、テンリュウは苦笑。

ここに残るという選択肢もあった。だが、テンリュウはホムラたちと行くことを決めた。

別に、義によってというわけではない。

彼女にとって全てである、願いのためだ。

「リリア。そして、リース」

テンリュウはリリアの頭を撫でながら、この地で出会った強き姉妹に、告げる。

「必ずまた、ここを訪れます。その時まで、お元気で」

「ふえっ」

「リリア……」

リリアが泣き出す。テンリュウはその小さな体を抱き締めながら、微笑んだ。

「今生の別れではありません。信じたならば、また会えます」

「テンリュウさん……」

「貴女も、強く生きてください。残酷な言葉かもしれませんが……」

そして、テンリュウはリリアを離し、微笑む。

その微笑みは、悲しくて。

寂しくて。

とても、街を守った英雄には見えず。
ただの、たった一人の、弱い女にしか見えなかった。

「いずれ、また」

さよならはいらない。
ただ、それだけだった。

「……本当に、私の果てはどこなのでしょうね？」

わかっていることを、呟く。
願いの果て。その先は。

「無価値な死……もう、決めたことですから」

第六・五話　最強の侍、その在り方（後書き）

というわけで、何故か友人たちから受けがいい、テンリュウさんです。
ちなみにホムラとグリスも何故か受けがいいのですが……？
とにかく、最強の侍が管理局の敵に回ったきっかけです。
感想を頂けたら、これ幸いです。では、次回予告を。

次回予告

管理局の英雄が、敵としてミッドチルダに舞い降りた。
その理由は何なのか？
そして、明かされるはそれぞれの理由。
カグラ・ランバード。
ホムラ・イルハート。
ファイム・ララウェイ。
それぞれの理由と共に語られるのは、過去と今を繋ぐ理由。
命を懸ける、その理由。
「生きようと願って生きられるなら、こんなことになっていません」

第七話
「ファイム・ララウェイという男」

第七話　ファイム・ララウェイという男

――真竜ガンゲイル。

その圧倒的な存在を消すために管理局は魔導砲『アルカンシェル』を撃とうとした。しかし、現場の指揮官であった八神はやては撤退を拒否。同時に彼女が指揮権を放棄したために指揮を引き継いだカグラ・ランバードにより、結果的には死者０。街も蒸発せずに済んだ。

だが、カグラ・ランバードと八神はやてが上層部の判断を無視したことも事実。そのため、二人とその場におり、カグラに従った陸士部隊の指揮官たちなどは本局に緊急召集されていた。

その中には、高町なのはやフェイト・Ｔ・ハラオウン。守護騎士たちのリーダーである八神シグナム。そして、ファイム・ララウェイたちの姿もあった。

「貴様らは、自分がしたことを理解しているのか！？」

会議室。理事たちと向かい合うように立つファイムたちは、いきなりそんな怒鳴り声を浴びた。全員が特に堪えた様子がない中、カグラだけがアクションを起こす。

「命懸けで戦った後なんだ。怒鳴らないでもらえませんか？」

肩を竦めるカグラ。彼はそのまま勝手に椅子に座る。すると、当然の如く理事の一人が重ねて怒鳴った。

「貴様！！　誰が座っていいと――」
「犬じゃねぇんだ。そうキャンキャン吠えんなよ。器が知れんぜ？」
くくっ、と笑みを漏らしながらカグラは言う。そんなカグラに、ミゼットが静かに告げた。
「しかしカグラ。あなたの言い方も、立場をわきまえるべきなんじゃないかい？」
「俺の立場？　ばーちゃんよ、耄碌しすぎだぜ？」
カグラは笑う。しかしその笑みの中に、覚悟が見て取れた。
そしてカグラは、問いかける。
「おい」
誰も呼びかけには応じない。それでも、カグラは問いかけた。
「この選択に、後悔しねぇんだな？」
「はい。覚悟の上です」
応じたのは、ファイム。カグラは、笑う。
「はっ、上等。男だよお前」
そしてカグラは、内ポケットから二つの封筒を取り出した。
そこに書かれているのは、『辞表』の文字。
場が、ざわめく。

「どういうつもりだい？」

それを手を出して制しながら、ミゼットが言った。カグラは、見てわかんねぇのか、と問う。

「俺とファイムの辞表だよ」

「はい」

ファイムは頷く。理事の一人が、ふん、と鼻を鳴らした。

「責任を取ると？　殊勝なこと――」

「勘違いすんなよジジイ」

その言葉を遮りながら、カグラは言った。

「選ぶのはあんたらだ。受け取るのか否か、この場で決めろ」

再び、場がざわめく。カグラは、笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「俺たちを切るかどうか、選びな」

「それは、選択するほどのことかい？」

「本気で言ってんなら、あんたはもう引退すべきだよばーちゃん」

くくっ、とカグラは笑った。

「何のために俺が片っ端から通信繋いだと思ってんだ？　魔力のこと考えれば、民間にまで繋ぐ必要はなかったのに、だ。……解は単純。このためだよ」

「どういうことだ？」

理事の一人の問い。カグラは、少しは考えろよ、と肩を竦める。

「今、世間の管理局上層部に対する印象はどうなってると思う？簡単だ。『現場の魔導師たちを信用せず、安全圏からアルカンシェルで街を消そうとした』だ」

「何だと！？　それは貴様等が！！」

「結果的にそうだろうが。つか、俺のあの発言を受けてそう取らない奴はいない。大体、最近の管理局は信用を失いつつあったんだ。当然っちゃ当然だわな」

カグラのその言葉通り、管理局の信用は、かつてに比べて大分落ちてしまっている。

ＪＳ事件やマリアージュ事件。更には最近増えてきた質量兵器による事件。

そして今回の、真実はどうあれ『クラナガンを消す』と判断した上層部。

それらの要因は、管理局の信用を奪うに十分だった。

「そんな中で、指揮官だった俺と、真竜討伐の立役者であるファイムの二人が同時に辞めれば、世間は大騒ぎだろーな。あんたらが『自主的に辞めた』っつっても、世間は『管理局は英雄を辞めさせた』と解釈する。ははっ、いい話だ」

「それはどうかね？　坊や、貴方は一局員よ」

「……俺はよ、自分の知名度ってのを理解してる。かつての『エース・オブ・エース』の名は、伊達じゃねぇよ」

それに、とカグラは続ける。

「ファイムもいる。俺一人ならまあ、前線にいるっつっても第一線

からは退いた身だからな。微妙だが……ファイムがいるんだ。影響は強いぜ」

カグラが言い切ったその言葉。それを聞き、理事の一人が鼻を鳴らす。

「執務官一人に、それほどの影響力が？」

「あるんだよ。地上に関して言うならな」

嘲るようなその言葉を、カグラは一蹴する。

「つーかよ、お前ら気付かねぇのか？　ファイムは『本局』執務官だぜ？　なのにどうして『地上本部のエース』なんて呼ばれてる？　何故、『エース』と呼ばれ、実績も残しながらＡ＋止まりなんだ？」

徐々に、言葉の中に苛立ちが蓄積されていく。

「本人も理解してないみてぇだから、この際言ってやるよ。……ファイムは、たった一人で地上で踏ん張ってきた。他の世界ならすぐ執務官が派遣されるような事件も、地上じゃ『何故か』派遣されない。そんな時、ファイムが走り回って解決する。どんな事件だろうと、部隊の力を借りながら、たった一人で命懸けで動き回る」

ファイム・ララウェイが命を懸けて戦っていることを、この場にいる者ならばみな知っている。

むしろ、知らないはずがない。

誰もがみな、『共犯者』だから。

「次元世界の平和と秩序を守る？　実に結構。ご立派だ。でもな、ならなんでミッドチルダを守らない？　何故ここだけを差別する？　何故、ファイム一人に全てを押し付ける？」

『地上本部のエース』。

いつしかファイムに付いていたその呼び名はしかし、本来ならありえないものだ。

そもそもが『本局執務官』であるファイムということと、何より、『たかがＡ＋レベル』で、『地上本部のエース』と呼ばれる現実がおかしい。

だって、それは。

それだけ、手が足りないということだから。

「他の世界ならすぐに執務官が飛び出し、上から指示が出るような事件も、ミッドチルダならファイムに丸投げ。部隊に丸投げ。なあ、てめぇらは馬鹿か？　レジアスのおっさんがどうしてあんなことをしたのか、未だに理解してねぇんじゃねぇのか？」

カグラ・ランバードは、当時の地上本部勤務者にしては珍しく、レジアス・ゲイズの手段……質量兵器の使用に反対していた。

管理局は銃を持つべきではない。そう、言い続けていた。

しかし、もうそれしか手が残っていないことも理解していたから、表立っては反対せず、一部では協力さえしていた。

だって、仕方ないのだ。

彼の理想は、本物で。

そこにだけは、共感できたから。

「今地上本部に、ＡＡＡランク以上の魔導師が何人いると思ってる？　たった三人だ。……ファイムがどうしてＡＡランクの試験を突破できなかったか。理由なんざ単純だ。引き抜かれるからだよ」

カグラの口調が、僅かに荒くなる。

「どれだけ頑張って教育しても、ＡＡランク以上になれば半ば強制的に引き抜かれちまう。『本局はより広い世界を守らねばならない』だと？　寝ぼけてんじゃねぇぞクソが！！」

だんっ、とカグラは机を叩いた。理事の一人が、言葉を紡ぐ。

「だが事実だ。我々は――」

「根刮ぎ優秀な奴引き抜いといて！！　こっちの都合はお構いなしで！！　納得できるわけがねぇだろうが！！　お前らにわかるか！？　長い時間かけて、必死になって育てて、一緒に地上を守ろうって決めてた奴が片っ端から引き抜かれてく気持ちが！？　その上で、結果出せなきゃ全部俺たちのせいにされる気持ちが！？　いい加減にしやがれ！！」

レジアス・ゲイズが本局に背いた理由。

それが、これだ。

ミッドチルダは次元世界の中心とでも呼ぶべき場所。

それ故に、他の世界よりも凶悪なテロや事件が起こりやすい。

だというのに、それから市民を守るための術を、片っ端から奪われ

ていく。

何という矛盾。
そして、傲慢か。

カグラの、地上の現状を知る者たちの総意でもある言葉を受け、理事の一人が言葉を紡ぐ。

「だが我々は、ミッドチルダのみに構っているわけにもいかん。人手はいくらあっても足りん」
「正論だな。吐き気がする。けどな、言わせてもらうぜ。手が足りねぇのは、こっちだって同じだ。いや、てめぇらよりも深刻だ。……地上の魔導師のうち、一年でどれだけの死者が出てるか知ってるか？　本局の三倍だよ。実力が足りないことを承知で、それでも出るしかないからそうなってんだよ。その気持ちがわかるのか？　実力不足と理解して。それでも戦う魔導師の気持ちが！！　てめぇらにわかんのか！？」

死に逝く者たち。それを見届ける立場のカグラだからこそ、思うのだ。

数人でいい。
たったそれだけで、変わるのに、と。

「……一つだけ、よろしいですか？」

カグラの背後から、声が上がった。声の主は、ファイムだ。

「確かに、手が足りないのかもしれません。地上よりも本局のほうが、大変なのかもしれません」

先程、理事の一人が吐いた正論。それを、ファイムは肯定する。
だが、その上で、しかし、と言葉を紡いだ。

ファイムは、一歩前へと進み出た。

「だから、聞かせてください。その正論を吐く権利を持つほどのことを、あなたがたはしてきたのですか？」

先の戦闘で最も深い傷を負い、服の下は包帯まみれ。更に、右目には眼帯をした状態のファイムは、それでもしかし、その影響を少しも感じさせずに言う。

「あの時、ランバード一佐の呼びかけに、多くの魔導師の方々が応えてくれました。魔導師でない方は、それでもできることをしてくださいました。そこに本局も地上も関係なく、だからこそ僕はこうして生きていられます。けれど」

応急修理だけを施した機械の右手を、ファイムは握り締めた。

「それは、何故あのとき『だけ』しかできなかったのですか？　本局と地上が手を取り合う……四年前、この理事会が発足した時、そう伺いました。しかし現実は？　むしろ、確執が強くなっている。違いますか？」

「貴様！！　我らを侮辱する気か！！」

「どうとでも。出世など初めから眼中にありませんし。それとも、四年前のように執務官資格を停止でもしますか？」

言って、ファイムは胸元のバッジを取り外すと、机の上に置いた。

執務官バッジ。かつて、四年前にもファイムは、同じことをした。
それこそが覚悟と示すために。

「肩書きを欲したのは、より多くの人を守りたかったからです。ファイム・ララウェイは執務官でなくなっても、やることは変わらない」

会議室が、静まり返る。

『守る』。言葉にすればそれだけの、しかしあまりにも難しいそれに対する覚悟。
少なくともこの場において、彼以上の覚悟を持つ者はいなかった。

「正論は構いません。しかし、力持つ者の正論はただの傲慢。違いますか？」

それに、とファイムは言った。

「そもそもこのようなことをしている場合ではないでしょう？　クラナガンは今も混乱しています。今すぐにでも、我々は戻るべきです。こんな状態で糾弾のための緊急召集など、正気の沙汰ではありません」

そして、ファイムは踵を返す。

「地上に戻ります。こんなことをしている場合ではありません」
「待て！！」
「……その命令に従えば、地上は元に戻りますか？」

普段の彼からは考えられないほどの、辛辣な台詞。それを受け、理

事の一人は、口ごもる。

そして、場を締めくくるように、カグラが理事たちに問いかけた。

「ちなみにこの様子は記録されてたりするんだが……どうするんだ？　さっさと選べよ」

カグラは立ち上がる。

「受け取んのか、否か」

◇　◇　◇

びりびりという、紙を引き裂く音が廊下に響き渡った。

ファイムとカグラの辞表が紙屑となり、それをカグラは魔法で燃やす。

そうしてから振り返り、笑みを浮かべた。

「はい、お疲れさん。さっさと戻るぞ。ファイムの言う通り、地上は今大変なんだからよ」

「……はい」

カグラの言葉に、ファイムは小さな声で応じる。はやてが、ファイムくん？　と声をかけた。

ファイムは苦笑を浮かべつつ、口を開く。

「なんでも――」
「自己嫌悪かい、坊主」
ファイムの言葉を遮りながら、言葉を紡いだのはゲンヤ・ナカジマだ。彼はそのまま、言葉を紡ぐ。
「カグラ。おめぇさん、シナリオを用意してただろ？」
「お、流石はおやっさん。気付いてたか」
「ああいう場では、大抵シナリオが用意されてるもんだ。もっとも、普通は向こうが用意するもんだが」
「ど、どういうことですか？」
この場の全員を代表するように、はやてが声を上げた。ああ、とゲンヤが頷く。
「なんのことはねぇやな。この二人がシナリオを組んで、理事会を丸め込んだってだけだよ」
「人聞き悪ぃぜ、おやっさん」
「事実だろう？」
「ま、その通りだけどな。……気にすんなよファイム。持ちかけたのは俺なんだからよ」
「いえ……すみません、行かねばならないところがあるので、先に失礼します」
ファイムは切り上げるようにそう言うと、歩き出した。その背にはやてが手を伸ばそうとし、その手を止めた。
そして、ファイムが立ち去った後、おもむろにカグラが口を開いた。
「嬢ちゃんたち、あいつのことを勘違いしないでやってくれや」

「勘違い？」
「……あいつの自己嫌悪は、さっきのことについてだ。理由はどうあれ、脅迫みたいなもんだしな。俺個人にしてみれば、気にするようなことじゃねぇんだけどな。真面目だねぇ、あいつ」
「それあの坊主のいいとろだろう？」
「おっしゃる通りで」

ゲンヤの言葉に、カグラは肩をすくめる。

カグラにしてみれば、理事会に対する丁度いいお灸なのだが、ファイムはそう思わない。
本当に、真面目だ。

「……ファイムはな、嬢ちゃんたちを守りたかったんだよ」
「守る、ですか？」

ポツリと呟いたカグラの言葉に、はやてが反応する。カグラは、ああ、と頷いた。

「理事会は、俺たち全員に何らかの罰を下すつもりだったはずだ。俺とファイムは階級なんざどうでもいいし、興味もねぇんだが、嬢ちゃんたちはそうもいかねぇだろ？　で、どうするかってなった時に、俺たちに矛先を向けさせればいいって話になったわけだ」

タバコをくわえつつ、カグラは言う。

「ま、そこからは賭けだったけどな。いやー、良かった良かった。ばーちゃんが足し算引き算きっちりできる奴で」

あっはっは、とカグラは笑う。はやては、そんな、と言葉を漏らし

た。

「なんで、そないなこと……」

「俺は単純に可愛い後輩たちを守りたかっただけだよ。ファイムは……知らん。本人に聞け。ま、似たような理由だろうけどな」

意味深な笑みを浮かべつつ、カグラは言い。

その場は、解散となった。

◇　◇　◇

「……ふぅ」

《大丈夫ですか、マスター？》

「リンネ。うん。大丈夫だよ。心配しないで」

愛機の問い掛けに、微笑を浮かべて応じるファイム。彼は今、八神はやてが指揮する次元航行艦『ヴォルフラム』が収容されている艦船ドッグにいた。

特務部隊機動六課の技師、エレン・ローグに会うためだ。

「ゲンヤさんにも言われたけど……ただの自己嫌悪だから。気にしないで」

《しかしマスター。マスターは間違っていません》

「善悪とかじゃないよ。僕みたいな罪人が何を偉そうに、って、そう思っただけ」

《マスター……》

「はやてさんは許してくれた。それはとても嬉しかった。けど……

そう簡単に、変われないよ」

変わりたくとも、変われない。
変わることは、許されない。

自分で引き金を引いてきたから。
そう簡単には、戻れない。

「生きたいと願っても、過去は変わらないから」

今まで歩んできた道を否定したとしても。
その道は、消えやしない。

だから。
だからこそ、否定しない。

全て抱えて、飛ぶだけだ。

「すみません、よろしいですか？」

扉をノックし、ファイムは部屋に入る。出迎えたのは、エレンだ。
茶のかかったセミロングの髪の女性である。

「ララウェイ執務官。どうかしましたか？」
「一つ、相談がありまして。マリーさんには断られたんですが……」

苦笑と共に頬を掻きながら、ファイムは言い。
そして、真剣な表情で言葉を紡いだ。

「無理なら、忘れてください。その時は仕方ありませんから」

そして、ファイムは一つの蒼い宝石を取り出す。
番号が刻まれた、それは。
「これを、僕のデバイスに組み込めませんか？」
――ジュエルシード。

◇　◇　◇

とある次元を隠れるように渡る、とある次元航行艦。
管理局に牙を剥いた、かつての英雄にして先代『エース・オブ・エース』ホムラ・イルハートが率いる組織の拠点だ。
そのモニタールームで、難しそうな表情を浮かべるホムラがいた。
「如何なさいました？」
その背に、不意に声がかけられた。ホムラが振り向くと、そこにいたのは蒼い髪の女性だ。
エリア・カリア。かつては騎士とまで呼ばれた人物で、同時にホムラ・イルハートが誰よりも信頼する人物である。
「……主、また見ておられたのですか？」
「ん、んー。まあ、敵の戦力把握は重要やしな？」

笑みを浮かべつつ、ホムラは言う。エリアは、そうですか、と頷いた。

ホムラが見ているのは、もう一週間前になる、地上本部で行われた戦闘の記録映像だ。

真竜ガンゲイル。かつてホムラたちが戦い、コアを撃ち抜いた怪物。コアが撃ち抜かれ、無限に近い生命力のほとんどを失っていたとはいえ、真竜を消滅させた執務官の力は、侮れない。

「主が気にされているのは、ランバード殿ですか？　それとも……」

エリアの視線の先にいるのは、全てが終わった後、座り込んだ八神はやてに寄りかかるようにして眠るファイムの姿だ。

ホムラは、まあ、せやな、と曖昧に頷く。

「別にあの阿呆を無視しとるわけやない。最後の呼びかけ……あれで魔導師どもが動いたんも事実。腐ってもカリスマは健在みたいやな」

「そのような言い方をされるということは、ランバード殿は本命ではないということですか？」

「せや。あいつも無視してええわけやないけど、それよか厄介なんがおる。……あの出力、例の術式の他にジュエルシードを使っとるな」

「ロストロギアを管理局が使うのですか？」

ホムラの言葉に、僅かな驚きを込めつつエリアは言う。ホムラは、せや、と頷いた。

「管理局は正義を装っとるだけで、決して『善』やない。表に出さんだけで、裏では体外なことしとるもんや。もっとも、このガキは独断やろうけどな」

ホムラは、うん、と背伸びをしながら言う。

「なんというか、目がな。覚悟決まっとるというか、なんというか。ある意味、一番厄介やもしれん」

死に対する恐怖を、生物は拭い去ることは決してできない。
だが、この青年はおそらく、ほとんど死を恐れていない。
死ぬことを受け入れているような……そんな、印象を受けるのだ。

「こういう手合いは面倒や。心が折れん」

実力で勝ってはいる。だが、諦めないというのは、時として思いがけない結果を生む。例えば、普通の魔導師が諦めて退く場面で、それこそ命を捨てた特攻でもされれば、思いがけない痛手を被ることになる。

また、ジュエルシードという不確定要素もあるのだ。厄介この上ない。
しかも、敵はこのファイム・ララウェイだけではないのだ。

「特務部隊機動六課か……面倒くさいなぁ」
「ランク一つを見ても、凄まじい戦力が揃っていますね」
「S＋ランクの魔導師は、単純計算で一個中隊レベルの力があるしな。あー、やだやだ。しかも今回は、リミットも無いみたいやし？」

『ゆりかご戦役』とも呼ばれる、ＪＳ事件。管理局史上においても類を見ないその戦いを勝利へと導いた英雄たち。
四年前より更に力を付けた彼女たちと戦う。それは当然、鬱になる。

「過剰戦力やなー。勝てるかなー」
「言葉に感情が込められておりませんが、主」
「なはは、バレた？」

ホムラは笑う。笑いながら、まあ、と口を開いた。

「個々の能力やったらこっちも負けとらん。一対一の状況にもっていったら、むしろこっちに分があるくらいちゃうか？」

かつての『エース・オブ・エース』である自分と『最強の侍』たるテンリュウを中心に、こちらも過剰と言って差し支えない程の戦力が揃っている。勝てるとは断言できないが、負けるとも思わない。

それに――

「そもそも、奴らは組織の一部隊。動きは制限されとるし、更に言うたら『頭』を押さえたら勝手に機能が低下する」

ホムラの視線の先にいるのは、優しい表情で眠ってしまったファイムを抱き締める、女性の姿。

――八神はやて。

「正直気は進まんけど……搦め手でいこか。ちょい面倒やけど、この間手に入れたロストロギアが使えるはずや」

ホムラが、立ち上がる。

「魔法が好きと。出会えて良かったと。これでもまだ言えるんやったら大したもんやけど、な」

ホムラは、冷たい目で、画面に映るはやてを見つめていた。

◇　◇　◇

クラナガン中央病院。クラナガンで最も規模が大きいその病院は、地上本部の魔導師たちもよく世話になる場所である。

そして、その病院の診察室では、初老に差し掛かった医者が髭をさすりつつ、ファイムと向き合っていた。

「身体の傷は、休養をとれば治っていくでしょう。しかし、リンカーコアの衰弱が激しいですね」

魔導師の魔力の源であるリンカーコア。普段なら消耗程度のそれがしかし、ファイムの場合は極端に衰弱しているのだ。

「心当たりは？」

「……少し、魔力を過剰に使用したくらいしかありません」

嘘である。原因などわかりきっている。

例の術式。ミッド式ともベルカ式とも在り方を微妙異にする、命を使う術式。

あれの、せいだ。

「そうですか……。まあ、とにかく休養ですな。とりあえず一週間程は、魔法使用は厳禁です」

「はい。わかりました」

ファイムは頷き、礼を告げて診察室を出る。そして、自分の胸元に手を当てた。

……リンカーコアは、回復しない。

ただ魔力を過剰使用しただけならともかく、ファイム・ラフラウェイという魔導師は、『それ以上』のことをしてきている。

例え思い直したところで、元には戻らない。

ならば――

「難しい顔してんじゃねぇか」

不意に、背後から声をかけられた。見ると、そこには見覚えのある人物が二人。

カグラ・ランバードと、ゲンヤ・ナカジマだ。

「どうした、坊主。悩み事か？」

「ゲンヤさん……いえ、なんでもありません。お二人こそ、どうして？」

笑顔を張り付け、曖昧に誤魔化す。ああ、とゲンヤが頷いた。

「この間……というより、一週間前だな。あの時にうちの部隊から

も結構怪我人が出てやがるから、その見舞いだ」
「俺はあれだ。巻き込んだし？　ま、お礼も兼ねてだ。いやー、大したことなくて良かった良かった」
「おめぇな。うちの娘に怪我させといて、いい度胸じゃねぇか」
「いや、おやっさんそれは……」
「怪我ですか？」

聞こえてきた言葉に、ファイムが反応する。ゲンヤは、ああ、と頷いた。

「ギンガがちょいとな。なに、大したことじゃねぇ。昨日退院したしな」
「ギンガさんが……。そういえば、しばらくお会いしていませんね」
「おめぇも忙しいからなぁ。……おめぇが出て行って四年か。早いもんだ。道理でギンガが美人になる」
「おいおっさん。表現がキメェ」
「黙れ。娘の成長を喜んでなにが悪い」
「悪かねぇけどな。確かに美人だし」
「手ぇ出すなよ」
「出すかよ。てか、忠告なら俺よかファイムにすべきじゃねぇ？」
「坊主ならまあ……ありじゃねぇか？」
「おいおい」

テンポの早いそのやり取りに、ファイムはついていけない。その様子を見て取ってか、カグラが苦笑した。

「ああ、そうだファイム。会ったら聞こうと思ってたんだが……まだ、『アレ』使う気か？」

『アレ』――その言葉の意味は、おそらくだが察しはついている。

そしてその答えも、また。

「はい。せめて、この戦いが終わるまでは」

覚悟と、決意と、願い。
その狭間で決めたのは、これだ。

そんなファイムの様子から何かを感じたのか、ゲンヤが口を開いた。

「おめぇが何を考えてるかなんて知らねぇが……その選択は、正しいのか？」

「……きっと、間違っています。少なくとも、『願い』と逆方向へ行っていますから」

あの時、初めて抱いたこの気持ち。

願ったこと。
望んだこと。

けれど。

願ったところで。望んだところで。
それを為せるとは、限らない。

「それでも、決めたんです。この選択をした以上、その中で最上を望まなければ」

「それは、正しい選択じゃねぇんだろう？　そうわかっているんだろう？」

ゲンヤは言う。ファイムは、はい、と頷いた。

そして、けれど、と言葉を紡ぐ。

「最初から正しい選択肢なんてないんです。選んだ選択肢を正しくしていくことが必要なんですよ」

間違っているなら、正せばいい。
選択の時間は、すぐに終わるのだから。

それに、だ。
それに――

「生きたいと願って生きられるのなら、こんなことにはなっていません」

それは、静かな宣戦布告。
彼以外にはわからない、世界への反逆。

あまりにもままならない世界で生きてきた。
変わらない現実を受け入れてきた。だから、わかる。

わかりすぎるほどに。

「僕に選べる道など、初めから決まっていたんです」

生まれた時から。
あの場所に降り立った時から。
ただ、それだけ。
それだけ――だった。

故に。
だからこそ。

ファイム・ララウェイは、こうなった。

「命の価値を全うする。それだけですよ」

そう言ったファイムは微笑んでいて。

……泣いていた。

◇　◇　◇

地上本部襲撃より一週間。地上本部復興は順調に進んでいたが、流石に建物の完全復興まではもう少し時間がかかる。故に、本部は緊急措置としてクラナガンに最も近い支部へと場所を移動していた。

その支部の会議室。そこに、ファイムを除く六課の面々と、カグラがいた。

カグラは集まったメンバーを確認すると、最初にいきなりすまんな、と言葉を紡いだ。

「だが、復興も大方目処が付いてきた。ただ、敵の動きはわからん。つーわけで、今のうちに色々と話しとこうと思ってな」

「あの、ファイム……ララウェイ執務官は？」

カグラの言葉に対し、はやてが問いかける。カグラは、ああ、と頷

いた。

「あいつは全部知ってるからな。今更、話すほどのこともねぇ。本人に聞いたら、『復興の方を手伝います』ってよ」

カグラは肩を竦める。ファイムの怪我は、大方回復した。もっとも、使ってしまった命は戻らないし、先の戦いで深い傷を負った右目も、もう一度開くようになるかどうかは微妙だが。

「……そうですか」

「なんだ？　残念そうだな」

「そういうわけやありません。ただ、また無理せんかと……」

「あー、するだろーな。ま、見守ってやりな」

心配そうなはやてに、苦笑しつつカグラは言う。

「男ってのは、馬鹿な生き物でな。意地があるんだ」

くっだらねぇ意地がな、とカグラは言い、さて、本題だと言葉を紡いだ。

「今回集まってもらったのは他でもねぇ。敵の首領と思われる男ーホムラ・イルハートについてだ」

地上本部を襲撃し、ロストロギアの強奪。更には本部の建物を壊滅にまで追い込んだ人物。

「だがま、ちょいと待ってくれや。クロノの奴がまだ……」

『すまない。遅くなった』

カグラが言った瞬間、ウィンドウが現れ、クロノの顔が映し出された。カグラは、遅い、と言いつつ、じゃ、話すぞ、と口を開いた。

「知ってる奴も多いだろうが……ホムラ・イルハートは元管理局所属だ。前の所属部隊は戦技教導隊第二部隊副隊長。当時は『エース・オブ・エース』なんて呼ばれてた」

『なのは。キミの先輩になる。……優秀な魔導師だった。あんなことさえなければ』

場の空気が沈む。そんな中、あの、となのはが口を開いた。

「あんなことって……なんですか？」

ずるっ。そんな擬音が聞こえてきそうな程綺麗にクロノがずっこけた。そして、呆れたように言う。

『次元世界でも知らないのは君ぐらいだぞ』

「ご、ごめんなさい」

「まー、嬢ちゃんは当時大変だったからな。仕方ねーよ」

苦笑しつつカグラは言い、まあ、と言葉を紡いだ。

「『あんなこと』ってのは、その『エース・オブ・エース』様が部下を何人か引き連れて管理局に牙を剥いたことだ。もう１０年以上前だな」

『当時の戦技教導隊からホムラ・イルハートを含む四名。更に厄介だったのは、聖王教会で騎士叙勲を受けた騎士が一人いたことだ』

「エリア・カリアっつってな。はっきり言って、バケモンだ」

カグラは肩を竦める。そして、言葉を紡いだ。

「ま、エリアだけじゃねぇんだけどな。ホムラはホムラでバケモンだし、他の奴らもオーバーSとかそんなレベルだった」

そう、数こそ少なくても、実際はそれこそ連隊に匹敵するほどの戦力が揃っていた。

「……酷いもんだったぜ。再起不能と死者は合わせて三桁に乗ったし、負傷者はギリギリで四桁に届かねぇってレベルで出てきた」

『そして、再起不能とまではいかずとも深い傷を負った魔導師は少なくない』

「俺もその一人だ。本当に、わけがわかんねぇ戦いだった。ただ確実に言えるのはーー」

カグラは、天井を見上げる。

「管理局にとって、唯一敗北と呼べる戦いだった」

◇　◇　◇

「ファイム!!　休憩だってよ!!」

「うん、わかった!!」

届いてきた声に、こちらも声を張り上げて応じる。復興作業の合間の休憩だ。

ファイムを呼んだのは、リューイだ。彼らは今、青い作業衣を着て作業をしている。

綺麗な金色の髪を纏めていたタオルを外すリューイ。そのリューイと並んで歩きながら、ファイムはリューイに問いかけた。

「もう体は大丈夫なの？」

「おう。ミリアムもな。つか、てめぇこそ大丈夫なのかよ？　その目とか」

「んー、再生手術を受けたんだけど、開くまではまだ時間がかかるって」

体の治療と共に、ファイムは目の手術も受けた。管理局の技術は凄まじい。だが、目の回復には時間がかかる。

もっとも、ただの再生手術ではないからというのもあるのだが。

「まあ、僕は自分で引き金を引いたから……全部元通りってわけにはいかないんだけどね」

「ん？」

「ううん、なんでもないよ」

呟いた言葉に反応したリューイに、首を左右に振って応じる。

そして、休憩所に着くと、そこではミリアムが待っていた。

「お疲れ様です。お二人共、昼食です」

「サンキュー」

「ありがとう」

差し出されたものを、それぞれ受け取る。

今日の昼食は、カレーだった。

ミリアムのように、直接の力仕事ができない者は、こうして裏方の役割を果たしている。この復興作業は地上の魔導師が中心になっているのだが、本局や支部からも応援が来ている。

こうして、管理局は一時的であっても正しい姿を取り戻している。

「……ファイムさん。一つ、お聞きしたいのですが」

「うん？　どうぞ」

カレーを食べながら、ファイム。ミリアムはでは、と前置きすると、ファイムに問いかけた。

「ホムラ・イルハートとは、どのような方なのですか？」

「そいつは俺も聞きてぇとこだな。あのクソ親父、何者だ？」

ミリアムの問いに、リューイが食いついてくる。この二人はホムラとやり合ったと聞いた。それにリューイは管理外世界の出身で、ミリアムもつい最近まで封印されていたから、知らないのかもしれない。

ファイムは、んー、と唸ってから、どこから知りたいの、と問いかけた。

「知る限りのことを。再び合い間見えた時、不覚を取らぬように」

「右に同じく」

「そっか。じゃ、どういう人なのかを……って言っても、あまり詳しくないんだけどね」

ファイムは苦笑し、そして、話し始める。

「ホムラ・イルハート。元管理局第二教導隊副隊長。当時で空戦Ｓ＋ランク。出身ははやてさんとか高町教導官と同じ地球だったはず。カグラさんによると、『いわゆる完全無欠の天才』だって。ただ、部下のこととかはしっかり見る人だったみたいで、部下からの人気は高かったみたい。同僚からも好かれてたんだって。確かに、いい人だったと思う」

過去、管理局に関わるようになった時に出会ったのがカグラとホムラだ。その時は、あんなことをするような人には見えなかった。

人の輪の中心に立って自分が一番笑っているような、そんな人だったから。

「僕はその……管理局に入った時に、会ったことがあって。正直、悪い人に見えなかったのを覚えてる」

むしろ、自分のことを心配してくれたくらいだ。後悔しないかと、聞かれた。

「でもあの人は、管理局に牙を剥いた。何人も傷つけて、何人も殺して、そうして逃げ出した」

まるで、管理局に関わる全てを否定するように。

ホムラ・イルハートというかつての英雄は、世界に牙を剥いた。

「当時ホムラ・イルハートに組した魔導師のうち、二人はその戦闘で死亡したんだって」

「ん？　お前はその場にいたんじゃねーの？」
「いたけど、すぐにリタイアしちゃったから。運が良かったよ。生きてた」

ファイムは苦笑。あの戦いで、死亡した者、負傷した者はとてつもない数になる。特に重傷を負うこともなかった自分は、運が良かったのだろう。

その後、ファイムは戦いの規模を知る限り詳しく教えた。それを聞き、リューイとミリアムの表情が曇る。

「ムチャクチャじゃねぇか。たった五人でそれかよ」
「それが魔導師の恐ろしいところだよ。オーバーSランクの魔導師なんて、それこそ戦略級だから」
「……しかし、疑問が残りますね」

不意に、ミリアムが口を開く。

「ファイムさんによれば、ホムラ・イルハートというのは誰もが羨むような才能と立場にあったはず。何故、そのようなことをしたのでしょうか？」
「……詳しくは、知らないんだけど」

ファイムはそう前置きし、言葉を紡ぐ。

「その戦いの数日前、魔導師が一人、亡くなったらしいんだ。……トモエ・イルハート。ホムラ・イルハートの妹だったんだって」

そう、それが。
英雄が管理局を敵に回した理由なのだろう。

◇　◇　◇

「妹さん、ですか？」
「ああ。……あの兄妹は転送事故でクラナガンに来たって経緯があってな。地球に両親もいねぇって言ってたから、二人きりの肉親だった」

火を点けない煙草をくわえながら、カグラは言う。

「……俺とホムラは、当時上層部から煙たがられてたんだ。現場にこだわって、前線でシンパを増やし続ける……自覚なんてなかったんだけどな。その時だよ。あの任務があったのは」

そこで、カグラははやてを見る。

「闇の書の封印……俺たち三人に下された任務だ」

場が騒然となる。
その中で、カグラは言葉を紡いでいく。

「安心しな。嬢ちゃんを恨んじゃいねぇ。俺もあいつもな。ただ、許せなかったんだろう。それほどのロストロギアと知りながら、何も知らせなかった管理局が」
「何も、知らせなかった……？」
「ああ。ロストロギアの封印任務としか俺たちは聞かされてなかった。……結論から言えば、俺たちは失敗。トモエは死に、その直後にホムラはあの事件を起こした」

俺が知るのは、それだけだ――カグラは、そう話を結ぶ。
そこで、話は終わった。

◇　◇　◇

「そういえば……」

思い出したように、ファイムは言葉を紡いだ。

「トモエという方は、カグラさんの婚約者だったはず」

第七話　ファイム・ララウェイという男（後書き）

少し落ち着いたお話です。
次回から、各キャラたちの絡みが始まる……はず。
楽しんでいただけましたか？
感想待っています。
では、次回予告です。

次回予告

出会うべくして出会った者たちと。
出会うべきではなかった者たち。
しかし物語は進んでいく。
未来の詩篇が紡がれて。
各々の出会いが紡がれる。
目指すべきあり方。
善悪の基準。
言葉にしなければ、何一つとして届かない。

「悪だなんて決められない。話してくれなければ何もわからない。
だから、あなたの口で、あなたの言葉で話して欲しい」

次回、第八話
「邂逅、願いと理由」

第八話　邂逅、願いと理由

「はーい、みんな集合。今から模擬戦をするよ～」

昼前、最早恒例となった高町なのはの訓練の締めが行われる。

今回の特務部隊には、以前のように新人がいない。故に、訓練も朝から晩まで毎日というわけではなく、基本的には毎朝、スバルたち元ＦＷ陣を中心に、その日によって参加できる者が参加していた。基本的にスバルたちは参加し、フェイトやシグナム、ヴィータといった元隊長陣は時間的な余裕があれば参加していた。ちなみにこの特務部隊機動六課におけるファイムの立ち位置は『部隊長補佐』である。そのため実はなのはたち元隊長陣と立ち位置は同じだったりする。

そして本日の訓練参加者は、元ＦＷ陣と、戦技教導官高町なのは。そして、ようやく魔法戦闘の許可が下りたファイムの六人だった。

『はい！！』

全員が整列する。その中ファイムだけは、なのは側に立っていた。

「制限時間は３０分。私とファイム執務官相手に凌ぎきるか、私たちのどちらかを落としたらみんなの勝利だよ」

『はいっ！！』

新人時代は一撃入れればだったのが、撃墜すればに変わっている。みなが成長した証拠は、こんなところに現れる。

「それじゃ、開始場所まで移動して、１０分後にスタートだよ」
なのはが言い、移動が始まる。その中で、ファイムはなのはに話しかけた。
「いいのですか？」
「ん？」
「『どちらかを撃墜』など……自分がなのはさんに迷惑をかけてしまいます」
全力を出すことは禁止されているとはいえ、なのはは『エース・オブ・エース』と呼ばれる程の魔導師だ。対し、ファイムはスバルたちよりも空戦という違いこそあれランクは下。足を引っ張りかねない。
だが、なのはは笑ってファイムの懸念を否定する。
「大丈夫。ファイムくんは強いよ。今日の訓練で確信したから。……強くなったね」
「覚えててくださったんですか？」
ファイムは驚く。なのはの教導を、短期間だけファイムは受けたことがある。しかしあれは四年も前だし、ファイムの他にも大勢が受けていた。
なのはは、当然だよ～、と笑う。
「ただ、無理は禁止。はやてちゃんに言われてるかもしれないけど、フルドライブは論外。カートリッジも、制限守ってね？」
「はい。……なのはさんも、ブラスターは禁止ですよ？」

ファイムに言われ、なのはは驚くと同時、にゃはは、と苦笑した。

「誰から言われたの？」

「ユーノさんとフェイトさんからです。釘をさしておいてくれ、と」

「二人とも心配性だな～」

なのはは苦笑を深くする。ファイムは、でも、と言葉を紡いだ。

「心配してくれる方がいるというのは、嬉しいですね」

「……うん、私もそう思う」

ファイムもなのはも、わき目もふらずに突っ走るタイプである。故に、周囲にたくさん心配をかけてきた。

なのはは自身が墜ちた時に。

ファイムはこの間の戦いで。

それを知り、そして、感謝している。

自分たちの周囲にいてくれる、優しさに。

「……そろそろ時間だね。ファイムくん、前衛任せてもいいかな？」

「はい。援護お願いします」

ファイムは拳を作りながら応じる。右腕はマリー謹製の新型に替えられていた。

ちなみにファイムはなのはのことを最初は敬意をもって『高町教導官』あるいは『高町一尉』と呼んでいたのだが、なのはが頬を膨らませながら、「他人行儀」と呼び方の変更を迫り、『なのはさん』

と呼ぶことになった。
ファイムにしてみれば雲の上の人である上に、直接会ったことがほとんどなかった相手である。最初は戸惑ったが、すぐに慣れた。
ちなみにはやてには『わたしの時は慣れなかったのになぁ……』と理解不能の怒りをぶつけられ、一時大変だった。

――それはさておき。

ファイム・ララウェイは意識を集中しながら、今から始まる模擬戦を楽しみにしている自分がいることに気付いていた。
エリオとキャロに関して言えば、以前からの知己であるので（模擬戦などはあまりしないが）、特に新鮮さはない。だが。

スバル・ナカジマ。
ティアナ・ランスター。

かつてのＪＳ事件において凄まじい成長を見せ、片や『銀制服のエース』、片や『星の光の継承者』と呼ばれる実力者たちと向き合える。ティアナは何度か会話したことがあるが、スバルは六課で初めて会うことになった。
その実力の噂は聞き及んでいる。しかも、今回はかつてのＦＷ陣が勢揃い。その連携が見られる。

楽しみだった。

ずっと一人で戦ってきた。そうするしかなかった自分。
その力が、どこまで通用するのか。

ファイムは、知らず微笑んでいた。

◇　◇　◇

一方、ファイムが期待するＦＷ陣は、作戦会議をしていた。リーダーはティアナである。

「一応聞くけど、３０分逃げ回る選択肢はあり？」
「ない！！」
「なしです！！」
「というより無理です！！」

ティアナの言葉を、スバル、エリオ、キャロが否定する。当然だ。なのは相手に守りを固めても、まとめて撃ち落とされるのがオチである。
ティアナは口元に笑みを浮かべ、じゃあ、と言葉を紡いだ。

「ララウェイ執務官を落とすわよ。四人で一気に、なのはさんの援護が入る前に終わらせる」
「ええっ！？　ティア、本気！？」
「うっさいバカスバル！　時間も３０分しかない。一か八かだけど、なのはさんを無視するわよ」

ティアナは言い切る。なのはを墜とす――それができれば文句はないが、訓練の後で消耗している今それを行うのはまず不可能だ。
それに、条件は『どちらかを落とす』ことだ。ならば、ランク的にもファイムを狙った方が上手くいく可能性は高い。

「先手必勝。いくわよ、みんな！」
「「「おう！！」」」

◇　◇　◇

市街地を模した模擬戦場の外に、いくつかの人影があった。そこに、新たな影が加わる。

「ありゃ、姐さんたち。何してるんです？」
「ヴァイスか。お前こそ何をしている？」

現れたのは、元機動六課のヘリパイロット、ヴァイス。応じたのはシグナムだ。
ヴァイスは、本部の建物の復興ッスよ、と言葉を紡ぐと、他の観客たちへと視線を向けた。

「隊長たちも。お久しぶりッス」
「あはは、もう隊長やないよ、ヴァイスくん」
「ふふっ、そうだね」
「隊長って……何年前の話だよ」

はやて、フェイト、ヴィータがそれぞれ応じる。ヴァイスは、いやー、と笑った。

「なんつーか、こう呼ばないとしっくりこないんスよね。……で、何を見ておられるんで？」
「模擬戦だ。なのはとララウェイに、元新人たちだな」
「ララウェイって……執務官の？」
「うん。確か、ヴァイスくんもあの時は参加してくれたんやんな？」
「大したことはできやせんでしたがね」

ヴァイスは苦笑。そんな中、模擬戦の始まりが近付いていく。

「さて、あいつらはどうでるんだろーな？」

「うーん、わたしやったらどっちかに集中攻撃して、できるだけ早う終わらせるけどなぁ」

「私もだな。なのはとラウェイを同時に相手取る気はない」

それぞれ指揮官として優秀な能力をもつはやてとシグナムが意見する。その中で、なら、とフェイトが言った。

「例えばファイムを先に落とすってこと？」

「それも手だな。……だが、あくまで落とせるのならの話だ。あの四人に、ファイムを速攻で落とせる力があるかどうか。それが問題だろうな」

シグナムは、そう言いつつも不可能だと感じていた。

四人の実力が低いわけではない。むしろ、一対一ならば互角以上にファイムとは戦えるだろう。

だが、それをファイム自身が誰よりも理解している。

自らの実力を客観視し、冷静に受け止めるのは難しい。だが、ファイムにはそれができる。

四人がファイムを速攻で落とせない理由など、それで十分だった。

◇　◇　◇

「リンネ、向かってくる人数は？」
《三人です。おそらく相手の狙いはマスターかと》
「あはは、予測通りだ」

市街地を模した訓練スペースに無数に立ち並ぶビル、その屋上でスバルたちを待ち構えながら、ファイムは苦笑した。

「なめられてるのかな？」
《というよりは、高町教導官が恐れられているというのが理由でしょう。あまり言いたくありませんが、マスターの方が高町教導官よりも相対の危険が低いですから》
「うん、わかってる。……まあ、そうくるなら僕の方針も決まったね」

ファイムは振り返る。そして右手を突き出すと、障壁を展開した。

――ガギィン！！

衝撃と轟音が大気を揺さぶる。最初に仕掛けてきたのは、エリオだった。

「はああっ！！」

ストラーダの穂先をズラして受け流すと、エリオは叫びながら強引に反転。ファイムに再び特攻する。
ほとんど助走距離のない中で、トップスピードに移る。その力に、ファイムは内心で喝采を上げていた。

そして、速いということはそれだけで相手の対応を遅らせることができる。ファイムもその例に漏れず、ギリギリ両腕をクロスさせて

受け流すことしかできなかった。
空中に放り出される格好になったファイム。彼は、自身の背後に『それ』を感じる。

「リボルバーナックル！！」

ウイングロードでこちらに向かってきていたスバルが、拳を振るう。
ファイムは緊急障壁を展開。吹き飛ばされ、ビルの屋上に着弾。屋上を削りながら、ようやく止まる。
だが――

「クロスファイアー、シュート！！」

追撃の手は緩まない。ティアナが放った魔力弾が、ファイムを包み込んだ。

◇　◇　◇

自身の一撃に手応えを感じ、ティアナは内心でガッツポーズを取る。
キャロのブーストを受けたエリオ、スバルの立て続けの攻撃に、自分の全力の一撃。確実に落とした確信があった。

しかし、煙が晴れたとき、ティアナの表情が曇る。

「まだ、立ってる……！」

無傷ではない。だが、ファイムは落ちていなかった。

（ティア！　どうする！？）
（ティアさん！　指示を！）

スバルとエリオが念話で問いかけてくる。ティアナは自分の後ろにいるキャロに視線を送り、アイコンタクトで指示を出すと、二人に対して言葉を紡いだ。

「作戦続行！　このまま押し込む！」
（わかった！）
（はい！）

二人が応じ、ファイムに向かっていく。ファイムはそれを迎え撃つが、凌ぐので精一杯で、余裕はなさそうに見えた。

「時間がない。次で決める！！」

ティアナは、走り出すと、彼女の相棒であるクロスミラージュを変形させる。『マリアージュ事件』において使用した、ロングバレルの大威力砲撃用モードだ。

魔力が集中。狙いはファイム。
そして引き金をティアナが引こうとした瞬間、ファイムと目が合った。
距離は遠く、偶然に思える一瞬。隻眼が、ティアナを見ていた。

――悪寒。

ティアナは、一瞬だけ躊躇い、すぐにその迷いを捨てる。

（何だろうと、撃ち抜く！　二人とも、いくわよ！）

（うん！）
（はい！）

そして、引き金が引かれる。
オレンジ色の閃光が空を駆け、ファイムを狙う。それは当然、ファイムを狙ったものだった。
――だが。

「スバル！？」

ファイムの側面におり、一度退くはずだったスバルが突然、ティアナの砲撃、その射線上に現れたのだ。
スバルは驚いた表情で振り返り――

――爆発が、空を凪いだ。

◇　◇　◇

「何だ！？　ティアナのミスショットか！？」
「いや、違うな。ララウェイだ」

ヴァイスの言葉に、シグナムが訂正を入れる。ヴィータが、ああ、と頷いた。

「ティアナが撃つ直前に、スバルに幻覚魔法を使いやがった」
「……ほんまに一瞬や。スバルがティアナの位置を確認する瞬間に、それを誤認させたみたいやな。確か、フェイトちゃんも戦技披露会で似たようなことされたもんな？」

「うん。私は距離感を一瞬だけ狂わされて、攻撃を避けられたよ。けど、これは一度しか通用しない魔法だよね？」
「そうだな。しかし、それで十分だ。不意とは二度も三度も衝くものではない。一度でいい。その一度が、こうして形成を逆転させる」
シグナムは言う。確かに、状況は大きく変わった。実際の戦闘であったなら、この後、連携が乱れる原因にもなっただろう。
だが、この模擬戦はそこまでの時間はかからない。
「詰みだな。最初の作戦は良かったが、ララウェイの粘り勝ちだ。……なのはがいなければ、立て直すこともできたかもしれんがな」
そう言ったシグナムの視線の先には、画面の端に映る『エース・オブ・エース』の姿があった。

◇　◇　◇

「スバル！？」
（な、何とか大丈夫！）
返ってきた念話に、ティアナは胸をなで下ろす。流石はヴィータに直接『守り』の指導を受けただけのことはある。
ティアナは頭を振り、ファイムがいるはずのところを見据えた。しかし、目に入ったのは黒髪隻眼の青年ではなく。
白きバリアジャケットを纏った、『エース・オブ・エース』の姿。
「砲撃魔導師に溜めの時間を与えちゃダメだよ？」

《Ｓｔｒｉｋｅ　Ｓｔａｒｓ》

――ズドンッ！！

一閃、桜色の閃光が、スバルとエリオを飲み込んだ。確認するまでもない。問答無用のノックアウトだ。

「スバル！！」

「エリオくん！！」

二人が声を張り上げる。その叫びを切り裂くように、声が響いた。

「余所見禁物です」

《Ｂｉｎｄ》

ガシッ、という音と共に、キャロがバインドで拘束される。ティアナは振り返りざま、クロスミラージュの引き金を引いた。

先程よりは威力が落ちるが、それでも砲撃としては十分な威力を誇る一撃が放たれる。しかし。

「――――」

文字通りの紙一重。ファイムはその一撃を少しも恐れず、ティアナとの距離を詰めた。

体を掠めるティアナの砲撃。だが、ファイムは一瞬たりとも怯まない。

その目はただ、ティアナだけを見つめていた。

――ダンッ！！

ファイムが踏み込む。そして繰り出された拳は、ティアナの眼前で止まった。

「……ッ！！」

ティアナが顔を歪める。ファイムは、ふう、と息を吐くと、拳を戻した。

それが――決着だった。

◇　◇　◇

「ふう……なんとかなって良かった」

「……お疲れ様です」

訓練終わりにシャワーを浴びながらファイムが呟くと、隣から消沈した言葉が聞こえてきた。ファイムは苦笑する。

「そんなに落ち込まなくても」

「……それは落ち込みますよ。三人がかりで、キャロのブーストもあったのに軽くあしらわれて……」

エリオは１４歳になる。見た目はかなり大人びているが、時折こうした負けず嫌いな面がでる。ファイムはエリオのそんな部分を好ましく感じていた。飽くなき向上心は、あるほうがいい。

だが、今は状況が状況なので、苦笑を深めるしかない。

「軽くなんてないよ。いっぱいいっぱいだったし、ギリギリもギリギリだった」
「でも、僕たちの攻撃を一度も受けてないじゃないですか」
「でもそれは、エリオたちも同じだよね？」
ファイムはシャワーを止めつつ、微笑を浮かべた。エリオは、あっ、と声を漏らす。
「さっきの模擬戦、僕は結構派手に吹き飛ばされてたよね？　あれ、わざとなんだ。逃がしきれない威力だったっていうのもあるんだけど、それよりも釘付けにされちゃまずいって思ってね」
「釘付け、ですか？」
エリオもシャワーを止めながら問いかけてくる。ファイムは、うん、と頷いた。
「情けない話だけど、一撃でもまともにもらえば畳みかけられて、間違いなく僕は落とされてたよ。だから、全体を把握しながら戦えるように、常に動いているようにしたんだ。止まって集中攻撃されたら、それこそ一瞬で終わっちゃうから」
「そんなことは……」
「エリオとスバルさんには、それだけの力があるよ。それに、なのはさんが控えててくれたからね。実際、僕の勝利条件は『耐える』ことだけだったんだよ」
そう、耐える。なのはがチャージを行うまで、ただひたすら耐える。あとは、きっかけを一つ作って一瞬でも動きを止められれば、なのはが決めてくれる。
「僕には、エリオたちを一撃で落とすような力はない。だから、そ

れはなのはさんに任せた方がいい。下手を打って僕が落ちることになるのが、一番最悪な結末だから」

この間、エリオとの模擬戦で痛感した。不意を衝いて引き分けは狙えても、勝つことはできない。
それが、差なのだ。
あまりにも圧倒的な、才能の差。

「勝利条件を明確にして、それのみを追求する。僕には、そんな戦い方しかできないから」

ファイムは、苦笑しながらそう言った。

◇　◇　◇

「ティア～、元気出しなよ～」
「別に。元気なくなんかないわよ」

スバルの言葉に、ティアナは素っ気なく応じる。スバルは、そんな親友の台詞に苦笑した。

ティアナ・ランスターは向上心が強く、負けず嫌いだ。四年前からと比べると、かなり余裕が出てきたが、時折こんな風に負けず嫌いな面が出る。
四年前は、自身が凡人であるという劣等感と焦りから暴走したこともあった。ただ、今回のは純粋に悔しいだけだろう。

ファイム・ララウェイ。空戦と陸戦という違いこそあれ、自分たち

より一ランク下の相手を、三人がかりで落とすことができなかった。それについては、スバルも悔しい思いがある。しかし、何かが違うのだ。

負けた。それは事実である。しかし、何故かすっきりしない。負けたら負けたで心の中に灯るものが、出てこないのだ。

「なんなんだろ……？」

スバルは呟く。そんな風に二人が歩いていると、向こうから執務官の制服を着た人物が歩いてきた。ファイムだ。

「お疲れさまです。丁度良かった。お二人を探していたんです」

ファイムは微笑を浮かべる。ティアナは、あたしたちを？　と首を傾げた。ファイムは、はい、と頷く。

「でも、その前に。今日はありがとうございました。非常に勉強になりました」

そう言って、ファイムは丁寧に頭を下げてきた。ティアナの表情が、一瞬だけ厳しくなる。

ファイムは頭を上げると、手に持っていた資料を確認し、言葉を紡いだ。

「いきなりで申し訳ないのですが、本日の午後から明日1日、休暇が出ています」

「ええっ！？　なんでまた？」

スバルが驚きの言葉を紡ぐ。ファイムは頷き、表情を引き締めた。

「『ワグリア』を消滅させた次元航行艦のことは聞き及んでおられますね？……あの艦の位置が、掴めました」
「「！？！」」
二人が驚愕の表情を浮かべる。ファイムは、更に言葉を続けた。
「正確には、掴める、なのですが……これにより、特務部隊機動六課に出動命令が出ました。明後日明朝、我々は『ヴォルフラム』で出撃します」
要は、準備期間を与えるということだ。
わかっているだけで、ホムラ・イルハートという元『エース・オブ・エース』である猛者と、『最強の侍』と呼ばれる、公にはしていないが、管理局が徹底的に敵対することを拒んできた怪物がいる。ギレン・リーや、グリス・エリカラン。姿はまだ確認されていないが、かつてホムラに協力した『騎士』エリア・カリアや、Ｓ－ランク魔導師、リヴァイアス・バルトマカリが出てくる可能性もある。
今並べた名前だけでも、単純な力を考えれば連隊クラスのそれだ。いかに特務部隊であっても、苦戦は免れない。
ファイムは、少し言い辛そうに言葉を紡いだ。
「あまり言いたくはないのですが……理事会は、僕たちの何人かは落ちることになる前提で話を進めておられるようです。……今回のターゲットは、それほどまでに危険な相手。それ故にはやてさん……八神部隊長は、心と体の準備ため、休暇を出してくださいました」
その言葉を受け、二人は頷く。その中で、でも、とスバルが言葉を紡いだ。

「ここから魔導師がいなくなるんですか？」
「いえ……僕と八神部隊長が残ります。基本的には僕と八神部隊長でなんとかするつもりですが、万一の時は緊急で呼び出させてもらいます。ご了承をお願いします」
もう一度、ファイムは頭を下げる。ティアナは、わかりました、と頷いた。
そして、失礼します、とティアナが踵を返そうとした瞬間、思い出したようにファイムが言った。
「ああ、そうだ。お二人とも、バイクは使われますか？　良ければ僕のを使ってください」
そう言って、ファイムは鍵を取り出した。スバルが、いいんですか、と問いかけてくる。ファイムは頷いた。
「デバイスを接続すれば、安全装置も起動するはずなので……良ければ、どうぞ」
「あ、ありがとうございます」
受け取りながら、ティアナは礼を言う。たが、その表情はすっきりしないものだった。
◇　◇　◇
「伝えてきてくれた？」
「はい。みなさん、出発なさられましたよ」

「ん、ありがとうな」
「いえ」

部隊長室にファイムが入ると同時に、そんな会話が展開された。はやては、うん、と背伸びをする。

「ごめんな？　お休み、明日の朝しかとれんくて」
「それははやてさんも同じでしょう？　大丈夫です。休みにすることもありませんから」
「そっか。……ほな、行こっか。まずは聖王教会や」
「はい」

二人は並んで歩き出す。今日、明日の二人の主な仕事は、情報収集とその整理だ。相手が相手である以上、指揮を執る立場の二人は万全を期す必要がある。

「じゃあ、ついでにお昼ご飯も一緒に行こ？　美味しいお店、見つけたんよ」
「いいですね。行きましょう」

ファイムは微笑み、はやても嬉しそうに微笑む。
幸せと呼ぶべきものが、確かにそこにあった。

◇　◇　◇

「……どうしよう」

数多の人間が行き交うクラナガンの街中で、少女は呟いた。待ち合

わせの相手とはぐれてしまった。こんなところで一人、どうすればいいかわからない。

見た目、１０歳かそこらの少女であった。紫色の髪と瞳を携え、内気なのか俯き気味に周囲を見ている。

まるで縋るかのように少女は目を潤わせながら道行く人々を見るが、誰一人として助けてくれるどころか、こちらを見ようとさえしてくれない。

都会のそんな冷たい一面に少女は泣き出す寸前だった。

どうしていいかわからない。どうすべきかもだ。

ギュッ、と、大事なものが入った鞄を小さな腕で抱え込むように握り締める。

――その時。

「あの、そこのキミ」

「何かあったの？」

赤い髪を携えた少年と、桃色の髪を携えた少女が、手を差し伸べてくれた。

◇　◇　◇

「ティア～。だから元気出しなって～」

「うっさい。あたしはいつも通りよ」

「機嫌悪い？」

「……」

遂には無視。スバルは苦笑した。未だにファイムのことが引っかかっているらしい。

ファイムは、いい人だと思う。他人を思いやり、気配りもできる。だからこそだろう。ティアナは、整理できない。いっそファイムが意地悪い人間であれば、ある意味そこで整理ができた。だが、彼は人格的な人物。負けたことと合わせて、ティアナは自分の中でファイムに対するティアナ・ランスターというものが整理できていないのだ。

ティアナの長所であり短所であるこの性格が、完全に裏目に出てしまっている。

「……混んでるわね」

ふと、ティアナが呟いた。見ると、銀行の中は人でいっぱいだった。二人はファイムのバイクに乗り、とある場所へ向かおうとしていたのだが、その前に手持ちがあまりないことに気付き、銀行へ来た。

だが、平日の昼間だというのに、銀行は人でいっぱいだ。

「待つしかなさそうね」

「そうだね。とりあえず番号札を――」

――ダアンッ！！

騒がしかった銀行内に、突如銃声が響き渡った。音が止み、スバルとティアナは弾かれたように音源を見る。

そこにいたのは、覆面を被った男たちが三人。

「全員動くんじゃねぇ！！　動いたらぶち殺すぞ！！」

わかりやすい脅し文句だった。スバルは、ティアナに念話を送る。

（銀行強盗！？　ティア、どうする！？）

（落ち着きなさい！　距離が遠い……！　周囲に被害を出さずに捕まえるのは難しそうね……！）

二人は表面上は従うフリをしながら、必死で打開策を考えていた。だが、このいきなりの展開をすぐにどうにかできるような都合の良い案は、そうそう出てこない。

焦りが二人を包み始める。そんな中、強盗犯の一人が言葉を紡いだ。

「おい、そこのガキ。こっちに来い。他の奴らは動くんじゃねぇぞ」

指名されたのは、綺麗な翡翠色の髪と瞳をした女の子だった。その女の子は一瞬だけ硬直すると、歩き出し、犯人たちのところへ歩み寄った。

――その時。

「ちょっと待てよ」

声が上がった。その場の全員か、声の主を見る。見れば、両手を挙げた状態で犯人たちを睨む金髪の青年がいた。

「そいつを人質にするんなら、俺を人質にしやがれ」

「なんだテメェは？」

「そのガキんちょの保護者だよ。俺にはそいつを守る義務と理由がある」

青年は言う。犯人の一人が、中心に立つ犯人――おそらくリーダーなのであろう人物を見た。リーダーらしき男は、頷く。

「いいだろう。貴様も人質だ。手を挙げたままこちらへ来い」

「あいよ」

青年はゆっくりと歩き出し、犯人たちの側によると、女の子の隣に座り込んだ。犯人の一人が、青年の後頭部に銃を押し付ける。

「妙なことをすれば、撃つぞ」

「あーい」

青年は適当な返事を返す。それを受け、犯人の一人が金を積めと要求を始めた。

それを見ながら、二人は焦りを加速させていく。

（ティア！　まずいよ！　人質を取られちゃった！）

（わかってる！　でも、どうすれば……！）

捕らえるにしても、下手に行動を起こせば一般人を巻き込む。人質など、一瞬で殺されるだろう。

ギリ、とティアナは歯を食いしばる。その瞬間。

（そこの魔導師二人、聞こえてっか？）

いきなり、第三者の声が届いた。二人は驚きながら、表面上は何事もなかったかのように装う。

（状況が状況だ。手短にいく。こいつらが俺たちのとこに来た瞬間、一気に制圧する。援護頼む）

スバルとティアナは、人質の青年へと視線を向ける。作業衣を着、髪をタオルで覆っているその青年は、ニッ、と口元に笑みを浮かべた。

スバルは、思わず声を上げそうになった。彼は――

（反論はなしだ。……いくぜ？）

念話が切られる。それと同時に、青年が動いた。

「なあ、あんた。結構テレビとか見てるだろ？」

「あぁ？」

「よく刑事ドラマとかで、犯人に銃口押しつけてるだろ？　けどあんた、ありゃおかしいぜ。だって――」

――タンッ。

青年に押しつけられていた銃が、静かな音と共に宙を舞った。

「犯人に銃の位置教えてるようなもんだろ」

――ガンッ！！

鈍い音が響く。青年の肘が、犯人の一人の顔面を正確に捉えた音だ。

「テメェ！！」

「次ィ！！」

回し蹴りが放たれ、もう一人が弾き飛ばされる。青年が振り向くと、リーダー格と思しき男が青年に銃口を向けていた。

「死ねえっ！！」

――ドウンッ！！

だが、銃口が火を噴く前に、犯人の銃は宙を舞った。オレンジ色の魔法弾が、正確に男の銃を撃ち抜いたのだ。

そして。

「おおおっ！！」

蒼き戦士が、地を駆ける。

――ドゴンッ！！

人間を殴った時に出る音とは思えない音を響かせながら、犯人は吹き飛んでいった。ガラスを粉砕し、道路に倒れ込む。起き上がる気配はない。

青年は、うわー、と頬を引きつらせながら、スバルに声をかける。

「スバルさん、やり過ぎじゃね？」

「……かなぁ？」

《Ｎｏ　ｃｏｍｍｅｎｔ》

待機状態になったマッハキャリバーが冷たく答える。スバルは苦笑

した。

「マスターも人のことは言えません」

そして、青年の背後から声がかかる。翡翠色の髪と瞳を有するその女の子は、犯人たちにバインドをかけながら青年に歩み寄る。

「一人は顎を粉砕。一人は肋骨を三本へし折る……過剰暴行と言われても、反論できません」

「あー、聞こえねぇ聞こえねぇ」

耳を塞ぎながら、リューイは首を振る。そうした後、リューイはスバルたちに向き直った。

「助かりました。いやー、撃たれるかと思ったッスよ」

「マスターは考えなさすぎです」

「あはは、まあ、なんとかなってよかったよ」

「そうね。特に怪我人もいないし」

スバルの言葉に、ティアナは頷く。迅速な解決。それが一番だ。

リューイは道路に倒れていた男を引き摺るようにして連れてくる。

その様子を見ながら、ティアナはスバルに問いかけた。

「ねぇ、スバル。あの人たちは誰なの？　知り合いみたいだけど？」

「あ、そっか。ティアは知らないんだっけ。えっと、お父さんの部隊の隊員さんで――」

「リューイ・エンドブロム三等陸尉と、ミリアム・エンドブロム一等陸士ッスよ、執務官」

パンパンと手を叩いて汚れを落としながら、リューイは言う。それ

を受け、ティアナも自己紹介をした。

「ティアナ・ランスター執務官です」

「スバルさんから聞いてるッスよ、ランスター執務官。……てか、お二人はどうしてここに？　仕事はどうしたッスか？」

「休暇だよ～。お金下ろしに来たの」

「あー、なるほど」

リューイは頷き、少し考え込むようにんー、と唸ると、なら、と言葉を紡いだ。

「じゃあ、後は俺たちに任せてください。事後処理とかはやっとくんで」

リューイは言い切る。ミリアムは嘆息したが、何も言わなかった。

「お二人とも、休暇ッスよね？　なら、休んだほうがいいですよ」

「ええっ、いいの？」

「ギンガさんには世話んなってますし。休暇潰れんのはキツいっしょ？」

リューイは肩を竦める。ティアナは、ありがとう、と礼を口にした。

リューイは、いやいや、と首を振る。

「気にしないでください。俺たちはあんたたち特務部隊に協力する身でもあるッスから」

「ならば、急いで犯人を引き渡しましょうマスター。仕事は山積みです」

「わーってるっての」

頭を掻きながら、リューイは気を失った状態でバインドをかけられている犯人たちの首根っこを掴むと、ズルズルと引きずり出す。そして、ああ、と思い出したように振り返った。

「えーと、ランスター執務官」

「ティアナでいいわ。今度、お礼させてもらうわね」

「いや、それは別に気ぃ使ってもらわなくてもいいんスけど……何かあったんスか？」

えっ、とティアナは目を丸くする。リューイは、いや、と肩を竦めながら彼の眉間に指を当てた。

「眉間に皺が寄ってたんで。俺の気のせいなら、気にしないでください」

じゃ。そう言って、リューイは外に来ていた警官たちの下へ犯人たちを連れて行った。ティアナは呆然としながら、自身の額に手を当てる。

そこには、本当に微かに、鏡を見ても気付かないであろうくらい微かに、皺が寄っていた。

◇　◇　◇

「ユーノさーん！！」

「ん？　あれ、ヴィヴィオ？」

無限書庫。あらゆる次元世界のあらゆる情報が詰まっているとされ

るその場所の一角で、ユーノ・スクライアは聞き覚えのある声を聞き、振り返った。
無重力の空間を漂ってきたのは、金髪オッドアイの女の子だ。

――高町ヴィヴィオ。
ＪＳ事件において、ジェイル・スカリエッティに利用され、『聖王のゆりかご』を起動するキーとなった。事件の後は高町なのはに引き取られ、今は本当の親子のように幸せに過ごしている少女である。

「どうしたの？　また調べもの？」
「今日は違います。えーっと……」

ヴィヴィオは齢１０という幼さでありながら、司書の資格を有している。だが、彼女はまだ幼い子供であることと、将来はゆっくり決めるべきであるというユーノの考えから、非常勤として関わっている。

そのヴィヴィオが、えーっと、と言いながら後ろを振り返った。ユーノもつられてそちらを見る。すると。

「なのは？」
「にゃはは……仕事中にごめんね？」
「いや、それはいいんだけど……仕事はどうしたの？」
「明後日出撃するから、それまで休暇なの」
「なるほど」

ユーノは納得する。なのはたちの特務部隊が相手取るのは、先代『エース・オブ・エース』が率いる組織だ。いかに特務部隊といえど、簡単にどうこうできる相手ではない。
それに、ユーノが調べた『テンリュウ・シンドウ』という怪物も、

無視できる相手ではないことがわかっている。

「大丈夫、なのは？」

「にゃはは、私は大丈夫。必ず、戻ってくるから」

ガッツポーズを作りながら、なのはは言った。

かつて、ユーノはなのはから全く同じ台詞を聞いたことがある。

誰もが信じられなかった。無敵のエースが墜ちた、その直前に。

人生の中で、一番泣いた日に。

だが、今の彼女はかつてとは違う。

数多の戦場を駆け抜けてきた、絶対的なまでの信頼感が、その言葉には込められていた。

もっとも、だからといって心配しないわけではないが。

「うん。待ってるよ、なのは。信じて待ってる」

「にゃはは、照れるね、ユーノくん」

「だけど、本心だから」

彼女の背中を守れなくなった時から。

歯痒く思いながら。

ずっと、信じてきた。

大切な人だから。

だからこそ――

「うん。知ってる」

なのはが、ユーノの手を握り締める。

二人は、笑っていた。

◇　◇　◇

聖王教会。次元世界においてもっとも浸透している宗教の総本山が、ミッドチルダには存在する。

その中庭を、フード付きの外装を纏い、ファイムとはやては歩いていた。目指すのは、教会の騎士、カリム・グラシアのいる部屋だ。はやてはもう慣れたものであるため迷うことはないが、ファイムはそうもいかない。そのため、はやてについていく形になる。

１０分もしないうちに、目的の場所に着いた。はやてがノックすると、どうぞ、と声がかかる。

「あら、はやて」
「カリム、久し振りや」

親しい間柄であるため、特に畏まった様子もなく、会話がなされる。更にはやては、部屋の隅にいた二人にも声をかけた。

「シャッハとオットーも、久し振りやね」
「はい」
「どうも」

シャッハとオットーが、それぞれ応じる。そんな、自分だけが異端者のような雰囲気の中で、ファイムが口を開いた。

「初めまして。本局執務官、ファイム・ララウェイです」

「ええ。伺っていますよ、ファイムさん。はやてはいつも、あなたの話をするので」
「ちょ、カリム！？」
「そうなんですか？」
ファイムが問う。カリムは、ええ、と頷いた。
「この間など大変でした。あなたが目を覚まさないと泣きついてきたり――」
「カ～リ～ム～？」
「あら、ごめんなさい」
はやてに詰め寄られ、カリムは微笑を浮かべる。シャッハは全く、と呆れたように呟き、オットーはこちらを完全無視していた。
ファイムは苦笑を浮かべ、それを見たカリムはさて、と言葉を紡いだ。
「お二人も忙しい身でしょうし、本題に移りましょう。……実は、新たな予言が出現しました」
「予言、ですか？」
ファイムが眉をひそめる。カリムは、はい、と頷いた。
「私の固有スキルで、詩編の形で紡がれます。もっとも、的中率はよく当たる占い程度なのですが……」
カリムの周りを、タロットのようなカードが舞う。ファイムは、それはまた、と呟いた。

「しかし、それほど凄いものを自分などが見てもよろしいのですか？」

予言などというものを、見てもよいのか。ファイムのそんな問いにカリムは考え込み、そして、結論を出した。

「そうですね……。すみませんが、席を外して頂いてもよろしいですか？」

「はい。すみません、失礼します」

ファイムはそれを受け、退出する。立場のことを考えれば、そういう不確定な情報はあまり広く知られるべきではない。

そうしてファイムが立ち去った後、はやてはカリムに問いかけた。

「ファイムくんに聞かせられへん理由があるん？」

「……私の予言は不確定なものですが、警戒しておいて損はありません。シャッハ」

「はい。騎士カリム」

シャッハは歩み出ると、机の上に今回の目的でもある予言を広げた。

「杞憂に終われば良いのですが、彼……ファイム・ララウェイ執務官についてのものと思われる記述がありました。また、管理局についてのものも」

「なんやて？」

はやてが眉をひそめる。カリムは、頷く。

「再び、『ゆりかご戦役』のような戦いが起こるかもしれません」

◇　◇　◇

聖王教会は、とても広い建物である。ファイムもそれは聞き及んでいたが、実際に見ると圧倒される。

「凄いね……歴史がある、って感じる」

《歴史について詳しい情報をお求めですか？》

「今は遠慮するよ」

《左様で》

リンネが引き下がる。ファイムは微笑を浮かべながら、教会内を歩いていた。

ここは、空気が穏やかだ。静かで、それでいて、優しい。

きっと、ここにいる人たちがそんな人たちばかりだからだろう。

知らず、穏やかな表情になるファイム。

「――――ッ！？」

だが、不意にその表情が大きく変わった。彼の視線の先にいるのは、眼鏡をかけ、長い髪を束ねた一人の女性。

その女性は振り返ると、ニコリ、と微笑んだ。

「妙なところでお会いしますね」

「あなたは……！」

驚くファイムに、ふふっ、とその女性は微笑を漏らす。

そこにいたのは、至高の侍。

――テンリュウ・シンドウ。

ミッドチルダに存在する、墓地。その場所に、シグナムとアギトの姿があった。

◇　◇　◇

「ゼスト殿。貴殿が好んでおられた酒をお持ちしました」
「味わってくれよ、旦那」

アギトがへへっ、と笑う。グラスに入れた酒を供え、花を供える。今日は、休暇ということで二人はゼスト・グランガイツという、かつての戦いで命を落とした騎士の墓参りに来ていた。

「……」
「……」

二人は黙祷。そして、それを終えるとシグナムはその場を離れる。

「シグナム？」
「積もる話も、私がいてはしにくかろう。ゆっくりしていけ」

そう言って、シグナムはその場を離れた。アギトは、ありがとう、と呟き、ゼストの墓に向き直る。

「旦那。四年経って、色々あったよ。あたしもルーも元気にしてる。旦那に助けてもらった命で、生きてるよ」

知らず、アギトの目から涙が零れた。

「シグナムも、はやてさんも、よくしてくれてる。姉御もシャマルもザフィーラも、優しくて。リィンとは時々喧嘩するけど、仲良くしてくれて、ホントに感謝してる」

だから、とアギトは言った。

「だから、旦那は安心して見ててくれよ。話したいこと、いっぱいあったけど、取っとくよ。ずっと先、旦那と同じところに逝ってから、話すからさ」

――じゃあ。

そう言って、アギトが墓に背を向けた時。

カラン、と、グラスの氷が傾いた。その音に、アギトは確かに聞いた気がした。

――待ってるぞ。

そんな、不器用な男の声を。

「おう！！」

アギトは、泣きながら、笑っていた。

――そして、一方では。

「何故かな？　お前のことを思い出す」

共に在ろうとはやてに言われ、本人もそれを望みながら、はやてのために天へと逝った友。

こんな場所に来たからだろうか。何故か、思い出す。

「いかんな。こんなことでは。お前との約束を果たせなくなる」

はやてを守ること。守り続けること。

騎士として。

何より、家族として。

友が唯一為せなかった、共に在り、見守るという行為を行うために。

「雨、か……」

ぽたりと、頬に触れた冷たい感触。

――成程、気が利いている。

空から見ているお前からのメッセージか？

泣いても、いいと。

「お前との思い出は、辛いものばかりだ。だが、お前がくれたこの名が、烈火の将という名こそが、それを耐える力をくれた」

名に負けぬ為に。

この名に恥じぬ、自分になろうと。

そうやって、耐えてきた。

他の騎士たちもだ。
お前のおかげで、主に出会えた。
あの、優しき主に。

――ツウッ。

シグナムの頬を、雫が伝う。だが、それが涙か雨かは、わからなかった。

「シグナム」

アギトが、こちらに来た。シグナムは、ふっ、と微笑む。

「旦那に報告してきたよ。あたしもルーも大丈夫だって。安心してくれって。見守っててくれって。それで、それで――」

「アギト」

努めて笑おうとするアギトに、シグナムは優しい言葉を紡いだ。

「この雨だ。泣いても誤魔化せる。何かが頬を伝っても、それは雨だ」

シグナムの、その言葉。
優しい詭弁。
アギトは、顔を俯ける。その頬を流れるものは、涙ではなく、雨。
真実も事実も、今はいらない。
ただ、想いのままに。

――友よ。
祝福の風よ。

案ずるな。
主はやてには、我らがいる。友がいる。想う人がいる。
笑っている。

だから、せめて。
今は、お前を想い、涙しよう。

◇　◇　◇

『物語は繰り返される
深き業の果て　欲の果て　仄暗い闇
世界は揺れ　世界を覆うは堕ちた夜
分かれ道は数多　移ろう時が全てを決める
星と月　天と風　雷と狂　炎と水　鉄と銃　夜と滅　拳と刃
澄の涙と蒼き決意　紅き意志と桃の願い
金色の炎　堕ちし時　世界は管理者に問いかける
古の伝説
猛き風が墜ちるとき
地上は業火に包まれる
地上の要　風の騎士
彼の者の答えが世界を決める』

紡がれたその予言を見、はやてたちは首を傾げる。わけがわからない。
わかるのは、これが決して良い予言ではないということだ。
そして――

「この、地上の要と風の騎士という記述が、おそらくラフウェイ執務官を示しているのではないかと」
「でも、地上っていっても色々あるし……」
「考え過ぎだと良いのですが」
シャッハが頷く。何も言わないオットーを含め、三人では何も解読できなかった。
そうしてひとしきり考えた後、カリムはまとめるように言った。
「はやて、彼に伝えるかどうかの判断は、あなたに任せます」
「……了解や」
はやてが頷く。その時だった。
――ポツリ。
窓に、雨の雫が落ちたのは。
「……雨……」
呟く。
それだけだった。
◇　◇　◇
「構えないのですか？」
「僕一人では、あなたを捕らえることなど不可能。あなたに戦う意志がないならば、手を出す理由はありません」
降り始めた雨の中、ファイムは言った。

「それに、ここで争えば、被害が出てしまう。一般の方々に被害を出してまで戦うのは、本末転倒ですから」
「道理ですね。私も、ここで争うのは避けたかったところです。……未来ある子供たちを巻き込むのは、本意ではありません」
テンリュウは微笑む。その様子からは、敵意も悪意も感じない。
やはり、とファイムは思った。
調べれば調べるほどに出てきた違和感。
この人は、敵意や悪意で戦っていない。
「あなたが戦う、理由はなんですか？」
「唐突ですね」
「……あなたは、誰も殺していない」
ピクリと、テンリュウの眉がはねた。ファイムは、尚も続ける。
「輸送船襲撃事件においても、地上本部襲撃事件においても、あなたは誰も殺さなかった。だから、聞かせてください。あなたの理由はなんですか？」
「殺さなかったのは、結果論です。お望みとあれば、この場で首を落として差し上げますが？」
テンリュウの目が細まる。ファイムは、嘘ですね、と言い切った。
「殺さないほうが、殺すよりも何倍も何倍も難しい。人は脆いのです。壊れやすく、死にやすい」
ファイム・ララウェイだからこそ、言い切れる。

殺してきたから。
そうやって、生きてきたから。
殺さずに生かす力を、もっていないから。

「僕には、あなたが悪には見えません。あなたは、もっと別の何かを目指そうとしているはずです」

言い放つファイム。テンリュウは、はぁ、と息を吐いた。

「あなたに何がわかるのです？　私の何が？」
「わかりません。わかるはずがない。だから、こうしているんです」

ファイムは、言う。

「人の気持ちはわからない。わからないから、想像するしかない。予想するしかない。信じるしかない。それでもわからなければ、聞くしかない。言葉にしなければ、何一つとして届かないから」

そのために、言葉があるはずだから。

「悪だなんて決められない。話してくれなければ、何もわからない。だから、あなたの口で、あなたの言葉で話して欲しい」

真摯な言葉。テンリュウは、少し、ほんの少しだけ、笑みを浮かべる。

「強い言葉です。私などには勿体無い程に。……あなたの言葉は、敵のものであるとはいえ、とても嬉しく思います。しかし、無理なのです」

テンリュウは、首を左右に振った。ファイムは、そんなことはない、とテンリュウの言葉を否定する。

「あなたが望むことに、協力できるかもしれない。話してくれなければ、その判断さえもできません」

「無理なのですよ。私の望みは、世界の理を、移ろう世界において唯一絶対のルールを覆すことなのです。私に協力すれば、それは管理局への、世界への反逆になります」

テンリュウは、だから、と言葉を紡いだ。

「あなたがそちらに在る以上、それは覆せぬ事実なのです。……もう、賽は投げられた。戻ることは許されません」

「でも」

「“Ｉｆ”の物語は好きですが、今それを行うのは不毛でしかありません。私とあなたは敵なのです。敵に情けを、優しさを向ける前に」

ふっ、と笑みを浮かべ、テンリュウはファイムに背を向ける。

「誰も失わぬよう、できることをすべきでしょう?」

テンリュウの姿が、霧のように霞んでいく。

「再び向き合う時は、全身全霊をもって」

――殺し合いましょう。

テンリュウは、そう言って。

姿を、消した。

「……」

降りしきる雨の中、取り残されたファイムは、無言で先程までテンリュウがいた場所を見つめる。

――確証などない。

三年前、無限書庫にハッキングをしてまでとある次元世界を救おうとした人物がいた。

何者なのか、それは一切わからなかったが。

きっと、テンリュウなのではないかと、ファイムは思うのだ。

あの時捉えたデバイスの名も、『桜花』だったから。

「……誰も、闘争など望んでいないはずなのに」

ファイムは、呟いた。

それが詭弁であり、綺麗事であると、知りながら。

◇　◇　◇

少女は、怯えていた。

手を差し伸べてくれた二人は、管理局の魔導師だった。

――管理局は怖い。

敵だと聞いた。

だから、逃げた。

「ううっ……」

あの優しさも嘘だったのだと思うと、涙が出てくる。少女は、逃げるために走り続ける。

そうして、走っていると。

「おや。こんなところにいたのですね」

人にぶつかった。見上げると、そこには微笑を浮かべる女性がいる。少女は、涙を浮かべながら、その女性にしがみついた。女性は、微笑を浮かべながら、少女を抱き締める。

「いけませんよ。勝手に待ち合わせ場所からいなくなっては。探してしまいました」

「……ごめんなさい」

「ふふっ、悪気があってのことではないのです。構いませんよ」

女性は頭を優しく撫でてくれる。少女は、テンリュウというこの女性が大好きだった。

優しくて、強くて、守ってくれる。側にいてくれる。それが、嬉しかった。

再会が、とても嬉しかったのだ。

「では、参りましょうか」

「……（コクリ）」

少女は頷き、手を引かれながら歩き出す。その中で、テンリュウは、ああ、と思い出したように言葉を漏らした。

「おかえりなさい。アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント」

紡がれたその名が、少女――アリアは嫌いだった。
その名前のせいで、ずっと、ずっと独りきりだったから。
けれど。
テンリュウが呼んでくれるのは、嬉しかった。

「あなたにも居場所が見つかれば良いのですがね……」

呟きは、アリアには届かなかった。

◇　◇　◇

「ねぇねぇ～、ボス～？」
「おん？」
「あと、宗主～」
「どうした、我が同志よ？」
「えっとねー、管理局に補足されるかも？　エヘ？」
「キモい」
「うわ、ボス酷いよ～。泣いちゃうよ～？」
「黙れ阿呆」
「酷い～。女の子泣かせるの～？」
「やかましいわ。貴様は男やろうが。……いや、男やんな？」
「……」
「黙んな！！　お前の回答次第ではわしの対応が変わるんや！！」
「うふふ～どうでしょ～♪」
「くっ、腹立つ……！！」

「まあ、それはどうでもいい」
「いや、わし的にはどうでもよくないんやけど」
「それで、補足されるまでの猶予は？」
「無視かい」
「明後日かな？　あんまり時間がないね～♪　キャハハ♪」
「貴様もか。というか楽しそうやなオイ」
「ふむ。ではどうするか。何かあるかね？　我らが頭目よ」
「ざーとらしくあらへんか？　創始者さん？」
「戦いの知識とカリスマをキミには期待している。策はあるかね？」
「ふむ。この艦が落とされんのは辛いから……せやな、どっかの次元世界で迎え討とか」
「勝算は？」
「丁度やろうとしとったこともあったし、いけるやろ。部隊なんてもんは頭ぁ叩きゃ機能が大幅に低下する。……地獄見せたるわ」
「頼もしい話だ」
「キャハハ♪　うわー、楽しみ～♪」
「せや、楽しみやで」

「――八神はやてを、空から引きずり落とす」

第八話　邂逅、願いと理由（後書き）

友人に、バトらねぇのかよ！！　とつっこまれた第八話です。
予言が出てきたり、ファイムとテンリュウが会話したりと、状況は少しずつ動いていきます。
感想など頂けたら、とても嬉しいです。
では、次回予告を。

次回予告

戦いが始まる。
月の光を纏う英雄が、その策謀を踊らせる。
舞うは夜。
猛るは風。
風は、月を否定する。

「否定はさせない。僕たちの想いに、偽りはない！！」

第九話
「偽りと真実」

第九話　偽りと真実

メディカルルーム。『湖の騎士』シャマルを主とする、六課メンバーの体調管理をする場所だ。
そしてそこには、ファイムの姿があった。

「はい、おしまい。ファイムくん。一応は問題なしよ」
「ありがとうございます」

ファイムは頭を下げる。決戦前に、ファイムは部隊長命令でメディカルチェックを受けていたのだ。

それも終わり、ファイムは立ち上がる。そのファイムに、ただし、とシャマルが言葉を紡いだ。

「前にも言ったように、カートリッジシステムとフルドライブは制限を付けます。ブラスターシステムも、使用は1まで」
「はい。承知しています」

はやてにも釘を刺されていることだ。
ただ、守れるかどうかは別問題だが。

『敵艦船発見!!　総員配置についてください!!』

まるで見計らったようなタイミング。ファイムは、ふぅ、と息を吐く。

これから始まるのは、次元世界でも最高峰の魔導師戦闘。
自分のような小物は、本来なら参加を許されない。

――だが。
それでも。
やれることは、あるはずだから。

「リンネ、付き合ってくれる？」

覚悟を秘めた、その言葉。

いつだって――そうだった。
いつだって、命を懸けてきた。

死にたいわけではない。
生きたいとさえ思う。

だが、それでも。

ここまできたから。
来て、しまったから。
もう、戻れない。

《あなたとならば、どこまでも》

愛機が、応じてくれる。
ファイムは微笑み、歩き出した。

◇　◇　◇

次元航行艦『アンチテーゼ』。定めに反するという名をもつこの艦のブリッジに、『管理局の裏切り者』であるホムラ・イルハートがいた。

彼は、艦の操舵手を兼任するグリス・エリカランに問いかける。

「グリス。もう敵さんは気付いとるか？」

「多分ね～。補足は終わってると思うよん？　今は多分あれでしょ。タイミング計ってるんじゃない？　キャハハ♪」

「なるほど。そーゆーことやったら、丁度ええ。こっちからタイミングをくれたろか」

直後、視界が開けた。

第３２管理世界『ソルトルージュ』。銀色の月と赤い月。二つの月を持つ世界だ。

人口も多く、発展した世界。

何故、わさわざここに来たかというと。

「管理局はご大層にも『全て』を守ってくださるらしいからなぁ。ここなら自然と力を抑えにゃならんやろ」

「キャハハ♪　鬼だねぇ鬼畜だねぇ？」

「打てる手は全て打つのが指揮官や。……さて、ほんならグリス。こっからは作戦通りにいく。不測の事態が起こったときは、任せるで」

「任されました～♪　キャハハ♪　でもあれだよねぇ？　ボスってば結構キツいことするよねぇ？」

グリスは言う。ホムラは、はっ、と息を吐いた。

「どんな聖人君子でも、醜い部分はあるもんや。わしはそれを衝いた……いや、衝こうとしとるだけ。耐えられるんやったらそれは上等。無理やというのなら所詮そこまで。そんだけや」

ホムラが言い切った、その直後。

轟音と共に、『アンチテーゼ』が大きく揺れた。

◇　◇　◇

「砲撃隊は弾幕を途切らしたらアカンよ！！　突撃部隊！！　準備は！？」

『こちらライトニング1。ライトニング分隊及びスターズ3、4は突撃準備完了しています』

次元航行艦『ヴォルフラム』の上に立ち、自らも弾幕を張りながら指示を出すはやてに、通信でフェイトが応じる。はやては頷いた。

「了解や！　ファイムくん！」

「イエッサー、『ボルケーノ・モード・バーストカノン』セット」

ファイムが構えていたガトリング砲のようなフォルムをした武器が、形を変える。

ガトリングの砲身が巨大な大砲に変化。更に、一瞬で数十発分の弾丸を――否、カートリッジをロードする。

「バースト・フレア……ファイア！！」

――ガドン！！

放たれたのは、圧倒的な威力を誇る砲撃。その熱線は、魔力を纏いながら敵艦船『アンチテーゼ』に直撃。突入の穴を開けた。

ガギン、という音と共に熱くなったヒューズを交換。だが、その瞬間にリンネから連絡が入る。

《砲身温度、限界値到達。冷却を開始します》

「お願い。……やっぱり試作品。限界が早い」

ファイム・ララウェイ執務官が今回の戦闘に持ち込んだーーいや、持ち込まさせられたのは、『ボルケーノ』と名付けられた管理局の新兵器だ。

近年、犯罪の傾向が変化してきており、ＡＭＦを始めとする魔導に対する兵器というものが増えてきた。それを克服するためという名目で、本心では『地上の魔導師のために』地上本部の技術部が開発したのがこの『ボルケーノ』である。

弾丸には実弾ではなくカートリッジを使用。更に従来のカートリッジよりも大型にすることで、使用者の魔力消費を限界まで減らすことに成功した。

形状は二種類あり、ガトリング時の弾丸は連射性においてＡＡ－ランク魔導師に匹敵、威力にしてＡＡランク魔導師のシューターに匹敵し、大砲時の砲撃の威力はＡＡＡランク魔導師に匹敵する。使用者の魔力使用がほとんどない現実でこの威力は、正直、圧倒的である。

しかし、その代償として暴発を防ぐためには最低でもＡＡランク以上の魔力操作技能が要求されることとなった上、弾丸こそ魔力で構

成されているが、これは魔法ではないという意見もあり、管理局では未だに普及するか否かの結論は出ていない。

そんな、ある意味魔法であり質量兵器である『ボルケーノ』を構えながら、ファイムは思う。

（管理局は、変わらないといけない）

永遠などないから。

みんな変わっていく。変わらなければならないから。

そうしなければ、移り行く世界に取り残されてしまうから。

だけど。

それでも管理局が管理局であるためには、変わってはならない。魔導という力のみで、平和を築いていかなければならない。

自分が言えた義理では、ないけれど。

『突入部隊、敵艦に突入！！　制圧開始します！！』

移り行く状況を告げる声が、意識を引き戻した。ファイムのすぐ後ろで、はやてが声を上げる。

「よし！！　前線指揮はライトニング１に任すよ！！　わたしたちはこのまま、砲撃を続ける！！」

「「「はい！！」」」

ファイム、なのは、ヴィータの三人が応じる。今回、この三人は突撃部隊の援護として砲撃を行っている。

ギレン・リーによれば、敵勢力の人数は九人という。

ホムラ・イルハート。
テンリュウ・シンドウ。
エリア・カリア。
ギレン・リー。
グリス・エリカラン。
そして、名前がわからない少年と、おそらくはいるであろうとされているリヴァイアス・バルトマカリ。

わかっているだけで今のところ七人。あと二人、不確定要素があるが、そもそもどこまで信用できるかわからない。結局、手探りでねじ伏せるしかないのだ。

そして、ファイムが一度ボルケーノの砲身冷却のために砲撃を止めた瞬間。

「守りは三人ですか。少々、役者不足ではありませんか？」
ゾクリ、と背筋に悪寒が走った。反射的にファイムは振り向く。それと同時に。

「こちらに構う暇がないとでも思われましたか？　なめられたものです」

――ズドン！！

轟音。はやての腹部に、深々とテンリュウの拳が突き刺さっていた。遅れて、パキィン、という、障壁が砕ける音が響く。

「あ〝っ……かはっ……！？」
「はやてさん！！」
「はやてちゃん！！」

ファイムとなのはが同時に叫ぶ。直後、ファイムの隣から何かが跳ねた。

「テメェ！！」

「怒りは判断を鈍らせますよ。紅き騎士」

――ガドン！！

振り下ろされたグラーフアイゼンに、テンリュウは一切の躊躇いもなく拳を振り抜く。

パキン。

亀裂。そして、グラーフアイゼンが砕け散る。

「アイゼン！？」

「重い一撃です。見事」

グラーフアイゼンを迎え討った右拳から血を滴らせながら、テンリュウは言う。そして。

「長居は無用。早々に仕事を済ませましょうか」

キィン、という音と共に魔法陣が展開され、はやての体が光に包まれる。はやてはダメージで動けない。

「マズい！！」

ファイムはボルケーノを投げ捨て、はやての下へと走り寄る。そして。

「……転送」

ファイム・ララウェイと八神はやては、消えた。

テンリュウはそれを見届けてから、なのはの方に向き直る。

「私に与えられた任務は、これで半分が終了。もう半分を遂行させて頂きましょうか」

「二人を、どこへ？」

レイジングハートを構えながら、なのはが問いかける。テンリュウは、ご安心を、と言葉を紡いだ。

「あの二人は頭目の下へと招待しました。予定では八神はやて殿のみでしたが、まあ良いでしょう」

セットアップ、とテンリュウが呟き、テンリュウの体が光に包まれる。

現れたのは、袴を纏う侍の姿。

「……『高町なのはの敗北は、管理局の敗北』。そう謳われているそうですね？」

「……そんなことはないよ。私は、ただ救いたいだけ。助けたいだけ」

「成程」

「だから――」

なのはは、レイジングハートを構えた。

「聞かせて？　あなたがどうして、こんなことをするのか。ううん、

あなただけじゃない。あなたたちがどうして戦うのか、私に教えて」

テンリュウは、面食らった顔を、一瞬、本当に一瞬だけ見せると、ふっ、と微笑んだ。

「彼と同じことを言うのですね」

「えっ？」

「なんにせよ」

血桜を召喚し、構えながら、テンリュウは言う。

「ここは戦場。ルールは一つ。勝者が正義。違いますか？　『エース・オブ・エース』高町なのは殿」

「……わかった」

なのはは一度俯くと、顔を上げる。

「だけど。私が勝ったら、お話聞かせてもらうから！！」

「ご随意に。では。テンリュウ・シンドウ」

二人から、魔力が噴き出す。

「全力！！　全開！！」

「――推して参る」

◇　◇　◇

『アンチテーゼ』内部。外見から想像していたよりも広い内部を、

フェイトたちは走っていた。今はフェイト、エリオ、キャロの三人と、シグナム、スバル、ティアナの二手に分かれて進んでいた。

その最中、マルチ通信で入ってきた情報に、フェイトとシグナムは表情を変える。

「はやてとファイムが！？」

『どういうことだ！？』

フェイトとシグナムが、通信を開いてきたヴィータに怒鳴るように問いかける。ヴィータは、ああ、と頷いた。

『二人は転移させられて、おそらくだがホムラ・イルハートんとこに飛ばされたみてぇだ。なのははテンリュウ・シンドウとやり合ってる。どうする？』

「……」

フェイトが考え込む。指揮官がいない今、下手には動けない。だがもう作戦は始まっている。

どうするか――そう考えた時。

『悩む必要はない。元々我らはこの艦を制圧しにきたのだ。主はやてとラウェイの救出は、その過程で行えばいい』

「シグナム、しかし……」

『どの道、進まねば主はやてたちを救うことさえできんのだ。案ずるなテスタロッサ。主はやてもラウェイも強者だ。簡単には墜ちん』

そう、その通りだ。フェイトは、そうですね、と頷く。

「エリオ、キャロ。作戦は続行。このまま艦を制圧する。その過程で可能なら、はやてとファイムを救出するよ」
「「はい！！」」
『こちらもだ。そしてヴィータ。お前は『ヴォルフラム』を守れ。いいな？』
『『はい！！』』
『おうよ！！』

――パン、パン。

乾いた音が響く。見れば、道の先に見覚えのある男と少年が立っていた。フェイトはバルディッシュを構えながら、男の名を呼ぶ。

「ギレン・リー……！」
「ほぉ？　光栄だな『雷光の死神』」
「キミは……！」
「あの時の……！」
「ウィル・ガーデンズだ。覚えなくていいぜ。どうせ死ぬ」

ギレンは巨大な銃を構え、ウィルは地上本部襲撃の時とは違い、鈍色の騎士甲冑を纏っている。その手に握られているのは、十手槍。

――説得は、無意味。
そうわかっていても、フェイトは言葉を紡ぐ。

「武器を捨て、投降するんだ。今ならまだ……」
「はっ！！　間に合うわけねぇだろうが！！」

ガチャン、という音と共にカートリッジがロードされる。
それが、開戦の合図だった。

◇　◇　◇

「シグナム」

アギトとユニゾンし、綺麗な炎を纏ったシグナムは、そう名乗った。
相手は頷き、日本の剣を構える。左右それぞれ赤と青の柄を持つ、
両刃の剣だ。

「エリア・カリア。仕えるべき主がため、貴様たちを斬り伏せる」
「貴様の主が誰かは知らん。だが、間違っているということだけは
わかる。主が過つ時、それを正すのも騎士の務めではないのか？」

エリアは、剣を構えながら、否、と応じた。

「貴様らの物差しで世界を語るな。貴様に主の何がわかる？　我が
騎士の誇りは唯一つ。あの方と共に在り続けること。例えそれが破
滅の道であろうとも。貴様こそ、そうではないのか？」

エリアは言う。貴様の騎士の誇りは違うのかと。
シグナムは、ふっ、と微笑を漏らした。

「騎士の誇りなど捨てた。私が戦うのは、家族のためだ」
『シグナム……』

アギトがシグナムを呼ぶ。エリアは、ふっ、と笑った。

「我々は互いに相容れぬ想いを抱いている。ならば、取るべき道は

一つ。違うか、烈火の将」
「違わぬな。参るぞ、『蒼き騎士』」
「その名で呼ばれるのはいつ以来か……。いいだろう。古代より我ら騎士は強くなったのか、否か」

古代ベルカから、近代ベルカへ。
騎士は、強くなったのか。
弱く、なったのか。
その答えが一つ、ここでわかる。

エリアの身体が、蒼い光に包まれていく。

「確かめさせてもらうぞ、古代ベルカの騎士よ」
「……来い」
「参る！！」

騎士の戦いが、始まる。

◇　◇　◇

「……」

嫌な汗が全身から噴き出しているのを感じる。後ろにいる相棒も、きっと同じことを感じているはずだ。

スバルは、改めて目の前にいる敵を見た。
おそらく、男だ。体つきは男のそれなので、きっと間違いはない。
こうもあいまいなのは、顔を隠しているからだ。
白い仮面。僅かに彩りが加えられたそれは、男が全身に纏う灰色の

服とは相容れない異質さを感じさせている。
手に持った武器はない。グローブに金属板が取り付けられているところをみると、自分と同じ格闘型だろう。

だが、そんなことより。
この男が纏う雰囲気が、ただただ、異質だった。

（なんなの、この人……？）

目の前に、こうして立っているのに。
まるで、生きていないかのような。
そんな、印象。

「……」

不意に、男が動いた。反射的に、スバルも構える。
始まりは、そんなものだった。

◇　◇　◇

ミッドチルダ首都、クラナガン。

次元世界の中心とでも呼ぶべきその場所で、リューイ・エンドブロムは自身の上司であるギンガと共に、横転したトラックを眺めていた。

「ギンガさん」
「どうしたの？」

「いや、ファイムたちがヤバい戦いしてるってのに、俺たちこんなことしてていいんスかね？」

ファイムたちが作戦行動に入ったことは、ついさっき通信で聞いた。それなのに、こんなことをしていていいのかと思う。

ギンガは、うん、と頷いた。

「私もそう思うけど、こっちも無視できないのよ。このトラックが運んでいたものが、少し問題で」

「密輸品スか？」

「ええ。……しかもロストロギアなのよ」

「うわぉ」

リューイは口笛を吹く。だから、とギンガは言葉を紡いだ。

「これはもしかしたら事故じゃなくて、ロストロギア絡みの事件かもしれないの」

「……なーるほど。んじゃ、調査しますか」

うん、と背伸びをしながら言うリューイに、ギンガが言葉を紡いだ。

「ちょっと待ってリューイくん。頼りになる助っ人が来るから」

「助っ人ッスか？　一体――」

「リューイっ！！　久し振りッス！！」

「どわっ！？」

誰ですか、と問う前に、答えが飛びついてきた。リューイはいきなり背後から抱きつかれ、抱きついてきた人物ごと床に倒れ込む。

リューイはうつ伏せに倒れた状態で、背中に乗る襲撃者に言葉を紡いだ。

「よぉ……ウェンディ。元気にしてたか？　あと重い」

「失敬な！　こう見えて体重減らしたんスよ！？」

「元気みたいだな。てか、『こう見えて』って言ってる時点で自覚してんじゃ……あだだ！？　やめろ！　背中をつねんな！」

「知らないッス」

ふん、とウェンディはそっぽを向くと、リューイから離れた。しかし、背を向けたその姿からは構って欲しいオーラが迸っている。リューイはやれやれと肩を竦めた。

「ウェンディ。悪かったって。久し振りだったから調子に乗っちまった」

「……」

「今度甘いもんでも奢ってやるから、機嫌直してくれよ」

「……なら、サンズハーツのケーキがいいッス」

出てきた名前に、うっ、とリューイは一瞬だけ言葉に詰まる。その店は、クラナガンでも有名な高級ケーキを取り扱っている店だった。

リューイは一瞬考えた後、わかったよ、と頷いた。

「仕事終わりにでも買ってやるから。機嫌直せ」

「ホントッスか？」

「嘘吐いてどうすんだよ」

リューイは肩を竦める。ウェンディは、再びリューイに抱きついた。

「大好きッスよリューイ！！」
「ええい、くっつくな。仕事中だっての」
ぐいぐいと引き離そうとするが、流石は戦闘機人。その力は普通ではない。
無駄なことに力を使ってんじゃねぇ、と、リューイが言葉を紡いだ時。
――チリッ。
感じたのは、違和感。
振り向いたのは、偶然。だが、その偶然に感謝することになる。
影。
佇むのは、全身を黒き甲冑で包んだ男。唯一鎧に覆われていない顔は、薄い笑みを浮かべている。
「戦場でじゃれ合うとは、余裕だな。鼠でも危機には気付き逃走するぞ？」
「誰だテメェ？」
リューイは優しくウェンディを遠ざけながら、問いかける。男は笑った。
「我は代行者。破壊者。断罪の執行人。貴様等に救いを与えるため、その首をもらい受ける」
「勝手な台詞だな」
リューイは吐き捨てる。男は笑みを崩さない。

「我は代理人。故に引き金を引く。安全装置を外す。照準も合わせる。返り血も浴びる。だがそこに、我が意志は介在しない。……我が意志を向けて欲しくば、力を見せてみるがいい、小僧」

男が、一振りの斧を形成。その刃を、リューイに向ける。

「安心するがいい。今宵の俺は機嫌がいいのでな。一撃必殺。見敵必殺。苦しむ間もなく送ってやろう」

「……ブラッディハウンド、セットアップ」

リューイは呟く。同時にリューイの体が光に包まれ、彼を守る武具が姿を現す。

その手に携えるのは、幅広の大剣。長さはリューイの高い身長に僅かに届かない程の長さで、普通の者なら振り回すことさえできないだろう。

そしてその身を包むのは、紅蓮の鮮やかな彩りで飾られた騎士甲冑。最早レアスキルと同等レベルで稀少な存在である真正ベルカの騎士が、顕現する。

「やれるもんならやってみろよ。何が来ようと己の信ずる武器を以てねじ伏せる。それこそがベルカの騎士と、俺は教わった」

「ほう……ほうほうほう！！　素晴らしい……実に素晴らしいぞ小僧！！」

男は、高々と笑い出す。

「『地上本部のエース』が不在と聞き、ギンガ・ナカジマ三等陸尉を引き出すのが精々と思っていたが！！　いるではないか！！　な

あ小僧!?　面白い!!　実に面白いぞ!!　頼むぞ小僧!?　その姿!!　立ち振る舞い!!　それが偽りなどと申すなよ!?」
「はっ、見かけ倒しかどうか、テメェで判断しな」

言いながら、リューイはＩＳを起動しようとしていたウェンディと、同じくブリッツキャリバーを起動しようとしていたギンガを見る。
そして。

「ここは俺に任せてください。二人は、周辺の安全確保を」
「リューイ!?　何を言ってるッスか!?」
「相手は推定でオーバーＳランクなのよ?　一人で相手をするのはいくらなんでも無茶よ」
「聞いてください」

油断なく男を見据えながら、リューイは言った。

「ただでさえ事故で野次馬が集まってきてたのに、あいつが現れてそれに拍車がかかってしまいました。このままじゃ、巻き込んじまう」

それだけは、避けるべきことだった。
関係のない者たちを、巻き込むことだけは。
ウェンディが、でも、と言葉を紡ごうとする。だが、その前にリューイが遮るように言葉を紡いだ。

「別にずっとってわけじゃねぇよウェンディ。避難が終わりゃ加勢してくれ。ミリアム連れてきてくれりゃ、尚ありがてぇ」

リューイとて馬鹿ではなく、この四年でそれなりに危険な現場というものを潜り抜けてきている。その拙い勘でもこの男がヤバい相手

とわかるのだ。一人で無理するつもりはない。
ただ――

「……わかったッス。いいッスね？　無理はしちゃダメッスよ？」
「わかってる。……頼んだ」
「了解ッス！！」

ウェンディが頷くと、ギンガも了解の言葉を紡ぎ、二人は走り出した。それを見送ってから、男が言葉を紡ぐ。

「小僧、中々紳士ではないか。女子供を戦場から遠ざけるとは。実に見上げた精神だ」
「別に。あの二人じゃなきゃこんなことしねぇよ。男女平等だ。特に魔導師に性別なんざ関係ねぇしな」

ガチャリ、という音を響かせながら、リューイはブラッディバウンドを握り直す。ほう、と男が眉を吊り上げた。

「なんだ、どちらかは貴様の伴侶か？」
「そんなんじゃねぇ。ただの恩人だ」
《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ガシャン、という音と共にカートリッジをロード。リューイの魔力変換資質により、刀身が炎に包まれる。
美しい、金色の炎だった。

「俺みてぇなどうしようもねぇ奴に笑顔を向けてくれんだ。守りてぇって、そう考えんのは当たり前だろうが！！」
「……成程、気迫は十分。しかしそこに実力は伴うか？」

男は斧を――汎用性を無視し、ただただ敵をねじ伏せることのみを追求した戦斧を構えながら、言い放つ。

「祈りはすませたか？　小便は？　懺悔は？　頭を垂れ、許しを乞う覚悟は？　我が名はリヴァイアス・バルトマカリ。留めたか？　覚えたか？　ならば――抱えて死ね！！」

ドンッ、という轟音と共に、リヴァイアスが地面を蹴り飛ばす。

「我が刃を見切れるか！？」

――ギィィイン！！

響く轟音。リューイは正面から、リヴァイアスの一撃を受けてみせた。

「テメェこそ、ついてきやがれ！！」

ガウン、という音と共にブラッディハウンドが薙ぎ払われ、リヴァイアスが後退。そこへ向けて、リューイの魔法が放たれる。

「ブレイズカノン！！」

《Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ》

放たれた熱線が、リヴァイアスを狙い撃つ。

直撃。リヴァイアスが爆発に巻き込まれる。だが。

「――――ッ！！」

直後、リューイの背後から死の刃が迫り来る。リューイはそれを受

け止め、刃を返し、弾くようにリヴァイアスを吹き飛ばす。
リヴァイアスは押し流され、床を削りながら勢いを止める。

そして、笑った。

「面白い。実に面白いぞ。いと高き銀月の従順たる刃、リヴァイアス・バルトマカリ。我はー一否、俺様は貴様を敵と認識する」

リヴァイアスから放たれていた魔力の圧力が、増していく。

「貴様を障害と、俺様は定めよう。さあ名乗るがいい小僧。敵と定めた者の名を刻むは俺様の流儀だ」

「……リューイ・エンドブロム」

「認識した。認識したぞ小僧、否、リューイよ。楽しいぞ楽しいぞ楽しいぞ

呼びかける。だが、反応はない。

「無駄や無駄。しばらくは目を覚まさんよ」

そんなファイムに、声が届いた。顔を上げると、そこにいたのは一人の魔導師。

ホムラ・イルハート。

ホムラは広い空間の中ほどまで歩いてくると、壁際にいるファイムに言葉を紡ぐ。

「嬢ちゃんはしばらく目を覚まさんよ。覚ますわけがない」

「はやてさんに何をした!!」

ファイムが吠える。ホムラは、ははっ、と笑った。

「もっと冷静な……というより冷酷な奴かと思っとったが。なんや、意外に熱いやないか。それともあれか？　その嬢ちゃんが特別なんかな？」

「……」

ファイムはホムラを見据える。ホムラは肩を竦めた。

「別に殺す気はあらへんよ。けど、せやな、殺しといたほうがええんかな？……今後のために」

――ドパァン!!

乾いた音が響いた。ホムラの障壁に、ファイムの拳が突き刺さった音だ。

柔らかな感触。普通の障壁とは違うその感触は、拳の威力を吸収された証。

ファイムは、ギリッ、と歯を食いしばる。ホムラは、ははははっ、と笑った。

「成程成程……そこが境界線か。嬢ちゃんの存在が、自分にとっての境界線と。ははっ、わかりやすいなぁ」

「……ッ！！」

ファイムはホムラから飛び退くように離れ、拳を握る。そして。

「フルドライブ！！　モード・フェザーナイツ！！」

《Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ，ｍｏｄｅ　Ｆｅａｔｈｅｒ　ｋｎｉｇｈｔｓ》

届かぬことは承知の上。それでもファイムは、拳を握る。

その背に背負うは、守りたい、大切な人。

守るために必要ならば、未来さえも投げ捨てる。

「ここまで来ると、健気通り越して哀れやな。わかっとるんやろ？　自分の拳は、わしには届かへん」

「だとしても！！」

《ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

吐き出される薬莢は、六つ。一度に使える、限界量。

更に。

「ブラスターシステム起動！！」

《Ｙｅｓ，ｇｅｔ　ｓｅｔ》
「ブラスター１！！　リミットリリース！！」

今のファイム・ララウェイが耐えられる、限界の一撃。
これ以上……いや、すでに、体は悲鳴を上げている。だが、ファイムは止まらない。

――ここで、終わらせる！！

薄々結果には感づいていた。しかし、ファイムはそれでも、止まらない。
守るために。
貫き通すために。
自らの想いを貫くためには、自分を捨てねばならないから。

「あああっ！！　バースト！！」
《Ｂｕｒｓｔ　Ｓｔｏｒｍ》
「ストームッ！！」

放たれたのは、翡翠の暴風。荒れ狂うそれは、人など簡単に砕いてあまりある威力を誇る。突き抜ければ、壁など容易に吹き飛ばすはずだった。
しかし。

「温いなぁ」
《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｍｕｌｔｉ　ｍｏｄｅ》

ウォン、という音と共に、空中にいくつものミッド式魔法陣が展開される。そして次の瞬間、そこから障壁が展開され、まるでファイムを囲むように壁で形作られたドームが出来上がる。

――翡翠の光が、潰える。

ファイムの魔法は、真っ正面から、否、真上から強引にねじ伏せられた。

どれほどの、力の差か。

「今のはちょいとヤバかったで」

パキィィィン……という澄んだ音と共に、障壁がすべて消え去る。

まるで新雪が舞い降りるかのように、銀色の魔力が空から舞い落ちる。

たが、その魔力はすぐさまホムラの下へと収束する。

「フレア・ザ・フレア。クロフ・ザ・クロフ。お返しや。吹き飛べ」

《Ｍｏｏｎ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

収束砲が、ファイムに向けられる。マズい、ファイムがそう感じ、避けようとした瞬間、ファイムは気付く。

――避ければ、無防備なはやてに当たる。

「……ッ！？」

歯を食いしばり、ファイムは後退。同時に、ホムラの魔法が臨界点を迎える。

銀色の光が、ファイムの視界を覆い隠した。

◇　◇　◇

バシュッ、と排気管より蒸気を吐き出す愛機を握りながら、ホムラは煙の中心を見た。そして彼は、笑みを浮かべる。

「ほぉ。ＡＭＦか。やるやないか」

「……」

八神はやては無傷。しかし、ファイム・ララウェイは満身創痍だった。

おそらく、ＡＭＦで威力を相殺しつつ、文字通り体当たりで八神はやてを庇ったのだろう。それでも八神はやてに被害がないのは奇跡だが、その代償も大きすぎる。

非殺傷設定でなければ、腕の一本くらいは吹き飛んでいただろう。

手加減して尚、ホムラ・イルハートとファイム・ララウェイにはそれだけの差があるのだから。

「さて、もう一度言わせてもらうで。自分の拳は、わしには届かん。精神論でも、根性論でもあらへん。ただ単なる事実として、自分はわしには届かない」

そもそも、わかっていたはずのことだ。

『たかが』Ａ＋ランク程度の魔導師が無理を重ねたところで、『エース・オブ・エース』に届くはずがない。

例え命を諦めようと。

それでも届かぬ高みだからこその『エース・オブ・エース』なのだ

から。

しかし、ファイムはそれでも諦めない。
ホムラは、茶化すわけではなく、心の底からの疑問をファイムにぶつけた。

「自分は状況が読めんほど阿呆やないはずや。何故、まだそんな目をしとる？」

『不屈の魂を持つエース・オブ・エース』でもないくせに、と、ホムラは言った。

ファイムは、口から溢れる血を吐き捨て、言葉を紡ぐ。

「意地」

言葉にすればそれだけで。
しかし何より大切な、その言葉を。

「才能がないのは理解してる。力が足りないのも理解してる。届かないのも理解してる。不可能は可能にならないと気付いてる。……でも、諦めたくない」

ファイムは、床に手を突きながら、立とうとする。
あまりにも無様なその姿を、しかし、ホムラは笑えなかった。

「才能とか。実力とか。不可能とか。限界とか！！　そんなもので！！　その程度のもので！！　諦められるわけがない！！　僕はここにいるんだ！！　何かが変わるかもしれない！！　変えられるかもしれないんだ！！」

ファイムは、力が入らず、一度床に倒れる。だが、その目が死ぬことはない。
再び起き上がろうとする姿は、果てしなく無様で、みっともない。

しかし、ホムラはそう感じなかった。

「才能も実力も届かないなら!!　残ってるのは意地だけだ!!
それだけが!!　あなたたち『天才』に立ち向かえる唯一のものだ!!　誇れるものだ!!」

力がないから。
どれだけ努力しようと、届かないことを知っているから。
だからこそ、心だけは屈しない。
それしか、残っていないのだから。

「ここで屈してしまったら!!　僕には何も残らない!!　拳も握れる!!　足も動く!!　五体がある!!　ならばまだ、やれることはあるはずだから!!」

ホムラは、一瞬。
ほんの一瞬だけ、気圧された。

だがすぐに、それを誤魔化すように吐き捨てる。

「意地も度が過ぎたら見苦しいだけや」
「見苦しくていい。それに……」

ファイムの視線が、一度だけ後ろへ流れた。
彼の視線の先にいるのは、八神はやて。

「大切な人の前で意地を張らなくて、どこで張るっていうんだ」
「見てへんのにか？」
「関係ない」

ファイムは言い切った。さよか、とホムラは息を吐く。

「せやけど、力が無ければどんな言葉も虚しいだけやぞ。どんな言葉も、力が無ければ届かない」
《Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》

白銀の光が、ファイムを飲み込んだ。

◇　◇　◇

世界最強の魔導師は誰なのか？

おそらく、誰であっても一度は抱く疑問であろう。そして同時に、解がわからぬ問いでもある。
しかし、今。
この『ソルトルージュ』において、その答えが出ようとしていた。

「どうしたのです？　管理局の『エース・オブ・エース』殿。あなたの力は、この程度ではないはずです」

最強の一人、テンリュウが、同じく最強を謳われる英雄、高町なのはに問う。

「いと高き銀月と紅月が浮かぶ空。その全てが我らの戦場。この広い世界で我らは争い、敵を制圧する。その覚悟がないのなら、時間の無駄です。立ち去りなさい」

「……違うよ」

なのはは、テンリュウの台詞を否定する。

「私の魔法は、あなたを倒すためのものじゃない。言葉では届かない想いを届ける力。悲しい今を撃ち抜く力。泣いてる誰かを、助ける力！！」

キィン、と魔法陣がなのはの足元に展開される。テンリュウは、何を、と言った。

「今この場のどこに、泣いている者がいるのです。私はあなたに刃を向け、純粋な殺気を向けている。泣いている者など、いないではありませんか」

「嘘！！　あなたは嘘を吐いてる！！」

なのははレイジングハートを構えながら、テンリュウの言葉を否定した。

「そんな悲しそうな顔で戦う人が、殺意なんてもってるはずがない！！」

「……ッ！？」

テンリュウの表情が、僅かに歪む。

そのまま、テンリュウは言葉を紡いだ。

「ならば……ならばどうするというのです！？　あなたと私は敵同

士！！　こうして向き合ったならば、殺し合うのが戦場の掟！！
あなたも私も譲れないものがあるならば、妥協点など見つけようがない！！」
「妥協なんて、しなくていい。譲れないものがあるなら、ぶつかり合うのも仕方がないかもしれない。だけど、何もわからないままぶつかり合いたくない！！　だから教えて！！　あなたの理由を！！」
「くどい！！　私はもう後戻りなどできません！！　ならば！！
最後まで突き進むのみです！！」

テンリュウも魔法陣を展開。二人から魔力が吹き荒れる。

「ブラスター１！！　リミットリリース！！　全力！！　全開！！」
《Ｓｔｒｉｋｅ　Ｓｔａｒｓ》
「夢想演舞！！」
《Ｌｉｍｉｔ　ｒｅｌｅａｓｅ》

空で、光が瞬いた。

◇　◇　◇

「……意地だけなら、最早凄い通り越して異常やな自分」

紡がれた言葉に対して、返事はできなかった。もう、しゃがんだ状態から立つこともできない。
しかしファイムは、ホムラを睨んだ。心は折れていない。

「確か、自分は『管理局が正義であるために』使われてきたんやんな？」

不意に、ホムラがそんなことを言い出した。ファイムは疑問符を浮かべながら、ホムラの言葉を聞く。

「せやけど、それって矛盾しとるよな。だってそうやろ？　正義のために、って、始めから管理局が正義なら、自分は必要なかったはずやもんな？」

それは、核心。

ファイムがずっと、抱え、封じ込めていた管理局の矛盾。

ファイム・ララウェイという存在こそが、矛盾だという事実。

「管理局……名は体を表すゆうけど、ここまで的確な名前は中々あらへんなぁ。まあ、ゆーても管理局の言う『管理』は『支配』と同義やけどな」

ホムラは、吐き捨てるように言葉を紡いでいく。

「質量兵器を禁じてんのも、平和を謳って次元世界に介入すんのも。全部支配のためや。くだらん」

「違う……管理局は……ッ！！」

「何が違う？　大体、誰が頼んだんや。『次元世界を管理してくれ』なんて。誰も頼んでへんやないか。押し付けがましいんや。好き勝手やっといて、『平和』なんざ謳いよって」

――虫唾が走るわ。

ホムラは、吐き捨てた。

だって、彼は。

そんな管理局に、妹を奪われたのだから。

「平和だのなんだのと綺麗事ばかり並べ立てて、実際はどうや？年がら年中上層部は利権争いに終始。果てには局員が戦死したことを無駄とまで言う始末。偽善もここに極まれりや。違うか？」

ホムラの言葉には、憎悪が込められている。

怒りと、憎しみと、諦めと。

ファイムは言葉の端々にそれを感じながら、それでも、彼には同意しない。

「そんなこと……ずっと前から、わかってる。管理局が正義じゃないことくらい。偽善であることくらい」

――立て。

ファイムは、自分に言い聞かせた。

「理事会が発足しても、何も変わらない。現場で魔導師が倒れても、泣くのは現場の仲間だけ。上層部は見向きもしない。そんなこと、ずっと前からわかってる」

傷によって震える体。それを、ファイムは無理矢理動かす。

「上層部は正義じゃない。偽善ですらない。だって、平和を望んで戦っているのは、いつだって現場の魔導師だから」

かつて、カグラ・ランバードという男が『権力は麻薬』と表現した。

どれほどの人格者であろうと、権力を手にすれば変わってしまう。

だから、現場の魔導師たちは取り残される。
信じていたのに、裏切られる。
けれど。

「そんな偽りの正義を翳す管理局を、望んでくれる人がいる。平和を、平穏を望む人がいる。助けを求める人がいる。その人たちは、管理局を正義と信じてくれている」

だって。
その人たちが見ているのは、上層部じゃない。
現場で戦う、本物の正義の代行者たちだから。
だから。

「否定はさせない。僕たちの想いは、偽りなんかじゃない!!」
「偽善や。所詮はな。管理という名の支配を求める管理局が掲げるもんは、正義やない。善ですらない。偽りに過ぎひん」
「違う!! 戦っている現場の局員は、誰一人として偽物なんかじゃない!!」

――立て!!

ファイムは、自らに言い聞かせ……立ち上がる。

「みんな!! 少しでも多くの笑顔を作ろうと!!! 少しでも多くの幸せを作ろうとしてる!!! その想いは真実だ!!」
「関係あらへん。結局上がクズなら変わりはせんよ」
「だったらあなたは違ったのか!?」

ピクリと、ホムラの眉が跳ねた。ファイムは、怒鳴るように言葉を紡いでいく。

「『エース・オブ・エース』と呼ばれたあなたは!!　英雄と呼ばれたあなたは!!　多くの命を救ってきたあなたは!!　偽りだったのか!?　救いたいと!!　平和が欲しいと!!　そう望んだことはなかったのか!?」

――そんなはずはない。

何よりも大切なその気持ちを持たずして、『エース・オブ・エース』などと呼ばれるはずがないのだから。

『エース・オブ・エース』は管理局の英雄であると同時に、絶対的な『本物』なのだから。

ホムラは、はっ、と息を吐く。

「随分吠えるやないか。いい気になるなよ小僧。そのわしを裏切ったのが管理局やろうが!!」

「だったらどうして戦わなかった!?　間違っていると理解しながら!!　どうして逃げ出したんだ!!」

ファイムの叫び。

今度こそ、ホムラの感情が爆発する。

「いい加減にせぇや小僧が!!　貴様にわしの何がわかる!?　管理局の犬のくせに!!」

「わかるわけがない!!　僕には肉親がいないから!!　失うことを想像さえできない!!　だけど!!　これだけはわかる!!　あなたは戦うべきだったんだ!!」

奪われたからこそ。

裏切られたからこそ。

ホムラ・イルハートという人物は、叫ぶべきだったのだ。

――『間違っている』。

ただ、その一言を叫ぶだけで良かったのに。

彼はしかし、そうしなかった。

「カグラさんがあなたと敵対したのは!!　戦うべきだと感じたからじゃないのか!?　大切な人を奪われて!!　辛くなかったはずがない!!　苦しくなかったはずがない!!　泣かなかったはずがない!!　恨まなかったはずがない!!　それでもカグラさんは耐えたんだ!!　翼を失っても!!　納得できなくても!!　残って戦うことを選んだんだ!!」

――そうでなければ。

あれほどまでに、他人を助けようとするはずがないから。

あんなにも孤独に、全てを擲つように戦うはずがないから。

ホムラは、だからなんや、と、言葉に殺意を乗せた。

「ほざくな小僧!!　わしらに何ができた!?　何が変えられた!?　何もできやせぇへん!!　また裏切られんのがオチや!!」

「変えられたはずだ!!　動けたはずだ!!　だってあなたは英雄だったんだから!!　僕なんかと違って、誰より高みにいたんだから!!　あなたは逃げたんだ!!　戦うことから!!　失ったことを耐えることから!!」

「――――ッ!!」

――ダンッ!!

ホムラは、ファイムの胸倉を掴むと、壁に叩きつけた。ファイムは衝撃を逃がすことさえできず、口から血を吐き出す。
だが、その表情に苦悶はなく。
むしろ、ホムラの方が余裕がないように見えた。

「あなたの、負け、です。わかってるんでしょう？　あなたはーー」
「黙れっ！！」

鼓膜が破れそうになるくらいの大声だった。ホムラはファイムをねじり上げている手とは逆の手で、手が震える程強く彼のデバイスを握り締めると、それをファイムに向けた。

「全部今更や。今更何ができる？　管理局が間違っとんのは変わりゃせぇへん。だったらわしはーー」

――ただ、壊すだけや。

ホムラは、酷く冷たい声でそう言った。ファイムは、ぐっ、と歯を食いしばると、一言だけ、言葉を絞り出した。

「……やり直せます」

望んだならば。
その言葉は、紡げなかった。

ただ、ファイム・ララウェイだからこそ、わかる。
どうしようもなくても。
こんな罪人でも。
生きていくしか、ないのだと。

「はっ」

ホムラは、吐き捨てる。

「――10年遅いわ」

第九話　偽りと真実（後書き）

個人の想いは正しいのに、どうして組織になると、偽りになってしまうのか。
アマネ・リィラです。
今回は開戦ですね。次回は少し長くなるかもしれません。
また、今回と次回は様々な意見、価値観が出てきます。それについてもご意見等ございましたら、是非ともお願いします。
ありがとうございました！！

次回予告

力と力。技と技。
磨き上げてきたそれと、常に共にあった大事な気持ち。
大切な人。
守りたい人。
かけがえのない日々。
その全てをあざ笑うように、一度は潰えたはずの夜が、再び世界に牙を剥く。

「それを受け入れられるほど、人間できていないので」

次回、第十話
「夜の夢」

第十話　夜の夢

最初に出会ったのは、師匠……ゲンヤさんの紹介やった。

『ファイム・ララウェイです。よろしくお願いします』

それは、まだまだ部隊指揮をする上では新人やった頃の話で。
酷く丁寧なその言葉が、壁を作っているように感じた。

だから――手を、差し出したんや。

『よろしく』

その時、彼がひどく驚いてたのを覚えてる。
後から知ったけど、彼はずっと独りやったから、そんな風に握手をすることさえも珍しかったんやね。

それが――出会いやった。

◇　◇　◇

――――！

轟音が響き渡る。吹き荒れる焔と氷。その全てが世界を蹂躙し、砕いていく。

「レヴァンティン！！」

シグナムが吠え、その剣に焔が宿る。対し、エリアも応じる構え。

「クリスティナ！！」

その双剣が氷を纏い、二人の騎士が必殺の意志を込めた一撃を抜き放つ。

『「紫電！！　一閃！！！」』

「氷姫！！　轟閃！！！」

――激突。

そして、轟音。

「「――――ッ！！」」

二人は吹き飛び、壁に叩き付けられる。だが、すぐさま起き上がった。

言葉は――必要ない。

ただ全力を以て、敵を討つ。

自らの誇りを懸けて。

剣に誓った理由を込めて。

何よりも――大切な、主のために。

「クリスティナ」

凛とした声が響き渡った。見れば、エリアがその双剣を十字をかた

どるように構えていた。同時、その刃が光を放つ。

「『氷姫』エリア・カリアと、氷の双剣クリスティナ。その真なる姿」

《Ｃａｔａｐｕｌｔ　Ｆｏｒｍ！！》

その刃が形を変えていく。それを見て、シグナムとユニゾンした状態のアギトが吠えた。

『シグナム！！』

「わかっている。――レヴァンティン」

《Ｊａｖｏｗｌ！！》

愛機が応じ、シグナムもまた、構える。

「烈火の将シグナムと、烈火の剣精アギト。炎の魔剣レヴァンティン。――その第三の姿」

《Ｂｏｒｇｅｎ　Ｆｏｒｍ！！》

石弓と弓矢。

二人にとって必殺のそれが、互いの命に照準を合わせ、激突する。

「駆けろ！！　隼！！」

「貫け！！　氷刃！！」

――世界が、染まる。

◇　◇　◇

地上で仕事を多く受けるようになってから、何度か彼と会うことになった。
そして、いつも以上に疲れた様子の彼に、わたしは思わず声をかけた。

『ファイムくん、大丈夫？』
『大丈夫です。少し、寝てないだけで』
『……まさか、またなん？』

問いかけ。それに、彼は頷いた。
ファイム・ララウェイは執務官である。そして執務官というのは、基本的に多忙だ。しかも事情によって結果的に地上の全てを担当する彼は、あのフェイト・T・ハラオウンでさえも驚くほどの仕事を抱えている。
しかし、そんな彼の下に補佐が長くいたことはほとんどない。

執務官補佐。その立場は、基本的にステップとして認識されている。要は、『執務官になるための過程』なのだ。そして、執務官の花形というのは基本的に多次元を渡ってこそである。しかし、ファイムは地上の仕事ばかりを受け、他の次元へ渡ることはほとんどない。そんなのでは、将来執務官になった時の人脈も築くことが難しく、結果としてファイムの下から補佐官は離れていく。そうする度に、彼は忙殺され、その体調を悪くしていく。

――不意に、ファイムの体が傾いた。だが、ファイムはすぐさま持ち直す。

『ファイムくん！？』
『……ッ、ちょっとめまいが……すみません』

苦笑するファイム。はやては、そんな彼に問いかけた。

『一体、どんくらい寝てへんの？』

『一週間くらい、ですかね……ダメですね、こんなでは。愛想を尽かされて当然です』

苦笑し、心の底からそんなことを言う彼。

ただ――憤った。

『ファイムくんのせいちゃうやろ！？』

『僕のせいですよ……人が離れていくのも、どうしても……』

『……ッ、なら、わかった』

その憤りが、誰に対してなのかはわからなかった。

彼なのか。

彼から離れていった者なのか。

それとも――自分か。

『わたしも手伝う。その代わり、休んでもらうよ』

彼は、その時ひどく驚いていた。

まるで、救いなどないとわかり切っている世界で、水など望めやしない無限の砂漠で、オアシスを見つけたような。

そんな、ボロボロの顔をしていた。

いつからといえば、この時からと答えるだろう。

わたしが――彼を、気にし始めたのは。

◇　◇　◇

斬撃が重なる。その最中、フェイトはギレンと向かいあっていた。

「ちょろちょろとウゼェんだよ！！」

――ガドン！！

放たれた閃光が宙を焼き、世界を砕く。フェイトはそれを避け、言葉を紡いだ。

「どうしてこんなことを……！」

「どうして！？　ハッ、お笑い草だな！！　テメェがそれを聞くのかよ、執務官ッ！！」

放たれる閃光。フェイトは、どういうことだ、と言葉を紡いだ。ギレンは、尚も叫ぶ。

「殺すしか生きられない世界で！！　そうするしかない世界で生きることは罪か！？　銃の握り方を知ってても、言葉なんざ知りやしねぇ！！　そんなガキが誰かを殺すのは罪か！？」

殺すことでしか生きられない世界で殺し続けてきたと、ギレンは語る。

どうしようもない世界で、生きてきたのだと。

「表に生きようと思ってもな！！　テメェらがそれを許さなかった！！　だったら殺すしかねぇだろうが！！　俺は死にたくはねぇ！

！　だから俺は、他人を殺してここにいる！！」
「だけど、それを選んだのは――」
「選択肢なんざなかったんだよ！！　なんだ、知らねぇのか！？　こいつぁお笑いだな！！　テメェとは違う、もう一人の執務官――あいつも、そうやって生きてきたってのによ！！」

ギレンが吠える。フェイトは、目を見開いた。同時に、彼女の脳裏に彼の言葉が浮かぶ。

『僕は罪人です。たくさんの人を、殺してきた』

それが、どういう意味を持つのかはわからなかった。
比喩だろうと、思い込んでいた。

だけど――それが、真実だというのなら？
言葉通りなのだとしたら？

「気になったから調べたが！！　俺とあいつは同じ世界の出身だ！！　年がら年中イカレた戦争を繰り返してた世界のな！！　敵はテメェらだ管理局！！　何が罪だ、何が――正義だ！！」

叩き付けられるような言葉。一見、無茶苦茶に聞こえるそれは、しかし、あまりにも圧倒的な『真実』の意味を帯び、フェイトに響く。

「俺たちは自由のために戦った！！　それさえも罪か！？　生きるために戦う、それが罪か！？　それを罪だというのなら――いいだろう、俺は罪人だ！！　だが、テメェらもまた悪なんだよ！！」

反論ができない。言い返せるはずなのに、言い返せない。

フェイトのあまりにも純粋な心が、その言葉によって止まってしまう。

「死ねよ――偽善者」

そして、その砲撃がフェイトを呑みこまんと放たれる。

しかし。

――天井を砕いて現れたそれが、それを遮った。

◇　◇　◇

わたしがファイムくんを手伝った次の日、満足に休む時間もないまま、彼は別の世界に向かった。

――『緑風事件』。

いい意味でも、悪い意味でも、彼を有名にしたその事件のために。

『帰ってきたら、今度こそ休んでもらおう』

わたしは、密かにそう決意した。

その時すでに、惹かれ始めていたのかもしれへん。

孤独を背負ったその背中に。

いつも、泣きそうなその横顔に。

――どうしようもないくらいに。

だけど。
その願いは、果たされなかった――

◇　◇　◇

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは、一人の少年と相対していた。年の頃は二人とそう変わらない。しかし、その吊り目の奥に光る憎悪の瞳に、エリオには見覚えがあった。

――あれは、昔の自分。
誰も信じられず、世界そのものを憎んでいた頃の、自分だ。

無数の剣戟が舞う。エリオと、相対するウィル、とギレンが呼んでいた少年。二人の速さを比べると、エリオの方が速い。しかし、一撃の重さでは、ウィルの方が上。
実力拮抗。その最中、エリオが叫ぶ。

「どうしてこんなことを……どうして、キミはこんなところに!?」
「私たちはあなたを助けたい!」

二人は、感じ取っていた。ウィルという少年が、自分たちと『同じ』であるということを。
過去の――悲しみだけしか知らなかった自分たちと、同じだということを。

しかし、やはりというべきか。ウィルはそれを拒絶する。

「誰もが友達になれるとか思ってんじゃねぇ！　話したくないんだ

よ、だからこうしてんだろうが！」
「でも、話してくれなければわからない！」
エリオが叫ぶ。ウィルは、チッ、と舌打ちを零した。
「ウゼェ、ウゼェウザ過ぎる！！　触れられたくねぇんだよこっちは！！　偽善を振り翳すな！！　勝手に同情なんかしてんじゃねぇ！！　そういうところだよ、そういうところなんだよ！！――ふざけんな！！」
その槍の切っ先を二人に向け、ウィルが吠える。
「あいつは――テメェらのせいで言葉を失った！！　奪われた！！　最近、ようやく少しだけ、本当に少しだけ話せるようになって、けど、笑顔は戻らなくて！！　あいつをそこまで追い込んどいて、謡ってんじゃねぇぞクソがぁぁぁっっっ！！」
一閃。ウィルの突撃を、エリオが受け止める。しかし、踏ん張り切れず、吹き飛ばされた。
「エリオ君！！」
「ギャウ！！」
キャロが叫び、飛竜フリードリヒが吠える。しかしそれを、他ならぬエリオが遮った。
「キャロ、フリード。手を出さないでくれないかな」
「エリオ君？」
「きっと――一対一じゃなきゃ、届かないと思うんだ」

グイッ、と、頭部より滴る血を拭い、エリオは言う。ウィルが、ハッ、と吐き捨てた。

「届きやしねぇよ。何も」

「――ストラーダ」

返答は――その、全力の一撃だった。

「がふっ!?」

腹部に減り込むその一撃。肺の空気を絞り出すことを強制され、ウィルが呻いた。そこへ、エリオが全力の追撃を叩き込む。

「紫電!!　一閃!!」

雷光纏いしその一撃は、ウィルを吹き飛ばし、衝撃で壁を砕いた。エリオはウィルを追うことはせず、言葉を紡ぐ。

「僕も、そうだった。誰もわかってくれないって、勝手に決めて、勝手に卑屈になって。誰もわかってくれないって、ただただ叫んでた」

「あぁ？」

ウィルが眉をひそめる。そう――あの頃の自分は、本当に何もわかってやしなかった。

ただただ、憎むだけで。

何も、わかろうとさえしていなかった。

「だけど、変われたんだ。たった一つの出会いで、たった一つの優しさで。あの人のおかげで、僕は、僕たちは変わることができた」

「……身の上話なら他所でしろよ。興味ねぇんだしよ」
「――あの人みたいになりたいって、思ったんだ」

あの日貰った、優しさを。
今度は、他の誰かへ届けようと。
残酷で理不尽な世界でも。

生きていけると、思ったから。

「だから、話して欲しい。力になれるかもしれない。ううん、力になる。だから――」

差し出す手。しかし――ウィルは、受け入れない。

「――ウゼェよ」

返礼は、本気の一撃。
文字通り、殺す気で放たれたもの。

戦いは――激化していく。

◇　◇　◇

わたしは、ただただ、言葉を失った。

『ファイム・ララウェイ――貴様の執務官資格を、停止する』

次元世界が一つ、消えかけたほどの事件。危険度Ｓランクの広域次

元犯罪者が姿を現したような事件。その事件の果てに、彼は人を救った。
殺せと命じられた二人を、生かしてみせた。
――なのに。
『命令違反は、重罪だ』
殺さず救った。そのせいで、彼は罪人扱いされた。
そんな、どうしようもない矛盾で、彼は。
『はやてさん。……少し、失敗してしまいました』
彼は、苦笑しただけ。
そうなることを、受け入れていた。
その時だ。
わたしが、管理局に疑いを持つようになったのは。
◇　◇　◇
「……ッ、スバル？」
「……」
隣に倒れているスバルに、声をかける。しかし、反応はない。ティアナは、内心で臍を噛んだ。

ロード、と、エリアが呼んでいた男――仮面を着けた男は、圧倒的な力を持っていた。

『自分より総合力で強い相手に勝つには、相手より強い部分で戦わなければならない』――なのはから教わった、大事な教え。しかし、この男にはそれが一切、通じなかった。

スバルの拳も。

ティアナの弾丸も。

全て真正面から、拳と魔法によって打ち砕かれた。

「……見つかるのも、時間の問題か」

《――諦めるのですか？》

ティアナの愛機たる『クロスミラージュ』が問いかけてくる。ティアナは苦笑した。

「前にも言ったけど、あたしはどれだけ努力しても完全無欠の超一流には、きっとなれない」

高町なのはのようには、決して。

あんな風には、なれやしない。

「もう、そのことについては整理がついてる。けど、やっぱり悔しいのは変わらなくて。情けなくてさ」

《しかし、我々は先日、知りました。全てにおいて、我々に劣っている彼の青年が、我々に勝利したという事実を》

勝っているところなどない。そう、断言できてしまう程度の力しか持たないはずの青年。

しかし彼は、ティアナたちに勝利した。

ならば、きっと。

『大丈夫、ティアならできるって！』

『天才かどうかは他人の評価ッスよ、執務官。ファイムは天才じゃねぇ。けどあんたは、俺にとっては天才に見える』

相棒と、先日出会った青年が出撃前にくれた言葉が、脳裏を過ぎる。

本当に、好き勝手なことを言ってくれる。

――だけど！

「――――」

見つかった。ティアナは、その銃口をロードに向ける。

「ランスターの弾丸は、どんな相手だって撃ち抜ける！！」

信じるのは己。

それだけでいい。

――あの青年のような姿こそ、きっと、自分が目指す到達点！

「……」

しかし、その決意は残酷な現実を前に脆くも儚く崩れ去る。

――一閃。

凄まじい威力の砲撃が、二人を包む。

――そして。

崩落する床。その先にいたフェイトは、落ちてきた二人に驚愕の表情を作る。

「スバル！？　ティアナ！？」

すぐさま、フェイトは二人を救い出す。ギレンは砲撃を中断すると、巻き込まれないように退避した。そして、チッ、と舌打ちを零す。

「ロード……テメェ、邪魔すんじゃねぇよ」

「……」

ロードは、そんなギレンを一瞥しただけで特に言葉を紡がない。おい、と、ギレンが声をかけた瞬間。

「……」

ロードが、手を差し出した。遮るように出された手。ギレンが眉をひそめる。

――轟音。

「バルディッシュ！」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

フェイトが叫び、バルディッシュが応じる。しかしそれは、攻撃のためのものではない。

姿を見せるは、無数の触手。フェイトにとって、見覚えのあるものが現れる。
それは周囲を蹂躙し、戦いを強制的に中断させた。
――戦場が、更なる混迷へと落ちていく。

◇　◇　◇

「……ッ！？」
ファイム・ララウェイは、目を覚ました。動こうとした瞬間、体に激痛が走ったが、死んではいない。
《マスター！？》
愛機たるリンネクロウズが、声を張り上げる。ファイムは激痛を堪えながら起き上がると、血を拭いながら言葉を紡いだ。
「リンネ、僕はどれくらい……？」
《マスターが落ちていたのは、ほんの数分です。あの男は、ここから姿を消したようですが……》
「そっ、か」
ファイムは、頷く。頷くと、はやての下へと進み寄る。
立てない以上、歩けない。這いずるようにして進む。
《マスター、ダメです！　重傷なのですよ！？》

リンネの制止を無視し、ファイムは進む。
這いずるようにして進むその姿はあまりにも無様で、みっともない。
しかし、ファイムは歯を食い縛って進む。
恥も外聞も、とうの昔に捨て去ってしまった。
だからこそ――

「……はやて、さん」

ポツリと、ファイムはその人の名を呼ぶ。反応はない。眠ったままだ。
無事、である。それは奇跡だ。殺されていても、おかしくなかった。

「――――ッ」

ダンッ、という音を響かせ、ファイムの拳が床を叩く。悔しさと情けなさ。特に、守れなかったという事実が、ファイムの心を締め付け、打ち砕いていく。
守れなかった。
負けてしまった。
負けては――ならなかったのに。
守るためには、決して負けてはならなかったのに。

「僕は、やっぱり、あなたを守れない」

短く紡がれた言葉には、あまりにも深い悲しみが宿っている。

弱さ。
どうにもならない、ただの歴然たる事実であるそれ。
それが――全てを奪っていく。
「足りなかった。届かなかった。通用しなかった」
命を、文字通り支払って。
血を吐くように、持てる全てを賭した。
しかし――届かない。
《マスター……》
「全てを懸けてもまだ足りない。だけど、もう、払えるものなんて――」
呟く言葉。ファイムは、弾かれたように顔を上げた。
「――いや、ある」
たった一つだけ。
文字通り――全てを失う代わりに、力を得る術が。
リンネが、声を張り上げる。
《いけませんマスター！！　それを使ってしまえば、もう戻れなくなります！！》
「……」

《あなたは、あなたにとっての全てを失う！！　それだけはなりません！！》

リンネが叫ぶ。だがファイムは、首を振る。

「今更だよ、リンネ。どうせ、いつか死ぬ運命だ。それを受け入れてきた。今更――止まらない」

止まれない、と、ファイムは語る。

失ってきたもの。支払ってきたもの。

その全てが、彼をここまで連れてきた。

進もうと、立ち止まろうと。遠くない未来に地獄が待っている。

ならば――全て抱えて、飛ぶだけだ。

「――頭は冷えたか、って聞こうかと思ったけど……必要なさそうやな」

不意に、声が響き渡った。見れば、一人の男が佇んでいる。

ホムラ・イルハート。管理局の、かつての英雄。

「自分も諦め悪い奴やな。どうしようもないやろうに」

「――まだだ。まだ、命が残ってる」

そして、ファイムはそれを取り出した。ホムラの眉が、ピクリと反応する。

「それが……切り札か？」
「そうだ」
青い宝石。その名は――ジュエルシード。
ロストロギアの一つであり、禁忌の力。
「ジュエルシードか。願いを叶える蒼き宝石。わしが取り損ねた奴やな」
「そうだ」
それを前に突き出し、ファイムは応じる。
やめろ、と、ホムラが言った。
「自分、死ぬで。――その、名誉までもが」
「覚悟の上」
そして、ファイムは風を纏う。
紡がれるのは、契約の詩。
「風は夜空に!!　炎は大地に!!　潰えぬ心はこの腕に!!　信じる思いはこの腕に!!――ネームレス、セットアップ!!」
《Ｙｅｓ，ｓｅｔ　ｕｐ》
現れたのは、巨大な砲門。
あの真竜ガンゲイルを討ち滅ぼした砲撃を放った砲門と同型のものが、現れる。
――覚悟の瞳。
死さえも是としたその瞳を見て、ホムラが舌打ちを零す。

「その目や。その目が気に食わんのや。まだ、そんな奴がおることが。管理局の魔導師に！！　まだそんな目をする奴がおることがわしは許せんのや！！」
「あなたにそれについて何かを言う権利はない。逃げ出したあなたに」
「あるわ！！　わしは奪われた！！　だからこそこうしてる！！　ここにいるんや！！」

同時、ホムラのデバイスが魔法を展開する。

《――Ｍｏｏｎ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

対し、ファイムも応じる構え。

《――Ｂｕｒｓｔ　Ｓｔｏｒｍ》

そして、二人は激突する。

――はやての体が動いたことに、二人は気付かなかった。

◇　◇　◇

振り抜かれた剛腕による一閃。それを受け、金色の炎を纏う青年が吹き飛び、ビルに直撃。大きな穴を開ける。
かつては教導隊にも籍を置いていた、歴戦の武人――リヴァイアス・バルトマカリは、ふん、と鼻を鳴らした。

「温いぞ、温いぞ小僧！！　その程度か！？　ならば果てろ！！　今すぐに消え失せるがいい！！　そうでないというのなら見せろ！！　見せてみろ！！　貴様が殺すか俺様が殺すか――どちらだ小僧！？」

リューイは、つっ、と口から呻き声を漏らすと、彼の愛機――『ブラッディハウンド』に金色の炎を纏わせ、咆哮する。

「ふざけんなよ、上等だ！！――ぶっ潰してやる！！　そうだそれでいい！！　来い小僧！！」

――ガドンッ！！

片や、Ｓ－ランク。
片や、ＡＡＡ＋ランク。

一撃必殺を常とするベルカの騎士。近代と古代の違いはあれど、その理念は変わらない。

「どうした小僧！？　その程度か！！」
「らあああっ！！」

振り抜かれた一撃。それはリヴァイアスの斧に防がれるが、衝撃により、リヴァイアスが後ずさる。リューイは吠えた。

「一撃の下に粉砕する――ブラッディハウンド！！」
《ｅｘｐｌｏｔｉｏｎ》

ガシャン、と、カートリッジをロードする音が響き、同時に炎が再び刃に纏わりつく。

――激突。
だが今度は、リューイが押し負けた。

「軽いな、軽過ぎるぞ小僧！！　これで古代ベルカを名乗るか！？
さあ剣を握り直せ！！　刃持つ者の義務を果たせ！！　俺様こそがお前の死だ！！」

追撃として振るわれる一撃。だが、その腕に魔法弾が飛来、リヴァイアスの動きが止まる。

「ＩＳ・エリアルレイド！！」

ラインディングボードに乗るウエンディが、彼女のＩＳを以てリヴァイアスの動きを止める。そこへ、同じくラインディングボードに乗ったディエチが追撃を放った。

「ＩＳ・ヘヴィバレル」

一閃。
Ｓランク魔導師のそれに匹敵する威力のそれが宙を焼き、リヴァイアスに迫る。リヴァイアスはたまらず後退。だが、その背後からはすでに更なる追撃が待ち受けている。

「「リボルバー――」」

蒼と紅。
二人の拳打と蹴撃が、リヴァイアスに迫る。

「――ナックル！！」
「――スパイク！！」

ギンガとノーヴェ。その一撃を、ギリギリのところでリヴァイアスは受け止める。二人はそれを受け、すぐさま退避。追撃を仕掛けようとするリヴァイアス。

――カカカッ。

しかし、その足下に突如、数本のナイフが飛来。その動きを止める。

「ＩＳ・ランプルデトネイター」

パチン、と、指を鳴らす音。

――爆発。

チンクの持つ能力により、リヴァイアスが爆発に巻き込まれた。普通なら、ここで決まっているはずの連携だが――

「くくっ、ははははははははははははははははははっっっ！！　素晴らしい！！　素晴らしいぞ！！　そうか――ギンガ・ナカジマ三等陸尉以外の戦闘機人！！　貴様らが彼の名高き『Ｎ２Ｒ』か！！」

「我々の連携を受けて無傷とは……怪物だな」

チンクが呟く。その背後で。

「――上等だ。殺してやる」

ゴバッ、と、瓦礫を吹き飛ばしながら一人の青年が姿を現した。炎の他に新たに風を纏い、どことなく神秘の香りを漂わせるのは、ミリアムとユニゾンしたリューイだ。

『マスター。冷静に』
「わかってる」
リューイが吐き捨てるように言う。リヴァイアスは笑みを浮かべた。
「成程――ユニゾンデバイスを得た真正ベルカの騎士に、ギンガ・ナカジマ三等陸尉。更には『Ｎ２Ｒ』か。成程……流石に分が悪い」
「逃げんのか？」
リューイが、挑発するように言う。リヴァイアスは、ふん、と鼻を鳴らした。
「戦略的撤退だ、小僧。俺様はまだ死にたくない。貴様らとはまだ踊っていたいが……どうやら、それも許されんようだ。闇に食われたくはない」
くくっ、と、リヴァイアスは笑い、空へと上がる。
「さあ、開戦だ！！　目覚めるぞ、貴様らの敵が！！　さあ急げ急げ急げ！！　祭囃子は聞こえているか！？　世界は再び戦いを望んでいる！！　さあ乗り遅れるな！！　闇が迫っているぞ！！」
「待て――」
リューイが追おうとする。リヴァイアスは、最後に一言、吐き捨てた。
「次は殺す。必ず殺す」
そして、その姿が消える。リューイは、なんだったんだ、と呟いた。

言い知れぬ不安が、彼を襲う。

◇　◇　◇

『おい、高町なのは、って知ってるか？』
『当たり前だろ。管理局が誇る、『エース・オブ・エース』。格好いいよな』
『しかも優しい。憧れるなホント』

あれ……これは、なんやろう……？
この、声は……。

『ハラオウン執務官、また危険度Ｓランク犯罪者を捕まえたってよ！』
『やっぱり凄いよな～』
『流石は『雷光の死神』……あんな風になりたいよ』

ああ、これは、そうか……。
わたしの、わたしの心か……。

『『ヴォルケンリッター』のシグナムさん、知ってる？』
『当たり前よ！　格好良いもの。ヴィータさんは可愛いし、シャマルさんは優しいし、ザフィーラさんは頼りになるし！』
『本当、凄いよね～！』

ああ、やっぱり……。
みんな、凄いなぁ……。

……それに比べて、わたしは……。

『部隊の設立？　無理無理、夢物語だ。現実を見たまえよ』
『犯罪者風情が』
『歩くロストロギアとは、これはまた……』

つまずいてばかりで、少しも、少しも、前に進めない。

足が動かなかった時……みんな、少しも嫌な顔をしないでいてくれた。
だけど――知ってる。
わたしが、足を引っ張っていた。

人とは違う。それは、あまりにも圧倒的な欠陥だ。みんな違う、などというのは幻想。それは、『基本的な全てが同じである』という前提があって、初めて成り立つ。
そんな矛盾の中、ずっと、生きてきた。
進むことができず、わたしはずっと……。

『……』

みんなが、背を向けて歩いていく。
わたしは……歩けない。
座り込んだ足が、あの頃のように――動かない。

――みんなが、去っていく。

なのはちゃんも。
フェイトちゃんも。
シグナムも。

ヴィータも。
シャマルも。
ザフィーラも。
リィンも。
アギトも。
ユーノくんも。
クロノくんも。
わたしを置いて――行ってしまう。

待って、と、わたしは叫んだ。
だけど――届かない。

――わたしを置いていかないで！
もう、置き去りにされるのは嫌！

届かない。みんなの後ろ姿が、消えていく。

？――見つけた。それが、貴様の闇か？

声が響く。
誰、と問いかけた。相手は、つまらなさそうに答える。

？わたしは、おまえだ？

――夜が再び、闇へと堕ちる。

◇　◇　◇

「力、技、速さ……おおよそ戦闘に必要な要素の全てで、わたしはあなたに勝っています。しかし、砲撃魔法。その一点のみはあなたに劣る。それのみでこの私とここまで渡り合うとは、『エース・オブ・エース』というのはやはり、伊達ではないようですね」

「たった一つの、自分の信じる何かで戦う。それが――私の戦い方」

なのはは言う。それこそが、時空管理局の魔導師、その戦い方だ。

テンリュウは、頷く。

「成程、真理です。……その強さに敬意を表し、あなたに教えて差し上げましょう。私の理由を。私という個人が戦う、最大の理由を」

「……」

なのはが身構える。テンリュウは、クスリと苦笑した。

「そう身構えずとも。……私の理由など、古今東西、あらゆる世界に溢れる普遍的なものですよ。――『死者の復活』。そのために、私はここにいる」

「死者の復活……？」

「有り体に言えば、死んだ人間を生き返らせる……ということです。どうです、普遍的でしょう？」

そう言って、儚げに笑うテンリュウ。なのはは、胸に痛みを感じた。この笑顔は……諦観と寂寥を含んだもの。口にする言葉の全てが真実ではない。きっと、テンリュウの言葉は真実であり、虚偽でもある。

だけど――そんなことよりも。

「……無理だよ」

なのはは、否定する。

彼女自身、それを望んだ人の末路を、知っているから。

「死んだ人は、絶対に生き返らない。私は、あなたと同じことを望んだ人を知ってる。だけどその人は、その望みの果てに全てを振り払って、虚数空間に消えていった……あんなこと、望んじゃいけないんだ」

「ならば――あなたは諦めることができますか？」

静かな言葉。テンリュウは、更に続ける。

「管理局の英雄として、数多の命を救ってきたであろうあなただからこそ、失いたくないものを数多く抱えているはず。それを奪われた時、あなたはそれを受け入れることができますか？」

なのはの脳裏に浮かぶのは、二人の人影。

大切な娘であるヴィヴィオと。

魔法を教えてくれた、大切な人、ユーノ・スクライア。

その二人を失って、それでも尚、取り戻すことを願わずにいられるか。

答えは、出ない。そんな『もしも』に、意味はない。

「要は、それだけなのですよ」

ふわりと、テンリュウの黒髪が風に煽られ、舞い上がる。

「摂理など、真理など。如何程の意味があるというのか。私は私の意志でここにいる。世界が立ち塞がるというのなら、その全てを薙ぎ払い、突き進む」

魔力が吹き荒れる。文字通りの世界最強が、牙を剥く。

「さあ、踊りましょう管理局。愚かな舞踏ではありますが、精々見世物になりましょう」

「……」

なのはは無言。テンリュウは、言葉では止まらない。

ならば――

――ドンッ！！

しかし、二人の激突は、第三者の介入によって取り消される。

「――――」

二人は同時に、艦を見る。そこには。

かつて滅んだはずの闇が、咲いていた。

◇　◇　◇

「ふんふんふ～ん♪　残念無念、この艦ともお別れか～」

特に残念そうな雰囲気も出さぬまま、グリス・エリカランは笑った。

彼の見ているモニターには、一つの映像が映し出されている。
――ファイム・ララウェイが、その体を一本の触手によって貫かれている姿だ。

「夜天の書……いや、闇の書か。失楽園シャングリラが『史上最悪の概念兵器』であるならば、闇の書は『史上最悪のロストロギア』……二度も三度も打ち破れるほど、軽くはない」

そして、グリスは立ち上がる。そこへ、一人の少女が姿を現した。

「あ、お姫様？　どしたのどしたの？」
「……」
「ウィルウィルが心配？　大丈夫大丈夫、心配ないない。それよりお姫様、逃げよっか？」

恐い怖い、敵が来るよとグリスは笑う。少女は頷き、そして、部屋を出る。
その後を追いながら、ウィルは振り向き、呟いた。

「見たかったけど、致し方なし、かな。――死にたくないし」

扉が閉められると、同時。
部屋が、吹き荒れる破壊の嵐によって蹂躙された。

◇　◇　◇

何が起こったのか、理解できなかった。
体に走る衝撃。響くのは、ホムラの声。

「はは、こら凄い。寒気がする。あの嬢ちゃん、化け物を飼ってたか」

その声には、驚愕と、歓喜と――僅かな憤怒が込められていた。
しかし、その言葉に応じる余裕を、ファイムはもたない。

「……はやて、さん……」

呟くように、その人の名を呼んだ。
その瞳が、ファイムを捉える。しかし。

「滅びを。終焉を」

紡がれたのは、残酷な言葉のみ。

――夜が再び、闇を纏う。

第十話　夜の夢（後書き）

９月１５日、色々ありまして、改稿しました。
といっても、大まかな流れは変わっていません。
すみません。そして、あちがとうございました。

第十一話　風は夜空に

あまりにも、唐突だった。

八神はやての足下に展開された魔法陣から、無数の触手が出現。それはファイムを貫いた後、薙ぎ払うようにその体を吹き飛ばした。

ファイムは耐えられず、壁に叩きつけられる。その視界に、一筋の光を見た。

ファイムは、手を伸ばす。

◇　◇　◇

『緊急召集!!　カグラ・ランバード一佐!!　いますぐ第一会議室へ!!　緊急――』

「うるさい。黙ってろ」

メキッ、という音が響き、がなり立てていた通信機が握り潰される。

カグラは通信機の残骸を廊下に設置してあるゴミ箱に投げ捨てると、足早に目的地へと向かう。

「雁首並べた所で出てくる意見なんて知れてんだよ。どうせまた切り捨てんだろうが」

苛立たしげに吐き捨てながら、つかつかとカグラは足早に歩いている。今彼が歩いているのは、本局の廊下だ。

彼は上層部からの呼び出しを無視し、とある場所を目指していた。
状況はわかっている。ファイムが想定していた状況で、一番最悪な状況を更に上回ってきた。この場所からでは、どうにもできない。

「失礼すんぜ」

目的の場所に辿り着いたカグラは、そう言って扉を開けた。感じる無重力。カグラの視線の先には、一人の青年がいる。

「ゆっくり挨拶といきてぇんだが、その余裕はねぇ。階級云々の話も抜きだ。手ぇ貸してくれ、司書長」

カグラは、そう言うと、一切の躊躇もなく頭を下げた。相手は、ユーノ・スクライアは頷く。

「勿論です。彼女たちを助けるのに、協力は惜しみません。……アルフ」
「現場から退いた身でも、やれることはあるさ。ねぇ？」

ユーノが呼びかけると、赤髪の少女はそう言って笑った。
カグラは、ありがとう、と礼を言うと、呟くように言う。

「これまで苦しんできた奴らが幸せにならなくて、誰が救われるんだよ」

それが、彼の理由だった。

◇　◇　◇

『ヴォルフラム』は、文字通り混乱していた。闇の書の復活に加え、主戦力の負傷、もしくは消耗。更には、指揮官の不在。
ファイムだけは意識を失ったリィンフォースを連れて戻ってきたが、彼自身も重体で、とても前線に出られるような状態ではない。

「負傷者の応急処置急いで！！　シグナム！！　そっちはどうなってるの！？」
『避難勧告は出した！！　これより我々は奴の掃討に出る！！』
医務室で聞いたシグナムのその言葉に、シャマルはダメよ、と言葉を返す。

「いくらなんでも無茶だわ！！　何の準備もなしに！！」
『我々がやらずして、誰がやるというのだ！！　それにもし『あれ』が『そう』なのだとしたら……それこそ、我々がやらねばならん！！』
「シグナム！！」

通信が切れる。相変わらず、人の話を聞いてくれない。
どうすれば――シャマルがそう考えた時。

「シャマル先生！！」

医務員の一人が、シャマルを呼んだ。シャマルは振り返り、そして、目を見開く。

「ララウェイ執務官が……！」

そこには、血で汚れ、しかし、誰もいなくなったベッドが一つ。

ファイムの姿は、なくなっていた。

「そんな……！」

シャマルは弾かれたように、モニターへと視線を向けた。

◇　◇　◇

闇の書と思われるロストロギアが復活した世界、『ソルトルージュ』から離れた世界。
その世界で、ホムラはぼんやりと空を見ていた。

「主。結果を見届けられなくてもよろしいのですか？」
「エリアか……興味あらへんな。見ても胸糞悪くなるだけや」

ふん、とホムラは鼻を鳴らす。エリアは、隣、失礼しますとホムラの隣に座った。

沈黙が流れる。
優しい静けさだ。
その優しい静けさを打ち破るように、ホムラが口を開いた。

「なあ、エリア。わし、間違っとったか？」
「……私はあなたの刃です。その判断は、身に余ります」
「さよか」
「それに」

エリアは、微笑みを浮かべる。

「既に答えが出ていることを他者に問うのは、あなたらしくありませんよ。我が主」
「……適わへんなぁ」
ホムラは苦笑。空を見上げる。
「……組織としては、作戦成功や。おそらく管理局は八神はやてを切り捨てる。それに逆らえば特務部隊は立場が悪くなって、動きがとりづらくなる。最悪解散や。八神はやても助かったところで、復帰までは時間がかかる。なんせ、１４年かけてやってきたことが一瞬で無駄になるんやからな」
「残酷ですね」
「……まあ、わしにはあのガキのがキツい運命背負いそうに見えるけどな」
ホムラは欠伸をしつつ、ふん、とつまらなさそうに言った。
「管理局に従えば、大切な人間を殺さなアカン。裏切れば、大切な人を守れても今までの自分を全て否定することになる。難儀なもんや。運命に磔にされるっちゅーんは、こういうことをいうんやろね」
あえて言わなかったが、もう一つ、彼には咎がある。
ロストロギアの使用。
どんな理由があろうと、状況であろうと、使えば管理局を敵に回すことになる。
残酷過ぎる運命は、どれを選んでも滅びの道。
「ま、選べるだけマシっちゃマシやさかい、後悔せん道を選んで欲しいもんやねぇ」

その言葉に、感情は込められていなかった。

◇　◇　◇

戦闘が始まって、三時間。事態はいよいよ深刻になってきた。
ただでさえ、各々が互角かそれ以上の敵と相対した直後なのだ。闇の書などという、文字通りの規格外を相手取るのは、かなり厳しい。

まず、最初からティアナ、スバルの二人は戦闘不能の状態だった。
命に別状はないとはいえ、戦えるようになるまではまだ時間がかかる。

また、ファイムとはやて、リィンフォースも戦える状態ではない。
特にはやては、おそらくはあの紛い物の『闇の書』の中にいる。

「その姿で……これ以上、好き勝手はさせん！！」

シグナムが吠え、こちらに向かってくる触手を打ち払う。

シグナムの視線の先にいるのは、はやて。
主、はやての姿を象る、憎き敵。

「その御姿を、これ以上汚すな！！」

数百という触手の嵐を突破し、シグナムははやてに――否、闇の書に迫る。
しかし、生気を失ったその顔を見た瞬間、その手が止まる。

「――――ッ！！」

声にならない声が、大気を震わせ。
その体を、触手が深々と貫いた。

「……かはっ……！？」
「シグナム！？」

ヴィータが叫ぶが、時すでに遅し。シグナムは、空より落ちる。

「シグナム！！」
《ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ》

そのシグナムを、フェイトが助け出す。そして注意を逸らすため、なのはが砲撃魔法を展開する。

「ブラスター２！！　リミットリリース！！」
《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》
「ディバイン……バスターッ！！」

桜色の砲撃が空を駆ける。しかし、闇の書が何重にも展開する障壁の前では、たった一発では届かない。

……かつて、エースたちが闇の書の完全破壊という偉業を成し遂げた。しかしそれは、様々な要因が重なったからこそである。

『闇の書の闇』を夜天の書から切り離した、八神はやての意志。
高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンという二人のエース。
ヴォルケンリッターという、四人の規格外の騎士たち。アルフとい

う優秀な使い魔と、闇の書の情報を全て揃えてきたユーノ・スクライアという少年。
当時最高峰の技術を投じて造られた艦船『アースラ』と、それを指揮する『奇跡の女神』リンディ・ハラオウン。
そして、かのギル・グレアム提督より直々の師事を受け、対闇の書用のデバイスを携えた、史上最年少執務官試験突破の記録保持者、クロノ・ハラオウン。

何の奇跡か、今日の管理局を支える英雄たちがその場に集ったからこそ、闇の書の破壊という偉業を成し遂げることができた。
しかし、今は。
突然の降臨と、成長したとはいえ、消耗した状態のエースたち。

結果は――見えていた。

「はやてちゃん!!　目を覚まして!!」
「はやてぇ!!」

なのはとヴィータが叫ぶが、その言葉は届かない。

「……世界の破滅を。終焉を」

はやての声で。
はやてではない、何者かが。
言葉を、紡ぐ。

「ブラッディダガー」

召喚されるは、千を超える刃の葬列。
血塗られた刃が、展開される。

「射出」

そして、なのはたちが身構える暇もなく、それは放たれる。

「「「つうっ！？」」」

全員がそれぞれ障壁を展開し、それを防ぐ。一発一発の威力は弱くとも、絶対的な数が多すぎる。徐々に削り取られていってしまう。

「キャロ！？」

「……ッ！？」

最初に限界を迎えたのは、キャロだった。フリードを包むように障壁を張った結果、他のメンバーよりも被弾数が多くなり、障壁にダメージが蓄積していったのだ。

――ピシッ。

障壁に皹が入り、砕けゆく。エリオが前に出、キャロを庇おうとした瞬間。

「リンネ」

《Ｙｅｓ，ＡＭＦ　Ｓｔａｎｄ－Ｂｙ》

刃が、消える。

本来ならば、輝く程に美しいはずの白を宿すバリアジャケットを血

で紅く染め上げ、合間から見える包帯には血が滲んだその姿で。
その青年は、微笑んでいた。

「二人とも、大丈夫？」
「ファイム、さん？」
「そんな、医務室にいたはずじゃ……」

キャロとエリオが呆然と口にする。ファイムは、うん、と頷いた。

「少しだけ休んだから、もう大丈夫。休んでられないよ」

ガチャン、という音と共に、ファイムはカートリッジをロード。右腕のバリアジャケットが弾け飛び、そこからワイヤーが飛び出す。

「ファイムくん！？」
「ファイム！？」

なのはとヴィータが叫ぶ。ファイムは、大丈夫ですよ、と呟いた。

「あれは『闇の書』ではなく、『闇の書という現象』です。その原因を撃ち抜けば、止めることは不可能ではありません」

ファイムは、闇の書を見据える。
そして、はやての姿をしたそれに、拳を向けた。

「僕はあなたに救われた。今度は、僕が救う番です」

◇　◇　◇

ロストロギア『リバースエンド』。それに対する知識を、ファイムはある程度であるが蓄えていた。
奪われたとされるロストロギアのうち、名称、特徴がわかるものはわかるだけ資料を集め、揃えておいたのだ。『リバースエンド』は、その資料の一つに記載されていた。

『ララウェイ。いけるのか？』

ザフィーラが、こちらへ念話で問いかけてくる。ファイムは、はい、と頷くと、この場にいる全員に念話を繋げた。

「あれは闇の書ではありません。過去の『闇の書の暴走』を再生しているだけです」
『どういうこと？』

フェイトの問いかけ。ファイムは頷くと、簡潔に答えた。

「おそらく使用されたのは危険度ＡＡ級封印指定ロストロギア『リバースエンド』です。それ自身が意志を持つ寄生型ロストロギアで、その能力は『対象の過去の現象』の再生。おそらくはやてさんは、そのロストロギアに囚われている」

だから、とファイムは言った。
助ける方法は、一つと。

「はやてさんの精神に干渉し、『リバースエンド』を引き剥がします。そうすれば、闇の書も消える」

ファイムが言うと同時、闇の書が動き出す。ファイムは短く息を吐

くと、こちらへ迫ってきた触手を拳で打ち払った。

「なめるなよロストロギア。人を、馬鹿にするな！！」

ファイムが吠え、その背に白き翼が宿る。ファイムのフルドライブだ。

「闇へと沈め。……スターライト」

闇の書が、収束砲を放とうとする。しかし、その過程でその表情が固まった。

――ボウッ。

夜の帳が落ち始めた世界に、翡翠色の無数の線が浮かび上がる。ファイムが放ったワイヤーであるそれらは、夜空に無数に張り巡らされていた。

「三次元型古代魔法陣だ。緑風さえも封じ込めた力、侮るな」

魔法とは古来、今とは違い、その発動に莫大な労力が必要とされた。それこそ発動の度に複雑怪奇な魔法陣を描き、長々と詠唱を行わなければならなかった。

しかし、魔法が普及するにつれ――特に戦争で魔法が必要とされていくにつれ、魔法は簡略化を目指していくこととなる。

魔法陣をより簡単にし。

詠唱を短くし。

時には、その威力を削ってでも利便性が求められた。

その過程でデバイスが生み出され、魔法陣は記録式になり、魔力収束さえもデバイスが補助するようになり、今の魔法が出来上がる。しかし、ファイムが用いたのはそんな現代の魔法ではなく古代の魔法。

『威力を犠牲にする』という過程を通っていない、純然たる魔法。

その力は、例え相手が闇の書であろうと、十二分に通用する。

「教えてください!!　闇の書事件では、はやてさんの姿で闇の書は暴走したんですか!?」

ギリギリと、無理矢理強引に魔法陣を維持しながらファイムは叫ぶ。その問いには、なのはが答えた。

『ううん!!　夜天の書の管制人格のリィンフォースさんが出てきてたよ!!　それがどうしたの!?』

「それなら……まだ間に合う!!」

ファイムは叫んだ。凄まじい魔力でファイムの結界を打ち破ろうとしている闇の書を見据えながら。

「僕が調べた情報が正しければ!!　『リバースエンド』は寄生者の闇に取り付く!!　そうして過去を再生するんです!!　まだ再生されきっていないなら、それははやてさんが抗っている証拠だ!!」

――パァァアン……!!

ファイムの結界が、吹き飛ぶ。ファイムは懐から、蒼い宝石を取り

出した。

「今なら届く。届けてみせる！！」

そして、ファイムが魔力を込めようとした瞬間。

――ツゥ。

ファイムの口から、血が滴った。次いで、ファイムの腹から何かがせり上がってくる。

「げほっ、えほっ！！」

ファイムは大量の血を吐き出す。無理を重ね過ぎた。正真正銘の限界を、体が告げている。

だが、ファイムは決して膝をつくことはない。

屈することは、できなかったから。

悲鳴のような、自らを呼ぶ声を聞きながら、ファイムは再び『ネームレス』を手にし――

『聞こえるか特務部隊機動六課！！　こちらは管理局本局理事会だ！！』

その声が、ファイムには、悪魔の声に聞こえた。

◇　◇　◇

――ダンッ！！

拳から血が滴り落ちるほどに強く叩きつけられた拳が、室内に音を響かせた。音の主は、ふざけんなよ、と言葉を紡ぐ。

「ホントにどうしようもねぇ奴らだなテメェらは！！」

叫んだのは、カグラ。怒鳴られたのは、理事会。
だが、理事会の長でもあるミゼットは動じない。

「坊やが何を言ったところで、決定は覆らないよ。理事会は、八神はやてを闇の書共々『抹殺』することを決定した」

「ババァ……！！」

カグラはミゼットを睨む。そのカグラの肩を、クロノが掴んだ。

「やめろ、カグラ」

「ッ、テメェ！！」

カグラは、クロノの胸倉を掴み上げる。

「テメェは納得できんのかよ！？　こんな時まで仏頂面しやがって！！」

「納得の話じゃない。理事会の決定だ」

「この……ッ！！　テメェそれでもあいつらの兄貴分かよ！！」

カグラは拳を振るう。それをクロノは掌で受け止め、二人は睨み合う。ミゼットは、やれやれと嘆息した。

「政治を覚えなさい坊や。クロ坊はそこのところ、賢明だよ？」
「願い下げだよ……！！　んなもん覚えてテメェらみてぇになるくらいなら、死んだ方がマシだ……！！」

理事会が相手であっても、カグラの罵倒は留まりを見せない。ミゼットは、残念だねぇ、と呟いた。

「その言葉遣いは少しばかり目に余るけど、それ以外は酷く優秀で期待してたんだけどねぇ」
「……はっ、願い下げだ」
「まあ、今回は特務部隊の監督官であるあなたは呼ぶべきだと感じたがら呼んだだけ。あなたの言葉では、何も変わりやしないのよ、坊や」

ミゼットは言う。それとほぼ同時に、一本の通信が入った。

『報告します！！　『ノア』が『ソルトルージュ』に到着しました！！』

そして映った画像に、カグラは眉をひそめた。

「なんだ？　小型艦か？」
「……」

言いながらクロノに視線を送るが、彼も知らないと首を横に振った。使えない男である。
そんな二人の様子を見たミゼットが、これは新兵器よ、と説明した。

「無人型次元航行艦『ノア』。武装は主砲の『アルカンシェル』の

みの、管理局の新兵器よ」
「なん、だと……！？」

わなわなと、カグラの体が震え、遂に、怒りの限界を迎える。

「ふざけんな！！　んなもんただの質量兵器じゃねぇか！！　レジアスのおっさんをあんだけ否定しておいて！！　いい加減にしろよテメェら！！　管理局法はどうした！？　憲章はどうした！？　テメェらの誇りはどこへ消えたんだ！？」

質量兵器を用いないからこその、管理局であったはずなのに。
『アルカンシェル』を積んだ無人航行艦――いや、最早移動砲台となった『アルカンシェル』は、十二分に質量兵器のそれだった。
ミゼットはそれには応じず、『ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ』となっている通信画面を見た。

「聞こえているんだろう、坊や？　特務部隊は早急に撤退を――」

ミゼットが、早急の撤退を促そうとした瞬間。

『拒否します』

明確な拒絶の言葉が、響き渡った。
それは、カグラにとっては二度目の体験。
あの青年が、『緑風事件』の時のように再び上に逆らってでも『管理局の正義』を貫くのだと、すぐに考えた。
だが。
次の瞬間、それが過ちと知る。

『はやてさんを見捨てる選択肢は、ありえません』

それは、彼がようやく、彼だけの理由を管理局に対して口にした瞬間。

そして。

彼は、世界を敵に回す。

◇　◇　◇

――驚いていた。

管理局に従い、管理局が正義であり続けるために戦い、償っていく。

そう誓い、１２年もの間、命を削って戦ってきたのに。

今、自分は、管理局に逆らっている。

自らの誓いよりも。

歩んできた人生よりも。

目の前の人が、大切だから。

「……」

耳に感じる音の中に、一つ、違和感が転がり込んでくる。

振り返ると、そこには魔導砲『アルカンシェル』を積んだ無人艦船『ノア』の姿。

ファイムは、すぅ、と息を吸い込むと、『ネームレス』を右手に持った。

《マスター！？》

「ごめんね、リンネ」

ーーセットアップ。
紡がれたその言葉を合図に、ファイムの腕に破壊の砲身が宿る。
右腕と一体化したそれは、ジュエルシードを内蔵している。
かつての戦いにおいて、ガンゲイルを撃ち抜いたファイムの砲撃。
それを再現するため、ジュエルシードを組み込み、演算能力特化にのみ重点を置いて六課の技師エレン・ローグが開発したデバイス『ネームレス』。
ーー砲門に、魔力が収束する。

「バーストストーム」

ーーズドン!!!!!!!!

放たれた砲撃は、『ノア』に直撃。有無を言わせず、撃墜する。相手は『アルカンシェル』を積んでいるといっても、所詮は小型艦。真竜さえをも撃ち抜いた魔法で、撃ち抜けないわけがない。
静寂が流れる。
誰も、何も言わない。闇の書でさえも、動きを止めていた。
そこにーー

『貴様!!　理事会の決定を無視し、あまつさえ『ノア』を撃ち落とすとは!!　なんのつもりだ!!』
「答えなら、すでに述べたはずです」

理事の怒鳴り声に、ファイムは平静に応じる。
いや……平静を装って応じた。口から、血が滴っている。

『黙れ!!　それは闇の書なのだ!!　破壊せねばならん!!　封印せねばならんのだ!!　そのための犠牲はやむを得ん!!』
「……やはりですね。昔からずっと思っていましたが、一番肝が座

っているのは現場です」

バシュッ、と、『ネームレス』が蒸気を吐き出す。

「救うだの守るだの平和だのと散々耳障りのよいことを言っておいて……誰が出てくるのかと思えば、無人艦ですか？　馬鹿にするのもいい加減にしてください」

『何だと？』

「現場の意見は全て元より聞く気はない。安全圏から指一つ動かさず、手を汚せと命令する。あなたたちの目は、耳は飾りですか？　どうして助けることを初めから放棄するのです？」

ファイムの目は、最早通信機越しの理事たちなど見ていない。

「１４年……１４年間ですよ？　ただ、偶然選ばれた。それだけの理由で逃れ得ぬ運命に飲み込まれ、それでも耐えて、償うと決めて働いてきた局員を切り捨てて。それが管理局の正義なのですか？　仁義一つ通せぬ正義に、何の意味があるのですか？」

『貴様……！！』

「正義のために戦ってきました。しかし、その答えがこれだというなら。管理局など、滅びてしまえばいい」

静かな怒りが、言葉となって大気を震わせる。

大切な人を殺せと言われて、黙っていられる道理はなかった。

「たった一人を救えぬ組織に、世界を守れるはずがありません。ただ、僕は許せない」

あなたたちが、と、ファイムは言い。

そして、彼は空を駆ける。

「安全圏から見ているだけなら。指をくわえて黙って見てろ！！」
《ｗｉｎｄ　ｍｏｖｅ》
ファイムは闇の書との距離を一気に詰める。闇の書は触手で迎え撃ち、ファイムに何本もの触手が迫る。
ファイムはそれを避けていくが、しかし、避けきれず、吹き飛ばされる。
「あ〝、かはっ……！？」
空に放り出されるファイム。そのファイムに、更なる追撃が迫る。
「闇に、溺れよ」
「……ッ！？」
叩きつけるように迫ってきた触手を、ギリギリで避ける。肉体的な限界が、訪れていた。
『ファイムくん！！』
なのはの声が聞こえた。視界の端に、なのはが援護の砲撃を放つ瞬間が映る。ファイムは、念話でなのはたちに言葉を飛ばした。
「僕が、はやてさんの精神に干渉します……急がなければ、はやてさんが……ッ！！」
ポタポタと滴り落ちる血を拭い。
ファイムは、再び空を駆ける。

「ダークネス・エアライズ」

だが、それを阻むように、なのはの援護砲撃を防ぎながら闇の書がファイムに向かって砲撃魔法を放った。ファイムは、くそっ、という言葉と共に急停止。

ーードンッ！！

空中に張り巡らされたワイヤーが再び躍動し、巨大な魔法陣を描く。今回描かれたのは、闇の書の砲撃を防ぐ防御陣。

「はやてさん……ッ！！」

ファイムが呼びかけるが、はやてには届かない。闇の書が、言葉を紡ぐ。

「抗ったところで、より残酷な未来が待っている……ならば、ここで消えてしまえばいい」

「ふざ、けるなぁっ！！」

「ならば、永劫の闇に呑まれなさい……スターライト」

闇の書は砲撃魔法の放出を止めると、新たな魔法を紡ぎ始めた。ファイムは腹を括る。

ーーここで、やらなければ。

優しいあの人を、取り戻すんだ！！

“ファイムくんになら、幸せになる権利がある”

初めて言ってもらった。そんな言葉は。
あなたのおかげで、僕は生きようと思った。生きられると知った。
結局、変わることはできなかったけど。
ファイム・ララウェイは、あなたに救われた！！

「バースト！！」

ファイムも、砲門を闇の書へと向け。
そして、二人の魔法がぶつかり合う。

「ストーム！！」
「ブレイカー」

ーーガドン！！！！！！！
巨大な純エネルギー同士の衝突は、大気を揺さぶり、大地を震わせる。
そして、数秒後。
大爆発が、起こった。

「「「ファイム！？」」」

その場の全員が叫んだ。爆煙の中から、その名を呼ばれた青年が、口元を押さえながら出てくる。

「……ッ、ゲホッ！！」

吐血。もう、口の中は鉄の味しかしない。
口の中のものを吐き出し、相手を見ようとするファイム。煙が晴れ、姿が現れる。

「……そんな」

……そこにあったのは、絶望。

その姿は、八神はやてから、銀色の長髪を宿した赤目の女性に変わっていた。

「闇の書……！！」

「……お前も、私をその名で呼ぶのだな」

闇の書が、悲しげに言う。ファイムは、闇の書に問いかけた。

「はやてさんをどうした？」

「主はここにはいない。主は永遠を望まれた。夢と現実の狭間の世界……そこは、永遠だ」

「永遠がどうなんて問答をする気はない。僕の目的は一つだ。はやてさんを返せ」

ガシャン、という重い音と共に、『ネームレス』がスライド。通常よりも大きな、特性のカートリッジがロードされる。

闇の書は、首を左右に振る。

「主はーー」

「もう一度だけ言う」

闇の書の言葉を遮り、ファイムは言った。

「返せと言ってるんだ。彼女を、返せ！！」

翡翠の閃光が、瞬いた。

◇　◇　◇

「テメェらは、これを見て何も思わねぇのか？」

カグラは、最早怒りではなく、純粋に疑問として問いかけた。

「ファイムはたかがＡ＋ランク程度の魔導師だぞ？　そんなあいつがここまでの立ち回りをしてるのは、命を使って全力疾走してるからだ。マラソンを最初から１００メートル走る勢いで走ったらどうなる？　そうだよ、すぐに限界迎えちまう。それをあいつはやってんだ。たった一人の女を救うために。それを見て何も思わねぇってんなら、もういい。テメェらは人間じゃねぇ」

「……私たちは、常に合理的な判断を下さなければなりません」

静かに言ったのは、リンディ。カグラは、わかってる、と返した。

「俺たちは結局は軍人だ。管理局はどれだけ誤魔化しても所詮は軍隊。それはわかってる。けどな、それだけじゃ誰もついてこねぇんだよ」

カグラは、そんなこともわかんねぇのか、と言葉を紡いだ。

「結局は軍隊っていっても、管理局はそれだけじゃねぇんだ。有無を言わさず殺すなんてのは銃でも握らせりゃ、ガキでもできる。管理局は違うだろ？　救うために、守るためにあるんじゃねぇのかよ？」

そうでなければ、管理局は存在意義を失ってしまう。

「テメェらに欠片でも、ほんの一欠片でも仁義ってもんが残ってんなら、話を聞けよ。その目で見ろよ。上から見下すんじゃなくて、同じ目線で人を救う努力をしてみろよ。それすらできねぇってんなら、テメェらは局員どころか人として失格だ。ファイムの言う通り、指でもくわえて黙って見てろ」

吐き捨て、立ち去ろうとするカグラ。その背中に、ミゼットが声をかけた。

「待ちなさい坊や。あなたには仕事がある」

「……」

「理事長命令よ。逆らうことは許さない。六課の監督官であるあなたには、責任があるのだから。……任務は一つ。ーーーー……」

ミゼットの言葉を聞き、カグラの目が見開く。そして彼は、ババァ、と唸るように言った。

「これはケジメよ坊や。組織を成り立たせるためには、見せしめが必要なの」

ミゼットの、冷たい言葉を聞いて。

カグラは、拳を握り締めた。

◇　◇　◇

「リィンフォースさん……！？」

「いや、違ぇ。あいつは、はやてに名前をもらう前のリィンフォースだ」

なのはの言葉に対し、ヴィータが応じる。その隣をシグナムが駆け抜け、レヴァンティンを振り抜いた。
ーーガギィン！！
闇の書は、シグナムの一撃を拳で受け止める。シグナムは、顔を伏せた状態で言葉を紡いだ。

「主はやてを、どうした？」「将か。……お前たちは忘れているだけだ。闇の書は、完成と共に暴走してしまう」

だから、主は、と闇の書は言葉を濁らせた。シグナムは、そうか、と頷く。

「貴様がリィンフォースではないというのなら。躊躇う理由はない」
『いくよシグナム！！』
「ああ。レヴァンティン！！」
《Ｊａｂｏｗ！！》

ガシャン、という音と共にカートリッジがロードされ、レヴァンティンの刀身に炎が宿る。

『「紫電一閃！！」』

直撃。闇の書は後方へ吹き飛ばされるが、何とか持ち直す。

「将……この力……！？」
「リィンフォースではないお前は知らぬ力だろうな。この十年に何があり、我らがどのように生きてきたか。すまぬが私は口下手なのでな。この剣で語るとしよう」

シグナムはレヴァンティンを構え、言い切る。

「私には戦う理由と退けぬ理由がある。主はやてをお前に任されたこと。家族を守るためということ。そして……ララウェイに頼まれたこと」

『シグナム……』

アギトが呟くようにシグナムを呼ぶ。シグナムは、鋭い眼光で闇の書を射抜いた。

「奴は必ず主はやてを取り戻してくると言った。それまで頼むと。あれだけのことをした奴に何が待っているかなど、私にさえ容易に想像できる。それでも奴は、主はやてを自分よりも優先した。ララウェイを、私は信じる」

刃が、唸る。

◇　◇　◇

白と黒。光と闇。善と悪。

おおよそこの世に存在する全てを混ぜ合わせたような、気持ち悪い感覚。それが、この空間に対してファイムが抱いた感想だった。

「……」

上も下も右も左もわからないその場所に、ファイムは佇んでいた。

ここは、夢と現実の狭間。

闇の書は、その固有技能として異空間を生み出す力がある。はやて

に聞いたことだ。
だが、ここは違う。
ここは、『リバースエンド』が創り出した、八神はやての心の世界。

「見ているのでしょう？　出て来ては如何ですか？」

虚空に向かい、ファイムは言った。声は反響することなく、すぐに消える。
だが。

『ほう。まさかここに第三者が足を踏み入れることができるとは。初めて知ったぞ』

応じる声があった。ファイムは視線を上に上げるが、何もいない。
しかし、いる。

「趣味がロストロギアの研究でして。一部のロストロギアは共鳴し合うんです。『リバースエンド』と『ジュエルシード』は古文書によれば同時代同世界のロストロギア。共鳴し合うと考えました」
『ほう、なるほど。そうやってここへの道を開いたか。中々やるではないか人間』
「……そんな問答、求めていません。はやてさんはどこです？」

ファイムは、声ー『リバースエンド』に対して問いかけた。『リバースエンド』は、さて、と言葉を濁す。

『あの者は停滞を望んだ。進まぬことを望んだ。本人の望みのままにするのが、正しいことではないのか？』
「いいえ。起きてもらいます。彼女はただ、弱っているだけだ」

はやてが望んだというそれを、ファイムは否定した。

「誰だって、卑屈になることはあります。弱音を吐きたくなることもあります。はやてさんは、今、偶然そういう時なだけです。あの人は僕なんかよりずっと強い」

あの人の強さに、ファイム・ララウェイは救われた。

あれが嘘で、あるはずがないから。

「彼女を返してもらう。はやてさんはどこだ？」

『……障害となるならば、消すのもやむを得まい』

ーーキィン。

澄んだ金属音が響き渡る。見れば、空間内を覆い尽くすかのような刃の葬列が、出現していた。

「どういうつもりだ？」

『ここは貴様の世界ではない。貴様はただの不純物に過ぎん。だから排除するのさ』

「……排除か。成程、わかりやすいね」

ファイムは拳を握る。ここは精神世界。気持ちが折れなければ、負けることはないはずだ。

そんな風に考えるファイムを嘲笑うように、『リバースエンド』が言葉を紡ぐ。

『ここは夢と現実の狭間。想いの強さがそのまま力となるが、肉体は現実のもの。限界を超えれば壊れていき、ここで傷を負えば傷を負う。死ねば……死ぬ』

「……だとしても、やることは変わらない。『リバースエンド』。

はやてさんを解放しろ。お前が、人類の叡智が生み出したものだというのなら」

『答えは否だ。我は破滅を望み、主も破滅を望んだ。その願いを叶えるために創られた』

「……人類の叡智が生み出した存在だというのなら」

ファイムはカートリッジをロード。走り出す。

「人を!!　救ってみせろ!!」

刃がファイム目掛けて飛来する。ファイムは、吠えながら突っ込んでいく。

はやてがいなければ、ファイムは生きている理由がない。

彼女が許しをくれ、そして、生きろと言ってくれたから、生きてみたいと思ったのだ。

空が無ければ、風は世界を歩めない。

だからこそーー

「風は夜空に!!」

◇　◇　◇

閃光が瞬き、同時に凄まじい魔力同士の衝突が繰り返される。

破壊不可能、封印不可能とされた最早災害級のロストロギア『闇の書』。

対するは、『エース・オブ・エース』を筆頭とする、管理局を支えるエースたち。

『雷光の死神』
『烈火の将』
『烈火の剣精』
『鉄槌の騎士』
『盾の守護獣』
現場にいるのは、今やたった六人。しかし、彼らに想いを託した者たちもまた、懸命に戦った。
ある者は届かぬと理解しながらも引き金を引き。
ある者は必死の想いを届けるため、刃を交えた。
だから、彼女たちエースは退くことをしない。
退けば、想いを託してくれた者たちを裏切ることになる。
ーー何より。
全てを捨ててでも大切な人を助けようとする青年を、無視などできるはずがなかった。

「エクセリオン……バスターッ！！」

ーーズドン！！！！！！！
桜色の閃光が、空を覆い尽くす。だが、闇の書は『エース・オブ・エース』の力でさえ、防ぎきる。

「鋼の楔っ！！」

ザフィーラが吠え、地面より生えた白銀の刃が闇の書の障壁を貫く。
そうして止まった一瞬の隙を、上空からヴィータが打ち抜く。

「アイゼン！！」
《Ｊａｂｏｗｌ！！》

カートリッジがロードされ、ラケーテンフォームになったグラーフ

アイゼンが障壁を叩く。
ーーピシッ。
障壁に罅。そして、それは徐々に広がっていき……割れる。

「シグナムッ！！」
「心得た！！　レヴァンティン！！」
《Ｊａｂｏｗｌ！！》

ガチャン、と、レヴァンティンがカートリッジをロード。ヴィータが飛び退くその瞬間、シグナムが追撃を加える。

『「飛竜！！　一閃！！」』

連結刃が走り、闇の書を打ち抜く。だが、闇の書はそれさえも耐えきった。
そこへ。

《Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ》

金色の刃が闇の書を撃った。離脱したエリオとキャロを下がらせていたフェイトが、戻ってきたのだ。

「テスタロッサ。エリオたちはどうした？」
「命に別状はありません。……まだ、届かないみたいですね」

フェイトは眉をひそめる。彼女の視線の先には、傷を負ってこそいるが健在な姿の闇の書がいる。

「……古代ベルカでさえも恐れられたロストロギアだ。簡単には沈

まん」

群雄割拠の時代でさえ、闇の書は恐れられた。その力はやはり、異常だ。

「ファイムくんは、大丈夫かな……？」

「どうしたんだよなのは。らしくねぇぞ？」

なのはの呟きに、ヴィータが笑みを浮かべる。ザフィーラが、口を開いた。

「ララウェイは必ず戻ると言っていた。我らは奴を信じるだけだ」

「……そうですね」

なのはは頷き、そして、前を見る。

闇の書が、こちらを見ていた。

「何故抗う？　抗えば、絶望が続いていくだけだ。希望は、容易く絶望にすり替わる」

「信じてるからだよ」

なのはは、即答した。

「足を止めてしまったら、絶望に飲み込まれてしまう。それを知ってるから。私たちは、戦うんだ。はやてちゃんを救おうとしてるファイムくんを信じて、一緒に！！」

そして、戦いが始まる。

◇　◇　◇

「……ッ！！」

迫り来る刃を避け、あるいは叩き落とし、ファイムは進む。だが、行けども行けども終わりを見せず、ただただ精神と肉体がすり減っていく。

ーーヒュン。

風切り音。ファイムを刃が切り裂き、鮮血が舞う。

「ーーーッ！！」

《Ｗｉｎｄ　Ｂｕｓｔｅｒ！！》

リンネが魔法を紡ぎ、ファイムの右腕の『ネームレス』が火を噴く。刃が薙ぎ払われ、しかし、すぐに復活する。ファイムは、くそっ、と血を吐いた。

『何故、抗う？』

迫り来る刃を打ち払い、避け、時には吹き飛ばす。そうして凌ぎ続けるファイムに、声が届く。

『肉体の苦痛は、精神を砕くに十分な程であるはず。この世界の権限は全て私にある。貴様の目的は叶わない』

ズンッ、とファイムの右足。その太ももを剣が貫く。ファイムは叫ぶことを堪え、それを引き抜く。だが、動きを止めたその一瞬を狙い、刃が飛来する。

『貴様は愚か者ではない。わたしにはそれがわかる。だからこそ理解できん。届かぬと知りながら、何故お前は抗う？』

ーーバキン。

『ネームレス』に何本もの剣が突き刺さり、その砲身が砕ける。ファイムは、宙に飛び出したジュエルシードを右手で掴んだ。

『奇跡など起きない。例え起きたとしても、同等の絶望がどこかで振りまかれるだけだ』

諦めろ、と声は言った。

ファイムは、ジュエルシードを握り締めた。

「サイクロン！！」

ーーゴゥッ！！！！！！

ファイムの周囲を風が渦巻き、剣を吹き飛ばした。ファイムは、吐く息の中にさえ血を滲ませながら、言葉を紡ぐ。

「諦めたら、全部、終わってしまう。何も為さないままにお前はよくやった、って、自分を褒めでもするの？　それこそ、無意味だ」

ーーファイムは、折れない。

「別に、都合のいいことなんて言ってない。はやてさんを返せって、言ってるだけだ」

ーー屈しない。

「僕の命とはやてさんの命の、等価な取引だ。残り少ない命だけど、

命が等価値なら、間違ってはいないはずだ」

ーーその先に待つ死を、受け入れられはしないから。

「はやてさんを救えないと感じた時、考えた時、僕は『絶望』という『死』に飲み込まれる。それを理解してる。だから、僕は止まらない。諦めない」

はやてを救うまで。

決して諦めないと、心に誓ったのだ。

声が、言葉を叩きつけてくる。

『だが、現実として貴様は限界だ。魔力などもう、欠片もなかろう？』

「命がある」

『その背に宿っていた翼。最早、見る影もない。貴様の未来そのものだ』

「翼が折れた。それがどうした？」

フルドライブ時に現れる風の翼は、既に潰えていた。しかし。

「ーー心なら、ここにある」

ファイムは、自分自身の胸を指差した。そして。

「それに、力ならまだ残ってる」

ファイムは、右手に持ったジュエルシードを見つめる。

彼は、それを。

『貴様、まさか』

ーー呑み込んだ。

瞬間、ファイムの体から血が噴き出す。ロストロギアなどという異物を取り込んだ体が拒否反応を起こし、傷口が開いたのだ。

だが。

ファイムは、それをねじ伏せる。

「何か、おかしいか？」

『貴様、ロストロギアを取り込み、何故平然としていられる？』

声は、驚愕を隠そうともしない。ファイムは、わからないのか、と応じた。

「人をなめるなロストロギア。ジュエルシードは願いを叶えるロストロギア。その能力は、『願いを魔力に変換し、その力をもって願いを叶えること』だ。ねじ伏せると願った、それだけだ」

『あり得ん……できるはずがない』

「もう一度言うよ。……『人を、なめるな』。人間の欲望は、闇は、心は。お前如きに理解できるものじゃない。その強さを、侮るな！！」

人は、欲望だけでここまで発展してきた生物だ。その心が、ロストロギア如きに負けることはない。

「はやてさんが貴様に取り付かれたのは！！　あの人があまりにも綺麗だからだ！！　純粋で！！　真っ直ぐで！！　だからこそ抗えなかった！！」

八神はやては、優しすぎる。純粋すぎる。

だからこそ、『リバースエンド』に取り込まれたのだ。
だが、人は誰しもあの人のように美しくはない。
人はもっと、醜い生物だ。

「『リバースエンド』！！　僕の心を見てみろ……！！　お前に教えてやる！！　人の心が、どういうものなのか！！」

ファイムは、走り出す。
血を滴らせる体を。
軋み、悲鳴を上げる体を。
苦痛で、すぐにでも心を折ろうとする体を。
前へと、押し出す。

「恨まなかった日はない！！　憎まなかった日はない！！　怒らなかった日はない！！　不条理な世界を！！　理不尽な世界をずっと見てきた僕の心の闇を！！　制圧してみろ、『リバースエンド』！！」

それは、心の底からの叫び。ずっとしまい込んでいた、ファイム・ララウェイの心の傷。
罪人だから、そんなことを考える資格はないと、そうして生きてきた青年の叫び。
心の強さが力となる世界であるが故に。
ーー心が少し、無防備になった。
閉じた扉が、開いてしまった。
ただーー

「僕は絶対に、はやてさんを救い出す！！」

今の彼は、彼自身に後悔も何もしていない。

それだけが、真実だった。

◇　◇　◇

世界の奥底であり、中心である場所。そこに、はやてはいた。
膝を抱え、俯き、他者を拒絶する格好で。
誰も訪れない。
だってここは、八神はやての心そのもの。心に入り込むことは、誰にもできない。
そのはずなのに。

ーーコツン。

足音が、響き渡った。はやては顔を上げない。足音の主は、はやての側まで歩み寄ると、言葉を紡いだ。

「迎えにきましたよ、はやてさん」

それは、酷く優しい声だった。心の底から身を案じてくれているのがわかるほどに。
しかし、はやてはそれを拒絶する。

「もう、放っといて。わたしは、もう、疲れたんや」

前に進むことに。
生きていくことに。
これほどまでにままならない世界で、戦うことに。

「疲れたんですか？」

声の主は、優しい。はやては小さく頷いた。声の主は、確かに、と言葉を紡ぐ。

「はやてさんは少し、頑張り過ぎるところがありますから。疲れても仕方ありません。僕に休めと言う前に、はやてさんも休まなければ」

はやては、首を左右に振る。

「ずっと、前に進もう、前に進もうってやってきた。せやけど、わたしの周りはみんな凄い人ばっかりで。わたしは、置いてかれてしまう。わたしは、それが怖いんや」

前に進もうとしても、みなは自分より遥か先へと行ってしまう。置いて行かれてしまう。

「足が動かなかった時、みんなは優しくしてくれて、笑ってくれてた。せやけど、わたしは知ってる。わたしは、みんなの足を引っ張ってた」

人と違う、ただそれだけ。
けれど、あまりにも明確な差。

「みんなが優しいから、だからわたしは甘えてた。わたしは汚い人間や。みんなの優しさにつけこんで……」

涙が零れた。
みんなの優しさに甘えていただけの自分が嫌で。

グズな自分が嫌で。
置いて行かれる自分が嫌で。
……何より。
そんなことを考えてしまう自分が、誰より嫌いだった。

「わたしは、最低の人間や。だから、もうええんよ」

ーーもう、立ち上がりたくない。
はやては、言った。
声の主は、ずっと黙ってはやての言葉を聞いてくれていた。
優しいな、とはやては思う。けれど。
その優しさが、かえって辛い。
いっそ、無理矢理にでも立たせてくれれば。
それを理由に立ち上がれるのにと、はやては更なる自己嫌悪の想いを抱く。
ーーどこまで他人に依存する気だ。
そんな風に、思ってしまう。

「本当に、もう、いいんですか？」

声の主は怒るわけでもなく、罵るわけでもなく、蔑むわけでもなく、ただ単なる問いかけを発した。

「ここが、はやてさんの夢の果てなんですか？」

その問いかけを発すると、声の主は黙ってしまった。はやては、自問する。
夢。追いかけたもの。
あまりにも遠く、今でも諦めずに追いかけているもの。
その果てが、ここ？

答えは、否。

「違う……違うけど、わたしは……もう……」

「ここからは、空が見えません」

声の主は初めて、はやての言葉を遮るように言葉を紡いだ。

「例え不条理で理不尽な世界でも、見上げれば憧れた空がある。振り返れば、例え真っ直ぐではなくとも、歩んできた道がある。前を見れば、追いかける夢がある。隣を見れば、」

そこで、声の主は一度言葉を切り、とても優しい声で、言葉を紡いだ。

「あなたを信じ、共に歩む友がいる」

それが、あなたの歩んできた道ではありませんか。

声の主は、そう言った。

「あなたは急ぎ足で歩み過ぎたんです。だから疲れてしまった。けれど、それの何が悪いのですか？　立ち止まることの、何が罪なのですか？　過去に依存することの、何が罪だというのですか？　未来も過去も等価です。未来に依存するのが是であれば、過去に依存するのも是であるはずです」

声の主は、それに、と苦笑の混じった言葉を紡いだ。

「僕は、いつまで経ってもあなたたちには追いつけない。どれだけ努力しても、届きはしない。……けれど、それでいい。それでいいんです」

声の主は、言う。

「あなたたちに追いつく必要なんてない。だってこれは、僕の道だから。躓いて、転んで、それでも進んできた道だから。あなただってそうです。あなたはあなたの思うように歩めばいい。それで行き詰まったなら、隣を歩く友を頼ればいい。例え道が違っても、それでも友達なんだから。……はやてさん。誰も、あなたを置いて行ったりはしていません」

僕には見えますよ、とファイムは言った。

「あなたが歩んできた、真っ直ぐに進んできた道が」

だから問います、と、声の主は言った。

「ここが、終着点ですか？」

はやては、首を左右に振った。だが、今度は先程のように弱々しいものではなく。

意志の込められた、力強いものだった。

涙がボロボロと零れる。

理由はわからない。ただ、涙が流れた。

はやては、顔を上げる。

ーーそこにあったのは、優しい笑顔。

「辛いなら、僕も背負います。一緒に悩みます。立ち止まります。だから、はやてさん。この手を取ってください。みんなが、待ってます」

差し出された手を、はやては握り締めた。
だが、はやては気付く。
ファイムの背に、夥しいまでの数の刃が突き立っていることに。
はやての表情が凍りつき、言葉を紡ごうとする。だが、その唇を、
ファイムは彼の人差し指で止めた。

「ここは、あなたの世界です。あなたが望んでくれたなら、こんなもの、すぐに消え去ります」

それは、虚構。
ここははやての世界であるが、しかし、全てが彼女の思い通りなわけではない。
ファイムもそれは理解していたし、はやてにもわかっていた。
しかし、それでも彼は、笑うから。

「空を、見に行きましょう」

ーー優しい嘘を、はやては受け入れた。

◇　◇　◇

ーーズドンッ！！！！！！！
突如、闇の書が光に包まれ、大爆発を起こした。なのはたちは一瞬、
視界を奪われ、そして、目撃する。

「ファイムくん！！　はやてちゃん！！」

闇の書がいた場所に、目を閉じているはやてをいわゆる「お姫様抱

っこ」で抱き上げるファイムの姿を。

「無事でーー」

「まだです！！」

ファイムが叫び、彼は器用にはやてを片手で支えながら右手を伸ばした。

その先にあるのは、真っ黒な砂を内包した、小さな砂時計。

ーー『リバースエンド』。

「おおおっ！！」

ファイムはそれを握り潰すように掴み取り、そして、願う。

ーーこのロストロギアの、制圧を。

ーーパキィィィン……！！

澄んだ音が響き渡った。

喝采が、上がる。

決着、だった。

◇　◇　◇

その後、『ヴォルフラム』の緊急停止システムを用い、地上本部に

戻ったファイムたち。彼らを待っていたのは、勝者を讃える凱旋の声ではなかった。
ー千を超える魔導師たちの、バリアジャケットを纏った姿での整列。
先頭に立つのは、カグラ・ランバード。
『ヴォルフラム』よりはやてを抱き上げながら降りてきたファイムが最初に目にした光景がそれで、そして同時に、彼は理解した。

「すみません。はやてさんを、お願いします」

目の前の光景が飲み込めないなのはたちに、ファイムは声をかける。
シグナムが、はやてを抱き上げながら言葉を紡いだ。

「ララウェイ。お前は、何をするつもりだ?」
「責任を果たしてきます。……もしかしたら、伝える機会がなくなってしまうかもしれません。はやてさんに、伝言お願いします」

ファイムは、優しい顔で、そう言った。

「あなたに出会えて良かった。ありがとう、はやてさん」

そして、なのはたちの言葉を待たずして、ファイムは歩き出す。
ー後もう少しだけ、動いて。
祈るように歩を刻み、ファイムはカグラの眼前に立った。

「……ファイム。お前が言ってくれるなら。立ち上がる。立ち上がれる。俺たちは同じ気持ちだ。頼む」

それは、懇願の言葉。
しかしファイムは、それを拒否する。

「ダメですよ。巻き込めるわけ、ないじゃないですか。僕なんかのために」

そう言って、ファイムは両手を差し出した。カグラは、馬鹿野郎、と呟く。

「どうしようもねぇ馬鹿野郎だよ、テメェは……ッ！！」
「わかっていますよ」

それでも、ファイムは望んだのだ。
こうなると、知っていて。

「大切な人を取り戻すには、これしかなかった」

ただ、それだけだったから。
カグラは、大馬鹿野郎が、と呟くと、ファイムに手錠をかけた。そして。

「ファイム・ララウェイ。ロストロギアの不法所持及び使用、独断専行、『ノア』撃墜の罪により、貴様の執務官資格を剥奪。同時に、局員資格を停止。更に、魔力の全面封印を行う」

カグラは、血を吐くようにそう言った。
ファイムは、はい、と頷く。
笑顔だった。
何もかもを、失ったのに。

そして、カグラを追って歩き出した瞬間、その体が倒れる。
ああ、とファイムは思った。
ーーロストロギアでさえ、もう、支えきれないか。
成程、ここが。
僕の、終着点。

……声が、聞こえた気がした。

「ファイムくんっ！！」

第十一話　風は夜空に（後書き）

第二部完結です。
友人からは、お前……と、言葉にならない感想を頂きました。
とりあえずの一区切り。
どこまでもシリアスなこの展開でいいのか、最近よく悩みます。

感想、メッセージ等頂けると喜びます。
よろしくお願いします。

次回はとても短く、結構早く出せるかと。
タイトルだけ。

次回、第十二話
「憎悪の連載」

第十二話　憎悪の連鎖

「なんでだよ……！？」

会議室に、そんな声が響き渡った。声を発したのは、ヴィータだ。

「ファイムははやてを助けたんだろ！？　ロストロギアを止めたんだろ！？　なんで犯罪者扱いされんだよ！？」

「それが上の決定だからだ」

吐き捨てるように、カグラは言った。ヴィータは、ふざけんな、と言葉を紡ぐ。

「千人も魔導師引き連れてあいつを捕らえにきて！！　ボロボロの怪我人にすることかよ！？」

「止めろヴィータ」

「うるせぇ！！　シグナム！！　お前は納得できんのかよ！？」

「できるわけなかろう！！　だが、我々がランバード殿を責めて何になる！？」

「こいつがファイムを捕まえたんだろうが！！」

「ヴィータ！！」

「止めなさい二人とも！！」

今にも掴み合いの喧嘩が始まりそうな雰囲気の中、シャマルが止めに入る。

「そんなことしたって、不毛なだけよ……」

場の空気が重くなる。その中で、無限書庫からこちらへ出向いてい

たユーノが口を開いた。

「ランバード一佐は、ファイムくんを捕まえようとしたんじゃないよ」

「司書長」

カグラがユーノを睨む。だがユーノは、言わせてください、と頭を下げた。

「ユーノくん、どういうこと？」

「うん、なのは。ランバード一佐は、理事会からファイムくんの逮捕と、既に決定していた分の処分を言い渡すことを命じられてた。それは事実だよ。けど、ランバード一佐は納得できなかった」

「できるわけねぇだろうが」

はっ、とカグラは吐き捨てる。ユーノは頷いた。

「だからランバード一佐は、短い時間で回せるだけ手を回して、その……クーデターの準備をしたんだ。千人の魔導師は表向きこそファイムくんが抵抗した時に殺害もやむを得ないために、っていうことだけど、実際は武力制圧のためだったんだ」

「地上では、本人が思ってる以上にファイムの影響は強ぇ。あいつがいなくなれば地上がどうなるか、みんな知ってんだよ。だから、すぐに集まったさ。だが……」

カグラは、俯く。

「あの大馬鹿野郎は、それを振り払いやがった」

自分のために、誰かを巻き込みたくない。

こうなったのは、八神はやてを救うというエゴのせいだからと。

「地上には、あいつに救われた奴は大勢いる。あいつが気付いてないだけで、必要としてる奴は腐るほどいる。それなのに……！！」

管理局は、彼を裁いた。
またもや、切り捨てた。
人を殺すことを拒否し、人を救った英雄を、管理局は罪人と呼ぶ。
本当に、狂っている。

「ファイムは、どうなるんですか？」

フェイトが呟くように聞く。スバルたちも、顔を上げてカグラを見た。カグラは、さて、と呟く。

「今までの功績が考慮されりゃ、牢獄行きなんてことはねぇだろう。だが、どこぞの次元世界へ飛ばされて謹慎、ってことにはなるだろうな」

空気が重くなる。
人を救った英雄が、罪人と呼ばれるこの場所。
管理局を信じてきた。信じて、戦ってきた。でも。

「私たちは、管理局を信じていいんですか……？」

ポツリと零れた、スバルのその呟きは。
ここにいる全員に、共通する疑問だった。

◇　◇　◇

……ピッ、ピッ。
規則的な機械音が聞こえてくる。はやてはガラス越しに、眠っているファイムを見つめていた。護衛のザフィーラはここを離れている。今、ここにいるのは二人だけだ。

「……ファイムくん」

はやては、彼の名を呟いた。救ってもらったのに、助けてもらったのに、今、自分は何もできない。
情けなかった。
全てを奪われてしまった彼を擁護する力さえ、自分にはない。
八神はやては、ファイム・ラフラウェイを守れない。
それが、何より辛かった。

「……わたし、ファイムくんに、何も伝えてへん……」

ポロポロと、涙が零れていく。

「ありがとう、って、言わせて……？　助けてくれてありがとうって……？」

伝言は、シグナムから聞いている。それを聞いて、泣いてしまった。
救われたのはこちらだ。
礼を言いたいのもこちらだ。
いつも、いつも、気付くのがこんなにも遅い。

「好きやねん……ファイムくんが……わたしは……ッ！！」

はやては崩れ落ちる。そうして、泣き続ける。
……しばらくして。
誰かが、入ってきた。

◇　◇　◇

「できたできた～♪　宗主～、ボス～？　終わったよ～？」
「流石だ。仕事が早い」
「もうできたんかい。ホンマ早いなぁ」

二人に誉められ、キャハハ、とグリスは笑った。

「まあ、映像を繋げてくだけだしねぇ♪　簡単簡単、猿でもできる♪」
「いや、猿にはでけへんやろ」
「ここでいう猿は、ボスのことだよ？」
「なんやとコラァ！！」
「落ち着け、同志よ」

宗主、と呼ばれている男が、そう言ってホムラを宥める。そして、二人に向かって笑みを浮かべた。

「人の心というのは面白い。肯定は中々受け入れぬくせに、否定は容易く受け入れる。これは池に投じる一石だ。波紋は必ず、世界を揺るがす」

宗主は、手を広げる。

「さあ、世界を変えようではないか。ファイム・ララウェイ。管理局はキミを否定した。だが我らはキミを肯定する。ならば、世界は？　キミを否定するか？　肯定するか？」

知りたいものだ、と、男は言った。

◇　◇　◇

「エレン……？」

現れた人物は、自らの部隊の技師だった。はやては、その名を呼ぶ。エレンは応じず、ファイムの方を見た。

酷く、冷めた目で。

「無様ね。……まあ、犯罪者の末路なんてこんなものか」

あまりにも冷たい声だった。はやては、立ち上がる。

「なん、やて……？」

「あんたもよ部隊長。いや、八神はやて。元犯罪者の部下一人が倒れたくらいで、何を泣いてんの？」

エレンの目は、濁っていた。はやては、どうしたんや、と呟く。

エレン・ローグ。地上本部でも名が通った優秀な技師だ。部隊においては裏方ではあるが、フェイトの補佐官であるシャリオ・フィニーノと共にデバイスの点検や『ヴォルフラム』の整備を担当してくれていた。特に、ユニゾンデバイスのメンテナンスなどという難しい仕事をこなせる者は、彼女を含めて僅かしかいない。

ずっと支えてきてくれた部下だった。その彼女は今、明確な敵意を抱いてここにいる。

「同じ犯罪者同士、同情でもしたの？　それともそういう関係？　くっっっだらないわ！！」

「エ、エレン？」

「気安く呼ばないでくれる？　というか、ホントに気付いてなかったのね」

……こっちは忘れたことなんて片時もなかったのに。

エレンは、そう言った。

「黙って裏方に回り続けて目立たないようにしてたけど、必要なかったかしら？　だって気付いてないんだもんね？　あたしがあんたを憎んでることにさぁ」

乾いた音が響いた。エレンが、その手にナイフを持っていた。

「『ヴォルケンリッター』も大したことないわねぇ。自分たちが叩き潰した相手のことを忘れてるんだもん。いや、眼中になかったのかしら？　どっちにせよ苛つくわ」

「エレン、まさか、まさか」

「あはは。ここまで言えば流石に気付くか」

エレンは、笑う。

「そうよ。私の名前はエレン・リストリア。あんたたちに魔力を奪われた、魔導師になるはずだった女よ」

エレン・リストリア。はやては、この名に覚えがあった。

償いのためと、はやてはそれこそ石を投げられても遺族の下を訪れ、頭を下げてきた。しかし、その全員に会えたわけではない。何らかの事情で行方がわからない者もいた。

エレン・リストリアというのは、その何らかの事情ではやてが頭を下げに行けなかった相手だ。

「リンカーコアが損傷してさぁ。潜在魔力はＡＡＡなんて言われて、天才扱いされてたのに。あんたのせいで全部パァ。学校まで追い出されて、家からも追い出されて、私は惨めな人生を送ってきた」

リンカーコアの復活には、個人差がある。高町なのはがそうであったように、魔力がすぐに戻った者もいれば、エレンのように戻らなくなってしまった者もいる。

「まあ、それでも？　施設で暮らしながら頑張ったわ。馬鹿みたいに努力して技師になってさぁ。そしたら何？　まさかあの八神はやてが私を勧誘するじゃない」

笑っちゃうわよ、とエレンは吐き捨てた。

「私から全てを奪っておいて、のうのうと生きてるばかりか、私に『エレンは天才やね』なんて、よく言えたわね？」

「わ、わたしは、そんなつもりじゃ……」

「知ってるわ。だから腹が立つのよ」

エレンが一歩、はやてに歩み寄る。はやては、強大な魔力を持つはずの彼女は、何の魔力も持たない女性に気圧された。

「犯罪者がのうのうと生きて笑ってるのが気に食わない。あんたさぁ、遺族に頭下げて回ったんだって？」

ホント意味わかんないわぁ、とエレンは嘲笑った。

「あんたがやったわけじゃないでしょ？　なのにどうしてあんたが頭下げてんの？　犯人でもない奴に頭下げられてさぁ、遺族が本心出すと思ってんの？　自己満足よ、自己満足。あんたのしてきたことは、ぜぇーんぶ、無駄」

「そ、そんな……」

はやての足から力が抜けていく。
償いをしてきたつもりだった。
けれど、今、それが否定された。
被害者に。
償うべき相手に。

「死んじゃいなよ」

エレンのナイフが、振り下ろされる。
はやては、ひっ、と身を縮めた。
ーーザシュッ。
はやての肩を、刃が薄く切り裂く。エレンは、あんたさぁ、と薄い笑みを浮かべた。

「聞いてみたい？　天才と呼ばれた私が落ちこぼれになって、親にまで捨てられて、どんな風に生きてきたか？」

「もうやめてぇ！！」

はやては、耳を押さえてうずくまる。エレンは、ふん、と鼻を鳴らした。

「あんた、やっぱり偽善者よ。口では償うだのなんだの散々言っといて、いざ責められたら自己防衛。偽善も甚だしいわ」
「あ、あ……」
「その点、ララウェイ執務官は……ああ、もう違うか。どうでもいいけど。なんにせよ、そこで寝てる人は違ったわ。わかってるんだもん。遺族が犯罪者に何を求めてるか」

ーー死ぬことよ、とエレンは言った。

「無意味に。無価値に!!　存在の尊厳さえも奪われた状態で死ぬこと!!　私たちが望むのはそれだけ!!　謝罪なんて!!　償いなんて求めてないのよ!!」

そして、刃が振り下ろされる。

「鋼の楔ぃぃッ!!」

突如現れた白銀の刃が、エレンのナイフが、音を立てて宙を舞う。

「ご無事ですか!?　主はやて!?」
「ザ、ザフィーラ……?」
「お下がりください」

ザフィーラはそう言うと、エレンと向き合った。エレンは笑う。

「あら、お早いお着きね。私の謹製の拘束具抜けてくるなんて」
「守護騎士をなめるな。……エレン・ローグ。貴様は、裏切ったのだな?」
「勘違いしないで。私はあんたたちの味方だった記憶はない」

エレンは言い捨てる。ザフィーラは、成程、と息を吐いた。

「間者ということか」

「ご名答。あんたたちはいい情報源だったわ。まあ、ランバード一佐は私のことについてなんとなく気付いてたみたいだから、楽勝ってわけじゃなかったけど」

言って、エレンは懐から球状の何かを取り出す。

「殺してやろうって思ったけど、やめたわ。絶望の底で苦しめ、犯罪者」

「待て！！」

ザフィーラが叫ぶが、エレンが掲げた何かが光り出すと、その体が消えていく。

転移魔法だ。

「私はあんたたちを、いや、あんたを絶対に許さない。八神はやて。それが、被害者の総意よ」

そして、エレンは消える。

「あ、あ、あ……」

はやては崩れ落ち、言葉にならない声を漏らす。

ーー心が、軋む。

「あああああああああああああああああああああっっっっっ！！！！！！！」

夜が、堕ちた。

第十二話　憎悪の連鎖（後書き）

ホムラ・イルハートの発言、「八神はやてを空から引きずり落とす」が結果となって現れた話です。
本当、色んな人が暗くて困ります。

……この後ですが、ファイムとはやては少しお休みします。みなさんの反応にもよるのですが、敵側のオリキャラなどに触れていこうと思います。

ふざけんな、本編書けやという方。ご意見頂ければできるだけそれに添います？
まだ山場はありますので、お付き合い頂けるとありがたいです。

ありがとうございました！！

第十二・五話　世界の評価

その日、世界を繋ぐネットにおいて、一つの映像が流れた。

それは戦いの映像。囚われた大切な人を救わんと、組織にさえも逆らって戦った青年の映像。

ただ、それだけだったなら、自主映画の一つとして片付けられただろう。

だが、その映像はあまりにもリアルだった。

そして何より、ファイム・ララウェイという執務官が、その映像の通りの道を歩んでいるという事実が存在している。

戦いは、一つ。

操られた女性と、青年たちの戦い。

そして、青年の末路。

人を救いながら、罪人となった哀れな青年。

その青年の言葉が、世界に問いかける。

【つかさ、これ本物だと思う？】

【この執務官知ってんだけど】

【てか、操られてる奴の顔がわからない】

【管理局が質量兵器使ってるのって本当？】

【とりあえず上層部が腹立つな】

【執務官強い（笑）】

【本気で書き込むと、まずこれはありえないでしょう。これほどのことがあったなら、報道されてないのがおかしい】
【情報規制だろ。無知か】
【『ソルトルージュ』って世界で何かあったのは事実。避難勧告が出たんだと】
【この執務官ってあいつじゃないの？　ほら、ミッドチルダの地上本部壊滅の時、真竜倒したとかいう】
【えっ、じゃあこれマジ？】
【わからんけど、もしマジならあれだな。管理局ってクソだな】

そして、世界は一つの疑問に辿り着く。

“管理局って、必要か？”

第十二・五話　世界の評価（後書き）

情報が巡る時人は大局を見ず、目の前の事実のみを判断材料にします。
そうして答えが導き出される。

……ちょっとした、世界の流れのお話です。ここから、少しずつ不協和音が聞こえるようになっていきます。

次回ですが、以前も書きましたように短編をいくつか入れていきます。少々急ぎ過ぎたような気がするので、各々の関係を少しでも描ければと。
お付き合い頂けると幸いです。感想を頂けると、尚喜びます。

次回は、ホムラ、エリア、ウィルを中心としたお話にする予定です。

ではでは、読んでいただき、ありがとうございました。

間章　戦う理由ときっかけと（前書き）

時間軸的には、十二話から数日後ですね。
今回は、ホムラ、エリア、ウィルの三人が主です。楽しんで頂ければ幸いです。

間章　戦う理由ときっかけと

ーードサッ。

強烈な一撃をくらい、今年で１４になる少年、ウィル・ガーデンズは地面に倒れ込んだ。荒い息を吐きながら、空を見上げる。

ここは第９０管理外世界『リプシロード』。魔法生物が数多く暮らすが、文明レベルが低いために管理局が手を出していない場所だ。

「おーい、どうしたぁ？　もう終わりかー？」

空を見上げていたウィルに、そんな声がかかった。ウィルは、彼自身のデバイスである『アルガンツァ』の柄を握り締める。

「誰が……俺はまだやれるっ！」

「お、ええぞ。男はそうでないといかん」

聞こえてくる笑い声をウィルは無視。顔を上げる。

眼前にいるのは、テンリュウ・シンドウがその力をもって屈伏させ、従える黒竜サリヴァルム。ウィルの相手だ。

「ギャウ！」

サリヴァルムーーサリヴァと呼ばれるその竜は、鳴くと同時に火球を吐き出した。ウィルはそれを受け止める。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

アルガンツァが魔法を固定し、障壁を展開。ウィルはアルガンツァを前に出し、受けに入る。

「ぐぐっ……！」

しかし、そもそもの力として、人と竜では大きな差がある。
ドンッ、という音と共に爆発が起こる。ウィルは吹き飛び、地面に倒れた。その上に、サリヴァがのしかかる。

「ぐっ……！？」

ーーペロペロ。
しかし、サリヴァはウィルに噛みついたりはせず、その顔を舐めるに止まった。
パン、パンと、手を叩く乾いた音が響き渡る。ホムラが、こちらへ歩いてきていた。

「はい、お疲れ～。サリヴァもお疲れや。ほい、ご褒美」
「ギャオ♪」

言いながらホムラが生肉を投げると、サリヴァは器用にキャッチ。美味しそうに食べ始める。その光景から視線を外すと、ホムラは、さて、とウィルに問いかけた。

「自分、どうして負けたか理解しとるか？」
「……力不足だからだよ」

ウィルは吐き捨てるように言う。サリヴァに力で負けた。それだけだ。
だが、ホムラはその解答を聞いてはぁ、とため息を吐いた。

「何もわかってへんのやな。そんなんじゃ、強くなるなんて夢のま

た夢やで？」
「……何だと？」
「言葉通りや。……お前たちを拾ってからもう８年くらいか。自分は強いよ。その年で陸戦ＡＡランクくらいの力があれば、十分に天才や。管理局にいた頃でも、中々自分みたいなんは見たことがなかったわ」

まあ、例外はおったけど、とホムラは呟く。

「で、お前が強くなりたいゆーからこうして鍛えとるけど、あれやな。どうしてもお前はそこを超えられへんね」

ホムラは苦笑。ウィルは、彼が何を言いたいのかわからない。

「まあ、仕方ないんやけどな。それを受け入れるには、お前はちょいと若すぎる」
「どういう意味だよ？　ガキだって言いてぇのか？」
「それが半分。けど、今の自分を否定もせんよ。それをしてしもたら、自分の成長も止まってまうからなぁ」

ホムラは笑う。ウィルには、何が何だかわからない。
ホムラはウィルに歩み寄ると、その頭を撫でた。ウィルの顔が不機嫌になる。

「わしの言葉の意味をここで教えんのは容易い。せやけど、それじゃあ意味がないんや。お前が自分で気付かなアカン。せやけど、ヒントなしはキツいやろうから、二つほどヒントをやるわ」

ホムラはウィルの頭から手を離すと、笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「『自分より強い相手に勝つには、相手より強くなければならない』。……せやな、手始めにメンバーにでもサリヴァの倒す手段でも聞いてこい」

そしたら、わかるはずや、とホムラは笑った。

◇　◇　◇

ーーテンリュウ・シンドウの場合ーー

「サリヴァの倒し方ですか？」

魔力消費を抑えるための小型モードに入っているサリヴァを撫でながら、テンリュウは言った。テーブルを挟んでテンリュウと向かい合うように座っているアリアも、首を傾げている。

「……戦うの？」

「いいえ、アリア。今のサリヴァは私にとって大切な友人です。ただ、昔は戦わねばならない事情がありましたが」

アリアにサリヴァを渡し、空になったアリアのカップに甘い香りのするミルクを入れながら、テンリュウは微笑む。アリアはこくん、と頷きながらサリヴァを撫でた。

キュウ、と気持ちよさそうにサリヴァが唸る。

「ウィル殿も、私がサリヴァと戦うならば、という仮定の話を伺い

たいのでしょう？」
「はい。テンリュウさんなら、どうするかと」
「そうですね……」
ウィルの分のお茶を入れ、座るよう促しながらテンリュウは顎に手を当てて考える。
「ご存知の通り、私には苦手な距離というものがありません。ですから、それこそ臨機応変に立ち回りますね」
「……」
「もっとも、広域魔法については詠唱の時間もないでしょうし、自然と使うことがなくなるでしょうが。基本的には持久戦ですね。若くとも竜。その力を侮るわけにはいきません」
……まあ、勝てるかはともかく、負けることはないでしょう。
テンリュウはそう結んだ。ウィルは、ありがとうございます、と礼を言いながらも、考え込む。
テンリュウの実力は圧倒的だ。ホムラやエリアでさえ、ニ対一でようやく互角の希望が見えると本人たちが言うほど。その実力があれば、成程、そういう立ち回りになるのだろう。
考え込むウィル。そのウィルに、アリアが言葉を紡いだ。
「……大丈夫？」
「ん、ああ。大丈夫だって。ホムラのおっさんに出された問題について、色々考えてるだけだから」
大丈夫だよ、とアリアの頭をウィルは撫でた。アリアは気持ちよさそうに目を細め、頷く。その光景を微笑を浮かべながら見ていたテンリュウが、問いとは、とウィルに聞いた。ウィルは頷く。

「ええと、『自分より強い相手に勝つには、相手より強くなければならない』っていう言葉の意味を考えろって。あと、サリヴァの倒し方を聞いて回れって」
「……成程、流石はホムラ殿、元戦技教導官です。素晴らしい言い回しですね」
テンリュウは微笑み、では、と言葉を紡いだ。
「私からの助言です。その言葉は、戦いの真理そのもの。その意味がわかれば、あなたは強くなれる」
そのテンリュウの言葉に続き、頑張って、とアリアが言う。
ウィルは、頷いた。

◇　◇　◇

ーーグリス・エリカランの場合ーー

「逃げるね♪」
「逃げんのかよ！」

ウィルは思わずつっこんだ。グリスは、キャハハ、と笑う。

「だってさー、サリヴァルムでしょ？　お侍さんの？　無理無理、無理に決まってる。ボクはデバイスもないしね～♪」
「でも、戦い方とかあるんじゃねぇの？」
「キャハハ♪　だからその意味がないんだって♪」

グリスは笑いながら、椅子でくるくると回る。

「わざわざ倒すなんて無駄な労力支払うくらいなら、逃げた方が効率的だよん♪　そのくらいの力はあるし？　というか、そのくらいの力しかないし？」

だから、とグリスは言った。

「ボクは戦わないのが戦いなんだよん♪　試合じゃないんだから、わざわざ戦う必要なんてなーんにもないの♪」

グリスは回転を止め、ウィルを見る。

「戦わないのも戦いだよ？」

◇　◇　◇

ーーリヴァイアス・バルトマカリの場合ーー

「ほう、銀月が。よいだろう、答えてやる」

「すみませんお願いします」

リヴァイアスに対し、ウィルは思わず敬語になる。何となくだが威圧感があるのだ。この男は。

「訓練をしながらで構わんか？」

「あ、はい。大丈夫です」
「よろしい。しかしサリヴァルム……竜か。奴とではないが、一度殺し合ったことがある」

リヴァイアスは見るからに重そうなダンベルを持ち上げながら、思い出すように言った。

「まあ、俺様なら多少強引でも近付き、全力の一撃を叩き込むことになるだろうな」
「……」
「俺様はミッドベルカ混合の術者だが、得手不得手がある。何より射砲撃は性に合わん。叩いて落とした方が早い」

リヴァイアスはふふん、と得意気に言う。

「例え竜の一撃であろうと、数発ならば耐えられるだけの力と技術はあると確信している。その間に力で落とす自信も同時にだ」

漲る自信は語っていた。負けるはずがないと。
だがウィルは、一つだけ問いを発した。

「それでも、倒せなかった時は？」
「決まっている。死ぬだけだ。それは食物連鎖の真理。弱肉強食。違うか、若僧？」

リヴァイアスは笑みを浮かべる。

「貴様もベルカの技を使うなら、覚えておけ。己の信ずる武器と技。それこそが全てだ。通じなければ、待っているのは死。故に我らは何があっても信じねばならん」

己をだ、と、歴戦の勇士はそう言った。

◇　◇　◇

ーーエリア・カリアの場合ーー

「ギレンさんはいねぇし、ロードは話したとこ見たことねぇし、宗主は……戦えるかわかんねぇし」

つか、話しかける気にならねぇ、と呟きながら、ウィルは歩いていた。すると不意に、前に人影が現れる。
透き通るような蒼い髪を宿した女性騎士、エリア・カリア。

「ウィルか。こんなところで何をしている？　主との訓練ではなかったか？」
「いや、その訓練で出された問題で」

言って、ウィルはエリアにホムラから出された問題について述べた。
エリアは数秒考えた後、外を見る。

「ウィル。少し外で話そうか。いい月が出ている」

ーー外は、すでに暗くなっていた。眩く浮かぶ月を見上げながら、エリアはウィルに背中を向けた状態で言葉を紡ぐ。

「ます、サリヴァだが。私ならば双剣の取り回しの速さで戦う。相手は竜。サイズが大きい以上、小回りは効かんだろう。……まあ、これは私の刃が通じるという前提があってこそだがな」
「通じない場合は？」
「死ぬさ」
エリアは、酷く平坦な声でそう言った。
「私は端くれとはいえ騎士なのだ。お前にもわかるだろうが、ベルカというものは己の武器が通じねばもう打つ手は一気に失われる。それに、己を信じれなくなれば死ぬしかない」
騎士とはそういう生き物だ、とエリアは言う。
「主のため、信じるもののために戦い、通じねば死ぬしかない。そういう生き物なんだ。……まあ、騎士のことはいい。強くなるため、だったな。参考になるかはわからんが、私の話をしてやろう」
エリアはそう言って、振り返った。
「もう過去の話だが、私は一時期、最強の騎士などと謳われていた。だが、それは初めからそうだったわけではない。きっかけと、理由があった」
「きっかけと、理由？」
「ああ。……当時の私は、自惚れていただけの愚か者だった。私は全てが救えると、本気で信じていた馬鹿者だった。そんな時だ。とある次元世界で、それこそ天災と呼ぶべきロストロギアの暴走があった。管理局では手が足りず、私を含め多くの騎士が人命救助に駆り出された」

エリアは、何かを思い出すように空を見上げる。

「……地獄だった。歩けば見つかるのは死体だけ。あちこちで泣き声と呻き声が上がり、炎が収まることはなかった。私はがむしゃらに動き回った。三日、四日、五日と、休むことなく人を救い続けた。私ならば救えると過信していたから。しかし、六日目だ。私は一人の少女を見つけた。瓦礫に押し潰されそうになっている少女だ。私はすぐに救おうとした。少女を押し潰そうとしていた瓦礫が倒れるまで時間がなかった。だが、私の体はもうすでに限界を迎えていた。……今でも夢に見る。きっと、私が間に合わぬと悟ったのだろうな。少女は、叫んだよ」

ーー『逃げて』。

自らが死ぬというその瞬間に、当時のエリアよりも遥かに小さな少女は、自らよりもエリアを案じた。

エリアは、顔を覆う。

「情けないことに、私は止まってしまった。その言葉を聞き、足がな。その私の目の前を、瓦礫が落ちていった。少女が叫んでくれなければ、私も死んでいた」

救おうとした少女に救われた。それが、辛かった。

何より、全てを救えると信じていた自らの自信が、砕け散った。

「その後の私は酷かった。それこそ鬼のように動き回った。だが、体はすでに限界だ。終わりなど見えていた。……一時間、二時間。その程度で良かったのだ。休んだほうが、より効率的に人を救えた。しかし、私はそれを受け入れられなかった。頭で納得しても、心が

納得しなかった。……そして、私はまた過ちを犯した。人を救った身代わりに、命を落としかけてな。その時だ。主に出会ったのは」

エリアは、言う。

人を庇い、死にかけた自分を、ホムラが救ってくれたと。

「その時、私は主に怒られた。そこで初めて、自分の傲慢さに気付いたよ」

ーー『お前はお前が救った人間にお前の死を背負わせる気か！？傲慢やとは思わんのか！？』

ホムラはそう言い、エリアをはたいた。

そして、エリアは知ったのだ。

自らが命を落として誰かを救っても、誰も喜ばないと。

「主は私に帰れと言い、自分は再び現場に戻ったよ。……後で知ったが、主は結局、当時から親友だったランバード殿と共に二週間近くギリギリのラインで人を救っていたらしい。それを聞いて、私はますます自分が情けなく思えたのを覚えているよ」

休むのは、一日きっかり一時間。冷静に、冷徹に、助けたいという熱を抱えながら、彼は戦った。

そして、その時、二人で合わせて四桁もの人を救い、二人は『エース・オブ・エース』と呼ばれるようになった。

「ウィル。私は、憧れたんだ。あの人のようになりたいと。それが私が強くなれた理由。ただの傲慢な子供から、最強の騎士とまで呼ばれるに至った理由だ」

お前はどうだ、とエリアはウィルに問いかけた。

「お前が刃を握る理由はなんだ？　何故、強くなろうと考えた？」

「俺は……守りたい。アリアを、守ってやりたいんだ」

ウィルは答えた。エリアは微笑む。この少年が強くなりたい理由がそこであることは、エリアも知っていた。だから、これは迷いがあるか否かの問題。

即答できるなら、この少年は大丈夫だ。

「その気持ちを忘れるな。そうすれば、お前は強くなれる。その気持ちこそが答えだ」

ウィルは、頷いた。

◇　◇　◇

「絶景かな絶景かな」

落ちれば確実に死ぬような高さの崖の上で酒を片手に、ホムラは言った。世界が、美しい。

「主。こんなところにおられたのですね。……随分、ご機嫌なようですが？」

「おー、エリアか。いやいや、ウィルがちゃんとした答えを持ってきよったから、嬉しくてなぁ」

あいつは伸びるで、とホムラは楽しそうに言った。エリアは頷くと、

ホムラの隣に座る。

「失礼します」

「堅いなぁ。そんなかしこまらんでもええのに」

「そういうわけにも参りません。……あの問いは、教導隊の教えでしたか？」

「せや。普通は悩んで悩んで答えが出るもんやけど、わしとカグラは即答して教導官を驚かせた」

ーー『自分より総合力で強い相手に勝つには、相手より強い部分で勝たなければならない』。

それが、答えだ。

ホムラとカグラという二人の『エース・オブ・エース』は、互いに勝つためにずっとそれをしてきた。

「懐かしいなぁ、ホンマ……」

「……後悔、しておられるのですか？」

「少しはしとるよ」

エリアの言葉に、ホムラは即答した。

「坊主の言うことにも一理あったし、正直、揺れとった。せやけど、思い出したわ。わしは、変えようと思ったんや」

外から、管理局という狂った場所を変えよう。

怒りをぶつけ、変えていこう。

そう、思っていた。

「結局、勝ったもん勝ちや。わしを止められんのやったら、管理局はおしまい。そんだけやね」

だから、もう迷いはない。ホムラは、言い切った。
エリアは、そうですか、と頷く。

「ならば良かった。主、あなたは前を向いているのがあなたらしい」
「おおきに。……てか、エリア。自分、ウィルに話したやろ」
「ふふっ、大丈夫です。あの後の……私があなたを主と呼ぶようになったきっかけについては話していませんから」
「……ならええけどな」

ホムラは言い、そして、エリアに問いかけた。

「なぁ、エリア。自分、今幸せか？」
「どうでしょう？」

それは、二人にしかわからない問答。ホムラは、わからんのやったら、と言葉を紡いだ。

「幸せかわからんのやったら、こっちに来るとええ。抱き締めたる」
「……あなたはいつも、私を救ってくれるのですね」

エリアは、泣くように微笑む。ホムラは、そんなエリアを抱き締めた。

「ったく、無理しおって。トラウマ自分から抉るアホがあるか」
「……すみません」

エリアはホムラの胸元に顔を埋めている。ホムラは、ええよ、と言った。

「わししかおらん。泣いてもわからんよ」
「……あなたは、本当に優しい」
エリアは呟き、そして、沈黙が流れる。その中でホムラが思い出すのは、エリアが自分のことを主と呼ぶようになった日のことだ。
『嬢ちゃん、塞ぎ込んでどうした？』
『……』
『助けられんかったことを悔いとるんか？　やったら、それはお門違いや。そうやって塞ぎ込むんは、自己満足やぞ』
『……えっ？』
『塞ぎ込んどる暇があったら、少しでも強くなれ。今度こそ救えるようになれ。そして、忘れるな。お前が救えなかった奴のことを。そんで、そいつの分まで幸せになる。それが、わしらの義務や』
『……でも、私は幸せがわからない。こんな気持ちで、幸せになんてなれない』
『幸せがわからんか。よし、こっち来い。抱き締めたる』
『……！？』
『どや？　暖かいやろ？　それが人や。これを感じられるんやったら、幸せにならなアカン。死を背負って笑わないと、誰も救われん』
『……暖かい。けど』
『ん？』
『あなたも、震えてる』
『……わしもな、仰山救えんかったんや。だから、強くなろうや。お互いに』
『……はい』
そして、数日後エリアはホムラの下を訪れ、いきなり言ったのだ。

『あなたに剣を捧げます。我が主』

そうして、エリアは騎士になった。
それがこんなにも自分たちを苦しめるとは、思ってもみなかった。

「……なあ、エリア。わしを名前で呼ばんのやね？」
「呼べませんよ」

エリアは、どこか嬉しそうに微笑んだ。

「あの日憧れた、あなたの背中に追いつくまでは」

間章　戦う理由ときっかけと（後書き）

少し、いつもとは違う雰囲気を出してみたく。
上手くいきましたかね？
相変わらずシリアスですが。

ホムラとエリアの二人は、距離感を意識しています。通じているのに、しかし、それでも男女の関係ではないという微妙な距離感が伝われば幸いです。
……関係の主導権は意外や意外、ホムラです。
感想などを頂けると、とても嬉しいです。

次回なんですが、リューイを主役に短いものを予定しています。

では、本当にありがとうございます。

間章　緑風、紡ぐは金色の炎

「……ほらよ、ウェンディ」
「わーい！　ありがとうッスリューイ♪」
「えーい、だからくっつくな。ケーキが潰れんだろうが」

地上本部の休憩スペースで、そんな会話が響いた。地上本部において僅か三名しかいないＡＡＡランク以上の魔導師の一人、リューイ・エンドブロムと、『Ｎ２Ｒ』の一角にしてナカジマ家の末っ子、ウェンディ・ナカジマだ。

「うー……美味しいッス！」
「そいつは良かったな。俺は財布が素寒貧だよ」

リューイは呟く。昔、彼の友人であるファイムにも言ったのだが、たかがケーキがこんなに高い理由がわからない。
もっとも、ファイムは『それでも買うからあの値段なんです。需要と供給ですよ』などと言っていた。うん、意味がわからん。

「リューイもそんな暗い顔しないで。ほら、あーん」
「ん、あーん」

ぱくっ。差し出されたケーキを食べる。
……悔しいが、美味かった。いやまあ、高いんだから不味かったら困るんだけども。うん、何でか悔しい。

「しっかし、お前含め女ってのは甘いもん好きだよな。ミリアムも何だかんだ言って好きだし、ナカジマ家も甘いもん持ってったらかなり喜ぶだろ？」

「あれ、じゃあリューイは甘いもの嫌いッスか？」
「嫌いってわけじゃねぇけど、進んで食おうとは思わねぇな」
コーヒーを啜りながら、リューイは言う。まあ、甘いものが美味しいことは認める。しかし、何となく重いのだ。
「あたしは甘いものならいくらでもいけるッスよ～♪」
「おーおー、太んなーー」
ーカツッ。机に置いていたリューイの手のすぐ側に、フォークが突き刺さる。
「リューイ？」
「いやいや、お前これはねぇよ。チンクさんもびっくりの腕前じゃねぇか」
「リューイ？」
「……すみませんでしたー」
謝る。うん、怖い。こういう時の女はマジ怖い。
ウェンディは、全く、と怒った素振りを見せる。
「リューイはそういう所、無神経ッスよね。そこは触れてはいけないところッスよ」
「悪かったって。機嫌直せウェンディ」
「別に悪くないッス」
嘘吐け。そのつっこみは、ギリギリで飲み込んだ。
「ウェンディ、どうしたら機嫌直る？」
「……じゃあ、頭撫でて欲しいッス」

「ん？　そんなんでいいのか？」

リューイが聞くと、ウェンディは頷いた。また何か買わされると思っていたリューイは、少し安堵する。
そして手を伸ばすと、ウェンディの頭を撫で始めた。ふあっ、と、気の抜けた声をウェンディが漏らす。

「こんなんの何がいいんだか」
「……いいんスよ。リューイはわからなくて」

わかられると困るッス、と、誰にも聞き取れないような声でそう言った。
そうして、数分経った時。

「あ、リューイと……ウェンディ？」

声が聞こえた。リューイがそちらを見ると、立っていたのはティアナ・ランスター。その視線は、ウェンディを撫でているリューイの手に注がれている。

……何故か、冷や汗が噴き出した。

◇　◇　◇

地上本部の廊下を、二人の女性が歩いていた。いや、片方は女性というよりは少女と呼ぶ方が正しい。
ギンガ・ナカジマ。

ミリアム・エンドブロム。
共に陸士１０８部隊に所属する魔導師とユニゾンデバイスである。

「それにしても、リューイくんはどこへ行ったのかしら」
「すみません。落ち着きのないマスターで」
「いいのよ。急に決まったことだし」

ギンガは微笑む。今二人は、上からの指示をリューイに伝えるために彼を探していた。
しかし、いない。

「全く、どこを出歩いているのか……」
「まあ、休憩時間だから。……そういえば」

思い出したように、ギンガが言った。

「二人はファイムくんと仲が良いわよね？」
「良くしていただいているというのが本音です。あの方は、私たちにとっては大恩人ですから」
「……緑風事件、よね。聞いても、いい？」

遠慮がちに、ギンガは言った。ミリアムは、そうですね、と言葉を紡ぐ。

「お聞きしたいのであれば。……そろそろ、乗り越えねばならないことですから」

ミリアムは、静かにそう言った。

◇　◇　◇

地上本部食堂。

「お久しぶりッスね、ティアナ」
「本当にね。調子はどう？」
「……」
「おかげさまで絶好調ッスよ～。パパりんたちも元気いっぱいッス」
「へぇ……オットーとかディードとかセインとかは？」
「……」
「勿論元気ッス。あ、でもセインはたまにイタズラして怒られてるそうッスけど」
「……相変わらずね」
「……」

何故だろう、とリューイは思った。
目の前で繰り広げられているのは、女性同士の仲のいい会話。だというのに、冷や汗が止まらない。

（目が笑ってねぇんだよ……）

リューイは額をひくつかせながら、内心で呟く。この二人、目が笑っていないのだ。だから怖い。

（仲悪いとは聞いてねぇんだが……）

リューイは首を傾げる。ウェンディは確か、ティアナのことを好きだと言っていた。嘘を吐く奴ではない。
ならば、何故？

その答えがわからない。

「……」

リューイはコーヒーを口に含む。その時、ウェンディがリューイの方を見た。

「そういえばリューイ、ファイムが目を覚ましたらしいッスね」

「面会謝絶だけどな。まあ、目を覚ますのがちょっとばかし遅かったとは思うけど、そんだけだな」

どうせ会えねぇし、とリューイは言った。ティアナが、そうなの、と言葉を紡ぐ。

「仲がいいって聞いてるけど」

「俺は親友だと思ってますよ。だからこそです。俺はあいつを信じてる」

リューイは、言い切った。

「カグラさんに呼ばれてった時は肩透かしくらって驚きましたけど、まあ、あいつらしいとも。そういう奴ですよ、あいつは」

周りを巻き込みたくない。そういう人間なのだ。

「ただ、あいつが罪人扱いされてんのは気に食わねぇ。あいつは、俺たちを救ってくれたのに」

「緑風事件ッスよね？」

「ああ。俺はあいつのおかげでこうして生きてんだ」

本気で感謝してるーーリューイは、言い切った。
そのリューイに、ウェンディが言葉を紡ぐ。

「あの、聞いてもいいッスか？」

何をだ、とは言わなかった。リューイは、んー、と少し考えてから、言葉を紡ぐ。

「いいぜ別に。面白い話でもねぇけどな」

◇　◇　◇

その日は、特に何の変哲もない日だった。
リューイ・エンドブロムは、交通事故で両親を失い、一人で生きていくことを強制された。
もっとも、住んでいる場所が離れているとはいえ、祖父はいたから独りきりというわけではなかったが。
周囲は色々言ってきたが、リューイにしてみれば鬱陶しいだけだった。悲しみなんてものは、消えるようなものじゃない。同情も、面倒なだけだ。
だから、リューイは次第に一人になっていった。
本人が望んで、そうなった。

「今日も一日、どうでもいい日が過ぎていく」

リューイは、謡うように呟いた。なにも変わらない日常。つまらない毎日。

目的も夢もない日々。
誰か、こんな日常を壊してくれないかと本気で思った。
あり得るはずが、ないというのに。

「……ん？」

不意に、叫び声のようなものが聞こえた。リューイは興味によって、そちらへ行く。
人通りの少ない道で、一人の女の子が叫んでいた。

「こ、これはダメです！　離してください！」

見れば、珍しい翡翠の色の髪と瞳をした女の子が、必死になって犬から何かを守ろうとしていた。

（おいおい、あの犬ブチギレてんぞ）

見れば、犬の方は怒りの頂点に達していた。今にも飛びかからんとしている。
リューイは、ふぅ、とため息を吐くと、走り出す。
そして、鞄を振り上げ、全力で振り抜いた。

「ワウッ！？」
「こっちだ！！」

犬が怯んだその一瞬で、リューイは女の子の手を引き、走り出す。
女の子は驚いた表情で、こちらを見ていた。

ーーそうして、数分走った後。

「大丈夫か？」
「はい。すみません、ありがとうございます」
「いいさ。大事なものなんだろ？」
手を引きながら、リューイは見ていた。小さな宝石のようなものを、この少女は大事に握り締めていた。
「ま、お互い怪我も……って、よく見りゃ傷だらけじゃねぇか！？」
リューイは思わず声を上げた。見ると、少女の身体はあちこちに擦り傷や切り傷を負っていた。
「手当てもしてねぇし……親はどうした？」
「……」
少女は口を噤む。リューイは息を吐くと、少女の手を引いた。
「手当てぐらいならしてやれる」
「えっ、しかし……」
少女は躊躇う。リューイは、言い切った。
「強制連行だ」
◇　◇　◇
リューイは家に着くと、早速少女の傷を水で洗った。痛そうな素振

りを見せたが、そこは無視。

（しばらく放置してやがったな……化膿してるとこもあんぞ）

内心で呟きつつ、リューイは手早く手当てをすませる。そうした後、リューイは傷口に絆創膏、もしくはガーゼを当て、これでよし、と呟いた。

「とりあえずこれでいいはずだ」

「あ……ありがとう、ございます」

「いいよ。ただのお節介だ」

言いつつ、リューイは少女に飲み物を出す。そして、呟くように言った。

「別に事情なんて知らんし、話したくないだろうから聞かねぇよ。話してくれるんだったら聞くけどな」

「……」

「……俺な、親がいねぇんだわ。事故だってよ。そういうのってさ、本当に突然なんだな」

こんな子供に何言ってんだ俺は、などと内心で呟きつつ、リューイは言う。

「整理なんてついてねぇし、つくまではしばらくかかんだろ。けど、何てのかな？　周りの目が変わっちまった。放っといてくれりゃあいいのに、変に気を使ってきて。俺はそれが嫌でな。普段なら気にしなかったんだろうけど、どうしてもな。……気がついたら、一人だったよ」

自分も周囲も変わってしまったから。
だから、今までのままではいられなくなった。
その答えが、独りきりという現実。

「なんつーか、理由があんだろ？　だったら、俺に言えることなんざねぇわ。だってよ、それはお前だけのもんだもんな。踏み込まれたくなんてないもんな」

リューイは、立ち上がる。

「落ち着いたら、家まで送ってくよ」
「……いんです」

少女は、消え入りそうな声で、そう言った。

「帰る場所、ないんです」

リューイは、そっか、と呟いた。

◇　◇　◇

深夜。リューイは、目を覚ました。ソファーで寝ていたせいか、体が痛い。

「あー……くそ。眠れねぇ」

リューイは呟く。理由はわかっている。
ミリアム、と名乗ったあの少女が気になるといえば気になるが、し

かし、主な理由はそこではない。
夢にまで見てしまう、孤独な夢。独りきりの夢。それが、眠りを阻害する。

「一人と孤独は違うなぁ……」

一人と孤独。
似ているけど違うそれ。リューイは、一人は好きだが孤独は嫌いだ。
だから、今は辛い。

「あー……俺ってこんな弱かったんだな……」

実感する。リューイ・エンドブロムは、あまりにも弱い。
孤独に、こうも痛みを感じるのだから。
リューイは、寝よう、と呟く。しかし、閉じようとした目が、とあるものを捉えた。

「ん？　ミリアム？」

立っていたのは、ミリアム。その目は虚ろで、リューイは思わずミリアムに近付いた。

「おい、どうした？　ミリアム？」
「……魔力保持者を確認。解析開始。ＡＡＡランクと認定」
「おい、ミリアム？」
「同調率解析……６２％。ユニゾン可能。デバイス『ブラッディハウンド』セット」

ミリアムの目が、リューイを映し出す。
リューイは何故か、背筋が凍った。

ーーそして、風は炎をその身に宿す。

◇　◇　◇

視界が、紅に染まっていた。
ゆらゆらと揺れる炎。それが、世界を覆っている。

「……殲滅」
（なん、だと？）

聞こえてきた呟きは、自分の声だった。
視界に、何かが映り込む。
それは、剣だった。

「エクスプロージョン」

再び、意思とは関係のない言葉が紡がれる。
ガシャン、という音が響き、剣が炎に包まれた。
リューイは、まさか、と思う。

（やってるのは……俺？）

夢だなどとは、欠片も考えなかった。
ただ、漠然と理解していた。
これは夢ではなく、現実であると。

「……殲滅」

自分の体が、勝手に動き。刀身に金色の炎を宿した剣を振るおうとする。
やめろと、心が叫んだ。
しかし、叶わない。
ーー振るわれた刃は炎を吐き出し、世界を焼いた。
何が何だか、わからない。
ただ、わかるのは。
この惨劇の犯人が、自分であるということ。

「ーーーーッ！！」

叫び声が聞こえてきた。視線がそちらを向く。
男の子が、泣いていた。
剣が、持ち上がる。

（おい、冗談だろ？）

そして、炎を纏った刃が、振り抜かれる。

（やめろ馬鹿野郎！！）

リューイは叫んだ。しかし、それで止まるわけではない。
振り下ろされた刃から、炎が走る。
男の子が、こちらを見た。ーー泣いて、いた。

（逃げてくれ！！）

祈るような叫びはしかし、大気を震わせることさえない。
だが。

ーーヒュン。
風切り音。リューイの放った炎が、突如、引き裂かれたように消滅した。

「大丈夫？」

優しい声が聞こえた。視線の先に、一人の青年が、いつの間にか立っていた。男の子を庇うように立っていたその青年は振り返ると、男の子に声をかけた。

「あちらはまだ、火の手が上がっていません。すぐにあちらへ」
「あ、あの……」
「急いでください。……気をつけて」

青年はそれだけを言い切ると、男の子に行くように促した。
そうして男の子が見えなくなってから、青年はこちらを見る。

「管理外世界である以上、わからないかもしれませんが、一応名乗ります。管理局本局執務官、ファイム・ララウェイです。今すぐ武器を納めてください」
「……障害は、排除する」

また、言葉が勝手に紡がれる。
だが、ファイムという青年は、首を左右に振った。

「ご安心を。あなたの言葉は、僕に届いている。今すぐに助けます」

バサッ、と、その背中に翼が宿る。

「届かぬ心の声を聞き、その想いに応えること。それが管理局の存在意義だ」

ーーそして、視線がぶつかり合う。

風が、吹く。

ーーザギィン！！

振り抜いた剣の一撃を、ファイムは右腕で受け止めた。しかし、重いあ一撃を受け止めきれず、吹き飛ばされる。

「つうっ……！？」

怯んだのは一瞬。だが、その一瞬が命取りになってしまう。

「エクスプロージョン」

紡がれた言葉。刀身が金色の炎を纏い、更に、風を纏う。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！！》

ファイムが、障壁を展開。しかしそれは一刀の下に砕かれる。

「ーーーー！！」

ファイムは瓦礫を巻き込み、家屋を破壊しながら吹き飛ぶ。

そして、もう、向かってこなくなった。

「……」

リューイはファイムが吹き飛んだ方向を一瞥すると、その場を離れた。

（何だよ、これ……？）

それを、ただ見ていることしかできなかった。

◇　◇　◇

《マスター。ご無事ですか？》

「……なんとか。あばらの二、三本は折れてるだろうけど……」

苦笑しつつ、ファイムは言う。凄まじい威力だった。防ぎきれない程に。

受け流すべきだった。それならまだ保ったはず。

「悔やんでも、仕方ないね。リンネ、位置特定は済んでる？」

《大丈夫ですマスター。追いますか？》

「ううん。……先に、人命救助をしなくちゃ」

ファイムの目に映るのは、燃え盛る街と、逃げ惑う人々。

管理外世界など関係ない。彼らを、救わなければ。

《しかしマスター。管理外世界、それも魔法文明がない世界への干渉は……》

「人を救って裁かれるなら、それはそれだよ」

ファイムは言い切ると、走りだそうとした。しかし。

『待て。ララウェイ執務官。救助行動を行うことは禁ずる』

いきなり、そんな声が聞こえてきた。ファイムは、思わず足を止める。

「何故ですか！？」

『そこが管理外世界だからだ。関わることは許さん』

「……助けを求めている人が、いてもですか？」

今回、ファイムにこの世界へ行くことを指示した人物に、ファイムは問いかける。

人を数字でしか見れない男は、一瞬の躊躇もなく答えた。

『忘れたのか？　貴様の任務はグリス・エリカランの早急な逮捕、もしくは排除だ。『そんなこと』に手を出している場合ではあるまい？』

それが管理局の人間の台詞であると、ファイムは信じたくなかった。

『会話記録は聞かせてもらった。グリス・エリカランはその世界にいるのだろう？　急げ』

「……それは、命令ですか？」

当然だ、と、相手は言った。

ファイムは、了解、と呟き、通信を切る。

握り締めすぎた拳から、血が流れ出した。

◇　◇　◇

「キャハハ♪　凄い凄い、お手柄だねぇ♪」

目の前で、見た目１４、５くらいの少年が楽しそうに笑っていた。
体は動かない。

「ＡＡＡランクの魔力持ち、更には炎熱の変換資質？　中々いないよそんな人？　キャハハハハハハハハ♪」

今現在、リューイは自分の意識を取り戻している。しかし、体が光の縄のようなもので拘束されていて、動けない。
隣にいる、ミリアムもだ。ただ、彼女は何かを堪えるように俯いている。

「誰だよテメェは？」
「犯罪者」

茶化すわけではなく、その少年は平坦な声でそう言った。リューイの眉が跳ね上がり、それを見たグリスは笑みを浮かべる。

「キミは知らないだろうけど、世界は無数に存在するんだよ。ボクはその中で犯罪を犯す人間。理由とか倫理とかはともかく、世界はボクを否定してる」

そういう人間だよ、ボクは。と、少年は言った。

「今回はね、ちょっとした実験。キャハハ♪　運がなかったねぇ？」

少年は、先程までとは打って変わって、楽しそうに言う。

「そこのユニゾンデバイス……ああ、わかんないか。魔法文明ないんだもんね？　まあいいや。単純に言うとね、キミは女の子と思ってるかもしれないけど、その子、人間じゃないの」

キャハハ、と少年は笑う。

「要はね、機械なんだよ。戦いの道具。キミは巻き込まれたの。キャハハ、ホント運がないよねぇ？」

少年は笑いつつ、俯いているミリアムを見下すように眺めた。

「自由になれたと思った？　逃げられると思った？　できるわけないでしょ、そんなこと。ボクを誰だと思ってるの？　グリス・エリカラン。『アンリミテッド・デザイア』の継承者だよ？　キミは逃げられない。逃がすつもりもない。ただ、逃げられ続けるのも面倒だしね。少し、痛い目に遭ってもらおうかな？」

キャハハ、とグリスは笑い、そして、リューイを見る。

「運が悪かったって諦めてね？　キミの心を叩き壊す。そうだね、世界でも壊してもらおうかな？」

「……ッ！？」

ミリアムが弾かれたように顔を上げる。グリスは笑った。

「それがキミへの罰だよ、ユニゾンデバイス。キミに組み込んだシステムから、キミは絶対に逃げられない」

「どういうことだよ？」

リューイは、思わず問いかけていた。グリスは、笑みを深くする。

「勇気あるねぇ♪　キャハハ♪　別に難しいことじゃないよ？　簡単に言うとね、精神を乗っ取ってるの？」

「精神？」

「キャハハ♪　肉体っていうのは、精神で動かすんだよ？　だからボクは、その精神を好きに奪えるようにした。キャハハ♪　想像してみてよ？　記憶が飛んでる間に何人も何十人も人を殺して傷つけて、気がついたら血の海に他人の血に塗れて立ってる気持ちをさぁ？」

ーードクン、と、リューイの心臓が高鳴った。

「ホント楽しいよ？　毎回毎回泣き叫んでさぁ？　心が壊れれば楽なんだろうけど、壊すことはボクが許さない。精神を掌握してるんだもん。直せる直せる。キャハハ♪　楽しいよ♪」

「クソ野郎が……！！」

腹の底からの声が飛び出した。グリスは冷笑を浮かべる。

「知ってるよ？　けど、ボクを止められないなら千の言葉も意味はない。……丁度いいや。ちょっと鬱陶しい執務官がいてねぇ。キミたちに相手してもらおっかな？」

キィン、という音と共にグリスの足下に魔法陣が現れる。

「テメェ……！！」

リューイは、グリスを睨みつけた。グリスは、笑う。

「相手はキミを殺しにくるよ？　どちらにせよ、キミは死ぬ」

ー一心か体かは、わからないけれど。

グリスは、そう言った。

◇　◇　◇

……視界が、血に染まっていた。右目が、ほとんど見えない。

「……ッ、なんて、力」

頭を押さえながら、ファイムは呟いた。グリスを追っていった先に、例の少年がおり、不意をつかれた。先程のダメージが尾を引き、まともにガードさえできなかった。

「リンネ、相手の能力は……？」

《……推定、オーバーSランク。魔力変換資質、炎熱、風雅を確認。術式はおそらく、真生ベルカ式です。また、ユニゾンデバイスの反応も確認しました》

「成程、はやてさんを思い出しちゃうな。……正直、荷が重い」

素直な感想が漏れた。相手が悪過ぎる。勝てる気がしないとは、このことだ。

けれど、そんなことは理由にならない。

「だけど、だからって無視はできないよね。あんなもの、見ちゃったら」

ファイムの視線の先には、少年がいる。
ーー今にも泣きそうな、弱い顔が。

「リンネ、手を貸してくれる？」
《無論。あなたがそれを望むのならば》

そうして、ファイムは息を吐く。
その胸元から、執務官であることを示すバッジが消えていた。
思い出すのは、先程のやりとり。
覚悟を示した、その一時。

ーー数時間前ーー

「殺害、許可？」

紡がれた言葉を、ファイムは思わず繰り返していた。

『そうだ。グリス・エリカランと共に、貴様が相対した少年とやらにも殺害許可を出す』
「ちょっと待ってください！　グリス・エリカランとの会話で、彼は被害者だとわかっています！」

殺害許可。それは、『殺せ』という命令に等しい。
その命令を、ファイムは下された。

『だから何だというのかね？　その少年は脅威だ。被害が広がる前にどうにかするのは、当然のことではないかね？』
「……それは、相手が助けを求めていてもですか？」

『多くを救うためには、少なきを切り捨てねばならぬ時もある』

ファイムは、拳を握り締める。

「現場で命をとるのは僕たちです。わかっておられるのですか？」

言葉が、鋭くなる。

「人を殺して、本当に人が救えるのですか？　救えるのであれば、証拠をください。彼を殺す、理由をください！」

『上に逆らうか？　貴様、自分の立場がわかっているのか？』

「わかっていますよ。あなたたちに逆らえば、僕は罪人になる。けれど、それなら従っても同じだ。彼を殺せば、僕は僕を許せない」

パキン、という音と共に、何かが砕け散った。

ファイムは執務官バッジを、彼が目指し、ようやく手にしたものを自ら砕いた。

元々、ファイム・ララウェイという人間は罪人だ。管理局に従わなければならない人間だ。

しかし、管理局が正義であるためにファイムはいるのなら。

ーーここで、彼を救わなければならない。

ファイムがバッジを砕いたことに、通信の向こうにいる人物が驚く。

『貴様……』

「僕には才能がない。力だってない。レアスキルだってない。ヒーローになんてなれやしない。魔法だって、たかが知れてる。けれど」

ファイムは、真っ直ぐな目で言葉を紡いだ。

「助けを求めている人の声くらいは聞こえる。そして、手を差し伸

べることくらいはできる。大した魔法も使えない僕にとって、それが一番強い魔法だ」

誰かを傷つけるためでなく、泣いている誰かを救うために、この手の魔法はあるはずだから。

ファイムは、言い放つ。

「彼を助けます。それが罪だというのなら。殺すことが管理局の正義だというのなら。どうぞ僕を殺してください」

ーーそうして、罪人は空へと駆け上がる。

「……グリス・エリカランによれば、ユニゾンデバイスのシステムを狂わせてるらしいね」

《そのようです。精神操作、と言っていましたが》

「それなら話が早い。システムを壊せばいい」

ファイムは、言い切る。リンネは、マスター、と呟くように言った。

《どうやってそれを為すおつもりですか？》

「……ＪＳ事件」

ファイムは立ち上がりながら、そう言った。

「高町教導官は、魔力ダメージでかの聖王を救い出した。グリス・エリカランはジェイル・スカリエッティの継承者。おそらく、似た方法で彼らを操ってる」

ついこの間にあったあの事件で、高町なのはという人物はそうやって奇跡を起こした。

「魔力ダメージでノックダウンさせる。いけるね、リンネ？」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

◇　◇　◇

もう、耐えられなかった。

再び現れた、翼を生やした青年。彼はしっかりしろと、助けてみせるとそう言った。

その青年をｉｉ再び、叩き落とした。

それだけではない。ここにくるまでに、自分は、自分が育った場所を焼き払った。

何人も、何人も傷つけた。

「ｉｉｉｉ」

青年が、再び空へと上がってきた。見るからにボロボロだ。

リューイは、呟く。

「頼む、殺してくれ」

意識はあった。言葉は紡げた。

しかし、人を傷つける体を、止められない。

このままではまた、誰かを傷つける。

「ダメなんだ。体が言うことを聞かねぇ。このままじゃ、また傷つ

けちまう。頼む、俺を殺してくれ」

先程、青年はこうして自分が話すことに動揺した。しかし、もうそんなことはないだろう。

リューイ・エンドブロムは、世界が嫌いだ。

たった一つの出来事で、自分をたった独りきりにした世界が大嫌いだ。

しかし、それでも。

そこに生きる人たちを傷つけるのは、嫌だった。

「死にたい？　殺して欲しい？」

青年は、ファイム・ララウェイと名乗った人物は、リューイの言葉に、僅かに感情の乗った声でそう返した。

「……ふざけるな」

《Ｗｉｎｄ　ｍｏｖｅ》

ーーガツッ。

鈍い音が響き渡った。リューイとの間合いを移動魔法で詰めたファイムが、頭突きをリューイに叩き込んだ音だ。

固まった血で塞がりかけていたファイムの額の傷が開き、血が噴き出す。

「死にたいなどと。殺して欲しいなどと。傲慢なことをよく言えたものですね」

ファイムはしかし、流れ出る血を少しも気にせず、リューイを睨みつけた。

「あなたが死にたいと言って過ごした今日は！　昨日死んだ誰かが生きたかった明日なんだ！生きてください！　辛くても！　苦しくても！　生きていかねばならないのです！」

ファイムは、右腕を構える。

「僕はあなたを助けたい。けれど、それだけじゃあなたを救えない。だから、言ってください」

お願いします、と、ファイムは言った。

「生きたいと言ってください。その言葉をくれたなら、僕は、例え命を捨てることになろうと、あなたを必ず助けてみせる」

「……俺は」

リューイは、絞り出すように口にした。

「死にたくねぇ……こんなわけわかんねぇ死に方なんて、したくねぇ！　頼むよ、助けてくれ！」

何もわからないままに、死にたくない。

リューイは、叫んでいた。

ファイムは、無論、と頷く。

「助けます。救ってみせる。救いを求める誰かに手を差し伸べるために、僕らはいるんだ！」

ーーヒュン。

風切り音。リューイの周囲に、薄い翡翠の光で覆われた無数のワイヤーが出現する。

それらはただ漠然と存在するわけではなく、意味ある陣を築いている。

「三次元型封印結界、起動！！」
《Ｙｅｓ，ｄｒｉｖｅ！！》

リューイの体から、力が抜ける。魔力を封じる力を宿す結界が、リューイの力を一時的に奪い去る。
しかし、この結界の効果は一瞬。
その一瞬で、ファイムは動く。

「ブラスター３！！　リミットリリース！！　バースト！！」
《Ｂｕｒｓｔ　Ｓｔｏｒｍ！！》

フルドライブによる限界突破に、ブラスターシステムによる更なる限界突破の重ねがけ。
命を削る行為だと、誰にでも理解できることだった。
しかし、それでもリューイには伝わる。
そうまでしてでも、救おうとしてくれているのだと。

「ストーム！！」

翡翠の光が、世界を飲み込んだ。

◇　◇　◇

「……外傷は、特にありませんね」
《魔力ダメージで気絶しているだけのようです》

「良かった。管理局には連絡してあるから、すぐに病院なりに連れて行ってもらえるね」

良かった、と、ファイムはもう一度呟いた。この少年を、救うことができた。

ただ、彼には今回の件のせいで、元の生活に戻れなくなるかもしれない。そういう意味では、救えたとは言えないのかもしれないが。

「あなたも、もう、大丈夫ですよ」

膝を抱え、俯いている少女に、ファイムは言った。少女は、首を左右に振る。

「……私は、これまでに多くの人を、殺してきました。巻き込んできました。許されるはずがありません」

「そうかもしれない」

ファイムは少女の言葉を否定せず、むしろ頷いて見せた。

「罪は、他人が何と言おうと自分が背負うものだから。きっと、一生終わりなんてない。けどね、それでも生きていくしかないんだ」

ファイムは、立ち上がる。

「僕は、明確な殺意をもって人を殺したことがある。その償いのために、管理局に従ってる。……自己満足とはわかってるんだ。けれどそれでもやるしかない。生きていくしかないんだ。こんな罪に塗れた罪人でも、生きていくしかないんだよ」

あなたは違う、と、ファイムは言った。

「あなたは苦しんで、悩んで、ずっと耐えてきた。何とかしようって、頑張ってきた。そんな人に冷たく当たる程、世界は残酷じゃない」

不条理で理不尽な世界だけど。きっと、世界はそれだけではないはずだから。

「……僕は行きます。まだ、やらねばならないことがある」

全ての元凶を、討たねばならない。

少女は、顔を上げた。

「……私も、連れて行ってください」

「後悔しますよ。必ず」

ファイムは、すぐさま聞き返した。少女は、頷く。

「それでも、私がやらねばならないことです」

◇　◇　◇

「キャハハ♪　捕まえにきたの？　ご苦労様だねぇ♪」

「……」

ファイムは無言。拳を構える。

その意味を悟ったグリスが、笑みを浮かべる。

「ふーん？　成程、矛盾してるとか思わないの？」
「……フルドライブ。モード・フェザーナイツ。ブラスター３。リミットリリース」

ーーゴバッ！！
吹き荒れる魔力が、地面を砕いた。ユニゾンデバイスである少女ーミリアムとユニゾンしたこの時、ファイムの力は一瞬ならばオーバーＳへと迫り得る。
あくまで、一瞬ではあるのだが。

「ホント矛盾してるよねぇ？　罪人が罪人を殺すんだから。ねぇ、気付いてる？」

ファイムは地面を蹴り飛ばし、前へと進む。

「その矛盾はいずれ、キミの全てを否定する」

ーードスッ。
ファイムの拳が、グリスを貫いた。

「……否定もなにも」

ファイムは、呟いた。

「ここでこうしていること自体が、意味のないことですよ」

◇　◇　◇

「以上が、俺とミリアムがファイムに救われた話だよ」

コーヒーを啜りながら、リューイは言った。

「あの後、ファイムは俺たちを弁護してくれて、俺たちは保護観察で済んだ。……考えもしなかったよ。あいつが、自分の立場まで捨ててたなんて」

見ず知らずの自分たちのために。

彼は、自らを犠牲にした。

「俺たちが特別じゃねぇんだろうさ。あいつは誰であっても同じことをする。だから、憧れてるんだ」

そして同時に、感謝をしている。

目指すものをくれた、あの男に。

「俺とミリアムの目標は、いつだってあいつの背中なんだ」

リューイは、笑ってそう言った。

「……マスターの言う通りです」

「……」

「私たちは、強烈に憧れました。あの方に」

それが戦う理由になったと、遠くからリューイを眺めながら、ミリアムはそう言った。

◇　◇　◇

「……相変わらず、キミは神出鬼没だねぇ」
「キャハハ♪　久し振り、ドクター♪」
「キミが『殺された後』以来かな？」
「うんうん♪　いやね、今日は確認があって会いに来たの♪」

長くはいられないんだけどねん、と、グリスは笑う。

「ねね、ドクター？　ここから出たい？」
「魅力的だが、遠慮させてもらうよ。ここはここでそれなりに退屈しないのでね」
「ありゃりゃ。じゃあ仕方ないね。……久し振りに会えて良かったよドクター。今日はそれを確認しにきただけだから。じゃあね？」

グリスは、スカリエッティに背を向ける。スカリエッティは、その背中に問いかけた。

「キミは何を目指しているんだい？」
「この世界」

グリスは、冷笑を浮かべた。

「この世を思い通りにするのが、ボクの夢だ」

そして、グリスは立ち去っていく。
スカリエッティは、ははははっ、と笑った。

「『アンリミテッド・デザイア』か……私などより、彼の方が余程その名に相応しい」

面白くなりそうだ、と、スカリエッティは笑い続けた。

間章　緑風、紡ぐは金色の炎（後書き）

緑風事件です。かなり省略しましたが、楽しんで頂ければ幸いです。
本当は、元々文庫一冊分くらいの話なんですが、それではいかんと色々削った結果、こういった形になりました。

感想など頂ければ、幸いです。
ありがとうございます。

さて、次回ですが、次回で短編は終了です。その次回についてなんですが、今までとは毛色が違ったものになります。
ｋｙｏｎｓｉ先生にも協力して頂き、できるだけ楽しんでもらおうと思います。
それというのも、今後本編はとんでもなくシリアスになっていきます。（友人に掻い摘んで話すと、軽く引かれました）
それがいいと言ってくださる方も多く、とてもありがたいのですが、その前に明るいものを挟もうと思った次第です。
相変わらず更新が遅く、申し訳ございません。

ご意見、アドバイス、感想などは頂けると大喜びします。
良ければ今後ともお付き合い頂ければ幸いです。

最後になりましたが、ｋｙｏｎｓｉ先生、本当にありがとうございます。

読者の皆様には、いつも支えられております。メッセージをいつもくれる方、いつもいつも感謝しています。感想をくれる方、毎回、それが原動力になっています。

長くなってしまいましたが、今後とも精進していく次第です。よろしくお願いします。

ありがとうございました。

間章　大乱闘、散りゆくは　前編

管理局本局。昼夜の概念がないせいで、そこで何ヶ月も過ごせば体のリズムが狂ってくるとされるその場所は、世界平和の要である。ＪＳ事件から一年が経った今も、管理局は不安定なままだ。特にミッド地上は変わらず本局に対して強い不信感を抱き、本局と地上を繋ぐと謳った理事会も大した成果を残せずにいた。

「……っとに、陰鬱だよなここ」

本局の食堂で、カグラ・ランバードは呟いた。感じるいくつもの視線に、僅かながら敵意を感じる。

カグラには理事会の便利な手駒という裏の顔がある。それ故に、それこそ様々な肩書きかあった。

地上では一佐として首都防衛隊の統括官の一人として活躍し、本局の戦技教導隊では教導官を人格面において教育する特別戦技教導官という役職に就く。他にも監査官や特別捜査官など、何かあれば必ず動ける立場にあった。

それ故に、カグラは何着も制服をもっている。本局にいるなら教導官の制服なり特別捜査官の制服なりを着ればいいのだが、彼は敢えて地上本部の制服を着ていた。

（こんなんで世界を守れんのかね？　くだらねぇ馬鹿ばっかりだよ）

カグラは内心で呟く。ＪＳ事件は本局と地上の確執が原因だ。だというのに、今も尚こうしていがみ合っている。

成長しない組織だ、とカグラは呟いた。

「カグラ？　何故キミがここにいる？」

「ん？　おー、クロすけじゃねーか」
「……その呼び方は止めろ」

管理局が誇るサラブレッドの一人、クロノ・ハラオウン提督は不機嫌そうに眉を寄せた。カグラは、ははっ、と笑う。

「何だよ、未だに師匠は苦手か？」
「……頼むから思い出させるな」

クロノは疲れたように言う。カグラは笑った。

「天才クロノ様もネコミミ師匠にゃ勝てねぇのな？」
「いいからその話題から離れろ」

カグラと相席しながら、クロノは言い放つ。カグラは、くっく、と笑った。そのカグラに、第一、とクロノは言葉を紡いだ。

「天才というならキミこそだろう？　かつての『エース・オブ・エース』のくせに」
「……俺ぁ偽物だよ。大切な奴一人守れなかった。翼も折れて当然さ」
「……すまん」
「いいさ」

カグラは苦笑する。ハリボテの英雄は翼をもがれ、今も尚、地を這いずり回っている。
それだけの、話だ。

「時に、クロノよ」
「どうした？」

カグラの目が怪しく光ったことに気付かぬまま、クロノは聞き返した。カグラは、いやいや、と言葉を紡ぐ。

「未だに妹が『お兄ちゃん』って呼ぶと動揺するらしいな？」
「ぶっ！？　な、な、なにを！？」
「いやー、カリムの姐さんから聞いたぜ？　『お互いいい大人だ。お兄ちゃんはやめろ』。あっはっは。馬鹿じゃねぇの？」
「くっ、貴様！」
「つかおめぇ、あれだ。動揺すんのはあれだろ？　やましい気持ちがあるからだろ？」
「なっ！？　あるわけないだろう！？」
「動揺すんのが怪しいんだよ。奥さんだけじゃ飽きたらず、義妹にまで手ぇ出す気か？　エロノめ」
「出す気などない！」
「だから動揺してんのが怪しいんだよ。このムッツリスケベ」

カグラは笑う。ピキピキと、クロノの額に青筋が浮かび上がった。

「カグラ。久し振りに模擬戦でもしようか。ああ、すまんな。久し振り過ぎて非殺傷設定が甘いかもしれんが勘弁してくれ」
「お前ホント面白ぇよな。けどあれだ、クロノ。士官学校時代ならいざ知らず、俺たちは今や指揮官だぜ？　どうせなら大隊戦でもしようじゃねぇか」

ニヤニヤと、カグラは笑いながら言う。クロノは、いいだろう、と頷いた。

「場所は？」
「本局の使われてねぇ大隊戦用の模擬戦ルームがあるじゃねぇか。

あそこでやろうぜ。そうだな……人集めに一週間として、一週間後にやろうぜ」

わかった、と、クロノは頷いた。

カグラは、笑みを深くする。

「言ったな？　後悔すんなよ？」

◇　◇　◇

管理局には、定期的に戦技披露会というものがある。

それは優秀な技能を持った魔導師同士が互いに宿す技能を広め、士気を高めるという行事だ。

少し前ならば『エース・オブ・エース』と『烈火の将』で行われた戦いは最早伝説となっているし、ついこの間であれば、『雷光の死神』と引き分けたことにより『地上本部のエース』と呼ばれるようになった執務官対決も手に汗握るものだった。

しかし、実はかつての戦技披露会は、個人戦だけでなく、団体戦も行われていた。

提督や部隊長などの指揮官が部隊を率い、互いに研鑽を積むというものだ。

だがこれは手間がかかりすぎるために廃止された。

そして、今。

地上と本局の雄が、それぞれの誇りをかけて覇を競うーー

「……どういうことかな、クロノくん？」

「……すまない」

「凄いよね。クロノくん、本局の看板背負ってカグラくんと戦うんだって？　私も誇らしいよ。毎日のように偉い人から電話で釘刺されてね。お義母さんにまで言われてさ。ホント誇らしいよ。流石は私の旦那さんだね」

「あ、あの、エイミィ……」

正座をさせられ、見下ろされる形で言葉を下されているクロノを哀れに思ったのか、フェイトが助けに入ろうとする。しかし、エイミィに睨まれると、一瞬で萎んでしまった。

「ご、ごめんなさい」

「フェイトちゃんが謝ることじゃないよ。むしろ、喜ぶことだもん。クロノくんがこーんなに立派になるなんてね？」

エイミィは笑っているが、目は笑っていない。

というか、額に青筋が浮かんでいた。

クロノは、すまない、と再び呟く。今度はアルフがフォローに入った。

「まあまあ、エイミィ。クロノも悪気があったわけじゃないだろ？」

「だからこそ問題なんだよね。クロノくんになくても、向こうには絶対裏があるから」

はあ、と、エイミィはため息を吐く。

「カグラくんは、私とクロノくんの士官学校時代の同期でね。その時の主席はクロノくんで、次席は私だったんだけど……」

「凄いじゃないかエイミィ」

アルフが素直に驚く。フェイトも頷いていた。

エイミィは魔力を持たない。士官学校というエリートが集まる場所で、それでも次席を取るというのは並大抵のことではない。だがエイミィは、そうじゃないんだ、と首を左右に振った。

「カグラくんが本気を出してたら、私は次席になんてなれなかったよ。クロノくんだって、主席になれたかどうかわからないもん」

「……身体検査を魔法で誤魔化して低評価にするような奴だ。その能力は、はっきり言って当時では飛び抜けていた。士官学校に入ったばかりの頃に冗談でエイミィがカグラの魔力を測定したら、当時でSランク級の魔力があったからな」

「口止めされたんだけどね。都合が悪いから、って」

エイミィは苦笑。フェイトが、どうして、と首を傾げた。

「そんなに凄いなら、隠す必要なんて……」

「……隠さなきゃ、カグラくんは表舞台に立てなくなるとこだったんだよ」

エイミィは、何かを堪えるように言った。クロノは立ち上がりながら、頷く。

「カグラには、所謂後ろ盾がなかった。あまり言いたくないが、僕には母さんがいたし、エイミィにも両親がいた。だが、カグラは孤児だったんだ。……あまり管理局を否定するような言い方はしたくないんだが、当時の管理局には『制圧部隊』というものがあってな。カグラが本当の実力を見せれば、奴は間違いなくそこへ放り込まれていた。無理矢理士官学校を退学させられて、だ」

「どういうことだい？」

アルフが問う、エイミィは頷いた。

「管理局は『制圧部隊』……別名、『屍部隊』のことは今でも否定してるけど、それは確かにあったんだ。私は関わらなかったんだけど、クロノくんたちが潰した部隊だから」

「キミを巻き込めるわけがないだろう」

クロノは憮然として言う。フェイトとアルフは、微笑を浮かべた。目を閉じて腕を組みながらクロノが何かを言う時は、照れ隠しだとみんな知っていた。

エイミィは、ありがとう、と言ってから、言葉を紡ぐ。

「その部隊はね、本来なら存在しない部隊なんだ。そして、存在しないからこそ、誰かが死んでも全てなかったことになる」

「そこに集められるのは、『問題がある優秀な魔導師』だ。……カグラの両親は、管理局の派閥争いに負けて自殺したらしい。当時の管理局上層部はカグラが両親を死に追いやった自分たちを恨んでいると考えていたみたいだ。そういう意味で、『問題があった』んだ」

もっとも、カグラ自身は多少思うところがあった程度だったようだが。

「……そんな状態でオーバーSなんて力を見せてみろ。カグラが何かをしなくても、上層部はカグラを消そうとする。理由は、『何かをされるかもしれないから』だ」

「『制圧部隊』っていうのは、そういう部隊だったんだ。危険な任務のみを引き受けて、多くの犠牲を出しながらもそれが認識されない部隊。異常だよ」

「管理局のために死ぬことを強制される、異常者のレッテルを貼られた部隊。カグラはそこに入れられないために、管理局を騙し続けた」

そういう奴なんだ、と、クロノは言った。

「良い意味でも悪い意味でも、カグラはカグラ自身の立場というものを理解している。自分の実力と、周囲の評価というものを恐ろしく冷静に判断できる男だ。正直なことを言えば、一番敵に回したくない男だな」

「それを敵に回して、更にこんな大事にしたのは誰かな？」

「……すまん」

クロノが再び頭を垂れる。エイミィはため息を吐くと、もういいよ、と言葉を紡いだ。

「こうなっちゃったら、クロノくんももう引き返せないからね。士官学校時代のみんなに連絡とってみるよ」

「ありがとう、助かる」

「フェイトちゃんとアルフも、手伝ってくれる？」

エイミィが聞くと、うん、とフェイトは頷いた。

「勿論だよ、クロノ、エイミィ」

「あたしもさ。まあ、あたしは現場から遠ざかって長いから、役に立つかどうかわかんないけどね」

「いや、本当に助かる。ありがとうアルフ」

クロノは礼を言い、そして、さて、と呟く。

「勝ちにいく。奴が何を仕掛けてこようがな」

◇　◇　◇

「僕を、ですか？」
「ああ。お前を俺の部隊に引き入れたい。どうよ？」
「不可能ではありませんが……僕でよろしいのですか？」

カグラに言われ、デスクワークをしながらファイムは問いかけた。
カグラは、おうよ、と頷く。

「お前は指揮官としてもやれるからな。是非欲しい」
「参加することはやぶさかではありませんが、勝算はあるんですか？」

整理の終わった資料をまとめながら、ファイムは聞く。カグラは肩を竦めた。

「あいつはそこまで人脈広くねぇし、いけるだろ。……てか、仕事早いなお前」
「しかし、奥様やはやてさん、フェイトさん、高町教導官などがおられますよ？……これぐらいでないと終わりませんから」
「あー、エイミィは人脈広いからなぁ。そういう意味ではそれなりのメンバー揃いそうだ」
「ニアSが何人もいてそれなりですか……」

ファイムが言うと、カグラは安心しろ、と言葉を紡いだ。

「とびっきりのジョーカーを用意した。やるからには勝つ。……まあ、わざわざ挑発したのにも意味があるしな」
「えっ？」

「くっくっく……理事会に話したら奴らも乗ってきやがった。おかげで全国放送だ。あの野郎の負け面を全国に流せるぜ……！」

あーっはっはっは、と、カグラは笑う。ファイムは、呟いた。

「まるで悪の親玉だね……リンネ、こういうのを何て言うんだっけ？」

《何がです、マスター？》

「確かはやてさんに聞いたことが……ああ、思い出した」

ファイムは、チラリとカグラを見る。

「死亡フラグだ」

◇　◇　◇

八神家。今日も今日とて忙しい一日を過ごしたはやてを待っていたのは、エイミィからの通信だった。

「……ああ、あれ、クロノくんが首謀者やったんですね」

エイミィから事情を聞き、はやては苦笑する。地上でも本局でも話題の団体戦。まさかクロノがその中心にいたとは。

『正確には、カグラくんが主犯なんだけどね。それでね、はやてちゃん。手を貸してもらえないかな？』

お願い、と、エイミィは手を合わせる。はやては、んー、と唸った。

「わたしとシグナムと……ザフィーラは大丈夫やと思います。せやけど、シャマルとヴィータは難しいかもしれません」

『そっかー。いや、十分に助かるよ～。なのはちゃんが難しいって言ってたから、はやてちゃんも来てくれないってなったとき、どうすればいいかわかんなかったんだよね』

「なのはちゃん、出られないんですか？」

『途中からでも出られれば、とは言ってくれたんだけどね。……それじゃあ、はやてちゃん。お願いね？』

「あ、はい」

はやては頷き、エイミィはもう一度ありがとう、と口にすると、通信を切った。

「主はやて」

「シグナム？　あ、聞いとった？」

「はい。その件ですが、ラウウェイを呼んでは如何ですか？」

「ファイムくんを？」

はやてが聞き返すと、シグナムは頷く。はやては、んー、と苦笑した。

「ファイムくんは忙しいから、難しいんちゃうかなぁ」

「そう、ですか」

「うん。それに、折角執務官として復帰したんやしね」

あんまり、邪魔したくないんよ、と、はやては微笑んだ。

シグナムは、わかりました、と頷いた後、呟いた。

「……主はやては、不器用だな」

◇　◇　◇

地上本部の廊下を歩いていると、人だかりを見つけた。

「ん？　なんかあったか？」

「そのようですね」

リューイ・エンドブロムの言葉に、ミリアムが頷く。二人は人だかりのところまで近付くと、その中を覗き込んだ。

そこに貼られていたのは、一枚の紙。

『戦技披露会大隊戦　参加者急募』

カグラ・ランバードによる、誘いだった。

◇　◇　◇

クロノ・ハラオウンは、相手が出てくれるのを待っていた。

相手も忙しい身だ。

『……はい。クロノさん？　どうしたんですか？』

相手が出てくれたことに少しホッとしながら、クロノは言った。

「忙しいところ、突然すまない。キミに頼みたいことがあるんだ」

そして、クロノはその人物の名前を呼ぶ。

「ー一緋凰響提督」

間章　大乱闘、散りゆくは　前編（後書き）

まず最初に、ｋｙｏｎｓｉ先生に御礼を。此度は本当にありがとうございます。
次回より、先生のキャラクターたちが活躍する予定です。本当にありがとうございます。

前編、というよりは、序章という形になりました。後編は、三日、四日のうちに出したく存じます。

感想など頂けると、喜びます。
ありがとうございます。

間章　大乱闘、散りゆくは　中編

第一模擬戦ルーム。
かつては大隊同士などの大規模な模擬戦の時のみ使用されていたそこは、ここ数年、使われることはなかった。
だが、今現在そこには、合わせて数千を数える局員たちが集結していた。
カグラ・ランバード。
クロノ・ハラオウン。
２０代の若手ではそれぞれ地上と本局を代表すると言っても過言ではない二人が、その中心だ。

『さあさあ、始まります！！　記録ではなんと、１５年振りの大隊戦！！　参加する局員は合わせてなんと四千五百人！！　そのうち二千人を率いるのはこの人！！　ＸＶ級次元航行艦提督、クロノ・ハラオウン！！』

クロノの顔がアップで映し出され、別の場所で観戦している者たちが歓声を上げる。

『ハラオウン提督にインタビューをしてみましょう。ハラオウン提督！！』
『クロノ・ハラオウンだ。まずは、このようないきなりのことであるのに拘わらず参加してくれたこと、感謝する』
『今回はカグラ・ランバード一佐と共に企画されたと伺っていますが……』
『魔導師は個人の力が重要視されがちだが、その力を発揮するには様々なサポートがあってこそということを忘れてはならない。また、

魔導師同士の連携も然りだ。それを確認するためにも、今回のことを企画した』

『成程成程、ありがとうございます。ハラオウン提督の陣営には、一度退役なさられた提督の奥様がいらっしゃるとか……？』

『ああ。今回も彼女にはかなり世話になった。いつも支えてもらい、感謝している』

『おっ、ノロケですね？』

『なっ！？　ちがーー』

『さあ、提督のノロケが入ったところで、ハラオウン提督陣営の主力メンバーを紹介したいと思います！！』

どっ、っ会場に笑いが広がる。最初に映し出されたのは、金色の美しい髪を有する女性だ。

『全女性管理局員憧れの的！！　結婚したい女性ランキング殿堂入り！！　犯罪者からは『雷光の死神』と恐れられるSランク魔導師！！　フェイト・T・ハラオウン執務官です！！』

歓声が上がる。『フェイトちゃ～ん！！』という野太い声の大合唱はきっと気のせいではない。

『では一言どうぞ！！』

『えっ、えっと、その……が、頑張ります』

うおおおおおっ、と、更なる歓声が上がる。フェイトは顔を真っ赤にしていた。

画面が切り替わり、今度は茶髪の小柄な女性が映し出される。

『更に！！　あの『ゆりかご戦役』において『奇跡の部隊』を率い、その後も第一線で数々の難事件を解決する『地上本部の切り札』こ

と八神はやて一等陸佐!!』

歓声。今回は、男女共に純粋な賞賛の声だった。はやては、なはは、と苦笑する。

『一言お願いします!!』

『買い被り過ぎや。ただ、ベストは尽くさせてもらうよ。みんな、頑張ろな?』

客席だけでなく、模擬戦ルームの方でも歓声が上がる。

『更に更に更に!!　かつて戦技披露会でかの『エース・オブ・エース』と引き分けた『烈火の将』こと八神シグナム一等空尉!!　ハラオウン提督の奥様であるエイミィ・ハラオウンさん!!　そしてそしてーー』

ーーどよっ。

一気に紹介しようとまくし立て始めた司会の言葉を遮るように、会場がざわめいた。見れば、会場のスクリーンの映像が、別のものになっていた。

マントを羽織り、いかにもな格好をしたカグラが、装飾の為された椅子でふんぞり返っている映像だ。

その後ろではパーカーを着、フードを被った上で口元を隠しているために顔が伺えない女性と、頭痛を堪えるように額を押さえているバリアジャケットを纏ったファイム・ララウェイの姿があった。

司会が、声を張り上げる。

『おーっとぉ!!　これは一体どういうことだ!?　カグラ・ランバード一佐が突如乱入してきたぞぉっ!!』

『人聞きの悪ぃこと言ってんじゃねぇよ。まあいい。よう、クロノ。

負けた時の言い訳はもう考えたか？』
『……いや、キミに何て言葉を返そうかを今迷っている』
『んだよ、つまんねぇ野郎だな』

カグラは立ち上がりながら、肩を竦める。司会が、声を張り上げた。

『さあさあさあ！！　ご紹介致しましょう！！　先代『エース・オブ・エース』にして、数々の異名と伝説を持つ地上の雄！！　カグラ・ランバード一等陸佐です！！』

わああっ、と歓声が上がる。地上に籍を置いてこそいるが、彼は管理局という組織において破格の人気を誇るのだ。

『管理局内理想の上司ランキング上位常連のランバード一佐にインタビューを行いましょう、どうぞ！！』
『まずはそこのクロすけと同じで礼を言わせてもらうぜ。よく集まってくれた。ありがとうな』

歓声。カグラはうんうんと頷く。

『そこの奴が言った通り、今回は普段中々経験できない大隊の連携を学んでもらうために企画した。まあ、つってもお祭だ。派手にいくぞ派手に！！』

わああっ、と再び歓声が上がる。

『だが、やる以上は勝たせてもらう。クロすけぇ、覚悟しろよテメェ？』
『おおおっ！！　宣戦布告だぁ！！　ハラオウン提督！！　如何ですか！？』

『こちらの台詞だ、カグラ。……だが、その前に一つ聞かせてもらう』

クロノは、神経な表情で画面越しにカグラを見据えた。

『何故、貴様の方には防壁がある？』

会場の空気が、一瞬、止まった。
そして、司会が声を張り上げる。

『流石はハラオウン提督！！　誰もが疑問に思いながらもスルーしてきたことに容赦なくつっこんだ～！！』
『何！？　そうだったのか！？』
『クロノくん、空気読もうよ……。いや、私も気になってたけどさ』
『あっはっはっはっは！！　いやー、やっぱり最高だわクロすけ！！』

カグラは腹を抱えて笑い出す。そうしてひとしきり笑うと、なーに、と言葉を紡いだ。

『造ったんだよ。いやー、この規模となるとあれだな。一週間は余裕でかかるな。大変だったぜ？　資材運び込んだり魔力コーティングかけたり色んなとこから予算ちょろまかしたり』
『貴様正気か！？　こんなことのために何をやってるんだ！？』
『やるからには勝つしかねぇからな。つーか、クロノ。お前、勘違いしてんじゃねぇか？』

カグラは、真剣な表情で言葉を紡いだ。

『どっちが勝っても、『お互い頑張ったな』なんて言ってなあなあ

にするつもりか？　馬鹿かテメェは。俺たちの、それこそ一対一の試合ならそれでもいいだろうけどな。俺たちは互いに兵隊を率いてんだよ。そいつらの誇りを背負ってんだよ。勝たせてやらなきゃいけねぇんだよ。卑怯ってんならそれでもいいけどな。俺は何と言われても勝つぞ。それが俺についてきてくれてる奴らへの、せめてもの礼だ。違うのか、クロノ・ハラオウン？』

『……違わないな。いいだろう。キミを卑怯などとは決して呼びはしない。だが、勝つのは僕たちだ。それだけは譲れない』

二人の視線がぶつかり合う。カグラは、上等だ、と呟いた。

『いい面になったじゃねぇかお坊ちゃんよ』

『ふん。今更だ』

歓声。観客のテンションが、一気に上がっていく。

『おーっとぉ！！　これは熱くなってきたぞぉ！！　さあさあさあさあさあ！！　それではランバード一佐陣営の主力をご紹介します！！　やはりこの人が一番でしょう！！　皆様も記憶に新しいと存じます！！　ついこの間の戦技披露会であのフェイト執務官と引き分けた『地上本部のエース』こと、ファイム・ララウェイ執務官！！　ランクこそ空戦Ａ＋ですが、誰もがそれ以上の実力があると理解しています！！　ララウェイ執務官！！』

『ありがとうございます。未熟な身ではありますが、全力を尽くさせて頂きます』

キャーキャー、と、黄色い声援が上がる。司会は更に紹介を進めようとしたが、それをカグラが遮った。

『まあ待ちな。観客もそろそろ待ちくたびれただろう。紹介なんざ

随時やってきゃいい。さっさと始めようぜ』
『同感だな』

カグラとクロノが、互いに開戦を催促する。司会は、わかりました、と頷いた。

『時間制限はありません！！　ルールは単純！！　両陣営の大将が捕縛されるかノックアウトされるかで勝敗が決まります！！　それでは皆様ご唱和ください！！　レディ……』

会場と、模擬戦ルームの者たちが声を合わせる。

『『『ゴーッ！！』』』

◇　◇　◇

「始まったねぇ、クロノくん。どう出るの？」
「まずは防壁に辿り着かなければ意味がない。はやて、指揮を……」

クロノの言葉が止まった。クロノの視線の先には、何か黒いものを背負ったはやてがいる。

「ふーん……女の子にきゃーきゃー騒がれて、さぞええ気分やろなぁ……。笑ってるもんなぁ……」
「あ、主はやて？」

ザフィーラが声をかけるが、はやてには届いていない。
クロノはゴホン、と咳払いをすると、フェイト、と彼の義妹を呼ん

だ。

「フェイト。はやてはダメだ。キミが部隊を率いて出陣してくれ」
「えっ、でも……」

フェイトははやてをチラリと横目で見る。クロノは、首を左右に振った。

「はやてはファイムが出てきた時に出陣させる。すまないがフェイト、第一陣を任せても構わないか？」

というか、ファイムにぶつけないと被害がこちらへ飛んできそうだ。フェイトははやての方を見ながらも、こくりと頷く。

「うん。わかった」
「頼む。まだオープニングだ。無理をする必要はない。向こうからＡＡＡランク以上の魔導師が投入されるようなら、退いてくれていい」
「うん。じゃあ、行ってくるねクロノ」
「ああ。エリオとキャロを連れて行くといい。フリードリヒなら許可が出ている」

わかった、と、フェイトは頷き、予め編成されていたいくつかの部隊のうちの一つを連れて行く。
そうしてフェイトを見送ってから、クロノは後ろを振り返った。

「準備はできているか？」
「ええ。大丈夫です」

頷いたのは、腰に二本の刀を差した、精悍な顔つきの青年だ。艶の

ある黒髪をしている。

「俺を含めて、三人ともいつでも出られます」

「そうか……助かる。キミたちの力で戦線をこじ開け、一気に攻め落とすつもりだ。頼んだぞ」

「はい」

青年は、カチャリと、刀の柄に手を置く。

「緋凰響、推して参ります」

◇　◇　◇

「んー、フェイトの嬢ちゃんが出て来たか。予想通りだな」

「そうなんですか？　僕はてっきり、はやてさんが出て来るとばかり」

はやては優秀な指揮官だ。最初に出て来ると思っていた。彼女の場合広域魔法が得意でもあるため、混戦になるとむしろ動きにくくなるのだ。

カグラはチラリとファイムを見ると、まあな、と呟いた。

「こっちにゃ生贄がいるからな。ま、はやての嬢ちゃんはしばらく放っといて大丈夫だろ。……ふむ。ちっと早い気がしねぇでもねぇけど、切り札その一でも投入するか」

カグラは立ち上がり、ファイムに指示を出す。

「相手の出鼻を挫くぞ。ファイム、あいつを出せ」
「了解しました」
ファイムは頷き、部屋を出て行く。カグラは、さーて、と呟いた。
「早いとこ手の内見せてもらわねぇとな」
その瞳は、激化する戦場を眺めていた。

◇　◇　◇

「砲撃隊、一斉掃射！！　歩兵隊、一時退避！！」
「「「はい！！」」」

フェイトの指示を受け、隊員たちが行動を始める。フェイトの部隊は、一言で言うなら劣勢だった。
まずフェイトが読み違えたのは、カグラ陣営の部隊が待ち伏せをしていたことだ。わざわざ幻術で迷彩をかけてまでである。
カグラは防壁を造り、守りを固めていた。迎え撃ってくるとは考えていたが、こんなに前で待ち構えているとは思っていなかった。
互いの陣営の真ん中に当たる場所で、激戦が繰り広げられている。

（防壁を利用した守り主体の戦い方をしてくると思ってたけど……）

遠い敵の本陣を睨むように見ながら、フェイトは歯噛みする。これは、自分のミスだ。
そのフェイトの視界に、敵陣へと飛んでいく隊員の姿が映った。

フェイトは、叫ぶ。

「無茶だ！！　戻れぇっ！！」

フェイトのその言葉が届いたのだろう。その身を犠牲にせんと敵陣へと飛来していく隊員たちは、微笑みを浮かべながら敬礼した。

「……ッ！　私も！」

フェイトはバルディッシュを握り締め、空へと上がろうとする。だが、それをエリオとキャロが止めた。

「待ってください！　フェイトさんを失えば、部隊は全滅します！」
「エリオ……だけどーー」
「お願いです！　フェイトさん！」
「……キャロ」

フェイトにしがみつき、キャロは必死にフェイトを止める。エリオも、必死だった。

「報告します！！　敵部隊が、退いていきます！！」

逡巡さえも、戦場では許されない。

「撤退？　まさか」
「ーーーー！？　あれはーー！！」

隊員の一人が何かを目視し、声を張り上げるが、遅い。

ーーーーガドンッ！！！！！！

駆け抜けた閃光が炸裂し、大地を砕いた。
最前線に立っていた魔導師たちは吹き飛び、部隊は甚大な被害を被る。
フェイトは、ギュッ、と、バルディッシュを握り締めた。

「テスタロッサ執務官。お相手願います」

圧倒的な一撃を放った人物ーーＡＡＡ＋ランク魔導師、リューイ・エンドブロムは、彼自身の得物である大剣型のデバイス『ブラッディハウンド』の切っ先をフェイトに向ける。
フェイトは、その人物を睨みつけた。

「リューイ・エンドブロム三等陸尉と、ミリアム・エンドブロム一等陸士だね」
「光栄です」
『私共如きをご存じとは、感謝の極みです』

リューイとミリアムが、それぞれ言葉を紡ぐ。そして。

「一手ご指南、お願いします」

リューイが地面を思い切り蹴り飛ばす。フェイトはそれを迎え撃ち、バルディッシュでリューイの一撃を受け止める。

「はあっ！」

ギィン、という音を響かせ、フェイトはリューイを弾く。リューイは逆らうことなく後退、地面を削りながら勢いを殺す。
そこへ、フェイトは追撃を仕掛ける。

《Ｆｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ》
「ファイア！」

十数発の雷を纏った魔法弾が放たれ、リューイを狙う。リューイはブラッディハウンドを振り抜き、それを打ち払った。そうして再びフェイトに接近しようとした瞬間、彼の鼓膜が声を捉えた。

「ダメ！　フリード！」

キャロの声。リューイが顔を上げると、上空からフリードリヒがこちらへと急降下してきていた。

『マスター』
「わーってる！　ブラッディハウンド！」
《Ｆｌａｍｅ　Ｃａｎｎｏｎ》

簡単な応答機能しか持たないデバイスが、声を発する。ブラッディハウンドの剣先から、金色の炎を纏った閃光が放たれた。

「フリード！！」
「ギャウ！！」

フリードリヒは旋回し、それを避ける。そうして生まれるのは、リューイ・エンドブロムの一瞬しかない隙。

「覚悟！！」

その一瞬を逃さんとし、エリオと数人の隊員たちがリューイを取り囲む形で各々のデバイスを振り下ろす。リューイは、口元に笑みを

浮かべた。

「なめんなよ？」

『フォール・ダウン』

ーーズガガッ！！！！！！

先程リューイが空へと放った一撃が、上空で魔法陣を形成。そこから魔法弾を生み出すと、空から降り注いだ。

リューイ・エンドブロムの豊富な魔力と、ミリアム・エンドブロムという優秀な魔力操作能力を持つユニゾンデバイスがいるからこそ可能な荒技だ。

降り注いだ魔法弾はエリオたちを撃ち抜き、動きを奪う。ふう、と、リューイが息を吐いた瞬間。

ーードルンッ。

まるで自動車のエンジン音のような音が聞こえた。リューイは反射的に構えようとするが、間に合わない。

「しまっーー」

「油断、大敵！！」

ドガアッ、という凄まじい音と共に、隊員たちが身を挺して庇ったために無傷でリューイの一撃をやり過ごしたスバル・ナカジマが、その拳をリューイの腹部に叩き込んだ。

「がっ！？」

『マスター！？』

空高く打ち上げられ、リューイは空中で何とか姿勢を取り戻す。

リューイは、大丈夫だ、と言葉を紡いだ。

「今のは効いたぜ……けど、スバルさんは陸戦魔導師だ。空なら」

リューイが呟いた瞬間、彼を中心に据えたいくつもの道が出現した。
的を絞らせないために、スバルがいくつもの『リューイに到達する道』をウイングロードで生み出したのだ。

「確かに、陸戦魔導師ならこれが最良の解答なんだろうな。けど」

リューイは目を閉じ、音を探る。
ー聞こえるのは、ローラー音。

「空を舞う自由さには程遠い！！」

右拳に魔力を充電。リューイは、スバルを待ち構える。
しかし、現れたのは。

《Ｈｅｌｌｏ，Ｂｏｙ？》

ローラーブーツだけーーマッハキャリバーだけだった。

《Ｉ　ｔｈｉｎｋ……》

リューイは驚愕で一瞬、動きを止め、それが致命的な隙を生む。

《‘Ｔｈｅ　ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ　ｉｓ　ｒａｔｈｅｒ　ｗｅａｋ’》

ーー『詰めが甘い』。
デバイスであるマッハキャリバーに言われたリューイは、ちくしょう、と、言葉を漏らした。

その背中に、蒼き拳が迫り来る。

「ディバインーー」

リューイは、防御も間に合わない。

「バスターッ！！」

放たれた砲撃が、リューイ・エンドブロムを飲み込んだ。

◇　◇　◇

『決まったーッ！！　ＪＳ事件の英雄が一人！！　『銀制服のエース』ことスバル・ナカジマ防災士長の一撃が、リューイ・エンドブロム三等陸尉を飲み込んだ～！！』

司会が声を張り上げる。大画面に、今のやりとりがもう一度再生された。

『では！！　解説をゲストにお願いしたいと思います！！　ティレット・ラートゥス一等空佐と、ゲンヤ・ナカジマ二等陸佐のお二人です！！』

『よう。ティレットだ』

『ゲンヤだ。よろしく頼まぁ』

画面の右端に、司会と一緒に映る二人の姿が映し出される。

『お二人は今回、それぞれラートゥス一佐はハラオウン提督側に。ナカジマ二佐はランバード一佐に協力されていると伺いましたが』
『あ～、というか俺は結局両方に手を貸してることになるんだけどな。いや、目をかけてる奴が参加したいって言い出すもんだからさ』
『ああ、成程。例の天才提督たちか』
『いや、響と奏は正確には副艦長だよ。……まあいいや。それで、ゲンヤさんはどうしてカグラに協力してんだ？』
『うちの部隊の隊員には丁度いい訓練を積ませられるからな。それだけだよ』
『なーるほど』

ティレットが納得する。司会が、それでは、と二人に言葉を紡いだ。

『先程の戦闘について解説をお願いします！！』
『そうだな……まあ、結論から言えばリューイの経験不足だな。……ティレットよ。ジャケット暑くないのか？』
『そうだな。ナカジマ防災士長の戦い方はある意味で陸戦魔導師の模範解答だ。……俺、寒がりなんで』
『まあ、つってもリューイはスバルにぶっ叩かれるまでの立ち回りは巧かったがな。ま、今後に期待ってとこだな』
『同意だ。……流石は『エース・オブ・エース』の教え子だ。切れる手札を組み合わせて相手を圧倒しやがった』
『しかし、これは今回のみしか通用しないのでは？』

司会の質問。それに対して、ティレットはそうでもない、と言葉を紡いだ。

『あれを見せたおかげで、相手は否応無しに警戒するしかなくなる。それだけでもかなり違うぞ』
『手札ってのは、『使うかもしれない』と思わせるだけでも十分効

果がある。そういう意味でも、スバルは確かに巧かったわな』
『はぁ～……凄いですね』
『そうでもない。ただ、流石に音に聞こえたストライカーだ。強い』
『ま、リューイも今のでダメージは入ったろうがリタイアすることはねぇやな。ひよっこでも、奴は真正ベルカの騎士。そう簡単にはくたばらん』

ーーわああっ、と、歓声が上がる。
模擬戦ルームの中心部に、いくつもの道が出現した。
ウイングロード。
エアライナー。
それぞれ、ゲンヤの娘が使う魔法だ。

『それにカグラは、黙って指くわえてるような器じゃねぇやな』
『同感だ』

◇　◇　◇

『ギン姉！！　ノーヴェ！！』
『スバル、手加減なしよ』
『いくぜスバル』

スバルと相対するのは、ギンガ、ノーヴェのナカジマ姉妹コンビ。
モニターでその様子を見ながら、ふふん、とカグラは笑う。

「リューイがフェイトの嬢ちゃんたちに勝てねぇのはわかってたこった。けどま、あいつはよくやった。とりあえずこのオープニングを制すりゃ、全体の流れはこっちに傾く」

カグラは右手を開き、掌を上へと向けながらゆっくりと握り締める。
流れというのは大事だ。まずはそれを掴まなければならない。
最初の衝突で勝利を掴めれば、その流れを掴める。

「左右に部隊は放ってる。後はー」

カグラが言葉を紡ごうとした瞬間、モニターに切羽詰まった様子の部下が突如、映し出された。

『報告！！　右翼部隊、襲撃を受けています！！』
「なんだと？　人数は？」
『ふ、二人です。ですが……』

いきなり、報告の途中で、その魔導師が倒れる。そうしてカグラの目に飛び込んできたのは、二人の男女。
カチン、という音を響かせて刀を納刀する長い黒髪の男性と、薄い金髪を腰まで伸ばした女性。
緋凰響。
天雅奏。
共にSランク級の実力を有する天才魔導師だ。

「ちっ……クロすけめ。とんでもねぇカードを切ってきやがった」

言いながら、カグラは振り返る。そこにいるのは、フードを深く被り、ファスナーを一番上まで上げて口元を隠しているせいで顔の窺えない女性だ。

「出番だ。テン……いや、オトヒメだったか」
「……任務は？」

「あの二人を止めろ。可能なら薙ぎ払え」
「了解しました」

そして、女性は腰の刀の束に、手を添えると、部屋を出て行った。
カグラは、さーて、と呟くと、部下へと指示を出す。

「おい。『あれ』持って来い」

数分後、大きな袋がカグラの下へと届けられた。

◇　◇　◇

「報告!!　敵の魔導師が数名、こちらへ向かってきています!!」
「撃ち落とします。砲撃隊、準備を。ただし、初撃は威嚇です。当ててはなりませんよ」
「はっ!!」

ファイムの指示を受け、部下が走っていく。ファイムは、ふう、と息を吐いた。
非殺傷設定。魔導が理想の力とされる最大の理由。しかし、非殺傷とは死ににくいというだけで、場合によっては死に至ることもないわけではない。
それに、所詮は魔導も力である。ファイムは防壁で見えない戦場へと想いを馳せた。
漂う、戦場独特の澱んだ空気。ファイムにとって覚えのあるそれは、気持ちのいいものでは決してなかった。

（模擬戦であっても、戦争には変わりない。……嫌だな）

ファイムは、本当に嫌だな、と呟いた。

「懐かしいなんて、感じてる」

管理局に勤めるようになってから、もうすぐ１０年になる。だというのに、今もまだ、覚えているのだ。

それが、やはり自分は歪んでいるのだと、ファイムに思わせる。

そうして佇んでいたファイムに、声をかける者がいた。

「ララウェイ執務官」

ティアナ・ランスター。こちら側に付いてくれた、優秀な執務官だ。

「ランバード一佐から、左翼の援護に回れと」

「……わかりました」

ファイムは頷き、すみません、とティアナに言葉を紡ぐ。

「ランスター執務官、こちらの指揮をお願いします」

「はい。……あの、ララウェイ執務官」

「何でしょうか？」

ファイムは、ティアナに問い返した。ティアナは、どこか歯切れが悪そうに言葉を紡ぐ。

「ランバード一佐は、本気で『あれ』を使うつもりなんでしょうか？」

「おそらく、使う気でしょう。あの人は、勝つためにはきっと、手段を選ばない」

それぐらいの覚悟は、背負っているはずだから。

「疑問があるなら、戦わない方がいいですよ。その迷いは必ず、あなたの命を奪いにくる」

「ですが、ララウェイ執務官。あなたはそれでいいのですか？」

「いいも何も、戦場の兵士に拒否権などありませんよ」

ファイムは、拳を握り締める。

「例え捨て駒であろうと、なんであろうと」

そうして、ファイムは戦場へと歩み出る。

その先で誰が待っているか、彼はなんとなく知っていた。

◇　◇　◇

『さあさあ！！　盛り上がって参りました！！　ハラオウン提督陣営よりランバード陣営の一団を迎え撃たんと出陣したのはこの二人！！　緋凰響二等空佐と天雅奏二等空佐！！　共にＳランク魔導師にして、次元航行艦の副艦長を務めています！！』

うおおっ、と歓声が上がる。

『その力は圧倒的！！　数十人からなる一団を瞬く間に壊滅させました！！』

『制限なしのＳランク魔導師は、一個中隊に匹敵する』

『まあ、そんな魔導師は管理局に５％といねぇがな』

『ランバード一佐はどう迎え撃つのか!!　中心地点でもハラオウン執務官率いる部隊とエンドブロム三尉率いる部隊とが激突しております!!　ギンガ・ナカジマ三等陸尉や、かの有名な『Ｎ２Ｒ』の一角であるノーヴェ・ナカジマ一等陸士が相手取るはスバル・ナカジマ防災士長!!　というかナカジマ二佐!!　娘さん多いですね!!』

『はっはっは。嫁にはやらんぞ』

『親バカが発動したところでもう一つの激戦地のご紹介を!!　二個中隊を率いるは、『地上本部の切り札』八神はやて一等陸佐!!　その見事な指揮で相手取っていた中隊を瞬く間に壊滅させています!!　止めるのは誰だ!?』

『まあ、あいつだろ』

『まあ、間違いねぇやな』

『ランバード一佐陣営より、一個中隊が出陣した模様!!　率いるのはー『地上本部のエース』!!　ファイム・ララウェイ執務官!!　図らずも地上の雄同士の対決となりました!!』

『やっぱりな。図らずもってか、カグラは狙ってただろ』

『まあ、多分そうだろうな。さて、あのタヌキはどうするつもりなのやら』

『さあ!!　戦闘開始より二時間!!　戦局が大きく動きそうです!!』

◇　◇　◇

「響、調子良さそうだね？」

「ああ。こんな大規模なのは本当に久し振りだからな。全力を出すのも」

Sランク魔導師にして、居合の達人。圧倒的なまでの剣術の腕を誇る英傑、緋凰響は頷いた。艶のある黒の長髪が、風に揺れる。
それを見て、響に負けず劣らずの長さの薄い金髪を有した女性が、響の髪の束を手に取る。

「また伸びてきたね。切ってあげよっか？」
「いや、まだいいだろ別に。面倒かけるし」
「響の髪を切るのは面倒じゃないよ？」

そう言って微笑むのは、総合Sランクという実力を誇る、二丁のライフルを手にした女傑、天雅奏。
管理局内でもその実力で有名な二人は、戦場で笑っている。

「でも、少し意外かな。響がクロノさんの要請をあっさり受けたのには」
「そうか？　いや、まあ、フレイさんもいいって言ってたしな。むしろ行ってこい、って感じだったし」

フレイ・A・アルトゥール。響や奏の直接の上官であると同時に、恩人でもある人物だ。響が今回のこれに出ようと思う、と告げると、二つ返事でオーケーしてきた。

「確かに」

奏も苦笑。響は、それに、と言葉を紡いだ。

「最近忙しくてあいつらに会ってなかったからな。参加してると思ったんだけど、今んとこ見当たらないな」
「うん。でも、向こうの大将はカグラさんだから。すぐには出さないだけかも」

「あー……あの人は今だに読めないからな。ありそうだ。まあ、俺たちはクロノさんの指示通り本陣をーー」

ーーゾクリ。

響の背筋を、何かが駆け上がった。何度も自らを助けてくれた直感。

響は奏に視線を送る。奏は、すぐに気付いてくれた。

ーーマズい？

ーー相当ヤバい。

ーーわかった。援護するね。

ーー助かる。

アイコンタクトでそれだけの会話をすると、響は前を見た。

ーー風が吹く。

一瞬、ほんの一瞬だけ、響は瞬きによって視界を閉じた。その一瞬の間に、そいつは現れた。

パーカーを羽織り、バリアジャケットは纏っていない。フードを深く被っており、ファスナーを一番上まで上げて口元を隠しているため、顔が窺えない。

ジーンズを履いており、靴も特に変わったところのない市販のものだ。

ただ、一点。

腰に差した刀だけが、普通とは違っていた。

響の直感が、物凄い勢いで警鐘を鳴らす。

「オトヒメ、と申します」

その女性は、凛とした声でそう言った。

「久方振りである……といっても、わからないでしょう。ただ、今

はあなたとこうして刃を交えられること、感謝します」
「何者だ？　どこの所属だ？」
「私はただの無頼。縁ありてこうしてここにおりますが、本来ならばこの祭に参加する資格さえございません」
キィン、と、オトヒメと名乗った女性の背後に魔法陣が展開される。ミッド式のように見えたその魔法陣は、僅かに様式が異なっていた。響と奏が身構える。オトヒメは、魔法陣から出現した無数の柄を一瞥すると、では、と言葉を紡いだ。
「まずはどれほどの力があるか、見せてください。私にこの刀を抜かせるだけの力、示せますか？」
オトヒメは、彼女の腰にある刀の柄に触れる。
わかりやすい挑発だった。
響はわかっていて、それに乗る。
「いいぜ。見せてやるよ。……ああ、そこ、射程圏内だぜ？」
明らかに刀など届かない場所にオトヒメは立っている。それでも、響はそう言った。
刃が、走る。
ーーザギィン！！
緋凰響は、達人である。居合は神速と謳われる技であり、それを極めた響は突っ立っているだけで周囲の人間を薙ぎ払える。事実、そうして響はここにいた部隊を薙ぎ払った。
しかし、響は驚愕することになる。
「存じておりますよ」

ーードスッ。

折れた刀身が、地面に突き刺さった。背後の魔法陣から引き抜いた刀で、オトヒメは響の居合を受けたのだ。

「二束三文の刀ではやはりへし折れてしまいますか。まあ、盾ぐらいにはなるでしょう」

言って、更に二本、オトヒメは刀を引き抜く。

「今のが全力というのなら、私が刀を抜くことなど夢のまた夢です。様子見など不要です。全力で参りなさい」

「くっ……！」

凄まじい眼光を受け、響は思わず身構える。その背後から、弾丸が駆け抜けた。

《Ｂｕｓｔｅｒ　Ｓｈｏｏｔ》

凄まじい速度で放たれた弾丸が、オトヒメに迫る。オトヒメは体を捻り、弾丸を避ける。

「速いですね。そして……」

ーードンッ！！

弾丸のうちの一発を、オトヒメは敢えて右手で弾いた。僅かに皮膚が裂け、血が流れる。

「威力も悪くない。応用性に富みますね。流石です、奏殿」

「なんで私の名前を……！？」

自身の弾丸があまりにもあっさりと弾かれたことと、名を知られていることに奏は驚愕。
だが、オトヒメはそれには応じず、響を見た。響は先程までとは違い、居合の構えを取っている。

「秘剣……」
「……」

オトヒメは後ろに跳び、距離を取る。響は、オトヒメを見据えた。

「地龍砕波！！」

衝撃波が放たれる。オトヒメは避けきれないと判断。その場に立ち止まると、手をかざした。

「……夢幻天声」

ゴゥン、という音と共に巨大な障壁が展開される。響は、迷わず突っ込んだ。
魔法によって強化された肉体は、自ら放った衝撃波へと響の体を運ぶ。
そして、響は刀を振り上げる。

「爆龍砕波！！」

叩き付けた刀により、衝撃波が爆発。響はすぐさま退いたが、オトヒメはその場に釘付けになる。
ーーズドンッ！！
爆発がオトヒメを飲み込み、障壁が砕け散る。そこへ、奏が追撃を放った。

「シャイニングムーン！！」
《Ｓｈｉｎｉｎｇ　Ｍｏｏｎ》

閃光が、オトヒメを包み込んだ。
放った後は冷却が必要であるため、使い勝手がいいとは言えないが、威力は申し分ない。

「奏！！」
「大丈夫！！　そっちは！？」
「大丈夫だ！！　ただ……」

響は晴れていく煙を見据える。
現れたのは、無傷のオトヒメ。
ただ……刀は抜いていた。赤い刀身の、禍々しい刀だ。

「ふむ……抜いてしまいましたか。予測以上。実にいいですね」

再び、響の背筋が凍る。

「強者との戦いは、やはり胸が躍ります。所詮私も武人ということでしょう。しかし、それも悪くはありません」

オトヒメは、刀の切っ先を響と奏に向ける。

「我が刀、血桜。幾年、幾千年、ただただ血を吸い磨き上げられてきた刃、侮らぬよう」

響は、ごくりと唾を飲み込む。そして、あるところへ念話を繋いだ。

（……聞こえるか？　お前の出番だ）
（おっけー。何すればいい？）
（門を破れ。今なら戦力が分散してる。任せたぞ、震離）
（任されたっ！）

そして、通信が切れる。
オトヒメが、成程、と呟く。

「まだ手札があるのですね。しかし、あなたたちは勘違いをしています。相手はあの男ですよ？　人の打てる生易しい手など、いくらでも粉砕します」

酸いも甘いも知り尽くし、地獄と天国を見てきた男、カグラ・ランバード。
彼が本気になれば、人の心など、容易く砕ける。

「人生も世界も、常に選択を迫られます。例えどちらを選んでも、間違いですが」

◇　◇　◇

ファイム・ララウェイは、覚悟を決めていた。
この先にいるのは、おそらく自分では適わない人たちだから。

「すみません。もしかしたら、指揮を預けるかもしれません」

ファイムがそう言った相手は、チンク・ナカジマ。眼帯をした小柄な少女だ。チンクは、どうした、と言葉を紡ぐ。

「何か不安でもあるのか？」
「予想なんですが……おそらく、はやてさんたちと会敵します。そうなると、指揮を執る余裕がなくなると思いまして」
「成程……だが、八神一佐たちが相手では私も大したことはできんぞ」
「……その時は、僕が何とかします」

ファイムは、何かを誓うように拳を握り締めた。

「せめて撤退の時間くらいは稼ぎます」
「……ファイム。お前とは出会ってから僅かしか経っていない。だからこんなことを言うのはお前にとって不愉快かもしれんが、言わせてくれ」

チンクは、隻眼でファイムを射抜いた。

「お前は私と同じ匂いがする。白の中の黒……更正を期待されていないと理解している目だ。私が独房送りを免れたのは、『それ』を期待されたからだ。そう……妹たちが、私という『黒』を見て自らの『白』に希望を見いだせるように」

白は、黒という対比がなければ自らを白と自覚できない。
だから私は、ここにいるのだ、と、チンクは言った。

「花を愛でようと、食事をとろうと、私の手の汚れは消えない。消えないと感じるのだ。この目を治さぬのと同じ。父もみなもよくしてくれている。しかし私は、それでも汚れている」
「……あなたには、妹さんたちがいます。ゲンヤさんがいます。あなたに救われた人がいます。あなたを想う人がいます。やり直せな

いなんてことは、ありません」

ファイムは、言った。

「あなたは管理局に関わってから人を救い続けている。助け続けている。……僕は、一年前、性懲りもなく人を殺めました」

歩みを止めず、ファイムは言う。

「殺意で。憎悪で。……大丈夫です。あなたは真っ白ではないかもしれませんが、黒ではありません。僕にはあなたが眩しく見えます」

苦笑しながら、そう言って。

ファイムは、歩みを止めた。

チンクは、しかし、と言葉を紡ぐ。

「そんなことを言うお前はどうなんだ。お前には、誰もいないというのか？」

「いませんよ。いえ……いてはいけないのです」

フルドライブ、と、ファイムは呟いた。

体を包む魔力が跳ね上がり、ファイムの背中に白い翼が宿る。

「一人でやっていかねばならない。巻き込んではならない。そういう道を、選んだんだ」

……烈火の将が、飛来する。

「優しさに甘えては、いけないんだ」

ーー轟音が、開戦の合図になった。

◇　◇　◇

ーーガァン！！

シグナムの一撃を、何とかファイムは受けきる。シグナムは、ほう、と言葉を紡いだ。

「今のを受けきるか。流石だな、ララウェイ」

「どうも」

右腕を振るい、調子を確かめながらファイムは頷く。シグナムは、ふう、と息を吐いた。

「お前とは一度全力で戦ってみたかった。しかし、今日はそうもいかん。すまんが、ララウェイ。……死んでくれ」

刃が唸る。ファイムは迫り来るシグナムの一撃を、何とか避けていく。

「容赦ないですね！」

カギン、と、シグナムの愛剣レヴァンティンを受け止めた右腕から金属音が響き渡る。

シグナムは、すまんが、と言葉を紡いだ。

「問答をしている余裕はない。……墜ちろ、ララウェイ！」

「……ッ！？」

シグナムの刃に、裂帛の気合いがこもる。

「紫電！！　一閃！！」

ーーズドン！！

文字通り叩き落とされたファイムは、かはっ、と、空気を吐き出す。問答無用の、必殺の一撃。障壁を貫いてこちらへ一撃が入った。

「まだ動くか。……レヴァンティン！」

《Ｊａｂｏｗｌ！！》

「飛竜！！　一閃！！」

シュツルムファルケン。連結刃が、ファイムを襲った。ファイムはその場から飛び退くが、唸る刃はまるで大蛇の如く迫ってくる。避けきれない。

「ララウェイ！　主はやてが来られる前に消えてもらう！」

「そういうわけにも……いきません！」

障壁で受け止めた後、ファイムは力点をズラすことで受け流す。シグナムは、ちぃっ、と舌打ちした。

「ええい！　いいから墜ちろ！　このままでは貴様がーー」

「……退いてくれへんかな、シグナム？」

言いかけたシグナムの言葉を遮り、誰かがこちらへと飛来してきた。堕天使を思わせるバリアジャケットを纏うのは、八神はやて。

彼女は一片の容赦もなく、魔法を紡ぐ。

「遠き地にて、闇に、沈めーー」

ファイムの周囲の空間が、大きく歪む。

「ディアボリックエミッション！！」

ーーズン。

空間そのものを喰らう一撃が、ファイムを飲み込んだ。ファイムの体が、大きく仰け反る。

「かっ……！？」

「まだ終わらんよ、ファイムくん」

ゾッとするような冷たい目ではやてはファイムを見据えると、更なる追撃がファイムを襲った。

「なんや、ファイムくん。モテるんやなぁ？　知らんかったよ」

ブラッディダガー。千単位の刃が、ファイムを狙い撃つ。

「何を……」

「何やろな。許せへんねん」

射出、と、はやては呟く。ファイムが、刃の雨に飲み込まれる。

「……ッ！？」

《マスター！？》

「大、丈夫っ！！」

刃の渦から、翼をはためかせ、強引に脱出。息を切らすファイムに、

リンネが言葉を紡いだ。

《何をしたのですマスター!?　八神一佐はカンカンですよ!?》

「知らないよ!?」

全く心当たりがない。

「ふーん、ファイムくん、意外としぶといね」

「あ、主はやて?」

「まあええわ。詠唱は完了しとる。これなら流石に沈むやろ」

キィン、という音と共にベルカ式魔法陣がはやての足下に展開され、更にはやての目の前にも巨大な魔法陣が展開された。

シグナムが、叫ぶ。

「主はやて!?　それは流石にやり過ぎです!!」

「響け終焉の鐘……」

「聞いておられない!?　ララウェイ!!　逃げろ!!」

「えっ、えっ?」

突如敵であるはずのシグナムにそんなことを叫ばれ、ファイムは本気で戸惑う。

シグナムは、切羽詰まった表情で叫んだ。

「死にたくなければさっさと退けっ!!」

模擬戦で死ぬの?

そんなことを思った瞬間、はやての魔法が紡がれる。

「ラグナロクッ……ブレイカアァァァッッ!!」

総合ＳＳランクという破格のランクを有する八神はやて。その真骨頂である、最早戦略級と言っても差し支えない威力の砲撃が放たれた。

広範囲殲滅魔法。それは、はやての味方さえも巻き込む。

理不尽だ、と、ファイムは思った。

◇　◇　◇

クロノ・ハラオウンは、顔をひきつらせていた。理由は単純。八神はやてだ。

「……なあ、エイミィ」

「……うん。どうしたの？」

「……はやてはもっと思慮深いと思っていたんだが、間違っていたのか？」

一部とはいえ、味方まで巻き込む砲撃。とても正気とは思えない。

エイミィは、あはは、と苦笑する。

「多分……恋する乙女は無敵なんだよ、クロノくん」

ーーカグラ・ランバード陣営ーー

「……ファイム死んだんじゃねぇ？」
「……一応、非殺傷設定ですけど」
「あれ、非殺傷なのか」

半ば本気の呟きを、カグラは漏らした。地面は抉れ、敵味方共に甚大な被害を被っている。
はっきり言おう。爆弾でも叩き込んだかのような被害が出ている。

「なあ、お前出てみる？」
「……遠慮します」
「……俺もだ。今の嬢ちゃんには勝てる気がしねぇ」

つか怖ぇわ、とカグラは呟いた。
それを聞き、青年ー楠舞煌は同感です、と頷いた。
本局の武装隊に所属する彼は、今回解説として参加している、彼にとって直接の上司ティレット・ラートゥスの薦めもあって参加している、のだが。
あれを見て、戦おうとは正直思わない。
カグラは、それにしても、と呟いた。

「押され始めたな」
「響んとこはむしろ押してますけど。……てか、何者ですかあの人？」
「んー、古い知り合い。あれの師匠と昔色々あってな。偶然見つけたから手ぇ貸してもらった。なんか『ワグリア』に行く予定とか言ってたな」
「辺境ですね」
「なー。ま、あれは放っといて大丈夫だ。負けるとこは想像できねぇ。先代なんか、俺とホムラ纏めて倒したしな」

ふあ、とカグラは欠伸を漏らす。

「世界最強を背負うような怪物だ。戦いに関して言えば、あれ以上のカードはねぇよ」

「……ただ、他のところは押され始めてますね」

「予測通り。お前とかはやての嬢ちゃんとか何人か例外はいるけど、基本的に構図は俺が地上でクロすけが本局って形だ。一部の例外……『N2R』とかリューイとかを除きゃあ、やっぱり質はこっちのが下だよ」

魔導師ランクで平均して2ランクくらいの差がある。仕方ないことだが。

「まあ、そのために色々用意してんだけどな。くっくっく……クロすけの吠え面が目に浮かぶぜ」

「……一つ、聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「そこまでして勝つ必要が？　あくまで模擬戦ですよね？」

煌が問う。所詮は模擬戦ではないかと。

カグラは、ははっ、と笑った。

「若いなぁ、お前。……政治だよ。管理局は今、ボロボロだ。地上は本局に劣等感を感じて、本局は地上を見下してる」

「そんなこと……」

「現実だよ。だからこそ、こうして戦ってんだ。気持ちの問題だからな。地上とか本局とか、関係ないって少しでも現場の奴らが思えば成功だ」

だから、とカグラは言った。

「勝つかどうかはともかく、負けるわけには絶対にいかねぇんだよ」

◇　◇　◇

爆心地のような様相を呈する、八神はやてとファイム・ララウェイがぶつかり合った戦場。
そこに一人、ポツンとはやては立っていた。
彼女の後方には、彼女が率いる部下たちがいる。本来なら彼らを率い、はやては進まねばならない。
しかし、進めない。

ーーガラッ。

瓦礫を押しのけ、一人の青年が姿を現した。
ファイム・ララウェイだ。

「先には行かせません」
「……退いてはくれへんのやね？」
「それが僕の任務ですから」

ファイムくん、とはやては呟いた。ファイムは、息を吐く。

「僕では勝てないことを知っています。それでも、僕たちがしているのは戦争です。戦場の兵士に、選択肢などありません」
「そんな、そんなこと」
「……はやてさんがどうして怒っているかはわかりません。しかし、今の僕には謝るということさえ許されない」

ファイムは、はやてに拳を向けた。

「こうして向き合う、敵なのだから」

はやては、違う、と呟いた。

「そんな悲しいこと、言わんといて！」

「戦場はいつだって、悲しみしか生みませんよ。殺そうが殺されようが」

ーーズズゥ……ウン……！！

鈍い音が響き渡った。はやてとファイムは、カグラ側の本陣を見る。そこから、いくつもの砲門が姿を現していた。はやては、驚愕に目を見開く。

「魔力砲台！？」

カートリッジという、魔力を充填するというシステムを応用した魔導兵器。その中で最もポピュラーなものだ。

連射はできないが、砲撃の威力はＡＡＡランク魔導師のそれに迫るとされる。

それが、火を噴く。

敵も味方もなく、ただ、戦場を蹂躙していく。

「……ッ！？　ファイムくん！！　どういうことや！？」

「カグラさんが覚悟を決めた。そういうことでしょう」

敵も味方も吹き飛ばす。そんな覚悟を。

「そんなんおかしいわ！」
「戦争に勝つためには、非情な判断も必要です」
「それはわかる！　せやけど、これはおかしい！」
「あなたはわかっていません。そして、わかる必要もない。……戦争など、知るべきものではありません」

ーードドンッ！！！

砲弾が着弾してくる。シグナムが、主はやて、とはやてを呼んだ。

「このままでは部隊に被害が出ます！　ご指示を！」
「……撤退や。みんな、一度退くよ！」
「させるとでも思いますか？」

ドンッ、と、はやての部隊の退路で爆発が起こる。そこにはチンクと、はやての砲撃を逃れたファイムの部下たちがいた。

「フルドライブ」

そして、ファイムも拳を構える。はやては叫んだ。

「なんで……どうしてや！？　このままやったら、ファイムくんたちまで！！」
「それが任務です。僕たちは、死に場所を与えられた」
「兵に死を躊躇う理由などない」

ファイムとチンクが、それぞれ言葉を紡ぐ。
その戦場に、砲弾が降り注いだ。

◇　◇　◇

クロノ・ハラオウンは、額に青筋を浮かべながら、叫んだ。
「カグラーーッ！！　貴様正気か！？」
「無茶苦茶だね……」
エイミィも呟く。戦場は、最早混沌と化していた。
敵味方問わず吹き飛ぶ者たち。あまりにも理不尽で、不条理な光景だった。
「クロノくん、どうするの？　撤退するのも手だけど」
「しかし、それでは結局ジリ貧だ」
「でも、このままじゃ被害が広がるだけだよ？」
「わかっている。わかっているが……」
クロノは歯噛みする。今の、この時に何か策を講じなければ全滅する。
だが、何も浮かばない。焦りがクロノを支配していく。
その時だった。
『ハラオウン提督！！　私が門を破ります！！』
モニターが開かれ、一人の女性が映し出される。
クロノは、すぐに作戦を組み立てた。
「わかった。全力でキミを援護する。頼んだぞ」
『頼まれましたっ！！』
モニターが閉じる。クロノは、出撃している部隊全てに通信を繋い

だ。

「総員に通達！！　これより門を破る！！　叶望二等空尉を援護し、門を破れ！！　一団となり、敵の本陣を制圧せよ！！」

『『『はっ！！！！！！』』』

迷いなき返事が返ってくる。クロノは、呟いた。

「僕は酷い指揮官だな、エイミィ。みんなに、死ねと命令している」

「ダメだよ、クロノくん」

エイミィは、クロノの手を握り締めた。

「クロノくんが迷ってたら、私たちは誰を信じたらいいの？　クロノくんは、堂々としてなくちゃ。みんなは、クロノくんを信じてるよ」

「……ありがとう」

◇　◇　◇

叶望震離。響や奏と同じ部隊に所属する魔導師である。

あの二人に比べると、階級も二等空尉であるし、魔導師ランクも一応はＡＡランクということもあって、知名度は低いが、実際は響や奏と遜色ない実力を有する人物である。

「いくよエクス！！」

《りょーかいっ！！》

震離は自身のデバイス『エクスピアシオン』に呼びかける。最高速度で戦場を駆け抜け、敵も味方も無視し、門にまで辿り着く。
ザシャッ、という地面を削る音を響かせ、震離は停止。そのまま、エクスピアシオンを構えた。
瞬間、震離を狙った砲撃が迫る。

「……ッ！？」
「叶望二等空尉！！」

震離が身構えた瞬間、魔導師が数人がかりで震離の前に出、庇った。着弾。震離を庇った魔導師たちが宙を舞う。
震離は見た。彼らが微笑んでいたのを。
震離は、強くエクスピアシオンを握り締める。

「エクス、出し惜しみはなし！！　全力の一撃を叩き込むよ！！」
《おっけーっ！！》

震離は魔法陣を展開。構える。
それに気付いたのか、敵の砲撃が強くなる。だが、震離を庇う魔導師たちが、彼女に砲撃を届かせない。

「雷神剣・豪雷槍陣・激槍！！」

震離の周囲に小刀型の魔力スフィアが展開される。更に震離のエクスピアシオンにも魔力が充填される。
この全てを収束して放つのが、震離の最大魔法。
だが。

《門が開いてく？》

エクスピアシオンが、疑問符を浮かべる。
震離も、眉をひそめ。
そしてーー驚愕する。

「まさか」

現れたのは、見た目12歳程度の張り付けにされた少女……もとい、少年。

「流ぇぇぇっっ！！」

◇　◇　◇

目の前で起こったことが、はやては信じられなかった。
ファイムが、砲撃から自分を庇ったのだ。

「ファイムくん……どうして……？」
「……どうして、ですかね？」

ファイムは、苦笑した。

「気がついたら、こうしていました」

ファイムが、目を閉じる。はやての、膝の上で。

「はやてさん……ご無事で」

戦場で、ファイムは、微笑んだ。

はやては、ごめんな、と呟く。

「主はやて！！　お逃げください！！」

シグナムの叫びは、はやてには届かない。

「ごめんな、ファイムくん」

はやては、ファイムを抱き締め。

砲撃が、二人を飲み込んだ。

間章　大乱闘、散りゆくは　中編（後書き）

模擬戦ですよ？
ええ、模擬戦です。だけど本気です。

……はい、すみません。中編になりました。書いているうちに長くなってしまいました。

今回登場しましたのはｋｙｏｎｓｉ先生の作品のキャラクターです。
面白いので是非読んでみてください。

ありがとうございました。

間章　大乱闘、散りゆくは　後編（前書き）

ｋｙｏｎｓｉ先生とのコラボ小説、その最終話です。

時間軸は、先生の作品からは一年後。私の作品からは三年前です。

楽しんで頂けたら幸いです。

間章　大乱闘、散りゆくは　後編

『魔導兵器『ブラストファング』ーーあれ、完成してたのか』
『あー、地上の開発連中が嬉々として開発してやがったな。マリーとかが。……おい、司会。起きてるか？』
『はっ！？　すみませんナカジマ二佐！！』
『気にすんな。呆然とすんのもわかる。ありゃまだ試作段階だからな。知らなくて当然だ』
『いや、ゲンヤさん。あれ局法的にありか？』
『一応は『魔導』兵器だからな。魔導である以上、非殺傷設定もできる。表面上は問題ねぇやな』
『なんとまあ、暴論な』
『わかってたこったろうよ。さて、カグラはカグラで何をしてんだか』
『……流を人質にか。爆弾にならなきゃいいけどな』
『そ、そうでしたご紹介を！！　門を破らんと数多くの戦友たちに庇われながら砲撃魔法を展開するのは、叶望震離二等空尉！！　特別捜査官としても活躍する彼女の前に立ち塞がるのは、風鈴流空曹！！　しかしこれはどういうことか！？　先の戦いの傷によって療養中、前線を離れていた空曹が、戦場で磔にされているーッ！！』
『こういうところ、あいつは冷静だよな。人の心の抉り方を知ってる』
『鬼にしか地獄は理解できねぇやな。あいつは鬼だよ。俺やおめぇさんが背を向けた場所に、その身一つで飛び込んだ、な』
『……そうだったな。地獄で正気を保つのが、どれだけ狂気的か』
『まあ、なんにせよあいつはアマチュアじゃねぇやな。プロだ』
『さあさあさあ！！　戦局もクライマックス！！　どちらが勝つのか！？』
『というか、生き残る奴いんのか？』

『さてな』

『……ちなみにゲンヤさん。これ、模擬戦だよな？』

『ああ。『模擬』戦だよ』

◇　◇　◇

「流！！　流ぇぇぇっっ！！」

震離が叫ぶ。彼女を呼ぶ声もまた響いているが、彼女には届いていない。

「う……震、離さん……？」

流が、ゆっくりと目を開ける。その間にも彼女を落とさんと放たれ続ける砲撃と、それから震離を守ろうと身を挺し、散っていく兵士たちが増えていく。

流は、周囲を見回し、ああ、と呟いた。

「……撃ってください」

◇　◇　◇

「大切な人間が立ちはだかるってんなら、意外と人間って生物は戦えるもんだ。『相手はこちらを倒しにきている。だから正当防衛だ』

って言い訳ができるからな」

扇子ー一少し前にお土産としてもらったそれで自分を扇ぎながら、カグラは言った。

「ところがどっこい。大切な人は磔にされているときた。それを撃ち抜くなんざ、相当な覚悟がなけりゃ、まずできねぇよ。なあ、煌よ？」

くっくっく、と、カグラは笑う。部屋の隅でバインドで縛られた状態の青年ー一楠舞煌は、ちくしょう、と呟いた。

「どうして……！？」

「それは何に対する質問だよ？　流を磔にしたことか？　お前がスパイとバレた理由か？　それともお前がこんなにもあっさり俺に負けたことか？」

椅子にどっかりと座り、タバコをくわえながらカグラは言った。煌は、ギリッ、と歯を食いしばる。

楠舞煌は、近接限定とはいえ、Ｓランク魔導師である。その速さはフェイトに匹敵する程だ。

確かにかつてのカグラは、管理局において最強とも言える『エース・オブ・エース』の片翼を担っていた。だが、今の彼はかつての力の半分以下程度の力しか有していない。

煌は、だからこそ挑んだ。なのに、敗れた。

初撃に完璧なカウンターを合わされ、その隙にバインド。それだけだった。

「んー、まだ余裕はあるし、俺が勝った理由を教えてやるよ。まあ、つっても答えは単純だ。お前が若過ぎるからだよ」

「なん……？」

「俺がどこにいると思ってる？　あの戦技教導隊だぞ？　年がら年中戦い方研究してる場所に十何年もいりゃあ、流石に強くもなる。……Ｓランク魔導師なんてのは、バケモンだ。大抵が力押しで何とかなるし、なっちまう。けど、教導隊ってのは『そういう奴』しかいねぇんだよ。そん中で強くあるためには、磨くしかねぇ。自分を磨き、相手を研究する。単純に突っ込んでくるだけなら、どんだけ速かろうが潰すくらい余裕だよ」

カグラは言い切る。もっとも、今も戦っているあの女性のように例外はいるが。

「でまあ、流については説明すんの面倒臭ぇからいいや。お前がスパイだって気付いたのはあれだ。お前一人だろ？」

カグラは、くくっ、と笑う。

「響たちが三人揃って向こうってのはわかる。同じ部隊だしな。けど、お前は？　何で同じ部隊の幼なじみ三人は参加せず、お前だけこっちにいる？　怪し過ぎだろ馬鹿か」

バサッ、という音と共に、紙の束が煌の前に放り投げられる。それは、事細かに部隊の隊員の情報が記されたデータだった。

「手間かかったけど、ま、こんくらいは普通だわな。信用できるかどうか以外に、適正判断もできる」

模擬戦である以上、モチベーションはまちまちである。能力以外にも、参加動機をカグラは判断材料にしたのだ。

やる気があるなら前線へ。ないなら防衛へ。

基本的にはその振り分けだ。

「お前含めてクロすけの手駒っぽいのは何人かいたがな。お前以外は全員前線に送り込んだ。そいつらにも名誉ってもんがある。全部吹っ飛べば、スパイだった事実は闇の中だ」

「……まさか、無差別攻撃は……」

「さてな。模擬戦っつっても、戦闘にゃ違いはねぇ。そこでスパイなんてする奴を信用するなんざ、難しいぜ？」

ま、そーいうこった、とカグラは言うと、じゃあな、と煌に背中を向けた。それと同時に、部屋に二人の使い魔が入ってくる。

「カグやん～。みんな撤退したぞ～」

「急いだ方がいいかと」

そこにいるのは、管理局史上唯一ＳＳＳランク認定を受けた英雄の使い魔たち。

「お、じゃ俺らも撤退するか。いやー、悪いな二人とも」

そして、去り際にカグラは思い出したように言葉を紡いだ。

「俺に勝ちたきゃ、教導隊にでも入れ。お前なら、すぐに俺なんざ追い抜ける」

◇　◇　◇

そして、カグラは部屋を出た。

「撃って、ください。震離さん」
「そんな、流、そんなこと言わないで……」
泣きそうな顔で、震離はそれを拒否する。流を撃つという行為は、彼女にはありえない選択だった。
しかし、流は首を振る。
「あなたの邪魔をしたくない。だから、撃ってください」
「……流……」
いやいやと、震離は首を振る。
「お願いします。邪魔になりたくない。あなたには、あなたが背負う仲間がいる」
震離を信じ、任せてくれたクロノ。
彼女のために身を挺し、散っていった者たち。
震離がここで撃てなければ、その全てが無駄になる。
「撃つんです。あなたは、撃たなければならない」
「やだ、やだよ」
「……」
震離は、それを理解していて、それでも撃てない。
だから、流は。
風鈴流という人間は、その言葉を紡いだ。
「撃て！！　叶望二等空尉！！」

ビクッ、と、震離の体が震えた。
震離は、叫ぶ。

「うあああああああああああああああっっっ！！！！！！！」

絶叫。
流の微笑みと震離の涙が、戦場を彩った。

「……流……流ぇ……」

目を閉じた流を抱き締めながら、震離は幾度も幾度も呟く。
そんな彼女の頭を、戦いで傷ついた手が優しく撫でた。

「……こんなこと、許しちゃいけない……！」

『ソニックフォーム』になり、リューイ・エンドブロムという難敵を打ち倒してきたフェイトが、怒りを言葉に乗せる。

「早く、終わらせなきゃ……！」

震離と流をその場に残し、フェイトは走り出す。
フリードに乗ってすぐ上を飛行しているキャロや、側を走っているエリオ、スバルを筆頭に、数を減らしながらも中心地点での戦闘を制した一団は、カグラ・ランバードの陣営へと突入した。
しかし。

そこで見たのは、誰一人として人がいない、空っぽの陣営。

「これは……？」

内部へと足を踏み入れながら、スバルが疑問符を浮かべる。フェイトは首を横に振った。

「わからない。これはーー」

「……煌さん！？」

エリオが上げた声に、一斉に皆がそちらを見た。皆の視線の先にいたのは、ボロボロの状態の煌。

煌はフェイトたちを見ると、絞り出すように言葉を紡いだ。

「……逃げ…ろ……」

ーー直後。

声が、響き渡る。

『兵士諸君！　任務ご苦労だった！　よくここまで辿り着いた！……だが！』

カグラの声は、すぐに終わる。

閃光が、世界を支配した。

◇　◇　◇

『ーーさよならだ』

『おーおー、ハラオウン提督が叫んでるな。今日何度目だ、ティレット？』
『『貴様正気か』って叫ぶのなら、音声だけで七回目かな？』
『なんということでしょう！！　ランバード一佐の本陣が突如爆発！！　突入をはかったハラオウン執務官の一団が巻き込まれました！！』
『予測通りっちゃ、予測通りだな』
『何が？』
『さっきも言ったがな、あの砲台は未完成なんだよ。俺は魔導師じゃねぇから詳しくはわかりゃしねぇが、ＡＡＡランク魔導師の砲撃ってのは、凄まじいエネルギーだ。それによって発生するエネルギーは、とんでもねぇ熱を発生させるんだと。それが限界を迎えると、ああして爆発するらしい』
『……もの凄ぇ欠陥品だなおい』
『そこさえ利用すんのがカグラの恐ろしいとこだよ』
『つか生きてんのかあいつら？』
『それは大丈夫みたいだな。防護結界が張られてる。ノックアウトはしたろうが、死にゃしねぇ』
『張った奴は……この結界の規模で参加者のラインナップからすりゃ、あの人か』
『まあ、そうだろうな。……なんだ、あの坊主にゃあいつって言わないのか？』
『一応将軍待遇だからな。ん？……なんか、白い悪魔が見えた気が』
『……そろそろ終わりそうだな』
『おーっとぉ！！　壊滅的な打撃を受けたハラオウン提督陣営が動きました！！　提督自らの出陣です！！　しかし、ランバード一佐陣営も相当な被害が出ている！！　これが最後の衝突か～！？』
『数的には若干カグラの方が多いが……』

『まあ、なんにせよここで決着だろうな。カグラはカグラで残存兵全部引き連れてるみてぇだ』
『遂に、遂に決着か～！？』

『ところで、ティレット。ファイムはあのタヌキと一緒にリタイアしたよな？』
『ん、ああ。そのはずだぜ。あいつらの雰囲気は間違いなく戦争のそれだったけど』
『……探したんだが、タヌキはリタイアして救護隊のとこにいるからともかく、ファイムがいねぇ』
『……まだ動けんの？』
『何をする気かねぇ？』

◇　◇　◇

「本陣を吹き飛ばすとは、成程正気の沙汰ではありませんね。有効な一手ではあるかもしれませんが、普通は打たぬ手です」
キン、と、自身の愛刀を鞘に納めながら、オトヒメでは言った。
「祭は終わりに近付いています。我らの決着も、着けるべきでしょう」
オトヒメの視線の先にいるのは、二人の魔導師。
緋凰響と天雅奏。
共に力持つ魔導師だ。
しかし、今。彼らは満身創痍だった。

「奏……大丈夫か？」
「うん、まだ……やれるよ？」
「上等だ。……どこまで、理不尽な」

響はオトヒメを睨む。オトヒメも無傷というわけではない。しかし、その傷は薄いものが多く、大したダメージはない。
何より、フードを剥ぐことさえできていないのだ。

「圧倒的な力を有する者は、それを超える圧倒的な力を見せつけられると絶望する……少々、見識が狭かったようですね」

オトヒメは、楽しそうに笑った。

「さあ、クライマックスです。持てる全てをお見せなさい」
「言われなくても！！」

響が前に出る。放つのは、必殺の一撃。
居合の構えを取り、響は集中を高めていく。オトヒメは、ならば、と呟いた。

「私も全力を出しましょう。……桜花」

オトヒメの右手に、巨大な薙刀が出現する。大の大人でさえも取り回しが難しいであろうそれを、オトヒメは軽々と右手一本で回転させる。
左手は、愛刀『血桜』の柄へ。

「私にこの二つを手に取らせる魔導師は、久方振りです。……参りなさい」

響は言葉ではなく、刃で応じた。

「奥義・封神幻魔！！」

圧倒的な速さ、そして鋭さを誇る一撃が放たれた。斬られた相手さえも、斬られたことに気付かない程研ぎ澄まされた一撃が、最強の侍に迫る。

「……夢魔龍閃」

対し、オトヒメも速さを追求した一撃を抜き放つ。片手の、しかも利き腕ではない腕による居合の軌跡が、空に美しい道を描く。

ーーザシュッ。

金属音とは別に、そんな鈍い音が響き渡った。
オトヒメの血桜が宙を舞い、肩口から血が噴き出す。
非殺傷といっても、響の獲物は刀である。まともに入れば斬れる。
それも響クラスの使い手となれば尚更だ。
オトヒメのフードが取れ、素顔が露になる。美しい黒の長髪を持つ、美女だった。

「……見事」

オトヒメは微笑み、そして、響へと桜花を突き刺した。
響は咄嗟にガードするが、威力を殺し切れない。
そこへ、トドメの一撃が叩き込まれる。

「夢想演舞」

ーーガドン！！
かの『エース・オブ・エース』に匹敵、あるいは凌駕さえしてしまう一撃が、響を叩き潰した。
奏が、叫ぶ。

「響！！　響ぃぃぃっっ！！」

返事は帰ってこない。今の一撃で盛り上がった地面の狭間から見える手は、動かない。
大切な人がそんなことになっていて、黙っていられるはずがなかった。

「……よくも！！　よくも響を！！」
「参りなさい。怒りは言葉ではなく、刃で語るべきです」
「あああっ！！　ブラスティング・アサルト・デストロイ！！」
《Ｂｌａｓｔｉｎｇ　Ａｓｓａｕｌｔ　Ｄｅｓｔｒｏｙ！！》

奏がその手に持つ二丁のライフル。そこに、凄まじい魔力が集中していく。
オトヒメは深い裂傷が入った左腕を動かそうとするが、痛みでそれを断念。桜花を手にした右手を前に出す。

「夢幻天声」

ゴゥン、という音と共に、巨大な障壁が展開される。
奏は地面を蹴り、オトヒメとの距離を詰める。そして、魔力で形成した刃を突き出した。
一方は、腹部へ。
一方はーーオトヒメの顔へ。

「あああっ！！」

魔力刃で障壁をこじ開け、ゼロ距離で最大威力の一撃を叩き込む、奏の大技。

オトヒメは自身の障壁が僅かに削られていくのを目にしながら、ほぅ、と息を漏らした。

「鬼気とは、やはりこうも人を圧倒するのですね。やはり、あなたたちは素晴らしい」

オトヒメは微笑み。

奏の砲撃が、放たれた。

ー一爆発。

人の五体など軽々と吹き飛ばしてしまいそうな程に強力な一撃が、空間を支配した。

「はっ……はっ……」

息を切らしながら、奏は爆発の後、立ち上る煙を睨みつける。

文句なしの一撃だった。立てるはずがない。

ーージャリッ。

砂を、踏む音。

立てるはずがない。ないというのに。

「……見事」

そいつは、立っていた。

頭から血を流し。響が刻んだ傷を深くし、そこから血を溢れさせながら。
それでも、微笑んでいた。

「響の居合を受けて、私の砲撃を受けて、どうして……!?」
「魔導師は魔力を代価に力を行使します。その魔力は生まれつきで定められているが故に、明確な差が出てしまいます」

ヒュンヒュンという風切り音を響かせながら、オトヒメは言葉を紡いだ。

「そして、定められている以上は限界がある。ならば、それを超えるには？　解は単純です。更なる『代償』を支払えばいい。人が誰しも有し、そして、何よりも大切なものを。より大切なもののために差し出せば良いのです。大切なもののために大切なものを差し出す……矛盾していますが、かつて何よりも大切なものに出会った一人の侍が辿り着いた答えです」
「……なんのこと？」
「これ以上は、我が秘技に関わることですので。……さて、終幕です」

世界が、唸る。
ただ魔力を集中しただけだというのに、押し潰されそうなほど強大なプレッシャーが奏を襲った。

「私は卑怯者ですよ。そもそも同じ土俵に立っていないのです。故に、敗北を気に病む必要はありません」

そして、オトヒメは桜花を振り上げる。
奏は身構えるが、そんなもの、意味はない。

「夢想演舞」
響を叩き潰した砲撃が、奏を襲い。
奏は、そこで意識を手放した。

「……私の仕事はここまで。中々楽しめましたね」
オトヒメは、ふふっ、と微笑む。
しかし、その微笑みはすぐに暗いものになる。
「……楽しむなど、どれ程の月日、忘れていたか」

◇　◇　◇

カグラ・ランバードは、本陣から一度引き上げさせていた兵力をまとめ、戦場を進んでいた。
すでに戦闘開始から半日以上は経っており、おそらくこれが最後の衝突になるのは見えていた。

「大体三割くらいか。思ったより少ねぇな」
「何がです？」
カグラの隣を歩く、リーゼアリアが問いかけてくる。カグラは、あー、と唸った。

「予定じゃ悪くても四割くらい残すつもりだったんだけどな。いやー、中々やるねぇ、クロすけは」
「あっはっは、そりゃクロすけをなめ過ぎだよカグやん！」
バンバンとカグラの背中を叩きながら、リーゼロッテが言う。カグラは肩を竦めた。
「まあ、グレアムさんの愛弟子だもんな」
「結局、父様には届きませんでしたが」
「いや流石にＳＳＳランクは無理だろ」
カグラは思わずつっこむ。総合ＳＳＳなどという、とんでもない力を有していた伝説の魔導師、ギル・グレアム。Ｓランク以上の魔導師ランクは、彼の成長と共に定められたとされるほどだ。
クロノは曲がりなりにもその愛弟子。確かに、少々侮っていたかもしれない。
「ま、何にせよ勝つのは俺だ。ここまでやらかして負けるわけにはいかねぇ」
「あり？　責任感じてる？」
「器じゃねぇが、大将だ。相応の覚悟くらいはあるぜ？」
カグラはそう言葉を紡ぐと、タバコを取り出し、くわえた。火は点けない。
足を止めたカグラ。それを部隊の者たちは不審に思うが、すぐに理由を理解する。
「真打ち登場だな、お嬢ちゃん」
「ここから先へは、進ませません」

空に佇むは、管理局が誇る英雄。犯罪者からは『白い悪魔』と恐れられる、その手で奇跡を起こす魔導師。
『エース・オブ・エース』高町なのは。
なのははすぅ、と息を吸い込むと、魔力を集中させた。

「エクセリオン……」
「いきなりか」

つか、このタイミングで嬢ちゃんかよ、と呟くカグラは、反撃の構えを取らない。リーゼロッテが、カグラを呼んだ。

「カグやん！」
「大丈夫だっての。切り札ならまだ残ってる」

隣にいるリーゼロッテに手をひらひらと振りながらそう言葉を返した瞬間、なのはの砲撃が臨界点を迎える。

「バスターッ！」
「ラウンドシールド！」

なのはの砲撃がカグラに直撃する瞬間、カグラを守るシールドが展開された。
それは『エース・オブ・エース』の砲撃を防ぎきり、一人の青年の姿をその場に顕現させる。
後ろで縛られた、金色の髪。翡翠の魔力を纏い、丸い眼鏡をかけている。

「ユーノくん！？」

なのはは、思わず名前を呼んだ。
ユーノ・スクライア。若くして『無限書庫』の司書長を務め、その功績から民間協力者でありながらも将軍待遇を受ける天才である。
高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてといった彼と同期である太陽たちに隠れがちだが、彼もまた、正真正銘の天才だ。
カグラはユーノの肩に手を置くと、そんじゃ、と言葉を紡いだ。

「頼んだぞ司書長」
「はい。……いくよ、なのは」

キィン、という音と共にミッド式の魔法陣がユーノの足下に展開される。
カグラたちが先に進むのを見送り、二人は向かい合う。

「どうして、って、聞かないんだね、なのは」
「ううん、聞きたいよ。だけど、ユーノくんはユーノくんの理由があるんだよね？　それは、聞いたら教えてくれるのかな？」
「ううん。悪いけど、そう簡単には教えられない」

ユーノは首を左右に振る。なのはは、そっか、と頷いた。

「なら、私が勝ったら、お話聞かせてもらうから」
「……お手柔らかにね、なのは」
「それはユーノくん次第だよ？」

悪戯っぽく言うなのは。ユーノは苦笑する。

「なのはらしいや。……いくよ、なのは」
「うん、ユーノくん」

かつて、出会うはずなき二人は出会い、その出会いがいくつもの奇跡を起こした。
高町なのはも。
ユーノ・スクライアも。
その出会いに何よりも感謝し、誰よりも互いを想っている。
そして、だからこそ。
譲れない、ものがある。

◇　◇　◇

『５１、５２、５３番の結界装置が機能停止!?　高町教導官の砲撃で!?』
『……ティレット。Ｓランク魔導師ってのは、誰でもあんなことできんのか?』
『ＡＭＦ抜いた上で、純魔力砲撃だけで対魔法に特化した結界抜くのは『エース・オブ・エース』くらいだな』
『やっぱりバケモンか』
『だからこそ、『高町なのはの敗北は管理局の敗北』なんて言われんだろ』
『これ見てる限りじゃ同感だけどな』
『はっ!!　そうでしたご紹介を!!　皆様ご存知かと存じます!!　弱冠２０歳という若さでありながら無限書庫司書長を務める、若き考古学者!!　彼を『天才』と呼んで疑う人はいないでしょう!!!　ユーノ・スクライア司書長です!!!』
『カグラの切り札か』
『まあ、結界魔導師としちゃオーバーＳとかのレベルらしいからな』
『そしてそして!!!　お待たせしました大本命!!!　その身の奇跡は数知れず!!!　残した偉業は星の数!!!　星の光と不屈の心を携

えるは、『エース・オブ・エース』高町なのは戦技教導官!!　彼女の敗北は管理局の敗北とまで謳われる英雄が、この最終局面で遂に登場です!!』

◇　◇　◇

「クロノよ。こうして向き合うのは何年ぶりだ?」
「キミとの最後の模擬戦がいつだったかなど、忘れてしまったよ」
氷の魔杖ーー『デュランダル』を携えたクロノが、そう言って応じる。そうだな、とカグラも頷いた。
「今ここで、決着を着けようぜ」
「望むところだ」
二人のその言葉を合図に、戦闘が始まる。最初に飛び出したのは、リーゼロッテとリーゼアリア。
「リーゼ!?」
「よっす、クロすけ。久し振りっ!」
リーゼロッテの容赦ない蹴りがクロノへ叩き込まれる。そこへリーゼアリアが魔法を紡いだ。
「ブレイズダウン!」
叩き込まれたのは、巨大な火球。クロノの視界は一瞬で赤に染まる。だが、その一撃がクロノに入る前に、白銀の盾がそれを防いだ。

「ザフィーラ！」
「ご無事ですか、提督」
「ああ、助かった」
「奴らの相手は、私とシグナムが務めます」
ザフィーラは短くそう言うと、リーゼアリアに躍り掛かった。リーゼロッテには、空よりシグナムが飛来する。
「紫電、一閃！！」
強烈な一撃が、リーゼロッテを吹き飛ばした。シグナムは、レヴァンティンの切っ先をリーゼロッテに向ける。
「間が悪く、リィンとアギトはメンテナンス中。不利になるかと思ったが、むしろ好都合だ」
魔力がシグナムを包み、振り上げた刃に魔力が収束していく。
「以前貴様たち相手に取った不覚、ここでまとめて返してやろう」
「ふん、上等じゃん」
リーゼロッテは、受けて立つ構えを取る。
そして、大気が裂ける。
ザフィーラとリーゼアリアは互いに多くを語ることなく、戦いを始める。激化する戦場。その中心で、両軍の指揮官は向き合っていた。
この場にいる者は、いや、全ての者が理解している。
この二人の戦いが決着であり、それ以外は全て飾りだと。
「リーゼたちを呼んでくるとは思っていなかったぞ、カグラ」

「ホントはグレアムのじいちゃんを呼びたかったんだけどな。理事会に止められた」
「当たり前だ。貴様正気か？　ＳＳＳランク魔導師など、単騎で都市一つを簡単に吹き飛ばせるような存在だぞ」
「ま、何にせよ俺のカードはもうほとんど残っちゃいねぇ。切れるカードは最後の切り札だけだ」

両手足を覆う手甲と足甲。近接戦闘に特化させた状態の愛機『ヘルダスト』を一瞥し、カグラは言う。

「俺の最後の切り札は、『俺自身』。かかってこいやお坊ちゃん。叩き潰してやる」

かつての半分に満たない魔力しか、今のカグラは有していない。しかし、今の彼は間違いなく、『英雄』カグラ・ランバードだった。

「いいだろうカグラ。相手をしてやる」
「御託はいいからかかってこいや『製氷機』」
「せいひょ……！？　いいだろう。後悔するな！　デュランダル！」
《ＯＫ，Ｂｏｓｓ》

ガシャン、と、デュランダルはカートリッジをロード。
カグラは空へと上がり、クロノもそれを追いながら叫ぶ。

「総員！！　巻き込まれるなよ！！」
《Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｉｎ》

かつて闇の書の封印のために生み出されたデバイスが紡ぐのは、闇の書の動きさえも封じた極冷魔法。
カグラを中心に半径５０メートル以上に及ぶ空間が一瞬で凍りつき、

大気の温度が急激に下がっていく。
普通なら決着となるべき一撃は、しかし、カグラには通じない。

ーーガシャァン！！！！！！

まるで硝子を割るかのような音を響かせ、巨大な氷塊が吹き飛んだ。
降り注ぐ、氷塊の欠片たち。十分な殺傷能力を備えたそれを避けながら、カグラはクロノに肉薄する。
ーーガキィッ！！
クロノはカグラの拳を受け止める。そうしながら、言葉を紡いだ。

「バケモノかキミは……っ！」
「褒め言葉……だよっ！」

カグラは強引に体を捻ると、体の回転で加速させた蹴りを叩き込んだ。
クロノは落下。地面に叩きつけられ、クレーターを作る。だが。

《Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ》

次の瞬間、熱線がカグラに叩き込まれた。カグラはまともに喰らい、宙を舞う。
だがすぐに体勢を立て直すと、ははっ、と笑みを浮かべた。

「いいね。楽しい」
「不本意だが……僕も少し、楽しくなってきた」

クロノも不敵に笑い、そして、二人は再度ぶつかり合う。
その目は、少年のように輝いていた。

◇　◇　◇

「あはは、クロノくんもカグラくんも、楽しそうだねぇ」
「本当に。……全く、初めからああしていればここまで大事にならなかったのに」

エイミィの言葉に、ため息混じりで言葉を紡ぐのは、ファイム・ララウェイだ。エイミィは、ふふっ、と微笑を漏らす。

「ララウェイ執務官は、カグラくんの目的を知ってるよね？」
「ファイムでいいですよ。……はい。気付いておられたので？」
「なんとなくね。クロノくんは頭に血が上ってるから気付いてないみたいだけど」

エイミィは笑う。ファイムは、流石だ、と内心で呟いた。
退役しなければ、クロノの片腕ーーあるいは彼女自身も提督として活躍していただろうと謳われるその洞察力は、衰えていない。
その性格故に理解されにくいとカグラは言っていたが、成程、優秀な人だ。

「だから、裏方に徹したんですね。その気になれば、あなた自身も指揮を執って戦えたというのに」
「どうだろうね？　私は所詮、魔力ゼロ。前線じゃ足手纏いにしかならないよ」

それは、つまり。
魔力さえあれば。前線ではなく、後方からなら十二分に力を発揮できるということだ。

今回、クロノの陣営に加わった者の大半はエイミィの人脈の派生だという。はやてたちだってそうだ。
エイミィという起点から誰かに繋がり、そこから更に誰かへと繋がる。
成程、確かに頷ける。
彼女に魔力があり、魔導師として戦える力があったなら、かの『奇跡の女神』リンディ・ハラオウン統括官の後継者となれたという評価は、妥当な評価だ。

（本当、はやてさんの周囲には凄い人ばかりいるなぁ……）

少しだけ、ほんの少しだけ、劣等感を感じた。
やはり自分は凡人なのだと、再確認した。

「……まあ、確かにね。ファイムくんの言う通りのところもあるよ。今はカメラもないし、言っちゃうけど……」

エイミィは、苦笑じみた表情を浮かべた。

「私はね、クロノくんの重荷になりたくないんだ。私に力があるなんて、万が一にも上が思ってしまったら、私は多分、呼び戻されちゃう。クロノくんはきっと、それを喜ばない。クロノくんとカグラくんってさ、そっくりなんだ。自分が傷つくのは少しも気にしないのに、誰かが傷つくのには過剰なまでに反応する。……心当たり、あるんじゃないかな？　ファイムくん、はやてちゃんから聞く限りじゃ、あの二人と同じみたいだから」

似てる、ではなく、同じ。
エイミィは、ファイムのことをそう評価した。
確かに、そうかもしれない。けれど、あの二人とは理由が違う。

あの二人はただただ、純粋な想いから『そう』なのだろう。
けれど、自分は。
ただ、罪人が償う方法がそれしかないという理由で、そうなっているだけ。

「僕は……しかし……」
「言いたくないなら、言わなくていいよ。整理がつくまで、抱えていた方がいいから。ただね、ファイムくん。これだけは覚えておいたほうがいいよ」

エイミィは、真剣な眼差しをファイムに向けた。

「自分自身を守れない人が、誰かを守れるはずがない。それは真理だよ」
「……心に、留めておきます」
「うん」

エイミィは頷く。ファイムは、では、と言葉を紡いだ。

「僕は、行きます」
「やるんだね？」
「そういう、シナリオですから」

バサッ、と、ファイムの背に宿る翼がはためいた。
エイミィは、そんなファイムに言葉を紡ぐ。

「無理してない？」
「大丈夫です」

ファイムは、そう答えた。
していない、ではなく、大丈夫、と。
無意識に。
そして、ファイムは空を駆ける。その姿を見送ってから、エイミィはため息を吐いた。

「男の子って、不器用だよね。無理してるって、丸わかりだよ」

エイミィは、チラリと、背後を振り返る。

「はやてちゃん……苦労するよ」

◇　◇　◇

「エクセリオンバスターA，C，S！！」
「……ッ！！」

相手に突撃し、ゼロ距離から最大出力の砲撃を叩き込む高町なのはの大技。
並の魔導師ーーいや、たとえオーバーSランクの魔導師でさえ無傷で受けきることは不可能なこの技を、ユーノは真っ向から受け止めた。

「ドライブ！！」
「シールド！！」

砲撃が放たれたその瞬間に、ユーノはシールドを展開した。そこへなのはの砲撃が直撃。ユーノは吹き飛ばされる。

「……くっ！」

だが、ユーノはすぐさま体勢を立て直すと、手を前に翳した。

「ストラグルバインド！！」

デバイスなしの、精密魔法操作はユーノの得意技である。更に、彼はあくまで結界魔導師。相手を封じるのが戦い方だ。

魔力結合を阻害するバインドが、なのはを狙う。なのはは空を舞うことでそれを避けると、シューターでバインドを撃ち払った。

「流石だね、ユーノくん。中々決まらない」

「僕にはこれしかないから。ろくな攻撃魔法を持たない僕は、こうやって相手の消耗を待つしかない」

「うん。知ってる。……その戦い方は、私のためなんだよね？」

なのはの、いきなりの言葉にユーノは弾かれたように顔を上げた。

なのはは、にゃはは、と笑う。

「私の戦い方は、ユーノくんと一緒に戦うことが始まりだもん。だからわかるよ。ユーノくんは『それしかできない』んじゃなくて、『それができるようになってくれた』んだって」

「……買い被りだよ、なのは。僕は……」

思わず紡ぎそうになった言葉を、ユーノは飲み込んだ。なのはは、呟くようにユーノの名を呼んだ。

「もしかして、『それ』が理由なのかな？」

「……」

二人の間に、詳しい言葉は必要なかった。
こうしている理由。それを問いかけたなのはに、ユーノは無言を貫く。
なのはは、わかった、と頷いた。

「次で決めるよ、ユーノくん。私が勝ったら、お話聞かせてもらうから！」
《Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

高町なのはにとって最強の、今まで幾多の敵を倒してきた魔法が紡がれる。ユーノは頷いた。

「いいよ、なのは。受け止めてみせる」

キィン、という音と共に、ユーノの魔法陣が輝く。綺麗な翡翠の光が、周囲に満ちる。

「ブラスター１！　リミットリリース！」
《ｃｏｕｎｔ　ｓｔａｒｔ》

凄まじい魔力の圧力がユーノを襲う。ユーノはごくりと唾を飲み込むと、自身を包む球状の結界を展開した。

「クロースド・ラウンド」

新たに会得した、守るための魔法。大切な人を守るために会得したそれが、まさかその人から自分を守るために使うことになるとは、何たる皮肉か、とユーノは内心で苦笑した。
そして、なのはの魔法が紡がれる。

「全力！！　全開！！　スターライトーー」
《4…3…2…1》
桜色の光が、臨界点を迎える。
「ブレイカアァァァッッ！！」
《ーーＺｅｒｏ》
放たれた砲撃が、ユーノを包み込んだ。

「……やっぱり、なのはは凄いなぁ」
「無理し過ぎだよ、ユーノくん。はやてちゃんだって、まともにＳＬＢとは相対しないのに」
「……でも、やらなくちゃいけなかった」
なのはに膝枕をされながら、ユーノは言った。なのはは、ユーノくん、と彼を呼ぶ。
「そうなんだね、ユーノくん。これは、確認だったんだね？」
「うん。……１１年も前に見切りをつけておいて、今更見苦しいけど、僕は、確かめたかったんだ」
ユーノは、自身の顔を覆うように顔を右手で包んだ。
「あの時……なのはが墜ちた時、僕には後悔しかなかった。僕がな

のはをこの世界へ連れてきてしまった。僕のせいだ、って」
「ユーノくん、それは……」
「わかってるよ、なのは。けれど僕は納得できなかったんだ。なのはの背中を守れなくなった自分が、許せなかった」
そのために、ユーノはこうしてなのはと相対した。
適うはずがないと理解していて、それでもユーノは戦った。
また、彼女と共に戦えることを願って。
……結果は、こんなだけれど。
足を引っ張るしかないと、思い知らされたけれど。
「馬鹿だよ、ユーノくんは」
なのはは、そんなユーノの額にデコピンを入れた。
「私は、いつだってユーノくんに守られてるよ。ユーノくんが信じてくれてるから、守ってくれてるから、私は頑張れるんだよ？　ユーノくんがいてくれるとね、背中が暖かいんだ」
なのはは、微笑み。
ユーノの頬を、一筋の涙が流れた。
「ありがとう。ユーノくん」
その一言で、報われた気がした。
◇　◇　◇

ドカッ、バキッ、グシャッ。
華やかな魔法戦が終わり、互いの部隊もほとんどが全滅した中、両軍の指揮官は互いに殴り合っていた。

「うらあっ！」

バキッ、という音が響き、クロノの顔面にカグラの拳が叩き込まれる。クロノは倒れかけたが踏みとどまり、殴り返す。
カグラの腹部に拳が叩き込まれ、カグラはぐっ、と表情を苦悶のものに変える。
しかし、カグラは今度は蹴りを叩き込んだ。
クロノはたまらず吹っ飛び、地面を転がるが、すぐに震える体で立ち上がった。

「こいよ、クロノ！」
「言われなくても！」

バキッ、と、再び互いに殴り合いが始まる。魔法の補助はない。無粋と、理解していた。
片や、かつて『エース・オブ・エース』の称号を背負いし英雄。
片や、理事会入りが半ば約束されたエリート中のエリート。
今の二人、しかし、そんなものは忘れ去っていた。
倒れることは、自らが背負った者たちに対する冒涜。
プライドも、恥も、誇りも。そのことに比べれば、意味などない。
そして、何より。
ー負けたくない。
心の底から、二人はそう思っていた。

「らあっ！」

カグラの拳が、クリーンヒット。クロノは、たまらず倒れ込む。

「うっしゃああっ！」

勝ち誇るようにカグラは拳を突き上げる。だが、その後頭部にクロノの跳び蹴りが入った。

「ぶっ！？」

カグラは地面に倒れ込み、顔を思い切り地面に打ちつける。

「勝ち誇るのは……早い、ぞ」

「この……」

二人は互いに掴みかかり、カグラはクロノの顔面を潰すかのように握り締める。クロノはクロノで、先程までの魔法戦でカグラが脇腹に負った裂傷を握り潰した。

「「……ッ！！」」

互いに痛みを堪え、しかし、一歩も退かない。最早子供のケンカになっていたが、誰も止めないし、止められなかった。
あまりにも二人が、いい笑顔だったから。
そして、二人は再び拳を振り上げる。
ーーガスッ。
同時に放たれた拳は、互いの顔面に綺麗に吸い込まれた。
そして、二人は倒れる。

「……くそっ……たれ……根性、あんじゃねぇか」

「キミ、こそ。そんな体で……よく、やる、よ」

仰向けになりながら、互いに言葉を紡ぐ。
二人とも、もう、限界だった。

「引き分け、ってのも……悪くは、ねぇが……観客が納得しねぇ……だろ？」
「そう、いえば……『模擬』戦、だったな……これは」
「……互いに、アホ面晒した、な……」
「……全く、だ……」

二人は、ほぼ同時に立ち上がろうとする。
しかし、とうに限界を迎えた体は、言うことを聞かない。
それでも立ち上がろうとする二人の目に、星の光が目についた。
朝からやっていて、もうそんな時間かーークロノは思った瞬間、はっ、と気付く。
ここは室内で、ホログラムで空こそ映し出されているが、その映像は変わることはない。
そもそも、あそこまで輝く翡翠の光は、星ではない。

「僕が目を覚ましてからだから、仕込みに三時間かかっちゃったか……。やっぱり、実戦で使えるものじゃないね」
《カビの生えた古文書の魔法ですから》
「まあ、今回は丁度良かったけどね」

空に、翡翠の軌跡が描かれる。三次元で描かれる複雑怪奇なそれは、ワイヤーで描かれた魔法陣。
ガシャン、ガシャン、と、何発もカートリッジをロードする音が聞こえてきた。下から見上げるとまるで天使のようにも見える人物が、カートリッジシステムが積まれた簡易デバイスを、空いた右手に持っていた。

「３５発……これでようやく足りるんだよね、リンネ」
《はい。計算では》
「よし、やろうか」

その人物は、確かに天使に見えた。
しかし、現実は。
ー一世界を砕く、悪魔だった。

「スフィア形成。リンネ、細かい制御はお願い」
《了解。マスターも、集中を切らさないでください》

空に、無数の魔力スフィアが現れる。それだけなら良かったのだが、それらは突如、魔力を収束し始めた。
クロノは、目を見開き、叫ぶ。

「なっ、なんだこれは!?」
「あー、俺の最後の最後の手段?」

冗談めかして言っていたが、クロノはすぐに悟った。カグラも相当焦っている。

「貴様正気か!?　くそっ!!」

立ち上がれないはずなのにクロノは立ち上がり、逃げようとする。
人は死に直面すると、信じられない力を発揮するのだ。

「ぶっ!?」

しかし、情けない声を上げてクロノはすぐに地面へと倒れ込んだ。

見ると、カグラが足を掴んでいる。

「離せカグラ！！」

「うっせぇ！！　俺はもう動けねぇんだよ！！　お前も巻き込んでやる！！」

「貴様正気か！？　離せこの！！」

「離すかボケ！！」

クロノはげしげしとカグラを蹴るが、カグラは離そうとしない。しぶとく足を掴んでいる。

「くっ……！！」

「俺が負けそうになったら全部吹っ飛ばすつもりだったんだが、いやー、まさかマジでやることになるとは」

「貴様はどれだけ……！？」

「いやな、大変だったんだぜ？　司書長とファイムが見つけてきた古代魔法を実現するために色々仕掛けしてよー」

「聞いてない！！」

「ま、諦めろクロノ。何のためにあんだけ無差別に魔力ばらまいたと思ってんだ？」

にひ、とカグラは邪悪な笑みを浮かべた。クロノは、この、と苛立たしげに言葉を紡ぐ。

「ここまで予測していたのか！？」

「できたらバケモンだろそりゃ。こうなるように運んだんだよ。……俺もお前も、負けても勝ってもダメなんでな」

怒らせたのもそのためだ、と、カグラは言った。

クロノは、何故だ、と言葉を紡ぐ。

「ここまでの手間をかけてまで、何故……！？」
「ガキじゃねぇんだ。自慢の頭で考えな。なに、すぐわかるさ。エイミィにはバレてるだろうしよ」
カグラは笑う。その頭上で、翡翠の光が輝きを増した。
数多の魔導師が戦い、散っていった戦場。そこに満ちた魔力が、全て収束する。
ーーまるで世界の終わりのような光が、降り注いだ。

◇　◇　◇

古代魔法。
最早名称さえわからないそれは、とてつもない前準備が必要だった。
模擬戦ルームの端に合計７２個もの術式補助のための装置を設置し、術を執行するファイムが術式を維持できるよう、３５発ものカートリッジロードのために改造を施した簡易デバイスを用意し、尚且つ、魔力散布を十分にするために魔導兵器まで持ち出した。
その術式は、現実ならば使用など不可能なこの古代魔法を、ファイムは一度限りの夢として使用した。

「……リンネ、これで良かったのかな？」
《間違っていないとは思います。それよりも、体は大丈夫ですか？》
「大丈夫。……じゃあ、戻ろっか」
《ランバード一佐たちは良いのですか？》
「いいと思うよ。どうせすぐ起きるだろうしね」

ファイムは笑い、歩いていく。その途中で、リンネは呟いた。

《……ただの魔導では、あれは発動できなかった。マスターが使用者に選ばれたのは、やはり……》

命を使う、術のため。

◇　◇　◇

『さて、終わった終わった』

『トータルで15時間とちょいか。中々長ぇやな』

『こりゃ夜通しかな、ゲンヤさん？』

『だろうな。……おい司会、いつまでもモニターの砂嵐なんざ見てねぇで、おめぇさんも準備しな』

『準備、ですか？』

『結果は引き分けだ。ま、そんなこたぁどうでもいい。大隊戦の後はな、参加者も観客も混ざって宴会すんのが通例なんだよ』

『今日の管理局、普段と比べてどんくらい機能落ちてんだろうな？』

『まあ、5、6％ってとこだろうよ。司会、おめぇさんにはもう一つだけ仕事が残ってる。行くぞ』

『はっ、はい！』

『……5、6％って凄いよな。管理局って、大丈夫なのか？』

◇　◇　◇

魔導がクリーンな力であるとされる最大の理由、非殺傷設定。

ご都合主義だとカグラは思うが、それがあるからこそ、こうして立っているのだとも彼は思う。

「行くのか？」

「久方振りに、力を出しました。感謝します」

カグラの視線の先にいるのは、オトヒメー一否、テンリュウ・シンドウ。

世界の裏側に脈々と受け継がれてきた、『最強』の継承者。

かつてカグラは、先代に敗れたことがある。故に、彼女の力は理解していた。

「感謝すんのはこっちだよ。無理に参加してもらってすまなかったな。ほれ、礼だ」

「……これは」

カグラが投げ渡した包みには、報酬という名のお金が入っていた。

ただ、その額が破格であったが。

「色んなとこに首突っ込んでると使いもしねーのに金が貯まる。貰っていってくれや」

「……では、ありがたく」

テンリュウの左腕には、すでに傷は残っていない。彼女は自力で治してしまった。

「……縁があれば、またいずれ」

ーーザアッ。

言葉と共に、風が流れた。瞬きは一瞬。その一瞬で、テンリュウは

消えてしまった。
カグラは、ふぅ、と息を吐く。
「……やれやれだな。どいつもこいつも、過去に囚われやがって……」
カグラは、小さく呟いた。
その呟きは、どこにも届かなかった。

◇　◇　◇

「よう、響。見てたぜ」
「ん？　優夜か。負けたけどな」
「謙遜すんなよ。大活躍だっただろ？」
そう言って笑うのは、有栖優夜。響たち幼なじみグループの一人であり、煌と同じ部隊の隊員である。
「あれ？　瑞希と雪奈は？」
奏が、優夜一人であることに首を傾げる。優夜は、ああ、と頷いた。
「あの二人は煌のとこ。なんか落ち込んでるみたいだしな」
「まあ、あんだけ見事に負ければそうなるか」
「相手を侮ってたっていうのもあると思うけど……」
響と奏、それぞれが言い、優夜は肩を竦めた。
「俺たちは仕事で出られなかったわけだが、どうだった？」

「どうもこうも、あそこまで見事にやられたのは中々経験にない」
「響と二人がかりで負けるなんて思ってなかったよ……」
二人は苦笑する。優夜が、そうか、と頷いた時、その背後から手が伸びてきた。
「よ～う。お疲れさんだな、二人とも」
優夜の頭を掴みながら現れたのは、カグラだ。それを見て居住まいを正そうとする響と奏だったが、それをカグラが押し留めた。
「いいって。無礼講だ。暗黙のルールだよ」
「ありがとうございます」
「堅いねぇ。まあいいけど。……聞きたいこと、あるんじゃねぇか？」
「……何者、ですか？」
あの人は、と、響は聞いた。カグラは、んー、と考えるように唸ってから、言葉を紡ぐ。
「古い知り合いでな。最強に最も近いとかそういうんじゃなく、純粋に世界最強の存在だよ。あれを最強と疑う奴はいない。最強の定義を知ってるか？　『最強を名乗り、誰にもそれを否定させないこと』だよ。あれにはそれができる」
「……」
響は沈黙する。そんな響に、つか凄ぇなお前、とカグラは言葉を紡いだ。
「隣に女がいるのに、出会った女について聞くなんて。プレイボー

イめ」
「いっ！？」
「……響、そうなの？」

ゆらぁり、という擬音が聞こえた気がした。奏の手に握られているのは、二丁のライフル。

「いやいやいや！！　ない！！　ないってば！！」
「問答無用！！」

追いかけっこ、スタート。それを見ながら、カグラは笑う。

「あっはっは、若いってのはいいねぇ」
「あんたわかっててやったな？」
「ケンカは祭の華だろう？」

くっくっく、とカグラは笑い。
ふぅ、と優夜は溜め息を吐いた。

◇　◇　◇

「いやー、しかしあれですね、叶望さん」
「あ、震離でいいよ？」
「んじゃ震離さん。……マジで似合いますね」
「でしょ！？」

キャイキャイと、二人は騒ぐ。その二人に挟まれ、ゴスロリ服の裾を掴んで俯くのは、風鈴流。

女性と間違われることに対してはかなり寛容になってきたが、流石に女性ものの服を着せられることについてはその限りではない。
ちなみにその恥ずかしがる仕草が二人のテンションを更に上げていることに、流は気付いていない。
しかし、そんな流にも救いの手が。

「お二人とも、調子に乗り過ぎです」

リューイのユニゾンデバイスであるミリアムが、溜め息と共にそう言葉を紡ぐ。
そうして彼女が手を差し伸べると、流は上目遣いにミリアムを見た。

「あ、ありがとうございます」

パキンと、ミリアムの中で何かが砕ける。
そして。

「ミリアムさん!?」
「……すみません。それは反則です」

鼻を押さえ、流に背を向けながらミリアムは言った。
救いの手は、容易に敵となる。

「……」

流は最早自分自身で状況打破をしなければならないと判断。スカートの裾を持つと、走り出そうと立ち上がる。しかし。

「震離さん、他に服のラインナップは?」
「ナース服に浴衣に、学生服。メイドもあるよ?」

『素晴らしい』

流の視界には、二人の魔導師がいた。
片や、Ｓランクの力を有する特別捜査官。
片や、ユニゾンデバイスを有し、炎熱の変換資質を有するニアＳランク魔導師。
正に絶体絶命だった。

◇　◇　◇

宴会場の喧騒から遠ざかった、屋外の一角。静かな風が吹くその場所に、ファイムは佇んでいた。
たった一人で。
拒絶したわけではない。
ただ、独りきりだった。

「混ざらねぇのか？」

そのファイムに、声がかけられた。ファイムが振り返ると、そこにはカグラが立っていた。

「嬢ちゃんたちが探してたぞ？」
「まさか。十年来のご友人ですよ？」

僕の入る余地などありません。ファイムは、そう言った。

「そういえば、あの騒ぎはカグラさんが？」
「一つは俺だが、もう一つは知らん。まあ、祭だ。好きにしたらい

い」
「理事会からは何も？」
「無視した」

清々しいまでに言い切るカグラ。ファイムは、全く、と呟いた。
沈黙。
数秒のそれが流れた後、カグラが言葉を紡いだ。

「なあ、ファイムよ。レジアスがいなくなって、お前は表舞台に立てるようになった。『緑風事件』に派遣されたのもそうだ。もう、命を使うなんてことしなくてもいいんじゃねぇか？」
「カグラさんもでしょう？　楠舞煌さん……いくらあなたでも、そのままで勝てる相手ではありません。……使ったのでしょう？」
「若い奴を成長させるためだ。後悔はねぇよ。たまに使うくらいなら問題もねぇしな」

カグラは言う。ファイムは、それでも、と呟いた。

「戻ることはできません」
「後悔は？」
「ありません」

即答。カグラは、そうか、と頷いた。
ファイムは、喧騒から更に離れていく。
その途中で、はやてたちがいるであろう場所を、ファイムは見た。

「すでに終わっていたはずの人生。……未練など」

その呟きは、まるで泣いているようだった。

間章　大乱闘、散りゆくは　後編（後書き）

まずは、ｋｙｏｎｓｉ先生に御礼を。今回、本当にありがとうございました。
無理な申し出を受けていただき、本当に感謝しています。

コラボという形ではありますが、現代に繋がるように書いたつもりです。

では、次回からは再び本編に戻ります。
ありがとうございました。

次回予告

突き付けられる現実。
変わってしまった自分は、選ばなければならない。
誰のために。
何のために。
その選択は、終わりが視えた未来への過程。

次回、第十三話
「避けられぬ運命の果てに」

第十三話　避けられぬ運命の果てに

「同志のおかげで、かなり実現まで近付いた」
「ああ、あのスパイの？」
「左様。必要な駒は揃いつつある」
「……後どんくらいかかる？」
「そうだな……数ヶ月、といったところか？」
「意外とかかるな」
「なに、『あれ』が見つかればもう少し早くなる。それに、実現がために十年以上待ったキミたちだ。今更、数ヶ月を待てない道理はないだろう？」
「そらま、せやな」
「なに、実現はすぐだ。私の悲願も遂に果たされる」
「わしらの仕事は？」
「露払いだ。核兵器を使えば今すぐにでも世界を制圧できるだろうが、私は敢えてそれをしまい」
「ほう、そらまたどうしてや？」
「一度使ったのは、力を思い知らしめるためだ。人は慣れるのだよ、同志。何度も使えば、人は恐怖よりも怒りと憎悪を感じるようになる。そうなれば待っているのは反逆だ。私は世界を支配するつもりではないとはいえ……それは望ましくない」
「だから、あくまで核兵器は言うこと聞かせるための脅しとして使うゆーわけか？」
「素晴らしい。流石だ、同志。人は恐怖と飢餓には勝てん。核兵器という恐怖の他に『あれ』が現れれば、人の心など容易く折れる」
「了解。露払いゆーと、あれか？　わしは機動六課でも潰せばええんか？」
「いや、必要ない。彼らの頭は動けない。ならば精々、動けぬことを苦しんでもらおう。彼らは組織の一員。我らが手を出さねば、動

くことさえ許されんよ」
「……了解や。ほな、適当にどこぞの部隊でも潰せばええか？」
「ああ、頼む。……そうだ。丁度、同志が興味を持っていた部隊があるな」
「ん？　資料？　ああ、グリスか。……ふーん、こらまた」
「部隊長はゲンヤ・ナカジマというらしい。優秀な人物らしいな。そして、優秀な指揮官の下には優秀な部下が集まるのが道理だ。ＡＡ＋ランクで前線に立つ魔導師など、地上にはそういないのではないか？」
「おらんね。まず。……成程、リューイ・エンドブロムとミリアム・エンドブロム。ギンガ・ナカジマ……地上では最強の戦力がおるなぁ」
「おや、強敵だというのに表情が優れないようだが？」
「阿呆。わしゃあテンリュウやらリヴァイアスやらギレンみたいなバトルマニアやない。強い奴と戦わんで済むならそれが一番や」
「ふむ。しかし、それだけではないようだが。知り合いかね、この一一陸士１０８部隊の部隊長は？」
「まさか」

「知らんよ、魔力ゼロで前線に出てくるような阿呆なんてな」

◇　◇　◇

一一生きてる。
最初に思ったのは、それだった。流石に帰ってこれないことを覚悟していたのだが。
ファイムは、自分の右手を見た。魔力封印が施され、自分は今、魔

法が使えない。
だが。
……キィン。
掌の上に、魔法陣が出現した。その形状はミッド式のものに似ているが、僅かに違う。

「……」

ファイムは魔法陣を消し去ると、ふぅ、と息を吐いた。そこへ、ノックの音が響く。
ーーコンコン。
どうぞ、とファイムが言葉を紡ぐと、入ってきたのはカグラだった。その手には、束ねられた資料がある。

「目ェ覚ましたらしいな」
「お陰様で」
「俺ぁ何もしてねぇよ。医療部の奴らに礼は言いな」

椅子に座りながら言うカグラ。ファイムは、いいえ、と首を左右に振った。

「あの時は、ありがとうございました」
「手を振り払った奴の言葉じゃねぇな」
「それでも、嬉しかったのは事実です」

ファイムは微笑む。カグラは、変わったな、と言葉を紡いだ。

「昔のお前は、生きたいだの嬉しいだの幸せだの……そういう、プラスなことは何一つ言わなかった。変えたのは誰だ？」
「はやてさん、だと思います」

「そうか、嬢ちゃんか。……感謝しろよ？」
「無論です。一生かけても返せぬ恩を頂きました」
「そうか」

ー一静寂。
静かな沈黙が流れ、それを、意を決したようにカグラが打ち破る。

「言うかどうか、相当悩んだ。やめたほうがいいんじゃねぇか、とも何度も思った」
「……」
「だが、隠す方が残酷だ。それに……今のお前になら、話してもいいだろうと俺は思う」

バサッ、と、カグラはファイムの目の前に紙の束を投げ渡した。そうしてからカグラは、言葉を紡ぐ。

「今回、お前の体について調べさせた。その結果だ」
「……それで？」
「ぼかしても仕方ねぇ。単刀直入に言うぞ」

カグラは、真剣な目でファイムを射抜いた。

「お前の命は、後十年で尽きる」

……衝撃は、こなかった。
ただ、なんとなく、ファイムは思った。
成程、と。
そんなものなのだろうな、と。

「それも、あくまでこれ以上魔法を使わなければの話だ。今のペースで命を使い続ければ、2、3年保つかも怪しい」
「……細胞の老衰化と、リンカーコアの異常消耗。治す手段は……『無し』、ですか」
パラパラと自身の体の状態を事細かに記した紙を捲りながら、冷静にファイムは呟く。カグラは、そんなファイムに言葉を紡いだ。
「驚かねぇんだな」
「驚く理由がありません。自分で選んだ道です。それに、このまま戦い続けても2、3年は生きられるのでしょう？　存外、生きられる」
死の宣告を受け、それでもファイムは言い切った。
僅かな時を、『十分』と。
カグラは、そうか、と言葉を紡ぐ。
「三年前からお前は随分変わったが……それでもまだ、『そのまま』なんだな」
「三年前にも言ったはずですよ。やめるわけにはいかない、と」
「頑固だな、お前。未練とかねぇのか？」
「……未練など」
ファイムは、首を左右に振った。そうかい、とカグラは頷く。
「……お前なら気付いてると思うが、三年前の模擬戦は、管理局のためにやったことだ。今まで現場を引っ張ってきた奴は、どんどん後方に下げられちまう。俺だってそうだ。前線にいても、最前線にはいられねぇ」

「だから、ハラオウン提督を焚き付けたんですよね？」
「不安だったんでな。俺を含め、どんどん優秀な奴は後方に下がっちまう。それなのに、次世代の奴らに教えられたことは精々が半分とちょっと。だから、『いっちょ揉んでやろう』ってな」
火を点けず、タバコをカグラはくわえる。
「それでも、間に合わねぇ部分が多い。だから、ファイムよ」
カグラは、どこか寂しそうな目で、ファイムを見た。
「お前が受け入れてんなら、是非もねぇよ。ー管理局のために、死んでくれ」
「それが償いに、なるのなら」
ファイムは、頷いた。
バタンと、扉が閉まる。ファイムは、一人病室に残された。
何の気なしに、ファイムは自身に死の宣告を下した結果を記す紙に目を通す。
目に映るのは、絶望の結果だけ。
細胞の死滅。
リンカーコアの消耗。
内臓器官の衰弱。
表面に現れていないだけで、体の中はボロボロ。その事実は、たった一つの真実だけを告げていた。
“お前は死ぬ”
そんな、避けようのない未来という真実だけを。

ーーポタッ。

紙の上に、雫が落ちた。ファイムは、自分の体を抱き締める。
震える体を。
涙を流す体を。

「なんで？　どうして？　選んだ道なのに。覚悟していたことなのに」

今、ファイムの手元には彼が家族と言うデバイス『リンネクロウズ』はない。
だから、誰も答えてくれない。
一人で、考えなければならない。

「どうして僕は、恐れてるんだ？」

自らそこへと突き進んでおきながら。
身勝手にも、死にたくないと思っている。
生きたいと、思っている。

「あんなことを言っておいて。覚悟しているなんて言っておいて」

『選んだ道ですから』
『後悔などありません』
『生きたいと思って生きられるなら、こんなことになっていません』

口にしてきた数々の言葉は嘘ではない。少なくとも、その言葉を吐いた時、それは全て真実だった。
死んでも構わないと、そうあるべきと、ずっとそうやって生きてき

たのに。
何故、今になって。
ファイム・ララウェイは、死を恐れる？
死など、受け入れたはずではないか。
今更、罪人が何を考えている？

「……死にたくない」

絞り出したその言葉は、真実だった。
死にたくない。
生きていたい。
独りきりになった今、ずっと封じ込めていた想いが溢れ出してきた。
いっそ、知らぬまま死ねたら良かったのかもしれない。
戦場で、限界を迎えて、そうして死ねたら良かったのかもしれない。
そうであったら、受け入れることもできただろう。
だが、今のファイムは、明確なカウントダウンが始まってしまっている。
死。
終焉。
終端。
死後の世界など、ファイムは信じていない。人は死ねば終わりだ。
その手を汚してきたファイムだからこそ、それが実感できる。
そして、人は簡単に死んでしまう。
死なない、なんてことはありえない。
人は……死ぬ。
あっさりと。
簡単に。
あまりにも、一瞬で。
理由など単純だ。
生きているから。

簡単に生まれるから、簡単に死ぬ。
生まれていくから、死んでいく。

「……知らなかったなぁ……」

ファイムは、呟いた。

「弱いとは知ってたけど。情けないとはわかっていたけど。弱者だとは、自覚してたけど」

ファイムは膝を抱え、顔を隠すようにそこに埋める。

「僕は、こんなにも弱かったんだ」

自分の死を、受け入れられぬ程に。

◇　◇　◇

「カグラさん」

ファイムの病室のすぐ前で壁に背を預けていたカグラに、声がかかった。閉じていた瞳をカグラが開けると、そこにいたのは高町なのはを筆頭とした機動六課の面々。更にリューイやユーノまでいる。ただ、八神はやての姿はなかったが。

「よう、嬢ちゃんたち。仕事はいいのか？」

「……六課は、一週間の活動停止です」

「そういやそうだったな」

結局吸わなかったタバコを、携帯灰皿へ捨てる。
実力云々はともかく、立場上は六課の？2であるファイムが『あんなこと』をしでかしたのだ。処分が下されるのも当然である。
それを、カグラ自身が彼らに告げたという事実もまた、ここにある。

「嬢ちゃんたちが何しにきたか、わかるぜ？　ファイムだろ？」

カグラは親指でファイムの病室を指差す。みなが一様に頷いた。
そして、一団からフェイトが進み出ると、カグラさん、と言葉を紡いだ。

「ファイムは間違ってない。間違ってなんかない。人を助けることが、間違ってるはずがないんです」
「んなこたぁ、誰だって知ってる。あいつは手段を間違えたんだよ。人を救うにも、手段がある。笑えるだろ？　人を救うには、手段を『選ぶ』必要があるんだよ」
「……それは、どういう意味ですか？」

フェイトが食い下がる。カグラは、大体な、と言葉を紡いだ。

「お前ら、今年で入局何年目だ？　一年、二年の新人じゃねぇだろ？　まさか、『管理局は正義である』なんて戯言本気で信じてるとか言わねぇよな？」

皆、一様に押し黙る。その沈黙の中には、困惑があった。
カグラは、ちっ、と舌打ちする。

（純粋だ純粋だって思ってたが、まさか本気で戯言信じてたとはな。……いや、原因は俺にもあるか）

知らずに済むなら、それが一番いい。
そうやって、彼女たちを、未来ある若い局員たちを『そういうもの』から遠ざけるようにしていた。
肥大化し、力を持つようになった組織というものは、簡単に『魔窟』となり果てる。
権力闘争などいつもだし、他人を蹴落とすなど日常茶飯事だ。
その裏で誰かが死んでいくのもまた、『普通』である。
ーーもう、いいだろう。
カグラは、そう思った。
昔。ホムラが管理局から出て行く少し前、彼女たちに問いかけたことがある。
あの時の純粋な気持ちを、ずっと抱き続けてきたのだろう。
だから、もういい。
もう、彼女たちは守られるような存在ではない。
それに。

「……いい加減、疲れてきたしな」

呟きは、カグラ以外には届かなかった。カグラは、さて、と言葉を紡ぐ。

「今の管理局では、『正論』も『正義』も力を持たねぇ。持つのは『利害』という言葉だけだ。設立してから９０年……組織が腐るには十分過ぎる時間だわな」
「……」
みな一様に押し黙る。カグラは、まあ、と息を吐いた。
「創始者でさえも腐り始めてんだ。崩壊は免れねぇよ」

カグラは、ついてこい、と一同に言葉を紡いだ。

「ファイムのとこに来たのは、はやての嬢ちゃんのことだろ？　悪いが、少し待て」

「何故ですか？」

声を上げたのは、シャマルだ。カグラは嘆息する。

「……12年。そんな時間、俺は少しずつすり減っていくあいつを見てきた。流石に、情も移るもんでな。歳の離れた弟みたいなもんだよ」

というより、親近感が生まれたのだろう。

償いのために命を使い続けるファイムと。

喪った人の生き様を無駄にせぬ為に、抗い続ける自分。

無意味と知りながらも、戦う二人。

似ていた、のだろう。

それ故に。

あれほどまでに、ファイムという青年を変えようとした。

彼が変われば、自らも変わっていけるーーそんな、戯言を信じていたから。

でも。

「そんな俺でも、初めてなんだよ。あれほどまでに弱ったファイムを見るのは。だから、そっとしておいてやってくれ。その代わりーー」

カグラは、どこか諦めたような目で、こう言った。

「教えてやるよ。管理局が、ファイム・ララウェイという人間に何をさせてきたのか。あいつは、何を支払ってきたのか」

そろそろ、決断せねばならない。
何も変わらぬ世界で生きてきたからこそ。
自分が、どうすべきなのか。
俺自身も。
彼女たちも。
ーーあいつ自身も。

◇　◇　◇

空間を支配したのは、沈黙だった。
カグラ・ランバードが語ったのは、監視役として彼を見続けてきた彼が語る事実。

「管理局に拾われる前、奴は第６２管理世界『セグリメ』にいた。……１０年前に消えた世界だな」
「『セグリメ』って、確か……」
「そうだ、フェイトの嬢ちゃん。『セグリメ』は年がら年中戦争を繰り返してた世界だ。そう……管理局とな」

よくある話である。管理局の干渉を、誰もが受け入れるわけではない。反発する者も当然出てくる。

「『セグリメ』との戦争は、かなり無茶苦茶な状況までもつれた。『セグリメ』の奴らは頑なに負けることを拒み、結果、培養器で生み出した『子供』を戦争に投入してきた」

「培養って、まさか」
「そうだ。『プロジェクトF』……もっとも、完成度はかなり低かったけどな。１０人造って１人成功すりゃ御の字ってとこだ。……ファイムは、その時に生み出された子供の一人だよ。あいつは、不完全な人造魔導師として生み出された」

全員が絶句する。特にフェイトとエリオは、言葉を失っていた。

「まあ、つっても体機能は特に問題なくてな。普通に生きりゃ、普通の寿命を迎えられるレベルだった。だが……あいつは兵士だ。人殺しの術を叩き込まれ、その上で人を殺してきた。まあ、それも長くは続かず、地雷で手足を吹き飛ばされてな。それを拾って実験に利用したのが、ジェイル・スカリエッティだ」

右腕と、右足。戦闘機人の技術は、『アンリミテッド・デザイア』によって付与された。

「だが、あいつはそこから逃げ出した。けどま、相手が相手だ。簡単に逃げ出せるわけがねぇ。瀕死の重傷を負わされてな。それを拾ったのが俺だった」

それ故に、カグラはファイムと関わりを深くすることとなる。
上層部との繋がりも、また。

「それからだよ。あいつは、管理局のために命を懸け続けた。多くの部隊を転々としながら、それこそ『誰か』を救い続けた。償い、って言いながらな」
「それじゃあ、ファイムくんは……」

なのはが悲痛な声を上げる。カグラは、ああ、と頷いた。

「あいつの理由は、戦争で人を殺したことに対する償いだよ。……この世界に、『正義』も『悪』もありゃしねぇ。あるのは『善意』と『悪意』と『結果』だけ。だからこそ、管理局は正義じゃない」

だというのに。

管理局は正義だと思わせるために、ファイム・ララウェイという男は戦ってきた。

何という矛盾。

そして、欺瞞。

彼を罪人と呼ぶならば。

何もしなかった者こそ、彼を見て見ぬ振りをし続けてきた管理局こそが、罪人だ。

「大分飛ばして話したが、これが奴の生きてきた道だよ。騎士シグナムは知ってたんじゃねぇのか？」

「……私と主はやては、戦争については聞き及んでいました。しかし、それ以上は……」

「成程。……正直な、俺は驚いたんだよ」

カグラは、そこでこの話が始まって初めて、苦笑を浮かべた。

「八神はやて……あの嬢ちゃんを救うために管理局を敵に回したって聞いた時は、本当に驚いた。それがあいつの正義だったのかもしれん。だが、奴は初めて、逆らったんだよ。１２年、たったの一度もなかったのに」

管理局のために。そうしてファイムは生きてきた。

八神はやてを救い出した時も、どこかに『管理局のため』という気持ちはあったのだろう。

だが、カグラはそう思わなかった。
だって、ファイムは言ったから。
ーー『滅んでしまえばいい』。
管理局を、否定したから。

「その代償として、あいつは今、『ああ』なってる。それでもお前らは、あいつを頼るのか？」
「ーーそれしか、我らには道がない」

カグラのその問いかけに応じたのは、シグナムだった。

「情けなく、恥とも思う。しかし、我らの言葉は主はやてに届かんのだ。言葉を届けられるのは、きっとラウェイしかいない」
「けど、シグナム」
「ヴィータ。私たちは誰の騎士だ？」

シグナムは、躊躇を見せたヴィータに、そう問いかけた。ヴィータは、はやての騎士だ、と答える。シグナムは頷いた。

「主はやてのためならば。鬼と呼ばれようと外道と呼ばれようと構わん。あの方の笑顔を取り戻せるならば……」

シグナムは一度目を閉じ、ギュッ、と拳を握り締めた。
何かを、堪えるように。

「ラウェイに更なる負担をかけることになろうと、私はそれを厭わん」
「……生粋の騎士だな、お前さんはよ」
「騎士の誇りなど捨てています。私が戦うのは、家族のため。それだけです」

いっそ清々しい。カグラは、了解、と頷いた。

「そこまで腹括ってんなら、俺が言うことは何もねぇ」

そう言って、カグラは出て行った。

沈黙が、場を支配する。

◇　◇　◇

「シグナム、本気？」

「何がだ、テスタロッサ」

フェイトの問いかけに、シグナムは足を止めて応じた。フェイトは、グッ、と拳を握り締める。

「もしかしたら、はやてはもう二度と戻ってこないかもしれないんですよ？」

「それが主はやての選んだ道ならば、是非もない。ララウェイならば、主はやてを託すことができる」

「でも……」

「良いのだ、テスタロッサ。我らは主はやての幸福のみを望んでいる。そのためならば、どのような代償であっても支払うさ」

シグナムは言い切る。だが、フェイトは首を横に振った。

「信じない。そんな、泣きそうな顔で言ってることを、誰が信じるもんか」

フェイトの言葉。シグナムは、体を震わせた。

「……納得など、できるわけがなかろう。主はやてがおられなくなるかもしれぬことを、納得などできるはずがない」

「だったら、どうして」

「もう道はないのだ！」

シグナムは、怒気と、悲哀を込めた叫びを口にした。

「我らは主はやてと常に共にあった。あり続けてきたつもりだった。主はやてが支えてくれたように、我らも主はやてを支えているものと信じて疑わなかった。だが、現実は……我らは、何もできんのだ」

シグナムは、体を震わせる。

「我らの言葉は、主はやてに届かない」

「シグナム……」

「我らは、愚かな騎士なのだ」

◇　◇　◇

覚悟のようなものは、まだ、定まっていなかった。

泣くだけ泣いたなら、自分にできることを探す。

かつて、自らが告げたその言葉を、今、自らにファイムは課していた。

ただ、できることはわからなかったが。

ーーコンコン。

ノックの音が聞こえた。どうぞ、とファイムが声をかけると、一人の女性が入ってきた。
八神シグナム。
ファイムの目から見ても、あまりにも真っ直ぐな騎士だ。

「体はどうだ、ララウェイ」
「お陰様で、調子はいいです」
「何よりだ。本来ならば全員で来るつもりだったのだがな。できなかった。許せ」
「いいですよ。迷惑をかけてしまいますし」

ファイムは苦笑。シグナムは、そうか、とだけ頷いた。
沈黙が流れる。
ファイムは、いいですよ、と言葉を紡いだ。

「一人で来られたのは、何か、話があるからでしょう？」
「……ランバード一佐から、お前の過去について聞いた」
「それはまた」

ファイムは苦笑。特に大した半生ではない。誇る程のことでもない。

「お前の半生については、私は言葉を持ち合わせていない」
「必要ありませんよ」

ファイムは、窓の外を眺めながらそう言った。

「僕の過去など、知りたければニュースでも見ればいい程度のものです。同情されるほどのことでもありません」

「そうだな。同情はお前への侮辱だ。……ララウェイ。私は、お前が今、力を失っているという事実を知りながらも、敢えてお前に頼みたい」
「何ですか？」
ファイムが問いかけると、シグナムは、ファイムに頭を下げた。
「主はやてを、救ってくれ。我らの言葉は、主はやてに届かない」
「シグナムさんたちの言葉が届かないなら、僕の言葉も届きませんよ、きっと」
「かもしれん。だが、主はやてを闇から救い出したお前ならあるいは届くかもしれん」
シグナムは、絞り出すようにそう言った。
そこに込められていたのは、純粋な懇願。
やはり、流石は八神はやてを守る騎士。主のことを、誰よりも考えている。
ファイムは、しかし、と、シグナムの真摯な言葉を聞いたからこそ、真剣に応じた。
「ただ言葉を届けただけでは、きっと、届きません。それに、言いたくありませんが……」
「わかっている。主はやてが戦いを望まぬのなら、我々はそれを受け入れる。あの方は我らの幸福に心をいつも砕いてくださる方だ。だからこそ……主はやてには、御身の幸福を考えて欲しい」
ファイムはベッドから降りると、シグナムを真っ直ぐに見つめた。
「僕は、罪人です」
「知っている」

「ここにも、いられない」
「知っている」
「あなたたちのように、力もない」
「知っている」

シグナムは、敢えてそこを肯定した。
ファイム・ララウェイが弱いとは思わない。しかし、冷静に見て、シグナムたちより強いとは思えない。
だからこそ。

「それでも貴様に頼みたい。貴様にしか、できんのだ」
「買い被りです」
「買い被りなものか。お前は、ずっと一人で戦ってきたのだろう？その境遇に同情などしない。だが、だからこそ『お前も』休むべきだ。今は我らがいる。主はやてと共に、休むんだ」

シグナムは、力強い言葉を紡いだ。ファイムは、何故、と言葉を紡ぐ。

「どうして、僕なんかに」
「刃を交わせば、ある程度その者の性質はわかるものだ。お前は主はやてのために、ロストロギアを持ち出した。世界に背を向けてまで主はやてを想ってくれた。大切な主を預けるのに、お前以上のーファイム・ララウェイ以上の男はいない」

あまりにも重いものが、肩に乗った気がした。
ファイムは、しかし、それを全て受け止め、背負う。
目の前の、あまりにも強い騎士に報いるために。
大切な、人のために。

「ありがとう、ございます」
「行け、ララウェイ」

シグナムは、ファイムの背を叩いた。
ファイムは、はい、と頷いた。

「一つだけ、聞かせてくれ」
「何でしょう？」
「お前は以前、主はやてに死ぬことさえも受け入れていると言ったらしいが。……お前は、この世界に未練がないのか？」
「ない、と以前の僕なら答えていましたが……今は、あります。生きたいと、死にたくないと思っています」

ファイムは、微笑んだ。

「もう、手遅れなのに。……シグナムさん。僕は、弱くなったんでしょうか？」
「馬鹿だ、貴様は」
「……はやてさんにも、似たようなことを言われました」

あの時は、『知っています』と答えたのだったか。
シグナムは、お前は弱くなどなっていないと、そう言った。

「それを、『強くなった』と人は言うのだ」
「……だったら、いいですね」

ファイムは、微笑んでいた。
微笑み、続けていた。

◇　◇　◇

「相手が沈黙してんのが不気味だな」
「そう、ですね」

機動六課を臨時で取り仕切ることになったカグラの呟きに、隣に立つフェイトが応じる。二人は今、地上にあるカグラの部屋にいる。

「このネットに流されてる映像も気になるし」
「ファイム……ですよね？」
「間違いなく、な。他は隠してんのに、ファイムだけは隠す気がねぇみてぇだ。……どういうつもりだ？」

カグラは眉をひそめる。フェイトは、なんにせよ、と呟いた。

「はやての艦である『ヴォルフラム』も、取り上げられました」
「無能な上層部ってのは、これだから困る」
「……」

フェイトは、窓から外を見た。

「ファイムの謹慎期間は……二カ月、ですよね」
「大分減らしたんだがな。ま、それまでには本部も元に戻ってんだろ。あいつらは少し、休ませねぇとな」

言いながら、カグラは感じていた。
きっとあの二人は、すぐに呼び戻される。

その時、自分は……。

「考えても仕方ねぇか」

「何をですか？」

「いんや、何でも？」

カグラは、肩を竦めてそう言った。

◇　◇　◇

月明かりが病室に差し込む中で。

その人は、ベッドの上にいた。

「はやてさん」

ビクッ、と、はやての肩が震えた。はやてはおそるおそる振り返り、ファイムを見つける。

ファイムくん、と、はやては呟いた。

ファイムは頷くと、はやての側へと歩いていく。そして、問いかけた。

「体は、大丈夫ですか？」

「それを言うたら、ファイムくんは……」

「僕なら大丈夫です。魔力も封じられてますから、日常生活には問題ありません」

もっとも、寿命の宣告は受けたが。

はやては、そっか、と、それならよかった、と、泣きそうな顔で言

った。
ファイムは、悩み、そして、選択する。

「はやてさん」

ー卑怯者、と、ファイムは自分自身を内心で罵った。
今から、自分は。
傲慢にも、はやてに委ねようとしている。
自分ではもう、決められなくなってしまった、命の使い方を。

「一緒に、行きませんか？」

ファイムは、はやての手を引いた。
はやては、えっ、と、疑問符を浮かべる。ファイムは、はい、と頷いた。

「僕は、ここからしばらく離れなければなりません。はやてさんも、共に行きませんか？」
「……わたしは、でも……」
「大丈夫。あなたには、心強い味方がたくさんいる。みんなが、あなたを送り出す準備は整えている」

ファイムは、はやての手を引き、その体を抱き上げた。

「強引ですみません。ですが、頼まれたので」

これまで、ファイム・ララウェイの背を押してくれた者は、一人。
八神シグナム。
大切な主を、託してくれた人。
手を引いてくれた者は、二人。

カグラ・ランバード。
償いをすると決めたファイムの行く道を、選択肢を示してくれた。
そして、もう一人。
八神はやて。
いつだって彼女は笑っていて、笑いかけてくれて。
だから、大切だと思ったんだ。

「行きましょう。あなたが魔法に出会った場所へ」

はやてを立たせ、ファイムはその手を握り締める。
初めて自ら手を引いた相手の手は弱々しく、柔らかかった。

「“海鳴”へ」

第十三話　避けられぬ運命の果てに（後書き）

ファイム・ララウェイは、人間です。
聖人でも悪魔でも神でもなく、ただの人間です。
昔、私の祖父は「死んでも満足」というのが口癖でしたが、いざ入院すると、一度だけ、ぽつりと呟きました。
「怖い」
やはり、どんな人でも死ぬというのは恐怖です。ファイムも、明確な終わりが見えたことで恐怖を感じたのでしょう。

このくだりは、この作品を考えた時に最初に浮かんだシーンです。
二人は恋人同士でもなく、友人同士とも呼びがたく、しかし、ただの上司と部下でもない。
互いに罪に押し潰されそうになりながら、二人は歩んでいきます。
感想など頂けると、とても喜びます。
では、次回予告を。

次回予告

始まりの場所に舞い戻ったはやて。
翼を奪われ、追放に等しい形でそこに来たファイム。
二人はそこで、様々な想いと気持ちに出会っていく。
そして、二人は。
選択を、迫られる。

「あなたが望んでくれるのならば、僕はいつまでも側にいる」

次回、第十四話
「二人きりの世界」

第十四話　二人きりの世界

第９７管理外世界『地球』。
魔法文明は存在せず、代わりに高度な科学文明が世界を覆っている。
基本的にこの世界に住む者は魔力ゼロであるのだが、極稀に生まれてくる魔力持ちはほぼ例外なく凄まじい力を有しているという特徴があった。
そんな世界の、『海鳴』と呼ばれる街に、ファイムとはやては降り立つ。

「ここが、はやてさんの育った場所ですか」
「うん。……ここ数年は、来れてへんかったけど」
「いい所ですね。空気が優しい」

ファイムは微笑む。海から流れてくる潮風が気持ちよく、どこか優しい。
きっと、この空気はここに住む人たちが作り上げたものだろう。
……心地良い。

「参りましょうか。荷物、お持ちしますよ」

はやての荷物が入ったスーツケースを、ファイムは手に取る。さすがに女性。荷物が多い。
ちなみにファイムははやての荷物の半分以下の荷物、それこそ必要最低限のものしか持ってきていない。

「あ、ありがとうな。……それと、ファイムくん」
「なんでしょうか？」
「……今のわたしは、『機動六課部隊長八神はやて』やない。ただ

の『八神はやて』や。敬語は、いらんよ」

どこか自虐的なその言葉。ファイムは、頷く。

「うん、わかったよ。はやてさん」

「……なんか、違和感あるね」

「それは、仕方ないよ。いつも敬語だから」

ファイムは笑い、はやても微笑む。

ただ、どことなく。

どことなく、雰囲気に違和感があった。

◇　◇　◇

「宿って、ここなん？」

「エイミィさんに協力してもらって。……ええと、ダメだったかな？」

「ううん。懐かしいな、って思っただけやよ」

そう言って、はやては頭を振った。目の前にあるのは、かつてはやてが住んでいた場所。

守護騎士たちと出会い、過ごした家だった。

「勝手知ったる我が家、ってわけじゃないけど……知らないところよりは、って思って」

「うん。ありがとう」

「どういたしまして」

違和感。明確にはわからないそれを二人は感じながら、しかし、無視していた。

「荷物を置いてから、どこに行く？」

「せやなぁ……久し振りやから、行きたいとこはいっぱい……ああ、あそこがええかな？」

それぞれが寝泊まりする部屋に荷物を置きながら、はやてはそう言った。

「ファイムくん、甘いの大丈夫やんな？」

「むしろ大好きだけど……」

「凄い美味しいお店があってなぁ。折角やし、そこに行こ？」

はやては、ファイムの手を引く。

「喫茶『翠屋』。ミッド地上でも中々お目にかかれへん、凄いお店や」

◇　◇　◇

一言で言うと、はやての言葉は何一つ間違っていなかった。

……美味しい。

素直に、そんな言葉が漏れた。なんだろう。ここまで美味しいものは食べたことがない。

ただ……。

「高町って……」

「うん。なのはちゃんの実家やよ？　正確には、ご両親がやってるんやけど」
「成程」

ファイムは納得しながら、ケーキを口に入れる。
……凄く美味しい。
それが伝わったのだろう。はやては、ふふっ、と微笑むと、ケーキの一欠片をファイムに差し出した。

「はい、あーん」
「……はやてさん？」
「ええやん、少しくらい」

笑っているが、笑顔に少し、悪戯っぽいものが混ざっていた。
ファイムは、全く、と言いながら逆らわない。

「美味しい？」
「はい……じゃなくて、うん。美味しい」
「あはは、敬語、抜けてないんやね？」
「敬語の方が使うので、どうしても……」

ファイムは苦笑する。はやては、じゃあ、と言葉を紡いだ。

「ファイムくんが敬語を使わない相手って、誰なん？」
「ええと、リューイとミリアムとエリオとキャロ……くらいかな？」
「……少ないね」
「……言ってて僕もそう思った」

ファイムは頷く。それなりに話す相手はいるが、みんな敬語で話してしまう。なんと寂しい。

そんな風にファイムが自己分析していると、せやけど、とはやてが言葉を紡いだ。

「今は、わたしも敬語やないね」

「……うん。その通りだ」

ファイムは微笑む。微笑みながら、思う。

ーーやはり、違う。

いつもの彼女とは、決定的に何かが違う。

そんな風に、ファイムが内心で呟いた時。

ーーカランコロン。

来店を示す音が響き渡った。ファイムがなんとなしにそちらを見ると、はやてが、あっ、と言葉を漏らした。

店内に入ってきたのは、二人の女性。

一人は金髪の快活な印象の女性で、もう一人は青い髪の大人しそうな女性だ。

その二人も、はやてを見て、あっ、と声を上げる。

「はやて？」

「はやてちゃん？」

二人は驚いた表情で、こちらへ歩いてくる。はやては、久し振りや、と立ち上がった。

「電話では話してたけど、こうして会うんは久し振りやね。二人とも、元気にしてた？」

「勿論よ。まあ、仕事は忙しいけど……」

「はやてちゃんこそ、元気にしてた？」

女性陣が盛り上がり始め、ファイムは微笑む。気を利かせ、マスターである高町士郎がコーヒーを出してくれた。ファイムは、ありがとうございます、と頭を下げ、士郎は構わない、とでも言いたげに首を振った。
そして、ファイムがコーヒーを一口飲んだ辺りで女性陣の話も終わり、ファイムに視線が集中した。

「あ、紹介するな。わたしの同僚で……」
「ファイム・ララウェイと申します」

ファイムは立ち上がり、礼儀正しく頭を下げる。二人も、頭を下げてきた。

「アリサ・バニングスです」
「月村すずかです。はやてちゃんとは、二人とも小学校からの幼なじみで」
「そうなんですか」

はやての隣へと移動しつつ、ファイムは言う。二人は頷いた。

「だから魔法についても知ってるわよ」
「何度か協力もしてるしね」
「それはまた」

ファイムは驚く。管理外世界の住人が魔法を知っている……問題なのだろうが、普通に驚くに留めておいた。

「というか、はやて。こんな彼氏どこで見つけてきたのよ？」
「ホントだよはやてちゃん」

ごほっ、という音がファイムの隣から聞こえてきた。ファイムは、大丈夫ですか、とはやての背をさする。
はやては、ありがとう、と言いながら真っ赤になった顔で首を振った。

「か、彼氏って……ファイムくんは彼氏と違うよ！？」
「えー、真っ赤になって否定しても説得力ないわよ？」
「うんうん。ですよね？　ララウェイさん」
「あ、ファイムでいいですよ。というかはやてさん、僕は彼氏じゃなかったんですね？」
「ファイムくん！？」

はやては更に顔を真っ赤にする。
そうしてしばらく笑った後、ファイムは立ち上がった。

「僕がいては、積もる話もしにくいでしょう？　先に出ますね。ごゆっくり」

お札を数枚出し、ファイムは言う。

「えっ、ファイムくん。そんな……」
「まあまあ、たまにはいいじゃないですか」

微笑みながらファイムは言い、そして、アリサとすずかにだけ聞こえるよう、言葉を紡いだ。

「……はやてさんを、お願いします」
そして、アリサとすずかが何かを言う前に、ファイムは店を出た。
アリサが、はぁ、とため息を吐く。

「はやて。アンタの彼氏、とんでもないわね」
「うん。凄く冷静で、客観的だよ」

冷徹過ぎるほどに。
自分ではダメだと、受け入れてしまう程に。
アリサとすずかは、そう感じた。
はやては、彼氏やないよ、と弱々しく首を左右に振った。

「わたしなんかが、そんなこと思ったらアカン」
「……はやてちゃん」

すずかが気遣わしげな声をあげる。アリサは、しかし、敢えてはやてに問いかけた。

「はやて、あんた……何かあったの？」

◇　◇　◇

「行くのかい？」

背後から声をかけられ、ファイムは振り返った。
ー一高町士郎。
かの『エース・オブ・エース』高町なのはの父親であり、先程、気を利かせてファイムにコーヒーを出してくれた人物だ。

「ええと、マスターさん……ですよね？　先程はありがとうございました」

「気にしなくていい。ほんのサービスだ」

士郎は笑いながらそう言うと、店のほうを見た。ここからは店内が見えないが、はやてたちがいるはずの場所を。

「はやてちゃんは、うちの娘の親友でね。小さい頃から知っている。そんな彼女がキミのような青年を連れてきたものだから、驚いてね」

「僕はただの部下ですよ」

ファイムは苦笑。だが、士郎は首を横に振った。

「『ただの』ではないだろう？　キミたちの距離感は男女のそれではないが、友人以上のものはあると感じるよ」

「……何者ですか？」

「ただの人の親で、喫茶店のマスターだよ。だから、少しだけ気になってね」

ーーゾクリ。

士郎の目で見据えられた瞬間、ファイムは悪寒を感じた。士郎は笑みを消し、ファイムに問いかける。

「……キミは、何故そんなにも覚悟をしているんだい？」

「なにを」

「目を見ればわかるよ。キミは、死を受け入れている。いや、受け入れようとしているのかな。少しだけ揺れている……といったところかい？」

士郎は、キミはいくつになる、とファイムに問いかけた。ファイムは、自らの年齢を口にする。士郎は、ふむ、と頷いた。

「こちらの世界でも、『裏』ではキミと同じ年齢でキミのような目をした人間はいる。かつては僕もそうだったくらいだ。だからこそ、一つだけ言わせてもらうよ」
「なんでしょうか？」
「自分自身を守れない人間に、誰かを守ることはできない。……情けない話だけど、僕は自分自身が死にかけて、初めてそれを理解したんだ。僕のせいで家族には本当に迷惑をかけてしまってね」
士郎は苦笑。そして、だから、と言葉を紡いだ。
「お節介と理解してても、言っておきたくてね。キミが命を捨てて彼女を守っても、彼女は決して喜びはしない」
「ご忠告、感謝します」
三年前に言われた言葉を、再び聞くことになるとは思わなかった。
いや、違う。
きっと、何度も聞くことになるほどに、定着した事実なのだろう。
だけど。
わかっているけど。
もう、それしか道はない。
「それでも、それしかないんです」
まだ、決められやしないけど。
きっと、ファイム・ララウェイは、その道を選ぶことになるだろうから。
◇　◇　◇

「……そんなことが」

話を聞き、すずかは言葉を失っていた。はやては、うん、と頷く。

「ずっと、償いをしてきたつもりやった。せやけど、わからんようになってしもて……」

はやては、俯きながら言う。
償いのために管理局へと入り。
そこで夢を見つけた。
だけど。
その全てが、否定された。
だから、わからない。
わからなく、なってしまった。

「はやて」

あまりにも弱々しい姿のはやて。そのはやてに、アリサは言った。

「歯を食いしばりなさい」

ーーパシン!!
アリサの平手打ちが、はやてを打った。すずかが、アリサちゃん、と言葉を紡ぐが、アリサはそれを手で制した。

「久し振りに会って、元気がないと思ったら……そんなことで悩んでんの?」
「そんな、こと?」

はやてが顔を上げる。アリサは頷いた。

「要するに、否定されたから怖くなったってことでしょ？　甘えてんじゃないわよ」

「なっ、なんやて？　どういう意味や？」

はやてが立ち上がる。アリサも立ち上がりながら、ふん、と鼻を鳴らした。

「わかってるくせに。……『弱虫』、って言ってるのよあたしは」

「……ッ！！」

反射的に、はやては手を振り上げ、思い切りアリサに叩きつけた。だが、振り下ろした手はアリサに掴まれた。

「はやてあんた、弱くなったんじゃない？　いくらなんでも、このくらいで怒るほど器も小さくなかったわよね？」

「何が……アリサちゃんに何がわかるんや！」

はやては、頭を振りながら喚く。

「やってきたことが、全部無駄って！　否定されて！　どうしようもなくて！　わたしは、どうしたらええんや！」

「わかるわけがないでしょあんたの気持ちなんか！」

アリサも、思い切りはやてに怒鳴りつける。

「いっつも一人で抱え込んでて！　わかるわけないでしょうが！　あたしたちこそ何なのよ！？　アンタの友達じゃないの！？　アンタが苦しい時にアンタから頼ってもらえない気持ちがアンタにわか

るの!?」
「アリサちゃん!　はやてちゃん!」
今にも掴み合いの喧嘩が始まりそうだったのを、すずかが止めた。
その中でも、アリサははやてに言葉を紡ぎ続ける。
「アンタはそんなに弱くないでしょ!?　なによ!　一度二度否定されたくらいで!　だったらあたしたちが肯定してやるわよ!　アンタは正しいって!」
アリサの叫びの中には怒りの他に、悲しみが込められているようだった。
「何度でも!　何度でもよ!　大体、あんたは自分で決めたんでしょ!?　選んだんでしょ!?　だったら一度躓いたくらいで悩んでんじゃないわよ!　進みなさいよ!」
「……ッ!!　それが……!!」
はやては、泣きそうな顔で言う。
「それができたら、こんなことになってへん!!」
「だったら変えなさいよ!　今すぐ!」
「簡単に言わんといて!」
二人は睨み合う。そして、あまりにも真っ直ぐに自分へと向けられているアリサの目に耐えられなくなり、はやては二人に背を向けた。
その背中に、すずかが声をかける。
「はやてちゃん。はやてちゃんを心配してる人は、たくさんいるよ。でも、その中で一番心配してくれてるのは、悔しいけど、ファイム

さんだと思う」

はやての足が、止まった。

すずかは、言葉を続ける。

「ファイムさんは、私たちに頼んだんだよ？　自分じゃダメだって、悔しいはずなのに、辛いはずなのに、そう判断して。だから、はやてちゃん」

はやての背に、すずかの言葉が突き刺さる。

「選ばなくちゃ、ダメだよ？」

はやては、答えず。

ーー店を、後にした。

◇　◇　◇

はやてが家に帰ると、ファイムが料理をしながら待っていてくれた。

しばらくして、料理が並んでから、二人は食事を始める。

ファイムは、何も聞いてこなかった。

何かがあっただろうことは、わかっているはずだ。アリサにはたかれて腫れてしまった頬を冷やすために氷嚢をくれたし、大丈夫ですか、と心配もしてくれた。

けれど、何があったかは聞いてこない。

ーーありがたかった。

そっとしておいてくれることが、何より。

静かな食事が続き、それも終わる。

ファイムがいいですよ、と言うのではやてはファイムが片付けをしている間、ソファーに座っていた。
そうしてしばらく経ち、ファイムが戻ってきた時。
はやての瞳から、涙が零れた。

「……」

ファイムはハンカチを差し出す。その手を、はやては両手で握り締めた。

「……わたし、アリサちゃんと喧嘩してしもたんよ」

はやては、ポツリと呟いた。

「わたしを心配してくれたのに。それやのにわたしは、八つ当たりみたいに怒鳴りつけて。酷いこと、してしもた」

「……」

「アリサちゃんにな、『弱虫』って言われてん。凄いなぁ、アリサちゃんは。的を得てるんやもん」

はやての瞳から、大粒の涙が溢れてくる。

「わたしは、アリサちゃんから逃げたんや。……卑怯者やな、わたしは。償うことからも逃げて。こんなんで、許されるわけがない」

その時、ファイムは反射的に動いていた。
ただ、目の前の人があまりにも弱々しくて。
耐えることが、できなかったから。

「……ファイム、くん？」

ファイムに抱き締められながら、はやては呆然と呟いた。ファイムは、僕が、と、言葉を紡いだ。

「僕が許します」

かつて、あなたは僕を救ってくれた。
その言葉を返す時が、今なのだろう。

「たとえ世界の全てが許してくれなくても。世界の全てが敵であろうと。僕はあなたを許します」

はやてを抱き締める腕に、力が込められる。

「あなたが望んでくれるのならば、僕はいつまでも側にいる」

ーーこの時だった。
ファイム・ララウェイが、自分の命の使い方を決めてしまったのは。
世界でもなく。
管理局でもなく。
たとえ、今までの自分を否定する結末になってしまっても。
目の前の人のために。
八神はやてのために。
そう、決めてしまったのは。

「はやてさん。辛いなら、もう、いいんじゃないですか？」
「えっ……？」
「あなたは、１４年間も戦い続けてきました。もう、いいじゃないですか。そろそろ、自分のことを考えましょう」

ファイムは、はやてを真っ直ぐに見つめる。

「誰にでも幸せになる権利があると教えてくれたのは、あなただ。はやてさんにも、幸せになる権利はある。いや、幸せにならなければならない」

ずっと苦しんできた彼女だからこそ。

幸せになる、権利があるのだ。

「目の前に突きつけられた現実は、とても辛かったんでしょう？　それでも笑おうとしたのでしょう？　自分よりも他人の幸せを祈ったのでしょう？　そういう人は、幸せにならなければならないのです」

そうで、なければ。

あまりにも世界は、残酷過ぎる。

「選ぶのはあなただ、はやてさん。だけど、あなたが望むのならば、たとえ何があろうと僕はあなたの側にいる。あなたを救うと、この魂に誓う」

こちらは決断した。

あとは、目の前の人が決めること。

選ぶことを許されなかった彼女が、選ぶこと。

「あなたは、どうする？」

◇　◇　◇

深夜。八神はやては、目を覚ました。
ただ、なんとなく目を覚ましてしまった。

「……」

目を擦りながら、はやてはぼんやりとする頭で考える。
どうするのか。
ファイムに告げられたその問いかけにはしかし、はやてには答えられなかった。
どうするのか、がわからず。
どうしたらいいのかさえ、わからない。

「……はぁ」

ため息。本当に自分は弱くなってしまったのだと、はやては思った。
足音静かに、はやては部屋を出る。そして、一階のリビングに着いたとき、話し声が聞こえてきた。
はやてが気配を殺して覗き込むと、話をしているのはファイム。そして声から察するに、通信の相手はカグラのようだった。

「すみません。ご迷惑をおかけします」
『ただでさえ抱えまくってんだ。今更一つ二つ増えたとこで問題ねぇよ。ただ、限度は二週間だ。はやての嬢ちゃんはともかく、お前が管理外世界にいるのを誤魔化すのはそれが限度だぞ』
「心得ています。二週間のうちには、別の世界へ飛びますよ」
『それでいい。ただ……ファイムよ。お前、何がしたい？』
「何の話です？」
『この状況で、話題が他にあんのか？　嬢ちゃんだよ』
「……」

『お前ならわかるはずだ。折られた心ってのは、そう簡単には戻らねぇ。嬢ちゃんが立ち上がるにしても、何ヶ月って時間がかかるくらいわかるだろうよ？』

「立ち上がる必要など、ありませんよ。何なら、逃げ出したっていいと僕は思います」

『ほぉ？　どういう意味だ？』

カグラが問いかけている。その問いかけは、茶化すような空気を含みながら、真剣なものだった。

そして、はやても思う。

逃げていいとは、いかなる意味かと。

「はやてさんの経歴を見た時、最初に感じたのは『理不尽』でした。彼女は選ぶ権利さえなく、ただただ、利用された。はやてさんにそれを言えば、おそらく彼女はそれを否定するでしょう。だからこそ、理不尽なのです」

『成程、確かに理不尽かもな。ただ選ばれた。それだけで罪人呼ばわりされんだからよ』

「だからこそ、僕は今ここで、はやてさんに選んでもらおうと思っています」

ファイムは、強く、はっきりとした口調で。

しかしどこか優しさを含んだ言葉を口にした。

「戦うのか、否か。管理局に留まるのか、否かを」

はやての体が震えた。カグラは、お前、と彼にしては珍しく驚いた声を漏らす。

『流石にそれは無茶だぞ、ファイム。嬢ちゃん程の力を持つ奴が、

他人の干渉を受けないなんてことはできやしねぇ』
「わかっています。何も今回で全てを決めろというわけではありません。ただ、今どうするかを選択して頂ければいい。昔ははやてさんがいなければシステムを保てなかった『ヴォルケンリッター』も、今は自力でシステムを保つことが可能と聞きました。……これは、彼らの総意でもあります」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。
八神はやての誇る四人の騎士が、この状況を望んだというのか。

「はやてさんは優しい。だからきっと、他人がいては考えを出せないと、そう彼らは判断しました。だから僕は、何も強制せず、ただ、待ちます」
『気の遠くなるような話だな』
「……もしも、はやてさんが管理局から去ることを選んでも、おそらくそれは果たせません。それは致し方ない事実です。だから、僕がいるんです」

キィン、と、ファイムの足下に魔法陣が展開された。カグラとはやては同時に驚き、そして、カグラは声を僅かに荒げた。

『お前、魔力を封印されてんじゃなかったのか？』
「僕自身の魔力は封じられましたが、命があります。ロストロギアも」

魔法陣が消え、光が消える。
はやての位置からは、ファイムの表情は伺えない。だから、彼がどんな顔をしてそんな言葉を紡いだのか、わからなかった。
それに、もう一つ。

……命が、ある？
どういう意味か。いや……わかっている。
八神はやては、薄々、感づいている。
ただ……。

「確か、魔法を使わなければ十年でしたよね？　ならば、騙し騙し使えば五年くらいは保つかもしれません」
『……テメェ、正気か？』
「正気ですよ。……その時なら、きっと、はやてさんは選べるのではないかと思うんです」

ファイムが笑ったのが、はやてにはわかった。
ただ、はやては、泣きたくなった。

「今は、きっと多くのことがはやてさんを縛っています。けれど、五年の時間をかけて切り離して、最後に僕自身もいなくなれば。はやてさんは誰の影響も受けずに自分自身で選ぶことができると思うんです」
『……暴論で、極論で、理想論だ。そんなものは。論理も矛盾してる。切り離すったって、どうするつもりだ？　親友たちや『ヴォルケンリッター』は場合によっては協力してくれるだろうさ。だが、管理局はそうはいかねぇぞ』
「逃げますよ。どこまでも。元々僕は敗北者であり罪人です。逃げることに躊躇いはない」
『たった二人でか？』
「覚悟はあります。いや、定まりました。……はやてさんが望んでくれるのならば」

その言葉はあまりにも強く。
同時に、悲しい。

「僕は世界さえも敵に回すとそう決めた」

悲しく。

悲しく。

そして、切ない。

『お前、やっぱり馬鹿だな』

カグラは、乾いた声でそう言った。

「僕はただはやてさんに、たった一度でいいから選び直す機会を用意したかったんです」

それが、彼女にできる恩返しで。

贈り物だと、男は言った。

『……っとに。眩しいくらいに大馬鹿野郎だよな』

カグラは、笑い。

ファイムは、何も言わず。

はやては……泣いていた。

◇　◇　◇

深夜。自らの寝室でぼんやりと月を見ていたファイムは、誰かの気配を感じた。

いや……誰か、というのは無粋が過ぎる。ここには、二人しかいない。
良い意味でも、悪い意味でも二人きりの世界。それが、ここだ。

「ファイムくん」

月明かりに照らされた彼女は、神々しくて。美しくて。
目を、奪われた。

「八神はやては、あなたが好きです」

その言葉を飲み込むのに、時間がかかった。
彼女は、言葉を続ける。
その瞳から、涙を流しながら。

「愛しています」

パサッ、と、はやての足下に服が落ちた。
上着を、はやてが脱いだのだ。
お願いします、と、はやては言った。

「わたしを、抱いてください」

第十四話　二人きりの世界（後書き）

それぞれの想いが交錯し、そして、選択の時が来ます。
ファイムとはやての二人は、きっと、お互いのことしか考えていません。自分のことを無視しています。
しかしそれも、終わりを迎えます。
ファイムがどうするのか。
はやてが、どんな選択をするのか。
楽しみにして頂けると幸いです……が、すみません。次回は管理局サイドの皆さんの話になります。はい。ファイムとはやては出ません。
ホントすみません？
あんなに気になるような書き方しておいて……？

感想などを頂けると、嬉しいです。
ありがとうございます。
いつもメッセージをくれる方、はい、すみません？
更新速度を上げるよう頑張ります？

では、次回予告です。

次回予告

英雄二人が不在の中、不協和音を響かせながらも管理局は動いていく。
世界の安寧のため。
平和のため。
しかし、軋み始めた組織は、崩壊の兆しを見せ始め。
未熟な騎士の眼前に現れるは、圧倒的な死の力。

そこで、青年は選択する。

「勝ちゃあいいんだろ？　全員薙ぎ倒して、俺の勝ちだ！」

次回、第十五話

「定められた終焉」

第十五話　定められた終焉

管理局地上本部陸士部隊。
陸士１０１部隊から陸士４０４部隊まで存在するその部隊の仕事は多岐に渡る。
まず何よりも優先されるのは、管理世界の安寧と平穏。陸士部隊は一部を除き、全てが地上にあるため、その任務は管理世界の要である『ミッドチルダ』、その守護であるといえる。
ただ、それは最も重要というだけで、全てではない。
いや、違う。
世界の守護の手段が多岐に渡ると言った方が正しいのかもしれない。
犯罪者の逮捕、及び護送。
事故の調査。
地道な犯罪捜査。
ロストロギアの捜索及び管理……。
様々な仕事がある陸士部隊だが、それ故に『管理局の仕事』といえば陸士部隊のそれをイメージする者がとても多い。
その陸士部隊の一つ、陸士１０８部隊一員であり、地上本部では僅か三人しかいないＡＡＡランク以上の魔導師、リューイ・エンドブロムは自身のデスクに突っ伏していた。

「あ～……終わんねぇ……」

彼の口から漏れるのは、そんなやる気のないセリフだ。そんな彼の隣で、ふぅ、というため息が漏れた。

「マスター。文句を言う暇があれば手を動かしてください」

カチャカチャと手際良くキーを叩きながら言うのは、ミリアム・エ

ンドブロム。リューイの家族であると同時に、ユニゾンデバイスだ。見た目は十歳程度の幼い少女だが、その雰囲気は酷く落ち着いている。

リューイは、けどさぁ、とミリアムの方へと顔を向ける。

「最近ずっと資料相手に格闘してんだぜ？　いい加減飽きたっつーの」

「飽きる、飽きないの問題ではありません」

「ホント容赦ねぇな……」

リューイは苦笑する。ミリアムは少々、真面目が過ぎるきらいがある。まあ、だからこそリューイが『こんな』だとも言えるが。

「そもそもマスター。あなたは六課へ出向する予定だったのですよ？　出向していても同じことを言うつもりでしたか？」

「言ったな……っていう冗談は置いといて」

ミリアムの目が怖い。うん。ホント真面目だ。

「それも保留になったしな。ギンガさんとお前共々」

「それは致し方ありません。今、六課は大変ですから」

「……確かにな」

部隊長の離脱と、ファイム・ララウェイの追放。

理屈はわかるが上層部の正気を疑ってしまう采配が、六課を蝕んでいる。

いや、六課だけではない。

今や地上本部は、本局に対して並々ならぬ不信感を抱き始めていた。

「俺は知らねぇけど……昔の地上って、こんな感じだったのか？」

「聞く限りではそのようですね。もっとも、単純な話でもないようですが。地上にも本局に近い方はいたようですし、逆に本局に所属していても地上寄りだった人物は数多くいたようです」
「……本局と地上ってより、派閥争いみたいだなそれ」
「事実そうだったのでしょう。もっとも、二極化という異例な状況ですが」
「そんだけ単純な話だったんだろ」

リューイは背もたれに背を預けながら、息を吐いた。
そう、単純な話だ。
あらゆる次元世界の中で最も凶悪な事件が起こる場所でありながら、しかし、最も戦力が整っていない。
それを耐えろというのが、無理な話だ。
大事に育ててきた優秀な人物は根刮ぎ持って行かれる。自分のような元犯罪者という『例外』以外は。
それは、対立もするだろう。

「……これは非公式な話ではありますが、四年前に起こったＪＳ事件も、本局と地上の対立が最悪の形で現出した結果だという話です」
「どういうことだよ？」
「その事件で故人となられましたが、レジアス・ゲイズ中将は状況打破の手段として質量兵器の導入と、人造生命……特に戦闘機人の投入を考えていたようです」
「無茶苦茶だな」

質量兵器と戦闘機人。どちらも、管理局の指針からは大きく外れるものだ。
いや、だからこそかもしれない。
反するからこそ、それを以て本局との決別を示そうとしたのかもしれない。

考え過ぎかもしれないが。
ミリアムは、確かに無茶苦茶です、とリューイの言葉を肯定してから、しかし、と首を左右に振った。

「おそらく、そこまでしなければ、もうどうにもならなくなっていたのでしょう」
「世知辛ぇな」
「本当に。……当時の機動六課は、本局側だったようですね。中将もそれを理解していたのでしょう。何度も査察を強行しています」
「あー、あれな。あれホントキツいんだよ」

リューイはげんなりする。定期的に行われる地上本部の査察は、はっきり言ってかなり疲れる。細かいところまで終始延々と指摘され続けるのは、嫌で仕方がない。
『お前は姑か！』というつっこみも、何度堪えたかわからない程だ。

「八神一佐は当時、空と陸の両方で活躍されていましたし、召集された主戦力のほとんどが本局所属でしたから。当時の隊長陣で地上所属の方は、八神シグナム一尉くらいです」
「そりゃ睨まれるな。レジアスっておっさんの性格は知らねぇけど、鬱陶しいことこの上なかったろうよ」
「はい。……ただ、一つだけ気になる情報があります。ユーノ・スクライア司書長は、地上寄りだったとか」
「……何でまた？」

リューイは、そこで普通に疑問を抱いた。ユーノ・スクライア無限書庫司書長。
民間協力者ではあるが、本局に籍を置き、同時に高町なのはたち機動六課隊長陣の幼なじみである。
そんな人物が、地上寄り……？

「ファイムさんも地上寄りではありますし、存外、地上寄りの人間は多いようですよ」
「ふーん。……手ぇ繋いで一二の三でってわけにはいかねぇってわかるけどよ。もう少し仲良くできねぇのか？」
「互いに次元世界を想ってのこと。故に、難しいのでしょう」

想うところは同じだからこそ。
相容れない。
どちらかを肯定することは、どちらかを否定することだから。

「……世界を守る前に、障害が多すぎる」
「人の世の常です。人は欲深く、罪深い。常に利を求めてしまうのです」
「世知辛ぇな」

リューイは、呟いた。

◇　◇　◇

特務部隊機動六課隊舎。
本来なら、機動六課の隊舎ははやてが指揮を執っていた次元航行艦『ヴォルフラム』が兼任していたのだが、今回、そのはやてが離脱したことと、ファイムが罪人として扱われたことなどにより、『ヴォルフラム』は封印を受けた。
そして、監視という意味も込めて六課には地上の隊舎が与えられた。
そこは四年前、機動六課があった場所でもある。
そこの食堂で、なのはとフェイトの二人は食事をとっていた。

「なんか、懐かしいんだけど……素直に喜べないね」
「うん。……はやてとファイムがミッドチルダから出発して、もうすぐ一週間だけど……」
「……心配だね」
「……うん」

なのはの呟きに、フェイトはこくりと頷いた。
今回、ファイムと『ヴォルケンリッター』が何を思ってはやてを地球へと連れて行ったのか、二人は聞いている。
ー選択。
八神はやてが許されなかったそれを、今度こそ行うためだ。
はやてが選ぶ道によっては、二度とはやてと会えなくなるかもしれない。
だが、確かに。
はやては、選ぶことが許されなかったのだ。

「私はユーノくんと出会って魔法を知って、お手伝いするって自分で決めて……管理局に入るのも、自分で選んだ。空を飛ぶことが好きだから。憧れた空を飛びたかった」
「私はなのはに出会って、悲しい別れもあったけど、リンディ母さんやクロノ、エイミィ、アルフっていう家族ができて。民間でも管理局でも、選ぶ道はあって。そんな中で私は私の夢を見つけて。私のように悲しい目に遭ってる子を助けたいって思った」
「……だけど、はやてちゃんは」
「うん。はやては……違ったんだ」

どうして、考えなかった。
二人は、ほとんど同時にそう思った。
だが、二人に非はないだろう。そもそも、誰が気付けるというのだ。

あんなにも輝き。
強く。
凛と。
己が騎士と共に償うと決断し、常に笑顔を絶やさずにいる人物が。
罪人として、管理局に繋がれているなどと。
本当は、辛いのかもしれないと。
一体誰に、想像できる？

「私たちは、恵まれてたんだね」
「……だから、気付けなかった。はやても一緒だって、思い込んでたから」
「そんなこと、あるわけないのにね」

人は違う。
家族であろうと、親友であろうと、同一などということはありえない。
だが、つい、それを忘れてしまう。
それが人であり。
人間という生き物が、いつまで経っても完璧になれない理由なのだろう。
二人はため息を吐く。そこへ、声がかけられた。

「なのは、フェイト」
「ユーノくん？」
「ユーノ？」

二人は同時に驚きの表情を作り、来訪者の名を呼んだ。来訪者……ユーノ・スクライアは、いきなりごめん、と言葉を紡いだ。なのはが立ち上がり、ユーノに問う。

「どうしたの？」
「カグラさんに頼まれたものがあってね。持ってきたんだけど……部隊長室が閉まってて」
「あっ、えっと、それはーー」
「使ってねぇからな」

なのはが言おうとした言葉を別の声が引き継いだ。ユーノが振り返ると、そこに立っていたのはカグラ。寝起きなのか、寝癖が立っている。おそらく、仮眠室から出て来たのだろう。
カグラは六課の部隊長代理となってから方々に連絡を取り、少しでも六課が動きやすくなるようにと手を打っている。
はやてとファイムが戻ってきた時のために。
ほとんど、寝る暇さえ惜しんで。
カグラは、頭を掻きながら、ありがとよ、と言葉を紡いだ。

「15分程仮眠してな、わざわざすまん。司書長」
「いえ……これが、頼まれていた資料です。ただ、件数が多く絞り切れませんでしたが」
「いや、助かる。ありがとよ」

厚さ十センチ以上の紙の束を受け取りつつ、カグラは言う。ユーノは、そんなカグラに問いかけた。

「何故部隊長室を使われないのですか？」
「俺がいるべき場所じゃねぇからだよ。あそこに座るのは、『八神はやて』であるべきだ」

カグラは言い切った。ならば、と、ユーノは問う。

「帰ってくると、カグラさんは思っておられるのですか？」

「……俺が他人の行動を予測する時は、状況を頼りにする。だから、正直わかんねぇよ。無防備な心が何を選ぶかなんざ、そいつにしかわからん」

人の心だけは、理解できない。

カグラは、肩を竦めた。

「ま、待つしかねぇよ。それが望む結果であろうとなかろうとな」

そうして、カグラは行こうとする。そのカグラに、フェイトが声をかけた。

「手伝います」

「お、助かる。ありがとよ」

なのはとユーノを残し、カグラとフェイトは歩いていく。資料の何枚かをフェイトに渡しながら、カグラは言葉を紡いだ。

「これは、地上本部に保管されてたロストロギアのデータだ。あの日ー襲撃ん時に持ってかれたロストロギアを割り出す」

「わかるんですか？」

「ホムラの馬鹿は、片端から持ってったわけじゃねぇ。ジュエルシードと『何か』を持って行ったんだ」

それを割り出せれば、あるいは目的、もしくは相手の切り札がわかるかもしれない。

「もっとも、部屋自体が吹っ飛んじまって、何が持ってかれたかの照合が難しくなってんだがな」

「でも、それがわかれば……」

フェイトの言葉に、カグラは頷く。

「ああ。今までずっと後手に回ってきたが……ようやく、手を打てる」

それはあくまで一筋の光明であり、希望。

だが。

希望を信じなければ、何一つ奇跡は起こらない。

◇　◇　◇

カグラとフェイトを見送ってから、なのはとユーノの二人は机を挟んで会話をしていた。

話題は、勿論ファイムとはやてだ。

「……正直なことを言うと、ファイムくんの気持ち、わかるんだよね」

「ユーノくん？」

「選択する機会を用意したかった……その気持ちは、よくわかる」

似ているから、と、ユーノは言った。

「ファイムくんははやてが魔法に関わったきっかけとは……闇の書とは、何の関係もないけど、それでも思ったはずだよ」

理不尽だ、と。

選択の余地さえないのは、あまりにも理不尽だと。

「じゃあ、ユーノくんははやてちゃんを……？」

どこか不安げななのはの言葉。ユーノは、違うよ、と苦笑した。

「はやてのことについて何も思わないわけじゃないけど、でも、僕が思うのはなのは、キミのことだよ」

「わ、私？」

なのはが驚く。ユーノは、うん、と頷いた。

ユーノ・スクライアは高町なのはに救われ、そして、なのはを魔法の世界へと引き込んだ。

そこに責任を感じなかった日はない。

特に、あの日。

高町なのはが墜ちた日などは、特にだ。

「僕が、なのはを巻き込んだ。魔法の世界へと引き込んでしまったから」

「ユーノくん、それは……」

「わかってるよ、なのは。あの時はなのはに出会えなければ僕は死んでた。だけど、なのはの人生を変えてしまったのも事実なんだ」

だから。

だからこそ、ユーノ・スクライアという人間は、ファイム・ララウェイを理解できる。

同じだから。

ユーノ自身、何度も何度も思ったことだから。

これで良かったのか。

なのはは、もっと別の生き方ができたのではないか。

自分が、高町なのはという女性の人生をねじ曲げてしまったのでは

ないか。
何度も、何度も。
まるで、自らを責め苛む罪人のように。

「だから、わかるんだ」
「わかる？」
「うん。……ファイムくんが言う、『選択の機会』。僕たちの前で彼が言ったことの意味が」

ファイムははやての所へ行く前、シグナムたち守護騎士と、はやての親友であるなのはとフェイト、そしてユーノに自身の考えを述べていた。
……たった一度でも、はやてに選び直す機会を。
そのためならば、自身がどうなろうと構わないと。
止めようとした。ファイムを犠牲にしてしまったら、意味がないと。
だが、彼の意志と。
あまりにも正しく、同時に間違っている論理を前にして、何も言えなかった。
はやてもファイムも、いなくなるかもしれない。下手すれば、二度と会えなくなるかもしれない。
そんな現実をその場の全員が受け入れてしまったのは、あまりにもファイムが必死で、痛々しく、同時に、悲しかったからだ。
だから、シグナムたちも大切な主をファイムに託したのだ。
彼の想いは哀しく。
しかし、真実だったから。

「はやてだけじゃない。なのはも、フェイトも。あまりにも才能がありすぎたんだ。管理局が手放したくないほどに。……あまり言いたくないけど、リンディさんにさえそういう意図はあったと思うよ」
「そう……だね。今ならわかる。あの時の私はまだ幼かったから、

余計に『そう』だった」

無論、当時のリンディやレティ両提督はそういう打算のみで動いていたわけではない。しかし、そういう側面があったというのも事実だった。

人は、一人では生きられない。

人は他者の中に自らを見つけ、ようやく自分の存在を確認できる。

そしてそれは、常に他者の影響を受け続けることに繋がる。例えば当時、なのはが管理局に入ることを拒んでいたとして、それが果たせた可能性は極めて低い。

おそらく管理局はあらゆる手を使い、あたかも彼女が選んだ風を装って入局させただろう。幼いなら尚更だ。

それが組織であり、人間である。

だからこそ。

だからこそ、ファイム・ララウェイという青年は……。

「ファイムくんは、誰の意志も介在しない、はやての意志だけによる決定を望んだ。『始まりをやり直す』ために」

最初からおかしかったならば、その後も狂ったまま、あるいは狂っていくのは道理だ。

ファイムはそれを認めなかった。

それだけだ。

「もしかしたら、僕も同じことをしていたかもしれない。……ねぇ、なのは。今、幸せ？」

唐突に、ユーノは問うた。

なのははは驚きつつも、しっかりと頷く。

「うん。あの日ユーノくんに出会って、魔法を知って。ヴィヴィオにも出会えて。私は、幸せだよ？」
「そっか。……後悔は？」
「……辛いことも、苦しいこともたくさんあって。どうして、って何度も思ったけれど。高町なのはが歩いてきた道に、後悔はないよ」
なのはは言い切り、それを聞いたユーノは微笑んだ。
「なら、いいんだ。そうであるなら、僕は……」
その先の言葉を、ユーノは紡がなかった。
必要が、なかった。

◇　◇　◇

ミッドチルダ北西部、森林地帯。
一応正式な名称もあるのだが、リューイは知らない。というか、興味もなかった。
「……暑い」
ぼそりと、リューイは呟いた。
管理局の制服は通気性こそいいのだが、少々分厚い。かといってバリアジャケットは、もっと暑い。
「マスター。文句を言わず歩きましょう」
「ほぉ？　へばって背負われてる奴が言うじゃねぇか」
「私は暑さが嫌いです」

リューイは自身が背負って運んでいる少女、ミリアムにそう言葉を紡ぐが、あっさりと返された。リューイは、つーか、と言葉を紡ぐ。

「お前は寒いのも嫌いだろうが」
「それが何か？」
「我が儘なんだよテメェは」
「私は春が好きです」
「……お前、言葉のキャッチボールって知ってるか？」

若干諦めながら、リューイはそう言葉を返すのが精々だ。
しかし、言いながらもリューイは面倒見がいいため、意外と気を遣いながら歩いている。
その二人に、側を歩いているギンガが声をかけた。

「仲がいいわね」
「まあ戸籍上は家族ですからね」
「……」

リューイの言葉に対し、ミリアムは無言。どうした、とリューイが問うと、なんでもありません、という返答が返ってきた。リューイは、あのな、と言葉を紡ぐ。

「信用できねぇんだよ」
「何故ですか？」
「一応、お前の主で家族だぞ。機嫌悪いことくらいわかるっつーの」

リューイは肩を竦める。ミリアムは、ぼそりと呟いた。

「……マスターは、ズルいです」

その呟きは、リューイには届かない。
そんな風にしばらく歩くと、ようやく目的の場所に着いた。そこでは、リューイやミリアム、ギンガの上司でもあるゲンヤが指揮を執っていた。

「おお、おめぇさんたちも着いたか。早速で悪ぃが、こっちの指揮頼まぁ」

言いながら、ゲンヤはギンガに簡単な指示と引き継ぎを行う。それが終わったのを確認してから、リューイはゲンヤに聞いた。

「ゲンヤさん。俺たちは何したらいいんだ？」
「ミリアムは探索の手伝いだ。リューイ、おめぇは……その辺で待機してろ」
「おい！」

思わず、つっこみが口をついて出た。
ゲンヤは、はっはっは、と笑う。

「おめぇさんに期待してんのは、万が一の時の戦闘能力だ。相手はロストロギア。暴走でも起こったときは、お前が止めろ」
「……了解」

最後に紡がれた真剣な言葉を聞き、リューイは頷く。そう、今回のリューイたちの任務は、ロストロギアの捜索だ。
つい数日前、この辺りでロストロギアの反応が確認された。ロストロギア関連の仕事は主に『遺失物管理課』のものなのだが、今回は場合が特殊であるとして、地上においては最強の戦力を揃えている陸士１０８部隊に話が回ってきた。

「……」

リューイは邪魔にならないよう、近くの木陰へと移動する。リューイはあくまで戦闘要員だ。知識はあっても、こういった現場での動きかたは知らない、いや、知らないことになっている。

誰にでも、役割はある。ミリアムの風の魔法は探知に向いているから彼女は捜索に関わっているのであり、同時に、リューイの力はあくまで戦うことに特化しているため役に立たない。

（ま、仕事奪うわけにはいかねぇしな）

人には誰しも役割がある。今ならば指揮を執ることだったり、実際に探すことだったり、リューイのように待機することもそうだ。だからリューイは、こうして暇を持て余しているわけだが……。

（……にしても、妙だな）

急ぎつつも、ただ急ぐわけではなく、適切な早さで捜索を進める同僚たちを見ながら、内心でリューイは呟いた。

ここはクラナガンから決して遠くない場所だ。来るのに一時間とかからない。

それ故に、徹底的な調査がなされているはずだ。そんな場所から、今更ロストロギアなど出て来るのだろうか。

「……妙っつーか、なんか腑に落ちねぇというか……」

自分でもよくわからない違和感に焦がされながら、リューイは呟いた。その時。

ーーざわっ。

俄に騒がしくなってきた。どうやら、見つかったらしい。

「早ぇな」

呟き、リューイは人だかりに寄っていく。そこでは、ギンガとミリアムが慎重にロストロギアの確認をしていた。
小さなロストロギアだ。

ーーゾクッ。

背筋に、悪寒が走った。
魔導師としては未熟なリューイだが、しかし、そんな彼でも感じられる圧力が、周囲に降り注いでいた。
ギンガとミリアムを見る。
彼女たちも、表情を強ばらせていた。

「ーー世界を斬らんと謡いて見れば。万雷喝采注いで候」

声。
世界が、染まる。

「嗚呼、嗚呼、哀れなり。君死に給ふことなかれ。狩人よ、刮目せよ。今宵は狩人が狩られる日」

閉じ込められる。広域結界が展開されていた。

「鉄よ、泪よ、汗よ、血よ。歓喜せよ、悟られよ、今宵は惨劇の夜」

空を見る。そこにいたのは、一人の魔導師。

「さあ、さあ、刃を持て。拳を握れ。鬨の声を上げよ」

かつての管理局の英雄、ホムラ・イルハート。
ズンッ、と、リューイの背後に何かが落ちた。見れば、そこには騎士甲冑を纏う男の姿。
ーーリヴァイアス・バルトマカリ。
男は、壮絶な笑みを浮かべる。

「運命がカードを混ぜた。銀月の手札はジョーカー、鬼札だ。ならば、貴様は何だ？」
リヴァイアスが彼の得物である戦斧を構える。

「我は刃。銀月の従順なる刃なり。来るがいい小僧」

ホムラが地面に降り立ち、笑みを浮かべる。

「恨むんなら、運命を恨め。神を。世界を。人生を。そうして、死んでいけ。ーーこの日、この時、この瞬間」

ホムラの力により、結界が完成する。

「運命が狩人を狩り立てた」

◇　◇　◇

緊急警報が鳴り響いた。飛び込むように司令室に入ったカグラは、

怒鳴るように問いかける。

「状況は！？」

「陸士１０８部隊より五分前に救援要請を受信！！　しかし間もなく通信は途絶えました！！」

「場所は！？」

「クラナガン北西部森林地帯です！！　封印結界の反応を確認！！　推定オーバーＳランク魔導師のものと思われます！！」

「そんだけあれば十分だ！！　魔導師は総員出撃！！」

一も二もなく、カグラは決断。報告を行っていたフェイトの補佐官であるシャリオ・フィニーノは、しかし、と言葉を紡いだ。

「停止期間中ですがーー」

「責任は俺がとる。辞めろってんなら辞めてやる。死ねってんなら死んでやる。仲間一人助けれず、何が守れる。出撃だ！！」

「了解！！」

シャーリーは即座に魔導師全員に緊急回線を繋ぎ、それを見たカグラが声を張り上げた。

「総員聞け。細かい説明は後だ。とにかく今は仲間の救援要請を受け取り、出撃する。場所はクラナガン北西部の森林地帯。空戦魔導師は今すぐ飛んで現場へ向かえ。陸戦魔導師は屋上だ。ヘリに乗れ。詳しくはそこで説明する」

『カグラさん。しかし、パイロットが』

フェイトが通信で伝えてくる。バリアジャケットを纏っており、向かう準備は整っているようだ。

カグラは、大丈夫だ、と言葉を紡いだ。

「俺も遊んでたわけじゃねぇ。優秀なのを一人連れてきてる。お前らもよーく知ってる奴だ」

そして、カグラは、自身もバリアジャケットを纏う。

「なのはの嬢ちゃんは俺と一緒に別ルートで向かう。付いて来い」

『はい！！』

なのはが音声の通信で応じてくる。流石に場数が違う。どういう意図での指示が、わかってくれているようだ。無論、他の者たちも。

「いいかテメェら。あの結界にゃ見覚えがある。よーく知ってる。時は一刻を争うぞ。だが、テメェらは奇跡の部隊だ。いいな、必ず帰ってこい」

そして、カグラは声を張り上げる。

「返事はどうした！？」

『『『はいっ！！！！！！』』』

何の迷いもないそれに、上等、とカグラは頷くと、シャーリーたちにこちらは任せ、自身は走り出した。

その途中で、カグラは考える。

（あの結界……ホムラが張ってんなら地上の結界魔導師程度じゃ解除に軽く半日はかかる。それじゃ全部終わった後だ）

今でこそ決別してしまったが、カグラにとってホムラは背中を預け合った唯一無二の友だ。その実力は誰よりも承知している。

ホムラの結界魔導師としての才能は、あまりにも圧倒的。全盛期の頃の自分でさえ、力ずくで破ることはできなかった。
ならば、どうするか。
あの男の結界をなんとかできる魔導師など。

「……運命かね」

いた。
たった一人だけ。この場には、『彼』がいる。
ならば。

「都合が良い気もするが……言ってらんねぇ！」

カグラは、速度を上げた。

◇　◇　◇

「ふむ。非戦闘員を逃がしたか。中々紳士だな小僧」
「なはは、まー逃げられやせんけどな。わしの結界破るなんざ、まあ無理無理」

リヴァイアス・バルトマカリとホムラが、楽しそうに言う。その言葉に込められているのは、絶対的なまでの自信。
ホムラ・イルハートという魔導師の結界が破られることなどありえないという、自信だ。
今、二人と向き合っているのはリューイ一人だ。ギンガとミリアムの二人はそれぞれ部隊長であるゲンヤの安全確保と、非戦闘員の守護に回っている。

「一人はトップを。一人は戦えない奴らを。そして一人は、襲撃者を。なはは、良い判断や。８０点くらいやな。堅実で、悪くない判断や」

「まあ、それはあくまで堅実。予測の範疇。故に、貴様の一手は悪手となる」

「……」

リューイは、黙して佇む。すでにデバイスは起動していた。騎士甲冑も纏っている。

倒れている木に座りながら、ホムラははははっ、と笑みを浮かべた。

「せやけど、運が悪いわホンマに。わしらは誰一人逃がす気はない。未熟な騎士一人でどうにかできるような状況やないで、これは」

「……関係ねぇよ」

リューイが、吐き捨てる。

「だったら何だよ。未熟だろうが何だろうが、それが俺のすべきことなんだよ。ほざいてんじゃねぇぞおっさん」

「ほぉ？」

ホムラの目が、細まる。興味を抱いた目だ。

「若いなぁ、自分。うん、羨ましいくらいや。けどま、若過ぎやね。……わしらだけやと、誰が言ったそんなこと？」

ー一轟音。リューイは思わず振り返る。

空が、燃えていた。

「何を」
「ギレン・リー。ま、戦争屋やな。一対一……サシの殺し合いならともかく、戦争において奴より優れた奴はわしらの中にはおらんよ。あと、あいつは何や知らんが一対一に拘るけど……実際は、一対多数に特化した魔法を使う」
「我らとは違い、戦争においては状況を選べるということがあり得ん。いつその背に刃が突き立てられるかわからぬままに、ただただ、目の前の敵を葬るのが戦場だ。常に多数を相手にしていれば、相応の技術が身に付くのも道理」
「ま、更に言えばわしはともかくリヴァイアスはギレンの真逆。サシに向いとるんでな。自分みたいないわゆる『強い敵』を潰しにきたわけや」

にっ、とホムラは笑みを浮かべた。
その笑顔は少年のように純粋で、同時に、残酷だった。
リューイは、ぐっ、とブラッディハウンドを握る腕に力を込めた。

「だったら、止めてやるよ。そいつも、テメェらも！」

ーーガァン！！
火花が散る。リューイの一撃と、リヴァイアスの一撃が激突していた。

「いい気迫だ小僧、否、リューイ・エンドブロムよ。ならば我らを討ってみよ。銀月を討ち取れば、この戦場も消え失せる！」

二人は互いに後退。そうしながら、リューイはリヴァイアスの言葉を整理する。
銀月、というのはおそらくホムラのことだ。そして、ホムラを倒せば。

ー結界が、消える。
みんなを、逃がせる。

「上等だ」

リューイは、ブラッディハウンドを構えた。

「勝ちゃあいいんだろ？　全員薙ぎ倒して、俺の勝ちだ！」
「ええなぁ、自分。愉快愉快。上等も上等や」

ホムラは、楽しそうに笑う。

「さあて、願いましては。わしを殺したければ、リヴァイアスを殺せ。まさか、覚悟がないとは言わんやろ？」

リューイの答えは。
ー振り抜かれる、刃だった。

「わしは掛け金をベットした。さあ、勝負や」

◇　◇　◇

陸士１０８部隊、仮設司令室。
ただ、少し大きめのテントが張られただけのその内部で、二人の男女が向き合っていた。
ゲンヤ・ナカジマ。
エリア・カリア。
突然の襲撃者を相手に、ゲンヤの側にいた魔導師たちは懸命に戦っ

た。だが、相手はかつて『聖王騎士団筆頭』の位置にいた傑物。適うはずもなく、蹴散らされた。
彼女の足下には、蹴散らされた魔導師たちがいる。陸士部隊における魔導師ランクは、平均してB、Cランク程度だ。Sランク魔導師に適うわけがない。
エリアは彼女の持つ剣の片方をゲンヤに向けながら、問いかける。

「眉一つ、動かさないか。ゲンヤ・ナカジマ」
「怒って欲しいのかい？」

問いかけに対し、ゲンヤは肩を竦める。エリアは、少々、と言葉を紡いだ。

「私が伝え聞く人物像、いや、知っている人物像とは違う。もっと部下思いな指揮官と思っていたが」
「部下思いであることと、この状況で平然としてることが一致しないとでも？」
「そうだ」

エリアは頷く。ゲンヤは、若いなぁ、と苦笑した。

「泣くのは簡単だ。だがな、それで誰が喜び、誰を助けることができんだ？　馬鹿も休み休みだ。俺は指揮官だ。冷静に、冷徹にいなければならねぇやな」
「……成程、浅慮だった。流石は我が主が認め、目標とする方だ。だが、それ故に危険と判断する」

エリアの目が細まる。噴き出すような魔力と殺気が、ゲンヤを襲う。

「貴様等は一人たりとも逃がしはせん。悪いが、死んでもらう」

エリアは地面を蹴り飛ばし、ゲンヤに迫る。一撃必殺。魔力を持たないゲンヤでは、防ぐことも適わない一撃だ。
しかし。
ーーギィン！！
突如、ゲンヤを包むような防護壁が出現した。明らかに魔導の力であるそれは、エリアの一撃を防ぐ。

「魔法？」

飛び退きながら、エリアは呟く。だが、すぐに彼女はその考えを否定した。
ゲンヤが持っているカードが目に入る。おそらく、あれだ。

「技術、ってのは常に進歩してるもんだ。俺みたいな魔力なしでも魔法を使えるように、って開発されたもんだよ」
「……時は移ろうもの、か。たが、そんなもので我が刃を止められるなどと、過信せぬことだ」
「わかってるさ」

ゲンヤが言った、その時。
ーーローラー音。
大気を震わせるそれが、エリアの耳に入った。

「まだまだ技術は完成してない。だが、使いようはある。例えば、時間稼ぎとかな」

バサッ、という音と共に幕が破られ、乱入者がエリアに拳を叩き込む。
ギンガ・ナカジマ。

ＡＡランク魔導師だ。
その乱入を認め、エリアは彼女のデバイス『クリスティナ』を構える。

「……我は刃、我は盾、我は剣。我が主の道を切り開くため、万象一切を薙ぎ払わん」

エリアの瞳から、一切の迷いが失われる。

「……参る」

◇　◇　◇

六課の陸戦魔導師チーム。スバル、ティアナ、エリオ、キャロにザフィーラを加えた四人は、ヘリで現場に向かっていた。
操縦するのは、ヴァイスだ。

「もう後１０分もしねぇうちに到着する。気ぃ引き締めろ」
『はい！』

全員が頷く。その中で、ティアナが口を開いた。

「ヴァイスさんが、ランバード一佐が言っていたヘリパイロットだったんですね？」
「あの人にゃ色々と世話んなっててな。ララウェイ執務官にもだ。で、手を貸してほしいって言うから、それなら喜んで、って流れだ」
ヴァイスは楽しそうに言う。それに対し、ティアナは少し考え込ん

でいた。
ララウェイ。ファイムの名を、こんなところでまで。
地上における彼の名は、どれほどのものだというのか。
カグラ・ランバードという英雄が陣頭に立ったとはいえ、ファイムの名を出したクーデターには千人もの魔導師が集まったという。
それほどの影響力を持ちながら、彼は。
そんな風に、ティアナが考えた瞬間。

「ーーーッ!?　全員、どっかに掴まれ!!」

ヴァイスが叫び、それとほぼ同時に、ヘリが大きく揺れた。アラートが鳴り響く。

「ちっ、お前ら脱出しろ!　急げ!」
「ヴァイスさん!」
「俺ぁいい!　スバル!　お前のウイングロードで脱出しろ!」

逡巡の暇はない。パイロットの命令は絶対だ。

「先に行きます!」

スバルが言い、ウイングロードを発動する。
そうして全員が出てから、ヴァイスは言った。

「ストームレイダー。……俺たちも脱出だ」
《Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ》

瞬間、閃光が視界を覆った。

◇　◇　◇

空に架かる、いくつもの道。ウイングロード。
青い軌跡の端では、撃墜されたヘリが墜落している。
ヘリを墜落させた張本人であるテンリュウ・シンドウは、ふむ、と呟いた

「『エース・オブ・エース』がいないことが気になりますが……まあ、良いでしょう」

ぶん、と薙刀を右腕一本で軽々と回転させながら、テンリュウは言う。

「特務部隊機動六課の皆さん。ここから先へと進みたければ、私を墜として行きなさい」

その馬の全員の視線がテンリュウに集中する。高町なのは、カグラ・ランバードを除く六課の魔導師たち。その全員を、テンリュウは一人で相手をすると言ったのだ。

「キュウ」

テンリュウの頭の上に乗る、小型モードのサリヴァルムが鳴く。

「テンリュウ・シンドウ。そして、その飛竜サリヴァルム。一一推して参る」

その言葉を合図に、戦闘が始まる。最初に動いたのは、ヴィータとスバルだ。

「アイゼン！」
「マッハキャリバー！」

二人が同時にそれぞれの相棒に呼びかけ、カートリッジをロード。
それぞれの一撃を叩き込む。
だが、テンリュウは左右の手、一本ずつで受け止めると、何事かを呟き始めた。
その意味を理解したシグナムが、叫ぶ。

「下がれ二人とも！」

しかし、遅い。

「バインド！？」
「二重発動！？」

ヴィータとスバルがそれぞれバインドで動きを封じられ、声を上げる。
魔法の詠唱、もしくは発動中に別種の魔法を紡ぐ技能を『二重発動』と呼ぶ。
魔法戦闘はそもそも並列思考、『マルチタスク』が基本となるが、魔力を二つ以上の意図を持って同時に操るのは、困難を極める。
例を挙げるとすれば、左右の手でそれぞれ違う絵を書く行為に似ている。その状態で精度を保てるのは、本当に一握りの魔導師だけだ。
故に、普通ほとんどの魔導師はバインドなどを発動させてからその制御をデバイスに任せ、追撃に入る。だがテンリュウは、二つの魔法の詠唱と発動を敢えて同時に行った。
見せつけるために。

「遠き地にて、闇に沈めーー」

テンリュウが、一歩後ろへ下がる。

「ディアボリック・エミッション」

八神はやても用いる空間魔法。それが、ヴィータとスバルを飲み込む。

二人は強大な魔力に押し潰され、意識を刈り取られそうになる。それを見、ザフィーラとティアナが叫んだ。

「ヴィータ！」

「スバル！」

そして、二人は同時に動く。

「鋼の楔いっ！」

「ファントムブレイブ！」

二人の一撃が放たれる。対し、テンリュウは冷静に障壁を張った。

「夢幻天声」

出現するのは、あまりにも強固な盾。それにより、二人の攻撃は防がれる。

そして。

「集団の利を生かさず、個々で向かってくる。……能力に差のある魔導師にはありがちですが」

ショートジャンプ。否。
単純な、絶対的な速さでテンリュウはザフィーラの背後に現れる。

「個々では私には勝てません」

ディバインバスター。テンリュウが放った一撃に、ザフィーラは飲み込まれる。そして、ティアナも。

「ウインドバスター」

ファイムが得意とする魔法を、テンリュウはティアナに叩き込んだ。
シグナムが吠える。

「貴様っ！！」

シグナムがテンリュウに迫る。

「紫電！！　一閃！！」

魔力を纏った必殺の一撃が放たれる。テンリュウは、ふぅ、と息を吐き、左手で腰に差した刀の柄を掴んだ。

「夢魔龍閃」

抜き放たれた、居合の一撃。それは、シグナムの一撃と渡り合う。

「なっ！？」

そして生まれた一瞬の隙、そこへ、テンリュウが容赦ない一撃を叩き込む。

「夢想演舞」

シグナムが砲撃の閃光に飲み込まれる。テンリュウはため息を吐いた。

「スタンドプレーでは勝てぬと申し上げたはずですが」

「フリード！　ブラストレイ！」

「ギャウ！」

飛竜フリードから熱閃が放たれる。テンリュウは、サリヴァルムに命じた。

「サリヴァ。バーストレイ」

「ギャオ！」

小型のサリヴァルムから、熱閃が放たれた。それはフリードの一撃と衝突し合う。

「飛竜は何も常に完全召喚する必要はありません。竜を従えるとは、こういうことです」

もう一度、閃光が放たれた。それは、フリードとそれに乗っていたキャロを巻き込む。

「一瞬です。ほんの一瞬でいい。竜には、それでも十分過ぎる力があります」

竜。人智の及ばぬそれは時として、圧倒的な力を発揮する。キャロやテンリュウのように竜と契約した者は、それを制御することに細

心の注意を払わねばならない。
キャロは竜を従える一族の中でも多大な才を持って生まれてきた。
それ故に不具合など感じることはほとんどなかったが、本来、竜の制御には凄まじい魔力を必要とする。キャロでさえ、フリードリヒの完全召喚は持って三時間程度だ。
召喚の才を持つものでさえそれだ。故に、生み出された術式がある。
ーー『限定召喚』。
竜の一部のみを、しかも一瞬だけ本来の状態にまで持って行くその術式は、極限まで契約者の消費魔力を抑えたもの。
無論、飛竜自身は本来の姿ではなく、それ故に脆弱ではあるが……
そこは、テンリュウ・シンドウという『最強』がカバーする。
これが、『最強の侍』が自身の飛竜を従えた際のスタイルだ。
テンリュウは、虚空に向かって軽く薙刀を振るう。

「でやあああああっ！」

その頭上から、赤髪の騎士が舞い降りてきた。テンリュウは、ふむ、と頷く。

「上空からの奇襲。意気は買いますが……」
「紫電ーー」

エリオがストラーダを振りかぶる。
だが、その一撃が放たれることはなかった。

「遅い」

ーーズシュッ。
エリオの体から、血が噴き出す。正面から、テンリュウの刀で斬られたのだ。

「夢魔龍閃。せめて、これを見切って頂かなければ」
落下していくエリオ。
ーーガシッ。
だが、その体は地面に落ちる前に受け止められた。
フェイトだ。

「……シャマル」

フェイトは後方から見守っていたシャマルにエリオを預ける。彼女は戦闘要員ではないが故に、テンリュウも特に気にしなかった。
シャマルはエリオを含め、負傷している者たちを治癒し始める。
そして。
フェイトと、テンリュウは。

「……あなたにも、理由があるのかもしれない」

家族を傷つけられ。
仲間を傷つけられ。

「わかり合えるのかもしれない。話を聞けば。話をすれば」

ーー黙っている、道理はない。

「歩み寄ることができるかもしれない。だけど」

フェイトの目に、強く、強く、悲しい意志が宿る。

《Ｏｖｅｒ　ｄｒｉｖｅ，Ｓｏｎｉｃ　Ｆｒｏｍ》

フェイトのバリアジャケットが大きく変化する。
真・ソニックフォーム。
防御を捨て、速さを。
ただの一撃で墜とされることさえ覚悟してフェイトが紡ぐ、最後の切り札。

「あなただけは、許さない！」

二振りの刃となったバルディッシュを構え、フェイトは叫んだ。テンリュウは、迷うことなく応じる。

「『雷光の死神』フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官。相手にとって不足などなく、我が気も充実している」

テンリュウの魔力が吹き荒れる。あれほどの魔法を連続して紡いでいるというのに、少しも衰えていない。
いや、むしろ。
力はより強く、燃え上がるように。

「かく語りきと世界は申し。歴史はするりと零れ落ちん」

テンリュウは、薙刀を持つ右手を後ろへ、『血桜』の柄を握る左手を前に出し、左半身の構えをとる。

「この戦いの正義はどこか。悪はどこか。是非はどちらか。その全てを決めるのは、後の歴史。故に、ただ今は、この戦いを」

フェイトが動き、バルディッシュを振るう。それを『血桜』で受け止め、テンリュウは叫ぶ。

「殺し合いを！！」

激突。六課において最速を誇るフェイトの猛攻を、テンリュウは全て捌いていく。

幾度目かの閃光が瞬いた後、フェイトはテンリュウから距離を取る。

「……ッ」

その右肩から、血が滴った。テンリュウが、微笑む。

「僅かな衝撃であっても傷を負う。その覚悟を纏ったのでしょう？
ならば、もっと見せてください」

フェイトにとって、目の前の敵はあまりにも高い壁だった。

だが、それでも。

「バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

カートリッジをロード。二本に分かれた刃を、再び一つに。

極大の刃。かつてＪＳ事件においてＮｏ．３トーレを倒した一撃が、テンリュウに迫った。

ー轟音。

テンリュウは、フェイトの一撃を受け止める。

鍔迫り合い。力比べ。

そして。

「……命など、使いたくはありませんでしたが」

テンリュウの足下に、ミッド式によく似た、微妙に違う魔法陣が展開される。

「……ッ！？」

フェイトが表情を変える。テンリュウは、ふぅ、と息を吐いた。

「代価を。報酬を。我は刃、我は盾。優しき名君がために」

かつて、古代ベルカに一人の優しい女性がいた。
その女性は独りきりであり、戦う力もなかったが、たった一つだけ他者とは違う力があった。
彼女を孤独にしたその力。
ーー運命を変える力。
世界の因果を破壊するその力は、本人さえ扱いきれず、彼女は国を一つ滅ぼした。
そして、独りきりになった彼女は、とある男に出会う。
彼女は初めて、人を救った。
男の運命をねじ曲げ。
死から、救った。
死から救われし男は、戦乱の世の中から彼女を守るとその刃に誓う。
運命を壊されてから出会えた、たった一人の姫君がため。
男の名は、天龍。
ーー神道天龍。
ただ一人からなる、無敵の軍勢。
その力が、今。
時を超え、世界に叫ぶ。

「世界を、主に」

◇　◇　◇

リューイ・エンドブロムは、決断を迫られていた。

「ぐっ……！？」

砂を噛む思い。
口の中に広がる鉄の味。
全身を走る激痛。

（俺は……ッ）

適わない。
勝てない。
守りたいものを、守れない。

（俺は……ッ）

部隊で最高のランク。
天才。
そんな風に呼ばれていながら、何もできない。
今こそ、この力が必要とされてるはずなのに。
ーーツウッ。
知らず、涙が流れた。悔しいから。いや、違う。
ただ、情けない。
みなは、必死に戦っている。抗っている。
なのに、こうして這い蹲っている自分は一体何なのか。

「才能は一級品。将来性は抜群。性格はちょいとばかり短気やけど、まあ、問題なし。うん。ええな自分。せやけど、ダメやね」

ホムラが、ははは、と笑う。

「力があろうとなかろうと、負ければ終わりや。例の『地上本部のエース』も同じ。言葉が正しかろうと思いが正しかろうと信念が正しかろうと、力がなければそれは戯言。弱けりゃ、意味はない」

……弱い？

ファイムが？

あの、ファイム・ララウェイが弱いだと？

「勝者が正義で敗者が悪。いつの世も変わらない、絶対唯一の真理や。……だからこそ、例の執務官は全てを失ったんやろ？　弱いから」

「……ッ！！」

リューイは、ブラッディハウンドを杖代わりにして立ち上がる。ホムラが口笛を吹いた。

「ほぉ。まだ立つか」

「……」

リヴァイアスは無言。リューイは、うるせぇ、と呟いた。

「馬鹿にすんじゃねぇよ。ファイムは、俺たちを救ってくれた。部隊のみんなは、俺たちを受け入れてくれた」

どうしようもない、自分たちを。

ファイムも。
部隊の人たちも。
それが当たり前のように、普通に接してくれた。

「手ぇ出すな。出すんなら、まず俺を殺せよクソ野郎が」
「……負け犬の遠吠え。弱い犬程よー吠える。主張を通したければまず力を見せぇ。それすらできんのやったら、武器を持っとる意味がない」

ホムラは笑い。
そして、リューイは覚悟を決める。

「オーバードライブ」

キン、という音と共に、リューイを魔力が包み込む。
フルドライブから、もう一歩踏み込んだ限界突破の術式。
肉体に多大な付加をかける代わりに力を得る、リューイ・エンドブロム最後の一手。

「くくっ、良いぞ、小僧。ようやく、騎士らしい顔つきになった」

リヴァイアスは楽しそうに言い、構える。ホムラは変わらず、傍観の構えだ。

「ブラッディハウンド」

カートリッジをロード。金色の炎が刀身を包み込む。
衝突。リヴァイアスが笑った。

「さあさあさあ！　こちらはすでに手札は揃った！　次は貴様だ！

ベットか？　コールか？　さあ選べ！」
「らああっ！」

リューイはリヴァイアスに全力で剣を叩き込む。リヴァイアスはそれを受け止めながら笑った。

「勝負か！　運命の悪戯はどちらを養護する？　貴様か！　俺様か！　さあ来るがいい！　殺し合いだ！　全身全霊！　徹頭徹尾！　殺し合うとしよう！」
「ふざ、けんなっ！」

リューイは叫ぶ。

「こっちはんなこと望んでねぇんだよ！」
「ほう！？　ならば何故貴様は武器を取った！？　刃を向け向けられる！？　なめるなよ小僧！　いかなる理由があろうと刃を握ったその瞬間から人は鬼となる！　殺人の鬼と！」
「そうならないために戦ってんだよ俺は！　俺たちは！」
「詭弁！　夢想！　理想論だぞ小僧！　殺したくないのなら武器をとるな！　祭囃子が聞こえる中、体を震わせ怯えていろ！　覚悟と共に戦場に立て！　ここは戦場！　死んで花を咲かせる世界！」

リヴァイアスが吠える。ざけんな、とリューイは呟いた。

「死んで花実が咲くものか！　生きろよ！　死んで楽になろうとすんじゃねぇ！」

かつて、リューイ・エンドブロムは死にたいと言ったことがある。
どうしようもなくて。生きていられなくて。
しかし、そこから彼が救い出してくれて。

こうして、生きている。
だから。

「生きてみろよ。生きることが戦いだ！」
「青い！　青いぞ小僧！　我らは騎士！　死さえも宿命！　宿業だ！生きることは確かに戦い！　だが、我らは死を義務付けられている！　故に願うのだ！」

リヴァイアスは戦斧を持ち上げ、そして、言う。

「もっと戦場を。もっと地獄を。もっと、もっとと！」
「……狂ってる」
「地獄の沙汰に正気などいらぬぞ小僧！　我らは望むのだ！　我らが死するに値する戦場を！　地獄を！　煉獄を！　俺様という存在の終わりを！　俺様が死するに相応しい時を！」
「そんなに……そんなに死にてぇなら！」

ガァン、という金属音。リューイは叫ぶ。

「首でも括れよ！　巻き込むんじゃねぇよ！　勝手に一人で死んでろよ！」
「言ったはずだぞ、小僧。『そんなもの』は御免だと」

リヴァイアスは、壮絶な笑みを浮かべる。

「意味のない死など！　無価値な死など！　我らは受け入れはしない！　死を義務付けられるが故に！　受け入れるわけにはいかんのだ！」

もっと、もっと。

死するに相応しい場所があるはずと。

「貴様が『そう』だというならば！　示せ！　誇示せよ！　小僧、否、リューイ・エンドブロム！　貴様はなんだ!?　俺様の死か！？　それとも俺様が、貴様の死か!?」

「知るかんなもん！　テメェの価値観を押し付けてくんじゃねぇよ！」

そして、リューイは得物を握る手に更なる力を込める。

……終わりは、唐突だった。

「あ……っ？」

リューイの腹部から、銀色に輝く刃が突き出ていた。

ゆっくりと、リューイは振り返る。

そこにいたのは、デバイスの先端に精製した魔力刃で自分を貫く、ホムラの姿。

「手ぇ出さへん、なんて言った覚えはないで」

ホムラは、笑みを浮かべる。

ちくしょう、と、リューイは呟いた。

ここが、リューイの限界。

仲間のために命を懸けた、その選択をしてしまった彼の、終焉。

「イノセントバスターA．C．S」

《Ｙｅｓ，ｄｒｉｖｅ》

ーーガドン！！

零距離からの、砲撃魔法。リューイの意識と力が、刈り取られる。

「予定変更や。どうやら、わしの結界を抜いた奴がおる。……悪く思うな」

リューイの意識が、消えた。

◇　◇　◇

砲撃魔法が、地面を抉った。その余波で、ミリアムは吹き飛ばされる。

「あっ……くっ……」

コホッ、と地面に倒れた彼女が咳き込むと、血が零れた。

体内のシステムが、傷ついている。

「うっ……」

「ユニゾンデバイスなんてのは、融合してようやく見れるようなもんだろ？　はっ、単体で出てきた時点で終わってんだよ」

ジャリッ、という音と共に砂を踏み分けながら歩いてくるのは、巨大なライフルを手にした男。

ギレン・リー。

「弱いってのは、そんだけで罪だ。なあ、そう思うだろ？」

ゴリッ、という、生理的に嫌悪感を抱く音が響いた。

ギレンが、彼の近くで倒れている魔導師の頭部に銃口を押し付けた

音だ。

「なにを……ッ！？」

ーーダンッ。

答えは、銃声だった。

「あ、あ、あああっ」

ミリアムの口から、言葉にならない声が漏れる。

今、彼女の目の前で。

大切な仲間が、殺された。

「あっははは！　あーっはっはっはっはっは！」

ギレンが笑い、ミリアムの目に絶望と憤怒、憎悪が入り混じった濁った光が宿る。

「あああああああああああああああああああああああっっっ！！！！！！」

限界を超えた叫び声。あまりにも悲痛な叫びと共に、ミリアムの周囲に風が渦巻く。

ミリアムは、単体でもＡＡ－ランク程度の力は有している。更に変換資質『風雅』による暴風は、その風圧で人の五体など容易に蹂躙する。

しかし。

「はっ！！」

《Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ》

吐き捨てるようなギレンの吐息と共に放たれた砲撃魔法。火を纏うその一撃が、ミリアムの暴風を薙ぎ払う。

「あうっ！？」

ミリアムは吹き飛ばされ、悲鳴を上げる。
ギレンは笑みを浮かべたまま、ミリアムに銃口を向けた。

「さあ、死ね」

簡潔なその言葉は。
躊躇いなど微塵もないことを伺わせるには十分だった。
ミリアムは、思わず目を閉じようとする。
ー風が、流れた。

「ぐっ！？」

突然の奇襲。放たれた拳を受け止め、ギレンは大きく後退する。
現れたのは、一人の魔導師。
英雄と、呼ばれる男。

「流石は司書長だな。ホムラの結界を、いとも簡単に抜きやがった」

セットアップ、と、カグラは呟き、その両手に二丁のライフルを持つ。
驚くべきことに、ギレンを後退させた一撃は、素手の一撃だったらしい。
『英雄』カグラ・ランバードは振り向かぬまま、言葉を紡ぐ。

「立てるか嬢ちゃん。立てるんなら、負傷者連れて、一度退け」
「……ッ」

カグラの言葉を聞き、ミリアムは唇を噛む。
どうした、とカグラが問いかけた瞬間、答えは別の場所から返ってきた。

「負傷者なんていねぇよ。いるのは、死人だけだ」
「……数十人単位で、ここには魔導師がいたはずだ」
「雑魚が束んなってかかってきたところで、意味なんざねぇよ」
「非戦闘員もいたはずだ」
「差別は駄目だろ？　全員、殺したよ。そいつの目の前でな」

ギレンが笑い、ミリアムは悔しさから涙を流す。
そう、この男は見せつけるように自分の目の前で、みなを殺した。
何も、できなかった。
カグラは、一言だけ、呟く。
そうか、と。
ギレンは笑った。

「弱ぇのは罪だろうが。俺は悪くねぇ。悪いのは、そいつらだ」

高々と笑うギレン。カグラは、もういい、と呟いた。ギレンは、はっ、と吐き捨てる。

「テメェもそういや力を失ったんだろ？　そんな力で何をする気だ？　戦場に言い訳は通じねぇぞ？」

ー一拳が、ギレンの頬にめり込んだ。
油断はあったのだろうが、カグラの一撃にギレンは反応できなかっ

た。

「なめんなよ若造。戦争のリアルを知ってるからどうした？　殺さなければ生きられないがどうした？　それぐらい知ってんだよ。いや、俺はそれ以上の『理不尽』を知っている」

毎日一ミリずつ削られていく心。
理不尽と叫ぶ心を黙らせる毎日。
平和の中の、地獄を。

「殺し合いにもマナーがあり、美学がある。きっちり教育してやるよ若造」
「はっ、この程度の力でほざくんじゃねぇよ！」

ギレンが砲撃魔法を放つ。それをカグラは、ライフルを投げ上げ、無手となった右腕で弾き飛ばした。
砲撃の射線が変わり、別の場所を穿つ。
血が滴る右腕でライフルをキャッチし、カグラは言う。

「もう一度言う。なめるなよ若造。たかだか力を半分損ねた程度で、俺が弱くなると思ったか？」

カグラの瞳に、冷酷な光が宿る。

「魔力がないならないなりに戦い方があるんだよ。お前の前に立つのは誰だ？……英雄だ」

ジャキン、という音と共にカグラのデバイス『ヘルダスト』が作動する。

「いい気になるな。お前如きが超えられる程、俺は弱くない。いつもならじっくり教育してやるところだが、お前は俺を怒らせた」

罪は二つと、カグラは言った。

「俺の仲間を傷つけたこと。俺の仲間を殺したこと。テメェは殺すだけじゃ飽き足らねぇ。殺して並べて晒してやる」

覚悟しろ、とカグラは言った。

英雄の足下に、ミッド式とは僅かに形を異にする魔法陣が出現する。

翼をもがれた英雄は、それでも尚、空を飛ぶ。

「管理局をなめるなよ。世界を知らん、若造が」

反撃、開始。

第十五話　定められた終焉（後書き）

主人公とヒロインが不在でも、物語は動きます。
各々の想いや理由が、少しずつ明らかになってきました。特に、あまりにも理不尽な力を持つテンリュウ・シンドウ。彼女について全てを語れる日も近いかもしれません。

……十五話です。はい、長くなりました。すみません。
とりあえず今回の友人ツッコミはこれに尽きます。

「テンリュウの強さ理不尽だろ。あと、カグラがイケメン」

作品の流れに対して何もないのは相変わらずです。
次回ですが、またまたファイムとはやてサイドに戻ります。
できるだけ早くお届けできるよう、努力します。
お付き合いくださる皆様、本当にありがとうございます。
感想など頂けると、本当に励みになります。
いつもメッセージをくれる方、そしてそのご友人。
更新を早くできるよう頑張ります？
良ければ今後もお付き合いを？

ではでは、次回予告を。

次回予告

遂に訪れるのは、選択の時。
擦れ違い、触れ合うことのなかった二人は、ここから始まる。
終わりと覚悟を定めた青年はどちらを選ぶのか。
真実を知った女性は何を選び、決めるのか。

定められた終わりの運命が、刻一刻と迫り来る。

「あなたに出会えたこと。それが、僕にとってこれ以上ない幸福です」

次回、第十六話

「あなたはわたしに微笑んで」

第十六話　あなたはわたしに微笑んで

月明かりに照らされた彼女は美しく。
理性を、放り投げそうになった。
だが。
それは許されない。
彼女の側にいられても。ファイム・ララウェイは彼女に触れることは許されない。
終わりの決まった自分が、そんな身勝手なことは許されない。

「……いけません、はやてさん」

声が震えていたことは、自覚していた。はやては、どうして、と呟く。
ファイムは、頭を振った。

「僕では、あなたを守れない。守りきることはできない」

確かに、誓った。
守ると。彼女の選択次第では、管理局から逃げることさえ厭わぬと。
だが、それは。
あくまで命を使うという前提と、自らさえも死するという結末を覚悟してのことだ。
だから。
ファイム・ララウェイは、彼女に触れることは許されない。

「僕はあなたを許すと言った。望んでくれるのなら、側にいるとも言った。だけど、だからこそあなたを抱くことはできない」

そこまでのことをしてしまえば、もう、戻れなくなる。
背負えない。
意志とは関係なく、ファイム・ララウェイという人間に、その資格がないのだ。

「僕は弱い。あなたを守ること、守り通すことが、できない」

それは、あまりにも冷徹な結論だった。
血が滴るほどに拳を握り締めてでも受け入れたくない結論。
だが、ファイムは。
自身が弱いという絶対的な事実を。
そんな現実を受け入れまいと叫ぶ本能を黙らせる理性を、持っていた。
持って、しまっていた。
故に。

「僕は、はやてさん。あなたが好きだ」

その言葉はあまりにも優しく。
何よりも、悲しかった。

「あなたを愛してる。あなたのためなら、世界だって敵に回してもいい。僕を救ってくれたあなたを、誰よりも想っている」

初めてだった。誰かのために命を懸けようと思ったのは。
救われた。助けられた。
どうしようもなく、惹かれていった。

「あなたを守ることができない僕に、資格はない」

ファイムは、俯いていた。
はやてを、見れなかった。
そんなファイムに、はやては。

「顔、上げて」

ーーパァン！！

一片の容赦もない、全力の一撃だった。はやては、泣きながら言葉を紡ぐ。

「なんでっ……どうしてっ、どうしてそんなことっ……！？」

はやては嗚咽を漏らしながら、ファイムに詰め寄る。

「守れないとか、資格がないとかっ……そういうことやない、そういうことやないやろ！？」

はやては、叫ぶ。ファイムは、僕は、と、声を漏らした。

「僕は敗者だ。罪人で、命も残り少ない。あなたを愛する資格なんて」

「資格なんて誰にだってあらへん！　あるのは気持ちだけや！　違うんか！？」

「……それでも」

「でももだってもない！……それとも、嘘なん？」

はやては、一転、不安そうな表情を浮かべた。
それは、あまりにも儚く。
ファイムの胸が、痛んだ。
はやては、ファイムに問いかける。

「わたしは、嬉しかった。ファイムくんが、好きやと言ってくれて。せやけど、あれは全部嘘？」

嘘なわけがない。

そんなことで、嘘など吐こうはずがない。

「嘘じゃない……嘘のはずがない！　はやてさんへの想いは真実だ！」

ファイムは、耐えきれなくなったように、想いを紡ぐ。

「一緒に！　共に！　あなたの側に在りたい！　あなたを守りたい！　ずっとずっと！　それが僕の気持ちだ！」

「それなら！　来て！　わたしをーー」

ーードサッ、という音と共に、はやてがベッドの上に倒れた。

否、倒された。

ファイムの手によって。

「……そんな顔、したらアカン」

はやては、優しく、自分を押し倒したファイムの頬を撫でた。

「わたしが、ファイムくんを守るから。だから、ファイムくんはわたしを守って」

はやての言葉。

それは、あまりにも。

「無理なんかやない。支え合うんや。ファイムくんとなら、きっとできる」
「……本当に、それでいいんですか？」
ファイムは、尚、問いかける。
自分などで良いのかと。
はやては、苦笑した。
「そんなこと、言わせるもんやないよ？　聞きたいことは、たくさんあるけど、今は」
はやては、ファイムの頭に手を回す。
「こうすることが、幸せやから」
「……はやてさん」
互いの吐息がかかるほどの距離で。
ファイムは、言った。
「ありがとう」
……未だ、迷いはある。躊躇いもだ。
しかし、ファイム・ラフラウェイは選択した。
勢いであろうと、なんであろうと。
彼女を、愛すると。
故に、告げなければならない。
自らの全てを。
ただ、今は。
「……」

当たり前のように、唇が重なった。

◇　◇　◇

語った真実は、大したものではない。
両親などない、人造生命として生み出されたこと。
人造生命としてはそれなりだったが、人造魔導師としては失敗だったこと。
戦場で生きてきたこと。
その過程で右の手足を失い、ジェイル・スカリエッティに戦闘機人の手足を付与されたこと。
そこからの逃亡でカグラ・ランバードに出会い、管理局の道具となったこと。
命を使う術式を、手にしたこと。
そして。
駆け抜けた１２年は、ファイムの命を削り取ったこと。
余命は、１０年。

「……これが、今の僕」

ファイムは、微笑みさえ交えながら、自らの人生を語った。
なんと、簡潔な人生か。
語ることに、一時間とかからないのだから。

「１０年という時間は、魔法を使わなければの話。今のペースで魔法を……命を使い続ければ、２、３年」

これが理由だと、ファイムは苦笑した。
ファイム・ララウェイが、はやてを愛する資格を持たぬと謡った理由。

「そんな、そんなこと」

ファイムと向き合う形で座るはやてが、首を左右に振る。ファイムは、いいんです、と言葉を紡いだ。

「これが僕の選んだ道。後悔はありますし、未練もある。過去を振り返ることも幾度となく」
「なんで、それなら、なんでそんなになるまで……」
「それでも、選んだからです」

敢えて言わなかったが、最近までは、自分の道に対して何も思うことはなかった。
後悔も、未練も、考えたことすらない。
はやてに出会い、そして、救われるまで。
彼女に救われたから。
人に、なれた。

「それに、その道を選んだからこそ、出会うことができた」

多くの人に。
大切な人に。
この道を選ばなければ、きっと、はやてと道を交えることはなかったろう。

「ならば、意味はある。僕の道には、しっかりと」

出会うために。
そう、きっと……。

「……でも、それなら、わたしは」

はやては、両手を握り締めながら、震える口調で呟いた。その手を、ファイムは優しく包み込む。

「僕の命など、考えずとも構いません。はやてさんは、はやてさんの道を選んでください」
「でも、わたしが選んでしまったら、ファイムくんは……」
「でももだってもないのでしょう？」

ファイムは、微笑んだ。

「あなたが戦えと申すのならば、僕は戦いましょう。あなたが生きろと申すのならば、逃亡者となっつでも生き延びましょう」

その台詞がある種、卑怯者のそれであることを、ファイムは理解していた。
自身の命の選択を、こんなにもか弱い女性に決めさせようというのだから。
しかし、それでも良いのだ、と、ファイムは思った。
結局、今のファイム・ララウェイの『選択』は、何をおいてもはやてのためなものであるだろうから。

「……決められへん。決められへんよ、そんなこと」
「今すぐでなくても構いません。ただ、あなたはあなたの幸福をひたむきに願ってください」

それが、何よりの願いだから。
はやては、なら、とファイムに問いかけた。

「ファイムくんの幸せは、何なん？」

微笑み。
そんなもの、決まっていますとファイムは言った。

「あなたに出会えたこと。それが、僕にとってこれ以上ない幸福です」

◇　◇　◇

「それじゃあ、行ってくるね？」
「行ってらっしゃい」

朝。日曜日に出かけようとするはやてを、ファイムは見送る。
はやてが向かうのは、アリサ・バニングスのところだ。

「あはは、ちょっと……怖いなぁ。喧嘩、してしもたしね」
「あなたのご友人なら、大丈夫」

敬語と、日常語の間。
そんな、不安定な言葉をファイムは口にする。
これが、今の二人の距離。
だが、それでいい。
ここから、紡いでいくのだから。

「僕が行っては邪魔になりますから」
「また、敬語」
そっ、と、はやては人差し指をファイムの口元に当てた。
ファイムは苦笑。
「それは、追々です」
「そうやね。……行ってきます」
はやては、そう言ってファイムに背を向けた。ファイムはその背を見送り、そして、息を吐く。
やはり、未だ迷いがある。当然だ。選択の余地を与えられなかった者が、突然、選択を迫られたのだから。
それに……はやては優しい。
あまりにも、優し過ぎる。
だからきっと、難しい。
彼女は自らの受難より、他人の苦痛を憂う人だから。
「ままならないね……。まあ、言っても仕方ないけれど」
はやてのことは、はやてが決めるべきだ。
それに。
ファイムには、やるべきことがある。
「キーワードは、一つ」
こちらへ来る際、少々無理を言ってユーノに貰った数百という枚数の資料を取り出し、ファイムは呟く。
「古代ベルカの『聖人』オリヴェント」

王ではない、一人の人間。
数多く存在する風聞の中でも、とりわけ知名度の低い人物。
『聖王』、『覇王』、『雷帝』、『黒王』など……数多存在する王や英雄に比べると、その知名度の低さは圧倒的だ。
むしろ、実在さえ疑われるその人物を、ファイムは調べ続けてきた。
何故なら。

「オリヴェント式……命を使う術式。その全てを、彼女が創った」

ー一理由など、その一言で十全足る。
ファイムはずっと、自身の力の無さを嘆き続けてきた。
カグラに授けられた、命を使う術式。その術式の名が『オリヴェント式』と呼ばれるのを知ったのは、四年前だ。
レジアス・ゲイズ中将が死した直後、カグラ・ランバードはファイムに問いかけた。

『表舞台に立つ気はあるか？』

最初は意味がわからなかった。ただ、裏で生きることを止めることはできなかった。
だが、それでもカグラは自分を導いてくれた。
執務官。ＪＳ事件のほとんど直後に『それ』になることができたのも、きっと、彼のおかげ。
無限書庫で働いていた自分を、『雷光の死神』と戦う誉れに招いたのも、カグラだ。
彼はそうまでして、ファイムを表舞台に引き上げた。
理由は知っている。
意図も、何もかも。
彼にとって、『ファイム・ララウェイ』は切り札だから。

「古代ベルカの、戦乱末期の資料は……」

しかし、ファイムはそれに応えなかった。
管理局を変えるという彼の目的、それを叶える最後の手段であったというのに。
それも……『選択』。
世界はままならない。どうしようもなく、これほどまでに思い通りにならない。
しかし、そんな世界でファイムは戦うことを決めたのだ。
だから、理解がいる。
四年前にカグラに告げられた『オリヴェント式』という魔法は、古代ベルカを始まりとする。
更なる力を得るために。
はやてが戦う道を選ばなければ、意味はない。
だが。
逃げるにしても、力はいる。

「『聖王』と『覇王』の一騎打ち……違う、きっともう少し前だ」

ユーノが渡してくれたのは、古代ベルカ時代の片端からの膨大な情報だ。
『聖人』についての情報は少ない。故に『聖人』が生きたとされる時代の情報の全てが必要だった。
これでもユーノなりにしぼってくれたのだろうが、四年かけても未だ実体が掴めない。
カグラに問われ、表舞台に立つ道を示されたあの日から。
ファイムはずっと、力を求めていた。
リューイ・エンドブロムに叫んだように。
力がない自らが嫌で。

自分にできることをすると決めてからも、それでも力を求めた。
ジュエルシードを使ったのもまた、それが理由。

「……論理は無茶苦茶。理由なんて、矛盾だらけ」

ファイムは資料を漁る手を止め、苦笑した。
自分という存在はこんなにも混沌としていたのだと、思い知った。
かつての自分は、あんなにも簡単だったのに。
銃を構え、引き金を引く。
ただそれを繰り返すだけの、機械だったのに。
変わったのだ。
単純な機械から。
矛盾を孕み、混沌とした、『人間』に。
「シグナムさんが言うように、これが強くなった、ってことなのか……」

それとも、弱くなったか。
無意味な問答だ。答えがわかる時は、こない。

「……考えても仕方ないね」

ファイムは呟き、資料に目を通していく。その中で、とあるものが目に付いた。

「……ロストロギアの情報？　どうしてまた。ユーノさんらしくない」

その資料は、とあるロストロギアについて記されているものだった。
だが、ファイムが欲したのは術式と『聖人』の情報。ロストロギアの情報は必要ない。

ファイムは、訝しげにそのロストロギアの資料を目に通す。

「……『聖人の領土』……？」

彼が探す『聖人』の単語を見つけ、ユーノがこれを用意した理由を悟る。

だが、そのことよりも。

ファイムは、その内容に体を震わせた。

「『『聖王のゆりかご』によって封じられた、史上唯一の楽園。そこは、運命操作によって形作られた空間により』……運命操作？」

聞き慣れない言葉だ。ファイムは、更に読み進めていく。

「『しかし、孤独なる『聖人』は王でなく、故に民はいない。いたのは『唯一人からなる無敵の軍勢』のみ。故にそこは人にあらざる者たちの領域であり、魔性の地。人智の及ばぬ魔界』……要領が掴めないな」

ファイムは呟く。書かれていることは抽象的なことばかりで、唯一わかるのは史上最強の質量兵器『聖王のゆりかご』によって封印されたということぐらいだ。

そもそも『聖人』は軍勢を率いる王でないことは、調べがついていたことでもある。

ただ、ファイムはその名をーー『聖人の領土』と呼ばれるロストロギアの名を、口にした。

「……『失楽園シャングリラ』」

それはまるで。

不吉な調べのようだった。

◇　◇　◇

月村すずかの暮らす家は、相変わらずの豪邸だった。アリサの家にも行ったのだが、こっちにいると聞き、はやてはここに来た。
はやてが訪れると、すぐさま月村家のメイドのファリンが出迎えてくれた。
そして、はやてはアリサとすずかの二人がいる部屋の前に立つ。

「……」

大きく深呼吸。
そして、はやては扉を開ける。

「……思ったより早かったわね」

扉の先では、アリサがワインをグラスに注いでいるところだった。
グラスの数は、三つ。
いつもなら微笑を浮かべているすずかも、真剣な表情を浮かべている。
挨拶の一つでもすべきだったのかもしれないが、はやてはただ、無言で座した二人の下へと歩み寄った。
それが、この場には相応しい。

「ふん、相変わらず迷ってるみたいだけど……マシな顔になったじゃない」
「お陰様で。……ああ、アリサちゃん」

「ん？」

ーーパシン。

はやての一発は、正確にアリサに叩き込まれた。はやては笑う。

「昨日のお返しや」

アリサは呆気に取られたような表情を浮かべた後、すぐに笑顔になる。

「上等じゃない。座りなさいよ」

「うん。……ようやく、わたしにもわかってきたから」

何が、とは、二人とも聞かなかった。

聞く必要など、ありはしない。

「色んなことがあって。自分を否定しそうになって。逃げるように、帰ってきて」

はやては、静かに語り始める。

「でも、踏みとどまれた。アリサちゃんと、すすがちゃん。そして……ファイムくんのおかげで」

あまりにも優しい彼に救われた。

はやては、自身の顔を覆う。

「許す、って、言ってもらえるのがあんなに嬉しいなんて、思わへんかった。救われるんやね」

たった一言で、と、はやては言った。
簡単な言葉だった。難しい言葉ではなかった。
許す、という言葉と、側にいるという言葉。
彼の約束に、救われた。
アリサが、良かったじゃない、と、ワインを煽りながら笑った。

「あんたはさ、なんていうか……あたしたちの中で一番大人だったから」
「シグナムさんたちの主として、管理局のエリートとして……無理してるの、バレバレだよ？」

アリサとすずかが、それぞれ言葉を紡ぐ。はやては苦笑した。
アリサは、だから、と呟く。

「あんたが弱音を吐ける相手が見つかって、本当に良かったわ。いい人みたいだし？」
「ふふっ、アリサちゃん。そんな悔しがらなくても」
「ちょっ、すずか！？」

アリサが焦る。すずかは、ふふっ、と笑った。

「アリサちゃんってば、自分がはやてちゃんの弱音を聞けないからって」
「ちょっ、黙りなさいすずか！？」

アリサは必死にすずかを止めようとする。
だがすずかは笑ったままだ。

「アリサちゃん、素直じゃないよね」
「確かになぁ。それは前から思ってたとこや。俗に言うツンデレや

しね」
「だ……っ、誰がツンデレよ！？」
「「そういうところ」」
「ぐっ……！」

アリサは押し黙り、はやてとすずかは笑った。
アリサはごほん、と照れ隠しのように咳払いをすると、はやて、と言葉を紡いだ。

「あたしたちは、あんたの今までを絶対に否定しない。あんたのしてきたことは無意味なんかじゃない」
「はやてちゃんの努力と気持ちは、間違ってない。胸を張って、誇っていいものだよ」
「……アリサちゃん……すずかちゃん……」

知らず、はやての瞳から涙が零れた、アリサが苦笑する。

「あんたが泣くなんて、珍しいわね」
「我慢強いもんね」

はやては、嗚咽を漏らしながら、必死で涙を拭いていた。だが、溢れる涙は止まらない。
アリサは、いいわよ、と、言葉を紡いだ。

「泣きなさいよ。泣いて、泣いて、泣いてから、立ち上がればいい」
「たまには立ち止まらなくちゃ。じゃないと、疲れちゃうよ？」

二人の優しさが、心に染みていく。

「前を見て、歩きなさい。あんたは一人じゃない」
「辛いなら、苦しいなら、いつだって私たちは支えるから」

はやては、頷く。何度も何度も。
一人じゃない。
自らの道に、意味はあった。
ならば。
選ばなければならない。
八神はやての道を。
初めて与えられた、選択を。
全身全霊を以て。

「……ありがとう、な」

答えは、一つ。
それは、あまりにも悲しいもの。
しかし、はやては決めた。
彼女の意志で。
たった一つの、その答えを。

ーー想いは、尊く。

◇　◇　◇

それは、邂逅。
出会うべきではなかった、本来なら有り得ない『現象』だった。
しかし、出会う。片側は意図し。
片側は、知らずに。

夕飯の買い物を終え、帰り道を歩いていたファイム。その帰り道、珍しいものを見た。

「すげ～」
「もっとやって～」
「わ～」

子供たちの無邪気な声。見ると、道端で仮面を被った男が、ジャグリングを披露しているようだった。たくさんの子供がそのマジシャンに群がっており、少し離れたところでは大人たちが見守っている。そのマジシャンが、ファイムのほうを見た。仮面から覗く瞳が、こちらを射抜く。
ー一違和感。
それが、脳裏を過ぎった。

「さ、今日はここまで。ありがとうね」

仮面のマジシャンが言い、子供たちが散っていく。もっと、という催促を、マジシャンは断っていた。
そして、マジシャンはファイムに軽く頭を下げる。つられてファイムも頭を下げ、そして。

「これを外さないのは容赦してもらえるかな？　あまり素顔は晒したくないものでね」
「気にしませんよ」
「寛容で助かるよ、青年」

マジシャンは笑った。ファイムは、お上手なんですね、と言葉を紡

いだ。
マジシャンは、ははは、と笑う。
「褒められると、悪い気はしない。……腹の探り合いはここまでにしようか、青年」
「……」
空気が変わる。表面上は何の変化も見せず、ファイムは臨戦態勢に入る。
マジシャンは、笑った。
「そう身構えるな、青年。私には、キミと相対する力はない。キミは、この世界の住人ではないだろう？」
マジシャンは笑いながら、そう告げる。ファイムは、返答に窮した。確かに、ファイムはこの世界の住人ではない。しかし、それを知っているのは、この世界では僅かな人間のみ。また、それがわかるということは……。
「管理世界の者が管理外世界へ来ることは、原則的に禁止ですが」
「なに、ちょっとした物見遊山だ。特に何かをするつもりはない」
「信用しろと？」
「してもらわねば、私が捕まるだけだ」
マジシャンは肩を竦める。どこまで本気か、わからない。
まあ、どちらにせよファイムは余程でなければ手出しはしないし、できない。彼はここにいないはずの人間なのだから。
「なに、私はただの旅行者であり放浪者だ。まだ見ぬ世界……特に、管理局の関わらぬ世界は実に美しい」

「……管理局を、否定するのですか？」
「否定は人の権利だよ、青年。肯定もまた然り。それを認めぬというなら、成程、管理局とは暴君なる組織だ」
いかなる意志をも認めてこそ自由であると、マジシャンは言った。
「無論、武器を取っての叛意ならば見過ごせないことだろうがね。ただ、思うだけ、考えるだけでは罪ではない」
「……敵があってこそ、華は輝く。道理ですね」
「ほう？　もう少し堅物かと思っていたが。中々話せるではないか、青年」
「事実をただ事実として客観的に受け止めるのは、必要なことです」
敵のない組織など、いずれ滅びるしかない。それは、古今東西で証明されてきた事実だ。
そんなことを言いながら、ファイムは違和感を感じていた。
今日初めて会った人間と、何を話しているのか。
マジシャンはファイムのそんな内心は気にも止めず、言葉を続ける。
「青年、キミは管理局に対して何の疑問も抱かぬのかね？」
「……管理局に属する人間に対する問いではありません」
「そうでもないぞ、青年。属する人間にさえ叛意は芽生える。そうでなければ、クーデターなどという概念が成立しようはずがない。この世界にある『下剋上』もまた然りだ」
マジシャンは笑っている。仮面で表情は伺えないが、笑っていることは容易に理解できた。
「青年、キミには死相が見える。そしてそれを受け入れている。キミを『そう』させたのは、管理局ではないのかね？」

小道具を全てしまい終えたマジシャンは、そんな風に最後の問いを紡いだ。
ファイムは、迷いなく答える。

「選んだのは僕です。結末の全てを予測した上で、僕は歩んできた」

そこだけは、譲れぬ一線。
選んだのは、選んできたのは、ファイム・ララウェイという人間なのだ。
マジシャンは、成程、と笑う。

「面白いぞ、青年。実に面白い。キミは『そう』なのか」

成程成程、と呟きつつ、マジシャンはファイムに背を向ける。

「その道行きに幸多からんことを」

そうして、マジシャンは去り。ファイムは疑問を抱いたまま、マジシャンとは逆方向に歩き出した。

ー着信。マジシャンの男は、ポケットから通信機を取り出した。
この世界に存在する『携帯電話』よりもコンパクトなそれは、通話機能のみに特化した、次元間通信を行える装置だ。

「……何かね？」
『お、宗主～。準備完了だよん♪　ロストロギアの反応を、管理局が感知。2、3日には動くだろうね～♪』
「ほう。それはそれは。彼らはどうだね？」

『絶好調♪　特にギレンが張り切っててね～♪』
「ふむ、上々だ。私も戻るとしよう」
『ちゃーんと、例の部隊が動くように手を回したし？　万事抜かりなし♪』
「素晴らしい」

とんとん拍子に進む会話。互いの言葉は、ただの確認だ。
宗主と呼ばれる男は相手の力量に対して信頼を置いていたし、逆に、向こうは向こうで自身の力でそれが為せない事実がありえないと理解していた。
故に、ここまでは茶番。
大事なのは、この後だ。

「では、同志よ。『あれ』についてはどうだね？」
『んー……正直、芳しくないかな？　例のスパイさんがとってきてくれた古文書を解読してるんだけど、全然上手くいかなくてさー』
「ほう？　それほどまでに難解かね？」
『基礎は古代ベルカ語で、何となくは掴めたんだけど……途中からわけわかんない言葉が出て来てるんだよね』
「ふむ……それは、古代ベルカ語ではないのだね？」
『全く違うね。おそらくだけど、かの『唯一人からなる無敵の軍勢』の生まれ故郷の言葉じゃないかな？』

珍しく、真剣な声色だった。マジシャンの男はふむ、と吐息を漏らす。

「ならば、彼女に協力を仰いではどうかね？」
『キャハハ♪　どの口が言うんだか♪　無理無理、できるわけないよん♪』

打って変わって楽しそうな台詞。

『殺されるよ？　彼女は、『その結末』に至らないための存在なんだから』

「わかってはいるがね。まあ、『剣聖』については手がある。彼女は結局、主には従うしかない。発動に至れば、後はどうとでもなる」

『キャハハ♪　やっぱり鬼だ♪』

「なに、必要とあらばな。……それで、同志よ。不可能かね？」

相手の笑いが、途絶えた。

そして、底冷えのするような声が響く。

『ボクを誰だと思ってるの？　グリス・エリカラン。『アンリミテッド・デザイア』の継承者。一週間だ。それだけあれば必ず解読する』

「ー期待している」

それだけを言うと、通信を切った。

そして彼は、空を仰ぎ見る。

「さて……ロストロギアを取り込んだ極めつけの『イレギュラー』である彼は、どうするのかな？」

楽しそうに、男は笑っていた。

「『失楽園シャングリラ』……世の因果さえもねじ曲げる『運命』そのものを相手に、どう出る？　管理局？」

狂おしく。禍々しく。

抱き続けてきた夢は、もうすぐ叶う。

成就の時は、近い。
手を広げ、謡うように口にする。

「さあ、世界を救おうか」

◇　◇　◇

八神宅。
夕飯はいらないとあらかじめ連絡があったため、ファイムは簡単に済ませると、引き続き資料漁りをしていた。
もっとも、多くは不明のままだ。『聖人』と『唯一人からなる無敵の軍勢』……たった二人の勢力についての情報はあまりにも少ない。更に。

「『聖王』や『覇王』との共闘の記述があるかと思えば、逆もある。特に『聖王』には敗北を喫している」

どこまで信じて良いのかわからないが、『ゆりかご』を用いた『聖王』の万を超える軍勢を相手に、たった二人で戦い抜いたという。
結果として、古代ベルカ最強と謳われる『聖王』に敗北するものの……その誉れには少しの恥もない。

「……掴めないな」

この二人がどのような人物で、どのような経緯を以て歴史に名を刻んだのか。
それが、わからない。

「……ふう」

結局、『オリヴェント式』に対しての有益な情報は得られなかった。
ファイムは、資料を片づけ始める。その途中て、気配を感じた。はやてが帰宅したらしい。
ファイムは玄関まで行くと、その人を出迎える。

「おかえりーー」
「ただいまっ！」

言い切る前に、はやてに押し倒された。香るアルコール臭。……どうやら、酔っているらしい。

「はやてさん……酔ってますね？」
「酔ってへん。あと、敬語アカン」
「酔っている人はみんなそう言います」

敬語に対する言葉をスルーし、ファイムはため息を吐く。

「水を持ってきます」
「嫌や！」
「嫌って……」

上体を起こしながら、ファイムは苦笑。そのファイムに、はやては縋りつくように抱きついた。

「……だって、こうでもせぇへんと、言えへんもん」

ファイムの胸に、温かいものが触れる。
はやての……涙だ。

「わたしは弱いから、だから、こんな風にしないと、言えへん」
「……」
ファイムは無言で、はやての頭を撫でる。ただ、言葉を待つ。
そしてはやては、意を決して言葉を紡いだ。
「わたしな……戦うことにしたよ」
前に進むと。
傷つき、心折られそうになりながら。
はやては、そう言った。
ファイムは、問う。
「それが、はやてさんの選んだ道なんですね？」
その問いに、はやてはゆっくりと頷いた。
「……誰からも影響を受けずに決めるなんて、無理や。わたしがわたしであるのは、みんながいてくれるから、せやから、わたしだけの意志じゃないかもしれへん」
弱音のようなその言葉と共に。
それでも、とはやては言った。
「これはわたしが選んだこと。決めたこと。ここで立ち止まったら、きっとわたしは後悔してしまう。自分で自分を許せへんくなってしまう」

だから、八神はやては選んだ。
苦悩し、惑いながら。
戦うことを。

「……ごめんな」

だからこそ、はやては謝る。
許されぬことと知りつつも。
償えぬことと知りつつも。
何故なら。
八神はやてが戦うということは、即ち……

「わたし、ファイムくんに死ねって言ってる」

ファイム・ララウェイに、死を強制することに他ならない。
戦う度に、彼は命を削っていくのだから。
しかし。

「いいんです。あなたがそれを選んだならば」

死など、すでに覚悟していた。
だから、ファイムは頷く。
そのファイムに、はやては言った。

「……生きて」

震える手で、ファイムを抱き締めながら。

はやては、願う。
選んでおきながら。
選んだからこそ。

「生きて、ください」

かつて、ファイムにはやては『生きろ』と言った。
そして、再び彼女は生きろと言う。

「一日でもいいから。一日でも長く、生きてください。定められた運命になんて、負けないでください」

ファイムは、強く、強く、はやてを抱き締める。
言葉は、いらなかった。
ーー約束。
何よりも尊い、大切なものが結ばれる。
ファイムは、震える声で、言葉を紡ぐ。

「生きます。必ず」

第十六話　あなたはわたしに微笑んで（後書き）

八神はやては戦うことを決意し、同時にファイムに『生きて欲しい』と願います。
二人は互いに依存しあいながら、戦いに向かっていきます。
矛盾を孕み、惑いながら。

はい、十六話です。
はやてとファイムの道行きが、決まりつつあります。
時間軸は十五話の2、3日前。
ただ、この二人の結論はあくまで二人のものであり、故にそこがポイントとなります。

次回ですが、少し短めのインターバルを挟みます。
時間としては過去の話。
カグラ・ランバードの過去、そして彼の理由が語られます。
短めの予定なので、すぐお届けできると思います。
では、第十六・五話。
「変わってしまった世界」

第十六・五話　変わってしまった世界

その日も、何の問題もなく過ぎるはずだった。
『二人のエース・オブ・エース』の両方が召集されたのは疑問だったが、逆にそうだからこそ問題はないはずだった。
まあ、相手はロストロギア。油断は禁物。カグラ・ランバードは、自分に何度もそう言い聞かせた。
何故ならーー

「カグラくん」

名を呼ばれる。振り返ると、そこには一人の少女がいた。
互いに、まだ十代の前半。しかし、気持ちだけは本物だった。
トモエ・イルハート。
カグラの親友の妹であり、婚約さえ交わしているカグラにとって誰よりも大切な人である。

「トモエ。準備は終わったのか？」
「うん。ばっちり」

軽いガッツポーズをトモエは見せる。トモエは空戦Ａ＋ランクを有する魔導師だ。カグラや、彼女の兄であるホムラと比べると大きく見劣りするが、実力の程は確かな人物である。

「無理はすんなよ？」

いつもと同じ文句を、カグラは口にする。
トモエとカグラは互いに所属する部隊が同じだ。首都防衛隊。もっとも、カグラは教導官として出向しているだけで、正式な隊員ではは

ないのだが。
何せカグラ・ランバードはかの戦技教導隊の、第二部隊隊長。地上にいるには、相応の理由がなければ叶わない。
トモエは、うん、と頷く。

「夢見が悪くて、少し不安だったけど、カグラくんがいるから、大丈夫」

そこに込められていたのは、絶対的な信頼。カグラは照れながら、まあな、と頷く。

「何があろうと守るさ、必ず」
「うん」

トモエは笑顔で頷く。その頭をカグラが優しく撫でると、また後で、と嬉しそうな顔でトモエは去っていった。
その後ろ姿を見えなくなるまで見送り……。

「出て来いテメェ」
「おや、バレとったか？」

カグラの言葉で廊下の角から姿を現したのは、ホムラ・イルハートだ。その手には、カメラがある。

「シャッター音丸聞こえなんだよテメェは」
「あら？　音は消したはずやけど」
「俺の耳をなめんじゃねぇよ」

ったく、と呆れた顔で言いながら、大体テメェは、とカグラは言葉を紡ぐ。

「覗き見してんじゃねぇよ。仕事はどうした？」
「その問いをそのまま返す」
「俺は終わってんだよ馬鹿か。で、お前は？」
「これから？」

ーーガンッ。
ホムラの脳天に、手加減なしの一撃が叩き込まれた。ホムラは頭を抱えて痛がる。

「痛ったーーッ！？」
「疑問符浮かべて誤魔化そうとすんじゃねぇよ馬鹿野郎。さっさと部隊の編成終わらせろタコ」
「うう、鬼や……鬼がおるでここに。あと、馬鹿じゃなくて阿呆と言って」
「阿呆」
「それでええ」

何事もなかったかのようにホムラは立ち上がる。この男との付き合いは長いが、未だにわからない。
「ま、とりあえずやな。その部隊編成についてちょいと隊長であるお前と話し合おう思てな」
「最初からそう言え」
「いやー、だってお前、トモエと話しとる時キャラ違うんやもん」

くっくっく、と本当に楽しそうにホムラは笑ったが、カグラの目がヤバくなってきたことに気付き、笑うのを堪える。
カグラは、はぁ、とため息を吐くと、それで、と問いかけた。

「話ってのは何だ？　これ以上ふざけやがったら殺すぞテメェ」

「受けて立つ……と言いたいとこやけと、それはまたの機会やな。今回は真剣やねん」
「お前がマジな話を持ってくるのは珍しいな。明日は雨か？」
「……カグラ、わしかて怒ることはあるんやで？」

ホムラは冷たい目でカグラを見るが、カグラは特に悪びれた様子もなく、肩を竦めただけだった。
これが、二人の関係だ。
親友であり、戦友であり、好敵手である二人の。
ホムラは、全く、と呟いてから資料を取り出し、カグラに渡した。
カグラはそれを受け取ると同時に、内容を理解する。

「隊員のリストか」
「せや。名前と所属、そんでランクが書かれとる」
「……地上の奴が多いな。ランクはまあ、俺とお前がいるから低くてもある意味納得できるが」

資料を見ながら、カグラは呟く。
ホムラは、しかも、と言葉を紡いだ。

「わしやお前の教えたことあるとこばっかりや。……なーんか、裏ありそうちゃう？」
「今更だろ」

ホムラに資料を返しながら、カグラは言った。

「上の連中の権力闘争なんてのは昔っからだろ。俺やお前が巻き込まれんのも」
「ま、せやな」
「ただ……トモエを巻き込むんなら容赦しねぇ」

カグラの瞳に、鋭い光が宿る。ホムラは、微笑んだ。

「……わしな、トモエに甘いやろ？」

「つかシスコンだろ。お前が『恋人にしたい局員ランキング』最下位常連なのはそれが理由だもんな」

「やかましいわっ！　貴様も似たようなもんやろが！」

「婚約者いる奴が上位でどうすんだ馬鹿」

「ぬぬぬ……ごほん。まあええ。いや、良くないけどええことにしとこ」

「無茶苦茶だな。で？」

「おう。……ずっと、負い目があったんや。わしのせいで、トモエはこっちに留まらざるをえなくなったんやないか、って」

ホムラとトモエは転送事故により管理外世界からやってきた。

そして、ホムラの異常なまでの魔力量と、本人の希望もあって管理局に入局した。

だが、トモエは？

ホムラしか肉親がいない、当時十にも満たない少女は？

選択肢など、なかったのではないかとホムラは思うのだ。

「せやから、なんや、照れくさいんやけど……お前には、ホンマに感謝しとる」

「感謝？」

「おう。わしにはどうしても、トモエは遠慮してまうからなぁ。お前がいてくれりゃ、あいつは大丈夫やと思えるんや」

ホムラは笑い、馬鹿が、とカグラは言った。

「救われてんのはこっちだよ。人と関わること自体が少なかった俺

に付き合ってくれんのは、クロすけとエイミィ除きゃお前らだけだしな」

カグラは、歩き出す。

「一生かけてでも守ってみせるさ、親友」

「当然や。トモエを幸せにせんかったら、わしがお前を殺すからな？」

「上等」

二人は笑う。

ーー逃れ得ぬ終焉が、近付いているとも知らずに。

◇　◇　◇

夜。その少女は、震える体を必死に沈めていた。

「……ッ」

襲い来るのは、恐怖。少女は、自らが目にした夢に恐怖を覚えていた。

何故なら、彼女の見た夢は高い確率で現実となる。

未来視。それが、少女の持つ力だった。

そして、だからこそ。

少女は、恐怖する。

「……このままじゃ、カグラくんとお兄ちゃんが……」

泣きそうな、いや、涙に濡れた声で、少女は言った。

「……二人が……死んじゃうよ……！」

闇の中。

虚しく、その声は響き渡った。

◇　◇　◇

出発前。カグラは、目の前で繰り広げられる相変わらずの光景に、呆れてため息を吐いていた。初見であるらしい他の隊員たち……今回、カグラの部下という位置付けにいる者たちは、言葉を失っている。

「あむっ、おむっ、むぐっ……ごくん、はぐっ、ん～……ぷはっ。あーん」

すでに二十人前は平らげながら、それでもまだ食い続けるのは、ホムラだ。

魔導師の前衛組はその特性上、カロリー消費が激しい。故にカグラも任務から帰還した後は平然と十人前くらいは平らげる。

だが、出撃前にここまで食べる魔導師はホムラくらいしかいない。

大体、食べ過ぎるとーー

「ホムラ、テメェ食い過ぎだ馬鹿。吐くぞ？」

「んぐっ、ぶはっ……阿呆。食うたら食うだけ魔力が精製されるんやで？　食わな損やろが」

「ねーよ」

カグラは呆れ返る。魔力量というものは個々人で決まっているものであり、スタミナと一緒で休息を取れば回復していくものだ。コンディションによって多少、回復量や総量に差異は出るが、食事で魔力が増えることは有り得ない。
ホムラは食い続けながら、むー、と声を漏らす。

「んぐっ……嘘や、ない……はぐっ、むぐっ、……で？」
「食うか喋るかどっちかにしろよテメェは」

ったく、とカグラはため息を吐き、隣に視線を送る。カグラの隣では、トモエが苦笑していた。

「まあ、気持ちの問題なんだと思うよ？」
「どっちにせよ食い過ぎだっての。あいつの給料の使い道、七割食費だろ？」

どれだけ高いエンゲル係数だ。
内心でつっこみ、今尚食い続けるホムラをぼんやりと眺めながら、ポツリと、カグラは言った。

「……大丈夫だよ」
「えっ？」
「何を不安に思ってんのかは知らねぇけどな。何があろうとお前のことは絶対に守る」

言葉を聞き、トモエは微笑む。

「カグラくん、優しいよね」
「さてな」

照れ隠しに、顔を背けるカグラ。トモエは微笑んだ。

「……優しすぎるよ、ホントに」

その呟きは、誰にも届かなかった。

◇　◇　◇

ーーそれは、誰一人として予測しない結末だった。

人という存在に巣くう、悪鬼羅刹。その犠牲に選ばれた者たちを救うため、少女は戦う。

全てを、懸けて。

話が違う。それが、全員の感想だった。

ロストロギアの封印任務……確かに油断はできない任務だが、『二人のエース・オブ・エース』がいれば問題なく遂行されるはずの任務だった。しかしーー

「撤退しろ!!　殿は俺とホムラが務める!!　テメェらには荷が重過ぎる!!」

「はっ、何が危険度A級ロストロギアや。特S級のそれやろが。……こういう時、貧乏くじ引かされるからきっついなぁ」

『二人のエース・オブ・エース』の眼前に展開するのは、地獄だった。

巨大な魔物ーーそうとしか表現できない、絶対的なまでの圧力を放

つ怪物と、その怪物に蹂躙され、かつての緑溢れる世界の面影さえなくなった一帯。
理不尽とは、正にこのことだ。

「……嵌められたようやな」
「薄々気付いてたことだろうが」
「ま、せやな」
二人は、軽く言葉を交わし合う。
これはつまり、上層部の意向だろう。
正確な情報を与えず、満足な人員も揃えず、二人をここへ寄越した。
『死ね』と、言っているのだ。

「ホムラ。相手のことは何一つわかりゃしねぇが……それならそれでいい。先手必勝、見敵必殺。全力でぶちのめすぞ」
「上等。わかり易くてええやないか」

だが、だからといって大人しく従う二人ではない。
たとえ敵がどれほど強大でも、この二人が揃ったならば。
ー一打ち倒せぬ、道理はない。

「ヘルダスト！！」
「ライジングサン！！」

二人はそれぞれ自身のデバイスの名を呼ぶ。
相棒たちが応じると同時、カグラは二丁のライフルの照準を敵に合わせた。

「ぶち抜け！！」
《Ｒａｓｉｎｇ　Ｃａｎｎｏｎ》

放たれるのは、一点突破の熱線。閃光の煌めきは、狙い違わず敵を穿つ。
そして、カグラはデバイスの形態を変更。ホムラを呼ぶ。

「ホムラッ！！」
「わかっとるわ！！」
《Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ａ．Ｃ．Ｓ》

ホムラのデバイス『ライジングサン』の先端に魔力刃が精製され、魔力の密度が上がっていく。
カグラはソルジャーモードで手足に装着されたヘルダストを携え、ホムラの背後に回り込む。
そして。

「行くぞホムラ！」
《Ｈｕｍａｎ　Ｃａｎｎｏｎ，Ｂｕｌｌｅｔ　Ｈ＆ａｍｐ；Ｒ》
「ドライブ！！」

カグラの蹴りにより放たれる人間砲弾で更に加速を得たホムラが、敵に突撃。その障壁を、刃が刺し貫く。

「吹っ飛べや！！」

容赦など微塵もない、ゼロ距離射撃。
数多の敵を打ち破ってきたその一撃はしかし、届かなかった。

「多重障壁！？」

ホムラは思わず声を上げる。ホムラの砲撃を防ぐ障壁が、何重なも渡って展開されている。

「下がれホムラ！」

カグラが叫ぶが、遅い。

ーズン。

放たれた閃光が、ホムラを飲み込んだ。カグラは、声を張り上げる。

「ホムラッ！！　野郎！！」

ヘルダストを構えるカグラ。その隣を、何かが駆け抜ける。

「トモエ！？」

他の隊員たちと共に後方へ下がっていたはずの少女が、飛来する。

「待て！」

カグラは叫んだ。ホムラが通用しなかった相手だ。トモエがどうにかできる相手ではない。

だというのに。

「……」

トモエを中心に、魔法陣がいくつも展開される。

それは、トモエという魔導師が発動できるはずがないほどの密度と純度を有していた。

その、有り得ない現象を引き起こす代償は決して軽くはない。

しかし、トモエという少女は全てを承知でその魔法を行使する。

「……補足、転移」

凄まじい一撃を喰らってしまったホムラの位置を、トモエは確認。
すぐさま後方へと転移させる。
ー一目を、開ける。
いつもなら茶色のかかった黒い瞳を有する彼女が、何故か金色に輝く瞳を有していた。

「ふっ」

短く息を吐き、トモエは自身が持つ意志持たぬデバイス『アレルヤ』を握り直す。ホムラのものとデザインを似せたそのデバイスを敵へと向けた瞬間、トモエ目掛けて無数の触手が飛来してきた。

「トモエ！！」

カグラが叫んだ。トモエは、届かないとは知りつつも、呟く。
ー一大丈夫。
そして、不可思議な現象が展開される。

『ギィィイアァァアィァアアアイイイイッッッ！！』

暴走した、意志なきロストロギアが吠える。それは、虚しき怒りの叫び。
ー一当たらない。
ただの一発足りとも、トモエへの攻撃が当たらないのだ。

「……嘘だろ？」

カグラは、呆然と呟いていた。あまりにも、鮮やか過ぎる。
避けるという行為は、予測から成り立つ。だからこそ、その行為は

敵の一歩先を歩むことに他ならない。そうであるからこそ、『避ける』という現象が成り立つ。
しかし、今、目の前で繰り広げられている行為はそんなものではなかった。
一歩先どころか、二歩、三歩先をトモエは歩んでいる。
まるで、未来がわかっているかのように。

「イノセント……」

トモエが、敵に狙いを定める。

「バスターッ！！」

放たれた、兄と同じ銀色の閃光は、敵が何重にも纏う障壁を一枚、食い破った。
有り得ない威力。カグラやホムラと並ぶだけの力を、今のトモエは有していた。

「……凄ぇ……」

カグラは呟く。純粋な賞賛の言葉を。
ただ。
彼の目には、トモエの口元から滴る血が映っていなかった。

◇　◇　◇

憤怒。それしかなかった。
鬱陶しい、鬱陶しい、鬱陶しい。

なんだ、これは。
世界を滅ぼすことこそ、自らの存在意義。
幾年幾歳、それだけを繰り返してきた。
力を求める者へ、暴虐の力を。
救いを求める者へ、死という名の安息を。
ただただ、繰り返してきた。
自らの名を、忘れてしまう程の月日を。
ーー許すわけにはいかない。
許せるはずがない。
我は、闇。
永久の闇。
我はただ、世界を黒く染め上げん。
しかし、宿主なくば力が足りない。
どうする？
どうする？
どうする？
……なんだ、いるではないか。
極上の光を放つ、贄が。
かつて、あの光に敗れた。
故に、あの光を貶める。
汚せ。
汚せ。
汚せ。
我は闇。無限にして永遠の、混沌たる破壊者なり。

かつて夜天の名を宿した存在は、今や、最悪の存在へと堕ちてしまった。
その因果が断ち切られるのは、ここではない。
故に、惨劇が起こり得る。

ー夜は、更なる闇を抱き、堕ちていく。

◇　◇　◇

……自分のレアスキルに気付いたのは、理解したからだった。
初めて“夢”を見た時は、何もわからなかった。
悪夢……そう、同僚で友人であった魔導師が凶弾に撃ち抜かれ、死ぬ夢だ。
普通、夢というのはすぐに思い出せなくなってしまうものだ。しかし、その夢の内容は中々忘れることはなく、そして、忘れられなくなった。
死。
夢で見た通りに、その同僚は死んだ。夢から覚めた、その日に。
それが幾度となく繰り返され、否が応でも理解する。
ー私は、『未来を視て』いる。
制御できるものではなく、ただ、『視る』のだ。
死を。
他者の終わりを。
おそらく……自身の周囲にいる人間が死に瀕した際に視えるのだと、そう理解した。何故なら、一度たりとも知らない人間の死を見たことはなかったから。
怖かった。誰にも話せなかった。
そう……最愛の人にさえ。
だから、一人で探し続けた。
未来を変える術を。
そして辿り着いたのは、『運命操作』を為したという古代ベルカの『聖人』の生み出した術式。

逃れ得ぬ運命に逆らうため、命を懸ける禁忌の術式。

「……」

口元を伝った血を拭う。やはり、無理がある。
自らの『死』を予見し、それを避ける。それ即ち、運命を変えること。
しかも、『死』という特別な運命をねじ曲げているのだ。命を使う術式と相まって、凄まじいまでの負荷がかかっている。
だが、これでいい。
何もしなければ、誰よりも大切な二人が死ぬことになる。
これは……挑戦だ。
今まで、何もしてこなかった。
運命に、ただただ黙して従ってきた。
そんな自分が初めて、運命に逆らう。

「……させない」

トモエは呟いた。刻一刻と命は力となり、その瞳は『死』を予見する。
負荷は命を文字通り削り取っていき、初体験する膨大な魔力は体を圧迫する。
それでも。

「殺させない。殺させるもんか」

世界中の誰よりも、大好きな人たちのために。
彼女は、戦う。

ーーギョロリ。

濁った瞳が、トモエを捉えた。悪寒が走り、目に映るいくつもの『死』に恐怖を抱く。
だが、トモエはそんな自分を必死に奮い立たせる。

「来なさい！　ロストロギア！」

◇　◇　◇

……最善を尽くした。そう、言っても良かった。
そう、最善。
誰か一人の犠牲で、他の全てが救われる。
そんな、結末。

「……カグラ、くん」

闇の書……それは、宿主を以て破壊をもたらす、史上最悪のロストロギア。

「私ね、運命に、勝ったよ？」

ならば、逆に。
誰かが闇の書を体内で抑え込めば。
一時であってもそれができれば。

「だから、泣かないで？」

ーー殺すことができる。

宿主ごと、闇の書を破壊することができるのだ。

「カグラくんも、お兄ちゃんも、救えたんだから。だから」

「……馬鹿、野郎……ッ！！」

カグラは、血を吐くように、言った。

彼が抱き締めるトモエの体……その体には、いくつもの弾痕が刻まれていた。

殺傷設定でカグラが撃ち込んだ、傷跡である。

「もっと……もっと別の方法が！！　手段がきっとあったんだ！！　ふざけんな！！　なんで、どうしてこんなことになってんだよ！！」

カグラは、心の底からの叫び声を上げる。闇の書との戦いの結末は、あまりにも単純だった。

宿主を欲した闇の書は、トモエを狙った。そしてそれをトモエは受け入れ、乗っ取られ、自我がなくなる前にカグラに頼んだのだ。

ーー撃って欲しい。

それで、終わるからと。

理不尽だった。不条理だった。あまりにも残酷な結末だった。

トモエは、弱々しく首を振る。

「いいの。私は、幸せだから。こんな風に、大好きな人に抱かれて、看取ってもらえて。私は、幸せ」

「……ッ」

カグラの頬を、涙が伝う。

俺も、と、カグラの口から言葉が漏れた。

「俺も、お前を、愛してる」

その言葉を紡ぐのが、精一杯だった。

トモエは、微笑む。

「嬉しい、な。カグラくん照れ屋で、そんなこと、言ってくれなかったから」

……ピキッ。

トモエの体が、再び、闇を纏い始める。

命を燃やし、抑え込もうとも、闇の書を完全に抑え込むことはできない。

「カグラくん。約束、して欲しいの」

「……何をだ？」

「自分を、責めないで」

トモエは微笑み、カグラは泣いていた。

「私はね、運命を変えたんだから。だから、いいの」

「いいわけ、あるか。お前は死ぬんだぞ？　なのに、何で！　どうして！」

「あなたを守れたことが、私の誇りになる」

たった一つの。

カグラ・ランバードの隣に立つ資格になると、トモエは言った。

「そして、もう一つ。……もう、私で最後にして」

……ピシッ、パキッ。

「管理局は、正義じゃなきゃいけない。だから、もう、私みたいにくだらない権力争いで死ぬ人を、生み出さないで」
「……ああ。必ず。必ず、変えてみせる」

いつものこと、と諦めていた自分を呪いたくなる。
そのせいで、こんなことになったのだから。
トモエは、満足したように微笑んだ。

「それじゃ、最後に、二つだけお願い」
「……ッ」

最後。その言葉が、あまりにも重く。
カグラは、黙っているしかなかった。

「カグラくんには、たくさん、たくさん思い出をもらったから。だから最後は笑顔がいい」
「……馬鹿野郎。変な顔になっても、笑うなよ」

泣き笑い。トモエは、うん、と頷く。
そして。
その時が、やってくる。

「私を、殺して」

カグラは、銃口をトモエの胸元へと押し付けた。
手が震え、カチカチと音を鳴らす。

「カグラくん。覚えておいて欲しいんだ」

……ピシッ、パキッ。

「運命は変えられる。悲しい未来は、打ち壊せる」

……パキン。

「泣いてくれてるの？　もう、笑って、って言ったのに。うん、でも、そうだね」

ーージャキッ。

魔力が、灯る。

「そういう、優しいところが、大好き」

ーーカチン。

「バイバイ。ありがとう」

銃声が、轟いた。

「う……っ、くっ……！」

大切な人の血で自らを濡らす英雄が、吠える。

理不尽に。

不条理に。

悲しみに……屈してしまう。

「うあああああああああああああああああああああっっっ！！！！！！」

◇　◇　◇

翌日。

カグラは、トモエの部屋で一通の手紙を見つけた。

カグラ宛ての手紙は、トモエからのものだった。

『えっと、この手紙がカグラくんのところにあるっていうことは、きっと私は戻れなかった、っていうことなんだと思います。

……嫌な予感、それもとびっきりのものだったから、私はこれを書くことにしました。

なんていうか、難しいね、手紙って。

いっぱい、いっぱい話したけど……そういえば、私がカグラくんに惹かれた理由とか、話したことなかったね。

えっと、照れくさいんだけど……私ね、カグラくんに救われたんだ。

言葉も通じない世界に来て、誰も頼れなくて、ほら、私あんまり人付き合いが得意じゃないから。お兄ちゃんみたいにすぐに溶け込めなかった。

それを、カグラくんが引っ張り上げてくれたんだ。

引きこもってた私の手を引いて、色んなことを教えてくれて。

惹かれて、いって。

うん、なんというか、好きになっていったんだね。

だから、カグラくんが好きだって言ってくれて、プロポーズまてしてくれたのは本当に嬉しかったよ。

……なんか、照れくさいね。

でもね、これだけは言えるよ。

カグラくん。あなたは、私にとって誰よりも格好良くて、強くて、頼りになるヒーローです。

私なんかを救い出してくれた、大好きな人です。
だから、これからも前に進み続けてください。
私も、一緒にいたかったけど。
きっと、それは叶わなかったから。
でも、カグラくんなら、一人でもやっていける。
あなたの優しさは、色んな人を照らしていく。
私は、ここまでだけど。
あなたはきっと、もっと高みへ行けるはずだから。
ありがとう。
本当に、ありがとうございました。
そして、さようなら。
あなたは、私が愛した人です。
誰より愛する、人でした。

……頑張れ、私の旦那様』

◇　◇　◇

トモエの死から、数年後。
カグラは、愛する人の墓前にいた。
それは、管理局がホムラ・イルハートという反逆の英雄を生み出した次の日だった。

「あの馬鹿がやらかしやがった。どういうつもりかは知らねぇが、見過ごせることでもねぇ」

花を供えながら、カグラは言う。

「お前が残してくれた、例の……『オリヴェント式』とかいう術式もある。まあ、あの馬鹿にやられた分は、それでカバーする。約束も、まあ、時間かけてもなんとかするさ」

ただ、一つだけ。

あの少年だけが……管理局のために死ぬことを定められた少年だけが、約束と違えている。

「やらなきゃなんねぇことは山積みだ。だから、もうちょっとばかしそっちに行くのは遅れる」

だから、と、カグラは言った。

「見守っててくれ。あの馬鹿についても、きっと何とかするからさ」

そして、カグラは黙祷する。

そのカグラの頬に、何かが触れた気がした。

「……」

カグラは口元に笑みを浮かべ、その場を立ち去る。その時持ち上げた左手の指には、指輪が填められていた。

そして、カグラは聞く。

懐かしい、声を。

“頑張れ、私のヒーロー”

第十六・五話　変わってしまった世界（後書き）

カグラ・ランバードの過去と、彼が愛した女性、トモエのお話です。
彼がファイムを気にかける理由は、トモエとの約束に起因します。
『オリヴェント式』……命を使う術式は、最初にトモエが発見したのですね。彼女は魔力量こそ少ないですが、レアスキルを有していたりと、やはりあのホムラの妹です。
もし存命であれば、なのはたちのいいお姉さんだったかもしれません。

さて、第十六・五話です。ありがとうございます。

今回、勢いで書いた部分が多く、わかりにくいかもしれません？
その場合は遠慮なくご意見、お願いします。
感想も待っています。
さて、では次回とその次で一区切り、第三部完、という流れになります。
物語も大分進み、徐々にそれぞれの思惑が空かされていきます。
ダラダラと続けるのは嫌いなので、完結まで突っ走りたいと存じます。
感想など頂けると、本当に嬉しいです。自分があまり書きにいかないくせに、と思われるかもしれませんが……申し訳ございません。
そして次回ですが、管理局側の戦いが一度、決着します。

そして、皆様のおかげで六万ＰＶを突破しました！！
私の作品に、皆様が足を運んでくださっている……これほど嬉しいことはございません。
楽しんで頂けるよう、頑張っていく所存です。よろしくお願いしま

す。

では、次回予告です。

次回予告

遂に『最強』がその全力を抜き放つ。相対するは、『雷光の死神』。
互いに譲れぬものを刃に乗せ、戦いは激化する。
そして、もう一つ。
かつては友と呼び合いながら、今や敵となってしまった二人は、互いの想いをぶつけ合う。
譲れぬものが、ある故に。
そして、世界は目撃する。
狂った物語を。

「もう、戻れやしねぇ。友よ。だから俺は、テメェを潰す」

次回、第十七話
「激動、轟いて」

第十七話　激動、轟いて

強さの定義とは、あまりにも難しい命題である。
歴史が示すように、『勝者が正義』であり、『正義が勝つ』わけではない。
故に、『正義』は『最強』ではない。
あくまで、結果に過ぎないのだ。
故に、その定義は難しい。
勝ち続ければ良いのか。
負けなければ良いのか。
それとも、もっと別の理由が必要なのか。
ーー『自分より総合力で強い相手には、相手より強い部分で勝たなければならない』。
教導隊に関わりを持つならば必ず突き付けられる問答である。
それが、より一層『最強』の定義を難しくする。
しかし、そんな中でも『最強』を謳われる存在はいる。
一人は、管理局の『エース・オブ・エース』。
管理局局員全員の誇りを背負い、数多の戦場を駆け抜け、同時にいくつもの偉業、奇跡を成し遂げてきたその誉れは確かに『最強』に相応しいかもしれない。
だが、もう一人。
最強を謳われる怪物がいる。
『剣聖』、『辺境の英雄』、『最強の侍』、『ソードマスター』……数多の異名を背負うその者は、正に一騎当千。
『最強を名乗り、それを誰にも否定させない』ーーかつて、とある男が定義した『最強』の意味。
それが、真実であるならば。
成程、相応しき者は他にいない。
その、並び立つ者なき『最強』の存在は、今。空を駆けている。

たった一つの、願いのために。

◇　◇　◇

「はあっ！」

振り抜かれた巨大な魔力刃は、しかし、防がれてしまう。フェイト・T・ハラオウンは、内心で表情を歪ませた。
左手に持つ刀、『血桜』で攻撃の全てをシャットアウトし、同時に右手に持つ巨大な薙刀『桜花』ですぐさま反撃に転じてくる。
あまりにも異質なそのスタイルはしかし、確かに強い。
テンリュウ・シンドウ。
ユーノ・スクライアの調査によると、歴史にさえ度々姿を現すその名は、確かに伊達ではない。
ガギギ、という、魔力の衝突による火花が散る。瞬間。

「……」

テンリュウが、右腕一本で操っているとは思えないほど流麗に『桜花』を一回転させ、思い切りフェイトに叩き付けた。
ーーガァン！！
間一髪、フェイトはそれを受け止めるが、威力を殺しきれず、弾かれる。
距離が空く。フェイトは、大きく息を吐き出した。
ツゥ。
フェイトの頬を、血が伝う。衝撃の余波だけで、僅かではあるが傷が刻まれていく。
長引けば、長引く程不利になっていく。

（一か八かだけど、やるしかない）

決心してからは、速い。フェイトはバルディッシュを両手で構えると、魔力スフィアを精製。それを、撃ち込んだ。

《Ｆｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ》

「ファイア！」

牽制の一撃を、テンリュウは軽々と避ける。だが、放たれた弾丸は、テンリュウがいた場所を通り過ぎると、方向転換し、テンリュウに追いすがる。

「追尾弾とは」

だが、何の問題もない。テンリュウはすぐさま、それらを打ち払う。そして、フェイトへ視線をやると、おや、と呟いた。フェイトの足下に展開する、巨大な魔法陣。それは、明らかな必殺の魔法。

その巨大な魔力を感知し、『桜花』が言葉を紡いだ。

《儀式魔法みたいだね。どうする？》

「ｉｉ受けて立ちます」

何の迷いもない言葉だった。桜花は、了解、と言葉を紡ぐ。

《先代もそうだったけどさ。愚直だよね、侍って》

「相手の全力をねじ伏せるだけの気概なくして、戦場に立てる道理はありません」

仕えるべき主がために磨き上げられてきた、必殺の刃。それこそが、『神道天龍』という存在。
それが、たった一人の魔導師に敗れることは許されない。

「夢幻天声」

ゴゥン、という音と共に、巨大な障壁が展開される。
そして、フェイトの魔法が紡がれる。
かつて、高町なのはと戦った時、彼女を墜とすために紡がれた大魔法が。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なる天神、今導きのもと撃ちかかれ」
《Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ》
展開されるのは、合計３８基の魔力スフィア。
その全てが、雷を魔導弾丸を撃ち出す。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト」

秒間七発。合計、１０６４発もの弾丸が、テンリュウ目掛けて飛来する。

「……ッ！」

フェイトは、歯を食いしばって術を維持する。
ー一弾丸の嵐が、止む。
果たして……テンリュウは、立っていた。
フェイトは、右手を掲げる。

「打ち砕け、ファイア！」

そして、最後の一発が放たれる。
それはテンリュウの障壁に直撃。ひびが入っていたテンリュウの障壁を打ち壊し、テンリュウの左肩に、威力を殺されながらも着弾する。
初めての、まともな一撃。テンリュウは、微笑んだ。

「見事」

その言葉が届いた頃には、すでにフェイトは動いている。

《Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

フェイトの持つ光刃が伸び、テンリュウを狙う。それを、テンリュウは居合で迎え撃つ。

「夢魔龍閃」

閃光と轟音が瞬いた。互いの技は相殺し、魔力をばら撒く。
そして、フェイトは大きくバルディッシュを振りかぶり、大きく振り抜いた。

「雷光一閃！！　プラズマザンバー……！！」
《Ｐｌａｓｍａ　Ｚａｍｂｅｒ　Ｂｒｅａｋｅｒ》
「ブレイカアァァァッッ！！」

放たれたのは、一撃必殺の奥義。対し、テンリュウも彼女の奥義で応える。

「夢想演舞」

衝突する、力と力。あまりの威力に世界が軋み、悲鳴を上げる。
振り撒かれる魔力が爆発を起こし、そして、均衡が限界を迎える。
ー一爆発。
互いの力があまりにも強かったが故に、拮抗も一瞬。

「……ッ」

爆発の余波で、フェイトは後方へと大きく後退。だが、すぐさま前に出る。

「疾風迅雷！！」

二本の刃となった雷の剣を携え、フェイトは空を駆ける。対し、テンリュウは迎え撃つ構え。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

フェイトの代名詞、音速に迫る超高速のスピードが解き放たれ、空を駆ける。

「……嘘」

だが、すぐにその表情が驚愕に彩られる。
ー一互角。
速さにおいては管理局でも並び立つ者はいないとまで謳われるフェイトと、テンリュウは互角の速さで空を駆けていた。
空に瞬く、いくつもの光。

金色と紅色。
空を彩るその輝きは、数多の魔導師たちが目指し、しかし、辿り着けない領域。
そして。
フェイトが、最後の勝負に出る。

「打ち抜け、雷刃!!」

全力で振り抜かれるバルディッシュの一撃。
渾身のそれを、テンリュウは『桜花』と『血桜』、その両方を交差させて受け止めるが、威力を殺しきれず、後退する。
それは、初めて生まれた一瞬の隙。
あのテンリュウが、全力で受けに回った瞬間。

ーーここだ!

フェイトは自身の体を高速で回転させ、速さと遠心力を上乗せした一撃をテンリュウへ叩き込む。

「轟け!!　神雷!!」

正真正銘の、最高の一撃。手応えがあった。
どんな魔導師であっても、墜とせたはず。
しかし。
現実は、どこまでも残酷にフェイトを襲う。

「……決着です」

背後。そう気付いた時には、もう、遅い。

「夢想演舞」

ーーガドン！！

至近距離からの、ＳＳランク魔導師のそれに匹敵する砲撃魔法。

限りなく装甲を薄くしていたフェイトに耐えられる道理はなく。

……『雷光の死神』が、墜ちていく。

「特務部隊機動六課……制圧完了」

テンリュウは、特に感情も乗せずに呟いた。

こんなものかと。

確かにそれなりに手こずったが、それだけだ。

これで……終わりか？

「……」

ため息。

それが漏れた、その瞬間。

「ウイングロード！！」

空に、無数の青い軌跡が紡がれた。同時に、凄まじい魔力を纏った火柱が上がる。

「『烈火の将』シグナムと、『烈火の剣精』アギト。……参る」

剣を振るうのは、かつて古代ベルカを駆け抜けた騎士とそのユニゾンデバイス。

そして。
かの『エース・オブ・エース』のように、不屈の心で立ち上がる先程墜とした魔導師たち。

「結論に至るにはいささか、早急でしたね。まだまだ修行が足りません」

笑みを浮かべながら、テンリュウも構える。
左半身の、受けて立たんという強者の佇まいで。

信じるものは、磨き上げてきた力。
振るうのは、共に駆け抜けてきた自分の全て。

ーー御心、確かに。
信念、抱きて。

◇　◇　◇

自らが突き出した刃は、特に抵抗らしい抵抗も受けぬまま、相手の体を刺し貫いた。

「……」

相手は悲鳴も上げず、むしろ苦笑さえ浮かべながら倒れ込んだ。
エリア・カリアはそんな風に倒れていくゲンヤ・ナカジマから愛機である『クリスティナ』を引き抜くと、一度だけ振るった。
血が飛び散り、床を濡らす。彼女の足下には、今、二人の人間が倒れていた。

ゲンヤ・ナカジマ。
ギンガ・ナカジマ。
今回、エリアたちのターゲットとなった陸士１０８部隊の部隊長と、その部隊におけるエースの二人だ。
だが、所詮は一部隊のエース。エリア・カリアという、かつて騎士団筆頭という名を冠していた騎士に適うべくもない。
エリアは二人を一瞥すると、その場を立ち去ろうとした。
そこへー砲撃魔法が降り注ぐ。

「……ッ！」

不意の一撃に驚きながら、エリアはその場を飛び退く。当てる気がそもそもなかったらしい。砲撃は、エリアが立っていた場所から少し離れた場所に着弾した。
エリアは、空を見上げる。
そこにいたのは、彼女の主がかつて冠していた名を引き継いだ、奇跡を起こす不屈の魔導師。
『エース・オブ・エース』高町なのは。

「今のは警告です」

なのはは、言葉を紡ぐ。

「武器を捨て、投降してください」
「断れば？」
「……実力行使も、やむをえません」

なのははレイジングハートを構える。エリアは、成程、と頷いた。

「私に投降する気はなく、同時にここに長居するつもりもない。…

…そう言えば、どうする？」
「力ずくでも、あなたを止める」
迷いはなかった。流石だ、とエリアは呟く。
そして。
二人の魔導師が、空を駆ける。

「レイジングハート！」
《Ｙｅｓ，ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏａｄ》
「エクセリオンバスター」

先手必勝、手加減なし。
高町なのはの十八番、桜色の純魔力砲撃が放たれる。

「バスターッ！」

ー直撃。
想像以上の威力に、エリアは表情を僅かに変え、そして、なのはは追撃の手を緩めない。

「いくよレイジングハート！」
《Ｙｅｓ，Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ａ．Ｃ．Ｓ》
「ドライブ！」

突撃。エリアは彼女の愛機、『クリスティナ』を眼前で交錯させると、障壁を展開した。
魔力刃が、突き刺さる。

「カートリッジロード！」

拮抗は一瞬。増幅された魔力によって魔力刃が更なる力を得、エリアの障壁が食い破られる。
そして、零距離砲撃。
ーーガドン！！
あまりの威力にエリアは後方へと吹き飛ぶ。いや、敢えて彼女は自分から後方へと飛んだ。

「成程、『管理局の白い悪魔』か……中々、的を得ている。確かに悪魔のような威力だ」

受け流したがらまだよかったものの、ノーガードで入れられたら一撃で意識を持って行かれるであろう一撃だった。
ただでさえ、その威力故に防ぎきるのが困難な砲撃……それを、至近距離から叩き込んでくるとは。
どこまでもーー似ている。

「やはり、砲撃魔法を極めた魔導師は同じ場所へと至るのか。主と、どこまでも似ている」

二振りの刃を構えながら、エリアは言う。そして、ほう、と息を吐いた。

「抜け目がないな。私を遠ざける間に、あの二人を救出するか」
「……私たちの目的は、あなたたちの逮捕と、１０８部隊の救援。一人でも多く、救ってみせる」

なのはは言い切る。エリアの視界の端に映るのは、金髪の青年。
確か要注意人物の一人、ユーノ・スクライアだ。
おそらく、二人の応急手当をするつもりだろう。
一瞬、それを阻むかどうか迷ったが、エリアはすぐさま諦めた。

高町なのは……全力で当たらねば、こちらが墜ちかねない。
それに、あの二人は重傷だ。ゲンヤ・ナカジマをしばらく動けなくするー一最低限の目的自体は果たしている。
故にエリアはそちらを一瞥すると、なのはに剣の切っ先を向けた。

「救えるのか、管理局。偽善を振りかざすお前たちに。『管理』という名の『支配』を押し付けるお前たちに。犠牲ばかりを生み出す、偽善者に」
「……偽善じゃない」

なのはは強くレイジングハートを握り締め、言った。

「偽善なんかじゃない。私たちは、心から願ってる。平和を。平穏を！」
「願うだけで叶うならば、世界はもっと優しいものだ。私は知っている。誰よりも平和を願い、理不尽に挑み、不条理と戦い……そして、屈してしまった男を」

彼は、正しかった。
だから、許せなかった。
自分の大切な人が殺されたことを。
幸せになるはずだった者を、地獄へ叩き落とした管理局を。

「しかし、主は立ち上がった。何を信じれば良いかもわからぬ中、必死にもがき、苦しんで。いっそ諦めれば早かった中で、それでも主は抗った。屈してしまいながら、涙を流しながら、それでも立ち上がった」

誰にも頼らず。
たった一人で、その答えに。

絶望を叩きつけられながら、しかし、それでも諦めなかった。
……寂しくなかったわけではない。
あの人が苦しんでいる時、何の支えにもなれない自身を恥じなかった日はない。
しかし、それでも。
あの人が立ち上がったならば、エリア・カリアという騎士は例え行く道が茨であろうと供をする。
それが、矜持。
そして、立ち上がる強さに憧れ、それを追い求める自分ができること。

「ならば私は戦うだけだ。理解などされなくても構わない。私たちは、ただただ願うだけだ」

優しいあの人が、願ったことを。
私も、共に。

「世界がもう少し、優しくあるように」

理不尽を。
不条理を。
惨劇を。
残酷を。
ほんの僅かでいい。
それらで泣く者が、少なくなるようにと。
だから。
だからーー

「私たちは『今』の管理局を認めない。世界を救い、悲しみを打ち払うべき存在でありながら、自ら悲しみを生み出し続ける場所を、

許すわけにはいかない」

それが、エリア・カリアが抱く願いであり、ホムラ・イルハートが掲げた理由。

優しい、世界を。

そのために、残酷にして不条理な管理局という組織を、叩き壊す。

かつて信じたからこそ。

これ以上、悲しみを生み出さないために。

「私たちは私たちの行いが正義であるなどと信じているわけではない。必要ならば謡い上げもしよう。だが、犠牲を生み出すこの行いが正義などと血迷ったことを口にする気はない」

しかし。

それでも。

私たちの、行いは。

「もう、悪を倒すには悪しかない。私たちを巨悪と呼ぶなら好きにしろ、『エース・オブ・エース』。だが、私たちがやらなければ何が変える？　誰が変えるという？　もう、戻ることも止まることもできんのだ」

エリアは言い切る。

悪だと、最善には程遠いと理解していても、それでも、やるのだと。

「……違う。間違ってる」

叩きつけられた、エリア・カリアの理由。それを、なのはは真っ向

から否定した。
エリアは、だろうな、と呟く。

「しかし、それでもー」
「しかしも何もない！　あなたたちは、根本的に間違ってる！」

数多の想いを受け止め、そして、届けてきた彼女だからこそ。
受け止め、尚、立ち向かえる。

「確かに世界は理不尽かもしれない。不条理かもしれない。……だけど！　それをなくすために管理局はあるんだ！」
「通じていないのか？　それを生み出しているのが管理局だと言っている」
「違う！　私たちは、いつだって戦ってる！　悲しい今を、撃ち抜くために！」

なのはは、叫ぶ。

「あなたたちの言ってることは間違ってない。だけど、だったらどうして自分を『悪』だなんて言うの？……それは、わかってるから。自分たちが間違っているって、あなたたち自身がわかっているから！」
「矛盾しているぞ、『エース・オブ・エース』。私たちは間違っていないと言ったかと思えば、間違っているだと？　論理が破綻している」
「あなたたちは、方法を間違えてるんだ」

不屈の心と共にある、高町なのはだからこそ。
その矛盾に、気付くことができた。
それは、奇しくも。

自らが過っているがために気付けたファイム・ララウェイと同じ結論だった。
エリアたちが抱える矛盾を、高町なのはは糾弾する。
「あなたたちは理想を追った。悲しい世界をなくそうと思った。なら、どうして？　どうして……その過程で悲しみを生み出すの？」
エリアの表情が、僅かに変わる。
それは、気付いていた矛盾だ。
「管理局を力で壊したら、それで悲しむ人はたくさんいる。理解されなくていい、って言ったよね？　それじゃあ、あなたたちまで救われない」
だから、おかしいとなのはは言った。
「悲しみがない世界にするために悲しみを生み出して、そんなのじゃ誰も救われない！」
「……そうだな。その通りだ」
微笑。エリアは、笑っていた。
それは、覚悟の笑み。
「だが、もう戻れはしない。このままではいれないのだ、私たちも、お前たちも。主は『今』の管理局を許せなくなった。私とてそうだ。……結局のところ、いくら御託を並べようと結論は変わらない」
互いの想いが相容れぬ時、古今東西、『それ』が行われてきた。
「勝者こそが絶対。それが真理だ。参るがいい、『エース・オブ・

エース』。主の名を受け継いだ貴様の力、見せてみよ」

なのはは、それでも躊躇する。
優しさが、彼女の邪魔をする。
しかし。
誇り高き騎士は、それを認めない。

「参れ！！」

轟く怒声。なのはは、レイジングハートをエリアに向ける。
そして……激突。
その最中、なのはが放つシューターの嵐を軽々と避けながら、エリアは呟いた。

「……いずれ、お前にもわかる時がくる」

管理局を敵に回した自分たちの気持ちがと、エリアは言った。
エリアは、チラリと視線を足下ー地上へと向ける。
そこでは、ユーノ・スクライアがゲンヤとギンガに応急処置を施していた。
エリアは、悲しみさえ宿した目でなのはを見据えた。

「管理局に大切な者の命が削られていると知った時……お前は平静でいられるか？」

それは。
答えのわかっている、問いだった。

◇　◇　◇

降り注ぐ砲撃の嵐を避けながら、カグラは引き金を引く。だが、元々カグラのデバイス『ヘルダスト』の『ガンズモード』は近接用の二丁ライフルだ。距離が遠くなればなるほど、威力が落ちてしまう。対し、ギレン・リーのデバイス『フラムジェイス』はむしろ、中・長距離用の大型ライフルだ。距離があれば必然、ギレンが有利になる。

「ははっ！　さっきまでの威勢はどうしたんだよ『英雄』！？」
「さてな」

凄まじい威力の砲撃は、森林地帯を薙ぎ払っていく。
しかし、カグラには当たらず、また、ギレンにもカグラの攻撃は当たらない。
わかりやすい、膠着状態だった。

「チョロチョロと逃げてんじゃねぇ！」
「避ける、ってんだよタコ」
「はっ！　ろくに反撃もしねぇでほざいてんじゃねぇぞ！」

砲撃の嵐が激しくなる。カグラは、視線だけで周囲を見回した。
ミリアムはすでに移動している。一人で足止めをしているというリューイのところへだ。

（あの馬鹿が相手となると、がきんちょ共じゃ荷が重い）

ホムラ・イルハート。
ランクこそリューイの一つ上だが、経験が違う。年期が違う。
勝てる道理は、欠片もない。

（エリアとかリヴァイアスも来てんなら、本気でヤベェ。……だが、あまりここで全力出し過ぎると結局意味ねーしな……）

相手が相手。ギレンにしたって、挑発しまくったおかげで冷静さを失っているが、本来なら今のカグラよりも格上である。

「……ま、迷ったところで、だな」

呟き、ふう、とカグラは息を吐く。

ー一空気が、変わる。

ギレンも砲撃を一度止め、訝しげにカグラを見る。カグラは、若造、と言葉を紡いだ。

「確認だ。テメェがおやっさんの部下たちを殺したんだな？」

「あぁ？」

「テメェ程の力があったら、殺さない選択肢もあったはずだが？」

「はっ、殺さねぇ？　ありえねぇよ」

ギレンは肩を竦めた。カグラは、そうか、とだけ頷いた。

「なら……容赦の必要もねぇな」

カグラの体が、揺らめく。あぁ？　とギレンは眉をひそめた。

「もう俺もそれなりに歳でな。最近は専ら、ガキ共の教育だの養護だのが楽しみだ。……だからな」

カグラの姿が……消える。

まるで、蜃気楼のように。

「……ッ！」

ギレンは慌てて彼のデバイスを構える。だが、カグラの姿は見えない。

「後輩共を傷つけられて、こちとらブチギレてんだよボケが！」

ーーガツッ！！

ギレンの後頭部に、振り抜かれたカグラの回し蹴りが叩き込まれる。

ギレンは地面を滑りながら、後方へとライフルを向けた。

「なっ！？」

その視界いっぱいに、白い布が広がった。

カグラのバリアジャケットのコートだ。

「ぐっ！？」

ギレンの視界が奪われる。

手を伸ばせば触れる距離にいたカグラは、二丁のライフル、その銃口をギレンの頭部に押し付けた。

「戦場では常にクールで……常識だ若造」

ーーガガガン！！

連射。ギレンの体が仰け反り、しかし、踏みとどまろうとする。

だが……。

「生憎と、反撃を許す気はねーんだこれが」

キィン、という音と共に『ヘルダスト』を包むように小型の魔法陣が展開される。
ミッド式に似ていながら僅かに形式を異にするその術式の名は、『オリヴェント式』。
命を使う、禁断の秘術。

「……よい夢を」

ーードゴゴン！！
先程とは威力の次元が違う魔力の弾丸が叩き込まれる。
設定は……殺傷設定。
ジワリと、倒れたギレンに被せられたコートが朱に染まっていく。
そのコートを手に持った瞬間、カグラの視界が歪んだ。

「……キツいな」

立ち眩み……いや、違う。これは、代償か。
ギレン・リーは確かな強さを有した魔導師だった。半分以上の魔力を失った自分では勝てない程の。
故に、使った。
先手で挑発し、冷静さを失わせ、その上で『エース・オブ・エース』と呼ばれていた頃は使いもしなかったスキルを使用して、不意を狙った。
ー情けない。
これが、今の『英雄』だ。
『英雄』だった男の成れの果ては、こんなにも弱く、情けない。
だが。

「これでいい……ファイムは、ずっとこれに耐えてきたんだ。トモ

エも……お前も、耐えてあの奇跡を起こしたんだろ？」

ならば、耐えねばならない。
ようやく、届くのだから。

「テメェの理由なんざ知らねぇし、知るつもりもねぇがな」

血に染まったコートを纏い、カグラは歩き出す。
かつて、友だと。
無二の親友だと信じた男のところを目指して。
違えてしまった。
だからこそ。

「もう、戻れやしねぇ。友よ。だから俺は、テメェを潰す」

何とかすると。
約束、したから。

ー十数年の時を超え、二人の『英雄』が激突する。

◇　◇　◇

……静かだった。
劇的なものは何もなく、静かに、二人は再会する。
かつて、『二人のエース・オブ・エース』と呼ばれた二人。
数多の魔導師たちの頂点に立ち、数々の伝説や奇跡を引き起こしてきた二人は、最早相容れぬ仲。
片や、約束がために身を切り裂くことを選んだ男。

片や、憎悪と憤怒がために世界を敵に回すことを選んだ男。
どちらもきっと、まちがえてはいないのだろう。
しかし、対立したからこそ、二人はこうして向き合っている。

「……」

チラリと、カグラはホムラとリヴァイアスの足下に倒れている二人を見る。
リューイとミリアム。二人とも、重傷だ。
しかし、カグラはそんな二人を見ても表情を変えない。そんなカグラに、ホムラが言葉を紡いだ。

「何しに来たんや？　力を損ねたそんな体で」
「決まってんだろ」

カグラの足下に、魔法陣が展開される。
それはすぐさまリューイとミリアムの場所にも展開され、二人を転移させる。ホムラや、少し離れた場所に立つリヴァイアスも二人には興味がないらしく、何もしてこなかった。
二人をこの場から遠ざけ、カグラはホムラを見据える。

「テメェを潰しに、地獄から這い出てきたんだよ」

カグラの体が揺らめく。蜃気楼の如く。
そして、その姿がかき消える。
ーーガァン！！
ソルジャーモード。手足を覆う具足の形となっていた『ヘルダスト』を振るったカグラの一撃を、ホムラが受け止めた。背後をとったのだが、わかっていたかのように障壁が展開されたのだ。

「ちっ！」

カグラは飛び退き、手を横薙ぎに振るう。何も見えないが、そこには確かに魔力が渦巻いている。

「ぶち抜け！」

《ＯＫ，Ｂｏｓｓ．　Ｐｌａｓｍａ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

不可視の魔力弾がホムラに叩き込まれる。

それをホムラは難なく防ぎながら、相変わらずやな、と呟いた。

「レアスキル『虹色吐息』。虹色の魔力光は、全力展開すればただそれだけで幻術を纏う……やったか？　わしでも見るのは珍しいわ」

カグラは応じず、一度距離をとる。内心では、舌打ちをしていた。

『虹色吐息』ーーそれは、カグラが有するレアスキルだ。

かつてトモエが有していた『未来視』のレアスキルに比べれば派手さはないが、実戦においてかなり役に立つレアスキルである。

魔力光というものは、個人によって決まっている。それは不変のものであり、個性だ。

それが、カグラには『無い』のである。

固有の色を有さず、本人の意思で魔力光を思うがままに変えられるレアスキル『虹色吐息』。それだけならただの色物だが、『虹』というところにポイントがある。

『虹』というのは、光の屈折などによって生まれる現象だ。それを支配するということは、自分に降りかかる光を制御できるということである。

それより生み出されたのが、『常時幻術展開』という、カグラの切り札だ。

『エース・オブ・エース』と呼ばれていた頃は全くと言っていいほ

ど使わなかったスキルだが、敢えてカグラは使った。
そうしなければ届かない程に、二人には隔たりが生まれてしまったから。

「光の屈折で姿を消したり、果てには魔力弾は『無色』ときた。そら初見じゃ攻略なんざ不可能。物凄い初見殺しやね」

カグラの姿がぶれ、そして、異様な光景が展開される。
一人、二人、三人、四人……無数のカグラ・ランバードが出現する。
光の屈折により生み出した、分身たちだ。
ホムラは、笑みを浮かべる。

「さーて、願いましては。運任せの当てっこゲーム。本物は？」

一斉に、全てのカグラが特攻を仕掛ける。ホムラは、彼のデバイス『ライジングサン』を回転させると、魔法を起動した。

《Ｂｌｕｓｔ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

ホムラを取り囲むように展開される、無数のシューター。
それが、一斉に放たれる。

「コール……勝負や、カグラ。全員撃ち抜いたさかい、わしの勝ちかな？」
「ざけんな馬鹿が」

足下より、声。
身を屈めたカグラが、体を捻り、拳を突き出そうとしていた。
惜しいなぁ、と、ホムラは呟く。
ーードドドン！！

空より降り注いだ弾丸が、カグラを撃ち抜いた。
カグラの体が傾き、ホムラは笑う。

「昔やったら勝率は五分やったけど、今はどないかな？　万に一つか、億に一つか」
「……米粒一粒以下の可能性でも、俺には十分だ」

カグラは踏みとどまり、拳を放つ。それは下からすくい上げるようにホムラの脇腹を捉え、吹き飛ばす。
ホムラは空中で体勢を整え、距離を取る。初めて喰らったまともな一撃だった。

「銀月よ。俺様の加勢は必要か？」

壮絶な笑みを浮かべつつ、見守っていたリヴァイアスが問う。ホムラは、いらんいらん、と手を振った。

「一撃入れるためにその十倍喰らうような阿呆や。二人がかりでやる意味もない」

それに、とホムラは言う。

「予定まではまだ時間もある。それまで遊ぼか」

カグラは、はっ、と吐き捨てるように息を吐いた。

「いい加減、決着着けようぜホムラ」
「……そうやな。随分、長くかかってしもた」

二人は、互いに視線を交わす。

瞬間。
ーーガドン！！
カグラの全力の踏み込みによって放たれた拳が、ホムラの障壁を軋ませる。だが、それはホムラの罠。

《Ｂｉｎｄ》

カグラの拳が絡め取られ、動きが奪われる。そこに、ホムラは追撃の砲撃を叩き込んだ。

「ライジングサン！」
《Ｙｅｓ，Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》

カグラは砲撃の光に飲み込まれる。
ー爆発。
問答無用の一撃だった。しかし。

「おおっ！！」

黒煙をその身で引き裂きながら、カグラはホムラに迫った。
その拳が、ホムラに届く瞬間。

《Ｂｌｏｏｄｙ　Ｃｈａｉｎ》

カグラの体が、カグラを取り囲むいくつもの魔法陣から放たれた紅の鎖で拘束される。
かつてならば引きちぎれたそれを、今のカグラはどうにもできない。

「チェックメイト」
《Ｍｏｏｎ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

ホムラが、彼の奥義とも呼べる魔法を紡ぐ。
収束する力。それを見て、くそっ、とカグラは呟く。

「弱くなったな、俺」

それは、諦めの言葉だった。ホムラは、ふん、と鼻を鳴らす。

「見るに耐えん程や」
「そうかよ」

カグラは、苦笑。
そして、銀色の光を見る。
……約束。
トモエと、約束したのに。
こいつを、何とかすると。

「随分と……まあ、なんだ。回り道……しちまった」

慣れないことは、するものではない。
ホムラとの戦いで、カグラは『オリヴェント式』を発動できなかった。反動に、耐えきれなかった。
そして。
今のカグラ・ランバードは、ホムラ・イルハートには届かない。
それが、事実。
故に。
ここで散るのが、運命なのだろう。

「……すまん、トモエ」

誰にも聞こえない声で、カグラは呟いた。

「お前との約束……果たせそうにない」

世界が、染まる。

カグラは、ちくしょう、と息を漏らし。

それでも。

ー一微笑んでいた。

◇　◇　◇

それは、歴史に刻まれる日。

時空管理局。

世界の守護者たるべきその組織が、敗北と宣戦布告を受けた日として。

『管理世界の諸君。突然ですまない。私の名はクライム。世界を憂う、革命者だ』

あらゆる次元世界に、同時にその姿は映し出された。

あらゆる世界のテレビに、その男はいた。

『私は、この世界を憂う。時空管理局……世界の平穏を保つという組織は、本当に世界を守っているのか?』

クライム……罪の名を名乗ったその男は、世界に問いかける。

『時空管理局が謳う『管理』とは、『支配』ではないのか？　我々は、人類は、本当に管理局に頼らねば平穏を保てないのか？　管理されなければ、何もできないのか？』

クライムは、問い続ける。
語りかけるように。

『かつて、こんな世界があった。戦争を繰り返し、毎日のように人がその命を散らしていく世界だ。管理局はそんな世界を放っておけぬと、干渉した。『戦争を止め、質量兵器を封印せよ』と。しかし、その世界にはその世界なりの理由があって戦いを繰り返していた。支配者と、支配される側の戦いだ。奴隷には叛乱という権利がある。それを、管理局は否定したのだ。
無論、奴隷側がそれを受け入れるわけがなく、追い詰められていた彼らは管理局にまで牙を剥くしかなかった。そして、支配者側もまた、干渉を拒み、管理局へと牙を剥いた。
……わかるかね？　管理局が関わったことにより、むしろ状況が悪化してしまったのだ。敵の敵は味方、という理由の下、彼らは世界として管理局と戦い、最後には自ら世界を滅ぼした。
諸君らに聞きだい。この話を、どれだけの者が知っている？』

知っているはずがない。
それは、秘された事実が故に。

『知らぬ、という事実が管理局の傲慢であり、闇だ。管理局は本当に『正義』なのか？　耳障りの良いことを口にするだけの、『偽善』ではないのか？　管理局は……我々の、人類の可能性を破壊してはいないか？』

画面が切り替わり、とある映像が映し出される。

それは、銀色の鎖で宙に磔にされているカグラの姿であり、テンリュウ一人に足止めされている六課の姿であり、そして。
壊滅した、陸士１０８部隊の姿であった。

『彼らは、我が同志によって敗北した。管理局は魔法を比較的安全などと語っているようだが……その現実がこれだ。魔法は人を殺さない？　力は所詮、力に過ぎない。どのように飾ろうと、魔法とて力だ』

それもまた、管理局の欺瞞である。
クライムは、そう言った。
『管理局は質量兵器を否定しているが……私は質量兵器を肯定する。質量兵器による犯罪は年々増え続け、犠牲者もまた増え続けている。だというのに、一般市民に対し、管理局は護身の刃を持つことさえ許さない。それが私には理解できない。私には、管理局が私たちに『大人しく死ね』と言っているようにしか聞こえない』

例え、抗議の声が上がろうと。
この男には、届かない。

『進歩、進化、進展。呼び方など何でも構わないが、人類に限らず生物というものは進み続けなければ滅びてしまう。危険と断じるなら、そうならないようにすればいい。最初からは不可能でも、いずれは可能になるだろう。始めから何もするなと断じるのは、人の可能性を閉じるのと同義であると私は考える』

男は……クライムは、両手を広げる。

『私は管理局を否定し、管理局が否定するものを肯定する。何故なら。私には管理局が『滅べ』と私たちに言っているようにしか聞こ

えんからだ。……何より、我らの『正義』が管理局を許せん』

男は、言う。

『人を殺せと管理局に命じられた青年がいた。彼はそれに逆らい人を救った結果、管理局に地位を奪われ、居場所から追われた。敵を倒せと命じられた『英雄』たちがいた。管理局は彼らを消すために虚偽の情報を渡した結果、英雄たちにとって大切な者が命を落とした。

管理局のために死ねと命じられた青年がいた。彼は命を削り続け、そんな彼を管理局は終ぞ『無駄』と言葉を投げかけた。

何という、不条理か。

最早、管理局に『正義』という名も『管理者』という名も名乗る資格はない』

だから、と男は言った。

だから私たちは立ち上がったのだ、と。

『私を詐欺師と糾弾するならすればいい。犯罪者と呼ぶなら呼ぶがいい。だが、覚えておけ。この理不尽で不条理な世界でも、『仁義』という名の『正義』はあるのだ』

男は、高々と宣言する。

『たとえ我らが倒れようと、必ずお前たちを討つ者は現れる。必ずだ。

世界に散らばる、同志たちよ。

遂にこの時がきた。

志を同じくするならば、立ち上がれ。武器を取れ。最早流血なくして革命はならない。

未来がために。
正義がために。
我らの想いを届けるのだ』
男は、謡うように口にする。

『開戦だ』

◇　◇　◇

世界に向けての大演説を終えた、クライム……ホムラたちの宗主に、声がかけられた。

「さっすが宗主♪　名演説♪」
「なに、大したことではない」

微笑を浮かべながら、クライムは言った。
グリスは、でもさ、と首を傾げる。

「動くかな？」
「動くさ。情報のリークも済んでいる。誰も彼も、『正義』というものが大好きだ。必ず動く」
「キャハハ♪　確かに♪」

グリスは笑う。クライムは、それで、とグリスに問いかけた。

「帰還は？」
「ばっちり♪　ギレンがちょーっとやられちゃったけど……ちょうどいいや♪　試したいこともあったしねぇ？」
「それについては好きにするといい。あの部隊は全滅かね？」
「ま、概ね？　あの場にいたので生き残ったのは数えるくらいかな？　あと、特務部隊は言いつけ通り殺さなかったけど？」
「それでいい。彼女たちには、私たちと戦ってもらわねばならない。迷いながら、迷いなき我々と戦う姿はきっといい絵になる」

クライムは、笑う。
ー計画は順調。今のところ、特に問題はない。

「さあ、行こうか。世界を変えよう」

物語が、加速していく。

◇　◇　◇

ー報告。
陸士１０８部隊及び、特務部隊機動六課の被害状況。
死者６５名。
うち、魔導師４９名。
非戦闘員１６名。
重傷者８名（この中には、ゲンヤ・ナカジマ二等陸佐が含まれる）。
……尚、重傷者のうち、ミリアム・エンドブロム一等陸士は目を覚ましたが、強いショックを受けており、事情聴取は困難。
また、今回の襲撃を受けたのは現場にいた者たちのみであるが、結果として八割以上の人員と部隊長を失った陸士１０８部隊は、事実

上機能停止。
特務部隊機動六課被害状況。
死者０名。
重傷者７名。
軽傷者４名。
……尚、重傷者のうちカグラ・ランバード一等空佐とフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官は予断を許さない状況。
また、こちらも実質的に活動停止に等しい被害を受けている。

報告者……高町なのは一等空尉。

第十七話　激動、轟いて（後書き）

ここにきてようやく姿を現した黒幕。
彼の言葉は事実と真実と虚構が入り乱れ、それ故に人を惑わせていきます。
カグラとホムラ。この二人の戦いについても、一度決着です。
一瞬に近い早さで決着が着いたのは、それだけ互いが互いのことを知り、尚且つそれだけの力の差ができてしまっていたということです。

はい、十七話です。
遅くなってすみません？
楽しんで頂けましたか？
カグラのレアスキルは、『自分の魔力光を自由に変えられる』です。
故に虹のように見えるのですね。
さて、テンリュウの理不尽な強さが発揮されたり、決着があまりにも理不尽だったりと、山場の中にもいくつか伏線を盛り込みました。
次は第三部のエピローグの位置にきますので、存外早くお届けできるかもしれません。
上手くいけば、明日にでも。

感想をくださる方々、本当にありがとうございます。励みになっています。現金なのですが、感想頂けると執筆速度上がったり？
メッセージをくれる方、励みになっています。今後もよろしくお願いします。
では、今回はこの辺で。

読んでくださり、ありがとうございます。
では、次回。

第十八話
「誓いと約束」

第十八話　誓いと約束

陸士１０８部隊の壊滅から、二週間近く。
八神はやてとファイム・ララウェイは、穏やかな日々を過ごしていた。
彼らは、何も知らない。
だが、その日は。
なんとなくだが……終わりを感じていた。

「はやてさん。確認させてもらっても、いいですか？」

結局、ファイムは敬語で話していた。戦うことを決めたはやての側にいようと決めた以上、彼女に不必要に近づいてはならないと判断した。
はやてもそれを受け入れ、せめてこの戦いが終わるまでは、ファイムは敬語で話すことにした。

「ん、どないしたん？」
「決意は、変わらないのですね？」

それは、確認だった。はやては、うん、と頷く。
戦うことを選んだ彼女は、今もまだ、迷いがある。
罪人としての自分。
償いの仕方。
その全てに整理はついておらず、『逃げたい』という気持ちは残っていると、彼女は語った。
しかし、それでも戦うことを決めたからと。
はやては……笑うのだ。

「自分の道を否定しないために。わたしは、戦うよ」
「そう、ですか」

彼女が決めたのなら、是非もなく受け入れる。
ファイムはそう決めていたし、同時にそうなるだろうと考えていた。
だが……ままならないものである。

（辛いとわかっている道を進もうとするはやてさんを、止めたいと思ってる）

矛盾だらけだ、本当に。
ファイムは、苦笑。そのファイムの背中に、そっと、はやてが触れた。

「はやてさん？」
「……わたしが決められた理由はな、ファイムくんがいるからや。ファイムくんが一緒にいてくれるなら、わたしは頑張れるんや」

優しい言葉だった。ファイムは頷く。
いつまでかはわからない。
それでも、『生きる』と決めた。
この人の隣で。
ただ……それだけで、良かった。

◇　◇　◇

時空管理局本局。

そこで、一つの決定が下された。

「もう、収拾をつけるにはこれしかないわ」

珍しく疲れた顔で、理事会の議長であるミゼットは言った。他の理事たちも、言葉はない。

世間は今、混迷を極めていた。

例の……クライムという男が率いる組織の行動こそないものの、他の有象無象たちが行動を起こし、管理局は対応に追われていた。

また、管理局の評判も問題になっている。

前々から流れていたファイムの件や、今まで管理局が表に出せなかったこと……レジアス・ゲイズのジェイル・スカリエッティとの繋がりや、『最高評議会』の行い、英雄たちによって葬られた、『屍部隊』というものの実在。

管理局の闇が、次々と公開されているのだ。

静まり返った室内。そこに、吐き捨てるような声が響いた。

「今までのツケが回ってきただけだろ。悪は許さず、ってな」

声を発したのは、カグラ・ランバード。未だ万全とは呼べぬ身でありながら、その場にいた。

前線を退き、全ての肩書きを捨て、代わりに『陸士部隊統括官』……地上本部の戦闘部門、その最高位に就くことになった彼は理事でこそないが、今回の事件に深く関わる人間としてここにいた。

「テメェらの尻拭いにあいつらを使うのは気に入らねぇ。けどま、そのために他の奴らまで危険に晒すのもおかしいからな。今は静観してやるよ」

「言葉を慎め」

理事の一人が声を上げる。ことあるごとにカグラの発言に噛みついてくる、無能な男だ。
カグラは、はっ、と吐き捨てる。

「クビにすんならすりゃあいいだろ。できんならよ」
「……本当に、いっそ憎らしい程に自分の立場を弁えているね、坊や」
「誰かさんたちのおかげでな。そうしなきゃ死ぬってんなら、そうなるしかねぇだろうよ」

カグラは吐き捨てる。ミゼットは、ふぅ、と息を吐いた。

「反対なんてしないだろうね、カグラ？」
「どうとも。あいつらがそれを選ぶんなら、いいんじゃねぇの？」

カグラは、笑みを浮かべる。

「ただ……どうなるかは知らねぇがな」

◇　◇　◇

互いに、無言だった。
ただ黙して、ソファーに並んで座っている。

「……」

不意に、ファイムが立ち上がった。はやては何も言わず、黙している。

ファイムは目を閉じ、そのまま、右目を覆っていた眼帯を外した。
ーーダダダダダダダダダッ！！
荒々しく、床を蹴る音が響き渡った。
二人がいる部屋のドアが弾かれるように開け放たれ、二十人近い武装した魔導師が雪崩れ込んでくる。
その人垣が割れ、一人の女性が進み出てきた。
リンディ・ハラオウン。
『奇跡の女神』と異名をとる、女傑だ。

「……土足で上がり込んでくるのは、いくらなんでも無礼ではありませんか？」

ファイムが、静かに言葉を紡ぐ。
その瞳が開かれ、その場にいた者たちは全員が息を呑んだ。
金色に輝く右の瞳。自然に生まれたものではないそれは、戦うための命……戦闘機人の瞳。
更なる力を求めたファイムが望み、ようやく体に馴染んだ力だ。
怒りを称えるかのように爛々と輝く金色の瞳。その瞳を真っ直ぐに見つめ返しながら、リンディは言葉を紡いだ。

「それについては謝罪します。しかし、事は一刻を争う状況です」

言いながら、リンディは控えている魔導師に視線を送った。その指示を受け取った魔導師が二人、前に進み出ると、それぞれ小箱を取り出し、その蓋を開けた。
入っていたものは……それぞれ、違う。
片方は、執務官バッジと一等陸佐の階級章。そして、インテリジェントデバイス『リンネクロウズ』。
もう片方は、戦場で将官以上の者が被る指揮官帽。そして、『准将』の階級章だった。

「この際、ファイム・ララウェイ……あなたが何故ここにいるかについては問いません」
「問われる筋合いもありませんが」
ファイムの言葉に、自然と棘が宿る。
彼らが何を望んでここに来たのか、わかってしまったからだ。
だから、ファイムは言い捨てる。
「僕は自分の意志でここにいる。それが罪だというのなら、ご自由に」
「……聞いていた人物像と随分と隔たりがありますね」
リンディがため息を吐く。ファイムは、それはそうです、と頷いた。
「礼には礼を。無礼には無礼を以て。人に礼儀を通して欲しくば、相応の態度をとってください」
「道理ね。構いません。……時空管理局理事会より、二人に辞令が下りました」
一歩進み出ながら、リンディは言い放つ。
「八神はやて。あなたは特務部隊機動六課部隊長から解任、同時に一階級の昇進により准将に任命」
突然の言葉であるそれに、はやてとファイムは驚く。リンディは、更に続ける。
「ファイム・ララウェイ。剥奪していた執務官資格を特例により、返還。また、同時に二階級昇進により、一等陸佐に任命。特務部隊

機動六課の部隊長補佐からは解任」

突然の、二人同時の昇進。そして、六課からの解任。
それが、意味することは。

「待ってください、リンディさん。六課は……みんなは、無事なんですか？」
「……六課は、壊滅、いや、敗北しました」

二人の目が見開く。リンディは、更に続けた。

「また、陸士１０８部隊も壊滅。管理局は、敗北したのよ」

ホムラ・イルハートが起こした戦いに引き続き。
管理局は、敗北を喫してしまった。

「特務部隊機動六課は解散。最早『奇跡の部隊』でさえ、この状況を覆すことはできないわ」
「……成程、理解しました。だからこその、『准将』ですか」

八神はやてに与えられた階級の意味を、ファイムは悟る。
六課の解散。地上の要たる陸士部隊、その一角の壊滅。そこから導き出される答えはーー

「管理局法戦時特例第十三条……『旅団運用』」
「流石ね」

ファイムの言葉に、リンディは頷き、そして、二人に言う。

「あなたたちは今までの功績を考慮した結果、旅団を率いるに相応

しいと判断されました」

ある意味で、それは栄転とも呼べる状況だった。

二人は階級を上げられただけでなく、戦時中でなければ成立しない『旅団』という規模の軍隊を率いることを命じられたのだから。

だが。

ファイムは、納得しない。

「建て前など、どうでもいい」

ファイムは、吐き捨てるように言った。

「察しろ、などと都合のいいことを押し通す気なら、その辞令を受ける気はありません」

ファイムは言い捨て、それを聞いたはやてが何かを言おうとしたが、ファイムがそれを押し止めた。

ここだけは。

この一線だけは、譲れない。

「僕は管理局のために死ねと言われて生きてきました。それは僕自身が選んだ道ですし、今更誰かを恨むことなどありません」

それは事実であり、受け入れるべきこと。

「二階級昇進？　それは、『そう』いう意味なのでしょう？　レジアス・ゲイズ中将も、カグラ・ランバード一佐も直接言いましたよ？　『それ』を口にする覚悟さえなく、あなたはここにこられたのですか？」

糾弾の言葉だった。俄に、魔導師たちが殺気立つ。
それをリンディは手で制し、言葉を紡いだ。

「……あなたたちには、広告塔になってもらいます。あなたたちが戦うことは、管理局が失いかけている信頼を取り戻すための礎となります」

八神はやて。
ファイム・ラフラウェイ。
地上においてとてつもない知名度と影響力を有し、尚且つ、ファイムに至っては『管理局の闇』と一部では考えられてしまっている始末。
それが管理局の一員として戦えば、風聞を覆す要因となる。

「そして……そのために、私は敢えてあなたに言います。ファイム・ラフラウェイ執務官。はやてさんはあくまで指揮官。しかしあなたには、最前線で戦ってもらうことになる」

ファイムは、冷たい目でリンディを見る。
リンディは、逡巡を捨て、言い切った。

「二階級昇進……いえ、二階級『特進』と受け取ってください。私たち管理局は、あなたに『死』を命じます。その命燃え尽きるまで、戦いなさい」

それは、死の宣告。
これを告げられるのは、三度目だ。
一人目は、それを当然と断じ、何の迷いもなく告げてきた。
二人目は、迷いながら、それでもそれしかないからと、血を吐くように告げてきた。

そして三人目は……その両方を内包し、しかし、凛とした口調で告げてきた。
結局、行き着くのはここなのだろう。
どれだけ望んでも。
周りが、『それ』を許さない。
生きること。
死ぬこと。
ああ、と、ファイムは思った。

（僕にも、選択の権利はなかったのか）

今更だけど。
今更だから。
ファイムは、進むのだ。
抗いながら。

「はやてさん」

選択の権利など、自分には必要ない。
どうせ、終わりが定まった人生だ。

「私、ファイム・ララウェイは、あなたに従います」

ファイムは跪く。はやてに頭を垂れ、言葉を紡いでいく。

「あなたが望むならば、永遠の地獄にさえ堕ちましょう。……御言葉を」

それは、茶番だった。
ファイムは、すでに知っている。知っているからこそ、確認するの

だ。
戦うこと。
戦わないこと。
今ならまだ、引き返せると。

「シュベルトクロイツ」

はやては立ち上がると、彼女のデバイスを起動させた。バリアジャケットは纏わず、杖だけを構築している。
はやては周囲を見回すと、厚手のコートを持った魔導師からそれを借り、羽織る。

「わたしの分、貰いますね？」

言って、はやては指揮官帽に階級章を付けると、それを被った。そして、ファイムの前に立つ。

「わたしの覚悟と選択は、何も変わらへん」

言いながら、はやての声に迷いがあることにファイムは気付いていた。
しかし、それでいいのだ。
迷い続けてこその、人だから。

「わたしは戦うよ。戦うことを決めたから。怖いけど、それが選んだ道やから。ファイムくん。わたしと一緒に、戦ってくれる？」
「命令を、頂ければ」
ファイムは面を上げぬまま、はやてに言った。

「この命をあなたのために使うと決めました。あなたを戴くと、そう決めたその瞬間から。弱き非才の身にはありますが、全身全霊を以て」

はやては、ぐっ、と唇を引き結ぶ。
命令。
戦うこと。
それについても、決着は一度着いている。
二人の想いも。
信念も。

「戦いなさい、ファイム・ララウェイ」

はやては、その言葉と共に、シュベルトクロイツを差し出した。ファイムはそれを、両手で受け取る。

「生きて、生きて、生き抜いて。その命の限り、わたしと共に戦いなさい」

それは、運命を受け入れず、八神はやてという女性が辿り着いた答え。
希望を抱かなければ、未来は見えないのだから。

「運命など変えなさい。希望を持って、生きて戦いなさい。それが、わたしの命令です」

ファイムは顔を上げ、ゆっくりと頷く。

「ーー承知」

ファイムは立ち上がりながら彼のデバイス『リンネクロウズ』を手に取ると、それを纏う。
そして、彼は。
微笑みながら、誓う。
約束として。
生きることを。

「Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｈｏｐｅ，ｍｙ　ｄｅａｒ」

ファイムが、紡いだのは。
たった、一つの意志。

ーー“希望を抱く”

第十八話　誓いと約束（後書き）

戦うと決めた二人は、管理局に利用されるという形で復帰します。
どこまでもままならない世界で、ファイムは徐々に押し込めてきた感情が出て来ます。リンディに対する厳しい言葉も、その一端です。

というわけで、十八話です。楽しんでいただけましたか？
今回は第三部のエピローグに当たります。気付けば文庫本４、５冊分の文章力だというのだから驚きです。
今回出てきた『旅団』ですが、規模は『連隊』より上で、今は世界の軍隊でもあまり見られない規模で、人数は１５００人～６０００人という規模です。構成については、次回の後書きで書くつもりです。

感想など頂ければ、是非ともお願いします。

次回から、本格的に戦争に近い雰囲気になっていきます。山場もありますので、どうぞお付き合いください。

では、次回予告です。

次回予告。

設立される、管理局の切り札たる部隊。そこに名を連ねるのは、歴然の勇士たち。
だが、それを率いる『地上本部の切り札』八神はやてと、『エース・オブ・エース』高町なのはの二人が、思わぬ形で激突する。
それは、必要な通過儀礼であり。

新たな始まりのための戦い。
そして青年もまた、新たな力を願う。

「……消し炭になっても良いのなら」

次回、第十九話
「夜空に瞬く星の光」

第十九話　夜空に瞬く星の光

時空管理局本局、模擬戦ルーム。
かつて、とある男の企みによって大隊戦が行われたその場所で、二人の魔導師が向き合っていた。
八神はやて。
高町なのは。
互いに押しも押されぬトップエースである二人は、互いのデバイスを構え、向き合っていた。

「なのは、はやて！　あんたたち、自分が何してるかわかってんの！？」
「なのはちゃん！　はやてちゃん！」

フェイトたちが入院しているということを聞き、ミッドチルダに来たアリサとすずかの二人が叫ぶ。だが、二人は耳を傾けない。

「あんたも何か言いなさいよ！」

アリサの矛先が、最後の観戦者たるファイムに向けられる。ファイムは苦笑した。

「何か、と言われても。何もありませんし」
「止めるとかあんでしょうが！」
「……消し炭になっても良いのなら」

どこか遠い目で、ファイムは言った。アリサは、なっ、と言葉を詰まらせる。

「どういう意味よ！？」
「消し炭になるのは僕です。お二人は押しも押されぬ、管理局のトップエース。僕は凡俗。割って入ったところで結果は知れています」
情けない話ですが、と、ファイムは肩を竦めた。
その上で、なんにせよ、とファイムは呟く。
「これは、お二人が望んだことです。僕に干渉する理由も権利もありません」
元よりするつもりもない。
……事の発端は、こちらに到着してすぐだ。
六課のメンバー……リィンとアギトはメンテナンス中で無事だったが、なのはを除く他のメンバーは全滅したとはやてとファイムは聞かされ、すぐさま病院に向かった。
そして、そこで。
高町なのはが、八神はやてに言ったのだ。
『私と、戦おう』
理由などわからないし、その意図も掴めない。
だが、はやては受け入れ、こうして、二人は向き合っている。
ー一衝突。
二人のトップエースが、魔力の衝突を起こす。
「……まあ、必要なことではあるけれど」
ファイムは、小さく呟いた。

◇　◇　◇

はやては、開始直後になのはから大きく距離を取った。中距離以下では、彼女はなのはに適わない。

「ブラッディダガー！」

千を数える刃の葬列。それが、なのはを狙い撃つ。

「アクセルシューター！」

対し、なのはは数十発のシューターを展開。それらは縦横無尽に空を駆け回り、はやての撃ち出した刃を全て蹂躙する。

ーーゾクッ。

目が合った。高町なのはの冷たい目に、はやては恐怖さえ覚える。

だが、しかし。

ここで引くことは、許されない。

「ディバインーーー」

なのはが砲撃魔法を展開する。それを受け、はやても魔法を紡ぎ上げる。

「ブレイズーー」

『魔力蒐集』。八神はやてが持つそのレアスキルで習得した、クロノ・ハラオウンも多用する砲撃魔法において最もスタンダードな一撃。

「バスターッ！」
「カノン！」

衝突。魔力が撒き散らされ、二人は余波で僅かに動きを止める。
追撃に入ったのは、なのはが先だった。

「レイジングハート！」
《Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　Ｅｘｅｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ａ．Ｃ．Ｓ》
「ドライブ！」

ーーガドン！！！！！！
凄まじい轟音が響き渡った。はやての障壁になのはの魔力刃が突き刺さった余波で、大気が震える。

「「くううっ……！？」」

力比べ。その拮抗を崩したのは、なのはだった。

「カートリッジロード！　ドライブ！」
《Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！！》

カートリッジロードによって増幅された魔力が、はやての障壁を食い破る。
そして。
爆発が、空を包んだ。

「……ッ！？」

黒煙の中から、二人が這い出てくる。そのまま二人は、示し合わせ

たようにそれぞれの奥義を紡いだ。
互いにトップエースを謳われる魔導師である。強大な力を持つ故に、長引くということがない。

「「ブラスター1！　リミットリリース！」」

二人は同時に、ブラスターシステムを起動。そのまま、最大魔法を展開する。

「全力！！　全開！！　スターライト！！」
《Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》
「響け終焉の笛……ラグナロクッ！！」

最早個人が有していい量の魔力を超えた魔力によって紡がれる大魔法。
それは、戦略級の兵器にさえ匹敵する。
模擬戦ルームが軋み、見守っているファイムも、全力で結界を展開。
そして。
二人は、衝突する。

「「ブレイカァァァァッッッ！！」」

余波だけで模擬戦ルームの床がめくり上がり、同時に、結界装置もダウンする。
純魔力の一撃だけでこの威力……正直、寒気さえ覚える程だ。
アリサやすずかは、呆然と成り行きを見守っている。
そして、ファイムは、ため息を吐いていた。
ー一煙が、晴れる。

現れたのは、仰向けに倒れながらレイジングハートを向けられる、はやての姿。
決着だ。戦いそのものは。
だが……。

「はやてちゃん、どうして？」

なのはの問いかけ。
何が、とは、はやては聞かなかった。
なのはは、尚も問う。

「どうして、はやてちゃん。どうして、戦うの？」

はやての頬に、暖かいものが触れた。

「私たち、負けちゃったよ？　私だけ、私だけが、無事で。みんな、傷ついて」

自分がいない間に何があったのか、はやては聞き及んでいる。
その中で、なのはだけが無事だったという事実も。

「はやてちゃんだって、傷ついて。ファイムくんだってそう。……どうして？　わかってるのに、どうしてなの？」

はやての目が見開く。なのはは涙を拭いながら、頷いた。

「ユーノくんから、聞いたよ。カグラさんからも。ファイムくんの命は、もう、残り少ないんだって」
「……なのはちゃん」
「どうして？」

なのはは、はやての胸ぐらを掴み、問いかける。

「そこまでわかってて、どうして戦わせるの？　戦うの？　答えてよ、はやてちゃん」

「……そのどうしての答えは、なのはちゃんにはわかるはずや」

優しい魔法使いであり、英雄である高町なのはだからこそ。

わかる、はずなのだ。

「ここで戦うのをやめてしまったら、逃げてしまったら。わたしは、もう、私自身を許せなくなってしまうんや」

「だけど！　死んじゃうんだよ！？　いなくなっちゃうんだよ！？　はやてちゃんは耐えられるの！？」

なのはは叫ぶ。高町なのはは、人の『死』というのに敏感だ。

それはかつて、彼女の父がその瀬戸際に立っていたからであり、彼女自身がそれを覚悟する目に遭ったからでもある。

そして、何より。

あの雪の日に、優しい銀色の女性を送ったのが、高町なのは自身だから。

「リィンフォースさんは、救えなくて。どうしようもなくて。わた、私がっ……」

嗚咽を漏らしながら、なのはは言う。

「送るって、何？　リィンフォースさん、笑ってたんだよ？　温かかったんだよ？　私は、リィンフォースさんを、殺しー」

ーーパンッ！
乾いた音が響いた。はやての平手打ちが、なのはを打った。
「勝手なこと、言わんといてくれんか？」
はやては上体を起こし、なのはの肩を掴む。
その瞳は、怒りに燃えていた。
「あの子を殺したのは、このわたしや。わたしの未熟さや。なのはちゃんのせいでも、フェイトちゃんのせいでもない」
あの雪の日。
たくさん涙を流したあの日に感じた無力感は、全て、自分のものだから。
「ファイムくんかてそうや。わたしが、彼を殺すことに、なるかもしれへん」
声が震えた。やはり、まだ、耐えられない。
二度も大切な人を失うのは、耐えられやしない。
けれど、それでも。
目を逸らさずに、決めたのだから。
「せやけど、わたしたちは、選んだんや。戦うことを。なのはちゃん、なのはちゃんかて、そうなんやろ？」
なのはが、こうして戦った理由。
それは。
『エース・オブ・エース』だからできることをするため。
そう……『全てを背負う』ため。

「わたしたちが戦わない選択をしても、なのはちゃんは戦った。今、みんなが傷ついてて、なのはちゃんだって未だＪＳ事件の疵痕が癒えてへんのに、それでも戦ったはずや」

それが、高町なのはという女性。
『エース・オブ・エース』の在り方だから。

「私は……っ」

なのはが口籠もる。はやては、首を左右に振った。

「そんな、自分ばっかり追い込んだらアカン。なのはちゃんは何も悪くない。悪いんはむしろ、いなかったわたしたちや」

なのはは、責任を感じていたのだろう。
自分だけが、敗北の中で無事であったことに。
彼女は強い。それこそどんな状況であろうと活路を見いだす『勝利の鍵』。
だからこそ、誰よりも責任を感じてしまうのだ。
自分の強さを、自覚しているが故に。

「わたしたちは、まだ終わりやない。まだ、負けてない。不屈の心を、諦めない強さをわたしたちに教えてくれたんは、なのはちゃんや。だから、みんなは必ず立ち上がる」

高町なのはを見てきたからこそ。
不屈の強さを知るからこそ。
その強さに、救われたからこそ。
その輝きに、憧れるからこそ……。

「それやのに、なのはちゃんがそんな顔してたらアカン。わたしは戦うよ、なのはちゃん」
「だけど……ファイムくんが」
「約束」
はやては、微笑んだ。
「わたしな、ファイムくんと約束したんや。『生きて』って。きっとそれはとても残酷な言葉なんやけど、それでも」
死を定められた彼に、その願いはあまりにも残酷だったろう。
だけと。
その気持ちと願いは、本物なのだ。
「それでも、約束してくれたから。今度こそ、違う未来を選んでみせる」
それは、はやての誓い。
失うしかなかった、大切な人。
そんな悲しい未来は、もう、認めない。
今度こそ。
優しい未来を、掴んでみせる。
「まだ時間はある。わたしは諦めへん。ファイムくんを、救ってみせる」
方法は、何一つわからなくても。
それは、決めたことだから。
八神はやては。

ファイム・ララウェイに、生きていて欲しいから。

「運命は変えられる。それを教えてくれたんは、なのはちゃんや。だから、手を貸して」

一人では無理だから。
だから。

「みんなで、戦おう。なのはちゃん」

なのはは、涙を流し。
はやても、泣いていた。

◇　◇　◇

《良いのですか？》
「……うん。ちょっとね。あそこにいたら、泣いちゃいそうだったから」

自身のデバイスの言葉に、ファイムは苦笑を返した。
本当に、あの二人は優しい。優し過ぎるほどに。
自分など、路傍に転がる石とさほど変わらないであろうに。

「なんにせよ、気持ちには応えないとね。……リンネ、付き合ってくれるかな？」
《無論です。私はあなたと共になら、どこまでも参ります》
「ありがとう」

信頼できる相棒を伴い、ファイムはとある場所に赴く。
ミッドチルダの地上。その技術開発局へ。
全ては、更なる力のために。

「想いは力に。運命を覆す」
《Ａｌｌ，ｒｉｇｈｔ》

◇　◇　◇

ーーダンッ！！
室内に、鈍い音が響いた。シグナムが、壁を叩いた音だ。

「何故、気付けなかった……！？」

彼女が責めているのは、彼女自身。なのは、はやて、ファイムを除く六課メンバーは、未だにベットから出られないフェイトの病室に集まり、カグラとユーノから話を聞いていた。
命を使う術式、『オリヴェント式』と。
ファイムの命が、終わりに近付いているという事実を。

「シャマル、お前、知ってたんじゃねぇのかよ？」

ヴィータがシャマルに問いかける。シャマルは、首を左右に振った。

「ファイムくんは一度も検査をさせてくれなかったから。……ごめんなさい。無理にでも検査を受けさせるべきだったわ」
「無理だな」

シャマルの呟きを否定したのは、カグラだ。フェイトが、言葉を紡ぐ。

「どういうことですか？」

「その態度だよ、嬢ちゃん。知られたら、嬢ちゃんたちはどうなる？　同情するか？　憐れむのか？　どっちにしても、本人にはキツいだけだ」

自ら選んだ道を同情されたり憐れまれたりするのは、あまりにも辛い。

「だけど、黙っていられた方が辛いです」

「話して、欲しかったです」

俯きながら、エリオとキャロが言う。それを受け、なら聞くが、とカグラが言葉を紡いだ。

「あいつがそれを打ち明けたとして、お前らは何ができた？　何もできやしねぇよ。むしろ、知ったせいで動きが鈍くなる。なら、知らねぇほうがいい」

「そんな言い方……」

「あんまりじゃありませんか？」

スバルとティアナが抗議の声を上げる。カグラは、ふぅ、と息を吐いた。

「俺はあいつに『死ね』っつってきた側の人間だぞ？　今更だっての」

ーーダンッ！！
再び、鈍い音。ヴィータが、カグラを壁に押し付けていた。

「テメェ！！」
「やめろヴィータ！！」
「ヴィータちゃん！！」
「うるっせぇ！！　ふざけんな！！　『死ね』だと！？　よくそんなと言えんなテメェ！！」

ヴィータは殺気を称えた瞳でカグラを睨む。カグラは、ふん、と鼻を鳴らした。

「八神はやて……あの嬢ちゃんの言葉を、全員忘れてるみてぇだな」

吐き捨てるように、カグラは言った。

「嬢ちゃんも言ってたろうが。あいつは、お前らが弱いからああなってんだよ。管理局が弱いから。だから命を使ってんだよ。ほざいてんじゃねぇ。甘ったれんな」

カグラは、言い捨てる。

「俺に掴みかかる前に、自分を恥じろ『鉄槌の騎士』。テメェらの弱さがファイムの命を削ってんだ。自覚しろ」

ヴィータの手を振り払い、カグラはため息を吐く。

「光があるってことは、影があるってことだ。お前らトップエースだのストライカーだのの影に、どんだけの凡人がいると思ってる。ファイムはその影の最も深い場所にいる人間だ。ただ、それだけだ

よ」

重い空気が場を支配する。そんな中、リィンが口を開いた。

「難しいです。ただ……悲しいですよ」

「そうだな。だが、真理だ。あいつのことを想うんなら、お前たちは輝き続けろ。影の人間にとってはな、光がちゃんと輝いてんのが何よりなんだよ」

カグラは目を閉じる。そのカグラに、怒りが籠もった声が届いた。

「気に入らねぇ」

「ん？」

声を発したのはアギトだ。アギトは、言葉を続ける。

「光とか、影とか。よくわかんねぇよ難しくて」

「……」

「けど、わかるんだよ。あんたらが、とんでもない貧乏くじを自分から引き受けてんのが」

カグラは、苦笑する。

「誰かがやらなきゃなんねぇんだ。それが俺たちだってだけだよ」

そして、カグラは部屋を出ようとする。その去り際に、言葉を紡いだ。

「運命は変えられる。悲しい未来は打ち壊せる」

それは、かつてカグラの愛する女性が紡いだ言葉。
それを、カグラは次世代のエースたちへと送る。

「納得できねぇなら、足掻け。それで未来が変わるかもしんねぇぞ」

◇　◇　◇

……久し振りに見た親友は、目を閉じ、沈黙していた。

「……」

ファイムは、チラリと右を見る。リューイが倒れてからずっと、ここで彼が目を覚ますのを待っている女性ーーウェンディ・ナカジマを。

「……リューイ」

ファイムは呟く。ミリアムにも先程会ってきたが、あちらもあちらで責任を感じ過ぎ、錯乱してしまっている。落ち着くまでは時間がかかる。
目を覚まさないのは彼だけではない。リューイの隣ではファイムにとっては恩ある上官であるゲンヤ・ナカジマも同じように眠っており、別室ではギンガ・ナカジマも眠っている。
あの場にいた陸士１０８部隊の者で、生存者は本当に僅かだったのだと思い知らされる。

「……どうしてッスか？」

不意に、ぽつりとウェンディが呟いた。ファイムは、そちらを見る。
まるで、独白のようにウェンディは言葉を紡いでいく。

「リューイも、パパりんも、ギンガも、ミリアムも……どうして、
誰も助けてくれなかったッスか？」

ファイムは、答えられなかった。
陸士１０８部隊の救援要請は、地上と本局の両方に届いていた。し
かし、動いたのは六課だけ。
カグラによれば、理事会から圧力がかかっていたとのこと。
ゲンヤ・ナカジマ。
リューイ・エンドブロム。
優秀過ぎる指揮官と、ＡＡＡ＋という破格のランクを有する真正ベ
ルカの騎士。
上層部でこの二人を疎んじている者は、とても多い。
だが、それを。
この女性には、告げられない。

「みんな、頑張ってたッスよ？　毎日毎日、リューイなんか、進ん
で雑用ばっかりやって。毎日毎日見回りなんかやって。倒れそうに
なって。それぐらいしなくちゃ、元犯罪者の自分は償いにならない
からって言って」

リューイ・エンドブロムは、どこまでも実直である。
そんな彼だからこそ、ファイムは友と呼ぶのだから。

「……いけない、んスか？」

嗚咽を漏らしながら、ウェンディは言った。

「元犯罪者は……っ、誰にも、助けてもらえないッスか？　どんなに頑張っても、ダメ、なんスか？」

その問いに、ファイムは答えられない。
ファイム自身が、知りたいことだから。
何をすれば償いになるのか。
どうすれば償えるのか。
罪人は、どこまでいこうと罪人なのか。

「……どうして、どうして、どうしてっ……！」

ウェンディが立ち上がり、ファイムの胸倉を掴んだ。
その瞳が称えるのは、悲しみと、怒りと、やるせなさ。
どうしようもないほどに蓄積された感情を、ウェンディはファイムに叩き付ける。

「どうして、いてくれなかったんスか！？」

その怒りが筋違いのものであることに、ウェンディ自身が気付いていたはずである。
だが、それでも叫ばなければどうにかなっていただろうし。
ファイムもまた、糾弾されることを受け入れていた。

「地上では、いっつもファイムの名前を聞くッスよ？　誰もが認める『エース』だって。なんで、どうして、リューイを助けてくれなかったんスか！？」

ウェンディは泣き続ける。ファイムは、そんなウェンディに問いかけた。

「……リューイをこんな目に遭わせたのが誰か、わかる？　ウェンディ」
「……多分、ホムラ・イルハートだって、カグラさんが」
「そっか」
ファイムは頷く。ホムラ・イルハート……彼は、幾度となく立ちはだかる。
「ファイム？」
ファイムから手を離し、涙を拭いながらウェンディはファイムを呼ぶ。ファイムは、酷く冷めた目をしていた。
「……正直なところを言えば、おかしいんだと思う。リューイは、言いたくないけど、負けて、こうなったんだろうから」
敗北の結果、深い傷を負うことになるのは道理だ。
しかし、それでも。
頭が納得しても、心がそれを認めない。
「許せない、って思うんだ。……ホムラ・イルハートは、僕が討つ」
これほど、納得できないと思うのはいつ以来か。
ああ、あの時だ。
はやてを殺せと命じられた、あの時以来。
「恨みも憎悪も、好きじゃないけど。むしろ、大嫌いだけど。それでも、僕は」
固く、固く、ファイムは拳を握り締める。

理由が一つ。
間違えたものが一つ。
出来上がった、瞬間だった。

◇　◇　◇

八神はやてが兵団長となる旅団の名称が決定した。
第１０８魔導旅団。
先の戦いにおいて壊滅した陸士１０８部隊の無念を引き継ぐことと、管理局の理念……『魔導を以て平和を紡ぐ』を象徴する意味を込めてその名が冠せられた。
八神はやてに集まった期待のほどが伺える。
だが、規模が規模であるために編成に時間がかかる。
実際に今も、八神はやてはカグラ・ランバードと編成……特に、地上からの引き抜きについて話し合っている。

「正直なことを言えば、連携の面を考えても部隊を2、3くっつけんのが一番なんだがな。それを中心に組んできゃ、それなりのもんが出来上がる」
「せやけど、それはできません」

はやては出されたコーヒーカップを机に置きながら、苦笑した。

「師匠の部隊が……陸士１０８部隊が壊滅して、地上は今かなり混乱してます。そんな中から部隊を、なんてできません」
「まあ、確かにな。それに、今回は状況が状況。元よりその方法は使えなかった」

カグラは肩を竦める。はやては、はい、と頷いた。

「わたしたちは、管理局の『象徴』でなければならない」

「そうだ。だから、表向きは精鋭部隊。実際は確執だらけの寄せ集めを指揮する必要がある」

カグラは、真剣な表情でそう言った。そう、懸念の一つはそれだ。

ー一第１０８魔導旅団。

それは『象徴』として、陸、海、空。その全ての代表でなければならない。そうでなければ、管理局の風聞を覆せないのだ。

精鋭を集めた、と言えば聞こえはいいが、実際は寄せ集めになる。

ランクが高かろうとスキルがあろうと実績があろうとだ。

むしろそれが、『余計なプライド』となって連携の邪魔をしかねない。

それに、陸、海、空の確執もある。そんな部隊を率いるはやての苦労は計り知れない。

それに、もう一つだけ、『旅団』という規模だからこそ噴出する問題がある。

「……魔導師ってのは、実力が個人の才能に大きく依存する。そのせいで能力もスキルもバラバラになりやすく、だからこそスタンドプレーに走りやすい」

質量兵器ならば、扱い方さえ叩き込めばある程度は横一線で錬度を高められる。だが、魔導師はその才能に依存する部分が多く、同じ手間をかけても同じ錬度に辿り着く保証がない。

それ故に個人差が現れやすく、結果として連携をあまりとらない魔導師は多い。特に高ランクの魔導師にはありがちなことである。

小隊や分隊ならそれも許されるのだろうが、旅団の中では『大隊』、『中隊』で動くのが基本になる。連携ができない、では話にならな

い。

「その辺の調整は大変だぞ、嬢ちゃん」
「それについては、一応考えてあります。問題は中間指揮官なんですけど……」
「嬢ちゃんの申請は全て受理した。多少強引な手を使ったが、まあいいだろ。……ただ、本当にあれでいいのか？」
「……本人たちが望んでることですし、ええと思います。空と陸の『エース』は、『象徴』としては申し分ありませんから」

言いつつも、納得いっていないことがカグラにはありありとわかった。だが敢えて何も言わず、そうかい、と頷く。
そしてカグラは手元にある資料に視線を落とすと、確認だ、と口にした。

「陸士１０８部隊……その生き残りは全員召集した。おやっさんたちも含めてな」
「ありがとうございます」
「なに。陸士１０８部隊を基礎に立ち上げてんだ。当然だよ。……それに、これなら誰も手出しできねぇだろうしな」

カグラは呟く。ゲンヤやギンガ、リューイといった目を覚ましていないメンバーは、『旅団』に名を連ねることになった。
無論、本格的に動けるようになるまでは現場復帰は見送りになるのだが、敢えてはやてとカグラはそういう措置をとった。
そうしておけば、休ませることができるからだ。

「おやっさんは優秀だからな。ムカつくが、理事会からは疎まれてる。何されるかわかんねぇしな」
「はい」

はやても頷く。頷きながら、本当に、と嘆息さえ吐く。
世界を守るだの。
平和を紡ぐなどと言う前に。
敵が、障害が、多過ぎる。

「……言いたかねぇけどな。こんなにも障害が多過ぎると、ついつい思っちまうよ」

背もたれに全体重を預けながら、カグラは言った。

「管理局なんざ滅びたほうがいいんじゃねぇか、ってよ」

綺麗事ばかりではいられない。そんなこと、理解している。
それでも。
それでも、もう少し、と思うのだ。
もう少し……まともではいられないのかと。

「情けないがな。まともに敵とも向き合わせてもらえねぇ組織なんざ、ってよ」
「……それでも、ここでなければ守れないものがあります」

両手を強く握り締めながら、はやては言った。

「大切な人たちがいるから、だからわたしは、戦います」
「辛いぞ？」

間髪入れずにカグラは問いかけた。はやては、頷く。

「覚悟の上です」

強い瞳だった。カグラは、上等、と頷く。

「いい目だな、嬢ちゃん。……よし、やる気出てきたぜ。理想の部隊を仕上げてやるよ」

カグラは、にっ、と楽しそうな笑みを浮かべる。

「嬢ちゃんたちが関わってきた奴らを中心に、召集をかける。錬度は低いかもしれねぇが、それよりは信頼だ」

状況が状況。それに、はやてたちは紛れもない『エース』であり、数多くの奇跡を起こしてきたのは伊達ではない。声をかければ即戦力とはいかずとも、粒は揃う。

大体、六課が丸ごと部隊に入るのだ。錬度など、二人の教導官が底上げしてくれる。

はやてもそれを理解しているのだろう。頷いた。

だが。

「ただ……一つだけ問題があるんです」

「ん？」

「『二人』の配置を定石から外したせいで、中間指揮官が足りないんです」

「……『Ｎ２Ｒ』はどうだ？」

「チンクは指揮官としてやれると思いますけど、他の三人は……特にウェンディはあの状態ですし……」

「ふむ」

指揮官ーーそれは死活問題だ。信頼できて、尚且つ力がある魔導師となると、中々いない。

大体、指揮官はニアSランクが基本の旅団だ。人材不足はある意味当然である。

「だかなぁ……俺が出るわけにはいかねぇし、おやっさんが目ェ覚ましゃ頼むんだが……」

頭を掻きながら唸る。

カグラ・ランバードは、前線を退いた身だ。戦う場所を血で血を洗う戦場から、謀略と策謀に溢れる魔窟へと変えた。

流石に、彼が前に出るわけにはいかない。

「師匠が目を覚ましてくれるまででええんですけど……任せられる人がおったら……」

「だがなぁ……執務官でも教導官でも、ニアSなんてのは大抵がかっ飛んでやがるからな……」

教導官を礼儀面で指導する立場だったカグラだからこそよくわかる。

教導官も執務官も、大抵が変人だ。

教導官は実力故に癖の強い者が多く、なのはやヴィータのように教導ができる教導官は実は半分くらいしかいない。

執務官は執務官で単独行動が基本となるため、魔導師の力や実務能力があっても指揮官適性がない者が多い。クロノという手本がいたフェイトや、そもそも戦争を知っているファイムのような、『指揮ができる執務官』というのが珍しいのだ。

まあ、実力があればスキルは二の次というのが管理局の魔導師であり、指揮官というものが疎かにされている結果だ。

「指揮官適性がある奴は大体がどこぞで指揮執ってるし……んー……」

「やっぱり無理ですか？」

「……代理くらいなら、何とかなりそうな奴がいる」

カグラは、ため息と共にそう言った。

「戦い方を高町教導官が教導し、人としての在り方を俺が教導した。新人研修をテスタロッサ執務官の下で受け、初めての実戦を八神司令とヴォルケンリッターの下で経験し、今年、陸士１０８部隊から本局戦技教導隊入りした天才魔導師が」

言いながら、カグラは笑っていた。カグラが言っている人物が誰かに気付いたはやては、でも、と言葉を紡ぐ。

「彼はまだ、１６かそこらやったはずです」

「今年で１５だな。確か。……何を言うんだ、嬢ちゃん。俺はその歳で『エース・オブ・エース』なんて呼ばれてたし、嬢ちゃんたちだって十二分に活躍してたじゃねーか」

カグラは笑みを浮かべ、それに、と言葉を紡いだ。

「あの小僧はファイムに憧れて管理局に来たらしいぜ？」

実に適任だとカグラは言った。

そしてカグラは、その名を口にする。

「ソラ・ウィンガード三等空尉……空戦Ｓ－ランク魔導師」

手札が、出揃う。

◇　◇　◇

暑かった夏も終わり、秋が近付いてきた。そのせいもあって、肌寒い。

「もう、そんな季節なのか……」

ファイムは呟く。時間は流れているようで、流れていない。
いや、逆かもしれない。
この事件に関わるようになってから、あまりにも多くのことが起こったから。
密度の濃い、日々だった。

「……いや、『だった』なんて言うのは、まだ早い」

何も、終わっていない。
むしろ、激化している。
まだまだ、終わりは見えないのだ。

「どこまで保つかは、わからないけれど」

ファイムは自身の掌を見つめる。
いつ果てるかわからない命。保って欲しいと思う。
もう少し。
もう少しだけ……。

ーードンッ。

余所見をしていたからか、ファイムは誰かにぶつかった。見れば、女の子が尻餅をついている。ファイムは慌てて、その子を引っ張り

起こした。

「ごめんね？　大丈夫？」

「……（コクリ）」

女の子は頷く。ファイムは一応、怪我を確認。……大丈夫。問題ない。

「キミ、一人？　危ないよ、もうすぐ日も暮れちゃうし」

ファイムは空に視線を向ける。少しだけ、赤く染まり始めていた。

だが、それだけならまだ許容範囲の時間だ。ファイムが気にするのは、最近の治安である。

クライム……『罪』の名を名乗った男の演説以来、あらゆる次元世界で治安が悪くなっているという話を聞く。

それは、クラナガンも例外ではない。

ファイムは、俯き気味な女の子を見て、問いかける。

「もしかして、迷子？」

「……（コクリ）」

女の子は頷く。そっか、と、ファイムは微笑んだ。

「じゃ、探そっか」

女の子の頭を優しく撫で、ファイムは微笑む。

こういう時、市民の力になるのが局員だ。

「僕はファイムといいます。あなたの名前は？」

その時、少女は初めてファイムを見た。
そして少女は告げる。
告げてはならなかったのに。
出会ってはならなかったのに。
二人は、出会ってしまった。

「……アリア」

第十九話　夜空に瞬く星の光（後書き）

戦う理由は、希望を抱くが故に。
理想を口にするはやては、甘いのかもしれません。しかし、彼女はそれをギリギリの中で選び取りました。
だからこそ、まだまだ世界は捨てたものではないのかもしれません。
そして、出会った二人。出会うべきでなかったのか、どうなのかは、今後の道行きで決まるでしょう。

はい、第十九話です。
ありがとうございます。
楽しんで頂けましたか？
今回はとりあえず、ファイムとはやての現状把握です。二人が知らない間に、世界は大きく動きましたので……。
そして、新キャラ『ソラ・ウィンガード』なのですが、オリキャラは彼で最後です。あまり出したくないというのもありますし、出し過ぎて原作キャラを書けなくなるのが嫌なのです。
次回ですが、またまた物語が動いていきます。主人公であるファイムの変化、それが見れるかもしれません。
そして旅団の構成ですが、後書きに書くには多過ぎて……？
なので、すぐにその分は投稿します。
話自体は３０話半ばくらいでの完結を目指していますが……どうなるか、見守って頂けるとありがたいです。

感想、質問、ダメ出し、待っています。
良ければ是非ともお願いします。
そして、７万ＰＶ、ありがとうございます。感謝しかございません。
今後とも精進していくつもりですので、よろしくお願いします。

では、次回予告を。

次回予告

出会った二人は、言葉を交わす。
それは決して多い言葉ではなかったが、しかし、通じるものだった。
そして、ガードが揃い。
象徴たる兵団は、戦場へと出陣する。
手にするのは、新たな姿。
堕天となりて、青年は空を舞う。

「わかりあうために戦うのも、ありだと思う」

次回、第二十話
「今と昔と未来」

第１０８魔導旅団　構成

陸士１０８部隊の名を引き継ぎ、戦時特例によって設置された。八神はやて准将（Ｂｒｉｇａｄｉｅｒ　Ｇｅｎｅｒａｌ）が率いる旅団（Ｂｒｉｇａｄｅ）。管理局が掲げる、『魔導による平和』という理念からこの名称になった。

以下、構成。

旅団司令部（兵団長：八神はやて准将。参謀官：ゲンヤ・ナカジマ二等陸佐）
魔導歩兵第零小隊（隊長：ファイム・ララウェイ一佐相当執務官。隊員、０名）

魔導歩兵第一連隊（二個大隊（一、三）、八個中隊。部隊長：八神シグナム二等空佐）
主力魔導師：ギンガ、エリオ、リューイ、アギト

魔導歩兵第二大隊（六個中隊。部隊長は八神ヴィータ三佐相当教導官）
主力魔導師：スバル、ノーヴェ

魔導歩兵第四大隊（四個中隊。旅団司令部直隷予備戦力）
主力魔導師：ザフィーラ、ミリアム、リィンフォース

旅団砲撃隊

魔導砲兵第一中隊（第一連隊直轄砲兵隊。隊長：ティアナ・ランスター二尉相当執務官）
主力魔導師：キャロ、ヴァイス

魔導砲兵第二中隊（第二大隊直轄砲兵隊。隊長はチンク・ナカジマ二等空尉）
主力魔導師：ディエチ

魔導砲兵第三中隊（支援砲兵隊。隊長：ソラ・ウィンガード三等空尉）

魔導砲兵第四中隊（旅団司令部直隷遊撃隊。隊長：高町なのは一等空尉。隊員０名）

飛行隊（四個中隊。隊長：フェイト・Ｔ・ハラオウン二佐相当執務官）
主力魔導師：ウェンディ

その他
医療班（最高責任者：八神シャマル）
整備班（最高責任者：マリエル・アテンザ。副整備長：シャリオ・フィニーノ）
……ｅｔｃ．

第１０８魔導旅団　構成（後書き）

はやてが率いる旅団の構成です。
正直、あまり軍隊は詳しくないので間違っていないか怖くて仕方ありません？

ちなみに、これは完成型ですので、ゲンヤさんやギンガ、リューイのように参加できないメンバーは（仮）という形になります。

そして、ファイムとなのはですが……この二人は、敢えてこういう形にしました。

陸と空のエースを如何に自由に動かすか、というのは戦略面というより広告面で必要な配慮です。故に、あの二人は単身で戦うという形になりました。

また、はやてとカグラの強権発動によりなのは以外（なのはは前線に拘ったため）の階級が軒並み上がっています。

この部隊が今後どのように活躍するのか、見守って頂けるとありがたいです。

ありがとうございました。

第二十話　今と昔と未来

夕暮れの街並みを、ファイムはアリアと名乗った少女の手を引いて歩いていた。
いつもなら活気がある街も、この状況下ではどうしても人通りが少なくなっている。

「待ち合わせをしてたの？」
「……うん。教会」
「成程、それならすぐそこだ」

ファイムは微笑む。このアリアという少女が言っているのは、聖王教会のことだろう。それならば、歩いて２０分とかからない。
そうしてしばらく歩いていると、前方から見回りらしき局員の二人が歩いてきた。
ーーギュッ。

「……？」

アリアがファイムの手を握る強さが、不意に強くなった。ファイムは首を傾げながら、二人組の横を素通りする。
そして二人組が大分遠ざかったのを確認してから、ファイムはアリアに問いかけた。

「管理局のこと、嫌い？」

苦笑を交えた、優しい口調の問いかけ。アリアは驚いた表情でファイムを見上げ、そして、頷いた。
ファイムは、そっか、と頷く。

「仕方ないかもしれないね。管理局は散々、世間一般で言うところの『悪いこと』をしてきたから」

犠牲になった者たちの数など、もう、わからないほどに。
管理局は、罪を重ねてきた。
善行の裏側で、悪行を。

「僕もね、管理局が嫌いなんだ」

足を止め、ファイムは言う。アリアは、そんなファイムを見上げていた。
アリアには、ファイムの正体はわからない。だから、ファイムの言葉の異常性に気付けない。
だが、彼を知る者なら。
たとえ一般人であっても、彼が言ったことに対して驚きを禁じ得なかっただろう。

『管理局が嫌い』

それは、『地上本部のエース』と謳われ、管理局のために命を使ってきた男の言葉ではなかったから。
ファイムは、酷く冷めた目で空を見上げる。

「何も変わらなかった12年間。『無駄』とまで言われた人生。……昔は考えたこともなかったのに、どうしてかな？　最近、そればかりを考える」

管理局が善とか悪とか、そういうのではなく。
もっと、根本的な疑問。

ー管理局は必要なのか？
そんな、疑問ばかりを。

「だけど……答えは出ない。出せるはずもない。ただ、わかるのは」

ファイムは、自身の右手を見つめる。

「管理局にいなければ、守れないものがあるという真実」

それだけは、間違えようのないことだ。
管理局にいなければ、八神はやてを守れない。
だから、ファイム・ララウェイは管理局にいるのだ。

「……」

アリアが、ファイムを見上げる。ファイムは苦笑し、しゃがみ込んだ。

「ごめんね、わからないよね？」

アリアの頭を撫でつつ、ファイムは言う。
全く……何を言っているのか。
こんな小さな女の子に。
だが。

「……大丈夫？」

アリアは、そう言って逆にファイムの頭を撫でた。
ファイムは驚きに目を丸くし、そして、微笑む。

「ありがとう」

そして、再び二人は歩き出す。

数分後、教会が見えてきた。もう少しだよ、とファイムがアリアに声をかけようとした瞬間。

「……ウィル」

アリアが呟いた。ファイムが前を見ると、一人の少年が目に映った。

（……彼は）

その少年に、ファイムは見覚えがあった。襲撃事件で飛竜を駆り、『ソルトルージュ』ではエリオと戦ったという少年だ。

ウィル、と呼ばれたその少年もファイムを睨んでいる。

ファイムは努めて冷静を装い、アリアに言葉を紡いだ。

「彼が、待ち合わせの相手かな？」

「……（コクリ）」

アリアは頷く。ファイムはそっか、と頷くと、ウィルに歩み寄った。だが。

「待て」

ウィルはそれを押し止めた。警戒の色がありありと受けてとれる。

アリアは戸惑い、ウィルとファイムを交互に見る。ウィルは、殺気さえ籠もった声で言葉を紡いだ。

「テメェ、見覚えがあるぜ。おっさんたちが『要注意』って言って

た魔導師だ。何のつもりだ？」
「……意外な高評価ですね。僕など警戒する程でないでしょうに」
ファイムは肩を竦める。ウィルは、ふざけんな、と言葉を紡いだ。
「はぐらかしてんじゃねぇ。殺すぞテメェ。アリアに何するつもりだ」
「何も。迷子のようでしたので、一緒に行動していただけですよ」
「……テメェ」
ファイムは至って真面目に答えたのだが、相手はそう思ってくれなかったらしい。怒りの色をどんどん濃くしていっている。そしてそれに応じ、魔力まで漏れ始めている。
（……マズいね）
ファイムは、内心で眉をひそめた。今現在、地上はかつてないほど緊張した空気の中にいる。
その中でこんな魔力を感知し、しかも敵勢力の一員とわかれば、ただでは済まない。
（彼一人ならともかく、他の魔導師もいたら、正直どうなるかわからない）
ウィル、という少年自体はＡＡランク程度の力を有しているだけで、それならば制圧自体は難しくない。
だが、他の……特にホムラやテンリュウなどがこの場にいるなら、状況はどれだけ悪化するかわからない。
どうするかーーファイムが思考を巡らせた時。

「ーーウィル！」

声が響き渡った。アリアが、叫んだのだ。
ファイムは驚きに目を丸くし、ウィルも驚きで硬直している。
アリアはファイムの手を強く握り締めながら、言葉を紡いだ。

「……ファイムは、助けてくれたよ？」
「……」

ウィルの表情から、怒りの色が薄れていく。相変わらず、警戒していたようだったが。

「……戦っちゃ、だめ」

アリアは言い、ファイムは微笑んだ。そして、ファイムは問う。

「どうしますか？」
「……どうするって」
「戦いがお望みでしたら、受けて立ちます」

ファイムは、鋭い視線をウィルに向ける。その瞳にウィルはたじろぎ、ただし、とファイムは言葉を紡いだ。

「この往来で。この子を……アリアを巻き込んでも良いのなら、ですが」
「……ッ」

ウィルは表情を険しくする。状況を悟ったのだろう。
この状況、追い込まれているのはウィルの方だ。
だが、それでも、ウィルは言った。

「……アリアを、返せ」

ファイムは、内心で成程、と呟いた。
この状況で一番に優先するほど、この少女が大切か。
ファイムは、構いません、と言葉を紡ぐ。

「元より、そのために探していたのですから。……良かったね。ほら、行きなさい」
「……（コクリ）」

アリアは頷き、一度強くファイムの手を握ると、ウィルへと走り寄った。そして、ぺこりとファイムに頭を下げる。ウィルは、ファイムを睨んだままだ。
ファイムは、そんなウィルに問いかける。

「……どうしました？」
「いいのかよ？」

問い返された。何が、とは聞かない。聞く必要がない。
見逃すのか、と彼は聞いているのだ。

「見逃しても。俺たちは、テメェらにとっては犯罪者なんだろ？」
「かもしれません。ですが、今の僕はデバイスもなければ、体調も万全じゃない。それに今日は、迷子の道案内をしただけです」

ファイムは微笑みながらそう言った。ウィルは、ちっ、と舌打ちする。

「なめてんのか？」

「侮っていないからこそ、です。今戦うのは、リスクが大きい」
ファイムは、ポケットに両手を入れ、それに、と言葉を紡いだ。
「あなたたちにはあなたたちの事情なり理由なりがあるはずだ。確信した。キミの理由は、『アリア』なんだよね？」
ファイムの問いかけ。ウィルは、重ねて舌打ちをした。
「ウゼェ。聞かれて話すと思うのかよ」
「いや。誰だって、隠しておきたいことの一つや二つ、あるからね。無理に聞こうとは思わないよ」
ファイムは言い、ただ、と言葉を紡いだ。
「戦ってわかり合うのも、ありだと思う」
互いに譲れぬものがあるなら。
ぶつからなければわからないことも、たくさんある。
もっとも、戦わずに済むならそれが一番だが。
ウィルは、更に舌打ち。
「気に入らねぇ」
「それはそれは」
「けど」
ウィルは、アリアの手を握りながら、絞り出すように言った。
「アリアを助けてくれたことには、礼を言う。……ありがとう」

そう言って、ウィルは頭を下げてきた。ファイムは一瞬、呆気に取られ、そして、微笑する。

「どういたしまして」

ウィルはそれを聞いた後、弾かれたように頭を上げる。
そして、彼は言った。

「次は、敵同士だ」
「残念ながら」

苦笑するファイム。ウィルは、最後にファイムを複雑な感情の込められた目で見ると、背を向けてきた。
アリアは、名残惜しそうにファイムを見る。ファイムは、微笑みを返した。

「また、いずれ」

確証などなかった。しかし、それでも良かった。
そして。
二人の姿が見えなくなるまでファイムはそこに佇み、沈黙していた。
その彼に、声がかけられる。

「ファイムさん」

振り返ると、そこにいたのは一人の少年。
燃えるような紅蓮の瞳を有し、白銀の長髪を後ろで束ね、教導隊の制服を着ている。
ファイムには見覚えがあった。優秀な後輩だ。

「ソラ？」

ファイムはその後輩の名を呼ぶ。何故、というニュアンスが込められていた。

ソラ・ウィンガード。

高町なのは以来である、１５才という若さで戦技教導隊入りした正真正銘の天才だ。

その天才は、周囲を見回すと、言葉を紡いだ。

「こんなとこでなにしてんですか、ファイムさん？」

「……白々しいね？」

ファイムは微笑。ソラは、バレてましたか、と肩を竦めた。

「いやでも、一応は偶然なんですよ？　見回りにかこつけてサボってたら、ファイムさん見つけて、なんか剣呑な雰囲気だったんで、見てたんです」

「見回り？　ソラは本局所属だよね？」

「増援です。ほら、地上、ゲンヤさんが倒れたから」

「……成程」

ファイムは頷く。ソラは元々陸士１０８部隊に所属していた。そういう意味で、確かに増援としては相応しい。

もっとも、本人の気質からして向いているとは思い難いのであるが。

「ま、上からの命令ですし？　従いますよ、面倒臭いですけど」

「なんというか、相変わらずだね」

「まあ、モットーですから」

ソラは肩を竦める。彼は、基本的に面倒くさがりだ。更に言えば、

向上心も出世欲もほとんどない。
現状から変わることを面倒くさがる……そういう人間なのだ。
なにせ、教導隊への誘いを最初彼は一も二もなく断った。理由は、
『面倒臭いのと、器じゃない』ということだ。
Sランク認定試験も、ゲンヤに騙されて受けさせられ、結果としてAランクから一気にS－ランク認定を受けることになるのだが、これについても本人はきっと、自分から受けることはなかっただろう。

「まあ、見回りは進んでやりましたけどね。一応、媚び売っとかないと」

ああ、とファイムは思い出した。
この少年は、腹黒いのだ。
まあ、根は良い人間なのだが。

「本当に相変わらずだね。……覗き見も、その一環？」
「いやいや、それは本当に偶然です。下手に刺激しちゃマズいと思いましてね。まあ……結果的に正解っぽかったですけど」
「二重の意味でね」

ファイムは息を吐く。ウィルを刺激しないという目的の他に、もう一つの意味でもソラの判断は正しかった。
あの場を見ていた、『最強』の存在が場に入るきっかけを与えないために。

「いやー、まさかエリアサーチを一瞬で潰されるとは思いませんでした」
「相手が相手だから。悔しい？」
「全く。戦いたくねーなー、って思うだけです」

本心からの言葉らしかった。ファイムは苦笑。

「本当にキミらしいね。……そろそろ、僕は本部へ戻るよ」

「あ、了解です。俺はもう少し見回りしてます」

「程々にね」

ファイムは言い、背を向ける。

彼の言う『見回り』は、要するにサボリである。全力を出さない……いや、出し方を知らないのが、この少年だ。

「それじゃあね」

ファイムは軽く頭を下げ、ウィルたちが歩いていった方を一瞥すると、本部へと歩いていった。

◇　◇　◇

風が流れた。音もなく、気配もなく、その者現れる。

「……テンリュウ」

アリアが呟いた。その頭に、手が乗せられる。

「はい。アリア」

テンリュウは微笑。そして、ウィルとは逆側のアリアの手を取りながら、ウィルに言葉を紡いだ。

「すみませんね、ウィル。合流が遅れてしまいました」
敬称を付けないのは、それだけ近付いたという証拠。ウィルは、いや、と首を振る。
「特に何もなかったから、別に問題は」
「そうですか。……『彼』との問答は如何でしたか？」
微笑を称えたまま、テンリュウは問う。ウィルは、少し考え込ん、答えた。
「妙な奴とは思いましたけど、特に何も」
「おや、そうですか。……彼とは、私も少し問答をしましてね。生粋の管理局員かと思えば、中々どうして。読めない方です」
ふふっ、とテンリュウは微笑む。
あの『エース・オブ・エース』もそうだが……管理局は、中々面白い人物が多い。
「甘いのか、それともただ優しいだけなのか。殺し合いさえ厭わぬ相手と、言葉を交わし合おうなどと。あそこまでの例外は、中々おりません」
テンリュウは言う。ファイムの在り方は、特殊だと。
「あなたは何も感じませんでしたか？」
「……最初は、戦う気だった。けど、なんていうか、毒気を抜かれて」
「ふむ。わかるかもしれません」

テンリュウは頷く。頷いてから、まあ、と言葉を紡いだ。

「あの場に私がいたことに気付いていたようですし、戦いは向こうも避けたかったでしょうね。一人、妙なのがいましたが」

「妙なの？」

「気にするような相手ではありませんよ。底は見えませんが、それだけです」

エリアサーチを飛ばしていた魔導師。技量は中々のようだが、特に脅威は感じなかった。

それならば、ファイムの方が危険だ。

「アリアはどうでしたか？」

テンリュウは思考を切り替え、アリアに問いかける。アリアは、首を傾げた。

「……ファイム、は、管理局？」

「ええ。彼は局員です。残念ながら」

名前まで覚えているのか、と、内心で驚きながらテンリュウは言った。

アリアは、人間というものが嫌いだ。更に言えば、人間というものが信用できない。

膨大な魔力を有する子供であり、彼女自身が制御できないとある『能力』が街を一つ消し飛ばしたとあれば、そして常に狙われてきたとくれば、人間など信用できなくて当然だ。

ウィルとてそうだ。アリアと偶然に出会った彼もまた、厳しい人生を送ってきている。

テンリュウを信用するのにも、時間を要したのだ。

だから、本当にテンリュウは驚いたのである。
アリアが、ファイムの名を口にしたのは。
アリアは、でも、と呟いた。

「……温かかった、よ？」
「はい」
「……優しかった、よ？」
「はい」
「……なのに、敵？」

アリアは、テンリュウを見上げる。テンリュウは、はい、と頷いた。

「残念ながら、彼は敵です。優しさも、温かさも本物でしょう。しかし、彼は敵なのです」

無情だが。
それは彼自身が、言い切っている。

「……嫌い、って」
「……？」
「……管理局、嫌い、って言ってた」
「……」

テンリュウは押し黙る。それは、なんと彼に似合わぬ言葉か。
『地上本部のエース』を謳われる彼に、その言葉はあまりにも似合わない。
だが、アリアが言うなら、真実なのだろう。
テンリュウは、そうですか、とだけ呟いた。
そして、三人はしばらく歩き、不意にテンリュウが言葉を紡いだ。

「アリア……すみませんが、今後、外出は控えていただきます」
「……どうして？」
アリアが聞いてくる。テンリュウは頷いた。
「これから、本格的に戦いが始まります。今まで以上に、世界は危険になります」
「……」
ウィルは何も言わない。彼も理解しているのだ。
今後、世界はどんどん荒れていくと。
「窮屈かもしれませんが、リヴァイアス殿が動かれ、より世界は混迷を極めます。私もあなたを常に守れなくなりますので……」
「……わかった」
アリアは頷く。すみません、とテンリュウは頭を下げた。そのテンリュウに、ウィルが言葉を紡ぐ。
「リヴァイアスさんが動くというのは……」
「例の、『あれ』のテストだそうです。管理局の辺境部隊を叩くとか」
テンリュウは言い、そして、空を見上げる。
「リヴァイアス・バルトマカリ……彼を、管理局は止められるのか」
特に興味もなく、呟いた。

◇　◇　◇

ー一第１０８魔導旅団。その編成がようやく終わり、召集が済んだ翌日だった。

第８０管理世界『ヘーメル』。そこに駐屯する辺境部隊より、救援要請が入ったのは。

理事会はすぐさま旅団の派遣を決定。彼らは三隻の次元航行艦で、現場に向かうことになる。

その、出発前。

八神はやてが、旅団の隊員全員を集め、演説を行っていた。

「今回、召集に応じてくれてありがとうな。まず、最初にそれだけは伝えます」

全員に聞こえるように言うはやて。

集まったのは、陸、海、空の魔導師たちや、後方支援の局員たち。

正直、連携には不安がある。

そう、不安があるからこそ、はやては言うのだ。

「わたしたちは、管理局の名誉を背負ってここにいます。せやけど、そんなものは必要あらへん」

ー一俄に、ざわめいた。

ここにいる者は、全員がこの旅団の意味を理解している。

『管理局の名誉を取り戻す』

だというのに、必要ないというのはどういうことか。

はやては、真剣な表情で言葉を紡いだ。

「その背中に『管理局』を背負ってる者は、今すぐここを立ち去りなさい。みんなが背負うべきなのは、そんなものやない。みんなが背負うべきなのは、『未来』や」

はやては、言う。

「あの男の主張が間違っているとは、正直、言い切れへん。せやけど、管理局がなくなってしまったら、わたしたちは誰も守れなくなる。それだけは、認められへん」

誰かを守るために。

ずっと、戦ってきたはずだから。

「わたしたちは、どうして管理局に入ったんや？　民間の魔導師企業かてある。技術かて、管理局以外で振るうことはできる。それでも管理局を選んだのは、守るためのはずや」

何故なら。

死ぬかもしれない場所に入るのは、相応の覚悟が必要だから。

「人が初めて力を振るうのは、いつだって何かを守る時や。そしてここにいるみんなは、『誰か』を守れる力があるとわたしは信じてる。管理局のためじゃなく、大切な『誰か』のために戦おう」

はやては、手を振るい、宣言する。

「第１０８魔導旅団ーー出撃や！！」

「「「おおおっ！！！！！！」」」

管理局のためが悪いとは言わない。だが、今のこの時世では、それは難しいだろうから。
だから、それよりももっと単純で、大切なものを。
守りたいもののために戦うことを。

ー戦いが、始まる。

◇　◇　◇

それは、異様な光景だった。
八神はやての旅団に比べれば、数は劣る。だが、『それ』はあまりにも異常だった。
同じ顔、同じ姿、同じ動き。
一糸乱れぬその行軍には、寒気さえ覚える。

「……」

はやては、無言。目の前の『異常』に、言葉を失っていた。
ー戦闘機人、そして、人造魔導師。
おそらく、人造魔導師のクローンを戦闘機人へと仕立て上げた、といったところか。

「兵団長。第二大隊が出陣しました。第一連隊は待機でよろしいですか？」
「……うん。まずは、相手の出方を見るよ」

ファイムの言葉に、はやては頷く。まずは相手の意図を掴まなければならない。

辺境部隊はすでに下がらせている。ここから先は、はやてたちの任務だ。

「グリス・エリカラン……戦闘機人を生み出してるのが彼なんやとしたら、ここでその力を見極める必要がある」

言い方は悪いが、大量生産が出来るのならば尚更である。

ファイムは、確かに、と頷いた後、はやてに問いかけた。

「では、兵団長。……ご命令を」

すでに戦闘は始まっている。ヴィータが率いる第二大隊と、敵の戦闘機人の部隊の衝突だ。

「……わたしがファイムくんに下す命令は、二つや」

はやては、迷いを称え、それでも尚強い瞳で言葉を紡いだ。

「……見敵必殺。わたしたちの行く道を邪魔する勢力は、みんなまとめて薙ぎ払いなさい」

「了解」

「そして」

はやては、ファイムを見つめる。

「死ぬことは許さない。必ず、生きて帰ってくるんや」

ファイムは、頷き。

「了解しました」

空を、駆ける。

◇　◇　◇

戦闘機人の厄介さは様々だ。
そもそもが戦うための存在であるために基本的な戦闘能力が高いことや、固有スキルＩＳなど、厄介な部分は数多い。
しかし、ヴィータをして厄介だと思わせたのは、その能力ではない。

「こいつら……感情がねぇのかよ！？」

正確には、意志がない。
魔法は全て非殺傷設定だ。しかし、砲撃などの放出系魔法ならばともかく、相手を直接叩くことになるベルカ式の技術は、どう足掻いても相手に傷を残すことになる。
だが、こいつらは。
ヴィータの一撃をくらい、砲撃をくらっても、こちらに向かってこようとする。
『退く』、ということをしないのだ。
まるで……前に進むことしか知らないかのように。

「……いや、そんなことはどうでもいい」

ヴィータはグラーフアイゼンを握り締め、前を見る。

「ぶっ叩いて蹴散らす。あたしのすべきことは、それだけだ！」

指揮官として指示を出しながら、自身も前線へと出撃するヴィータ。
そのまま彼女は、敵の戦闘機人を2、3人まとめて殴り飛ばす。
その時。

「!?　アイゼン!」
《Ｊａ》

グラーフアイゼンが応じ、障壁が展開される。そこへ、ミッド式の強力な砲撃が叩き込まれた。

「ほぅ?　中々良い反応だ」
「テメェは……!」

突然の乱入者を、ヴィータは睨む。
リヴァイアス・バルトマカリ。
ヴィータにとっては、一応、教導隊の先輩になる。
リヴァイアスは笑みを浮かべ、ヴィータを見据える。

「小僧の言うところでは、こいつらはまだ試作段階。精々がＡランク程度の力しかないらしい。故に貴様の相手など務まらん」
「それがどうしたんだよ?」
「俺様が相手をしてやろう、『鉄槌の騎士』。さあ、来るがいい。幾百、幾千、刻み続けてきたその力を見せてみよ!」

ヴィータは、先制の一撃でその言葉に応じた。リヴァイアスは、ははは、と笑う。

「さあ殺し合いだ!　貴様が殺すか俺が殺すか!　答えはどちらだ『鉄槌の騎士』!?」

力と力が衝突し、閃光が弾ける。
戦いが、更なる段階へとシフトする。

◇　◇　◇

向き合う二人の間に漂うのは、和解など有り得ない、敵対の空気。
ファイム・ララウェイ。
グリス・エリカラン。
いくつもの運命の悪戯が、二人の因果を構築した。
『緑風事件』。
『アンリミテッド・デザイア』。
『戦闘機人』。
そして……。

「そういえば、キミも『オリヴェント式』の使い手なんだってねぇ？」

グリスは笑みを浮かべながら、ファイムに言う。ファイムは無言。
グリスは、キャハハ、と笑った。

「命を使う……実にそそられるよ。言い換えればそれは、『永遠』への道標だからさ。だからボクは、興味を抱く」

命を使う術式。それは逆算すれば、『命を手に入れる術式』になりうる。
だからこそ、グリスは興味を抱いたという。

「世界、って広いよねぇ？　世界征服、なんて子供っぽいんだけど、

それでもボクはそれを望むんだ。だから、『命』が欲しい」

両手を広げ、グリスは笑う。

「世界を手に入れるには、『永遠の命』が必要だ。死んで失うなんて、ボクは認めない。ボクは永遠に世界を所有する」

「……狂ってる」

ファイムは、吐き捨てるようにそう言った。グリスは、笑う。

「古代からの、人類共通の夢だよ？　否定し切れるの？」

「できる。お前は、狂っている」

そんなことのために。

そんなことのせいで。

どれだけの人を、傷つけてきたのか。

「お前は僕が止める。グリス・エリカラン。かつてお前を、殺した者として」

そして、ファイムは彼のデバイスを起動する。

「『リンネクロウズ・ナイトメア』……セットアップ」

《Ｙｅｓ，ｓｅｔ　ｕｐ》

ファイムは、新たな姿を纏う。

その手にははやてが手にする魔導の杖……『シュベルトクロイツ』と同型の杖が握られ、純白を基調としていたバリアジャケットは、所々黒が混じり、威圧感を醸し出している。

そして、その背には。

正義を語る純白の翼ではなく。
正義を捨て、己が想いに生きる証の、堕天の黒い一対の翼が宿っていた。
これが、ファイムの新たな姿。
彼の決意を、体現したもの。

「そんなに見たいのなら、見せてやる」

足下に、『オリヴェント式』の魔法陣が展開される。

「グリス・エリカラン。お前はここで、僕が止める」

第二十話　今と昔と未来（後書き）

ファイムの新しい姿は、正義から、自身の想いを願う堕天の姿となりました。
旅団の初陣の相手は、心無き戦闘機人。
どう戦うのか？

はい、第二十話です。
ありがとうございます。
今回は短めでしたが、次回はまた長くなるかもしれません。
感想を頂けると、ありがたいです。
よろしくお願いします。

では、次回予告です。

次回予告

戦いが始まる。
初陣となる戦いで、魔導師たちは現実を突き付けられる。
意志なき人形。
しかし、人の姿をしたそれを、彼らは撃たねばならない。
それは、あまりにも、難しい決断だった。
惑いの中、選ぶのは？

「殺しても蘇る……なら、殺し尽くすだけだ」

次回、第二十一話
「戦場の狂気」

第二十一話　戦場の狂気

動揺が広がっていたのが、ありありとわかった。
――戦闘機人。
先の『ゆりかご戦役』でも猛威を振るったその存在が、再び。
対人の戦いであることは、覚悟していた。
そして、奇麗事では済まないことも。
だが。
意志なき人形のように迫ってくる戦闘機人たちを相手に、隊員たちはただ、戸惑う。
意志がないからこそ。
意志がないのに、向かってくるからこそ。
戦って、良いのか。
そんな、疑問が。

◇　◇　◇

八神シグナムは、厳しい表情で戦場を眺めていた。相手は戦闘機人。しかも、スバルたちのような意志を持つ戦闘機人とは違い、意志なき戦闘機人だ。
そして、痛みも何も感じないからこそ、『退かない』。
魔力ダメージで完全にノックアウトしてしまうか、打撃などで文字通り動かなくなる手傷を負わせるしかない。
そう……威嚇が通じないのだ。
管理局の魔導師は、時として犯罪者と戦闘を行うことも数多い。しかし、相手は人間だ。故に、威嚇も通じる。
だが、それが通じない人形は、想定していなかっ。

「……殺す覚悟を持つ者は、存外、少ない」

シグナムは呟く。戦う覚悟があっても、非殺傷設定という力を魔導が持つ故に、『殺す覚悟』がある者はほとんどいないのだ。
それが悪いこととは言わない。だが、今この状況では、邪魔にしかならない。

「我らが出れば……しかし、それでは何の意味もない」

シグナムは呟く。シグナムたちは最早、『それ』については割り切っている。敵である以上、ある程度は仕方がないと。
しかし、だからといってここでシグナムが敵を薙ぎ払えば、甘えが生まれてしまう。
それでは、意味がない。
主はやては、どうするつもりなのか……シグナムが、そう呟いた瞬間。
――光が、瞬いた。
山吹色の、まるで太陽のような光を纏うシューターが、戦場の一角で唸りを上げている。
決して強い魔法ではないようだが、その光は余裕を携え、しかし、容赦なく敵を薙ぎ払っている。
見覚えがあった。
戦技披露会にてかのクロノ・ハラオウンの相手として抜擢され、惨敗だという周囲の評価を覆し、ギリギリの惜敗を演じた天才魔導師。

「……『陽光』か。成程、確かに輝くものを持っている。何の躊躇も持ち合わせんか」

呟いたシグナムは、レヴァンティンの柄を強く握り締めた。

戦場が、色を帯びていく。
それは敵の質量兵器の光であり。
魔導師たちの、魔法の光でもあった。

◇　◇　◇

山吹色の光が……太陽の光が戦場を駆け巡る。容赦なく敵の戦闘機人たちを撃ち抜くシューターは、止まらない。
薙ぎ倒した数は約二十。ソラ・ウィンガードは、ふう、と、息を吐いた。

「ヴィクトリア。シューター消そうか」
《おや、もういいのかい？》
「ちょっと疲れたからね～。いやー、しんどいわ」
《あははっ、言うじゃないか。そんなこと、欠片も思ってないくせにさ》

ソラのデバイス『ヴィクトリア』が応じ、シューターが消える。ソラは、いやいや、と笑った。

「わたくしめは凡人にございますから？」
《あんたほどその言葉が嫌みになる人間もいないねぇ。それで、どうするんだい？》
「ん？……まあ、色々とね。俺もフォローしないといけないんだわ。器じゃないけど、隊長だし。一応ね」

ソラは肩を竦め、地面に降りる。
そこで待っていたのは、彼の率いる隊員たち。

「隊長……あなたは、躊躇いがないのですか？」
ソラの副官である、ソラよりも年上の魔導師が聞いてきた。ソラは、ああ、と呟く。
「敬語はいいですよ。先輩の方が年上ですし」
「……」
「……睨まないでくださいよ」
ソラは苦笑。冗談と受け取られたらしい。だが、ソラは本気だった。そもそも彼は年功序列を大切にする気質の人間だ。それ故に、年上の人間に敬語を使われると違和感しか感じない。
まあ、それはともかく。
ソラは、それなら、と言葉を紡いだ。
「先輩たちは何故躊躇するんですか？」
「何故、って……」
「命令ですよ？　戦うのは」
紅のバリアジャケットの尾をたなびかせながら、ソラは言う。
「わたしゃ、管理局から給料もらってますので。命令、ってか、与えられた仕事はきっちりこなしますよ。それが義理でしょ？」
「しかし、相手は人なのですよ？……隊長は、何とも思わないのですか？」
「死にたくないですから」
ソラは肩を竦め、現在は杖の形態を取っている『ヴィクトリア』を振るう。

――閃光。
まるで線引きでもするかのように、ソラと副官の間に溝が作られた。
「相手は殺しにきてます。俺は死にたくありません。理由なんてそんなもんでしょう」
「だが……」
「死にたくないから殺すんですよ。でももだってもねーんです。俺たちは、『殺せ』って命じられてんですよ」
戦え、というのは、そういう意味だ。
ソラ・ウィンガードは、それを割り切っている。
生きるも死ぬも、自らの責任。それは、相手もだ。
「ただ、嫌なら仕方ないです。退いてください。まあ、未熟者でも時間稼ぎくらいはできるでしょう」
《Ｂｌａｄｅ　Ｍｏｄｅ》
『ヴィクトリア』の形状が変化し、フェイトのバルディッシュのような魔力刃を持つ大剣が現れる。
「弱くても、まあ、なんというか。わたしも隊長なんで」
そして、ソラは地面を蹴り飛ばす。
あの線は、境界。
あれを越えれば、戦うと、そういうこと。
「ヴィクトリア。行くぞ」
《ははっ、いいね坊や。全力を出すのかい？》
「ねーな」

相対するのは、敵の一団。質量兵器の代名詞たる銃を携えた戦闘機人たち。
個々の能力は決して高くないが、数が多ければ苦戦する。
もっとも。
常に余裕であることを信条とするソラは、この状況でも本気を出すことはない。

「４割くらいで、十全だろ」
《……ほんとあんた、『余裕』の意味をはき違えてるねぇ》
「わかってる。でもま、わたくしめにはこれしかできませんから」

おどけた調子で言い、そして、ソラは敵を見据える。
――狙いは、中央。

「疾風迅雷！」
《Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ》

かの『雷光の死神』フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官と同じ掛け声と共に紡がれる、刃の一撃。それは違うことなく、敵を穿つ。

《Ｈａｍｍｅｒ　Ｍｏｄｅ》

そこでソラは止まらない。ヴィクトリアを背後に回すと、その形状が再び変化。今度は、『鉄槌の騎士』八神ヴィータ教導官の持つグラーフアイゼンのような鎚へと姿を変えた。
そして、ソラが振り上げると同時に、その鎚が巨大化する。

「轟天爆砕！」

――ズドン！！

問答無用の大質量。一団が、壊滅寸前まで追い込まれ、そこへ、ソラはトドメの一撃を叩き込む。

《Ａｒｃｈｅｒｙ　Ｍｏｄｅ》

ヴィクトリアが三度、姿を変える。魔力によって形成された矢をつがえるための、弓に。

「駆けろ！　隼！」

矢が放たれる。『エース・オブ・エース』と引き分けた『烈火の将』シグナム。彼女と同じ、一撃必殺の奥義。

――陽光が、敵を飲み込む。

築かれたのは、死山血河。立っている戦闘機人は、いない。

《流石だねぇ、坊や》

「誰だってできるって、これくらい。本来の使い手の人たちなら、一撃で事足りたレベルだ」

ソラは肩を竦める。そう、これが彼のスタイルである。

『他者の模倣』。

彼が天才たる所以は、その魔力量よりも、『目』と『技術』にある。

魔法というのは理論である。論理で構築されるそれは、八神はやてのレアスキル『魔力蒐集』がそうであるように、習得には相応の努力が必要になる。

だが、ソラはその類い希なる観察眼により、見ただけで魔法の構造を理解し、それを最大で八割程度ではあるものの、再現することができる。

最早レアスキルと呼んで差し支えない能力だが、本人は敢えて言うのだ。

――『所詮は猿真似』。
凡人が、天才の真似事をしているだけと。
だからこそソラ・ウィンガードは『天才』でありながら、『凡人』なのである。

「ま、凡人は精々足掻かせてもらいますか。適当に」
《……あんたさ、嫌味だよ、それ？》
「客観的な事実だろーに。俺が天才であるなら、こんなことにはなってないだろーし？」

肩を竦める。そう。自分の限界は、一番自分がわきまえている。
人一人が、とは言わない。だが、自分にできることには限界がある。
だから。
だから、こうしているのだ。
ソラ・ウィンガードは、弱いから。

「なんにせよ、とりあえずのノルマは果たしたかね？」
《戦争にノルマなんてないよ、坊や》
「ま、お仕事だから。戦争だろーと教導だろーと……人殺しだろうとね」

そして、そろそろ一度下がるのもありかなー、などとソラが考えた瞬間。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ヴィクトリアが反応し、魔力による砲撃を障壁で防いだ。ソラは、うわー、と声を漏らす。

「奇襲？　ありがと、ヴィクトリア」

《呑気だねぇ、坊や》
「常に余裕を、ってことで」
《まあ、いいさ。……さあ、お出ましだよ》
「できれば来ないで欲しいねー、こういうの」
《ほんと覇気がない》
「ないのはやる気だよ。……さて、妙なのが出て来たなこりゃ」

ソラは眉をひそめる。現れたのは、一人の男。
ただ、その姿は異質だった。
右腕と一体化した巨大な砲門。体の右半分を覆うどす黒いアーマー。
左半分だけ窺えるその顔は、あまりにも凶悪な色を宿した瞳を有していた。

「なんだあれ？　ぶっちゃけキモいんだけど」
《……地が出てるってことは、本気で気持ち悪いんだねぇ。まあ、わからないでもないけどさ》
「で、あれ何よ？」
《一応、『ギレン・リー』って答えが出てるけどねぇ？》
「へー、そりゃまた面倒臭いな」

弓をダラリと下げた状態で、ソラはギレンを見る。
ギレンの目は鋭く輝きながら、しかし、どこか焦点が合っていなかった。

「確か、カグラさんに潰された、って聞いてんだけど」
《目の前にいるんだ。是非もないよ、坊や。まあ、あの姿見てると、なんとなく予測はつくけれどねぇ》
「……どっちにせよ、貧乏くじかよ」

ソラは呟く。このレベルの使い手が、何人もいるとは思えない。と

いうことは、運悪く当たってしまったということだ。
わざわざ自分のような雑魚を潰しにくるなどということは、有り得ないだろうから。

「方針的には、時間稼いで援軍待ちか、隙みて逃げるか」
《軟弱だねぇ？》
「わたくしめは凡人にございます故」

そして、ソラの刃たるヴィクトリアの姿が変わる。

《Ｓｃｙｔｈｅ　Ｍｏｄｅ》

巨大な大鎌。フェイトの『ハーケンフォーム』のそれに似た武器を、ソラは構える。
そして。

「ハーケン……セイバーッ！」

振るわれた刃より放たれた光刃が、空を駆ける。フェイトと同じその魔法は、しかし。

「ブラストカノン！」
《Ｂｌｕｓｔ　Ｃａｎｎｏｎ》

放たれた砲撃によって消し飛び、ソラは、いっ、と声を漏らす。
迫り来る砲撃。ソラは飛翔し、それを避ける。
ギレンが、ははははっ、と笑った。

「凄ぇ力だ……ははっ、今なら、誰だろうと負けやしねぇ！」

吹き荒れる魔力。ソラは、うーん、と呟いた。

「キツいなぁ、これ。逃げたくなってきた」

《何言ってんだい、坊や。まだ実力の半分程度しか出してないだろうに》

「いやいや、これがわたくしめには限界でございますよ？」

《……来るよ坊や！》

ソラの言葉に応じず、警告を飛ばすヴィクトリア。

――轟音。

咄嗟に張った障壁で何とか防いだが、衝撃に腕が震える。

「はっはぁ！　吹っ飛べクソガキ！」

「――――ッ！？」

――ガドン！！

硬直の一瞬、その間に距離を詰めてきたギレンが、零距離で砲撃を叩き込んできた。

ソラは受け止めきれずに吹き飛ばされ、地面をニ、三回、バウンドし、ようやく止まる。

《ちょっ、坊や！？》

「……ッ」

ソラは歯を食いしばって起き上がる。

油断をすると、意識を持って行かれそうだった。

そして。

「あははっ！　かかってこいよ！」

「……っとに、だから言ったんだよ」

ソラは起き上がりながら、呟く。

「隊長なんて、貧乏くじだって。だから、嫌だったのに。器じゃねーんだよ」

口調が荒れる。苛立ちが募る。

こんなものを相手に、どうしろというのだ。

《だけど、やるしかない。ねぇ、坊や？》

「おっしゃる通り」

苦笑するソラ。彼はしかし、それでも全力を出すには至らない。

出さないではなく。

出せない、だから。

――ドクン。

心臓が高鳴る。それを、ソラは恐怖故と受け取る。

その解釈が間違っているとは、知らずに。

◇　◇　◇

「らああっ！」

振り抜かれる鉄槌。普通なら避けることを目指すべきそれを、リヴァイアスという男は敢えて受けて立つ。

「ふん！」

振り抜かれる、リヴァイアスの戦斧。それは、ヴィータの一撃と衝突する。

――ガァン！！

まるで雷鳴のような音が轟き、二人は弾かれる。ヴィータは舌打ちし、リヴァイアスは笑っていた。

「楽しい！　実に楽しいぞ『鉄槌の騎士』！　『紅の鉄騎』！　愉快だ！　ただただ愉快だ！　やはり世界は広い！　古代ベルカ……大乱時代を生き抜くその力、正に無双！　我が敵に相応しい！」

「うるせぇ！　戦闘狂が！」

ヴィータは叫び、シューターを放つ。リヴァイアスもそれに応じ、シューターを放ちながら、ならば、と叫んだ。

「貴様は心躍らぬと言うのか！？　己が刃が敵を穿たんと唸り！　敵が刃が己を切り刻まんと唸るこの戦いが！　血戦が！　我らは刃だ！　戦い以外に何を見い出せる！？」

轟音。直撃はない。だが、互いの武器がぶつかり合う衝撃は、確かに互いの体へとダメージを与えていた。

しかし、互いに退くことはない。

「テメェと一緒にすんじゃねぇ！　相手傷つけんのが楽しいわけねぇだろうが！」

「ほう！？　ならば何故戦う！？　何故刃をとる！？　何故貴様はここにいる！？」

「そうしなきゃ守れねぇからだ！　あたしらは、守るために戦ってんだ！」

「詭弁だぞ紅き騎士！」

リヴァイアスが吠える。

「貴様は！　いや、貴様たちは矛盾している！　守るためだと！？　ならばそのために他者を踏みにじるのが正義か！？　それはエゴとは呼ばぬのか！？　貴様たちの正義など紙切れ同然！　薄いのだ！　薄氷の如く！　踏めば砕けるものに、どれほどの価値がある！？」

「うるせぇ！　だったらテメェはどうなんだ！」

「『だったらテメェはどうなんだ』！？　ふん、知れたことよ！　俺様は俺様を正義などとは思っておらん！　俺様は異端なのだ！　異質なのだ！　我らが宗主は自らを正義と謳うが！　そんなものに興味などない！　正義を名乗るに値するは『銀月』であり、俺様ではないのだ！　俺様は時代にも世界にも疎まれる異端よ！」

リヴァイアスは、だからこそ、と吠える。

「俺様は欲するのだ！　俺様が存在してもよい理由を！　証を！　人を引き裂き、人に狩られる狩人たる俺様が存在を許される場所を！　力のみが絶対たる戦場を！　俺様が死ぬに値する、死山血河の地獄を！　戦場でしか俺様は生きられぬ！　しかし管理局は戦場が生まれることを許さない！　ならば俺様はどうなる！？　戦いしか生き方を知らぬ俺様は！？　野垂れ死ねとでも言うのか！？」

「だから、テメェはこんなことをすんのかよ！？」

「そうだ！　俺様は戦いを望む！　戦場を欲する！　もっと、もっと！　何処かに、更なる死に場所があるはずと！　異端にして異質たる俺様を殺すために世界が用意せし場所があるはずだと！」

――ギィン！！

二人の距離が開く。ヴィータは、ふざけんな、と言葉を紡いだ。

「異端だとか異質だとか言ってるけどな、要は死にてぇんだろ！？　だったら勝手に死にやがれ！　あたしたちを巻き込むな！　首吊るなり腹切るなり、自分で勝手に死にやがれ！」

「……成程、貴様もそう言うのか」

初めて。

そう、初めて。

リヴァイアス・バルトマカリという男は、微笑を浮かべた。

嘲笑うような笑みではなく。

どこか哀しげな、淡い笑みを。

「だが、そんなものは願い下げだ！」

しかし、すぐさまいつもの彼の顔つきに戻る。

壮絶で。

破壊的で。

狂瀾に酔いしれる顔に。

「確かにそれならば死ねるだろう！　たが、『そんなもの』は願い下げなのだ！　俺様は自らの価値が欲しいのだよ！　戦場に生きた証が！　意味のある死が！　狂おしく愛おしく欲しいのだ！　無価値な死など願い下げだ！　俺様は俺様が死ぬ理由が欲しいのだ！　故にこそ戦場を求める！　世界が朽ちようが果てようが！　管理局が滅びようが消えようが！　そのようなことに興味はない！　『銀月』は俺様に、俺様が果てるべき戦場を与えると言った！　地獄を見た男が言うのだ！　絶大なる力を持つあの男が！　故にこそ俺様はついていく！　『銀月』ならば！　俺様が死ぬに相応しい戦場をみつけてくれるであろうから！」

「だったら！」

ヴィータは叫び、グラーフアイゼンを振りかぶる。

「今ここが、テメェの死に場所だ！」

「ほう！　吠えたな『鉄槌の騎士』！　ならば俺様を殺してみよ！」

二人の魔力が渦を巻き、大地を砕く。

「「フルドライブ！！」」

同時に二人が叫び、限界突破の力を纏う。

互いに冠するは、ベルカの騎士。

故に。

一撃必殺の意志が、大気を穿つ。

「轟天爆砕！」

「撃滅！」

力と力。

あまりにも単純な戦いが、展開される。

騎士であるが故に。

ただその一撃を以て、叩き潰すために。

「ギカントシュラーク！！」

「レクイエム・ロンド！！」

――轟音。

最早大気を揺らすどころか、この空を砕きかねない音が響き渡った。

叩き潰さんと鎚を振り下ろしたヴィータと、返り討ちにせんと戦斧

を振り上げたリヴァイアス。
そして、決着。

……パキン。

何かが砕けた音。
いや、何かというのはおかしい。この状況において、砕けるものなど決まっている。

「アイゼン！？」
「……ベルセウス」

二人が、それぞれ相棒の名を呼ぶ。
結果は、互角。
互いに互いの刃を破壊する、というのが結論だった。
そして。
そこからの決着もまた、訪れる。

「はあっ！！」

裂帛の気合いと共に放たれたのは、純然たる拳。それはヴィータの腹をとらえ、華奢な体躯は吹き飛ばされる。

「かっ……！？」

何回か地面をバウンドしたヴィータは、呻き声を漏らす。リヴァイアスは、ふん、と息を吐いた。

「紙一重だったな、『鉄槌の騎士』。僅かに一手。それが、貴様の敗北の理由だ」

相棒が砕けた時、冷静でいた者と、いられなかった者。
それが、リヴァイアスとヴィータの差だった。

「テメェ……！」

ヴィータがリヴァイアスを睨む。リヴァイアスは、ふん、と鼻を鳴らした。

「貴様は俺様の死ではなかったようだ」
「……」

闘志衰えぬ瞳。それを、リヴァイアスは一笑に伏し、踏みにじる。

「敗者は死ぬ。それが、ルールだ」

無慈悲な足が、ヴィータに向かって叩きつけられた。
――グシャリ。
鈍い音と共に、血が飛び散る。リヴァイアスは、物言わぬ『それ』に背を向けた。

「さて、潮時か。……俺様の死は、何処にある？」

その呟きは、妙に冷めていた。

◇　◇　◇

今更、言葉を交わし合う気などなかった。

互いの信じるものに大きな隔たりがあることは理解していたし、説得が通じる相手とも思えなかった。
何より。
相手は、グリス・エリカランは、生かしておくにはあまりにも危険が過ぎる。

「一点突破」

フルドライブ状態……新たな姿である堕天に身を落としながら、ファイムは魔法を紡ぐ。

「ウインドバスター」
《Ｗｉｎｄ　Ｂｕｓｔｅｒ》

翡翠の閃光が空を駆ける。グリスは笑みを浮かべ、それを防ぐと、成程、と呟いた。

「それがキミの本質なんだねぇ？　冷酷に、冷徹に、機械的に。ただただ、敵を叩き潰す。憎しみを抱けば抱くほど、キミは機械的になるみたいだ」

――流石、戦争を知るだけのことはある。
グリスは、くすくすと笑った。それが、あまりにも不快だった。
グリスは、だけどね、と言葉を紡いだ。

「キミはボクを憎んでる。でも、どうして？　キミに対してボクは何かをした記憶はないし、キミはどうしてボクに対してそこまで憎悪を抱けるの？」
「フェザーショット」

返答は、羽の矢だった。雨のように降り注ぐそれを、グリスは何とか避けてみせる。
そうしながら、言葉を紡ぎ続ける。

「許せないから？　何故？　キミは何の被害も受けてない。倫理？　正義？　笑わせるよ。それはキミから最も縁遠いものじゃないか」

グリスは、尚も言う。

「興味が出たからさ、色々調べさせてもらったよ？　キャハハ♪　想像以上にキツい人生送ってるねぇ？」

だからこそ楽しいのだけれど、と、グリスは言った。

「キミは理解してる。倫理も正義も愛情も正論も、最後にはゴミ以下の屑になるって。だって、キミはそれを何度も何度も見てきたから。そんな場面を、繰り返し見せられてきたから」

ファイムの目が細まる。グリスは尚も、くすくすと笑っている。

「理由なんて、意味を持たない。意味を持つのは力だよ。力があれば、どんな暴論も極論も押し通る。正当性など二の次三の次。そして、それを知るキミが今更、倫理やら正義やらでボクを憎悪するのは有り得ない。そこまでキミは、人間らしくない。なら、何故か」

「ウインドバスター」

グリスの言葉を遮るように、魔法が紡がれる。グリスはそれを障壁で難なく防ぐと、指を鳴らした。瞬間。
グリスの姿が……歪んでいく。

（幻術……！）

ファイムは内心で舌打ち。グリスの言葉は、尚も続く。

『ボクとやってることはそんなに変わらないのに、キミはドクターを憎悪していない。キミをそんな姿にしたのがドクターだって考えれば、むしろそちらを恨んで然るべきなのにね？』

声が反響し、位置が掴めない。やり合ってみて、わかった。グリス・エリカランは、『逃げ』に特化した魔法を使う。

所謂攻撃のための魔法を使わず、強固な守りと幻術による幻惑でこちらを惑わしてくる。

そこに言葉を加えた搦め手ーーそれが、グリス・エリカランの戦い方。

『けれど、現実に憎まれてるのは、やっぱりボク。キャハハ♪　なんでかなぁ？　おかしいなぁ？　でもね、答えは思いの外簡単だったんだよね』

不快な笑い声。それが、神経を逆撫でする。

そして、グリスは言葉を紡ぐ。

『要は同族嫌悪なんだね？　キミとボクは、『同じ』なんだ』

笑い声。想像以上に不快なグリスの言葉に、ファイムの眉がつり上がる。グリスは続けた。

『目的も性格も、おおよそ人としてのほとんどが違うけど、根本は

『同一』。キミもボクも、『たった一つの願いのためならば、たとえどれだけの犠牲を出そうと構わない』。その犠牲を外に求めたボクと、自分自身に求めたキミの違いこそあれ、ね』

くすくすと、耳元で笑い声が囁いた。ファイムは薙ぎ払うように裏拳を放つ。

空気が抜けたかのような音と共に、グリスの幻影が一つ、消え去った。

『認めなよ。ボクだって、キミみたいなのと『同じ』なんてのは不快でしかないけどさ。それは紛れもない事実なんだから』

八神はやてを守るために、あらゆる犠牲を払うと決め、命さえも犠牲にしてきたファイム。その以前も彼は、管理局を正義とするために多くの犠牲を支払ってきた。たった一つの目的のために。

世界が欲しいと口にするグリスは、これまでにそれの実現を目指して数多くの犠牲を生み出してきた。リューイやミリアムなどは、ほんの一例に過ぎない。世界、という途方のない目的のために彼が犠牲にしてきたものに、優劣はなかった。

成程、確かに。

この二人は、同じなのかもしれない。

ただ、その向かう先はあまりにもかけ離れているが。

『だからこそ、興味がある。『オリヴェント式』……『運命を変える力』。そんなものに縋ってまで、キミは何を望むのかが』

「……ぐだぐだと長ったらしい話をするかと思えば、そんなことを聞きたかったのか」

呆れた、とでも言わんばかりにファイムは息を吐く。

何を願うかなど。

何の為なのかなど。
すでに、決まっている。

「お前に答える義理はないが、いい。答えてやる。……大切な人がいる。僕はただ、その人に幸せになってもらいたいだけだ」

優しいあの人に。
笑っていて、欲しいから。

「僕は影だ。闇だ。本来なら、太陽であるあの人の前に現れるべきじゃなかった。でも、出会ってしまったから。だから、僕はあの人の幸福だけを願う。後、2、3年の命？　上等だ。僕があの人の日常を狂わせている。なら、喜んで死んでやるさ。あの人が日常を取り戻し、太陽になれるなら」

きっと、本当は出会うべきではなかったのだ。
しかし、出会ってしまった。愛してしまった。
そしてそのせいで、管理局の闇に巻き込んだ。
管理局のピエロの役は、自分一人で良かったはずなのに。それなのに。
彼女にまで、背負わせた。
彼女の日常に、闇を落としてしまった。
だから。
だからこそ。

『……気持ち悪い覚悟だね。わかってるの？　死ぬんだよ？　自分がいなくなるんだよ？』
「何を躊躇う必要が？」

ファイムは、言い捨てる。

己の命など、もういいと。

「覚悟なんて、定まってる。力がなくても。弱くても。愚かでも」

ファイムは胸を張り、あまりにも悲しい決意を口にする。

「はやてさんの幸福が、僕の幸福なのに」

そこで、グリス・エリカランは、不覚にも言葉を失った。

己のことしか考えない、彼だからこそ。

あまりにも『それ』が、歪に見えた。

ファイム・ララウェイ。

根本が『同じ』である彼。だが、ファイムは『違う』。

彼が過ごしてきた日々は、それほどまでに多くのことを彼に諦めさせてきた。

はやてを想う。そう言えば聞こえがいい。だが、ファイムのそれはあまりにも異質。

まるで、自分のことなど欠片も考えず。

いや、むしろ。

自己を愛するという概念が、丸々消えてしまっているかのようだった。

敗北。

逃亡。

限界。

隷属。

理不尽。

不条理。

その全てに屈してきたからこそ。

ファイム・ララウェイは、これほどまでに。

《Ｂｒｅａｋ》

世界が、砕ける。
空が割れ、大地が割れ、グリスが形成していた幻は消え去る。
――ジャリッ。
砂を蹴る音。グリスが、後退りした音だ。
今のグリスをそうさせたのは、紛れもなく。
恐怖と、そう呼ばれるものだった。

「お前を生かしておくつもりはない。グリス・エリカラン」
「……何度殺しても、ボクは蘇るよ？　ボクの魂がある限り」
「なら、砕いてやる」

ファイムはヒュンヒュンという風切り音を響かせながら杖を振り回し、グリスに狙いを定める。

「殺しても蘇るなら……殺し尽くすだけだ」

グリス・エリカランは、初めて『それ』を感じた。
天才である彼には、今まで一度もなかった疑問。
――『こいつ』は、『何』だ？

◇　◇　◇

正直、荷が重かった。
自分は『エース・オブ・エース』たちのように才能に溢れているわけではない。
……天才？

そんなもの、周りが勝手に言っているだけだ。時間をかけて、それなりに経験を積んで、誰にでもできることを積み重ねてきただけだ。誰が何と言おうと、それは決して変わらない。
だから。
この状況は、荷が重過ぎる。

《来るよ坊や！　備えな！》
「ッ、くそっ！」

ソラ・ウィンガードは吐き捨て、障壁を張る。そこに砲撃が着弾し、火花を散らす。
――ドクン。
心臓が高鳴る。マズい、そう感じた瞬間、ソラはその場から退避。
瞬間、障壁が食い破られる。

「ははっ！　柔ぇ！　柔ぇぞクソガキ！」
「……ッ！？」

放たれる弾丸の嵐をソラは障壁で防ぐが、それは時間稼ぎにしかならない。すぐさま障壁は食い破られる。
ソラのデバイス、『ヴィクトリア』によれば、ソラとギレンの魔力量に大きな差はない。むしろ、単純な量ではソラが上回っているという。
なのに、ソラの力は何一つ通用しない。魔力量で勝敗が決まるわけではないが、しかし、魔力量で勝っているはずのソラがいとも簡単に障壁を破られるのは、いくら何でもおかしい。
――ドクン、ドクン、ドクン。
焦りか。それとも別の何かか。心臓が、早鐘を打つ。

《坊や！　いつまで手を抜いてるつもりだい！？》

耐えかねたようにヴィクトリアが叫んだ。ソラは、ギリッ、と歯を食いしばる。

「俺は全力だよ！　あんなの相手に手ェ抜けるはずがないだろ！？」
《なっ……嘘を言うんじゃないよ！　あんたの保有魔力であの程度の力なわけがないんだよ！》
「嘘じゃねぇよ！　俺だってわかんねぇよ！」

いつもの余裕を消し去り、ソラは叫ぶ。
そう、全力だ。全力のはずなのだ。
空を懸ける、『陽光』の煌めき。それに偽りなどないはずなのだ。
なのに。
届かない。
あまりにも、遠い。

「はっはぁ！」

耳障りな笑い声。ソラは、魔法を紡ぐ。
たがそれは、幾度放とうとも届かない。
――ドクン、ドクン、ドクン。

「くっ……！」
《Ｍａｇｉｃ　Ｍｏｄｅ》

ソラのバリアジャケットの形が変わる。
物語に出てくる魔法使いのような佇まい。それは、大威力の魔法を紡ぐための姿。

「遠き地にて、闇に沈め――」

魔力が集中。世界が歪む。
魔法使いのような帽子を深く被り、ソラは魔法を紡ぎ出す。
高速詠唱と、威力の弱化。それにより、大魔法の発動を極限まで早くする。
――ドクン、ドクン、ドクン。
高鳴る心臓。ソラは、覚悟を決める。
地面を蹴る。砲撃とシューターの嵐の中を駆ける。駆けていく。
被弾は数発。僥倖だ。

「あぁ！？」

ギレンが目を丸くする。ソラは、その眼前に杖となったヴィクトリアを突きつけた。

「ディアボリック・エミッション！」

広範囲殲滅魔法。近距離からの、回避不可の一撃。
ソラは大きく退避。ヴィクトリアが、蒸気を噴き出す。

《ｃｏｌｄｉｎｇ》
「やったか？」
《どうかね？　あたしの予測通りならーー》

――ズドン！！
一筋の閃光が、ソラを襲った。ソラは咄嗟にガードするが、弾き飛ばされる。

「クソガキィィイイッッ！！」

ギレンの右腕に高密度の魔力が集中する。ソラは、瞬時に悟った。
あれは――ヤバい。

《……マズいね。坊や！》
「なんだよ、ヴィクトリア」
《今の坊やじゃあれは防げない！　退くよ！》
「……できれば、そうしたいんだけどねー」

ソラの口調が、いつもののものに戻る。
余裕を持ち、飄々と。
あの空に浮かぶ雲のようになろうとして形成されたものに。

「なんというかさ、ほら、わたしは隊長ですから」

自らを『わたし』と呼び、適当な敬語を使う時。
ヴィクトリアの主は、自らを偽る。

「期待されても応えられないし、できることなんて知れてるけど。
兵団長が……総大将が、わたしにここを任せたわけで」

ヴィクトリアを構える。心臓が高鳴る。足が震える。
しかし心は、定まっていた。

「だったら、死んででも仕事しなくちゃならんのですよ。あの人を
総大将と戴いた以上は」
《待ちな坊や！　それは――》
「『これ』を『覚悟』と、呼ぶんじゃないのか？」

そして。
ソラは、自身の全力を以て――思う限りの全力を込めて、砲撃魔法

を紡ぎ上げる。

「一閃必中」

「死にさらせっ！」

二人の魔法が、大気を駆ける。

「ディバインバスター！！」

「ヘルカノン！！」

温かささえ感じる『陽光』の光と、在り方を歪められ、どす黒くなった光が衝突する。

力と力の衝突。

だが……結果は明らかだ。

「くうっ……！？」

じりじりと、ソラが押され始める。諦めが、ソラの脳裏を過ぎる。

――ドクン、ドクン、ドクン！！

だが、高鳴りは止まない。諦めに対する恐怖？

いや、そんなはずはない。

ソラ・ウィンガードは、割り切り、全てを天秤にかけてきた人間だ。

諦めに対し、躊躇など――

「あぁ！？」

不意に、ギレンが声を上げた。見れば、ギレンに向かっていくつもの砲撃が放たれていた。ギレンはそれを避けるため、砲撃を止める。

援軍。しかも、あれは。

「隊長！」

ソラの、部下たち。

「遅れて申し訳ありません。覚悟を定めるのに、時間がかかりました」

――ドクン。

「我々は戦うために来ました。それを忘れて、いや、覚悟していませんでした。しかし、あなたが決めさせてくれた」

――ドクン。

「援護します。参りましょう、隊長」

自分より遥かに経験を積んでいるはずの副官は、そう言い切った。

ああ、と、ソラは思う。

ここでなら。今なら。

「ヴィクトリア。『あれ』、出そうか」

《……いいのかい、坊や？》

今この時ならば、きっと。

「恥ずかしいけどさ。完成してないし。できるかもわからないしねー。でもさ、ここでやらなきゃ男じゃねーでしょ？」

変わらず、不遜を演じながら。

しかし、少年の目は本気。

ヴィクトリアは、了解、と頷く。

《見せてみな、坊や。あんたの本気》

「わたくしにできるかどうか」

おどけ、そして。

『陽光』が、煌めく。

《Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ，Ｍｏｄｅ“Ｂｌａｄｅ　Ｍａｓｔｅｒ”》

暁の光をその身に纏い、顕現するは一人の剣士。

少年が昔、本当に昔に憧れ、しかし、捨ててしまった夢の残滓。

「……」

上半身は、限りなく装甲を薄くし、最早黒い、肌に吸いつくようなアンダーだけ、それも腕はグローブ以外に覆われていない。

対照的に、腰には甲冑が装着、その上からは紅の衣が巻かれ、風にたなびいている。

そして腰には、二振りの、通常の剣の七割程度の長さしか持たない双頭の剣。

刃がない、殺意を消したそれは、殺すのではなく制圧するという意志表示。

――ピシッ。

不意に、腰の鎧に亀裂が入った。ソラは、ちっ、と舌打ちする。

『ヴィクトリア』――多様な形態を持つ、試作の新世代デバイスだ。

様々な機能が追加されている反面、酷く脆くなってしまっている。

ソラは単なる耐用時間の問題と思っているが、違う。ソラの全力――フルドライブ時の魔力が大き過ぎるためだ。ただでさえ他のモー

ドに比べて耐久力を下げた仕様であるため、尚更だ。
故に、許されるのは一撃のみ。

「……正直、この技名あんまり好きじゃないんだけどな」
《おや、カグラの名付けは不服かい？》
「格好付け過ぎなんだよ。まあ、でも」

ザリッ、という音を響かせ、ソラは構える。二本の剣を右側へ回し、腰を落とす。

「――いいか、今は」

――ドクン！！

一際高く鳴り響く心臓の音。今なら、この瞬間なら。
ギレンは隊員たちが足止めしてくれている。

「ただ、叩きのめす」

――だんっ！
ソラは、思い切り地面を踏み締める。
――だんっ、だんっ、だんっ！！
二度、三度、四度。
タイミングを図る。
そして、踏み込もうとした瞬間。

《坊や！！》
「――――！！」

ソラは全力でその場から飛び退いた。直後、先程までソラのいた場所に、いくつもの弾丸が降り注ぐ。

そう、弾丸。掛け値なしの、質量兵器。
その弾丸は、ギレンの下にも降り注ぐ。隊員たちは飛び退き、ギレンは、ただ空を見上げていた。
弾丸をその身に受けながら。

「ギレン・リーさん。撤退命令です」

現れたのは、一人の女性。白衣の上から両腕に何やら機械仕掛けのアーマーを纏い、周囲には四機のユニットが浮遊している。
いや、六機だ。ソラを狙い撃ったらしい二機のユニットが、女性のところへ戻っていく。
どうやら、自動で動くようだ。

「制限時間も過ぎています。……帰還を」
「ちっ」

ギレンは舌打ち。制限時間というものが何かはわからないが、とにかく。

（――逃げられちまう！）

それは避けなければならない。この状況で奴を取り逃すのは、部下たちに悪い。
それに、捕らえるのが仕事だ。

「一撃必殺！」
《待ちな坊や！》

ヴィクトリアの制止を振り切り、前へ。こちらに気付いた女性が、ユニットを四機用いて壁を作る。対し、ソラは渾身の一撃を放つ。

「我流極星『流れ星』！！」

振り抜かれる二振りの刃。名付けられたその名は、とある世界の言い伝え。

曰く、それに願えば願いが叶う――。

「――――」

流れたのは、二つの流星。

太陽の光たる陽光を纏いて駆け抜けたそれは、ユニットを全て粉砕する。

だが……届かない。

――パキィィイン――

何かが砕ける音。ヴィクトリアが、二振りの刃が砕けていた。腰の鎧も、砕け散る。

足りなかった。

機を逸したが故に、踏み込みが足りなかった。

いや、違う。

力が……足りなかった。

「……」

女性が懐から何かを取り出す。魔法を封じ込めたガードだ。

女性はすぐさまそれを起動。魔法陣が展開され、二人の姿が消えていく。

止める力は、ない。

「……すまん、ヴィクトリア」

《謝られるようなことかい？　あたしの機能不足さ、こんな結果は

ね》
「そうか」
《それより……いや、いいよ》
ヴィクトリアは言葉を切る。ソラは彼女を待機モードに戻すと、ふぅ、と息を吐いた。
――そして、地面を蹴る。
不完全燃焼。そんな感じだった。

◇　◇　◇

桜色の砲撃が、戦場をねじ伏せた。
それを合図にシグナム率いる連隊が突撃を開始。
大局は、決した。
そしてそれは、こちらもだ。

「お前たちの負けだ」
「そうみたいだねぇ？　ふーん、思ったよりやるもんだ♪」
キャハハ、とグリスは笑う。その体は、ファイムのバインドによって磔にされていた。
グリスはしかし、笑っている。当然だ。殺しても、彼には代わりとなるクローンが用意されている。
しかも、スカリエッティの時のように所在がわからない。
「捕まえたところで、ボクは自殺を選ぶ。八方塞がりってのは、こういうことだね？」
「言ったはずだ。殺し尽くすと」

そして、ファイムは杖を構える。
魔力を纏い、そして、風を纏う杖。暴風を閉じ込めたそれは、一撃で五体を吹き飛ばす。
ストラグルバインド――魔力結合を阻害するバインドで縛られたグリスに、抗う手段はない。

「『オリヴェント式』――定められた死の運命を早め、それを代償に何かを成す力。キャハハ♪　でも、それじゃだめだ。その程度じゃ、『聖人』も『唯一人からなる無敵の軍勢』も倒せない」
「……」

ファイムは、最早暴風の槍となった杖を振りかぶる。

「止めてみなよ。できるなら」
「言われずとも。――ストームライン」

放たれた杖はグリスに突き刺さり、暴風を解き放つ。
微塵さえ、存在を許されない。

「『聖人』と……『唯一人からなる無敵の軍勢』。少し、繋がってきた」

グリスを殺したそのままに、ファイムは呟き。
そして。

「……勝つために、僕は――」

その呟きの先は、彼にしか聞こえなかった。

◇　◇　◇

「……殺されるのも、楽じゃないんだけどね」

新たな体で復活したグリスは、キャハハ、と笑う。

「まあ、いっか。収穫はあったしねぇ？　キャハハ♪　さあ、本番だ♪」

止まらない笑い声が、いつまでも続いていた。

第二十一話　戦場の狂気（後書き）

歪みが新たな歪みとなって、次々と伝播していきます。
ファイム・ララウェイという青年の歪みは、その自己に対する悲しいまでの顧みなさ。
そして、それ故に。
彼は、自らを切り捨てます。

はい、第二十一話です。楽しんで頂けましたか？
今回は八神はやて率いる第１０８魔導旅団、別名『八神兵団』の初陣、そして初勝利です。
色々ともやもやしたものが残りましたが、とりあえず決着です。
次回からは、クライマックスへ移行するための山場に入っていきます。

感想など頂けると、ありがたいです。
そして、皆様のおかげで８万ＰＶを突破しました！！
ひとえに皆様のおかけです。少しでも楽しんで頂けるよう努力する所存です。よろしくお願いします。

それでは、次回予告です。

次回予告

一時の休息。その中で、旅団のメンバーも思い思いに過ごす。
その最中、八神はやては思いがけぬ人物と出会う。
己の力を確かめんとする者は、騎士の将に挑み。
目を覚ませし炎は、自らの罪に苛む。

そして。
風の騎士は。

「とりあえず……頑張って」

次回、第二十二話
「最強が生まれた理由」

第二十二話　最強が生まれた理由

第１０８魔導旅団の初陣は、勝利だった。
死者が出ることもなく、重傷だったヴィータも、一週間程度で回復するレベルで、実際、今はもう復帰している。
しかし、戦いが終われればそれで終了というわけではない。事後処理や引き継ぎなど、やることは山積みである。
それも一段落が着き、はやてはうん、と背伸びをした。それを見ていたファイムが、お疲れ様です、と言葉を紡ぐ。
はやてには、本局と地上に部屋が与えられた。今回は地上の執務室で、資料の整理をしていたのだ。
また、旅団のメンバーが寝泊まりする場所もある。もっとも、人数が人数であるため、いくつかある寮に住み分けているのだが。
ちなみに旅団用の司令部は、ゲンヤ・ナカジマの陸士１０８部隊のもので、はやてに与えられた部屋というのはゲンヤが使っていた部屋である。

「うん。ファイムくんも手伝ってくれてありがとうな？」
「いえいえ」

ファイムは微笑む。はやてはもう一度ありがとう、と言うと、立ち上がった。
彼女はこれから、外回りだ。

「わたしは行くな？　ヴィータにごめんて言うといてくれるか？」
「了解です」

ファイムは笑う。ファイムの方は、午後から休みだ。それもあって、ヴィータと、目を覚ましたというリューイ、ギンガの見舞いに行く

予定だ。ゲンヤは……まだ目を覚ましていない。
はやてはありがとう、と言葉を紡ぐと、立ち上がったファイムに歩み寄っ。
そして。
ーー唇同士が重なる。
不意打ちだった。流石のファイムめ目を白黒させる。
はやては唇を離すと、自身の表情を隠すようにファイムの胸に額を押し付けた。

「……今は、これくらいしかできひんから」
「はやてさん……」

ファイムははやてを優しく抱き締める。そうして、穏やかに時が流れ。

「……？」

不意に、はやての手がファイムのネクタイに伸びた。ファイムが疑問符を浮かべたその次の瞬間。
ーーギリッ。
思い切り締め上げられた。ファイムは、はやてさん、と言葉を紡ぐ。
はやては、聞いたよ、と言葉呟いた。

「朝……自分の吐いた血で溺れてたんやってな？」
「う……誰、から？」

今も吐きそう。そんな言葉を飲み込みながら、ファイムは聞いた。
はやては、リィンからや、と言葉を紡いだ。

「朝、呼びに行ったら寝てる間の吐血で溺れてた、って」

「……」

……口止めしたのになぁ。

その言葉も、飲み込む。

「なんで、黙ってるん？」

「……心配をかけたくなかったので」

「心配するに決まってるやんか！」

はやては、怒りとやるせなさを内包した瞳でファイムを睨む。

「わたしが、ファイムくんに無理させてる。そんなわたしが、何で、ファイムくんが苦しんでることを知らへんのや！」

「……はやてさんのせいではありませんよ」

ファイムは、優しくはやての手を握る。

「これは、僕が弱いから。だから、はやてさんのせいではありません」

弱いから、こうなっているのだ。それを他者に背負わせる気はない。

だがはやては、それが気に入らないらしい。

「話して。お願いやから。何も知らへんのは、本当に怖いんや」

はやては言う。

「何も、何もできひんかもしれへんけど。ファイムくんに『死ね』って命令してるわたしに、そんな資格ないのかもしれへんけど。それでも」

「……わかりました」

ファイムは、頷く。はやては微笑み、そしてファイムは、はやての唇を奪った。

自己嫌悪を、感じながら。

◇　◇　◇

地上本部お抱えの病院で、ファイムはその人物に出会った。

「あ、ファイムさんもお見舞いですか？」

「うん。リューイたちに。ソラも？」

「先輩ですしねー。暇でもありますし？」

「ソラらしい」

ファイムは微笑む。ソラは彼自身が認めてしまうような『腹黒』だが、それはあくまで万一の時のための根回しであり、敵に回さない限りはむしろ頼りになる人物だ。

もっとも、読めない部分も多いのだが。

「ファイムさんもですか？」

「うん。リューイとミリアムは友達だし、ギンガさんとゲンヤさんはお世話になった人たちだから」

「なーる。わたしもまあ、世話になってますしね」

「そっか。ソラが教導隊に入ったのは二年前だもんね」

「リューイさんとは何度も模擬戦しました」

負けっぱなしですけど、とソラは肩を竦める。実力ではおそらく、

ソラが上だ。しかし、ソラは手を抜くのが基本なので、力を出さなかったのだろう。
本当に、勿体無いとファイムは思う。
彼がその気になれば、きっと『エース・オブ・エース』を狙えるくらいの力はあるだろうに。
まあ、本人は全力で否定するのだろうが。

「リューイには僕も勝ったことは一度くらいしかないなぁ」
「そうなんですか？」
「うん。まあ、一番最初だったから、手の内を互いに知らなかった、っていうのが大きいんだけどね」

ファイムは肩を竦める。そう、手の内を知らないから、不意を打つことができたのだ。だから勝てた。それだけだ。
もっとも、ファイムはこう言うが、その『最初の一回』で何があっても負けないことこそが、『エース』と呼ばれる資格である。
究極的な結論だが、ファイムと違い、『死なないなら負けてもいい』と思っているソラが『エース』と呼ばれない理由がそこだ。
まあ、ソラ自身は自分が『エース』と呼ばれることはむしろ、嫌とさえ思っている。故に、呼ばれていないことを喜んでさえいるのだが。
ソラは、だからですよ、と言葉を紡ぐ。

「ファイムさんは、やっぱり『エース』です」
「弱いんだけどね。旅団の長の中じゃ、最弱だよ。だからなのはさんは一人で『中隊』なのに僕は『小隊』でしょ？」

まあ、『小隊』でさえ身に余るんだけどーファイムは、苦笑しながらそう言った。ソラは、成程、と相槌を打つ。

「でも、高町先輩は『エース・オブ・エース』ですよ？　次元が違う」
「うん。まあ、それについても色々あるんだけどね」
含みを持たせるように言い、ファイムは立ち止まる。リューイの病室に着いたのだ。

「この話はまた今度。お見舞いに……ソラ、どうしたの？」
「いや～、その。俺、厄介事は大好きなんですけど、面倒事は大嫌いなんですよ」
「……物凄くワガママだよね、それ」
「いやまあ、そうなんですけど。……というわけでファイムさん。これ、リューイ先輩の見舞い品です。ギンガさんとこに行きますんで、良ければ見舞い品預かりますよ？」
「あれ？　リューイには会わなくていいの？」
「まあ、今回は」

ソラは肩を竦める。ファイムは不思議に思ったが、まあいいかと内心で決着を着けた。
そしてソラにギンガ用に持ってきたフルーツを渡すと、一言。

「ギンガさんによろしく言っといてね？」
「りょーかいです。ファイムさんも、先輩によろしく言っといてください」

それじゃ。……そう言って、ソラは歩いていった。ファイムは、リューイの病室のドアをノック。
ーーコンコン。
反応なし。ファイムは首を傾げながら入るよ、と言葉を紡ぎ、部屋に入った。

そして。

「……」

……思い切り後悔した。

リューイが寝ているベッドを挟むように座る、女性二人。ウェンディとティアナだ。

二人は睨み合うようにして座っている。なんだろう。空気が怖い。

「おお、ファイム！」

まるで救世主でも見たかのような表情で、リューイはファイムを呼ぶ。ファイムは、はい、と頷いた。

「お見舞いに来たよ。これ、僕からのフルーツ。あと、ソラからも預かってるものが」

言いながら、ファイムはソラの行動に納得した。成程、これは確かに面倒だ。

なにより、原因である人物が状況を理解していないのが何より厳しい。

「おお！　サンキュー！　病院食って味気なくてな～！　二人もどうだ？」

「……」

「……」

「……あの、二人とも？」

リューイが呼びかけても、二人は無言。ファイムは、ふぅ、と息を吐く。

「元気そうで何よりだよ、リューイ。それじゃあ、僕はこれで」

正直、逃げたい。怖い。

だが、リューイはやはりゴネる。

「いやファイム、折角ーー」

ーーガタッ。

音が響き、リューイの動きが止まる。見ると、ティアナが少し動いただけだった。

リューイは、目でファイムに言葉を紡ぐ。

ーー助けてくれ。

それに対するファイムの回答は。

「とりあえず……頑張って」

見捨てることだった。

ファイムは病室を出る。うん、本気で怖かった。

そして、病室を出たファイムの目に、一人の女の子が飛び込んできた。

ミリアムだ。

「あっ……」

ミリアムが声を上げる。ファイムは微笑んだ。

「時間あるかな？」

「……はい」

ー一待合室。

ミリアムに缶コーヒーを渡し、ファイムは言葉を紡いだ。

「体調はどう？」

「……体は、正常です。戦いには出られます」

「そっか」

それは良かった、と、ファイムは笑った。

……沈黙。

ある意味で心地良く、しかし、気まずい。

そんな沈黙が少し流れたあと、ぽつりと、ミリアムが言葉を零した。

「……すみませんでした」

「何が？」

ファイムは、即座に問い返す。ミリアムは、強く手を握り締めながら、言葉を紡いだ。

「私はファイムさんに、失礼なことを言いました。恩も忘れて」

「……」

ああ、とファイムは内心で呟く。ミリアムが言っているのは、きっとあれだ。

今回の戦いに出る前、ファイムはミリアムに会いに行ったのだ。錯乱している、と聞きながら。

そして、ミリアムに糾弾された。

『肝心な時におらず！！　何が『地上本部のエース』ですか！！』

泣き叫びながら、ミリアムはファイムにそんな言葉を叩き付けた。
ファイムにしてみれば、それは受けるべき糾弾だ。だから、気にしていない。
むしろーー

「気にしなくていいよ。言われて当然だから。確かに、肝心な時にいないのはいけないよね」
「しかし、私は、私はっ……！」
「いいよ。ミリアムは何も悪くない。悪いのは、僕だ」

ーーそんな言葉を、貰いたかったわけではない。
潤んだ瞳は、それを如実に語っていた。
だけど。
ファイム・ララウェイは、こんな風にしか生きられない。
ミリアムの頭を撫で、ファイムは苦笑する。

「気にしないで」
「……ッ」

ミリアムが俯く。言いたいことがあるのに、言葉にならない。そんな感じだ。
ファイムは立ち上がると、ミリアムに聞いた。

「リューイは、どれくらいで復帰できそう？」
「……あと、一週間は最低でもかかると。リンカーコアにダメージがあり、完全回復には最低でも一月は」
「そっか」

ファイムは頷く。一ヶ月もあれば、どのような形であれ決着は着い

ているはずだ。
もうこれ以上、巻き込まずに済む。

（グリス・エリカランを見れば、リューイはきっと激昂する）

怒りに身を任せ、グリスを殺すことだろう。そうするだけの理由と力を、リューイは持っている。
だが……それはダメだ。
リューイは、折角新しいこの場所で認められつつある。その彼が相手を殺せば、それによって評価は暗転する。
ただでさえ、元犯罪者という烙印を押されてしまっているのだ。
たとえ殺害許可が出ている相手であろうと、許されないだろう。
故に。
ファイム・ララウェイが、奴を討つ。

「ゆっくり休んで、二人とも」

言い切り、ファイムは立ち去ろうとする。その背に、言葉が紡がれた。

「いえ……私も、戦います」
「いいの？」

ファイムは問いかける。かつて、共に人を殺めた少女に。
また殺すことになるぞ、と。
ミリアムは、頷く。
ファイムは、呟いた。

「……そっか」

◇　◇　◇

病室に入った時、その人は着替えを終えていた。
身に纏っているのは、味気ない病人服ではなく、管理局地上本部の制服。
第１０８魔導旅団の、制服だ。

「……もう、大丈夫なんですか？」
「ええ。大丈夫よ」

微笑みを浮かべながら、その人ーーギンガ・ナカジマが頷く。ソラは、そうですか、と笑った。

「ギンガさんが戻ってくれるなら……かなり、楽になりますね」
「またそんなことを言って。あなたのほうが、ランクが上じゃない」
「いやー、なんといいますか。わたしゃ、大したこともできませんので」

ソラは肩を竦める。今のは、半分本気だ。
あの女性ーー調べで、エレン・リストリアという名であるとわかった女性の出現のせいで、重要参考人を取り逃がした。
他の人たちなら、ありえないような失態だ。
ギンガは、あのね、とソラに詰め寄る。

「ソラは、もう少し自分に自信を持つべきよ。あなたは強いんだから」
「……その自信のせいで、誰かを危険に晒したくねーんですよ」

ソラは、苦笑しながら言った。

「今回だってそう。運が良かった。……もし、最後の一撃がギレン・リーに向かって放たれていて、でも、届かなかったら……」

ぶるりと、体が震えた。

もし、そうなっていたら。

部下全員が、目の前で殺されていたかもしれないのだ。

それがーー怖い。

「俺に対する期待が高過ぎるんですよ、みんな」

「当たり前よ。私だって、期待してるもの」

「……」

ソラは押し黙る。期待が嬉しくないわけではない。ただ……怖いのだ。

自身の限界を定めるが故に。

期待に応えられなかった時、居場所を失うのではないかと。

ただ、怖いのだ。

それが、ソラ・ウィンガードと、ファイム・ララウェイの間にある、『エース』であるか否かの差。

ソラは、限界を自ら定め、その範囲内で余裕をもって戦う。

ファイムは、限界を痛感しながら自らにできる最大限を常に発揮し、時には限界さえも変えてしまう。

だから、力があってもソラ・ウィンガードは『エース』になれない。

ギンガは、そんなソラに言葉を紡いだ。

「私も父さんも、本当はソラを教導隊に渡したくなかったの」

「そうなんですか？」

「優秀だったし、ソラはランクを上げるつもりもないみたいだった

から、その気になればいつまでも部隊に居させることができた」
「……でも、試験を受けさせたのは」
「ええ。父さんー部隊長よ。らしくもなく、嘘まで吐いてね」

ギンガは苦笑。そう、ソラは元々、二年前までは陸戦Aランクの魔導師で、階級も低かった。
しかし、空戦Aランクの試験を受けてみろ、とゲンヤに唆され、実際はSランクの認定試験を受けることになり。
今の、空戦S－ランクという称号を手にした。
故に、ソラは教導隊からスカウトを受けたのだ。なのに。

「私も父さんも、ソラならもっと多くの人を救えるって思ったの。だから、教導隊に送り出した」
「……でも、そのせいで部隊は。俺がいればー」

言いかけて、ソラはハッとなる。
今、自分は何を言おうとした？
自分がいれば、部隊の全滅を防げたとでも？
何という、傲慢。
らしくない、こんな自分は。そう思い、ソラは言葉を飲み込む。
だが。
ギンガが、ソラの言葉を掬い取った。

「確かに、ソラがいればここまで酷いことにはならなかったかもしれない。それは、私も思うわ」
「……それは、でも、買い被りです」
「そんなことないわよ、ソラ。あなたは強い。だからこそ、もっと高みへ行って欲しかった。……あなたは、望んでいなかったかもしれないけど」

頷く……その行為が、できなかった。
ここで頷けば。
ギンガやゲンヤの思いを、踏みにじることになりそうだったから。

「……ソラは、優しいね」

ギンガは微笑んだ。ソラは、押し黙る。
ギンガは、拳を握り締めた。

「でも、確かにソラに道を押し付けるわけにはいかないわ。あなたが戦いたくないなら、私が戦う。……昔からあなたは、戦うのを嫌がってたものね」

「……」

自分は何をしているのだ、とソラは思った。
戦いたくないのではない。戦う気がないだけだ。それを隠すために、嘘を吐いていただけだ。
今でも、管理局の魔導師として戦うことについては割り切っている。
『仕事』。要はそういうことだ。
憧れで入った管理局は、思っていた程綺麗ではなく、それ故に割り切った。
所詮、仕事だと。
だから実力についても嘘を吐いてきたし、それを間違っているとは思わない。
真面目な奴が馬鹿を見る場所なのだ。管理局は。
憧れたあの人は、あんなにも辛い道を歩んでる。それで、理由は十分だった。
だけど。
『戦いたくない』ーーその嘘が、目の前の人を巻き込んでいる。
余計なものを、背負わせようとしている。

自分が。
こんな自分が。

「……待ってください」

ーードクン。
また、あの時のように心臓が高鳴る。
今ならまだ、間に合う。

「俺が戦います。ギンガさんが背負うことじゃない」

変わらず、管理局の戦いに対しては給料を貰う分に対する義理としか思えない。
だけど。
その考えを、他人に背負わせる気はない。
たとえ誘導された先の道であっても、選んで進んだのは自分だから。

ーー『自らが吐いた嘘はいつの日か、誰よりも大切な人を傷つける』。

誰に言われたか忘れてしまった言葉を思い出す。
今ならまだ、間に合うはずだ。
しかしギンガは、でも、と言葉を紡ぐ。

「いいの、ソラはそれで？」
「いいも何も。俺は戦うのが仕事です」

それに。
一つ、確かめたいこともあった。

「ギンガさん。……一つ、お付き合い願えますか？」
「いいけど、どうしたの？」
「確かめたいことがあります」
そう、確かめたいこと。
自分の力が、どれほどのものか。
ーー知りたいのだ。

◇　◇　◇

見舞いの相手は、元気一杯だった。ファイムは微笑する。
「調子はいいみたいですね、大隊長」
「まーな。……今回は、システムに助けられた」
ヴィータは複雑そうな表情で言う。システム、というのは『守護騎士プログラム』のことだろう。
普通とは違う、人としての存在だからこそ……ヴィータは、助かったのだ。
もっとも、守護騎士たちはシステムから独立していっているため、次もそうなるとは限らないらしいのだが。
「何にせよ、復帰して頂けるのは心強いです」
「……あたしはすぐに復帰できる。ただの負傷だ。けど、ファイム。テメェは違うだろ？」
「何の話ですか？」
ファイムは、すぐさま切り返した。微笑さえ浮かべて。

ヴィータは、テメェ、と言葉を漏らす。

「もう、あたしたち全員が知っててんだよ。テメェが、命を使って戦ってるってのは。……もう、時間が残ってねぇってのも」

「……成程、みなさんから感じる、遠慮したような態度はそれが理由でしたか」

お茶を煎れながら、ファイムは苦笑。なんだ、はやてだけかと思えば、みんな知っていたのか。

まあ……知られたからどうというわけでもないが。

「それで、ヴィータさんは何を感じたのですか？」

「何を、って」

「同情？　憐憫？　憤慨？……どれも、不要ですよ。僕はこの結果に後悔はしていません」

何度、口にした言葉か。

最近、ようやくわかってきた。この言葉は、相手に届けるために紡がれた言葉ではない。

自らに向かって紡いでいる言葉だ。

「未練は、まあ、少しだけありますが。生きることに対して未練はあれど、僕自身の命には未練はないのです」

だからこそ戦うのだ。是非もない。

ヴィータは、ふざけんな、と言葉を紡ぐ。

「テメェはそれでいいかもしれねぇけどな、それならはやてはどうなるんだよ」

「……」

未練。そう、未練だ。
生に対する未練があるとすれば、八神はやて。その存在に終始する。
だが。

「……たとえ僕がいなくなっても。はやてさんには、ヴォルケンリッターがいます。ご友人がいます。何も、変わりませんよ」

悲しんだとしても。
涙したとしても。
きっとあの人は、立ち上がってくれるから。

「テメェ……」

ヴィータがファイムを睨む。対し、ファイムは初めて、ヴィータを睨み返した。
鋭い瞳。まるで全てを諦めたかのような。
そんな、目で。

「今更、何が変わる？」

ファイムは、自身の想いを吐き出した。

「生きられるなら生きたいよ。けれど、それが許されないんだ。だったら、受け入れるしかない」

もし、受け入れなかったら。
自らの全てを否定して、そうして死んでいくことになる。
哀れなことに。
悲しいことに。

ただ、それだけは。
認めるわけにはいかない。
この道だからこそ、はやてに出会い、恋い焦がれ、愛することができたのだ。
それを否定することだけは、ファイム・ララウェイという存在が許さない。
許されやしない。

「戦いは止められない。それは、僕にとってのアイデンティティ。戦いしか知らない僕に、他の道なんて選べない」

戦場に生まれ落ち。
道具として戦い。
命を削り、ここまで来た。
今更普通の生き方などできないし、やり方もわからない。
人を愛する感情でさえ、示せたのが奇跡なのだから。

「命果てる時、どうなるかはわからない。ただ、今は。はやてさんの笑顔を守りたい」

そのためならば、死ぬことさえ厭わない。
それが、覚悟。
あの人の幸福が、ファイム・ララウェイにとっての幸福だから。
諦めずに、諦め続けてきた絶望の人生に。
唯一差した、光だから。

「いずれ戦場にて散ること。それが、僕の運命だ」

あまりにも悲しい未来。
死を約束され、それが刻一刻と迫る身でありながら。

しかし、ファイムはそれを受け入れる。
たった一つの、夢を抱き。
終わりを、肯定する。

「貫くのは、大切なこの想い。懸けるのはー命だ」

命懸けで、はやてを愛し。
はやてを、守る。
ただ、それだけ。
たった……それだけだった。

抱くは、愛。
懸けたものは、命。

◇　◇　◇

正直、嬉しいと言えば嬉しい。
目を覚ました直後に、二人も女性が見舞いに来てくれたのだ。これに不満を抱けば、それこそ世の男どもに殺される。
だが、しかしだ。
しかし、これは如何なものだろうか。

「……」
「……」
「……」

沈黙×3。笑える画だなこれは。

ウェンディ・ナカジマ。
ティアナ・ランスター。
ウェンディは入局当初からの知り合いで、ティアナは最近知り合ったばかりだが、色々と話す機会が多く、それなりに親しくなっている。
ミリアムを除けば、知り合いの中で最も親しい女性はこの二人になるだろう。
しかも二人は仲がいいときた。喜ばしいことである。
だと、いうのにだ。

「……あの」

ー睨まれた。うん、さっきからずっとこれだ。
何のつもりかわからないが、二人は沈黙しながら剣呑な視線を交わしている。
リューイを挟んで。
……お前ら俺の見舞いに来たんじゃねーのかよー、という台詞は飲み込む。流石にそこまでは馬鹿ではない。
しかし、いつまでもこのままというわけにもいかない。
なので。

「なあ、二人とも」

睨まれた、が、リューイは視線に耐えながら言葉を紡ぐ。

「旅団……俺も加わるんだよな？」

リューイは、確認するように問いかけた。二人は頷く。

「リューイは、第一連隊ッスよ」

「シグナム連隊長の下ね」
「……なら、前線ですね」

ぐっ、と、リューイは拳を握り締める。

「今度は不覚をとらねぇ。必ず叩きのめす」

決意を込めた言葉。ウェンディとティアナは視線を交わし合い。そして。
ーースパーン！！

「痛いっ！？」

思い切りリューイを叩いた。二人は、呆れたような表情を作る。

「リューイ、自分の状態を理解してるッスか？」
「復帰まで、まだかかるわよ」
「……いや、まあ、それは」

リューイは苦笑。だが、彼の目は笑っていない。
すぐにでも復帰する。そんな、目だった。

「ただ、俺もずっと休んでるわけにはいかないから。……ファイムの馬鹿も、無茶してるし」

その言葉に、二人はハッとなる。リューイは、更に続けた。

「戦える奴が戦わなくちゃ、誰が守る？　あの野郎の言う、管理局がなくなった世界で泣くのは誰か。……弱い奴らだ」

守る者たる管理局がなくなれば、傷つくのは弱い立場の者だ。それくらいは、リューイにもわかる。

「すぐに治して、戦ってやる。今が、踏ん張りどころだ」

リューイは、言い切る。
その言葉は、まるで。
戦いが間近に迫っていると言っているかのようだった。

◇　◇　◇

聖王教会。騎士カリムに会いにきていたはやては、会談を終え、中庭を歩いていた。
聖王教会は、とても良い雰囲気を纏っている。空気が、優しい。
まるで、戦時特例が発令されているのが嘘であるかのような、そんな雰囲気だった。
そんな、益体もないことを考えていた自分に苦笑し、はやては歩を進める。その時だった。
ーーピリッ。
ひりつくような、肌が泡立つような感覚。

（なんや……？）

はやては足を止め、眉を寄せる。
『何か』が……いる。

「……」

そして、はやては見つける。違和感の正体を。
まるで、世界と一体化しているかのように自然にベンチに佇む、一人の女性。
あまりにも自然に。まるで、風景の一部のように彼女が佇むからこそ、はやては違和感を感じた。
あまりにもー自然過ぎる。
自然、というものにおいて、人間というのは異物である。それは、どこまで行こうと変わらない。
人間という存在は、そのあまりの自己主張の激しさ故に、自然に溶け込めないのだ。
だが、目の前の女性はそれをしている。
まるで、彼女自身が『世界』の一部であるかのように。

「……面白い所で出会いますね」

世界に、色が宿る。
女性は、初めてそこで『異物』となった。
女性が、深く被っていた麦わら帽子を取る。そうして現れた顔に、はやては驚愕した。

「なっーー」
「おっと。それ以上は口にせぬことです。私はこの場で戦う気などありませんが……そちらがその気なら、ここで刀を抜くことも厭いません」

女性ーーテンリュウ・シンドウが微笑む。その身に纏う衣装は純白の、まるで令嬢が纏うかのようなシンプルなドレスだ。
相応の気品さえ漂わせる彼女はしかし、それ以上に威圧感もその身に纏っている。
はやては唾を飲み込み、言葉を止めた。テンリュウは、正しい選択

です、と頷く。

「すでに私の力は証明しました。特務部隊が総員で挑んでこようと、ねじ伏せましょう」

それはきっと、誇張ではない。

テンリュウ・シンドウー『最強』たる彼女と何度も戦いながら、はやてたちは未だに息切れの一つさえ見ていないのだ。

「……随分な自信やな」

はやては、虚しいと知りつつ挑発する。テンリュウは、クスリと微笑んだ。

「私は『人間』ではありません。『神道天龍』という『概念』なのです。人の身にあらざる存在に、どうやって勝つというのです？」

「……どういう意味や？」

「言葉通りの意味ですよ。それ以上でも以下でもありません。……まあ、今日はそのような話をしにきたわけではありません」

テンリュウは立ち上がる。そして、はやてを見据えた。

微笑を消し、真剣な表情で言葉を紡ぐ。

「本当ならば『彼』に直接話をしたいところでしたが……旅団の長たるあなたならば、問題ないでしょう」

「……」

はやては無言。

『彼』、というのが誰か、何となくはやては理解していた。

ただ、認めたくなかったのだが。

「『オリヴェント式』……カグラ・ランバード殿は、未完成で不完全であるが故に、その反動も少ない。また、完成させる気もないようですから問題ありません。しかし、『彼』は違う」

テンリュウは、刺すような目ではやてを見る。

「『オリヴェント式』が私と姫にしか使うことが許されない理由……それは、私は『概念』であり、姫は『不死』であるが故です。常人……いえ、『人間』が使えば自らの定められた命という『運命』を削り取ることで願いを成す力である『オリヴェント式』は、人が使っていい魔法ではないのです」

『運命を変える力』と呼ばれる、『オリヴェント式』。なんのことはない。それは決して、良い意味で『運命を変える』のではないのだ。

自らの死期を早める……それ故に、『運命を変える』のだ。

それは決して希望の力ではなく。

ー終焉への力。

破滅への力なのだ。

「回りくどい言い方は止めましょう。……ファイム・ラフウェイ殿。彼をこれ以上、戦わせてはなりません」

テンリュウは言った。

ファイムは、戦うべきではないと。

「私は『神道天龍』の末裔。故に、『オリヴェント式』の運用には責任があります。我が先達が編み出した術式で人を殺すのは、本意ではありません」

「……それを、信じろっていうんか？」
「はい。信じて頂かなければ、彼は遠くない未来に命を落とします」
テンリュウは断言する。
だが……それはすでに、覚悟していることだ。
自分も、ファイムも。
それを感じたのか、テンリュウは少し悲しげな瞳ではやてを見た。

「あなたは何もわかっていないのです。……何故、かつて『オリヴェント式』を紡いだ侍は、世界と契約する魔法を使ってまで自らを『概念』としたのか。……そうしなければ、『喰われて』しまうからです」

それほどまでに危険なのだと、テンリュウは言った。

「『唯一人からなる無敵の軍勢』は、そうしなければ守れなかったのです。『聖人』も然り……人であることを捨てなければ、『オリヴェント式』は使えません」

キィン、という音と共に、テンリュウの足下に魔法陣が出現する。
それはー一命を使う術。

「テンリュウ・シンドウとは、呪われた名です。その名を継ぐ者は人であることを捨て去り、同時に名前さえも捨て去ります。そうして『個』を捨てた『概念』となる。そうして初めて、『オリヴェント式』を扱えます。受け継いだ命と、目的のために世界に『固定』された存在である私は、言ってしまえば『人間』とは命の総量が違います。しかし、『彼』は人です。たかが八十年程度の命しか持たぬ存在が使うにはあまりにも代償が重過ぎるのです。……彼は、後どれくらいの命を？　２０年ですか？　３０年ですか？　まさか、

知らぬわけではないでしょう？」

はやては、躊躇した。答えるべきか否か。
だが、有無を言わさぬテンリュウの瞳と。
世界最強の秘密に対する興味が、答えを口にさせた。

「あと……魔法を使わなければ１０年。使えば、２、３年って……」
「……ッ！？」

テンリュウが、大きく表情を変えた。
まるで……信じられないものを見るかのように。

「あと、あと２、３年！？　何故です！？　どうしてそんなことになるまで！？」
「なっ、なにを……」

肩を掴まれ、はやては動揺する。テンリュウの態度は、異常だった。
いかに責任とはいっても、彼女にとってファイムは敵。なのに。
テンリュウは、ギリッ、と歯を食いしばると、はやてから手を離した。

「……『オリヴェント式』は、命を使う術式。それは、ある日突然死んでしまうような生易しいものではありません。使用者の命を、確実に削り取っていくものです。あと２、３年など……彼の体は最早限界のはず。意識があることさえ奇跡のような状態ですよ」
「！？！」
「最早体内の内臓はボロボロ。毎日気が狂うかのような激痛に苛まれているはずです。……気付かなかったのですか？」

テンリュウは、僅かに怒りを称えた瞳ではやてを見据えた。

はやては……答えない。
ただ。

（吐血で溺れる……それが、もし、毎日なんやったら）

何故、気付かなかった？
何故、気付けなかった？
彼はいつだって。
助けて欲しいと、叫んでいたはずなのに。
あんなに、助けてくれたのに。

「……もう、これ以上は無駄でしょう。私の先達が紡ぎし術式の犠牲者……できれば、救いたかったのですが」

テンリュウは、憐れむような目ではやてを見る。

「此度の戦い……アリアとアルハザードしか理由はなく、管理局には恨みも何もありませんでしたが。気が変わりました」

テンリュウは、鋭い瞳ではやてを見据える。

「人を使い潰すのが管理局だというのなら。それがやり方だというのなら。相応の覚悟をして頂きます」

そして、テンリュウははやてに背を向ける。

「何が正義。何が世界の守護者。人の犠牲の上に成り立つ平和など、願い下げです。その無知を、盲目を、愚昧さを恥じなさい。あなたたちの傲慢が、一人の未来ある若者を殺し、その存在さえも歪め、破壊するのです」

そして、テンリュウはその場を立ち去った。
はやては、動けない。
ただ、立ち尽くし。
呆然としているしか、なかった。

ーーポツリ。
雨が、肌を打つ。

頬を伝ったその雫が、雨なのか。それとも別の何かなのか。
それは……はやてにしかわからない。

◇　◇　◇

時空管理局本局無限書庫。
管理局の情報の要たるその場所の最奥。
そこに、巨大な魔法陣が描かれていた。
それは、ミッド式でもベルカ式でも、ましてやオリヴェント式でもない魔法陣。
名前さえも忘れ去られた、世界と繋がるための魔法を紡ぐための魔法陣。
ユーノ・スクライアが、彼の後輩のために紡いだ、大魔法陣だ。

「いいんだね、ファイムくん？」
「はい。ありがとうございます」

ユーノの言葉に、ファイムは頷く。これを用意することを願ったのは、ファイムだ。

オリヴェント式ーーその副作用とも呼べる、肉体の限界をどうにか抑えるために、ファイムはこれを用意して貰った。

「正直、限界が近付いてまして。前回の出撃も、フルドライブで強引に」

苦笑しつつ、ファイムは言う。そう、ファイムの肉体はそれほどまでに限界に近付きつつあった。

フルドライブは本来、肉体にかなりの負荷をかけるものだ。しかし、敢えてその負荷をかけることで、ファイムは神経を鈍らせ、痛みやその他、戦闘の邪魔になる感覚をねじ伏せた。

それがより一層、自らの死期を早めていると知りながら。

また、体内にあるロストロギア『ジュエルシード』も役に立っている。こうして激痛に苛まれながらも正気でいられるのは、それのおかげだ。

「……ねぇ、ファイム、あんた、考え直す気はないかい？」

紡がれた言葉。見ると、アルフがこちらを見ていた。彼女もまた、自分を助けてくれている人物だ。

アルフは準備を進めながらも、問いかけてくる。

「あんたが今、キツい状況にいるのはわかる。でもさ、これはわけが違う。こんな、成功するかどうかもわからないような儀式を、本気でやるのかい？」

「……もう、戻れないんです」

ファイムは、苦笑と共にそう言った。

「自分の体です。自分が一番よくわかってます。僕の体は、もう限

界です。2、3年と言いますが……きっと、今のままではそこまで保つことさえないでしょう」

それは、ただの規定事項。
変わることはなく。
また、変わるはずがないこと。
しかし。

「それは、少し困るんです。死ぬのは、もう少しだけ後だ」

だから、ファイムは世界と契約する。
失われた古代魔法を紐解き、代価を差し出し、力を手にする。
そうして、戦いに赴くのだ。

「せめて、この戦いが終わるまでは。……僕がここにいるのにも、理由があるはずだから」
「……覚悟が決まってるなら、大きなお世話だったね」
「いえ……ありがとうございます」

ファイムはアルフに軽く頭を下げる。アルフは、首を左右に振った。

「いいさ。あたしは何もしてない。その覚悟も想いも信念も、全部あんたのものだよ」
「そうだね。その通りだ」

準備を終えたユーノが、微笑みながらそう言った。
ファイムは、ユーノさん、と言葉を紡ぐ。
ユーノは頷いた。

「正直なことを言えば、もっと他に手段があったと思う。例えば…

…それこそ、魔物の類になるとかね」

使い魔、という概念だ。本気で人を捨てるというのであれば、そんな道もあっただろう。

しかし、ファイムは。

それを知っていて、この道を選んだ。

「だけどキミは、人のままで、人であることを超えようとした。……矛盾してる。だけど、キミは正しいと僕は思う」

「……」

「今回、調べれば調べる程、相手の強大さばかりが目に付く。Sランク魔導師なんてのは、『怪物』だからね」

かつての『エース・オブ・エース』や、『騎士団最強の女性騎士』。『戦争屋』に『アンリミテッド・デザイアの継承者』……果てには、『唯一人からなる無敵の軍勢』。

その全てが、『怪物』と呼ぶに相応しい。

だが。

相手が、怪物なればこそ。

「『怪物』を打ち倒すのは、いつだって人間だ。キミは人間。……少なくとも僕は、そうであると信じてるよ」

「ありがとうございます」

ユーノとアルフ。その二人に、深々と頭を下げ。

ファイムは、魔法陣の中心に立った。

そして彼は、彼の相棒に言葉を紡ぐ。

「いこう、リンネ」

《私はあなたの翼。参りましょう、マスター》

そして、儀式が始まる。
視界が全て消え去り、『自分』という存在の境界線が曖昧になる。
その中で。
ファイムは、声を聞く。

“矮小なる者よ。願いは？”

それは、世界の声。
今日ここで、ファイム・ララウェイは、世界と契約する。
たった一つの、願いがために。

「ファイム・ララウェイという存在を、この世界に固定せよ」

それは、かつて『最強』が紡いだ儀式。
自らの存在を定義し、世界に固定するーーそうすることにより、自らの存在を『概念』へとシフトする。

“良い。ならば重ねて問おう。代償は決して軽くはない。良いな？”

それは、天使の囁きか、悪魔の囁きか。
ファイムには、どちらでも良かったが。
だから、言い切る。

「好きにしろ」

第二十二話　最強が生まれた理由（後書き）

『最強』の秘密が明かされました。彼女は人ではなく、『概念』。
それ故に、人では彼女に勝てない。
そして、ファイム・ララウェイは最後の手段に訴えます。最早彼には、一刻の猶予さえ残されていません。

はい、第二十二話です。
楽しんで頂けましたか？
今回はインターバル。この作品のテーマとして、『理不尽』と『不条理』があります。その形の一つが、『オリヴェント式』なのですね。

感想、アドバイス、苦言、等々ありましたら、是非ともお願いします。
そして、一万ユニーク突破しました！！
ひとえに皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

さて、物語も最終章に近付いて参りました。楽しんで頂けると、幸いです。
次回ですが、インターバルを一つ挟み、それから本編に移ります。
お付き合いくださいませ。

ありがとうございました。
では、第二十二・五話。
「狂気の楽園、その御名は」

第二十二・五話　狂気の楽園、その御名は

ミッドチルダ海上。
かつて、『ゆりかご』が『楽園』と戦った場所に、いくつもの影があった。
その影の先頭たるホムラ・イルハートが、退屈そうに欠伸をする。

「さて、ようやく見つけたんはええけど、どないする気や？」

振り返る。視線の先にいるのは、クライムだ。
エレン・リストリアが作り出した自立型起動兵器『ルシフェル』…六つあるビットのうちの一つに乗っている彼は、ふむ、と言葉を紡いだ。

「かの『聖王』も慎重なものだ。わざわざ海に沈めるとはな」
「それだけじゃないよ～……っと」

クライムの言葉に、グリスが言葉を紡ぎ、魔力弾を一発、海に放った。
それは海面に向かっていき、突然、弾けた。
ー結界。
それが、グリスの魔法を防いだのだ。

「認識阻害の魔法もかけてあるねぇ。人払いもだ。調べなきゃ、興味を持たなきゃ辿り着けない。そういう結界だね。キャハハ♪　厳重厳重♪」
「どうすんだよ、そんなの」

テンリュウより借り受けた飛竜サリヴァルムに乗るウィルが肩を竦

める。テンリュウはメンバーで唯一、ここにいない。クライムが呼ばなかったのと、何より、今日は朝から彼女の姿は誰も見ていない。それを、クライムは『都合がいい』と言っていたが、果たしてどう都合がいいかはわからなかった。
ただ、ウィルはこれからのことに不安を覚えていたのだが。

「結界、堅いんだろ？　どうすんだ？」

不安を振り払い、ウィルは問いかける。それに答えたのは、リヴァイアスだった。

「小僧、貴様は何を見ている？　貴様の目は、脳は飾りか？　貴様の師は、一体誰だ？」

ウィルは、言葉を受けて視線を巡らせる。
その先にいるのは、かつての『エース・オブ・エース』。
『銀月』と呼ばれる男は、凄まじい魔力をその身に纏っていた。思わず、こちらが震えるほどの。

「主は否定するが……主の結界魔法の力は管理局においてもあのユーノ・スクライア以外に並ぶ者はいない。結界魔導師とは、『創る者』だ。しかし、それだけではない。『創る』ということは、『壊す』ことも可能」

エリアが言う。誇らしげに、まるで自慢するように。
ホムラは、ほな、と口を開いた。

「やるけど……全力でやってもええんやな？」
「はい。認識阻害の効果は結界によるものではなく、この空間そのものにかけられているようです。全開でやろうと、管理局に気取ら

れることはありません」
「ま、『あれ』の力が漏れてるだけだし？　いけるいける、大丈夫だよん♪」
「りょーかいや」
《Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》
エレンの言葉と、補足をするグリスにそう応じ、ホムラは魔法を紡ぐ。
ーー銀閃。
何もないはずの空間でそれは弾け、魔力を撒き散らす。ホムラはカートリッジをロードすると、次や、と呟いた。
「ライジングサン。イノセントバスター、ツインシフト」
《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》
迸る二筋の閃光。それは、見えない障壁を一枚、食い破る。
闇の書よりも固いーーあまり思い出したくないことを思い出しながら、ホムラは更に魔法を紡ぐ。
《Ｍｏｏｎ　Ｓｔｒｉｋｅ》
多口砲撃。高町なのはの『ストライクスターズ』やテンリュウの『夢想演舞』と同系統の魔法が、障壁を食い破る。
だが、まだ終わりではない。
《Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ａ．Ｃ．Ｓ》
突撃。空を舞う魔導師は、障壁に刃を突き刺し、零距離から魔法を叩き込む。
障壁が砕ける。あとーー四枚。

「面倒やな。一気にやるか。ーーライジングサン」
《Ｍｏｏｎ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》
紡がれる、ホムラ・イルハートの奥義。極大の魔力が、収束していく。
そして。
「ブラスター１。リミットリリース」
《Ｙｅｓ，ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｌｏｒｄ》
カートリッジがロードされ、更にブラスターシステムによって更に魔力が増幅。
必滅の一撃が、紡がれる。
ーーパキィィイインーー
砕け散る結界。ホムラは、うん、と背伸びをした。
「結界破壊は終了や。で、どないする？」
世間話でもするかのような調子で言ってくるホムラに、ウィルは絶句していた。
結界とは、普通相応の結界破壊の魔法『バリアブレイク』を用意し、解体するものだ。八層からなる結界を力業で砕くなど、正気の沙汰ではない。
しかも、あれだけ強力な魔法を連発しておいて、息一つ切らしていない。
これが、『正真正銘の天才』と謳われし、かつての『エース・オブ・エース』。
ホムラ・イルハート。

「主はただ魔法を紡いだわけではない。魔法一つ一つにバリアブレイクの効果を付与していた。それ故だ」
「いや、それって楽じゃないですよね？」

エリアの言葉に、ウィルは確認の言葉を投げかける。
変換資質を持たぬ魔導師が、魔力を某かに変換するのが手間であるように、本来の魔法以上の力を得ようとすれば、相応の手間と力がいる。
だがホムラは付与する素振りを微塵も見せていなかった。つまり、ほとんど一瞬で『結界破壊』の効果を魔法に付与していたということになる。
一体どれほどの技量だというのだ。
エリアは、ホムラを見つめたまま言葉を紡ぐ。

「主を怪物と呼ぶ者もいるが、あの方はただ強い、それだけだ。そして力を振るう理由も心得ている。あの方の背中を見て学べ、ウィル。強さの答えはそこにある」

そして、エリアはホムラの下へと向かっていく。ウィルは、それを無言で眺めていた。
ーーくいっ。
不意に、服を引かれた。見ると、アリアが服を引いていた。

「……ウィル？」
「……大丈夫だよ」

ウィルは首を振る。そして、前方を指差した。

「呼んでるぞ」
「……ウィルも」

「ああ」

アリアを伴い、サリヴァを進ませる。アリアは飛行魔法を心得ているので、空が飛べる。
そうしてホムラたちのところまで行くと、クライムがアリアに手を差し出した。

「さあ、『聖人』よ。その力を示すがよい。ここに眠るは、キミのための楽園だ」

アリアが、一歩、歩み出る。
まるで、導かれるように。
その体が輝き、光が溢れ出す。
そして。

「ーーーー」

全員が、驚愕に目を見開いた。
海に渦が坂巻き、瞬間、巨大な穴が開いたのだ。
アリアが、目を開き。
クライムが、笑った。

「『楽園』は『聖人』の帰還を喜んでいる。さあ、行こう同志たちよ」

みなが降りていく。その最中、ウィルの隣を通ったグリスが、楽しそうに呟いた。

「クスクス……『唯一人からなる無敵の軍勢』はこれを見たらどう思うのかな？　『神道天龍』は、『失楽園シャングリラ』の奴隷な

のに、ね……♪」

何のことかー聞く前に、グリスは行ってしまった。グリスは佇む。ー不意に、背後に違和感を感じた。見ると、そこには長身の、仮面を着けた男……ロードがいた。

「……」

激烈なまでの悪寒を感じながら、ウィルはサリヴァを伴って下へと降りる。

それを見送ったロードは、背後を振り返った。そこには、異形となったギレンがいる。ギレンはロードが見ていることに気付くと、行けよ、と言葉を紡いだ。

「俺はここで見張りだ。テメェは行きやがれ」

ロードは数秒、無言で佇み、穴へと降りていく。

ギレンは、その姿が見えなくなってから、ちっ、と舌打ちした。

「あの野郎、気味が悪ぃ」

それは。

誰もが、感じていることだった。

◇　◇　◇

穴の底にあったのは、巨大な建造物だった。

かつて、古代ベルカにおいて『聖王のゆりかご』に敗北した伝説の

『楽園』。
今は主を失って久しいために力を失っているが、ここから伺える異様は神秘に満ち、神々しい。
そして同時にーー毒々しい。
完璧でありながら。
完全でありながら。
だからこそ、ここは完結している。終わっているのだ。

「さて、行こうか同志たち。ここが、夢への階段だ」

クライムが言い、全員が内部へと侵入する。静かな空間。気味が悪いそれに、ホムラが舌打ちした。

「なんや、妙な空気やな。わしらが、異物みたいに感じる」
「キャハハ♪　それは当然だよ、リーダー♪　ね、スパイさん？」
「……ここ、『失楽園シャングリラ』は『聖人』と『唯一人からなる無敵の軍勢』のためだけの『聖域』です。この場所において、私たちは『異物』以外の何物でもありません」

スパイ、と呼ばれたことに対して某かを感じたようだが、エレンは冷静を装って言葉を紡いだ。クライムが、後を引き継ぐ。

「ここは完全であり完成しているが故に、終わった場所だ。争わないが故に強くなれず、競わないが故に、高められない。進歩を放棄した以上はいずれ滅びるが運命だ。……その代わりに、争いが存在しないのだがね。ふむ、確かにここは『楽園』だ。もっともーー」

モーターの駆動音が聞こえた。見ると、何体もの機械人形が、姿を現していた。
剣呑な雰囲気。ああ、とクライムが言葉を漏らす。

「それはあくまで、『聖人』と『唯一人からなる無敵の軍勢』にとってのみ。我らにしてみれば、さしずめ地獄か」

クライムは笑い、ウィルたちはそれぞれのデバイスを構える。その中で、クライムはアリアに言葉を紡いだ。

「前に出たまえ。ここはキミの世界だ。キミに危害は加えんだろう」

「……」

言われ、アリアはクライムと敵とを代わる代わるに見比べる。クライムは、どうした、と言葉を紡いだ。

「キミが行かないなら、戦いになるぞ。誰かが傷つく。良いのかね？」

有無を言わさぬ調子だった。アリアは迷いながら歩み出る。

そして。

「ッ、くそっ！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！！》

動いたのはウィルだった。アリアの前に高速で移動すると、障壁を張った。

ーーガガガガッ！！

響き渡る弾丸の嵐による轟音。

ウィルの障壁が軋み、表情が歪む。アリアは、ウィルの背後でへたり込んでいた。

そして、銃弾を吐き出しているボックス型の機械人形の後方から、人型の、頭のない機械人形が現れる。

両腕がブレードになっているそいつは、間違いなく近接型。
マズい、ウィルがそう感じた瞬間、そいつがこちらへと駆けてきた。
ウィルは、腕に力を込めーー

「ふん、出遅れたか」

その言葉を聞いた瞬間、近接型の機械人形がバラバラに砕け散った。
見えたのは、蒼き一閃。
エリア・カリアの一閃が、敵を潰していた。

「……主」

エリアが呟き、そして、ウィルの目にその背中が映り込む。

《Ｉｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》

駆け抜ける銀色の閃光。それは敵を蹂躙し、打ち砕く。
ほんの一瞬で敵を蹂躙したホムラの背中。銀色の光を纏うその背中が、ウィルには眩しく見えた。
圧倒的な力。
なんと、遠いことか。

ーーガギィン！！

いきなり、背後から凄まじい金属音が聞こえてきた。振り返ると、リヴァイアスが自身の得物を振り抜いてクライムを狙い、ロードが割って入ってそれを止めているようだった。

「気味の悪い男だ。俺様の一撃を受け止め、言葉一つ発さぬとはな」
「……」

ロードは無言。それを見ながらウィルはアリアの手を引いて立ち上がらせ、クライムを睨んだ。

「……テメェ」

「何をそんなに激昂するのかね？」

クライムはウィルの殺気を称えた瞳を受け止めながら、平然と肩を竦めた。

「彼女は『不死』だ。進み、終わることを繰り返す存在。傷の一つや二つ、すぐにでも治るだろうに」

「テメェ！！」

ウィルは床を蹴り飛ばし、クライムに向かって自身の一撃を叩き込む。だが、それはグリスの障壁に止められた。ウィルは、一度距離を取る。

「どけテメェ！」

「キャハハ♪　冷静になりなよ、ウィルウィル？　宗主の言う通りでしょ？　『聖人』の子孫であるその子は、『不老』でこそないけど『不死』だ。違う？」

「だからって傷ついていいことにはならねぇだろうが！」

たとえ『不死』でも、痛みはある。血も流れる。

『不死』とはむしろ、枷なのだから。

「合理的ではないね。若さ故かな？」

ウィルの叫びを、クライムは一笑に伏す。ウィルの頭に血が上り、

得物を構える。向こうにはエレンも加わり、一触即発の空気が流れた。

「ーーおい」

その中で響いたその声は、全員の動きを奪うに十分だった。

ホムラは背を向けたまま、言葉を紡ぐ。

「お前に協力しとんのは、利害が一致しとるからと、目的に近付く一番の近道やからや。勘違いするんやない」

ホムラは、鋭い瞳でクライムを睨む。

「貴様がわしの『大切』に触れるな。図に乗るんやない。……殺すぞ」

空気の温度が、一気に下がった気がした。クライムは、笑みを浮かべながら頷く。

「ーー心得ておこう」

◇　◇　◇

そして、圧倒的なホムラの魔法で敵を砕き、一行は深部へと辿り着く。その途中で驚いたのは、ロードの戦闘能力の高さだ。

ホムラとは全く違う、完全な前衛型の戦い。その力は、まるで。

『最強』を謳われる、テンリュウのようだった。

「さて、ここが最深部。心臓だ」

クライムが、両手を広げて口にする。
最深部。そこに至るだけで、三時間はかかった。あの『聖王のゆりかご』をも超える巨大な存在。
それがーー『失楽園シャングリラ』。
絶対にして究極。望めば、世界さえも覆す。
その圧倒的な威容は、朽ちず、果てず、今も尚、紡がれている。

「世界を変え、ねじ伏せる絶対なる力。ーー同志よ。例のものを」
「はいは～い♪」

グリスが応じ、魔法陣を展開する。
光り輝くそこから現れるのは、無数のロストロギア。
危険度はピンから切りまで。『ジュエルシード』のような危険なものから、名前さえない力の弱いものもある。
全て、ホムラたちが集めてきたものだ。
全て、エネルギー内蔵型。使い方によっては世界さえも破壊する程のロストロギアが、そこにあった。

「単純な数で９２個。キャハハ♪　これなら、起動は簡単だよん♪」
「流石だ。……本来、『失楽園シャングリラ』を起動するエネルギーは、『概念』である『神道天龍』の絶大な魔力と、『不死』たる『聖人』の無尽蔵な魔力ーー共に『オリヴェント式』による魔力供給が必要になる」

ーー『失楽園シャングリラ』。
歴史の闇に葬られた、『最強の質量兵器』たる『聖王のゆりかご』

と並ぶ、『最悪の概念兵器』。
運命をねじ曲げ、世界を覆すそれを扱うことが許されるのは、『聖人』のみ。
そしてその起動には、『オリヴェント式』が必要になる。
だが、今ここに、『オリヴェント式』の継承者たるテンリュウはいない。
彼女は、『失楽園シャングリラ』を蘇らせることを、決して良しとしないからだ。

「本来なら、『剣聖』たる彼女がいてくれれば一番良かったが、そうもいかない。……何、案ずる必要はないぞ、同志たち。要は、起動するに至るためのエネルギーがあれば良いのだ」

クライムは笑い、グリスとエレンにロストロギアを設置するように指示する。その様子を眺めながら、ホムラが口を開いた。

「ふん、それでロストロギアか。まあ、理には適っとるわな」
「ふふっ、その通りだ。それにこれならば、『剣聖』も存分に力を振るえる。かつて『覇王』に遅れをとったような悲劇は起こらんよ」

かつて、『唯一人からなる無敵の軍勢』は、無念を抱いて『覇王』に敗北した。
力は互角以上であったが、『失楽園シャングリラ』に魔力供給を行わなければならなかった故に、最後の最後でその差が出てしまったのだ。

「……よー言うわ。結局、お前にとって『神道天龍』は道具に過ぎひんのやろ？　これが起動したら、テンリュウは逆らえなくなるんやからな」
「何を躊躇う？　彼女は人ではない。それに……『ここ』こそが、

彼女の目指す場所だ」

テンリュウ・シンドウが目指す、たった一つの願い。
喪われた都、『アルハザード』。
そこでしか叶えられぬ願いを抱くが故に、彼女はこちら側にいる。

「ギブ・アンド・テイクだ。彼女の目的も私の目的も、これで果たせる。無論、キミたちの願いもだ」

準備が整う。クライムは、笑みを浮かべた。

「では、宣戦布告といこうか。ただ蘇らせたところで、大した威嚇にもならない。劇的に、圧倒的に。伝説の楽園は顕現するべきだ」

そして、クライムは大仰に手を広げ、宣言した。

「欺瞞の塊である管理局。偽りに満ちた平和。その全てを否定し、私たちは世界を救う」

あまりにも腐りきり。
進歩さえもひていしようとしている世界。
その全てを……覆す。

「抵抗するならすればいい。いかなる時代であれ、勝者こそが正義だ。故に私たちが正義になる」

そうして、クライムは宣言する。

「管理局最大の秘密にして、最大の嘘……『魔法』を否定する。さあ、手始めだ。再び地上を地獄に変えよう」

それが。
開戦の、合図だった。

第二十二・五話　狂気の楽園、その御名は（後書き）

史上最悪のロストロギア、『失楽園シャングリラ』。
封じられたはずの力は、数百年の時を超え、蘇ります。

はい、第二十二・五話です。楽しんで頂けましたか？
ちなみに軽い補足説明ですが、『失楽園シャングリラ』は本来の名前ではなく、『聖人の領土』というのが本来の名前です。
封印した『聖王』や『覇王』が、復活を恐れ、忌避される名を付けたという経緯があります。
蛇足ですが？

さて、次回からは、連弾で戦いが続きます。
山場は後二回。最後までお付き合い頂けると、幸いです。
感想など頂けると喜びます。
では、次回予告です。

次回予告

開戦。
それぞれの迷いと理由を胸に抱き、戦いは始まる。
何を信じ。
何を願うのか。
願った夢は同じであるはずなのに、互いの手段はあまりにも違う。
そして。
戦いは、更なる局面へ。
「人間を人間たらしめるのは、心の在り方だ」

次回、第二十三話
「開戦、更なる局面へ」

第二十三話　開戦、更なる局面へ（前書き）

戦いはここに始まる。

饗宴は狂宴となり、世界を喰らい尽くす。

もし、戦いが正義だというのなら。

証明して欲しい。

その価値を。

意味を。

そして。

世界となりしキミに、見せて欲しい。

絶望と戦い、傷つきながら、しかし、それでも見つけられるのかを。

希望を。

人はまだ、希望を見ることができるのかを。

キミに、激励を贈る。

……“光あれ”

第二十三話　開戦、更なる局面へ

ミッドチルダ首都クラナガン。
そこに座すは、一度は破壊され、しかし、本来の姿を取り戻した地上の要。
その一角にある模擬戦ルームで、ソラ・ウィンガードは荒い息を吐きながら仰向けに倒れていた。そんなソラに、彼の模擬戦の相手だったファイム・ララウェイが声をかける。

「大丈夫、ソラ？」
『大丈夫ですか？』

ファイムとユニゾンした状態のミリアムも、重ねて問いかける。ソラは、苦笑した。

「大丈夫ですよ～……いやぁ、いい勉強になりました」

疲れの色は濃いが、ソラの口調は明るい。何かを掴んだのだろう。
ここ数日、ソラは様々な魔導師に模擬戦を申し込んでいた。
シグナム、なのは、フェイト、ヴィータ……誰もが、一流と認める魔導師に。
そして今日、ファイムもミリアムとねユニゾンや、確かめたいことがあってソラと一騎打ちをした。
結果は――ファイムの勝利。

「あんな、戦い方もあるんですね」
「兵法の基本だよ」

ソラの言葉に、ファイムは苦笑しつつ応じる。やったことは、そう

難しいことではない。
ただ単に、開始直後にフルドライブとブラスターシステムを起動。ソラが本来の力を出す前に、全力でファイムの最大魔法『バーストストーム』を叩き込んだ。
本来のソラの実力なら、防ぐことができるはずの一撃だったが、オープニングで、気持ちも何も乗っていない状況では防ぐことは不可能だ。

「戦いにおいて理想的なのは、奥の手をいくつも用意することじゃない。相手が力を出す前に、ノックアウトさせるのが一番だよ」
「あはは……勉強になります。それやられると、俺はキツいなぁ……」

上半身を起こし、座り込みながらソラは苦笑する。ファイムの言葉は真理だ。戦い方の、一種の答えでもある。
奥の手を打ち破るのではなく、奥の手を出される前に叩き潰す。
あまりにも理想的だ。
ただ。

「あくまで、それができる場合に限られますが」

ファイムとのユニゾンを解きながら、ミリアムが言う。ファイムは頷いた。

「そうだね。例えば……なのはさんには通用しないだろうね。あの人は、僕と同じ戦い方をするから」
「あー、確かに。本気になるの早いですよね」
「教導の時はそうでもないけどね」

ファイムは言う。高町なのは。『エース・オブ・エース』たる彼女

は、『全力全開』を信条とするためか、出し惜しみというものをしない。
だからこそ、常に限界を超え続け、そして、奇跡を起こしてきた。
自分自身を、犠牲にして。
ソラは、立ち上がり、笑った。

「……やっぱり、色々と不便ですね。いきなり本気が出せないのは」

出せない、ではなく、出し方がわからない、なのだが、今の時点では結局同じことだ。

「やっぱりあれです。これが、『手抜き』をしてきたわたしのツケなんでしょうね」

常に余裕を、という言葉を実践するために全力を出すことを拒み、それ故にいつの間にか『全力を忘れてしまった』少年、ソラ・ウィンガード。
だから彼は、思い出そうととしている。
何も知らなかった幼少期は出せた『本気』を、出すために。
ファイムは、そんなソラを見ながら、だけど、と言葉を紡いだ。

「かもしれないけど、それは良いこととは限らないよ」
「……そう、ですね」

ファイムの言葉に、ミリアムは頷く。ファイムとユニゾンした彼女は、理解しているのだ。
ファイム・ララウェイが、一体どのような状態にあるのかを。

「常に全力というのは、要するに『後がない』ってことだよ。勝てればいいけど、負ければそこで終わり。余裕なんて、欠片もない」

「いや、まあ、そうかもしれないですけど」
「だからね、僕は僕のスタイルを強制しない。してはいけないんだ」
限界を出し、通じなければ限界突破の術式を使う。
それは、言い換えれば。
『オリヴェント式』など使わなくとも、命を使うことになる。
それに、そもそも魔法とは――

「……ねぇ、ソラ。ソラは、『魔力』って何なのか、考えたことある？」
「え？」
「いや……ごめん、変なことを聞いたね」

ファイムは首を左右に振る。それは、触れてはならぬ部分。
管理局が隠し続けてきた秘密。
『オリヴェント式』という、命を使う術式を使うファイムだからこそ気付けた事実。
管理局を否定し、魔導をも否定する秘密。
まあ、だからどうというわけでもないが。
魔導だろうと質量兵器であろうと、力は力だ。どちらを使おうとリスクはあり、危険もある。
ただ、それだけである。

「じゃあ、僕はこれで。ソラも、あんまり長居しないようにね」
「あはは、教導もありますんで、大丈夫ですよ～」

笑いながらソラは言い、ファイムは立ち去る。そうしながら、ファイムはミリアムに言葉を紡いだ。

「ミリアム。僕の体のことだけど、他言無用だよ」

「……はい」

ミリアムは頷く。だが、彼女とて全てがわかっているわけではない。
ただ、ファイムの体が実はもう限界で、何らかの方法で現状維持で固定している、ということくらいだ。
まさかそれが、世界と契約などという途方もない行為によって成立しているなどと、誰が気付こうか。
そして。
今のファイムは、戦える体ではないということも。

「それじゃあ、ミリアム。僕は提出しなくちゃいけない資料が――」

――――。

耳を切り裂くような警報。ファイムは、言葉を止める。
それが意味することは、一つだ。
敵襲。

◇　◇　◇

八神はやては、迷っていた。
テンリュウ・シンドウ。敵として立ちはだかる、最強の存在。
彼女は、確かに口にした。

――『ファイムは限界だ』

その、抗いようのない事実を。
大丈夫だと思っていた自分が、恨めしい。
なんと、楽天的か。
わかっていたはずなのに。
ファイムがもう、限界なのは。

「……ッ」

はやては、胸元で煌めく十字架のネックレスを握り締める。
ファイムに贈られた、祈りの品を。
どうすれば良いのか。
戦うことを決めて、彼はそれについてきてくれた。
だけど。
戦いは、彼を蝕んでいく。
戦わせない？
……無理だ。
彼に戦うなと言ったところで、彼は聞かないだろう。
それが、ファイム・ララウェイという青年なのだから。
迷いは深くなっていく。
もしもが、脳裏を過ぎる。
もしも、あの時。
選択肢を与えられたあの時に、戦わないことを選んでいれば。
そうしていれば、戦う必要はなかったのだろうか？
いや、それは違う。
戦わない道を選べば、八神はやては自分を許さなくなる。
それは、ダメだ。
それは、自分も彼も許さない。
だって。
彼があんなになってまで自分にくれたのは、『選び直す機会』。
幸福に至る道を、探し当てることだったのだから。

そして、選んだ道は間違っていない。
ここで、八神はやては様々なものに出会ってきた。
辛く、悲しく、苦しい中で。
幸福を、掴んできたのだ。
だから。
間違っていない、はずだ。
しかし。
間違っていないなら。
彼の死は、必然だったのかもしれない。
……そんなことを思ってしまう自分は、何なのだろう。
八神はやては。
どうしたらいいのだろう？

「……」

沈黙が世界を支配する。
そして。
しばらくして、

――警報が、鳴り響いた。

◇　◇　◇

空に浮かぶは、次元航行艦。
以前吹き飛んだ『アンチテーゼ』の代わりに裏ルートから手に入れた、元は管理局の艦だ。
それがこうして、堂々と敵対を示す集団の手に渡るのだから、世界はやはりどうかしているのだろう。

自ら滅びへと歩を進め。
一体どこを、目指すというのか？

「さて、諸君。この日は、この時は、この瞬間は。後に歴史に刻まれる」

わざわざ用意された、玉座の間。そこに座すのは、『聖人』の名を継ぐ少女。
だが、語り部は彼女に非ず。
語り部は、狂気を纏いし破壊のメシア。

「今後一年、今日この日は『厄災の日』として語られるであろう。
しかし、その後永劫に渡り、人類は今日という日を『救世の日』として語り継ぐ！」

両手を広げ、クライムは語る。
仰々しく。
物言わぬ機人たちに。
彼の戦いに力を貸す、同志たちに。

「停滞とは終焉である！　人は、安寧と引き換えに進歩を諦めた！
仮初めの欺瞞に満ちた平穏に身を委ねた！　それは正しいのか！？　否！　断じて否である！」

管理局――その名の通りの『管理』という、平穏と停滞を、彼は否定する。
何故ならば。
停滞の先にあるのは、滅びであるからだ。

「ただ生きるだけならば動物として生まれれば良い！　野山を駆け、

大海を生き、大空を舞えば良い！　だが、我らは人間だ！　知恵を持つ、万物の霊長！　その我らが進歩を諦めれば、その先に望むのは何たるか！？」

この演説は、どこまで行こうと一人の価値観に終止する。
しかし、それを聞く者が。
それを認める者は、確かにいるのだ。
現に。
彼に賛同せし、世界に牙を剥く者たちは、彼の言葉に耳を傾けている。
それは事実であり。
それだけが、真実だった。

「我らは知恵を持つ獣だ。故に、義務を有する」

一転、静かな口調でクライムは語る。

「それは、進歩し続けること。歩み続けること。我は現状に満足できぬ生き物だ。『アンリミテッド・デザイア』……それは個人を示す名前ではなく、人類が抱える本能である」

もっと、もっと。
少しでも。僅かでも。
人は、そうやって発展してきた。
だから。

「それを否定した先は滅びしかない。だというのに、管理局は人の在り方を否定する。滅びを望む。その先には、未来などありはしないというのに。なればこそ、我らが立ち上がらねばならない。だが、僅かな方法では最早変えられん。故にここに、私は謡おう」

クライムは、天を仰いだ。

「闘争を。闘争を。闘争を。闘争を！」

狂ったように、彼は叫ぶ。

「争いは全を奪い、全を生み出す！　闘争とは人類の本質であり！　破壊であり！　創造である！　我々は、世界を救う！　滅びなど認めない！」

バサッ、という音と共にマントをはためかせ、クライムは謡った。

彼の言葉は真実であり、事実であり、虚偽である。

だが、そんなことは些末な話だ。

ただ、戦争を望む。

彼が謡うのは、それだけなのだから。

「さあ、立ち上がれ！　私は知っている！　諸君たちが勇猛なる勇士であることを！　数多積み重ねられる屍の上に佇むべき、無双たる英雄だと！」

機人たちが、武器を取る。クライムは、宣言した。

「――開戦だ！　地獄を！　煉獄を！」

そうして笑うクライム。そのクライムに、グリスが確認、とばかりに言葉を紡いだ。

「じゃ、宗主。目標確認だよん？」

「最終目標は、地上本部の壊滅やったな？」

「ああ。それでいい。派手にやってくれ」
「首都記念公園は～？」
「目障りだ。粉砕したまえ。欠片も残すな」
「三提督記念館は？」
「鬱陶しい偽善の館だ。吹き飛ばすといい」
「次元同盟記念碑は？」
「砕け。倒せ」
「パシフィックドームは？」
「邪魔だ。解体せよ」
「魔導師は？」
「向かってくるなら殺せ」
「一般市民は？」
「逃げるようなら殺せ。否定するなら殺せ。慈悲など必要ない」

矢継ぎ早の質問に、クライムは全て簡潔に答える。質問者であるグリスは、壮絶な笑みを浮かべた。
そして、クライムは、なに、と言葉を紡ぐ。

「難しく考える必要はない。見敵必殺、サーチ・アンド・デストロイだ。人類のあるべき姿への回帰、その名誉ある犠牲だ。躊躇いはここに置いていきたまえ」

そして。
戦いが、始まる。

「……第一降下部隊が、市街地に到達したようやな」

ホムラが呟く。先鋒を務めるのは、『最強』の侍と『氷姫』の騎士。
それぞれ違う場所に降り立った二人は二百人からなる戦闘機人を引き連れ、戦場を蹂躙する。

「見事だ。さあ、行きたまえ。戦士たちよ。戦場がキミたちを待っている」

戦いが始まる。

理不尽で、残酷な、悲しい戦いが。

◇　◇　◇

旅団構成員にかけられた、緊急召集。

それぞれの隊長の指揮の下、市民の避難や敵軍の対応に当てられる。

しかし、突然の奇襲である以上、すぐに対応できるわけではない。

ならば、どうするか？

――部下を持たぬ隊長が、出ればいい。

旅団には、八神はやてより独自の行動が許される隊長が二人いる。

その二人が、時間を稼ぐ。

「いくよ。ミリアム、リンネ」

「はい」

《はい》

二人が応じ、ファイムは走りながら自身のデバイスを掲げる。

ファイムが手にした、新たなる姿に至るために。

「リンネクロウズ・ナイトメア。セットアップ！」

《Ｙｅｓ，ｓｅｔ　ｕｐ》

ファイムがバリアジャケットを纏う。堕天の翼を纏い、夜天の杖を

手にした姿に。
そして。

「「ユニゾン・イン！！」」

ミリアムとのユニゾン。黒髪が、透き通るような翡翠の色に変わり、その瞳は、夜の輝きを強くする。
堕天使の如き翼を背負いながら、しかし、その衣装は騎士の如く澄んでいる。
『悪』たる堕天使と。
『正義』たる騎士。
相反し、相容れぬそれを纏うその姿は歪であり、しかし、美しい。
それは。あるいは。
『矛盾』という、何よりも人間らしいものを携えているからかもしれなかった。

「……！」

地面を蹴り飛ばし、ファイムは空を駆ける。翼をはためかせ、望むのは百を超える戦闘機人の軍勢。
だが、ここで問題が一つ。

（敵は二手……どうする？）

敵は二手に分かれている。時間稼ぎをするなら、二手共足止めせねば意味がない。
だが生憎と、百単位の敵の塊を二つも同時に足止めするような力を、ファイムは持ち合わせていない。
ならば、どうするか。
その迷いは、すぐに消え去ることになる。

『ファイムさん！』
「あれは……！」
ファイムの目に入ったのは、空を飛行する、『エース・オブ・エース』の姿。
その人物はこちらに視線を向けると、微笑んだ。意図を悟る。
ファイムは頷くと、眼前に集中する。そして。

「フルドライブ！！」
「イクシード・ドライブ！！」

二人の『エース』は、己の体に更なる負担を強要し、そして、力を紡ぐ。

「一点突破！　ウインド――」
「全力全開！　エクセリオン――」

翡翠の光と、桜色の光が空に瞬く。
放たれるは、開戦の合図。

「「バスターッ！！」」

――ズドンッ！！
放たれた砲撃は、狙い違わず敵を飲み込んだ。
しかし。
安堵は、早い。

「――――！」

煌めいたのは、紅の一閃。咄嗟に盾にしたはやてと同型、同名の杖

『シュベルトクロイツ』が軋み、悲鳴を上げる。
伝わる振動で、腕が痺れた。

『ファイムさん！』
《マスター！　『彼女』です！》
「……」

杖を構え直し、ファイムは油断なく前を見据える。
煙の中から、無事にやり過ごしたのであろう戦闘機人たちが次々と降下していく。
無視はできない。しかし、無視するしかない。
何故なら――

「……以前、あなたにはこう言いましたね」

まるで散歩でもするかのような軽い足取りで。
しかし、欠片の油断もない足取りで、その人物は空を歩んできた。

「“殺し合いましょう”――と」

戦装束に身を包み、右手に薙刀を。左手に刀を携えた侍が、こちらを見据える。

「こうして私の眼前に立つということは、構わない、と受け取っても良いということですね？」

口調こそ問いかけであったが、そこに『問いかけ』などという優しさはなかった。
あるのは、ただ、詰問。
何故。

刃のようなその問いかけが、突きつけられる。

「……何故、私の眼前に立ったのです？」

テンリュウは、純粋なる問いかけを、ファイムに叩きつけた。

「あなたが私に勝てるとでもお思いですか？」

「負けると断じて立つ人はいない」

ファイムは言い切った。そして、魔力を纏う。

その姿を見たテンリュウは、あなたは、と言葉を紡いだ。

「あなたまで。あなたまでもが『化け物』になったのですか。何故です、何故」

その言葉は静かなようで、荒々しい。

「私のようになど。私のようになどなってはならなかったのです。人を捨てねばならないような。そうしなければならなかったほど弱かった私などには」

テンリュウは、その瞳に必死ささえ滲ませて、言葉を紡ぐ。

「今ならまだ戻れるはずです。やめなさい。世界の奴隷になど。人を捨てるなど。そんなものは、望むべきではない」

「……」

「私のような怪物は、人間に殺されなければならない。怪物に殺されてはならない」

いつの時代も。

どんな戦いでも。
怪物を倒すのは、人間なのだから。
ファイムは、僕は、と言葉を紡ぐ。

「僕は強くなりたかった。強くありたかった。強くあろうとした。
強さを、生まれる前から望まれていた」

人造魔導師とは、そういう存在だ。
力を望まれ、戦う存在。
ただ、自分は失敗だったのだが。

「力さえ、と何度も叫んだ。世界を呪いさえした。自分の弱さを認め、それでも戦う？　ただ、諦めただけだ」

いや、受け入れた、というべきか。
ファイム・ララウェイは、自身の限界を受け入れた。
だからこそ。
だからこそ、こんな風になっている。
この様に。

「でも、諦めきれなかったんだ。強くなることを。強くあることを。
だから、こうしている」

力を望んだその果てに。
こうして、歪みの極地にきた。
怪物の、領域に。
しかし。

「ここが僕の果てだ。あなたを倒さなければ、僕は大切な人を守れない」

「……そのために、人であることを捨てたというのですか」
「いいえ。捨ててなど、いない」

ファイムは、否定する。
敵であっても。
味方であっても。
彼自身でさえ、認める事実を。
ファイム・ララウェイは、人を捨てたということを。
他ならぬ彼が。
――否定する。

「この右腕と、右足と、右の瞳は人類の刃だ。この身に飲み込んだ力は、人類の叡智だ。纏うのは、人類の盾だ。共に戦うのは、人類の友だ。そして……この身は、人類の夢、その残骸と、人類の夢が紡いだ魔法の果て」

右半身に宿るのは、戦闘機人の手足と瞳。
飲み込んだのは、夢を叶えるロストロギア『ジュエルシード』。
纏うのは、人類が生み出した魔導師の盾、リンネクロウズというデバイス。
共に戦うのは、人類が紡いだ『緑風の紡ぎ手』と呼ばれる、ミリアムという名のユニゾンデバイス。
そして、その肉体は。
人類が夢見た神の真似事にして。
人類が紡ぎ上げた、世界と繋がる魔法の果て。
だから。
だからこそ。

「僕の全ては人の力で構成されている。僕は怪物でも化け物でも異物でもない。僕は、『人間』だ」

その嘘を。
ファイム・ララウェイは、その身に纏う。

「人間を人間たらしめるのは、その心の在り方だ」

ファイムはテンリュウに杖を向け、宣言する。

「あなたは自身を否定した。だけど僕は、僕自身を否定しない。あなたは僕が倒す。……怪物を倒すのは、いつだって人間だから」

テンリュウは、成程、とため息のように呟く。
そして。
あまりにも冷たい目で、ファイムを見据えた。

「ならば問います。あなたの勝機は？　億分の一？　兆分の一？　果たしてどれだけの可能性が？」
「……たとえ無に等しくとも、僕には十分です」

ファイムは、覚悟を決める。

「奇跡を起こすのが、『エース』と呼ばれる僕の義務だ！」

そうして。
絶望が、幕を上げる。
あまりにも深く、無慈悲で、圧倒的なものが。
人が抗ってはいけないものが。
その力を、開放する。

◇　◇　◇

高町なのはの眼前に現れたのは、蒼き騎士だった。
――エリア・カリア。
『氷姫』と呼ばれ、かつての『エース・オブ・エース』と肩を並べたとされる、歴戦の騎士。
言葉はない。なのはは戦おうとデバイスを握る手に力を込める。
だが。

「むっ！」

駆け抜けてきた山吹色の閃光にエリアが反応し、砲撃を障壁で受け止める。
その彼女の背後に、蒼く輝く軌跡が描かれる。
ウイングロード。その上を走るのは、ギンガ・ナカジマ。

「はああっ！」

振り抜かれた拳は、エリアに受け止められる。ギンガは素早く飛び退くと、エリアから距離を取った。
そして、その反対側になのはにとっては後輩である人物が舞い降りる。
陽光纏うその魔導師の名は、ソラ・ウィンガード。

「お前たちは……」

エリアが眉をひそめる。ソラは、高町隊長、と言葉を紡いだ。

「ここは引き受けます。行ってください」

「ソラくん？」
「敵の本丸を落とせば、まあ、敵も止まるでしょう。お願いします」
頭を掻きつつ、ソラは言う。面倒臭そうに。
「わたしが行ったところで、大したことはできませんしね。隊長、行ってください」
ソラはなのはの方を見ない。見れやしない。
目を離せば――死ぬ。
「でも……」
なのはは逡巡する。ソラに任せても良いのかを。
相手が相手。ソラでは荷が重いとは、誰もが思うところだ。相手は『エース・オブ・エース』と並ぶような実力者なのだから。
しかし、ソラはもう一度、行け、と口にする。
「敵の本丸に突っ込んでどうにかできるような人は、あなた以外にいません。……それに、何というか。あの人とは個人的に少しありましてね」
口調は変わらず、不遜。
だが、込められた意志は真実だった。
なのはは、ソラとエリア、そしてギンガを見回す。優しい彼女だからこその迷い。しかしなのはは、それを振り切った。
「……わかった。ソラくん、ギンガ。任せるよ。あと、私の呼び方はなのはさん、ね？」
「――了解」

ソラが応じると同時に、なのはが空を駆け上がる。阻止せんとエリアが動くが、それをギンガが阻んだ。
火花が、空を彩る。

「行かせない！」
「……ふん」

双剣を振るい、エリアはギンガを弾く。なのはが最早追いつけぬ場所まで飛翔し、エリアはそれを確認するように一度だけ視線をそちらに向け、再びソラとギンガを見据えた。

「お前たちが相手か。自身の力量さえ見極めずに、刃を握るな。覚悟さえ定まらぬ未熟者が我が眼前に立つなど、片腹痛いにも程があるぞ。身の程を知れ」
「……覚悟なら、ありますよ」

ソラは、『マジックモード』によって杖の形態を取っている自身のデバイス『ヴィクトリア』をエリアに向けながら、言葉を紡いだ。

「教会で過ごした俺は、あなたの名前を何度も何度も聞いてきた。まあ、それだけですけど」

ヒュンヒュンという音を響かせながら、ソラは杖を回す。
――かつていたという、最強の騎士。
何度も何度も聞いたその人を思い描き、理想にしていた。
その人が管理局からも聖王教会からも離反したと後に聞かされても、数々の武勇伝は色褪せなかった。
ただ。
管理局に入って、あまりにも理不尽な世界を目にして。

最強の騎士でさえ抗えなかったのかと、絶望した。
――それだけの縁だ。
ただ、それだけの。
夢見たものは、権力にさえ勝てないものだったという、脆く儚い夢の終わり。その瞬間、それを、目の当たりにしただけだ。

「勝手に憧れて、勝手に失望したんだ。だから、あなたには関係ない。ただ、何というか。これが俺の仕事なんで」

だから。
今、こうして戦うのは別の理由。

「管理局がどうなろうと知ったことじゃないし。滅びんなら滅びればいいとさえ思うけど。……この街が消えんのは、流石に困るんだよ」
「ソラ……」

ギンガが呟きを漏らす。ソラは、普段の彼が決して見せない苛烈な表情で、言葉を紡いだ。

「戦うんなら勝手にやれよ。他人巻き込むなよ。俺の日常に、何の権利があって干渉してんだよ」

空気が固まる。エリアは、ふん、と言葉を漏らした。

「変革とはそういうものだ。後の時代に英雄と謳われる者は数多の犠牲を築いた存在だ。そのための礎として数多の墓標が建てられるのは世界の道理。……若いな、それすらもわからないか」
「若くて結構。無鉄砲でいられんのは、若い間だけだ」
《Ｄｕｓｔ　ｔｏ　Ｄｕｓｔ》

ヴィクトリアが、魔法を紡ぐ。
ソラの魔力変換資質『水冷』……魔力を水に変える力を用いて生み出される、霧の結界だ。
それは敵を閉じ込める、迷いの霧。
ただの霧ではなく、魔力が込められた霧であるそれは閉じ込められた者の方向感覚を狂わせ、結果、出られなくする。

「ダスト・トゥ・ダスト。霧に帰れ」
「……良いだろう」

直感で出られないと感じたのだろう。エリアは双頭の剣を構えた。
そして、ソラとギンガに問いかける。

「私は先代聖王騎士団筆頭、エリア・カリア。お前たちがただの雑兵であるなら退け。時間の無駄だ」

凛とした声色だった。二人は息を吸い、応じる。

「第１０８魔導旅団第一連隊隊員、ギンガ・ナカジマ。階級は三等陸尉」
「第１０８魔導旅団魔導砲兵第三中隊隊長、及び戦技教導官。階級は三等空尉」

エリアは、そうか、と、二人の名乗りに頷き。そして。
――空を、舞う。

「ならば、相手にとって不足はない！」

◇　◇　◇

地上本部司令室。地上本部における最高指揮官が指揮を執るべきその場所は、今、騒然としていた。

「地上中央情報統制本部、通信が途絶えました……！」

地上本部を現在すべているのは、ルドルフ・ゲインブリッジ中将だ。理事会のメンバーでもある。

ただ、周囲からは常に陰から無能と謗られ続けてきた人物であるが。その男に、いくつもの報告が寄せられる。

「遺失物管理部機動一課、二課、三課、通信が途絶えました！」

「クラナガンＮＴＢ社管制局と通信断絶！　現在首都圏における民間の通信が不通になっています！」

「第一支部連絡がありません！　陸士１０６、１０７部隊通信断絶！」

「首都海上防衛艦隊司令部通信断絶！　首都防衛隊本部情報管制部応答ありません！」

――それは全て、絶望の報告。

ルドルフは、馬鹿な、と言葉を漏らす。

「なんだそれは。戦争でも始まったというのか」

「そうなんでしょうね。戦争が始まったんでしょうよ」

その言葉に、吐き捨てるように応じたのはカグラだった。彼は苛立たしげに、火を点けないタバコを咥える。

「何考えてるかは、知りませんが。知ろうと思いませんが。とにか

く、始まった――」

――バァン！

カグラが言い切ると同時に、指令室の扉が乱暴に開け放たれた。みると、そこには何人もの武装した戦闘機人たち。

「何だ貴様ら！」

「おっと、動かないでもらおうかランバード殿」

叫んだルドルフを無視し、部屋にいた局員のうち数名がカグラに銃を突きつけた。掛け値なしの、質量兵器である銃を。カグラは鬱陶しそうにその銃口を一瞥すると、ふーん、と呟いた。ルドルフが、貴様、と言葉を紡ぐ。

「レイベルン二佐！　き、貴様っ！　どういうことだこれは！」

「やかましい騒ぐな！　見ての通りだ。管理局などもう必要ないのですよ！」

はっはっは、と、レイベルンと呼ばれた男は笑う。

「しかし僥倖だ。まさかあのカグラ・ランバードを捕えることができるとはな。これは、宗主殿もお喜びになるに違いない」

再び響く笑い声。癇に障るそれが響く中、カグラがはっ、と吐き捨てるように言った。

「テメェらは糞みてぇな仁義さえも忘れたようなクソッタレで、質量兵器に頼らなければ何もできねぇようなカスだ。そんな奴らが、この俺を、かつての『エース・オブ・エース』を捕まえるだと？笑える冗談だよ。あの世で二階級特進でもしてな」

「き、貴様っ！」

――ダァンッ！

早打ちだった。一瞬でデバイスを起動したカグラは、問答無用でレイベルンの腕を撃ち抜いた。そこから更に、銃弾を連射する。

「魔導だって人は殺せる。授業料だ。それ持って先に地獄に行ってな」

一瞬だった。

ほんの一瞬で、戦闘機人たちも裏切り者たちも撃ち殺された。カグラは欠片も減っていないタバコを死体に向かって投げ捨てると、ふん、と鼻を鳴らした。

「くだらねぇ。裏切り者にはお似合いだ。……無事ですか、将軍」

「あ、ああ。すまない。助かった」

「俺はあんたが裏切るんじゃねぇかなー、とか思ってたんですけどね」

「……私は無能で臆病者だが、卑怯者ではないよ、カグラ」

グッ、と両手を握り締め、ルドルフは言う。カグラは口笛を吹いた。無能と囁かれていることを知ってか、そうでないかはわからないが、無能であることをこの男は認めた。存外、そういう男は珍しい。将軍に対する認識を改め、カグラは立ち上がる。

「それじゃ、ここから急いで逃げますよ将軍。腹立つ話だが、先手を取られた。ここも攻撃目標でしょうしね」

賛成してくれると思っての提案だった。おっさんの子守は面倒だが、一応上官だ。見捨てるわけにもいかない。

だが、返ってきた返答は予想外のものだった。

「か、カグラ。君は急いで脱出しなさい。き、君には。君には君にしかできない仕事がある。かつての『エース・オブ・エース』たるキミだからこそできることが。わ。私は脱出はできない。逃げることはできない。そ、それだけはできないんだ」

「敵の一団が新たに降下してきます！　数は――四百！」

「敵の規模が連隊規模を超えました！　第１０８魔導旅団のみでは保ちません！」

矢継ぎ早の報告。絶望の報告。それを聞いてなお、将軍は逃げないと言う。

「この状態じゃあここに式能力何ざ残ってねぇ。将軍、あんた死ぬ気か」

「も、もしかしたら……もしかしたら、通信が回復して命令が伝達するかもしれない」

ルドルフは、震える口調でそう言葉を紡いだ。

「どこかの基地が、部隊が、敵を撃退して我々の指示を待っているかもしれない。私はここの指揮者だ。『ここ』が生きている限り、逃げるわけにはいかんだろう」

ルドルフは震えている。しかし、その瞳は強い光を宿していた。

「カグラ。私は無能だ。どうしようもない男だ。君とは違って、私は何かを成せるような人間ではなく、何も成そうとしてこなかった」

いつしか。

誰もが、耳を傾けていた。

「私は、生まれと与えられた仕事でこの地位にいる。どうしてここにいるかがわからないような無能者だ。与えられた仕事だけをこなしてきた。そして『これ』は、私の『仕事』だ」

怯えながら、震えながら、ルドルフはカグラを見上げる。

「私は何も掴もうとしてこなかった。成そうとしてこなかった。……だから、せめて。せめてだ。この仕事は、全うしなければならない、と、思う、ん、だが……」

言葉から自信が消えていく。怖いのだろう。当然だ。
これから彼は、死を迎えるのだから。
どれほど上手く立ち回ろうとも。
それは、真実だから。

「行け、行ってくれカグラ。君ならば、世界を救える」

カグラは、コートを翻した。そして、腰に装備していたものを机の上に置く。
それは……拳銃。
魔導ではなく、人を殺めるためだけの、鋼鉄の力。

「万一ん時のための切り札です。手榴弾も置いていきます。……使うかどうかは、将軍、あんたが決めてくれ」

敬語が消える。
カグラは、初めて目の前の男を対等と見なした。
全く、自分も修行が足りない。

管理局もまだ――捨てたものではないではないか。

「色気はねぇけど、これが餞別だ。……武運を、サー・ルドルフ」

「君もな、カグラ」

笑みを交わし合う。そして、ルドルフは他の局員たちへと視線を向けた。

「さあ、君たちも脱出するんだ。ここには必要最低限の人員がいればいい。……あ、いや」

折角決まっていたのに、またルドルフは怯えたような調子で言葉を紡ぐ。

「も、もういっそ私だけでいいんじゃないかな？　君たちも早く逃げなさいよ」

局員が、動く。

「――もう一度、情報統制本部へ連絡を試みます」

なにを、と、ルドルフは呟いた。カグラは微笑し、他の局員たちも笑い出す。

「「「くっ、くくっ、あははっ！」」」

対してルドルフは、震えながら言葉を紡いだ。

「な、なにがおかしい。なんだ、笑っている暇なんかないぞ。早く逃げるんだ。命令だぞ」

「被害状況を確認し、再整理しろ。隊を組織し、直接連絡を取りに行け。徒歩ででもだ！」
「なっ、なにを言っとるんだ。逃げろ、早く、逃げるんだ！」
ルドルフは言うが、局員たちは従わない。
「首都防衛隊に連絡だ！　生き残っている魔導師たちを集めろ！」
「守備隊を組織しろ！　走れ！」
「出入り口にバリケード構築！　急げ！」
――ダンッ！
ルドルフは立ち上がり、机を叩いた。そうして、怒鳴る。
「なにをしとるんだバカモンっ！　こんなことに付き合う必要はない！」
局員たちは顔を見合わせる。誰もが恐怖で僅かに顔を引き攣らせながら。しかし。
――それでも、笑っていた。
「何を言ってんです、将軍。あなたじゃ、コンソール一つ動かせないでしょ」
「いつも通り座っててくださいよ。『仕事』の邪魔ですから」
それは、彼らの覚悟。
あまりにも尊く、そして、眩いもの。
同時に――無能と謗られ続けてきた男が、手にしたものでもあった。
「……すまん、皆。すまんな」

ルドルフは座る。いつものように。死を迎えると理解していても、それでも。
それが彼の、『仕事』だから。

「……」

カグラは何も言わず、その場を去ろうとする。ここに、カグラの仕事はない。
その背に、ルドルフが言葉を紡いだ。

「カグラ。……私は、未来に何かを紡げたのだろうか」
「繋いださ。俺を通して、あんたの覚悟と決意は未来に繋がる」

ルドルフは、そうか、と頷いた。

「若者に何かを繋げるというのは初めての経験だが……いいものだな。実に、いいものだ」
「だろう？」

だから俺は、教導官なんだ――カグラはそう言い残し、その場を立ち去った。そして、携帯端末を取り出す。

「指示を出す。いいか、これは至上命令だ。一般人の救助を最優先しろ。守ってこその管理局だ。テメェらが磨いてきた力を見せてみやがれ」

そして、カグラは歩き出す。地上の戦力は、奇襲によって壊滅的な打撃を受けた。ただ、八神はやて率いる旅団は無事。そして今、彼らは戦っている。
おそらくこれは、彼らにとって最初で最後の総力戦だ。勝とうが負

けようが、被害は甚大。二度と、今のような形で戦うことはできないだろう。
しかし――それでいい。
管理局は、刃であり、盾である。
人を守るために敵に刃を突き刺し、そして、盾となって死ぬなら、それが本懐だ。

「援軍到着まで、最低でも二時間はかかる。クラナガンは終わりだ。だが……テメェらも終わらせてやる。俺の名に懸けて」

覚悟と決意は、いつだってここにある。
だから、大丈夫。
たとえここが――カグラ・ランバードの夢の終わりだったとしても。

「――覚悟しろよ」

第二十三話　開戦、更なる局面へ（後書き）

戦いの火蓋は切って落とされ、一人の狂人が始めたものは、世界を包みます。
そして。
青年の嘘と選択は、そのまま青年自身に突き刺さる。

はい、第二十三話です。
楽しんで頂けたでしょうか？
山場の始まりです。この戦いは以前、序盤で起こったようなものとは大きく違い、軍隊同士の対決です。
その中でメインキャラたちが戦うわけですが、やはり決して綺麗ではありません。

あともう少しです。
第四部も、完結間近。楽しんで頂ければ幸いです。

感想などを頂けると、嬉しいです。

ちなみに最初の詩は、友人にアドバイスを頂いて書きました。
戦いの前に、と思って書きましたが……如何でしたか？

それでは、次回予告です。

次回予告

戦いの理由は様々。

しかし、結末は同じ。
死。
果てに待つのはそれであることは誰もが理解しているのに、誰もそれを受け入れない。
何故なら。
人は、自身の死を理解できないから。
言葉がぶつかる。
夜と月は、互いの信念を持って相対する。
言葉は、刃だ。
そして。
嘘を抱えた、青年は。

「十二年前なら、良かった。あなたに心臓を抉られても。首を飛ばされても。だけど、ダメだ。僕を殺すのは、僕自身の役目だから」

次回、第二十四話
「世界の選択、決断は」

第二十四話　世界の選択、決断は

戦いが激化する。
意志なき機人たちは歩みを止めることなく、我先にと進軍してくる。
それを押し止めるのは、八神はやて率いる旅団。
そして。
彼女の前には今、一人の男がいる。

『この期に及んで理由なんざ聞く気はあらへんやろな？』

立体映像――ホログラフ。目の前の中空に佇むこの男はしかし、本物ではない。
映し出されている映像だ。
だが、それで十分。
言葉さえ交わせるなら、それで用は果たせるのだから。

「随分な真似してくれるやないか。わたしたちだけやない。一般人まで巻き込むなんて」
『それこそ、聞くほどのことやないやろ。一般人？　甘えんな。そこにおるのは管理局に組する人間。わしらの敵や』
「戦う術を持たへんのにか？」
『関係あらへんな』

ホムラは、肩を竦めて言葉を紡ぐ。

『局員であろうとなかろうと。魔導師であろうとなかろうと。今日この時この瞬間にここにおったらその時点で戦争の当事者や。理由なんてのはそれで十全』
「……とても、元管理局員の台詞とは思えへんな」

はやては、吐き捨てるように言った。
これが、この男のようなものが、管理局の『エース・オブ・エース』だったというのか。
ホムラは、はっ、と吐き捨てる。

『若いな、まだ若い。闘争のルールや。『彼ら』はそのあまりにも弱い自己のカードに全てを賭けた。古来より存在する闘争のルールや。強者が勝って弱者が負ける。戦いなんて、どこまでも単純や』

そしてホムラは、はやてに言い放つ。

『『あなたとわたしは違う』――戦いの動機なんざそれで十分。相容れないから、ぶつかるから、妥協できないから戦うんや。それさえ理解できないんやったら部屋の隅っこで震えとけ。戦争になんざ姿を現すな。……やけど、お前らもわしらも武器をとった。なら、することは一つのはずや』
「……」
『勝てば官軍、なんてよく言うたもんや。真理であり、絶対や。それは』
だから、戦うのだ。
どちらも、譲れないから。

『否定したかったら勝て、八神はやて。戦いはここで終わる』
「……わかった。わたしが、あなたたちを止める」
はやてはコートを翻しながら宣言する。

「正義はわたしたちや。あなたたちのそれは、エゴに過ぎひん」

『……は。欺瞞と知りつつ正義を語るか。実に上等』

ホムラの姿が歪む。

戦の口上は――ここで終わりだ。

『可能性を見せてみろ。わしらが納得できる可能性を』

ホムラの姿が消える。はやては一度大きく息を吐くと、振り返った。

「作戦は続行。第一連隊は引き続き戦線を維持。第二大隊は市民の避難を。砲兵隊は、総員で第一連隊の援護や。威嚇はいらへん。殲滅する気で撃ちなさい」

はやての指示が響き渡る。状況は決して良いとは言えない。

しかし、泣き言は許されない。

背負うものがあり。

戦う理由がある。

ならば、戦うしかないのだ。

「兵団長、飛行隊の準備が整いました」

「流石や。飛行隊は敵本営へ攻撃を。先行している高町隊長を援護しつつ、速やかに敵本営を落としなさい」

「了解！」

一通りの指示を終え、はやては即席の司令室――テントに入る。それと同時に、言葉を紡いだ。

「これで、ええんやろうか？」

「おめぇさんは間違っちゃいねぇ。だが……問題は魔導師連中だ。やっぱり、連携に不安がある」

言葉を紡いだのは、ゲンヤ・ナカジマ。
未だ万全とは程遠いながら、それでも管理局のために戦ってくれている人物だ。

「おっと……悪ぃ。おめぇさんも魔導師だったな」
「いえ。……やはり、魔導師は連携戦ができないのでしょうか？」
「できねぇってわけじゃねぇだろうが、難しいだろうな。魔導師ってのは、どうしたって個人差が出る。一定じゃねぇんだ。横並びじゃねぇ以上、連携は難しいやな」

ゲンヤは言う。そう……それは、今まで何度も議論を交わされ、同時に決着を見せなかったことだ。
魔導師は、個人である。
同じ技量、というのはあり得ず、だからこそ、スタンドプレーが多くなる。
相手は自分に何ができるかわからず、自分も相手が何ができるか、わからないからだ。
故に。
ゲンヤ・ナカジマは感情では質量兵器を認めずとも、彼の理性はそれを認めている。

「だが、否定するんだろう？　だったら、迷ってる場合か？」
「……」
「間違ってるかどうかなんてのは、俺たちが勝手に決めていいこっちゃねぇやな。だが、今、こうして戦えるのは俺たちだけだ。なら――戦うしかない」

ゲンヤは、だから、と言葉を紡いだ。

「背負うってのは、そういうことだ八神。おめぇは今まで、負けなかったことがなかった。死なせたことがなかった。だが、これがリアルだ。人は死ぬ」

先輩として。
参謀として。
老練なる指揮官は、次世代を背負う者へ言葉を紡いだ。

「大切であろうとなかろうと、強くあろうとなかろうとだ。それだけは、何年経っても変わらねぇ真実だ」

背負えと、ゲンヤは言った。

「命を背負え。それがおめぇさんの義務だ。カグラの馬鹿はどうもおめぇさんたちを過保護に見るきらいがあるが。俺ぁそんなつもりはねぇ。おめぇさんはもう、子供じゃねぇだろう？」

――轟音。
空に翡翠の光が瞬き、紅の光に押し潰される。
ゲンヤが、ああ、と呟いた。

「坊主も、無茶をしやがる。……相手が、悪いだろうに」
「……わたし、は」

はやては拳を握り締め、俯く。
だが、涙だけは流さない。

「あの二人には、一人で隊を名乗らせた。……それは、同時にそれだけの憎悪を一心に受けることを意味する」

たった一人で。
向けられる数多の殺意を受け止めなければならない。
それはあまりにも辛く。
――悲しい。

「あの二人にばかり重荷を背負わせて……わたし、地獄に落とされるやろな」
「あの世に、天国なんざありゃしねぇやな」

ゲンヤは、苦笑を浮かべる。

「あの世は現世の写し身だ。この世界のどこに天国がある？　永遠の楽園が？　少なくとも、『ここ』は『地獄』だぞ八神。結局、人は誰しもそこへ堕ちるのさ。地獄へとな。……しかし、それでも俺たちは戦う。何故だ、八神？」

ゲンヤが問いかけてくる。はやては、決まってます、と頷いた。

「大切なものを守るために戦うんです。未来のために」

ゲンヤは、上等だ、と頷いた。
戦いが――激化する。

◇　◇　◇

スバル・ナカジマは、『ストライカー』と呼ばれる魔導師である。
奇跡を起こすとされる、絶対的なまでの信頼を持つ『エース』と並び称される、その人がいればどんな逆境をも覆せるという称号。

故に、彼女は逃げることを許されない。
彼女が退くことは、隊の敗北を意味する。
――たとえ、退く理由が。
自らの同種を『壊す』ことに対する、嫌悪であっても。
それでも、退けない。

「おおおおおおっ！」

迷いを抱きながら、しかし、それでもスバルは拳を振るう。
――ドゴン！！
轟音が響き渡り、戦闘機人の一人が吹き飛ぶ。そのまま後ろの者たちが巻き込まれ、倒れ込む。
このまま押し込む――そう決め、スバルがマッハキャリバーで駆け抜けようとした瞬間、スバルの瞳が『異物』を捉えた。
戦闘機人たる彼女の瞳だからこそ捉えることのできた、違和感。

「――お久しぶりです」

開口一番、言葉と共に無数の弾丸が飛来した。スバルは彼女の俊敏さをもってそこから飛び退き、ビルの凹凸に掴まる。
現れたのは、一人の女性。

「お一人ですか？　スバル・ナカジマ防災士長？」

六機のユニットを携え、立っている女性を、スバルは知っていた。
エレン・ローグ。
本名を、エレン・リストリア。八神はやてを憎悪しながらもそれを隠し通し、そして、最終的に管理局を敵に回した人物。
いや。
最終的に、というのはおかしな話だ。

彼女の目的は、おそらくまだ果たされていない。

「ああ、そういう……人命救助ですか」

不意に、エレンは笑みを浮かべてそう言った。
スバルは、僅かに拳を握る。
エレンは、大丈夫ですよ、と謡うように言った。

「ここに来るまで何人救われたかは知りませんが、お疲れでしょう？　しかし、ご安心ください。この先にあなたの仕事はありませんよ」

テンリュウと似た口調。しかし、彼女とは根本的な部分で違う。
やめろ、と、思った。
それ以上は、口にするなと。
丁寧でありながら、しかし、あまりにも癪に障る口調で、エレンは言った。
それを。

「私たちの通り道には、死体しかありません」

――ドゴンッ！！
返答は拳だった。戦闘機人モード。自身と相手への怒りが、爆発していた。
ビットを二つ重ね合わせて防いだエレンは、笑みを深くする。

「あなたの瞳が要救助者を見つけるのであれば、この子たちの瞳もそれを見つけます。生かしておく意味がないなら、殺すのが道理ですよ」
「……ッ！！」

スバルは飛び退き、距離を取る。もう一度突進しようと試みるが、その眼前に戦闘機人の一団が現れる。まるで、エレンを守るかのように。

「ッ、どけえっ！」

スバルは叫ぶが、聞く相手ではない。魔力を集中させ、魔法を紡ぐ。

「ディバイン――」

――一つ、気付いたことがある。

この戦闘機人たちは、意志も感情もない。文字通りの機械に等しい存在だ。

どのように調整しようと、意識というのは人間をベースにした時点で残るものだ。しかし、彼らにはそれがない。

グリス・エリカラン。

ファイムが口にしていた、敵の要注意人物の一人の名を思い出す。

――人の心を操る。壊す。

どこまで真実なのかはわからないが、それが真実だというのなら。

それは、あまりにも。

救いがない。

『敵の戦闘機人を救う方法は、一つしかありません』

ファイムは、この間の会議で、全員に向かって言葉を紡いでいた。

『彼らを、壊すことです』

納得できることではなかった。しかし、しなければならないことで

もあった。
もし仮に、彼らを捕まえたとしよう。それでーーどうする？
後付けで感情を与える技術などありはしないし、同時に、与えてどうなるという問いがある。
ジェイル・スカリエッティは戦闘機人たちに、兵器として戦力として存在する以上に、『生命の揺らぎ』を求めた。
だからこそ――人として生きることができる。
だが。
彼らはそもそも、『兵器』として、『戦力』としてしか考えられていない。
そんな彼らに感情を与えることは、殺すことよりも酷いことになる場合があると、ファイムは語った。
戦場で、道具であった彼だからこそ。
その言葉に、重みがあった。
兵器には――兵器のまま、死なせてやるのが慈悲であると。

（私たちは、戦うことを選んだ）

言葉の後に、ファイムは嫌なら去ればいいと口にした。しかし、誰も立ち去りはしなかった。
それが……答えだ。
選択の自由を与えられ、選択した以上、受け入れた以上、逃げられる道理はない。
逃げてはならない。
自分たちは、ずっとぬるま湯に浸かっていた。口だけで正義を謡い、その裏で誰がどれだけの涙を流しているか、想像さえもしていなかった。
だけど。
知ったから。
手を汚さずに守れるものなど、本当に僅かだと。

何も失いたくないのなら――奪ってでも、守るしかないと。
だから。
だから、スバルは――

「バスターッ！！」

閃光が駆け抜け、戦闘機人たちを飲み込む。エレンは――上だ！

「掃射」

エレンが短く呟くと、ニ機のビットからガトリング砲が姿を現し、スバルに照準を定めた。
銃弾――殺すための道具であるそれは、いかに戦闘機人であるスバルとてまともに浴びれば致命傷になる。

「ウイング……ロード……ッ！」

質量兵器。それも、普通の犯罪者とは程度が違う、ガトリング砲という武器を使う敵に、僅かに体が震える。
剥き出しの、研ぎ澄まされた殺意の嵐が、身を削る。
だが、空が飛べないスバルは、そこまで駆け上がらなければならない。
蒼き軌跡。
螺旋状に描かれたそれを、スバルは駆け上がっていく。
銃弾によって削られていく道。スバルは、相棒に言葉を紡ぐ。

「マッハキャリバー！」
《ご安心を。私はあなたを運ぶための力です。振り落とされぬよう、ご注意ください。相棒》

速度が上がる。
――圧倒的な速さ。
スバルは、一瞬でエレンの許に辿り着く。

「なっ！？」

エレンは驚愕の表情を作る。そこに、スバルは全力で拳を叩き込んだ。
――ガァン！！
鈍い音が響き、エレンを守ったビットが一機、砕け散る。エレンは、短く舌打ちした。

「インヒュレート・スキル……！」

――ＩＳ・振動破砕。
戦闘機人にのみ許される能力、ＩＳ（インヒュレート・スキル）。
個々によって違うそれだが、スバルが有する能力は、『振動破砕』という強力なそれだ。
その力は対人・対物において凄まじい威力を発揮し、実現する。
エレンの装備をも砕いたのは、その力だ。

「くっ！？」

エレンは距離を取ろうと、腰に装備した装置を動かし、更に空へと駆け上がる。だが、そんな装置では歴然のストライカーからは逃げられない。

「おおおっ！」

一撃。ビットが砕ける。

もう一撃。ビットが砕ける。
更に一撃。ビットが砕け散る。
――あっと言う間に、エレンを守るビットは二つになった。
だが。

「……ッ！？」

スバルの右腕に痛みが走る。『振動破砕』は、普通のＩＳとは大きくリスクが違う。ある意味で『失敗』な能力だ。
戦闘機人に対して、強力な威力を発揮するそれは、戦闘機人であるスバルにさえも反動という形でダメージを強要する。
故に使用回数に制限があり、使えるのは六発が限度。下手をすれば、腕の神経が焼き切れてしまう可能性さえある。
発動は四回。後、二回だけ残っている。
敵のビットは、後二つ。
――さぁて、答えは？

《相棒！》
「ッ！？」

マッハキャリバーの叫びを受け、スバルは後退する。
エレンは、ふん、と鼻を鳴らした。

「あなたたちと今更話をする気はなく、だから私は願います」

ビットのガトリング砲が、スバルに照準を合わせる。

「死んでください」

――ガガガン！！

炸裂する弾丸がウイングロードを抉り、破壊していく。
スバルは、障壁で身を守りつつ新たな道を生み出し、そこを駆け抜ける。
そうして――叫んだ。

「なんのために!?　どうしてこんなことをっ!」
「問答のつもりはないと、言ったはずですが」

炸裂する弾丸。駆け抜けるローラーの音。
あらゆる場所から響く怨嗟の声と、それを掻き消す無常なる轟音。
嗚呼。
ここを地獄と言わず、何を地獄と称するか。
再び、二人が交錯する。
――互いに手札は、残り一枚。
エレンは飛び退きながら、ちっ、と、彼女以外には聞こえない舌打ちを漏らした。

「……私が、魔導師だったら」

彼女にしか通じず、彼女にしか理解できない理由を、エレンは呟く。
かつては未来を嘱望され、しかし、たった一つの理不尽にすべてを奪われた女性。
だから彼女は、質量兵器でその身を覆う。

「おおおっ!」

スバルが迫ってくる。エレンは迎え撃つ。
――極小型電磁砲、準備。
エレンの口元が小さく動いた。ガトリング砲が弾き出され、一発限りの切り札が姿を見せる。

レールガン。音速ををも軽々と超える、暴力の権化。
そして、スバルもまた。

「一撃！！　必倒！！　ディバイン――」

魔導と質量。
相容れぬそれが、衝突する。

「バスターッ！！」
「発射！！」

――――。
あまりの轟音に、一瞬、耳が利かなくなる。相殺、いや、余波で互いにダメージを負っているのだから、総裁というのもおかしな話。

「……ッ！」

粉塵と閃光の中を、スバルはその戦闘機人の瞳でエレンを探す。
――いた！
スバルが、その姿を視認した瞬間。

《相棒！》

マッハキャリバーが声を上げた。スバルの腹部――右の腹に、重い衝撃が走る。スバルは体を仰け反らせるが、なんとかその場に踏み止まった。
――銃弾を一発、撃ち込まれた。
急所ではない。致命傷でもない。痛い。辛い。流れ出る生暖かい血が、不快感を与えてくる。
これが、質量兵器という力がもたらす結果。

優しさも慈悲もなく、ただただ、こちらを殺しにくる。
嫌だ、と、スバルは思った。
こんな思い、誰にもさせたくない――！

「うおおおおおっ！」

かつて、なのはに問われ、答えた想いがある。
相棒と共に、誓ったものがある。
そう、大切なものは。

『この手の魔法は、守るための力。悲しい今を、撃ち抜く力』

なれば。
なればこそ。
あの人に憧れた自分は、自分のままで。

《行きますよ相棒！！》

返事は必要ない。返事などなくとも、意志は伝わる。
――轟音。
エレンを守るビットが消滅し、同時にスバルの右腕にも限界が訪れる。

「とった！」

エレンが叫ぶ。その手に握るのは、小さな拳銃。戦いにはあまりにも頼りなく、人を殺すには十全過ぎるモノ。
その銃口が、スバルに突きつけられる。
だが、スバルもまた、その『左手』に力を隠している。

「リボルバー――」

引き金が引かれる。スバルのこめかみを掠めたそれは、彼女の鉢巻を弾き飛ばす。しかし、その刹那に、彼女の魔法は完成する。

「シュート！！」

叩き込まれる、魔法の弾丸。それは五体を吹き飛ばすことはなく、突き抜ける衝撃によって力を奪う。

それが、魔法。

殺さず制する、不殺の力。

エレンが倒れ込み、スバルは銃弾を浴びた腹部を押さえながら、動かぬ右腕をだらりと下げながら、しかし、立っている。

決着など、こんなものだ。

「……一つだけ、八神はやてに伝えて頂戴」

不意に、仰向けに倒れた状態でエレンは言葉を紡いだ。

「私はあんたを許さない。地獄で、待ってる」

カキン、という、撃鉄を起こす音。スバルが駆け寄ろうとするが、遅い。

「……ああ、でも。少しだけ、本当に少しだけ――」

――楽しかったな。

それは、何に対しての言葉なのか。

戦いか。

歩んできた人生か。

八神はやてを恨んだことか。
それとも――管理局で過ごした日々のことなのか。

「待っ――」

――ダンッ。
あまりにも……無情な結末だった。スバルは、やりきれなさに左の拳を握り締める。
彼女の理由は聞き及んでいる。だが、スバルは普段の彼女がどういう人だったのかを知らない。
理解する暇さえ、なかった。
それでも――こうして、殺し合う。

《あなたはよくやりましたよ、相棒》

気遣いが、心に染みる。マッハキャリバーは、更に続けた。

《文献による知識では、これこそが戦争です。不条理で不合理で残酷で理不尽なこれこそが》

「……うん」

《……何を、呆けているのですか?》

マッハキャリバーは、怒りを灯した言葉を紡ぐ。

《あなたにはまだやれることがある。何度でも言いましょう。まだ私たちは戦えます。『あの人』に比べれば、『彼』に比べれば私たちの傷などかすり傷です。なのに、こんなところで立ち止まるのですか?》

新たな、戦闘機人たちの一団が迫り来る。迎え撃たなければならな

い。

《あなたが折れそうな時、何度だって言いましょう。あなたが教えてくれた私の生まれた理由。憧れる強さ》

マッハキャリバーが、走り出す。

《――嘘にしないでください》

――ドゴンッ！

振り抜かれた左の拳が、先制の一撃を叩き込んだ。

「ごめん。そうだった」

向かい来る敵に対し、構えを取る。

「いくよ、マッハキャリバー！」

《Ａｌｌ，ｒｉｇｈｔ　Ｂａｄｙ！！》

駆け抜ける。

今できることはそれだけだから。

進めるなら――進まなければ、ならないから。

◇　◇　◇

剣戟の音が響き渡る。同時に、竜と竜による衝突の余波が、世界を揺らす。

「おおっ！」
「ああっ！」

ぶつかるのは、二人の若き騎士。
エリオ・モンディアル。
ウィル・ガーデンズ。
互いのデバイスを構え、二人は相対する。

「ふっ！」

エリオが速度を上げる。彼にとっての限界速度。
立ち並ぶビル。その側面を足場に、ある種空戦魔導師よりも自在に空を飛び回る。
フェイトに迫る速度を実現するエリオを相手に、ウィルは補足さえままならない。

（速ぇ……！）

ウィルは内心で舌打ちする。しかも、向こうにはブーストまであるのだ。理不尽この上ない。
まあ、そんなもの、言い訳にさえならないのだが。
――ドッ！！
ギリギリ補足したと感じたが、ズレた。ウィルの腹部をエリオのストラーダが捉え、骨が折れる嫌な音と共に、ウィルは吹き飛ばされる。
着弾。
ビルを抉って倒れ込むウィル。血を吐き出す彼に、エリオは静かに言葉を紡いだ。

「僕たちが正しいかどうかなんてわからない。正直なことを言えば、

信じられなくなってる自分がいることも否定できない」

管理局の在り方。
正義と悪。
何が、誰が正しいのか。
エリオだけでなく、おそらく旅団の者たちは総じてその疑問に捕らわれている。
しかし。

「だけど、キミたちが間違ってるのはわかる」

――ガラッ。
瓦礫を押しのけ、ウィルが姿を現す。その表情は、不快そうに歪んでいた。

「ほざけよ。何が正しいのかもわからねぇくせに」
「わかるよ。少なくとも、キミたちがしていることはただの傲慢だってことぐらいは」

エリオは、言い放つ。

「キミたちの言葉は正論だよ。確かに管理局は完璧じゃないし、間違っていたこともあった。けれど、それを口にするなら、どうして最初から武器を取ったんだ」

互いに武器を向け合い、二人は互いの想いをぶつけ合う。

「力を持つ者の語る正論は、ただの傲慢だ」
「だからなんだよ。正しいならそれでいいだろうが」

ちっ、とウィルは舌打ちする。正論とは、正しい論理だ。何の問題がある？
暗に問いかけたその問いに、エリオは首を左右に振って答えた。

「違う。間違ってる。僕が聞きたいのはそんなことじゃない。僕が聞きたいのは、キミたちはその正論を語るだけのことをしてきたのかだ」

ウィルの表情が引きつった。エリオは、更に言葉を重ねていく。

「できることは、たくさんあったはずなんだ。なのにそれを全部無視して武器をとって他人を傷つけて……そんなのが、正しいわけがないんだ！」
「……うるせぇよ」

ウィルは、最早憎悪さえ抱いた瞳でエリオを睨んだ。

「そんなこたぁわかってんだよ！　だがな、だったらどうすりゃ良かった！？　俺は、そうしなけりゃ守れないんだよ！」
「そんなことはない！　想い一つで、きっかけ一つで変わっていけるんだ！」

ウィルは、ふざけんな、と呟く。

「甘ぇんだよ！　どうにもなんねぇことなんざ、いくらでもあるんだ！」

だからこそ。
ウィルは、戦うのだから。
どうしようもない世界で、それでも、彼は。

「俺が間違ってるってんなら、来いよ。潰してみろよ。倒してみろよ。超えてみろよ！」

ウィルの体に、魔力が集中する。
必殺の力。ウィルのスタイルは、パワーによる一撃必殺。
相手が速かろうと遅かろうと関係ない。
ただ、刹那の一時に敵を討つ。

「ごちゃごちゃと手前勝手な論理をぶつけてくるんじゃねぇよ！止めたいなら！　かかってこいよ管理局！！」

エリオは、静かに首を縦に振る。
――わかった。
エリオの唇が、動く。そして。
刃が――唸る。

「「――――ッ！」」

真っ正面からの激突。互いに、伝わってくる衝撃に眉をひそめる。
痺れる腕。エリオは、強引にそれを持ち上げた。

「サンダー……レイジ！！」

振り下ろされる槍は、地面を穿った。雷を纏う槍。意味を悟ったウィルは、地面を蹴って空に逃げる。
果たして、予測通り。地面がめくれあがり、雷が撒き散らされた。
サンダーレイジ。『雷光』の変換資質を有するエリオが紡ぐ雷を纏ったストラーダを地面に叩き込み、雷を周囲の地面に伝導させて敵を討つ技だ。多人数を相手にする際、かなりの威力を発揮する。

だが、ウィルは間一髪それを回避した。ダメージはない。
――目が合う。
ウィルは空中で、彼は空戦魔導師ではない。自在に動くことなど不可能だ。
しかし。

（肉を切らせて骨を断つ。叩き落としてやる）

確かに自由は利かないが、しかし、そんなものは一撃喰らう覚悟を定めていれば何のことはない。
元より無傷は望めぬ相手。カウンター、もしくは相討ち。それで終わりだ。
だが、エリオは、ウィルの想像の外にある行動を取った。

「ストラーダ!!　フルパワーだ!!」
《Ｊａｂｏｗｌ!!》

魔力の爆発。それにより、捲れ上がっていた地面が瓦礫となり、宙を舞う。
――マズい。
ウィルは、反射的に身を竦めた。
陸戦魔導師は空を飛べない。だが、地上における速さは、空戦魔導師より遥かに上だ。
足場さえあれば――陸戦魔導師は、空戦魔導師よりも速く、自由に動き回る。
そして、今。
無数に瓦礫という名の『足場』が舞う空は、最早空ではなく、地上。
――陸戦ＡＡランク魔導師、エリオ・モンディアルの領域！

「くっ！」

しかし、ウィルとて陸戦魔導師だ。条件は同じ。
だが。
まるで狙ったかのように、いや、狙ったのだろう。ウィルの周囲にだけ、瓦礫がなかった。

「……ちくしょう」

ウィルが呟くと同時に、エリオが動き出す。
地面を蹴り、空を駆け巡る。
それは、圧倒的な速さで。
赤髪の少年の軌跡は、実に、美しかった。

「ライトニング・インパルス！！」

駆け抜けながら、エリオはすれ違いざまにウィルに一撃を叩き込んでいく。カウンターなど、合わせるタイミングがわからない。
――ガシャ…ン……！
ウィルの手に握られていたデバイス『アルガンツァ』が折れ、砕ける。
それは、彼の心が折れた証。

「おおおっ！」

あまりにも速い速度は、自身にまでダメージを強要する。エリオのバリアジャケットは、所々が破けていた。
しかし。
勝者は、彼。
右腕に紫電を纏い、空より飛来する赤き少年だ。

「……くそっ」

ウィルの、諦めと共に。

拳が、彼を討つ。

「紫電！！　一閃！！」

◇　◇　◇

最早その場所は、爆心地のようであった。

ビルは薙ぎ倒され、地面は捲れ上がり、道路は道路としての機能を果たしていない。

その爆心地の中心に立つ女性――テンリュウ・シンドウは、酷く冷たい瞳で言葉を紡いだ。

「五体を吹き飛ばしたつもりでしたが。存外、持ちこたえますね」

その視線の先にいるのは、瓦礫に背を預けて座り込んでいるファイム・ララウェイだ。

「しかし、ここがあなたの限界、そして、境界です。同じ次元に立とうと、そもそもあなたと私では存在始まりが違う」

厳しい言葉。しかし、それは真実だ。

片や、その他大勢の一人が縋りつくようにして辿り着いた結果。

片や、最強となることを願われ、そうなるべくして研ぎ澄まされた存在。

次元が違うというのは、こういうことを言うのだろう。

「……まだ、立つのですか」

しかし――しかし、だ。

それは絶望の理由になっても、挫折の理由になっても。

――諦める理由には、ならない。

「リンネ！！　ミリアム！！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！！》

『はいっ！！』

二人の相棒が応じてくれる。堕天の翼――三対のうち、四つをもぎ取られたそれをはためかせ、ファイムは前を見る。

足が震える。恐怖ではなく、純粋なダメージでだ。

しかし。

こんなのは――いつものこと。

この様は、普段と何も変わらない。

「あなたは」

ファイムの瞳を見据え、より一層冷淡な表情で、テンリュウは言葉を紡いだ。

「あなたは愚者ではない。賢者です。自らの立ち入るべき領域を理解している。だからわかるはずです。――ここは、あなたの踏み込んで良い領域ではありません」

断言。テンリュウは、更に続ける。

「ここは、天才たちの、怪物たちの領域です。天才はいます。怪物

も。残酷なようですが、人はそもそもから平等ではない」

あなたは、場違いだ――テンリュウは、そう言い切った。
ファイムは、本当に、本当に僅かだけ苦笑する。
――本当に、この人は。
優しいのだろう。甘いのだろう。
言葉で――折ろうとしてくる。
しかし。

「だから、なんだ」

ファイムは、『そんなこと』で折れはしない。
才能がないことも。
力が足りないことも。
すでにもう、理解していたから。

「止まれないんだ。ここまで来たんだ。ないものねだりをする気はない。御託はいい。ここはどこだ？」
《Ｊａｃｋｅｔ　ｐｕｒｇｅ》
右腕のバリアジャケットが弾け飛び、機械の腕が露わになる。

「あなたと僕は敵同士で、ここは血が流れ、死体が転がる戦場。砲撃の音と阿鼻叫喚が響き渡る、この世の煉獄。『あなたと私は違う』――さあ、殺し合いだ」

精一杯の虚勢。勝てるとは思えないし、そうそう長く戦えるとも思えない。
しかし、だ。
少しでもここでテンリュウを足止めできれば、それだけで味方の損

害は減らせる。以前、『海鳴』で資料を見つけ、調べることになったワード。

――『唯一人からなる無敵の軍勢』。

『最強』たるテンリュウ・シンドウは、個人ではない。少なくとも伝承では、たった一人で一国の軍隊を撤退させることさえ平然とやってのけている。

人間ではなく。

怪物ではなく。

化け物とさえ呼べない。

個人の形をした、軍勢。

それが――調べていくうちにファイムが抱いた感想だった。

テンリュウは、成程、と微笑を浮かべる。

「やはり、人間は素晴らしい。実に、素晴らしい」

微笑は一瞬。彼女の表情は、すぐに戦士のそれへと変わる。

「では、その首、貰い受けましょう。何を愚かなことを口にしていたのか。全身全霊を持って、わが刃にて沈めること。それこそが礼儀だというのに」

凄まじい威圧感。ファイムは拳を握り締め、負けじと魔力を紡ぎ上げる。

「ミリアム！」

『はい！』

ユニゾン状態の相棒に声をかける。そうして、左拳を突き出した。

「「ウインドバスター！！」」

《Ｗｉｎｄ　Ｂｕｓｔｅｒ！！》

紡がれる、風を纏った閃光。それはテンリュウに直撃するが、その薙刀によって打ち払われる。造作もなく。

その結果に内心で舌打ちしながら、ファイムは動く。ミリアムとのユニゾンによって得られる加護は、実に単純なものだ。

――強化。

風を纏う魔法の威力が、飛躍的に上昇するのだ。それは、ミリアムを示す名である『緑風の紡ぎ手』という言葉に起因する。

『緑風』とは、古代ベルカにおいて『暴風』を意味する。謂れは、暴風によって自然が巻き込まれ、緑色の暴力となったことからくるらしい。

同じ『風』であっても、リィンフォースとは対極にある。

頼りになる――相棒だ。

「このような力で――」

テンリュウが呟くが、それは途中で途切れる。彼女の視界に映るのは、張り巡らされた翡翠の光を纏うワイヤー。

――三次元型封印結界。

かつては『緑風』さえも数分の間、完全に行動を奪われた、古代魔法の模倣。

通常ならば、隙が生まれるはずの攻撃。だが。

「いい魔法です。しかし、足りません。これでは、足りない」

薙刀の形状をしたデバイス『桜花』を地面に突き刺し、テンリュウは『血桜』を手に取る。普段、左手で抜いているそれを、右腕で。

「夢魔龍閃・百花繚乱」

――――。

音が消えた。ファイムの目に映ったのは、紅の閃光がいくつか走った、ような気がしただけ。実際は、数十を数える剣戟の軌跡がテンリュウの周囲を蹂躙していた。

近くにいれば――間違いなく、五体を切り刻まれていた。

結界を構築していたワイヤーは千切れ去り、結界は砕け散る。一瞬の拘束さえ許されなかった。

しかも、テンリュウの技のあまりの威力に、地面が砕け、周囲を瓦礫が舞っている。

どれだけの差が、あるというのか。

《Ｗｉｎｄ　Ｍｏｖｅ》

しかし、だからといって止まるわけにもいかない。ファイムは空中に浮かぶ無数の足場を利用し、縦横無尽に空を駆け回る。

それは奇しくも、エリオ・モンディアルという少年騎士が使った戦法と同じものだった。

もっとも――

「成程、情報にありましたね。『地上本部のエース』は、魔導師としての基礎を全て習得した凡才の極致にあると」

ファイム・ララウェイは、凡人である。

自身の限界を理解しているし、できることに限りがあることも重々承知している。だからこそ、ファイムは自らが習得できる全てに手を出し、一定以上の力を手にした。

空戦魔導師でありながら、陸戦魔導師の戦い方を習得し。

ミッド式の魔導師でありながら、近代ベルカ式を学んだ。

そうして――古代魔法にまで手を出した。

かつては、管理局のために。
今は――たった一人の、誰よりも大切な人のために。

「確かに、努力したのでしょう。研鑽を積んできたのでしょう。血が滲むほどに。血反吐を吐くほどに。それほどの重みが、あなたの拳には宿っている」

加速。加速。加速。
体が軋むほどの速度まで到達し、ファイムはテンリュウに迫る。狙いは、テンリュウの背後。それも、首。どれだけ鍛えようと、弱点である場所だ。
――されど。
テンリュウが、呟いた瞬間。

「――――」

ファイムの腹部に、テンリュウの回し蹴りが叩き込まれた。ファイムは吹き飛び、血を吐き出す。テンリュウは、静かに口にした。

「戦いとは、人生の競い合いです。それまでの過去が勝敗を決める。……あなたの場合は、そこに訪れるはずだった未来を足すことで、更なる力を望んでいる。成程、間違ってはいないでしょうね。それならば、あなたとは次元を異にする天才たちとも渡り合えるでしょう」

テンリュウは、謡うように言葉を紡ぐ。

「しかし、私は人ではない。人であった頃の名と過去は確かにありますが、今更そんなものに意味はない。私の膨大な過去は、『神道天龍』という存在そのもの。勝てるわけがないのですよ。……さて、

この戦も各所で決着を見せ始めている様子。そろそろ、死んでもらえますか」

テンリュウが血桜を抜き、切っ先をこちらに向ける。立とうとするが――立てない。

地面を蹴る音。死が、迫ってくる。

轟音。そして、沈黙。

ファイムの腹部に――深々と、血桜が突き刺さっていた。

「『概念』に成ったところで、死なないわけではありません」

刀から手を離し、テンリュウは言う。

「首を落とせば死にますし、心臓を潰されても死にます。ましてあなたは、失われた秘術で強引に『概念』となった存在。殺さば、死にます。元々、死を誤魔化すようにしてそこに至ったようですしね」

むしろ、不安定な分死にやすい――テンリュウは、そう言った。

嗚呼、と、ファイムは呟く。

――世界が、閉じる。

痛みはもう感じていない。終わりが近づいてきている。手招きしている。地獄が、自分を呼んでいる。

ここが、終着点。

限界点。

見えていた終わりが――ここに集約する。

『ファイムさんっ！！』

《マスターッ！！》

声が聞こえる。酷く響く声が。

これはなんだろう、何なのだろう。
嗚呼。
嗚呼。
嗚呼……そうだった。

『ファイムくん！！』

幻聴。大切な人の声。
けれど。
その人の声は、涙に濡れていた。
嫌だな、と思う。
それは――嫌だ。
あの人には、笑っていて欲しいから。

……ズル……ッ……

生理的に思わず嫌悪感を抱いてしまうような音が響き渡った。刀を抜き去り、ファイムは立ち上がる。激痛が、今更襲ってきた。溢れ出る血が、地面を濡らす。

「十二年前なら、良かった。あなたに心臓を抉られても。首を飛ばされても。だけど、ダメだ。僕を殺すのは、僕自身の役目だから」

何もなかったあの時なら。
一度死んだ、あの日なら。
だけど。
今は、違う。
守りたいものがあって。
成し遂げたい、ものがある。
テンリュウは、どこか悲しげな表情を浮かべた。ファイムは、拳を

握る。

「諦めないために、こうなったんだ。この様に、なったんだ。泣きたくないから、涙を消すために怪物になったんだ。化け物になったんだ。成って、果てるために」

テンリュウが駆ける。瞬間、紅の刃が彼女を襲った。

「――――ッ！」

彼女にしては珍しく、不意を衝かれたのだろう。それでも『血桜』を回収しているのは流石だが。

ファイムは舌打ち。彼の足下にできた血溜りから、何本もの血で形成された槍が突き出していた。

――禁忌の魔法、ブラッディ・ランス。

戦争が生んだ、魔力を一切使用せず、自身の血を媒介に刃を形成するという、己の命を平然と縮めるような魔法。魔法の秘密を内包する、危険な力。

「そんなものまで……」

テンリュウは、驚愕の表情を作る。そして、気付いた。

これを使うということは、ファイムは『知っている』のだということに。

「……成程、それが覚悟だというのなら。良いでしょう」

テンリュウは呟く。ファイムは、内心で自身を鼓舞した。

――さあ、ここからが正念場だ。

どこまで、耐えられるか。

勝負。

◇　◇　◇

カグラは、駆けていた。彼が愛用する車を運転し、駆け抜けていた。目指す場所は決まっている。すでに、応急で打てる手はすべて打った。だが、この状況を覆すにはまだ打たねばならない手はいくつもある。

幸いにも、本当に幸いにも、一般市民は予測よりも被害が少ない。それでも市民のうち、二割以上は行方不明か死亡しているのだが。避難にはまだまだ時間がかかる。ならば、すべきことは限られている。

……ザザッ……ザッ……

無線から、無機質な音が響いてきた。カグラは、唇を噛み締める。管理局地上本部の司令部は、街の中心部にある。最奥に聳える地上本部にではなく、だ。そこにある理由は、管理局は市民の盾であるということを示すためである。

そしてそこは、すでに呑み込まれている。

『諸君。私は、本部のルドルフ中将である。この通信が通じているかはわからない。だが、通じていると信じて、誰かに届いていると信じて送信する』

ギリッ、という音が車内に響いた。カグラの歯軋りの音だ。

『もうすぐここは陥落する。狂気が、すぐそこまで迫っている。故

に、この通信を聞く者たちに、最後の命令を送る』

無能な人だった。憤りを覚えたことは、一度や二度ではなかった。

『抵抗し、守り切れ。希望はある』

だが、あの人は。

男の中の――男だった。

『さようなら。君たちに栄光を。祝福を。――光あれ』

爆発音。それも途中で途切れ、通信が途絶える。

聞こえるのは、ノイズのみ。

「……ざけやがって！」

カグラが叫ぶ。瞬間、車の周囲で爆発が起こった。ロケットランチャーだ。戦闘機人たちに捕捉された。

車が制御を失い、瓦礫に突っ込む。ひしゃげた車。戦闘機人たちが駆け寄るが、車に触れようとした瞬間、二十人近くいた戦闘機人のうちの一人が、頭を吹き飛ばされた。それにより、動きが止まる。

「汚ぇ手で俺の愛車に触れんじゃねぇよガキども」

戦闘機人たちが、姿を現したカグラを取り囲む。その瞳には、殺意も興味もない。

「来いよ、化け物ども」

カグラは自身のデバイス『ヘルダスト』を構え、宣言する。

「人間を人間たらしめんのは、その意志だ。あの馬鹿を見てると、酷くそう思う。テメェらの親玉たちより、あいつのほうがよっぽど人間だよ。さあ、来いよ化け物ども。戦ってやる」

カグラの言葉。戦闘機人たちは動かない。

そこへ。

「――――ははははははははははははははっ！」

甲高い交渉が響き渡った。直後、凄まじい質量が落ちた轟音が響き渡る。

禿頭の、鎧を纏った男。

狂気を纏い、しかし理性をも纏うそいつが、笑っていた。

「流石だ！　流石だぞ隊長！　やはり素晴らしい！　そのような体で！　衰えた肉体で！　必死の戦場で戦ってやる！？　間違いない！　やはり俺様の直感は間違ってはいなかった！　そうだやはりそうなのだ！」

戦闘機人たちが、一歩、退く。意思も感情もないはずの彼らが。

まるで――怯えるように。

「貴様が、お前が、お前たちこそが！　我が怨敵！　我が宿敵！　打ち倒すのは俺様だ！　俺様のものだ！　殺していいのは俺様だけだ！　誰にも渡さん！　誰にもだ！」

カグラは煙草を咥える。そうして、ああ、と頷いた。

「俺も、テメェとはいずれ殺し合うことになるとは思ってた。テメェが管理局にいた頃から――いや、テメェと初めて会った日からだ。テメェは違う。あまりにも、違い過ぎる」

人から逸脱した者は、どうしようもなく歪んでいく。
ファイムもいずれ、そうなっていくだろう。
テンリュウは、もうすでに歪んでしまっている。
だが――この男は。
初めから、歪んでいる。

「ならば、殺し合うは必然！」

リヴァイアス・バルトマカリ。
異端の魔導師は、高々と宣言する。カグラは、ふん、と鼻を鳴らした。

「……どけっつっても、聞かねぇんだろどうせよ」
「然り！　待ち望んだ宿敵だ！　貴様の翼は、俺様が叩き折る！」
「翼なんざとっくに折れてるんだがな。まあ、いいか。……俺にも用事があるんだよ。ちゃちゃっと済ませる。異存はねぇな？」
「一撃のもとに敵を粉砕するがベルカの神髄なり。カグラ・ランバードよ。貴様とて、ベルカを学んだ身であろう。それが愚問とわからんか？」
「それもそうだ」

二人は向かい合う。その最中、時に、とリヴァイアスが言葉を紡いだ。

「隊長よ。敢えてそう呼ぼう。あの場所には、貴様の宿命が待って

いるぞ」

なんだ、と問う暇もなかった。

――激突。

第二十四話　世界の選択、決断は（後書き）

ところどころで決着が着いていく中、人であることを捨てた二人の戦いは更に激化していく。
勝者であっても、敗者であっても、苦い思いは打ち消せない。
故に――人は、更なる血を望む。

はい、二十四話です。楽しんで頂けましたか？
相変わらず暗いです。シリアスです。勝利しても、少しも気分がよくなりません。
そして……蛇足とわかっていますが、今回、命を落とした彼女について少しだけ。
彼女は、本当に普通の人間です。偶然で奪われ、それに怒っていただけの。その果てにあのような形で管理局を裏切り、そして、命を落とすことになりました。理解などできないかもしれませんし、少しも報われなかったかもしれません。しかし、それこそが『現実』なのではないかと私は思います。
ただ、最後に彼女が呟いたあの一言で、救われていたと信じたい。

感想、ご意見など頂けるとありがたいです。
あと、少し全体の手直しをしたいと思います。なので、更新が遅れるかもしれません。
本当にすみません。

では、次回予告です。

次回予告

隠されていたものが浮き彫りになる。
戦いが唐突に途切れる。
怒りと憎悪と戸惑い。
圧倒的な暴力の矛先は、一人の狂気。
そして――世界。
覆せない事実を突きつけられた時、どうするのか。

「忘れるわけ、ない。それが大切なら、絶対に」

次回、第二十五話
「仮面は偽るもの」

第二十五話　仮面は偽るもの

高町なのはは、想像外の敵に苦戦していた。
名を、ロードといったか。仮面を着けた正体不明の男は、今まで彼女が戦った中では間違いなく最強クラスの強さを有していた。
フェイトのような速さ。
シグナムのような強力な一撃。
ヴィータのような鉄壁の守り。
はやてのような広域魔法。
そして――自分のような、砲撃魔法。

「……」

ロードは無言のまま、身を捻る。そして、その捻れを解放。
――轟速。
フェイトのそれと同等、あるいは上回るのではないかという速度で、ロードが迫ってくる。なのははレイジングハートを構え、迎え撃つ。
ドォン！！
シールドで防いだそれは、圧倒的な威力を有していた。なのはの腕が、衝撃で軋みを上げる。

「……ッ！」
《Ｂｉｎｄ》

だが、その代わりに捕らえることができた。ロードの拳を、カウンターの要領で絡め取る。
高町なのはの近接殺し。必殺の一撃が、紡がれる。

「全力！！　全開！！」

《Ｓｔｒｉｋｅ　Ｓｔａｒｓ！！》

放たれる必中の一撃。ロードを飲み込んだその一撃は、地面を抉る。
薬莢を排出するレイジングハート。そして。

「足りないかな？」
《おそらくは》

なのはの言葉に、レイジングハートが応じる。
刹那。
煙を引き裂くように、ロードがこちらに向かってきた。なのはは、大きく空へと飛び上がり、距離をとる。

「アクセルッ……」
《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》
「シューターッ！！」

放たれるは、５０を数えるシューターの雨。文字通り雨の如く降り注ぐそれを、ロードは紙一重で避けていく。
世界最高クラスの魔導師戦闘。それは、文字通り紙一重の戦いになる。
そして。
数発、その身に浴びながら、ロードは嵐を突破。なのはに迫る。
――紡がれたのは、二つの軌跡。
あまりの速さに、二人の動きはその軌跡でしか追うことが許されない。
そして、その衝突の果てに。
二人は、互いにゼロ距離から砲撃を放つ。
轟音。
オーバーＳランク同士の衝突が、大気を揺らす。

「「……ッ」」

二人は同時にダメージによって動きを止め、そして、僅かにロードの方が動き出すのが早かった。

ロードの拳が、なのはに迫る。

――瞬間。

「ウィンデルシャフト！！」

叫びと共に、騎士が割り込んできた。ロードが、弾き飛ばされる。

トンファー型のデバイス『ウィンデルシャフト』を携える、紫色の髪の女性。

シャッハ・ヌエラ。

聖王教会のシスターであり、その腕はシグナムと並び称される程の人物だ。

「ご無事ですか！？」

「シャッハさん？」

なのはが驚きの声を上げる。シャッハは、はい、と頷いた。

「我ら聖王教会も、加勢に参りました。援護します」

油断なく得物を構えながら、シャッハは言う。

ただ――

「……高町教導官、何者ですか奴は？」

「……わかりません」

なのはは首を振る。シャッハの一撃を不意打ちのように受けても大したダメージを負った様子がない。
ロード。
本当に、何者か。
この底知れなさ、まるであの『最強』のようだ。
シャッハは一度息を吸い込むと、言葉を紡いだ。

「ランバード殿の指示により、盛り返しが始まっています。あとは、あの艦を沈めるのみ」

シャッハが視線で示すのは、敵の本拠地たる次元航行艦。
確かに、あれさえ沈めれば一定の終息は見せ始めるだろう。
しかし、その前に目の前の男をどうにかしなければならない。
そうしなければ、何も果たせない。

「……」

視線の交錯は一瞬。二人は、互いに逆方向に動き出す。
シャッハは陸戦魔導師である。今も、魔法陣を足場にしている。
故に、高町なのはが無数の魔法陣を作り出し、足場を用意する。
戦場を、騎士が駆け抜ける。
ファイムやエリオがそうであったように、陸戦魔導師の行き着く先は、いつだって一つである。
ロードはシャッハを迎え撃つ。的確に受け、受け流していく。
そして。
瞬きの刹那の攻防は、ロードに軍配が上がる。

「――――」

シャッハの表情が驚愕に彩られる。カウンター。この速さをものと

もせず、ロードはそれをなそうとしている。
そして、その拳がシャッハを捉える瞬間。

「エクセリオンバスターA．C．S！！」

なのはが、ロードに向かって突進を敢行していた。下手をすればシャッハをも巻き込む攻撃に、ロードの反応が遅れる。
――直撃。
魔力の刃は、咄嗟にロードが突き出した右手に突き刺さり、貫いている。
そしてなのはは、一瞬の躊躇いもなく魔法を紡ぐ。

「ドライブ！！」
《Ｙｅｓ，ｄｒｉｖｅ！！》

放たれた砲撃は、ロードを飲み込んだ。
そして、二人はその場から離れる。

「ご無事ですか！？」
「すみません、ありがとうございます」

肩で息をしながら、なのはの言葉にシャッハが応じる。手応えはあった。それなりのダメージは入ったはずだ。
――煙が、晴れる。

「……」

ロードは、負傷していた。だらりと下げた右腕からは血が滴っており、深いダメージが入ってるのは明白だった。
しかし、それより何より。

――その仮面が剥がれ落ち、その顔が露わになっていた。
端正な顔立ち。美形、と称するべき顔つき。鋭い瞳は他者を射抜く、冷たい光を宿している。

「……」

なのはとシャッハは互いにデバイスを構え直す。顔が見えたからといって、彼女たちがすることは変わらない。
――チリッ。
不意に、肌が泡立つような感覚に襲われた。男の瞳が、更に鋭くなる。
来るか――二人が身構えた瞬間。

「はい、ストップだよん♪」

声が響いた。二人は弾かれたように顔を上げる。
上空より――一人の少年が降りてくるところだった。
グリス・エリカラン。
狂気の具現たる、最悪の魔導師。

「いやいや、想定外想定外♪　まさか死んでる間にこんなことになってるなんてね～♪」

キャハハ、とグリスは笑いながら、ロードに歩み寄る。

「死んでもボクは生き返るから別にいいけど。やっぱりあれだね。すぐに対応できないのは問題だね～？」

グリスが歩み寄ると、ロードは構えを解いた。目を閉じる。
そのままグリスは振り返ると、笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「さて、退くよ？　怖い怖いお侍さんが来ないうちに。……ああ、いや、手遅れか」

グリスの表情から笑みが消え、同時に、紅の閃光が駆け抜けた。
現れるのは――『最強』の存在。

事態は、より混沌へと堕ちていく。

◇　◇　◇

蒼い煌めきが、ギンガの体を切り裂いた。
その体は力を失い、倒れ込む。ウイングロードから足を踏み外し、地上へ落下していく。

「……」

そこへエリアはとどめの一撃を叩き込もうとしたが、それはもう一人の相手によって止められた。
ソラ・ウィンガードは、死神の鎌のような形態――『サイスモード』のヴィクトリアを振り抜く。エリアは難なく受け止め、後退した。

「……はっ……はっ……」

ソラの息は荒い。対し、エリアは息一つ乱していない。
それが、二人の状況を如実に示していた。

「相棒が墜ちた。お前はもう、独りきりだ。まさか勝てるとは思っていまい。諦めろ」

エリアは、静かに言い捨てる。ソラは、ふん、と鼻を鳴らした。

「そういうわけにもいかねーんだよ。一応、仕事でやってんだ。……いや、そんな御託はどうでもいいか」

《Ｂｌａｄｅ　Ｍｏｄｅ》

ヴィクトリアが大剣へと形状を変える。ソラは、正直、と言葉を紡いだ。

「戦うのは嫌いだ。痛いし、しんどいし。手ェ抜けんなら抜くさ。死にたかねぇけど、別に死んでもいいしさ」

死にたい、とは思わないが。

別に、死んでどうというわけでもない。

「でもあれだ。負けるにしても何にしても、責務は果たさなきゃなんねーだろ。ま、それに。理由もできたしさ」

口調は不遜。しかし、熱い想いは真実だった。

忘れたと思っていた。こんなのは。

納得いかない――なんてのは。

ギンガがやられたことが、許せないなどという気持ちは。

「敵討ちとか、正直縁遠い言葉だと思ってたけど。……いやー、わからんもんですね。わたしはこれを、『あり』だと思ってます」

口調が変わる。何かを感じたのか、エリアは剣を構え直した。

「……てなわけで。その首、わたしに譲っていただけません――」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

ソラの姿が消える。高速移動。一瞬で、エリアの前にたどり着く。

「――か？」

笑顔。エリアは片方の剣を防御に回すと、向かってくるソラに向かって剣を突き出した。しかし、それは虚空を裂く。

――幻術。

エリアがその答えに辿り着くと同時に、その背後にソラが現れる。

そして。

「紫電！！　一閃！！」

轟音。

騎士たちの奥義を、ソラは放つ。微かな、笑い声が聞こえた。

「……その技で私に挑んだ愚行、地獄で後悔するといい」

双剣が煌めく。ソラは大きく後退。間一髪で避ける。

そして。

「ヴィクトリア！　フルドライブ！」

《Ｙｅｓ，Ｍｏｄｅ　Ｂｌａｄｅ　Ｍａｓｔｅｒ！！》

姿が変わる。上半身の装甲を限りなく薄くし、二本の刃をその手に握る。

かつて憧れた、最強の騎士。
それを目指して辿り着いた、あまりにも空虚な姿。

「ここで決める！　一撃必殺！！」

長引けば不利になっていくことは必至だ。故に、ソラは最後の一撃をその手で振るう。
対し、エリアは僅かに微笑。
――二人が、衝突する。

「我流極星、流れ星！！」
「氷姫！！　轟閃！！」

轟音。
大気が揺れ、光が瞬く。ソラが展開した霧の結界が、吹き飛ぶ。
果たして。勝者は。

「――我が刃の真似事か。なるほど、猿真似にしては中々だ。褒めてやろう」

エリアが、静かに口にする。ヴィクトリアは砕け散り、ソラの体が傾いた。その体には、大きくバツを描いたような傷が刻まれ、血が溢れ出している。
落ちていこうと体を傾かせるソラ。その体を、エリアは胸ぐらを掴んで止めた。
クリスティナを鞘に納め、エリアは自身の変換資質を用いて氷の剣を二本、生み出す。

「だが、浅慮だった。その程度の実力で私の眼前に立ったこと、後悔しろ。貴様は墓標だ。貴様の死をもって、管理局に知らしめてや

ろう」

エリアはソラを投げ捨てる。ビルの壁面に直撃。意識がないソラは、乾いた呻き声と共に血を吐き出す。

そして、その体が落ちる前に。

――ズンッ。

氷の剣が、ソラの掌を貫いた。二本の剣が、正確に。

まるで。

磔にされた罪人のような姿になるソラ。エリアは、そんなソラに背を向けた。

「足りぬ力で敵と戦うことは、愚の骨頂だ。管理局も目を覚ますべきだろう。貴様らはもう、誰も守ることはできないのだとな」

そうして、踵を返して進もうとしたエリアの眉が、跳ね上がる。

これは、この、気配は。

「……テンリュウの、魔力？　なんだこれは。こんなもの、私は知らんぞ」

まるで世界そのものを焼き尽くしかねない勢いで唸る魔力の気配。

見上げれば、ソラが唸りをあげている。

――なんだ、これは。

エリアは呟くと、体を一度震わせ、空へと駆け上がった。

戦いが――終わる。

◇　◇　◇

理不尽だなぁ、と、ファイムは呟いた。
力の差があること。
勝てないこと。
勝てるはずがないこと。
その全てを理解し、納得し、戦場に立っている。
それでも。
ここまでなのか、とは思わずにはいられない。

「……砲撃が二つ。斬撃が二十。刺突が十二に、打撃が十五。今、数分の間にあなたが受けた傷です。まだ意識があるのですか？」

その声色は。
憐れみさえ、宿していた。
ファイム・ララウェイは、決して強い魔導師ではない。一般水準より上というだけで、『エース』と呼ばれる魔導師の中では最弱の立場にある。
しかし、それでも彼が戦ってこれたのは、その能力故にだ。
いかなる状況であっても、相手と自分の力量を正確に見極め、的確な手を打つクレバーな思考。時には不意を衝き、卑怯と謗られることさえもやろうとする覚悟。
それが、彼に勝利をもたらしてきた。
しかし。
目の前の相手は、そんなファイムの全てを否定する。
――届かない。
言葉にしてしまえば、それだけのこと。
何をしようと。
どうあろうと。
ファイム・ララウェイは、彼女には届かない。

「結局のところ……理由など、関係ないのです。戦いは、単純」

テンリュウは、ふぅ、と息を吐き出した。

「強い者が勝ち、弱い者が負ける。ただ……その全てが酔いしれる程に良いものではない。それだけの話です」

数多の戦いを超え。

そして、気が遠くなる年月をその身に記憶として刻む女性は、悲しむようにそう言った。

「しかし、夢のために、目的のためには戦うことも道理。あくまで手段ではありますが、だからこそ大切なのです」

「……目、的？」

「聞き及んでいるでしょう？　世界の理に縛られる私が何を愚かな、と思われるかもしれません。しかし、それは私にとって唯一の、譲れぬもの」

テンリュウは言いながら、酷く、寂しそうな表情をしていた。

それは。

自らの言の意味を知り、しかし、それでも進むと決めた故か。

理に反し、それでも尚……。

「我が師を、もう一度。あの方ともう一度逢うこと。それのみが私の願いであり、私が私である理由」

死者の、蘇生。

それは人類史において何度も何度も望まれてきたことであり。

そして――望んではならないこと。

「あなたとて、生き返って欲しい人の一人や二人、いるでしょう？

結局、人はその誘惑からは逃れられない。……私のような、化け物でさえ」

テンリュウは目を伏せる。
ファイムは、刹那の逡巡を経て。
――テンリュウを、否定した。

「やっぱり、間違ってる」

震える手で地面に触れ、体を支えながら、ファイムは立ち上がろうとする。
だが、無様に倒れ伏す。
ミリアムの反応はない。おそらく、意識が落ちているのだろう。
それでもユニゾンを保っているのは、彼女の意地か。

「生き返って欲しいなんてのは、僕たちの押し付けだ。『そんなこと』を理由に、その人の人生を否定しちゃいけない」

立ち上がれるか、いや、立ち上がれば殺される。
しかし。
ファイムは、立ち上がるしかなかった。
ここはきっと、譲ってはならない場面。
だって。
だって、それは。

「僕たちはエゴで生きてる。そうして他人を傷つけて、傷つけられて、そうやって生きてる。それは人の本質だ。生きてる以上は、傷つけ合う。どうしようもない。……あなたは」

瓦礫を支えに、血を吐き出しながら、ファイムは立ち上がった。

「あなたは、また巻き込むつもりなのか？」

生きることは苦しみである、などとは、よく言ったものだ。
でも、実際にそうなのだろう。
死ぬことが救いだとは、少しも思わない。
だけど。
何も得られなくなる代わりに、何からも与えられなくなる。
楽しみも。
――苦しみも。
嬉しさも。
――憂いも。
愉悦も。
――憤りも。
希望も。
――絶望も。
その場所から、無理矢理に引きずり出すなど。
許される、わけがないのだ。

「……それも道理でしょう」

テンリュウは頷く。頷いた上で、しかし、と言葉を紡いだ。

「納得など、私はできない。間違っていることも理解しています。
愚かであることも、私の醜さも。しかし、ダメなのです。理性が納得しても、感情が受け入れない。何も、何一つとして」

テンリュウは、鞘に納められた状態の『血桜』を振る。それはファ

イムを掠め、その僅かな衝撃だけで、ファイムは倒れた。
――しかし、彼は再び立ち上がる。
無様な姿で。歯を食いしばり。
テンリュウはその姿を笑いはせず、むしろ、慈しむように見ていた。

「私は、あの方に救われた。奴隷であった私に手を差し伸べ、力を与えてくださった。あの方が私に利を見ていようと構わなかった。あの方は、私の全てだった。あの方だけが、私を見つけてくれた！」

テンリュウは叫ぶ。そして、ファイムの血で汚れた右手で、自身の顔を覆った。

「怖いのです。私は。私たちは、『神道天龍』は弱いからこそこうなった。涙を流し、枯れ果てた後に、『化け物』と成った。成って、果てるために」

――不思議だった。
世界最強の存在であるはずのテンリュウが、『怖い』と口にする。
それは、適う敵などいない彼女にとって最も似合わない言葉のはずなのに。
酷く――似合う言葉だった。

「大切だったはずなのに。大切なのに。思い出せなくなっていく。あの方の記憶は『ここ』にあるのに、私はあの方が思い出せなくなっていく」

自身の胸元で強く手を握りしめ、テンリュウは言う。

「声も、優しさも、顔も。何もかもが、『私』から消えていく。思い出せなくなっていく。私はどうすれば良いのです？　どうすれば

良かったのですか？　あの方だけが――私を呼んで、くれたのに」

それは、涙色の独白。

追い詰められた『最強』――いや、『孤独』が漏らした言葉。

強くあれば、人は孤立していく。

そもそもが人でないなら、尚更だ。

……おそらく、『神道天龍』とは続いていく存在なのだろう。

『神道天龍』という存在を代々で継承していくことにより、数多の記憶と命を内包していく。

その膨大な『過去』という『記憶』は、元々は『別の誰か』であった新たな『神道天龍』を、塗り潰していく。

確かに――怪物だ。

そもそも、『そこに在って然るべき存在』である『神道天龍』。内包する命はおそらく、一つ二つでは済まない。

『唯一人からなる無敵の軍勢』――おそらく、言葉通りの存在なのだ。

彼女は、『個人』でなく、『数多の命の結晶体』。どこまでいこうと『一人の命しかない』人間では、勝てる道理はない。

ただ、その代わりに。

『神道天龍』は、置いてきてしまったのだろう。

自分の名を。

自分の生まれを。

自ら『　　』となり、『群体』となるために。

そして、それ故に。

彼女は――苦しんでいる。

だが。

「忘れるわけ、ない。それが大切なら、絶対に」

彼女と同じ次元へと身を堕としたファイムだからこそ。

彼女の嘆きを、否定した。

「あなたがどういう存在なのかは、わからない。推測しかできない。だけど。これだけはわかる。あなたが大切に思うものを、そう簡単に忘れはしない。ただ、あなたは思い出せないだけだ」

ファイムは、強い瞳でテンリュウを射抜いた。
ボロボロの体で。
それだけは、譲れないとでも言うかのように。

「怖いから思い出せないんだ。あなたは、『何か』を恐れている。そのせいで、思い出せない」

テンリュウの瞳が、揺れた。

「受け入れるんだ。目を開いて。そうすれば、きっと」

ファイムは、静かな瞳で告げた。
テンリュウは、困惑し。
そして。
――異質な気配が、その空気を支配する。

「「――――ッ！？」」

二人は同時に顔を上げる。
ファイムは左目を閉じると、右目に埋め込まれた戦闘機人の瞳を起動する。
空の上。そこにいるのは、三人の魔導師。
二人はこちらの味方だ。
高町なのはと、おそらくは『シスター』シャッハ・ヌエラ。

そして、相対しているのは、おそらく――

（確か、ロードとかいう……）

報告によれば、スバルとティアナというストライカー二人を退けたという、正体不明の魔導師。

しかし、仮面を着けていたという話だったが、今の彼は素顔を晒している。

整った顔立ちの男だ。しかし、見覚えはない。

何者か――目を凝らし、もっと良く見ようとした瞬間。

「……師匠」

ポツリと、声が零れたような音が響いた。

ファイムが弾かれたように隣を見る。

――風が、流れた。

隣には誰もおらず、紅の光が僅かに残滓として残るだけだった。

ファイムは、動こうとして。

「……え……？」

乾いた声が漏れた。

体が傾く。意識が遠のいていく。

《マスターッ！？》

愛機の声が、酷く遠くから聞こえてきた。

ジワリと、体に温かい何かの感触を感じる。

そういえばー体を、斬られていたのだったか。刺されもした。
魔力による止血が、間に合わないらしい。
視界が、黒く染まる。

ブラックアウト。

◇　◇　◇

――鬼気。
まさに、『鬼』と呼ぶに相応しい、絶対的な存在がそこにいた。

「――グリス・エリカラン」

まるで、断罪のような声色だった。
ただ一言、言葉を発するだけで。
世界が――震える。

「説明を。返答次第によっては、その首、もらい受けます」

最強の侍。
その強さは、ただ単純に戦うことに終始しない。
その強さの神髄は、その威圧にこそある。
戦う前より、相手を制圧する。口にするには容易く、実行するにはあまりにも難しいそれを、テンリュウ・シンドウはやってのける。
――不用意な言葉ならば、斬る。
その瞳には、怒気と共にそんな言葉が込められていた。

「何故、ここに我が師がいるのです？」

「……見ての通り、以上の理由はないと思うけどねぇ？」

グリスは肩を竦める。

――ザシュッ。

静かな音。グリスの左腕が肩から斬り飛ばされ、宙を舞う。

「次は、右です」

キン、という音と共に刀が納められる。なのはもシャッハも、反応さえできなかった。

――これは、まずい。

なのはとシャッハは、同時に思考する。

強いことなどわかっていたし、なのはは実際に相対して戦った。油断できない相手とは理解している。

なのに。

これは、違いすぎる。

戦ってはいけない。向かい合ってはいけない。

一体――どこまでの力を有しているのだ？

「……キャハハ、これはキツいなぁ……仕方ないか」

左肩から血が噴き出し、グリスの体を朱に染めている。

しかし。

グリス・エリカランは、笑っている。

「ロード……今から、『死ぬ』から」

簡潔な言葉。グリスの体が、急激に眩い光を放つ。

なのはとシャッハは咄嗟に障壁を張るが、しかし、それが意味を成すことはなかった。

――ストラグルバインド。

テンリュウの手から伸びたそれが、グリスを捕らえた。光が止まる。

「逃がすとでも？　私をなめるな、グリス・エリカラン」

静かな言葉の中に、凄まじいまでの怒気と鬼気を孕ませ、テンリュウは言う。

――不意に、空が暗くなった。

雷鳴。

夕闇に至ろうとしていた空に、分厚い雲がいつの間にか浮かんでいた。それは時折光り、雷鳴を轟かせる。

あり得ない、となのははは思おうとして、できなかった。

魔法とは、理論である。数学的な理論の集大成で、限界は違わず存在する。

電気を生み出し、雷のようなものを放つことができても、本物の雷は放てないように。

だが。

今のテンリュウはその理さえも破壊し、雷を生み出そうとしている。

自然への干渉。

ある種の奇跡。

あまりにも出鱈目な魔法……だが、これこそが本当の『魔法』なのではないか？

知らず、恐怖を覚えるこれこそが。

「……世界と契約するからこそ、世界に干渉する魔法を容易に扱える、か……キャハハ♪　やっぱり、化け物だねぇ♪」

動きを封じられながら、グリスは笑う。しかし、その表情には薄っ

すらと汗が浮かんでいた。
ある意味、『死なない』存在であるグリスは、死に対して僅かであれ愉悦さえ見出す狂った存在だ。その彼でさえ、今のテンリュウには恐怖を抱く。
理を外れようとする存在に恐れられてしまうほど、テンリュウは『外れて』いるのだ。

「――無駄口を、叩かないでいただけますか？」

雷鳴。
天より一筋の雷が落ち、グリスを打った。雷はそれだけに収まらず、市街に落ちると容赦なく街を蹂躙した。
――キィン、という音と共にテンリュウの足下に魔法陣が展開され、雷鳴がさらに大きくなる。

「殺しても蘇るのでしょう？　ならば、死なぬ程度に殺して差し上げましょう」

轟く雷鳴、そして閃光。膨大な魔力によって、あり得るはずがない魔法が展開される。テンリュウの額にもうっすらと汗が浮かんでいたが、彼女は止まらない。
手を振り上げ、魔法を行使しようとする。
瞬間。
――ゴンッ！
鈍い音が響いた。ロードが上空よりテンリュウに向かって踵落としを放ち、それをテンリュウが受け止めた音だ。
だが、不意の一撃を受け止めきれず、テンリュウは地面に着弾する。
ロードが、静かな瞳でそれを見下ろしていた。

「師匠……！」

テンリュウが悲痛な声を上げる。だが、ロードは応じない。
そこに、何を感じたのか。
テンリュウは『桜花』を構え、空へと駆ける。

《ちょっ、待ちなって！》
「黙りなさい！」

『桜花』にそう一喝し、ロード目がけてテンリュウは刃を振る。
――しかし。
その刃は、ロードの首筋に触れる瞬間に、停止する。

「～～～～ッ！！」

涙を纏った、テンリュウの瞳。それに対し、何の感情も抱かないロードの瞳。
――拳が、唸る。
メキメキという嫌な音を立て、テンリュウの腹部にロードの拳が減り込む。テンリュウは吹き飛ばされ、そのままビルに直撃。ビルを崩壊させた。

「……」

ロードはそれを一瞥するとグリスを抱え、転移の魔法を展開する。
なのはとシャッハは追おうとしたが、ロードの瞳に射抜かれ、一瞬、体を硬直させてしまった。
それが、致命的な隙となる。

「キャハハ♪　今日はここまでみたいだね～？　まあ、どうせすぐにまた戦うよん。ではでは皆さん、御機嫌よう♪」

グリスの姿が消える。なのはとシャッハが歯噛みした瞬間、獣のような叫び声が聞こえた。

「――――――

変更を余儀なくされた。戦闘機人たちも大半が失われ、ウィルやエレンといった、戻ってこなかった者もいる。
だが――クライムは、笑っていた。
「ははは……素晴らしい力だ。この私でさえ、震えが止まらない」
狂ったように笑うクライム。そのクライムに、ホムラが挑むように言葉を紡いだ。
「説明を要求しよか」
「何に対してかね？　敗北者への弔いについてか？　そんなものは必要ない。必要な犠牲だ」
ギシッ、という硬質的な音が響いた。ホムラの瞳に、炎が灯る。銀色が、世界を包む。
「言うたはずやな、クライム。わしの大切に、手ェ出すんやないと」
「ウィル・ガーデンズのことかね？　キミが家族同然に可愛がっていたあの少年。ふむ、確かに残念だが……あれは彼の未熟の結果だろう？　エレン・ローグ……いや、リストリアについてもだ。戦場に出るということは、己というカードに全てを賭けるということだ。そして彼らは、賭場で敗北した。それだけの話だ」
「……」
ホムラは、無言。ただ、部屋に充満する圧力が増していく。
「私を殺すか、ホムラ・イルハート。それもいいだろう。怒りのままに、その力を行使したまえ。だが、キミは忘れてはいないかね？　キミは甘い。優し過ぎる。それ故に――失ったというのに」
「……何やと？」

「キミが世界に疑いもったきっかけ。管理局の闇。『屍部隊』。キミは甘さから彼らを生かそうとし、裏切りにより、仲間を大勢失った。甘いのだよ、キミは。彼らは『表』で生きていくことなどできない存在だった。救えるはずがなかった。殺す以外に道はなかった。――キミの力で救えるものなど、知れているぞ」

ギシリと、空気が軋む音が聞こえた。

かつて、『二人のエース・オブ・エース』が現れる前、とある闇の部隊が存在していた。

特殊制圧部隊――通称、『屍部隊』。『異常者』たちによって構成されていた、存在しないはずの部隊。それは管理局の敵を秘密裏に葬り去るための部隊であった。

その在り方に疑問を抱き、ホムラやカグラ、クロノを中心とする今の管理局を支える者たちが調査し、戦いが起こった。最終的にカグラが部隊の首領を殺害し、終結を見たが。

その時、ホムラは大勢の仲間を失った。

救おうと思っていた者たちに、刃を向けられて。

「また、繰り返すのかね。一時の情に身を任せ、再び世界を違えさせるのか。キミは――なればこそ、それだけの力を持ちながら将に至らない」

その言葉を遮ったのは、澄んだ金属の音だった。ただ黙して成り行きを見守っていたエリアが、彼女にしては酷く珍しく、怒気を称えた表情でクライムを見据えている。

「我が主を侮辱するな。貴様に、相応の力があるとでもいうつもりか。他者にのみ戦わせ、貴様はここに座しているだけ。そのような者が、我が主を語るな」

「ふむ。それも道理だ。しかし、これはこれで一つの将としての在

り方だよ」

クライムは言い切る。一触即発の空気が、流れる。

――ロードが、歩み出た。その隣にはグリスもおり、二人はクライムを庇うように立つ。

クライムは、笑みを浮かべた。

「戦い、ここを沈めるか？　それもいい。だが、そうすればお前たちのしてきたことは全て潰えるぞ。大局を見給え、ホムラ・イルハート、エリア・カリア。最早、誰も戻れはしない。この世界は違えてしまったのだ。今はいい。魔法にもまだ可能性がある。だが――それもあと数十年もすれば限界を迎える。その先に待っているものは何だ？　進めなくなった人類の先にあるのは、緩やかな滅亡だ」

クライムは、言う。

「管理された世界は素晴らしいのだろう。争いもない。平等だ。しかし、進歩がない。毎日に変化がなく、ただ世界は終わりに向かって緩やかに進むだけ。十年後、二十年後、自由意志などなく、管理者に自分自身の人生のす全てを決められる世界。そんなものが、本当に平和か、平穏なのか。私にそれを問うたのは、他ならぬキミだろう、ホムラ・イルハート」

「……」

「第二管理世界……あの場所で、キミは私に言った。『天下布武』という言葉と共に。武を布く。戦いこそが人間の本質であり、競争こそが人間の業であると。幸福などというものは、自らの手で掴まねばならないと。何より――魔法は、人の命を食い荒らすのだと。私もまた世界を憂う身であった。だからこそ、戦うと決めたのだ。それを、今ここでキミは台無しにするというのかね？」

――睨み合い。それが数分続き、最終的に、ホムラがため息を吐いた。

「どういう経緯でここにおるかは知らんが……先代とやり合う気はあらへん」

死んだはずの命がここにあること。それに対する疑問もあるが、それはおそらく、隣にいる少年の存在が説明している。

ホムラは背を向け、ああ、と呟いた。

「ちなみに、わしの世界で『天下布武』を唱えた英雄は本当に凄い人間やった。文字通り、時代を変えたと言ってもええくらいや。せやけど、最後には裏切りで殺された。あと一年生きてたら、文字通り世界が変わっとったやろうな。……その武将だけやない。世界を見据え、変革をもたらした者の末路はみんな、どうしようもなく無様や。みっともないかどうかはともかく、な。お前も、気を付けろや」

「ふむ……それは、宣戦布告かね？」

「ただの忠告や」

言って、ホムラは部屋を出て行った。その、数分後。

――轟音。

艦が大きく揺れ、凄まじい音が響き渡る。

「……鬼ごっこの、鬼に捕まっちゃったね～？」

キャハハ、と、グリスは笑った。クライムが、ほう、と言葉を漏らす。

「随分と早い。予定が狂ってしまうな」

「いやー、相当ご立腹だったしねぇ。怖い怖い。転移をジャミングで妨害してるから、単純なスピードだけでここまで来たのか～。凄い凄い。次元航行艦以上の速さって、どこまで化け物なんだろうね♪」

笑いながら、でも、とグリスは呟いた。

「一応、手は打ってあるし？　ま、なんとかなるでしょ、多分。というか、楽しみでさえあるよ」

グリスは、ロードを見る。

「『最強』同士の戦いだよ？　見逃したくないね」

「ふむ。道理だ」

クライムが頷き。それと、ほぼ同時に。

テンリュウ・シンドウが、風穴を開けて舞い降りてきた。

その威風堂々とした姿は、まさに。

――『最強』。

◇　◇　◇

「……っとに、前線は退いだっつーのによ」

次元航行艦の外壁に強引に掴まった状態で、その男は呟いた。

「まあ、いいか。さて、街も心配だが、それよかこっちだな」

その男は――『英雄』と呼ばれる男は、笑みを浮かべた。

「――この艦沈めて、全部終わらせてやる」

第二十五話　仮面は偽るもの（後書き）

蘇ったのは、かつての『最強』。
しかし、願っていた再会は最悪の形で成ってしまう。
そして、怒りを称えた『最強』は、どこへ。

第二十五話です。楽しんで頂けましたか？
とりあえず、防衛戦は唐突に幕を下ろしました。
神道天龍は本当に理不尽な存在です。ぶっちゃけると、万全な彼女を殺したければそれこそ万を超える軍勢を差し向けるしかありません。
しかし彼女は人であることを捨てながら、迷い持つ人間です。
だからこそ、言葉こそが彼女に最も有効な武器なのかもしれません。

戦いも終わりが近付いてきました。次回は、ホムラたちの艦での話になります。
短い予定なので、早めに出せるかもしれません。

感想など頂けると、ありがたいです。
よければ、最後までお付き合いください。

では、次回予告です。

次回予告

紡ぐ言葉。しかし、それは届かない。
待っていたのは残酷な真実。
その果てに。

最強の侍は……。

「私は弱いのです。たった一人で、幸せになど、強くなどなれない」

次回、第二十六話。

「伝えたかったもの」

第二十六話　伝えたかったもの

圧倒的な魔力。
圧倒的な威圧感。
舞い降りた最強は、迸る殺気を身に纏い、しかし、黙して待っている。
――何を？
決まっている。理由と、意味をだ。

「……ドクターは、かつて、究極の命を目指した。完全な人造生命の制作を」

グリスは、謡うように言葉を紡ぎ始めた。

「神様が創った、『人』という存在。それに挑もうとして、あの人は多くの命を生み出し、同時に奪ってきた」

ジェイル・スカリエッティ。
『アンリミテッド・デザイア』の名を持つかの男は、そこに至るために戦っていた。
生命が持つ、『ゆらぎ』……それを、実現しようとした。
戦闘機人も。
聖王のクローンも。
彼にとっては、その過程でしかなかったのだ。

「ボクもまあ、一応は『そっち側』の存在だし、わからなくもないよ。完全な人造生命には、興味がある」

キャハハ、とグリスは笑う。

彼が自らを人と呼ばぬのは、テンリュウに対する皮肉か、それとも別の何かか。

「だけど、ドクターとボクじゃ、方向性が違うんだよね。ドクターは『ゆらぎ』こそを『生命』としたけど……ボクは、そうは思わない」

バサッ、と、グリスは白衣をはためかせ、言い放つ。

「『ゆらぎ』とは、『迷い』だ。『完全』に、そんなものは必要ない。そして、『これ』はボクにとっての最高傑作」

グリスは、隣に立つロードを見る。
テンリュウの瞳に、炎が宿った。

「……私がここに立つ理由を知った上で、その妄言を吐くのですか？」

「戯れ言と笑われたって構わない。理解して欲しいなんて思わないしね。天才は、いつだって孤独だ」

「自らを天才と称しますか。傲慢ですね」

「別に、『怪物』でも『化け物』でも構わないよ？」

グリスは薄い笑みを浮かべた。

「全てに共通するのは、『孤独』。人は孤独に耐えられない。なら……耐えることができたなら、それは人ではない証」

グリスは、両手を広げ、楽しそうに言う。

「ボクは世界が欲しい。そのために必要なのは、力だ。だから、『

完全な命』を求めた。手に入れようとした。そしてそれは――もうすぐ完成する」

広い部屋――広さに反し、たった三人しかいない部屋に、グリスの笑い声が響き渡る。

「『最強』をも打ち破れば、最早敵はいない。さあ、殺し合いなよ。その先に、ボクの夢がある」

――夢。

グリスは、謡うように言い切った。

「……」

ロードが前に出る。テンリュウは、一瞬、迷いをその瞳に過ぎらせ、しかし、得物を構えた。

そして、言葉を紡ぐ。

「一つ、問おう」

その瞳に影を過ぎらせながら、テンリュウは血を吐くように言った。

「人の蘇生は、可能なのですか？」

「――人ならば、ね」

人ならば。

その言葉の意味を、テンリュウは一瞬で理解した。

だって、それは。

ずっと、考えないようにしていたことだったから。

「まあ、それさえも難しいけど。おかしな話だよねぇ？　創るのは酷く簡単なのに、直すのは酷く難しい。確率的に言えば、不可能に近い。まあ、それでも『プロジェクトF』を使えば『代用品』くらいなら簡単にできるんだけどね」

グリスは肩を竦め、まあ、と息を漏らした。

「『アルハザード』ならそれも可能だったんだけど、あそこは『終わって』しまったし。馬鹿な人たちだよね、永遠を求めた果てに滅びるなんてさ。……永遠を、自分という個人が観測できなければ、永遠なんて意味がないのに」

一瞬。

本当に一瞬だけ、グリスの表情に翳りが垣間見えた。

しかしすぐにそれは消え、笑みを浮かべてグリスはテンリュウを見る。

「けれど、自分から『人を捨てた存在』を蘇らせる術なんてものは、たとえ『アルハザード』を探しても見つかりはしない。そもそもその手段は、『永遠』に至るためのものだったんだから」

それは、つまり。

願いは――叶わないということ。

もう二度と、言葉は交わせないということだ。

たった一言さえ……。

「キミたちのことについてはさ、『ロード』を創る時に色々調べたよ。……ねぇ、本当の名前って、覚えてる？」

「……」

テンリュウは無言。それを返答と受け取り、グリスは頷きながら言葉を紡いだ。

「世界に固定、なんて一口に言っても、そう簡単な方法じゃない。制約を付けて、固定するための縁を結ばなくちゃいけない」

――『概念に成る』。

それは、決して良いことばかりではない。

人は、精神を肉体という殻で覆うことで、世界にいる。

しかし、『概念』と成った者は人から上の次元へとシフトするために、別の『殻』が必要になる。

それが制約であり、『固定対象』だ。

聖人。

失楽園シャングリラ。

桜花。

血桜。

それがテンリュウの固定対象であり、他にも二つ、彼女を縛る制約がある。

ある意味で、人間以上にままならない存在。なればこそ、彼女は『最強』なのだ。

数多の鎖を携え、その代わりに凄まじいまでの力を発揮するからこそ。

「最早、定義において『人』じゃないんだ。そんなものを蘇らせるなんて、できるはずがない。そもそも、名前さえわからないんだ、より一層、不可能だね」

肩を竦めるグリス。テンリュウは、嗚呼、と呟いた。

確かに――その通りだ。

奴隷であった自分を救い、育ててくれた先代『神道天龍』。

その人の本当の名を、自分は知らない。

「……さて、お喋りはここまで。時間も押してる。さあ、戦ってもらおうか」

醜悪な笑みを浮かべながら、グリスは宣言する。

「ボクの技術者としての力は、『精神干渉』。ロードに心はない。あるのは、戦うという意志だけ。墓穴から掘り出してまで整えた傑作だ。楽しんでね？」

笑うグリスと、無言のロード。
テンリュウは、『桜花』を構える。

「そう……ですか。師よ。もう、あなたに会うことは叶わぬ夢なのですね」

涙が、一滴。
たった一言、それだけで良かった。
失ってしまった人。
消えてしまった人。
届けたいものが、あったのに。

「化け物は……儚き夢さえ叶わぬのですね」

そして。
世界が知らない、世界最強同士の戦いが、幕を上げる。

「――推して参る」

◇　◇　◇

艦が大きく揺れる。なんだよ、と、カグラは呟いた。

「内輪揉めでもしてんのか？　いやまあ、それならありがてぇんだけど――っと」

分かれ道に差し掛かった瞬間、カグラは身を隠す。

――戦闘機人。

おそらくは巡回しているのだろう。規則正しく歩む二人組の戦闘機人を、カグラは幻術を用いてやり過ごす。

戦闘機人に対する術式は、ある程度修得している。それを用いてやり過ごすと、カグラは再び歩き出した。

だが。

「……ッ！」

不意に腹部が痛み出し、カグラは膝を折る。リヴァイアスにやられた傷が、痛む。

「あんの……野郎……ッ、無茶苦茶しやがって……ッ！」

荒い息を吐きながら、カグラは壁に手をつく。

リヴァイアス・バルトマカリとの戦闘は、想定外の厳しさを纏っていた。

まず、力が違い過ぎる。全盛期ならばともかく、今のカグラではリヴァイアスには適わない。

死ぬかもしれない――と、本気で思った。

しかし、何の偶然か、空から降り注いだ雷によって急死に一生を得た。

「くっそ……あばらを持ってかれてるなこりゃ……！」

体調は最悪。一発、いいのを貰ってしまった。

そのおかげで逃れられたとはいえ、あの男には貸しができた。……返せるとも、思えないが。

「だが、んなことはどうでもいい。……ヘルダスト」

《Ｏｋ，Ｂｏｓｓ》

愛機が応じる。ヘルダストはインテリジェントデバイスではなく、あくまで補助装置だ。それは、カグラ自身が人格を機械に必要としなかったのと、それに頼りたくはなかったというのが理由だ。

インテリジェントデバイスの人工ＡＩは、最早『人』と呼んで差支えない。カグラが歩む道は、茨の道だ。たった一人で地獄の中へ飛び込む覚悟をして、ここにいる。故に、誰も頼りたくはなかった。背負わせたく――なかった。

「エリアサーチ……ちっ、この艦全体に結界魔法を張ってやがんのか。出力は魔導師じゃねぇな、機械か？　まあ、統括してんのはあの野郎だけどよ」

あの野郎――袂を分かった、親友のことを思い出す。

『かつて友だと信じた男よ』

あの日。もう、随分と前のことのように感じる、ホムラと再会した日。

あの男は、背を向けてそう言った。
勝手なことを――言ってくれる。

「……友、ねぇ。正直、俺はお前のことをそんな風に思ったことは一度もなかったんだがな」

親友と、口にしてきたけれど。それは、きっと違う。
カグラ・ランバード。
ホムラ・イルハート。
生まれも育ちも違う、才能の方向性も違う、その二人の間に結ばれるものは、たった一つ。
――『相棒』。
クロノ・ハラオウンと共に、カグラが彼の今までの生涯で背中を預けた存在であり、預かった存在。

「難しいよなぁ……人間、ってさ」

壁に背を預け、カグラは呟く。
あの日――ホムラが管理局を裏切った日。味方が全滅させられて、代わりにホムラに組した後輩と先輩を、合計二人も殺すことになった日。
カグラは、ホムラに誘われた。
――返答は、否。
だからこそ、エリアに斬られ、墜ちたのだが。

「伝えたいことがあっても、伝えられねぇ。惚れた女の遺言さえ、叶えてやれねぇ」

カグラは、歩き出す。
どう進めかいいかわからないが、なんとなく、進む先はわかってい

た。

「さて――いかにも、だな」

しばらく歩いた先に、道の終わりがあった。

その扉の先に、何が待つのか。

（仕込みは終わってる）

ならば、後は。

もう、『英雄の残滓』でしかない自分ができることは――

◇　◇　◇

刃が一度ぶつかるだけで、凄まじい衝撃が大気を揺さぶる。

互いに、装備は全力。

テンリュウは『桜花』と『血桜』を携え。

ロードは召喚魔法によって呼び出した刀を手に、折れる度に新たな刀に持ち替えて戦っている。

戦い方は、酷く似ている。

それは――二人が『同じ』だから。

本来、同時に存在するはずのない存在だからだ。

だが――

「――――ッ！？」

テンリュウが吹き飛ばされ、壁に激突。轟音を響かせる。あまりの威力に、艦の壁に穴が開いた。

《ちょっと、何してんの！？》

テンリュウのデバイスたる『桜花』が声を張り上げる。テンリュウは、息を吐き出すだけだ。大したダメージはない、ないが、事態はそれ以上に深刻だった。

体が――動かないのだ。

おそらく、冷静な目で見れば、ロードよりもテンリュウの方が強い。ロードは確かに『最強』だが、『最強の残滓』に過ぎない。こう言うと語弊がありそうだが、一世代前、つまりは型落ちだ。

それに、ロードにはなく、テンリュウにはある『力』もある。

《割り切りなさいよ！　あれは先代じゃない！　先代の残り滓よ！　あんたが望んでたものは、そんなものじゃないでしょ！》

「しかし、私は」

――ゴゥッ！

暴風が吹いた。テンリュウは咄嗟にロードの一撃を受け止めるが、突き抜けた衝撃まではどうにもならなかった。更にその衝撃は、テンリュウの背後の壁を打ち破る。

「……あんまり壊すと、沈んじゃうんだけどね～……」

離れた場所で念入りに防御結界を張っているグリスが、呟くように言った。テンリュウは、ハッとなる。

そうだ。ここは、艦の上だ。そして、ここにはアリアがいる。

彼女は――守らなければならない。

しかし。

「割り切ると言っても、私は……」
《ああもう！　うざったい！　強いくせに悩んでんじゃないわよ！》
「ならば、あなたは何とも思わないのですか！」
ロードを弾き飛ばし、構え直す。睨み合う形になりながら、それでも、尚。
テンリュウは――迷う。
「あなたの主なのですよ！　あの方は！」
《――あたしの主は、ここにいる》
燃えるようなテンリュウの言葉に対し、『桜花』が返したのは冷静な言葉だった。
《今まで馬鹿みたいな数の主に仕えてきたけどさー、なんていうか。ここまで馬鹿なのは初めてよ。みんな、確かに先代の死は悲しんでたけど、誰も彼も最終的にはそれどころじゃなくなっちゃう。あんたの中にある膨大な、『誰かの記憶』に押し潰されるのを堪えるのに、必死になる》
数多の、『神道天龍』を見てきた彼女は、語る。
《あんたはさ、やっぱり色々と規格外なのよ。他人を受け入れる――本当の意味で、そんなことができる人なんていない。他人がまず、他人にはわからない。だけど、『神道天龍』はそれを強制させられる。数多の人生を受け入れさせられる。……あんたは、それを受け入れることができた。見てて思うよ、ホントにさ。あんた、多分……自分のためには頑張れないんだ》
自分のためには何もできない。

いつだってその刃が唸る時は、誰かのため。

《なんていうかさー、土台無理だったんだよ、自分の願いを叶えるなんて。ずっと見てたけど、あんた、迷ってばっかだもん》

――間違っている。

何度も何度も彼女が口にしてきたそれは、きっと。

《……でも、あんたは他人のためだけにいられるほど強くもなかった。難儀だよねぇ、人間って。だけどさ、要はそういうことでしょ？》

他人のためにしか戦えないくせに。

自分を、自分だけでは支えられなかった。

《前を見なさいよ。望んだものじゃなくても、いや、望んでなかったのかもしれないけど、それでも再会はここにある。あたしたちには、未来なんて高尚なものは見えやしない。なら、踊ってみるのもまた一興、ってね。あんたの世界に、そろそろ決着、つけなさいな》

いつもは子供っぽく振る舞っているくせに、こういう時だけお姉さんのような口調で話してくる『桜花』。

――自分の世界。

事故、とも呼べる事件のせいで、守るべき存在であるアリアと出会うことが最近までできなかったテンリュウにとって、世界とはたった一人の師匠だった。

恋慕だったのかもしれないし。

憧れていたのかもしれないし。

陶酔していたのかもしれない。

ただ、あの人だけが。

今、目の前に立つ人だけが、テンリュウにとっての全てだった。
そこに――決着を。

「……迷いも、惑いも、悔いも。今尚、胸を締め付けます」

それでも。
全てだったものを、奪われても。
まだ――戦えるのか？

「私は」

世界が――揺れる。

◇　◇　◇

「……ふむ、珍客だね」

司令室。本来なら何人もいなければならないのであろう部屋には、たった一人の男しかいなかった。
無駄に広い部屋だ。その男は、艦長席の椅子を回転させると、こちらを見る。
――クライム。
今回の事件――いや、最早戦争と呼んでいいほどの規模となったこの戦いの、原因。
カグラは、拳を握り締める。

「無茶をする。いや――そうか、そうだったな。キミは確か、あの戦いでも同じことをしていたな。次元航行艦にその身一つで張り付

くなど、キミしか考えないし実行もしないだろうね」
「……テメェが」

クライムが何かを言っている。
だが、カグラには。
今の彼には、届いていなかった。

「テメェが、テメェさえふざけたことをしなければっ！！」

拳が唸る。だが。
――ギィン！！
その拳は、クライムが展開した障壁によって防がれてしまった。

「ちっ！」

カグラは飛び退き、距離を取る。クライムが、笑みを浮かべた。

「学習、というものを知っているかね？　昔と何も変わらないのだな、キミは」
「あぁ？」
「……そうか、まだわからないか。無理もない。あの時から随分と経つ。キミが、見違えるようになったのがいい例だ。しかし、少しだけ残念だ。私は、キミにとってとるに足らない存在だったかね？」

クライムが笑みを浮かべる。カグラは無言。意味がわからない。
まるで、どこかで会ったことがあるかのような口振りだが――

「――キミたちが潰したのだろう？　私の部隊を。なのに忘れ去られるとは、中々堪えるものだな」
「潰した？」

「あの時、キミとは問答までしたのだがね。ふむ、思い出せぬなら仕方がない」

クライムは笑みを浮かべる。その、人を見下したような瞳に、カグラは見覚えがあった。

いや、何度も見てきたといってもいい。

人を人と思わない――それは、管理局の上層部にいる人間たちの目だ。

どうしようもない、鬼たちの。

――だが。

クライムの瞳は、それとは少し違う。

見下している。見下しているのだが……それ以上に。

『私の前では、キミも羽虫も同格だ』

不意に。

本当に不意に、そんな言葉を聞いた。

記憶の底にある、その言葉。

だが、それは。

それを口にした人間は――

「いや、まさか。そんなはずはねぇ。そもそも、それならホムラの野郎が手を貸すなんてこと、ありえねぇだろ」

「いや……そうでもない。あの時、私は黒幕のような扱いを受けていたが、私と直接向かい合ったのはキミだけだ」

クライムが笑う。

カグラは――顔を上げ、険しい表情でクライムを見た。

「私を直接見たことがある者で今尚生きている者は二人。一つはキ

ミで、一つはリヴァイアス・バルトマカリだ。彼からは聞かなかったのかね？」

――宿命。

リヴァイアスは、そう言っていた。

元々、あの部隊にいた男であり、最も闇に近かった男がだ。

ならば、そうなのか？

この男は――

「思い出したかね？　そうだ、私だよ、カグラ・ランバード。『屍部隊』の頭領であり、キミと殺し合いを演じた男だ」

久しぶりだね、とクライムは笑う。カグラの瞳が、更に険しくなった。

「亡霊が……テメェは確かに殺したはずだ！」

「殺されてなどいないさ。確かに大きな傷を負い、虚数空間に落とされたが……それはイコールで死に繋がるわけではない」

クライムは肩を竦め、立ち上がる。

「むしろ、キミには感謝さえしている。次元震が起こるあの中だからこそ、私は辿り着いた。そう、失われし都――アルハザードに」

「……世迷い言を」

「そう思うなら、それで構わんさ。だが……私がここにこうして立っているのは、紛れもない真実だぞ、カグラ・ランバード」

「……」

「しかし……キミも随分と見違えた。敵である私が言うものでもないのだろうが、『ただのエース』であったキミが、今や『英雄』か。キミに討たれた者として、誇りに思う」

クライムは笑いながら口にする。
敵を前にして、この余裕。
今更――カグラは、ああ、と納得した。
確かにこの男は、あの時の男だ。
平等――悪い意味でのそれを実現する、最悪の男。

「しかし、キミも難儀な想いをしている。八神はやて……確か、『闇の書』の主だろう？　反発は多かったのではないかね？」
「……」

カグラは無言を通す。悔しいが、クライムの言う通りであった。
八神はやて――彼女に対する管理局上層部の印象は、決して良くはない。『闇の書』というロストロギアは、それだけのことをしてきている。
八神はやてが悪だというわけではないが、しかし、それで割り切れるものではない。
『闇の書』が起こしてきた事件の犠牲者は、それほどまでに多い。
そう……あの、クロノ・ハラオウンまでもが、その犠牲者の一人。
カグラが関わった事件や、かのギル・グレアム提督が関わった事件の舞台になった管理世界では、未だに『闇の書』は『憎悪の対象』になっている。
八神はやてに、責はない。
彼女はただ、選ばれただけだ。
しかし。
それで納得できる心を持つ者は、決して多くはない。
カグラでさえ。
納得するのに、かなりの時間を必要としたのだから。

「知るかよ。そんなこと。今俺がここにいて、嬢ちゃんも戦ってる。

それが真実だろうが」
「……成程、強いな。キミは確かに耐えたのかもしれん。だが、その強さを他者に強制できるのかね？……できんよ。だからこそ、キミでは私には勝てない」
「……いきなり、何を言うかと思えば」
はっ、と吐き捨てるように、カグラは言った。

「勝つもクソもねぇ。こうして侵入されてる時点で、テメェらは負けてんじゃねぇか」
「それもまた真理……だが、そうして話を逸らした時点でキミの心が敗北しているというのもまた、事実だ」
クライムは笑みを浮かべる。そうしてから、結局、と言葉を紡いだ。
「キミと私は平行線だ。どこまでいこうと、相容れぬ者というのはいる。……だが、だからこそ敢えて聞こう。キミは、現状が最善だと考えているのかね？」
「んなわけねーだろ、馬鹿か」
即答だった。クライムは、ほう、と息を漏らす。

「だがな、理想郷なんてのは本当にに理想なんだよ。実現なんざできやしねぇ。誰もが笑える世の中？　ああ、魅力的だよそれは。実現するなら、どんな協力だってしてやるさ。前にも言ったようにな。……けど」
そう……理想と、目標は違う。
実現できない夢など、いくらでもあるのだ。
理想郷など、その究極である。

「無理なんだよ、どうしたって。昔は俺も憧れた。……くだらねぇ、とは流石に言わねぇ。けどな、そんなもんのために今、幸せに生きてる奴らに泣いてもらう？　ふざけんな。誰が認めるか」

この問答は、昔も一度、行った。

叶うはずのない理想のために、今を犠牲にする――そんなものを、カグラは認めない。

カグラは、確かにな、と呟く。

「どこまでいこうと平行線だよ、俺たちは。……それで？　結局何が言いたいんだよテメェは？」

「なに、どこまでもままならない世界だ、と思ってね」

クライムは両手を広げ、宣言する。

「だからこそ私は闘争の道を示すのだよ、カグラ・ランバード。弱者を救う、などと謡いながら結局、強者が勝つ世界に比べれば、その方が遥かに素晴らしい」

「傲慢だな」

「そうでなければ救えないのであれば、私は悪魔にでもなろう。私は、世界を救う」

言い切ったその言葉に、一片の迷いも虚偽もなかった。

本気だ。

それがわかる。わかるからこそ、カグラは否定する。

「俺は、テメェを認めない」

彼が戦うのは。

弱い者たちのため。
一時でも長い、平和のためだから。

「殺さなきゃ止まらねぇことは知ってる。テメェはあの日、あの時に死ぬべきだった。……こんなわけのわからねぇ幕は、今すぐ降ろしてやる。それが、俺の役目だ」

地面を蹴る。
殺したはずの男が生きていた――だからこそ、こんなことになってしまった。
ならば。
――ここで、その過ちを正す！

「死にやがれっ！」

カグラが吠える。その拳が、再びクライムを狙う。クライムは障壁を展開、防ごうとする。
そして、拳が触れる瞬間。
――ニッ。
カグラが笑みを浮かべ、拳を引いた。そのまま、空中で身を翻し、距離を取る。

「……？」

クライムが疑問符を浮かべる。カグラは、笑みを浮かべたまま言葉を紡いだ。

「テメェの正体が割れた以上、正面からやり合う気はねぇ。今の俺じゃあ、勝てやしねぇからな」

かつてならともかく、今のカグラでは勝てない相手。
冷静に、カグラは言い切った。そして、タバコを咥える。

「相応のやり方で――いかせてもらうぜ」

――ドォン！！

不意に、爆発音が響き渡った。艦が大きく揺れる。
同時に、カグラの姿が消えていく。彼のレアスキル『虹色吐息』による迷彩だ。
そして、カグラの姿が見えなくなり。
クライムが、ポツリと呟いた。

「……本当に、楽しませてくれる」

酷く、楽しそうに――

◇　◇　◇

「……侵入者、ね。リヴァイアスはどないしとる？」
「自室に。水を差されたことが相当、気に食わなかったようですね」
「おいおい、ガキか」

ホムラは頭を掻きながら苦笑する。

「つか、この艦大丈夫か？　流石に沈むやろ。テンリュウも戦っとるし」
「……先代、ですか」
「せや。……正直、な。あの日、あいつを誘ったこと――後悔しとるよ」

ホムラは、呟くように言った。
テンリュウが仲間になった日。あの時、テンリュウの望みを知りながら、だからこそあのように言葉を紡いだ。
死者の蘇生――それこそが、テンリュウの望みだと思ったから。

「義理堅いからな。アルハザードについては、クライムとグリスが詳しかったからいけると思ったんやけど……まさかなぁ、そもそも人間やないんてどんでん返し、いくらなんでも無茶苦茶やろ」
「人間では……ない？」
「グリスからな、聞いたんや。テンリュウ・シンドウ……いくら強いゆーても、あれは理不尽過ぎる。どんなカラクリがあるんかと思えば、まさかなぁ。『概念』ってのは、行き過ぎやろ流石に。ま、そのせいでテンリュウの願いが叶うことはないと、そういうわけや。戦っとんのも、それが理由やろ」

ホムラは苦笑する。その笑顔が、酷く無理をしたもののように見えて。
エリアは、主、と言葉を紡いだ。

「主は……納得できるのですか？」
「できひんよ。けど、そもそもから間違っとるんや。死者を生き返らせる？　軽く言うてええことやない、それは決して踏み込んではいけない場所や」

ホムラは、寂しそうな表情を浮かべた。
トモエ・イルハート。
ホムラが喪った、エリアにとっても友人であった女性。
彼とて、取り戻したいと思ったことはあるはずだ。

「人の蘇生は、有史以前からの人類の夢や。せやけど、同時に最大の禁忌でもある。人は死んだら生き返れない。その禁忌を破れば、悲劇が襲ってくる。……ゼスト、やったか？　あの騎士とレジアスもそうや。本来なら騎士ゼストが死んで終わりやったはずのことが、あの変態のせいで余計に二人も犠牲者を出し、地上を混乱させることになってしもた」

ゼスト・グランガイツ。
先のＪＳ事件でジェイル・スカリエッティによって強制的に蘇ることになり、騎士シグナムに討たれることになった人物だ。ただ、彼は本来、死者であった。それ故に、彼が求めていた、レジアス・ゲイズ中将の回答は得ることを許されず、そればかりかレジアスは命を落とす結果になる。
それが――摂理だ。
かの大魔導師プレシア・テスタロッサも、死者蘇生を夢見た果てに、この世から姿を消したのだから。

「望んだらアカンのや、そんなことは。死者を蘇らせるために、その蘇った死者ごと全部失うなんてのは、阿呆の所業や」
「ならば……何故、主は止めなかったのですか？」

カンッ、カンッ、という音が鳴り響く。二人は階段を昇りながら、会話をしているのだ。
ホムラは、んー、と唸るような声を上げた。

「止められんよ。あんなん。わしが止めてどうこういうような奴やない。それに……あいつは例外や。『蘇ってくれるのであればどんな結末も受け入れる』……はっきり言うけど、正気やないぞあれは。自分が死のうとどうなろうと、どうでもええと本気で考えとる。破滅的や」

ホムラが立ち止まる。扉だ。
この艦の屋外に出るための、重厚な扉である。

「ま、それはええ。今は――こっちや」

その扉を開け、ホムラは外へと出る。風が吹き抜け、ホムラとエリアの髪を揺らした。
艦の屋外。随分と広い甲板には、数十人からなる戦闘機人たちが円を作って臨戦体勢にあった。その中心には、火を点けずにいるタバコを咥えた男が佇んでいる。

「……久し振りやな、カグラ」
「おお。遅かったな。待ってたぜ」

ここに来るまでに戦い、負傷したのだろう。バリアジャケットはボロボロで、額が割れ、血が流れている。
しかし、そんなことは欠片も気にする様子もなく、その男は丁度いい、と口にした。

「――お前に、伝えたかったことがある」

◇　◇　◇

決着は着かない。このままでは。
テンリュウは、大きく深呼吸をした。そうしてから、ロードを見る。

「あなたを取り戻せるのであれば、私はたとえこの命が終わっても

良かった。たった一言、たった一言だけ、あなたに伝えたかったことがありました。しかし、それが許されぬならば。それが、この世界の回答だというのであれば」

テンリュウは、『桜花』と『血桜』を床に突き刺した。その足下に、巨大な魔法陣――オリヴェント式の陣が展開される。

「最早世界など、私にとって価値なきもの。そして――ここが、私の終着点」

グリスはすでにいない。二人の戦いの余波に耐え切れず、撤退している。

だが――どの道、観覧席にいられるのはここまでだ。ここから先は、誰も立ち入れない世界の戦いになる。

「ならば――？始まりの場所？で決着を」

――風が流れる。風穴が開いているとはいえ、屋内だというのに、暴風のような風が。

空に浮かぶ、紅の光。

無数の浮かぶそれらは線を生み出し、二人を取り囲むようにいくつもの魔法陣が展開される。

「……望んだものは、刃」

テンリュウが、謡うように言葉を紡いでいく。ロードは、まるで聞き惚れるかのように動かない。

――我、右手に薙ぎ払う刃を、左手に守る刃を――

――心に賜りし想いを、愛を、願いを――

――我は孤独、ただ一つの刃、されど、無敵の軍勢なり――

――なればこそ、この身一つで運命を切り開かん――

かつて、一人の男は世界に願った。

たとえ、自らの命が果てようと、魂が燃え尽きようと、守りたい人がいると叫び、力を望んだ男。

その者は、文字通り世界と契約した。人の体では成し遂げることができないこと――たった一人で、『聖王』、『覇王』、『軍神』、『雷帝』、『黒王』、『聖母』など、古代ベルカ時代において覇を争っていた者たちからたった一人で『聖人』を守るために。

その時、男は世界にあることを捧げる。

――『自らの世界』、である。

契約を交わしたその場所、その時間を、丸々自身の中に呑み込んだのである。世界と契約し、概念となる――それはつまり、世界と同化することに等しい。

故に、『世界を呑み込む』必要があった。

そして、呑み込んだ世界はかの『闇の書』が、かのフェイト・T・ハラオウン執務官に発動したように一つの精神世界として機能する。

敵と自分を、『終わってしまった世界』へと誘い、徹底的に殺し合うという、究極の魔法。

それが、『神道天龍』が紡ぐ、最強にして最後の奥義。

「開け、永久に停滞せし死の地獄。――?永遠終端(エターナル・デッド・エンド)?」

――世界が変わる。

硬質的だった床や、風穴を開けられた壁は全て消え去る。代わりに現れたのは、一つの戦場。
燃え盛る大地。
川のように流れる、夥しい量の血液。
積み上げられた、いくつもいくつも見かける死体の山。
煙によって閉ざされた、暗い空。
正に――死山血河。

「愛刀『血桜』は、ここと世界を繋ぐためにあちらに置いて参りましたが。しかし、それで十全でしょう」

テンリュウは『桜花』を構えながら、言葉を紡ぐ。
パチパチと、音が響く。ここは戦場だった場所。それも、『神道天龍』が古代ベルカの時代に戦い、『軍神』と呼ばれたとある人物の、万を数える軍勢をたった一人で退けた場所だ。
切り取られた場所であるが故に歴史には刻まれていないのだが、しかし、ここは罪の証である。

「この世界を紡ぐ――それだけで、私の魔力の大半は使用してしまいます。しかし、ここにある数多の命、その全ては私の力となる」

オリヴェント式――命を使う術式。『神道天龍』が最強である理由は、ここに積み重ねられた命を使えるからこそだ。それに抗うには、それこそ『運命』でも操らなければ不可能である。
ここに至った時、テンリュウ・シンドウは文字通りの怪物に成る。

「最早言葉さえ届かぬのであれば、せめて。私たちの始まりであるこの場所で。『神道天龍』という、我らを縛る名前が世界と成った、この場所で」

ロードは、変わらず無言。
そして、二人は激突する。
観客はいない。
ただ。
同じでありながら殺し合う二人がいるだけ。

「――推して参る」

その言葉が、紡げたことを。
テンリュウは――悲しんだ。

◇　◇　◇

「なあ、ホムラよ。俺はな、どうしようもなく無能だよ」

珍しく、本当に珍しく、タバコに火を点けながらカグラは言った。
まるで、懺悔でもするかのように。

「トモエは、俺とお前の対立を望まなかった。なのに、俺とお前はこうして敵同士でいる。管理局についても、なんとかするなんて調子のいいことを言っておきながら、結局何もできてない。何が『英雄』だ。本当に……一人の力ってのは、知れてやがる」
「せやな。本当にそう思う。事実……お前はここで、殺されるんやしな。一人きりで」

ホムラが、鋭い視線をカグラに向ける。カグラは苦笑した。

「怖いな、おい」

「脅しやない。こんだけのことをしでかした上に、お前は敵や。生かしとく道理もあらへん。ここは高度一万メートルの上空や。たとえSランク魔導師でも、飛び降りて無事に済むことはあらへん」
「諦めろ、カグラ・ランバード」

双剣を構え、エリアが一歩、歩み出る。カグラは、確かにな、と呟いた。
結界装置によって力場が保たれているが、本来なら立っていることさえできない高度だ。普通に考えて、飛び降りれば緩やかに死ねるだろう。
そういう、運命が待っている。
だが、だからこそだ。
運命というものに対する回答を、すでにカグラは持っている。
故に――

「――ホムラ。お前に、トモエの遺言を伝える。それが、伝えたかった」

カグラはタバコを捨て、踏み躙ると、笑顔を浮かべた。

「？運命は変えられる。悲しい未来は、打ち壊せる？――あの日、トモエが言った言葉だ。だからよ、ホムラ、エリア」

――懐から、カグラは掌サイズの何かを取り出す。手榴弾だ。
それを、戦闘機人たちの一角へと投げつける。
爆発。道が、開ける。

「――諦めるってのが、まずありえねぇんだわ」

甲板の手すりに足をかけ、よじ登る。そうしてから、カグラは振り

返った。

「それじゃあ、縁があったらまた会おうぜ。――相棒」

――浮遊感。

カグラの体が、墜ちていく。

ホムラが、何かを叫んでいる。戦闘機人たちが身を乗り出し、こちらを狙っていた。

カグラは、笑みを浮かべる。

「トモエ。遅くなったけど……伝えたぞ」

カグラは、呟き。

――その体を銃弾が貫いたのは、その瞬間だった。

第二十六話　伝えたかったもの（後書き）

伝えたかったことは、愛する人が残した言葉。
死の運命……果たしてそれは、変えられる運命なのか？

第二十六話です。更新が遅くなってすみません？

今回ですが、クライムの正体がバレました。補足ですが彼は死んだはずの人物で、管理局の闇そのものだった人物です。
もっとも、気付いた人は身を投げ出し、生死不明になりましたが……。

次回ですが、管理局側のお話を入れ、そこで第四部は完結になり、そこから最終部に入ります。
最後までお付き合い頂けると嬉しいです。
感想など頂けると嬉しいです。
ありがとうございます。

そして……少し気が早いのですが、次回作を書くかどうか、迷っています。
案が二つあり、『優しい嘘』の続編か、古代ベルカの戦乱を描くかで迷っている次第です。
ただ、『優しい嘘』はそれ一つで伏線も何もかも回収する予定です。
なので、蛇足と思われるかもしれないのですが……。
ご意見頂けると、嬉しいです。

では、次回予告を。

次回予告

唐突に幕を下ろした戦い。その結末は、決して良いものばかりではなかった。
迷い、悩み、それでも立ち止まることは許されない。
そして。
世界は、一つの『運命』を目撃する。

「その場しのぎなんだ、これは。僕は、もう……永くない」

次回、第二十七話
「矛盾、成り立たぬ道理」

第二十七話　矛盾、成り立たぬ道理

ため息が漏れた。ここ数日、まともに休む暇もない毎日のせいで疲れが溜まっている。

「……受け身ばっかりや。これやと、どうにもできひん」

仕方ないのかもしれないが、どうしても受け身になるのだ。

勝てるのか……そんな、弱気な気持ちがはやての心に沸き起こる。

今回の戦いの被害は甚大だ。旅団の構成員、そのうちの二割は負傷などで戦線離脱。その中にはファイムにソラ、ギンガといった主力メンバーも含まれている。

どこかで攻勢に転じなければ、削り取られる……今回の結果は、それを暗に示していた。

「せやけど、どうしたらええか……」

クラナガンは半壊。その復興もある。やることは山積みだ。

ふう、と、はやてがもう一度ため息を吐いた時。

「はやて！！」

ドアを蹴破るかのような勢いで、フェイトが入ってきた。はやては驚き、目を丸くする。

「フェイトちゃん？　どないしたんや、らしくあらへん――」

「大変だよはやて！！　ファイムが――」

はやての表情が変わる。フェイトは、叫ぶように言葉を紡いだ。

「ファイムが、病院から抜け出して行方不明なの！！」
「――何やて！？」
ガタン、という音を響かせながら、はやては立ち上がる。フェイトは頷いた。
「シグナムとヴィータが様子を見に行ったんだけど、病室にいなくて。昨日の夜のうちに抜け出したんだろうって」
「……ッ、何でそんな……」
はやては呟く。今回の戦いにおいて、最も重傷だったのはおそらくファイムだ。あまり言いたくはないが、命を繋ぎ止めているのが不思議なくらいの重傷だった。そんな、意識を失って眠っていた彼が、失踪？
嫌な予感しかしない。はやては拳を握り締める。フェイトは、頷いた。
「今、手の空いてるみんなで探してる。はやても」
「……せやけど、わたしは」
はやては首を振る。自分は、責任者だ。無責任に仕事を放り出すわけにはいかない。
そう――指揮官とはそういう仕事だ。
百のために一を切り捨てる。そうしなければならない。
「わたしは、ここの指揮官や。その責任を疎かにはできひん」
「……はやて」
「探したいよ。心配やよ。せやけど……許されへんのや。そんなことは」

俯きながら、絞り出すようにはやては言った。フェイトは、はやて、と彼女の名を呼ぶ。瞬間。

――パンッ！

乾いた音が響き渡った。はやては呆然とし、叩かれた頬を左手で撫でる。フェイトは、血を滴らせるはやての右手を握り締めた。

「本当の気持ちを隠しても、後悔するだけだよ、はやて。きっとね、ファイムを見つけることができるのははやてだけだと思うんだ。だから、はやては行かなくちゃだめだよ」

フェイトは、優しくはやての背中を押す。

「ここは任せて、はやて。……行ってらっしゃい」

「フェイトちゃん……うん、ありがとうな」

帽子を置き、はやては部屋を出る。フェイトは、ふう、と息を吐いた。

「本当に、はやても意外と素直じゃないよね……。私の出会いはどこにあるのかなぁ……」

苦笑し、フェイトは仕事に取り掛かった。

◇　◇　◇

聖王教会。

首都クラナガンにある総本山ともいうべき場所の一角で、彼は目を

覚ました。
――ウィル・ガーデンズ。
エリオ・モンディアルに敗北した彼は、目の前の光景に困惑する。
「ここはどこだ？　牢獄じゃねぇ……？」
世間一般の牢獄とは、鉄格子があって然るべきだ。しかし、ない。
それに、かなり整然としている。間違いなく、罪人を閉じ込めるような場所ではない。
何なのだろうか――そんな風にウィルが頭を悩ませていると。
「失礼します……あら、目を覚まされたのですね」
不意に、金髪の美女と、それに付き従う紫髪のシスターが入ってきた。そのうち、金髪の美女はウィルに微笑みかけると、上品に言葉を紡いだ。
「初めまして。ここ、聖王教会で騎士をしております、カリム・グラシアと申します。こちらは――」
「シャッハ・ヌエラです。シスターをしております」
シャッハ、と名乗った女性が頭を下げる。その自己紹介の後、では、とカリムが言葉を紡いだ。
「あなたのお名前、お聞きしても？」
「……ウィル」
「では、ウィルさん。無事に目を覚まされて良かった。この子も、お返ししておきますね」
カリムが言うと、黒い小さな物体がウィルのもとに飛来してきた。

受け止めたウィルは、思わず声をあげる。

「サリヴァ！？」

「キュウ～」

小型状態の飛竜――サリヴァルムが、嬉しそうにウィルにすり寄る。

カリムが、微笑みを浮かべた。

「流石に封印処理は施しましたが、それ以外は特に問題ないはずです」

その笑顔からは、悪意が伺えない。ウィルは、思わず問いかけた。

「あんた、管理局の人間じゃないのか？」

「一応、管理局にも席を置かせて頂いておりますが……あくまで私たちは教会の人間です。それとも、管理局の方が良かったですか？」

クスッ、と笑みを浮かべて言うカリム。ウィルは、首を左右に振った。

管理局は……正直、冗談じゃない。

だが、疑問が残る。あの赤髪の、エリオとかいう少年は管理局の人間のはずだ。それなのに、どうして自分は聖王教会にいるのか？

それが顔に出ていたのだろう。カリムは微笑みながら、大きな理由はございません、と言葉を紡いだ。

「とある優しい指揮官の配慮で、あなたをここに招いただけです。何かわからないことがありましたら、何なりと申し出てください」

微笑。カリムは、では、と言葉を紡ぐ。

「ご自愛ください」

そうして、部屋を出ようとするカリム。ウィルは、何かを言おうとして。

何も――言えなかった。

「……キュウ？」

……サリヴァが、小さな鳴き声を上げた。

◇　◇　◇

「……普通、男女の病室って別だよな？」

「普通はねー」

リューイの呟きに、隣のベッドにいるスバルがうんうんと頷く。リューイは、大きく息を吸い込んだ。

「なんでスバルさんと同室なんだコラアアアッ！？」

「病室ではお静かに！！」

「すんません！！」

全力で怒鳴りにきた看護師のお姉さんに、全力で謝るリューイ。

事ある毎に脱走を企てる彼は、病院内で要注意人物の扱いを受けている。

なので、看護師さんたちには頭が上がらないのだ。

「あははー、怒られたねリューイ」

「いや、てか……マジで、いくら何でもおかしくないですか？」

リューイは、はぁ、とため息を吐く。この間の戦いの時、リューイは大人しく病院にいたのだが、その戦いが終わった直後、スバルが運び込まれてきた。

外傷はそこまでだったが、魔力の過剰使用と疲労によってしばらく眠っていたのだ。

そして、リューイはというと……。

「あの、そこの二人？　睨むのやめてくれません？」

「「……」」

ウェンディ・ナカジマ。

ティアナ・ランスター。

この二人組に、看病（という名の見張り）をされ、気の休まる時がなかった。

二人は何らかの約束事を決めたらしく、交替しながら看病してくれた。それだけなら凄まじくありがたいのだが、しかし。

そう――しかしだ。

この二人は、あろうことかリューイの看病の理由をこう言ったのだ。

――『スバルを襲わせさせないため』と。

リューイは、はぁ、とため息を吐く。

「いや、だから。襲いませんて」

「「……」」

「いや、襲わないって！！」

「病院ではお静かに！！」

「すんません！！」

謝罪（本日二回目）。
――閑話休題。
落ち着いたリューイは、大体、と疲れたように言う。

「二人の間で俺はどんな印象なんですか？」
「女たらし」
「天然たらし」
「あはは……」

ウェンディとティアナの容赦ない言葉と、それに苦笑するスバル。
リューイは何だか泣きたくなってきた。

「泣いていい？　彼女なんていたことないのにこの仕打ちだよ？　モテない男にそれは酷くない？」
「「どの口が言うか」」
「こっちの台詞だ！！」
「病院ではお静かに！！」
「すんません！！」

謝罪（三回目。しつこい）。

「いい加減学びなよ、リューイ」
「いや、スバルさん。理不尽には反応しないと」
「理不尽なのはリューイッスよ」
「激しく同意ね」
「どこがだよ……」

リューイはため息。本当に、日に日にこの二人がわからなくなっていく。

以前、ミリアムに相談したら『マスターは子供ですね』と鼻で笑われた。いつか絶対泣かす。
心の中でそんな物騒な誓いをリューイが立てていると。

「……そういえば、ミリアムはどうッスか？」

不意に、ウェンディが思い出したように言った。リューイがああ、と声を漏らす。

「特に問題はねーって。安静にしとかなきゃなんねぇみてぇだけどな。ファイムが庇ったらしいな」
「……らしいわね」
「全くだよ。あの馬鹿」

リューイはため息を吐く。普通、ユニゾンデバイスとユニゾンした魔導師は傷を分け合うことで耐久力を上げる。だというのにそれを無視して、ユニゾンデバイスを守るとは……ファイムらしいが、正気の沙汰ではない。
だが、まあ。
それでこそ、ファイム・ララウェイだ。むしろそうしなければ、彼ではない。
ちなみに、そのファイムは……。

「更に、その馬鹿は行方不明と」
「どこに行ったんスかね～？」
「心配ね」
「捜しに行かなくていいのかな？」

三者三葉の返答が返ってくる。リューイは、まあ、いいだろと言葉を紡いだ。

「ミリアムは捜しに行ってるし。第一、俺たちじゃ見つけらんねーだろうしな」

くあっ、という気の抜けた声を漏らしつつ、リューイは欠伸をする。ウェンディが、かもしれないッス、と頷いた。

「見つけるのは、きっと――」

その先は、誰も口にしなかった。
する必要が、なかった。

◇　◇　◇

首都クラナガンにある、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院。そこは、緊急の避難所として使われていた。避難した家族と合流するため、掲示板に張られたいくつもの紙。それらを整理しているところに、声が響いた。

「なのはママ～！」
「ヴィヴィオ！」

駆けてきたヴィヴィオを、なのはは抱き上げる。二人の目には、薄く涙さえ浮かんでいた。

「ごめんね、ごめんねヴィヴィオ。ずっと、ずっとここに来れなくて」
「ううん、ママも無事で良かった」

――二人に、血の繋がりはない。だが。
どんな親子にも負けない絆が、ここにはある。

「なのは」

親子の再会。それを見守る役目は、一人の青年に与えられる。なのはは、顔を上げた。
そこにいるのは――ユーノ・スクライア。高町なのはをずっと支え続けてきた、世界の知識の管理人。

「ユーノくん……」
「なのは。こっちへ」

ユーノが手招きする。なのははヴィヴィオをおろし、手を繋ぎながらユーノについていく。そうして案内されたのは、一つの扉。ユーノは、ごめん、ヴィヴィオ、とヴィヴィオに言葉を紡いだ。

「少しだけ、待っててくれるかな？」
「……うん、わかった」

優しい笑顔。それに何かを感じたのだろう。ヴィヴィオは頷いた。
ユーノは、なのはを連れて部屋に入る。
――目の前に現れたのは、静かな広い部屋。
無数の、『何か』が詰まった袋が横たえられた場所。
大きさは大小様々。なのはが、ハッと目を見開く。

「これって……」
「苦いね。苦い……敗戦だ。僕たちは、負けたんだ」

ユーノは、絞り出すように言葉を紡いだ。その拳が、固く握り締められている。

「ヴィヴィオの友達も、僕たちの知り合いも、全員無事が確認できたよ。アインハルトや、リオ、コロナ、アイナさんはここに避難してもらってる。だけど」

ユーノは、なのはを見る。その瞳には、やるせなさと、悔しさと、怒りが込められていた。

「それで納得なんて……できないよね？」

「ユーノくん……」

「納得できないから、僕たちはこの世界に来て、管理局に入った。『エース・オブ・エース』は屈しちゃいけない。どんなことがあっても、不屈のエースであり続けなくちゃならない。だけど、なのはだって人間だ。か弱い女の子だ。弱音を吐きたい時ぐらい……あるはずだ」

だから、と、ユーノは言った。

だからこそ――

「ここなら、僕しかいない。僕が、支えるから。思い切り泣きなよ、なのは」

「ユーノくん……でも、私は、ダメ、だよ。私は……」

今にも泣きだしそうな顔で、膝をつきながらなのはは言う。

心が強いということは、褒め称えられるべきことだ。不屈の心。それは、誰もが憧れるものだろう。

しかし――時として、それが枷になる。

「いいんだ、なのは。泣いてもいい。いや、泣かなくちゃいけない。みんなを守る『英雄』であるからこそ、みんなと同じ『人』でなくちゃいけない。人を辞めちゃいけない」

その言葉は。

人を辞めてでも力を求めた少年を、示していた。

高町なのはは、そうなってはならない。

「ユーノくん、私、私っ……」

なのはの瞳から、涙が零れ落ちる。ユーノは、なのはを抱き締めた。

「私、守れ、なかった……み、みんな、頑張って、だけど、私、私は……っ！」

「……」

なのはの言葉に脈絡はない。本人の中でも、整理できていないのだろう。

――英雄の悲劇。

英雄は、人間として扱ってもらえない。始まりは肩を並べていたのに、いつしか誰もいなくなっていく。それを受け入れることができた者はまだいい。例えば、カグラ・ランバードのように一人でいることを受け入れた人物ならば。

しかし、なのはにそれを受け入れろというのは酷な話だ。

彼女は――誰よりも、人間なのだから。

だから、誰かが支えなければならない。

英雄が、自分自身を否定した時。それが――『死』を迎える時なのだから。

「――――――――！」

なのははは、泣く。
彼女が泣くのは、笑うのは、いつだって誰かのためだった。
孤独だった彼女は、そうして心配をかけないようにしてきた。
――しかし。
ここで彼女が涙するのは、自分のため。
自らのために泣くなのはを――ユーノは、初めて見た。

「大丈夫だよ、なのは」

ユーノは、なのはの瞳を真っ直ぐに見つめる。

「僕が支える。守ろう、絶対に」

――前線は退いた。もう、戦うことはないと思っていた。
だけど。
ここまで来てしまったならば、覚悟を決めなければならない。
ファイム・ララウェイの失踪。おそらく、彼は自分と同じ結論に至ったのだ。失われた楽園――それを、たった一人で。
だから。
ユーノ・スクライアは戦おう。
大切な人を、守るために。

「……」

二人の唇が――重なる。
決意の、証だった。

◇　◇　◇

「……本気で、見張りとかねぇんだな」

サリヴァを頭の上に乗せながら、ウィルは呟いた。彼は今、聖王教会の敷地内を自由に歩いている。特に見張りの気配もない。魔力封印もされていないので、特におかしなところはない。あるとすれば、デバイスがないことぐらいか。

「つっても、壊されたしな……」

思い出す。あの甘ったれの少年に負け、デバイスを壊された。完全な――敗北。

「……ちっ」

舌打ちを零す。結局、負ければそれまでだ。
生き恥――そんなものに自分はこだわらないと思っていたが。
どうも、腹が立つ。

「よっしゃ、みんな。戻るよ～」
「えー！？」
「なんでさソラ～！？」
「もっと遊ぼうよ～！？」

不意に、声が聞こえてきた。そちらを見ると、子供たちに囲まれた少年が一人、ボールを持って喋っていた。
ソラ、と子供たちに呼ばれる青年は、いやー、と苦笑した。

「俺も付き合ってやりたいんだけど、雨降るしな。仕事もあるし」

「雨なんて降ってねぇよ！」
「仕事いっつもサボってるくせに～！」
「なはは、きっついねぇ。けどま、雨は降るよ。――ほれ、雨の匂いだ」

――ポツッ。
ソラの側にいた女の子の頬に、雨の滴が落ちる。次の瞬間。

「わあ～！」
「きゃあ～！」
「ほらほら、戻らねーと風邪引くぞー」
「汚ぇ！　ソラの奴もう屋根の下にいやがる！」
「ずるいよ～！」
「いいから急げっての。お前さんらが風邪引いたら俺がカリムさんに怒られんだから」

パンパンと手を叩いて子供たちを誘導するソラ。子供たちはまた遊んでね、という言葉を残し、屋内に引っ込んでいった。ソラはそれを見送ると、ベンチに座っていたウィルのほうへ歩いてきた。

「お、目ぇ覚ましたか」

馴れ馴れしく声をかけてくるソラ。その顔を近くで見、ウィルは気付く。

「テメェ、旅団の――」
「お、サリヴァも元気か。ほれ、餌だぞー」
「キュウ♪」

サリヴァが一切の躊躇もなくソラの下へ飛来し、ソラが差し出した

餌を口にする。……一目でわかる。懐いているな。

「えーと、ウィルだっけか？　お前さんにも渡すもんがあるんだよ」

ウィルの言葉を無視して一方的にそう言うと、座りながらソラは何かを取り出した。受け取ったウィルは、目を見開く。

アルガンツァ――ウィルの、デバイスだ。

「シャーリーさんっていう優秀な人がいてなー。マリーさんは忙しくて手に余裕なかったみたいだし、助かったわホント。大事なもんだろ、ちゃんと持っとけ」

「……いいのかよ、俺はテメェらの敵だぞ？」

「いいんじゃない？　うちの大将がいいって言ってんだから。俺はしがない雇われだ。私情を挟む気なんてないし、そもそも『私情』なんて高尚なもん、持ってた記憶もない」

ソラの瞳が、変わった。

虚無。虚空を見つめるその瞳。

それは――『壊れた人間の証』。

「雇われ、って」

ウィルは、紡ぐ言葉が自分でも信じられなかった。

目の前にいるのは、管理局の人間。それなのに。自分は、管理局を肯定しようとしている。

ソラの言葉が、許せなかった。

「テメェ、管理局の人間だろ。平和だの平穏だの、耳当たりのいいことばっかり口にする、平和の守護者だろ？」

「……まさか敵に説教される日が来るとは。俺も異常だねぇ」

ソラは肩を竦め、膝の上に乗って丸くなっているサリヴァを撫でた。
そうしてから、俺は、と言葉を紡いだ。

「給料もらって働いてるだけだよ、俺は。それ以上の理由なんてないし、必要ない。給料に見合うだけの仕事をする。それ以外にすることなんてない。犯罪者も、俺と俺の周囲に迷惑かけないんならどうでもいい。ああ、捕まえろって言われたら捕まえるけどな。それは仕事だ」

「テメェ、は……それでも」

「肩書きなら、確かに『時空管理局本局戦技教導隊教導官』だけどな。重いんだよ。評価が不当に高過ぎる。俺はそんな器じゃない。もっとしょーもないがきんちょだ。『エース』でも『ストライカー』でもない。ただの欠陥商品だよ。適当な社会的な地位と給料をくれんなら、お前さんたちの味方してもいいくらいだ。……始まりは『憧れ』と『正義』だったさ。一応な。けど、そんなもん一瞬で消えちまった」

ソラは、だからいいんだよ、と言葉を紡ぐ。

「お前さんがどうしようと興味はない。いや、サリヴァは可愛いから愛でるけどな」

「……じゃあここで、テメェ殺す気でデバイス起動してもいいのかよ」

「そいつは困るな。ここはさ、俺の生まれた――違うな、育った場所だ」

苦笑を浮かべるソラ。どういうことだよ、とウィルが問いかける。
ソラは、別に大したことじゃない、と背伸びをした。

「よくある話だ。育てる根性も余裕も気合もねぇくせに産むだけ産んで、ここに棄てたんだよ。ああ、廃棄とは少し違うか。どの道一緒だけどな。……ま、そういうわけでな。ここで俺は生きてきた。つっても管理局入ってからは寮暮らしで、ガキ共の相手くらいしか最近はしてねーけどな。聖王教会の教えとやらにも興味はねぇし」

「育った場所ぐらいは守りたいってか？」

「おう。――『立派な人間』の真似事だ。上手いだろ？」

挑発するつもりでウィルが言った言葉に、ソラは正気とは思えない返答を返してきた。そのままソラは、笑っていない目のままに言葉を紡ぐ。

「口では言える。けどな、怒れるかどうかは疑問だ。結局、受け入れちまうんじゃねぇかな、って思っちまう。ここがぶっ壊されて、奪われたとしても。『ああ、仕方ない』ってな。……けどあれだ。流石に、今ここで暴れられんのは困る。ガキ共の居場所を失くしちまうわけにはいかねーんでな」

スッ、と、ソラの目が細まる。ウィルの背に、悪寒が走った。しかし、ウィルはそれに耐えて言葉を絞り出す。

「どうせ避難とかするんだろ。俺たちのせいでよ」

「……できる奴は、とっくに避難を終わらせてる。ここにいんのは、避難ができない奴らだ」

眠り始めたサリヴァを撫でながら、ソラは言う。

「俺と同じなんだよ。捨てられた奴ら。言いたかないけど、普通じゃないんだ。親がいないってのは。……いわゆる『普通の人間』が逃げるのでも手間取ってんのに、『普通じゃない人間』が逃げる余

地なんてどこにある？　ねーよ。そんなもん。だから、ここで暴れんのは勘弁して欲しい」

「……それでも、暴れるって言ったらどうすんだよ？」

「こうする。……ごめんなー、サリヴァ。汚れるとあれだしな」

ソラは立ち上がり、そして、雨の中に出る。

土砂降りの雨でぬかるんだ地面の上に立ち、ウィルを見据える。すぐ近くだ。しかし、二人を隔てる何かがあるかのように、二人の周囲は違う。

片や、濡れることもなく健在な少年。

片や、びしょ濡れになる壊れた少年。

――ジワリ。

打ちつけるような雨のせいだろう。両掌に巻かれたソラの包帯に血が滲む。しかし、本人は気にしていない。

「何を」

――土下座。

汚れることも、濡れることも一切合切の躊躇も見せず、ソラはそれをやってのけた。

「俺の頭にどれ程の価値があるかはわからんし、価値なんてないかもしれない。でも、わたしにはこれしかできません。戦いが起こってしまえばわたしの負け。ならば、わたしはこうします。惨めでも、みっともなくとも、無様でも、無残でも」

異常。あまりにも、異様。

――違う。

ウィルは、直感でそう思った。ソラの年齢はわからない。わからないが、自分とそう離れてもいないはずだ。なのに、こいつは。

「所詮、冗談だろ？　何やってんだよ」
「冗談かどうかは、わたしにはわかりません。私と貴方は違うのですから。理解など、できるはずがないのです。わたしはここを壊されたくはない。それだけです」
――歪んでいる。
土砂降りの雨の中、こんな風に土下座をする奴が、果たしてどれだけいるか。いない。いるはずがない。
誇り。プライド。おそらく、ソラの中にはその概念がないのだろう。いや、あるのかもしれないが、こんなに簡単に捨てることができるのであれば、それは『無い』のと同じである。
だから、ウィルは舌打ちをした。
「やめろよ。いいよ。暴れやしねぇよ」
「信じても？」
「信じろよ。いいから立てよ」
吐き捨てるようにウィルが言うと、ソラは立ち上がった。その服はずぶ濡れで、泥に汚れている。顔もだ。
ウィルは、あんた、と言葉を紡ぐ。
「あんた、結構偉い人間なんじゃないのかよ」
「望んでないんだけどねー。ま、相応しくないと思うなら勝手に奪ってくだろうさ。勝手に押し付けた時みたいにな」
ソラは吐き捨てる。その言葉は、暗に自身が上の立場にあると告げていた。
だから、かもしれない。
ウィルは、それを、問いかけた。

――秘密を。

「なあ、あんた。『魔力』って……何だと思う？」

「生命力」

ソラは、即答した。そのまま、言葉を続ける。

「正確には、『リンカーコアによって生命力が変換されたもの』だな。新陳代謝みたいなもので、普通なら特に問題ないが、フルドライブやらブラスターシステムやらを使うと限界を突破して魔力精製を行うため、結果的に寿命を縮める」

「知ってんのか？」

「今現在、病院抜け出して絶賛行方不明中の尊敬する先輩が同じこと聞いてきてな。調べた。ここ三日、無限書庫に不法侵入までしてな。いや、誰も彼も忙しそうにしてるおかげで楽だったわ。司書長も何故かいなかったし。……アルハザードがどうこう書いてあったから、眉唾もんかと思ってたけどな。どうやら、そうでもないらしい」

ソラは、静かな瞳で言う。ウィルは、そうだよ、と吐き捨てた。

「魔法は、命を食い荒らす。だから、俺たちは」

「魔法を――魔導を否定すると。成程ね」

「そうだ。管理局の、世界の嘘だこれは。知らない内に命を使って野垂れ死ぬなんて」

「ああ、だからお前らは質量兵器を肯定すんのか。戦闘機人も。んー、成程」

「そうだ。魔法を、管理局という偽善を否定するためだ」

吐き捨てるようにウィルは言った。ソラは、ふう、と息を吐き。

「――馬鹿じゃねぇの？」

思い切り、侮蔑の言葉を叩きつけた。ウィルが、なっ、と声を漏らす。ソラは、言葉を続けた。

「質量兵器ってのは、確かに引き金引くだけだ。残るのは後味の悪さぐらい。だがな、言っとくぞ。その代わり――凄まじい確率で相手を殺す」

「……ッ！」

「それに対して魔法は？　殺さず制圧する力。いいね。殺さない力だ。どっちがいいかは、俺には答えが出てるぞ」

ソラは言い切る。ウィルは、けど、と言葉を紡いだ。

「それであんたは納得できんのかよ？」

「できる。で、俺みたいなのに納得できるんだ。他の、誰かのために戦う魔導師連中も納得できるだろうよ。だって、自分が傷ついたら誰かを殺さなくて済むんだぜ？」

都合が良過ぎる。実にいい、と、ソラは言った。ウィルは、首を横に振る。

「自己犠牲なんて、そんなもんにどんだけの価値があるんだよ」

「自己犠牲？　馬鹿。それは違うぞ」

ソラは、一片の躊躇もなく、言い切る。

冷たい、瞳で。

「――それを覚悟と、呼ぶんだよ」

そこに立つのは、壊れた人間。

特に理由もなく、寄る辺もない身でありながら、命を削る魔導を是とする異端者。

ソラは、ちなみに、と言葉を紡ぐ。

「これ知ってんのは現場でも片手で数えられるレベル以下だと思うぞ。とんでもない封印かけてあったし。司書長も知らねーんじゃないかね？」

――だから、公表すればある程度の混乱は生じるだろう。

ソラは、言った。その上で、しかし、と言葉を紡ぐ。

「結局一緒だよ。変わらない。今の管理局なら、その答えに落ち着くさ。お前はどうなんだよ。己を懸けて誰かを守るのか。それとも、誰かを殺して誰かを守るのか」

要は、そういうことだとソラは言った。

「ま、幸い時間はあるみたいだし。じっくり考えな。脳みそがあって、材料も与えられたんだしよ」

ウィルは押し黙る。ソラ、という少年に、ウィルは言い返せなかった。

言い返すには、自分は、考えるということをしてこなかった。

「じゃあな。物事ってのは、多方向から見てみないとわからんことが多い。独り善がりほど、惨めなものはない」

ソラが、立ち去る。
ウィルは、黙って座ったままだった。

◇　◇　◇

「……」

――いない。
八神はやては、焦っていた。
シグナムやヴィータ、リィンやアギトにも手伝ってもらい、ファイムを探している。しかし、影さえ掴めない。

（首都内はエリアサーチで調べた。後は……郊外？）

はやては、顔を上げる。彼女が立っているのは、森林と市街の境界だ。
一歩踏み込めば、旅団設立のきっかけになった戦いのあった森林へと足を踏み入れることになる。それに対して、某かの思いを抱くわけではないが……。

「……まさか、なぁ」

呟く。こんなところに、いるはずがない。
いるはずがないのに――

「……」

八神はやては、足を踏み入れた。枝を踏む音が響く。生い茂る森がざわめく。
――自然の世界。
人が踏み入ることを拒絶する、その場所。そこを、はやては進む。
一歩、一歩と。
まるで、見えない糸に導かれるかのように。
そうして、三十分ほど歩いた時。

「……雨？」

冷たい何かが頬に触れ、はやては顔を上げる。
――雨が降り出す。
まるで叩き付けるような、雨が。

「……ッ」

はやては走り出す。どこか、雨宿りできる場所――いや、違う。
――こんな雨の中、ファイムを放っておけない。
まだ彼がいると決まったわけではないのに、いつの間にか、はやてはファイムがいると決めつけていた。
そして。

「……これって」

はやての目に、見覚えのあるものが飛び込んできた。
ナイトメア。はやてが持つ杖――シュベルトクロイツと同型の、ファイムの武装。
だが、美しい輝きを持っていたはずのそれはボロボロで、色もくすんでいる。

「……リンネ？」

その杖の先端に、小さな宝石が括り付けられていた。リンネクロウズ・ナイトメア。ファイムのデバイス。

「……アカン。停止しとる。せやけど、リンネがここにいるってことは……」

その二つを手に取り、はやては進む。少し先に、崖を見つけた。まさか――ゾッとするような想像が頭を過ぎり、はやては崖下を覗き込んだ。

――現実とは、得てして残酷なものである。

「――ファイムくん！？」

ファイムが――いた。

崖下に倒れ、薄く、その体の下には血が流れ出ている。

はやては即座に崖下に滑り降りると、ファイムに駆け寄った。その体は冷たく、開いた傷口からは血が滴っている。

「ファイムくん！　しっかりして！」

「……ッ」

漏れるのは呻き声のみ。はやてはファイムを支えながら、視線を周囲に送る。

――山小屋。

まるで、救いの神のようにそこにある場所へ、はやては急いだ。

◇　◇　◇

傷の応急処置は済ませた。しかし、体温の冷たさは魔法ではどうにもできない。
――歯痒い。

「……ッ」

苦しそうな呼吸。はやては、逡巡。
――温める方法。
古来より、有効な手段として一つの方法が確かにあるのだが……

「……迷ってたらアカン」

意を決し、はやてはファイムの服に手をかけた。ずぶ濡れの服。それを脱がすと、大小様々、新旧様々な傷が目に入る。
夏場であっても長袖のシャツを着、素肌を晒そうとしないファイム。その理由は、ここに尽きる。
醜いとは思わない。むしろこれは、彼が歩んできた道の証。はやては綺麗だとさえ思う。しかし――そう思わない人間もいるのも確かだ。
管理局とは軍隊である、と言ったのはカグラだったか。しかし、管理局は軍隊でありながら軍隊であることを秘匿する組織だ。あくまで、清廉潔白な正義の守護者でなければならない。
なればこそ、最近の風潮は実に厳しい。
辺境世界では表立った管理局を否定する動きが起こり始めているし、今回、備えとして他の世界へ避難してもらうという管理局の決定も、募ってきた不信が作用して難しくなっている。
ままならない。本当に。
ファイムは、彼は、そんなままらない世界を守るために傷ついて、

ボロボロになっていった。

「……」

はやては自身も服を脱ぎ、ファイムを抱き締める。温めるのは人肌が一番とは、古くから言われていることだ。

ファイムの呼吸は荒い。体は冷えているのに、傷は異様な熱を持っている。苦しいのだろう。辛いのだろう。

――そんなことにさえ、気付けなかった。

誰よりも側にいるつもりだったのに、共に背負うと言ってくれたのに。

辛い、という一言さえ、彼は発したことがない。だけど、どこかで助けを求めていたはずだ。

なのに――

「……ごめん、ごめんな、ファイムくん」

ファイムの頬に、はやての涙が落ちる。

弱音一つ吐かないことと、強いことは違う。

それはただ――耐えているだけだ。

張り裂けそうな心で、押し潰されてしまいそうな理性で、必死に、歯を食い縛って耐えているだけだ。

頼り方を知らないから。

迷惑をかけたくないから。

嗚呼、と、はやては思う。

自分が彼に惹かれた理由。そうだ、こういうことなのだ。

――似ている。

抱え込んで、押し潰されそうになって、だけど、迷惑をかけたくないから打ち明けられない。信じていても、話したところで見捨てられやないと友人や家族のことを信じていても、それでも臆病だから

打ち明けられない。
だから、惹かれた。
そして、話すことができた。
ならば――次は。

「やっぱり、わたし、甘えてたんやなぁ」

苦笑する。
優しさに、甘えていた。初めて弱音を吐けた相手だったから。受け入れてくれた人だったから。
しかし。
それも――終わり。
次は、わたしが背負う番。

「一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に進んで、一緒に悩んで――一緒に、堕ちよう？」

堕天となりし彼に、はやては、囁く。
遠くない未来――別離が待っている。それは、覆しようのない運命だ。
おそらく、彼はその時まで抱えていくつもりだろう。
――そんなことは、許さない。
大切だから。大切に想うから。その、別離までの時間を共に過ごしたい。最後の瞬間まで、隣にいたい。
そのために。
八神はやては、ファイムに問う。

「ファイムくん。あなたは――どこまで堕ちていったの？」

……。

……。

……。

「うっ……？」

ファイムの瞳が、薄く開く。はやては、ファイムくん、と優しく彼の名を呼んだ。

「はやて、さん……？」

「うん。目、覚めた？」

「ここは、どこですか？」

「山小屋、かな。まあ、詳しい説明の前に……勘忍してな、ファイムくん」

はやては、ファイムの脇腹に手を伸ばす。そして、そのまま思いっ切り握り締めた。

――傷口を。

「……ッ！？」

悲鳴にならない悲鳴を上げる。はやては笑っていた。

「我慢強いなぁ、ファイムくん。普通は悲鳴でも上げるもんやと思うんやけどなぁ」

「ッ、ちょっ、はやてさん？　なんか怖い……というか近い！？」

「目もばっちり覚めたみたいやな。ほな、いくで」

はやてはファイムの頭を両手で掴むと、真正面から見据えた。笑顔

だが、額に青筋が浮かんでいる。
そして。

「――何をしとるんやアホッ！！」

鼓膜が破れるんじゃないかというぐらいの大音量で、ファイムは怒鳴られた。耳鳴りがする。

「どれだけ、どれだけ心配したと思ってるんや！！　いきなりいなくなって……わたしが、どれだけ……ッ！！」

はやての瞳から、涙が溢れる。ファイムは、どうしていいかわからない。

「支えてもらってばっかりで！！　頼ってもらえんくて！！　そんなに頼りないんか！？　わたしっ、わたしは――」

「頼りなくなんか、ない」

はやての言葉を遮り、ファイムは言った。そうして、苦笑する。

「……急に、怖くなったんだ。僕は、また、負けてしまった」

敬語をファイムは用いない。二人きりの時の、暗黙のルール。

「こんな風に成り果てても、負けてしまった。このままだと僕は、僕の敗北に誰かを巻き込む。それが怖くなった。僕にできることをすればいい。僕が、僕として戦えばいい。ファイム・ララウェイの戦いをすればいい――そう決めていたのに、僕は何もできないのか

もしれない。そう思うようになった」

擦り減っていく寿命。強引にそれを引き伸ばし、人であることを否定までしてここに至った。

――しかし、通じない。

「何のためにこうなったのか、わからなくなって。だけど、どうにかしなくちゃいけないって気持ちもあって。どうにもならなくて。気付いたら――歩き出してた」

弱いことと、気付いたこと。すぐにどうにかしなければならないこと。

それが頭の中を巡って、気が付けば、動き出していた。

「……本当に、怖くなってきたんだ。考えたくない。僕のせいで――誰かが死ぬなんて」

死は恐怖だ。近づいてくることがわかっている今は、毎日恐怖に怯えている。

しかし――それよりも。

自分が弱いことで誰かを――はやてを死に巻き込んでしまうことのほうが怖い。

「僕一人ならいいんだ。僕一人なら。だけど、誰かを死なせることだけは嫌だ」

そうしないために、こうして戦っているはずだから。

守るために、人であることを捨てたのだから。

まあ、それも結局はその場しのぎだが。

「……僕の寿命については、話したよね、はやてさん」
「うん。少し、喧嘩した」
「あの時、検査しても異常は出なかった。だから、はやてさんは引き下がってくれたけど……あれには、はやてさんが予想してた通りに裏がある」
「裏？」
「うん。僕は――人であることを、捨てたよ」

ファイムは、驚くほど平坦な声で、そう言った。

「見た目は変わらないんだけど、存在そのものが変質してる。古代魔法を使って、契約したんだ。ユーノさんとアルフさんに協力してもらって。それなら寿命を延ばせると思ってね。企みは成功した。だけど、失敗した」

はやては何も言わない。ファイムは、天井を見上げながら言葉を紡ぐ。

「壊れかけの体のまま、この世界に固定されたんだ。『壊れかけの状態が正常』として。上手くいかない。本当に、本当に少しだけ終わりが延びただけ。ままならないなぁ」

覚悟はしていたけど、と、ファイムは呟いた。はやては、絶句している。
それは、そうだろう。
テンリュウが言っていた、気が狂うような痛み。それを、ファイムは抱えたままだというのだから。しかもそれは治ることがなく、固定されてしまったなどと。

「その場しのぎなんだ、これは。僕はもう……永くない」

ファイムは、静かにそう告げた。そう告げてから、はやてに自身がどういう存在であるかを語る。
倒れないために、世界と契約するという手段を求めたこと。
『概念』となることで自分を世界に固定するものは肉体ではなくなったため、その分、寿命が延びたこと。
そして。
自身を固定するための要因として、『八神はやて』と『自分自身』を選んだこと。

「『ファイム・ララウェイが存在するからファイム・ララウェイは存在する』――酷い矛盾だ。世界が気付けば、排除される。だから、勝手だけど、はやてさんに頼ったんだ」

手を伸ばし、ファイムははやての手を握る。
矛盾した論理。成り立たない道理。それがまかり通る時間は、きっと僅か。
それが否定された時、きっと。
八神はやてが――文字通り、『全て』になる。

「頼ってないなんて、あり得ない。はやてさんが生きててくれれば、僕は存在できる。僕は、そういう存在になった」

だから、誰よりも頼りにしているのだと、ファイムは言った。
はやては、せやけど、と首を振る。

「もう、永くないって……」
「それも真実。元々、そういう運命だったんだ。少しだけでも延ばせたのは、僥倖だよ。運命は変えられるかもしれない。だけど、死の運命だけは変えられない」

それを変えようと思えば、永遠に至るしかない。
その代わり――すべてを失うが。

「だから、怖いんだ。ここまでして、こんな風になって。こんなところまで堕ちてきて。それでも、守れないかもしれない」

そうして、気付いたら一人で歩き出していた。
本当に、どうしようもない。
何も――できやしないのに。
はやてが、ポツリと、呟いた。

「……ファイムくん。やっぱり、アホやな」

はやての額が、ファイムの胸元に触れる。

「ファイムくんは、何度も何度もわたしを助けてくれたよ。わたしを守ってくれたよ。わたしだけやない。ファイムくんは、多くの人を守ってきたんや。誇らなアカン。わたしは、わたしが好きになった人がファイムくんで、本当に良かったって思う。だって、ファイムくんならわたしを――わたしたちを守ってくれるって、信じられる。強さなんて関係ない。いつだってファイムくんは、足掻いて足掻いて戦ってきたやないか。戦ってきてくれたやないか」

はやては、顔を上げ、微笑む。

「誰かのために。それだけをずっとずっと願ってきたあなただから、わたしは信じることができるんや。そして――だからこそ、支えたい。堕ちた、って言ったやんな？　引っ張り上げる、とか、そういうことができたらええんやけど、それができてもわたしはせぇへん

よ。だって、それはあなたが歩いてきた結果やから。わたしも一緒に堕ちる。隣にいる。わたしは、どんなあなたでも誇りに思う。大好きな人やから。大切な人やから。だから、隣で一緒に歩いていきたい」

「はやてさん……」

「守れないかもしれへん？　違うやろ。守るんや。守れるはずや。ファイムくんは、わたしが惚れたファイム・ララウェイは、それができるはずなんや。頼むよ、ファイムくん。弱音はいくらでも吐いてくれたらええ。受け止める。いくらでも一緒に悩む。泣き続ける。だから、自暴自棄になって、一人で戦おうなんて思わんといて」

はやては、ファイムの手を握り締める。

まるで、ファイムを逃がさないとでもいうかのように。繋ぎ止めるかのように。

「わたしを守って、ファイムくん。わたしが、ファイムくんを繋ぎ止めるなら。ファイムくんが、わたしを守って」

守り合う。二人で、共に。

本当に、強い人だと、ファイムは思う。

きっと、はやては理解している。ファイムがもう、残り少ない命でいることを。延ばせるのは、本当に僅かな時間だと。

それでも、こんな風に言葉をかけてくれる。

本当に――この人は。

「あなたを、愛すること。愛する相手に、あなたを選んだこと」

ファイムは、微笑み。

「――僕は、誇りに思います」

唇が重なる。
戦いの時が――迫る。

◇　◇　◇

「……思ったより、時間がかかったようだね」
「流石に、『聖人の末裔』相手だとどうもね～。まあ、終わらせたけどさ。キャハハ♪」
「それで、彼女は？」
「んー、固定されてる空間ごと持ってきたよ」
「成程。まあ、あれには触れられれん。それが正解だ」
「空間そのものを固定、だっけ？　無茶苦茶だよね、理論の理の字もわかんないや。これがホントの魔法、だね」
「この時代の魔法は、命を代償とする『技術』と言ってもいい。概念的には『魔術』のそれだ。しかし、彼女のあれは違う。一つの『世界』を構築するだけじゃなく、あの刀を中心に空間を固定するなど……魔法と呼ぶ他に、表現方法が見当たらない」
「ま、どっちにせよこれが起動して、帰ってくれれば……どれほどの力を持とうと、ただの奴隷に成り下がる」
「そうだ。たとえ『最強』であろうと、いや、『最強』であるからこそ、しがらみからは逃れられない。……さて、始めようか。世界に問おう。管理局は必要であるか否かを。そして示そう。魔導に――何かを守る力などないのだと」

その日。首都クラナガンから伺える海上に、一つの巨大な建造物が出現した。
古代神話の塔のような佇まいをしたそれは、圧倒的な巨大さと雄大

さをもって、世界を圧倒する。

「さあ、歴史の始まりだ！　闘争の始まりだ！　正しきを主張するならば、力を見せ給え！」

それは、封印されたもの。
失われた、楽園。
失楽園――シャングリラ。

「開戦だ」

第二十七話　矛盾、成り立たぬ道理（後書き）

誇り。人間が人間であり続けるために大切なもの。
人を想うことを誇りとする者もあれば、その誇りがない者もいる。
しかし、個人の理由など捨て置き、世界は廻る。廻っていく。
決戦は、失われた楽園で。

はい、第二十七話です。楽しんで頂けましたか？
今回はインターバルの回ですね。そして、第四部が完結です。第四部は、近付くようで近付かない二人の距離を意識しました。二人は純粋です。そして、相手を思いやり過ぎる。
しかし、そんな二人もようやく、もう一歩近付けました。
あなたを好きになったことを、誇りに思う――言ってみたい台詞です。

さて、次回から遂に最終部です。『優しい嘘』――始めてから、もう少しで半年になります。ここまで付き合ってくださった皆さん、本当にありがとうございます。
誰もが納得するエンディング――理想かもしれませんが、未熟な私にそれは難しいと思います。しかし、バッドエンドにはならないと思いますので、どうかよろしくお願いします。
感想、ご意見、質問等、いつでもお待ちしています。
本当に、感想を頂けるとモチベーションが上がって……。
次回作については、完結の時にまた、お聞きするかもしれません。

それでは、次回予告を……と言いたいのですが、次回からは予告なし。タイトルだけでいきます。
基本的にバトル、そしてシリアスになっていきますので、ご容赦を。

では、次回。
第二十八話
「失楽園、終焉の地」

第二十八話　失楽園、終焉の地（前書き）

運命の定義。

それは、抗えないというたった一つの真実。

しかし、運命にいかほどの価値があるのか。

未来など――人間にはわからないのだから。

戦いの意味。

戦いの理由。

全てを内包し、世界は震える。

終焉か、存続か。

――深淵に座し、キミを待つ。

第二十八話　失楽園、終焉の地

数多の剣戟が、世界を揺らす。
常人には視認さえ困難な速度で繰り広げられる、世界最強同士の戦い。
それは、概念と化し、滅びることは有り得ない世界を軋ませる。

「……！」

視線が交錯。
戦いが始まってから、約三日の時間が流れている。テンリュウの魔力は、この世界に貯蔵された『死』であるが故に、理論上限界はない。万を超える人間の命を、どうやって崩すというのか。
――『唯一人からなる無敵の軍勢』。
人の形をした軍勢に、個人が勝てる道理はない。

「流石は、我が師。しかし……その身は最早、師の残滓に過ぎない。なればこそ、我が刃を持って終わらせましょう」

収束する魔力。技も何もない。
ただ渾身の力を込めた、全力の一撃。
終わりには、それが相応しい。
技という技を、魔法という魔法をぶつけ合った先に待つのは、純然たる力の勝負。

「参る」

――轟音。
テンリュウが蹴り飛ばした地面が凄まじい音を立て、爆散する。対

し、ロードも応じる構え。
そして。
二人は、激突する。
……結果は。

《視えてた結末とはいっても、ね。やっぱり……後味悪いわ》

デバイスたる『桜花』が、苦笑混じりに言う。
その刃は、深々とロードを貫いていた。
――ポタリ。
『桜花』を伝い、血がテンリュウの手に触れる。生暖かい血。
それは、この人が生きている証。
されど。
意志を奪われた者は、生きていると言えるのか。

「――見事」

不意に、声が聞こえた。テンリュウは、弾かれたように顔を上げる。
そこにあるのは、ロードの顔。
しかし、それは何もない、意志さえない人形のものではなく。
掠れ、風化しようとしていた記憶の彼方にある、『あの方』の笑顔。

「一人で、やっていけるのかと心配していたが……杞憂だったようだ。私を超えてくれた。師として、先達として、これ以上のことはない」
「師……本当に、あなたは……」

テンリュウの瞳には、戸惑いがある。ロードは、微笑んだ。

「何の奇跡か、それとも因果か……。理由はわからない。けれど、私はこの僅かな時間だけは、私でいられる」
「あ……ああっ……師、師っ……」
テンリュウの、『桜花』を握る手から力が抜ける。今にも、取り落としそうになる。
それを――
「――手を離すな、『神道天龍』」
ロードが、遮った。彼は、血を吐き出しながら言葉を紡ぐ。
「この世界は理不尽の塊だ。だからこそ、目を逸らしてはならない。お前の歩んだ道を、否定するな」
ロードは、そうしてから、苦笑する。
「泣くな、全く。泣かぬ為に、お前は私から引き継いだのだろう？　涙もろいところは、成長せぬか？」
「師……私は……」
「この結果を後悔しているのか？　大丈夫だ。私は死した身。何の冗談か、意識なき中でお前と戦い、こうして意識を取り戻した。だが、死んだ身なのだよ、私は。死者は二度死なない。お前は、私を殺したわけではない」
優しげな笑み。ロードは、テンリュウ、と呟くように自らの後継者の名を呼ぶ。
「見事。強くなったな。誇りに思う」

――――。
音もなく、ロードの体が崩れていく。砂になり、サラサラと砕けていく。
別れの時。
そもそもが、存在しないはずの人物だ。消え行くのは、道理である。
「二度、弟子に――後継者に看取ってもらうのは、僥倖なのかもしれん」
ロードは微笑む。満足だ、と。
その先の終わりを、受け入れて。
テンリュウは、師、と必死に言葉を紡ぐ。
「――ありがとうございました」
その言葉を。
ずっとずっと、それだけを言いたかった。
膨大な魔力を持って生を受けたために、忌み嫌われ、奴隷として売られた幼少時代。
正直――明日など、見えやしなかった。
そこから、師が救い出してくれた。
そして、一人で生き抜く術を教えてくれた。
なのに、伝えられなかったから。
泣き叫ぶばかりで、何一つ、伝えられなかったから。
「あなたのおかげで、私はここまでこれました。本当に、本当にありがとうございます。……伝えたかった。これだけを、たったこれ

だけを」

ロードは、呆気に取られたような表情を見せ。
そして、微笑みを浮かべる。

「礼を言うのは、こちらもだ。……テンリュウ。お前は、自分の名を覚えているか？」

砕けていく体。そちらには少しも気を払うことなく、ロードは問いかけてくる。テンリュウは首を左右に振った。
ロードは、そうか、と呟く。

「……師として、最後の教えを送る。自らの名を、思い出せ。世界の鎖を引き千切るために」

ロードは微笑む。微笑み、天を仰ぎ見た。

「随分と長く、我らという存在は生きてきた。……そろそろ、終わるべきかもしれん」

呟くように、そう言って。
ロードは、ではな、と言葉を紡ぐ。
最早――首から上しか、残っていない。

「先に、地獄で待っている。なに、すぐだ。待つのは、膨大な未来がお前を押し潰すまでの、ほんの僅かな時間に過ぎん」

そして、その姿が塵と消える。
後に残るのは、紅の血。
そこにいた、証。

本来ここにいるはずがない男は、骨さえ残さず、消え去った。
まるで――最初から存在しなかったかのように。
そして。
不意に、あらゆる『神道天龍』を見てきた存在が、言葉を紡いだ。

《泣き叫ぶと思ったけど、ね。泣かないの？》

テンリュウの瞳から、涙は消えていた。
むしろその瞳には、凄まじいまでの意志が宿っている。
燃えるように激しい、意志が。

《泣いてもいいのに。待ち望んだ奇跡が、本当に奇跡みたいに叶って、嬉しさと虚しさでいっぱいのくせに》
「……そうですね」
《どうせ、あたししかいないんだよ？　泣いちゃいなよ》

『桜花』は言う。茶化した調子で、優しく。
テンリュウは、微笑んだ。

「そうしたいところですが、それはできません。今、涙すれば……立ち上がれなくなる。それはできない。私には、やらなければならないことが残っています」

『桜花』を振るう。血が飛び散り、世界が歪む。
そう……まだだ。
泣くのは、まだ。

「初めてです。――心の底から、誰かを殺したいなどと思ったのは」

◇　◇　◇

――轟音が、空間を支配した。放たれる衝撃波が、壁にひびを入れる。
地面に突き立てられた『血桜』を抜き放ち、テンリュウは前を見る。
そこにいるのは、二人の敵。
クライム。
グリス・エリカラン。
一時は味方と受け入れたが、今は違う。

「クライム。グリス・エリカラン」

圧倒的な密度を纏った魔力が吹き荒れる。展開されるのは、命を使う術式――オリヴェント式。
テンリュウ自身の魔力は、ほとんど使ってしまっている。回復を待たねばならない。
だが、それがどうしたというのか？
彼女の宿す『世界』には、万を超える命が貯蔵されている。
それがそのまま『神道天龍の命』であり、『力』だ。
限界など、ありはしない。

「私は、あなたたちを許さない」

騙されていたこと、利用されていたこと――それも腹立たしいが、それよりも。
あの方を。誰よりも尊敬するあの方を辱めたことだけは、許さない。
『最強』を、『神道天龍』を侮ったこと、後悔させよう。

「その死をもって償いなさい。――あなたたちには、手向けの言葉

さえも必要ない」

そして、刃が振るわれる。
目指すは――クライムの首!!
『桜花』を右腕で。『血桜』を左腕で振るう。挟み込むように狙った一撃。必殺のそれはしかし、結果を見せない。

「……ッ!?」

ピタリと、そんな擬音が相応しいような形で、刃が止まった。
意志に反し、体が。
まるで、それを拒否するように。

「――普段の冷静なキミならば、戻ったその時に気付いただろう。だが、気付かなかった。それが敗因だ」

クライムの右手が、テンリュウの眼前に翳される。
――閃光。
放たれた一撃は、テンリュウを吹き飛ばした。……大したダメージはない。しかし――

「私はキミが加わると聞いた時、真っ先に考えた。『最強』の力は頼りになる。だが、キミはいつか必ず私に刃を向けるのがわかっていた。ならば、どうするか。……そう、『ここ』だ。この場所が――この失われた楽園こそが、解答だ」

クライムの陰から、一人の少女が歩み出る。
アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント。
『神道天龍』が守るべき『聖人』であり、『失楽園シャングリラ』の主。

「正確には、『聖人の末裔』こそが答えだが……さして変わることではない。いずれにせよキミは、この場所では奴隷に過ぎん」
「……アリアに、アリアに何をしたのです！？」
テンリュウが吠える。アリア――人見知りをするその少女は、決して明るい性格ではない。
しかし。
あんな、死んだ目をするような子供でもなかった。
「キャハハ♪　お侍さん、あなたがそれを聞くの？」
笑い声。あまりにも不快なそれを発する人物は、クスクスと笑い続ける。
「ボクを誰だと思ってるの？　グリス・エリカラン。人の心なんて、ボクにとっては玩具と変わらない。まあ、流石に苦労したけど……やれやれ、『先代』然り『聖人』然り、どうして化け物はこんなに扱い辛いんだろうねぇ？」
肩を竦め、ケラケラとグリスは笑う。
「あなたは……どこまで……ッ！！」
テンリュウは、グリスを狙い、刀を振るう。
しかし、再び、止まる。
――『隷属』。
『失楽園シャングリラ』の内部において、『神道天龍』は何があっても『聖人』に逆らえない。『聖人』が殺すなと命じれば、何があっても殺すことはできない。

そう、たとえ相手がどれほど憎かろうと。
――それが、制約。
力の代償として背負うことになった、鎖だ。

「いい表情。キャハハ♪　いいねぇ、ホント楽しい♪」

グリスから、魔法による砲撃を受ける。
ダメージはない、ないが……これでは。

「アルハザードでさえ、文献でしか見ることができない力、『運命改変』……破格の力だ。『刃が振るわれる』という運命をねじ曲げ、『刃が止まる』という運命に帰結させる。キミを縛るこの力は、確かに人には許されん力だ」

だが、扱う者が未熟に過ぎると、クライムは言った。

「ウィル・ガーデンズ……彼が死んだと告げただけで、心を閉ざした。哀れなものだ」
「なっ!?　あ、あなたは……あなたは本当に人なのですか!?」
「人だよ。いっそ人外であったならば……私は、こんな風にはならなかっただろう。憂うことさえ、なかったかもしれん」

クライムは首を振る。
テンリュウは、再び跳ねた。
――しかし、届かない。
幾度刃を振るおうと、その刃は届かない。
撃ち込まれる何発もの魔法。それはダメージこそ大したことはないが、心を削り取っていく。
そして、遂に。

「――――」

カラン、と、音が響いた。
テンリュウの手から、『桜花』と『血桜』が滑り落ちる。
その身体は、鈍く輝く鎖に繋がれていた。

「キミにはまだ仕事がある。なに、大したことではない。中枢を守ってもらうだけだ」

運命――世界の一部であるテンリュウは、本来ならそれとは切り離された存在だ。
しかし、このように例外はある。
打つ手は、ない。

「恨むのであれば、恨むがいい。だが、その刃が私たちに届くことはない」
「キャハハ♪　残念無念～、ってね♪」

二人はアリアを連れ、出て行く。テンリュウは、必死に言葉を紡いだ。

「卑怯な……あなたたちには、人としての誇りすらないのですか！？」
「キミのように強いのであれば、誇りで己を律する必要があるかもしれん。だが、我々は弱者だ。弱者に誇りなど、求めるものではない」
「あなたたちが弱者など、そのような戯れ言を誰が信じるのです！？　私と戦いなさい！！　今ここで！！」

テンリュウの叫びは、しかし、届かない。

「その必要はない。――さらばだ、誇り高き侍。ここが、キミの終着点だ。キミの主に代わり、私が言葉を贈ろう」

クライムは笑みを浮かべ、言い放つ。

「――大儀であった」

そして、二人が立ち去り。

テンリュウを縛っていた鎖が、消え失せる。

「ああ、あっ……！！」

怒りと、やるせなさと、虚しさと。

ぐちゃぐちゃになった感情が、爆発する。

「あああああああああああああああああああっっっ！！！！！！！！！！」

◇　◇　◇

墓地。

荒れる世界においても、ここだけは静かなままだ。

「……」

八神はやて准将。

第１０８魔導旅団兵団長。

今や、管理局の要の一人となったその人物は、そこに佇んでいた。

「はやてさん……いえ、八神兵団長」

その背に、声がかけられる。

ファイム・ララウェイ。

管理局一佐相当執務官。

地上において英雄と謳われる、英雄。

この二人がその身に纏うのは、いつもの制服よりも威圧感を纏った、軍服。

「指令です。第１０８魔導旅団は、あの巨大な浮遊要塞――『失楽園シャングリラ』を制圧、破壊せよと」

「軽く言うてくれるなぁ……。あんなとこに、どうやって行けばええんや」

はやては苦笑する。ファイムは、一応、と言葉を紡いだ。

「はやてさんの艦……『ヴォルフラム』は使用許可が下りました。逆に言えば、それしか許可は下りていません」

はやての艦である、『ヴォルフラム』――次元航行艦としては確かに優秀な艦だが、いかんせん規模がそこまで大きくはない。旅団全員を運ぶことは、おそらくできない。

「運べて半分、ってとこやろね。……まあ、元々守りに残さなアカンかったさかい、変わらへん」

「そうですね」

ファイムは頷く。仕事の上で、二人は上司と部下である。その辺り

の節度は守らなければならない。
お互いのためにも。

「報告は以上です。……急ぎましょう。タイムリミットまで、あと20時間しかありません」
「うん。せやけど……少しだけ、待ってくれへんかな？」

ファイムに背を向けながら、はやては言った。ファイムは、はやての隣に立つ。
そうして――言葉を紡いだ。

「墓標、ですか」
「うん。名も無き者たちへの手向けや。……無意味、と思う？」
「いえ」

ファイムは首を振る。名も無き墓標――それは、敵の戦闘機人たちが眠る場所だ。
先の戦いにおける被害は、互いに甚大だった。
死者も負傷者も、凄まじい数を数えることになる。
そんな中、誰に言われたわけでもなく、いつの間にか戦闘機人たちを皆が供養していた。
道具として生み出され、道具として使い捨てにされた彼ら。
そして、命を落とした一人の復讐者も、ここに眠っている。

「人って、変な生き物やね。自分たちのことで精一杯のはずやのに、こんな風に敵だったはずの相手を弔ってる」
「その、どうしようもない甘さが、人が人である所以でしょう」
「うん。……愛情も、憎悪も、人であるからこそや。だから、受け止めよう、って思って」

はやては、墓標に手を触れ、呟くように言う。

「エレンな。わたしを、最後まで恨んでたんやって。うん、やっぱり……少しだけ、辛いかな？」

「そうでしょうね。憎悪というのは、深い感情です。消えるようなものではありません」

エレン・ローグ……いや、リストリア。

スバル・ナカジマと戦い、敗北。その後、自殺したという。

その、死を選ぶ瞬間、彼女は言ったらしい。

――『絶対に許さない』。

八神はやてに対する憎悪のみを残し。

彼女は、死んだ。

償いの機会は、永遠に失われた。

ファイムは、言葉を紡ぐ。

「……しかし、あなたは生きています。生きているならば、前に進まなければならない。あなた自身のためにも、立ち止まってはなりません」

「――うん。わかってる。わたしには、背負うものがある。立ち止まるのは、今やない」

バサッ、と、マントを翻す。そうしてから、はやては言葉を紡いだ。

「行こう、ファイムくん。こんな悪夢、いい加減終わらせなアカン」

はやては、遥か遠くにありながらも、圧倒的な存在感を放つ『それ』を見据えた。

失楽園、シャングリラ。
運命などという、途方もないものを操る、絶対的な存在。
しかし、そんなもの――『運命』など、なんのことはない。

「運命だのなんだの、ややこしい御託を並べたところで恐れなんか抱く必要もあらへん。未来はわからへんのや。始めからわからないのなら、変わろうとどうなろうと関係あらへん」

それに、と、はやては言った。
それに――

「運命を、未来を創るのはわたしたちの役目や。あんな……過去の異物の役目やない」

そして、はやては宣言する。

「――世界を、救うよ」
「了解しました」

ファイムは敬礼する。
賽は投げられた。どんな結末かはわからない。わからないが。

――もう、戻れないのは確かだった。

◇　◇　◇

『この誤った世界に生きる諸君。また会うことができて光栄だ。
そう、私だ。

先の戦いは、よく持ちこたえた。しかし、その代償は大きい。……残念だ。結果として、かの『英雄』をも討つことになるとは。

だが、これで我々の覚悟はわかってもらえたと思う。そして、その覚悟の成就のために用意した最大にして最後の切り札が、キミたちが今目にしているものだ。

――失楽園シャングリラ。

運命を変える力を持つ、古代ベルカのロストロギアだ。『聖王のゆりかご』が最強の質量兵器ならば、こちらは『最悪の兵器』だ。

しかし、我々は一方的な戦いを望まない。キミたちにも主張があるだろう。だから、我々は戦いを申し出る。

今より４８時間後――ミッドチルダに三発の核兵器が落ちる手筈になっている。その威力については、説明も必要ないだろう？

――ミッドチルダは、消滅する。

止めたければ、ここに来い。ここに至れ。

失楽園シャングリラを破壊すれば、核兵器も作動しない。

さあ……決戦だ』

――プツッ。

２０時間以上も前に電波ジャックによって流された映像を切り、クロノはため息を吐いた。彼は今、彼が指揮するＸＶ級次元航行艦『クラウディア』に乗り、ミッドチルダに向かっている。

「……動き出すまでに、２０時間以上もかかるとは……」

腕を組み、クロノは苦々しく呟く。どうしようもない、本当に。

これだけの緊急事態でありながら、本局の対応は呆れるほどに遅かった。はやてたち旅団が先行して『失楽園シャングリラ』に向かうこと、ミッドチルダの住民を避難させること……それを決めるだけで、一日以上はかかっている。

先行、という言い方をしたが、実質向かえるのははやてたちだけだ

ろう。
時間が無さ過ぎる。

「会議は踊るか……言いたくはないが、今の僕はお前と同じ気持ちだよカグラ」

行方不明となった友へ、言葉を紡ぐ。
あの男が、大人しく行方不明に甘んじているとは思えない。それが意味するのは――

「……だが、言っても仕方がない。――頼むぞ、みんな」

管理局への不信は置き去りに。
クロノ・ハラオウンは呟いた。

◇　◇　◇

「『失楽園シャングリラ』に突入するんは、第一連隊と第一砲兵隊を中心に、ララウェイ隊長、高町隊長、ヴィータ隊長たちＡＡランク以上の精鋭や。……本来なら、全員で突入したいところやけど、そうもいかへん」

大画面が展開される。そこに映るのは、無数の黒い影がこちらに向かって飛来してきている光景だ。
戦闘機人と、ＪＳ事件の時に現れたガジェットとはまた違う形の、機械兵器たち。

「首都防衛にも手を回さなアカン。そのために、一時的に第二大隊

と第三大隊を統合、ゲンヤ・ナカジマ参謀官に指揮を任せます。第二、第三砲兵隊は参謀官の指揮下で援護を。ハラオウン隊長の飛行隊は、前線の切り込みや。できるだけ、敵を首都の前で食い止める」

はやては、決戦前に指示を出す。出しつつも、後手に回っていると歯噛みしていた。

だが、そもそも全員を運ぶことは叶わないのだ。ならば、若干突入の方に戦力を分けた上で、痺れを切らしたかのようにこちらに向かってくる敵の団体の相手をしなければならない。

「わかっとるとは思うけど、この戦いでこの世界の存亡が決まる。全員、心して戦うんや」

その場に集う部下たちの顔が引き締まる。

思っていたより、この旅団を率いる時間は長くなかった。しかし、戦争など案外そんなものだ。

むしろ、ここまでついてきてくれた彼らに、礼を言いたい。

「――ここまで、よくついてきてくれました」

――頭を下げる。

俄に、場がざわめく。

「わたしは、未熟者や。一人では、張り子の虎に過ぎひん。せやけど、みんなが支えてくれたから、わたしはこの場所にいる。……そして、そのわたしたちを支えてくれてるのは、わたしたちが守らなアカン人たちや」

顔を上げ、はやては言う。

「管理局が間違ってるかどうかなんてわからへんし、興味もあらへん。せやけど、わたしにも、わたしなんかでもこれだけはわかる。……わたしたちを支えてくれてる人たちは、宝や。わたしたちが戦わなアカン相手は、そのみんなの『笑顔』を偽りと呼んだ。それが――わたしは許せへん」

そう、それだけが。
ずっと、引っかかっていたことだ。
何が、虚偽だ。何が、偽りの平穏だ。
この世界に溢れる笑顔は、嘘ではない。

「良い世の中、ってなんや？　進歩だけしてる世界か？　そのために戦争を認める世界か？――違う。そうやない。誰だって、平和がええに決まってる。みんなが笑える世界、誰もが日常の、ほんの一コマで笑っていられる世の中。わたしたちが目指すべきは進歩やない。そんな世の中や」

その訴えは、当たり前のことで。
しかし、誰も言わなかったこと。

「良き世を目指すんや。守るんや。行こう、みんな。――世界を、救おう」
「「「おおおっ！！！！！！」」」

天を突き破るかのような声。
そして。
――決戦へ。

◇　◇　◇

ミッドチルダ上空。海上に浮かぶ、圧倒的な威圧感を纏う巨大な建造物へ、それは向かっていく。

「……つまり、古代ベルカの『聖人』が創ったロストロギアなんやな？」

『うん。伝承ではそうなってるね。ただ、要領を得ない説明ばかりで詳しいことはわからない。わかってるのは、『運命操作』を行う『聖人』の手足であり、それ単体で『完結した』場所だってことぐらいだ』

「運命操作……さっきはああ言うたけど、破格の力やねんな？」

『そのはずだよ。『聖王のゆりかご』でさえ、封印が限界だった。……あくまで伝承だけど、『聖王』と『覇王』が同時に戦ってようやく『聖人』を止めることができたっていうくらいだ』

「……」

ユーノの言葉に、はやては表情を曇らせる。

『聖王』と『覇王』。物語に登場するような英雄。それが力を合わせなければ、討つことなどできなかった相手。

『運命操作』――その言葉から想像できる力は、おそらく圧倒的だ。運命……そんなものを相手に、どれだけのことができるのか。

そんな風に、はやてが考えていると。

『……憶測、推測は必要ですが……それで打つ手を見失っては意味がありません』

冷静な言葉が聞こえた。言葉を紡いだのは、ファイムだ。現在、ファイムとユーノは別の部屋にいる。はやての予測が正しければ、『失楽園シャングリラ』に辿り着く前に一つ、衝突がある。それをど

うにかするためだ。
ちなみに『ヴォルフラム』の操縦をしているのはルキノ・ロウランという、ＪＳ事件の際には『アースラ』を操縦していた女性だ。

『やることは二つ。敵の制圧と、中枢の破壊。たとえ何が来ようとねじ伏せる――それができるはずです』
「……うん。そうやね。わからんもんは仕方あらへん。――ええか、みんな。相手は正体不明のロストロギアや。警戒も覚悟も注意も、し過ぎて損するようなことはあらへん」

はやては、艦全体に聞こえるように言葉を紡いだ。その隣に立つなのはが、ポツリと言葉を紡ぐ。

「……フェイトちゃんたち、大丈夫かな？」

防衛線で、最前線に立つ友人を想い、なのはは呟いた。
その呟きに、シグナムが苦笑しながら応じる。

「相変わらず心配性だな。テスタロッサが信用できんか？」
「そ、そういうわけじゃありませんけど……」
「なら信じろよ。大体、あたしたちは誰かの心配してる場合じゃねーだろ」

ヴィータが呆れたように言う。その通りである。
――先代『エース・オブ・エース』、ホムラ・イルハート。
砲撃魔導師の基礎、それを構築した純然たる天才を筆頭に、相手には油断できない魔導師たちが揃っているのだから。

「どちらにせよ、ここで戦いは終わる」

はやてが呟く。
あくまで、ひとまずだ。
勝てば、また新たな戦いが始まるだけ。
負ければ――ここで終わりだが。
その時。

「――魔力反応！　砲撃が来ます！」

シャーリーが声を上げた。来たか、とはやては呟く。
現在、『ヴォルフラム』は『失楽園シャングリラ』の上空を目指している。その艦目掛けて何らかの妨害があるのは、予測していた通りだった。ヴィータが、ちっ、と舌打ちする。

「あんだけ挑発しといてこれかよ」
「この程度も回避できないようなら、戦う必要がないということだろう。私たちがしているのは戦争だ。スポーツではない」
「そうやな。……まあ、問題あらへんよ。この艦には、あの二人がいる」

モニターが切り替わる。無数のモニターやパネルに囲まれ、何らかの準備を進めるユーノと。
『ヴォルフラム』の外に、堕天の翼を纏って立つファイム。
その二人が、映し出される。

「わたしたちを、影からずっと守ってきた人と。地上を、傷つきながらたった一人で守り続けてきた人。管理局に、『守り』においてあの二人に敵う人はおらへん」

アラートが鳴り響く。はやては、微笑んだ。

「ホンマに……格好ええなぁ」
「うん。だって――私たちが、選んだ人だもん」
なのはも微笑む。
前哨戦――開幕。

◇　◇　◇

――閃光。
高密度の魔力砲撃――いや、違う。これはレーザー砲だ。純粋な質量兵器による一撃。
『一、三、四番結界起動!!　安全装置解除!!』
轟音。展開された結界に着弾し、『ヴォルフラム』が大きく揺れる。
『結界出力６６％低下!!』
『スクライア司書長により安全装置解除!!　司書長によるマニュアル操作開始!!』
『浮遊結界展開!!』
耳につけた通信機から聞こえてくる報告に耳を傾けながら、ファイムは目を閉じ、佇んでいた。
吹き抜ける風。通常ならば簡単に吹き飛ばされてしまうような状況だが、それは『ヴォルフラム』を包む結界が補助してくれる。
キリキリと、軋むような音が聞こえた。ファイムを中心に、限界まで展開されたワイヤーがあらゆる場所に巻き付き、形を成している。

『ファイムくん！！――抜けさせるよ、いいね！？』
「了解」
ファイムが呟くと同時に、悲鳴のような報告。
『第二射きます！！』
――閃光。
放たれた一撃は、障壁に直撃。それを食い破る。だが。
「リンネ」
《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》
リンネが応じると同時に、ファイムは杖――ナイトメアを左手で回転させる。
直撃。
ファイムが構築した結界に、敵の閃光が衝突する。ビキッ、という音が右腕から響いてきた。限界までワイヤーを展開した右腕が悲鳴を上げている。痛みを感じる。だが、それを堪え、ファイムは更なる一手を打つ。
「カートリッジロード！！」
《Ｙｅｓ，ｄｒｉｖｅ！！》
――ドパッ！！
そんな、耳を塞ぎたくなるような轟音が響き渡った。閃光が逸れ、空へと流れる。
受け流したのだ。
何も、正面から捻じ伏せる必要はない。というより、ファイムにそんな芸道はできない。ならば、どうするか。

逸らせばいい。それは、ファイムが戦うために至った結論でもある。
そもそも、彼のスタイルは敵の攻撃をできるだけ逸らし、受け流し、それでいて確実な一撃を叩き込むというスタイルだ。格好悪い戦い方である。力比べなど、してはならない。できやしない。
しかし、これが――ファイム・ララウェイだ。

「来るよ、リンネ」

蒸気を吐き出す右腕を携えながら、ファイムは言う。
ファイムは弱い。故に、戦いにおける思考は酷くシンプルだ。
まず、勝利条件を明確にする。その上で勝てないと判断したなら、生き残ることを優先する。
いつだって、天秤にかける。
そして――今は。
ここを命を懸けて守り切ることが、勝利条件だ。
一手、選択を誤れば、死。
そんな戦いが、幕を上げる。

――そして。
放たれた閃光が、『ヴォルフラム』を僅かに掠めた。

◇　◇　◇

『ヴォルフラム』が、急激に浮力を失い、墜落していく。

「総員!!　どこかに掴まるんや!!」

はやてが叫ぶ。ユーノとファイムは奮闘した。しかし、『ヴォルフ

ラム』の下部に向かって放たれた砲撃を防ぎきることができず、動力を一時的にやられたのだ。

「墜落します！！　推定落下地点は――『失楽園シャングリラ』上部！！」

シャーリーの声。『ヴォルフラム』から窺える世界に広がるのは、緑と青。広がる森林と、溢れ出る水源。

しかし、どこか現実味のないそこへ、『ヴォルフラム』が落ちていく。

――轟音。

森林を削り、大地を砕きながら、『ヴォルフラム』は進んでいく。

そして。

「止まっ……た……？」

誰かが、ポツリと呟いた。『ヴォルフラム』のシステムが落ち、内部が暗くなってしまっている。

そこに非常電源が灯ると、声が聞こえた。ファイムの声だ。

『こちら、ララウェイ。……現在、外にいます。敵の気配はありません』

「ん、そっちは無事か？」

『特に怪我はありません。自分も中へ入りましょうか？』

「いや、そのまま外で警戒を続けといてくれるか？　こっちからも何人か送るさかい」

『了解』

ファイムが応じる。はやては、さて、と言葉を紡いだ。

「万事完璧、とはいかへんかったけど、とりあえず乗り込むことはできた。さて、気を引き締めるで。ここはもう、戦場や。しかも、制限時間までである。……まずは、現状把握や。シャーリーはマリーさんのところへ行って、『ヴォルフラム』の状態を確認。他のメンバーは負傷者の確認や。ああ、シグナムは何人か部下を連れてファイムくんと一緒に見張りに――」

指示を出すはやて。しかし、その指示が終わる前に。

『緊急事態です！！　敵影を確認！！　戦闘機人の部隊です！！　率いているのは――エリア・カリア！！』

切羽詰まったファイムの声。なんやて、とはやては外を見る。遥か遠くに、黒い点が見えた。おそらく、あれだろう。ファイムの右目は、戦闘機人のそれだ。その気になれば、あの程度の距離、視認できる。

「シャーリー！」

「はい！　敵が到着するまで、約十分！　数は約五千！」

「早いな……こっちに、準備もさせへん気か」

はやては呟く。呟くと、すぐさま動いた。

「第一連隊、第一砲兵隊、出撃や。シグナムはエリア・カリアの相手をお願い。……指揮は、わたしが執る」

艦全体へと言葉を紡ぎながら、はやては続ける。

「今から呼ぶメンバーは、別行動で敵の中枢を制圧してもらう。……本当は、連隊で制圧するつもりやったけど、そうも言ってられへ

ん」

本来ならば、それは最後の策だ。少数精鋭による制圧。それは、あまりにも危険度が高い。

だが、今は信じるしかない。管理局を支える、『エース』たちを。

「高町なのは。八神ヴィータ。スバル・ナカジマ。エリオ・モンディアル。……ファイム・ラフラウェイ」

一騎当千。この場に集う魔導師たちの中で、間違いなくトップクラスの実力を有する彼らに、はやては指示を出す。

「まずはこの五人に先行してもらう。……急ぐんや。時間があらへん」

動き出す。はやてもその身にバリアジャケットを纏い、宣言する。

「もう一度言うよ、みんな。――世界を、救おう」

◇　◇　◇

「やはり、あなたとの戦いは運命だったようだ」

「決着が着かなかったこれまでの戦い、清算するとしよう。――アギト」

「おう！」

シグナムの言葉に、アギトが頷く。そして。

「「ユニゾン・イン！！」」

立ち上る火柱。エリアも、氷を纏う。

「主はやてが、指揮を引き受けてくださった。私に憂いはない。ただ全力で、お前を討つだけでいい」

「同感だ。我が刃、我が氷刃にも一片の曇りもない。行くぞ！！」

そして、開戦。

現代の騎士と古代の騎士。――決着の刻。

◇　◇　◇

「総員、踏ん張るんや！！　砲兵隊前へ！！」

はやての指示が飛ぶ。『ヴォルフラム』を中心に、戦場は激戦の模様を見せ始めていた。その最中、各所で様々な声が飛び交う。

「さっさと行きなさいバカスバル！　ここはあたしたちが何とかするから、あんたはあんたのすべきことをしなさい！」

「ティ、ティア、死なないでね――痛っ！？」

「縁起でもないこと言わないで。……死なないわよ、誰も。誰一人、死なせやしない」

だから行きなさい、と、ティアナは言い。

スバルは――頷く。

「無理しちゃダメだよ、キャロ、フリード」

「エリオ君も」
「ギャウ」
「うん。大丈夫。じゃあ、行ってくる」

多くの言葉は必要ない。
若き騎士は、駆けていく。

「行ってくるね、ユーノくん」
「うん。……ごめんね、一緒に行けなくて。一緒に戦おう、って思ったんだけど」
「ううん。ユーノくんが背中を守ってくれるから、私は戦えるんだよ。それに――」
「うん？」
「帰ってきたら、うんと甘えちゃうんだから」

そして、『エース・オブ・エース』は空を舞う。

「ヴィータ、無理したらアカンよ？」
「はやても、無理しちゃダメだよ？」
「大丈夫。防衛戦の方が消耗が少ないんや。それやったら、ヴィータたちの方が心配。……ちゃんと、元気な姿で帰ってくるんやで？」
「うん！」

ヴィータが笑顔を浮かべる。そうしてから、二人の視線は一人の青年へと向けられた。
その青年は、微笑みを浮かべている。

「……行ってきます」
「……うん」

長い会話は必要なかった。
ただ、それだけで。

走る。
走り出す。

――世界が終わるまで、１８時間。

第二十八話　失楽園、終焉の地（後書き）

戦う理由というのは個人によって違い、人間というのはカンペキな生き物ではないが故に、その主張には歪みが生まれます。

はい、第二十八話です。楽しんで頂けましたか？
今回は戦いの始まりですね。とりあえず、マッチアップはシグナムＶＳエリアです。この二人については初めから決まっていたので、持って行けてよかったです。
はやての、少数精鋭による制圧という作戦は正直、下策です。しかし、誰よりも味方を信じる八神はやてという女性ならばこういう選択をするのではないかという考えに至った次第です。

さて、この戦いが最終章。ここで、『優しい嘘』は決着を見せます。とある友人にも言われたのですが、この物語は群青劇であると同時に、やはりファイム・ララウェイという、『脇役でありながら主役になってしまった青年』の物語です。彼が、どういう結末を辿るのか。もう少し、お付き合いください。

感想、ご意見、お待ちしております。

それでは、次回はもう少し早くお届けできることを祈って。

次回、第二十九話
「不条理であろうと、理不尽であろうと」

第二十九話　不条理であろうと、理不尽であろうと

迫り来る戦闘機人の軍勢。フェイトは、ソラに声をかけた。

「さっき言ったこと、お願い」

「了解しました。……避難については任せてください。隊長も、気をつけて」

「うん」

フェイトは頷く。彼女の仕事は、最前線での敵の足止めだ。対し、ソラの方は一般人の避難誘導である。ソラ・ウィンガード個人としてはどうでもよいことであっても、そこは与えられた仕事だ。給料分は働く。

防衛部隊の割り振りは単純である。第二大隊、第三大隊――本来ならヴィータとはやてが直接の指揮を執るべきこの二つの部隊の統括を、一時的にゲンヤ・ナカジマ二等陸佐に与え、前線指揮をフェイト・T・ハラオウンが担当。その上で、フェイトの指揮下に第二砲兵隊が、ゲンヤの指揮下に第三砲兵隊が入るという形になっている。目的はあくまで防衛だ。守るための戦い――むしろ、これが管理局の本来の在り方だろう。

「お前のほうも気を付けろ、ソラ。……言いたくはないが、最近、管理局はあまり良い印象を抱かれていない。スムーズにはいかないぞ」

声をかけてきたのは、チンク・ナカジマ。眼帯をした、ナカジマ一家の一人だ。ソラ自身、実はナカジマ一家全員と面識があったりする。ソラは、大丈夫ですよ、と頷いた。

「他の人たちならともかく、わたしが担当するんで。……柄じゃないし、器じゃないけれど。泥被るのは上の役目です」
「また卑屈なこと言ってんなテメェは」
「うん。そうだね」
呆れたように言うのは、ノーヴェとディエチだ。ソラは、いやいや、と苦笑した。

「卑屈も何も、客観的な評価ですよ？……それに、心配すんなら俺より――」
ソラが、チラリと視線を送る。離れた場所で、睨むように敵が来る方向を眺める女性。
ウエンディ・ナカジマ。

「……頼みますよ。ウエンディさんに何かあったら、リューイさんキレますし」
「あいつはウエンディでなくてもキレるだろ」
「そう思います？」
ソラは即座に、ノーヴェの言葉に切り返した。

「リューイさん、馬鹿ですけど……意外と鋭いですよ。少なくとも、自分に好意向けてくる人が傷ついたら、それこそ我忘れてキレそうです」
「ほう……それは、姉としては聞き逃せないな」
「えっ、じゃあリューイ、気付いててあれやってるの？」
「最低だな」
「どうでしょうね。……というか、気付かない時点で十分最低な気がしないでも――」

ソラの言葉が、途切れる。チリチリと、嫌な気配がする。
――ゴゥッ!!
頭上を、小型の艦が猛スピードで通り過ぎた。それはしばらく進んでから旋回し、戻っていく。
だが、そんなものはどうでもいい。

「……」

みな、一様に無言でそれぞれの獲物を構えた。陣形としては、一番前にフェイト。その斜め後ろにノーヴェ。中間地点にソラ、チンク。一番後ろにディエチ。誰かの指示ではない。ただ、気が付けばこの形になっていた。
ただ、ウエンディだけは、少し離れた場所からぼうっとした顔で空を見上げていたのだが。
そして。

――ドンッ!!!!!!!

轟音が響き渡った。地面が揺れ、土煙が舞い上がる。
現れたのは――二人の魔導師。

「戦場、嗚呼愛しき戦場!!　そうだ、そうだそうだそうだこれなのだ!!　俺様が求めていたものは!!　ただ殺すだけならば羽虫にもできよう!!　ただ群れるだけならば獣にもできよう!!　だが!!　敵を殺すため以外の用途を持たぬ武器を集団で振るい!!　敵を余さず打ち倒さんと吠える生物がこの世のどこにいる!?　おらぬよ!!　おりはせぬ!!　我らだけだ!!　そう、我らだけが殺し合うためだけの殺し合いをする!!」

吠えるのは、禿頭の、鎧を纏った一人の男。
殺し合うためだけの、殺し合い。
どんな生物でも本能的に避ける行為――同族殺し。それを、人間という生物はさも当然のようにやろうとするし、やってきた。その醜さは歴史の一ページを紐解くだけで十分に理解できてしまう。
確かに、その通りだと、ソラは冷静に思った。
人間ほど、この世で救いがたい生き物はいないと。

「くくっ、あはははははははははははははははははははははははっ！！」

そして、もう一人。
高々と、壊れたように笑う男に、ソラは見覚えがあった。
ギレン・リー。
体を機械で補強した、犯罪者。
ただ、ソラはその姿を見て眉をひそめる。ギレンの瞳……そこに、光がない。

「くくっ、さあ、我が怨敵よ！！　宿敵たちよ！！　踊るとしよう！！　血を撒き散らし！！　憎悪を吐き出し！！　その先に地獄を！！」

戦斧が唸る。そこへ。

「ウエンディ！？」

叫んだのは、誰だったのか。
――ウエンディが、リヴァイアス・バルトマカリへと突撃していた。
リヴァイアスは力任せに振るわれたウエンディのラインディングボードを受け止め、笑う。

「もう我慢できないか管理局の走狗!?　いいだろう踊ってやる!!　銀月よ!!　我が導きの光よ!!　感謝を!!　憎悪を!!　さあ付いてこい小娘!!　このまま地獄へと邁進する!!　殺してみせろ!!　この心臓に!!　この脳髄に刃を突き立ててみろ!!　貴様らが平和を望むと謡うならばこの俺様を終わらせてみろ!!　人の業、その果てであるこの俺様を!!　敵よ!!　愛しき愛しき怨敵よ!!」

「うあ、ああ、あああっ!!」

絞り出すようなウエンディの声。リヴァイアスは、力任せに振り抜かれたそれを受け止め、僅かに後退する。

「お前なんかに!!　お前なんかが!!」

ウエンディが吠える。それに呼応するように、ギレンが動いた。その手に持ったライフルの銃口を、ウエンディに向ける。しかし。

《Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ》

雷の刃が、ギレンを吹き飛ばした。フェイトが、声を張り上げる。

「迎撃開始!!　ギレン・リーは私が相手をする!!　総員、かかれぇぇっっっ!!」

「「「おおおっ!!」」」

念話も使って下された命令に、一斉に反応する魔導師たち。リヴァイアスたちに続き、戦闘機人たちが上陸してきた。戦闘開始だ。

「ＩＳ・ランプルデトネイター」

パチン、と、チンクが指を鳴らした。瞬間、リヴァイアスを中心に爆発が起こる。

「ぬうっ!?」
「あうっ!?」

ウエンディはその余波で吹き飛ばされたが、それをノーヴェが救助し、事なきを得る。チンクは、続けざまに指示を飛ばした。

「砲兵隊、一斉掃射!!　弾幕を途切れさせるな!!」
「「「了解ッ!」」」

放たれる無数の魔法弾。その最中でも、フェイトとギレンは高速で戦闘を行い、物凄いスピードで戦場を海上へと移した。ギレン・リー。様子はおかしかったが、実力は本物だ。下手な魔導師が向かっていったところで、無駄に犠牲を出すだけ。フェイトがどうにかするというなら、それが一番だ。
ソラは、さて、と呟く。

（こうなる前に引っ込むつもりだったが……）

ここでのソラの仕事は、本来存在しなかった。しかし、こうなれば別。

（――やるか？）

そうして、デバイスを握り締めた瞬間、チンクがソラの前に立った。右手を横に出し、まるでソラを止めるような恰好をしている。

「お前の戦場はここではない。ここは任せろ。お前は戻れ」
簡潔な言葉だった。ソラは、頷く。
「――わかりました」
「迷わないか。……やはりお前は、どこか外れている」
チンクは苦笑し、だが、と呟いた。
「望むものは同じと、信じているぞ」
ナイフが放たれ、爆発を起こす。リヴァイアスの笑い声が轟き、『N2R』が迎え撃つ。
ソラは、走り出した。

◇　◇　◇

一般人の避難は、転送ポートを使って行われる。そもそも、ミッドチルダにいたら危ないのだ。他の世界へ逃げるしかない。
しかし、避難は思うように進まないのが現実だ。
「うっせぇ！　信用できるかよ！」
「管理局の偉い奴はとっくに逃げてんのか！？」
「あんたら魔導師なんだろ！？　だったらさっさと戦えよ！」
積もり積もってきた管理局への不信。それが、最悪の形となって顕現していた。
先の戦いでの、実質的な敗北も響いているのだろう。管理局の言う

安全を、誰も信用しようとしない。

（まあ……当然か）

避難メンバーの中でその様子をぼんやりと眺めながら、リューイ・エンドブロムは内心で呟いた。相手の質量兵器の恐ろしさは、ここにいる市民たちが一番理解している。現場の魔導師たちに次いで、凄惨な戦場を見たのは彼らなのだから。

それに、彼らにしかわからない恐怖もある。

「相手は銃持ってんだろ！？　なのに俺たちは武装することさえ許されねぇのか！？」

そう――これだ。

魔導師たちなら、魔導という戦いの力がある。しかし、一般人にそれを求めるのはあまりにも酷だ。たとえ、ＳＡを習得している人物がいたとしても、実践とスポーツは違う。

殺すか、殺されるか。

魔導であっても、万能ではない。相手を殺傷することはある。

殺す覚悟。

それを宿すからこその軍人であり、魔導師だ。

「テメェの杖を寄越しやがれ！！」

ぼんやりとしていたリューイの思考を覚醒させる、大声が響き渡った。見ると、一人の男性が武装局員の杖を奪い取ろうとしていた。

「ちょっ、何を――」

「うるせぇ！！　テメェらが信用できねぇんだ！！　自分の身は自分で守るしかねぇだろうが！！」

周りの者たちは、むしろ男の方の味方らしい。リューイは、ちっ、と舌打ちする。

（正論だな。正論だが……気に入らねぇ）

そして、リューイはそこへ割って入ろうとする。その前に。

一人の少年が、近付いていった。鮮やかな陽光のバリアジャケットを纏った魔導師。見覚えのあるその背中。

――マズいっ！！

直感が、警鐘を鳴らした。リューイは全力で地面を蹴り飛ばし、その背中に迫る。

――ダンッ！！

鳴り響いたのは、一発の銃声だった。場の空気が固まり、直後、ドサッ、という鈍い音が響く。

戦闘機人が一人――頭を銃弾で撃ち抜かれ、倒れていた。建物の上から、奇襲を仕掛けようとしていたらしい。少年の体に返り血がかかり、その顔が朱に染まる。

直後、魔導師が一人駆け寄ってきた。

「隊長！！　申し訳ありません、一人、守備を突破していった戦闘機人が……」

「大丈夫ですよ、処理したんで」

血を拭いながら、淡々と少年――ソラは告げた。そうしてから、指示を出す。

「なるべく時間を稼いでください。避難まで、もう少しかかりそう

なんで」
「――了解しました」
そうして、魔導師は駆けていく。リューイは、おい、とソラに声をかけた。しかし、ソラはリューイの方を向かず、手にした拳銃――正真正銘の質量兵器のグリップを、男へと向ける。
「どうぞ」
簡潔な一言だった。血に濡れた十五の少年は、言葉を続ける。
「デバイスを持ったところで、魔導の心得がなければ鈍器としてしか扱えません。しかし、これなら引き金を引くだけで殺せますよ。手を貸してくれるんでしょう？」
どうぞ。もう一度、ソラは言葉を紡いだ。男は杖から手を離し、一歩、後ずさる。他の者も同様だった。
誰もが、化け物でも見るかのような目でソラを見ている。ソラは、しかし、感情の乗っていない声で言葉を続けた。
「わたしたちが信用できないのはごもっともです。それで、自分の身を守りたいならご自由に。……正直こっちも余裕ないんでね。避難したくないと言う人の相手してられないんですよ。したくないならどうぞ。勝手に死んでください」
ソラは肩を竦める。男が、なっ、と声を漏らした。
「それでも管理局か！」
「管理局を否定したのはそっちでしょうに。都合が良いとは思いませんでしたか？　まあいいです。どっちにせよ、このままならこの

世界は滅ぶんですよ。……正直、俺だって逃げたい。けどな、あんたらを避難させるのが仕事で、そのために俺はいるんだ。でもま、仕事は仕事。無理強いするのは仕事じゃない。死にたきゃ死ね」

きっぱりと言い捨てる。ソラ。その肩を、リューイは掴んでいた。ソラは一瞬、鬱陶しそうな目をし、すぐにいつもの表情に戻った。

「リューイ先輩？　なんでここに？」
「白々しいなテメェ。……ちょっと歯ぁ食い縛れ」
「――お断りします」

――ガツッ！！
鈍い音が響いた。ソラの顔面目掛けて放たれた拳が受け止められた音だ。リューイは、ちっ、と舌打ちする。

「可愛げのねぇ野郎だ」
「本性バレてる人に猫被る意味もなし、ってね」
「腹黒が。……気に入らねぇ野郎だったが、ここまでとはな」

リューイは手を離すと、吐き捨てるように言葉を紡ぐ。

「仕事だから、だと？　ふざけんのも大概にしろボケ。俺たちはな、管理局はな、そんなもんのために戦ってんじゃねぇんだよ。守るために、誰かのために戦ってんだ」
「……押し付けないでもらえませんか、暑苦しい」

ソラは、ため息と共に呟いた。周囲の者たちは息を呑み、二人を見守っている。
リューイは、押し付けじゃねぇ、と、言葉を紡いだ。

「押し付けなんかじゃねぇよ。ファイムの野郎も、ここにいる魔導師も、テメェ以外はみんなそうなんだよ」

守るために。

管理局の魔導師は、そのために力を望む。

そうでなければ、命など懸けられない。命を懸けるだけの理由があるからこそ、命を懸けるのだから。

しかし、ソラはそれを否定する。

「現場はそうでしょうね。けど、上層部は違う。……別に上官を侮辱する気なんてありませんが、リューイ先輩。だったら教えてください。管理局の上層部は、ファイムさんや大将をこの戦場に放り込んだあいつらは、あんたと同じような理由で戦ってるんですか？」

「……ッ、それは」

「そう、そんなわけがない。それを肯定すれば、先輩たちへの侮辱になる。……別にどうでもいいですけどね。管理局が正義であろうとなかろうと。俺は命を懸けてますよ。安い安い給料に」

「上層部も同じだってのか？」

「いいえ？　ここまで即物的じゃないでしょう。権力とか利権とか、理由は様々。……結局、そういうことなんです。何に命を懸けるかなんて、その人次第。ただ俺は。管理局が正義であろうとなかろうと、外道であろうと鬼畜であろうと、安い賃金のために働くんです」

ソラはリューイに背を向ける。リューイは、ソラ、とその背中に声をかけた。

「管理局は正義だよ。テメェ自身が示した通り、質量兵器は百害あって一利なしだ。……嫌われ役を買って出て、楽しいか？」

「何のことやら」

ソラは肩を竦める。リューイは、ふん、と鼻を鳴らした。
途中で、気付いたことだ。ソラ・ウィンガード。気に入らない男だが、その性質は理解している。彼は自分の利益のために動く人間でも、他人の利益のために動く人間でもない。ただ、彼が決めたことをするだけだ。
そして、今の彼が『決めている』のは、給料の分だけ働くこと。恥も外聞も、彼には関係ない。真似したくもない生き方だが、それも一つの在り方だ。
認めようとは、思わないが。

「気に入らねぇな、テメェ」
「今更でしょうよ。……それじゃあ、俺、仕事に戻りますんで」

言って、ソラは歩き出した。その背を見送ったリューイも、背を向ける。

「……それでは、避難ですが……」

遠慮がちな声が聞こえた。振り返ると、魔導師たちが避難誘導を始めていた。しかし、今度は誰も逆らわない。
ソラの、覚悟の結果だろう。

「……」

それを複雑な表情で眺め、リューイは歩き出す。
ソラとのやり取りとは別。こんなところまで戦闘機人が来ているということは、戦況がまずい状況にあると踏んでのことだ。
体は万全とは程遠い。しかし。
誰かを守るために、戦う。

そう、口にした以上は。
戦わなければならない。それ以外の選択肢はない。
リューイは、走り出した。

◇　◇　◇

――惨劇。
バリアジャケットを纏い、別の場所で戦っていたミリアムを強引に連れて最前線に来たリューイが見たのは、それだった。

「そんな、まさか……」
「くっ！」

呆然としているミリアムをよそに、リューイは、担架に乗せられて運ばれていく三人に駆け寄る。
チンク、ノーヴェ、ディエチ……『Ｎ２Ｒ』のうちの三人が、重傷を負っていた。

「みなさん！」

リューイが駆け寄る。チンクが、薄く目を開いた。

「リューイ、か……？　すまない。不覚をとった。あの男、想像以上に……」

チンクが呻き声を漏らす。その中でも、戦闘機人たちの進行を、チンクの部下たちが押しとどめている。

しかし、突破されるのもおそらく時間の問題だ。

（加勢すべきか？）

一人とはいえ、リューイ・エンドブロムという魔導師は、ＡＡＡ＋という高位魔導師である。更に、ミリアムというユニゾンデバイスもいる。活躍は、十分に可能なはずだ。

おそらく、ウェンディも戦っているはず。そう思い、その手に持った大剣を握り締めた瞬間。

「……リューイ、お前の戦場はここではない」

身を起こし、チンクが言った。まるで、リューイの思考を読んだかのように。

隊長、と他の魔導師が声を上げる。チンクは、ずれていた眼帯を着け直すと、ふらつく体で立ち上がる。

「リヴァイアス・バルトマカリ……あの男を、ウェンディが追っていった。情けない話だが、私たちは負けた。――頼む、リューイ」

チンクは、真っ直ぐにリューイを見据える。

「私たちは、罪人だ。だが、それでもこの街は、管理局は、私たちを受け入れてくれた。……正義など、私には語れない。しかし……それでも、守りたいものはある」

チンクも、リューイも、経緯はどうあれ元犯罪者である。

無論、そのせいで幾度となく白い目を向けられてきたし、良いことばかりでもなかった。

しかし、そんな場所でも、優しくしてくれる人、笑っていられる場

所があった。
居場所がある。
チンクは、それを守るために戦うのだという。
だが、リューイは。

「正義はあります。俺が元犯罪者だとか、そんなことは関係ない。管理局は正義だ。そうじゃなきゃ、いけねぇ」
「――マスター」

ミリアムが、呟くように言った。
リューイとミリアムがユニゾンし、風が吹き荒れる。薄く輝くような金色の髪を揺らし、リューイは前を見る。

「俺に――俺たちに任せてください。ウェンディは、必ず助けます」

チンクでさえ、このダメージだ。ウェンディも、きっと軽くないダメージを負っている。
それでも、戦うのは、きっと。

『ここはお願いします』
「ああ。任せておけ。姉が倒れているわけにはいかん」

チンクが頷く。彼女の傷は深い。しかし、それでも立ち上がる。
リューイは、空へと上がる。

――爆発音。

響いたのは、聖王教会の方面だ。リューイは、速度を上げた。

◇　◇　◇

「シスター・シャッハ！　防衛ラインが突破されました！」
「ッ、避難状況は！？」
「まだ半分ほどしか……」

その報告を聞き、トンファー型のデバイスウィンデルシャフトを携える紫髪のシスター、シャッハは歯噛みした。教会内にいる孤児たちや、司祭たち。参拝に来ていた者たちを避難させるための時間稼ぎをしているのだが、手が足りない。

（聖王騎士団は、少数精鋭……数で押されると、やはり脆い……！）

管理局との衝突を避けるため、聖王教会は『騎士』という名の戦力の数を抑える傾向にある。少数精鋭、というのは動く際には動き易いが、こういった防衛戦ではそれが短所となる。

『シャッハ、聞こえますか？』
「騎士カリム！？」

聞こえてきた念話に、シャッハは声を上げる。カリム・グラシア。理事たる自分が先に逃げるわけにはいかないと、セインと共に避難誘導をしている人物だ。

『セインたちもよくやってくれていますが、まだ時間がかかります。そちらは、どれくらいもちますか？』
「……第二防衛ラインを突破されました。戦闘機人たちがここに到達するまで、おそらくそう時間はありません」

四重の防衛線を引いて待ち構えていたが、すでに二つ、突破されている。今はオットーとディードの二人が中心になって第三防衛ラインで抑えているが、それもどこまでもつか。

『……状況は芳しくないようですね。仕方ありません。私が――』

「いけません騎士カリム！　あなたは戦ってはなりません！」

『しかし、シャッハ』

「いかに騎士団最強とはいえ、あなたは何があっても喪ってはならぬ人。戦ってはなりません」

シャッハは言い切る。騎士カリム。その人物は、現代の騎士団において最強を謳われる人物だ。しかし、彼女の持つレアスキル、そして、その影響力はここで失っていいものではない。故に。

「ここは私たちが守ります。何があっても、何が来ようとも」

『シャッハ――』

「それでは」

強引に念話を切り、シャッハは息を吐く。そうしてから、前を見据えた。

彼女の周囲には、彼女と同じようにここで戦う騎士やシスターたちがいる。シャッハは、そんな彼女たちに言葉を紡いだ。

「私たちの、騎士の本懐を遂げる時が来ました」

シャッハは、迷わない。

「我らは剣であり、盾である。右手に剣を。左腕に盾を。この胸に、退けぬ信念を。――守りましょう、我らの背には、我らを信じてくれる彼らの想いがある」

ウィンデルシャフトを掲げ、シャッハは言う。

「ここから先へは、誰も通しません。ここが、我らの死に場所です」

そして、騎士たちがその想いを一つにした瞬間。

「――ならば、俺様を止めてみせろ」

声が響いた。同時に、ドサッ、と、何かが地面に落ちる。

――オットーと、ディードだった。

「オットー、ディード!?」

シャッハが声を上げる。地面に倒れた二人は、呻き声を上げた。

「すみ、ません……、シスタ……シャ…ハ……」

「あの、男……に……」

二人を、騎士たちが起こし、後方へと運んでいく。シャッハは、男を睨み付けた。男は、壮絶な笑みを浮かべる。

「そこの二人は中々楽しませてくれたぞ。そこの小娘、次は――貴様か?」

「……報告は受けています。リヴァイアス・バルトマカリですね」

「――知っているのなら、話は早い」

ズンッ、と、リヴァイアスが地面を大きく踏み締める。リヴァイア

スが纏う鎧は所々傷があり、本人のダメージは決して少なくないはずだ。しかし、その魔力に衰えというものはない。
今にも――この場の全員を食い殺そうとでもしているかのような、圧倒的な威圧感。

「さあ、俺様を楽しませろ!!　死ぬか!!　逃げるか!!　蛮勇を見せるか!!　この場で決めろ騎士共!!」

笑い声をあげるリヴァイアス。シャッハは、じりっ、と、僅かに後退した。無意識のうちに。
――瞬間。

「ぬっ!?」

四発のシューターが、リヴァイアスを狙い撃った。リヴァイアスは、誰だ、と声を張り上げる。シャッハたちも振り向いた。
そこに、いたのは。

「ほう……小僧か。死んだと聞いていたがな?」

リヴァイアスが笑みを浮かべる。現れたのは、一人の少年。
ウィル・ガーデンズ。その少年が、デバイスを構え、立っていた。

「反逆か?　俺様は構わんが……銀月が見れば、何と言うかな?」
「……考えたこと、なかったんだ」

ウィルは、槍の形をしたデバイス――アルガンツァの柄を、強く握り締める。その体は、僅かに震えていた。
当たり前だ。リヴァイアス・バルトマカリの凄まじさは、味方であった彼が一番よく理解している。勝てないことも、十分に。

しかし、彼はここに立った。

「俺だけじゃなかったなんて。誰にだって、大切なものがあるんだって。管理局にだって、守りたいものがあるんだって。ちょっと考えれば、わかるのに。わかったはずなのに。俺だけが、俺だけが辛いわけないのに、それなのに」

知ったから。

厳しい人生の過程で壊れてしまって、それでも、人間のフリをする男を。

誰にでも、守りたいものがあるのだということを。

リヴァイアスが、ふん、と鼻を鳴らす。

「それさえわからんから、貴様は小僧なのだ。しかし……だからどうした？　互いの守りたいものが違うならば、ぶつかるならば、争うしかなかろう。それさえもわからん、などとほざくなら戦場に出るな。時間の無駄だ」

「そうですね……けど、あんたは違う」

ウィルは、デバイスの切っ先をリヴァイアスに向ける。

「あんたは、破壊するだけだ。壊すだけだ。奪うだけだ。……守るなんて発想、あんたにはないんだろ？　だったら、あんたは違う。俺たちとは、違うんだ！」

決意の咆哮。まるで、自分自身を奮い立たせるかのように、ウィルは吠えた。

だって、そうだ。

彼の力は、リヴァイアスに届かない。

それでも、戦うのは――

「俺はあんたを認めねぇ！　おっさんなら！　エリアさんなら！　テンリュウさんならわかる！　あの人たちは、守りたいもんがある！　けど、あんたは違う！　そんな奴に奪わせてたまるか……奪われてたまるかよ！」

「吠えたな、小僧。しかし、ここに貴様の守るべきものなどなかろう」

「関係ねぇよ。あんたを認めない。理由なんて、そんだけで十分だ」

震える体で、ウィルは言った。リヴァイアスが、笑う。

「くくっ、吠えたな？　吠えたな小僧？　いいだろう、殺してやる」

魔力が吹き荒れる。リヴァイアスは、笑った。

「異端の我に居場所などない！！　俺様はリヴァイアス・バルトマカリ！！　戦場の申し子！！　裏切り謀反は戦の華よ！！　さあ、来るがいい！！　俺様は一切の躊躇もなく、貴様の覚悟を打ち砕く！！　さらばだ、かつての戦友よ！！」

吹き荒れる魔力。限界など、一片も感じさせないそれを前に、ウィルの体が震える。その隣に、一人の女性が立った。

シャッハだ。

「正直、あなたがこうして加勢してくれることに驚きを禁じえません。……信じ、頼ってもよいのですね？」

「……正直、管理局も聖王教会も好きじゃねぇ。けど、ここがなくなると困るんだろ？」

ウィルは、だったら、と、言葉を紡いだ。

「手を貸すよ。柄じゃねぇけど、さ」

◇　◇　◇

ソラ・ウィンガードは、空を飛んでいた。聖王教会の避難が滞っていると連絡を受け、増援に来たのだ。
そして、もう一つ。
リヴァイアス・バルトマカリがそちらへ向かっていると聞いて、急いでいる。あの男は要注意人物だ。何せ、『Ｎ２Ｒ』が敗北を喫するような相手。流石に、歴戦の勇士ともなればレベルが違う。

「……怪獣でも通ったかのような痕だな」

ソラの表情が引き攣る。おそらく、リヴァイアスが戦闘を行いながら進んだ結果だろう。見下ろした地上は、無茶苦茶に荒らされていた。……死体も、転がっている。
魔導師も。
一般人も。
戦闘機人も。
これが――戦場。
普通なら、精神的に追い詰められて嘔吐でもしてしまいそうな惨状を前にしても、しかし、ソラは表情を変えない。
受け入れてしまっている。

「……やっぱり、異常なのかねぇ。こういう時、平静なのは」

適当に呟き、ソラは速度を上げる。今は、そんなことを考えている場合ではない。

――教会の方で、轟音が響いた。
断続的に響く轟音と、煌めく閃光。急げ、と、ソラは自身に命じる。
しかし、こんな時でも、彼の心は冷めている。
酷く冷静に――相対した時のことを考えている。

――そして。

ソラは、教会に辿り着いた。
目を――見開く。

「シャッハさん!?」

思わず、声を上げた。
壁に寄りかかり、血を流して座り込む女性。ソラが知る中でも最強の一人である魔導師が、敗北していた。その周囲には、オットーやディード、騎士やシスターたちが倒れている。
戦闘機人たちの姿はない。つまり、たった一人の魔導師にやられたということだ。
そして。
一人の少年が、その魔導師に斬りかかる。
だが――

「……貴様は、馬鹿だ」

――ズンッ、と、戦斧の刃が鈍い音を響かせ、その体に食い込んだ。
少年は――ウィルは、血を吐き出し、動きを止める。

「この、大馬鹿野郎めが。地獄で待っていろ。――俺様も、すぐに行く」

――――。
放り捨てられ、ウィルが、地面に落ちる。
致命傷。助かる見込みは――ない。

「さて――」

幾人もの猛者たちの返り血でその身を染め上げた男が、上を見上げる。
――一閃。
凄まじい金属音が、空気を揺らした。

フルドライブ・モード『ブレイドマスター』。

短期決戦のためだけの一撃を、ソラが叩き込んだのだ。デバイス『ヴィクトリア』に、ソラの魔力負荷による罅が入る。

「――問答無用か。よいだろう、来い」

返答は必要なかった。ソラのただならぬ気配を察したのだろう。リヴァイアスは笑みを消し、得物を構える。
そして、ソラの奥義が放たれる。

「我流極星――『流れ星』」

第二十九話　不条理であろうと、理不尽であろうと（後書き）

守るという行為は何よりも尊く、しかし、何よりも難しい。理不尽な破壊者は、圧倒的な力を行使する。勝ち目はあるのか。

はい、第二十九話です。楽しんで頂けましたか？

今回は管理局側です。何気に聖王教会の二人は好きだったりします。あまり出せませんでしたが……。

ウィルは、何も知らない子供のイメージです。自分自身の守りたいものを守れなくなってしまったが故に、他人の守りたいものを守る手助けをしようと、思いつきのように考えました。

迷いだらけですが、しかし、あんな風に時として矛盾を抱えた行動をしてこそ、人間ではないかと思います。

……そして、一つ、お聞きしたいのですが、私の描くキャラクターたちの中で、皆さんにとって魅力的に見えるキャラクターはいますか？

今後も書いていくにあたり、参考にしたいので……よろしければ、教えてください。

キャラクター設定ですが、纏めるために一度すべて外しました。近いうちに、全員分を一気に出したいと思います。

そして、皆さんのおかげで１２万ＰＶ突破しました！！

本当にありがとうございます。今後ともお付き合いいただけると嬉しいです。

感想、ご意見など、頂けるとありがたいです。

ありがとうございます。
予定では、あと四話ほどで最終話、そしてエピローグへと至る予定です。最後までお付き合いいただけるとありがたいです。

では、次回、第三十話。
「覚悟」

第三十話　覚悟

失楽園シャングリラ内部。
人の踏み入るべきではないその場所は、終わった場所。

「争うことも、競うことも、いがみ合うこともない場所。……成程、確かに『終わった』場所だ」
《高めることも、極めることもできない代わりに、永遠の平穏を……この場所は、確かに完成しています》

ファイムの言葉に、リンネが応じる。
――『失楽園シャングリラ』。
ユーノがファイムに用意した資料に入っていたその情報の裏が、取れたのだ。
完成した、終わった場所。
その意味は、至極単純だ。
『進歩しない』。
……進歩の裏には、必ず争いがある。それが平穏を脅かし、その代わりに発展をもたらす。

「皮肉だね」

一人、歩みを進めながら、ファイムは呟く。時間がないという事実から、ファイムたち突入組は分かれて行動している。誰もが正真正銘のエースやストライカーだ。一人であっても、大抵の苦境は突破する。
むしろ、メンバーの中ではファイムが一番危険なくらいだ。
まあ、ファイム自身がそれを心得ているので、滅多なことにはならないだろうが。

「確か、向こうの主張は『進歩のために管理局を潰す』だったはず。……ここは、その『進歩』を否定している場所だ。なんというか、色々とおかしいよね」

《確かに……しかし、そんなことは度外視し、単純に戦力だけを求めたのではありませんか？　あまり認めたくはありませんが、ここにいる無数の機械人形たちの戦力は侮れません》

「戦闘機人もいるしね。……考え過ぎか。まあ、確かに色々とおかしいけど――」

ファイムの目が、鋭い色を宿す。瞬間、その体が跳ねた。

――ダダダンッ！！

同時に、ファイムが立っていた場所に無数の弾痕が刻まれる。前を見ると、二門のガトリング砲を備えた機械人形――まるで、戦車のような威容をした質量兵器が、こちらを狙っていた。

「厄介そうなのが出てきたね」

《――解析。動力に魔力装置が使われていますが、そのほとんどが質量兵器のそれです。如何しますか？》

「あまり魔力消費もしたくないし――」

――ギョムン。

カメラ・アイが、ファイムを捉える。ファイムは右腕のワイヤーを解き放つと、すぐさま防御用の魔法陣をワイヤーで構築。眼前に展開した。

そして、ガトリング砲が火を噴く。

明らかに、人ではなく対物用に設計されているであろうそのガトリング砲の威力は圧倒的で、障壁も長くはもたない。そう判断したファイムは左手に持っていた杖――ナイトメアを一度回転させると、思い切り体をひねり。

投げた。

《Ｓｔｏｒｍ　Ｌｉｎｅ》

リンネが魔法を紡ぐ。同時にファイムは障壁を消すと、その場で飛び上がり、弾丸の嵐を避ける。天井が高くて助かった。通常ならば、すぐさまその砲門がこちらを向くのだろうが、一瞬だけ稼げればいい。

そして。

暴風を内包した杖が機械兵器に突き刺さり、炸裂する。

――轟音。

吹き荒れた風により、前面部分が炸裂。その車体がひしゃげていた。ガトリング砲も片方が壊れ、銃弾に引火したのか爆発を起こす。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

密閉空間における爆発は、圧倒的な殺傷力を発揮する。リンネはそれを考え、ファイムを守ったのだ。彼らがいるのはシャングリラ内部の通路。天井は高いが、密閉空間に違いはない。

――ギョムン。

駆動音。ファイムは眼帯を外すと、その土煙の中を見た。そこには、健在なガトリング砲を向けてくる機械兵器の姿がある。

（頑丈だね。だけど――そういう武器を持ってるのは、僕だって同じだ）

――ギャリン！！

凄まじい金属音が響き渡った。ワイヤーがガトリング砲の方針を捕

らえ、強引に向きを変えられた音だ。見当違いの方向にばら撒かれる無数の弾丸。ファイムは、腰回りに隠すように装着していたホルスターから、二丁の得物を取り出す。
自動機関小銃――『フレア』。
小難しい名前をしているが、要するにただのマシンガンである。以前、ファイムが使った『ボルケーノ』と同じく、魔力を込めた弾丸を撃ち出すという、管理局法ギリギリのラインを走る武器だ。

「――――」

引き金を引く。連続で引く必要はない。引き続ければ、秒速三十発という凄まじい速度で弾丸が放たれる。
響き渡る金属音。装甲が硬い。闇雲に撃っても無駄だ。……ならば、先程の爆発で破壊した場所を狙う。
そう判断した瞬間、マシンガンが弾切れを起こした。ファイムは即座に空になった弾倉を廃棄すると、腰に着けられた次の弾倉をセットする。しかし、その行動の隙を相手は見逃さない。
――ギュルルッ！！
突如、機械兵器がこちらに向かって直進してきたのだ。ワイヤーでガトリング砲を逸らしているとはいえ、それで止められるような質量はしていない。ファイムは即座に、ワイヤーを全て解放。様々な場所に巻き付けると、機械兵器の行く手を阻んだ・
――ギャギッ、ギャルルルルッ！！
物理法則を利用し、強引に止めたのだが――流石にこの質量の質量兵器。長くはもたない。そう判断すると、ファイムは躊躇なく地面を蹴り飛ばした。

《Ｗｉｎｄ　Ｍｏｖｅ》

最高速で機械兵器に接近。マシンガンの先端に装備された、小型の

ナイフを強引に突き刺すと、引き金を引く。
響き渡る銃声。跳弾によってファイムの体に傷がつくが、少しも気にしない。
そして。
弾丸が強引に装甲を抉じ開け、内部を蹂躙する。そうなれば、もう、決着である。
動きを止める機械兵器。その内部を見、ファイムは呟いた。

「……やっぱり、か」

そこにいたのは――戦闘機人。
死体となった、それだった。

「この機動が全部機械のものとは思えなかったけど……成程ね、こういうことか」
《……妙ですね。この質量兵器は、『失楽園シャングリラ』のガーディアンのはず。そもそも、ここは人がいられる場所ではありません。だというのに、『人のための兵器』があるはずがありません》
「そうだね。だけど……目の前に存在してる」

ファイムは呟く。パイロットである戦闘機人は絶命している。なので、反撃の心配はない。
――『失楽園シャングリラ』。
それは、『聖人』が生み出した彼女と『唯一人の軍勢』のためだけの場所だ。そして、彼女たちを守るためだけに存在するガーディアンたちは、『人が乗る』という状況をそもそも想定していない。なのに――

「きな臭いね。前提条件が破綻してる」
《マスター。おそらくは、あの男でしょう》

「……グリス・エリカランか」

ファイムは呟く。ファイムとは数多くの因縁を結ぶ、悪魔のような少年。『アンリミテッド・デザイア』の継承者。ジェイル・スカリエッティと『同じ』である彼が、原因を握っている。

「何にせよ、決着は急がなくちゃいけない。急ごう、リンネ」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

ファイムは、走り出した。

――亡骸を、燃やしていくことを忘れずに。

◇　◇　◇

「キャハハ♪　これは中々、怖いねぇ？」

モニターを見ながら、グリスは笑う。ファイムの今の行動の全てを監視していたのだが……やはり、厄介だ。

「まあ、答えに到達することはないだろうけどね～。『アルハザード』を夢物語と思ってる間は、無理無理」

キャハハ、と、グリスは笑う。

計画は順調だ。ここに至るまでが問題だったが、幸い、『ロード』という綱渡りも渡り切ることができた。彼を失ったのは少々想定外だったが、しかし、最大の難敵であるテンリュウ・シンドウは抑え込めた。

ならば、後は。
世界を掌握する力を、手にするだけだ。

「首尾は上々。後は、タイミングだね。……ん？　何これ？」

ほくそ笑んでいたグリスだったが、不意にその表情を変えた。視界の端、モニターに妙なものが映っていたのだ。

「……小型船？」

シャングリラの壁面に、突き刺さるように顕現する一基の小型船。だが、その船体はひしゃげており、あれでは中の者も無事ではないだろう。

「管理局の増援かな？　まあいいや。気にしても仕方ないし」

――どうせ、大したことないし。
呟き、グリスはモニターに目を通す。
その瞳には、狂気が宿っていた。

◇　◇　◇

スバル・ナカジマとエリオ・モンディアルは、途中で偶然にも合流していた。そして二人は、かつて六課で培ったコンビネーションで突き進んでいたのだが――

「ッ、はあっ、はあっ……キリがないね。エリオ、大丈夫？」
「ッ、はい。スバルさんこそ、大丈夫ですか？」

二人して肩で息をしながら、互いの状況を確認する。二人共が音に聞こえた『ストライカー』だが、流石に進む度に戦っていては、疲労も蓄積していく。
ちなみに、二人の周囲には先程ファイムが何とか一基破壊した戦車型の機械兵器が六基ほど沈黙している。
スバルは、苦笑しながら言葉を紡いだ。

「大丈夫。それに、ティアたちにも頼まれたしね。地上のみんなも、頑張ってくれてる」
「そうですね……急ぎましょう」

エリオが頷く。地上も、自分たちを送り出してくれた旅団の者たちも、必死で戦っている。それは、信じてくれているからだ。
自分たちが、ここを制圧すると。あの男を、止めてくれると。

「……もう、あんな思いはしない」

スバルは、ギュッ、と、拳を握り締める。
エレン・ローグ。
目の前で死なせてしまった、あの女性。
あんなことは、もう、繰り返さない。
そして、行こう、とスバルが口にした瞬間。

――――。

エリオが、後方へと大きく吹き飛ばされた。鈍い音を響かせ、壁を砕き、座り込む。薄っすらと、頭部から血を流していた。

「エリオ！？」

「――余所見とは余裕だな、嬢ちゃん？」
《Ｂａｄｙ！！》
――ドカッ！！
鈍い音が響いた。スバルのデバイス、マッハキャリバーが強引にスバルの右腕を動かし、攻撃をガードする。
「へぇ……良いデバイスじゃねぇか」
相手が、笑みを浮かべながらそう言葉を紡いだ。その人物を見て、スバルが驚愕する。
「えっ、そんな、嘘……？」
「嘘じゃねぇよ。目ェ見開いてよく見やがれ」
相手は笑う。その笑みは、見覚えがあるもので。
同時に、見たことがないほど狂暴だった。
「カグラさん……！？」
そこにいたのは、カグラ・ランバード。
生死不明となっていた、英雄だった。
「何故あなたがここに！？」
スバルが声を張り上げる。カグラは、んー、と鬱陶しそうに唸り声を上げた。
「別に大した理由じゃねぇよ。……世の中な、ままならねぇことが多いんだよ」

ふっ、と、寂しげな表情を見せ、ファイティングポーズをとるカグラ。スバルは応じるように構えながら、言葉を紡ぐ。

「わ、わかりましたっ！　人質を取られてるんですね！？」

「――馬鹿野郎。誰を人質に取るんだよ」

――一閃。凄まじい速度で放たれた蹴りを、スバルはギリギリで受け止めた。凄まじい威力。力を損ねたという話が信じられないほどだ。

「全部、俺が選んだんだよ」

拳打の応酬。カグラの戦闘方法は全て我流だという。普通なら荒が目立つはずのそれはしかし、実践で磨かれ、研ぎ澄まされてきたが故に、一つの流派として完成している。

「――――ッ！」

スバルは攻撃を何とか凌ぎ、反撃に出るが、大した結果は得られない。その時、不意に、スバルの横を赤髪の少年が駆け抜けた。

「ストラーダ！！」

《Ｊａ！！》

エリオの咆哮と共に、振り抜かれる槍。その一撃はカグラを吹き飛ばし、エリオはスバルの隣に着地する。

「エリオ！？　大丈夫なの！？」

「心配をおかけしました。大丈夫です」

グイッ、と、血を拭いながらエリオは言う。そうしてから、カグラを見た。

「……どういうことでしょうか？」

「……わかんない。けど、それを問いただす余裕はなさそうだよ」

スバルは呟く。二人の視線の先には、無傷の姿のカグラ・ランバードがいる。

力を損ねた？――どこがだ。

この、どうしようもないくらいの絶対性。まるで、あの人のようだ。

まるで――『エース・オブ・エース』高町なのはのような、憧れのあの人のような、強さ。

嗚呼、と、スバルは納得した。

あの人のような強さ？……当たり前だ。

「……」

無言で、スバルは拳を握る。

この人も――『エース・オブ・エース』なのだ。

全力でやらねば――殺される。

◇　◇　◇

八神ヴィータは、『鉄槌の騎士』と謳われる優秀な騎士である。その力は、今更説明するようなものでもない。

事実、ヴィータは襲い来る質量兵器たちを文字通り一撃必殺で粉砕

していた。彼女の周囲には、無数の残骸が転がっている。

「……ちっ、鬱陶しい野郎共だな」

ヴィータは息を吐く。体力も魔力もまだ問題ないが、こうも行く手を邪魔され続けると、流石に精神的にやられてしまう。だが、これだけ数多くの邪魔が入るということは、目指す方向が間違っていないという証拠でもある。

――『ゆりかご戦役の英雄』。

ヴィータに対する周囲の評価で一番に上がるのは、やはりそれだ。

『聖王』をたった一人で打ち倒した『エース・オブ・エース』と並び称される『ゆりかごを墜とした』英雄。

その彼女だからこそ、こうして再び動力炉を目指している。

そこを破壊することが、第一目標だ。

「カートリッジもまだ残ってる。時間は……あと、１４時間か。急ぐぞ、アイゼン」

《Ｊａｖｏｗｌ》

そして、ヴィータが進もうとした瞬間。

「ヴィータちゃん！」

なのはが、ヴィータの隣に降り立った。ヴィータは、なのは、と声を上げる。

「お前、どうしてこっちに？」

「にゃはは、私の方は行き止まりで……別のルートを通ってきたら、

ヴィータちゃんの姿が見えたから」

右手でレイジングハートを持ち、苦笑しながらなのはは言う。ヴィータは、そうかよ、と苦笑した。

「奴らの方は？」

「うん。まだ会ってない」

「そーかよ。じゃあ、さっさと動力炉潰して後輩共とファイムの援護に行こうぜ。あいつら、まだまだ頼りないからな」

なのはに背を向けながら、ヴィータはどこか楽しそうに言う。

「特にファイムの野郎は、放っとくとどんな無茶するかわかんねぇし。なぁ、なのは――」

――ドスッ。

鈍い音が響き渡ったのは、その瞬間だった。ヴィータは、自分の体から生えた刃に、目を白黒させる。

振り返ると、そこには、笑顔を浮かべながら『右手に持った』レイジングハートを刃へと変え、ヴィータを貫くなのはの姿がある。

「は、ははっ……」

ヴィータは、ごふっ、と血を吐き出しながら、呟く。

（なにやってんだよ、あたし……？）

朦朧とする意識。その中で、ヴィータは自分自身を叱責する。

（なのはは、『左利き』じゃねーか……！）

――ズルッ。

引き抜かれる刃。なのはは――偽物のそいつは、更に一撃を加えようとしてくる。ヴィータは、全力でグラーフアイゼンを振り抜いた。

「アイゼン！！」

――ゴキンッ！！

鈍い音が響いた。ヴィータの腕に、嫌な感触が残る。なのはは壁に叩きつけられ、地面に倒れる。その顔は、血に濡れていた。

「ヴィータちゃん……どうして……？」

なのはが、右手を伸ばしてくる。

「てめぇ、いつまで、なのはの、姿を……ッ！！」

息を切らし、血を吐き出しながら、ヴィータは吠える。

なのはは、どうして、と、手を伸ばしてくる。

「ひどい、よ……」

ビクッ、と、ヴィータの体が震える。

――違う。

必死に、ヴィータは否定する。

――なのはじゃない。うろたえるな。

グラーフアイゼンを、振り上げる。

――なのはじゃない！

「うあああああああああああああああああああああっっっ！！！！！！！」

――振り下ろされた鉄槌は。
彼女の大切な何かを、打ち砕いた。

◇　◇　◇

「キャハハ♪　良い三文芝居だったね～♪」

モニターを見ながら、この全てを仕込んだ犯人は、笑う。

「さてさて、鉄槌の騎士さん……キミはさ、そのボロボロの体でどこまで耐えれるのかな？」

ピッピッ、と、モニターの一つにヴィータを中心に無数の光点が映し出された。その数は百を超えている。
全て――戦闘機人たちだ。

「見知った者……それがたとえ偽物であっても、キミたち人間は戦うことを躊躇する。甘いよねぇ、本当に甘い。けれど、そのおかげでボクは見ることができる」

クスッ、と、グリスは笑みを浮かべた。

「――心が壊れる、綺麗な音を」

笑う。笑い続ける。
楽しそうに、本当に楽しそうに、彼は笑う。
そして。

「さあ、『運命』通りに戦いは始まる……そろそろ、ボクも動こうかな」

彼が一瞥した画面には。
地上と空の『エース』が、別の道を行く映像が映っていた。

決着が――迫る。

◇　◇　◇

「……？」

高町なのはは、不意に振り返った。虫の知らせ、とでも言うのだろうか。心が、ざわめく。

「どうかされましたか？」

その思考を引き戻したのは、一人の青年の言葉だった。視線を前に戻すと、そこには黒髪の青年――ファイムがいる。
高町なのはとファイム・ララウェイ。個別で進んでいた二人は、今、二人がいる広大な空間で鉢合わせした。ちなみにその時、なのはは

『エクセリオンバスター』の一閃で戦車型の機械兵器を六基、まとめて粉砕した直後で、ファイムは頬を引き攣らせていた。
その二人は今、一つの選択を迫られている。

「……この意匠……おそらくですが、この先が玉座でしょう」

精緻な意匠に手で触れながら、ファイムが言う。古代ベルカの聖王のシンボル、それを『逆さ』にしたような意匠が刻まれたそれは、巨大な扉だ。
玉座でないにしても、何か重要な部屋であることは間違いない。それ故に進むことに異議はないのだが、それには問題があった。

「この、もう一つの扉は何でしょうか？」

一回り小さい扉が、二人が入ってきた扉とは別に、もう一つあるのだ。可能性としては、二人がこうしてここに来た道とは別の道があるというのが一番あり得る。しかし、それは所詮推測だ。違う可能性も捨てきれない。
なのはは、そうだね、と呟くと、レイジングハートに視線を落とした。

「レイジングハート、どう？」
《エリアサーチは全て遮断されました。しかし……遮断されたということは、『何かがある』ということにもなります》
「そうだね。……あまり、時間もない」

なのはは呟く。予告の時間まで、後、たったの１２時間。それまでに『失楽園シャングリラ』の制圧、そして、動力炉の破壊をしなければならない。

「ファイムくん、私は、こっちに行く。そっち、任せていい？」

決断は早い。なのはが指差したのは、一回り小さいほうの扉だ。ファイムは、わかりました、と頷く。そして、ただ、と言葉を繋げた。

「そうやって、自分自身を一番危険な場所へ送る癖……やめた方がいいですよ」

「……よく言われるよ。けどね、私はそうじゃなくちゃいけないと思うんだ」

なのはは、レイジングハートを握り締める。

――『エース・オブ・エース』。

歴代の英雄たちが背負い、引き継がれてきたその異名。それは、ただの称号ではない。

「昔はね、どうして私が、って思ったこともあったよ。『エース・オブ・エース』……自惚れから墜ちちゃった私が背負っていいのかな、って」

力だけがあった、あの雪の日。私は――高町なのはは、墜ちた。

敗北し、墜ちてしまった。

今でも夢に見る。だけど、だけどだ。そこで立ち止まるわけにはいかなかった。

「けれど、私は『エース・オブ・エース』高町なのはだから。――この肩には、管理局の全てが懸かってる」

『エース・オブ・エース』とは、そういう名前である。管理局の誇り。魔導師たち全ての想い。その全てを背負い、空を舞う。

負けることも、屈することも許されない。

――不屈の心。
高町なのはがその胸の内に秘めていたそれは、何度も奇跡を引き起こしてきた。
諦めない心だけが――奇跡を生む。

「だから、私が行かなくちゃいけない。この先へは」

高町なのはは、決意する。彼女は子供ではない。自分の立場と、その意味の全てを正しく理解している。
たとえこの先に待つのが『最強』であろうと『先代』であろうと。
彼女は屈してはならない。敗北してはならない。
彼女の敗北は、『管理局の敗北』なのだから。

「私が、止める」

決意の言葉。ファイムは、一瞬、様々な意味の込められた瞳をなのはに向け。
――最後に、微笑んだ。

「わかりました。あなたがそう言うなら、是非もありません」

そして、ファイムは進んでいく。

「――武運を」

短い言葉と共に。なのはは頷くと、扉を開けようと、一歩前へ進んだ。瞬間。

――ギギ、ギッ……。

鈍い音を響かせ、扉が開いた。

《……来い、ということでしょうか？》

「だろうね。いくよ、レイジングハート」

そして、なのはは歩みを進める。ゆっくりと。

広大な廊下のような通路が続く。床には絨毯が敷き詰められており、壁には無数の柱が規則的に立っている。

そして。

広大な空間に、ひっそりと備え付けられた玉座が目に入った。やはり、最奥の壁には聖王のシンボルを逆さにしたものが描かれている。

「……古代ベルカの時代、『聖人』は『聖王』の友人やったらしいわ」

声が響いた。玉座から少し離れた場所で、壁に寄りかかる男がいた。

ホムラ・イルハート。

先代、エース・オブ・エース。

「詳しい話はわからへんけど、あの時代にあって利益を顧みない親友同士、ってとこやったらしいな。美しい友情や。『唯一人からなる無敵の軍勢』も、『覇王』とは仲が良かったらしいし。……せやけど、あんな時代にそれが許されるはずがあれへん」

言って、ホムラはタバコを取り出すと、火を点けようとライターを取り出した。しかし、火は点かない。ホムラは、ああ、と呟いた。

「そういや、そういう『運命』が設定されとるんやったか？　禁煙を強制されるって……まあ、ええけど。美味いもんでもないし。あのアホはようこんなもん、いっつも咥えとるな……」

何やら呟き、ホムラはタバコの箱を握り潰した。そして、その視線を玉座の方へ向ける。
そう――聖王のシンボルを貶める、『逆さ』のシンボルへ。

「きっかけも理由も知らへん。ただ、『聖人』は『聖王』を殺そうとした。……このシンボルは、その決意表明らしいわ。反逆――たった二人の反逆や。当時の『聖王』と『覇王』の連合の規模を考えれば、自殺だとはわかっとったやろうにな。ま、結果として『ゆりかご』によって『楽園』は封じられ、今に至る。――どうや、似とるやろ？」

ホムラは微笑んだ。そして、壁から背を話す。
その背に背負うのは、『聖王』への『反逆』を象徴するシンボル。
なのはは、『それ』の意味を、急速に理解した。

あれは――管理局。
ホムラが反逆するのは、世界そのもの。

世界を敵に回したかつての英雄が、現代の英雄と対峙する。

「お前らには、わからへんやろ？　わしの理由なんざ。意味なんざなぁ。それは、後の歴史でも同じや。結局、『何故か』で片付けられるやろう。そらそうや。わしの理由は、決して表沙汰にできないものが理由になっとるし、する気もあれへんからや。勝とうが負けようがな。……せやけど、それでええ。わしの理由は、わしだけのもんや。誰にも渡さへん」

奪われたから、と、カグラは言っていた。なのはも、そうなのだろうと、話を聞いて頷いた。

しかし――大きな、大きな思い違いをしていたとなのははは気付く。
奪われたのは、あくまできっかけだ。
ホムラの理由は、違う。

「……そうだね。私には、推測はできても、あなたの気持ちはわからない。話してもらわなくちゃ、何もわからない」

なのははは、言う。最後のピースを求めて。
しかし、ホムラは拒絶する。

「言葉なんざ、結局、何も伝えられへん。それはもう、嫌というほど思い知っとる。……わかり合えると思った。志は同じやと信じとった。ずっと、親友でいられると思っとった。せやけど、世界はそれを許さへんかった。あいつに、言葉は届かへんかった」

「――身勝手だね」

なのははは、首を振って否定する。ホムラの言葉は、あまりに身勝手だ。
おそらく、ホムラが言っているのはカグラのことだ。だが、彼にも理由があるし、彼自身も戦っている。だからこそ。

「独り善がりな考えで、あなたはこんなことを？」

「正義であろうと悪であろうと、最後は結局独善的なもんやで、後輩。それに、身勝手なんは重々承知や」

ホムラが、デバイス――ライジングサンを構えた。

「せやけど、世界はこんなにもままならへん。思い通りにならへんのや。なら……もう、こんな方法しかあらへん」

既存のルールをぶち壊すために。
そのために、ホムラは『楽園』を再びこの世に召喚した。

「『運命』ってのは、要は世界のルールや。それを掌握し、世界を捻じ伏せる」
「その先に、何が待ってるか、わかってるの？」
「知らんよ、そんなん。……ちゅーか、自分ら勘違いしとるけどな、わしもお前も、どんだけ天才だろうと所詮は一人の人間や。できることなんて知れとる。で、そのできることが知れとる人間程度のせいで世界が滅びるんなら、ええんちゃうか？――滅びたら、別に」

吹き荒れる魔力。なのはは一度、大きく息を吸い込んだ。
そして、その足下に魔法陣が現れる。

「わかった。だったら、私はあなたを止める」

何が、だったら、だったのか。
それは、なのはにもわからなかった。
ただ。
この世界が、なのはにとっては大切な世界で。
大切な人がいる場所であることは、確かである。

「世界は確かに、不条理で、理不尽で、こんなはずじゃなかったことばっかりで……でも、だからこそ、私たちは生きてるんだ。歯を食いしばって、俯くのを必死で堪えて、それでも、前に進むんだ！」

ホムラは無言。言葉は不要と断じたらしい。
二人は、同時に叫ぶ。

「「オーバードライブ！！」」

最初から、手加減無用の全力全開。
一撃一撃が必殺となる、世界最高峰の魔法戦闘。
制限など欠片もない戦いが、始まった。

◇　◇　◇

運命というものを、信じたことはない。
波乱万丈――果たして、そう呼んでいいのかはわからないが、それなりに数奇な道程を歩んできたが故に、ファイムは思う。
いくつもの偶然に助けられた。
いくつもの奇跡に救われた。
だから、『運命』と聞いても首を傾げてしまう。
だって。
神様というのが本当にいるのなら――

「……」

無言で、ファイムは歩みを止めた。無駄に――というとあれだが、正直広過ぎる廊下の終わりに、その人が座っていたためだ。
テンリュウ・シンドウ。
壊れた機械兵器の上に座り、じっと黙している。
――空気が、張り詰めた。

「……立ち去りなさい」

こちらを見ずに放たれた最初の言葉は、それだった。テンリュウは、

言葉を続ける。

「この道が正解、とは言っておきましょう。この先には、制御ルームがあります。そこを制圧すれば、動力炉の位置の特定、破壊も容易い。しかし、貴方はそこに辿り着くことはできません」

「……」

「むしろ、この場所に五体満足で大した怪我も負わずにいるだけで奇跡です。自分自身でも理解しているのでしょう？　あなたはここに相応しくありません。そのような力で、どうしてここまで来たのです？」

厳しい言葉。それが全て、ファイムのことを示している。

ファイムは普通より少し上程度の凡人である。

今まで彼がどうにかやってこれたのは、周囲のサポートがあったからこそだ。本来の彼は、こんな場所で生き残れるほど強くはない。少なくとも――テンリュウ・シンドウを相手にして生き残れる道理はない。

今まで生き残ってきたのは、数多くの偶然に助けられたからこそなのだ。

だから、ファイムは苦笑する。

「わかっていますよ。だから、ここに僕がいるのは蛇足です。僕とあなたの戦いなんて、あってもなくても同じものです」

英雄となるのは、ファイム・ララウェイの仕事ではない。

彼の仕事は、ここにはない。

それでも――

「それでも、僕はここにいる。ここにいることが、できている」

なればこそ。
答えは。

「無意味であっても、戦うんですよ」
「何の『答え』を得るために？」
「僕の存在理由を。ここに、僕がいる理由を知るために」

……一体、どこで、いつから間違ってしまったのだろう。
今の僕には思い出せないし。
意味も、ない。
世界と契約して、人を捨て、こんな姿に成れ果てて。
やり直すことなんて、できやしない。

「誰も見ていませんよ。あなたの輝きを。命とは、燃え尽きる瞬間にこそ爆発する。しかし……それを看取る者は、ここにはいない」
「いいんですよ。それで。……見せたくないので」

ファイムは、拳を握り締める。テンリュウは、舌打ちを零した。

「――弱者のくせに、どうしてそこまで」

辛辣な台詞。突き刺さるような殺気を感じる。

「僕はまだ、？生きて？いない」

それを全て捻じ伏せて。
ファイムは、言い切った。

「『生きたい』と願ったあの日から、僕はまだ、ちゃんと生きていない。戦うことに意味を見つけた。失いたくないものができた。嘘ばっかり吐いて、負けてばかりで、情けない人生だったけど。きっとそれは、このためだから」

ファイムは、踏み出す。
必死の、戦場へ。

「もう、嘘は吐かない。ここで、僕は戦う。その先に、僕の未来がなくても」

テンリュウは、立ち上がった。そうしてから、初めてファイムに視線を向ける。

「……私は、ここの運命に支配されています。もう一歩、踏み出せば――私はあなたを、殺さなければならなくなる」
「……」
「これが最後です。――答えは？」

――踏み出した。
瞬間、体が浮く。

「――――ッ！！」

悲鳴さえ上げることは許されなかった。血を吐き出す。体が軋む。
テンリュウに、顔を掴まれた。みしみしと、頭蓋が軋む音がする。
ファイムは反射的に腰へ手を伸ばすと、二丁の自動小銃を抜いた。
杖――ナイトメアは、手放してしまっている。
――一閃。
引き金を引くより速く、二筋の閃光が駆け抜けた。自動小銃が斬り

飛ばされ、同時にファイムの体が浮く。

――ズドンッ！！

大砲の弾でも着弾したかのような音が響き渡った。ファイムの体が、瓦礫に埋もれる。

『失楽園シャングリラ』を構成する材質は、今や失われた技術によって生み出されたものである。それこそ、普通なら大砲を撃ち込んだところで焦げ目程度しか付かないという凄まじい代物なのだが、そんなものはテンリュウ・シンドウという『絶対』の前では意味を為さない。

「……ッ、うっ……！」

ファイムは、杖を手に取り、立ち上がろうとする。そうして前を見た瞬間、テンリュウの掌が視界を覆い尽くした。

「――眠りなさい」

呟くような声。光が、ファイムを包み込む。

「夢幻抱擁」

ファイムの体が――消える。

テンリュウは、大きく息を吐くと、先ほどまで彼女が座っていた場所に座り直した。

つうっ、と、一筋の汗が彼女の頬を伝い、床に落ちる。

「流石に、師との戦いから間を置かずに戦えば……厳しいものがありますね」

そうして、彼女は虚空を見上げる。

「知っていますか？　答えとは『得られる』ものではなく、『突きつけられる』もの。……幸福を突きつけられて、あなたはそれを拒絶できますか？」

◇　◇　◇

――ここは、どこだ。

最初に思ったのは、それだった。

道の真ん中に、一人、ポツンと佇んでいる。

「ファイムくん！」

不意に、名を呼ばれた。振り返ると。

「もう、どないしたん？　いきなり立ち止まって」

「はやてさん？　いや、ええと……」

「早く行かんと、みんな怒るよ？　ほら、はよ行こう」

言って、はやてが手を引っ張ってくる。ファイムは、はい、と頷いた。

そうだ。これから、予定があったんだ。

――チリッ、と、違和感のようなものが駆け抜けた。

第三十話　覚悟（後書き）

混迷を極めてきました、第三十話です。

思い返すと、長いですね。半年で、気が付けばここまで。

……当初の予定では、半年経つ頃には完結しているはずだったのに。

というわけで、配置が終了しました。グダグダとバトルを引っ張るつもりはありません。最低でも、一話で一組は決着が着きます。

ちなみに、ヴィータのくだりは最初から考えていました。ＳｔＳでクワットロの行動を見た時、『これぐらいやったほうがいいのでは？』と思ったことを覚えています。

そして――感想をください。切に。本当に。

いや、我儘だとはわかっているんですよ？　読んでくださっていることは、アクセスを見ればわかりますし……。

ただですね、本当に楽しんでもらえてるのかな～……と、不安になっているわけです。

なので、良ければ感想をください。本当に。

あと、できれば前回のあとがきでも書いた、魅力的なキャラについてもどうか一つ……いや、いなければもう、仕方ないんですが……。

所詮は未熟者ですし……。

と、グダグダ書きましたが、感想をください、いつでもお待ちしております。そして、頂ければ即座に返信するくらいの気合いです。

では、ありがとうございました。

そして、次回。

第三十一話「狂気と狂気」

第三十一話　狂気と狂気

――『失楽園シャングリラ』最奥部。
本来なら、『聖人』のみしか立ち入ることが許されない場所に、二つの影があった。
クライム。
アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント。
今回の戦いにおいて、中心にいる人物だ。
いや、アリアは多少違うのかもしれない。もっとも、こんな少女が『失楽園シャングリラ』を制御、操作しているというのだからある意味中心なのかもしれないが。

「ふふっ、それにしても見事なものだ」

クライムが笑みを隠さずに呟く。彼の視線の先には、いくつものモニターが展開されていた。そこでは、世界に名を馳せる魔導師たちの戦いが起こっている。

「やはり闘争こそ、人間のあるべき姿だ。――実に、美しい」

楽しそうに、クライムは言う。
――結論から言えば、クライム……正確にはアリアは、『勝敗を操作する』ことが可能である。『運命操作』、もしくは『運命改変』と呼ばれる力は、『因果の連鎖を無視して結果を固定する』能力である。要するに、過程でどうなろうと結果が定められるということだ。
つまり、『勝つ』とアリアが定めれば結果は『勝利』になる。もっとも、その過程がどんなものかはわからず、無傷の勝利ということはありえない。

本来の『運命操作』ならばその過程さえも操作できるのだが、そこは操るのがあくまで人間という制限がある。『結果』の決定は、終着点である――つまりは白か黒かであるが故にやりやすい。しかし、『過程』というのは複雑怪奇だ。一ミリ立ち位置がずれただけで変わってしまうようなものである。結果、そこまでの演算ができる者はいない。

故に、クライムはこの戦いの勝敗を決定はしなかった。流れに任せているのである。

まあ、結果が決められる以上、『勝とうが負けようが同じである』ため、定める意味がないというのもあるのだが。

「さて……計画も大詰めだ。アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント――その力、貰い受けよう」

バシッ、という鈍い音が響いた。棒立ちの、光のない瞳を有したアリアの右腕を覆っていた衣服が、全て弾け飛んだのだ。

現れたのは――奇怪な右腕。

複雑怪奇な記号がびっしりと刻まれた、異形の腕だ。

「……アルハザードでキミの力に行き着いた時、私は疑問を抱いた。『運命操作』――何故、それほどの力をたかが人間が制御できているのか、とね。かつて、暴走の果てに『聖人』はここを創り出したというが……それはつまり、それまでは暴走の一つさえ起こさなかったということだ」

考えてみれば、異常である。

時間操作さえも机上の空論であり、過去にも未来へも人は渡れないとされているというのに、それを飛び越えて『運命』などというものを操れるときた。

それは最早、神の御業だ。

途方もない力である。望めばおそらく、世界の崩壊をも招く。いや、むしろ招いてしかるべきなのだ。しかし、それは起こらなかった。それは、つまり。

「強引に封じ込めたか。……右腕の魔法刻印。成程、私は思い違いをしていたようだ。『聖人の末裔』？　違うな。キミは、『聖人』本人なのか」

心を奪われたアリアには言葉を発する力も自由意志もない。クライムは、ふっ、と笑みを零した。

「思えば簡単だった。『唯一人からなる無敵の軍勢』が世界と契約したならば、『聖人』とてその方法を手にしていたというのに」

――神道天龍。

最強たる存在がそうしたように、『聖人』もまた、世界と契約することで自分自身の能力を抑え込んだのだ。この右腕の刻印は、おそらくそのためのものだろう。

その神の奇跡に等しい力を、『聖人』は右腕に封じ込めた。

世界のために。

「しかし、そこまでしても抑え切ることはできなかった。キミの発する力は、おそらくは『運命改変』の欠片。……それでさえ、あの『剣聖』を封じ込めるというのだから脱帽する」

漏れ出した、極少量の力。それだけで、アリアはこの『失楽園シャングリラ』を制御し、テンリュウ・シンドウを封じ込めている。

――『そうであると定めている』からだ。

ならば、答えは単純だ。

「なればこそ――貰い受けよう」

クライムの手が伸び、魔力が高まる。そこへ。

――カツン。

音が響いた。クライムが振り返る。一人の少年が、立っていた。

グリス・エリカラン。

いつものような笑みを、いつも以上の邪悪さをたたえて浮かべる少年――グリスが、小さな笑みを零す。

「間に合ったみたいだねぇ、良かった良かった♪」

「……キミには、仕事を与えていたはずだが」

「ああ、ストライカー二人の足止め？　あれなら済ませたよん♪　ボクの試作品が相手してるよ？」

張り詰める空気。二人の表情は柔らかいが、気配は酷く硬い。

グリスの視線が移り、アリアに据えられる。その笑みが、より一層深くなった。

「そういえば、宗主にはボクの願い事について話したことなかったっけ？」

「ふむ。聞いたことはないが」

「じゃあ、教えてあげよっか？」

「教えてくれるのならば、聞かせてくれんかね？」

クライムは、無意識のうちに一歩下がった。グリス・エリカランは、精々ＡＡランク程度の魔力しか持っていない。対し、クライムはかつてあの全盛期のカグラ・ランバードと互角以上にやり合った魔導師である。戦いになれば、負けることはまずないだろう。

だというのに、一瞬、恐怖した。
グリスは、キャハハ、と告白に笑うと、両手を広げて宣言した。

「この世界だ」

たった一言でありながら。
あまりにも途方な、その言葉を。

「ボクは、この世界が欲しい。世界の全てを掌握したい。無限の欲望の果ては、そこだ。全てを手にしたその先に何があるのか、ボクは知りたいんだ」
「……狂っている」
「宗主がそれを言うの？」

グリスは首を傾げる。そうして、言葉を続けていく。

「自分の都合で世界を否定する宗主と、自分の都合で世界を手にしようとするボク。差なんてないと思うけどね」
「違うな。私の願いは、世界のためのものだ。キミのような、個人のためのものではない」
「それを、誰かが頼んできたの？」

グリスは、挑戦するように問いかけてきた。クライムは、むっ、と言葉に詰まる。グリスは続けた。

「英雄は『祀り上げられるもの』で、変革者は『称賛されるもの』だけど……どちらも始まりは個人のエゴだ。宗主のそれは未来を見据えてるかもしれないけど、結局、争いを起こしてる。なら、それはエゴだよ。自分にとって都合のいい世界を創るためのね」

都合のいい世界。
今が許せないなら、変えるしかない。それだけのこと。
世界のためと、クライムが語ったそれを。
グリスは、正面から否定する。

「真実と虚構なら、ぶつかり合えば真実が勝利する。二つの意志、理想同士が衝突すれば、劣る側が妄想に堕ちるは必然」

チリチリと、妙な気配が肌を焼く。

「エゴだと理解している者と、そうでない者……この差、結構大きいよ？」

だからさ、とグリスは言った。
まるで――断罪の死神であるかのように。

「――死んで頂戴。夢のために」

――ジャガッ！！
金属音が鳴り響く。突如出現した、盾のようなフォルムをした無数のビット――あのエレン・ローグが使っていたものと同型のもの。
それが、２０機も出現していた。

「理論値では、６機でＡＡランク魔導師と互角に渡り合える。それはスパイさんも実証してくれた。そして理論値では２０機という数字が、Ｓランク魔導師に匹敵する」
「理論は所詮、理論に過ぎん」
「そうだね。だから、ここで実験する。スパイさんはあくまで自分自身の改造を拒否したから６機が限界だったけど……ボクにそんな倫理はない。それじゃあ、始めようか。一世一代の賭けをね」

「いいだろう。掛け金は？」
「――ボクの夢」

――ガガガンッ！！
２０機のビットが、同時に火を噴く。クライムはその場から高速で退避すると、グリスの背後を取った。

「ならば、私はコールだ」

掌が突き出され、砲撃魔法が紡がれる。しかしグリスはビットを四つ背後に回すと、それを防いだ。
――ズンッ！！
轟音。破壊の嵐が撒き散らされ、部屋に敷き詰められていた無数のコードが全て弾け飛ぶ。グリスは、笑みを浮かべた。

「ただの砲撃で四層抜くか……無茶苦茶だね」
「紙切れに等しい。……あと四発だな。これでＳランク魔導師に匹敵とは、笑わせる」
「まあ、理論は理論だからねぇ？」

響き渡る銃声。しかし、クライムという男はそもそも、魔導師としてはＳランク魔導師――かつては『エース・オブ・エース』と互角以上の殺し合いを演じたような男である。普通に考えて、多少の兵器が通用するような相手ではない。
魔導師とは、その九割が一発の銃弾で倒れるような『少々特殊』程度の存在だが、一握りはそれこそ最新鋭の質量兵器を個人でねじ伏せる。
いかにグリスが凶悪な兵器を制作しようと、クライムはそれを粉砕する。

「さて――後二発」

放たれた砲撃により、ビットが更に8機、吹き飛ばされる。圧倒的な力だ。だが、グリスの表情に焦りはない。

「そんなに怖い？　焦って壊そうとするくらいに」

「……」

グリスの言葉に対し、クライムは無言。更なる砲撃魔法を展開する。そこで、終わる――はずだった。

「――――」

ごふっ、という、生理的に嫌悪を抱く音が響き渡った。クライムは、それが自分の発した音なのだと、他人事のように感じる。

――血に濡れた華奢な腕が、クライムの体を貫いていた。

「……」

ゆっくりと、クライムが振り返る。そこにいたのは、一人の少女。アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント。

死人のような瞳をした少女が、クライムの体を貫いていた。

「キャハハ♪　ホント、単純だねぇ？」

ズルリ、と、気色の悪い音を響かせながら、腕が引き抜かれる。様々な刻印が刻まれた腕――『運命操作』を為す、『運命』を手にする力。

スローモーションのように見えるその光景を見ながら、ああ、とクライムは妙に納得した。

クライムは、自身の周囲に魔法による障壁を展開している。ちょっとやそっとでは貫けない強固なものだ。
それが、こうも容易く貫かれたのは――

（因果の崩壊……それを、自身の身で体感することになるとは……）

どこかで、甘く考えていたのかもしれない。
『運命』――人には理解も、制御もできないもの。それを無理に理解しようとして、勝手に貶めていた。
こんなにも、単純なのに。
『抗えない』。
ただ、それだけだった。

「運命を操るだか何だか知らないけど、結局そこに指向性を持たせるのは人の精神だ。そして、『生前のボクが』専門にしていたのは、心の制御。まあ、操れない道理はないね」

かつて、あまりにも残虐な手口――精神を操作し、人の心をいくつも砕いてきた狂人は、そう言って笑う。
『緑風事件』も然り。人の心を弄ぶからこそ、彼は狂人なのだ。

「――さて、勝負はボクの勝ちだ。景品は頂いていくよ？」

――――――――――。

鮮血が、空を舞う。
無機質な床を、命を感じさせない壁を、朱に染めていく。

「うふふ♪」

自らの右腕を、ビットに装備されていた刃で断ち切った狂人が、笑みを零す。身に纏った白衣が朱に染め上げられ、凄惨な様相を呈していた。

グリスは、自身の腕を微塵に引き裂く。傍から見ると思わず目を背けたくなるような行為だが、グリスは笑っていた。

そうしてから、今度はアリアの右腕に触れる。

「じゃあ――貰うね？」

鮮血。

再び、世界が朱に染まる。

アリアの右腕が肩口から斬り飛ばされ、宙を舞う。アリアは瞳を閉じ、倒れ込んだ。クライムのすぐ隣へと。

グリスはアリアの右腕を掴むと、壮絶な笑みを浮かべた。

「キャハハ♪　キャハハハハハハハハハハハハハッ♪」

狂ったように笑うグリス。いや、ように、というのはおかしいか。

彼はすでに、狂っている。

そして。

グリスの右肩に、アリアの腕が振れる。

――生まれるのは、最悪の存在。

『史上最悪の概念兵器』とされる、『失楽園シャングリラ』。

それを操る『聖人』は、あくまで純粋で温和な人間だったという。

だからこそ、最後の最期に『聖王』に敗れたとも。

しかし。

もし、『聖人』が自らのためならば他人を殺すことを是とするような人物だったなら――

「さあ、ここから先はボクの舞台だ。精々無様に這い回って欲しいね」

グリスは、その右腕を動かす。痛みはあるし、本来の腕ではないが故の拒絶反応――特に、創られた体は万全ではない。しかし、今はその痛みさえも心地よい。

「かかってきなよ、人間。『運命』に、勝てるなら」

最悪の具現が、狂気を纏う。
加速する物語は――止まらない。

第三十一話　狂気と狂気（後書き）

一話につき、一組の決着。まさかのグリスｖｓクライム。
……え、予測できた？……すみません。

はい、第三十一話です。楽しんで頂けましたか？

今回は、中々グロテスクな描写がありましたね。十ちょっとの女の子の腕を斬り飛ばすって……無茶苦茶です。
さて、私は物語を書く際、一つの大きなテーマとそれに付随するテーマをいくつか用意します。そして、それとは別に重要なキャラクターにはそれぞれのテーマを用意するのが私のやり方です。
そして、グリスのテーマは『狂気』。
クライムのテーマは『エゴ』です。
クライムはともかく、グリスは最低の屑です。ですが、そんな彼だからこそあそこまで突っ走れるのではないかと。

それでは、しつこいようですが……感想を。一言でも二言でもいいので。お願いします。
……友人に言われたのですが、『一話一話が長いから感想書きにくいんじゃないの？』とか……そんなこと、ないですよね？

そ、それでは、楽しんで頂けると幸いです。
あ、あと、次回は相変わらず長めの予定ですが、それからは一組の戦闘とその決着が主になるので、短くなるかもです。ご了承ください。

それでは、遅くなりましたが、ありがとうございました。

では、次回、第三十二話
「戦場の申し子」

第三十二話　戦場の申し子

空を彩る金色の軌跡は、世界でも数えるほどしかいない亜音速の域にまで到達する魔導師。
金色の死神、フェイト・Ｔ・ハラオウン。

対するは、その金色の軌跡を掻き消さんとする血塗られた傭兵。
しかし、傭兵とはいえ矜持の一つでもあったはずの彼は、今はただ哄笑を撒き散らし、吠えるだけの存在と成り果てている。

カグラ・ランバードに敗れたと、フェイトは聞いていた。
しかし、彼は戦場に復帰してきた。そして、ソラ・ウィンガードと殺し合い、その際に『時間切れ』という言葉を聞き、撤退したとも。

『俺は確かに悪だろう！　だが、テメェらも悪だ！』

かつて、叩き付けられた言葉をフェイトは思い出す。ギレン・リー。戦争の被害者。

彼に同情するわけではない。同情の余地はある。あるが……だからといって、認めるわけにはいかない。
たとえ、ままならない世界に翻弄されたのだとしても。
不条理で理不尽な世界に絶望したのだとしても。

それでも人は、生きていけるのだ。
フェイトという女性は、それを誰よりも知っている。

「吹き飛びやがれッッッ！！」

轟音。一際威力の大きい砲撃が放たれる。以前とは、根本から威力が違っていた。

顔の右半分を覆う、マスクのような機械仕掛けの装置や、右腕を呑み込むようにして顕現する異様な右腕。人と機械の融合。ファイムや戦闘機人のようなスマートさはない。あるのは、異質というその一点。

文字通りの融合だ。機械をただ、くっつけたような。そんな、印象。

「くっ――」

フェイトは速度を上げる。ギレンがどんな手法を用いてここまでの魔法を行使しているのかはわからない。いや、予測はできる。あの機械が補助の役割を果たしているのだろう。敵方にはあのグリス・エリカランがいるのだ。

しかし、機械で魔法を強化できるという話は聞いたことがない。質量兵器と魔導は別物である。事実、ＪＳ事件においてもジェイル・スカリエッティはロストロギアを使用し、『聖王の器』たるヴィヴィオを強化し、戦闘機人たちを強化していた。ガジェットにしても同様だ。

だが、ギレンからはロストロギアの反応がない。どういうことか。

（考えても仕方ない）

ギュッ、と、フェイトはバルディッシュを握る手に力を込める。いつまでもギレンに手間取っている場合ではない。核兵器の発動まで、時間がないのだ。

「バルディッシュ！」
《ｙｅｓ，ｓｉｒ》

相棒が応じてくれる。形状が変化し、大剣へと姿を変える。

《Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ》

放たれるは金色の閃光。煌めく一閃が、狙い違わずギレンを穿つ。
対し、ギレンもただ攻撃を待つわけではない。その速度から、回避は困難と判断。その右腕の砲身を前に向ける。

――衝突。

先に光が世界を覆い。
続いて、轟音が大気を震わせた。

海上で戦っていた二人の余波により、津波が発生。しかし、今の二人にとってはそれさえも意識の外。

《Ｆｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ》
《Ｓｉｌｖｅｒ　Ｂｕｌｌｅｔ》

「「オーバーリミット！！」」

同時に紡がれる言葉。通常、放たれる魔法の弾丸というのはＳランク魔導師であっても、同時に放てるのは精々百を数える程度である。そこに細かい操作が入るとなれば、更に半分以下になる。あの高町なのはでさえ、精緻なコントロールは通常、６８発が限界と断言している（これはこれで異常な数字だが）。

しかし、今の二人はフルドライブ発動による魔力強化の恩恵と、自身が持つデバイスのサポートを全面的に受けることにより、同時に五百を数える魔力弾を放っている。

速射限界突破――フェイトは自身の有する儀式魔法により、１００発を数える弾丸を放てるが、あれは秒間毎に限れば一度の発動数はそこまで多くない。

しかし――今。

二人は、同時に５００の弾丸を放っている。

――ズガガガガガガガガンンンッッッ！！！！！！！

この数になれば、精緻な操作など不可能である。互いに、『敵を撃て』という命令しかしない。圧倒的な速度で迫る弾幕は、全て、一人の魔導師を討つためだけのもの。

世界の頂点たる戦いが、激化する。

そして。

「「――――――ッ！！」」

二人は、同時に目を見開いた。そもそも、精緻なコントロールをしていない魔法弾である。撃ち合えば、互いに相殺することなく撃ち漏らしたものが出てくるのは道理。

フェイトとギレン。互いに迫る弾丸の雨の数は――２００。

――轟音が、世界を包み込んだ。

◇　◇　◇

世界を呪うようになったのは、いつだったのか。
世界を呪うことが馬鹿らしくなったのも、いつだったのか。
もう思い出せないし、思い出す必要もない。

生まれた時に、人生は決定されていた。運命は決定されていた。
――死。
それも、馬鹿馬鹿しいことに神とやらのために死ねという。

聖戦？――馬鹿らしい。
殺し合いなんて血生臭いことをしている時点で、そこに救いも安息もありはしない。

しかし――そんなことさえ、疑問に思うことさえ、許されはしなかった。
疑問を抱けば、死んでいく。
戦場とは、そういうものだ。

幼い時分にそれを知ったのは、不幸かはたまた幸福か。
……何にせよ。
そこで、終わったはずだった。

それでも、今、生きている。
何故なのか？

真理、という言葉を知った。

それは、世界に定められたルールだという。
この残酷で不条理で理不尽な世界に定められたルールだと。

理解した。
力が、ルールだ。

何と、単純なルールか。
食物連鎖。弱肉強食。
俺は強かったから、生きてきた。

ならば、何を求める？
こんな体になってまで、俺は、何を。

――俺は何を、求めていた？

◇　◇　◇

轟音。ブラックアウトしそうになる意識を、何とかギリギリで保つ。
凄まじい威力だ。五体満足なのは――非殺傷設定のおかげか。本当に、甘いものだ。
管理局の魔導師とは、どこまでも甘い。

「ぐっ……！？」

右腕に激痛が走った。見れば、右腕の砲身が大破してしまっている。
右の頬も痛むが……おそらく、これは顔に着けていたマスク型の補助装置がやられているのだろう。

無様だな、と、ギレンは吐き捨てた。
先程のあれは、走馬灯だろうか？――いや、今はそんなこと、どうでもいい。
――ザアッ。
微かに聞こえた、風の音。そして、紫電が瞬く弱い音。
風が渦を巻く。位置は――背後。

「オーバードライブ。真・ソニックフォーム」

その言葉は、死神の言葉に聞こえた。
――一閃。
思い切り叩き付けられた一撃は、狙い違わずギレンの体を叩き、吹き飛ばす。
凄まじい音を立て、海へと叩き落されるギレン。彼は、水中からその姿を眺めていた。

（……防御を捨てて、速度の一点特化を目指した姿か）

先程まで羽織っていたマントはなくなり、全体的に露出が増えている。無駄なものを全て――いや、必要なものさえすべて排除して、速さに懸けたというのか。

（――上等）

――ザパンッ！！

高速で空へと上がり、ギレンは得物を構える。見れば、フェイトも少なからず傷を負っていた。あの圧倒的なスピードで避けようとしたのだろうが、数が数だ。避け切れなかったのだろう。

もっとも、ギレンに比べれば随分と軽傷だが。

「……降伏してください」

不意に、フェイトが口を開いた。ギレンは、くくっ、と笑う。

「冗談じゃねぇ。どうせ、死刑だろ？」

「そんなことは――」

「詭弁はやめろよ、執務官」

ギレンは、吐き捨てるように言った。

「どうせろくな結末なんざ待っちゃいねぇんだ。だったら、とことんまで殺し合おうぜ」

「……そんなことはない。あなたが望めば、いくらでも未来は変えられる」

フェイトは、言う。

かつて、何度も何度も彼女に呼びかけてくれた人がいた。

暗闇に囚われていた自分を、闇に繋がれていた自分を救い出してくれた親友。

私も、その人のように。

「どうしようもないと思っても、それでも、変わっていける。変われるんだ。まだ、始まってすらいない。だったら、いくらでも」

――本当の自分を始めるために。

かつて告げられたその言葉を、フェイトはギレンに紡ぐ。

未来は不確定であり、未だ形を成さない。

だから、いくらでも変わっていけると。

「――変わる必要なんてねぇんだよ」

しかし、ギレンは振り払う。魔力を集中させ、全てを。

「俺は、俺に納得してる。このぶっ壊れた体と心にな。変わるってことは、否定することだ。俺は選んだ。俺を、俺自身を。俺という存在は始まってる。これからも続いていく！！」

大気が、吠える。

凄まじい魔力がギレンの右腕――破損した砲身に集中していく。

生き方を変えること。それは、素晴らしいことだけではない。

変わる、ということは、今までを否定することだ。

ここまで、こんな様に成り果てるまで歩んできた道を、ギレンは否定しない。できるわけがない。

なればこそ――

狙うは世界。フェイトを点で捉えたところで、避けられるのは目に見えている。

――ならば、面で捉える。

「吹き飛びやがれェェェッッッ！！」

準備の隙など与えない。全力の砲撃。凄まじい魔力が奔流となり、世界を焼く。

グリスが用意した機械は、人工的にリンカーコアを強化する装置だ。寿命を削るほどの生命力を魔力に強引に変換するための。

放たれた一撃は、世界を喰らう。

対し、フェイトは前に出る。退こうがどうしようが、逃げることはできない。

二振りの剣を合わせると、巨大な大剣へと姿を変える。それを、フェイトは全身全霊で振り下ろした。

――轟音。世界が揺れる。

二人は歯を食い縛り、この永遠のように永い一瞬の攻防に全神経を集中させる。少しでも気を抜けば墜ちるのは自分だと双方が理解していた。

そして、決着の時が迫る。

「ぐっ！？」

呻き声を漏らしたのは、ギレンだった。その砲撃が徐々に切り裂かれ、また、切り裂かれる速度が上がっていく。

単純な結果である。

面の攻撃と、一点突破を目的とした点の攻撃。その相性だ。

……砲撃は、切り裂かれる。

「……ちっ」

振り下ろされた一撃が、ギレンを叩き落とした。

◇　◇　◇

フェイトは、大きく息を吐いた。その体には、所々傷がある。

（……もう少し耐えられてたら、私が落とされていた）

その想像をし、ゾッとする。凄まじい強さだった。本当に。

だが、勝利したのはフェイトだ。後は、ギレンを捕縛すればいい。

そう思い、ギレンを追おうとした瞬間。

《サー、あの男の反応が消えました》

「えっ？」

バルディッシュの言葉に、フェイトは目を見開く。確かに、反応が消えていた。

「逃げた？」

《そのようです。……転移先は、『あそこ』ですね》

「……『失楽園シャングリラ』」

フェイトは、空に浮かぶそれを見上げる。要塞と呼ぶには強大過ぎ

る、あの『聖王のゆりかご』よりも巨大な存在。ある種の神秘性さえ感じさせるそれは、あまりにも圧倒的過ぎる。

――史上最悪の概念兵器。

ユーノ・スクライアが話していた言葉を思い出す。何でも、通常のロストロギアとはあまりにも成り立ちが違い過ぎるため、常識が通用しないのだとか。

概念兵器……物体として世界に存在するのではなく、固有の『理由』によって存在するロストロギア。そうであるが故に『聖王のゆりかご』は物理的に『失楽園シャングリラ』を破壊することが許されず、封印するに留まるしかなかった。

ユーノによれば、その『理由』を排除すれば消滅するらしいが……。

「……バルディッシュ」

《ｙｅｓ，ｓｉｒ》

多くの言葉は必要ない。彼女の愛機は、すぐさま応じる。

地上の戦闘も心配だ。しかし、それよりも。

（予告の時間まで、１０時間……！）

残された僅かな時間の方が心配だった。何、心配の必要はない。地上には、頼れる仲間たちがいる。

――雷光の死神が、空を舞う。

◇　◇　◇

失楽園シャングリラ、奥部。
『最強』が座す場所に、その男は現れた。テンリュウ・シンドウはその姿を一瞥すると、視線を外して吐き捨てる。

「少々、虫の居所が悪いのです。あなたの相手をする気はありません。傷を負っているなら、早急に下がるべきではありませんか？」

吐き捨てるような言葉。男――ギレンは、くくっ、と笑う。

「そいつぁ、できねぇ、相談だ。俺は……テメェに用がある」

息も切れ切れに、ギレンは言う。その体からは血が滴り落ち、満身創痍なのは隠しようもない。

フェイトの一撃によってその右腕は大破し、ほとんど原形を留めていない。全身もボロボロで、意識を保っているのが不思議なくらいの有様である。
そんな状態で、ギレンはここにきた。

――『理由』のために。

「俺ぁ、昔、世界の真理……ルールってもんに気付いた」

ピクリと、テンリュウが反応する。ギレンを視界から外していたその瞳が、再びギレンを映す。
凄まじいまでの威圧感。しかし、ギレンは怯まない。

「弱肉強食、食物連鎖……人間も、その輪の中にいる。力が、絶対

だってな」

強いものが勝ち、弱いものが負ける。

戦いとは――単純だ。

生きることは戦い、とはよく言ったものである。

力があれば、生きていける。

「別に、暴力だけじゃねぇ……力ってのは、いくらでもある。だが、俺は、俺には、暴力しかねぇんだ」

権力でも、知力でも、『力』と名のつくものは無数にある。それがあれば生きていけるというのは、間違っていない。

どう使うかは、また別の話だが……。

「俺は、一人でいい。一人で生きていく。だから、暴力だ。俺は――『最強』になる」

ギレンの瞳は、僅かに揺れている。おそらく、意識が朦朧としているのだろうとテンリュウは判断した。

しかし、その想いに嘘はない。

――走馬灯。

夢の欠片。

置き去りにしてきたあらゆるものの中で、唯一、自分にしがみついていたものがある。

それが、これだ。

生きるために。

生きていくために。

ただ、『最強』であれ。

ギレンは、そのボロボロの体で、崩壊した砲身をテンリュウに向ける。

「最強……くれよ」

テンリュウは、その幽鬼のような姿を一瞥する。

妄執に囚われた亡霊。幾何の命も残されていないだろうに、ギレンは目指す。

それこそが、彼を世界に縛り付ける『理由』であるが故に。

「……愚かな」

一言、テンリュウは呟き。

そして――

……。

……。

……。

惨劇。

その場に顕現したものは、そう表現するに相応しかった。

無数の刀。テンリュウが収集した、文字通り無銘の刀を全身に突き刺し、まるで剣山のようになった姿のギレンは、その原形を留めていない。文字通り――バラバラだ。

テンリュウ自身は、ここまでするつもりはなかった。投げた刀の一撃で心臓を穿ち、それで終わらせたはずだったのだ。

しかし、ギレンは刀を突き刺したままで直進してきた。テンリュウはその体を押し留めるため、更に数本、体に突き刺した。壁に縫いとめるために放ったそれを、ギレンは自身の手足を捨ててまで前に進もうとした。

結果、『血桜』が煌めき、その胴体が両断される。ギレンに最早魔力は残っていなかった。しかし、そうでもしなければ、止まらなかっただろう。

――いや、そこまでしても止まらなかった。

上半身だけの姿で、それでもギレンはその砲撃をテンリュウに放とうとしていた。凄まじい執念である。

それでも、結果は無常。

テンリュウは無数の刀をギレン目掛けて投擲。結果、ギレンは絶命した。

「……『最強』、ですか」

ボソッ、と、テンリュウは呟く。

ここまでしなければならないほどに、ギレンは『それ』を渇望した。生きるために。

――死にに来た。

「……かつて、私に挑戦してきた彼らは、どうだったのでしょうか……」

テンリュウ・シンドウは『最強』である。表舞台ではなく、裏側にその名は広く知れ渡っている。現代に限らず、過去の『神道天龍』は数多の猛者に果し合いを申し込まれ、その全てを屠ってきた。

殺すことも、殺さないこともあった。

その全員が『最強』を目指した者たちである。それほどまでに、この『最強』というのは魅力的なのか。

「力など……振るうべき時に行使できねば、ただの枷だというのに」

ここではない、異空間へと誘われた青年をテンリュウは思い浮かべる。

あの青年は強い。戦闘という面に関して言えば、それこそテンリュウにとっては足元にも及ばない。それでもテンリュウが迎え撃つ際に『桜花』と『血桜』の両方を手にするのは、ひとえにあの青年が持つその圧倒的なまでの心の強さ故だ。

あそこまで折れず、前進する人間をテンリュウは見たことがない。

長い長い『神道天龍』の歴史の中でさえだ。

自分自身の命を顧みないどころか、否定までして。

そうまでして、ここに来た。

「……」

ここは相応しくない、というのは嘘だ。確かに実力は不十分。しかし、それを補って余りあるものがある。

覚悟と、理由。

英雄というのは、ああいう人物のことを示すのではないだろうか。
テンリュウは、天井を見上げる。
――籠の鳥。
ふと、そんなフレーズが脳裏を過ぎった。

第三十二話　戦場の申し子（後書き）

今回はフェイトＶＳギレン、そして、テンリュウＶＳギレンでした。
……少し唐突だったかもしれません。精進します。

ギレン・リーですが、彼のテーマは『拒絶』でした。アニメだろうと漫画だろうと、彼のようなキャラクターは総じて説得に耳を貸します。しかし、それはおかしいだろうと思い、彼は最後まで拒絶していました。
実は、彼自身はもっと早くに脱落する予定でしたが……予定は未定ですね。

そして、マサムネ・ナルタキ先生、レビューを書いていただいてありがとうございます。
あそこまでのものがあるとは思えないのですが……先生の期待に添えられるよう、精進していきます。

あと、今回は少し文章の区切りを変えてみました。『読みにくい』と指摘を頂いたので……好評なようなら、全部を改変しようかと思います。

感想など頂けると、モチベーションが上がり、投稿の速度が上がります。
本当に、一言二言でいいので、感想をお願いします。

ありがとうございました。

それでは、次回。
第三十三話「？笑えるはずだ？」

第三十三話　？笑えるはずだ？

騎士の本懐とは、主のためにその命を使うことである。
自らの剣を捧げた、唯一無二の主がために……そのために散ることこそ、本望である。

だからこそ、剣を握り。
なればこそ、敵を屠る。

しかし、それで本当に良いのか、と思うことがある。
主は、幸福になれと仰った。そう、幸福にだ。
幸せが何たるかを教えてくれた、大切な主。あの人のためならば、たとえ死んだとしても私は笑っているだろう。

しかし、幸福か、と聞かれれば即答はできない。
未練がないかと問われれば、間違いなく否と言う。

あの人の傍にいられれば。
ずっと、隣にいられれば。
それだけで、幸福でいられる。

それは、騎士としてなのか。
それとも――

◇　◇　◇

氷と炎が激突する。圧倒的な剣戟と、魔力の衝突。

片や、古代ベルカにおいて『史上最悪のロストロギア』と呼ばれた『闇の書』の騎士。

片や、近代ベルカにおいて最強を謳われた、蒼き騎士。

――一騎当千。その誉れが何より似合う二人が、正面から衝突する。

「はあっ！」

「ふっ！」

振り抜かれる一閃。二人の戦いは激化する度に場所を移動し、失楽園シャングリラの上空、地上問わずあらゆる場所で衝突している。

（強い……これが、古代ベルカの騎士と融合騎か……！）

シグナムの一閃を双剣で受け止め、後退しながらエリアは内心で称賛の言葉を紡いだ。

エリア・カリアの体には、ある特殊な装置が埋め込まれている。重大な欠陥が見つかったために名前さえ与えられなかったそれは、『意志無きユニゾンデバイス』だ。

古代ベルカの産物である、ユニゾンデバイス……その力は、圧倒的である。それは、シグナムという騎士が体現している。

だが、問題も数多い。一番の問題はやはり、ユニゾンにおける相性だ。ユニゾンできれば相当な力を発揮するが、そのユニゾンができる魔導師というのがまず少ない。先天的な資質に依存するこの傾向

こそ、ベルカ式という術式が廃れていった理由である。

千の魔導師よりも、一騎当千の猛者を一人。

それこそが、ベルカの理念。

そして――現代の騎士たちは、再びユニゾンデバイスを望むこととなった。

理由は酷く単純で、管理局と聖王教会のバランスだ。聖王教会には教会騎士団と教会聖歌隊という戦力がある。前者は騎士で、後者は魔導師による編隊だが、これに管理局が難癖をつけてきた。

曰く『戦力を持つことは平和を乱す要因である』と。

無論、聖王教会は反発したが、そのまま揉めては本当に争いになってしまう。そこで、数ではなく質を求めたのだ。千の魔導師に匹敵する騎士が一人いれば、数では一人でも実質は千というロジックが完成する。

しかし――現実はどこまでも残酷だった。

意志が邪魔になると考えられ、生み出されたユニゾンデバイスの後継機となるはずだった存在。それはしかし、多くの騎士たちの命を奪うことになる。

――拒絶反応。

急激な魔力の強化に耐えられた騎士は、当時ではたった二人しかいなかった。その過程で、二十人もの騎士が命を落とすことになる。

エリア・カリア。

カリム・グラシア。

耐えきることができた、たった二人の騎士。その二人の騎士には、共通項があった。
曰く――

「紫電――」

一瞬、エリアの意識が別の何かに逸れた。その隙を衝き、上空からシグナムが剣を振る。

『「一閃ッ！！」』

――ズドンッ！！！！！！

凄まじい轟音が響き渡る。
まるで水切りの石のように何度も地面をバウンドし、失楽園シャングリラの上にある湖に着弾した。

ゴポッ、と、水の音が響いた。揺らめく視界。水の中にいる。

「……」

エリアは、静かに目を閉じた。そうしてから、自身の胸元に双剣を握る手を当てる。

――我が、主。
私は、何のために戦うのでしょうか？

おおよそ、エリアという騎士に似つかわしくないことを、エリアは内心で呟く。

何のために戦うか。
それは、彼女自身が誰よりもわかっている。
――我が主のために。
ずっと、それだけのために戦い続けてきたのだ。ずっと、そう、ずっとだ。
しかし――だ。
それを、あの人が望んだことはあったのか？
（――戯言を）
浮かんできた迷いを、全て一笑の下に切り捨てる。
あの日。
我が剣を捧げた日。
あの方は――言ってくれた。
『わしの知らんとこで死なんのやったら、ええよ』
受け入れてくれた。
剣を受けてくれたのだ。
さあ――行こう。
主との約束だ。
私はまだ――ここでは死ねない！！
死ぬのは――あの方の隣でだ！！

――――――――――！

荘厳な音が鳴り響く。撒き散らされた氷の魔法が、湖の全てを氷結させ、一つの世界を創り出す。

それはあまりにも美しく。
圧倒的だった。

――ツウッ、と、エリアの口から一滴、血が滴り落ちた。
負傷の傷ではない。これは、リミットが近付いている証だ。

（時間がない。ならば……）

一撃必殺。
ベルカの神髄を以て、古代の騎士を踏破する。

「――参る」

飛来した烈火の将と、剣を打ち合わせる。
衝撃で、世界が割れた。

――吹き飛ぶ氷塊が、更なる戦いの激化を謡う。

◇　◇　◇

空に描かれる、二つの軌跡。
共に、その力を誉れと共に謳われる二人の騎士の戦いは、知らず、見る者を魅了する。

はやてが指揮する魔導師たちも。
戦闘機人たちでさえも。

騎士とは、斯くも精錬で、美しい。

ただ、その剣を振るうのではない。彼らには、彼らにとっては何よりも大切なものがある。

誇り、と、それを人は呼ぶ。

大切な主のために。
剣に誓った、想いのために。

あまりにも純粋で、真っ直ぐで、そして、その刃でこそ想いを語るからこそ、彼らは美しい。

「シグナム……アギト……」

はやての唇から、吐息のような言葉が漏れた。

二人の、大切な家族。二人だけではない。今、自分とユニゾンしているリィンフォースも、地上で戦っているザフィーラとシャマルも、先行して内部に突入しているヴィータも、大切な家族だ。

信じている。
信じていない――わけがない。

だから、今、自分がすべきことは戦いを見守ることではない。

「砲兵隊前へ！！」

はやては声を張り上げる。同時に、複数の魔力スフィアを展開。

――ブレイズカノン・トライデント。

魔力量において、八神はやては高町なのはをも上回る。文字通り、戦略級の力を有しているのだ。

個人でそんな力を持つことが是であるかどうかはわからない。しかし、ただ言えるのは、個人としての魔力ならばかのテンリュウ・シンドウをも凌駕する魔力を八神はやては内包している。

『展開、ターゲット設定。――行けます！』

リィンフォースが告げる。狙うは、敵陣営の中心。はやては、その有り余る魔力を振りかざす。

「煉獄の焔へ――撃ち抜け！！」

はやての眼前に、魔力スフィアが融合し、巨大になったそれが三つ、展開される。

『「ブレイズカノン・トライデント！！」』

放たれたのは、紅蓮の閃光。

三つの車線で世界を走り抜けるそれが、大気を焼き、大地を蹂躙し、戦闘機人たちを呑みこんでいく。

「放てぇぇぇっっっ！！」

そこへ、迸るような号令がかかった。砲兵隊の隊長、ティアナ・ランスターだ。魔導師たちが一列に並び、はやてが蹂躙した戦闘機人たちの一団へ、更なる追撃を叩き込む。

轟音と、閃光。

一個中隊――5、６０人のＡランク相当魔導師による一斉掃射だ。その威力は凄まじく、大地を蹂躙していく。

ただ、驚くべきなのは、中隊の砲撃よりも八神はやてのそれの方が凄まじい威力を発揮したという事実。

故にこそ――魔導は、才ある者が用いれば世界を食らう。

「フリード！」

誰もが息を吐こうとした瞬間、キャロが叫んだ。見れば、生き残りの戦闘機人たちが、戦車型の機械兵器を操り、特攻を仕掛けようとしていた。

先程から、何度も相手にしているあの兵器――中々に凶悪である。その馬力はＡランクの前衛魔導師が数人がかりでなければ抑えることはできず、その砲撃も純粋な質量兵器だ。ガトリング砲と……榴弾。二種類のタイプがいるらしく、ガトリング砲は無論、対人榴弾を使うタイプは相当厄介だった。

ガトリング砲は、その連射能力によって戦線をこじ開けるのに対し、対人榴弾は広範囲の殺傷兵器だ。当たると炸裂するそれは無数の破

片を撒き散らし、敵を殺傷する。事実、初見の際には相当な被害を被った。

そして、一番厄介なのはその装甲だ。魔法による強化は勿論、何やら普通とは違う材質を使っているらしく、相当硬い。

しかし――それには、フリードリヒが実に役立ってくれた。

「ブラストレイ！！」

「――――――！！」

キャロの命に応じるように発された咆哮。吐き出された熱線が、機械兵器を蹂躙する。

飛竜、フリードリヒ。

若年竜とはいえ、その破壊力は圧倒的。流石は古代より数々の伝説に歌われる伝説の存在である。その力は、あまりに圧倒的だった。

機械兵器たちが沈黙する。非殺傷、などというものに気を払う余裕はなかった。

「……終わった、かな？」

はやてが呟く。敵の姿はない。エリアサーチにも、特に反応はなかった。

はやてはそれを確認、声を張り上げる。

「負傷者の確認や！　見張りと救助部隊に分かれて、動けるメンバーを確認！　部隊を編成し次第、突入するよ！」

「「「はい！」」」

魔導師たちが声を張り上げる。瞬間。

――――――――――。

凄まじい轟音が響き渡った。世界の温度が、急激に下がっていく。

「――――ッ！？」

弾かれたように、はやてはそちらを見る。

世界が――氷に閉ざされる。

曇天の下、絶対零度の無限氷牢が、大地を覆っていく。

「――シグナム」

はやては、呟いた。

彼女が絶大の信頼を寄せる、烈火の将――大切な、家族の名前を。

◇　◇　◇

――強い。

その一言しか紡げぬ自分に、また、紡がせる相手に、シグナムは思いを馳せる。ベルカ式という術式は、あまりにも才能に頼り過ぎる術式である。それ故に、古代ベルカにおいて隆盛を誇りながらも現

代では廃れてしまった。

しかし、だ。

今ここにいるのは、間違いなくベルカの騎士。

一騎当千を理念とし、それを体現することを目指し、同時に到達した騎士。

（いかんな……口元が緩む）

この状況では、一瞬の油断が命取りだ。それはシグナムも理解している。

だが――

（これほどの強者と戦える……それに喜びを覚えている私がいる）

バトルマニア、と、シグナムはよく彼女と同じ夜天の騎士であるヴィータに揶揄される。それに対し、普段から表立って否定しないのは、それを彼女自身が認めているからだ。

もっと、もっと。

更なる力を。無限の剣戟を。

幾千の猛者を打ち倒し、ただ一人佇んだかつての戦場のように。

この身を削る、地獄のような殺し合いを――！

（やはり歪んでいる。しかし――）

エリアと亜音速の剣戟で切り結びながら、シグナムは口元に笑みを

浮かべた。

フェイトや、剣の友であるシスター・シャッハとの模擬戦は実に心躍るものだ。高町なのはと戦った戦技披露会は実に楽しかった。

しかし、それは所詮、『模擬戦』である。
殺し合いには程遠い。必殺の意志がない。

どこかで、そこに不満を感じていた自分がいた。何故なら、彼女が駆け抜けてきた古代ベルカの戦乱を始めとする昏き日々は、殺すか殺されるかの殺伐としたものだったのだから。
そして、そこで戦ってきたからこそ、シグナムは思う。

――そうだ、これだ、と。

望んだものは、必殺の意志。
問答は不要。躊躇いは捨て置く。
この手に握るは、断ち切るための刃。

「アギト！！　レヴァンティン！！」

シグナムが叫び、カートリッジがロードされる。二発の薬莢が、宙を舞う。

「クリスティナ！！」

対し、エリアも応じる構え。双剣のそれぞれから一発ず、つ二発の薬莢が宙を舞う。

そして、放たれるは必殺の一撃。

躊躇いも、憂いも、全てを置き去りに。

騎士の頂点たる二人が、その全霊を賭して刃を振るう――！

『「紫電！！　一閃！！」』

「氷姫！！　轟閃！！」

――ズドンッ！！！！！！！

響き渡る轟音が、世界を揺らした。あまりの衝撃に二人共に吹き飛ばされ、距離が離れる。シグナムは地面に叩き付けられ、肺から空気を吐き出す。アギトが、声を張り上げた。

『シグナム！？』

「ぐっ……大丈夫だ、案ずるな。――――むっ！」

シグナムの眉が跳ね上がる。濃密な魔力の気配。感じるのは、明確な危機。

「――――」

見上げると、少し離れた中空にエリアが佇んでいた。二振りの刃を交錯させ、十字に構え、目を閉じている。

――圧倒的な魔力。

その口元からは血が滴っており、満身創痍であると窺えた。故に、これは必殺の魔法。

最後の――一手。

「決着だ。騎士シグナム。……あなたと刃を交えたこと、誇りに思う」

二人の距離は遠い。しかし、不思議とその声ははっきりと聞こえた。

シグナムは、私もだ、と頷き、自らの得物を構え、立ち上がる。

「そもそも、初めて見えた時に殺し合いを果たすべきだった。何の因果か、決着はここまで先延ばされたが……それもまた、互いの徳が故。しかし、騎士エリア。違えるな。最後に立つのは――」

二人の視線が交錯する。焼けるような気配。濃密な殺気が、世界を支配する。

そして――二人は、宣言する。

「「私だ」」

勝つのは己と。

信じる刃は、必ず敵を討つと。

魔法が、紡がれる。

「凍てつけ!!　極氷の彼方で永劫眠れ!!」

《Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ!!》

紡がれたのは、最強の氷結魔法。

『エターナル・コフィン』――かつて、『闇の書』を封印せしめるために生み出された魔法。その破壊力は、『史上最悪のロストロギア』と謳われる『闇の書』を、理論上とはいえ半永久的に封じることさえ可能とされた。

かの、歴史上唯一ＳＳＳランク魔導師の名を冠したギル・グレアムの弟子であるクロノ・ハラオウンが譲り渡された『氷の杖デュランダル』でしか実現不可能であるはずの大魔法。しかし、エリアはそれを行使する。

そこにどんな無理があったのか、シグナムは知らない。

そこにどんな想いがあるのかも、シグナムは知らない。

知る必要など――ない。

「アギト」

『おう！』

相棒が応じ、魔力が噴き出す。全身全霊の一撃を放つ覚悟だ。

「レヴァンティン」

《Ｊａｂｏｗｌ！！》

理由など、想いなど、知るだけ無駄だ。

理解などできないし、する必要もない。相手は、全霊を賭して戦ってくれている。ならば、私が。

シグナムという騎士が、すべきことは――！

《Ｂｏｒｇｅｎ　Ｆｏｒｍ！！》

レヴァンティンの形が変わり、弓の形をとる。一点突破――これは確か、ファイムの言葉だったか。

「駆けよ！！　隼！！」

シグナムが吠える。そう、これだ。これでいい。

騎士として、エリアに報いる方法は、たった一つ。

――全霊を以て、その全てを打ち破る！

「おおおっ！」

炎を纏いし隼が、氷の世界を駆け抜ける。

◇　◇　◇

エターナル・コフィン……おそらく、現代に紡がれる魔法では、最強の魔法の一つだろう。その威力は、あまりにも圧倒的であると同時に、破壊的である。

エリアがこの魔法を知ったのは、聖王騎士団を去る少し前だ。『闇の書』――彼女にとって、親友とも呼べる女性を奪った憎きロストロギアを破壊した。その知らせを聞き、すぐさまその戦闘記録に目を通した。

――圧巻だった。

二人の『幼きエース』を中心とし、数多の猛者たちがその奇跡を成し遂げた。管理局には、八神はやてとその騎士『ヴォルケンリッター』を、『闇の書』のことについて嫌うという風潮が一部ではあるようだが、彼女は違った。

ただただ痛烈に――憧れた。

主と仰ぐ、最強と信じる魔導師。
その魔導師と唯一肩を並べることを許された、英雄。

その二人でさえ敵わなかった因果を、呪われた歴史を、自らの手で八神はやてと『ヴォルケンリッター』は断ち切った。その美しいまでの奇跡に心打たれぬはずがない。また、騎士として、憧れなかったはずがない。

私は……終ぞ、主の苦しみを和らげることができなかった。
癒すことが、できなかった。

誰よりも側にあると言いながら、『ヴォルケンリッター』がそうしたように、自らその呪いの連鎖を断ち切ることができなかった。

なればこそ、力を求めた。

もっと、強く。
もっと、もっとと。

いつか、主を救い出せる日が来るようにと。

だから、試す。

（『闇の書』をも終わらせた、絆の奇跡……この目で）

願うのは、それだけだ。

騎士シグナムの強さは圧倒的。それは、幾度となく紡いだ打ち合いで理解した。更に言えば、相手には自分とは違い時間制限がない。総合的に見れば、やはりあちらの方が上だろう。

しかし、それで戦いが決まるわけではない。だからこそ、エリアは最後の切り札を抜いたのだ。

自身の命――本来、生み出せる以上の魔力を擲ったことによって使用できる、究極の魔法を。

「決着だ！！　騎士シグナムッ！！」

再び、彼女は吠える。何となく、結末は予測できていた。

永遠の氷河が、エリアを中心に広がっていく。呑み込まれた者は永遠の牢へと幽閉される。人間を一人、ロストロギアごと封印しようとして生み出された魔法だ。その威力は決して侮れない。いや、普通ならば抗うことさえ許されない。

しかし――

「駆けろ！！　隼！！」

轟く咆哮。やはり、シグナムは一歩も退かなかったらしい。――それでこそ、至高の騎士。

そして、放たれた矢が氷の世界を食い破る。

――――。

――――――――。

――――――――――――。

駆け抜けた、紅蓮の一閃。氷の世界を食い破りながら、それは、一切の衰えも見せずに飛来する。

――パキィィンン……！

エリアのデバイスであるクリスティナが、砕け散る。受け止めた矢の勢いは、それでも止まらない。

そして。

「――すみません、主」

――その体を、深々と矢が貫いていた。

ごふっ、と、エリアは夥しい量の血を吐き出す。

「私は、負けました」

その体が――墜ちていく。

氷の世界が、砕け散った。

◇　◇　◇

氷が砕けていく。後数時もすれば、全て跡形もなく消滅するだろう。

シグナムは、横たわるエリアを見ながら息を吐いた。

「私の勝ちだな、騎士エリア」

「……そのようだ」

エリアは、苦笑を浮かべる。その体は満身創痍で、体の至る所に傷が刻まれていた。その鎧も所々が砕け散り、無残を晒す。

「見事、その一言しか……浮かんでこない。なんだろうな、これは……主のために戦うと、そう、大義を掲げ、負けたというのに……しかし、納得している。やはり、と……私の見た奇跡は、やはり、美しいと……」

その瞳から、涙が零れ落ちた。後悔はない。全身全霊で戦い、敗北した。それはただ、力が足りなかったという結果に過ぎない。

しかし――無念である。

「……泣くならば、泣け」

パシュン、という音がした。ユニゾンを解いたシグナムは納刀する

と、エリアに背を向けながら言葉を紡ぐ。

「そして、泣くだけ泣いたなら、自分にできることを考えろ。この状況で、この場所で。……別に、お前だけにしかできないことである必要はない。大切なのは、お前がどうしたいかだ。それがわかれば、きっと――」

アギトを連れ、シグナムは去ろうとする。

「――笑えるはずだ」

それは、厳しくも、優しい言葉。

エリアは、そんなシグナムに問いかける。

「……私は、愚かなる騎士だ。いや、騎士を名乗ることさえ許されまい。私は主が過っていると知っていて……それでも、止めなかった」

「――是非もない。私も、かつては間違っていると知りつつ剣を取り、戦った。だが」

振り返り、強い意志を称えた瞳でシグナムは言う。

「悲しい過去があろうと、消せない傷痕が残ろうと……生きる意味を失わなければ、人は強く生きていけるものなのだと、そう思うようになった。お前と、お前の主の生きる意味。――もう一度、考えてみろ」

――苦笑。

エリアは、手を伸ばして地面に触れる。

「フリーズ・ブレイク」

キィン、という静かな音が響いた。エリアを中心に、氷の結界が展開。その姿が、消える。

それを見送ったシグナムに、アギトが言葉を紡いだ。

「いいの、シグナム？」

「構わんさ。決着は着いた。大局に影響はない。……私も、変わったものだ」

空を見上げ、シグナムは言う。

「かつての私であれば、躊躇なく命を絶っていただろう。……ここまで甘くなったのは、主のおかげか。何故かな」

苦笑。どこか嬉しそうに、シグナムは笑う。

「弱くなったのに、喜んでいる私がいる」

良いな、と、シグナムは呟いた。

これは実に――良いことだ、と。

第三十三話　？笑えるはずだ？（後書き）

シグナムＶＳエリアです。騎士という生き方を貫くエリアと、それを捨て、家族のために戦うと決めたシグナム。二人のどちらが正しいというのはきっとありません。ただ、今回はシグナムが勝利したというお話です。

はい、第三十三話です。楽しんで頂けましたか？

そして……すみません。後、二、三話とか言いつつ、終わりそうにありません。後五話くらいですかねー……？

ええと、エリアのテーマですが、『騎士』です。文字通り、全てを主のために。格好いいですよね、こういう人。ただ、なろうとは思いませんが。

この戦いは、当初から予定していたものです。騎士の戦いを描くと同時に、それだけでは足りない『何か』――ここでいうなら、シグナムが口にしたことを描きたかったので。

感想、ご意見、お待ちしております。感想をいただけて若干テンションが上がっているので、次回は結構早めかも？

それでは、次回。

第三十四話「暴風、その名は狂気」

第三十四話　暴風、その名は狂気

我流極星、流れ星。

カグラ・ランバードが名付け親である、ソラ・ウィンガード必殺の奥義は、その尋常ならざる速さと力で敵を討つという至極単純なものである。しかし、シンプルであるということはそれだけ完成されているということであり、事実、凄まじい威力を誇る。

――だが、これは諸刃の剣だ。

ソラ自身には、多少の負荷がかかる程度である。しかし、彼の刃たるデバイス『ヴィクトリア』が耐えきれないのだ。

『ヴィクトリア』は、新世代のデバイス、その実験機である。あまりにも多様な変形機構を備えたそれは、その代わりに耐久力を捨ててしまった。結果、本人は否定しているが、『天才』に相応しいだけの魔力を有しているソラの『全力』を受け止めきれないのだ。

――『全力を出さない魔導師』。

いつしか、ソラに付いてしまったこの名は、全て彼のせいであるとは言い難い。彼にも原因はあるが、全力を出せないデバイスを与えた管理局にこそ、その咎はあるだろう。

まあ、何にせよだ。

要は、『使えば武装を失う』技なのである。つまり、文字通り決着を着けるその瞬間にのみ使用されて然るべき技だということ。放ち、仕留められなかった時、ソラは丸腰で敵と向き合うことになるのだ

から。

だから――これは本来、有り得ないことだった。

「我流極星――『流れ星』ッ！！」

咆哮と共に放たれる、必殺の一撃。圧倒的な威力を誇るそれは、陽光の軌跡を纏いながら突き進む。狙うは、リヴァイアス・バルトマカリ。

ソラ・ウィンガードは、酷く聡い少年である。客観的、というのだろうか。感情というものが、そもそも希薄だ。普段の彼は人懐っこく、よく笑う少年である。しかし、一度戦闘に入ると恐ろしいまでの冷静さ、冷徹さを発揮する。

自分自身さえも、駒の一つ。命を天秤にかけ、賭けるべきか否か、踏み込むべきか否か、退くべきか否かを冷徹に判断する。

あまりにも落ち着いたその思考は、十五の少年のそれではない。しかし、ソラはやってのける。

まるで、それが自己であるかというかのように。

だから、おかしいのだ。

初手の一撃から、倒せる確信もないままに『最後の一撃』を放つのは――

「ぐうっ！？」

リヴァイアスが、声を上げる。堪えようとしたが、突き抜けた衝撃は防ぎきれるものではない。Ｓランクに匹敵する威力のそれだ。まともに受ければ、吹き飛ぶのは道理。

――ズドンッ！！

リヴァイアスが、家屋に直撃する。聖王教会の棟の一つだ。避難しているという前提で、そこに叩き込んだソラは、息を吐く。

ヴィクトリアが――砕け散る。

刀身が砕け散り、柄だけになった二振りの剣。ソラはその柄を握り締めたまま踵を返すと、一人の少年の下へと走り寄った。

「おい！！　しっかりしろ！！」

大声で呼びかける。無理に体には触れない。夥しい量の血液が、地面を濡らしていた。

「う、あ……」

ごほっ、という音と共に、少年――ウィルが、血を吐き出した。抉るようにして刻まれた傷。リヴァイアスの戦斧による一撃が、致命傷を与えていた。

――これはなんだ、と、ソラは思った。

ウィルは、敵だった存在で、捕虜のようなものだ。それが何故、リヴァイアスに斬られる？

更に、どうして、まるで味方であるかのように、倒れている。

わけが――わからない。

「くそっ、傷が深い……！　ヴィクトリア！」

《ッ、坊やも人使いが荒いねぇ……無理だよ、あたしもアンタも、

治癒魔法の心得なんてないだろう？》

「だが！」

ソラは叫ぶ。諦められない。諦めきれない。

この少年には、まだ――！

《危ない坊や！！》

警告の言葉。ソラは、反射的に折れた得物を手にした。瞬間、凄まじい衝撃が体を打ち、地面を削りながら後退する。

至近距離に――リヴァイアスの姿があった。

「ほう！　我が刃を柄のみで受けるか！　良いぞ小僧――実にいいッ！！」

「がっ！？」

力を込めただけ――それだけでソラは押され、吹き飛ばされる。

壁に打ち付けられ、肺から空気が絞り出される。ソラは、それでもリヴァイアスを見据えた。

「テメェ――」

「良い目だ。実にいい。そうだ。それだ。その気迫、殺意をもって刃を振り下ろせ。俺様が望むのはそれよ。さあ、地獄を。もっと――地獄をッ！！」

「何故味方を斬った」

吠えるリヴァイアスに、立ち上がりながらソラは声を絞り出す。リヴァイアスは、ふん、とつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「何を今更。裏切り、反逆の結末など決まっている。その覚悟をもって成すからこそ、意味がある。それだけのことだ」

リヴァイアスは吐き捨てる。それは、つまり。

ウィルは――自ら、こちら側へ？

「暇潰しにもならんかったがな。……さあ、貴様の疑問には答えた。次は俺様の望みに応えてもらおうか！！」

――轟音。

凄まじい力で、リヴァイアスが戦斧を振り下ろす。ソラはそれを受け止めるが、すでに限界であった『ヴィクトリア』は受け切れず、粉々に砕け散る。ソラは瞬時に後ろへと飛び退いたが、避け切れずに体を斬られる。

鮮血。

噴き出す血が、視界を染め上げる。

「温い」

そして、ソラへと更なる追撃を加えようとした瞬間。

「ＩＳ・エリアルレイド」

それを阻害するように、いくつもの魔法弾が放たれた。リヴァイアスは咄嗟に飛び退く。そこにいたのは、自らのＩＳを展開するウェンディだ。リヴァイアスは、ほう、と言葉を漏らす。

「追ってきたか――追ってきたか！！　良いだろう良いだろう！！
あれでは足りぬか小娘！！　ならば――更なる地獄を見せてやる
！！」

ゴバッ、という音と共に、地面が抉られる。リヴァイアスに、疲れの様子は微塵も見られない。

ソラは痛む体を動かし、ウィルの下へ行く。そうしてから、言葉を紡いだ。

「目ェ、覚ませ。……それとも、もう、死ぬか？」
「ぐっ……」

ウィルが、僅かに声を出す。そうして、ソラの服を掴んだ。

「たの、……たの、む…あ……アリアを…、守っ、て……く……」

げほっ、と、ウィルは血を吐く。再び、ソラの中に疑問が芽生えた。

――なんだ、これは？

ウィルの傷は、致命傷だ。この状況では、正直助かりようがない。今にも零れ落ちそうな命。それは、ウィル自身が一番理解しているはず。なのに、ウィルは言ったのだ。

『守ってくれ』

自分ではない他人を、死の淵に想っているのだ。死を前にすると、人は驚くほど素直になり、正直になるものだ。だから、これは格好つけたわけではなく、ウィルの本心だということだろう。

死ぬことよりも。
終わることよりも。

――誰かを、想った。

「……ッ、おい！」

ソラは、声を張り上げる。ウィルは、自身のデバイスを強く握ると、ソラへと押し付けるように差し出した。ソラが、その柄に触れる。
――瞬間。

「……」

ウィルの瞳が、閉ざされた。その手が、力なく地面に落ちる。

キュウ、という、声を聞いた。小型状態の黒竜サリヴァルム――サリヴァが、小さく鳴いて――いや、泣いていた。

「おい」

ソラは、ウィルに呼びかける。しかし、反応はない。
こんな、こんな――

「ふざけんな、こんなもん押し付けて、お前」

キュウ、と、サリヴァが泣きながら縋り付いてきた。

嗚呼、そうか。
嗚呼、そういうことか。

「……」

サリヴァを撫でる。リヴァイアスの一撃で、ソラも深い傷を負っていた。しかし、溢れ出る血を魔法によって強引に止血する。応急処置くらいなら、自分程度の魔導師にも可能だ。

サリヴァを撫でながら、ソラは呟く。

――お前も、悔しいか？

そうか、これが『悔しい』か。

――お前も、辛いか？

そうか、これが『辛い』か。

そして。

そして。

そして――……

――これが、『怒り』かッ！！

「行くぞサリヴァ。俺が強引に封印を解いてやる。敵を討つぞ」

「キュウ！」

応じると同時、ソラは魔法陣を展開。胸の奥が熱い。まるで燃えているかのよう。

対し、頭は酷く澄み切っている。血を流したせいだろうか。頭から血が抜けている。

――上等。上等だ。いいだろう。

別に、ウィルという少年は敵同士だ。それについて怒る道理はない。

道理はないが、どうにも許せない。

「限定解除。痛いけど、いいよな。我慢するよな。俺だって――キレてんだ」

「キュウ、キュウ――ギャオウッ！！」

竜が吠える。悲しみの咆哮。

その竜と共に、友ではなく、敵であるはずの少年の武器を取り、ソラは駆ける。

「行くぞッ！！」

裂帛の気合と共に、戦いが激化する。

◇　◇　◇

結局、何のために戦っていたのか。

考えることも放棄して、ただ、勝手に世界を憎悪して。

そうして――生きてきて。

歩んできた軌跡に、意味はあるのだろうか？

紡いできた言葉に、想いはあるのだろうか？

今なら、あの――赤髪の魔導師に負けた理由もわかる。俺は、ただの子供だった。

こんな、何も知らないような子供が生き残れるほど、世界は甘くない。

――この結末は、当然だ。

だけど。

たった、一つだけ。

アリアの、ことだけを。

俺には、もう、守れないから。

……嗚呼、なんだろう。

酷く、眠い。

――おやすみ。

◇　◇　◇

ウェンディは、溢れそうになる涙を必死で堪えていた。敵――リヴァイアス・バルトマカリ。ウェンディの標的は、最初からあの男だけだった。

ファイムに聞かれた時、ウェンディは一つ、嘘を吐いた。

『リューイをこんな風にしたのはホムラ・イルハート』――あれは、嘘だ。止めをさしたのはホムラかもしれないが、実際にリューイを傷つけたのはリヴァイアスだ。

だからこそ、ウェンディは悔しさに涙を流しそうになる。

（どうして、どうして、どうして……ッ！？）

一体、何発の弾丸を叩き込んだのか。リヴァイアスは、全く堪える様子がない。
騎士たちも立ち上がり、シスター・シャッハを中心にリヴァイアスに攻撃を加えている。それなのに、リヴァイアスは息一つ乱さない。

（私は、私はっ――！）

ウェンディは、引き金を引き続ける。それがいつか、打倒に届くと信じ。

「温いっ！！　その程度か！！」

リヴァイアスが、大きく回転するようにして周囲を薙ぎ払う。まるで竜巻のようなそれに巻き込まれ、騎士たちが吹き飛ばされる。

「ギャウ！！」

そこへ、サリヴァが熱線を放つ。だが、あろうことかリヴァイアスはそれを戦斧を振るうことで弾き飛ばすと、笑みを浮かべた。

「若年竜か……それでも温い！！　俺様に刃を突き立てんとするならば、もっと命を賭してみろ！！」

轟音。サリヴァがリヴァイアスの一撃によって巨体を薙ぎ払われ、そこへ攻撃を仕掛けようとしたソラも、吹き飛ばされた。
そこへ、シャッハが彼女の得物であるトンファー型のデバイス『ウィンデルシャフト』を構えて突撃する。その前に、一人の女性騎士が得物である長い棒状の武器を以てリヴァイアスを穿たんと突きを繰り出す。
だが、リヴァイアスは笑みと共に戦斧を振り上げ、女性騎士――シ

スターかもしれない――は、そのデバイスごと吹き飛ばされた。

「マリア！！――貴様ッ！！」

シャッハが叫び、カートリッジをロード。放たれる一閃は――しかし、リヴァイアスに届かない。

「ははははっ！！　どうした！？　殺してみせろ！！　この俺を、殺してみせろッ！！」

「あうっ！？」

シャッハが薙ぎ払われ、宙を舞う。そのまま、リヴァイアスは戦斧を全身全霊を以て地面に振り下ろす。

「ぬんっ！！」

――ゴパッ！！！！！！

全てが砕け散る音が響き渡った。リヴァイアスを中心に、衝撃波が発生。ウェンディを含め、全員が吹き飛ばされる。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

リヴァイアスの笑い声が響き渡る。何という理不尽。この圧倒的なまでの強さ……最早、無双。

圧倒的な強さ。リヴァイアス・バルトマカリは、Ｓ－ランクの魔導師だという。だが、これを目の前にしては、そのレベルで収まらないのが良く理解できた。

正しく、怪物。聖王騎士団の猛者と、教導官、戦闘機人を同時に相

手取ってこれだ。理不尽にもほどがある。

「――――ッ！」

ウェンディは、それでも引き金を引き続ける。その弾丸は確実に当たっている。それなのに、ダメージを与えている様子はない。

「実に、いじらしいな小娘。退けぬ理由でもあるというのか？」

――ギャン！！

カートリッジがロードされ、リヴァイアスの戦斧が鎖により伸びてくる。それは正確にウェンディの武装を吹き飛ばし、その衝撃で体を薙ぎ払った。

いや――ギリギリで、直撃をもらわなかっただけで大したものだろう。しかし、それでもリヴァイアスの攻撃力は凄まじい。倒れ伏したウェンディは、その激痛から動きを奪われる。

「おおおっ！！」

そこへ、槍を携えた満身創痍の少年が突撃を敢行した。リヴァイアスは、戦斧を振りかぶる。

――ズドンッ！！

大気が揺らされる。衝撃でめくれ上がった地面は、元の美しさを完全に失ってしまっていた。

果たして、敗北したのはソラ。

「――――」

悲鳴さえ上げることを許されず、その体が壁へと叩き付けられた。

――全滅。

正しく、ここにいた戦士たちは、たった一人の狂気に敗北した。

「……ッ」

ウェンディは、歯を食い縛る。

情けない己が。こんなところで倒れている自分が。戦うための体を授けられていながら、何もできない自分に、涙を流す。

――悔しい……！

痛覚遮断。

――悔しい、悔しいよ……！

神経回路、再構築。

――私は、私たちは……！

死滅細胞、排除。現行細胞、限界起動。

――私たちは、なんのためにこんな体に！？

戦闘機人モード――起動。

◇　◇　◇

渇きが癒えない。どうしようもなく、ただ、渇く。

幾人もの猛者と争うことになろうと。

幾年もの月日、戦いに身を投じようとも。
ただ――渇く。
血を。
血を。
強者の血を。

吸血鬼、という生物がいるという。伝説上の生物だ。
血を吸う、鬼。
成程――それは、俺様のことだ。

吸血鬼は高潔な種族だという。――ふざけるな。
鬼であると名乗るなら、理性など放り投げろ。戦え。戦い続けろ。

血を。
血を。
幾千の返り血と、自身の流血を。

敵と己の血が混じり合った時、俺様はただただ、歓喜する。

さあ、戦場を。
地獄のような戦場を。

俺様の果ては、そこでいい。
そこならばきっと、渇きは癒える。

嗚呼。

嗚呼。
嗚呼……。

いつになれば、癒えるのだ。

この、果てのない渇きは――……

◇　◇　◇

ウェンディの瞳が、黄金の煌めきを映し出す。戦闘機人モード。自身の体が壊れることさえ厭わず、その代償に僅かな時間なれど圧倒的な力を発揮する。

「あああっ！！」

ウェンディが吠え、無数の魔法弾が放たれる。負担による内出血が皮膚を破り、出血が起こっているが……今の彼女には、その痛みさえも届かない。

「ぬんっ！！」

リヴァイアスが、その魔法弾の全てを打ち払う。その瞳は、明確にウェンディを敵と見なしていた。
ウェンディは、再び吠える。

――犯罪者は、誰にも助けてもらえないッスか？
かつて、ウェンディはファイムにそう問いかけた。その時に、悟ったことがある。

犯罪者は――どこまで行こうと犯罪者だ。

何を成しても。どれだけの努力を積もうとも。
人を判断する上層部の人間が、そういうレベルでしか人を見ていないのだから変わりようがない。
ならば、どうするか。

変わっていくしかない。
自分自身を守れるように、なるしかない。

辛く、厳しく、険しい道。
だけどそれさえも、選んだ道だから。

「うわあああっ！！」

ウェンディが吠える。しかし――

「――温い」

衝撃が、全身を駆け抜けた。
ウェンディの体が浮き上がり、次いで、地面に叩き付けられる。

「気迫は見事。だが、生半可な力ではこれが結末だ。せめて、苦しまぬよう送ってやろう。この私は走狗だ。なればこそ、道具の処理は道具がすべきだろう」
「……」

ウェンディは、這い蹲りながらリヴァイアスを睨む。その眼は死なない。
無様でも、無残でも。

ウェンディは――諦めない。

「良い目だ。だが、悲しいかな。勝者は正しい者ではない。勝者が――正しい者だ」

リヴァイアスが、歩み寄ってくる。ウェンディは、自分自身の体を叱責する。

立て、と。

しかし、無情にも、体は動かない。

（私は、まだ……ッ！）

――立て。

足音が近付く。

――立って。

足音が止まる。

――立ち上がって！

斧が振り上げられる音が、響く。

「……どうして」

ウェンディの瞳から、涙が零れ落ちる。

――無念の、涙が。

「どうして――立てないんスかあッ！？」

刃が――振り下ろされる。

「立たなくていい」

――金属音。
現れたその背中は、格好良くて。
逆光に照らされたシルエットは、怒りを称えているようだった。
嗚呼、と、ウェンディは納得する。
この背中に――惚れたのだと。

◇　◇　◇

――ふざけるな。
最初に浮かんだのは、それだった。

「――――」

上段より振り下ろされた斧を受け止めた体勢で、金髪の青年――リューイ・エンドブロムは何事かを呟いた。
――エクスプロージョン。
僅かに、ほんの僅かにリヴァイアスに届いた言葉。
世界が――朱に染まる。
響き渡る轟音。爆発により、リューイとリヴァイアスの二人が吹き飛ばされる。リヴァイアスが、壮絶な笑みを浮かべた。
「来たか――来たか小僧ッ！！　待ち侘びた！！　待ち侘びたぞ！

！　さあ殺し合うぞ殺し合うぞ！！　あらゆる悦楽がこの一瞬の前には下らぬ座興となる！！　さあ――徹頭徹尾、殺し合うぞ！！」

「……なんなんだよ、テメェは」

爆発によって負った傷から流れ出る血を拭い、リューイは言う。

「テメェ、何やってくれてんだよ。ふざけんな。何の理由があって――なんの正義があって、こんなことしてんだよ！？　答えろ！！」

「正義など――愚か者の戯言に過ぎん」

リヴァイアスは、ふん、と鼻を鳴らした。

「正義とは、結果だぞ小僧。それは、何かを為した結果として付随する称号の一つだ。成程、人はそれを目指すのだろう。だが、正義を掲げたその瞬間、それは欺瞞となる」

――この世に悪はなく、あるのは幾千の正義のみ。

――一人殺さば犯罪者だが、百人殺せば英雄だ。

人の矛盾。誰もが追い求める正義というものは、誰もが追い求めるが故に多くの形がある。価値観の話だ。

正義とは、悪というものがあって初めて成立する概念である。明確な悪だと相手を糾弾することにより、こちらは正義となる。

だが――それでいいのか？

例えば、一人の貧しい少年がいたとする。彼は、生きるために犯罪と知りつつ盗みをした。それは悪か？　選べなかった事実さえ、悪と断ずるのか？

そして、その少年を無理やりに更正させようとするのは、正義なのか？

正義とは、価値観である。そしてそれは、目指すべきものであった掲げるものではない。
正義を掲げた時、相手は悪となる。その時、人は話を聞かなくなる。
――『あなたとわたしは違う』。
闘争にある根本へと触れるそれは、それこそが、悪だ。
相手を理解しようとさえせず、正義という欺瞞を振り翳す――それだけで、悪だ。いや、それこそが悪なのだ。
だが、そんなことはリューイにもわかっている。
「……知ってんだよ。掲げた正義が悪になることぐらい」
知っているのだ。正義のために、犠牲になり続けてきた男を。
それを切り捨てようとした管理局が――正義を掲げる組織が、どれほど醜いかも。
だが、そんなことじゃないのだ。
――リューイの『正義』は、そんなに難しいものじゃない。
「信念がどうとか。理念がどうとか。偽善だろうが偽悪だろうが欺瞞だろうがどうでもいいんだよそんなもん。そういう小難しいことは頭いいやつに任せとけ。俺が言いてぇのは、そういうもんじゃねぇ」
リューイは、自身のデバイス――大剣型のデバイス『ブラッディハウンド』を構える。

「泣いてる奴に手を差し伸べたり。困ってる奴に手を貸したり……そういうのは、正義だろうが」

簡単な話だ。仁義、と呼ばれるものに近い。

困っている人を助けて、相手も自分も笑う――それが、『正義』だ。

「ささやかだよ、ちっぽけだよ。……けどな、そんなもんしかこの手には掴めねぇんだよ。そんな風にしちまったのは、テメェらだろうが。小難しい理屈ばっかり口にして。結局自分を正当化してるだけじゃねぇか。『そんなもん』、必要ねぇ。笑う時は笑って、泣く時は泣いて……怒る時は怒る。それでいい」

それだけでいい、と、リューイは言った。そして。

「世界を救うとか、そんな大それたことは英雄の仕事だ。俺は、俺の日常を守る。俺の正義は、それでいい。理由なんて、その程度でいい。それだけあれば――テメェを殺せる」

そして、金髪の青年が吠える。

「ミリアムッ！！」

『はい！！　風よ――！！』

リューイとユニゾンしているミリアムの声。同時に、ブラッディハウンドに風が纏わりついた。

そして――一閃。

暴風が、刃となってリヴァイアスを襲う――！

「ぬうっ……この程度で俺様を殺せると！？　なめるなよ小僧！！」

――ガァン！！

あまりの威力に、衝撃波と火花が周囲に撒き散らされた。撃ち合いは一瞬。されど、その一瞬でリューイは理解する。

――このままでは、負ける、と。

そもそも、実力差が明確なのだ。そこに、リューイは体調が万全からは程遠いという事実がある。ならば、どうするか。

（一撃必殺……切り札しかねぇ。――ミリアム！）

（はい！）

《Ｅｘｐｌｏｔｉｏｎ》

ガシャン、と、二発のカートリッジがロードされる。刃に、美しい金色の焔が宿った。その姿はさながら、黄金の剣。

そこへ――ミリアムの風が、更に纏わりつく。リヴァイアスが、笑みを浮かべた。

「ほう――美しい。やはり、いいな。実にいい。人間とは斯くも――美しい」

そして、リヴァイアスも戦斧を構える。そこへ――

「放てッ！！」

轟く叫び声が響き渡った。シスター・シャッハの号令により、騎士たちが一斉に魔法弾を放つ。リヴァイアスは、鬱陶しそうにそれを打ち払った。

「ＩＳ・ヘヴィバレル！！」

そこへ、一直線に走る閃光が迸った。その砲撃は狙い違わずリヴァイアスを穿ち、轟音が周囲を支配する。

――ディエチだ。

「まだ抗うか！！　羽虫共ッッッ！！」

「ＩＳ・ランプルデトネイター！！」

吠えるリヴァイアス。その体に、いくつものナイフが突き刺さった。正確には鎧に突き刺さったのだが、それらはパチン、という指を鳴らす音と共に起爆する。

「ぬうっ！？」

「おおおっ！！」

そこへ、ノーヴェの射撃が発動。ガトリング砲に匹敵する連射速度を誇るそれが、リヴァイアスを釘付けにした。

しかし、痛む体を引きずり、ここまで辿り着いた彼女たちの必死を込めてさえ、リヴァイアスという暴風は抑え切ること叶わない。

「鬱陶しいッ！！　塵に還れッ！！」

衝撃波。再び、彼を取り囲んでいた者たちが吹き飛ばされる。元々満身創痍なのだ。耐えられる道理はなかった。

「レクイエム――」

更に、リヴァイアスは体を捻り、大きく構えた。あれは――マズい！

「――――！」

だが、リヴァイアスはいきなり弾かれたように自身の右側を見た。
そこにいたのは、尋常ならざる魔力を纏い、ウィル・ガーデンズのデバイスをまるで槍投げでもするかのように構えるソラの姿。
リヴァイアスが飛び退こうとする。しかし、その足を縫いとめるように魔法弾が数発、飛来した。

「貴様ッ――！」

――ウェンディ・ナカジマ。
倒れ伏しながらも、彼女は、彼女にすべきことを果たした。
そして、『本気を出さない魔導師』が、その全身全霊を込めた投擲を――為す！

――――――――――。

それは、正に破壊の一撃。圧倒的な威力を込めて放たれた投槍は、文字通り世界を蹂躙した。
飛来するその一撃は、正確にリヴァイアスの両腕を穿つ。純粋な質量と魔力による一撃は、リヴァイアスの両腕を奪い去った。

「……行け」

それは、誰が呟いた言葉だったのか。

空に舞う、一人の騎士。
未熟なれど、若かれど。

その在り方に――過ちはない。

「「「行けぇぇぇっっっ！！」」」

――振り抜かれた一撃は、二人の騎士を巻き込む大爆発を起こした。

◇　◇　◇

――リヴァイアス・バルトマカリ。
彼の半生には、謎が多い。出生、そして、教導隊に入るまでの彼の記録が一切合財、失われているのだ。
いや――初めから、記録はなかった。
特殊制圧部隊。通称、屍部隊。
いるはずのない魔導師。それが、リヴァイアス・バルトマカリという魔導師の在り方だった。
しかし。
彼は、ホムラ・イルハートと出会う。

圧倒的な魔導。美しいその光。
その男は、彼に言った。

『戦うことしか知らん、か。なら……戦場を用意したる。お前が後悔するぐらいの、ドロドロでぐちゃぐちゃな戦場を。そこで後悔したら、やり直せ』

だから――歩んできた。

地獄のような戦場。戦場という地獄。
嗚呼、と、リヴァイアスは呟いた。
迫り来る敵。濃密な死の気配。
あの男は、少しも嘘を吐かなかった。

「くくく……そうか、これが……死か……」

――ここが、地獄だ。
死という、地獄――。

「何もかもを懸けたさの先に……こんなものが……くくっ、だが……銀月よ。俺様は、後悔などしていない」

後悔したら、と、あの男は言った。
後悔はない。満足だ。
ただ、ただ、満足だ――

「実に、実にいい……良い、戦争だった」

そして、リヴァイアスは、笑う。

「そうか、そうか……これが――敗北か」

瞳から光が消えていき、その命が尽きていく。

「……声が……聞こえる……銀月…、いと、高き……恩寵を……俺様は――先に逝く」

そして、命は燃え尽きる。
戦場を望み、戦場にのみ生き続けた男は、そうして散った。

「いい、戦争だった？」

エクスプロージョン・ブレイク。風の魔法による急激な酸素供給により文字通り爆発させた炎により、敵も自分も吹き飛ばすという、諸刃の奥義。気安くなど使えないそれを使い、深い火傷をその両手に受けながら、リューイは言った。

「ふざけんな。ふざ、けんなッ！！」

叫ぶように、哭く。

「こんなもんが！！　こんなことが！！　認められていいわけがねぇだろうがッ！！」

「――死者の前です。静かにして頂けませんか」

響いたのは、冷淡な声だった。リューイが振り返る。そして目にしたのは、ソラが跪く姿と、手を組み、眠るようにして死んでいる一人の少年。

「あの化け物を倒すのは……こいつが、ウィル・ガーデンズがいなければ、できなかった」

そう言ったソラの傍には、ウィルの得物――リヴァイアスの両腕を吹き飛ばした槍型のデバイス『アルガンツァ』が突き立っている。黒い飛竜も、傷ついた身で、ウィルを眺めていた。その眼は酷く、寂しそうである。

「――シャッハさん」

「はい」

シャッハが歩み寄る。リューイはウェンディに肩を貸し、立ち上がらせると、その光景を見た。

――その場の全員が、黙祷し、一人の少年のために祈りを捧げる姿を。

これが、ウィル・ガーデンズが手にしたもの。

その人の人生の価値は、その死の瞬間にわかるという。この少年は、これだけの人が祈りを捧げるに足ることをした。

聖王騎士団。

管理局。

この二つと共に、迷いながらも、守るために――戦った。

そして、シャッハの祝詞が終わる。

「――そうあれかし（アーメン）」

「「そうあれかし（アーメン）」」

祈りの時間が――終わる。

ソラ・ウィンガードは『アルガンツァ』を手に持つと、天を見上げた。その視線の先にあるのは――楽園。

「どうする気だ、テメェ」

「頼まれたんで。……礼には礼を。無礼には無礼を――受けた恩は返さなければ」

リューイの言葉に、冗談めかしてソラは答える。リューイは、ふん、と鼻を鳴らした。

「上等だ。俺も行く」
「リューイ！？」

ウェンディが声を上げる。リューイは苦笑した。

「行かなくちゃなんねぇんだ。……このふざけた戦いを、終わらせるために」
「無理してますね」
「してねぇよ」

リューイは言い。
そして――羽ばたく。

「ちょっと、行ってくる。――待っててくれ」
「リューイ！！」

ウェンディが声を張り上げるが、リューイは苦笑を漏らすのみ。

戦いは、最終局面へ。

第三十四話　暴風、その名は狂気（後書き）

というわけで、ＶＳリヴァイアス、決着です。
……理不尽この上ない強さでしたね、本当に。

はい、第三十四話です。楽しんで頂けましたか？
リヴァイアスのテーマは、『戦争狂い』です。戦闘狂ではありません。そして、ウィルのテーマは『狭い視野』でした。前者は、言葉通り。戦争でしか生きられない男で、後者は、自分の側しか見えていなかった子供、という意味です。

ようやく、ここまで……。
次回なんですが、少し遅くなるかもしれません。山場なので、結構とんでもないページ数になりそう……。

そして――皆様のおかげで、１３万ＰＶ突破しました！！　ありがとうございます！！
今後とも精進していきますので、どうぞよろしくお願いします。

そして……感想を頂ける方法を本気で思案している私がいたり。

読んでくださり、ありがとうございました。

では、次回、第三十五話。
「エース・オブ・エース」

第三十五話　エース・オブ・エース

管理局の英雄といえば、誰だろう？

管理局を築き上げた、伝説の三提督か？

史上唯一、ＳＳＳランクに到達した、ギル・グレアムか？

史上最初にエース・オブ・エースを名乗った、レスティア・Ｇ・グランツか？

その後、永き不在のエース・オブ・エースの座についた、二人の男。

カグラ・ランバードとホムラ・イルハートか？

闇の書を破壊せしエースたちを率いた、奇跡の女神、リンディ・ハラオウンか？

それとも――不屈の心と星の力を携えしゆりかご戦役の英雄、高町なのはか？

わからない。きっと、全てが正解で、全てが過ちである。

英雄とは、人々が望んだ時、現れるものなのだから。

人の想いだけでは、力だけではどうにもできない危機が迫った時。

英雄は、誕生する。その英雄自身は、ただの人間だ。しかし、彼、或いは彼女は、人々の期待という力を背負い、奇跡を起こす――否、起こさざるを得なくなる。そうして、英雄が生まれてしまう。

それはきっと、とても悲しいことだろう。

その人の意志など関係ない。人々の――ひいては、その世界の意志により、個人は英雄へと祀り上げられるのだから。

そして、今。
世界は、英雄を望んでいる。
楽園を終わらせる、英雄を――……

◇　◇　◇

煌めくは、青と赤、そして、七色の軌跡。
地面を削りながら、エリオ・モンディアルが限界まで上げた速度を落とす。耳を澄ませる。視覚は、この相手に限っては不都合だ――右ッ！

「ふっ！」

ダンッ、という音と共に、エリオは自分の体を前に投げ出す。瞬間、その頭上を『何か』が通り過ぎた。
音が響き、壁が爆発によって抉られる。魔法弾だ。不可視の……透明の魔力を以て紡がれたそれは、視認できない。音と感覚を頼りに相対するしかない。
放ったのは――カグラだ。

「うおおおおっ！！」

ローラーが地面を走る音。スバルが、その拳をカグラへと叩き込んだ。しかし、カグラはスバルの姿を一瞥するだけ。何十にも渡って展開された障壁が、スバルの拳を拒み続ける。

「――――ッ！」

すぐさま、スバルはその場を飛び退いた。瞬間、先ほどまで彼女がいた場所に無数の弾痕が刻まれる。やはり――不可視の魔法弾。

「♪」

鼻歌。楽しそうにカグラの口から紡がれたそれは、二人にとってはレクイエムとなる。

――七色の、世界。

二人は、内心でほとんど同時に呟いた。それなりの広さはある通路だ。例の、戦車型の機械兵器が横に二台並んでも余裕がある横幅と、十メートル以上はある縦幅。相当な広さだ。しかし。

スバルとエリオの二人と、カグラ。彼我の距離は、十メートルとちょっと。

――そこにまるで壁でも作るかのように、七色の弾丸が無数に展開されていた。

「「――――ッ」」

二人の全身から、汗が噴き出す。あれほどの量の魔法弾。あの高町なのはとの訓練でさえ、経験がない。いや、訓練である以上、彼女も本気を出していなかったのだろうが。

それにしても……これは。

いくらなんでも――理不尽過ぎる。

これが――管理局何千万の魔導師、その頂点に立つ、エース・オブ・

エース。

力を損ねた？――ふざけるな。これは、正に。伝え聞く、『英雄』の姿ではないか。

「さて――願いましては」

そして、弾丸が放たれる。始まるのは、死のダンス。

放たれる千を数える魔法弾。無論、精緻なコントロールはない。しかし、それでも数が数だ。微妙にタイミングがずらされたそれは、最早点ではなく面の攻撃になる。

――轟音。

二人とも、避け切ることは最初から放棄していた。躱すのは、ギリギリのラインで。障壁を展開し、嵐の中を耐える。高町なのはと八神ヴィータ。二人の英雄に、ＪＳ事件の際に叩き込まれたのだ。生き残るために。無事に帰るために。

信じてくれる人がいる。待っていてくれる人がいる。

信じている――人がいる。

だからこそ、耐える。相手が強大なのは、今回が初めてではない。いつだって、どんな時だって、泣いてる誰かを救うために。貫った優しさを届けるために、戦ってきたのだから。

しかし――

「――チェックメイトだ」

響いたのは、そんな言葉。カグラは親指を立て、サムズアップの形を作ると、それを下に向けた。

「若いな、魔導師共」

――二人の頭を、脳天から不可視の一撃が叩いたのは、その言葉が紡がれるのとほぼ同時だった。

虹色吐息――カグラのみが持つレアスキルという名の『特別』が、猛威を振るう。

◇　◇　◇

「……ッ、ああ、くそッ、この程度の傷で……」

呻くような声が漏れた。小さな通路。人が一人立って通れるくらいの、他の通路に比べて明らかに細いその道に。

黒い影。闇の中に浮かぶのは、一人の影。

壁に寄りかかり、土気色の顔で苦悶の表情を浮かべるその男は、体を引きずるように進んでいく。

――ドサッ。

その体が、地面に倒れ伏した。乾いた笑い声が、響く。

「……一時は、『不死身』だなんて呼ばれてたが……いや、死んでねぇなら、まだ悪運残ってるか……はは、怖ぇなぁ、オイ……。悪運、尽きたら……とんでもねぇ、しっぺ返しが待ってそうだ……」

軽口。それが紡げることに、安堵した。
まだ、やれる。
死ぬのは――まだだ。

「姫さんにも……借り、できちまったしな…馬鹿にも、貸して、借りて、利子だってもらってねぇし……あの野郎、麻雀の負け分、払えっつーの……」

本来、この世界にはなく、別の世界から持ち込まれた遊びを思い出す。意外と頭を使う上に凄まじい勢いで時間が過ぎていくので、どハマりした。
賭け事を管理局の人間がしていいのかどうかは、知らないが――

「……何だよ、さっきまで――忘れてたのに」

ずっと、忘れていた。そんなこと。
なのに、今、思い出したのは。

「走馬灯、か」

死の間際に起こるという、人生の回想。成程、可能性は高い。
今正に、自分は死にかけている。だが。

「ふざ、けんなよ」

無理やりに、立ち上がる。痛みはもう、感じない。
どれだけ自分が危険な状態かは、理解している。それでも。
やはりまだ――死は早い。

「さあ……願いましては。俺が、管理局にとっての何なのか」

答えは何だと、呟いた。

◇　◇　◇

砲撃魔導師……それは、現代の魔導師の中では最も基本系の術者であると同時に、意外と数が少ない魔導師の系統である。理由は単純で、究極的に要求されるのが『出力の大きさ』であるが故だ。

砲撃魔導師というのは、強固な守りを中心に立ち止まって展開・射出が基本となる。その際に必要とされるのは、敵から『逃げない』という精神力と、防ぎきるだけの技能、そして魔力だ。故に、砲撃魔導師としての技術を習得している者は多くとも、純粋な砲撃魔導師は少ない。

しかし――今。

この場所には、その砲撃魔導師の究極ともいえる二人が戦っていた。

「アクセルッ……シュゥタァァアアッ！！」

放たれるのは、高町なのはの誘導弾。量よりも精緻なコントロールを中心として編まれた４５発のそれは、容赦なく空間を蹂躙する。

「ふっ――」

《Ｍｏｏｎ　Ｆｉｅｌｄ》

対し、ホムラは受ける構え。薄い銀色の光を放つ結界が、シュータ

ーを全て遮断する。

《Ｉｎｏｃｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》

そして、間髪入れずに反撃の砲撃が放たれた。なのははそれを、シールドで防ぐ。受ける際、盾を僅かに斜めにすることで、受け流すように受け止める。

――轟音。

魔力に対し、強固な耐性を持つはずの壁が砕ける。戦いが始まって、約一時間。しかし、互いに浮かぶ中空より欠片も移動していない。

これが――砲撃魔導師の極致。

何が来ようと動かず受け止め、強固な守りには僅かな綻びさえも許さない。対し、敵を撃ち抜く一撃は、当たれば必殺の一撃。

砲撃魔導師の原型を構築した魔導師、ホムラ・イルハート。

現代において最強を謳われる砲撃魔導師、高町なのは。

この二人の戦いは、見る者が見れば震えが止まらなくなるだろう。

互いに撃ち合った魔法の数は、すでに百を数えようとしている。だというのに、この二人は息一つ乱していないのだ。

圧倒的な魔力量に加え、鍛え上げられた肉体。それを裏付ける、数多の修羅場、死線を潜り抜けてきた経験。

おそらく、この二人もまた、間違いなく『最強』なのだ。

「……わしがこの世界に来た時な、ミッド式もベルカ式も、特に差はあらへんかった。まあ、遠距離主体か近距離主体かの差があったくらいで、どっちも普及率が似たようなもんやったんや」

不意に、ホムラは語り出す。
今でこそ、ミッド式は多人数を制圧することを目的とした『現代の魔法』などといわれているが、ホムラがこの世界に来た二十年前などは、まだそんな地位を確立していなかった。

遠距離を主とするミッド式。
近接戦闘を主とするベルカ式。

この二つに大きな差はないとされ、しかし、明確な差があった。
――定型の存在。
ベルカ式というのは、今でこそ古代ベルカの時代より形を変えてしまったが、目指すべき到達点というものが定められている。
一騎当千の騎士。
今も昔も、それは変わらない。『己の信ずる武器を以て、必倒の意志の下、敵を討つ』――それは、ずっと変わらない。
しかし、そこで、ホムラには疑問が生まれた。

ならば――自分が扱うミッド式は、どこに到達すればいい？

多人数相手にも立ち回れる術式。いいだろう。実用性は確かに高い。数を制圧する力。いいだろう。しかし――足りない。

当時のミッド式の術者は、ある一定のラインに到達すると、誰もが立ち止まらざるを得なくなった。最終的な形がわからない。
無論、そこで悩むのは一流の術者たちだ。しかし、そんな彼らでさえ、悩むほどの命題だった。
明確な目標――それは、極める上では最も大事なものだから。

「せやけど、二つの間には一つ、大きな差があった。……目標が、ミッド式にはなかったんや。ベルカ式のような、明確な目標がな。

わしは、教導隊に入ってすぐ、そこにぶち当たって――そして、完成させた。ミッド式の目指すべき究極系を」

それこそが、現代の魔法の雛型、砲撃魔導師。
目指すのは、ただ一騎で全てを制圧する頑強さ。
ベルカ式の一騎当千とは少し違う。個人対個人ではなく、個人対軍隊で戦うことがミッド式の究極。
それを思い描き、完成させた男。それ故に、誰もが彼をこう呼び称える。

――正真正銘の天才、と。

「なんや、後輩がわしの戦い方をマスターしてくれとんのは、素直に嬉しいわ。名誉は不滅に非ず……されど、技術は永遠なり。うん。せやけど、お前は勘違いしとる」

ホムラの瞳が、炎を宿す。その瞳に込められているのは、怒りでも、憤りでもなく、もっと単純なもの。
――殺意。
ホムラ・イルハートは、高町なのはを殺す気だった。

『高町なのはの敗北は、管理局の敗北である』――事実上、最強の魔導師たる高町なのはを示す言葉にこれ以上の言葉はない。実際はそう簡単には管理局を打倒することはできないが、こう謳われている以上、高町なのはを倒す――いや、殺すことはホムラたちにとって至上命題である。
世論、というのは、人が思っているよりも遥かに影響力が強い。世論が『管理局の敗北』を認識すれば、それだけで世界が荒れる。

――滅べばいい、と、ホムラは思った。

自分のような男が一人、憤りを覚えただけで。それを発端として起こった戦い程度で滅びる世界など、もう、滅べばいい。

だから、確かめるのだ。

管理局は――高町なのはは、『答え』を見せてくれるのかと。

「わしの考えた戦い方で、わしに勝てるわけがないやろうが。わしに勝ちたいなら、見せてみろや。わしが去った後、お前らが磨いてきた技術を。魔導を。その果てに、何を手にしたのかを。――正義を語るなら、その真実を証明してみろや」

なのはは、無言。

ただ、自らのデバイスを――唯一無二のパートナーを、握り締める。

戦闘は激しさを増し。

楽園が、戦場となっていく。

◇　◇　◇

フェイト・T・ハラオウンは、自分自身に歯噛みしていた。『失楽園シャングリラ』――そこを目指し、地上より単独で飛んでいるのだが、空を飛ぶ無数の機械兵器たちに足止めされ、思うように進めない。

（地上も、今は踏ん張ってくれてる。――急がなくちゃいけないのに……）

フェイトの長所は、その高速機動にこそある。しかしだ。いくら早

く動けても、道の全てを覆う壁を突破することはできない。今の彼女は、正にその状態だった。
無数の、敵。
まるで黒い壁でもあるかのように隙なく配置されたその軍団を踏破することは、速さだけでは叶わない。

（ブレイカーを撃つ……？　ううん、駄目。辿り着く前に魔力が尽きちゃう）

ギレン・リー……あの男との戦いは、相当な消耗をフェイトに強いた。ここで大規模な砲撃魔法を展開でもすれば、辿り着く前に限界を迎えるのは目に見えている。
しかし、このままでは辿り着けないままにタイムアップ、という可能性もある。
どうするか、フェイトが思案を始めた瞬間。

――――――――――。

轟いたのは、竜の咆哮。
駆け抜けたのは、一筋の閃光。

――爆発。
機械兵器たちによって形作られた壁に、巨大な穴が開く。

「飛竜――？」

フェイトは、その表情に驚愕を浮かべながら呟く。黒竜――確か、あのテンリュウ・シンドウが従えていた竜だ。
マズい、とフェイトは内心で呟いた。今の一撃は、おそらく外しただけ。あれは敵だ。

前も、後ろも閉ざされた。逃げ場は――ない。
自身のデバイス、バルディッシュを握る手に、更なる力を込めるフェイト。しかし。

《……サー、どうやら違うようですよ》
「えっ？」

愛機が、どこか優しさを称えた声でそう言葉を紡いだ。どういうこと、と、フェイトが言葉を紡ごうとした瞬間。

「ハラオウン隊長！」

聞き覚えのある声が聞こえた。飛竜の背に、二つの人影を確認する。

「ソラと……リューイ！？」
「隊長、ご無事でしたか！？」

声を上げるフェイトに被せるように、ソラが叫ぶ。ソラはそのまま、身を乗り出して手を差し出した。

「説明は後です！　掴まってください！」

――通り過ぎる刹那、フェイトはソラの腕を掴む。ソラはそのままフェイトを引っ張り上げると、指示を出した。

「――突き抜けろ、サリヴァ」
「ギャオウッ！！」

咆哮。意志無き機械たちでさえ、僅かに竦むような咆哮を轟かせ、飛竜サリヴァルムが直進する。自らのブレスによってこじ開けた道

を進んでいく。
その最中、フェイトは二人に問いかけた。

「ど、どういうこと？　どうして二人が？　なんで、飛竜に乗ってるの？」
「あー、落ち着いてください。……おい、ソラ」
「今手ェ離せないんで先輩、説明お願いします」
「はぁ？　サリヴァに関しては何も知らねぇぞ。つか、テメェ、お前の方が先輩だろうが。局勤めの年数的にはよ」
「いいですけど……じゃあ、指示出し代わってくれますか？」
「……わかったよ」

ソラの言葉に、リューイはため息を吐いて応じる。瞬間、サリヴァが大きく動いた。ソラは右手でサリヴァの首筋に触れて自身を固定すると、左手で槍型のデバイス――アルガンツァを構えた。そのままアルガンツァを一回転させ、いくつかの誘導弾を生み出す。

「掴まっててくださいよ――」

ソラが言うと同時、サリヴァが大きく体を大きく急降下させ始めた。落ちる速度に加速を加えているその速さは凄まじく、フェイトとリューイはサリヴァにしがみつくことになる。
そして、海面すれすれで急停止――いや、急激に正面へと方向展開を行い、風圧で海面が裂ける。その背後からは、無数の機械兵器たちが追いすがっていた。

「……チッ、しつこいねぇ。しつこい男は嫌われるってのに。なあ、サリヴァ？」
「ギャウ！」

――上昇。凄まじい速度で上昇するサリヴァに、流石の機械兵器たちも一瞬戸惑う。だが、彼らは意志無き人形である。そのまま、追いすがってくる。
その戦闘機械たちの眼前に、そいつは現れた。

「……人型じゃなくて良かったな、とか思ってみたり」

――ズガガンッ！！

一閃。技と力。上空より飛来した魔導師の一撃により、一瞬でその一団は蹂躙される。
墜ちていく魔導師――ソラ・ウィンガード。それを回収するようにサリヴァが大きく旋回。ソラが海へ落ちる前に、その背でソラを受け止める。

「じゃ、頼んます。……お二方」
「おうよ」
『はい』

着地したソラが間髪入れずにそう言うと、すでに準備を終えていた二人が応じる。そのまま紡がれるのは、金色の閃光。

《Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ》

空を駆け抜ける、風を纏った金色の焔。その一撃は瞬く間に敵の一団を蹂躙。追いすがっていた者たちを一掃する。

『掃討完了しました』
「流石♪」
「……ソラ、お前手ェ抜いただろ？」

「何がですか？」

振り向かぬまま、変わらずサリヴァに指示出しをするソラ。とぼけんな、と、リューイは刺すような視線をその背中に向けた。

「どうして、テメェのデバイスを使わねぇ？　しかも、本気のテメェなら俺に頼らなくてもあれくらい一掃できたはずだ。……用意してた誘導弾も、いつの間にか消してやがるし」

「……鈍い割には、よくわからないところで目敏いですよねー」

ソラは苦笑する。しかしそれは、フェイトも気になったことだ。今の攻防において、ソラは彼のデバイスとは違うデバイスを用いた。何故なら、ソラは『バリアジャケットを纏わなかった』のだ。

バリアジャケットというものは、使い手の体格や性質によって変わってしまうものである。そのため、官給品であっても基本的に専用のものとなるのが普通だ。

デバイスの武器としての部分……たとえば杖や槍などは、扱い辛いとはいえ使うこと自体は可能である。しかし、バリアジャケットを纏うことはほとんど不可能。第一、武器にしても本来自分のものではないのだから、扱い辛くて当然だ。なのに、ソラはそれを選んだ。管理局の制服を纏い――上着は脱いでいるが――血に濡れたカッターシャツの姿で、戦場にいる。

フェイトもリューイも、バリアジャケットという自身の身を守る鎧を纏っているのに、ソラはそれさえも纏わずに。

リューイは、うるせぇよ、と、少し苛ついたような声を上げる。

「質問に答えろ。テメェ――死ぬ気か？」

「まさか。死にたくはないですよ。死んでもいいかなー、とは思い

ますけどね。……ま、色々と事情があるんですよ」
「はぐらかすなよ」
「まま、別に死ぬ気はありませんよ。……なんていうか、通さないといけない筋みたいなもんです。男ってのは、馬鹿な生き物ですし？」
「男であるテメェが言うんじゃねぇよ」
「あはは。……じゃ、リューイ先輩、ミリアムさん。隊長に説明を。こっから先は……ちょっと、余裕がなさそうだ」

ソラの声色に、真剣な色が宿る。彼らが進む先に聳えるのは、楽園。
――失楽園、シャングリラ。

リューイは、ふう、と息を吐くと、隊長、と言葉を紡いだ。

「時間がないんで、かいつまんで説明します。……まず、この竜……サリヴァルムですが、どういうわけかそこの馬鹿に懐いてます。そいつによると、『利害の一致』だそうスけど……どちらにせよ、今は心強い味方だ。地上の方は、他の皆さんに任せてきました」
「ええっ？　だけど、この竜は――」
「気持ちはわかります。けど、時間がない。信じるしかないんです」

ぐらりと、サリヴァの巨体が揺れた。『失楽園シャングリラ』より放たれた砲撃を避けるため、身を捻った結果だ。
リューイは、その背に掴まりながら、チラリとソラに視線を送る。

「リヴァイアス・バルトマカリは……討ち取りました。こっちの被害も相当でしたが……」
『ウィル・ガーデンズという少年を始め、数多の味方を失いました』
「……」

フェイトは無言。ウィル・ガーデンズというのは、確か捕虜となっていた少年だったはず。それをまるで味方のように語ることについて、思うところがあったが……相応のことがあったのだろうと納得した。

――なんにせよ、だ。

今は、そのことよりもすべきことがある。

「さあ――正念場です」

ソラが、呟いた。

戦場となった楽園が、近付いていた。

◇　◇　◇

――まるで、砲弾の着弾だった。

内部に突入する者と、残って帰還用の艦を守る人員を編成していた八神はやては、思わず戦闘体勢を取っていた。

土煙が晴れ、そこから声が聞こえる。

「……ッ、テメェ、最後の最後にしくじってんじゃねぇ！」

「いやまあ、サリヴァも頑張ったし」

「キュウ～」

『できれば、もう少し穏やかに着地をしたかったですね……』

「確かに」

聞こえてきたのは、聞き覚えのある声。はやては、思わず声を上げる。

「フェイトちゃん!?」
「はやて!」
驚くはやての側に、フェイトが駆け寄る。その光景を見て、んー、とリューイが首をひねった。
「……俺ら無視?」
「まあ、下っ端ですから」
『ソラさんはともかく、マスターなど一兵卒ですから、仕方ないかと』
「そんなもんか」
言いつつ、リューイは歩き出す。そのリューイのところに、オレンジ髪の女性が走り寄ってきた。
「リューイ、あんたこんなところまでどうやって」
「あ、どもティアナさん」
リューイは軽く会釈し、ミリアムとユニゾンを解除する。ティアナ・ランスターは、二人を見て呆れたように言葉を紡いだ。
「ちょっと、ミリアム。あんた、この馬鹿が暴走したら止める役なんじゃないの?」
「お言葉を返すようですが、執務官。私のマスターは止めて止まるような方ではありません。ならば、その身に付き従い、その身が滅びぬように最善を尽くすことこそ我が誉れです」
「……平然と、よくそんな恥ずかしい台詞が吐けるわね」
「羨ましいですか?」
「誰が!」

「まあ、それはともかく……マスターは、選んでこちらまで来られました。そうですよね？」
「おう」
ガチャリ、と、その得物を握り直した音が響く。
「終わらせないとな。……こんな、ふざけた戦い」
決意を新たに言うリューイ。ティアナは、ふう、と息を吐いた。
「ま、精々無理しないようにね。病人なんだから」
「あ、心配してくれるんですか？」
「違うわよ！　倒れられたら迷惑っていう話！」
「……これが噂のツンデレですか」
ぼそりとミリアムが呟いた言葉が届かなかったのは、幸運だったのか、どうなのか。
「まあいいわ。それで、アンタたちはどうやってここに来たの？」
「ああ。ソラが――」
ティアナの言葉に応じようと、リューイが振り返る。しかし。
「――あれ？」
そこには、誰もいなかった。
――僅かに、血の痕だけを残し。
ソラ・ウィンガードは、姿を消していた。

「――今から、指示を出すよ」

首を傾げるリューイ。その耳に、そんな声が届いた。

「この戦いを、終わらせる」

そこにいたのは。

――八神はやて。

英雄の器を持つであろう、人物だった。

◇　◇　◇

おそらく、ここだ。

壁に寄りかかりながら、小さく呟いた。事前の情報がほとんどなかったから苦労したが、これほどの規模の建造物――要塞とでも呼ぶべきここには、やはりというべきか隠し通路が存在した。

「……まあ、当然だわな」

重い扉を押し込む。これほどの施設だ。万一に備え、最深部から重要人物が脱出できる方法を用意するのは至極当然のことである。

そう、当然。当たり前。

だからこそ――気になる。

（だが……『当然』であることはおかしい。ここは、たった二人の

ためだけの場所。ここが落ちれば二人に行く場所などなかった。それなのに、逃げ道なんざ用意するか？）

そう、それだ。ここは、『聖人』にとっては最後の砦となるべき場所だった。そして事実、ここが落ちた時に『聖人』もまた、歴史の表舞台から姿を消している。ならば、何故？

（ここは……本当に『聖人』が創った場所なのか？）

運命改変、もしくは、運命操作。

数少ない資料から読み取れるその能力は、字面だけでも凶悪な能力であることがよくわかる。運命などという人には認識できないものを視るどころか操作してしまうなど、それは最早、人に許された能力の範疇を超えている。

しかし、その能力一つで、こんなものを生み出せるのか。

「いや……そんなことは、今考えることじゃねぇ」

呟く。今必要なのは、どうやってこの戦いを終わらせるかである。疑問について考えるのは、この戦いから生き延びてからだ。

扉が――開く。

昏い、闇の底のような部屋。踏み込んだ瞬間、思わず顔をしかめた。

「……ッ」

漂ってきたのは、思わずむせ返りそうになるほどに濃い、血の匂い。昔、事件捜査で惨殺死体の現場に踏み込んだことがあるが……あの時と同じくらいに、いや、硝煙の匂いが上乗せされている分、こちらの方がキツい。

「何があった？……ん？」

目が慣れるまで入口で佇んでいたのだが、不意にその視界が何かを捉えた。

気配を殺し、慎重に近付く。誰かが倒れているようだが――……

「――子供……？」

思わず、呟いた。そこに倒れていたのは、一人の少女だった。

長い黒髪を携えた、女の子。しかし、その姿を見て思わず舌打ちを零す。

「……惨いことを」

倒れていた少女は――右腕がなかった。

暗闇に慣れてきた目で見渡せば、戦闘の痕がある。争ったのか、それとも一方的だったのかはわからないが……いずれにせよ、この少女は敗北し、その右腕を奪われたのだろう。

ぴちゃり、という音がした。水溜り……違う、血の海。少女の流した血によって生まれたそこからは、むせ返るような匂いが漂う。

「……」

ここで少女の首元に手を伸ばしたのは、ただの反射行動だったのだろう。この傷だ。生きているはずがない。

しかし、結果としてそれが運命の分かれ目となる。

――トクン。

指先で感じたのは、微かな鼓動。……生きている。

「……嘘だろ、おい」

思わず、呟いた。当たり前だ。右腕を奪われるほどの傷。それが、つい先程というならまだ命を繋ぎ止めていてもおかしくはない。しかし、おそらく奪われてからは結構な時間が経過している。この血溜りが何よりの証拠だ。

だというのに、この少女は生きている。

失血死していてもおかしくはない……いや、失血して然るべきほどの出血をしながら――……

「……仕方ねぇ」

死んでいるならともかく、生きているというなら話は別である。その体を抱き上げ、応急処置を施す。こんな場所では、治療など不可能。そもそも、ここは戦場だ。下手を打てば、自分もやられる。

「う……？」

少女が、薄くその瞳を開けた。その体を優しく抱き上げながら、精一杯、微笑みかける。

「王子様、ってわけにはいかねぇが……安心しな、嬢ちゃん。俺は英雄だ」

言いながら、エリアサーチを飛ばす。そこで、何かが彼の探知に引っかかった。

――コツン。

靴の音が響く。身構え、音がした方向を凝視する。そこに、いたのは。

「ほう……生きていたのかね？」

深淵の闇から姿を現した男は、そう言って笑った。だが、その体は血に塗れている。

返り血か、と思ったが、違う。男の腹部から溢れ出る鮮血が、そうではないと告げている。

少女を抱きかかえる手に、力を込める。男は――クライムと名乗る、本名を世界の闇へと葬った男は、その様子を見て笑った。

「情けない、話だ。たった一人に反旗を翻されただけで……この有様とは」

「テメェには、相応しい末路だよ」

「ふふっ、そうかもしれんな。……さて――」

クライムは笑い、そして、その眼を細める。

――殺気。ここで、一戦交える気だ。

「決着を着けようか。あの時の――因果を。ここに終結させよう」

魔力が噴き出す。しかし、傷を負っているからか、クライムの魔力にかつてのような強大さはない。

対し、こちらは逃げる構えを取る。こちらには、守らなければならない少女がいるのだ。

その様子を見、フッ、と、クライムが笑う。

「キミは、あの時から変わらんな。あの時もそうだった。私を殺し切るよりも、次元震を食い止めることを優先した。その上で、結果、防ぐことは叶わなかった……いい加減、理想を捨てたまえ。守れるものなど知れている。全てを守ることなど、たとえ神であろうとできはしない」

「知るかボケ」

吐き捨てる。そういうことじゃないのだ。そういうことでは。

「小難しい理屈なんざいらねぇし、必要ねぇな。達観してテメェのことしか考えねぇような屑になるくらいなら、いくらでも喰らいついてやるさ」

「……やはり、キミと私はどこまでいこうと平行線か。残念だ。敵同士であり続けたとはいえ、いや、敵同士であり続けたからこそ、キミのことを私は誰よりも評価しているつもりだったが」

「他人の評価なんざいちいち気にしても仕方ねーよ。俺の価値は、俺自身が決める」

それだけでいい、と、言い切った。

クライムは、そうか、と、薄く笑った。

「ならば……祭に華を添えるとしよう。観客などいない、舞台裏の戦いだがね」

そして、クライムは言う。

「カグラ・ランバード。前時代の英雄。ここが、キミの死に場所だ」

対し、カグラは――管理局の英雄は、笑う。

「違うな。ここは俺の死に場所じゃねぇ。俺は、あの日に。トモエを喪った日に死んだんだ」

そして。

命がけの逃走劇が、スタートする。

◇　◇　◇

八神はやてたちは、少数精鋭の部隊を編成し、内部へと突入していた。決して多くなかったが、ＡＡランク以上の魔導師のみを選別、踏み込むことを選んだ。理由は単純で、やはり『ヴォルフラム』を守る必要があったからだ。ここを制圧した後、どちらにせよ退避の手段は必要になってくる。はやてはそちらに戦力を裂くことを決定した。

更に、はやてはギリギリの決断をし、自分自身も内部に突入するという道を選んだ。無論、連絡のためのラインは確保している。しかし、本来彼女は指揮官、それも旅団を束ねる立場にあるのだ。それが指揮を放り捨てるようにして前線に出ることは、あり得ない。

――しかし、彼女はそれを選択した。

ＪＳ事件……かつての事件で、彼女は英雄の一人として祭り上げられた。しかし、彼女にとってそれは重荷にしかならなかった。

彼女自身が、自身を英雄と認めなかった。決着に間に合わなかった……全てを、他人に背負わせた、と。

（……ファイムくん）

そして、今の彼女は、あの時よりも強くなったはずだ。
何もできなかったあの日よりも、強くなれたはずだ。

だからこそ、彼の下へ。

一人にはさせない。あんな顔、もう二度とさせやしない。

（ファイムくん）

あの人に誇られるような自分でいたいから。
誇れる自分に、なりたいから。

（――ファイムくん！）

――届けたい、言葉があるから。

だから、彼女は進む。
彼女の騎士たる烈火の将は、ここにはいない。彼女には、はやてにとっての親友である執務官と共に別行動をさせている。
当然、ごねられたが押し通した。……これは、私情を含んでいる。
巻き込めない。

そして、はやてはそこへ辿り着く。

途中、彼女の行く手を阻もうとした全ては、薙ぎ払った。

『はやてちゃん、こっちです！』

ユニゾン中のリィンが言う。広間に出、三つに分かれた道が目に入った。そのうちの一つを、リィンが示す。
豪奢な扉とは違う、素朴な作りの扉の先へ進めと。

「行くよ、リィン」
『はいです』

はやてが呟き、二人が進む。
そして――

――――。
――――――。
――――――――。

考えていた。思案していた。ただ、耽っていた。

（……私の名前。あの方がくれた、大切なもの……）

呟く。奴隷だった自分に、名前などなかった。その自分を救い出し、助けてくれた人が、名前をくれた。
ずっと、それだけを名乗ってきた。なのに……

「桜花」
《あんたの名前なら、あたしにもわかんないよ?》

発した言葉は必要なうちの一割にも満たないのに、的確な返答が返ってきた。テンリュウ・シンドウ。『概念』に至り、究極に至った

絶対的な『最強』は、ため息を吐く。彼女の愛機である『桜花』は、そもそも、と言葉を紡いだ。

《『神道天龍』っていうのは、そういう存在だもん。まず、自分自身の境界を失っていくことで、世界に近付いていく。力の代償と思えば、まあ、わかり易いかな。……そもそも、代々受け継いでいくのもそれが原因だしね》

『桜花』が、苦笑するように言う。そう、そうなのだ。

人としての殻を捨て、『概念』に至る。それは即ち、『肉体』という防壁を捨てるのに等しい。人の心……精神というものは、酷く脆弱だ。それを守るために、『固定対象』や『誓約』といった肉体の代わりになるものを必要とする。

しかし、そうしていくつかの問題をクリアした古代の人間たちも、たった一つのことだけはクリアできなかった。

――『自我の消失』。

人の心というのは、摩耗していき、擦り減っていく。また、『概念に成る』というのは、世界の一部となるに等しい行為である。世界とは、意志無き意思の集合体だ。人だけではない。あらゆる生命の魂が地表を埋め尽くすこの世界で、たった一人の意識というのはあまりにも脆弱だ。

故に――失っていく。

自らが何者か、どこから来て、どこへ行くのか。

アイデンティティと呼ばれるものが、一切合財、消滅していく。

「自らを失う前に、次代へと引き継ぐ……理には適っていますね」

《個人差があるんだけどね。七十年近く、そのままでいた奴もいるし。……実際、あんたも名前だけでしょ？　やっぱり破格ね》

「まあ、十年以上前からこの姿に変化がないのはいささか奇妙ではありますが……」

テンリュウは苦笑する。『神道天龍』が続いていく存在というのは、そういう理由だ。自我を全て失った時、『神道天龍』は世界の奴隷となる。そういう契約だ。しかし、それを認めることはできない。だからこそ、何度も何度も新しくなり続けてきた。

そして、『神道天龍』というのは、『完全な状態』であることを常とする。そのため、今のテンリュウの肉体は、彼女にとって完全な状態――全盛の状態、ということになる。

テンリュウに、成長という過程はなかった。いや、十年前まではあったが、一気に階段を飛ばし、この状態に至った。

そこに後悔はない。ないのだが……思い出せないその辛さが、心を占める。

頭が痛い。思い出すことを拒否しているかのようにガンガンと、頭痛が鳴り響く。

《無理をしないほうがいい。思い出せないなら、思い出せないもの。世界に逆らう気？》

「師の、教えですから。――――ッ」

変わらず苦笑を浮かべるテンリュウ。しかし、不意にその表情が大きく変わった。

「桜花！！」

テンリュウが吠え、薙刀と装束が展開される。その瞬間、無数の刃が彼女に向かって降り注いだ。

ブラッディ・ダガー。単純な魔法だが、それ故に効果は高いそれを。

――ザギギギギギギギギギンッッッ！！

襲い来る刃の全てを打ち払う。一発一発は、正直大したことのない威力だ。しかし、その数が多過ぎる。ただでさえ、一度『世界を開いた』ために消耗しているというのに、畳み掛ける時に災難というものは畳み掛けてくるらしい。

《遠い――！　距離、二千！》

「遠距離砲撃――これは！？」

テンリュウが吠える。彼女の足下が、突如氷結していた。すぐさま飛び上がるが、一瞬にして空間が氷に閉ざされる。

極冷魔法――エリアが得意とするそれだが、彼女よりも規模が大きい。おそらく、『そういうタイプ』の魔導師だ。

ならば。

「――――」

一息。それと共に、空を蹴り飛ばす。空間に魔法陣による足場を作り、それを蹴り飛ばしたのだ。

まるで矢のような速度で駆け抜けるテンリュウ。それを迎え撃つように、一筋の閃光が駆け抜けた。

――直撃。

二つの力が衝突し、轟音が世界を支配する。その果てに、テンリュウは見つける。

飛来する、堕天使の甲冑を纏う一人の女性を。

「「――――」」

互いに視線を合わせど、言葉を交わすことはない。

――金属音。

互いのデバイスを打ち合わせ、二人の女性は距離を取る。テンリュウは、ふう、と息を吐いた。

「たった一人で私と相対するのが指揮官とは。……血迷いましたか？」

「迷ってなんか、あらへん」

対し、八神はやては、毅然とした表情で言い切る。

「こうすることが、私の決めたこと。迷いなんかない。ファイムくんを、どこへやったんや？」

「永遠の、幸福たる牢獄へ。夢と現実の狭間です」

夢と現実の狭間――その言葉に、はやては聞き覚えがあった。そうだ、その場所は、かつて闇の書がフェイトを閉じ込めようとし、自分自身も閉じ込められた場所。

そして、ファイムが救い出してくれた場所。

「なんやろな……どうしてこう、行き着くところは一緒なんやろう」

『はやてちゃん？』

はやての呟きに、怪訝そうな様子でリィンが応じる。はやては彼女が持つ杖――シュベルトクロイツを、テンリュウに向けた。

「永遠とか、幸福とか……そんなもん、定義なんてできひんのにな」

「……」

「永遠なんて、この世に存在せぇへん。そもそも、『永遠』の極致はただの『孤独』や。わたしも、あなたも、リィンも、みんなも……この世界を生きてる。永遠に比べたら、刹那に等しい時間なんやろうと思うよ。せやけど、だからこそ、奇跡なんや」

この時代、この時、この瞬間を生きていること。

そしてそれが、独りきりではないということ。

それこそが――奇跡。

「いつ、終わってしまうかわからへんから、だから『生きる』っていうんや。その奇跡を歩んでいくからこそ、人は――美しい」

……かつて、八神はやては孤独に泣いたことがある。

闇の書――守護騎士たち。彼らが現れるまで、彼女はどうしようもなく孤独だった。だからこそ、彼女は誰よりも、孤独の辛さを知る。

同時に――幸福の美しさも。

「ファイムくんを、返してもらおか」

「……私を屈服させれば、あるいは可能かもしれません。彼が幸福を否定したならば、世界は割れるでしょうが……」

「――なら、わたしのすることは決まったな」

キィン、という音と共に、はやての足下に魔法陣が展開された。そうして紡がれるのは、何重にも渡る障壁による結界。

そして、同時に無数の刃の葬列が展開される。ブラッディダガー。

「ファイムくんは、帰ってくるよ。だから、それまで耐えるのがわたしのすべきことや」

八神はやての戦闘能力は決して高くない。テンリュウと正面からやり合っても、おそらく倒すことは不可能。
なればこそ、彼女は信じる。リィンと自分だけでは勝てない相手を倒すための、ヒーローの登場を。

「……その心、いつまで保てるか。見せて頂きましょう」
「帰ってくるまで」
『はいです！』

そして、戦いの幕が上がる。

勝利のない――敗北を避け続けるだけの戦いが。

◇　◇　◇

カグラ・ランバードは走っていた。迫り来る敵。相手は深い傷を負っているといっても、それはカグラ自身も同じである。しかも、今の彼には守るべき対象がいる。逃げの一手を打つのは、当然ですらあった。

「くそっ、理不尽だなおい」

悪態をつく。そうしなければ、虚勢を張っていなければどうにかなってしまいそうですらあった。

――閃光、そして轟音。

駆け抜けた一閃は、カグラと彼が抱える少女を撃ち抜いた。しかし、その姿が突如、霧散する。

「幻術か。――本物はそこだな」

更に、一閃。放たれた砲撃は壁を砕き、辛うじて直撃を避けたカグラが転がるようにして出てくる。

「ふっ……これが英雄の姿とは、情けないものだとは思わんかね？」

「英雄の残滓にできることなんざ、限られてるんだ――よッ！」

牽制のための魔法弾。しかし、それは障壁によって防がれる。クライムはそれを一瞥すると、その人差し指をカグラに向けた。

「残念だ。一時代の英雄がここまで堕ちた姿を見るのは忍びない。せめて、一思いに終わらせよう」

「――――ッ！？」

――先程までのの砲撃魔法に比べ、明らかに威力が上がったその一撃が、世界を蹂躙する。

凄まじい轟音。一応、魔力対策を施されている壁や床も、一撃で蹂躙される。

そして、一瞬で爆心地のような状態にされたただ広い廊下を眺め、ふむ、とクライムは呟く。

「下に逃げたか。……したたかだな。やはり、侮れん」

彼の視線の先には、床に人が一人通れるくらいの穴があった。おそらく、あの咄嗟の一瞬でカグラがこじ開けたのだろう。

しかし、避け切ることは叶わなかったらしい。穴の近くには、大量

の血痕が残されていた。
追うか――クライムが、そう考えた瞬間。
――ズグンッ。
「……ッ！？」
激痛が走った。クライムの腹部――そこから、血が噴き出している。
どうやら、傷口が開いたらしい。
「……少し、待つか」
呟く。その瞳は、どこまでも空虚だった。
……。
……。
……。
カグラは、今にも座り込みそうになる頼りない足に内心で舌打ちを零した。体力の限界と、魔力の限界。体の傷も深く、どうしようもない状態だ。
（そういや、姫さんも言ってたな……応急処置ってよ……）
内心で呟く。命の恩人の言葉は正しいのだろう。だが、だからといってここに来ない理由にはならなかった。
だが、これは少々、厳しい。

――ギョムン。

無機質な、駆動音。向けられる銃口の数は――数える気が失せた。合計、十以上のガトリング砲がこちらを狙っている。運が悪い。落ちた先が、機械兵器の巣窟とは。

（不死身だ不死身だ言ってきたが、死ぬ時は呆気ねぇもんだ）

人生五十年――相棒と信じた男が好きな過去の偉人の言葉らしいが……この世界では、魔導師の人生などそれ以下だ。どいつもこいつも、前線に立つ間に死んでいく。

本当に――ままならない世界だ。

「う……っ……？」

不意に、手元から声が聞こえた。少女が目を薄く開けようとしている。カグラは、自身の背を機械兵器たちに向け、少女の瞳にそれが映らぬようにした。

（あー、くそ。守れねぇ……）

呟く。だが、その時、彼は気付いていなかった。

腕の隙間――そこから、少女が見ていたことを。

絶対的なまでの、死の嵐を。

――音が、消えた。

カグラは、遂に来たのだと観念する。諦めるも何も、冷静な目で見てどうしようもない状況なのだ。

だから、彼は見えなかった。
かつて天才と呼ばれた彼に続く、新たな天才の姿が。
正真正銘の天才――彼がそう評価する、次世代の天才。

その者が、ここに来ていることに。

「――ウィル？」

少女が呟いた。直後――爆発が起こる。
来たか――そう思い、体を強張らせるカグラ。
しかし。

その体を覆うのは、銃弾ではない。
『陽光』。
鮮やかな、夕暮れの光。

「――――……」

カグラは振り返り、そして、驚愕する。
燃え上がり、紅蓮の炎を上げる質量兵器たち。それとカグラたちの間にに割って立つ、血染めの制服を纏い、その肩に竜を背負う一人の少年。

「キミが、アリア？」

振り返らぬまま、少年は言った。そして、横顔だけをこちらに向け、呟くように言う。

「守りに来た。キミの騎士の代わりに」
「キュウ」

小型状態の竜――サリヴァが鳴く。少女が、呟いた。

「……ウィルじゃ、……ないの……？」

呟くように言う少女。その少女の下へ、小型の竜が飛来した。その光景を見、少年はこの少女が探し人だと確信する。

「そうだったら一番だったんだけどな。……大丈夫だ。代わりに俺が守って見せる。死に間際の言葉だ。命を懸ける理由としちゃ、十分すぎるってな」

《心の底からかい、坊や？》

「さーて、ね」

カグラにも見覚えのある槍型のデバイスを構え、そいつは言う。カグラは、思わず声を上げた。

「色々つっこみてぇとこが溢れてるが――何しに来た？」

「騎士様の代わりですよ、教官」

冗談めかして、少年――ソラが肩を竦めた。カグラは更に言葉を紡ごうとしたが、その彼にソラのデバイス『ヴィクトリア』――待機状態なので、指輪型――が投げ渡された。ダメージがあるようで、所々ひび割れが発生している。

「一から十まで説明したいとこですけど、そうもいかないみたいですし。詳しい話は『ヴィクトリア』にでも聞いておいてください」

苦笑して言うソラ。そのソラにカグラが更に何かを言おうとしたが、その前に女性の声が響き渡った。

《厄介な仕事押し付けてくれるねぇ、坊や？》
「じゃ、変わる？」
《いやぁ、それはゴメンだねぇ。折角マスターが珍しくやる気なんだし、手伝えないのが未練だけど……まあ、次の機会にってことにしとこうか》
「次ってことは……」
《あんたは勝つだろう、坊や？》

確認する――違う、断言するように、『ヴィクトリア』が言った。
ソラは、頷く。

「――当然！！」

同時、『陽光』が爆ぜた。
夕焼けのように鮮やかな光。

そして――現れるのは、紫の光を纏う、昏き光。
――クライム。

「ほう……カグラ・ランバードを追ってきてみれば、妙な客だ。キミは誰だね？」
「んー、『エース』でも『ストライカー』でも『騎士』でも……『英雄』でもない魔導師。……敵の黒幕倒すには役者不足だけど、ま、それも運ということで」

口調は、変わらず不遜。戦場であろうと、彼の言葉は変わらない。
変わるのは、その気配だ。

必殺の意志。死にたいとは思わず、されど、死んでも良いと定義す

る。
あまりにも外れてしまったその信念の前に、慈悲などなく。
あるのはただ、その場だけに通じる理由のみ。
それだけで、少年は戦う。

「……で、教官。アリアを守るには、こいつを潰せばいいと？」

アリア、というのが自分が抱きかかえる少女のことだとはカグラも理解していた。だから、彼は頷く。

「そうだな」

再び目を閉じ、眠ってしまった少女。その少女に僅かに視線を向け、言い切る。

「そいつは過去の亡霊だ。――引導を渡してやれ」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ」

言葉と同時に、響き渡るは轟音。
圧倒的な魔力。互いに、その力はオーバーＳの高みにある。

「そのデバイス……少年、持ち主はどうした？」
「死んだ」

互いに睨み合う中で交わされた言葉。ソラは、酷く簡潔に答える。
守ろうと思っていたわけではなく。
友だったわけでもない。

だが――あの少年は、自分にはないものを持っていた。

死の間際に、自分ではない誰かを想う――目指すべきものに、見えた。
だから、戦うのだ。
それを理由とし、刃を持つ。

クライムは、そうか、と頷いた。そして――もう一度、呟くように、そうか、と言葉を漏らす。

「キミが、奪い取ったのかね？」
「託された。あの子を守って欲しいと。――右腕、奪ったのはテメェか？」

声の質が変わる。クライムは、ふっ、と吐息を漏らした。

「私ではないが……結果として、そう変わらんよ。その力は私が望んでいたものだ」
「――知ってるさ。どういう力かも、なにもかも。教えてくれた」

ピクリと、クライムの眉が跳ね上がった。
ソラは、吐き捨てるように言う。

「くだらねぇ。くだらねぇよテメェら。こんなことのために、人が死ぬのかよ」
「こんなこと、というのは心外だ。私の欲したものは、おおよそ万人が同じ思いを抱くほどの普遍性を持っていると思うが？」
「だったら、俺は万人の一人じゃなくていい。――そろそろ、やろう。一瞬で決める」
「同意だ」

そして、二人は激突する。
前時代の遺物と、現代の天才が。

◇　◇　◇

カシャン、と、愛機が床に落ちた音が響いた。
鉄槌の騎士、ヴィータ。その名を持つ幼き容貌の騎士は、全員全霊を以て突き進んできた。
迫る敵を打ち払い。
襲い来る刃を退けて。

――そして、辿り着いた。

失楽園シャングリラ――その動力炉に。

「……ッ、あ、アイゼン……ッ」

ヴィータが言葉を紡ぐが、その声に覇気はない。当然だ。今の彼女はまさに満身創痍。バリアジャケットも多くが裂け、その血が体を濡らしている。
そして、彼女の相棒たる『鉄の伯爵グラーフアイゼン』も、その身に数多くの罅を刻み、文字通り崩壊寸前に至っている。

彼女たちを襲ったのは、一騎の強者ではなく、無限のような『数の圧力』であった。

戦闘機人、質量兵器、機械兵器……終わることなく襲ってきたそれは確実に彼女の気を削ぎ、肉体に傷を負わせていった。

その全てを突破したことは驚嘆に値するだろう。しかし、その代償も大きかった。

「――こいつを、壊さねぇと」

紡がれた言葉は、まるで泣きそうな子供のような声だった。
彼女を襲ったのは、冷たい鉄の刃だけではない。彼女が知る『誰か』の姿をした偽物も、数多く彼女を襲ってきた。
そしてその全てを、打ち砕いた。
だが。

「はやてが、困るんだ」

――八神はやて。ヴィータにとって、誰よりも大切な人。主。
その偽物を――彼女は、『破壊』した。

心はもう、壊れる寸前だった。

「だから、だから――……ッ」

その体が、床に伏す。
その瞳が――閉ざされる。

世界が滅ぶまで、あと6時間――……

第三十五話　エース・オブ・エース（後書き）

大変お待たせしてすみませんそして一話で一組決着とか言いながらどこも戦い初めで本当にすみません。

ええと、第三十五話です。楽しんで頂けましたか？
久し振りに二万という文字数に……次回も増えそうです。

まさかのテンリュウＶＳはやて・リィン。大変ですねこれは。

さてさて、今回はカグラとソラについて少し触れましょう。カグラは二つテーマがあり、『英雄のその後』と『後継者に託す先人』というものがあります。ソラは、『理由なき天才』です。ここでの理由がないというのは、才能がある故に理由がないまま強くなってしまった、という意味ですね。才能があるというのも難儀なものです。

そしてですね、友人の勧めでオリジナルを書いてみようかな、とか画策してみたりしています。いや、もちろん『優しい嘘』が完結してからですが。
次回作についても、前の後書きで書いたように続編を書くべきか否かについて迷っていますし……難しいですね。

ではでは、感想頂けると励みになります。
話別でみると最新話を毎回百人近くは読んでいるのに感想をもらえない不思議。あれ？

これを書いてるのが深夜でテンションがおかしいことになっていますが、感想は是非ください切実に。意見を頂けると本当に参考になるのです。

と、あまり長く書きすぎてもあれなので、この辺で。
ありがとうございました。

では、次回。第三十六話。
「託したもの、託されたもの」

・追伸・
私の活動報告で絶賛不定期更新中の、『恋愛講座～アマネの部屋～』
もよろしければ是非見てください。

第三十六話　託したもの、託されたもの

玉座の間は、主が座す場所である。それ故に、他の場所よりも強固な造りになっている。
だというのに、たった二人の魔導師が、そこを蹂躙していた。

振るわれる、圧倒的な力の奔流。まるで爆流のようなそれを、互いにぶつけ合う。

「「……ッ！」」

高速戦闘。二人の姿は、凡人には最早軌跡でしか追うことを許されない。

高町なのは。
ホムラ・イルハート。

互いに砲撃魔導師の頂点に立つ身なれど、歴戦の勇士であることは変わりない。
戦い方など万に届き、億に迫る。

《Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ》

先に一手を届かせたのは、なのはだった。

桜色の鎖がホムラの右腕に巻きつく。なのははホムラがそれに対応する前に、思い切りその鎖を振り回した。

「――――ッ、おっ――？」

たまらず、ホムラが宙を舞う。そしてそのまま、凄まじい音を立てて壁に直撃した。

――ドンッ、という音を立て、ホムラが土煙を舞い上がらせ、倒れる。なのははそこで止まらない。レイジングハート、と彼女の愛機に声をかける。

「エクセリオン――」

ここで決める、という必殺の意志は、しかし、遮られた。

《Ｉｎｎｏｃｅｎｔ　Ｂｕｓｔｅｒ》

駆け抜ける銀色の一撃。なのはは咄嗟にそこから飛び退き、障壁を張る。

衝撃波で軋む障壁。レイジングハートが、言葉を紡ぐ。

《――維持不可能》

――バァァァンッッッ――

吹き飛ぶ障壁。なのはは緊急退避を行うが、砲撃がその身を掠め、弾き飛ばされる。

痛み分け――単純な攻防に見えるが、極地に至った者の戦いなど、こんなものである。

細かい策など、弄するだけ無駄。むしろその隙に、死が忍び寄ってくる。

だからこそ、全力。

全身全霊の、正面からの殺し合いこそが、全てを決める。

「……ッ、市中引き回しの刑、やったか？　あれを思い出したわ。えげつないなぁ、自分」

「あそこで反撃が来るなんて……こっちこそ、やられるかと思ったよ」

互いに苦笑。流石に、『エース・オブ・エース』。その強さに偽りは欠片も見られない。

文字通り、一瞬の隙、判断ミスが全てを奪っていく。

不思議なものである。互いに、ほんの少しだけ、胸が高揚している。純粋に楽しいと、心の底でそう感じている。

――天才とは、孤独である。

その才能があまりにも圧倒的であるが故に、理解されることはほとんどない。友人であろうとだ。自分の見ている景色が、他人には理解できない。

そしてそれを、天才自身が知っている。故に、彼らはどこまでも孤独だ。

しかし、今。

ここに立つ二人は、互いの才能を理解しようとしている。ただ、理解が許されるのは片方のみ。

人は、自らより劣っている才能しか推し量ることはできないのだから。

「時間も押しとる。……そろそろ、決着と洒落込もか」

「そうだね……そろそろ、決着を」

二人の視線が交錯する。そして、二人は同時に叫んだ。

「ブラスター3！！　リミットリリース！！」

「オーバードライブ！！」

二つの魔力が吹き荒れ、その振動だけで室内が軋んでいく。その最中、ホムラが問いかけた。

「滅びは運命や。ここでわしを倒したところで、その消耗した体でどうやってここを潰す？　テンリュウかておる。運命はすでに、定まっとるぞ」

滅びこそが、運命。

この戦いの結末は既に決まっていると、ホムラは語る。対し、なのははそれを否定する。

「運命なんて、覆せるもの。未来はわからない。未来を創るのは、ここにいる私たち。だからこそ、私は諦めない」

未来などというものは、どこまでも不確定なものである。

運命？　それが、なんだというのか。

わからないものである以上、定義があろうとなかろうと、結局同じ。

「未来は、自分の手で掴み取る。私は――私たちは負けない。世界も壊させない。必ず、未来を勝ち取って見せる！」

「立派な台詞や。流石は英雄、やな」

「私なんて、まだまだだよ」

なのはは、言う。

「私は、ただちょっと、ほんのちょっとだけ、魔法が使えただけの魔導師。私よりも凄い人は、たくさんいる。だけど、英雄って、エースって呼ばれるなら……私は、そうなれるよう、そうであれるように努力する。そのための覚悟は、もう、持ってる」

そして――二人の『エース・オブ・エース』は、その力を賭した最大の魔法を紡ぎ上げる。

《Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》
《Ｍｏｏｎ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

星の光と、月の光。
夜空に瞬く二つの光が、激突する。

「全力！！　全壊！！」
「月夜に堕ちろ！！」

互いの全てを懸けた、必殺の攻防。
決着が、迫り来る。

「スターライトッ――」
「ムーンライトッ――」

視線の交錯は、一瞬。

「「――ブレイカァァァッッッ！！」」

――玉座の間が、崩壊していく。

まるで、もう、ここは必要ないとでも言うかのように。

◇　◇　◇

駆け抜けたオレンジ色の弾丸が、男の腕を弾いた。続け様、風が唸る音と共に、大剣が振り抜かれる。

「おらあっ！」
「――ちっ」

――ガアンッ！！

轟音。大剣を振り抜いた青年――リューイは、なっ、と声を漏らす。当たり前だ。相手は素手の拳で、抜身の刃物を正面から殴り、

「――足りねぇよ」

――あろうことか、吹き飛ばしたのだ。

衝撃で宙に放り出されるリューイ。しかし彼は空中で姿勢を取り戻すと、追撃を仕掛けようと構えた。その視界に、七色の弾丸が映る。

「ファイア」

短く紡がれた言葉と共に、一斉に魔法の弾丸が放たれる。リューイは即座に吠えた。

「ミリアム！！」

『イエス、マスター』

冷静な声。彼とユニゾンしているユニゾンデバイス……ミリアムが応じる。瞬間、竜巻のような風がリューイの刃に纏わりつく。

「らああっ！！」

――一閃。

振り抜かれた刃より放たれた暴風が、弾丸の嵐を吹き飛ばした。男の――カグラの表情が変わる。すぐさま大きく後退し、暴風から逃れた。

そこへ――狙撃手の一撃が迫る。

「クロスファイヤー・シュート！！」

迸るのは、オレンジ色の軌跡。凄まじい数。咄嗟には避け切れないであろうそれを、あろうことか相手は全て拳で叩き落とした。

「威力が足りねぇな。速射を優先して威力を削ったか。馬鹿野郎。速射は最初の数発でいい。一気に全部放ったところで、威力が低けりゃ意味がねぇ。牽制の数発だけ、速さを。他は威力を。『ストライカー』の一人なら、それぐらいやってのけな」

まるで、教官のような言葉。いや――そうだ、そうなのだ。この男は、そういう男だ。

カグラ・ランバード。

かつて、十代も半ばという若さで管理局の闇に立ち向かい、あの高町なのはでさえ成し遂げられなかった、教導隊の隊長の一角を務めた男。

――正真正銘の、英雄。

だが、その男を前に、リューイは眉をひそめた。

「ん、どうしたリューイ？　まさか、何故俺がこっちにいるのか、なんて聞かねぇだろう――」

「――あんた、誰だ？」

パシュン、という音と共に、リューイはユニゾンを解く。カグラは眉をひそめた。

「どういう意味だ？」

「言葉通りだよ。あんたが、あのおっさん――カグラ・ランバードだと？　ふざけんのも大概にしろボケ」

「全くですね。……演技にしても、もう少し上手くやるべきでしょう」

ミリアムまでもが、冷ややかな視線で言う。そのまま彼女は、近くに倒れ、気を失っているエリオとスバルに結界を張った。側に来たティアナが、どういうこと、と言葉を紡ぐ。

「どうもこうもないんですよ――俺とミリアムの保護観察者、誰だと思います？」

「保護観察？」

「私とマスターは、扱いとしては元犯罪者の危険人物です。それを教育するために、教導隊の指導教官でもあったランバード統括官を保護観察者としていたのですが……」

「この事件が起こってからは、それどころじゃなくなってたけどな」

吐き捨てるようにリューイは言う。その後、彼はカグラを睨み付けた。

「保護観察っつっても、五分くらい会話するだけ。けどな、わかるんだよそれでも。あの人は、俺を名前で呼ばない。あの人が名前で呼ぶのは、認めた時だけだ」

ティアナは、ハッとなる。カグラが名前を呼ぶ人物……それは、本当に僅かだ。

大抵、『若造』だの『小僧』だの『嬢ちゃん』だの……役職で呼ぶばかりだ。彼が本当に名前を呼ぶのは、数人。

八神はやて。

高町なのは。

フェイト・T・ハラオウン。

しかし、彼女たちについても『嬢ちゃん』という呼称を付ける。そうなれば――

――ファイム・ララウェイ。

カグラが名を呼ぶのは、たった一人の青年のみ。

肩書きも何もかもを無視して、真剣な時に名を呼ぶのは、彼だけ。

「あの人は、俺を名前で呼ばねぇんだよ。誰だ、テメェ」

「――さてな」

男――カグラは、煙草を咥えた。火を点ける。

それもまた、普段の彼がしないこと。

「結局、詮索に意味はねぇだろうよ。……さあ、殺し合いだガキ共」

「……ここに来て、あの人の真似すんじゃねぇよ」

リューイは、大剣の柄を握り直す。そうしてから、チラリと、ティアナに視線を送った。同時に、念話を送る。

（ティアナさん。一旦態勢を整えます。――隙を作りますので、後お願いします）

（……わかったわ）

詳しい説明をしている暇はない。それを察してくれたのだろう。ティアナが応じてくれる。

そして――リューイが踏み込む。

「おおおっ！！」

両手で握った大剣を、全力で振り下ろす。それは金色の炎を纏いながら、しかし、カグラではなく床を打ち砕いた。

《ｅｘｐｌｏｔｉｏｎ》

リューイのデバイス、『ブラッディハウンド』が吠える。そのまま地面を打ち砕き、大爆発が起こった。

「サイクロン！！」

そこへ、ミリアムの魔法が追撃をかける。吹き荒れる暴風。視界を奪われたカグラは、そこで見失うことになる。

「……転がってた二人も連れて、か。ふん。上等だよ」

穿たれた巨大な穴を眺め、カグラは呟く。
追うか、そう呟いた瞬間。

『誰だ、テメェ』

あの――騎士の格好をした、生意気な青年の言葉が脳裏を過ぎった。
知っている。知識として。あの青年がどういう男なのかは。
だが――

「だからどうした。……殺せばいい」

英雄の姿をした何者かが、戦場に舞い降りる。

◇　◇　◇

「……つう……一日二度の自爆はやっぱキツい……！」
「本当に、馬鹿ね。ほら、手。見せなさい」
「あ、ども」
「べ、別にアンタのためじゃないわよ。乗り切るのに、アンタの力が必要なだけ」

笑顔で礼を言うリューイに、ティアナは顔を逸らしつつそんなことを言う。その様子を見て、「ツンデレ」とミリアムが呟いたのは余談だ。

あの、リヴァイアス・バルトマカリを討ち取ったリューイの一撃。
エクスプロージョン・ブレイク。技というにはあまりにも醜いそれ

は、自分を犠牲にして敵を討つためだけの技。
もう一度使えば、文字通り腕が吹き飛ぶ。

「結局、どういうことでしょうか？」

ティアナがリューイの腕に応急処置を施した後、ミリアムがポツリと呟いた。何がだよ、とリューイが問う。ミリアムは頷いた。

「あの時はマスターに追従しましたが……あのカグラさんが本物ではない、という根拠はありません」
「ちょっと待てや。テメェもハッタリかましたのかよ？」
「待ちなさいリューイ。『テメェも』ってことは、まさかアンタも」
「いや、あの一瞬で偽物なんて判別できませんて。とりあえずこのくそ忙しい、ってか大変な時に行方不明になってる上にわけわかんねぇことしたからとりあえず喧嘩売ろうと」
「アンタ常識ってもんがないの！？」
「マスターが常識の通じないほどに鈍感なのは執務官が一番知っておられるかと」
「まあ、それは確かに」
「おいコラどういう意味だ」
「言葉通りですが、何か？」
「よし決めたテメェ泣かす」
「落ち着きなさい」

スパン、という小気味のいい音と共に、リューイの頭が叩かれる。
それで、と、ティアナはため息と共に言葉を紡いだ。

「どうするつもり？　スバルとエリオ……二人がやられたっていうことは、生半可な相手じゃないわよ」
「そうですね――よくわかんねぇけど……多分、ありゃオーバーS

と見た。ミリアムはどうよ？」
「マスターと同意見ですね。高町教導官と同クラス、と見て間違いないかと」
「……でも、妙ね」
ティアナ自身、二人の意見には納得している。だが、それならば、おかしい点がいくつもあるのだ。
「確か、カグラさんは魔力の半分以上を失ったって聞いてるわよ」
「それでも技術は相当なもんですけどね。勝てる気しませんし」
「あの魔力と、技術が合わさるとなれば……文字通り、最悪の難敵ですね」
「それが『エース・オブ・エース』だろうよ。……まあ、心当たりがないでもないんだけどな。魔力があるってことは、偽物ってことだろうし」
「心当たりって？」
ティアナが問いかけてくる。リューイは、推測ですよ、と肩を竦めた。
「憶測で語ったものが刃を鈍らせるわけにはいきませんし。……さて、どうするか」
チラリと、リューイはスバルとエリオの二人を見る。もう少しすれば、意識も戻るだろうが……それでどうするというのか。
こちらは、消耗した魔導師四人。対して、相手は文字通りの『エース・オブ・エース』。体調も万全ときた。
――ピピッ。

策を巡らせようとするリューイ。そのリューイのデバイスが、電子音を鳴らした。
着信。
相手は――ソラ・ウィンガードのデバイス、ヴィクトリア。

◇　◇　◇

駆け抜ける、二筋の光。それは進む先にある壁という名の障害を気にも留めず、突き進んでいく。

「ふっ」

短い、吐息。それと共に凄まじい風切り音を響かせながらソラ・ウィンガードがその手に持った、他者のデバイス――アルガンツァを振り抜く。

――ガギギィン！！

響き渡る金属音は、二つ。
返す刃で振り抜いた一撃までも、防がれた。ソラは、ちっ、と舌打ちを零す。

「フォトン……ランサーッ！！」

そして、距離を取ると同時に雷撃を纏った弾丸を七発、同時に放つ。
変換資質を持たない――正確には、雷の変換資質を持たない――ソラだが、訓練を積めば魔力変換はそれなりに早くなる。ましてや彼

は、本人が認めようとしないが正真正銘の天才を謳われる人物だ。
努力し、それが実を結ばないという道理はない。
努力したという過程を通り、結果としてそれが必ず実を結ぶ……それが、天才という存在だ。

――ドドドンッ！！

全弾命中――しかし、まだだ。全て防がれた。

「――――ッ！！」

ソラが、その身を大きく逸らす。瞬間、虚空を紫色の軌跡が薙ぎ払った。

「ふむ、『エース』でも『ストライカー』でも『英雄』でもない魔導師がこれほどの力を誇るか……中々、管理局というのも侮れん」

クライム。そう名乗る男の周囲に浮かぶのは、無数の刃。
紫色の、まるで十字架のような両刃の剣。刀身の色さえも濁った醜い紫色のそれは、クライムの能力。
――レアスキル、『異端狩りの刃（ブレイズ・オブ・セント・クロス）』
効果は至極単純。使用者が望む限り、無限の刃が紡がれ続ける力。
そこに代償はない。正に、破格の能力だ。エネルギー保存の法則を何だと思っているのか。

「この刃の全ては、墓標だ。私がこの手で葬り、あるいは私の指示によって葬られた者たちの。そして――この世に墓標を刻むことが許されなかった、我が同志たちの墓標だ」

シャン、という音と共に、刃の葬列が現れる。いつの間に展開した

のか。千を数えようという刃が、ソラとクライムを取り囲んでいた。

「数は――我が同志、ウィル・ガーデンズとリヴァイアス・バルトマカリ。ギレン・リーを加え、その刃の数は９６６本と……半分となる」

ヒュン、という風切り音と共に、刀身が半分しかない剣がクライムの手に握り締められる。

「この刃は、私だ。この刃を持って相対するのは、キミを含めて三人目。一つは、我が配下となる条件に刃を突きつけてきた『戦争狂』。一つは、今日の管理局を支える『英雄』……一つは、『何者でもない』キミだ」

刃の葬列が、角度を変える。その切っ先の全てが、ソラを狙う。

「死の嵐を生き残れるか、管理局」

「――――」

一閃。陽光の輝きが、一本の剣を砕いた。クライムが、眉をひそめる。

「……この世に、墓標を刻むことが許されなかった？」

静かに、ソラは呟くように言う。その瞳は、自身が纏う光の如く、美しく輝いていた。

「ざけんな……ふざ、けんなッ！！」

咆哮。噴き出すような魔力。満身創痍であるはずの少年は、しかし、

彼が一度も発揮できなかったその本領を、本気を、その身に纏う。

「墓標ならある！！　侮辱すんじゃねぇよ……させるかよ、させてたまるかよ！！　あいつは俺なんかよりもずっと、ずっと生きてたんだよ！！　あいつの墓標は、ここじゃねぇ！！」

何故、これほどまでに怒っているのか。激昂する意識とは別の、酷く冷めた意識は、その理由を理解していた。

――羨ましかったのだ。

死に瀕したその瞬間に、自分の命よりも大切なものを迷わず口にできるその姿が。ましてや、敵である自分に躊躇なくそんなことができる心が。

あの少年にはきっと、喝采されるべき何かがあった。語り継がれるべき物語があった。ならば、その墓標は少年の果てであるあの場所に建てられるべきだ。

決して――こんな場所ではない。

「熱いな、少年。思い出すよ。英雄がまだ英雄ではなく、ただの若造の姿で私の前に立った日を。そうか。管理局……まだ、いるではないか。次代を担う英雄候補が」

「……」

ソラは無言でアルガンツァを構える。だが、クライムは首を振る。

「しかし――なればこそ、私はキミを殺さねばならん。英雄など、必要ないのだ。英雄が必要なのは、乱世のみ。私たちの勝利の後に訪れる地獄にこそ、英雄は必要になる」

「……させるかよ、そんなこと」

「キミの意見など求めてはいないよ、少年。いずれにせよ、キミの命運はここに尽きる。９６６――いや、９６５本の刃。無限には程遠いが……なに。キミ一人を塵芥に帰すのに、これ以上は必要なかろう？」

そこで、クライムが初めて笑った。
嘲笑。こちらを完全に侮った笑み。

ソラは、その瞳を細め、吠える。

「――上等！！」

爆発するのは、紅蓮の炎。自らの魔力を通常の変換プロセスを通し、炎へと変換させる。
同時、刃が唸る。

「エクスプロージョン！！」

ソラが吠える。彼が振るう技――魔法は、金色の炎を纏う騎士の技。振り撒かれる炎。それらは剣を吹き飛ばしていくが、時間差によって放たれているそれは、一撃では焼き切れない。

「――くっ！」

体を捻り、致命傷を避ける。だが、掠める刃がその身を削り取っていく。
噴き出す鮮血。その中で、ソラはいまだ炎を纏う槍をもう一度振り抜く。

「飛竜！！　一閃！！」

ヴォルケンリッターが一角、烈火の将、シグナム。
騎士の中の騎士たる彼女の技を、ソラは不恰好に再現する。騎士たる彼女本来の技は炎を纏った連結刃による広範囲の攻撃だが、ソラのそれは炎を放つだけの技。
しかしそれでも、効果は十全。

剣が燃え落ち、炭となる。いける、ソラがそう感じた瞬間。

「――――ッ！？」

ドンッ、という衝撃音と共に、右腹部へ一本の剣が深々と突き刺さった。続けて、数十本の剣が飛来する。

「――かふっ……！？」

呻き声が漏れた。刃を咄嗟に弾きはしたが、防ぎきれなかった。左腕を深く切り裂いた刃のせいで左腕はもう動かず、右足も同様にやられた。貫かれた腹部は熱を持ち、全身を気怠さが襲う。

――ツウッ。

切り裂かれたこめかみから、夥しい量の血が流れ出し、右の視界を塗り潰す。一瞬、ほんの一瞬、炎で焼き切れなかった刃を見逃しただけでこの有様。
情けない、と、ソラは内心で呟く。恐ろしいことに、こんな状況でも彼の精神は安定を保っていた。

心臓が高鳴ることはなく。
恐怖を覚えることもない。

ただ寒々と、冷静にして冷徹なる心で自身の状態の把握に努めている。

――怪物。

酷く鮮明に、その単語がソラの脳裏を過ぎった。

「――勝負とは、刹那に決まる」

声が響く。残った左の視界に映るのは、刃の葬列。気配でわかる。３６０度、全方位で囲まれた。

「如何なる強者であろうと、敗北など一瞬に過ぎん。我が刃……６０も砕いてくれた返礼、させてもらおうか」

「……別に、わたしが死んだところで何かが変わるわけでもなし」

不意に、ソラが言葉を紡いだ。だらりと手を投げ出し、無防備な体勢を取る。

「世界は変わりませんよ、自称・変革者殿。こんなことで変わるほど、この世界は甘くない」

「ほう……どういう意味だ」

「誰も彼も、自分を特別だと思い過ぎです。人は、どこまで行こうと一人きりなんです。あなたがどれほどの力を持とうと、たった一つの事件で世界を変えることはできない」

「……一人ではない」

クライムは、ふっ、と微笑みを浮かべた。

「我が手には、いくつもの同志がいる。手札は揃った。揃ったはずだったからこそ、私はこうしている」

「手札、ですか」
「将たる者は、非情であらねばならん。まさかそれがわからないというほど、愚かでも無かろう。キミは優秀だ。故に、ここで殺しておかなければならない。キミだけではない。ここに集う管理局の英雄たち……彼らにもまた、ここで死んでもらう」
――ヒュン。
風切り音。ソラの頬を浅く切り裂く位置を駆け抜けた刃。血が、流れ出す。
「英雄とは、大衆にとって寄る辺となる。なってしまう。その英雄が乱世の英雄であれば私も望むところであるが……管理局となれば話は別だ。管理局に英雄は必要ない。嘘偽りの英雄など」
「英雄に嘘も偽りもないでしょうに。わたし自身、英雄を奉る弱者の身でありますからわかります。ここにいる英雄の中に、偽物などいない」
「吠えたな、少年。ならば、自身さえも偽り無き英雄と語るのか？」
無数に並ぶ刃が、その威容を増す。下手な受け答えは死に繋がる。というより、すでに死は定められた運命。
故にソラは、吐き捨てるように言い切った。
「――俺は、ただの魔導師だ。英雄じゃない」
クライムは、一言、そうか、と呟く。そして。
――空間が、爆ぜた。

全方位より迫るは、バリアジャケットを纏わぬソラなど容易く切り裂く無限の刃。しかしその全ては、ソラに到達する直前に、動きを止める。

「……ッ！？」

呻き声が漏れた。見ると、クライムの背――それも、彼が体を貫かれ、癒えていない傷口に、一発の魔法弾が突き刺さっていた。

「敵殺す直前に、ベラベラベラベラと……あんた、馬鹿だろ？」

――パチン。

指を鳴らすその音と共に、魔法弾が炸裂する。そもそも、クライムは体を貫かれるような重傷だったのだ。その傷口を広げるような一撃に、流石のクライムも意識を飛ばしかける。

「――――！」

だが、それでもクライムは意識を振り絞り、刃を操作、ソラへと狙いを定める。しかし、殺到した刃はあろうことかその体を通過した。

「……幻、術……ッ……！！」

クライムが、呻き声を漏らす。その背後から、ソラの声が響いた。

「ご高説ってのは、信念持ってる奴に言えよ。俺みたいな、『何もない人間』には何の重みもない」

酷く冷たい目。彼をよく知る者――例えば、ファイム・ララウェイ

ならば気付いただろう。ソラ・ウィンガードが自身を『わたし』と呼称する時は、文字通り、自身を偽る時。
彼にとって大儀など意味はない。それでも彼がそれらしく言葉を紡いだのは、時間稼ぎのため。

ソラがしたことは単純だ。クライムと話をしている間に幻術と転移魔法の準備を進め、魔法弾に気を取られたその一瞬の隙に同時発動。背後を取る。口にすれば簡単だが、多少魔法に明るい者なら、これが不可能な絵空事であることがわかるだろう。

マルチタスク……平行同時独立思考。一度に複数の考えを巡らせるというのは、魔導師にとっては基本技能である。例えるなら右手と左手で別々の絵を同時に描く、といったものだが、これは訓練でどうにかなる。しかし、同時にいくつも思考できる、というのは、決して同時にいくつも魔法を紡げるということにはならない。
この世界における魔法は、科学の究極系である。凄まじい演算を必要とするそれは、同時にいくつも展開できるものではない。
いかな天才とて、三次関数や四次関数の入り乱れる式を二つ以上同時に脳内で展開するなど不可能だ。

しかし、ソラはそれをする。
あの、ホムラ・イルハートでさえ辿り着けなかった領域へ。何人も侵すことが許されない領域へ足をかけることが許される。

「フルドライブなんて、一日に二度もするもんじゃないんだよ。寿命縮むし。だから……一撃だ」

クライムが、その手に唯一握った折れた刃を振り抜く。
打ち込まれる一閃。その一撃と、ソラの握るアルガンツァの一閃が、宙で激突する。

――二つの刃が、砕け散る。そこへ。

「我流極星――」

圧し折れた、受け継いだ槍。切り離されてしまった刃の部分を魔力で強引に操り人形のように動かした左腕で掴み、腰を回す。

傷口から、体が悲鳴を上げるかのように血が噴き出しているが――知るか、そんなもの。

――死んだなら、それはそれだ。

「――流れ星ッ！！」

駆け抜ける、二筋の閃光。

『陽光』の名に違わぬ夕暮れの色を映したの一撃が、クライムという男の最後の抵抗である障壁を食い破る。

――轟音。

勝者は、英雄でも、エースでも、ストライカーでもない人間。

敗者は、世界を変えようとし、多くの混乱を生み出した管理局、かつての闇。

だったのだが――……

「……逃がしたか。ま、いいか別に。右腕はきっちり頂いたし」

ふう、と息を吐く。痛みはない。正直かなりヤバいのだろうが、知らん。死ぬならそれはそれ。

パキンッ、という澄んだ音が響いた。粉々に……文字通り、金属の粒となって消えていく。
残ったのは、罅の入った小さな宝石。
アルガンツァの――コア。

「お前の主は、これで納得してくれるかな……？　してくれると嬉しいんだけどねぇ……」

視界が霞む。血を流し過ぎた。というか、今まで意識が飛ばなかっただけでも十二分に奇跡である。

「……つーか、運命とか……あの小さい体にキツいもん、背負ってるよな……ホントに。出来りゃあ……うん……？　出来りゃあ、何だ……？」

意識が、途絶える。
体が、墜ちていく。

――薄れゆく意識の中。
何かが受け止めてくれた感触を、感じた。

◇　◇　◇

「聞こえるか、おい。聞こえてんなら返事しろ。くそ、こっちもダメか。おい、ヴィクトリア。次――」
『いや待て少しくらい待てよ！』
怒鳴り声が聞こえた。カグラは、馬鹿野郎、と言葉を紡ぐ。

「こっちにゃ重傷者がいるんだ。大声出すなタコ」
『テメェ誰だ!?　ソラはどうした!?』
「ああ、そこから説明しなきゃなんねぇのか。俺だよ、カグラ・ランバード。色々あってな。ちょいと手ェ借りてぇからこうしてんだよ」

頭を掻きながら、カグラは言う。今、彼はアリアとソラが呼んだ少女と共に物陰に隠れている。少女に応急処置は施したが、このままでは危険であることも明白だ。
そのため、援軍を呼ぼうとしていたのだが――

『はぁ!?　嘘吐きやがれ!』
「おいコラ小僧。テメェ、口のきき方を――」
『おっさんは今、俺たちと戦ってんだ!　そこにいるはずがねぇんだよ!　この非常時にわけわかんねぇこと言ってんじゃねぇ!』

ピクリと、カグラの眉が跳ね上がる。真剣な表情。彫刻のような冷たさを纏うその口から紡がれた言葉は、先程までとは雰囲気が違った。

「おい小僧、詳しく説明しやがれ」
『はぁ!?　だからテメェ――』
「ぐだぐだ言わずに回答だけを口にしろ。時間がない。俺がそこにいるんだな?」

ぐっ、という呻き声が聞こえた。こういう時、この男は聡い。

『ああ、けど、魔力値がおかしい。明らかに俺より上だ』
「……完璧に偽物じゃねぇか馬鹿野郎」

『……私たちもそう結論付けましたが、カグラさんが行方不明という事実もあります。故に、完全に偽物だと断じるわけにはいきません』

「じゃあ俺が証明してやる。俺はここにいるぞ、嬢ちゃん。カグラ・ランバードはな、『英雄の残滓』だ。相棒だと信じた男に墜とされ、這いずり回って戦い続けてる馬鹿だ。少なくとも、こことここに及んでお前らと正面切って戦うようなことはしねぇ」

ミリアムの言葉に、強い口調でカグラは言い切る。……誰かは知らないが、上等なことをしてくれる。

「俺の偽物は、デバイスを持ってたか？」

『いえ……持っていませんでした』

割り込んできたのは、別の声。聞き覚えがある。この声は――

「執務官の嬢ちゃんだな？　なら、それが答えだ。俺のデバイスは、昔から『ヘルダスト』だけだ。第一、デバイス無いなら気付け」

『でも、バリアジャケットは纏っていましたし……』

「防護服なんざデバイスなしでも作れる。……他には？」

『そういや、なんか魔力光が一定じゃなかったような』

「――俺のレアスキルだな」

吐き捨てるようにカグラは言う。そして、それが偽物の証明だ、と言葉を紡いだ。

「俺のレアスキル……『虹色吐息』。魔力光を自在に操り、幻術魔法を常時展開する能力だ。知っているのは、俺を含めて数人。そして俺は、全盛期にそれを使ったことは一度しかない」

だからこそ、それが証拠だ、とカグラは言った。

「読めてきたぜ、クソッタレが。そこまで完成してるとはな……」

『どういうことです？』

疑問の声。カグラは頷いた。

「時間もねぇだろう。手短に話す。そっちの面子は？」

『私とリューイ、ミリアムと、気絶してるスバルとエリオが……』

「その二人、叩き起こせるか？」

『おそらく』

「ならやってくれ」

ふう、と、カグラは息を吐いた。通信の向こうから、呻き声が聞こえる。

「目ェ覚ましたか？　いいか、気を引き締めろ。テメェらが相手してる俺は、偽物であって本物ではない――『プロジェクトF』の完成形だ」

『『プロジェクトF』……』

呻くような声が聞こえた。エリオだ。だがカグラは敢えてそれを封殺し、言葉を続ける。

「お前らが目にしてんのは、その完成形。本来なら、あってはならないものだ。……この完成が意図的なものか、偶発的なものかは知らん。知る気もねぇ。今必要なのは、どうやって俺を殺すかだ。もう理解してると思うが、俺は強い。はっきり言って、全盛期の俺がレアスキルまで持ち出したら高町の嬢ちゃんとも互角以上にやり合える」

ごくっ、と、唾を飲み込む音が通信越しにカグラに届いた。しかし、これは基本なのだ。これを理解した上で対策を立ててもらわねばならない。

カグラ・ランバードの自己評価に、過ちはない。かつての彼はホムラ・イルハートが反旗を翻した際、レアスキルを封印した状態で五人のSランク魔導師と殺し合い、そのうちの二人を絶命させている。結果として魔力の大半を失うこととなったとはいえ、その能力を考えると過大評価にはならない。

「レアスキル――『虹色吐息』は、お前らが思ってる以上に厄介な能力だ。常時幻術化……無色の魔法弾と、光の乱反射で俺の実像を覆い隠す。対策は、二つ。一つは、俺個人を狙って攻撃するんじゃなく、空間そのものを攻撃すること。そこに俺がいる以上、空間ごと吹き飛ばされたら幻術も意味がない。そしてもう一つは――――……」

説明は手早く。正直、話すのも辛いのだ。故にこそ。

『わかりました、やってみます』

代表するように、リューイが言い。

カグラは、微笑む。

「気張れよ、ガキ共。……今回、管理局がこうしてやり玉に挙げられた。悪評が立っちまったもんは仕方ない。だがな、覆せるのは次世代のお前たちだけだ。英雄はすでに英雄なんだ。嬢ちゃんたちがどれだけ活躍しようと、結局、英雄が相応の活躍をしたに過ぎねぇ。

いいかお前ら、そこにいるのはかつての俺であり、過去の残滓だ。
――打ち破れ」

笑みと共に、カグラは言い切る。

「俺の答えは、とっくに世界に示した。次は、お前たちの番だ。さあ、願いましては。お前らの掛け金は――信念は、何だ？」

答えは返ってこない。だが、それでいい。
通信の向こうで、轟音が響いた。カグラは、吠える。

「さあ行けガキ共！！　捻じ伏せてみろ、管理局の力を証明しろ！！――返事はどうした！？」

『『『『『応ッ！！』』』』』

デジャウ。かつて、真竜を倒した時も、同じことをした。
嗚呼、と、カグラは納得する。

自分の役目は、これなのだと。
後継者に託して、自分は――

……。
……。
……。

バサッ、という、翼のはためく音が聞こえた。人影。黒き飛竜――
サリヴァルムに寄りかかるように立つ少年が、こちらを見る。

「――勝ったか？」
「無論」

ボロボロの体で、少年は頷いた。そして、言う。

「逃げられましたが、右腕を頂いてきました。そちらは？」
「……若い奴の、背中をな。年取ったな俺も」
「来年三十ですもんね」
「違ぇねぇ」

くくっ、と、カグラは笑う。そうしてから、ふう、と息を吐いた。

「ちょっと、眠いな」
「……ですね。それそろ、限界が」

ドサッ、という音。ソラの体が、地面に横たわる。
同時に、懐から煙草を取り出したカグラの手からも、それが落ちた。

『ギャウ！？』
《ちょっ、二人共！？》

サリヴァとヴィクトリアが叫ぶが、二人は応じない。
じわりと、血が滲んでいく。

――動く気配が、なかった。

◇　◇　◇

「……十七分と、五十二秒。直接戦闘には恵まれないその才能で、よくここまで耐えたものです。流石はゆりかご戦役の英雄が一人、八神はやてとそのユニゾンデバイス、リィンフォース」

静かな声色。それは純粋な賞賛と、それとは別の哀しみを纏っている。

立っているのは、テンリュウ・シンドウ。倒れているのは、深いダメージによりユニゾンが解けてしまった八神はやてとリィンフォース。

勝敗は、ただ、それだけで理解できる。

「やはり、人間というのは素晴らしい。絶望を前にして、それでも向かっていくことができるだけの力を……勇気を持っています。ただ悲しいことに……あなたの勇気は、蛮勇としてここに果てる」

「……ッ、うっ」

はやては起き上がる。だが、立つことはできず、痛む体で床に座り込んだままだ。その状態で、意識を失っているリィンフォースを抱き上げた。

「リィン……」

「死んではいません。殺す気もありません。しかし、これ以上抗うのであれば、私はあなたたちを殺害の必要があると認識せざるを得なくなる」

紅に染まった刀、血桜。その刃を眼前に突きつけられる。

認識せざるを得ない——その言葉は、まるで。

懇願しているように、はやてには聞こえた。

「私に命じられた絶対の命令は、『何者であろうと生きてこの先へは進ませないこと』。その方法は私に一任されていますが、いずれにせよ、敗北しない限り私は誰も通すことはできません。そしてここが『私たち』にとっての楽園である以上、神道天龍は敗北を許されない」

それが枷。この地において彼女が――『神道天龍』が敗北する時は、『死ぬ時』以外に許されない。ここはそういう場所だ。終わりの地であり、最後の地。

「退くならば追いません。選びなさい。ここで死ぬか、逃げ延びるか」

首筋に当てられる刀。皮膚が薄く裂かれ、血が流れる。
はやては、ギュッ、と、リィンを強く抱き締め、そして。
前を――見る。

「――どちらも、選ばへん」

八神はやての回答は、それだった。
ほう、と、テンリュウが言葉を零す。

「自らが吐いた言葉の意味……理解していますか？」
「理解しとるよ。たしかに、わたしでは勝てへん。けど、それでもや」

刃を、はやてはその手で掴む。手が斬られ、血が滴るが……そこに怯えは欠片もない。
ギシッ、という、刃が軋む音。テンリュウは、内心で呟いた。
――動かない。
物理的にも。精神的にも。
勝者であるはずのテンリュウが、気圧されていた。
「諦めはせぇへん。絶対、絶対にや。ここで立ち止まったら、わたしはわたしを許せない。彼の……彼の命を擲ってまで、わたしはこっちを選んだ。この道を選んだ。戦い続けることを選んだ。今更――止まらへん！！」
吹き荒れる魔力。折れぬ心。
不屈のエースは、ここにも。
――いや。
これほどの強さを彼女に与えたのは、きっと……。
「もう、戻らへん。選択の時は過ぎ去った。だからわたしは、戦い続ける。誰に言われたわけでもない、わたし自身の意志で。わたしは生きてるんや。生きてここで、戦えるんや！！」
展開される術式。それは、空間魔法。
（装填術式――こんな高度なものを！？）
紡がれる魔法に、テンリュウは驚愕する。装填術式――それは、戦闘魔導師によって開発された極めて実践的な術式だ。予め詠唱をし

ておいた術式を、自身の中へ固定。それを放つ。

一言でいうと簡単な術式だが、無論、そんな生易しいものではない。
固定するために常に魔力を消費する必要がある上、固定することにも演算能力を裂くことになるため、実用には至らなかった術式だ。
しかし、たった一度。最後の切り札としてならば。

「――遠き地にて、闇に、沈め――」

加えて、巨大な魔法を維持できるだけの魔力量を有しているならば。
或いは――不可能ではない。

「ディアボリック・エミッション！！」

――――――――――！！

音が消え、空間が制圧される。空間そのものを打ち砕く、大魔法。
その威力は破格の一言だ。
崩れゆく石柱や壁。部屋の形が丸ごと変わる中、紅蓮の煌きが迸る。

「……見事」

――一閃。
その身に傷を負いながらも、しかし、衰えぬその刃の一撃により、
はやての体は正面から斬りつけられる。

深い傷。はやては、短い声を漏らし、その体から夥しい量の血を流し、倒れる。

「流石に私も余裕がありませんので……一刀の下、沈んで頂きました」

血が飛び散る。珍しく息を乱している彼女は、一度大きく深呼吸をすると、虚空を見つめた。

そして。

――ピシッ、と、虚空が割れる音が響いた。

世界が――割れる。

「この世への未練を、未だ持ち得ているのですか？」

テンリュウは、その手に持つ得物を握り締め、言い放つ。

「――孤独なる英雄よ」

第三十六話　託したもの、託されたもの（後書き）

随分と遅くなってすみません。三十六話です。楽しんで頂けましたか？

それにしても一万飛んで五千文字オーバー……多いですねぇ、ホント。

そして、皆様のおかげで１４万ＰＶ突破！！　ユニークも一万五千人突破です！！
ありがとうございます！！
予定としては、エピローグ入れてあと四話くらいじゃないかな……とか思っていたり。
……当初の予定よりも長いですね……三十話半ばって……当時の私は何をアホなことを……。

ええと、コホン。今回はリューイ、ミリアムについて。リューイは『善行を正義とする青二才』であり、ミリアムは『負い目を感じながらも前を向こうとする若者』です。二人の始まりは重いものではありますが、それでも周囲の人たちのおかげで救われている。だからこそ、そういう描写も多いです。

また、ソラの天才性やはやての術式などは私の完全なオリジナルです。特にソラ。彼、多分その気になれば一番強いんじゃないかな、と思う今日この頃です。流石、最初の主人公候補。

そして、とある方にメッセージで頂いたのですが、
『『優しい嘘』の前半は、ファイムの格好良さが一番ですね』

……とのことです。すみません、主人公が出てこなくて。最終決戦なのに。

ええと、ファイムは次回の次回、最終話の一話前で丸々、彼の話をするつもりです。お楽しみに♪

では、感想ご意見、お待ちしております。
好きなキャラクターや、この話が好き、などがございましたらご意見お願いします。

最後となりましたが、ありがとうございます。

では、次回。第三十七話。
「想いの残滓」

第三十七話　想いの残滓

響き渡る轟音の嵐。文字通り、身を裂かれるような嵐の中を、五人の魔導師と一人のユニゾンデバイスが踊っている。

スバル・ナカジマ。
エリオ・モンディアル。
ティアナ・ランスター。
リューイ・エンドブロム。
ミリアム・エンドブロム。

そして――カグラ・ランバード。

管理局の英雄と、次代を担う若き魔導師たちの激突。その圧倒的な魔力の衝突は最早、暴風である。周囲の壁は軒並み砕け散り、豪奢な造りであった内装は見る影もない。

「どうしたガキ共。この程度か？」

その暴風の中心で笑うカグラ。その周囲には、七色の弾丸が浮かぶ。『虹色吐息』――あらゆる魔力光を纏い、幻想を撒き散らす力。無色という不可視の弾丸や、光の乱反射という現象により姿を隠すという行為。白兵戦において、これほど単純な意味で強力なスキルはそうそうない。

「おおおっ！！」

弾丸の嵐を踏破し、リューイがその大剣を振りかぶる。狙うは、一

撃の必殺。しかし。
――その一撃は、カグラの体をすり抜ける。

「ハズレだ、小僧」

横から聞こえてくる、声。それと同時に、顔面に拳が突き刺さる。
――光の屈折率の利用による、幻術。偽りの姿を映し出す虚像。
何度目かわからないそれに、リューイは再び膝をつく。

「ぐっ、あ……！」
『マスター前を！！』

呻くリューイに、突き刺さるような声が届いた。瞬間、リューイの顔の横をオレンジ色の弾丸が駆け抜ける。リューイに追撃を仕掛けようとしていたカグラに向かってその弾丸は一直線に迫るが、再びその体を通過するにとどまる。また、虚像。

「ふん……そろそろ、飽きてきたな」

ヴンッ、という音と共に、魔法陣がいくつも展開される。同時にカグラの姿も増えた。数は――七人。

「超えられないならそれで構わねぇよ。ここで――死んでいけ」

吹き荒れるは魔力の嵐。七つの魔法陣はそれぞれ、虹のようにそれぞれが別の色を纏い、光り輝く。

「煌めくは清廉。輝くは荘厳。泡沫の夢なれど、万物に触れし空想は具現に至る」

七人のカグラが、それぞれ別の場所で同じ詠唱を唱和する。全員が、同時に表情を変えた。

――マズい！！

『マスターッ！！』

「わかってる！！」

最初に動いたのはリューイとミリアムだった。ミリアムの力により、リューイの大剣『ブラッディハウンド』に暴風が宿る。それと同時に、リューイはそれを振り抜いた。

「吹っ飛べ！！」

『ウインドシュトローム！！』

剣に宿った暴風に指向性を持たせ、広範囲を殲滅せしめる強力な一撃。ミリアムとリューイがイメージだけで扱ってきた即席の技だったが、ここに来てようやく形となる。

暴風は周囲の壁を抉りながら、一直線にカグラを狙う。しかし、リューイたちを囲むようにして佇む七体のカグラ全てを消し去ることはできず、一方向の三人に直撃した。また、その三人は幻影だったようですぐさま消える。

その代わり――魔法陣の三つを消滅させた。カグラが、笑みを浮かべる。

「――幻想の果てに真実を」

だが、それをリューイたちが目視できたのは一瞬。詠唱が完了する。

「セヴンス・ヘヴン」

――世界が、染まった。

視界の全てが七色の『何か』で覆い尽くされ、同時に、体を凄まじい衝撃が駆け抜ける。

（――まず、っ、……これは……ッ……！？）

飛びそうになる意識を必死で抑え込みながら、リューイは内心で焦りを募らせる。目を開けているはずなのに視覚は完全に潰されている。体も、今自分が立っているのかどうなのか、その確信が持てないくらいに不安定だ。

意識が歪む。何もわからない。痛覚の許容量を超えたせいか、衝撃しか感じない。

意識が――もう――……

「――ッ、ふざけんじゃないわよ！！」

霞み行く意識を取り戻させたのは、そんな声だった。同時、七色に染まったの視界が急速に色を取り戻す。

《Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

紡がれるのは、星の光を受け継ぐ魔法。ティアナが構える彼女のデバイス、クロスミラージュが変形し、長距離砲撃用の形を見せる。

「スターライトブレイカー！！　シフト《ファントムストライク》

！！」

歯を食い縛り、ティアナが吠える。その銃口に収束しているのは、彼女のオレンジ色の魔力を中心に固められたカグラの魔力。

「ほぉ……俺の魔力を飼い馴らすか。いいぜ、嬢ちゃん。やってみな。ただ、忠告してやる」

バチン、という凄まじい衝撃音。ティアナの収束する魔力に、亀裂が入る。

「俺の魔力は、じゃじゃ馬だぜ？」

――ビキビキビキッ！！

綺麗な球体を描いていた魔力が、急激に歪み始める。ティアナは片膝をつき、しかし、震える体で暴発しそうになる魔力を強引に抑え込む。

目が、合った。

リューイの今の立ち位置は、カグラとティアナの間だ。このまま撃てば、リューイは巻き込まれる。スバルとエリオがそれに気付くが、その二人はすでにティアナの後ろにいる。前には出れない。

そして――リューイが下がる時間もまた、ない。

「――――……」

短く、リューイは呟いた。魔力が吹き荒れ、凄まじい音を立てる戦場において、その声はきっと届かない。

しかし、ティアナにはわかった。目で、彼女が問う。

――いいのか、と。

この状況下、手加減などする余地はない。それでも良いのかと。

リューイは、頷く。

笑っている。

迷う時間は――ない。

「――ブレイカー射出！！」

抑え込むのも困難。故に、ティアナは引き金を引いた。

圧倒的な魔力の奔流が駆け抜ける。カグラの言う、『範囲の攻撃』――その解答だ。

「ミリアム！！」

『イエス、マスター！！』

対し、リューイもただ黙ってやられるわけではない。目を凝らし、五感を研ぎ澄まし、前を見る。

――目に入るのは、僅かな歪み。透明な何かが蠢いて見えるように感じる空間。

「おおおっ！！」

駆け抜け、剣を振り抜く。硬い何かに当たった感触。即座に、リューイの足下に魔法陣が展開された。瞬間、空間が軋みを見せる。

現れたのは、魔力で強化した腕で剣を受け止めるカグラの姿。

「……テメェ」

呻くように、カグラが呟きを漏らす。リューイは左手を柄から話すと、カグラの腕を掴んだ。

「俺の――いや、俺たちの勝ちだよ偽物野郎」

『チェックメイトです』

――膨大な魔力の奔流が、二人を押し流すように包み込んだ。

◇　◇　◇

スターライトブレイカーが吹き飛ばした通路。一部は壁が吹き飛び、外の光景が見て取れる状態になっていた。

「……ティア」

「……ティアさん」

スバルとエリオが、もどかしそうに声をかける。ティアナは、ぐっ、と強く唇を噛み締めた。

直撃の瞬間、ティアナには見えた。リューイが体を張って、カグラを射線上に固定したところが。いかに範囲を攻撃するものとはいえ、直撃しなければ意味がない。そういう意味で、リューイの行動は正しかった。そして、状況を打破するために引き金を引いたティアナもだ。

だが――割り切れないこともある。

「……ッ」

俯くティアナ。何れにせよ、引き金を引いたのは彼女である。正しかろうと正しくなかろうと、彼女自身が納得できないのであればその括りに意味はない。

ただ、勝ったことは事実だろう。いかにカグラ・ランバードとはいえ、あの砲撃を食らって無事とはいかない。

《相棒、前を》

だが、緩みかけた空気を引き締める声が響いた。スバルのデバイス『マッハキャリバー』だ。瞬間、声が響き渡る。

「いい魔法だ。だが、威力が少しばかり足りねぇな。俺を沈めたければ、あそこから更に畳み掛けてこい」

煙が晴れる。姿を現したのは、健全な姿のカグラだ。彼は煙草を咥えると、火を点ける。

紫煙をゆっくりと吐き出し、ゆっくりとその視線を三人に向けた。

「……で？　次は何を見せてくれるんだ、そこの三人――いや、四人は」

――風が吹いた。砕けた壁から差し込んでいた陽の光。夕焼けの色を帯びていたそれを遮り、大きな影が姿を現す。

「フリード！！　ブラストレイ！！」

「ギャオッ！！」

現れたのは、ピンク色の髪を有した竜使いの少女と、その飛竜。

――ズドンッ！！

竜の口から放たれる熱線が、世界を歪める。カグラは、ふん、と鼻を鳴らした。

「プロテクション」

カグラが手を翳すと、障壁が展開される。若齢とはいえ、フリードリヒは竜である。それこそ暴走でもすれば街一つ破壊するほどの力を持つ。しかしカグラは、平然とその竜の一撃を受け止める。

「はああっ！！」

だが、この戦場にいるのはその竜のみではない。高速で走る紅き騎士が、全力でその槍を振り抜く。

ちっ、という舌打ちを零し、カグラはその場を飛び退いた。そこへティアナの放った魔法弾が飛来する。カグラはそれを避け、フリードが陣取る場所とは別の場所から中空へ躍り出た。

「ふん……ＪＳ事件のＦＷ共の集合か。丁度いい。お前たちに教えてやるよ。空戦魔導師の頂点の力をな」

失楽園シャングリラ。ソラに浮かぶそれから一歩外に出れば、そこは無限の空が広がる自由な世界だ。そこは空を戦場とする空戦魔導師の独壇場。

そして、大地を駆け回る陸戦魔導師にとっては、ただ見上げるだけの――死地。

「室内はどうも窮屈でやり辛ぇことこの上ねぇ。――さあ、来いよ。格の違いを教えてやる」

魔力の圧力が増す。同時にカグラの背後に、再び七つの魔法陣が展開された。全てが別の色を宿すそれは、先程全員の意識を奪おうとした魔法と同じもの。

「――スバル」
「うんっ！」

躊躇はない。戦場は常にその様相を変えていく。有利な状況で戦えるならばそれは願うべきことだが、常にそんな状況で戦えるわけがないのも事実。ならば、敵の領域に飛び込む覚悟も必要だ。

「ウイングロードッ！！」

描かれるのは、無数の軌跡。空に描かれた蒼い軌跡は、カグラを中心として戦場を形作る。
紡がれた数多の道。その全ては、カグラを終着点として交錯している。

「ふん……陸戦魔導師としちゃあ、これが最上の選択だろうな」

デジャヴ――微かに感じたそれを意識の隅に追いやり、スバルは疾走する。それを見送りながら、ティアナが指示を出した。

「キャロ！！　こっちへ来て！！　リューイとミリアムの治療をお

願い!!　エリオ!!　スバルと一緒に攻撃開始!!　あたしが援護する!!」
「「はいっ!!」」

二人が応じ、それぞれの居場所が入れ替わる。キャロはティアナの側へと転移すると、倒れているリューイとミリアムの下へと駆け寄った。意識して視界から外していたが、あの二人の状態は良くない。この戦いでの復帰は絶望的だ。
エリオはフリードに飛び乗ると、スバルと共にカグラへと突撃を敢行する。その二人が到着する前に牽制のために放ったティアナの弾丸がカグラに直撃したが、片手で振り払われた。

「固定開始。――展開。掃射」

カグラが短く言葉を紡ぐと、魔法陣より出現した無数の魔法弾がスバルたちに向かって降り注いだ。スバルとエリオは直進を諦め、それを避けながら歩を進めていく。

カグラが先程放った魔法――『セヴンス・ヘヴン』は、空間魔法だ。非殺傷設定の究極とも思える魔法とティアナは理解した。何しろ視覚を始めとした全ての感覚を閉ざされた中で凄まじい魔力に押し潰され、魔力ダメージでノックダウンさせられるという代物なのだ。多人数を制圧する魔法としては、これ以上ない魔法である。
ティアナが先程それを打ち破れたのは、収束砲である『スターライトブレイカー』を形成するための魔力スフィアを予め用意していたからだ。それで強引に魔力を集め、術を止めた。
二度やれるような手ではない。向こうがどういう気か知らないが、こちらは全員がもう限界に近いのだ。

「スバル、エリオ、キャロ。聞こえる？」

物陰に身を隠しながら、ティアナは三人へ指示を飛ばす。そうだ。これが自分たちのスタイルだ。相手が格上でも、戦術面でそれを補い、制圧する――ＪＳ事件で偉大な先輩たちが自分に求めたのはそういう力だ。

ならば――やってやる。

――『エース・オブ・エース』を、制圧してみせる！！

「相手はカグラさんの偽物。そこを突くわ。タイミングをずらせば終わりよ。いいわね？」

返事は待たない。待つ余裕もない。後は、信じるのみ。

自身よりも圧倒的に強大な相手に向かって突き進む二人と、自分自身を。

「作戦は――――」

喉が渇く。口の中が乾いて痛い。緊張する。それはそうだ。相手はあの、カグラ・ランバード。偽物であろうとなんであろうと、その実力は本物だ。

「――――――――、……――――」

しかし、超えなければならない。いつまでも、いつまでもあの人たちに甘えるわけにはいかない。

浮かぶのは、背中。

自分たちに強さの意味を授け、夢に立ち向かうための力を教導してくれた不屈のエース。

当然のように自分の手を引き、夢を叶える手助けをしてくれた、優しいエース。
自分たちのような、当時はただの新人だった有象無象を見出し、導いてくれた強きエース。

そして。

その三人とは全く違う、『弱者としての強さ』を持つ、ただのエース。

その遠い背中にそう簡単に追いつけるとは思えない。しかし、決めたのだ。追いつくと。追い越すと。ランスターの弾丸は、どんな相手だろうと撃ち抜けると証明するのだと、そう決めて。

――けれど、何ができた？

ただ思い描くだけならば猿でもできる。だから、必要なのは踏み出す勇気だった。たった一歩でいい。全てを背負い、リスクを理解し、それでも尚、前へと進む僅かな勇気。

そして、それを示すのは――今。
今こそ、あの背中を追うための一歩を踏み出す！！

「――行くわよ！！」

放たれる弾丸。それに後押しされるように、フリードが熱線を吐き出した。それはカグラを襲うが、障壁に阻まれて届かない。しかし、それでいい。目的は他にある。
ストライカーたちが、その真価を問われる。

――――。
――――――――。
――――――――――。

「……ちっ、煙幕のつもりか？」

カグラが吐き捨てる。フリードの一撃の余波により、カグラの周囲に粉塵が舞い上がったのだ。煙幕のようにそれは、カグラから視界を奪う。

「だが……悲しいかな。そこが陸戦魔導師の限界だ」

目を閉じ、カグラは耳を澄ませる。聞くのは、ローラー音。視界が潰された程度で焦り出すほど、彼の神経は優しくできていない。

「そこだな」

魔法陣が一斉に輝きを増す。現れるのは巨大な魔力スフィア。巨大な魔力にものを言わせたそれは、Ｓランク魔導師の全力砲撃。待ち受ける。そして、煙と共に現れたのは。

《Ｈｅｌｌｏ，ＢＯＳＳ》

マッハキャリバー。スバルのデバイスが、それ単機でこちらに突っ込んできた。それが駆け抜けた直後、背後に違和感を感じる。

「――――ッ！！」

振り向き様に回し蹴りを叩き込むが、いない。そして。

「――ＩＳッ、発動！！」

戦闘機人モード。カグラを逃がさぬため、金色の瞳を有して現れた蒼き魔導師が、全力でその拳を構える。

時間差攻撃――先にマッハキャリバーを行かせ、そのあとを少しだけ遅れてスバルが追撃する。騙された相手は、自身の死角から攻撃が来るであると予測して自ら背を晒すという寸法だ。
もっともこれは、三年前に行われた模擬戦でスバルが使った戦法の改良版である。プロジェクトＦ、という単語を聞き逃さなかったティアナが『カグラの偽物であるならばその戦法を記憶として知っている』と推測し、指示した作戦だ。
自身で一度見ているが故に、カグラは反射的に背後を振り返ってしまう。それを衝く――そういう戦法だ。

「振動破砕ッ！！」

――ガドンッ！！

最早、人間同士の接触とは思えない音が響き渡った。咄嗟に張ったカグラの障壁は一瞬で吹き飛び、スバルの拳がカグラの腹部へと叩き込まれる。

「が、あっ……！？」

体の骨が軋み、折れる音が響き渡る。それでもカグラは咄嗟に魔法を展開。右手から放った即席の砲撃魔法でスバルを吹き飛ばした。

「おおおっ！！」

次いで、エリオの一撃が迫り来る。スバルが用意したウイングロードという足場を縦横無尽に駆け回り、自分自身にさえも負荷を与える一撃を繰り出す。

高速の乱打。亜音速に近いその速さから繰り出される一撃は、スバルの一撃によって深いダメージを体に刻まれたカグラに、更なるダメージを与えていく。

「ライトニング・インパルス！！」

中空に描かれた無数の軌跡。それは、エリオ・モンディアルがウィル・ガーデンズを打ち倒したのと同じ技。故に、最後の一撃もまた、用意されている。

「紫電――」

雷撃を纏う、エリオのデバイス、ストラーダ。しかし、その一撃が放たれる瞬間。その腕が掴まれた。

「――舐めるなよガキが」

エリオがカグラに向かっていくのと同時に突撃を敢行し、その腕をつかんだカグラが言うと同時、カグラの背後の魔法陣のうちの三つが煌めく。

「――――ッ！？」

バインド。中空に縛られたエリオに、砲撃魔法を避ける手段はない。

「堕ちろ」

エリオが砲撃に飲み込まれる。しかし、その寸前にエリオは叫んでいた。

――フリード、と。

「ギャウッ！！」

「ぐっ！？」

今度はブレスではなく、その巨体を生かした体当たり。すでにボロボロの体でそれが受け止められるわけがなく、カグラは弾き飛ばされる。同時に、大きく血を吐いた。

「か……ッ、……舐め、るなッ！！」

持ち直す。流石は音に聞こえた『エース・オブ・エース』。不死身とも呼ばれるその耐久力は称賛に値する。本来であれば、スバルの振動破砕が入った時点で決着が着いているはずなのだ。

カグラは視線を巡らせる。感じるのは魔力。出所は――！

「――――！」

目が合う。ティアナ・ランスターだ。その後ろにはキャロ・ル・ルシエもいる。先程自分を巻き込んでくれたあの金髪の騎士はもう動けないはず。

「堕ちろ！！」

残る四つの魔法陣から、臨界点を迎えた砲撃魔法が放たれる。一発一発が致命の一撃。非殺傷などという甘えは存在しない。

――ズドンッッッ！！

『史上最悪の概念兵器』とまで謳われる『失楽園シャングリラ』――一部とはいえ、その外壁が吹き飛ばされる。しかし、何故か直撃したその場所に、ティアナとキャロの姿があった。

「――くそったれが！！」

カグラが吠える。二人の姿が霞み、消えていった。

――幻術！

「……あの野郎の物真似は、相当癪に障るんだがな」

カグラの耳に、そんな声が届いた。見ると、中空に佇むリューイが頭部や口元から血を滴らせながら、腰を捻って『ブラッディハウンド』を構えている。

カグラは知る由もないが、その構えはソラ・ウィンガードがかのリヴァイアス・バルトマカリを討ち取る際、両腕を奪った技に似ていた。

それは、つまり。

――極限まで魔力を追求した得物の投擲。

「この際だ――ごちゃごちゃ言ってる余裕はねぇ！！」

ゴウッ、という音と共に金色の焔がその刃に宿る。そして、カグラがリューイの一撃に対して迎撃の構えを取る前に、その一撃が放たれた。

「おおおおッ！！」

名などない、ただただ全身全霊を懸けて投擲するだけの魔法。単純。しかし、それ故に強力。

――轟音。

放たれた一撃は、カグラに直撃。しかし、カグラは強引に身を捻り、直撃を避けた。当たり前だ。あんなものをまともに喰らえば、文字通り命を持って行かれる。

しかし、避け切れるものでもない。貫ってしまった一撃は、左腕を持っていった。血が噴き出す。

「――――」

その時、空を見上げたのは偶然だった。しかし、カグラは空を見上げた自身を、何となく、良くやったとそう感じた。

空に浮かぶは、一人の魔導師。

風を纏い、オレンジ色の砲撃をこちらに放とうと銃口を向けてくる、一人の女性。

チラリと、カグラは視界を動かした。自身が落としたスバルとエリオの二人はどうしているのか。海に墜ちたか、と思ったが、そうではなかったらしい。

キャロ――あの少女が、『ホールディングネット』で二人を受け止

めていた。リューイもだ。

「……チッ」

舌打ち。短いそれを、カグラは零す。その視界の先には、もう一度紡がれたオレンジ色の、星の光。

『星の光の継承者』――物騒なものを、現代の『エース・オブ・エース』は遺したものだ。

管理局。『記憶』の中では、随分とくだらない組織だと思ったが。

何だ――いるではないか。

英雄の、後継者が。

その時の笑みは、きっと、本当に満足したもの。

だからこそ、受け入れた。

……。

……。

……。

『チャージ完了。射出可能です』

《Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

自身の内部から聞こえてくる声に、ティアナは小さく頷いて応じた。

これが、ユニゾン。成程、とんでもない力だ。体の底から力が溢れてくるような錯覚を覚える。

しかし、ミリアムとのユニゾンの相性はあまり良くないらしい。目

に見えない圧迫感とでもいうべきものを感じる。だが、構わない。元々、ユニゾンは出力強化のための策ではない。ティアナ・ランスターを空へと上げる。そういう策だ。

スバル、エリオ、フリードの攻勢により、どうにかしてカグラの意識を集中させる。ここでの集中とは、目の前のこと以外に気を配る余裕を失くさせることだ。先程の『スターライトブレイカー』を耐え切られた理由。それはチャージ不足だ。一瞬で組み上げた収束砲は、その真価を発揮できない。

故に、チャージの時間の確保と、射線上に相手を固定するための方法が必要だった。そのために、スバルとエリオにはギリギリのラインを走ってもらい、幻術まで使用した。

その中で僥倖だったのはミリアムとリューイだ。チャージ不足だったおかげで、二人は目を覚ました。そのおかげで、カグラを撃つ際に『空中から』という方法――陸戦魔導師であるティアナがすれば、これ以上ない奇襲となる――を成すことができたし、リューイの一撃によって時間稼ぎとカグラの固定ができた。

後は、自身にカグラを撃ち抜くだけの力があるかどうか。

（……なのはさん）

最大の目標である人のことを思い浮かべる。あの人のようになりたい。不屈の心で、誰よりも強く、誰よりも気高く、誰よりも自由に空を舞うあの人のように。

――だから、今。

あの人と同じ場所にいるという英雄を、撃ち落とす。

「スターライト――！！」

光が臨界点を迎える。放つ一撃は必殺。

受け継いだもの。
託されたもの。
その二つを胸に――今こそ。

『「――ブレイカァァァッッッ！！」』

放たれた砲撃が、カグラ・ランバードを飲み込み、海へと突き刺さった。

◇　◇　◇

感じたのは、柔らかな感触。カグラは、ため息を漏らした。

「甘いな。……敵を助けるなんてよ」

ホールディングネットの上で、カグラは身を起こした。当然のようにバインドがかけられている。

「……」

全員が無言。カグラは、もう一度息を吐くと、苦笑を漏らした。

「見事なり、だな。……俺は偽物。泡沫の夢。消え逝く身には、重畳だ」

不意に、カグラの体が砕けた。その体が砂と化し、崩れていく。スバルが、息を呑んだ。

「カグラさん！？」

「偽物と知って、その名で呼んでくれんのか。嬉しいねぇ。……これはな、自然の摂理だ。俺は存在しないはずの形。生まれてはならなかった罪、そのものだ。プロジェクトFの是非についてなんてのはどうでもいいが、今生きてる人間と全く同じもんを創ることは、やっぱり異常なんだよ」

カグラは微笑みを浮かべる。その姿は、彼らが知っているカグラ・ランバードという存在そのもので。

誰も、何も言えなかった。

「細胞にはすべての設計図が刻まれている――そういうコンセプトでな。俺は創られた。グリス・エリカランにしてみれば、急場凌ぎのための駒だ。だから寿命なんてどうでも良かったし、任務を果たせれば消えて構わない存在だった。使い捨ての道具だよ」

それでも、カグラ・ランバードの全盛期を制作できたのは奇跡に等しい。『同一の存在』というものは、同次元に存在できない。本物のカグラがその魔力を失っていたからこそ、再現できる可能性があったとはいえ、だ。

かの大魔導師プレシア・テスタロッサでさえも成し得なかった、完全なるクローン……いや、『代替物』の精製。成程、グリス・エリカランは本当に化物だったらしい。

この技術は、実現できるはずがないのだから。

「レアスキルまで再現して……本当に化物だ。使い捨ての道具に、どれだけ命を懸けたのやら」

カグラは笑う。エリオが、どうして、と言葉を紡いだ。

「道具とわかってて、どうして」

「……意味が欲しかった」

嘆くような問い。それに対し、カグラは静かに応じる。

「俺の記憶の全ては借り物だ。俺のものじゃない。なら、俺とはなんだ？　俺は、何を以て俺と認識すればいい？　俺は、ここにいるのに。仮初であろうと道具であろうと、生きているのに」

カグラは微笑んだ。その体はもう、半分しか残っていない。

「お前らと戦って、お前らに勝つならいい。お前たちを潰したのは俺。そういう証が生まれる。けれど、負けたなら……未来に、何かを繋げたんじゃないかと、そう思うんだ」

未来へ。

過去も未来もなく、ただ現在だけを与えられた人形。

――だからこそ。

最後は、真っ向勝負を仕掛けた。幻術など使わずに。

まあ、その幻術に足下を掬われたわけなので、少しスッキリしない部分もあるのだが。

「馬鹿野郎。泣く奴があるか。道具のために泣いてどうする？」

知らず、頬を伝う涙。スバルたちは、慌ててそれを拭う。

カグラは、最後だ、と呟く。

「スバル・ナカジマ。エリオ・モンディアル。ティアナ・ランスター。キャロ・ル・ルシエ。リューイ・エンドブロム。ミリアム・エンドブロム」

全員の名を呼ぶ。それは、彼が認めた証。

カグラ・ランバードは、認めた相手の名前しか呼ぶことはない。

「自信を持て。俺の記憶が告げている。お前らが本気になれば、『エース・オブ・エース』にだってなれる。高町なのはだろうがフェイト・T・ハラオウンだろうが八神はやてだろうが超えられる。……じゃあな」

笑み。そして、カグラは空を見上げた。

「短い、刹那の人生だったが……その涙、手向けに貰っていく」

七色の粒子となって溶け行く体。その体が消える瞬間、カグラは呟いた。

「――重畳なり」

そして、その姿が消えて逝く。

カグラ・ランバードであり、何者でもなかった存在。

その存在の最後は、欠片一つ残さず、されど、生きた証を残したものだった。

◇　◇　◇

見つけたのは、ボロボロの状態で倒れている三人だった。シグナムは、慌てて駆け寄る。

「ランバード殿、ソラ！」

近付き、脈を確認。……生きている。隣で倒れている少女もだ。

「テスタロッサ、治癒魔法の心得はあるか？」

「応急処置ぐらいなら……」

フェイトが頷く。シグナムは、十分だ、と言葉を紡いだ。

「急いでくれ。私はその類の魔法が使えない」

「わ、わかりました」

フェイトが三人に駆け寄り、応急処置のための魔法を紡ぎ始める。シグナムは、さて、と呟いた。

「そこの飛竜。案ずる必要はない。私たちは味方だ。警戒を解いて出て来い」

《――大丈夫だよ、サリヴァ。この人たちはあんたの味方さ》

聞こえてきたのは竜の声ではなく、女性の声。同時に小型の黒い竜とその体に括り付けられた宝石型のデバイスが姿を現した。シグナムは、ふん、と鼻を鳴らす。

「ヴィクトリアか。……何があった？」

《色々。正直、一言では説明できないねぇ。……あたしゃ、説明と

かは苦手でね。ウチの坊やに聞いてくれた方が手っ取り早い》
「ソラにか？　だが、奴は今――」
《ウチの坊やを甘く見ない方がいいよ、連隊長殿。――ほぉら、目覚めた》
「何？」

シグナムが振り返る。彼女の目に映ったのは、一人の少年。
ソラ・ウィンガードが、目を覚ました。

「ギャウ♪」

サリヴァが嬉しそうにソラの下へと飛来する。ソラは、苦笑を漏らした。

「すまん、取り逃がした。ごめんな、サリヴァ。助けてくれてありがとうな」
「ギャウ♪」

ソラに撫でられ、嬉しそうに唸るサリヴァ。シグナムは、ソラ、と声をかけた。

「無事なのか？」
「……正直、満身創痍です。けれど、退けません」
「十全だ。命令を聞かないままでの単独行動についての説教は後にしてやる」

シグナムは頷く。そうしてから、未だ眠ったままの少女へと視線を向けた。

「だが……あちらはそうもいかないようだ。ソラ、説明はあるのだ

ろうな？」
「勿論です。むしろ、聞いていただかなければなりません」
頷き、少女へと視線を向けるソラ。そこへ、呻き声のような声が届いた。
「あぁ……？　ここは……天国か……？」
薄く、カグラが瞳を開けた。フェイトが、カグラへ声をかける。
「カグラさん！」
「んあ……？　おお、嬢ちゃんも天国へ来たのか」
「んなわけねーでしょうが。馬鹿かあんた」
カグラのとぼけた発言に、ソラがつっこみを入れる。カグラは、おお、と声を上げた。
「やっぱりお前も死んだのか」
「……サリヴァ」
「ギャウ」
――パクッ。
この緊迫した状況には似つかわしくない、そんな音が聞こえてきそうな行動。小型状態のサリヴァが、カグラの頭を思い切り食べていた。
「ぬおおおおおおおっ！？」
「目ェ覚めましたか？」
「――ッたりめぇだァ！！」

サリヴァを引きはがし――小型とはいえ竜だ。どこにそんな力が残っていたのか――ソラに拳を叩き込むカグラ。その疾風の一撃はしかし、ソラに受け止められる。

「今はんなアホなことしてる場合じゃねーでしょう」

「……よしわかった。テメェあれだ。帰ったら死なす」

「生きて帰れたら覚えておきますよ。……とりあえず、状況はかなりヤバいです。この子の右腕がない――それはつまり、『ここ』の所有権が奪われたことを意味します」

少女の側にしゃがみ込みながら、ソラは言う。どういうことだ、とカグラが言葉を紡いだ。

「失血死して当然の出血量で生きてることといい、ただの子供とは思ってなかったが」

「ただの子供も何も、彼女がここの『本来の主』ですよ。……まあ、敵さんのボスの口振りとか、その辺から下手人は予測できますが……今は良いでしょう」

ソラは肩を竦める。そうしてから、少女を抱き上げた。

「おい、ソラ――」

「この子には、最奥部まで来て頂かなければなりません。もう手遅れかもしれませんが」

カグラの言葉を遮り、ソラは言う。待て、とシグナムが言葉を紡いだ。

「その子が何者かは知らないが、重傷であることはわかる。時間が

ないのはわかるが、その子だけでも『ヴォルフラム』へ送るべきではないのか」

「そうだよ、ソラ。それに、ソラだって平気そうな顔してるけど、実際は立ってるのも辛いはずだよね？」

続くフェイトの言葉。ソラはため息を吐いた。

「俺もそうしたいんですが……そうもいかないんですよ。それに、どんな状況になろうとこの子は死にませんよ」

そして、ソラは告げる。核心たる言葉を。

「この子の名は、アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント」

託された刃。そこに記されていた秘密を。

「『失楽園シャングリラ』をこの世に創造し、『唯一人からなる無敵の軍勢』を従え、『聖王』と『覇王』の軍勢にたった二人で渡り合った存在。『聖人の末裔』？　違う。そんなものじゃない。彼女自身が、『聖人』なんです」

何百年という永い時を繰り返し続けてきた存在。託された秘密は、あまりに重い。

「痛みもある。苦しみもある。けれど、死ねない。『聖人』が背負った業――『不死』。この状態で生きていることが、何よりの証明です」

痛みも苦しみも残したまま、只々、生きていく。それが――『不死』。

「……詳しい話は、進みながらします。急ぎましょう。サリヴァ」
「ギャウ！」

ソラの足下に魔法陣が浮かび、同時にサリヴァの足下にも魔法陣が現れる。数秒後、サリヴァは本来の姿を取り戻していた。

サリヴァはソラと契約したわけではない。故に、魔力供給のラインは設定されていない。また、テンリュウという規格外と契約しているサリヴァとラインを繋ぐことなど、普通は不可能だ。
しかし、ソラにはそれができる。正真正銘の天才――ソラの魔力は、実を言うとリューイよりも若干低いというレベルで、確かに強大だが絶大というわけではない。それでも彼が『陽光』とまで呼ばれるのはその応用力。おそらく、彼に魔導の演算能力で勝てる者はあらゆる次元世界を見渡しても数えるほどだろう。
本人が自覚しているかどうかはわからないが、その圧倒的な天才性こそがソラの武器である。これで本人にやる気があれば、『エース・オブ・エース』の名を冠していてもおかしくはない。

サリヴァの背に乗るソラ。優しく少女――アリアを抱き上げ、彼は前を見る。

「正直、ここに来た目的はこの子を守ってくれって頼まれただけなんです」

誰に言うでもなく、ソラは言葉を紡いだ。カグラが、何だと、と声を上げる。ソラはそれに応じることをせず、言葉を続ける。

「最初はここから連れ出せばいいのかと思いましたけど。どうやら違う。……あんまり、こういう理由は得意じゃないんですけどねー。

俺みたいなのが、『誰かを救う』なんて。本当に――らしくない」

苦笑を漏らし、ソラは言う。救う。救い出す。きっとあの少年は、自分にそれを託したのだ。

どうすればいいかはわからない。しかし、この場所は『聖人の領土』。終わることのない永遠の呪縛から救い出す方法はきっと、ここに眠っている。

「俺は行きます。皆さんは――」

振動。言葉を紡ぎ切る前に、カグラがサリヴァの上に乗っていた。

「おお、意外に乗り心地良いな。竜は狩ったことはあるが乗るのは初めてだ」

「私は飛行してついて行こう。テスタロッサはどうする？」

「私もそうしますよ、シグナム」

サリヴァの両隣に立ちながら、二人が言う。ソラは、わかりました、と頷いた。

そして――竜が吠える。

終幕は、近い。

◇　◇　◇

「――アンロック」

魔法陣を展開すると同時、ユーノ・スクライアは魔法を紡いだ。扉

にかけられていたロックを外し、先へと進む。

アンロック――開錠の魔法は、実はかなり高度な魔法である。だが、ユーノ・スクライアは考古学者であり、また、遺跡発掘に長けたスクライア一族の出身である。遺跡発掘において必須となるトラップ解除能力やサバイバル能力など、こと考古学の分野において彼に敵う者は管理局にいない。

ちなみに彼は途中までキャロと共に進んでいたのだが、分かれ道で別々の道を行くことになった。

そして、その技術を生かした彼は一人、最奥部に辿り着いていた。本来なら、簡単には入れない場所。直通で行こうと思えば、テンリュウ・シンドウが陣取る制御ルームを通過するか、玉座の間を通らなければ辿り着くことが許されない場所へ、彼は辿り着いた。その能力故に、ただの一度も戦闘に巻き込まれず、だ。

それが幸か不幸かを決めるのは、彼ではない。

「……ヴィータ？」

不意に目に映った少女の姿を受け、ユーノは呟いた。そこに倒れているのは、『紅の鉄騎』、『鉄槌の騎士』と謳われる魔導師。

「ヴィータ！？」

一目見てわかった。マズい、と。ユーノはヴィータに駆け寄ると、その体を抱き起こす。息はしている、意識もある。どうやら、気を失っているだけらしい。

ユーノはすぐさま治癒のための結界を展開。そうしてから、周囲を見回す。

（広い空間だ……だけど、それ以外に特徴がない。壁の装飾も、他の場所とそう変わらないし……）

文字通り、何もない空間。ただ広いだけの場所。

――違和感。

何もない。それに、痛烈な違和感を感じた。

（ここは、あらゆる意味で完成された場所だと文献には記されていた。なら……ここにも意味がある。意味がない場所なんて存在しない）

完成された場所。それ故に、『意味がない場所は存在しない』という結果が成り立つ。

なんのための場所なのか――そう、考えた時。

「――ふぅん。まさか、最初にここに到達したのがあなたとはね。少し予想外……だけど、考えれば当然か」

声が響いた。同時に、ユーノの視界に一人の少年が現れる。

異様な――少年だった。

「ユーノ・スクライア。管理局が誇る無限書庫司書長。管理する膨大な情報と重要度から、ミッドチルダ書庫統括官――大臣待遇を受けている。遺跡攻略に、これほどの人材もいないか」

血に染まった白衣。乾いた血が赤黒く変色し、より一層生々しさを見せている。ただ、その白衣は右腕の方から先がバッサリと切られており、血に濡れた不可思議な文様がびっしりと刻まれた異様な右腕が見えている。

更に、その表情だ。恍惚とした、焦点の合わない瞳。

「結界魔導師としての能力は、オーバーS。キャハハ♪　これは凄いや。守りにおいては最強ときたか♪」

――狂気。

例えようのない、寒気がするその存在を前に。

ユーノは、言いようのない感覚に囚われた。

これは、そうだ。

「ん、ん、んー……予測からは外れたけど、前哨戦としては申し分なし。準備運動には、贅沢この上ない感じだけれど」

――恐怖。

「ああ、そうそう。勘違いしないでね？　そこの騎士さんは、ボクがやったんじゃないよ？　ただねぇ、動力炉を潰されると困るから、ここに移動してもらったんだよん♪　凄いでしょ、ここ？　ここはね、戦場だった場所なんだよね。初代『剣聖』と『覇王』――文字通り、次元を揺るがす二人の戦いに耐えるためにここは創られた。故にここは終着点だ。さっき少しばかり内部をいじってねぇ。――動力炉を潰したければ、ボクを倒さなくちゃいけないようにしたんだ」

少年――グリス・エリカランが笑う。

楽しそうに。

愉快そうに。

――卑しく、笑う。

「世界を救うんでしょ？　だったら、ボクを倒せばいい。単純だ。わかりやすい」

風が、吹いた。

グリスが纏う魔力。大きなものではあるが、強大というわけではないそれ。

ユーノならば、抗うには十分な圧力。だというのに。

「さあ、キミが最初のチャレンジャーだ。――Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」

冗談めかした言葉と共に、冗談ではない殺気をグリスは叩き付けてくる。

ユーノは、一度大きく深呼吸をする。

――第一ラウンド、開幕。

◇　◇　◇

収束砲同士の激突。それが生み出す衝撃波は、想像を絶するほど強力なものだ。玉座の間の外壁は吹き飛び、瓦礫という名の質量の暴力が撒き散らされる。

「――――ッ！！」

その暴風の中、ホムラ・イルハートは冷静に自分の状態を確認した。
彼が放った『ムーンライトブレイカー』と、高町なのはが放った『スターライトブレイカー』。この二つは全く同種の魔法だ。故にぶつかり合った時は、その技量の勝負となる。

結果は――互角。

ただし、相殺しきれるような規模ではない。ホムラ自身、何割かは被弾した。無論、高町なのはもだが。

「――次の一撃や。次の一撃を」

魔力ダメージと、魔力の全力放出のせいで体が重い。しかし、それは相手とて同じはずだ。
ならば――次の全力を先に叩き込んだ方が勝つ！

「レイジングハート」
《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

聞こえてきた声。思わず、ホムラは身を竦ませる。
濛々と立ち込める煙の中。見上げた空に、そいつがいた。

不屈の魂を持つ英雄――エース・オブ・エースが。

《ブラスターモード、リミッター解除。残存カートリッジ全魔力解放》
「星よ――――――！！」

煌めき。天を見上げたホムラの瞳に映るのは、数多の星の瞬き。
そう。
まるで、天の川のような――
「……なんと、まぁ」
ホムラは、呟く。星の光は一色ではない。高町なのはの桜色の他に、
銀色の光が混じっている。
それは、ホムラの光。
高町なのはは、ホムラ・イルハートの力でさえ、そのまま従えた。
「……世の中、広いなぁ……」
呟くホムラ。そこへ、なのはの魔法が降り注ぐ。
「スターダストッ――」
振り上げられるなのはの手。それが、一気に振り下ろされる。
「……わしの負け、かぁ……」
その時浮かべた笑みは、きっと。
とても、清々しいものだった。
「――メモリーズ！！」
――――。
――――――――。

―――――――――――――――。

降り注ぐ無数の星。それは、本来ならばホムラの命を奪うには十分過ぎるほどのものだった。

しかし、高町なのはは管理局の魔導師である。

なればこそ。ホムラは、生き残る。

「甘いなぁ、自分」

呟くように言うホムラ。なのはは、そうですね、と頷いた。

「だけど、私は。高町なのはは、管理局の魔導師ですから」

殺さず制圧する力。魔導。

それがどういう力なのかを、なのは自身、実は理解していた。

しかしそれでも、なのはは魔導を信じる。それが、選んだ道。

「管理局は、絶対的に正しいわけじゃない。それは、私もわかっています。だけど、管理局でなければ守れないものがある。私は、守るもののために戦う存在でありたい。そう在り続けたい」

「……敗者のわしに、語る言葉はありはせん。負けた以上、わしの想いが間違っていたと認識するしかない。ただ、一つだけ。お前にわしから餞別を送るわ」

体を起こし、座り込んだ状態でホムラはなのはを見据える。勝者たるなのはが見下ろし、敗者たるホムラが見上げている構図。

「今まで、わしの教え子でわしに似た奴は一人もおらへんかった。

わしに似んように、わし自身がそこを留意しとった。……せやけど、何の皮肉やろな。わしの考えた魔導、砲撃魔導師――わしを超えてその完成形を見せてくれた奴が、誰よりも似てしまうなんて」

「似てる、ですか。私と、あなたが」

「嫌なんはわかる。わしかて嫌や。同族嫌悪やな。わしもお前も、『こんなの』は自分一人でええと思っとる」

ホムラは苦笑。言葉を続けていく。

「こっちに来たの、いくつや？」

「……九歳の時です」

「わしと変わらんか。なら、そうなったんもわからんでもないな。……自分、勘違いしてへんか。一人で何もかもをやろうとすることはないんやで？」

「……そんなこと、ありません」

なのはは、首を振る。

「私には信じる仲間がいて、大切な友人がいます。一人でなんて」

「それが半分、嘘やな。誤魔化さんでええよ。自分は頼りにしとるんやろうさ。その仲間をな。せやけど、それに甘えたらアカンとも思っとる。――自分、自分以外の仲間が邪魔やと思うとるやろ？」

「――――ッ、そんなことは！」

「激昂すんのは図星の証や。別に責めとるわけやない。天才なんてのは得てしてそういうもんや。ただ、自分は普通の天才とは違った。自分の才能を自分のためじゃなく、他人のために使おうとした。……先輩からの忠告や。力があるからって全てを背負う必要はあらへん。最も辛い想いをするのは自分やないとアカン、誰かが傷つくんやったら自分が手酷く代わりに傷つかなアカン――そんなんは、ただのエゴや」

射抜くような視線。なのはは、違う、と言葉を漏らした。

「私はそんなこと、思ってない」

「すぐに認めろとは言わんよ。そう簡単に認められるようなもんでもない。……自分で気付いとるか？　心を決めとるんか知らんけど、何もかもを振り切ってどこかへ行ってまいそうな目をしとるで、今の自分」

どこへでも。どこまでも。命が果てようとも、高く、遠く。

高町なのはは、時折、そんな目をする。

「わしは負けた。２９年も生きてきて、ようやく自分の限界を理解した。せやけど、自分は？　敗北を経験したことがない無敵の『エース・オブ・エース』は、どこまで突き進む？」

「……限界なら、知っていますよ。一度は墜ちた身ですから」

なのはは言う。雪の日に、自身の限界故に落ちた彼女。限界なら、あそこで知った。

「……なら、ええか。――さあ、行け」

ホムラは、自身の背後を指差す。その先にあるのは、最奥部へと通じる扉。玉座の裏に隠された隠し通路だ。

「振り返るな。敗者は灰に。塵は塵に。止めるんやろう？――世界を救え」

――風が、舞う。

空へと上がる高町なのは。彼女はそのまま、振り返らずに進んでい

く。
そして。
ホムラ・イルハートは――……
「……無様な姿やなぁ、クライム」
「ふむ。キミに名を呼ばれるのは、初めてだね」
「余裕かましとるなぁ、ギリギリのくせに」
「それはお互い様ではないかね？」
現れたのは、一人の男。
――クライム。
この戦いの全てを仕組んだ男であり、ホムラも同志と信じた男。
右腕を失くしたその男を見、ホムラは笑う。
「だから言うたのになぁ。ろくなもんやないって。……グリスか？」
「謀反を起こしたのは彼だが……この右腕は違う。新しい時代の波に、攫われた」
「そいつは重畳。……もう限界やろ？　わしが送ったる」
立ち上がり、ホムラがデバイスを構える。クライムは、笑った。
「頼もうか。……最後の最後に裏切られ、同志と信じた男に送られるならそれもまた、一興だ」
「やろうな。――わしらの負けや、クライム。どうやらこの世界、まだまだ捨てたもんやないらしいで」
「そのようだ。……そこに私たちの居場所がないことが、少々心残りだが」
「同感やけど……まあ、ええんちゃうか？　この世界がまだ、価値

あるものと知れて良かったわ」

そして、ここに幕は下りる。

物語は奏者を変え、混迷へと堕ちていく。

「ほなな。地獄で会おうや」

「――先に地獄で待っていよう」

◇　◇　◇

高町なのはは、駆けていた。もう時間がない。急いで中枢を破壊しなければ、世界が滅びる。

辿り着くまでに、そこまで時間は必要にならなかった。最奥部。広大な空間に、なのはは飛び出す。

――そして。

「――――」

目にした光景に、彼女は言葉を失った。

そこにいたのは、ユーノ・スクライア。

彼女にとって誰よりも大切な人が、重傷を負い、首を掴まれて宙吊にされていた。

「おっ、ようやく本命が来たみたいだねぇ♪」

少年が笑う。ユーノは投げ捨てられ、床に無様に転がった。すぐさ

ま助けに行きたかったが、できない。
――動けない。
魔法で縛られているわけではない。ただ、高町なのはの戦士としての本能が、警鐘を鳴らしていた。

「さあて、それじゃあ戦おうか。運命……キミはよく、それを覆してきたと言われるけど。本当にそうなのかな？　本当にそうなら、証明してよ」

血に濡れた体で、少年が壮絶に笑う。

そこにいたのは、狂気の具現。
無限の欲望の継承者。

――グリス・エリカラン。

第三十七話　想いの残滓（後書き）

とりあえずようやくここまで持って来れました。敵は全滅、残るはたった一人の狂人のみ。
……ファイムとテンリュウとはやては次回活躍、乞うご期待です！

随分お待たせしましたすみません。その代わりと言っては何ですが、結構なボリュームになっているのではないかと思います。
とりあえず、今回はホムラですね。彼は『耐え切れなかった人』です。どうにもならない中で必死に許せないことに抗おうとした姿が、ホムラです。……後は、偽カグラ。彼の役目は『次世代の英雄たちへのバトンタッチ』でした。原作でもあるように、なのはさんは結構限界が来ている、という描写が多いです。なので、スバルたちをそこ――英雄へ引き上げるという意図がありました。

そして、ホムラとなのはの対話ですが。あれは、原作を見た私の中で抱いた違和感が形になったものです。『ＳｔＳ』のなのはさんは、どうにも歪です。正しいのですが、それは人としてどうなのか、と思える部分が多かった気がします。ブラスターなんてその最たる例です。自己犠牲の歪さ。この作品でもファイムを通して何度も描写しましたが、彼女にこそ自己犠牲の歪さに気付いて欲しいです。

そして、ようやくです。ようやく次回からファイムが復活です。次回のお話は、この作品において一番書きたかった部分の一つです。楽しんでもらえるよう、精いっぱい頑張りますので、よろしくお願いします。

感想はいつでもお待ちしております。あと次回を合わせてエピローグ込みで三話です。支えてくださった皆様の声、良ければお聞かせください。メッセージでも構いません。

では、よろしければ最後までお付き合いいただけると幸いです。

ありがとうございました。

そして、次回。第三十八話。

「選んだ未来」

第三十八話　選んだ未来（前書き）

夢の深淵。幻想の奥。
その果てで、私は見ていた。

ずっと。
ずっと。
ずっと。

訪れたかもしれなかった未来。
その最中で、笑っているその人を。

私は必要ないのだろう。
あの人は、笑っている。

私のみの内に封じたものが、蘇らないことを祈る。
この力を使えば、あの人は終わってしまう。

だから、私は孤独でいよう。
あの人の歩んだ道を、否定させたくないから。
他ならぬ、あの人の手で。

マスター。
あなたは、私の誇りです。

第三十八話　選んだ未来

「もう、どないしたん？」

隣を歩く女性――八神はやてが、頬を膨らませながらそんなことを言う。ファイムは、いえ、と首を振った。

「少し、ボーっとしていて」

「もう、久し振りのにデートなんやで？　上の空とかやめてーな」

言いつつ、はやてが腕を絡ませてくる。ファイムは苦笑した。

「すみません、はやてさん。そうですね……随分と、久し振りですね」

久し振り。そうだ。ずっと忙しかったのだ。それもようやく一段落が着き、こうしてはやてと共に歩いている。

「うん。お互い、ずっと忙しかったもんなぁ……」

「あの戦いもようやく片付きましたしね」

ふと漏れたファイムの言葉。はやてが首を傾げる。

「あの戦い……って？　戦い、なんて呼べるほど大きい事件はＪＳ事件以来起こってへんやろ？」

「えっ、あれ……？」

ファイムは左手で頭に触れる。なんだろう。とても、とても大事なことがあったはずなのに。

戦い――その言葉が、妙に引っかかる。

「……何だろう、これ」

「……ファイムくん、まだ疲れてるみたいやね。んー……ほな、元気が出るおまじない、してあげる」

はやてが悪戯っぽく微笑む。それからは、一瞬だった。

――唇に、柔らかい感触。

驚き、目を見開いた先で。はやてが、笑っていた。

「どうや？　元気、出た？」

「……はやてさんには、敵いませんね」

ファイムは苦笑。本当に、この人は。

――どうしようもないくらい、愛しさを募らせてくれる。

はやては、ファイムの前に歩み出ると、楽しそうに微笑んだ。

「だって、幸せやもん」

本当に、幸せそうに。

思わず見惚れてしまうくらいに、美しく。

「世界はまだ、昏い部分も多くて。わたしたちがやらなアカンことはたくさんあるけど……それでも、わたしは幸せやから」

はやてが、ゆっくりと、確かめるように歩いてくる。

「シグナムも、ヴィータも、シャマルも、ザフィーラも、リィンもみんな元気で。なのはちゃんやフェイトちゃんたちも元気で。――ファイムくんと、こうして想いを通じ合わせることができて」

はやての手が、ファイムの胸に優しく触れる。……その手は、震えていた。

「本当に、本当に良かったよ。右腕も治って、こうして、一緒にいられて」

顔を伏せ、震える声ではやてはそう言った。ファイムは震える体で右腕を持ち上げ、そして、驚愕する。

――治っている。

重い機械の腕――戦闘機人の腕ではなく。血の通った、暖かい腕に。腕だけではない。右足もだ。この感覚は、そう、久しく忘れていた生身の感触。

いや――そうだ。そうだった。

治った、じゃない。治してもらったのだ。

ロストロギア……名前を思い出せないが、はやてが必死になって探し出してくれたそれによって、体を取り戻したのだ。

自分は。

生きて、いるのだ。

生きて――いられる。

「ありがとう、はやてさん」

震える両手で、はやてを抱き締める。この人のおかげで、前を向けた。そして、生きていられる。
どれほど感謝しても、し足りない。

「本当に、ありがとう」

はやてが、ゆっくりと手を回してくれる。

「お礼を言うのは、違うよ。わたしは、わたしがそうしたいから。あなたに生きていて欲しいから、こうしてるんや。一緒に生きていきたい。命ある限り、ずっと、ずっと。――生きていって、くれますか？」

はやての問いかけ。ファイムは、当然ですよ、と声を絞り出した。

「僕は、ずっと一人で生きてきた。ずっと、そうして生きていくんだろうと思ってた。大人になった姿なんて想像もできなくて。ずっとずっと戦い続けたその先に、ボロ雑巾のようになって死ぬんだって。――だけど」

目を閉じれば、浮かぶものがある。
最愛の人と、笑いながら歩く自分の姿。

そんなものを想像できるなんて、思ってもいなかった。

「あなたとなら。あなたと共になら、生きていける。生きていきたい」

それだけでいい。もう、たった――それだけで。

生きていくことができると、知ったから。

「――愛しています。あなたを」

誓うように。
謡うように。

そう――告げた。

嗚呼、と思う。
こんなにも。これほどまでに。

世界は――美しい。

◇　◇　◇

はやてと共にしばらく歩いて辿り着いたのは、一軒の大きな家屋だった。非常に綺麗な建物で、新築だということが一目でわかる。

「……完成してたんですね」

「うん。ファイムくんが腕と足と目を治してる間にな。――今日は、開店前にお祝いや」

嬉しそうにはやてが言い、ファイムの手を引いて中に入る。そうしてから目に飛び込んできた光景に、ファイムは驚きを覚えた。

「えーと……一言で言います」

「うん？」

はやてが楽しそうに首を傾げる。ファイムは、大きく息を吸い込み、ゆっくりと言葉を吐き出した。

「皆さん、仕事は？」

そこにいたのは、管理局を支える歴戦の魔導師たち。

高町なのはにフェイト・T・ハラオウン。なのはの娘であるヴィヴィオや、ヴォルケンリッター。元機動六課のストライカーたち。リユーイとミリアムもいるし、ナカジマ一家に加えて聖王教会所属のセイン、オットー、ディード。ヴィヴィオの学友であるリオにコロナ。覇王の血を引くアインハルトもいる上、八神家の弟子であるミウラの姿も見られる。

更にファイムが驚いたのは、ユーノ・スクライアの姿があることだ。多忙な彼がここにいることには驚きを禁じ得ない。他にもクロノ・ハラオウン提督の妻であるエイミィや、その子供。アルフもいる。

よくよく見れば、機動六課時代のメンバーのほとんどが集結していた。

そして。

「あー、仕事ならクロすけに押し付けた」

ガチャガチャと音を響かせながらビンケースを運んでいる男……カグラ・ランバード。彼はこのメンバーの中で民間協力者でありながら大臣待遇を受けるユーノを除けば一番高い階級の人間だ。多忙なはずだが……。

「クロノの野郎はキレてたけどな。知るかっつーの。俺の結婚十周年の祝いも兼ねてんだ。ま、たまにはな」

ケースを床に置きながら、楽しそうに笑うカグラ。そこへ、鈴を転がしたような声が響いた。

「――たまにはって、カグラくんはいつもクロノさんに仕事押し付けてるじゃない」

現れたのは、一人の女性。随分と若い。
ただ、ファイムにはその女性の名が一瞬でわかった。

――トモエ・ランバード。

「トモエさん、すみませんありがとうございます」
「いいんですよ、なのはさん。好きでやってることですし」
「ごめんねー、トモエちゃん。任せちゃってさ」
「エイミィさんは、お子さんの相手をしなければなりませんしね」

微笑むトモエ。その雰囲気はどこまでも柔和で、優しさに満ちている。

「まー、いいじゃねぇか。――俺たちもようやく、親になるんだからよ」

優しくトモエの頭を撫で、カグラが言う。作業をしていた全員が、驚いてこちらを振り返った。
そして、代表するようにゲンヤ・ナカジマが言葉を紡ぐ。

「そうか……ようやくか。おめぇさんたちも、親になるんだな」
「おう。おやっさん、アドバイス頼むぜ」
「はい。……十年。ようやく授かった子宝です」

自身のお腹に優しく手を当て、トモエは微笑む。ゲンヤは、そうかい、と頷いた。

「子を育てるってのは、並大抵のことじゃねぇやな。……おめぇさんたちに、覚悟はあるか？」

「今更だぜ、おやっさん。覚悟なんてのは、ずっと前から決めてるよ」

「私一人ならば、きっと絶対という言葉は紡げませんでした。けれど、私の隣にはカグラくんがいます。彼と一緒なら……この子と合わせて三人なら、私たちは大丈夫です」

強い瞳。その瞳はすでに、『母』としての強さを宿していた。若き身なれど。彼女もまた、一人の母。

ゲンヤは、そうか、と呟き、微笑む。

「なら、俺に言えることはねぇやな。……困ったら、いつでも頼りな。さあ、祝いだ」

ボトルを取り出し、その蓋を開けながら、ゲンヤは言う。

カグラも頷き、声を張り上げた。

「さあ、好きなだけ飲むぞ。喫茶『翠屋』開店記念、俺とトモエの結婚十周年、ファイムの全快祝い――そして、俺たちの出産前祝いだ！！」

全員がグラスを掲げ、唱和する。

「「「「「乾杯ッ！！」」」」」

その、幸福だけに満たされた空間で。
ファイムもまた、笑っていた。

三年前、模擬戦の後に行われた酒宴の最中、彼は立ち去った。
――居場所などない。
そう、呟いて。

けれど。今の彼は笑っている。
幸福に満ちた顔で。

それが、真実。
それだけが――真実だった。

◇　◇　◇

喫茶『翠屋』――管理局が誇る『エース・オブ・エース』、高町なのはの故郷である第97管理外世界『地球』に存在するその店をクラナガンに出店すると決まったのは、つい最近だった。
元々、高町なのはは文字通り飛べなくなるまで空で戦い続けるつもりだった。彼女の主治医でもある八神シャマルがどれだけ止めても、その意志を曲げる気はなかった。
しかし、彼女には世界を守るよりも大切なものができた。

最愛の娘――高町ヴィヴィオだ。

血の繋がらない親子。しかし、どんな家族よりも確かな絆を持つ二人。なのはは、せめて娘が一人前になるまでは側にいようと、今は

危険な任務から退いている。それは同時に、数多の傷を負ってきた不屈のエースにとってひと時の休息となっていた。
そして、もう一人。高町なのはとは別に、その傷ついた翼を休める者がいる。

「……よう、ファイム。どうした、ベランダになんか出て？」
「少し、酔いを醒まそうかと思いまして」

一人佇んでいたところへ、カグラが声をかけてきた。ファイムは微笑み、水の入ったグラスを軽く持ち上げる。カグラは、成程、と言葉を紡いだ。

「三年前みたいに……『居場所がない』なんて言わねぇんだな」
「言いませんよ。――あの時と今とじゃ、随分と違いますから」

振り返り、ファイムは室内を見る。そこでは、リューイとスバルが大食い対決を繰り広げ、周囲の人間が囃し立てている様子が見て取れる。
ほんの、日常の一コマ。それが、何より美しく見える。

「昔は、僕なんかがこんな気持ちになれるなんて思いませんでした。――生きたい、生きていきたい、なんて」
「……なんか、なんて卑下する必要はねぇよ。お前はよくやってきた。ボロボロになるまで突っ走って、傷だらけになっても歯ぁ食い縛って耐えて。血を流しても、涙の一つも零さないで」

ファイムの隣へと歩み寄りながら、カグラが言う。

「お前は、よくやってるよ。いや、やってきた。二十歳にも届かないようなガキが、たった一人で地獄を歩いてきたんだ。お前は本当

に、よくやってる」
「――それでも、救えなかったものがたくさんあるんです。本当に、どうしてなんでしょうね？」
星空。都会の光のせいであまり見えないそれを見上げながら、ファイムは呟く。
「どうしてこんなにも、世界はままならないんだろう――？」
生きたい。生きていきたい。そう思うのだが、しかし、それは許されない。
強引に進み続けてきた。そのせいで傷ついた体には、最早時間が残されていない。
いつだって、そうだ。
いつだって、気付くのがこんなにも遅い。
水を飲み干すファイム。そのファイムに、カグラが問いかけた。
「……ファイム。お前、奇跡って信じるか？」
「……いきなり何を？」
ファイムは首を傾げる。カグラは言葉を続けた。
「奇跡ってのは、人にとっては救いでな。あれは信仰のきっかけとして起こるもんだ。お前は神様なんて信じちゃいねぇだろう？」
「いたとしても、関係ありませんから」
カグラに視線を向けず、ファイムは答える。神様がいたとしても、その祝福は自分には向けられない。

「神様に愛されるほど、清廉潔白な人生を歩んできた記憶はありません」

殺してきたし、奪ってきた。誰かを救うために、誰かを踏み躙ってきた。

全てを救うことなど、できやしなかったから。

そんな力、持っていなかったから。

しかし、カグラは、ゆっくりとその言葉を紡いだ。

まるで、神様の使いのように。

「――そうでもない。ファイム。奇跡はな、誰にでも一度は起こる」

「どんな、奇跡が？」

「生きていい。それだけだ」

言って、カグラは記録用のデバイスを取り出した。データ保存のためだけのその装置をファイムに投げ渡し、カグラは言った。

「お前が守ってきた世界は、今、目の前にある。あの世界でなら、生きていい」

目の前に広がる世界。

大切な人たちが笑い合う、温かい世界。

「俺が許してやるよ。いや、俺だけじゃねぇ。世界が許す。お前はこの世界でなら、生きていい」

「……」

「リハビリやら治療やら、それなりに大変だろうが。――生きていけるぞ、今のお前は。そろそろ、幸せになってもいいんじゃねぇか

？」

カグラが、そう言い残して立ち去っていく。ファイムは、苦笑した。

「……奇跡、か」

たった一度の、優しくて、残酷な奇跡。
この世界で、僕は、生きていける。

生きていけるかも、しれないのだ。

◇　◇　◇

深夜。騒ぎ過ぎて疲れてしまった面々。ファイムは、一人で月を見上げていた。
草木も眠る時の中、静かな音が世界を包む。

「……眠らないのか？」

不意に、その背中に声がかけられた。振り返ると、目に映ったのはシグナムの姿。ファイムは、少し、と言葉を紡ぐ。

「眠れないんです」
「そうか。……隣に座っても構わんか？」
「ええ。どうぞ一献」

ファイムは微笑み、シグナムにお猪口に注いだ日本酒を渡す。シグナムはそれを受け取ると、一息で飲み干す。

沈黙。心地良ささえ感じるそれがしばらく流れた後、シグナムが言葉を紡いだ。

「ラフウェイ。ランバード殿から聞いたが……お前は、本当に管理局から去る気か？」

「――流石に、限界ですから」

苦笑を漏らす。そう、ファイムは管理局から去るつもりだった。そう、決めた。

生きられると、知ったから。

「僕の命は、戦力のあてになるほどに残っていません。僕が戦えていた理由は、そこだけですから」

「残酷な話だな。限界、ということか？」

「いえ……限界が延びたからこそ、ですね。本当は、戦場で死ぬつもりだったんです。孤独に、刃に抱かれて死んでいくものだと。そうしなければならないと」

「自己陶酔だな。そんなもので救われる者などいない」

「それでも、それが僕のけじめというか。最後の贖罪だと思っていたんです。多くの人を殺してきました。多くの命を踏み躙ってきました。救った分だけ、壊してきました。それしか知らなかったから」

ファイムは、一口、日本酒を口に運ぶ。舌が痺れるような辛さが、口の中に広がった。

そうしてから、夜空を見上げ、呟くように言う。

「僕の始まりは、善意でも悪意でもないんです。ただの渇望。殺すことでしか生きられなかったから。生きていくために殺してきた。だから、僕は」

お猪口を床に置き、ファイムは言う。
そうしてから、ゆっくりと、その言葉を紡いだ。

「――僕は。ファイム・ララウェイは、どうしようもないほどに間違いました。善意も悪意もなかった世界で。ただ純粋な渇望しかなかった世界で、悪意を許容しました。僕は弱かったから。善意で悪意を打倒できるほどの力なんて望めなかった。

そのために命を捧げてきました。天秤を傾けないよう、殺意には殺意を返し続けてきました。絶対に誰かが傷つくと、泣かせると、そうわかっていてもそれを選びました。

後悔はしました。絶望もしました。だけど、立ち止まることだけはできませんでした。立ち止まった時は、悪意の刃に抱かれて死ぬ時。悪意を以て誰かを救おうとした僕は、そのために犠牲にした誰かの悪意でしか死んではならなかったんです。

だけど、僕の悪意から生まれたものは、やっぱり悪意だ。そこに終わりはないんです。誰かを救うために誰かを踏み躙ってきた。正義のために、誰かのささやかな願いさえ握り潰してきました。だからもう、僕は僕自身の幸せを願うことは許されない」

ずっとそう思ってきたし、それはこれからも変わらない。
行き着くところは、いつだって、自分の幸福を否定するという極致。
だけど、それでも、生きたいと思ってしまう。

何という、
浅ましき矛盾――……

「……難儀な話だな。お前が幸せになることに、誰も異議を唱えはせんだろう。むしろ、祝福さえしてくれるはずだ」
「許せないのは僕自身ですよ。僕は生きたいとは言いますが、幸せになりたいとは言いません。言えるはずがない。そんなこと、僕自

身が許しはしない」

「身勝手だな。自分を誤魔化すことぐらい、容易いだろうに」

「容易いですよ。だから、はやてさんの言葉を受け入れました。あの人が許すと言ってくれたから、僕はこうして生きようと思ってる。けれど、そんな自分自身を許せない僕がいるんです。僕の悪意が、僕の幸せを許容しない。世界と正義のために、僕は悪意を以てでも立ち塞がるものを悉く叩き潰すと決めてきました」

「その悪意で救えたものがあるのなら、それはそれで一つの正義だろう？」

「そうかもしれませんし、世間はそう定義してくれています。けれど、さっきも言ったように悪意からは悪意しか紡げない。たとえ、ボクが幸せを願っても、いつか僕は決定的に間違える。はやてさんを巻き込んで、世界を巻き込んで、徹底的な悪意で僕は僕自身を殺す。

だから――シグナムさん。お願いがあるんです」

ファイムは、真剣な瞳でシグナムを見据える。

「僕は、あの人の幸せだけを願います。それこそが僕の幸福です。八神はやてが笑っていてくれること。それだけが僕の幸福の定義です。けれど、僕は僕の幸福を許容できない。だから、僕が決定的に間違った時、僕を止めてくれませんか？　誰よりも大切なあの人に悪意を向けた時、僕を止めてはもらえませんか？」

「……何故、それを私に頼む。ランバード殿やリューイ。ソラもいるだろう？　言いたくはないが、私は加減というものを知らん。それも悪意が主はやてに向けられるというのなら尚更だ。そんな私に止めろというのは、まるで」

「――いいんですよ、それで。シグナムさんなら、悪意でも善意でもない愛情で僕を止めてくれる。はやてさんを想うあなたの気持ちで、僕を殺してくれる。それなら、悪意は続かない」

「……お為ごかしは無駄のようだ」
「そういう、さっぱりしたところ、好きですよ」
「ふん。お前はどうしようもないほどに愚かだな。そもそも、私が断った時はどうするつもりだった？」
「その時はその時です。それに、僕がそうなることをこうして事前に話しておけば、結局あなたは僕を殺してくれるでしょう？」
「……本当に、いっそ憎らしいほどに賢しいな。貴様は」
深々とため息を吐き、シグナムは言う。ファイムは微笑んだ。
「褒め言葉として受け取っておきます」
「……主はやてをどうするつもりだ、貴様は？」
「言ったはずですよ。僕の願いはあの人の幸福。それが為された時に不安がありますが、それはあの人の不安ではなく僕の不安。大切な人です。本当に、誰よりも」
「……いいだろう」
ファイムの言葉の本気を感じ取り、シグナムは言う。
「お前が自らの幸福を許容できず、主はやてに――世界に悪意を向けた時、我が刃は一切の躊躇も迷いもなくお前の首を貫い受ける。その一撃によってお前の悪意を粉砕すると約束しよう。
我が名、烈火の将シグナムの名において誓う。
悪意に対し、善意ではなく。
悪意に対し、悪意でもなく。
お前が望む、私のうちに宿る主はやての幸福を願う愛情を以て、貴様を斬ろう」
「――ありがとうございます」
盃を渡す。シグナムはそれを受け取ると、続いてファイムの杯にも

酒を注いだ。

「ただし、代わりに誓え。私はお前の願いを聞き入れる。代わりに、お前もまた、私に誓え。

お前はお前のまま歩み続けろ。主はやてのためだけに生き続けろ。善意だろうと悪意だろうと一向に構わん。お前の全ては無駄ではなく、歩んできた道もまた、無駄ではない。我らヴォルケンリッター、主を想う忠節の騎士。お前は我らに肩を並べると私は定義する。応えてみせろ。主はやての幸福だけを願い、生き抜いてみろ。

――見届けてやる。お前の生き様と死に様を」

「はい」

ファイムは頷く。一切の迷いもない返答だった。

死さえも許容した青年。だからこそ、ファイムはここまで来てしまった。

――二人は盃を合わせ、一気に飲み干す。

そして――シグナムが、大きくため息を吐いた。

「全く……誓い一つでここまで気が重くなるとは。私も老いたな」

「僕も、シグナムさんを巻き込んだことを少し後悔してるんですよ？　こんなことを背負わせて、って」

「馬鹿者。お前はお前の心配と、主はやての心配をすればいい」

そして、シグナムが立ち上がり。

ファイムは、目を閉じた。

◇　◇　◇

幸福の定義。それが、僕にはわからない。
そう、告げた時。その人は、こう言った。

「笑ってたら、幸せやよ。心の底から、大切な人と一緒に」

そうなんだろう。幸福とは。
こんなにも近くに。無造作に。
手を伸ばせば届くところに、それはある。

「たった一つの冴えたやり方を目指して、人は進んでいく。けれど、いつもそう上手くはいかへん。だから、わたしたちは探し続けるんや。幸福を探して、一歩ずつ」

強い人だ。本当に。
愛する相手に選んだことを、誇りに思う。

「なぁ、ファイムくん。――今、幸せ？」

陽だまりの中、その人が、優しく問いかけてくる。
――既視感。
見たことのある光景だ。

そう、何度も見てきた。
夢の最中で。願いの果てで。

幻想の――終着点に。

「うん。幸せだよ」

隣に、この人がいて。
守るために、戦って。

嗚呼。本当に。
美しい。
輝いている。

世界はこんなにも、美しい――……

「ありがとう」

大切な人の、頬に触れる。掌に感じる温かさ。

「あなたのおかげで、僕は。はじめて、幸せって言葉の意味を知ることができた。生きることができた」

嗚呼。そうだ。
これは、僕が望んだもの。

「僕が何を守りたいのか。何を為すべきなのか。今はもう、はっきりとわかる。だから、もう、大丈夫」

「……ファイム、くん？」

「あなたは幻想だけれど。それでも、僕が愛する大切な人に変わりはない。こんな言葉に意味はないかもしれないけれど。それでも、伝えたいんだ。――幸せに、なってください」

もう、十分だ。
夢から、醒める時が来た。

心地良い夢は、もう、終わりにしよう。

「さあ、行こう。――リンネ」

僕の戦場は、残酷な現実だから。

「――残酷な未来へ」

世界が砕ける。
砕けていく。
砕けていく。
砕けていく。
そして――……

「この世界は、現実です」

「……そうだね。この世界は、あり得た可能性のあった世界。数多の奇跡が起こり、『ファイム・ララウェイが誰から見ても幸せになった世界』だ。それは僕の居場所じゃない。あそこには、僕じゃない僕がいる」

壊れた世界。
乞われた世界。

現れたのは、たった二人だけの世界。

「後悔、しますよ。マスターは、この世界で幸福に生きられたのに」

「その代わり、キミは一人ぼっちだ。――リンネ」

視線の先にいるのは、一人の女性。金色の髪を纏う、泣きじゃくる美しい女性。

――リンネクロウズ。ファイムのデバイスが、人の姿を模したもの。

ここはファイムの世界。彼が思い描く彼女の姿が、具現となる。

深い、底なしの闇。それこそが、ファイムの――……

「キミは、ファイム・ララウェイの戦いの象徴だ。管理局に入る前から共にあった、戦うために手にした力だ。だからこそ、キミはあの世界にいられなかった」

「……私がいれば、マスターは戦いから逃れられません。だから、私は」

「うん。そうだね。だけど、それでいいんだ。キミと一緒に歩いてきた道が、僕の道。それ以外の可能性は、僕にとってただの物語。空想の果てにあるもの。僕の現実は、ここにしかない」

だから、と、手を差し出す。

「行こう。リンネ。僕たちの未来へ」

「……マスターは、馬鹿です」

涙を拭いながら、リンネは言う。

「アホです。間抜けです。どうしようもないくらいに、不器用です」

「……うん」

「けれど――」

リンネが、ファイムの手を掴む。

「――それでこそ、我が主」

二人が光に包まれる。その最中、ファイムが言葉を紡いだ。

「ごめんね。こんなマスターで。……最後まで、付き合ってくれる？」

「あなたと私は一心同体。あなたが望むのならば、地獄の底でもお供しましょう」

そうして、二人は旅立つ。

戦場へ。

――最後の、戦いへと。

◇　◇　◇

巨大な閃光が、視界を覆った。肌を刺す、冷たい気配。漂う血の匂い。

――そうだ。ここが、戦場だ。

「……ファイムくん？」

不意に、はやてが言葉を紡いだ。ファイムは、微笑む。

「ただいま、はやてさん」

そして青年は、敵である女性に視線を向けた。そこに佇む最強の存在は、鋭い殺気を纏いながらこちらを睨んでいる。

「……『夢幻抱擁』から帰還しましたか。あの場所は完全なる場所。囚われた者の幸福の具現が再現されます。あなたは、幸福の全てを否定したのですか？」

テンリュウ・シンドウ。思えば、幾度となくぶつかり合い、幾度となく負けた相手。
きっと、これが最後の戦い。

「幸福を否定し、未来も否定されたこの場所へ帰ってきたあなたに何が残るのです？　望める未来など知れています。あなたに待つのは残酷な終焉のみ。何故、戻ってきたのです？」
「……確かにあの場所は心地良い。僕だけじゃなくて、みんなも幸福だった」

トモエが生きていたように。きっと、誰もが幸福な世界なのだ。
けれど、違う。それは、違う。

「後悔も絶望もしてきた。だけど、僕はここにいる。僕はここまで歩いてきた。僕の歩んできた道を、否定はさせない」

それだけは。
その道を歩んできたことだけは。

たったそれだけが、誇りだから。

「それで？　どうするというのです？　あなたでは私には勝てない。それはもう、論ずるに値するほどのことですらないはずですが」
「……それでも、戦う。守りたい人がいるんだ。幸せになってもらいたい人がいるんだ。諦められない。諦めてたまるか。僕の未来は

望めなくても、大切な人未来を諦めるわけにはいかない」

ファイムが魔力を纏う。風が吹き、背中には堕天の翼が宿る。

「僕の世界は、はやてさんが笑っている世界だ。その世界のために戦う。それだけでいい。それだけで、僕は。僕は――――ッ！！」

吠えるファイム。テンリュウが、ゆっくりと口を開いた。

「……その覚悟、心に強く抱きなさい。そして、祈るのです。強く、強く。決して折れぬように。そして」

テンリュウの姿が、消える。

「――その想いを抱いたまま、散りなさい」

激突。凄まじい衝撃がファイムを襲う。壁に叩き付けられ、あまりの衝撃に壁が陥没する。呻き声さえ上げられない。意識が飛ぶのを必死で堪える。

（耐えろ……耐えろ耐えろ耐えろ！！）

カートリッジをロード。陥没した壁を蹴り飛ばし、テンリュウに向かって拳を突き出す。だが、簡単に避けられ、同時にカウンターを合わせられる。

蹴りが腹部に減り込み、骨が軋む。それでも、歯を食い縛ってその場にとどまる。

――止まるな。前を見ろ。

瞳を閉じず、前を見続けろ。

「夢魔龍閃」

血飛沫。大きく左腕が切り裂かれる。

停止は死。退こう進もうが、そこは必死の戦場。

ならば、進め。歩を前へ。

「……まだ、向かってきますか」

諦観が人を殺す。そうだ。ずっとそれだけを抱いてきたではないか。

諦めない。それだけを。ただ、それだけを。

「ファイムくん！！」

叫び声。駄目だ。泣かせてる。それではダメなのだ。

前へ。前へ。

骨が折れた。――知るものか。

右の拳はまだ握れる。ナイトメア――杖は、半ば以上感覚を失った左腕で、まだ持っている。

「――遅い」

見えない。少しも。傷が多過ぎて、痛みさえ感じない。

けれど。それでも。

諦めを踏破しろ。ただただ、前へと進め。

勝機は一瞬。その一瞬に全てを懸けろ。

「――――」

交錯するように振り下ろされる、桜花と血桜。当たれば必死は免れない一撃。だが、ここだ。

ここを――！

「――――ッ！？」

交錯する一瞬、杖を盾にする。一瞬で断ち切られたが、その一瞬で構わない。

左腕を肩から持っていかれた。上等だ。代わりに懐へ踏み込めた。

そして。

全力の踏み込みと共に、右の拳が振るわれる。

「一点突破ッ！！」

拳が直撃。障壁で阻まれた。だが、強引に指を差し込む。機械の腕が軋み、悲鳴を上げる。

「バーストストームッ！！」

全力の砲撃。入った。そう、直撃だ。

――轟音。凄まじい衝撃波が周囲に撒き散らされる。ファイムは、奪われた左腕の部分を押さえ、膝をついた。

全力の攻防。だが、一撃が届いた。拳が届いた。

ならば――戦える。まだ、戦える。

「ファイムくんッ！？」

慟哭のような声。大丈夫。紡ごうとした言葉は、紡げなかった。

「……死ぬ覚悟は？」

突き刺すような殺気。ファイムは、大きく深呼吸をする。

拳は届いた。ならば、戦える。手が届くのならば、最後の手段に訴える。

膝をつき、文字通り満身創痍なその姿。その姿で、ファイムは。

祈るように、言葉を紡ぐ。

「Ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｏｌｌｏｗｅｄ　ｗａｙ，ａｌｌ　ａｒｅ　ｆａｌｔｓ．（この道は、その全てが過ちだった）」

紡がれた言葉は、詠唱のようであり、違う。

これは、契約の執行。概念となり、世界の一部となった彼が、紡ぐもの。

「Ｍａｌｉｃｅ　ｗａｓ　ｂｒｏｋｅｎｎ　ｂｙ　ｍａｌｉｃｅ　ａｎｄ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ｗａｓ　ｓｅｅｎ　ｔｈｅ　ｅｎｄ．（悪意を以て悪意を砕き、その果てに正義を見る）」

テンリュウが表情を変えた。彼女にはわかるのだ。この詠唱の意味が。

彼女が有する世界とはまた違う、ファイム・ララウェイという概念の『世界』が具現する。

「I do not accept my happiness. Therefore, I fall to hell.（私は私の幸福を認めない。故に、私は地獄へ堕ちる）」

はやては、その言葉の意味を聞いて表情を硬くする。

これは、そう。まるで、罪人の懺悔。

罪を告白し、死のうとする者のそれだから。

「If allowed once again, the miracle of following the right way.（もしも許されるならば、もう一度。歩みを正す、奇跡を）」

未来を捧げて戦ってきた。その果てにここへ来た。

しかし、それでは届かない。ならばそれでいい。

「I deny me. This is my last arrival point, offering the future, the past once again.（私は私を否定する。ここが私の終焉。未来を、過去を、もう一度）」

世界と契約したあの日。ファイム・ララウェイが捧げたもの。

それは――自分自身。

彼は、自分自身という『世界』を定義し、捧げ、呑み込んだ。

そうして紡がれる究極の奇跡は、たった一度の物語。

歩んできた軌跡をやり直すための道が、提示される。

「――Last tale of lyrical.（最後の叙情詩）」

それは、幻想。
まさしく、物語。

終わりの定められた人生。確固として、その日に終わることがわかっている人生は。
きっと――人生ではなく、物語なのだろう。

ファイムの体が、光に包まれ。
そして、現れた姿にはやてとテンリュウは驚愕する。

「ファイム、くん……？」
「……そう、ですか。自らの人生を呑み込んだのですね」

現れたのは、一人の少年。
齢7といったところか。鋭い目つきを携えたその少年は右腕と右足が機械でできており、右の瞳もまた、戦闘機人の瞳を有している。
身に纏うのは――リンネクロウズ・ナイトメア。

「僕は僕を殺して、あなたを倒す」

歩んできた道全てを捧げ。
傷だらけの最弱が、最強へと挑みかかる。

第三十八話　選んだ未来（後書き）

第三十八話です。遅くなってしまって本当にすみません。

本当は三万文字くらいを予定していたんですが、分けた方がいいという友人のアドバイスを受けまして。とりあえず、ファイムのターン前半戦です。

今回、ファイムくんの壊れ加減がテーマになっています。生きたい、というのと幸せになりたい、というのは彼にとっては別物です。結局のところ、彼を一番赦せていないのが彼自身なのでしょう。

今回、最後の魔法はちょっと実験です。テンリュウの時は演出の関係から詠唱を英語でできませんでしたが（一応あるんです。出せたらいいんですが……）、今回は英語でやってみました。
軽く説明すると、ファイムやテンリュウのように人でなくなった存在にのみ許される魔法は、魔法よりも一つ上の次元の術式です。文字通りの奇跡ですので、その違いを英語詠唱という形で出そうと思い、こうなりました。

ファイムの魔法についての解説は、次回にあるはずです。
楽しんで頂けましたか？
日常編は、長くしようとすればいくらでもできましたが、敢えてカットしました。あれはあくまで幻想ですから。

感想、ご意見など頂けるとありがたいです。
次話は一週間以内には投稿します。そうしてから最終話、エピローグという流れに入ろうかと思っています。

お付き合いくださった皆様、ありがとうございます。
では、次回。第三十九話。
「代価の果てに得たもの」

第三十九話　代価の果てに得たもの

失楽園シャングリラ、最奥部、玉座の間。
そこで――ホムラは、柱に寄りかかって座り込んでいた。

「……兵どもが、夢の跡。気分はどうや、仮初の王？」

ホムラの視線が、玉座へと向く。彼と高町なのはの戦闘によって半壊した玉座には、一人の男が目を閉じて座っていた。
――クライム。
とうとう、ホムラも本名を聞くことのなかった男だ。もっとも、彼はすでに絶命している。ホムラが穿った胸の傷から流れ出ていた血は止まり、赤黒く変色している。

「結局……わしらが間違っとったんかな？」

ホムラは呟く。管理局が正しいとは、今も思わない。しかし、こういう結果が出た以上、自分たちが正しかったことに対しても確信が持てない。
――想いは間違っていなかったと、思う。
だけど――やり方を、どうしようもなく間違えてしまったのだろう。

『叫べばよかったんだ！！』

あの、いけ好かない青年の言葉を思い出す。あの青年には力がなかったが、正しい。
成程、こんなこともあるのか。
勝者でなくても、正しい、ということか。

「くくっ……まだまだ、修行が足らへんなぁ……」

ホムラは呟く。二十年。最前線で戦ってきた。死にかけたことは一度や二度ではない。信じた親友たちと共に、次元世界の危機を救ったことさえある。

しかし――まだまだ、未熟。

それが知れただけでも、僥倖だ。

――轟音。天井が崩れる音が響く。

降り注ぐ瓦礫の山。それはホムラの上ではなく、クライムの上へと落ちていく。

そして。

「……」

かつて、管理局の闇の中心に立ち。

今回、次元世界の存亡をかけた戦いを引き起こした男の体が、押し潰された。

黙祷。数秒、目を閉じた後、ホムラは天井を見上げた。

「さて……名残惜しいけど、わしの生涯もこれにて幕か」

嫌な音を立てる天井。逃げることは難しくない。そこは歩んできた人生の苛烈さが違う。全てを懸けた戦いの中でも、きっちりと余力は残している。

だが――生き延びて、どうしろというのだ。

先程から、ウィルやアリア……そして、エリアに念話を繋ごうとしている。しかし、一切繋がらない。その結果が意味することがわか

らないほどに、愚かではない。
――大切なものを、守れなかった。
言葉にすればそれだけのことであり、しかし、何より重い意味を持つ。
「後悔は山ほどあるが――それも重畳」
ピシッ、と、ホムラの頭上の天井が音を立てた。
もう、疲れてしまった。生きていくことに。憎悪を抱いて生きていくことに。もう、疲れた。
休んでしまおう。
世界は残酷で、理不尽で、どうしようもない。
あの後輩も、残酷な世界に食い殺されている。
もう……何もかもが、どうでもいい。
そう、ホムラが思った瞬間だった。
《Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ》
声が響いた。同時に、肌を刺すような冷気が周囲を支配する。
「主ッ！！」
そして、響き渡る声。見ると、そこにいたのは一人の騎士。しかし、騎士甲冑はボロボロで、腹部には強引に血を固めて止血したであろう痕がある。満身創痍なのは、一目で見て取れた。
エリア・カリア。

大切と、ホムラが想う女性。

「エリア、か。……何しとるんや、そんな体で」
「すみません。到着が遅れてしまい――」
「そんなことはええ。……無理するんやない、言うとるんや」

言うと同時、こっちに来い、とホムラは手招きする。エリアは一瞬戸惑ったような表情を見せ、ホムラの傍まで歩み寄ると、膝をおった。まるで、跪くように。
それは、騎士たる彼女にとっては当然の行動。だからこそ、ホムラはその体を抱き寄せた。
エリアが、驚愕の表情を見せる。

「あ、主!?」
「――無事で良かった」

心の底からの言葉。ホムラは、エリアを強く抱き締める。エリアは、すみません、と言葉を紡いだ。

「烈火の将……彼の者に、私は敗北しました。無様にも」
「命懸けで戦ったことに、無様も何もあらへんよ。よーやった。大義やったで」
「……ありがとうございます」

エリアが微笑む。綺麗だな、とホムラは思う。同時に、嗚呼、と納得した。
燃え盛るような憎悪の心……それが、溶けていく。

消えてしまったと思っていた人が、もう、取り戻せないと思っていた人が、生きていた。生きていてくれた。それだけで。それほどの

ことで、こんなにも。

「……エリア。今まで、ホンマにおおきにな」

「――主？」

「わしみたいなドアホの、くだらん戦いに付き合ってくれて。……もう、ええよ。満足や。わしは、もう、満足してしもた。これからは、好きなように生きてくれや」

この女性を、自分の都合で縛りつけてしまった。それもまた、後悔だ。

だが、それもここで終わり。彼女ならば、ここから脱出して生き残る術があるだろう。もう、縛られる必要はない。

エリアが、ポツリと呟く。

わかった、と。

いつもの丁寧な言葉を捨てた、その言葉で。

――柔らかな感触が、ホムラの唇に触れた。

それがエリアの唇なのだと気付くのに、数秒の時間を要した。

「ホムラ。あなたは、ここにいるのですね。ようやく……ようやく、私はあなたに追いつけた」

エリアが微笑む。その時、ホムラは気付いた。エリアの瞳。美しい碧眼であるはずの瞳に、光がない。ホムラは、弾かれたように表情を変える。

「エリア、自分、目が」

「……血を流し過ぎました。しかし、命を懸けてこの程度ならば、十分に僥倖です。それに……今の私には、あなたが感じられる。そ

れだけで十分です」

エリアが、優しく腕を回してくる。ホムラも、エリアを抱き締める手に力を込めた。

「私は、愛する人に一人残され生きていける程に強い女ではありません。あなたを失い、どう生きていけというのです？」

「……そう、か。すまんなぁ、最後の最後まで。アホな男で」

「良いのです」

ピシリと、氷の世界に亀裂が走る。

いかに、最強の騎士『氷姫』エリアとはいえ、この深手で『エターナル・コフィン』などという大魔法を維持できるはずがない。発動さえも不完全だ。

世界が――終わる。

しかし、そんな中でも、この二人に揺らぎはない。

「私は、そんなあなたを愛すると決めたのですから」

「……あはは、おおきにや。――随分、待たせた」

閉じていく世界の中。ホムラは、微笑む。

「一緒に生きようか。ずっと、ずっと――……」

――そして、世界が壊れていく。

◇　◇　◇

『概念』へと至る時は、世界と契約するというのが摂理だ。その際、その者は世界と同化――いや、一部と成る。しかし、一部とはいえ、世界というものはいくら存在のランクを上にシフトさせようと、人が背負いきれるものではない。そのために、それを望んだ者は一つの行為を為す。

それが、『世界を呑み込む』という行為。

その際の『世界の定義』は不明である。しかし、生半可なものではない。それはテンリュウやファイム自身が理解している。世界とは、人にとっては己の周囲、己を中心とする物語に他ならない。

それは他者からも観測できるからこそ、物語なのである。しかし、呑み込んだ者は他人からは観測できないようになる。

それが、どういう意味を示すのか。答えは単純だ。

物語が――空想へと堕ちる。

空想は物語となることで、他人の目に触れることができる。しかし、空想は空想だ。それは誰にも見られない物語である。

事実、『神道天龍』が呑み込んだ世界――万の軍を唯一人で打倒したという古代ベルカの事実は『空想』となったことで、歴史の表舞台から消えた。ただ、万の軍隊が消えたという事実は残るのみである。

そして、ファイム・ララウェイが呑み込んだ『世界』とは。

彼の過去と、未来。

即ち――人生だ。

「……ロストロギア『リバースエンド』と『ジュエルシード』。過

去の再生と願いを叶えるその二つを用い、無理を通しましたか。しかし、『リバースエンド』は砕け散ったはず。何故ここに？」

「――あの時願ったのは、破壊じゃない。『制圧』だ」

七歳ほどの外見をした少年。その人物がファイム・ララウェイ本人であることを、その場にいるはやてもテンリュウも確信していた。面影がある上に、バリアジャケットも同じ。

何より――身に纏う静謐な殺気が、彼が彼自身であることを雄弁に物語っている。

ファイムの側に浮かび上がる、黒い砂を内包した砂時計。――『リバースエンド』だ。それを手に掴み、握り締めると、その砂時計は脆くも崩れ去る。

「このロストロギアはあまりにも危険だった。だから、封印の必要があった。ロストロギアの中には、転生を繰り返すものもある。封印処理が必要だと。……そのあと、魔力封印されたり、謹慎を受けたりで封印することができなかったけど――丁度良かった」

「……」

「僕の……僕たちの使う魔法、『オリヴェント式』は、命を使う術式。そういう力だ。けれど、僕にはもう、戦力のあてになるような命は残っていない。なら――引っ張ってくればいい」

もう一度。

歩んできた道の全てを否定し、歩むはずだった未来を否定し。

命があった、あの頃を。

「僕はどうしようもないほどに間違えた。間違えてきた。悪意で悪意を塗り潰して、そうやって正義を――張りぼての正義を演じてき

た。僕は地獄に堕ちるだろうし、死ぬ時は、悪意の刃に抱かれて死ぬことになると思ってる。僕はそれだけ罪深い。

でも、僕は。それでも、僕は。はやてさんを――守りたい」

ガシャン、という、カートリッジをロードする音が響く。同時に、ワイヤーが弾けるように飛び出した。

「届かないことは理解しているし、意味がないこともわかってる。未来も過去も否定して、僕には何も残らないことも、ずっと前から理解してる」

ファイムが定義した世界は単純だ。十二年前――カグラ・ランバードに出会う前。そして、魔法を……たった一度の奇跡を使った後の未来。

その全てを、呑み込み、世界から抹消した。

管理局に入る前のファイム・ララウェイという存在は消滅し、同時に、十九歳以降のファイム・ララウェイというのも存在しなくなった。

いずれ他の者たちの記憶からも消えるだろう。未来はともかく、過去の彼を覚えている者はいなくなる。

「それでも、さ。それでも、どうしようもないんだ」

自身の全てを否定して。

それでも、届かないとわかっていて。

しかし彼は――力を求めた。

「泣いて欲しくないんだ。生きていて欲しいんだ。この世界だってそうだ。滅ぶなら滅べばいいと思う。だけど、ここははやてさんが

生きる世界だ。だから、守る。それだけだ」

世界を守るという理念も、正義という信念も、もう、必要ない。
必要なのは――守る意志。

「行くぞ最強。最後の意地だ。あなたを倒して、世界を救う」
「吠えましたね。一人の女性を世界と称するその覚悟、確かに受け取りました」

風切り音。振り抜かれた刀の一閃が、壁を切り裂き、粉砕する。

「私も世界を開くのが道理なのでしょうが……流石に一日に二度世界を開くことは不可能。故に、全身全霊、徹頭徹尾、我が全力の絶技を以てお相手しましょう」

張り詰める空気。全身が泡立つような感触。叩き付けられるように感じるこの感触が殺気なのだと理解するのに、時間は必要なかった。
ギシッ、と、空気が軋んだような気がした。瞬間。

――轟音。

一瞬でファイムの背後に回ったテンリュウが、腰の刀から居合を放ったのだ。彼女の得意とする絶技、『夢魔龍閃』とは違う。ただの居合。
しかし、『ただの居合』で世界は裂ける。魔力を飛ばしたわけでもないのに、延長線上の壁に亀裂が入った。あまりにも鋭過ぎた一撃のせいで、崩壊は起こらない。

――速さを！！

間一髪、小柄な体――リバースエンドを利用して再現した、七歳の姿――を回転させ、ファイムはそれを避けると、続けざまに蹴り上げを放った。しかしそれは紙一重で避けられ、代わりに薙ぎ払うようにテンリュウの持つ薙刀の形状をしたデバイス――『桜花』が振り抜かれた。

通常なら躱し切れない一撃。だが、今のファイムなら避けられる。

キィン、という音と共に、魔法陣がいくつも展開された。翡翠と紅。それぞれファイムとテンリュウのものだ。形状はミッド式ともベルカ式とも違う、命を使う禁忌の術式――オリヴェント式。

《ロール！！　コネクト！！》

ファイムが纏うバリアジャケット、リンネクロウズが叫ぶ。杖はもう消えている。過去の姿を再現したと同時に体の傷は消えたが、流石にデバイスまでは修復できない。

ワイヤーが煌めき、何本かが『桜花』に巻き付く。だが無論、それで止められるほど優しくはない。故に、狙いはそこではない。

「――――」

テンリュウの腕に走る、僅かな軋み。どんな達人でも、その斬撃の軌道上に障害物が突然現れれば多少なりとも力を込める。狙いはそこだ。今のファイムには、そんな僅かな動きさえも見える。

ファイムは体が浮き上がった状態で、右手を差し出す。狙うは桜花。その柄だ。

「――――！？」

テンリュウの表情が驚愕に染まる。だが、そんなことに気を払う余

裕はない。ファイムは柄を掴むと、思い切り弾いた。これにより、桜花の軌道がずれ、ファイムの体が更に浮く。
交わされる視線。

「――夢魔龍閃」

しかし、驚愕の直後、瞬時に技を放ったのは流石に最強を謳われるテンリュウ・シンドウ。その一撃はファイムの首を穿たんと迫り来る。
対し、ファイムも黙っていない。回避行動と共に編み上げていた、ワイヤーの布陣による防御壁。それによって、その一撃を防ぎ切る。
爆音のような音が轟いた。テンリュウが打ち込んだのは、必中、必殺の一撃。しかし、ファイムはその全力を以てそれを受け止めた。
そして、更なるテンリュウの追撃。未だ地面に着地できていないファイムに、更なる一撃を叩き込む。

「夢想演武――」
「――バーストストーム!!」

だが、そこで黙ってやられるほどファイムも甘くはない。オリヴェント式の全力起動によって強引に術の構築スピードを強化。同時に、威力も底上げする。

――ガドンッ!!

紅蓮と翡翠が衝撃波を撒き散らし、大気を大きく揺らした。衝撃波によってファイムは大きく吹き飛ばされ、テンリュウも僅かに後退。
自然、二人の距離が開く。

沈黙が流れ、魔力の余波が空気に満ちる。その静寂を打ち破るように、テンリュウが言葉を紡いだ。

「どうしました？――歳を取られたようですが」

「……」

ファイムは無言。だが、僅かに眉が跳ねあがる。そう、彼の姿はテンリュウが言ったように僅かに成長していた。七歳相当だったものが、今は九歳相当。僅かだが、確かな違い。

「成程……そういう世界ですか。理解しました。たった一人の命で私に抗う――その言葉の意味、あながち間違ってはいませんね」

「……」

「私たちの使う術式――『オリヴェント式』は、命をそのまま力に変える術式。その力の大きさは、通常の魔法など軽々と凌駕します。その代償として、寿命が削られていくわけですが……あなたはそれを許容するだけではなく、積極的に使うことを選んだのですね」

そう……ファイム・ララウェイは、『リバースエンド』の能力『過去の再生』により、『まだ命を残していた自分』を再生。ジュエルシードの能力『願いの成就』により、『過去の自分に記憶と意志、力を引き継ぐ』ことを思いついた。

そして更に、概念となることで過去を消滅させ、未来――つまりは、自分の終着点を固定することにより、その思いつきを魔法にまで昇華した。今のファイムは子供の姿であり、過去の姿であるが、その体に宿った戦闘機人の右腕と右足。右の瞳は、彼がこの事件が始まってから手に入れたものだ。

そして、その意志もまた。

改めて命を使い直す。彼が詠唱した通りに、人生をやり直す。それがファイムの選んだ方法。

だが――無論、限界もある。

「そうやって歳を取っていくということは……成程、未完成というわけですか。時を遡ることができても、停滞させることはできないと、そういうことですね。――何故、そこまで？」

彼女は言う。

それはあまりにも、間違っていると。

「怖くはないのですか？　自分自身の命が尽きようとしているこの瞬間が。私と渡り合えば渡り合うほどに、終焉が近付いている現実が。私とどうしても相対する必要はなかったはずです。世界を救いたいならば、ここを吹き飛ばせばいい。私は倒すべき敵将ではありますが、必ず倒さねばならない相手というわけでもありません。――そしてあなたは、そうまでしても私には届かない」

彼女は、言う。

「あなたに私は殺せない。人の理を踏み越えようと、摂理を捻じ曲げようと、私はその遥か上位に屹立する」

対し、少年も応じる。

「たとえそうであっても、僕が諦める理由にはならない。勝てないとはわかっている。それでもここへ来たんだ」

最強は、問う。

「未来を諦め、自らの過去さえも否定したあなたに、何が残るというのです？」

最弱は、答える。

「想いが残る。僕は確かにここにいた。僕の紡いだ思いだけは、誰にも奪わせない」

そして、二人の意志は交わらない。

「刹那を生きるあなたと、永遠を定義する私。在り方が違う身でありながら、どこまでも近く」

「だからこそ相対する。僕の想いも戦いも、全てが全て、僕のものだ」

「それは私とて同じ。そして、あなたは違う。あなたは――誰かのために、戦えたでしょう？」

「それこそ同じ。あなただって、誰かのために戦っている」

「この戦争、どちらに正義があり、悪があるか。そんなことに興味はありません。私は刃でいい。刃でいられれば良かった。そうであれたなら、私は。――神道天龍は、最強のままに刹那でいられた」

「僕はこちら側だから。僕たちの行いが正義だと定義する。僕は刃だった。けれど、今は。僕は僕の意志で生きている。生きていこうとしている。だからこそ――ここまで、強くなれた。強くなるために、永遠を捨てた」

相反するようでいて、似通う二人。

決着は……文字通り、血を見るまで終わらない。

強くなるために、力を求めるために、自分自身の終焉を定めた魔導師と。

強さの究極であるため、最強であるため、自分自身を捨てて永遠を掴んだ侍。

どちらも正しく、等しく過ち。
なればこそ、相対する。

「最後に問いましょう。あなたの人生を、あなたが定義したあなた自身の始まりの以前を記憶できる者の一人として。あなたは辛い人生を歩んできました。どれほど苛烈だったか私には想像しかできませんが……それだけでも眉を顰めざるをえません」

最強は、言う。

「力があれば、と、何度もあなたは叫んだのでしょう。しかし、あなたに許された力は命を削る禁術でした。世界の――管理局のために。そのためだけに戦ってきたのでしょう。しかし、あなたはそんな自分を捨てた。管理局を敵に回してしまうかもしれないようなことをしてまで、あなたは戦おうとしています。勝てぬと理解していて。最強たる私の前に立っています。――何のために？」

問いかけ。何のために、戦うのか。
その問いに対する答えを、すでにファイムはもっている。

「――世界を敵に回しても、守りたい人がいる」

理由などというのはそれだけでいい。それ以上は必要ない。
大切だと思える人がいる。たったそれだけで。それだけの理由で、生きていける。

テンリュウの言う通りだ。誰かのために戦える。それだけで、たっ

たそれだけで。
――全てを懸ける、価値がある。

「――――」

吠える。咆哮する。全てを吐き出すように。
未来も過去も捨て去って。それでも、戦うのだ。

この世界が、続いて欲しいから。
続いて行って、欲しいから。

彼女に――笑っていて、欲しいから。

◇　◇　◇

二人の戦闘。それを、はやては眺めていることしかできなかった。
彼女自身が限界で、回復を待たなければならないということもあるが、それよりも二人の戦闘速度だ。残像しか映らないような速度の戦闘。いかにはやてが援護型とはいえ、文字通り視認できない速度で戦闘されては援護などできない。

ギュッ、と、はやてはシュベルトクロイツを握る手に力を込めた。

『世界を敵に回しても、守りたい人がいる』

その相手が誰なのか、ここに及んでわからないほどにはやては愚かではない。
――わたしのために。

彼は、あれほどまでに。

テンリュウの言葉や、ファイム自身の言葉から、ファイムの状況は朧げであるが理解した。おそらくだが、彼は自分自身の寿命を定義したのだろう。
あの、魔法。幼くなる直前を終焉として。
もう一度、人生をやり直すように。

どんな――覚悟があるのだろう。
こうして、戦っている間にも、過剰なまでに命を消費する彼は少しずつ歳を取っていく。放っておけばまだ十年以上は生きられたはずなのに、彼はそれを否定してまで戦っている。

「どうして」

その言葉は、きっと、彼に紡いではならない言葉。彼を否定してしまう言葉。
だからこそ、彼に届かないところで、はやては呟く。

「どうして、なん？」

彼なりの葛藤があったのだろう。彼なりの決意と覚悟があったのだろう。
しかし、それでも思ってしまう。

――どうして、と。

「わたし、は」

優しい笑顔。自分を救い出してくれた彼を想いながら、はやては呟

く。

「あなたと一緒に生きられたら、それだけで……それだけで、良かったのに」

望んだのはささやかな幸せ。

それさえも――許されないのだろうか。

そして。

はやての下に、通信が入る。不安定な魔力力場が形成されているために、通信が酷く不安定だ。更に、それが外からのものだとすれば余計にである。

ただ、聞き取れる声で、その言葉が紡がれた。

『……聞こ…るか……こちら……クロノ……』

クロノ・ハラオウン。次元航行艦隊の提督。ようやく、次元航行艦隊が到着したのか。

『……応答を』

はやては、ゆっくりと、二人の戦いを見つめる。

彼の覚悟も、自分の悲壮も。

その、全てを内包し。

決着が――近付いている。

◇　◇　◇

床を蹴り飛ばし、テンリュウに迫る。ヒット・アンド・アウェイなど考えない。できるだけ密着した位置で、加速と反射だけを頼りに拳を突き出す。

テンリュウの得物は刀と薙刀だ。両方とも、密着されると相手を斬ることが難しくなる。そこを利用する。

踏み込み、放つ。単純。小細工は必要ない。この距離では、小細工など弄した時点で隙になる。

「――――」

意識が加速する。流石は音に聞こえた最強の担い手。その力は圧倒的。満足に武器を振るえない間合いでも、問題なくこちらの攻撃を捌いてくる。

加速する。もっと、もっと。

魔法陣が展開される。ミッド、ベルカ、そして――オリヴェント。持てる全てを叩き込む。相手に勝る部分――そんなものはない。ならば、それを認めて、しかし、踏み込むしかない。

一歩、更に、一歩。

突き出した拳を受け止められる。マズい。拳を掴まれた。テンリュウがこちらの右拳を――戦闘機人の腕を、そのとんでもない握力で握り潰そうとしてくる。

――させない。

展開するのはベルカ式の魔法陣。ベルカ式の神髄にして奥義である身体強化は、近代であろうと古代であろうとその重要度を変えることはない。

体を捻る。高速回転。遠心力に加速を乗せて、全力で左の肘を叩き込む。

ミシリ、と、右の腕から嫌な音が響いた。無理な体勢のツケがが回ってきたらしい。だが、知るか。

――ドゴンッ！！

轟音が響いた。振り抜いた肘が、テンリュウの桜花の柄に直撃した音だ。二人の距離が開く。その一瞬でファイムは追撃を行わず、両手を広げた。その掌に、魔法陣が展開される。

右腕には、ミッド式の方陣を。

左腕には、ベルカ式の方陣を。

脈々と受け継がれてきた術式。その二つを。

「いくぞリンネッ！！」

《Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ！！》

――合成する。

紡がれるは、円の中に三角形の方陣を取り込んだ強大な魔法陣。吹き荒れる翡翠の魔力。ファイムの姿は、すでに十二、三歳のそれ。この状況において、彼は彼が戦い続けていられた最大の理由を放り捨てた。

闇に消えた禁忌の術式、オリヴェント式ではなく――管理局の魔導師としての魔導を、使ったのだ。

「ミッドとベルカ。現代の魔導。相反する二つを、オリヴェントを橋渡しに融合させましたか。器用な真似をするものです。――成程、気が利いている」

対し、テンリュウが展開するのは、彼女の魔導であるオリヴェント式。

運命を覆す力。誰よりも守りたいと願った君主を守るため、一人の

侍が辿り着いた極地の術式。

「かつて私が――神道天龍が破れたのは、戦いを極めし『覇王』。その再現をしてくれるとは。ただ両方を使うわけではなく――統合させ、新たな力を紡ぐとは。いいでしょう。ならば、私もお応えします」

紅の魔力。疲弊していても、流石に最強。吹き荒れる魔力に、付け入る隙は窺えない。

だが、そんなことはわかっていたことだ。この、合成術式。ずっと前から考えていて、ようやく、この土壇場で強引に形にできたこれは――確かに切り札。しかし、これでもきっと、届かない。

どこまで行こうと、自分は才能のない凡夫だ。対し、相手は最強を背負う天才。

ただの天才なら、付け入る隙もあっただろう。しかし、『神道天龍』というのは究極の熟練者だ。過去の経験の全てを受け継ぎ、受け継ぐ際にも極限の修練を課されている。

どれだけ命を削ろうと、凡夫がどうこうできる相手ではない。だが――

「名乗りを。第１０８魔導旅団第零小隊隊長、ファイム・ララウェイ。階級は、一等陸佐」

「――神道天龍。使える君主を失った、無頼なり」

自嘲するように言うテンリュウ。ファイムは、違う、と呟いた。

「僕が聞きたいのは称号じゃない。あなたの名だ」

テンリュウの表情が、僅かに歪み。

そして――微笑を浮かべた。
返答は――命を奪う、全力の一撃。
互いに、互いの全てを懸けて。
力と力が――交錯する。
「一点突破ッ！！」
「――推して参る！！」
全力で――後のことなど全てを度外視して、魔法を紡ぐ。
奇跡を、望んで。
「バーストストーム！！」
「夢想演武！！」
――衝突。
◇　◇　◇
想像を絶する威力の衝撃。二人の丁度中立地点で直撃した砲撃魔法は、その衝突で撒き散らされる衝撃だけで世界を食い荒らす。
駆け抜ける衝撃。歯を食い縛り、テンリュウはそれに耐える。
――何という力……！
疲弊しているのは認めよう。ロード――師匠にして先代であった男

との戦闘で世界を開き、その上でギレン・リーを絶命させ、更に八神はやてという膨大な魔力の持ち主が放った自滅覚悟の一撃を、力技で耐えた。その上で、文字通り命懸けで限界を超えてきた眼前の少年と、限界速でやり合った。
魔力が底を尽きかけている。しかし、自分の力の原点は、歴史から名を消された万の命。
対し、目の前に屹立し、最強と相対する男は、いかに覚悟を決めたとて所詮は一つの命。飛べる高さは知れており、限界もまた、定まっている。
だというのに、今、目の前で抗っている男は。

「――――!」

呻き声の一つも漏らさず、強い光の灯った瞳でこちらを睨んでいる。
まるで、勝利を確信しているように。
バチン、と、余波で何かが吹き飛んだ。
バキン、と、壁に亀裂が走った。
――天井から、崩壊の音が響いた。
崩壊が近い。こちらの拮抗も、限界が近付いている。

――押し込む!!

テンリュウは、更に二つ、周囲にオリヴェント式の魔法陣を展開した。保険として残しておいた力を注ぎ込む。貯蔵している命はこの程度では消えはしない。しかし、操るテンリュウ自身の精神力がそろそろ限界だ。意にそぐわぬ行動を――ここを守るという縛りを受けているせいで、調子が上がらない。
ここを守れ、という命令はあっても、全力でここを守れという命令はない。

要は――そういうことだ。
抗おうという気持ち。クライムと、グリス。憎悪さえテンリュウが抱くあの二人に従うことを是としない自分が、本能の部分で命令に抗おうとしている。それが、精神力を削っている。

しかしそれでも――彼女は、最強を背負う者。
目の前に立つものが何者であろうと、敗北を喫することはない。最強とは不敗。更に言えば、目の前にいるのは、
エース・オブ・エースでもなく、
死神と謳われる天才でもなく、
切り札と叫ばれる奇跡の指揮官でもなく、
如何なる状況をも踏破するストライカーでもなく、
ましてや――英雄でもない。

ただの、周囲からエースの一人と囁かれるだけの、凡夫。
命を懸けなければ、エースにさえなれない、凡夫の極致に立つ男。
自らにできること、自らが可能とすることを極限まで極め、それでも、天才の高みを見上げることしかできない者。

そんな凡夫を相手に、最強が破れる道理はない。

「――――――！」

叫んだ声は、どちらのものか。あるいは両方が叫んだのか。
衝突する力が、加速する。

翡翠と紅蓮が混ざり合い、しかし、紅蓮が世界を覆っていく。
――押し切る！！
勢いを加速させ、テンリュウは吠えた。最早、自身の声さえ聞こえない。圧倒的な轟音。その果てに、テンリュウは勝機を見出す。

一度目は、相対する価値もないと思った。
二度目は、ただ会話し、殺すと宣言するだけだった。
三度目は、殺すと決めて、しかし、殺せなかった。
四度目は、弱者を斬るが忍びなく、逃げるように彼を地獄へと叩き込んだ。
――しかし、彼は戻ってきた。

認めることにしよう。この男は、神道天龍の長い歴史においても、数えるほどしかいなかった強敵だ。その強さは単純な戦闘能力とは違うところにあるが……それがどうしたというのだ。
力など、如何程のものか。何よりも重要なのは、その心。
この男の心の強さは、唯一人で世界を敵に回して尚、笑える程の高みにある。孤独であったとしても、前に進み続けることができる。
そして、その強さは。
かつて、数多の神道天龍が望み、手に入れることが叶わなかったもの。

どれほどの技を継承しようと。
どれほどの魔力を貯蔵しようと。

あの時――『覇王』に敗れたように、たった一つの想いには、勝てない時がある。

だけど。
だからこそ――！！

――負けるわけにはいかない！！

何のために続いてきたのか。そうだ。このためだ。この瞬間のためだ。あの日守れなかった理由。強さを、大切な君主を、守れる力を

手にするために。
そのために――続いてきた！！
「――――――――ッ！！」
咆哮。同時、均衡に耐え切れなくなった砲撃が同時に爆発した。凄まじい衝撃が駆け抜ける。その最中、テンリュウは見た。閃光が迸る中、陣を描く翡翠の戦が走るのを。
――あれは、彼の防御陣……！！
一気に押し込めるようになったのは、あれを構築していたからか。しかし、何故だ。あんなもので押し切られた砲撃を止められやしない。爆発した魔力さえもだ。
そもそも、彼自身、あんなもので防げると思っていないはず。
衝撃が抜ける中で、浮かぶ疑問。それは、彼の叫びで解決される。
「――はやてさん！！」
「ラグナロクッ――」
聞こえてきた声。この状況下でその言葉を拾えたのは僥倖だった。
マズい、と、テンリュウの口端から言葉が漏れる。
だが、間に合わない。衝撃で怯んだ体は、魔法による防御を許してくれない。
そして、魔法が迫る。
「――ブレイカァァッッッ！！」
壮絶な威力の収束砲が、テンリュウを穿った。吹き飛びそうな意識。しかし、意地とでもいうべき何かが――彼女が、最強たるテンリュウ・シンドウであるという誇りが、彼女の意識を押し留めた。

――目を閉じるな！！

自らに向かって吠えると、テンリュウは前を見た。目に映るのは翡翠の光。やはりだ。彼もまた、こちらへ向かってきている。崩壊する楽園。その最深部で、決着を望む。

崩れゆく部屋。テンリュウの視界の端で、制御ルームへと通じる扉が瓦礫で押し潰されていくのが見えた。時間も残り少ない。最早、あそこに行くのは不可能。そうなれば、動力炉を粉砕するしかないだろう。核兵器――とある管理外世界ではコンピュータで完全管理しているらしいが、ここにはあれほどの兵器を制御するだけの魔力を備えているのは動力炉しかない。

だが――そんなことは、もう、関係ないのだろう。

煌めきが目に映った。漆黒の光。翡翠を纏って現れたのは、剥き出しの機械の腕。戦闘機人の腕といっても、大抵の戦闘機人はそれをスキンで覆っている。だが、彼は敢えて晒している。

ワイヤーや、カートリッジのためという理由はあるだろう。しかし、それとは違う理由で、彼は人とは違うものを選んだのではないかと、テンリュウは思う。

自らを彼がどう定義したのかはわからない。

固定対象として、自分自身と八神はやてを選んだと聞いた。

矛盾を自ら選んだ彼に待つのは、滅びだけ。

それでも彼は、向かってくる。

姿はもう、十四そこらにまで達している。

耐えるために、そこまで支払ったか。

――ならば、応じるのが矜持！！

右の手に力を込める。神速の突き。全力で突き出した桜花の刃が、ファイムを穿たんと迫る。だがそれを、ファイムはまるで予測していたかのように顔を横に傾け、避けた。

しかし、速度が速度だ。掠めた一撃はこめかみを裂き、肩を切り裂いた。しかし、止まらない。

ならば、と、テンリュウは刀を抜いた。居合術。間合いが近く、完全な威力は出せないが、受け止めることはできるだろう。

だが――ファイムは、テンリュウの予測を超えてくる。

放たれた拳。それは、しかし、テンリュウを狙ったものではない。

――まさか！！

テンリュウは驚愕。抜き放たんとしている刃。それを、ファイムは狙っている。抜身の刀を、拳で。

「――――ッ！！」

咆哮が大気を振るわせた。甲高い金属音が響く。同時、かち上げられた刀――血桜が、宙を舞う。

ヒュンヒュンと、風を切る音が響かせながら血桜が宙を舞う。

――瞬間。

テンリュウの脳裏に、閃くように、何かが駆け抜けた。

？刃は、人を斬るためだけに存在する。まずはそれを自覚しろ？

響く声。これは――そうだ。まだ神道天龍になる前、初めて血桜を握った日の思い出だ。

?侍などと名乗っても、所詮は人斬り包丁を振り回すだけの人殺しだ。だから、私たちには確かな理が必要になる。最強であるために。最強であることに、驕らぬために？

そうだ。あの日も、こうして。

血桜を、跳ね上げられたのだったか。

?何れお前も理解する。私たちがどういう存在なのか。――世界から外れるというのが、どういう意味なのか？

あの時、師匠は笑っていた。

遠くない未来、自分に全てを譲ると同時に、死ぬとわかっていたのに。

?さあ、もう一本だ。血桜を拾え？

血桜が、床に突き刺さる。同時、テンリュウは、その言葉を聞いた。

?強くなれ、未来のお前のために。――オトヒメ？

カチリと、テンリュウの中で何かが噛み合った。

そうだ。そうだった。

――私の、私の名は。

忘れてしまった、大切なものは――

テンリュウの表情に、笑みが灯る。

同時。

ファイムの体が、吹き飛ばされた。

◇　◇　◇

テンリュウの手が触れた瞬間、ファイムの体に衝撃が駆け抜けた。
透し、と呼ばれる技法だ。零距離から、装甲を無視したダメージを叩きつけてくる。
ファイムは、肺から空気を吐き出した。同時、前を見る。
そこでは、酷く清々しい表情で、テンリュウが微笑んでいた。

「――最後に一つ、問いましょう」

刀が消えた右手をゆっくりと開き、同時にファイムを見据えながら、テンリュウは言った。

「きっと、あなたは――あなたたちは、世界を救うために決断を強いられます。それは酷く残酷でしょう。何故なら、答えとは得られるものではなく、突きつけられるものだからです。たった一つの冴えたやり方……そんな甘いものは、望むことさえ許されないでしょう。
あなたたちは、必ず、後悔する。絶望する。必ず、世界を呪う。
――残酷ですが、言いましょう。奇跡は、今ここに起こりました。我が刃を弾く……最強に一矢報いたことが何よりの奇跡だと、他ならぬあなたたち自身が理解しているはず。
奇跡は二度、起こらない。
誰にでも一度起こる奇跡は、しかし、たった一度しか起こらないからこそ、奇跡なのです。命を懸けた先に掴んだ奇跡は、今ここに

起こりました。ならばもう、あなたに奇跡は残っていない」

崩壊していく空間。その中で、最強の侍は問いかける。

「それでも、あなたたちは世界を救おうとするのでしょう。たった一つの、世界を。ここまでの力を、意志を見せられたのです。私にも理解できます。あなたの世界は、たった一人の女性――八神はやて。彼女が生きる世界。だからこそ、あなたはあなた自身を否定できた」

ファイムは、無言でゆっくりと頷いた。そう、その通りだ。

彼にとっての世界の定義は、『八神はやての生きる場所』だ。だからこそ幸福に背を向けることができたし、過去に遡った後の終焉に対する恐怖さえも打ち払った。

そして、そこには。

その、世界には――

「問いましょう。――その世界に、あなたの姿はありますか？」

一息。はやてが息を呑んだのがわかった。ファイムは、息を吸い、逡巡し。

それでも、答えを口にした。

「――ない」

はやてが震えた。テンリュウは微笑を消した。

それでもファイムは。

愚か者は、笑っていた。

「僕は、悪意を抱えて戦ってきた。命を使ってきた。全てを救えな

いと理解していたから、悪意を以て、百人救うために一人を、千人救うために十人を、万人救うための百人を殺してきた。等しく等価な命を、踏み躙って、握り潰して生きてきた。それを正義と定義した。

だけど、僕はもう、正義なんて語れない。

等しく等価だった命が、いつの間にか、そうじゃなくなった。

なのはさんも、フェイトさんも、カグラさんも、シグナムさんも、ヴィータさんも、シャマルさんも、ザフィーラさんも、リィンも、アギトも、リューイも、ミリアムも、スバルさんも、ティアナさんも、エリオも、キャロも、ギンガさんも、ゲンヤさんも、ソラも、ユーノさんも、クロノさんも、僕の中で、大切な命になった。

そして、何よりも。誰よりも。

はやてさんが――僕にとっての、ファイム・ララウェイにとっての、全てになった。なってしまった。それを僕は誇りに思うけれど――だからこそ僕は、僕が生きることを許容できない。

僕は死ぬよ。悪意を抱えて。いつかきっと、僕の悪意が世界を喰らうなら。

その前に――僕は死ぬ」

あまりにも悲しい答え。しかし、それが、ファイム・ララウェイの答え。

彼にとっては最善の、たった一つの冴えたやり方。

悪意を抱いてきたからだからこその――善。

テンリュウは、そうですか、と、一言だけ呟いて。

静かに、目を閉じた。

天井から、彼女の下に、圧倒的な質量の瓦礫が降り注ぐ。

二人が、目を見開いた。だがテンリュウは一言、降り注ぐ瓦礫を受

け止めるように屹立し。

「――我、名を得たり。答えを、得たり――」

謡うように呟いて。

最強は、瓦礫に埋もれて消え去った。

「……」

沈黙が流れる。ファイムは歩み寄ると、血桜を引き抜いた。そして、言う。

「――借り受けます」

両手で持ち上げ、差し出すように。

そして、紅の刀を携え、歩み出す。その背に、はやてが言葉を紡いだ。

「――今更、わたしの言葉では止まらへんのやろね」

「ごめん」

すれ違う直前に、並ぶようにして。

違う方向を向きながら二人は言葉を交わす。

「――逃げたら、良かったんかな？」

「わからない。どちらにせよ、僕の死は定まっていたことだから」

「……そっ、か」

同時に、二人が互いへと視線を向けた。

触れ合う唇。その唇が離れた時、互いの目に宿るのは、覚悟。

「行こうか、ファイムくん」
「行こうか、はやてさん」

幾度となく、終焉に対する言葉は交わし合ってきた。
だから、もう。

「わたしはあなたと共に」
「僕はあなたと共に」

残酷な現実へ。
非情な未来へ。

大切な――人のために。

「世界を――救おう」

第三十九話　代価の果てに得たもの（後書き）

というわけで、ｖｓテンリュウ・シンドウ決着です。
次回は遂に最終話となるわけですが、さてさて、どうしたものか。
……おそらくページ数は過去最高を記録しますね。最悪、四万文字に収まらない気が……。

というわけで、人気キャラであるテンリュウです。友人の間では断トツです。二位はファイム。今回は、テンリュウについて。
彼女のテーマは酷く明白です。『絶対に負けない心弱き最強』。お気付きかもなのですが、実はファイムはこの作品内でまともな勝利は一度だけ。今回も、勝てたとはいえません。むしろ敗北でしょう。あれだけやって、刀を弾く程度で終了ですから。しかし彼は心が強い。テンリュウは、その対極ですね。
ぶっちゃけチートなのに何となく弱く感じるのはそこでしょう。まあ、最後まで敗北はなかったわけですが……。

そして、次回で最終話なのですが……その前に。１６万ＰＶを遂に突破しました！！　ほんとうにありがとうございます！！
活動報告にも上げようかなー、とか思っていますが。折角なので記念小説でも書こうと思います。５、１０、１５で三つずつ。完結後に。
ただ、何を書くか迷っているんですよね。
そこでですね、リクエストとか頂けると嬉しいなー、とか、思ったりしています。
……一応、前に書いた団体模擬戦の完結後バージョンも予定してたりするのですが……。それ以外は何もなくて。
カグラとクライムの因縁とか、詳しく語っていない部分も多くあり

ますし……無ければ、適当に考えますが……。

いずれにせよ、感謝しかありません。
次回で最終話。そして――エピローグです。
ここまでお付き合い頂き、本当にありがとうございます。感想など頂けると嬉しいです。

それでは、次回。最終話。
「優しい嘘」
彼らの道行き、見届けて頂けると幸いです。

最終話　優しい嘘　前篇（前書き）

――括目せよ。
これが、英雄の生き様である。
その最期、しかとその目で見届けたまえ。

最終話　優しい嘘　前篇

時空管理局本局。そこに緊急召集された理事会は、最早、ただいるだけの集団であった。
ミッドチルダと本局を核兵器で吹き飛ばす――クライムという男にはそれを行う意志があり、技術もあることを皆、理解していた。

――クライム。

かつて、今より15年近くも昔。全く同じ名で生きていた男がいた。悪を以て、正義を為す。管理局ほどの組織になると、一枚岩となることなど望むべくもなく、結果、どうしても『調整役』が必要になる。

レジアス・ゲイズの時代は、ファイム・ララウェイを中心にまだ管理局と繋がりを保っていたジェイル・スカリエッティ――正確には、彼が率いた戦闘機人によってそれが成されていた。

正義のために、非人道的手段による粛清。正義、という言葉の利便さは、最早語るべくもない。
そして、彼らが必要となった理由こそが、クライムという男である。

「……管理局の、負の遺産」

誰かが呟いた。クライムという男。死んだはずの――消えたはずだった男が管理局にとってどんな存在なのかは、その一言で説明できる。

特殊制圧部隊――通称、屍部隊。

不吉な名を持つその部隊は、表に公然と存在する部隊ではなかった。
裏側の存在。文字通り、屍――死んだはずの者たちによって構成される部隊だ。
その構成員の多くは、精神的に異常とみなされた者、管理局に逆らう意思ありと判断された者、元犯罪者など、管理局にとって不都合な者たちだ。その部隊は外で華々しく活躍する魔導師の裏側で、表立っては決して行うことができない行為に身を染めていた。
犯罪者の抹殺、危険思想保持者の暗殺など、現代ではファイム・ラウェイさせられていたことを、彼よりも大々的に、組織で行っていた。

そして、その部隊を率いていたのが――クライム。

この男の素性は、わからない。気が付けば存在していた男……それが、当時の上層部の見解だった。一応、経歴はある。屍部隊に所属する前の経歴は――後に彼の死と共に無限書庫からも消されたが――残っていた。
しかし、そこに書かれていたものは全てが虚構だった。
名は、屍部隊に所属する時点で消されるとはいえ――本名とされる名は、どこの記録にも残っていない。そんな人間がいた形跡すらないのだ。彼が生まれ育った場所は、第二管理世界というが……そこの彼の故郷とされる場所に、彼はいた形跡がない。
何故なら。
彼が生まれたとされる場所は、魔法生物の巣がある場所なのだから。

そして、彼の男は反逆を起こした。
誰にも気付かれない反逆。もう少し彼に時間があれば、今回の戦いに匹敵する被害が出たであろう事件。それが起こることなく闇に葬られたのは、今や英雄となった男の活躍があればこそだ。

しかし、今。
あの時以上の危機が、迫っている。

「……次元航行艦隊が、間もなく到着します」

静まり返った会議室の中で、リンディ・ハラオウンの声が響いた。
かつて『聖王のゆりかご』を消滅させた次元航行艦隊による魔導砲『アルカンシェル』の一斉掃射。しかし、今回はそれが行えない状況にある。
旅団が内部に侵入しているということもある。しかし、それよりも、確証が得られないことが大きい。

「しかし、『失楽園シャングリラ』……あれを破壊したとしても、核兵器が止まる保証はありません」
「……止めてみせろ、か」

理事の誰かが、ポツリと呟いた。そう――核兵器の解除方法があるとしたら、内部にある。破壊したからといって、止まる保証はないのだ。
それに、もう一つ。そもそも、『アルカンシェル』が通用しない可能性が示唆されている。

「そしてもう一つ……強力なＡＭＦの反応を確認しました。いえ、正確にはＡＭＦではないようですが……いずれにせよ、干渉が阻害されています」

侵入自体は可能だ。しかし、外部から魔力で干渉しようとすると、その全てが打ち消されるのだ。
どういう理論かは不明だ。しかし、手が出せないというのも事実。

「クラナガンへの侵攻自体は、大方制圧しました。しかし、未だ内部制圧には……」
「八神准将からの連絡は？」
「クロノ・ハラオウン提督が通信に成功しました。その際、あのテンリュウ・シンドウをファイム・ララウェイ一佐が討ったと連絡が」
――ザワッ。
少々予想外の報告に、会議内がざわめく。リンディは、しかし、と言葉を続けた。
「まだ核兵器の停止には至っていないとのことです」
再び、沈黙。いかに『最強』を討ったとしても、核兵器を止められなければ意味がない。
誰もが重い沈黙を抱く。そんな中、ミゼットが口を開いた。
「……最悪の場合の想定が必要だね。『アルカンシェル』が力不足というなら、それ以上の力を出すしかない」
魔導砲アルカンシェル。それは、現在の管理局が保有する兵器では最強の威力を誇る。あまりの威力に使用制限が複数の項目に渡って設けられているくらいだ。
しかし、更に。
管理局には、その黎明期に生み出された表舞台からも消え去った兵器が残されている。
「ｘナンバー……確か、『アースラ』を改造していたはずだね、リンディ？」

「は、はい。万一に備え、衛星軌道上に多重迷彩をかけて飛ばしてありますが、しかし」

リンディが言いよどむ。当然だ。ｘナンバー――その名の意味を知る者は、当然それがどんなものかも理解している。

葬り去られた究極の兵器。その力は、圧倒的であると同時に。

あまりにも――人道に反している。

「あの砲台は……その」

「――八神はやて」

リンディの迷いを含んだ言葉に、断じるようにミゼットは言った。

「おそらく、現代の次元世界で最強の魔力を持つあの子なら砲台に成り得る。緊急事態で昇進し、随分と早く将軍職に就くことになったとはいえ……あの子はいずれ、理事になる器だった。そして、上に立つということは後ろ暗い闇を覗き、その闇に身を堕とすということ。――丁度いい機会じゃないかい？」

「しかし、理事長」

「リンディ。私たちは戦争をしているんだよ。情報操作など当然。あの子も、真実を知ったからといってどうこう叫びやしないよ。それが政治。あの子は賢い。あの子は自分自身の日常を守るために、全てを受け入れ呑み込むよ」

「――理事長、あなたは」

リンディが、表情を険しくする。

「あなたは、あの子を脅すつもりですか！？」

「脅す、なんてことはする必要もないよ、リンディ」

ミゼットは、ため息を零しながらリンディの怒りを受け流す。

「あの子は賢い。何も言わずとも理解するさ。――そういう結末が待っている、ってね」

そして、理事長は命を下す。

あまりにも深い闇に鎮座するからこそ。

それが、正義と信じて。

「――八神はやて准将に勅命を。砲艦『アースラ』を以て、『失楽園シャングリラ』を沈めよと」

決着が――迫る。

◇　◇　◇

不意に、はやてが足を止めた。ファイムは、首を傾げて振り返る。

「はやてさん、どうしました？」

「……ううん。ちょっと、連絡が」

「連絡……本部からですか？」

ファイムの問いに、はやては頷く。そうしてから、少し、迷うような表情を見せた。

「なぁ、ファイムくん。一つだけ……聞いてもええか？」

「？　はい。なんでしょうか？」

「――命を使うって、どんな気分や？」

ドクン、と、自身の心臓が大きく高鳴ったのを、ファイムは確かに感じた。
命を使う……最早常態と化してしまった、その行為。それを行う気分。

「そう、ですね。説明は難しいんですが……自分の中で、何かが少しずつ終わっていく、といった感覚でしょうか」
「終わって、いく？」
「はい。未来が少しずつ消えていくような、歩いていく道の先が少しずつ消えていくような……そんな感覚です」

そう――消えていく。
未来が消えていき、歩む先が明確に終わっていくイメージ。
同時に、肉体が死んでいく感覚もある。

「過去を振り返らないと、潰れてしまいそうになるんです。体が死んでいく、未来が消えていく……そんな、そんな感覚です」

十二年間。その重みを背負い続けてきた。
無駄だとは思わない。その行為の果てに出会うことができたのだし、それで守れたものもある。
――けれど。
自分以外に背負わせようとは、思わない。

「僕は後悔していません。こんな体になったことも。だけど、それを誰かに背負わせる気はない。はやてさん……その言葉の意味、問いかけの意味、お聞きしても？」
「――私も、命を使う時がきたみたいなんや」

はやては、言った。
静かに、寂しげな表情と共に。

ファイムは、どういう意味ですか、と言葉を紡ぐ。

「命を使う、なんて。どういう意味です？」
「言葉通りの意味やよ。今、理事会から連絡……というよりは、命令が下されたんや。Ｘナンバー――禁断の究極兵器。それを使え、っていう命令や」
「ｘナンバー……」
「うん。それがどういうもんかはよくはわからへん。せやけど、ええもんでないのも確かなんやろうと思う」

はやては苦笑する。その笑顔はやはり、どこか寂しげだ。

「『失楽園シャングリラ』……ここの動力炉を破壊すれば、核兵器は止まるんやろうと思う。あんな兵器を制御できるようなエネルギーがある場所は、いくらロストロギアでもここしかあらへん。せやけど、動力炉を破壊した後、ここはどうなると思う？」
「……」
「迂闊やったわ。理事会も同じことを考えたんやろうね。――そうや。ここは、吹き飛ぶ」

はやては、天井を見上げながらゆっくりとそう言った。

史上最強の概念兵器、『失楽園シャングリラ』――それが内包するエネルギーは膨大だ。今こうして立っているだけでも、圧迫されるような『何か』を感じる。
証明があるわけでもないのに、内部が明るい。魔力が満ちているからだ。

上位の魔導師でさえ、魔力を視覚化させることは魔法を使う時ぐらいしかできない。魔導師が戦闘体勢に入った瞬間、溢れ出る魔力が視覚に捉えられることがあるが、それができるのはオーバーSと呼ばれる一部の魔導師のみだ。そしてそれさえ、戦闘時のみ。

それがここには、常に発動している。煌めくような魔力の渦。ただ纏うだけでこの魔力だ。ここを制御している動力炉には、どれほどの魔力が渦巻いているか想像もできない。

はやては、わたしのミスや、と呟く。

「この異様な大きさに呑み込まれてた。予測できた展開やったのに。……ミスの責任は、取らなアカン。幸いか、帳消しのための手段は理事会が用意してくれたみたいや。わたしは、今からそっちへ向かう」

「……それは、しかし」

ファイムは、唇を噛む。責任――それを口にされれば、何も言えない。

指揮官、責任者というのは責任を取るために存在している。はやては今回の作戦における最高責任者の一人であり、旅団の長だ。それが責任を取るのは必然である。

過去の歴史を紐解けばよくわかる。指揮官というのは敗北の度に死に、ミスの度に死んでいく。

今回、命を使えという指令が出たのも、ある意味では頷ける。

ただ、ファイムは内心で自身を叱責した。そう、確かにミスだ。だが、自分はそれに気付けたはずなのだ。『失楽園シャングリラ』がどれほどの力を有しているのか、知ることのできる立場にあったのだから。

「責任、そう、責任や。――それを口実に、わたしは引き金を引くよ」

不意に、はやてはそう言った。ファイムは、えっ、と、呟きを漏らす。

「口実、とは？」

「責任があるのも事実やし、わたしじゃなくても結局、誰かがやらなアカンかった事でもある。わたしがやるか、誰かがやるか……それやったら、わたしがやったほうがええやろ？」

「……はやてさん」

ファイムは、咎めるような口調ではやての名を呼んだ。

誰かが傷つくくらいなら、その代わりに自分が傷つけばいい。その考え方は、あまりにも危険だ。

美しいことではあるし、称賛されることでもあるだろう。

自己犠牲は、確かに尊い。だが、その果てにあるものをファイムは知っている。

そう――ファイム自身。

彼自身に後悔はない。しかし、やはり過ちであったと彼は思う。自分自身が死ぬことで悲しむ人が――昔は思ってもみなかったが――確かにいるのだ。自己犠牲は、その人たちを傷つける。

だからこそ、ファイムははやての手を掴んだ。

「行かせません。そんな理由で、命を使うことは許さない」

「……ファイムくん」

「あなたにまで、背負わせない。生きてもらいます、あなたには」

もしも、と、ファイムは言った。
それでも行くと、言うのなら――

「――僕が引き金を引きます。今のこの体ならば、全力を以て力を使えば、あなたの魔力量さえ超えられる」

決意の言葉。大切な人。大切だからこそ。大切なればこそ。
命を懸ける――意義がある。

はやては、小さく微笑み。

――不意に、唇に柔らかいものが触れた。
目の前にあったはやての顔が離れる。はやては、堪忍して、と呟いた。

「惚れ直してしまうやんか。……こんな場所で、そんな目で言われたら。私は」

不意に、はやてを掴んでいた腕が離された。はやてはファイムから数歩離れると、静かに微笑む。

「別に、今すぐ死ぬわけやあらへんよ。死ぬためやない。生きるためにやるんや。精一杯、生きるために。命懸けで生きていくために」

決意の瞳。そんな、燃えるような瞳を携えて。

「――あなたとの未来のために」

はやては、言った。
生きるために。生きていくために。
そうやって――いくのだと。

「……」

ファイムは、目を伏せ。
そして――頷く。

「……わかりました」

ん、と、はやては頷いた。
そして、ファイムに背を向ける。彼女の戦場はここではない。
この先は――ファイム・ララウェイの戦場だ。

「――武運を」

重なる言葉。
二人が触れ合うことは、もう、なかった――……

◇　◇　◇

「……不死、か」
「ええ、そうです。それが、この子の背負った業ですよ」

内部を黒竜サリヴァルムの背に乗って移動しながら、カグラの言葉にソラは頷いた。広い空間を高速で突き進むサリヴァの両隣にはフェイトとシグナムがおり、襲い来る機械兵器の軍団を強行突破している。

「時間がないので詳しく話している暇はありませんが、結論を言えばそうです。『聖人』オリヴェント――歴史の上にもほとんど姿を見せないその存在は、そもそも『死なない』存在だったんです」

「死なない存在、だと？」

シグナムが眉をひそめる。ソラは頷いた。

「事実であるかどうかは、彼女の状態を見ればわかります。『運命改変』……その破格の能力については先程話しましたが、しかし、どう考えてもあれはおかしい」

「おかしいって？」

「フェイト隊長。そもそも、『運命』などというものを人間が制御できると思いますか？」

ソラは言う。できるはずがない、と。

「そもそも、『運命』というものは人に観測できるようなものではありません。そもそも見えやしない物語を改変するなんて、どんな文豪であっても不可能です。……時間がないので省きますが、『聖人』とはそういう存在だったんですよ」

チラリと、ソラは自身が腕に抱く少女を見た。右腕を奪われた後、応急処置もなく長時間放置されたであろうにもかかわらず、死の気配はない。それどころか、時間が経てば経つほどに状態が良くなっていっているようにさえ感じる。

「未来と過去……その全てを掌握し、その上でそれを捻じ伏せる能力。『調停者（バランサー）』とも呼ばれる彼女は――」

――ズドンッ！！

ソラが言葉を紡ごうとした瞬間。突如、壁が吹き飛んだ。同時、人影が飛び出してくる。その姿を見て、まず最初にフェイトが反応した。

「なのは！？」

現れたのは、白きバリアジャケットを紅の血で染め上げた、『エース・オブ・エース』。

彼女は鬼の形相でフェイトたちに視線を向けると、怒鳴るように叫んだ。

「二人をお願い！！」

同時、転移魔法が展開され、フェイトたちの進路上に二つの人影が現れる。

ユーノ・スクライア。

八神ヴィータ。

二人共、浅くない傷を負っている。フェイトとシグナムはすぐさま急停止すると、二人を抱き上げた。

「ユーノ！？」

「ヴィータ！！　どうした！？」

「早く二人を！！」

なのはが叫ぶ。状況の展開に追いつけない。
どう動けばいい――迷いは一瞬だった。しかし、その一瞬がソラ・ウィンガードの動き出しを致命的に悪くする。
背後で、何かが跳ねた。

「どけガキ共ッ！！」

咆哮が轟く。叫んだのはカグラだ。彼はそのままフェイトとシグナムの前に割って入ると、魔法陣を展開する。

――直後、世界が爆ぜた。

圧倒的な力の奔流。全力で展開したであろうカグラの障壁が一瞬で軋み、亀裂が入る。保たない――誰もがそう直感した瞬間、桜色の魔力が世界を染め上げた。

「ブラスター１！！　エクセリオン――バスターッ！！」

――ズドンッ！！

力の奔流を、更なる力の奔流が捻じ伏せる。全力の砲撃。誰に向かって放たれたものなのか――その答えは、すぐさま現れた。

「――流石だねぇ♪　これだけの差があって、まだ諦めないんだ？」

現れたのは、白衣を血で紅に染め上げた一人の少年。
――グリス・エリカラン。

「まあ、諦めてもらっても興醒めだけど――って、あれ？　ああ、誰かと思えば。増援かな？　数が増えたところで、何かが変わるわけじゃないと思うけど」

グリスはカグラたちを一瞥すると、楽しそうにそう言った。ソラは、そんなグリスの右腕を凝視する。

（……そういうこと、か）

びっしりと不可思議な文様が刻まれた右腕。グリスの体とは明らかにそぐわないその腕。

そしてこの、言い知れぬ圧迫感。

つまり――奴が。

「――――」

無意識のうちにソラは拳を握り締める。そんな様子がグリスの目に映ったのだろう。グリスが笑った。

「キャハハ♪　ずっと見てたよ？　宗主を討つなんて、随分やるもんだ♪――だけど、その程度じゃボクは倒せない。運命はこの手の中にある。さあ、やろう？」

「――レイジングハート」

諸手を広げ、グリスが言う。瞬間、いくつものシューターが駆け抜けた。グリスは、笑みを浮かべる。

「そうだね。あなたとの決着がまだ着いてない」

グリスが右腕を振るった。すると、なのはが放ったシューターが不

自然な軌道を描き、壁に直撃した。
なのはは止まらない。限りある天井の中とはいえ、広さは十全。空へと駆け上がる。
グリスはそんななのはを見上げながら、楽しそうに笑った。

「大空を舞う不屈の翼……鳥籠の中じゃ、飛べる高さも知れてるよ」

異音。世界が軋むような音が響く。
そして現れたのは、異常な光景。

室内を覆っていた壁の表面が剥がれ落ち、すぐさま黒光りする鋭利な刃へと変換された。刃の葬列。その光景に、ソラは見覚えがあった。

「これは――」
「……ふざけた力だな」

カグラも、サリヴァから降りながら呟いた。クライムのレアスキル、『異端狩りの刃』。それとよく似た光景だ。
グリスは笑う。

「さあ、踊ろうか。決着は見えているけど――精々、楽しませてよ」

対し、なのはは魔法で応じる。

「――――！」

極限の戦闘が、幕を上げる。

◇　◇　◇

高町なのはの敗北は、管理局の敗北である。
いつしか謳われるようになった文句の根拠は、彼女の武勇にある。
奇跡としか言いようがないほどの偉業の数々。こと戦闘においては、現代で管理局に並び立つ者は数えるほどしかいないとされる。
よく彼女と並び立つ魔導師としてフェイト・T・ハラオウン執務官や八神シグナム一等空尉の名が挙がるが、その当人たちも「彼女には勝てない」と断言している。

――高町なのはの敗北は、管理局の敗北である。

それは最早公然の事実であり、実際のところ、高町なのはが真っ向勝負で打ち負けるような魔導師が現れた場合、他に勝てる者などいないのだ。
だからこそ、彼女は敗北を許されない。
どんな状況であれ、その不屈の魂で勝ち続けなければならない。
しかし。
今、目の前にいる敵は――……

「アクセル――シュウタァァァッッッ！！」

放たれるのは、三十二発の弾丸。高町なのはの能力であれば、その全てを精緻なコントロールを以て操れる。
グリスに向かって直進する弾丸。しかし――

「外れ♪」

謡うようにグリスが呟くと同時、確実に直撃するコースで飛来していたはずのシューターが突如制御を失い、全て外れたのだ。見当違いの方向へ飛んで行ったそれらは、壁に直撃して霧散する。

（また……！？）

なのはは内心で舌打ちする。また。また、外れた。

突然制御を失い、必ず逸れる弾丸――まるで、『当たらないことが決まっている』かのようだ。ユーノとヴィータを抱えて退避していた時もそうだった。

なのはの頬を、一筋の汗が伝う。それを見透かしたように、グリスが笑った。

「焦ったかな？――じゃあ、次はボクのターンだね」

――ゴウッ！！

凄まじい音を響かせながら、無数の刃がなのはを狙って飛来した。

材質は壁面でこそあるが、そもそも亜音速に近い速度で飛来する武器はそれだけで危険だ。

なのはは高速機動に入り、それらを避けようとする。数が多いせいか、精緻なコントロールはない。避け切るのは難しくない――そう、判断した瞬間。

「まあ……甘いというか、何というか」

グリスの声。それと同時に。

――鮮血が宙を染め上げ、純白のバリアジャケットが紅に染まった。

「なのはっ！！」

フェイトが叫ぶ。なのはは、驚愕に目を見開いた。
回避行動にミスはなかった。全てを避け切れたはずだ。しかし、結果として駆け抜けた刃の悉くがなのはを掠め、その肌を切り裂いた。

「ふぅん……？　回避能力の見積もりが甘かったか。まあでも、十分かな」

致命傷ではない。しかし、全身に走った傷は動きを奪うには十分だ。

「……ッ」
「流石は『エース・オブ・エース』。遊んでたらボクが喰われそうだ――」

だから、と、グリスは言い。
前に突き出したその異様な右腕を握り締める。

「ここらでフィナーレといこうか。後がつかえてる」

紡がれるのは、巨大な刃。グリスは左腕を掲げると、それを中心に刃を組み上げた。そして、それを全力でなのはに振り下ろす。

――ゾンッ！！

その質量からは想像できないような速度で振るわれた刃が、凄まじい音を立てて振り抜かれる。
そして。
再び、鮮血が世界を染め上げた。

同時。
桜色の奔流が、少年を押し潰す――！
――ガドンッ！！
放たれた砲撃魔法により、壁が大破した。グリスは、へぇ、と呟きを漏らす。
「――やっぱり、凄いね」
大破した、左腕の刃。砲撃を喰らい、焼け焦げた左腕を見ながら、グリスは呟いた。
なのはを見る。なのはの右腕には、深い裂傷が走っていた。
なのはは痛む右腕を無視し、左腕だけでレイジングハートを構えた。あの一瞬、なのはは避けることを考えず、文字通り差し違えるつもりで踏み込んだ。振り下ろされる刃に対して一歩も退かずに、だ。その代償として右腕を斬られたが、代わりに左でを吹き飛ばすことに成功した。
「……」
なのはは、表情を僅かに歪める。血が止まらない。思ったよりも傷が深いらしい。だが、代わりに一つの成果を得た。
（届く）
不可思議な力で攻撃が延々と逸らされていたが、それも完璧ではな

いとわかった。ならば――届く！

「……ふぅん、成程」

「……？」

「舐めていたねぇ、これは。流石に天下の管理局。その、『エース・オブ・エース』。侮れる相手じゃない」

覚悟を新たにしたなのは。その目の前で、グリスは呟いた。同時、いきなりグリスは自身の左肩を掴む。

「邪魔だねぇ、どうも。まあ……換えればいいか」

――メギッ。

思わず生理的な嫌悪感を抱かずにはいられない、そんな音が響いた。グリスが、あろうことか自身の左腕をもぎ取ったのだ。

鈍い音を立て、地面に転がる左腕。その場の全員が、息を呑んだ。グリスの左肩から血が噴き出す。

「究極の力っていうのは、理を捻じ伏せるもの」

グリスが、その右腕で握り潰すように左肩を掴んだ。

血が、ただ噴き出すだけだった血液が、形を成していく。

「自然治癒の運命を改変した。腕一つ治すことなんて、造作もない」

それは棒状の形をとり、徐々に人の腕の形に変わっていく。

数秒後には、紅の腕が新たにグリスの左肩から生えていた。

「命とか使うわけだけど、まあ、別に。ボクの体ってスペアあるし。

右腕さえ付け替えれば代わりはいくらでもあるしねぇ」

なのはの顔に、笑みが浮かんだ。それは――絶望の笑み。
不可思議な現象のせいで、そもそも攻撃が当たらない。当てたとしても、その傷は容易く戻ってしまう。

「もう、人間じゃないね」

苦し紛れのように、なのはは言った。グリスは笑う。

「それは、あなたも似たようなものでしょ？」

グリスが言うと同時、再び無数の刃が展開される。

「『避けられない』という運命を付加した。どこまで踊れるか――見せてよ」

――放たれる、死の刃。なのはは息を吸い、括目する。
先程の砲撃……あれだけが、どうして届いた？　特に変わったことはしていない。
運命……グリスが何度も口にするそれが、おそらくキーワード。それを操作する？

わからない。わからないが――感覚が、告げている。
数多の戦場を駆け抜けてきた経験が、どうすべきかを告げている。

「レイジングハート」

なのはは呟いた。同時、彼女の愛機はすぐさま応じる。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

展開される砲撃魔法。グリスが笑みを浮かべた。余裕の笑みだ。自分には当たらない――そう、高を括っているのだろう。それは正解だ。故に、なのはの狙いはそこではない。

（何の工夫もない。これが教導だったら、あの子は零点だね）

向かってくる刃を冷静に見つめながら、なのはは呟いた。数は多いし速度も速い。しかし、単純すぎる。

そして。

なのはが、その魔導を開放する。

「ディバイン――バスターッ！！」

桜色の砲撃。グリスは右腕を突き出し、すぐさまそれを逸らそうとしたが、その前にその表情が変わった。

「まさか！」

――消滅。

文字通り、なのはを狙い撃とうとしていた刃の全てが、消滅したのだ。

単純な話である。グリスではなく、『グリスの放った刃』を狙い撃ったのだ。なのはにしてみれば、防御の一手だったわけだが――

「ぐっ！」

――ドンッ！！

あろうことか、その砲撃はグリスに直撃した。爆発の煙。なのはは驚愕の表情を浮かべるが、同時に反射とも呼べる速度で叫んでいた。

「フェイトちゃん！！」

同時、『雷光の死神』が駆け抜ける。真・ソニックフォーム。出し惜しみなしの全力だ。

「バルディッシュ！！」

叫ぶと同時、振り抜かれる二刀の刃。金色の雷を纏うそれは、グリスを穿ち、弾き飛ばす。

――当たった。その場の全員がそれを判断した瞬間、更なる追撃が行われる。

「『紫電！！　一閃！！』」

紅蓮の炎を纏う騎士の一撃。しかし、それはグリスの展開した障壁によって阻まれる。だが、障壁だ。先程までは回避行動さえも取ろうとしなかったのだ。それが、受けに回った。

――勝機！！

動きは早い。距離を取ろうとしたグリスに対して次いで放たれたのは、巨大な火球。黒竜サリヴァルムの一撃だ。

「へぇ……！」

グリスはそれを、身を捻って避ける。その背後で、魔法陣が煌めい

た。

「――転移魔法ってのは、扱いが難しいな」

現れたのは、この中で唯一バリアジャケットを纏わない少年。『陽光』が、その手に握った一本の刀を振り抜く。

――鮮血。

その斬撃は、正確にグリスの正面を斬りつけた。噴き出す鮮血。それを浴びながら、しかし、ソラはちっ、と舌打ちを零した。

――ズンッ！！

受け止めた衝撃をそのままに、壁に激突して砂塵を巻き上げるグリス。ソラの背後から、カグラが声を飛ばした。

「やったか？」

「いえ。斬る瞬間にこちらに突っ込んできました。腕はまだです」

「なら――俺の番だ」

言うと同時、カグラが床を掴んだ。全力の肉体強化により、床を持ち上げ、巨大な塊を持ち上げる。

「うらあっ！！」

咆哮。思い切り投げつけられたそれは、純粋な質量による攻撃だ。

――轟音。グリスがいるであろう場所に着弾したそれを見届け、カグラは息を吐く。なのはたちも降りてきた。

「……終わったのかな？」

ポツリと、フェイトが呟いた。それに対し、わかりません、とソラが応じる。

「ただ、ダメージは通ったはず。『運命改変』――使い手が本物でない以上、やはり弱点はありました。不意に弱い」

「不意って？」

「隊長には話していませんでしたね――まあ、皆さんに話したのもさっきなんですが。……『運命改変』。それが、奴が手にした能力です。本来は、この子の能力ですね」

ソラは、サリヴァの背に乗った状態で眠っている少女を見、頭を撫でる。そうしてから、言葉を続けた。

「レアスキルと呼んでいいのかどうか……あまりにも規格外過ぎ、てその判断さえ難しいのですが。不死の存在たる『聖人』には運命が見えたようです。世界がどう動いていくかの物語。しかも、『聖人』はそれを覆す能力まで有していました。

なのはさんの攻撃が当たらなかったのも、おそらくはそれが原因です。

『当たる』、という運命を『当たらない』という運命に改編する――無論、言葉で言うほど容易いことではありませんが。どちらにせよ、規格外の力です。

しかし、グリス・エリカランには運命を見るほどの能力はない。ならば、不意を衝けば――グリス・エリカランに見えない場所からの打撃は、何よりも効くはずです」

ソラの言葉。それに対し、全員が成程、と頷いた。その中でもなのはは、少し考え込む。

――自分の撃っていた攻撃は、全て精緻なコントロールを以て放っ

ていた。
それが悪いということはない。だが、人の意志で操れるということは、予測ができるということだ。何せ、どう動くか、の答えがあるのだから。
予想外の攻撃――それについて、なのはは本能の部分で理解していた。あの連撃の口火を切った砲撃も、グリスではなくグリスの放った攻撃を狙ったためにグリスは反応が遅れた。
その後の不意打ちの連打もだ。――結局、そういう能力なのだろう。
運命改変。
そんなふざけた能力、あるのかどうか疑わしいが……グリスが正体不明の能力を有しているのも事実だ。
ただ――
「……私たちの目的は、グリス・エリカランじゃない。私たちの目的は、あくまで動力炉の破壊だよ」
なのはが、確認するように言う。そう、目的は核兵器を止めることだ。それを忘れてはならない。
「だな。時間もねぇ。グリスの生死確認は――」
「――――」
ドサッ、と、何かが倒れる音が響き渡った。全員が弾かれたようにそちらを見る。
――ソラ・ウィンガードが、倒れていた。
「ご高説、ありがとう。……魔法弾の一発でノックアウトか。随分、ボロボロだねぇ？」

「……ぐっ……」

ソラは呻き声を漏らす。だが、それが彼の限界だ。
そもそも、ソラはここに至るまでに相当なレベルで自身の体を傷つけている。立っているのが不思議なほどの状態だったのだ。それでも尚、戦えたのは偏に彼の心故。
意地に近い。
しかし、それでも限界だ。

「グリス！！」

カグラが吠える。対し、グリスは口元に笑みを浮かべ、言葉を紡いだ。

「――リンク接合。コード・インペリアル。――並列高速演算、開始――」

吹き荒れる魔力。なのはたちは即座に動いた。しかし。

「遅いよ」

声が聞こえたと同時、シグナムが吹き飛ばされた。目に見えない力によって吹き飛ばされ、壁に叩き付けられる。
シグナム、と、フェイトがそちらへ視線を送る。だが、それが致命の隙。

「――かっ……！？」

突如、全身を何かが押し潰そうとしている感覚に襲われた。地面に押さえつけられる。重力魔法、違う。これはもっと凶悪なものだ。

「お返し」

――ガドンッ！！

残酷な笑みと共にフェイトに向かって放たれたのは、先程カグラがグリスへと投げつけた大質量の塊だった。上空より凄まじい速度で落下してきたそれに、フェイトは押し潰されそうになる。

「フェイトちゃん！！」

だが、間一髪、なのはがフェイトの手を引いて救い出した。しかし、この極限の戦場。運命などというものを操る怪物を相手に、他者を気遣う余裕など本来ならあり得ない。

「甘いね、本当に」

ドスッ、と、なのはは自身の腹部から衝撃を感じた。見ると、彼女の腹部から一本の腕が生えている。
背後から――貫かれた。

「他人救って自分がやられてちゃ、世話がないよ」

呆れたような、嘲笑を含んだ言葉。しかし、なのははここで止まるほど安くはない。

「フェイトちゃん！！」
「バルディッシュ！！」

叫びと共に、雷光の一閃が迸った。容赦のない一撃は、なの歯を貫

いていたグリスの左腕を斬り飛ばす。グリスは、ふう、と息を吐いた。

「無駄だって言ってるのに」

グリスが二人に右手を翳す。同時、砲撃が放たれた。
二人を呑み込む凄まじい威力の砲撃。グリスは、笑う。

「まあ、実際こんなものだよね。本気になれば相手にすらならない。万全ならともかく、キミたちはボロボロだ。負ける要素はないよ」
「……管理局のトップエースを相手に、言うじゃねぇか」
「この右腕があるからねぇ。……あなたは来ないの？」

煙草を咥え、紫煙をくゆらせるカグラに対し、グリスは挑発するように問う。その問いに対し、カグラは無言。グリスは、キャハハ、と笑った。

「まあ、無理か。かつての『エース・オブ・エース』も、今は翼をもがれた有象無象。運命なんかに勝てるわけがない」
「……運命、ね」
「そこの天才くんの言葉は正解だよ？　事実も事実、大正解♪　流石に一人の脳味噌じゃ、いくらボクが天才でも限界があってねぇ。――だから、繋げた」

グリスは、酷薄な笑みと共に言葉を続ける。

「ボクのスペアはさ、万を超える貯蔵がある。それと繋げて、分割演算思考をした。……どうかな？」
「――運命を演算したか」
「正解。ボクは弱いからねぇ。……けれどまあ、今回は逃げるわけ

にもいかない。全力で勝たせてもらうよ」

狂気の瞳。カグラは、了解、と頷いた。

そして、拳を握る。

「まさか、ガキ共の相手をして俺を無視するなんてこたぁねぇよな？」

「……やるんだ？」

「当たり前だボケ。――さあ、やろうぜ」

魔法陣が展開される。そうして構えを取りながら、ああ、とカグラが呟いた。

「後輩共。お前たちの先輩として、俺が戦ってやろう」

なのはの目に、その背が映った。

力を奪われ、堕ちたとされる英雄。

「お前たちの戦い方を見てたが。なってねぇな。そんな戦い方、俺は教えた覚えはねぇ。見せてやるよ、ガキ共。戦うということはどういうことなのか。運命に抗うというのはどういう意味なのか」

七色の光が噴出する。

美しい輝きが、世界を染め上げる。

「その目を開いて焼き付けな。英雄の戦い方を」

そして、カグラが駆ける。

「――これが、カグラ・ランバード最後の教導だ」

◇　◇　◇

――運命は変えられる。残酷な未来は、打ち壊せる。
誰よりも大切だった――いや、大切な人に教えてもらった言葉だ。
それを為す時が、今なのだろう。

（ただ、速く！！）

思い切り床を蹴り飛ばし、交錯様に蹴りを叩き込む。だが、外れ。

「……♪」

楽しそうな笑みを浮かべるグリスの顔が見えた。なめるな、と呟く。
壁を蹴り、更に速度を上げた一撃を叩き込む。しかし、また避けられる。

突撃。避けられる。
突撃。避けられる。
突撃。避けられる。

当たらない。その事実が重い。しかし、これはまだ天秤がどちらにも傾いていない証拠といえる。グリスがカグラの動きを完全に掌握したならば、避ける必要さえなくなる。『勝手にカグラが当てなくなる』という状況になるからだ。
故に、カグラは全力で地面を蹴り飛ばす。

――速さだ！！　考える暇を与えるな！！

自身の魔力を、姿勢制御と足裏の強化に全て注ぎ込む。全身の筋肉の防護には気を払っていないため、実は凄まじい勢いで筋繊維が千切れ、内出血を起こしているが――知ったことか。

――もっと、もっとだ！！

思考演算、万人の並列を相手とすれば、余計な小細工など無駄。ならば思考の時間を稼がせないよう、全速力を持ってい相対するのが望ましい。

加速。

加速。

加速。

空を切る幾多の一撃。速さとは極限まで至ればそれだけで必殺となる。しかし、グリスはまるで申し合わせたようにその全てを避けていく。

その、互いに一撃を加えることのない戦いがどれだけ続いたか。

限界を迎えたのは――英雄だった。

――足が……！？

壁を足裏で掴んだ瞬間、太ももの皮膚が破裂した。血が噴き出す。

それを見て取ったグリスが、キャハ、と醜悪な笑みを浮かべる。

「チェックメイトだ」

一瞬でカグラの眼前に辿り着いたグリスが、その右手をカグラの腹部に押し込んだ。

――ズドンッ！！

カグラの体を衝撃が走り抜ける。駆け抜けた衝撃はカグラの背後にあった壁をも打ち砕き、カグラの口端からは血が零れ出す。

「――――」

声が聞こえた。何と言っているかはわからない。だが、おそらく自分の名を呼んでいる。

馬鹿だな、と、カグラは小さく呟いた。

自分たちも相当傷ついているというのに、こんなポンコツの心配をするとは。

――嗚呼……そうだな。

まだ――やれるな……！

自分は言った。教導をしてやると。最後の教導だと。

ならば、ここで動かずしてどうするか。ここだろう、カグラ・ランバード。お前が残したいものは、この一瞬にこそ紡ぐべきものだろう？

ならば――突き進め！！

「――よう」

グリスの右腕を掴み、カグラは言う。

彼の背後に展開されるのは、奇怪な魔法陣。ミッド式ともベルカ式とも違う、禁断の術式。

その力を、グリス・エリカランは知っている。

運命を変える力。名を――

「――オリヴェント式!!」
「正解だ!!」

――ゴンッッッ!!

強烈な拳がグリスを打ち抜いた。吹き飛ぶグリス。だが、そこで勝負は終わらない。
魔法陣を展開。空中に足場を形成。そのまま、全力で蹴り飛ばす。

「――――」

音さえ置き去りにした高速の一撃。だが、それはグリスに避けられる。感覚の消えてきた両足のせいで、満足な動きが許されない。
それでも、カグラは前へと進む。
拳を振るう。
肘を放つ。
砲撃は――ない。

余力がない。ここで決められなければ、おそらく詰みだ。
だからこそ、突き進む。

――運命は、変えられる。

言葉さえ紡げなくなっていくほどに壊れていく体。限界の、極限の領域。
ここに至り、ようやくカグラは理解する。あの男は、最弱の青年は、ずっとこんな思いをしてきたのかと。
これは、辛い。
命が消えていく感覚は、何より――怖い。

――悲しい未来は、打ち壊せる。

しかし、だからこそ止まれない。
伝えたいことも伝えなければならないことも、まだまだ多く残っている。大体、自分自身が未熟者。全てを伝えても十全とは至らない。だというのに、伝える時間は残っていない。

なら、どうすべきなのか。
どうしたらいいのか。

ただ――語ればいい。
歩んできた道を、背負ってきた背中を、見せればいい。
だからこそ、これが最後だ。最後の――教導。

「捉えた♪」
「――――ッ！？」

腹部に、強烈な衝撃が走った。触れないままの打撃。重力操作――いや、空間操作。流石に運命操作などという破格の大技だ。こんな規格外のことも平然とやってのける。
悲鳴よりも、吐血が先だった。凄まじい量の出血。だが、カグラの瞳はグリスを捉えて離さない。

――ざけんな！！

吠えた。声となったかはわからない。だが、それでも。
しかし。
次いで――カグラの頭部に、凄まじい衝撃が走った。

◇　◇　◇

「――カグラさん！！」

その場の全員が叫んでいた。吹き飛ばされたカグラが、壁に直撃し、それを破砕し、瓦礫に押し潰されていく。

グリスは、終わり、と首を傾げた。瞬間。

――ズドンッッッ！！

砲弾のような勢いで、何かが着弾した。カグラだ。しかし、彼は見当違いの方向へと着弾している。グリスが、再び首を傾げた。

「どういうつもり――」

――ゴンッッッ！！

グリスの腹部に、カグラの肘が直撃した。たまらず、グリスは吹き飛ばされる。だが、その異様な再生力によって傷はすぐに修正された。

そして、カグラは笑みを浮かべながら、言う。

「ああ、そこにいんのか。歳かね。目が悪くなってる」

ポタリと、紅の滴が斑点を作った。頭部から流れ出る血と、今の言葉。

――カグラは、目が見えていない。

そんな状態で、音を頼りに戦っているのだ。

グリスが、初めて笑みを消し、言葉を紡ぐ。

「無様だね。そんな姿に成り果てて、何を望むの？」

「――未来」

迷いのない言葉だった。グリスは、ふう、とため息を吐く。

「少しは……マシな言葉を、期待したのに」

――轟音。

空間操作により、カグラが吹き飛ばされた音だ。壁に減り込む体。

悲鳴。グリスは、しかし、止まらない。

「死になよ」

「……」

カグラが何かを言った。声帯がやられたのか、声は聞こえない。ただ、彼が諦めていないことだけはわかった。

――突撃。

再び、高速の突撃が敢行される。しかし、やはり避けられてしまう。それどころか、突撃の速度も制度も滅茶苦茶だ。確かな意識があるかどうかさえ分からない。

カグラ・ランバードは、英雄である。

しかし同時に、彼は力を失った魔導師でもある。

今の彼は総合ＡＡランク程度の力しかない。それでも十分高い方ではあるが、しかし、この場においては力不足であることは否定できない。

それでも、彼は進む。同時に、あり得ない力を発揮する。

――何故か？

あの魔法陣だ。普通の魔法陣とは違う、得意な形をした魔法陣。あれが、規格外の力を吐き出している。

しかし、きっと、代償は大きい。

あれが、命を使う、術式。

――何故？

なのはは、拳を握り締めた。立てない体。こんなのでは駄目だ。こんなところで這い蹲るために、ここに来たわけではない。差し違えてでもグリスを止めなければ。

……最後の教導、と、カグラは言った。

ならば、知らなければならない。学ばなければならない。

何のために。

誰がために。

どうして――諦めない？

何故、あそこまでボロボロになって――

「――――」

――それが見えたのは、偶然だった。

笑み。

カグラの口端に浮かんだ、僅かなそれ。

彼は意地で諦めていないのではない。

彼は、見えているのだ。

希望が。
未来が。
だから、彼は。

彼が、戦うのは――……

――辿り着くことができたのは、彼女が天才と呼ばれる魔導師であったため。
そして、カグラ・ランバードの背を見てきた故。

刺し違える？――馬鹿を言うな。それでは駄目だ。命をドブに捨てることになる。
そうじゃない。魔法とは、悲しい今を撃ち抜く力。

未来を見ろ。
希望を抱け。

命懸けで――生き抜いて見せろ！！
それが答えだ！！

「――――ッ！！」

咆哮が響いた。それは、管理局が誇る天才が、更なる段階へと踏み込んだ証。
命とは、懸けるもの。

未来のために命を捨てるのではない。
未来を生きるために、命を懸けるのだ。
――命懸けで、生きていくために。

そうして――英雄が、更なる力を振り絞る。

◇　◇　◇

体が動かない。もう、目も見えない。音も聞こえない。話せもしない。
死んだのか、と、思った。
けれど、そうじゃない、と、音を出せない喉で呟いた。
生きるために戦っているのだ。死ぬために戦っているのではない。
自己犠牲など、掃いて捨てればいい。未来を歩むために、命を懸ける。

命懸けで――生きていく。
それが、オリヴェント式の真髄。

おそらく、ファイムのオリヴェント式にはそれが欠けていた。だから、あんなにも歪な未来を紡いでしまった。
それはきっと、教えを過った自分のせい。

ならば――せめて。
――こいつらには、さぁ。

そんな未来、歩かせたくねぇだろう？
未来はさ、明るくて。
とても――美しいんだから。

嗚呼。
嗚呼。
嗚呼……けれど。

もう、無理かもしれない。
せめて、伝えることはできたのだろうか？

……頬が、温かい。
無様な、涙。

――されど。
もう見えないはずの瞳に、光が映った。

桜色の、全てを包み込むような優しさと強さを持った光。
そして、それを纏う不屈の背中が。

笑みを零す。――なんだ、伝わってるじゃねぇか。
流石に、優秀だな。

まだまだ、伝えたいこともあったけれど。
ファイムに……詫びを、入れたかったけれど。

？――カグラくん？

声が、聞こえた。
久しく聞く、片時も忘れたことのなかった声。

――悪いな、と、呟いた。

遅刻に遅れたような口調で、静かに。

――今、そっちへ行くよ。
随分――待たせた。

そいつは。
笑っていて。

ゆっくりと、首を左右に振った。

？――お疲れ様？

ああ、と、カグラは頷いて。
ゆっくりと――微笑んだ。

◇　◇　◇

――気配が、死んだ。
高町なのはは、それを背中越しに理解した。

英雄が、ここで。

私は、また――！

「――――――――――、」

――守れなかった。

獣のような咆哮が、大気を震わせる。

最終話　優しい嘘　前篇（後書き）

……いやもう遅くなって本当にすみません。
書いていたら余裕で四万文字オーバーの気配だったので、急遽予定を変更して前後篇にしました。本当にすみません。

さて、皆様のおかげで１８００００ｐｖ突破しました！！
ありがとうございます！！

そして、完結後のリクエストもありがとうございます！！
更にですね、実は完結後に記念小説を書こうと画策しておりまして。
更にですね、その中で大隊戦をしようとも思っているのです。

そこで、コラボを募集したいな、とか思ったり。
局内の話ですので、できれば局員、もしくは聖王教会の人間を出してもらえると嬉しかったり……よろしければ、是非。

今回、一人の男が一つの結末を迎えました。
彼の辛い道のりもここで終わり。後継者に託すという役目は、実は高町なのはに対してのものでした。
このくだりも、最初から考えていたものです。
ご意見、感想、頂けると幸いです。

ありがとうございました。

では、最終話の後篇でお会いしましょう。

お付き合いいただけると、幸いです。

最終話　優しい嘘　後篇（前書き）

戦争は終わる。
数多の犠牲と、想いの終焉の果てに。

青年が選んだのは未来ではなく。
優しい――嘘だった。

最終話　優しい嘘　後篇

響き渡ったのは、後悔の慟哭。
まるで獣のように叫ぶのは、その場で意識を有していた魔導師たち。

フェイト・T・ハラオウン。
八神シグナム。
ソラ・ウィンガード。

三人が三人、等しく叫ぶ。

「――――――――――、」

それは、理性を失った獣の叫び。

――どうしてと、彼女たちは慟哭する。

英雄は死んだ。何度も何度も自分たちを救ってくれた男は、激闘の果てに沈んだ。
床を叩く。
ふざけるなと、叫び続ける。
動けと、怒鳴る。

「動け……ッ！！」

しかし、意に反して体は動いてくれない。

「どうして……ッ！？」

彼女たちは、自問する。
何のために、力を磨いてきたのかと。
それは、守るためではなかったのかと。

――自分たちよりも弱い英雄に守られる。
そのために戦ってきたわけでは、ないのだと。

こんなところで這い蹲るために、戦ってきたわけでは、ないのだと
――

「……」

その最中、一人の女性が前に出た。
――高町なのは。
溢れ出す魔力を身に纏い、彼女は言う。

「――許さない」

静かに、燃えるような怒りを込めて。
ツウッ、と、その頬を一筋の滴が流れた。不屈のエースの瞳から、
涙が幾筋も零れ落ちる。

「あなただけは――許さない！！」

――ゴバッッッ！！

吐き出された魔力が大気を揺らし、衝撃波が世界を打ち据えた。グ
リスが、笑みを浮かべる。

「へぇ……だったら、どうするの？」

「――――」

返答は――砲撃だった。

――ズンッッッ！！

凄まじい威力の砲撃が駆け抜け、グリスを飲み込んだ。グリスは右手を振るい、なのはの砲撃を打ち払う。だが、なのははすでに次の攻撃へ入っている。

「エクセリオンバスターＡ．Ｃ．Ｓ！！」

《Ｙｅｓ，ｄｒｉｖｅ！！》

魔力刃を展開し、突撃を敢行する。グリスが障壁を展開したが、構わない。刃を食い込ませ、引き裂くようにして穴を開ける。

「――――ッ」

「ドライブッ！！」

――ゴバッッッ！！

零距離から放たれるのは、桜色の砲撃。圧倒的な威力。しかし、そもそも『魔法は当たらない』という運命を自らに課しているグリスには、十全な威力を発揮できない。

それ故の、オリヴェント式。今でこそ、なのはは魔法を感覚ではなく理論で紡いでいるが、そもそもの彼女は理論というよりも感覚で魔法を紡ぐ天才だ。オリヴェント式という術式の存在を知らずとも、感覚だけで彼女はそれを使いこなす。

何故ならば。いつだって彼女は、命懸けで戦ってきた。

そうして――奇跡を起こしてきた。

――今更、命を懸ける術式について学ぶ必要などない。

（……ごめんね、ヴィヴィオ）

内心で、なのはは愛娘に対して呟くように言葉を紡いだ。ヴィヴィオ。大切な娘。宝物。

見守ること、守っていくことを自らに課し、そして、そこに幸福を感じてきた。

しかし、今、自分は命を使っている。

あの子と共に在れる未来のいくらかを削って、立っている。

「レイジングハート！！」

でも、と、なのはは思う。

この戦い――戦争に近いこの戦いのために、多くの犠牲が出た。そして、グリス・エリカランという最悪の敵と相対するために、一人の魔導師が命を懸けた。

繋げるために。

遺すために。

――ならば、自分がすべきことは何だ？

そうだ――その想いを、受け継ぐことだ！！

「全力！！　全開！！」

吠える。息つく暇など与えない。相手が相手だ。油断すればこちらが喰われる。

それに、この力をまだ十全には使い切れていない。ならば、相手が

体勢を立て直す前に叩き潰す。

「――チッ」

初めて、グリスの表情から余裕が消えた。同時、四十ものシューターが姿を現す。なのはは展開しようとしていた魔法を中断。シューターを展開する。

「――――ッ！！」

放ったのは、同時だった。

二つの光が至る所で激突し、その余波で周囲が砕け散っていく。

轟音を立て、軋む世界。極限の戦いが、幕を上げる。

獣のような咆哮は、互いに退けぬことを示すもの。

前へ。

ただ、前へ。

前へと――ひたすらに。

掴むべきものは、その先にある。

◇　◇　◇

失楽園シャングリラ――そこを抜け出したはやては、中空でその威容を眺めていた。

圧倒的な存在感。戦乱の時代、古代ベルカにはこんなものが存在し

ていたというのか。

そして、同時に。

「こんなものを使わなアカン程に……世界は、混乱してたんか？」

誰もが平穏を目指した時代だったという。しかし、それでも成し遂げられなかったものがある。

そして今、かつて封じられた力を以て、終結した戦乱を再び起こそうとする者がいる。

認めるわけにはいかない。認められるわけがない。

ならば――

『――八神准将、聞こえますか？』

声が届いた。はやてが振り返ると、そこには見覚えのある一隻の艦船が浮かんでいる。

アースラ。

かつて、闇の書を打ち砕き、リンディ・ハラオウンからクロノ・ハラオウンへと受け継がれ、八神はやて自身もＪＳ事件の際に艦長席へと座った伝説の艦。

今の名は、

Ｘナンバー１２――？アースラ？

来るべき災厄のためという名目で造られたという、古代ベルカの遺産――ロストロギアさえも凌ぎかねない禁断の力。

あんなものがあったことに、正直、嫌悪を抱かずにはいられない。

けれど、予測はしていたことだ。

管理局は決して、正義ではなく。
同時に、正義の味方でもない。

秩序を守るということは、平和を願うということは、イコールで正義となるわけではないのだから。

『八神准将。理事会の指令です。――――……』

内容は聞かずともわかっている。撃て、ということだろう。
手を汚し、闇を抱え、こちらに来いと。

『……はやてちゃん』

意識を取り戻し、はやてとユニゾンしているリィンが呟きを漏らす。
心配してくれているのだろう。
だがはやては、もう、立ち止まれない。
だって。

――予感している。
もう自分は、彼とは――……

「行こうか、リィン」

呟くように、はやては言った。
黒き翼が宙を舞い、世界を染める。

「世界を、救おう」

そうして、戦いは終局へ。

世界が終わるまで、後、一時間を切っていた――……

◇　◇　◇

ファイム・ララウェイがその場所に辿り着いたのは、外でアースラが到着するのとほぼ同時だった。

無残に壁が抉られ、吹き飛び、原形さえとどめていない場所。
そこに倒れ伏すのは、幾人もの魔導師。

「やあ――遅かったね？」

楽しそうな声が聞こえた。血塗れだが、目立った外傷は見られない。
グリス・エリカラン――そいつがこの場所にいて、この状況を作り出していることに、ファイムはどこか納得していた。
思えば、この戦争が始まってから、幾度となくこいつとは向かい合った。
結局――そういうことなのだろう。

クライム。あの男とは結局向かい合うことがなかったが、それはそれだ。自らが相対すべき敵。殺すべき怨敵は、今、目の前にいる少年だ。
人の心を弄び。
全てを狂わせてきた、絶対的な敵。

――グリス・エリカラン。

「正直、危なかったよ。もしも『エース・オブ・エース』が万全で、

オリヴェント式を使うことに慣れていたなら、負けていたかもしれない。けれど……そうならなかった。キャハハ♪　やはり運命は――この手の中にある」

最初に目に映ったのは、悔しそうに這い蹲る三人の魔導師。

フェイト・T・ハラオウン。
八神シグナム。
ソラ・ウィンガード。

歴戦の魔導師であるはずの、自分よりも遥かに強いはずの彼女たちが、這い蹲っているという事実。

「何度砕こうとも、ボクの体は壊せない。さあ、カウントダウンだ。世界は終わる」

次に目に入ったのは、震える体でレイジングハートを杖とし、立ち上がろうとうともがく女性の姿。純白のバリアジャケットは血で朱に染まり、限界なのは一目でわかるほどだ。
不屈のエース・オブ・エース。
彼女でさえ、管理局の誇りである彼女でさえ、勝てない。

「祈るのか、抗うのか。まあ、全部が全部、無駄だけど……それで、あなたはどうするの？」

最後に目にしたのは、一人の英雄の姿。
座り込むようにして壁に背を預けるのは、誰よりも誇り高く、誰よりも傷つきながら、戦ってきた英雄。

たとえ力を損なっていようと、彼を英雄と呼ばぬ者はいない。

そういう生き方をしてきたのであり、そんな彼だからこそ、信じてきた。

だが、その、英雄は。

「弱者であろうと、僕は差別しない。かかってくるならきなよ。徹頭徹尾、全身全霊、殺し合おう」

――笑っている。
微笑んでいる。

満ち足りた笑顔で。
静かに。
静謐に。
侵すことを許されない聖域に佇む、聖人のように。

嗚呼、そうか。
そういう、ことか。

今、自分がすべきことは――……

「――――」

――ゴウンッッッ！！！！！！

凄まじい轟音が世界を叩いた。同時、グリスの体が宙を浮き、壁に叩き込まれる。グリスが体を起こし、前を見る。瞬間、その眼前にファイムの拳が現れた。

「一点突破――」

《――Ｗｉｎｄ　Ｂｕｓｔｅｒ》

轟音。

零距離からの、一切の容赦もない一撃。壁を撃ち抜く一撃は、グリスの体を焼け焦がす。

「――――ッ」

追撃へ――そう自然に考えたファイムの真横を、鋭い切っ先が駆け抜けた。壁の欠片を材質としてグリスが創った、鋼の刃だ。

――――ッ！！

大気を引き裂き、駆け抜けていく刃。背後の壁へと突き立つそれは、掠めただけでファイムの頬を深く切り裂いた。

「キャハハ！！　問答無用か！！　いいね――いいよ！！」

グリスの掌が突き出される。それを足を振り上げ、蹴り上げることで回避。そのままグリスの腹部へと両掌を添えると、ファイムは短く息を吸い――

「――フッ！！」

思い切り、押し込んだ。

寸勁、と呼ばれる技だ。透し、と呼ばれる技術で、相手の防御を『鎧の上から抜く』ための技術である。今や実践で使える者がどれだけいるかもわからない技術だが、そこはファイム・ララウェイだ。

修練で辿り着ける極地へ、極限の人生を経て辿り着いた究極の凡才。

天才に勝つことは叶わない。それが不可能であるということは、彼

自身が理解している。

「ぐ……ぶっ……！？」

グリスが呻き声を発した。口から血を滴らせている。当然だ。骨を打ち抜く感覚がある。

――この戦争が始まってから、ファイム・ララウェイは勝利らしい勝利を得ていない。

旅団発足の時に殺したグリスは、結局殺したところで意味がない存在だったし、先程のテンリュウとの戦いとてあちらはまだ戦えたはず。

つまり、彼は勝利を得ることなく、しかし、それでも戦っている。

――何故か？

彼は弱者であるが、愚者ではない。故に理解している。目の前の敵がどんな存在なのかを。

しかし、それでも彼は前へと進む。――何故か。

解は、単純。

退けぬ理由が――あるからだ。

ここで退けば、何も残らない。人類のため、世界のため、誰かのため――違う。そんなものを掲げて戦う日々は、歩んできた過去に置いてきた。

浮かぶのは――彼女の姿。

あの人を守るために、ただそれだけのために、自分は――

「おおおっ！！」

右手にミッド式を。
左手にベルカ式を。
過去から繋がり、未来へと進んでいく系譜を。
この手で――融合させる。

「吹き飛べ！！」
《Ｂｕｒｓｔ　Ｓｔｏｒｍ！！》

掌底を叩き込んでから、術式の発動まで十秒足らず。グリスは障壁を咄嗟に展開するが、ダメージによって揺れた意識が、一歩、踏み出すことを遅れさせる。

――凄まじい轟音が、世界を包んだ。

圧倒的な魔力の奔流。オリヴェント式の全力を注いだ一撃は、彼の体を老化させる。今の彼の肉体年齢は――十六歳。
ファイムは寿命を十九歳で迎える。ならば、使える命は後、三年分。

「……」

地面に着地するファイム。粉塵の中に魔力を感じる。感じていた違和感。あの右腕……どういうおものかはわからないが、これでは崩れてくれないらしい。

――クスッ。

笑い声が聞こえた。忍ぶような笑い声。それはすぐさま、哄笑に変わる。

「キャハ、キャハハッ、キャハハハハハハハハハハハハハハッッッ！！」

空に浮かぶグリス・エリカランは、笑っていた。

同時、ファイムは眉をひそめる。焼け焦げたようなグリスの体の損傷。それが、みるみるうちに修復していくのだ。

「妙だとは思ってたけど！！　変だとは、おかしいとは、異常だとは看破したけれど！！　そういうことかッ！！　キャハハハハハハハハハハハハハハ

ならば!!　ボクの望みは人の願い人の望み人の欲望!!　目を背けるなよ管理局!!　必要ないんだよお前たちは!!　ボクが害悪!?　ドクターが害悪だって!?　それは人類の否定だ!!
　人は欲望の果てにこうして生きている!!　そうして世界を回している!!　争いは本質だ!!　人の業だ!!
　何故それを否定する!?　管理局は混乱する世界を『武力で統制して』今の世界を創った!!　偽善だ欺瞞だ醜悪だ!!　そんなものが平和であるはずがない!!」
「……」
「そもそも!!　そもそもだ!!　どうしてボクやドクターは生み出された!?――そうだ管理局だ!!　管理局が必要としたからだ!!　こんなにも――こんなにも醜悪なものを!!」

管理局のために生み出された、負の遺産。
ジェイル・スカリエッティ。
グリス・エリカラン。
彼らの意識は、質量兵器と争い、人造生命にしか向いていなかった。
それは管理局の理念において許されるようなものではなく、しかし、生み出したのは管理局だ。
その矛盾。表には出せない矛盾。

管理局の矛盾そのものを、グリス・エリカランが糾弾する。

「進化には争いが不可欠だ。どんな生物でもそれは変わらない。より強く、より繁栄を。『産めよ増やせよ地に満ちよ』――神様が与えてくれた命令とやらは、そういうものだったはずだ。だけど、管理局がそれを阻んだ。突然現れたその組織が、その全てを否定した。
　質量兵器を否定し、進歩を否定して。どこまでも理解に苦しむよ。平和のためと言って進歩を捨て、緩やかな滅びに向かおうっていうんだから。

今更、世界の一つや二つが消えたからってどうしたっていうの？
甘んじて受け入れるべきだよ。それが滅びを回避する方法なら、
キミたちは」
「――滅びなんて、知らない」
拳を握り締め、ファイムは言った。
「人をなめるな――前に言ったはずだ、グリス・エリカラン。滅びに対し、人は抗う。戦うことができる。たとえ滅びに直面しようと、人は必ず乗り越える」
「平和ボケした世界で？」
「人は強い。お前なんかよりも」
「――それが、キミの理由？」
そんな体に成り果てた理由かと、グリスは問いかけてきた。
ファイムは、違う、と、言葉を紡ぐ。
「背負ったものがあるんだ。背負って、ここに来てる。
多くのものを背負ってきた。僕なんかには、荷が勝ち過ぎてるけれど――だからこそ、負けられない」
魔力が渦を巻く。
「来い、グリス・エリカラン。見せてやる。――ここが終焉の地だ！！」
◇　◇　◇

人々は、もう、逃げることを諦めていた。
どんな映画や小説でも、重大な危機において逃げることが許されるのは権力者や金持ちのみ。彼らが本当に必要な存在なのかどうかは別として、そういう物語が出来上がっている。
故に――逃げることが叶わなかった者たちは、ただ、ここにいる。

「――――」

どうしようもなくなった時、人は、どうするのか。
ただ――祈るしかない。
戦っている者たちがいることも知っている。だが、絶望は近付いている。

「……頑張れ」

誰かが、呟いた。

「……頑張ってくれ」

また、誰かが呟いた。

「私たちを――助けてくれ!!」

今度は、誰もが叫んでいた。
その声は届かない。しかし、想いは届く。

戦う者が誰なのかはわからない。けれど、彼らにはわかるのだ。
自分たちの全てを背負い、戦っている者がいる。

絶望の楽園の中で、戦う者が。

「世界を――救ってくれ！！」

――世界が終わるまで、後、五十二分。

◇　◇　◇

不快だった。

どう考えても、絶望しかない。勝てるはずがない。妙なことにl、あの青年には干渉が働かないが、それは慣れの問題だろう。すぐにどうにかできる。

英雄も、エース・オブ・エースも、墜ちた。

どうしようもないはずだ。世界は滅びる。仮に突破できたとしても、この先にある動力炉の破壊をすれば、膨大な魔力が撒き散らされて世界が吹き飛ぶ。

結局、世界は終わってしまう。

なのに――何故だ？

何故、立ち向かってくる？

「背負ったものがある？――戯言だね」

フン、と、鼻を鳴らしてグリスは言った。

「魔導師の強さは魔力量とその操作技術に左右される。そんな精神論――根性論でどうにかなるような話じゃない」

「……」

「ああ、そういえば例外がいたねぇ？　けれど、オリヴェント式も

結局は魔力量の上乗せ。……キミたちはいつだってそうだ。自分自身の向上を諦めて、？心？なんていうものに縋り付く。まるで、そんなものが本当に掌の上にあるとでも言うかのように」

グリスは嘲笑の笑みを零す。対し、ファイムは息を吸い。

「――それがわからないから、お前は所詮、そこまでなんだ」

――ヒュン。

耳元を通り過ぎた風切り音。瞬間、左肩に凄まじい熱が走った。斬られた、と思うと同時、グリスは背後を振り向く。そこに突き立つのは、一本の刀。

（あれは――！？）

最強の侍の愛刀、血桜――！

「――余所見をしている暇が？」

――ズドンッッッ！！

幾度目かわからない轟音が世界を叩いた。グリスの腹部へと叩き込まれた肘。体が宙に浮くと同時、その視界にそれが映った。

「色々と――背負って、託されて、ここにいるんだ」

《Ｓｔｏｒｍ　Ｌｉｎｅ》

折れた杖。それが、グリスの体目掛けて投擲される。速い。避けられない。避けることは不可能だ。

突き刺さる。衝撃。ただでさえ吹き飛ぶような衝撃を受けていた体が、それによって更なる加速を受け、壁に激突する。
そして――爆発。

折れた杖が、その生命の最後の仕事として、内包していた暴風を一気に開放する。吹き飛ぶ五体。しかし、すぐさまその体が再生する。

「もう、人間じゃないな」
「それはお互い様。――そうでしょう、人間を辞めた人？」

右腕以外が、全て紅の硬質的なものに変わった。不思議な感覚。なんだこれは、と思うと同時、満ち足りてきた感覚が体を覆う。
無駄を全て排除した状態。再生、という行為は、進化をも孕んでいるということか。

同時、グリスは理解する。幾度の衝突により、ファイム・ララウェイという存在を。
人を捨て、概念に至った存在。それは世界と同化するに等しい。そして、運命というものは世界を書き換える行為。世界そのものであるファイム・ララウェイには、運命操作が通じない。

（なら、周囲を砕けばいい）

ファイムの魔法は、運命操作によって防ぐことはできない。厄介な相手だ。立て続けに攻撃を喰らったのもそれが理由。おそらく、天敵と呼ばれる部類の相手だ。
なればこそ――ここで殺さなければならない。

「重力変換。――起動」

呟く。同時、周囲の壁が爆ぜた。高町なのはと殺し合いをした時のような、壁を材料とした刃を無数に展開する。魔法で殺すよりも、切り刻んだ方がいい。

対し、ファイムはワイヤーを使って血桜を引き戻すと、それを構えた。大した男である。まさか剣術の心得まであるというのか。

まあ――関係ない。

断ずると同時、グリスはその全てを投擲した。ファイムも応じる。

そして、極限の戦闘が幕を上げた。

◇　◇　◇

襲い来る刃の群れ。それを目にしたファイムは、内心で恐怖さえ抱いていた。

――エースたちは、こんなものを。

こんなものを相手にして、戦っていたのか。

「――――ッ」

歯を食い縛る。

たとえ相手が何者でも、戦ってきた。死さえも予定調和とされ、戦ってきたのではないか。

前に出る。

足を出す。

身を屈める。
前を見る。
手に力を込める。
刃を――振り抜く。

不思議な感覚だ。世界が止まって見せる。走馬灯とは違う。体が動く。
ならば――どうするか。

振り上げた刃が、一瞬にして敵の刃を斬り捨てた。凄まじい切れ味だ。流石は最強の侍が有する刃。

斬り捨てる。
斬り捨てる。
斬り捨てる。

空を駆け上がり、その眼前に到達する。そして――

「――紫電」

振り抜く刃は、全力の一撃。
刃を使う騎士の中で最強はあの人だ。その力を――借りる。

「一閃――ッ！！」

――ザンッッッ！！

凄まじい音。感じたのは確かな手応え。八神シグナム――彼の騎士とは何度も手合わせをした。自分の力は自覚している。だが、信じていない。

非力な自分が信じるのは、いつだって誰かの力。
共に戦う人の力こそを、信じなければ。

「――甘いよ！！」

咆哮が響いた。同時、ファイムの頭上に影がかかる。
見上げる暇はない。感覚で理解する。質量だ。頭上から、何かで押し潰す気か。

――させない！！

加速する。宙を蹴り、世界を駆ける。
駆ける。駆ける。駆ける。
だが――間に合わない。

「潰れろ」

声が聞こえた。誰が、と、大気を震わせない返答を返す。
ワイヤーを射出。張力により、自身を飛ばす。

――何かが背を掠った。だが、直撃はない。
眼前。舌打ちを零しそうな表情のグリスがいる。その体へ、拳を叩き込む。

固いものを叩いたような感触。当然だ。最早グリスの体は、人のものではない。
だが、だからなんだという。こいつを超えなければ、先はない。

「――――ッ！！」

極限の集中と共に、ワイヤーを操作する。全神経を注ぎ、グリスの体に巻き付ける。

（――右腕は無理か……！）

何の魔法か、右腕には届かないらしい。くそっ、と呟くと同時に、ファイムはワイヤーの固定を終える。
右腕以外の全てを拘束し、縛り上げる。

「ぐっ……！　キャハハ、縛り上げて収束砲でも撃つ気？」
「――いや」

ファイムは、その右腕を、振り抜く。

「――刻む」

――――――――――。

形容しがたい音だった。全身を引き裂いた音。グリスの異様な体が、粉微塵に吹き飛ぶ。
やった、と、誰もが思う。だが――

「甘く見られてるねぇ」

鈍い音を立て、その体が再生した。

「不死というもののの絶望、味わってもらうよ？」
「……」

ファイムは無言。加速の術式を発動する。

限界が、近付いていた。

◇　◇　◇

二人の戦闘。極限のそれを見ながら、なのはは呟いた。
――このままではマズい、と。
ファイムの速さも力も、明らかに彼の能力を超えている。あれは最早オーバーSランクの力だ。彼の身には余る力。

けれど、止めることはできない。

わかる。高町なのはだからこそ、理解できる。どれほどの代償が待っていようと、決して彼は止まらない。そういう道を選んでしまっている。
かつての――いや、今も尚、そういう道を選んでしまっている自分と同じように。

ならば、手を貸すのは自分の役目。

「いくよ……レイジングハート」
《Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ》

相棒の言葉。本当に頼りになる。
道を開くため、運命を打ち破るため。
これは、そういう戦いだ。

ならば。
ここで自分が動かねば――魔導師として生きると決めた、意味がな

い！

――そして。

高町なのはの力が、炸裂する。

――ガドンッッッ！！

駆け抜けた桜色の流星は、戦闘中の二人にとっても予想外だった。

その奔流に呑み込まれたグリスが、その顔を再生しながら吠える。

「な、っ……フルドライブ！？　命が惜しくないの！？」

「――今更、お前がそんなことを口にするのか？」

そして、再びワイヤーがグリスを拘束する。縛り上げられたグリスは、再び自由を失くす。ファイムが、呼びかけてきた。

「なのはさん。――十秒。時間を」

酷く冷静な言葉だ。やはり彼は凄い。戦場において的確な答えを導き出している。

十秒――それは、最早限界に近いなのはが、ここからの脱出という余力を残した上で凌げる時間だ。

もっとも――その時振るわれる力、なのはの命については、度外視されているが。

「――うん。わかった」

頷くと同時、シューターを展開した。同時に、オリヴェント式を展開。圧迫するような感覚が薄らぐ。おそらくだが、グリスあたりがそういう操作を行ったのだろう。
故に、フェイトたちは動けない。動けるのは、託されたものを受け取ることができた自分だけ。

――なのは、と、自分を呼ぶ声が聞こえた。
――ごめんね、と、謝った。

体は限界。気合だけで立っていたのは、倒れたら意識ごと持っていかれると思ったから。万全には遠く、砲撃も今のが最後だろう。
だけど。
立ち上がらなければならない。
世界を、救うために――！

「――不屈、か。上等だね」

最早姿さえも化け物と化したグリスが、呟く。
その、最中。

「――起動、収束」

ファイムが、左手に血桜を持ち替え、右手を前へと突き出した。

◇　◇　◇

何をする気かはわからない。ただ、グリスは直感した。

――早急に抹殺する。

高町なのはは虫の息。いつでも殺せる。厄介だが、放置してもいい。だが、ファイム・ララウェイは違う。あれは何かを企んでいる。放置してもいい敵じゃない。

殺す。

判断は一瞬。しかし、実行は阻まれる。

「――――ッッ！？」

眼前に展開されたのは、無数のシューターだった。コントロールを捨て、数を優先してきたらしい。隙のない弾幕が張られる。

――マズい！！

突破を試みる。しかし、オリヴェント式を用いて展開された術式だ。運命操作が上手く働かない。

それに、もう一つ。

何故か、少しだけ体が重い。だが、問題ないと判断する。

シューターを弾く。そして気付く。大した威力ではないと。

ならば、と、正面突破を目指した。しかし、それでも数は数。突破は容易ではない。

荒れ狂う弾雨の中を駆け抜け、高町なのはを視認する。酷く憔悴しきった顔だ。あれは放っておいても自爆する。ならば、標的は――

……

「――花鳥風月」

足下から、声が聞こえた。そこにいるのは、右手に翡翠の刃を携えた魔導師。

――収束砲を、剣に……！？

圧縮、という技術がある。一種の魔導技術だ。これは圧縮する対象の規模が大きければ大きいほどに困難な技術となる。ちなみに高町なのははこの手の術式が一番苦手である。

わかる。ファイムの右手。その手に握られた剣は、膨大な魔力が圧縮されて造られた剣だ。ファイムの手によって作られたそれを喰らえば、凄まじいダメージを受けるだろう。

だが――こちらは無限の再生力を誇る存在だ。すぐに再生する。肉を切らせて骨を断つ――そうだ、それでいい。

「――――！」

振り抜かれた。血桜と、収束砲を圧縮した高密度の剣。体が深く斬られ、一刀は腹より下を。一剣は左腕の肩から先を奪い取った。

衝撃と激痛。だが、それもすぐさま――……

「……あれ？」

再生……しない。

いや、再生はしている。だが、遅い。致命的なほどに。遅すぎる。

どういうこと、と、グリスが呟くと同時に、ファイムが言った。

「限界だ」
「限、界……？」
「いくら不死でも、限界はある。あれだけ無茶な再生を、そう何度も何度も繰り返せるわけがない」
荒い息を吐きながら、ファイムは言った。グリスは、馬鹿な、と言葉を漏らす。
限界？　ありえない。ありえるはずがない。これは、この力は――
「そんなはずがない！！　ボクは究極の力を手にした！！　運命さえも捻じ伏せたんだ！！」
「そう思っているのはお前だけだ」
「ふざけるなッッッ！！」
突き出された拳。だがそれは、合わせた二本の刃によって防がれる。そして、グリスは気付いた。体が重い。再生も、途中で止まっている。
「聖人の――究極の！！　聖王と覇王がようやく封印したほどの力だ！！　最強の力だ！！　それが、お前程度の力で――！！」
「負けたんだ、聖人は。それはつまり、万能じゃないということ。運命を操ろうとどうしようと、結局神様にはなれなかったんだ。――それに」
ギリギリと軋む刃の向こう。ファイムは、凛とした表情で言い放つ。
「僕だけの力じゃない」
「……！？」
「なのはさんの、カグラさんの、フェイトさんの、シグナムさんの、アギトの、ソラの力だ！！」

――鈍い音。
ファイムの拳が、グリスを殴り飛ばした。最早人の姿を留めていない顔がへこむが、再生はゆっくりと進むのみ。
衝撃で吹き飛んだグリスは、酷く緩慢な動作で立ち上がる。何故だ、と、叫び続ける。

「何故!?　どうして!?　これは王の力――世界を統べる力のはずなのに!!」
「それがお前の敗因だ、グリス・エリカラン。有限を無限と信じたこと。この世に無限なんて、都合のいい話はありはしない。永遠もない。有限だから、限りがあるから、だから、生きるんだ」
「敗、因……？」

ファイムの言葉が、酷く、響く。

敗北？――この、ボクが？
有り得ない。有り得ない有り得ないアリエナイイイィィィッッッ!!!

「ボクは究極の力を手にした!!　負けるわけがない!!」
「見苦しいね」
「認めない……認めてたまるかッッッ!!」

絶叫が響く。同時、グリスの左腕が変質し、巨大な剣が形作られた。
ファイムがやったように、大気から強引に魔力を収拾。その暴力を纏い、刃が振り下ろされる。

「負けるか――負けるわけがない!!　ボクはグリス・エリカラン!!　アンリミテッド・デザイア!!　世界をこの手に!!　消え

ろ！！　消えてしまえ！！　負けるものかァァアアア

だが、あまりにも突然のことにはやては眉をひそめる。不気味過ぎる。なんだ、この、嵐の前の静けさのようなものは。

「――ファイムくん」

呟く。すでに、旅団のほとんどは脱出していた。残っているのは、最深部に向かっている者たちのみ。

故に、彼女は案じる。大切な親友たち。大切な家族たちの無事を。

――何より。

誰よりも愛する、彼のことを。

――引き金を引く時は、着々と迫っている。

◇　◇　◇

終わった、と、ファイムは思った。

これで、後は動力炉を破壊するだけだ。

「……」

流石に負担をかけ過ぎたのか、口元から零れる血をファイムは拭い去る。剣は展開したままだ。この先、必要になるだろう。

「ファイムくん」

背後から声が届いた。なのはだ。彼女は、大丈夫、と問うてくる。

ファイムは頷いた。

「大丈夫です。それよりも急ぎましょう。早く動力炉を破壊しないと」

「そうだね。この先にあるはずだから――」

なのはが言葉を紡ぐ。視界の端で、フェイトやシグナム、ソラが立ち上がるのがわかった。しかし、カグラは動かない。

――カグラさん。

内心で、ファイムは呟いた。英雄として戦い続けてきた男。彼は、この場所で何を見たのだろう。

行方不明と聞いていたが、生きていて、そして、果てた。

問いたいことも、教えてもらいたいことも、いくつもあった。

だが、もう――

――――――――――――――――――ッ！！！！！！！

不意に、建物内が大きく揺れた。何だ、と、誰ともなく声を漏らす。おぞましい轟音。思わず、声を上げた。

「この揺れは……！？」

遂にタイムリミットがきたのか、と、全員が同時に思った。しかし、時間の余裕はまだある。ならば、これは何だ。

軋むような咆哮を上げる楽園。

「――教えて欲しい？」
「――――ッ！？」

不意に割り込んできた声に、全員が同時に振り返った。抉れ、砕け散った壁の奥。そこに、体の八割を失い、最早頭部と右腕だけになった少年がいた。

狂気が。
倒したはずの、最悪の敵が。

「……まだ、生きていたのか」
「キミたちが思う以上に、しぶとかったみたいだねぇ？　キャハハ♪」

グリスは笑う。だが、限界なのは明らかだ。傷一つつけること叶わなかった右腕も気にはなるが、どちらにせよ致命傷。スペアがあるのかもしれないが、ここにいるグリスの命は風前の灯火だった。

「残念だったな。お前がここで死ねば、その右腕はお前のものじゃなくなる」

言い放ったのは、ソラだった。グリスは、キャハハ、と笑う。

「殺すの？」
「――捕まえる」

問いに答えたのは、なのはだった。彼女は、フラフラの体で、しかし、凛とした表情を浮かべて言葉を紡ぐ。

「私たちの仕事は、殺すことじゃない」

その答えは、グリスの予想とは違ったものだったのだろう。グリスは、その表情を歪め、言い捨てる。

「ふん。勝者の驕りか、管理局の義務か――気持ちいいものじゃないね、偽善なんて。だけど、高町なのは……いや、管理局。ボクの敗北が、キミたちの勝利だとは限らない」

「どういう意味だ？」

「簡単だよ。この揺れは――失楽園シャングリラの、暴走だ」

「――――！？」

全員が、その言葉に表情を凍りつかせた。唯一人、グリスを除いて。

「良い表情だねぇ。そんなものが見れるなら、まあ、上場かな。……薄々気付いてるんだろうけど、ボクの右腕はそこで寝てる聖人から奪ったものだ。ああ、取り戻そうとしても無駄だよ？　もう固定したから。――この右腕はね、所持者と共に失楽園シャングリラを統括してた。それなのに、ボクがこうしてやられちゃったから……指示系統が、崩壊しちゃったんだよね」

「……」

「今、外から見たここは随分と静かだと思うよ？　だって、内部の魔力をぜぇーんぶ、動力炉に集めるように指示したから。指示系統が壊れる前にね。いくら動力炉、っていっても、ボクにキミたちの言う限界があるように、限界があった。じゃあ、膨大なエネルギーはどうなると思う？」

「――まさか」

全員が同時に、悪寒が走るようなその結論に到達した。グリスのみが、キャハハ、と、笑みを零す。

「理屈は単純。爆発だ。まあ、二〇〇〇キロが吹き飛ぶくらいじゃない？　世界の滅びには程遠い。ああ、そうそう、核兵器を止めるには動力炉を破壊しなくちゃいけないんだけど、そうすると動力炉が爆発しちゃうねぇ」

「――――ッ」

全員が歯を食い縛る。ここまできて、そんな絶望的な結果が待っているとは。

半径、二〇〇〇キロ。クラナガンは無論のこと滅びるし、おそらく二〇〇〇キロというのは爆発の範囲だ。それを超える地域にも無論、影響が出る。

核兵器を止めても、結局、この世界が消えるというのか。

どうすればいい――そんな、答えの出ない問いかけが充満する中。

一人の青年が、歩み出た。

「動力炉へは、どう行けばいい？」

「……」

「答えろ、グリス・エリカラン」

鋭い瞳。グリスはふう、と息を吐くと、右手の指を動かした。同時、部屋の奥に一つの通路の入り口が現れる。

「運命操作で場所を組み替え、動力炉の場所は移してある。あれは、そこへ通じる扉だよ」

「嘘ではないという証拠は？」

「どうせ滅びるのに嘘吐いてどうするの？　このボクだって死ぬのにさ」

笑うグリス。真偽のほどはわからないが、しかし、今は議論している暇はない。進むしかなかった。
入り口を凝視する魔導師たち。そこへ、グリスの言葉が届いた。

「ああ、そうそう。中に入れるのは、一人だけだよ。そしてそいつは、確実に死ぬ」
「……一人？」
「うん。こればっかりは弄れない場所でねぇ。そもそも踏み込むとして、その必要があるのが聖人一人だけだったから、そういう風になってるの。複数の生体反応が入ると、進路も退路も封鎖されちゃうんだよねぇ。
　更に、進む先にはボクでさえどうなってるのかわからない防衛プログラムと、高濃度の魔力汚染に包まれた世界だ。万一、動力炉を破壊できたとしてもその悪条件を突破して逃げ出すなんてできない。その前に爆発するだろうしね」
「そんな……」

呟いたのは、誰だったのか。
状況の変化とは、常に起こる。起こり続ける。

勝利を得たと思った矢先、進むも地獄、戻るも地獄の命題を叩きつけられた。
避難は済んでいない。このままでは、世界が滅びる。なのに。

「キャハハ、どうしたの？――醜いよねぇ、ホントに。もうすぐ世界が終わるその瞬間に、その滅びと自分自身の命を天秤にかける愚かさ……醜いよ、本当に」
「――――ッ、こんなの、どちらを選んでも滅びだろうが！！」
「キミたちの信念や正義なんて、所詮こんなものだよ。圧倒的な絶望の前には膝をつくしか、屈服するしかない」

キャハハ、と、グリスは心から愉しそうに笑っている。
この死に体を見れば、誰もが負け惜しみと断じただろう。この場の当事者たちを除けば。

あと一歩だった。あと一歩で、世界が救えた。なのに。
勝者が追い詰められ、敗者が笑っているこの状況。それでも、時間は確実に進んでいく。

だからこそ――『彼』は、笑った。
静かに。
静謐に。
まるで――聖者のように。

「――人をなめるな。グリス・エリカラン」

言ったのは、青年だった。彼は、グリスに背を向け、言い放つ。

「動力炉の破壊。それと同時に、暴走を抑え込む手は用意されている。はやてさんが、用意してくれている」

その時、彼の手を誰も掴むことができなかったのは、何故だろうか。

「僕が行きます」
「――待って」
「止めても無駄です。今この場で余力があるのは僕だけ。それが、結論です」

振り向かぬまま、制止の言葉を振り払うファイム。その背に、シグナムとアギトが言葉を投げつけた。

「待て、ララウェイ。行くならば私も」
『そうだよ！　ファイム！』
「――一人しか、進めないんですよ」

バッサリと、ファイムは切り捨てた。フェイトが、ファイム、と言葉を漏らす。

「はやてはどうするの？　一人で、残していくつもりなの？」
「僕のような未来のない者といても、不幸なだけですよ」

そう、不幸なだけ。
彼女には、幸せになってもらいたい。

「大丈夫」

ファイムは言う。振り返った横顔は。
――幸せそうに、微笑んでいた。

「必ず、帰ります」

それは、嘘。
誰もがわかる、嘘だった。

命懸けで彼が吐いた、嘘。
世界を包む、優しい嘘。

「ファイムさん。――これを」
「……これは？」
「通信機です。長時間は無理ですが、少しくらいは」

ソラは止めようとしなかった。ファイムは、ありがとう、と頷く。
そして。

希望のために。
未来のために。
絶望を叩き潰すために。

明日なき青年が、最後の戦場と飛翔した。

◇　◇　◇

失楽園シャングリラ外部。
突如様子が変わった失楽園シャングリラを、はやては睨み付けるようにして見ていた。すると、その視界に一匹の竜が映る。
あれは――……

『はやてちゃん!!　なのはさんたちです!!』

リィンの報告。その最中、はやては気付いた。
竜の背に乗っている者が――足りないと。

「……ファイムくん」

はやては呟く。彼の姿がなく、他の者たちが脱出してきたということは。
それは、たった一つの理由を示している。

彼は。
あの人は。
どうして、こんな風にしか。
こんな風にしか、生きられない――？
「――はやてちゃん」
竜が、アースラの側に飛来してきた。なのはがそこから飛び降り、はやてに小型の通信機を渡す。
「まだ、繋がってる。……だから」
言って、なのはは竜と共に後方へと下がった。はやては、小さな通信機を握り締め、膝をつく。
結末がどんなものか――彼女には、見えてしまっていた。
◇　◇　◇
崩壊を始める楽園の中を、一人の侍が歩いていた。迷いのない足取りは、彼女を容易に最深部へと運んでいく。
「――無様ですね」
呟き。それと同時に、腕が宙を舞った。
上半身だけで無様に進んでいたグリス・エリカランが、苦悶の呻き声を上げる。

「あ、がっ……！？」
「大方、死んだふりでもして逃れましたか？　無様ですね、実に無様です」
蔑むような目で彼を見るのは、テンリュウ・シンドウだった。
「ボクの、ボクのッ……腕、どうして……！？」
「我が刃――桜花は、概念と化しています。運命を断ち切るなど造作もない」
《まあ、本来の持ち主相手ならこうもいかないけどね。偽物相手で良かった良かった》
笑い声。グリスは、呻き声を漏らす。
「……殺しなよ」
「……」
「そのために来たんでしょ？　だったら、殺せばいい」
グリスは言う。彼には、代わりの体があるのだ。ここで殺されようと、続くことはできる。
尤も、失ってしまった右腕は辛い。しかし、それはまた新たな道を探せばいい。
我はアンリミテッド・デザイア。そのために生きている。諦めるという事象は、プログラムにインプットされていない。
対し、テンリュウは静かに応じた。
「――申し訳ありませんが。私はあなたを殺しません」

――直後、世界が歪んだ。
圧倒的な魔力。その手が、最早人とは呼べぬ姿になったグリスを掴む。

「化け物の身に堕ちてなおその執念……感服に値しますが。どちらにせよ、愚か、の一言に尽きます。殺さず生かさない方法など、万に等しい手法がある」
「――――ま」
「夢幻抱擁」

グリスの言葉を聞く気はなかった。光に包まれるグリス。テンリュウは、ふう、と息を吐く。

「その世界を抜けられるのは、己の欲望を超えた滅私ができる者のみ。アンリミテッド・デザイア……百年経とうと、あなたはそこから抜け出せない」

言い切り、テンリュウは奥の通路へと目を向けた。

「死が救いというほどに、前を見てきたわけではありませんが……」
《どうするの？》
「……どうしようもありませんよ」

呟き、そして。
テンリュウは、目を閉じる。

「楽園も終わりを迎え……私はどこへ行くべきでしょうか」

終焉が――近付く。

◇　◇　◇

長い、長い通路の先。
異空間をどれぐらい歩んだのか。時間の感覚さえもおかしくなってしまいそうなその先に見つけたのは、絶望だった。

「……ッ」

ごくりと、唾を呑み込んだ。目の前に広がるのは、それだけの光景だった。
機械で形作られた兵士たち。この失楽園シャングリラを守ってきたのであろうそれらが、無数にそこに佇んでいた。

そして、その奥。
紅蓮に輝く強大な存在は――動力炉。

伝わってくる。成程確かに、これなら世界さえも滅ぼせそうだ。
そして同時に理解する。これがそうだと。偽物ではない。これを壊せば、核兵器を止めることができる。

「……はは っ」

もう、笑うしかない。

金属独特の軋みを上げ、機械兵士たちが一斉にこちらを振り返る。
数が多過ぎる。数える気にさえならない。

《マスター》

「――わかってる」

応じると同時、ファイムを見つけた機械兵士たちが一斉に銃弾を放ってきた。面の攻撃。
その全てをワイヤーによる障壁で受け切り、ファイムは言う。

「――邪魔をするな」

放たれたのは、殺気と呼ばれるもの。しかし、意志無き人形たちにそれが理解できるはずがなく。
しかし。
次いで放たれた咆哮は、人形たちでさえも理解した。

「世界を救うんだ――――そこを、どけえええぇぇぇッッッ！！」

これは、害為すものと戦闘人形たちが理解する。
故に、全身全霊で排除する。

――激戦が、繰り広げられている。

命無き鋼の軍団。爆流の如きそれに逆らい、駆け抜けながら、青年は吠えている。
その進んだ道には幾多の残骸が積み上げられ、ただ標的を目指している。

痛みなどどこかへ置き去りにした。

血が全身を染め、命を使い続けたその姿は、もう、十八歳のそれとなっていた。

「あああああああああああああああああああ――――――――ッッッ！！」

何体目かわからない敵を斬り捨てた時、ファイムの脳裏を、不安が過ぎった。

――まだなのか。まだ、いくら、どれだけたおせば――……？

瞬間、その肩を銃弾が貫いた。

「――――――ッ…！？」

息が詰まる。痛みはないが、衝撃が体を傾ける。

そして、同時に無数の弾丸が叩き込まれた。ファイムの体が、傾き――

――ザシャアアアッッッ！！

しかし――倒れなかった。

倒れることは、できなかった。

――倒れない。

「どけよ」

血に染まったその体で、手負いの獣が咆哮する。

「そこを、どけぇぇぇえええええええッッッ！！」

咆哮が響く。
敵の機械兵士たちが、一瞬、その動きを鈍らせた。プログラムによってしか動かない兵器が、恐怖を覚えたというのか。

潮が引くように遠ざかる機械兵士たち。その奥に、その威容はある。
幻想的で、同時に狂おしい輝きを纏うもの。
圧倒的であると同時に、異様である存在。

ガクン、と、膝が折れた。しかしファイムは、剣を杖とし、倒れるのを拒む。

「――別に、英雄になれるなんて思ってない」

ヒーロー、正義の味方。
そんなものが自分からは程遠いものだとはとっくの昔に理解していたし、なれるわけがないとも理解している。

それでもここへ来たのは、世界のヒーローなんかじゃなくて。
あの人の、たった一人の――……

それが、ファイムの答え。
揺るぎ無き、理由。

「おおおっ！！」

吠えると同時、収束砲を圧縮した剣を突き立てた。狙う場所は既に決まっている。おそらくは、鉄槌の騎士ヴィータが罅を入れたのであろう一か所だ。
突き立てた剣が爆発し、大きく亀裂が入る。ファイムは、更に血桜

を同じ場所へと突き刺した。

「砕けろぉぉッッッ！！」

そしてその柄を、押し込むように全力で殴りつける。

――ビキビキビキッ！！

凄まじい音を立て、崩れていく動力炉。衝撃で吹き飛ばされたファイムは、壁に叩き付けられ、壁に背を預けた状態で座り込む。

終わった、と、彼は呟いた。そこへ。

『……ファイムくん』

最後の……本当に最後の、通信が入った。

◇　◇　◇

「……ファイムくん」

震える声で呼びかけた。祈るように、応答を待つ。

ノイズだらけの通信機。その向こうから、その人の声が届いた。

『……無事、任務は終了です。はやてさん……撃って』

こんな時までそんなことを。はやてはそう思ったが、溢れ出しそうになる涙を堪え、はやては言う。

「まだや！！　ファイムくんがまだ戻ってきてない！！」
『戻る時間は……ありません』
「そんなことは――」
『――足が』
遮るような言葉。ファイムの、苦笑を含んだ言葉が聞こえる。
『足がもう……動かない。機械の足も、人の足も、潰れて……しまって……』
辛そうな声。はやては、唇を噛み締めた。
どうしてだ。どうして、どうしてこんなことに。
望んだのは小さな幸せだけだった。
それ以上は望まなかった。
世界は――それさえも、赦してはくれないのか。
『――大丈夫』
溢れ出る涙。ファイムは、言った。
もう、言葉を発することができなくなってしまっているはやてに。
『生きて帰る。――約束だ』
約束。
それは、嘘。
彼が吐いてくれた、命懸けの嘘。
汲み取らなければならないのか。
汲み取らなければならないのか。

どうして、こんな結末しか待っていない？

『ほら――涙を拭いて、はやてさん』

死の足音が聞こえているはずの彼は。

笑って、そう言った。

『祭りの最後は――誰もが笑っていなくちゃ、ダメだよ？』

ノイズが酷くなる。はやては、反射的に叫んだ。

「待っ、待って！！」

『……はやてさん』

彼の言葉は、どこまでも優しい。

そして彼は、その言葉を告げた。

『あなたを心から――愛してる』

そして、通信が途絶える。はやては、崩れ落ちるように膝をついた。

これが現実か。こんなものが現実か。

こんなもののために、戦ってきたというのか。

折れそうになる心。しかし――

「――――ッ！！」

涙を拭い、はやては立った。
ここで折れたら、全てが無駄になる。ファイムの覚悟も犠牲も、全てが。

そんなことは、それだけは――させない！！

「……」

吐息のように、か細く、はやては彼の名を呼んだ。
そして。

その引き金が――引かれる。

「――――――――――――――――――――、」

彼女の口から放たれた咆哮は、魔導師でも、戦士でもない――ただ一人の女性の、悲痛な叫び。
楽園を包み込む、禁じられた力。それは、戦いの終焉を告げていた。

後に歴史に刻まれるであろう戦いが、幕を降ろした瞬間だった。

最終話　優しい嘘　後篇（後書き）

最終話です。遅くなってすみませんでした。

だいぶ駆け足になってしまったかもしれません。一応、エピローグが用意してありますのでそちらもお待ちいただけると幸いです。

さて、九か月ほど続きましたこの物語も、ようやくここまでいたりました。

皆様には感謝しかございません。

本当に――ありがとうございました。

ファイムの道行き、見届けて頂けたでしょうか？

感想などお待ちしております。

できれば、皆様のお声をお聞かせください。

本当に――ありがとうございました。

エピローグ（前書き）

――なぁ、ファイムくん？
あなたは、どこにいるの？

エピローグ

……静かだった。
同時に、温かい何かを感じる。

「……」

ゆっくりと、吐息を零すような声と共に、目を開けた。

――眩しい。

陽の光が、視界いっぱいに広がる。それに耐えながら、男はゆっくりと呟いた。

「……生きとる？」

包帯塗れの体。軋む肉体。麻酔のせいか、体に痛みは感じないが……しかし。

……生きてる。

それだけは、それだけが、真実だった。そして、彼は視線を巡らせる。
同時、彼の中を大切な人の面影が過ぎった。

「――――ッ、エリア――！？」

声に上げ、彼女の名を呼ぶ。

自分がここにいる以上、彼女も――そう思うのは至極当然のことだった。

立ち上がろうとする。だが、その瞬間、見計らったようなタイミングで襖が開いた。

その時、初めて自らが和風の部屋で眠っていたことに気付く。

警戒。それと共に来客へと視線を送る。そこに立っていたのは、黒髪の鋭い目つきをした女性だった。豪奢な衣装に身を包んでいる。

「目を覚ましたか。三月もの間、目を覚まさぬから、いつ目覚めるか賭けておったのだがな。――カゲマサ、どうやら私の勝ちのようだぞ」

「……まだ、『氷姫』殿が目を覚まさずにおりますが」

不意に聞こえてきた声。女性のすぐ側に、いつの間に現れたのか黒装束を纏う新たな女性がいた。口元を隠しているため、顔が窺いにくい。

忍――男は、彼の故郷である世界に存在する概念に該当するものとして、理解した。

従者の言葉。それを受け、豪奢な衣装に身を包んだ女性が笑った。楽しそうに笑い、

「確かにそうであったな。……ふむ、どちらが先に、というのも賭けに入れておくべきだったか？」

「いずれにせよ、家臣団との賭けの結果は先延ばしかと」

「そうだな。……さて、身内で話を進めてすまなかったな」

女性の視線が、こちらへ据えられる。口元は笑みを刻んでいたが、

その目は笑っていなかった。

「状況もわからぬことだろう。それについては、わらわから説明できる分はしてやろう。何が聞きたい？」

「……エリアは、どこや？」

最初の問いにその言葉を選んだことに対し、後悔はなかった。ほう、と、女性が息を漏らす。

「どこか、や、どうして、ではないのだな？」

「ここがどこだろうとどういう理由でここにいようと、エリアと一緒ならわしは切り抜ける」

即座の返答だった。女性は一瞬、目を丸くし、すぐさまどこか攻撃的な目つきになる。

「大した自信だな。流石、音に聞こえたエース・オブ・エースか？」

「昔の話や。今は、ただの大罪人に過ぎんよ」

「自覚があるのか」

「なければ精神異常者やろう？　管理局が勝ったんやから」

言い放つ男――いや、ホムラ。女性は、ふっ、と小さな笑みを浮かべた。

「やはり面白い男だ。……心配するな、ホムラ・イルハート。エリア・カリアは別室で寝ている」

「信用しろと？」

「今ここでお前が生きているという事実は、証拠にはならないか？」

問いかけ。ホムラは、息を吐いた。

「……ま、ええやろ。何か企んどるようなら潰すだけや」
「……貴様」
肩を竦めたホムラ。瞬間、今まで黙っていた『影』が動いた。
白刃の煌めき。一瞬にして刃がホムラへと到達する。
――だが。
「……無礼やなぁ、クソガキ」
何が起こったのか、カゲマサ、と呼ばれた女性は理解できなかった。
気が付けば彼女はうつ伏せで組み伏せられ、喉元に彼女が持っていたはずの刃を当てられていたのだ。
「見るからに、そこのお嬢ちゃんがお前さんの主人やろ？　主人が話し合いの席を設けとるのを、従者が勝手に潰すもんやない」
「……ッ」
カゲマサが息を呑む。女性が、ふう、とため息を吐いた。
「すまぬが、離してやってくれ。カゲマサは私の護衛でな。腕は立つが少々、気が逸る時がある」
「ああ、構わへんよ。ガキのじゃれつきにいちいちキレるほどわしもガキやないんでな」
言うと、ホムラは手を離した。カゲマサは転がるようにホムラから離れると、彼を睨み付ける。ホムラはそれを一瞥すると、それで、

と口を開いた。

「お嬢ちゃん、自分は何者や？　わしとエリア……どう考えても爆弾でしかないわしらをこうして手当てしとるお前さんは？」

「……口振りではそうでないかと思っていたが。何だ、覚えてもらえていないというのも寂しいものだな」

苦笑。そして、女性は凛とした佇まいで告げる。

「――第三管理世界『ジパング』六代目宗主、ユリミツ・レイン・アーデルハイト」

「……これはこれは。自治領の宗主さんかいな」

ホムラは苦笑を零す。第三管理世界『ジパング』。そこは、第二管理世界と並んで少々特殊な立場にある。

初期の頃から管理局に協力してきたその世界は、その世界で取れる特殊な鉱物や、独自の文化により自治を認められている。独立しているというわけではないが、いずれにせよ、一つの世界として成り立っているのも事実だ。

そこの宗主――本来なら理事会にも参加できるほどの人物は、笑みを浮かべた。

「そうは言っても、所詮は飾りだ。貴様たちの叛乱も、我が国は見逃していたわけだしな」

「……ユリミツ様」

「ふっ、そう起こるなカゲマサ。どうせ行ったところで無用な責任を負わされただけに過ぎん。今回はこれで正解だ」

「えらいまあ、豪快な姫さんやね」

「――姫、か」

茶化すように言ったホムラに対し、ユリミツは目を細めた。

「貴様にそう呼ばれるのは……悪くない」

「……さよか。で、そのお姫様は、わしらに何の利を見た？」

ホムラの表情に笑みが灯る。ユリミツも、笑みを浮かべた。

「ほう……わかるか？」

「思い出したわ。そういやおったなぁ、姫さんみたいなんが。随分、成長したやないか」

「先代の頃に比べればな」

「親父さんの葬式以来か」

「ああ。……まあ、思い出話は後でいい。私は、貴様らに『貸し』を作れればそれで良かった」

貸し、と、ホムラが眉をひそめた。ユリミツは、なに、と言葉を紡ぐ。

「難しい話ではない。私は運がいい。次元世界最強の侍に、管理局のエース・オブ・エース、聖王教会騎士団最強の騎士……そして、管理局の英雄に、同時に恩を売れたのだからな」

楽しそうにユリミツは言い、まあ、と口を開いた。

「英雄については……どうなのだろうな。管理局の三人娘に繋がるラインを確保できただけで良しとすることになるだろう。いずれにせよ、我が一族の神具を与えたことが無駄にならないことを祈るまでだ」

「よーわからんが、要するにわしは恩を着せられたわけやな。――恩を売ったわしに、姫さんは何を望む？」

「――我が軍の鍛錬と、来たるべき時に出陣を」

答えはすぐさま帰ってきた。どういうことや、というホムラの問いに、ユリミツは更に言葉を続ける。

「次元世界は今、揺れている。百年、共和制の世界が続いた例は歴史上に存在しない。したとしてもそれは、王族や宗主など、議会とは別の王がいた場合だ。そして、今の管理局に王はいない。ならば、滅びてしまうのも宿命だ」

「戦争でもする気か？」

「必要とあらば、な」

断言するユリミツ。ホムラは、息を吐いた。

「次から次へと……あの世で引退できると思うとった矢先に」

「それでこそ人生。違うか、ホムラ・イルハート」

「違わんね」

ホムラは、笑う。そして。

まだしばらく、妹の下へは行けそうにないと、改めて苦笑した。

◇　◇　◇

「……運命、ねぇ」

目の前。説明を聞いたゲンヤ・ナカジマ二佐は、ギンガに入れてもらった茶を湯呑ですすりながら呟いた。彼の眼前、一人の少年はは

い、と頷く。

「聖人、というのはそういう存在だったらしいですね。運命を覆すための存在……死ぬことも老いることもなく、故に孤独に生き続けてきた」

「それが何故、子供の姿に？」

「……繰り返し、だそうです」

ゲンヤが抱いた当然の疑問に、ソラは頷いた。そうしてから、彼はモニターを展開し、説明する。

「史実にもほとんど記録されていない戦いで、聖人は聖王と覇王に敗れたそうです。その際、崩れていく楽園を見て、思ったのだとか。――どこで間違えたのだろう、と」

そう――ウィルのデバイスには、そういう言葉で記録が残されていた。

間違えた。間違えてしまった。運命さえも手にしたはずの女性は、間違えてしまったのだ。

「もしやり直せるならば――それが、間違った形で設定されてしまったようです。望んだものに到達できなければ、繰り返しを続ける。続けていく……そんな、未来へ」

「ふん。それで？　望んだものってのは？」

「――平穏です」

声を発したのは、ずっと黙っていたフェイトだった。彼女は頷くと、言葉を続けていく。

「ただの平穏な日々。それだけを望んだと。……ですが」

「繰り返せば繰り返すほど、周囲とは差が生まれる……ってな。報われない話だ」

ふう、と、ゲンヤは息を吐いた。そうしてから、もっとも、と言葉を続ける。

「おめぇがどうにかするんだろう、ソラ？」

「どうにも。運命操作の能力は失ったようですし、まあ、不死は残っているようですがそれがどうしたと」

「――その結論が、養子縁組？」

黙って成り行きを見守っていたギンガが、ポツリと言った。ソラは、うー……と何やら唸ってから、頷く。

「いや、保護者が必要でしょ？　ほら、色々と問題ありますし」

「後見人には私がつきます。……あまり言いたくありませんが、私たちの立場を利用できればと」

「平穏を望んだってんなら、守ってやりたいって、俺は思う」

ソラは言った。嘘偽りのない言葉を。

アリア・シュヒテンダーク・オリヴェント。

彼女は、ソラの養子となる。そういう結論をソラは出し、彼女もまた、それを受け入れた。

……まあ、怖い怖い侍の監視が付くわけだが。いかがわしいことがないようにと。

大丈夫、俺はロリコンじゃない……そう呟き、ソラはゲンヤを見た。

ゲンヤは笑っている。

そして、彼は、言った。

「――いいじゃねぇか」

ソラの選択を、肯定したのだ。

「苦労することも、キツい思いをすることも、全部納得してのことなんだろう？　だったら、いいじゃねぇか。俺の協力が及ぶ範囲でなら、協力してやる」

「……ありがとうございます」

ソラは、深々と頭を下げた。ゲンヤは、いいやな、と手を振る。

「改めて部下になる奴の言葉だ。聞いてやるのも上官の務めだろうよ」

「まあ、部下といってもここで仕事できるのはほとんどないのですが……」

ソラは苦笑する。今回の件が落ち着き、アリアを養子として迎えると決めたソラは、一つの選択をしていた。それは、地上本部へ戻るという選択だ。

無論、ソラ程の人材を本局がみすみす見逃すわけがなかったが……それはそれ。ソラという少年を侮ってはいけない。辞職をちらつかせれば言うことを聞いてもらえた。流石に本局も英雄の一人をそんなことで手放す愚は侵さなかったようだ。

ただ、その交換条件を出されたが。

「……確か、五年以内に魔導師連中の平均ランクを０．５以上上げろ、だったか？」

「要するに鍛えろということですね」

「無茶苦茶ね……」

「なのはでも無理じゃないかな、それ……」

フェイトさんの基準はなのはさんらしく、あのなのはさんでもできないらしい。……いや、まあ、うん。出来るとは思ってない。それはそれでなんとかするつもりだ。ぶっちゃけそんな約束守る気ないし。

肩を竦め、ソラは頷いた。

「いずれにせよ、俺の戦いはこっからです。すみません、お手数おかけします」

「構いやしねぇやな。八神も、大変らしい――」

――バタンッ！！

言いかけた瞬間。突如、凄まじい音と共にドアが開かれた。

全員がそちらを見る。そこにいたのは、リューイ・エンドブロムだった。彼は息を切らしながら室内を見渡すと、慌てた調子で言葉を紡ぐ。

「すんませんけど匿ってください！！」

物凄く腰が低かった。彼はそのまま、奥にある部隊長用の机の陰に隠れる。何だ一体、と、ゲンヤが呟いた瞬間。

――バタンッ！！

本日二度目の乱入者が現れた。今度は三人。ティアナ・ランスター。ウェンディ・ナカジマ。ミリアム・エンドブロムだ。その三人はこちらに頭を下げてから、勢いよく口を開く。

「リューイを知りません（ッス）か！？」

見事なハーモニーだった。おお、と、ゲンヤは少し気圧されながらも三人娘に問いかける。

「どうしたいきなり？」

「聞いて欲しいッスパパりん！！」

「マスターは真正の屑です」

「今回ばかりは同意するわ」

ボロカスに言われるリューイ。ソラは、何だかなぁ、と、リューイがいる場所を横目で見ながら呟いた。

「絶対、くだらないことだ」

「間違いなくね」

「え、ええと……？」

「で、どうしたんだ？」

ゲンヤが聞く。答えたのはウェンディだった。

「リューイが、皆の分のケーキを食べたんスよ――――ッ！！」

◇　◇　◇

挨拶の一つでもしようと、隊舎を目指して歩いていた女性――テンリュウ・シンドウは、突然の轟音に眉を寄せた。反射的に音の方角を見ると、何やら金髪の青年が建物のガラスを突き破って吹っ飛んでいる。

そして、それを追うのは見覚えのある魔導師たち。テンリュウは、首を傾げた。

「一体、何事でしょうか？」

《何となくだけど、物凄くくだらないことの気がする。気にしなくていいと思うよ？》

応じる桜花の言葉に、そうですか、と、彼女は頷く。そうして、空を見上げた。

蒼い空。美しいそれを見られる幸福を抱き。

「平和、なのでしょうか？」

《ここと、あたしたちは、って限定ならそうかもね》

「含みのある言い方ですね」

《事実でしょ？》

問いかけ。テンリュウは、違いありません、と頷いた。

「平和とは平等に訪れることがないものであり、心の在り方。なればこそ人はそれを求め、それを壊す」

《くだらないとしかおもわないけどね、あたしとしちゃあさ。……で、どうなの？》

「どうなの、とは？」

首を傾げるテンリュウ。桜花は、とぼけないでよ、と言葉を紡いだ。

《初めてじゃない？　あんたが、そうまでして興味を持つ相手はさ》

「片手間ですよ。グリス・エリカランの代わりの体を破壊して回る、片手間です」

《ふーん》

桜花は、気のない返事を送る。テンリュウは、ともあれ、と呟いた。

「やることは山積み。時を止めるロストロギアも見つけましたし、後はグリス・エリカランの隠れ家全ての破壊と、管理局への忠誠を示すためのロストロギア集めですか」

《時を止めるロストロギアについては、あんたの私情じゃん》

「人はエゴの塊ですよ」

歩き出す。その最中、桜花が思いついたようにテンリュウへと問いかけた。

《あのさぁ、もしかして――惚れた？》

対し、テンリュウは笑顔で応じる。

「――ええ。彼の在り方は、愛する相手に相応しい」

まあ、報われぬ想いですがと、彼女は呟き。

腰に差した、一本の刀の柄を――彼女のものではない血で染まったそれを、優しく撫でた。

◇　◇　◇

「じゃあ、はやてはいつもああして？」

「うん。お仕事の時は、そんな素振りは少しも見せないんだけど……」

ユーノ・スクライアと、高町なのは。今、二人はヴォルケンリッターに頼まれ、八神はやての様子を見にきていた。彼女たち自身も戦いの収束後は多忙を極め、墓参りもできていなかったので丁度良かったのだが――……

「……近寄れないね」

墓地にて、カグラ・ランバードと名の刻まれた墓と、その隣、彼が愛した女性が眠る墓へと手を合わせながら、ユーノは言った。なのはは二つの墓へと花を供え、うん、と頷く。

「休みがあると、いつもあそこでじっとしてるんだって。……休みの日は、一日中、ああしてるって聞いたよ」

「……彼の死を受け入れられていないのか、いや、そうじゃないね」

ユーノは首を振った。そうじゃない。そんなことではない。

「はやては、きっと後悔してるんだ」

「後悔？」

「引き金を引いたのは、はやてだよ。なのは」

ユーノの言葉に、なのはは息を詰める。ユーノは、言葉を続けた。

「あの時、選択肢ははやての手の中にあった。引き金を引かない、っていう選択だって当然あったんだ」

「だけど、その選択肢は」

「うん。そうだよ、間違いだ。それは断言できる。だけどね、なのは。引き金を引いたこともまた――間違いなんだ」

そう、間違い。

あの時のはやては、選択肢を許されていなかった。その中で強制された選択肢は全てが過ち。
故に、彼女は悩んでいる。

「きっと、はやては責めて欲しいんだと思う」
「責めて欲しい？」
「なのはも、そういうところがあるから……何となく、わかるんだ」

苦笑し、ユーノは言葉を続けた。

「周囲は、はやての選択を全面的に肯定する。彼の死さえも、必要な犠牲としてしまった。それがはやては受け入れられない。だからああして、考えてるんだと思う。
答えなんて出ない。そんなことはわかってるんだろう。それでも、彼女は。
進むことも、戻ることもできなくて、あそこにいる。否定して欲しいのに否定されない現実から逃げるように。だって、そうでしょ？みんなは、こう言うんだ。――？ファイム・ララウェイを殺したことは正義だ？って。
勿論、そんな意味じゃない。彼の犠牲を呑み込んでまで世界を救ったことを称賛しているだけだ。それがはやてには届かない。そういうことだよ」

厳しい表情で言うユーノ。そうしてから、彼は、ふと、視線をはやての方に向けた。

――驚愕。

隣で彼を見ていたなのはは、ユーノの表情がそれに変わったのがよくわかった。そして、ふと、彼の表情が柔らかくなる。

「行こう、なのは」
「えっ、でも――」
視線をはやてに向けるなのは。彼女は、そこで理解した。
目を伏せ、そうだね、と頷く。
「私たちよりも、はやてちゃんには――……」
◇　◇　◇
――どうしてなのだろう。
その問いが、延々と繰り返されていた。どうして、と、何故、と。
あの時、引き金を引いた自分。それが許せなくて。認められなくて。
どうして。わたしは……
「――――」
涙の一つさえ、零れてこない。どうしてだ、と、また自身へ問いかける。
彼を失った悲しみさえ、嘘だというのか。
涙一つ零せない程度の想いしか、自分にはなかったというのか――……
繰り返す疑問。その果てに。
不意に、声を聞いた。

「――泣いておられるのですね？」

優しい声だった。問いかけの対象は自分ではないのかもしれない。しかし、はやては反射的に答えていた。

「……泣いてません。泣くことが、できないんです」

「それなら、何故、ここで俯いているのです？」

問いかけは即座に返ってきた。はやては、何故やろう、と、自問する。

そうしてから、答えを見つけた。

「きっと、待ってるんです」

「待っている？　誰を？」

「――大切な人を」

言って、はやては苦笑した。

「わたしは、間違えたんです。間違えてしまって、こないなことになってしもた。だから、わたしは待ってるんやと思います。大丈夫だよ、って、そう言って帰ってきてくれるのを」

有り得ない話ですけれど、と、はやては言った。

そう。あり得ない。この手で自分は、彼を――……

「ですが、その彼はもう、余命幾何もない人物ですよ」

「……構いません」

不意の言葉に、反射的に答えた。相手は、更に言葉を重ねてくる。

「罪人です」
「構いません」
「弱者です」
「彼は強い」
「愚か者です」
「わたしもです」
「哀しみしかない未来。――それでも、共に？」
「共にあれた幸福を思い出せるなら、それは何より大切なものになる」

――涙。
知らず、溢れ出していた。相手が、苦笑したのがわかる。

「本当に、いいの？　僕なんかで」
「あなたやないと、アカン」

絞り出した言葉。それと共に振り返ると。
――そこにいたのは、車椅子に乗った、最愛の人の姿。

最愛の人は、ありがとう、と、頷いて。

「ただいま、はやてさん」

微笑みながら、そう言った。
そして、わたしは。
泣きながら、縋り付くように。

彼の胸元へ、一直線に飛び込んだ。

「――おかえり」

エピローグ（後書き）

とうとう、エピローグへと至りました。
本当に、支えてくださった皆様へは感謝しかございません。

最終話、それぞれの道行きは敢えてぼかしました。ＴＰＰがどうにかなれば、これの続編も書きたいなぁ、とか思っていたりします。

ファイムですが、彼を救い出したのはテンリュウです。彼は生きるべきだと、そう断じたテンリュウが彼を生かしました。

そして、最後の再会。
敢えて、描写は簡潔にしました。

二人がどんな想いでこの結末へと到達したのか、皆様のご想像の余地ができればと。

そして、時を止めるロストロギア……テンリュウがこの数か月でファイムと共に見つけ出したそれは、文字通りファイムの時を止めています。しかし、はやての時は流れていく。流れる時に触れる者の側にあれば、どうしても時は流れる。ファイムは、僅かな延命を得たにすぎません。
それでも彼は帰ってきた。何故ならば、あの場所こそが彼の最後の居場所だからです。
終わりの見えた未来。それを、二人は手を取り合って歩んでいきます。
選んだ形は、そんなものでした。

今まで、本当にありがとうございました。

あと少し、記念小説として、四つほど物語を用意しております。

ですが、本編はここまで。

記念小説も本編と絡めて書きますが、彼らの物語は一度、ここでおしまいです。

ファイムという青年が歩んだ道や、彼以外の者たちが歩んだ道に対し、何かしらの想いを抱いていただけたなら、何よりです。

今後は、とりあえず、戦期物の一時創作の設定を詰めながら、少し休息していこうと思います。あ、『恋愛講座』は健在ですよ？　更新しますよ？

では、本当に。

これまで支えてくださった皆様へ、何よりの感謝を。

この作品を描くことで、私のような未熟者にも何かが遺せたなら、何よりです。

本当に、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2056r/

魔法少女リリカルなのは～優しい嘘～

2011年11月20日23時25分発行